

具同中山遺跡群

具同中山遺跡群

県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書

県道中村下ノ加江線緊急地方道路
整備事業に伴う発掘調査報告書

第59集
二〇〇一・三

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

2001.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

具同中山遺跡群

県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書

2001.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



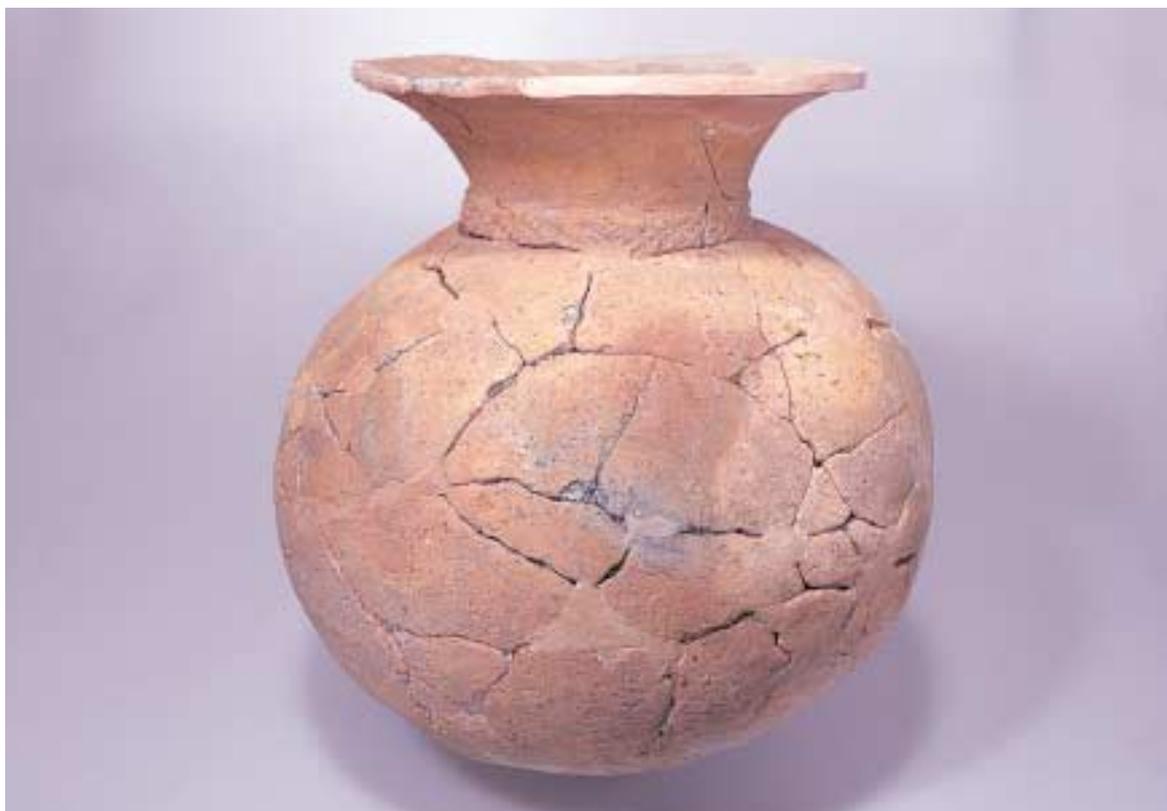
調査区全景(上空より)



SX5(上空より)



SK4出土遺物(31)



土器集中25出土遺物(748)



祭祀関連遺物



SD4木製漆器椀

序

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、平成9年度から高知県中村土木事務所の委託を受け、県道中村下ノ加江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しております。県道中村下ノ加江線道路が建設される四万十川の支流中筋川流域は県下でも有数の遺跡が密集する地域で、古墳時代では河川周辺で行われた祭祀遺跡、中世では河川流通の主要を担ったと考えられる遺跡が確認されています。

本書は、平成9年度に実施した県道中村下ノ加江線建設工事に伴う具同中山遺跡群の発掘調査報告書です。今回の調査では、今までにない弥生終末期から古墳初頭にかけての祭祀的要素が強い配石を伴う遺構や、中世では県下でも希な大型の掘立柱建物跡を検出しました。縄文時代から近世にかけての複合遺跡として大変貴重な成果をあげることができ、四万十川流域における歴史に新たなページを付け加えることができました。この報告書が埋蔵文化財の保護、さらには今後の考古学研究の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして高知県中村土木事務所の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、調査・報告書作成では関係各位の皆様にも多大な御指導並びに御教示を頂いたことに厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 門田伍朗

例 言

1. 本書は県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う具同中山遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 具同中山遺跡群は中村市具同に所在する。
3. 調査は高知県中村土木事務所の委託を受け、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
4. 発掘調査は平成9年4月21日から平成10年2月10日まで実施した。
5. 調査対象面積は2,189㎡(調査延べ面積10,945㎡)である。
6. 発掘調査は次の体制で行った。

総括-財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 古谷碩志
同調査課長 岩崎嘉郎(前期)、西川裕(後期)
調査担当-財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター調査第五班長 松田直則
同主任調査員 山崎正明、池澤俊幸、浜田恵子
同調査員 筒井三菜、同調査補助員 武吉真裕、技術補助員 川村健一
総務担当-同総務主幹 吉岡利一、石川馨 臨時職員 山崎詠子
7. 本書の執筆は松田の指導のもと、以下のように各員が分担した。編集は筒井が行った。

第 章(池澤)、第 章(浜田)
第 章-第1節(池澤・浜田)、第2節(浜田)、第3・4節(筒井)、第5節(池澤)
第 章-第1・2節(浜田)、第3・5節(筒井)、第4節(池澤)
遺物写真は弥生時代を浜田、古墳時代～中世を久家、近世を池澤が撮影した。
6. 遺跡の略号は「97-3GN」とし、出土遺物の注記等にはこれを使用した。報告書に掲載の縮尺率はそれぞれに示した。遺構についてはST(竪穴状遺構)、SK(土坑)、P(穴・柱穴)、SB(建物)、SD(溝)、SR(流路)、SF(祭祀集中箇所)、SX(性格不明遺構)で表記した。
7. 現地調査及び本報告書を作成するにあたって、下記の方々より指導並びに貴重なご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。(敬称略)

岡本健児、大澤正巳、岡田光紀、穴澤義功(たたら研究会)、鈴田由紀夫(九州陶磁文化館)、藤澤良祐(瀬戸市埋蔵文化財センター)、百瀬正恒(京都市埋蔵文化財研究所)、片桐孝浩・佐藤竜馬・森下英治(香川県埋蔵文化財調査センター)、栗田正芳・梅木謙一(松山市埋蔵文化財センター)、柴田昌児(愛媛県埋蔵文化財調査センター)、武田尊子(愛媛大学)、出原恵三、前田光雄、久家隆芳、松村信博、山本純代(埋蔵文化財センター職員)
8. 遺構、遺物の測量及び写真撮影は各調査員・技術補助員が行い、調査区全体の航空撮影は株式会社アイシーに委託した。出土木製品の保存処理は東都文化財研究所と吉田生物研究所に、樹種同定及び植物珪酸体分析はパリノ・サーヴェイ(株)に委託した。骨片分析は岡山理科大学富岡直人氏に依頼し玉稿を賜った。
9. 現地測量、遺物整理、報告書作成においては下記の方々の協力を得た。

野町和人、岡村朋美、岡本智子、飯田縁、岩本須美子、川久保香、黒岩佳子、澤本友子、土居江里子、橋田美紀、益井和子、宮地佐枝、山中美代子
なお調査においては当センター職員、出原恵三、広田佳久、堅田至、久家隆芳、田中涼子の助力を得た。
10. 調査にあたっては、高知県中村土木事務所の御協力を頂いた。また具同地区長をはじめ地元住民の方々には遺跡に対する深いご理解とご援助をいただき、あつく感謝の意を表したい。
11. 出土遺物、その他図面類の関係書類は高知県文化財団埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第 章 調査の経過と方法	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の方法	2
3. 試掘調査出土遺物	3
第 章 遺跡の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	6
第 章 調査の成果	
第 1 節. 基本層準	9
第 2 節. 縄文～弥生時代	
1. 区の調査	
(1) 縄文晩期から弥生時代前期の遺構と遺物	17
(2) 弥生時代前期末から後期前葉の遺構と遺物	17
1) XI層検出の遺構と遺物	
竪穴状遺構 土坑 ピット 性格不明遺構 焼土	
2) 層下層(-3・ -4層)検出の遺構と遺物	
流路 杭列・杭群 土坑 炭化物集中・焼土	
3) 層上層(-1・ -2層)検出の遺構と遺物	
土坑 性格不明遺構 土器集中 焼土	
4) 包含層出土遺物	
XI層出土遺物 -3・4層出土遺物 -1・2層出土遺物	
(3) 弥生時代後期中葉～後葉の遺構と遺物	62
土坑 土器集中 包含層出土遺物	
(4) 弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構と遺物	72
土坑 性格不明遺構 土器集中 包含層出土遺物	
2. 区の調査	
(1) 弥生時代前期末から中期の遺構と遺物	109
杭列 包含層出土遺物	
(2) 弥生時代後期前葉から後葉の遺構と遺物	110
土器集中 包含層出土遺物	
(3) 弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構と遺物	112
土器集中 焼土 包含層出土遺物	
第 3 節. 古墳時代	
1. 区の調査	
1) 検出遺構	173
祭祀遺構 土器集中	

2) 包含層出土遺物	189
2. 区の調査	
1) 検出遺構	195
祭祀遺構 土器集中	
2) 包含層出土遺物	232
第4節. 古代・中世	
1. 古代	
(1) 検出遺構	261
2. 中世	
(1) 検出遺構	268
掘立柱建物 土坑 溝 井戸 土師器集中 ピット群 包含層出土遺物	
第5節. 近世	
(1) -1層上面検出の遺構と遺物	341
掘立柱建物 炉跡 溝 ピット 性格不明遺構	
(2) -2～6層出土の遺物	350
第 章 考察	
第1節. 具同中山遺跡群 検出の弥生時代祭祀関連遺構と遺物	357
第2節. 具同中山遺跡群 出土の弥生時代から古墳時代初頭の土器	362
第3節. 具同中山遺跡群 における古墳時代の祭祀について	381
第4節. 四万十川下流域出土の古代の土器 -まとめと展望-	385
第5節. 具同中山遺跡群における集落の変遷について	409
第 章 自然科学分析報告	
1. 具同中山遺跡群 出土動物依存体及び土壌の分析	419

挿 図 目 次

Fig.1 中村市位置図
Fig.2 具同中山遺跡群 調査区位置図
Fig.3 調査区グリッド設定図
Fig.4 試掘調査出土遺物実測図
Fig.5 遺跡周辺の現況地形図
Fig.6 具同中山遺跡群及び周辺の遺跡
Fig.7 ・ 区南壁セクション
Fig.8 中近世基本層準(区南壁)
Fig.9 区検出遺構全体図(弥生時代前期末～後期前葉)
Fig.10 ・ 区検出遺構全体図(弥生時代後期中葉～古墳時代初頭)
Fig.11 XIII層出土遺物実測図
Fig.12 区 ～XI層東西セクション

- Fig.13 ST 1 遺物出土状況図
Fig.14 ST 1 平面図・出土遺物実測図
Fig.15 SK1・P 40～42平面・エレベーション図
Fig.16 SX1・焼土2平面・セクション図
Fig.17 SR1・2・3エレベーション図
Fig.18 杭列1平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig.19 杭群2平面・エレベーション図
Fig.20 SK5・6・7平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.21 炭化物集中1平面・セクション図及び出土遺物実測図
Fig.22 SK2・3・4平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図
Fig.23 SK4出土遺物実測図
Fig.24 SX2平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.25 土器集中1遺物出土状況図
Fig.26 焼土25・焼土15セクション・遺物出土状況図
Fig.27 土器集中1出土遺物実測図1
Fig.28 土器集中1出土遺物実測図2
Fig.29 土器集中1出土遺物実測図3
Fig.30 焼土39セクション図・土器集中2遺物出土状況図
Fig.31 土器集中2出土遺物実測図
Fig.32 土器集中3遺物出土状況図
Fig.33 土器集中3出土遺物実測図
Fig.34 土器集中4遺物出土状況図
Fig.35 土器集中4出土遺物実測図
Fig.36 土器集中5遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.37 土器集中6遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.38 焼土10・41・36平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.39 -3・4層・XI層出土遺物実測図
Fig.40 -1・2層出土遺物実測図1
Fig.41 -1・2層出土遺物実測図2
Fig.42 層出土遺物実測図
Fig.43 SK8平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.44 土器集中7遺物出土状況図
Fig.45 土器集中7出土遺物実測図
Fig.46 土器集中8遺物出土状況図・焼土56セクション図
Fig.47 土器集中8出土遺物実測図
Fig.48 土器集中9遺物出土状況図
Fig.49 土器集中9出土遺物実測図
Fig.50 層出土遺物実測図

- Fig.51 SK9・10平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
- Fig.52 SX4平面・遺物出土状況図
- Fig.53 SX4平面・セクション・エレベーション図・集石及び遺物出土状況図
- Fig.54 SX4平面図・集石3・5・6セクション図
- Fig.55 SX4出土遺物実測図1
- Fig.56 SX4出土遺物実測図2
- Fig.57 SX5平面・セクション・エレベーション図・集石及び遺物出土状況図
- Fig.58 SX5出土遺物実測図1
- Fig.59 SX5出土遺物実測図2
- Fig.60 土器集中10遺物出土状況図
- Fig.61 土器集中10出土遺物実測図
- Fig.62 土器集中11遺物出土状況図及び出土遺物実測図
- Fig.63 土器集中12遺物出土状況図・焼土50・54セクション図
- Fig.64 土器集中12出土遺物実測図1
- Fig.65 土器集中12出土遺物実測図2
- Fig.66 土器集中13遺物出土状況図
- Fig.67 土器集中13出土遺物実測図
- Fig.68 土器集中14遺物出土状況図及び出土遺物実測図
- Fig.69 土器集中15遺物出土状況図
- Fig.70 土器集中15出土遺物実測図1
- Fig.71 土器集中15出土遺物実測図2
- Fig.72 土器集中15出土遺物実測図3
- Fig.73 土器集中16遺物出土状況図
- Fig.74 土器集中16出土遺物実測図
- Fig.75 土器集中17遺物出土状況図及び出土遺物実測図
- Fig.76 土器集中18遺物出土状況図
- Fig.77 土器集中18出土遺物実測図1
- Fig.78 土器集中18出土遺物実測図2
- Fig.79 ・ 層出土遺物実測図
- Fig.80 杭列3平面・エレベーション図及びⅠ層・Ⅺ層包含層出土遺物実測図
- Fig.81 土器集中19遺物出土状況図及び出土遺物実測図
- Fig.82 土器集中20遺物出土状況図
- Fig.83 土器集中20出土遺物実測図1
- Fig.84 土器集中20出土遺物実測図2
- Fig.85 土器集中21・22遺物出土状況図
- Fig.86 土器集中21出土遺物実測図1
- Fig.87 土器集中21出土遺物実測図2
- Fig.88 土器集中21出土遺物実測図3

- Fig.89 土器集中22出土遺物実測図1
Fig.90 土器集中22出土遺物実測図2
Fig.91 土器集中23遺物出土状況図
Fig.92 土器集中23出土遺物実測図
Fig.93 土器集中24・25遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.94 焼土68遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.95 層出土遺物実測図1
Fig.96 層出土遺物実測図2
Fig.97 区検出遺構全体図(古墳時代)
Fig.98 区検出遺構全体図(古墳時代)
Fig.99 SF1遺物出土状況図
Fig.100 SF1出土遺物実測図
Fig.101 SF2遺物出土状況図
Fig.102 SF2出土遺物実測図1
Fig.103 SF2出土遺物実測図2
Fig.104 SF3遺物出土状況図
Fig.105 SF3出土遺物実測図1
Fig.106 SF3出土遺物実測図2
Fig.107 SF4遺物出土状況図
Fig.108 SF4出土遺物実測図
Fig.109 SF5遺物出土状況図
Fig.110 SF5出土遺物実測図
Fig.111 土器集中26遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.112 土器集中27遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.113 土器集中28遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.114 土器集中29遺物出土状況図
Fig.115 土器集中29出土遺物実測図
Fig.116 層出土遺物実測図1(区)
Fig.117 ・ 層出土遺物実測図2(区)
Fig.118 ・ 層出土遺物実測図3(区)
Fig.119 ・ 層出土遺物実測図4(区)
Fig.120 ・ 層出土遺物実測図5(区)
Fig.121 SF6遺物出土状況図
Fig.122 SF6出土遺物実測図
Fig.123 SF7遺物出土状況図
Fig.124 SF7出土遺物実測図1
Fig.125 SF7出土遺物実測図2
Fig.126 SF8遺物出土状況図

- Fig. 127 SF8出土遺物実測図
Fig. 128 SF9遺物出土状況図
Fig. 129 SF9出土遺物実測図1
Fig. 130 SF9出土遺物実測図2
Fig. 131 SF10遺物出土状況図
Fig. 132 SF10出土遺物実測図1
Fig. 133 SF10出土遺物実測図2
Fig. 134 SF10出土遺物実測図3
Fig. 135 SF10出土遺物実測図4
Fig. 136 SF11遺物出土状況図
Fig. 137 SF11出土遺物実測図1
Fig. 138 SF11出土遺物実測図2
Fig. 139 SF11出土遺物実測図3
Fig. 140 SF11出土遺物実測図4
Fig. 141 SF11出土遺物実測図5
Fig. 142 SF11出土遺物実測図6
Fig. 143 SF12遺物出土状況図
Fig. 144 SF12出土遺物実測図1
Fig. 145 SF12出土遺物実測図2
Fig. 146 SF13遺物出土状況図
Fig. 147 SF13出土遺物実測図
Fig. 148 土器集中30遺物出土状況図
Fig. 149 土器集中30出土遺物実測図
Fig. 150 須恵器集中遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig. 151 層出土遺物実測図1(区)
Fig. 152 ・ 層出土遺物実測図2(区)
Fig. 153 ・ 層出土遺物実測図3(区)
Fig. 154 ・ 層出土遺物実測図4(区)
Fig. 155 層出土遺物実測図5(区)
Fig. 156 SK11平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig. 157 調査区検出遺構全体図(古代・中世)
Fig. 158 SK12・13平面・セクション図及び出土遺物実測図
Fig. 159 SK14・15平面・セクション図及び出土遺物実測図
Fig. 160 SK16・17・18・19平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 161 SB1平面・エレベーション図
Fig. 162 SB1礎板出土状況・エレベーション図
Fig. 163 SB1出土遺物実測図
Fig. 164 SB1礎板実測図1

- Fig. 165 SB1礎板実測図2
- Fig. 166 SB2・3平面・エレベーション図
- Fig. 167 SB4・5平面・エレベーション図
- Fig. 168 SB6・7平面・エレベーション図
- Fig. 169 SB8・9平面・エレベーション図
- Fig. 170 SB3・8・9出土遺物実測図
- Fig. 171 SB10平面・エレベーション図
- Fig. 172 SB11・12平面・エレベーション図
- Fig. 173 SK20平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
- Fig. 174 SK21・22平面・セクション図及び出土遺物実測図
- Fig. 175 SK23・24・25平面・エレベーション図
- Fig. 176 SD1・2・3・4セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
- Fig. 177 SE1平面図・出土遺物実測図
- Fig. 178 SE1柱・横棧実測図
- Fig. 179 SE1板実測図
- Fig. 180 土師器集中出土状況図及び出土遺物実測図
- Fig. 181 ピット出土遺物実測図1(P 43 ~ P 51)
- Fig. 182 ピット出土遺物実測図2(P 52 ~ P 69)
- Fig. 183 ピット出土遺物実測図3(P 70 ~ P 81)
- Fig. 184 ピット出土遺物実測図4(P 41 ~ P 61)
- Fig. 185 ピット出土遺物実測図5(P 101 ~ P 118)
- Fig. 186 層出土遺物実測図1
- Fig. 187 層出土遺物実測図2
- Fig. 188 層出土遺物実測図3
- Fig. 189 層出土遺物実測図4
- Fig. 190 -2層出土遺物実測図1
- Fig. 191 -2層出土遺物実測図2
- Fig. 192 -2層出土遺物実測図3
- Fig. 193 -2層出土遺物実測図4
- Fig. 194 -2層出土遺物実測図5
- Fig. 195 -1層上面検出遺構全体図(近世)
- Fig. 196 SB13平面・セクション・エレベーション図
- Fig. 197 SB14平面・セクション・エレベーション図
- Fig. 198 SB13・SB14出土遺物実測図
- Fig. 199 SB15平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
- Fig. 200 SB16平面・セクション・エレベーション図及び出土柱根実測図
- Fig. 201 SB17平面・セクション・エレベーション図
- Fig. 202 SB18平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

- Fig.203 炉1平面・セクション図及び出土遺物実測図
 Fig.204 炉2平面・セクション図
 Fig.205 SD5出土遺物実測図
 Fig.206 P119～P120平面・セクション図及び出土遺物実測図
 Fig.207 SX6平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
 Fig.208 -2、 -6層出土遺物及び採取遺物実測図1
 Fig.209 -2、 -6層出土遺物及び採取遺物実測図2
 Fig.210 土器集中・SFの分布と変遷
 Fig.211 甕の形態分類と変遷
 Fig.212 弥生土器時期区分と各期の様相(1)
 Fig.213 弥生土器時期区分と各期の様相(2)
 Fig.214 弥生・古墳時代初頭の土器時期区分と各期の様相(3)
 Fig.215 土師器甕の口縁部形態例
 Fig.216 下ノ坪遺跡F区包含層出土土師器甕
 Fig.217 古代における煮炊具の変遷
 Fig.218 具同中山遺跡群 遺構全体図(中世)
 Fig.219 船戸遺跡、アゾノ遺跡 遺構全体図
 Fig.220 遺構全体図及び建物配置図(具同中山遺跡群1989・90年調査)

表 目 次

- Tab.1 試掘調査出土遺物観察表
 Tab.2 杭群2ピット計測表
 Tab.3～6 区検出焼土一覧表1～4
 Tab.7～41 弥生時代遺物観察表1～35
 Tab.42 石器・ガラス製品・石製品観察表
 Tab.43～64 古墳時代遺物観察表1～23
 Tab.65～81 古代・中世遺物観察表1～17
 Tab.82 土錘法量表
 Tab.83 ピット及び礎板計測表
 Tab.84 出土古銭表
 Tab.85～88 近世遺物観察表A～D
 Tab.89 甕の形態別組成
 Tab.90 具同 .口縁部形態別組成
 Tab.91 高知県中央部.口縁部形態別組成
 Tab.92 粘土帯貼付口縁のタイプ別組成
 Tab.93 遺構別土器組成表
 Tab.94 甕の属性対応表

- Tab.95 具同中山遺跡群祭祀形態分類表(古墳時代中期)
 Tab.96 土佐の土器編年と搬入品
- Tab.97 時期・器種別出土遺物点数
 Tab.98 時期別遺物点数
 Tab.99 時期別器形組成
- Tab.100 須恵器皿口縁部におけるb形態の比率
 Tab.101 各地域・遺跡の傾向模式表
 Tab.102 土師器甕における口縁部形態と胎土
 Tab.103 下ノ坪遺跡出土須恵器杯の組成比
 Tab.104 Tab.97-2具同中山遺跡群(今次調査)のうちの実測分
 Tab.105 Tab.97-3船戸遺跡のうちの実測分
 Tab.106 Tab.102のうちの実測分
 Tab.107 具同中山遺跡群 出土土器割合表

写真図版

- 巻頭図版1 調査区全景(上空より)、SX5(上空より)
 巻頭図版2 SK4出土遺物(31)、土器集中25出土遺物(748)
 巻頭図版3 祭祀関連遺物、SD4木製漆器椀
- PL.1 調査前全景(西より)、区完掘状況及び南壁セクション
 PL.2 区南壁セクション(層～層)、ST1(東より)
 PL.3 ST1セクション(南より)、SK5半截状況
 PL.4 焼土35遺物出土状況、土器集中3遺物出土状況
 PL.5 杭3セクション(南より)、SR1・2完掘状況(西より)
 PL.6 杭群2-P4炭化物出土状況、SK6遺物出土状況
 PL.7 SK4半截状況、SX2セクション(西より)
 PL.8 SK7セクション(北より)、焼土15セクション(南より)
 PL.9 ~ XI層遺物出土状況
 PL.10 層遺物出土状況
 PL.11 SX5集石及び遺物出土状況(西より)、同上セクション(北より)
 PL.12 SX4集石及び遺物出土状況(東より)、SX4集石1・2・3出土状況
 PL.13 SX4セクション(北より)、同上(西より)
 PL.14 層遺構検出状況及び遺物出土状況
 PL.15 SK7遺物出土状況、土器集中15遺物出土状況
 PL.16 層遺構検出状況及び遺物出土状況
 PL.17 層遺物出土状況
 PL.18 区南北セクション、区南壁セクション(～層)

- PL.19 SF2遺物出土状況、SF3遺物出土状況
- PL.20 土器集中26遺物出土状況、SF9遺物出土状況
- PL.21 SF10遺物出土状況、同上
- PL.22 SF11遺物出土状況、同上
- PL.23 SF12遺物出土状況、同上
- PL.24 SF13遺物出土状況、須恵器集中出土状況
- PL.25 土器集中28・29遺物出土状況、SF5遺物出土状況、SF5須恵器出土状況、SF6・7・9・10遺物出土状況
- PL.26 SF10遺物出土状況、 層遺物出土状況(須恵器蓋、土師器鉢)、 層遺物出土状況(須恵器蓋)、 層遺物出土状況1・2、SF10石製有孔円板出土状況、SF10石製紡錘車出土状況
- PL.27 調査区南壁セクション(~ 層)、 区中世面完掘状況(東より)
- PL.28 区中世面完掘状況(西より)、SB1完掘状況
- PL.29 SK20完掘状況及び遺物出土状況、SD4半截及び完掘状況
- PL.30 SE1検出状況(北より)、SE1半截状況(北より)
- PL.31 SK13セクション及び遺物出土状況、SK13完掘状況、SK11遺物出土状況、SB1-P4半截状況、SB1-P15礎板出土状況、SB1-P16礎板出土状況、SB8-P2柱根出土状況、礎板と古銭出土状況
- PL.32 SD1完掘状況、SD4木製漆器椀出土状況、SE1曲物出土状況、土師器集中出土状況、SK8瓦器出土状況、 層須恵器出土状況、 -2層青磁出土状況
- PL.33 区東部 -1層完掘状態、炉1(東より)
- PL.34 SB13東部完掘状態(西より)、SB14完掘状態(南より)、SB15完掘状態(南より)、炉2調査状況、SB14-P2半截状態、SB16-P2柱根出土状況、SB17-P4柱根検出状況、P121柱根出土状況
- PL.35 区最下層確認トレンチ(東より)、作業風景
- PL.36 ~ XI層出土遺物
- PL.37 層出土遺物
- PL.38 ・ 層出土遺物
- PL.39 ~ XII層出土遺物
- PL.40・41 層出土遺物
- PL.42~47 層出土遺物
- PL.48 層出土遺物、 層出土遺物
- PL.49 層出土遺物、同上(裏面)
- PL.50 ・ XI層出土遺物
- PL.51~62 出土遺物(古墳時代)
- PL.63~68 出土遺物(古代・中世)
- PL.69 層出土磁器、同上
- PL.70 出土陶磁器・土器
- PL.71 出土陶磁器・土器
- PL.72 包含層出土遺物、焼塩土器
- PL.73 炉1,包含層出土鉄滓、試掘調査出土遺物

第 章 調査の経過と方法

1. 調査に至る経過

県下では、高知空港の拡張、四国横断自動車道の延伸、高知新港の建設など交通網の拡充が進められている。幡多地域においても土佐くろしお鉄道の整備、中村宿毛道路の建設など徐徐にはあるが、交通網の拡充が進行しつつある。こうした交通網の整備は利便性の向上のみならず、物流をスムーズにし、人的交流を促進させ地域の経済・文化の発展に寄与するところが大きい。

県道中村下ノ加江線建設予定地内の中筋川沿岸は具同中山遺跡群など周知の遺跡密集地域である。高知県教育委員会は埋蔵文化財の取り扱いについて、高知県中村土木事務所と協議をおこなってきた。その結果、道路建設で破壊される箇所については記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意した。平成9年4月1日・7月1日付けで高知県と(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターとの間で委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

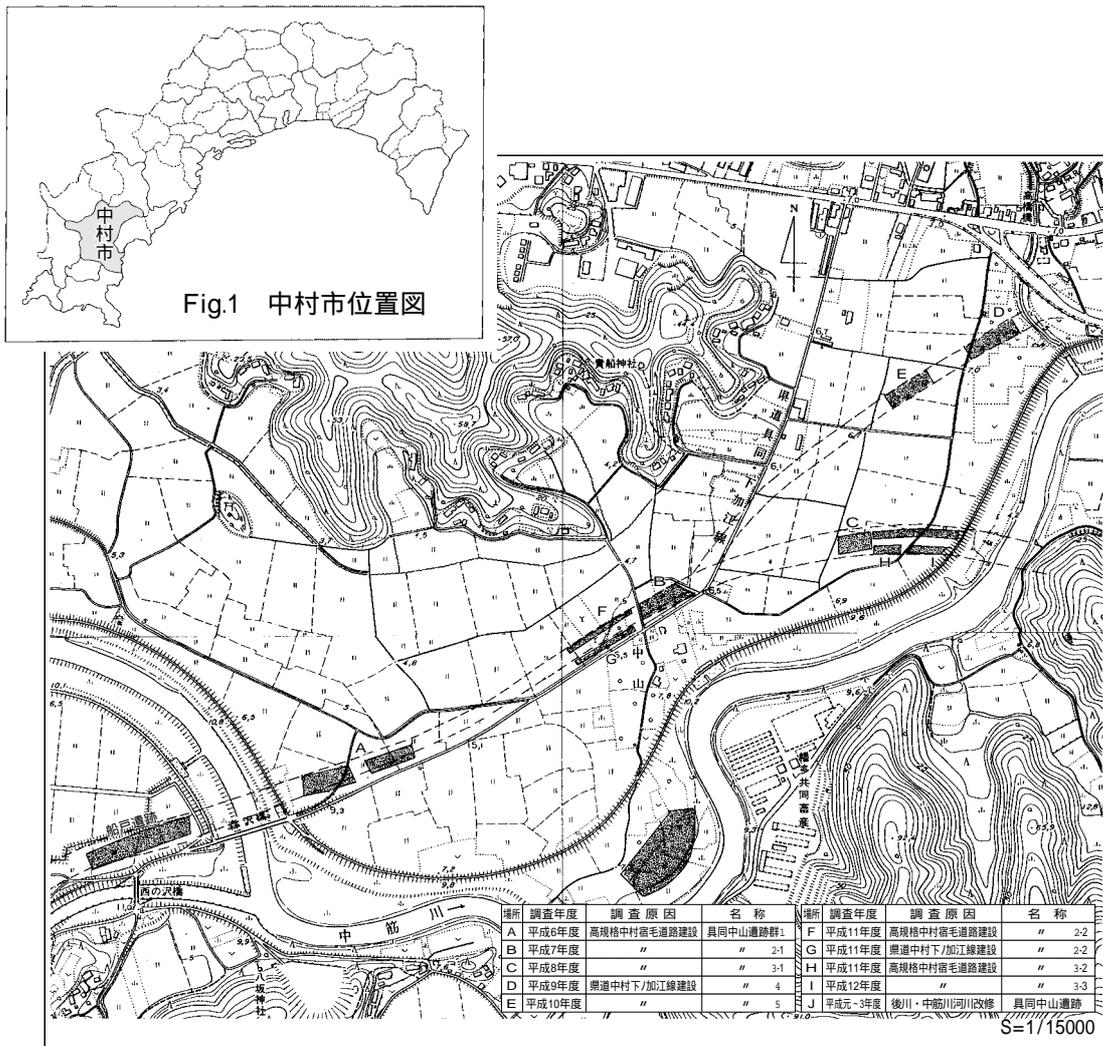


Fig.2 具同中山遺跡群 調査区位置図

2. 調査の方法

平成8年度に実施された試掘調査の結果により、道路工事区内において遺構・遺物が確認された範囲内を調査する運びとなった。調査区は南北方向21m、東西方向約108mを測る方形状を呈しているため、中央には土層観察用の畦を設け、東側を 区、西側を 区として調査を行った。包含層までは重機による掘削を行い、遺構・遺物検出面については人力による掘削を行っていった。表土下2.00m地点からは周縁壁面の崩壊を防ぐため板材を設置した。標高4.70m地点からは鉄製の矢板を設置し、下層の調査を行った。調査区周辺に設置された公共座標を利用して調査区内に4×4mのグリッドを設定した。南北方向をA、B、C...、東西方向を1、2、3...とし、グリッド名は北西隅をA-1のように呼ぶこととした。遺構・遺物の測量、取り上げに当たってはグリッドを利用し、1/10、1/20の縮尺で平面測量を行い、必要に応じて断面図を同縮尺で行った。また先行するトレンチ調査についてはそのつど平板測量を併用した。近世から弥生時代の包含層までは人力と重機掘削を併用して調査を進め、それより下層の標高2.00m地点までは重機による掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認し、調査を終了した。中世遺構面の完掘状況については航空測量をおこなった。

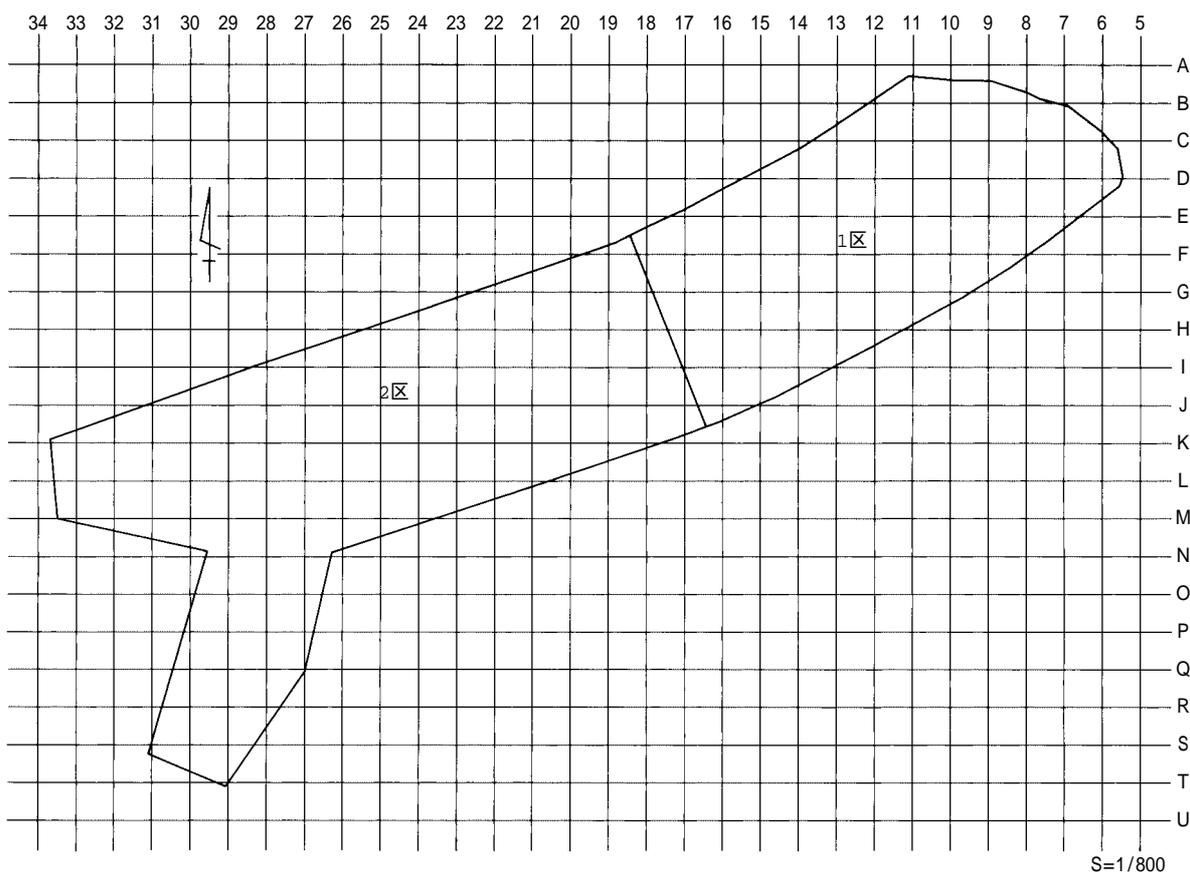


Fig.3 調査区グリッド設定図

3. 試掘調査出土遺物

試掘調査時に出土した遺物から、一部を報告する。トレンチの位置等については概報に記載されている(「具同中山遺跡群 県道中村下ノ加江線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書1998年」)。本調査の基本層準との関係については、試掘時の出土標高等を手がかりとした。9は出土標高からみれば 層に相当するが、層準界面の凹凸や上層から掘込みの遺構の存在も注意される。

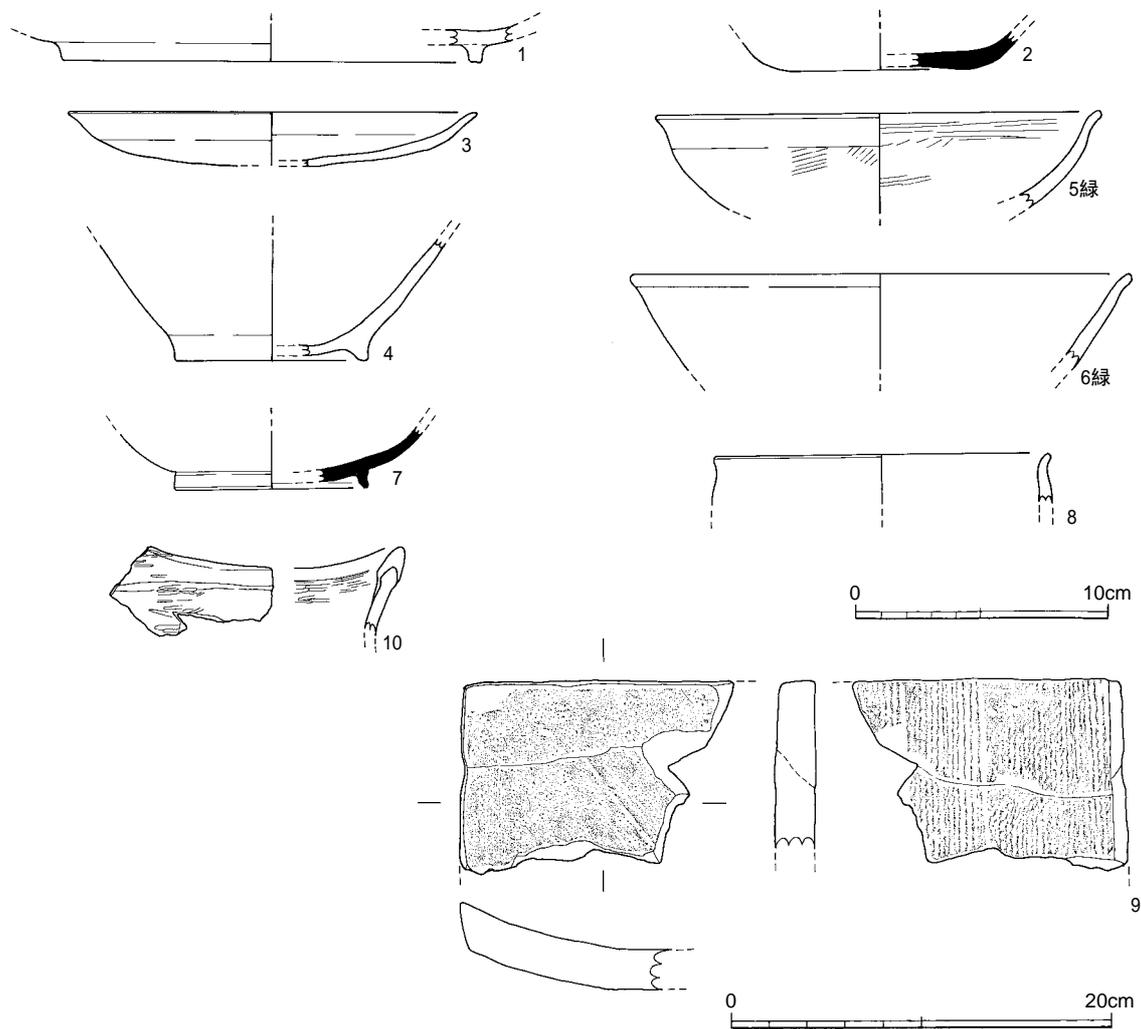


Fig.4 試掘調査出土遺物実測図

挿 図 番 号	ト レン チ	種 類	器 形	法 量 (cm)			手 法 的 特 徴	色 調	胎 土 ・ 素 地	備 考
				口 径	器 高	底 径				
1	B	土師器	皿B	—	—	16.3	畳付少し凹	5YR6/6橙	チ,赤れ	摩
2	B	須恵器	杯A	—	—	7.8		2.5Y8/2灰白	精土、軟	摩残1/4
3	C	土師器	皿A	16	2.1	12		2.5YR6/8橙	チ・赤れ多含, 気孔	摩残1/3
4	F	土師質土器	杯	—	—	7.6		10YR8/4浅黄橙	赤れ多含	摩残1/4
5	F	緑釉陶器	椀	17.2	—	—	外面下位がスリか,内 外ミカキ,内面口縁下 に斜圧痕	2.5Y6/2灰黄	長石,硬,須恵質	薄い釉,残1/9,出 土標高は -2層 相当
6	G	緑釉陶器	椀	19.4	—	—		5Y8/3淡黄,断2.5YR 8/3淡黄	長石,気孔,軟	摩,淡緑黄色の 薄い釉,残1/8
7	C	須恵器	椀	—	—	7.6	外面下位は回転スリ か		精土、軟	摩,繊細なつく り,残1/4弱, -2 層相当
8	B	瀬戸	天目椀	13.1	—	—		5YR3/6暗赤褐,断2.5 YR8/2灰白	気孔	残1/8
9	G	瓦		厚2.0	—	—	上面布目,下面縄状 圧痕,接合部で剥離	5YR6/4にぶい橙,下 面橙	チ,赤れ多含,軟	出土標高4.73 ~ 5.18mは 層相 当
10	F	縄紋土器	浅鉢	—	—	—	口縁端部丸く肥厚, 外面横位のヘラミガ キ	10YR2/1黒	石英,雲,他少量	摩

「チ」はチャート。
その他353ページ参照。

Tab.1 試掘調査出土遺物観察表

第 章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

具同中山遺跡群が所在する中村市は高知県の西南端に位置し、四国第二の河川四万十川とその支流後川・中筋川が作りなす沖積平野に立地する。中村市はその大部分が山地と低丘陵部で占められ、四万十川下流に形成された平野部は三方を山に挟まれた谷平野となっている。

具同中山遺跡群は、四万十川の支流にあたる中筋川左岸に立地する。中筋川は四万十川下流右岸に合流し、総流路延長は36.4km。川の上流と下流の標高差は殆どなく中流から下流にかけては数カ所で大きく蛇行し、流れは非常に遅く通常は平坦で穏やかである。しかし、同遺跡群が立地する中筋川流域の当該地域は四万十川との合流部に近く、さらに河口域との標高差が殆どない等の要因から、当地域は豪雨や台風の際には水位が上昇し、四万十川からの逆流現象による川の氾濫を頻繁に招いている。現在の河川堤防が設置される以前はこの氾濫による洪水などの水害が頻繁に起こり人々が生活する上で深刻な問題となっていたといわれる。

具同中山遺跡群はこうした中筋川下流の氾濫原上に立地するが、当時の地形を復原する試みとして、近年、遺跡周辺の昭和22年当時撮影の航空写真及び赤外線カラー航空写真を元にした航空写真解析と古地形解析⁽¹⁾がおこなわれた。それによって、現況地形では中筋川左岸に沿った一帯がわずかに高く自然堤防が発達し、この自然堤防の北側が低地となっていることが明らかとされ、又、この山裾との間(現在の水田域)の後背湿地にかつての埋没河川や湿地が推定されている。さらに、これらの解析結果を裏付けるように、この低湿地一帯で行われた近年の発掘調査では、平成6年度調査(具同中山遺跡群)で弥生時代から古墳時代及び中世にかけて東西方向に流れる幅約7mの自然流路が確認され、平成7年度調査(具同中山遺跡群 -1)でも弥生時代中期から古墳時代の遺物を伴う自然流路が確認されている。これらの成果から古環境が復原され、弥生時代以降から現在まで地形

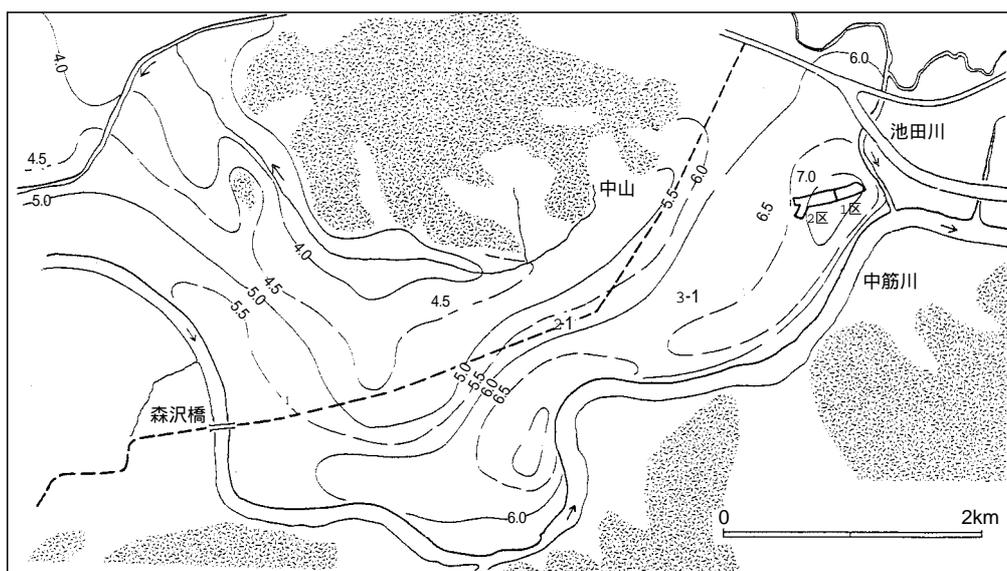


Fig.5 遺跡周辺の現況地形図(『具同中山遺跡群 -1』より引用)

の変化はほとんど見られず、自然堤防北側の低湿地には数条の河道と後背湿地が広がっていたものと推定されている⁽²⁾。

本次調査地点(具同中山遺跡群)はこの最も発達した自然堤防上の北端に立地するもので、堤防上の平坦部から北に向かって傾斜する箇所にかけての一带が該当している。調査地点の層準によると、シルト層と粘質土層から構成される洪水堆積物層からなっており、やはり、洪水が頻繁に繰り返された当地域の地形環境を反映している。

このような常に洪水の危険にさらされる立地条件下にありながら、弥生時代以降当河川流域には数多くの遺跡が存在してきた。この背景には、洪水堆積物によってもたらされた肥沃な土壌と水利、又、古代・中世に至っては河川交通等、立地上の多くの利点があったものとみられ、具同中山遺跡群においても自然環境の規定を受けつつ河川流域の遺跡が継続して営まれたものとおもわれる。

2. 歴史的環境

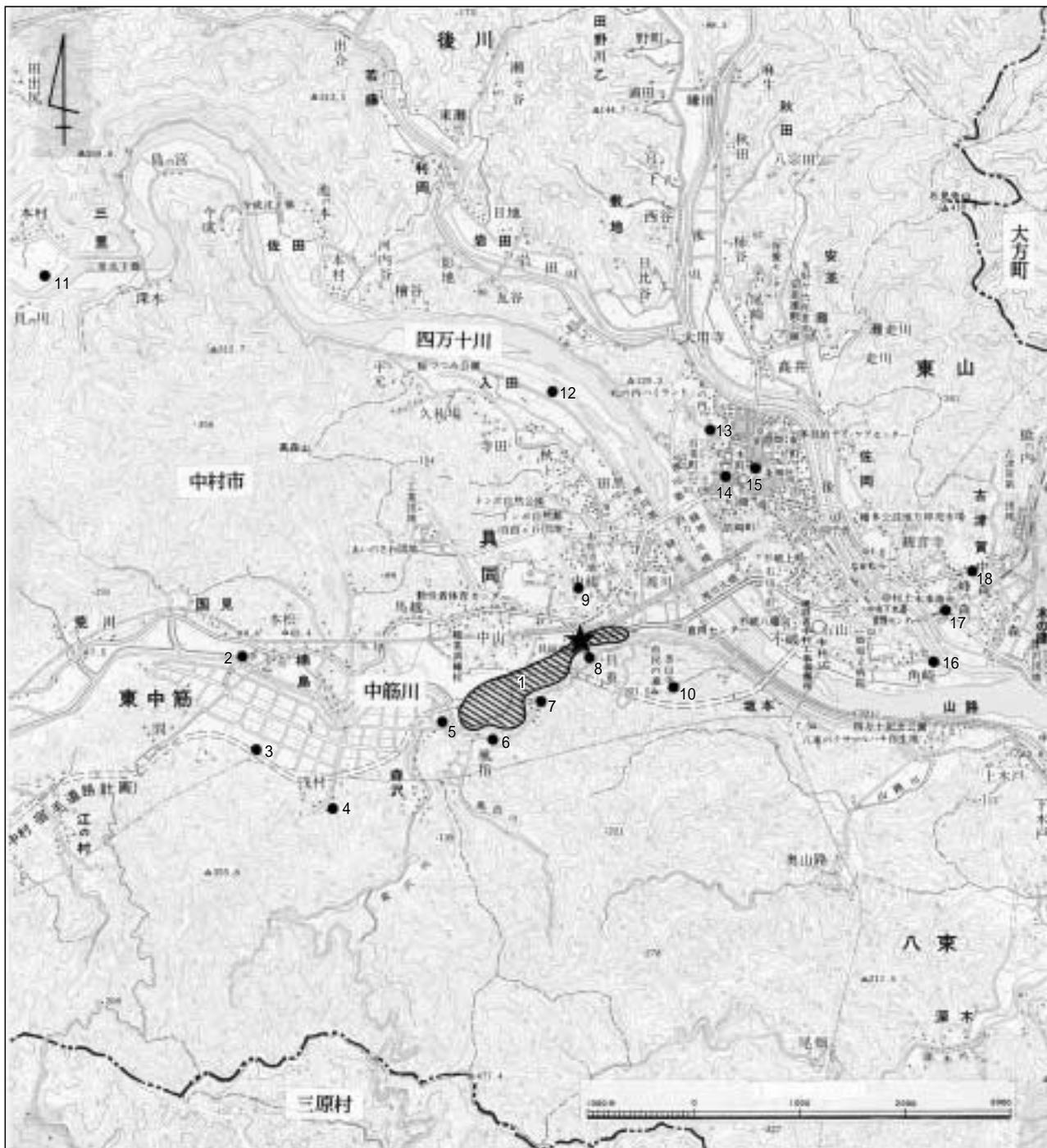
具同中山遺跡群は縄文時代から中世に至る遺跡としては、中村市において最も広範囲に及ぶ遺跡である。本遺跡は昭和20年代の中筋川河川改修の際に古墳時代の祭祀遺物が発見されて以来、河川祭祀遺跡としてその存在が注目されてきた。この具同中山遺跡群の所在する中村市には、縄文時代から近世にわたる多くの遺跡が確認されているため、ここでは中筋川流域に展開する周辺遺跡を中心に紹介していく。

縄文時代早期及び中期から後期の遺物をともなう遺跡として、中筋川と四万十川の合流点から上流約10kmにあたる左岸の河岸段丘上に立地する国見遺跡があげられる。又、縄文後期後半から晩期に至ると中筋川右岸に位置する船戸遺跡において平城式土器・片粕式土器、西部九州の北久根山式・伊吹町式土器、東九州の西平式土器等が確認されている。この他にも、中村市市街地中央の中村貝塚から縄文晩期中村式土器が、又、四万十川河口から約10km上流の入田遺跡からは縄文晩期末の入田B式土器が出土しており、晩期以降には中筋川流域の平野部への生活圏の広がりが推測される。

弥生時代においては、先述の入田遺跡から入田式土器として位置付けられる弥生前期土器が出土している。又、国見遺跡においては、弥生前期中葉の住居跡が検出されている。さらに、上流の中筋川右岸に位置する西ノ谷遺跡では弥生前期末の一括遺物と土坑群が確認されており、又、平成7年度の具同中山遺跡群調査では弥生中期土器の出土をみている。

古墳時代では、四万十川と中筋川の合流地点から約18km上流に、前期古墳である曾我山古墳と高岡山古墳群が所在している。中でも高岡山古墳は県下において唯一確認された前方後円墳であり、その下流域にあたる具同中山遺跡群では、数次にわたる調査によって古墳時代の河川祭祀跡が確認されている。一方、後川流域では四万十川との合流地点から約1.2km上流に後期古墳である古津賀古墳が存在しており、その周辺の後川下流域の自然堤防上でもやはり古墳時代の河川祭祀跡が確認されている。

古代、律令体制下での幡多地域に関する文献上の記載は少ない。しかし、中筋川流域では、右岸にあたる風指遺跡、同じく右岸にあたる船戸遺跡の調査で、畿内産緑釉陶器、黒色土器、篠窯産鉢



	遺跡名	時代		遺跡名	時代
1	具同中山遺跡群 平成9年度調査対象地	縄文～近世	10	香山寺跡	中世・近世
2	国見遺跡	縄文～古墳・中世・近世	11	三里遺跡	縄文
3	間城跡	中世	12	入田遺跡	縄文・弥生
4	浅村遺跡	中世	13	中村(為松)城跡	中世
5	船戸遺跡	縄文・古墳～中世	14	中村貝塚	縄文
6	風指遺跡	弥生・平安・中世	15	中村御所跡	近世
7	アソノ遺跡	中世	16	角崎遺跡	古墳・中世
8	具重遺跡	古墳	17	古津賀遺跡	古墳～中世
9	粟本城跡	中世	18	古津賀古墳	古墳

Fig.6 具同中山遺跡群及び周辺の遺跡

など官衛的色彩の強い遺物が多く出土している。

中世については、幡多庄の成立に関する文献上の記載が残されている。それによれば、同庄は平安末期に成立し鎌倉時代初めには九条家の荘園となったもので、その後道家の代には第三子実経の一条家創設と共に幡多庄が一条家へと譲渡されている。その後応仁の乱(1467)を経て、一条教房の代には不安定な政治情勢の中、幡多庄の荘園維持が困難となり、応仁2年(1468)には荘園の安堵・回復のために一条氏がこの地に下向したとされる。その後100年間は、当地域は一条氏の勢力下に置かれ、独自の文化が発展を遂げた。この後、天正2年(1574)には一条家内の内乱により一条兼定は追放、翌年領土回復のため長宗我部氏と渡川の合戦が行われ、栗本・扇城跡、中村城跡が両陣営の居城とされている。この時期の発掘調査は山城を中心に行われており、栗本城跡の調査をはじめ、9城跡の調査が行われている。又、具同中山遺跡群では12世紀から13世紀後半代の掘立柱建物跡が確認され、青磁・白磁等の貿易陶磁、瓦器等が多量に出土している。又、本次調査では14世紀代と考えられる総柱建物跡が確認され、又、中筋川右岸にあたるアゾノ遺跡では13世紀から14世紀にかけての建物跡を検出した他、15世紀代の地震による墳砂痕を検出している。

同じく右岸に立地する船戸遺跡では掘立柱建物跡とともに石製の碇が出土しており、当遺跡は入江状の地形に立地した条件と「船戸」という地名等から、中筋川を往来した川船の港(川津)として機能したものと推定されている。

近世以降、長宗我部氏にかわった山内氏の土佐入国にともない、中村の地においても山内氏が中村城に居城し幡多の管理が行われるが、元和元年(1615)一国一城令により中村城は廃城となる。近年の調査では市街地において一条氏関連遺跡の調査が行われ、それに際して、17世紀から18世紀代の陶磁器類が出土しており、近世の屋敷地を示唆する貴重な資料となっている。

註

(1) アジア航測株式会社「具同中山遺跡群古地形解析報告書」『具同中山遺跡群 -1』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター2000

(2) 筒井三菜「具同中山遺跡群の古地形解析成果から」『具同中山遺跡群 -1』同上

参考文献

出原恵三・松田直則・広田佳久「具同中山遺跡群・古津賀遺跡」『後川・中筋川埋蔵発掘調査報告書』高知県教育委員会1988

前田光雄・松田直則・広田佳久他「具同中山遺跡群」『後川・中筋川埋蔵発掘調査報告書』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1992

曾我貴行『国見遺跡』中村市教育委員会1994

出原恵三「西ノ谷遺跡」『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1994

出原恵三・松田直則「風指遺跡・アゾノ遺跡」『後川・中筋川埋蔵発掘調査報告書』高知県教育委員会1989

松田直則『中村城跡』中村市教育委員会1984

出原恵三・松田直則・曾我貴行他『船戸遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1996

松田直則・松田知彦・竹村三菜『土佐中村一条氏関連遺跡確認調査報告書-小姓町地区-』中村市教育委員会1997

『中村市史』高知県中村市

第 章 調査の成果

第1節. 基本層準

(1)第 ~ 層

調査区南壁の土層実測図を示した。最初に中世以降の堆積層について概要を述べる。 -5層以上については煩雑さを避け、ある程度まとまった単位で扱うことを断る。まず、21から22グリッドにかけて、広く浅い溝状の落ち込みや土層の乱れが、SD2以降現代に至るまで観察できる。SD2や -2層の落ち込み方から分るように(Fig.7・Fig.8)、それらは数度以内の偏差で正方位を指向しており、遺構と同じ土地利用企画のもとになるか、或いはその企画方位を決定する要因になっているものと推測できる。以下当該部を「境界」と呼称する。「境界」の -3層付近以上では杭列や河原石の列が検出される部分もあり、「境界」が現代に至るまで意識されてきたものであることを示す。 -2層が西へ落ち込む肩部では、同層下層あるいは -1層上面より、備前焼甕、白磁類、播磨型土師器鍋などの他、砥石、被熱・打割された石、鉄滓等が、同肩部に並ぶように検出された。「境界」以西では建物等の遺構は全く検出されなかった。また西部の25グリッド以西は落ち込んで -4、 -5層が堆積しており、その時期は他層との関係より、中世後期から近世のいずれかに属す。 -2層以上については、堆積状況や土質より、耕地として比較的安定・継続的に利用されたものと考えられる。

(2) ~ XV層

層以下はシルト層と粘質土層が交互に堆積する洪水堆積物層である。各層とも 区ではほぼ水平堆積し、 区に至っては北西に向かって傾斜し緩やかに高度をさげる状況が認められる。又、遺物の包含状態についても、弥生時代中期から後期には 区と 区の境に、弥生時代終末期には 区の中央部付近に土器分布の北限があり、対応する同層位間でもこの境界を境に様相が大きく変化し堆積層内の土器量・炭化物含有量等に著しい違いが認められる。

層は厚さ50cm前後で、 区中央部においては標高4.3~4.8mの間にほぼ水平堆積しているものの、 区以西では徐々に高度を下げ 区中央部で標高3.9~4.4mの間に堆積しており、 区から 区東部にかけて弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器片と炭化した植物遺体を多量に含んでいる。

層は厚さ20~30cm前後、ほぼ均一な粒度を保つシルト層で、弥生時代後期の遺物を少量含む。層は調査 区の中央部ではさらに炭化物を多量に含んで粘性が強まり、 -1層・ -2層・ -3層に細分される。又、調査区北部から西部一帯にのみ -4層が堆積する。この 層は 区中央部においては標高3.7~4.1mの間に水平堆積するが、 区西部で標高3.0~3.6mへと落ち込み、東部から西部へ向かい緩やかに傾斜していくもので、 区においては腐蝕物と弥生時代中期から後期の遺物を多量に含み、又、東西方向に向かう流路跡を検出している。一方、 区では無遺物層となり -a層・ -b層・ -c層、 -d層が各々対応している。

続くXI層は厚さ約60~70cm、厚みをもつシルト層が砂質から粘土質に交互に堆積する氾濫堆積層である。 区では無遺物となり、調査 区においてのみ弥生時代前期から中期の遺物を疎らに含む。XII層は 区東部ではXII-1・XII-2層が標高2.6~3.1mの間に堆積するが、 区では標高2.0~2.3mの間

にあるやや粘性を増し炭化物を含んだXII - a・XII - b層となる。XIII層は 区東部では標高2.3～2.6mの間に堆積し、 区西部においては標高2.0m以下となるもので、 区から流れ込みによる縄文晩期土器1点が出土している。

XIV層以下は明度・粒度の異なるシルト層が相互に堆積しており、 区ともに全くの無遺物層となっている。

- 1層：上層5Y4/6灰色から下層10YR4/1褐灰色までの粘土質シルト。下層で鉄分の集積が増す。
- 2層：10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトで、鉄分やマンガンの集積部を含む。鉱物の集積は各細分層の下面に多く、下層ほど密度を増す。
- 3層：5Y4/1灰色を主とする粘土質シルトで、鉄分やマンガンの集積部を含む。「境界部」で落ち込み状に堆積する。
- 4層：5Y4/1灰色粘土質シルトで、鉄分の集積斑を含む。20グリッド付近から西への落込みに堆積する。
- 5層：5～7.5Y4/1灰色粘土質シルトで、鉄分や大粒のマンガン粒を多く含む。 -4層の下位に堆積する。
- 6層：10YR4/2灰黄褐色と4/4が混ざる粘土質シルトで、マンガンの粒状斑紋を含む。近世以前の遺物を包含。
- 1層：2.5Y4/1灰色粘土質シルトで、鉄分や大粒のマンガン粒を多く含む。「境界部」のやや東側から落ち込み、以西に堆積する。
- 2層：5Y4/1灰色粘土質シルトで、鉄分や大粒のマンガン粒を多く含む。
- 1層：10YR4/4褐色に4/2灰黄褐色が混ざる粘土質シルトで、マンガンの粒状斑紋を含む。中世以前の遺物を包含している。上面で、近世等の遺構を検出した。
- 2層：10YR4/2灰黄褐色に4/1褐灰色が混ざる粘土質シルトで、大粒のマンガン粒を含む。比較的土器片が目立ち、若干の炭化物を含む。
- 層：10Y4/1灰色粘土質シルトで、鉄分やマンガンの集積は上位層に比して少ない。中世前期に属するSD2の埋土も同質である。
- 層：10YR4/4褐色粘土質シルトで、マンガンの粒状斑紋を含む。奈良期から平安初期の遺物を中心とするが、平安中・後期の遺物を少量包含していた可能性もある。
- 層：5Y5/1灰色粘土で、炭化物を多量に含む。古墳時代の遺物を多量に含む。
- 層：5Y5/1灰色シルト質粘土で、炭化物を多量に含む。古墳時代の遺物を多量に含む。
- 層：7.5Y5/1灰色シルトで、炭化物を多量に含む。弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺物を多量に含む。
- 層：2.5GY6/1オリーブ灰色シルトで、褐色シルトが少量混じる。
- 1層：2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト。炭化物・土器を多量に含む。 - a層：同左。炭化物をやや多く含む。
- 2層：5GY6/1オリーブ灰色シルト。炭化物を少量、土器を多量に含む。 - b層：同左。炭化物を少量含む。
- 3層：2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト。炭化物を多量に、土器を少量含む。 - c層：同左。炭化物を少量含む。
- 4層：7.5Y5/1灰色シルト。炭化物・土器を少量含む。 - d層：同左。炭化物を少量含む。
- 4層：7.5Y5/1灰色シルト質粘土。
- XI-1層：5Y5/2灰オリーブ色砂質シルト。土器を極少量含む。 XI - a層：同左。炭化物を少量含む。
- XI-2層：5Y4/2灰オリーブ色粘土質シルト。 XI - b層：同左。炭化物を少量含む。
- XI-3層：5Y5/2灰オリーブ色砂質シルト。 XI - c層：同左。
- XI-4層：5Y4/2灰オリーブ色粘土質シルト。 XI - d層：同左。
- XII-1層：5Y5/1灰色砂質シルト。 XI - a層：同左。炭化物を少量含む。
- XII-2層：5Y5/1灰色シルト。 XI - b層：同左。炭化物をやや多く含む。
- XIII層：5GY5/1オリーブ灰色シルト。
- XIV層：5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト。
- XV層：5GY5/1オリーブ灰色シルト

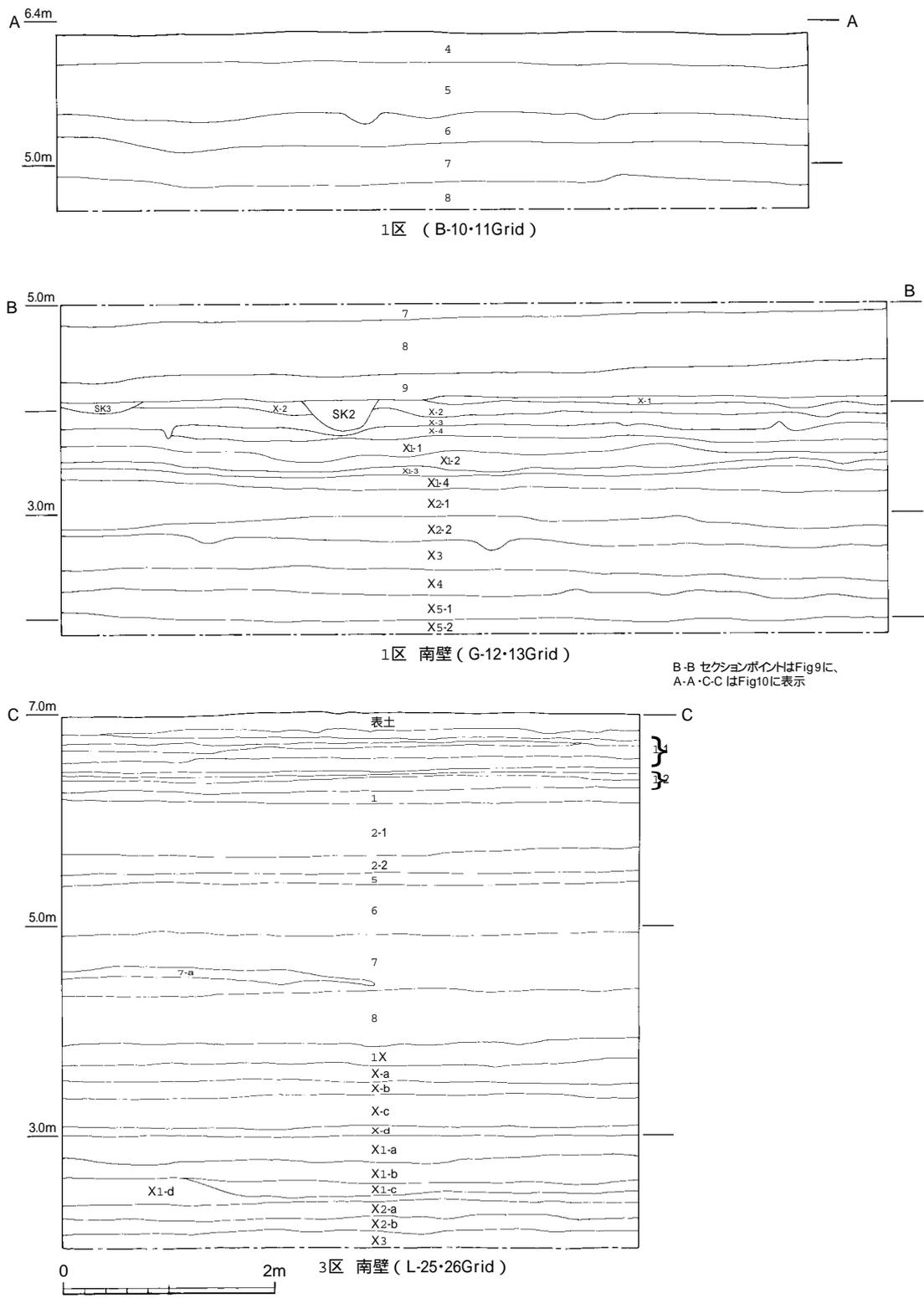


Fig.7 ・ 区南壁セクション

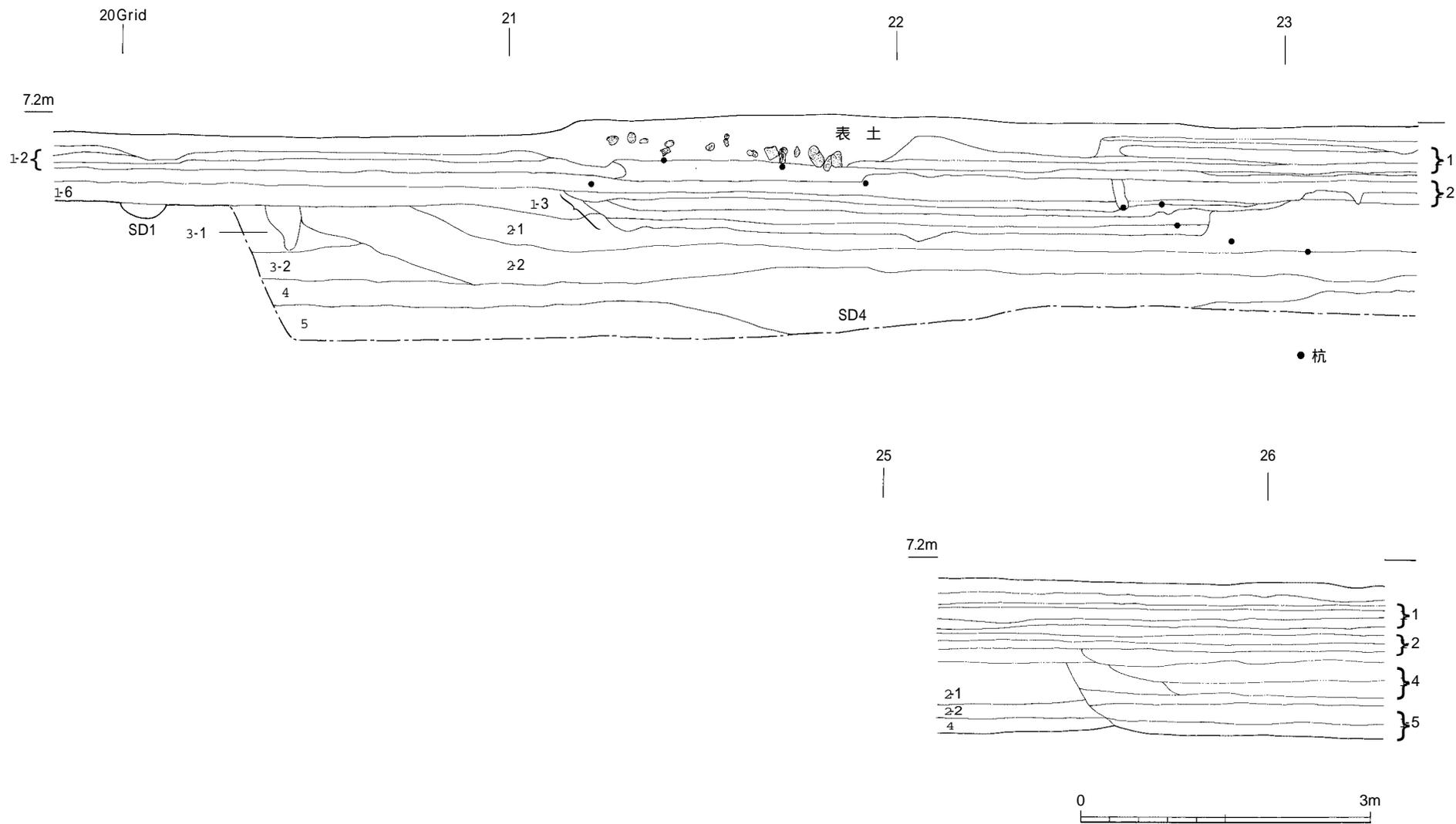


Fig.8 中近世基本層準(区南壁)

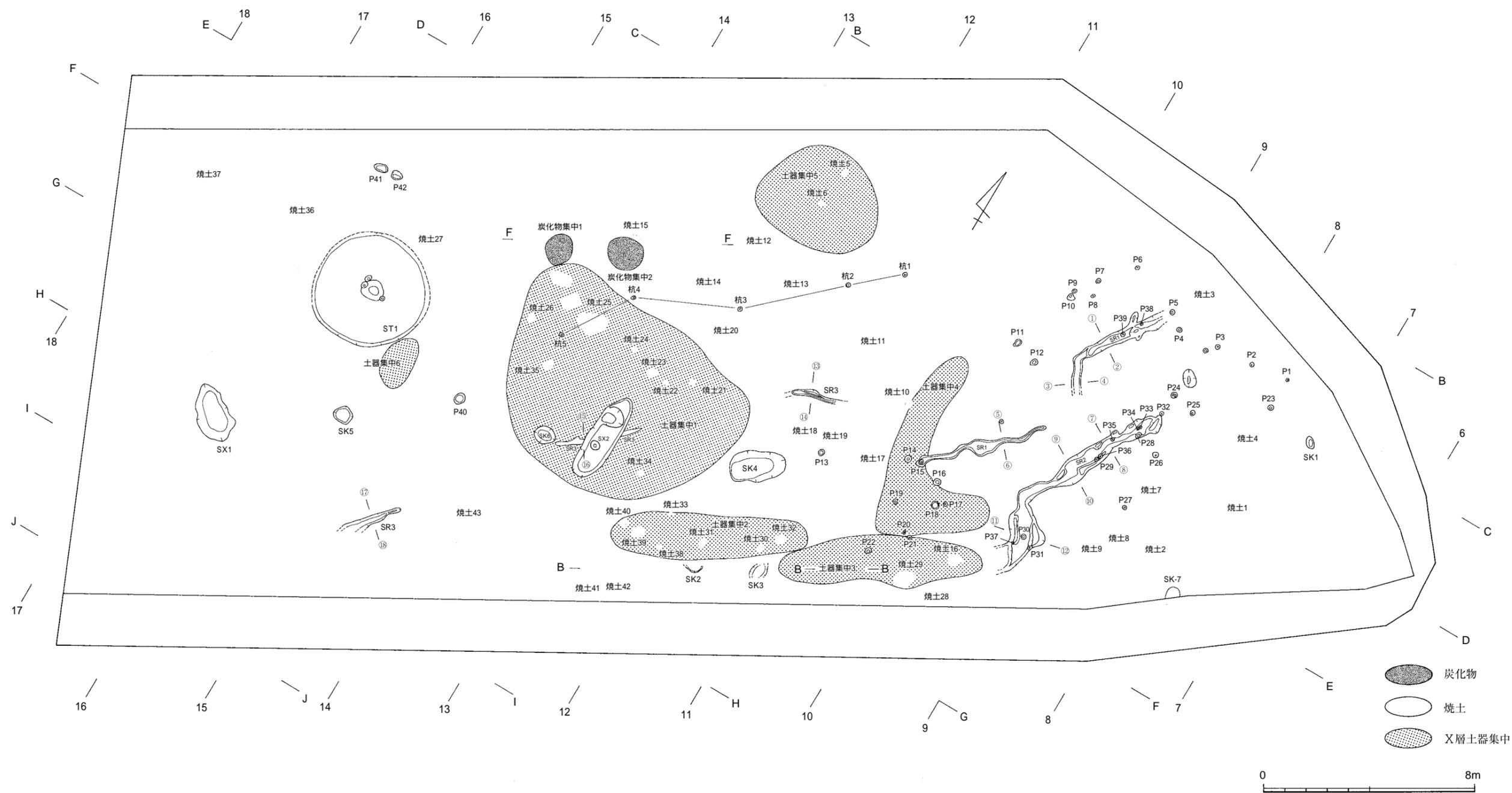


Fig.9 区検出遺構全体図(弥生時代前期末~後期前葉)

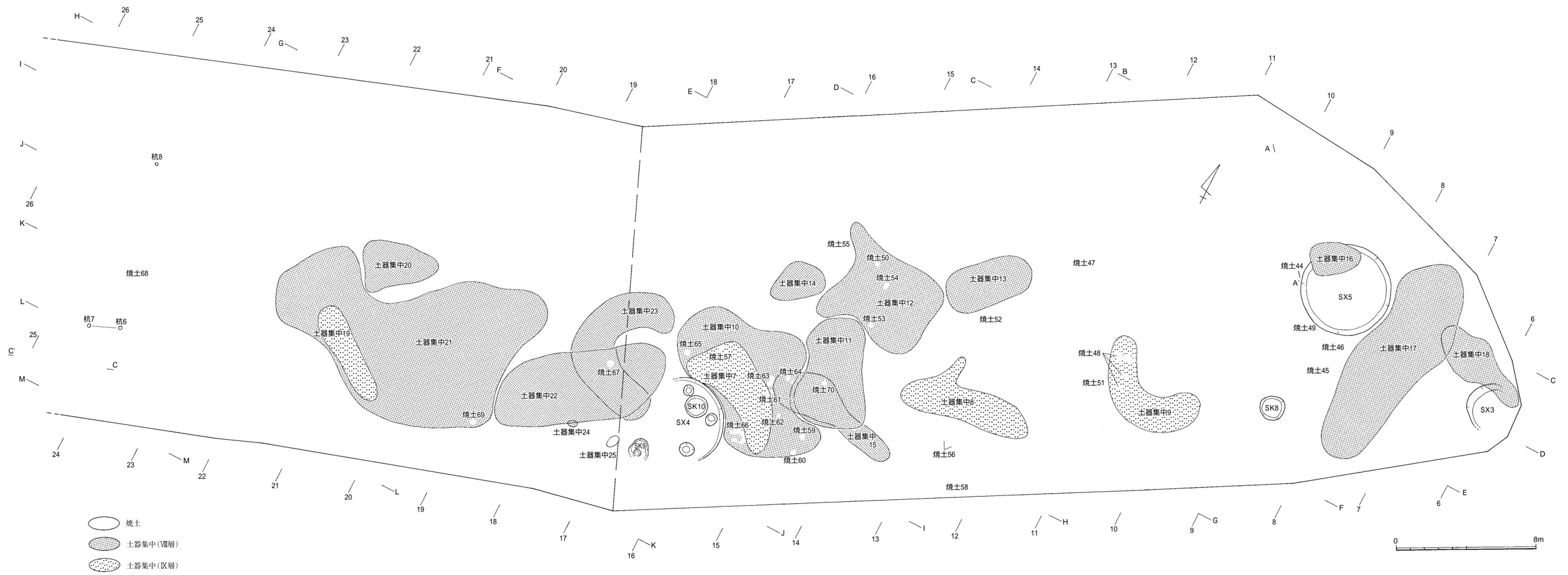


Fig.10 ・ 区検出遺構全体図(弥生時代後期中葉～古墳時代初頭)

第2節 縄文～弥生時代

1. 区の調査

(1) 縄文晩期から弥生時代前期の遺構と遺物(Fig.11)

区におけるⅫ層以下の層位での遺構・遺物の検出は皆無に近く、確認されたものは焼土1箇所と縄文晩期土器1点及び少量の細片のみである。

焼土1は 区東部D-8グリッドにおいて検出されたもので、検出面はⅫ層の下位、標高2.86mにあたる。径約40cmの円形の範囲に橙色の焼土が広がるもので、炭化物及び土器片は未検出である。一方、出土遺物はⅫ層、標高2.58mのレベルより出土した縄文晩期土器1点とその近辺より出土した細片1点である。土器はいずれも細片で、器表が摩耗した状態で出土しており、このうち実測可能な11を図示した。11は入田B式土器に該当する深鉢の胴部で、体部中位で稜をなして屈曲し屈曲部に刻み目を施した断面三角形の突帯を貼付する。内外面に横位のナデ調整を施し焼成は堅緻である。

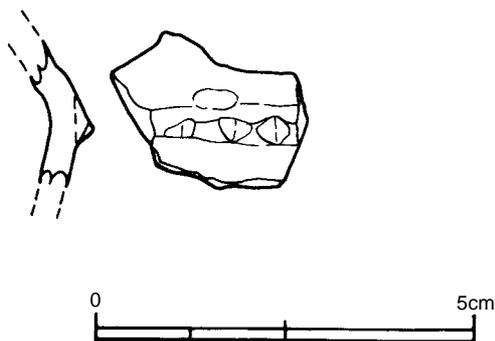


Fig.11 Ⅻ層出土遺物実測図

(2) 弥生時代前期末から後期前葉の遺構と遺物

弥生時代前期末から後期前葉の遺物包含層はⅪ層～Ⅹ層が該当する。このうち調査 区の中央部東西25mにわたる範囲では、Ⅹ層はさらに -1層：炭化物を多量に含む黄灰色粘土質シルト層(標高4.0～4.1m前後)、 -2層：オリーブ灰色シルト層(標高3.9～4.0m前後)、 -3層：炭化物を含む黄灰色粘土質シルト層(標高3.7～3.9m前後)、 -4層：炭化物を含む灰色シルト層(標高3.7～3.9m前後、常に -3層の下位に存在するものではなく、ほぼ同レベルの堆積層内で粒度が異なる一帯を区分したものに細分される。 -4層は北部に向かうに従って再び粘性が強まり、調査区中央の北側部分D-11～14・E-14・15グリッド周辺にのみ、炭化物を少量含んだ灰色粘土層による浅い落込み(-4層)が存在する。

遺構と土器集中の検出面は -1層と -3層の各上面、及び -4層とⅪ-1層上位に集中し、大きく3時期に分かれているため、以下の項ではⅪ-1層、Ⅹ層下層(-3・4層)、Ⅹ層上層(-1・2層)の各面ごとに検出状況を述べることにする。なお、Ⅹ層下層に伴うものとして位置付けた遺構の一部は現地において上面での検出が困難であったためⅪ層上面で検出されたものであるが、検出状況・埋土・出土遺物を考え合わせ同層に位置付けている。

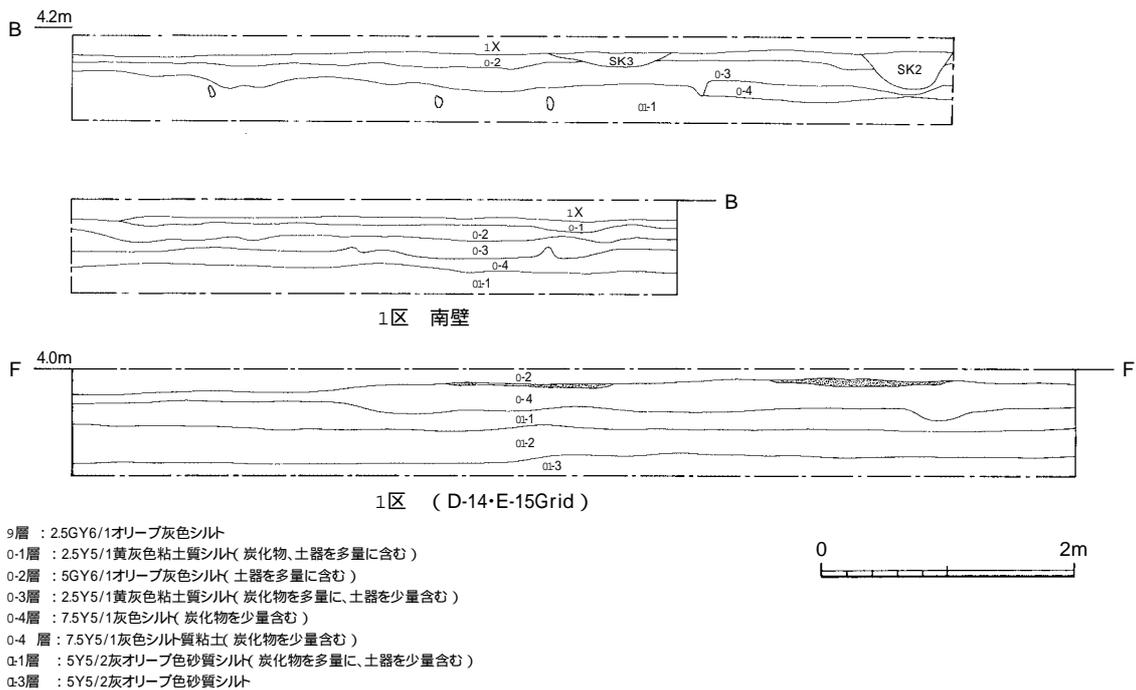


Fig.12 区 ~ XI層東西セクション

1) XI層検出の遺構と遺物(Fig.12)

弥生時代前期末の遺物包含層は、調査区中央部北側から西部一帯にかけて堆積するXI-1・2層(灰オリーブ色砂質シルト・粘土質シルト層、標高3.4~3.7m前後)が該当しており、遺構の多くはXI-1層において検出されている。検出された遺構は、竪穴状遺構1基(ST1)、ピット3基(P40・41・42)、焼土を伴う浅い落込み(SX1)、及び東部で検出された土坑1基(SK1)、焼土1箇所(焼土2)が該当しており、区北部から西部にかけての一帯に特に遺構・遺物の検出が集中する傾向が認められる。なお、ST1から弥生時代前期末の土器の出土をみた他には、他遺構は特に年代観を明らかとし得る土器片を伴っておらず、何れも検出層位と埋土の共通性により此所に位置付けたものである。特にこのうち本項に掲載したピット3基(P40・41・42)については、検出時の状況と遺構形態から中期中葉以前の層位からの掘り込みであった危険性をはらむものであることを特記しておきたい。

竪穴状遺構

ST1(Fig.13・14)

区の西寄りF-16グリッドに位置する竪穴状の遺構である。検出面はXI層、標高3.40mのレベルにあたり、遺構埋土の灰色シルトがXI層堆積層を掘り込む状態で平面プランを検出した。しかし、埋土が-4層堆積土に類似することや、上層での遺構検出が困難で床面近くに至っての検出であったことから、本来はさらにXI-1層又は-4層からの掘り込みがあった可能性が高い。又、埋土は遺構の壁際に移るに従いXI層堆積土と序々に混じり合うため、壁面立上りのプランは明瞭さを欠いたが、床面の確認ラインから導き、平面形態はおよそ径4.2m前後の規模をもつ円形であったもの

と考えられる。埋土は 層：灰色砂、 層：炭化物を少量含む灰色シルト、 層：炭化物を少量含む灰色シルト(チャート剥片・チップを多量に含む)、 層：炭化物を多量に含む灰色シルト、からなる。 層は遺構外側に移るに従いXI層堆積土である灰オリーブ色シルトが混入し、遺構埋土との境界が明瞭ではないことから壁の立上がりラインを確認できたのは南北バンク南側とその周辺部のみであった。

床面の中央部には中央ピット(P1)が存在し、その両側には2基の小ピット(P2・P2)が中央ピットを挟んで相対するように位置する。又、中央ピット脇にはさらにもう1基の浅い小ピット(P4)が検出されている。各ピットの規模はP1が径80cm深さ19cm、P2が径14cm深さ8cm、P3が径26cm深さ11cm、P4が径26cm深さ9cmを測り、埋土はP1が炭化物を少量含む灰色シルト、P2~4が炭化物を少量含む黄灰色シルト質粘土である。この他、中央ピット南側の床面では規模60×60cmの焼土が検

F-15 ×

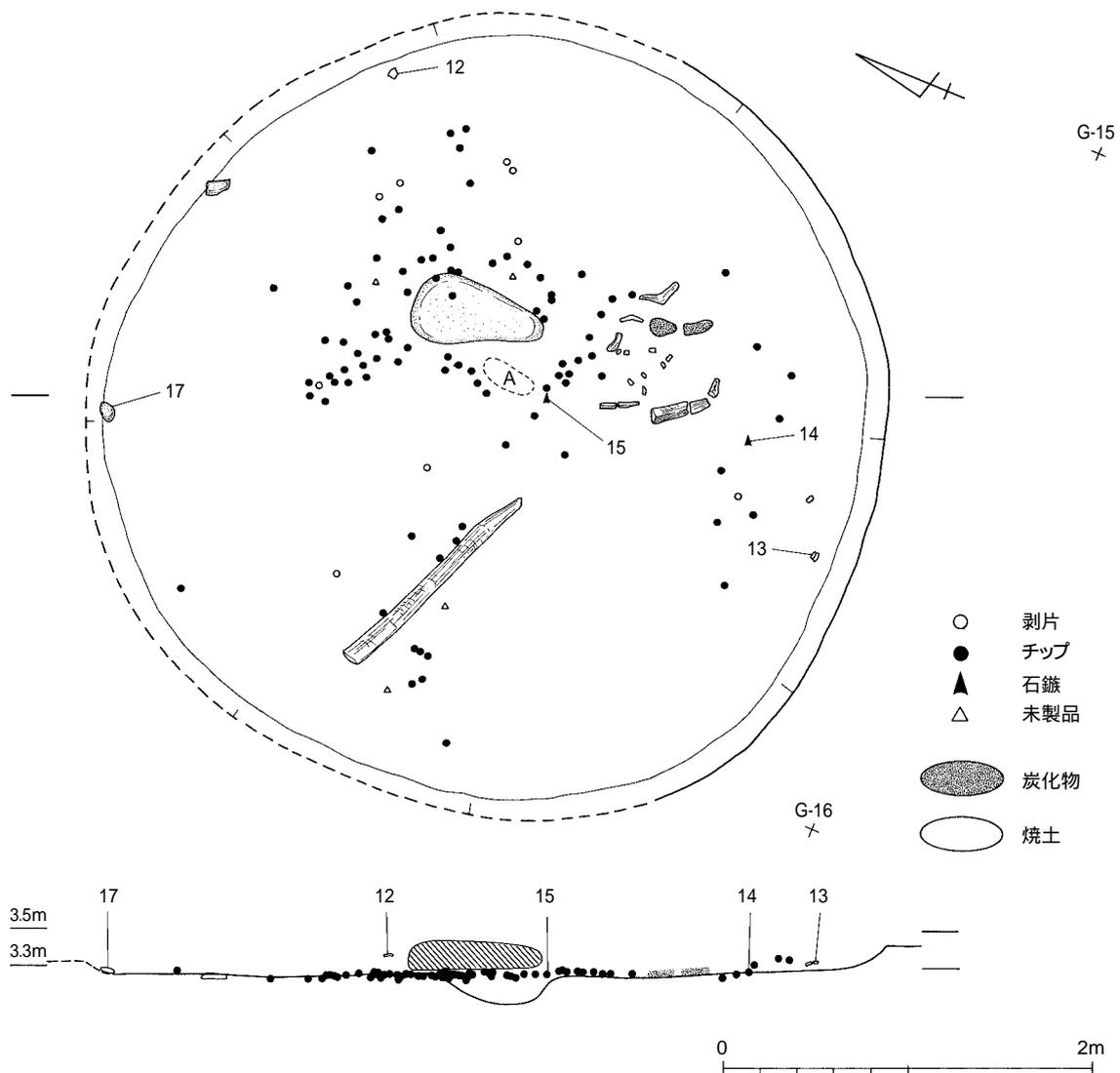


Fig.13 ST1遺物出土状況図

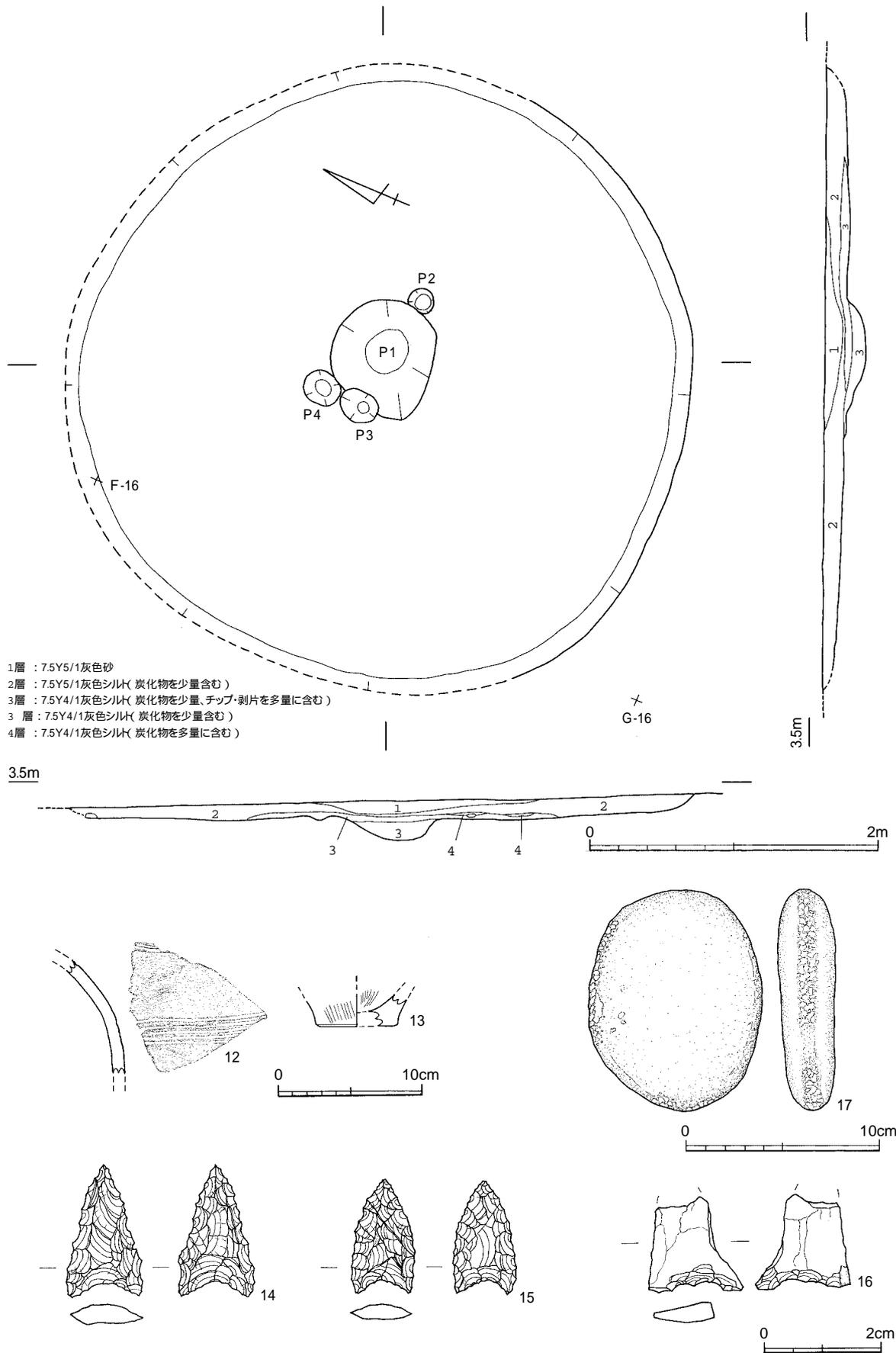


Fig.14 ST1平面図・出土遺物実測図

出され、焼土周辺には炭化物が集中している。さらに焼土脇からは長さ1.3m程の炭化した丸木材が出土した。

出土遺物は土器体部細片2点、底部1点、叩石1点、石鏃2点、石鏃の未製品4点、剥片10点、チップ204点である。出土状況を見ると、土器3点は何れも壁際付近からの出土で、底部(13)は床直上、壺胴部(12)は床面から10cm浮いた状態での出土である。この他、未実測の細片1点が床面より出土しており、片面には煤が強く付着していた。この他特に打痕や擦痕等の使用痕跡は認められないが、床面中央からは扁平な大型の礫が出土しており、この大型礫の直下及び周辺の床面からは石器製作に伴うと見られる剥片・チップが多量に出土している。大型礫の南西側にあたる範囲(Fig.13図中「A」で表示)と礫の直下には特に剥片・チップの集中密度が高く、礫位置から離れるに従い密度が弱くなる。これらの剥片・チップは石材は灰白色の頁岩3点・赤色頁岩が211点の割合で、又、チップは押圧剥離によるものが多数を占める。この他に、床直上から赤色頁岩製の凹基式石鏃2点(14・15)と同石材の未製品4点(16)、砂岩製の叩石(17)が出土している。なお、堆積状況や、中央ピット埋土への剥片・チップの混入が1点もないこと等からみて、上述した剥片・チップは、中央ピットが完全に埋まりその機能を失った後に廃棄されたものとみることができる。

図示したものは12～17である。12は壺の胴部で外面に5条を1単位とするヘラ描き直線文を施すもの。底部(13)は内外面に木理の粗いハケ調整を施す。14は赤色頁岩製の凹基無茎石鏃。平面形態は二等辺三角形を呈し、表・裏面共に全面敲打を施すもので縄文的な特徴を残している。15も同石材による凹基無茎石鏃。2辺が丸味をもった二等辺三角形を呈し、表面は全面敲打を施し裏面は初剥離面を僅かに残す。法量は14が全長2.31cm、全幅1.31cm、全厚0.35cm、15が全長1.97cm、全幅1.08cm、全厚0.28cm、と双方とも小型品である。調整加工段階に破損したものと考えられる未製品(16)は石材は赤色頁岩を使用し、平面形態は台形状を呈する。17は砂岩製叩石で、扁平な楕円形の河原石を利用している。全縁部に使用痕跡が認められ、特に長側縁は強い敲打により欠損する。

ST1の時期は、時期比定の根拠となり得る唯一の土器が流れ込みの可能性をもつ弥生前期土器(12)1点のみであることから時期決定の根拠は弱い。遺構形態・検出層位も考え合わせ弥生時代前期末に比定している。又、遺物出土状況及び剥片・チップの出土量からみて、ST1が石器製作に利用された期間は非常に短期間であり、製作直後には遺構廃絶され、埋没したものとみられる。

土坑

SK1(Fig.15)

区東端C-8グリッドに位置する浅い皿状の土坑である。検出面はXI層の中位、標高3.36mの地点にあたる。平面形態は不整楕円形をし、検出規模は長軸59cm、短軸44cm、深さ6cmを測る。埋土は黄灰色シルト質粘土で炭化物を多く含む。出土遺物はない。

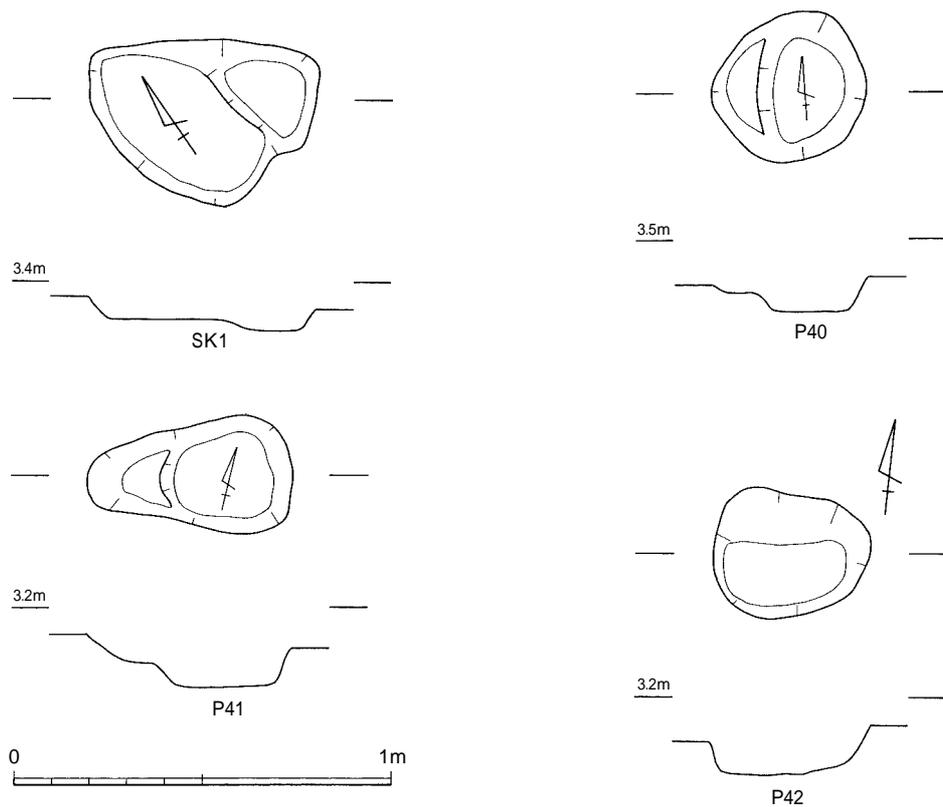


Fig.15 SK1・P40～42平面・エレベーション図

ピット

P40(Fig.15)

区西部F-15グリッドに位置し、検出面はXI層、標高3.40mの地点にあたる。平面形態は円形を呈し、検出規模は径41cm、深さ9cmを測る。埋土は灰色粘土で炭化物を層状に多量に含む。出土遺物はない。

P41(Fig.15)

区北西部E-17グリッドに位置し、P34の西に近接する。検出面はXI層、標高3.13mの地点である。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長軸54cm、短軸31cm、深さ14cmを測る。埋土は灰色粘土質シルトで炭化物を多量に含んでいる。出土遺物はない。

P42(Fig.15)

区北西部E-16グリッドに位置し、P33の東に近接する。XI層、標高3.13mのレベルでの検出である。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長軸41cm、短軸35cm、深さ14cmを測る。埋土は灰色粘土質シルトで炭化物を多量に含む。出土遺物はない。

性格不明遺構

SX1(Fig.16)

区西部H-17グリッドに位置する。検出面はXI層中位、標高3.38mのレベルにあたる。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長軸225cm、短軸125cm、深さは最も深い箇所10cmを測る。埋土は

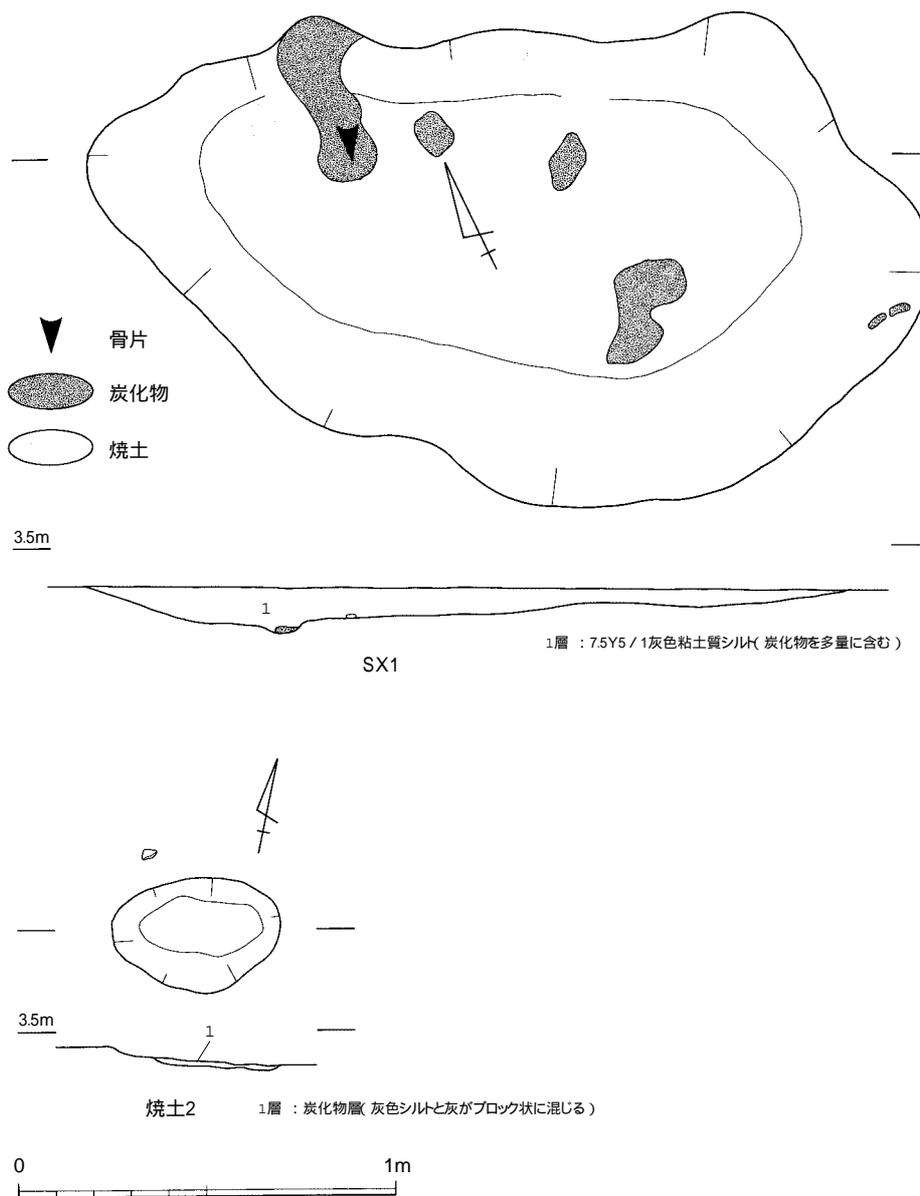


Fig.16 SX1・焼土2平面・セクション図

炭化物を多量に含む灰色粘土質シルトである。床面は中央が緩やかに落込み、壁は緩やかに立ち上がる。床から壁立上がりにかけては径60cmの規模をもつ焼土が検出されており、焼土の周辺2m四方には炭化物片が散在している。又、焼土直上からは炭化物と黄白色の灰が出土しており、灰は0.5～1cm前後の厚みをもって堆積し、中より5～10mm大の小骨片が少量出土している。なお、この小骨片は骨片分析により、哺乳綱、中でも中型哺乳類のものであるとの同定結果を得ている。

出土遺物は埋土中より土器片が少量出土しているが、何れも細片で図示できるものはない。

焼土

XI層では、先述のST1・SX1内焼土を含む4箇所の焼土を確認しているが、ここでは特に遺構や土器集中に伴わなかった単独の焼土とXI層以下の焼土を取り上げた。

焼土2(Fig.16)

区東部D-8グリッドで検出された。検出面はXI層中位にあたり、標高3.44mを測る。焼土は50×30cmの楕円形のプランをもって広がり、直上には深さ3cm程の浅い掘り込みが存在する。掘り込み部の埋土は炭化物が占めるが、炭化物内には灰色シルトと灰がブロック状に混じり人為的な攪拌の痕跡を留めている。出土遺物は焼土脇より出土した土器細片1点のみである。

2) 層下層(-3・ -4層)検出の遺構と遺物

流路(Fig.17)

区の北東から南西方向に向かう一群の流路である。遺構検出面は -3層からXI-1層にあたり、地点によって標高約3.69~3.85mと差があるが、これは 層堆積土と遺構埋土が類似し上層での確認が困難であったことから、各々上面をかなり削平された状態で検出が行われたことによる。又、流路はSR1~3という3条の単位を確認しているが、軸方向が共通し、一連の流路を構成していた可能性も考えられる。床面の標高は 区東部にあたるSR1の - 地点で標高3.64m、 - 地点で3.71m、西部にあたるSR3の17-18地点では標高3.48mと、僅かながら高低差が認められ、北東から南西方向へかけての緩やかな流れが想定される。

時期については、出土遺物が皆無であることから活動期間は特定できないが、弥生時代中期末の遺物を伴うSK6によって切られることや検出層位からみて、弥生中期前葉から中期後葉の間のいずれかに活動し、中期末以前には完全に埋没しその機能を失ったものとみられる。

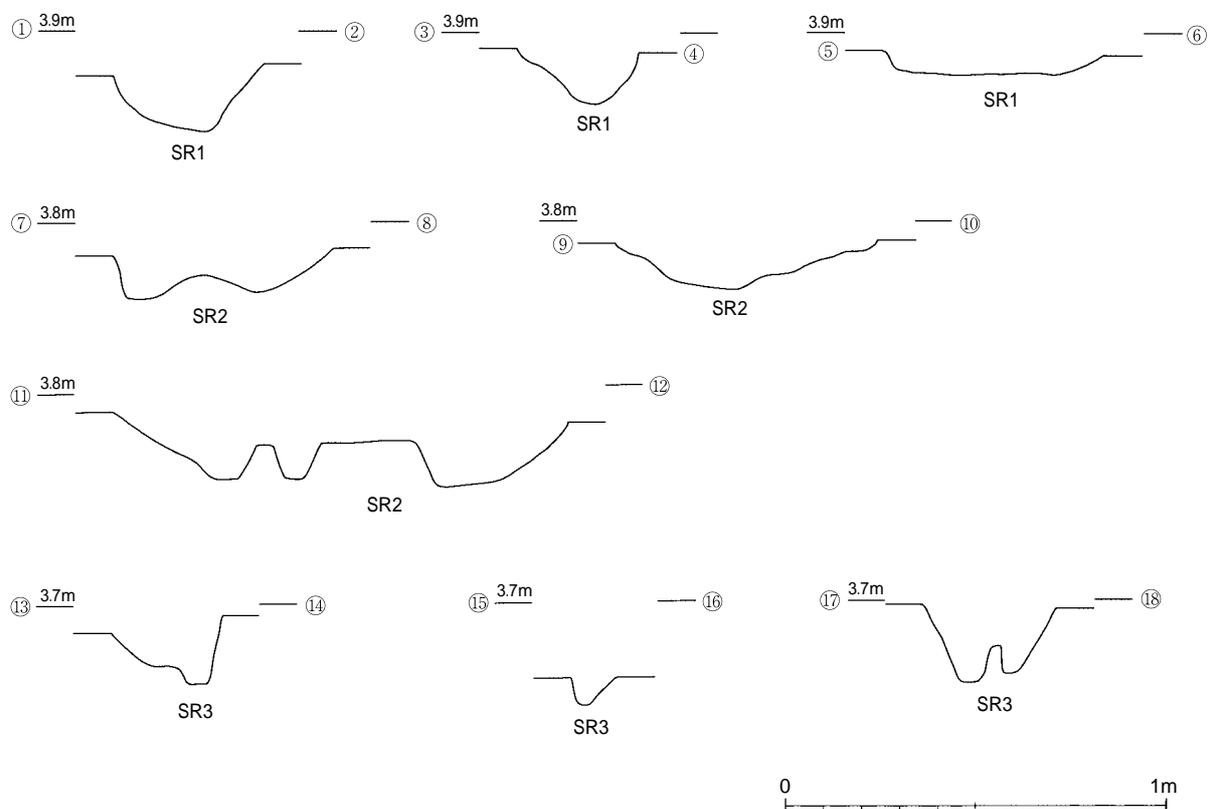


Fig.17 SR1・2・3エレベーション図

SR1

区東部で検出された。東部では -4層が存在しないため、検出面は -3層にあたり、標高3.85mでの検出となる。小さく蛇行しながら南西方向へ向かう流路で、およそN-32°-Eの軸方向をもつ。検出規模は幅が30~58cmとかなり増減をみせ、深さは5~20cm前後を測る。埋土は黄灰色粘土質シルトである。出土遺物はない。

SR2

SR1とほぼ並行し、N-30°-E前後の軸方向をもって南西方向へ向かう。検出規模は幅58~120cmで増減し、深さ12~19cmを測る。肩部にはテラスをもち床面は高低差をもつ。埋土は黄灰色粘土質シルトである。出土遺物はない。

SR3

区中央部F-13・14グリッドと西部H-15グリッドで検出された。F-13・14グリッド地点では -3層、標高約3.8mのレベルで幅1m前後の黄灰色シルトの帯状のプランを長さ3mにわたって検出しておりSK6との切り合いも確認していたが、遺構のプランが不明瞭であったため、XI層上面にあたる標高3.69mのレベルまで掘削した後に、東西にわたる流路のプランを再確認することとなった。上面をかなり削平された状態での検出であったため、検出規模は17-18地点で幅35cm、深さ22cm、軸方向はN-45°-E前後を測る。埋土は黄灰色粘土質シルトである。出土遺物はない。

杭列・杭群

杭列1(Fig.18)

区中央部北寄りE-14グリッドからC-12グリッドにかけて、5基の杭穴を確認した。杭穴1・3~5はXI層上位で検出され、検出面は標高3.56~3.85mのレベルにあたるが、埋土の状況及び杭穴2が -4層面で検出されている点から何れの杭も -4層面より上からの掘り込みがあったものと考えられる。杭間の距離は2~3.6m前後で間隔は一様でなく、およそN-47°-Eの軸方向をもって並ぶ。確認された杭穴1~5は、径16~20cm前後、検出時の深さ12~32cmを測る。埋土は何れも炭化物を多量に含む黄灰色粘土で、杭穴1~3・5内には木杭が残存する。

杭列1は南に近接するSR1~3の流れにほぼ並行した配置をみせるため、流路の付属施設として同時期に活動した可能性をもつが、共に出土遺物をみないことから特定できるものではない。

杭は杭穴1~4から各々出土しており、このうち杭穴1出土の19、杭穴2出土の18、杭穴4出土の20を図示した。いずれも丸木材を利用したもので、先端部に加工痕跡を認める。

杭群2(Fig.19)

区東部一帯、SR1・2周辺で39基の小ピットを検出した。ピットは 層の最下位からXI層上面にかけて検出されており、検出面は標高3.8m前後にあたる。又ピット群のうちP15・28~39は流路SR1・2床面からの検出である。ピットの配置に全体的な規則性を見出すことはできないが、このうち、流路の流れに交差する形態をとり東西方向へほぼ等間隔で直線的に配置されるP1~4と、流路北岸に沿ってやや南北方向へ不規則に散在するP6~12、流路南岸に沿って散在するP23~27、SR1・2の肩部に沿って流路内に分布するP15・28~39の各ブロックを認めることができる。

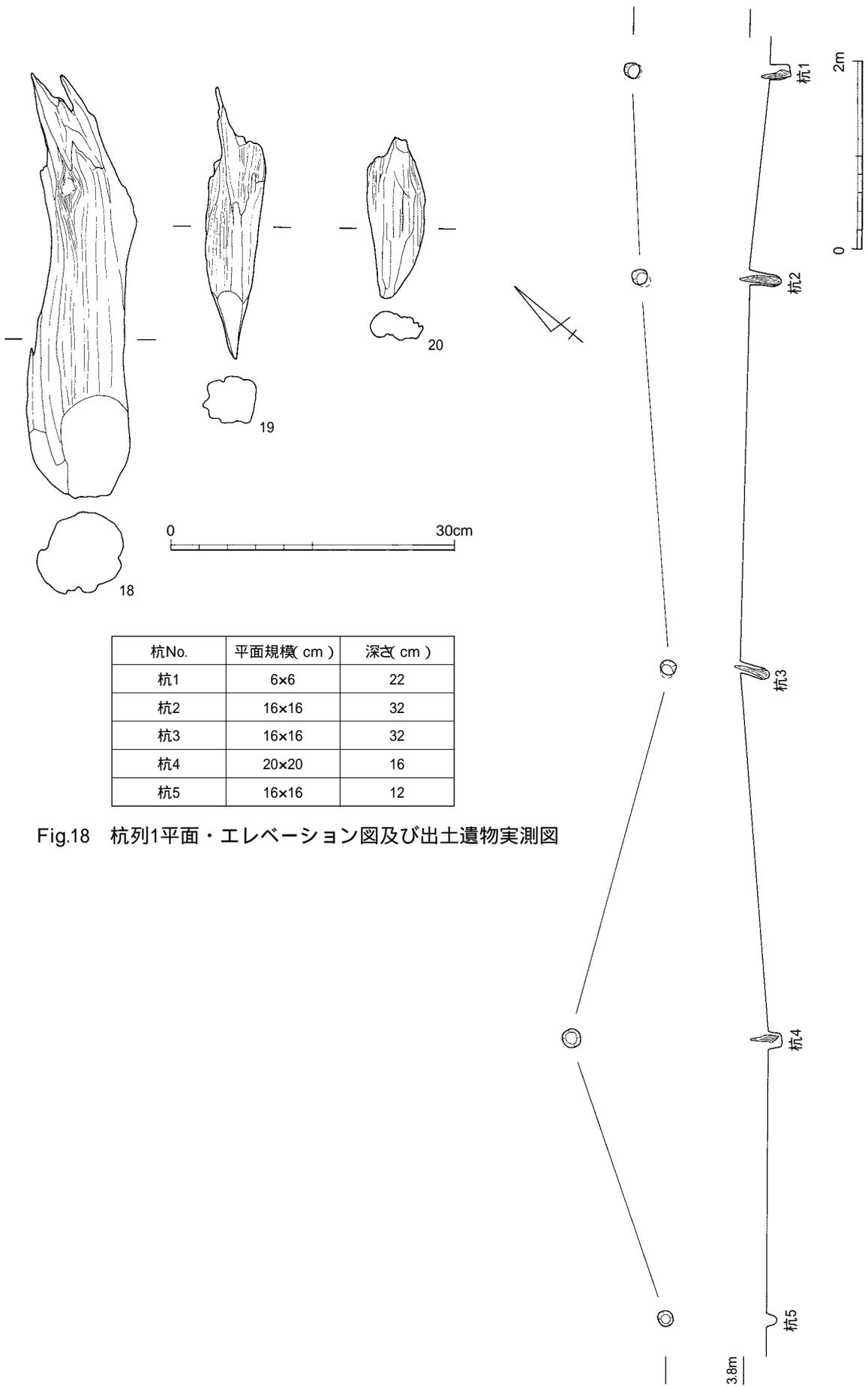


Fig.18 杭列1平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

ピットの検出規模は径10～25cm・深さ6～20cm前後を測り、詳細は別表(Tab.2)の通りである。埋土はP1～4・P7・P10～13・P19・P27～39が炭化物片を多量に含む黄灰色粘土で、このうちP4においては粘土内より木杭であったとみられる腐蝕した木片と多量の炭化物片を検出しており、埋土が共通する他のピットについても木杭が残存していた可能性が高い。一方P5～6・P8～9・P14～18・P20～26は埋土が炭化物を少量含む黄灰色粘土質シルトからなる。なお出土遺物は各ピットとも皆無であった。

P4からの木杭の検出、及び埋土とピットの規模及び配列状態が杭列1に類似することからP1～4・P7・P10～13・P19・P27～39は一群の杭穴として捉えることが可能であり、又、埋土の異なるP5～6・P8～9・P14～18・P20～26についても規模と配列状態が共通する点からみて同様の性格を有するものと予想される。又、P15・28～39がSR1・2床面から検出されている点や、さらにピット群全体の配置がSR1・2にほぼ沿う形態を示すことから、やはり流路に付随する付属施設として機能していた可能性が高い。出土遺物が無いことから時期の特定はできないが、流路との関係及び検出層位からみて、弥生時代中期前葉から後葉の間におくことができる。

ピット番号	平面規模(cm)	深さ(cm)
P1	9×9	13
P2	15×15	14
P3	20×20	16
P4	18×18	20
P5	23×23	9
P6	10×10	9
P7	6×6	6
P8	13×13	11
P9	18×18	11
P10	26×20	17
P11	25×23	19
P12	24×23	20
P13	20×20	6
P14	24×24	12
P15	16×16	11
P16	24×20	6
P17	12×12	12
P18	28×24	6
P19	18×18	6
P20	12×10	14
P21	12×12	13
P22	18×18	7
P23	24×24	7
P24	23×23	7
P25	14×14	6
P26	12×12	13
P27	13×13	13
P28	12×12	9
P29	16×16	17
P30	22×16	9
P31	16×14	10
P32	8×8	5
P33	8×8	10
P34	10×10	5
P35	10×10	5
P36	10×10	15
P37	20×15	9
P38	12×12	7
P39	20×20	9

(Tab.2 杭群2ピット計測表)

土坑

SK5(Fig.20)

区西部G-16グリッドに位置する。検出面はXI層上面、標高3.70mの地点にあたるが、埋土からみて-4層面からの掘り込みがあった可能性が高い。平面形態は楕円形を呈し、検出規模は長軸71cm、短軸61cm、深さ12cmを測る。埋土は炭化物を含む黄灰色粘土質シルトである。

出土遺物は壺(21)1点と底部1点及び胴部細片で、21が埋土中出土、底部と胴部細片が床面からの出土である。21は外面に強い指頭押圧を加えた扁平な粘土帯貼付口縁となる。口縁部から頸部にかけては断面三角形の小突帯を4条巡らせ、頸部下端には櫛描直線文を配し楕円形あるいは棒状の浮文を貼付する。小突帯は両側に静止横ナデを施し部分的に指頭による摘み痕を残すものである。内外面ナデ調整で、胎土は砂礫を多く含み、体部はやや薄手の作りとなる。この他、未実測の胴部細片も内外面ナデ調整で薄手である。

SK5は出土遺物からみて弥生中期中葉に位置付けられる。

SK6(Fig.20)

区中央部F-14グリッドに位置する。検出面は-3層、標高3.80mの地点にあたる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸73cm、短軸66cm、深さ13cmを測る。埋土は炭化物を含む黄灰色粘土質シルトである。

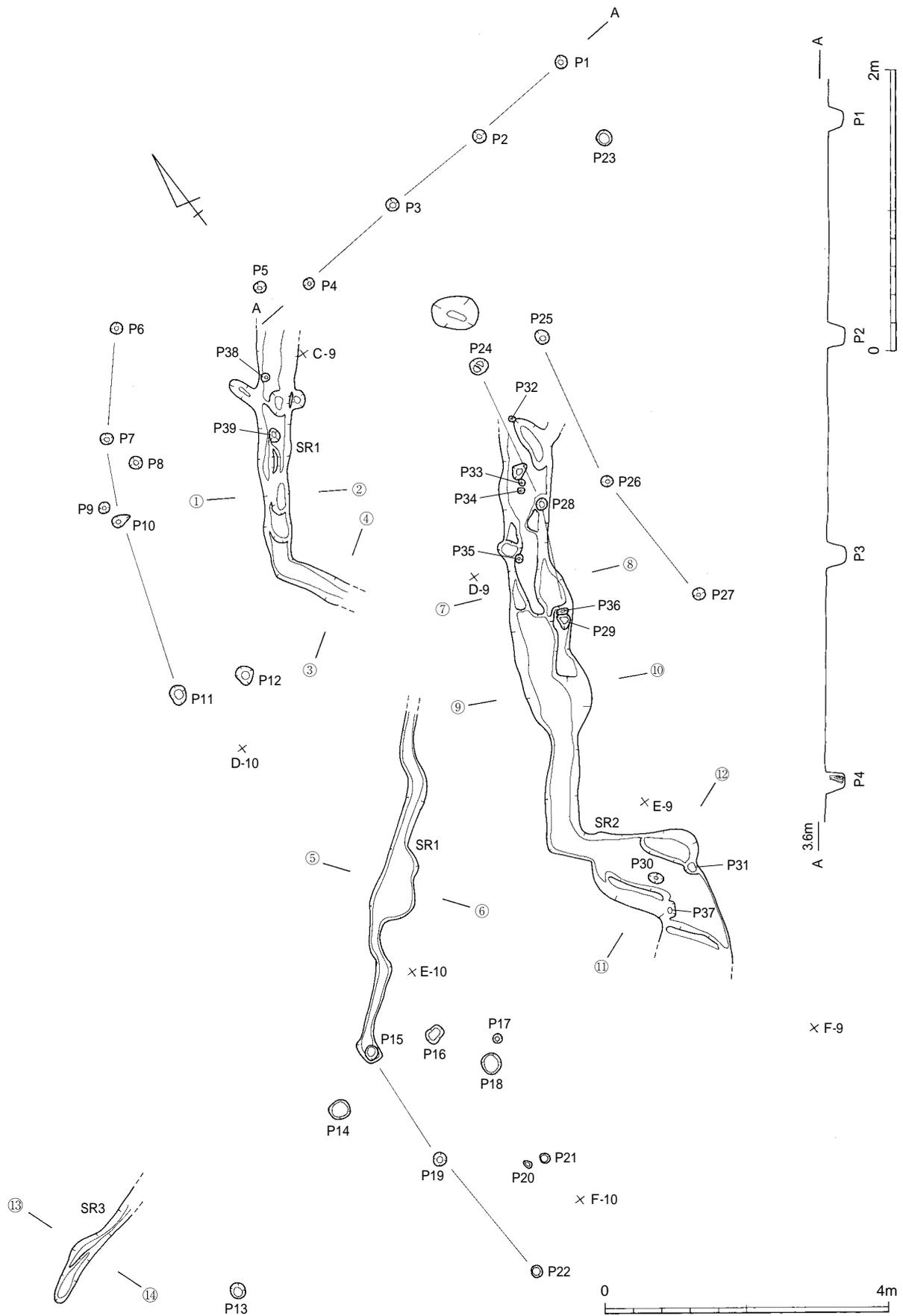


Fig.19 杭群2平面・エレベーション図

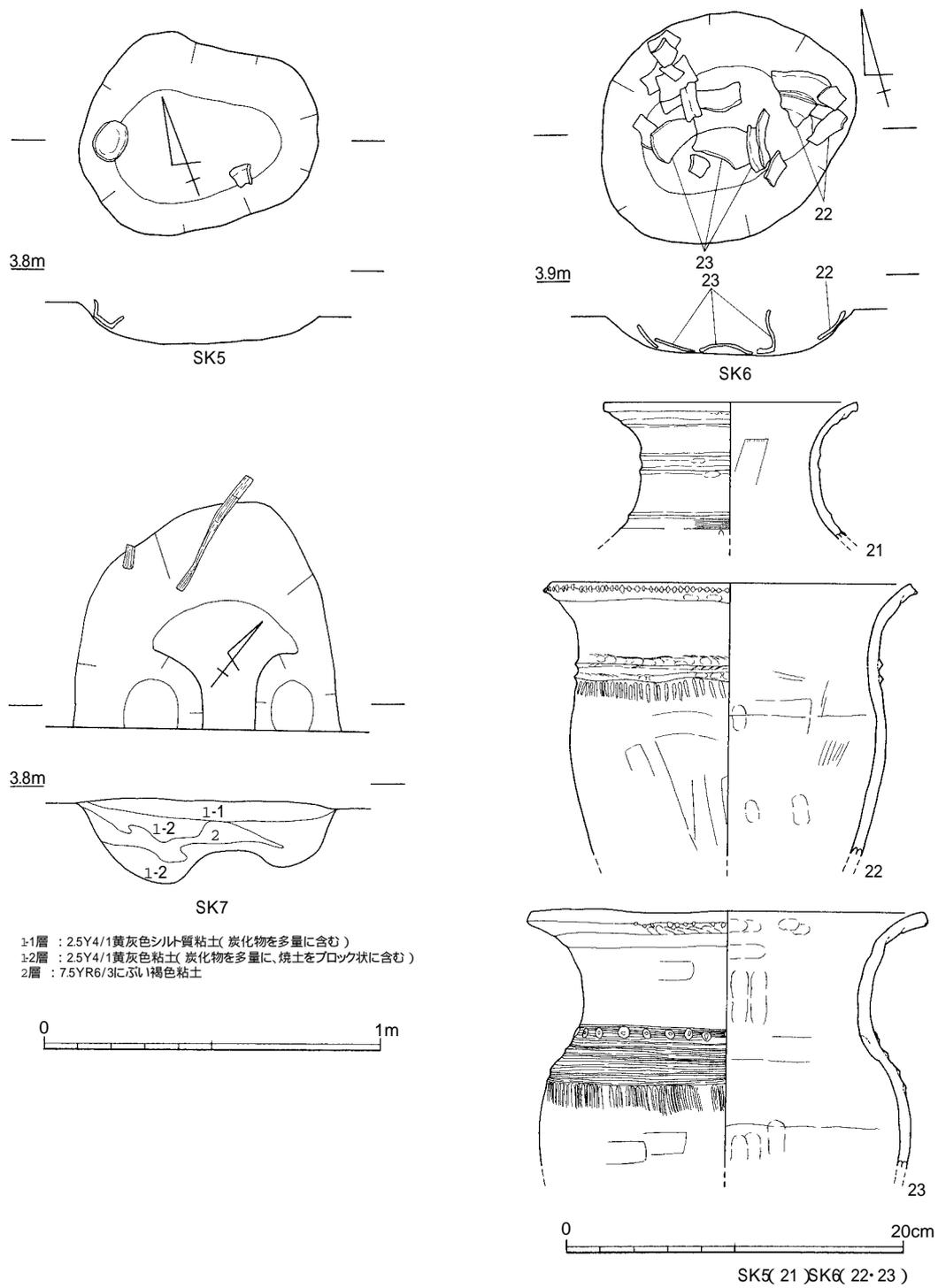


Fig.20 SK5・6・7平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図

出土遺物は甕2点である。出土状況においては両者とも破片の状態から床面からまとめて出土しており、接合後は何れも完形近くまで復原された。図示したものは22・23である。22は口縁部が大きくカーブを描いて外反する「土佐型」の形態を示す甕であるが、胴部の張り口縁部の外反度が弱いタイプ。口縁部は外面に強い指頭押圧を加えた扁平な粘土帯貼付口縁をなし、口唇部下端に刻目

を施す。上胴部には貼付による断面三角形の小突帯を2条貼付し、突帯上下を指頭で摘み爪圧痕が顕著に残る。突帯の直下にはヘラ描きによる列点文を配する。角閃石をやや多く含む灰褐色の胎土で焼成は堅緻である。一方23も同タイプ甕に類するが、22とは対照的に、胴部の張り口縁部の外反度が強まる。口縁部は同様に外面に強い指頭押圧を加えた扁平な粘土帯貼付口縁で、口唇部下端に刻目を施す。上胴部には櫛描直線文の上面に4条の貼付突帯・円形浮文を組み合わせ、貼付突帯には胴部と色調の異なる粘土を使用する。直下には櫛状原体による斜方向の連続文様を巡らす。胎土特徴も22とは異なり灰色系の砂礫を多量に含む褐灰色の胎土である。

SK6は出土土器からみて弥生中期末に位置付けられる。

SK7(Fig.20)

調査区南西部E-8グリッドに位置する土坑で、標高3.75mのレベルで検出された。南側は調査区外に出ており全体の規模は不明であるが、およそ平面形態が楕円形を呈する浅い皿状の土坑であったものと考えられる。検出規模は短軸80cm、深さ20～25cmを測る。床面は部分的な落込みを伴い、人為的な攪拌を受けた痕跡を留める。埋土は -1層：黄灰色シルト質粘土、 -2層：黄灰色粘土、 層：鈍い褐色粘土で、 層は炭化物と焼土ブロックを多量に含む。出土遺物はない。

炭化物集中・焼土

-3・4層にあたる標高3.7～3.9mのレベル間では、5箇所の焼土と炭化物溜まり2箇所を確認しており、ここでは出土遺物と層位との関連から特に重要とされる炭化物溜まりを取り上げた。なお、本文中に記載できなかった各焼土の検出位置と規模は別表(Tab.5・6)に示している。

炭化物集中1(Fig.21)

区の中央北寄りD-14・15グリッドに位置する。当地点周辺では -4層：灰色シルト層がより粘性を強めた -4層：灰色シルト質粘土層が堆積し一帯が緩やかな落込みをみせており、その上面標高3.90mの地点において、1m程の間隔を空けて存在する東・西2ブロックの炭化物溜まり(炭化物集中1・2)を検出した。

西に位置する炭化物集中1は径1mの不整形の範囲に炭化物が疎らに堆積するもので、その直下には2～3cm前後の深さをもつ浅い落込みを伴う。埋土は炭化物を多量に含むオリブ灰色粘土で占められており、埋土中から甕口縁部2点を含む少量の土器細片が出土している。

図示したものは24・25である。24は口縁部が逆「L」字状を呈するもので、端部に浅い刻目を施す。外面には煤が強く付着している。25は口縁部に断面三角形の小突帯を2条貼付するもので、突帯にはハケ状原体による「V」字状の深い刻目を施す。

炭化物集中1は、弥生時代前期末に位置付ける。

炭化物集中2

区北部D-13グリッドに位置する小規模な炭化物溜まりで、炭化物集中1の東にあたる。検出面は -4層、標高3.90mの地点である。径約50cmの円形の範囲に1cm程の厚みをもって炭化物が薄く堆積するもので、出土遺物はない。

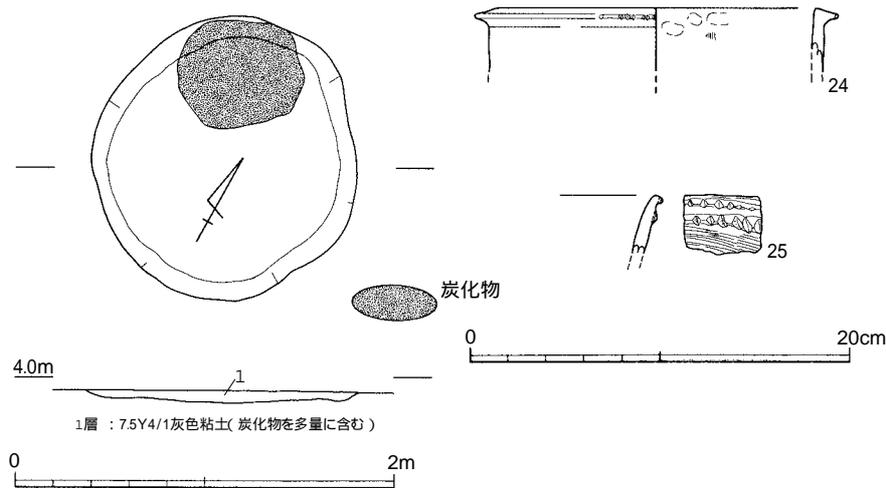


Fig.21 炭化物集中1平面・セクション図及び出土遺物実測図

3) 層上層(-1・ -2層)検出の遺構と遺物

-1層には多数の焼土と炭化物集中と共に、土器集中1～6と浅い皿状の土坑SK2・3・4、SX2が存在する。同層の土器集中には部分的に人為的な掘り込みが認められ、土器の出土は一部 -2層にまで及ぶ。各遺構と土器集中の検出面は -1層に集中しており、土器集中1・2、SK3・4、SX2が標高4.0～4.1m、土器集中3～6、SK2は標高4.1m前後での検出である。このうち土器集中1、SK4、SX2の間では土器の接合関係が認められており、同時期の土器廃棄と捉えられる。又、これらは、先述した -3・4層検出の自然流路と遺構群が埋没した後の、一連の廃棄遺物として把握できる。

土坑

SK2(Fig.22)

G-12グリッド 区南端に設定したトレンチ際で検出した。検出面は -1層、標高4.12mの地点にあたる。北側の大部分をトレンチによって削平されているため、全体の形状は不明であるが、楕円形の平面プランをもつ浅い皿状の土坑であったものと思われる。検出規模は短軸56cm、深さ6cmを測る。埋土は炭化物で占められ、黄灰色シルトがブロック状に少量混じる。出土遺物はない。

SK3(Fig.22)

区南端部 F-12グリッドに位置し、検出面は -1層、標高4.06mにあたる。南部は調査区外に出、さらに北側の一部をトレンチによって削平されているため、全体の形状は不明であるが、平面形態が楕円形を呈する浅い皿状の土坑であったものと思われる。検出規模は短軸54cm、深さ5cmを測る。埋土は炭化物で占められ黄灰色シルトが少量混じる。埋土中より土器片数点が出土するが、いずれも細片であり図示できるものはない。

SK4(Fig.22)

区中央 E-12・F-12グリッドに位置する浅い皿状の土坑で、検出面は -1層、標高4.00mのレベルにあたる。平面形態は楕円形を呈し、長軸212cm、短軸120cm、深さ13cmを測る。床面は中央に向かい緩やかに落込みをみせ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土はほぼ炭化物で占められるが、黄灰色シルトがブロック状に混じり人為的な攪拌を受けた様相を示す。

埋土中からは多量の炭化物に混じり炭化した丸木材が出土しており、それに伴い下層より約2cm大の小型の桃の種子が1点出土している。又、さらに床面から下層にかけては黄白色の灰のブロックと共に5～10mm大の小骨片が数箇所から出土した。これらの小骨片は骨片分析によって、哺乳綱(特に中型哺乳類)・鳥綱・硬骨魚綱のものであるとの同定結果が得られおり、同一遺構内で同時期に複数の動物遺体が高温焼成されたことが明らかとなっている。

以上の分析結果及び桃の種子、又出土遺物の項で後述する赤彩土器の出土等から、SK4は土器廃棄を伴う祭祀的色彩の強い動物遺体焼成土坑として捉えられる。又、SK4床面出土の土器片(38)と後述する土器集中1内出土の土器間に接合が成立したことから、SK4と土器集中1は同時期の一連の土器廃棄と考えられる。

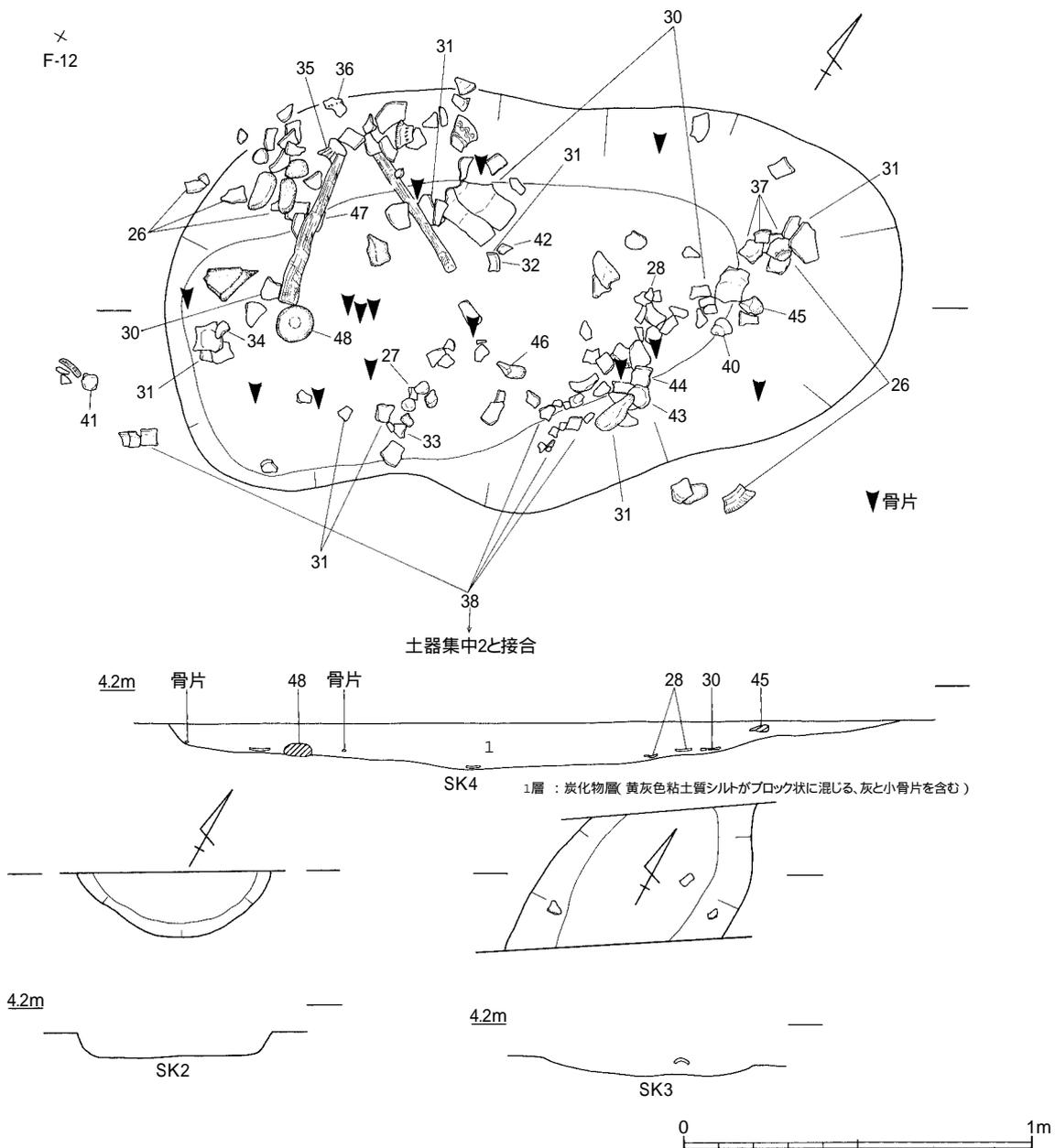


Fig.22 SK2・3・4平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図

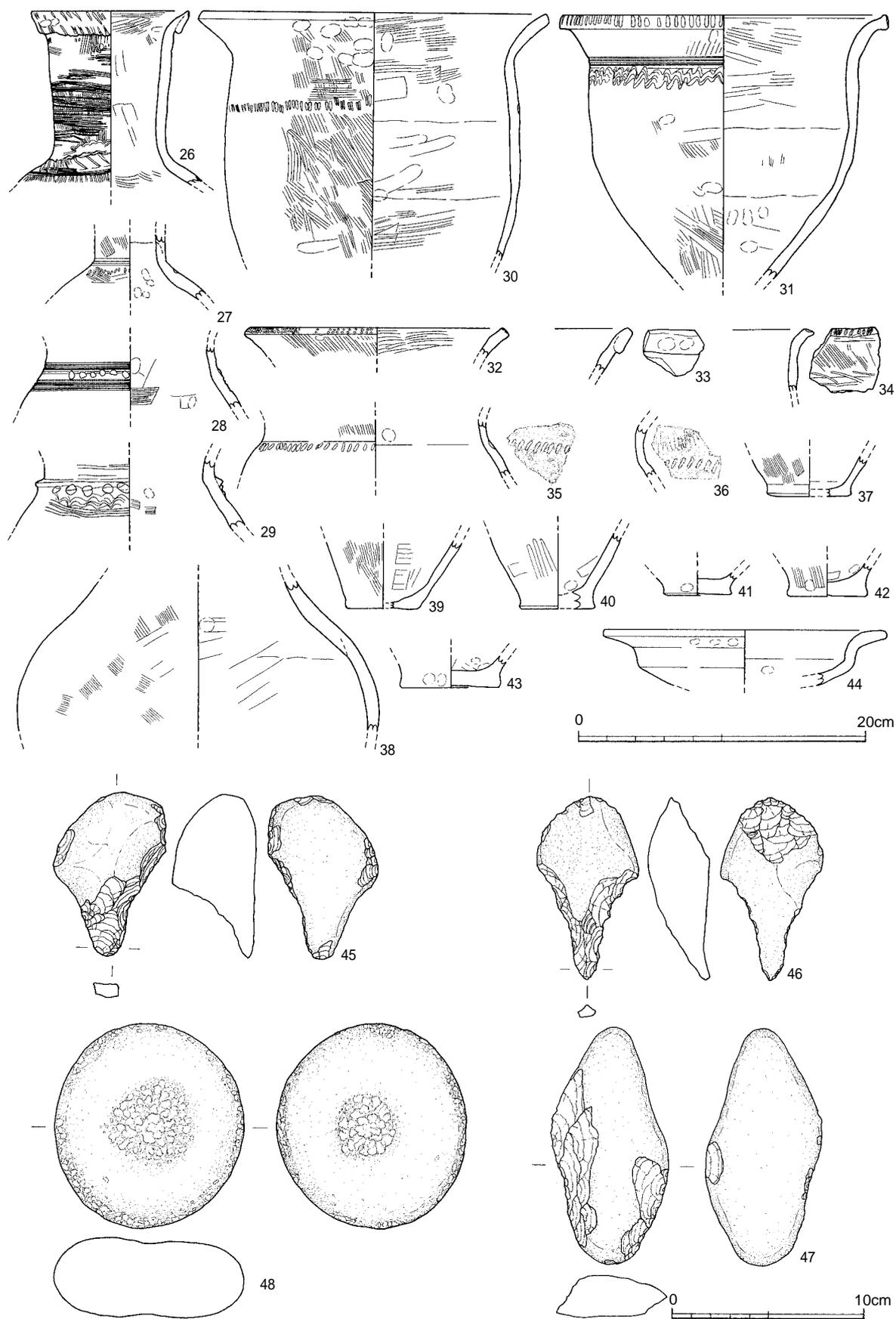


Fig.23 SK 4 出土遺物実測図

出土遺物は壺・甕・高杯・叩石・尖頭状の礫器・敲打器である。土器は口縁部点数にして壺1点、甕22点、高杯1点、底部は5点が出土している。甕の口縁部形態は粘土帯貼付口縁3点、素口縁で無文のもの15点、素口縁で口唇部に刻みあるいは刺突を施すもの4点である。又、底部は何れも平底で底部脇に押圧を加え摘み出し風となる。甕の口縁部形態は大きくカーブを描き外反するタイプで占められ、うち粘土帯貼付口縁が3点、端部に刻目あるいは刺突を施すもの4点、無刻みのものが15点を占める。底部は底部脇を摘み出すもの4点である。

出土状況を見ると土器は床面から下層に集中し何れも破砕された破片の状態出土しており、1個体の破片が各所に散在している。中でも赤彩の甕(31)は接合後完形に復原されたものであるが、出土時には床面の各所から破片が出土している。又、壺胴部(38)は西に近接するSF21出土土器片と接合される。叩石1点・尖頭状の礫器2点は共に上層よりの出土である。

図示したものは壺(26・27・38)、甕(28・30～36)、高杯(44)、壺又は甕の胴部(29)、底部(39～43)、尖頭状の礫器(45・46)、叩石(48)、敲打器(47)である。長頸壺(26)は粘土帯貼付口縁外面に刻目を施し、頸部から肩部にかけては多条の櫛描直線文・櫛描波状文・逆「ノ」字状の圧痕文・列点文を連続的に施す。27は壺、29は壺又は甕の上胴部で何れも頸部下端から肩部に文様帯を設ける。27は肩部に櫛描直線文と列点文、29は断面三角形の突帯を貼付し直下に刻目を入れた円形浮文・櫛描波状文・櫛描直線文を施す。38は壺の胴部。甕は全て口縁部が緩やかにカーブを描いて外反するタイプで、30・31は胴部の張りが弱い。30・35・36は上胴部に列点文を施す。31は口縁端部を面取り全面に刻目を施すもので、上胴部に櫛描直線文と櫛描波状文を施す。器面は粗いハケとナデ調整で仕上げ、赤彩する。32は口唇部を面取り刺突文を、34は刻目を施す。33は粘土帯貼付口縁の外面を指頭押圧する。高杯44は強く屈曲する杯部を呈する。

砂岩製の45・46は尖頭状の形態をもつ礫器で、楕円形の河原石を利用し片側面の両側より打点を加え尖頭状に加工する。先端部は鋭角的に尖らせ、加工を施さない裏面においても先端部のみには打点を加えていることから、先端部使用を目的としたものと推察される。しかし先端部及び体部には特に敲打痕等の使用痕跡は認められず、繰り返しの使用及び固い対象物を敲打したものと考える。砂岩製の敲打器(47)は扁平な不整楕円形の河原石を利用し両縁部と先端部に使用痕を認める。48は砂岩製の叩石で、扁平な円形の河原石を利用し、両主面の中央部と縁部全面に使用痕を認める。

SK4は、弥生時代後期前葉に位置付けられる。

性格不明遺構

SX2(Fig.24)

区中央部F-13・14グリッドに位置する。先のSK4に類似する浅い掘り込みを伴った炭化物溜まりで、SK4からは西方4mの地点にあたる。検出面は -1層、標高4.06mのレベルとなる。平面形態は長楕円形を呈し、規模は長軸340cm、短軸105cm、深さは平坦部で5～7cm、最も深い箇所深さ17cmを測る。床面はおよそ平坦であるが部分的に緩やかな落込みやピット状の小さな掘り込みを伴い、壁は床面平坦部から緩やかに立ち上がる。埋土は 層：黄灰色粘土質シルトがブロック状に混じる炭化物層、 層：黄灰色シルト質粘土、 層：オリーブ灰色シルトで、 層には共に炭

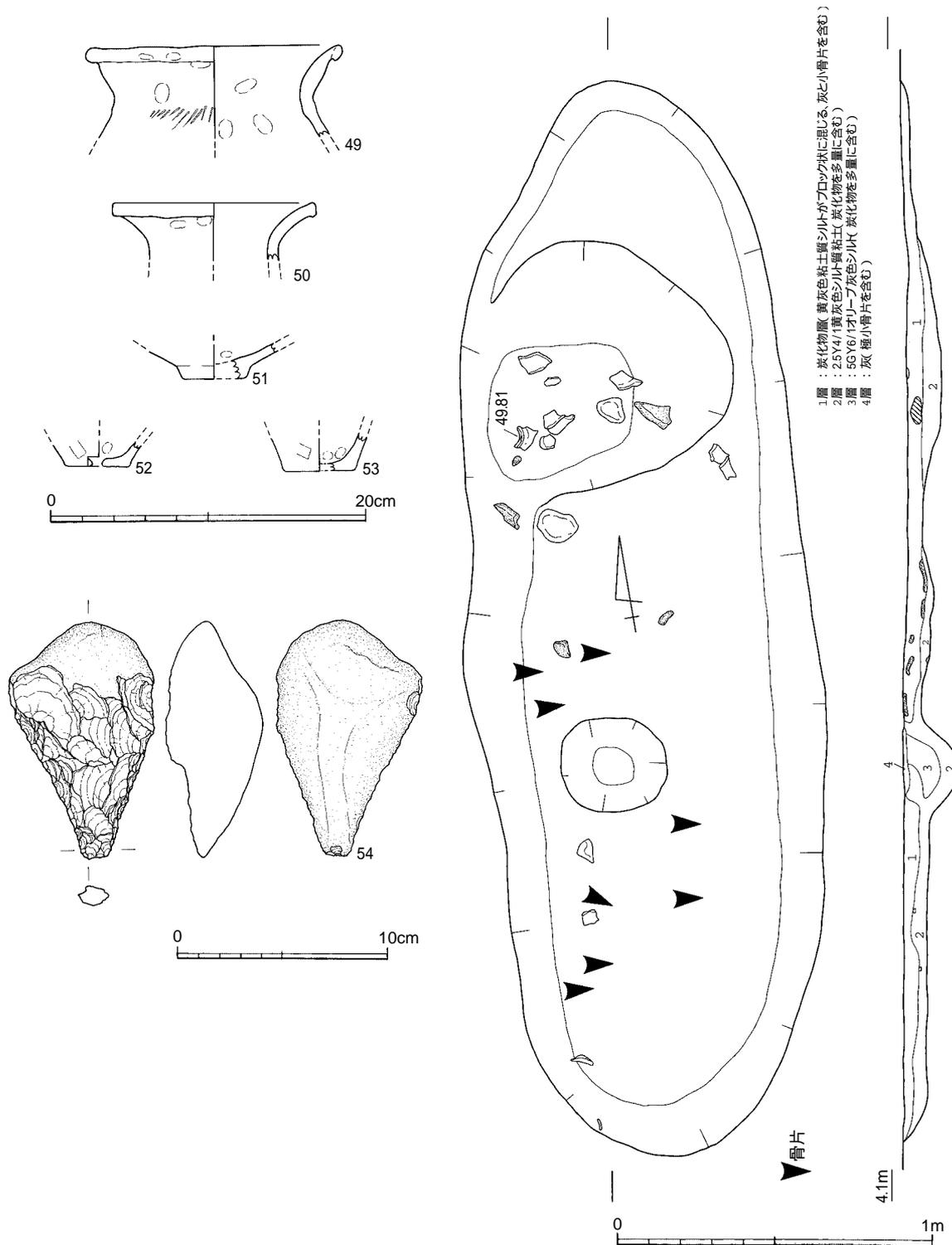


Fig.24 SX2平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図

炭化物を多量に含む。 層埋土は、 層の堆積を切って上面より掘り込んだ痕跡を留めており上面には灰白色の灰からなる 層が1~2cmの厚みをもって薄く堆積する。又、 層の上面と床面からは、2~5mm大の小骨片が各所から散在して出土している。これら小骨片は骨片分析によって哺乳綱のものとの同定結果を得たものである。

出土遺物は壺・甕・甑・尖頭状の礫器である。土器は口縁部点数にして壺1点、甕3点、鉢0点、底部は4点が出土している。甕の口縁部形態は大きくカーブを描き外反するタイプで占められ、うち粘土帯貼付口縁が1点、無刻みのものが2点を占める。又、壺・甕・甑の底部は平底2点、凸状1点、平底に焼成前穿孔を穿つもの1点である。

図示したものは壺(50)・甕(49)・甑(52)・底部(51・53)・尖頭状の礫器(54)である。このうち51が検出面、49・50・53・54が 層、52が 層よりの出土である。広口壺(50)は口縁部が大きく外反するタイプのもので、端部を面取り僅かに肥厚させる。甕(49)は口縁部外面に粘土帯を貼付するが外面への強い押圧は施さず強い段を残し、端部を丸くおさめる。上胴部には列点文を巡らす。底部(51)は凸状を呈する。甑(52)は底部中央に焼成前穿孔を認める。砂岩製の礫器(54)は楕円形の河原石を利用するもので、両側面から大きく剥離させ先端部を作り出した後、さらに先端部に調整剥離を加え尖った先端部を作り出している。

土器集中

層上層では土器集中1～6が分布する。各集中は、 区中央部標高4.0～4.1mの地点に分布し土器集中1・2から構成される[層-1群]と、 区南東部標高4.1m前後の地点に分布し土器集中3・4から構成される[層-2群]、 区北部標高4.1～4.2mに分布する土器集中5と西部に位置する土器集中6から構成される[層-3群]、に大きく分けられる。各群は10cm前後の標高差をもち、特に土器の接合関係も確認されなかったことから、ここでは 層-2・3群を後続する廃棄遺物群として掲載したが、出土土器からは大幅な時期差は認められず、比較的近い時期の一連の廃棄遺物として捉えることも可能である。

(a) 層-1群

土器集中1(Fig.25～29)

区中央部E-12～15・F-13・14グリッドにかけて広がる土器集中で、土器廃棄は8×6.4mの広範囲にわたる。検出面は -1層にあたり、標高4.0～4.2m前後のレベル間に土器片が15cm程の高低幅をもって分布しているが、部分的に掘り込みを伴う土器廃棄も認められ深いもので標高3.9m程度となる。土器は -1層・ -2層の各々から出土しており、炭化物集中の検出面にあたる標高4.1m前後のレベルに水平分布する一群(-1層取り上げ遺物)と、標高4.0m前後のレベルに分布する一群(-2層)に大きく分かれるが、これらは小ブロック単位の平面分布においても上層と下層の遺物集中範囲がほぼ一致し、 -1層から -2層までの掘り込みを伴う土器廃棄を認めると共に、細片についても -1層・ -2層出土土器間で高い接合関係が成り立っている。又、土器の分布密度は全体に低く疎らであるが、炭化物溜まりと焼土周辺に集中する傾向が強い。

なお、土器集中1の東方と南方には連続してSX2、SK4が存在し、SX2・SK4・土器集中1間で出土土器片の接合が確認されており、同時期の土器廃棄として捉えられる。又さらに、南方には土器集中2がほぼ同レベルで分布している。

土器集中1内では大規模な炭化物溜まり1箇所とそれに付随するとみられる複数の小規模な炭化物溜まり、及び焼土21～23・25・26・35を確認している。

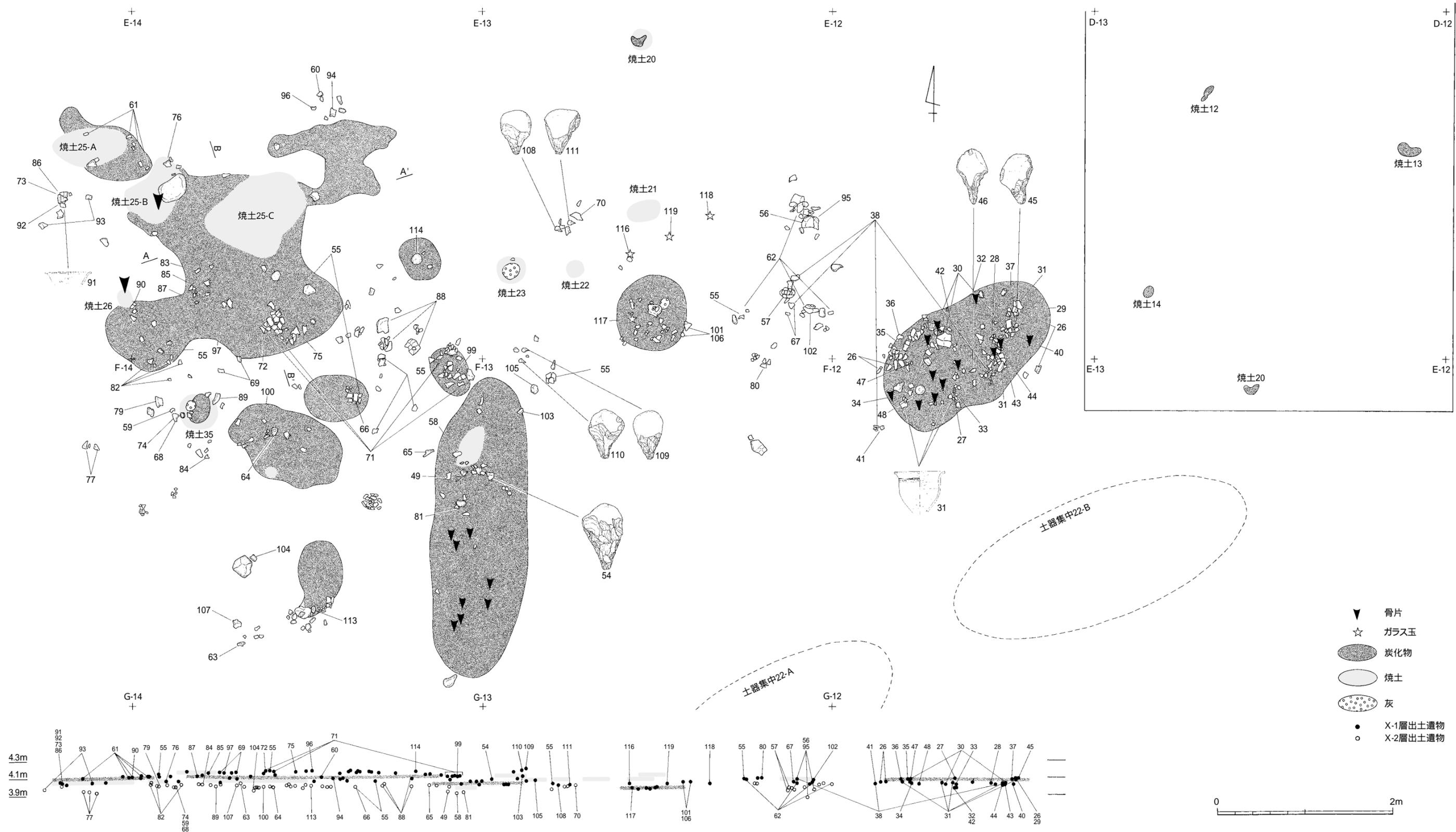


Fig.25 土器集中1遺物出土状況図

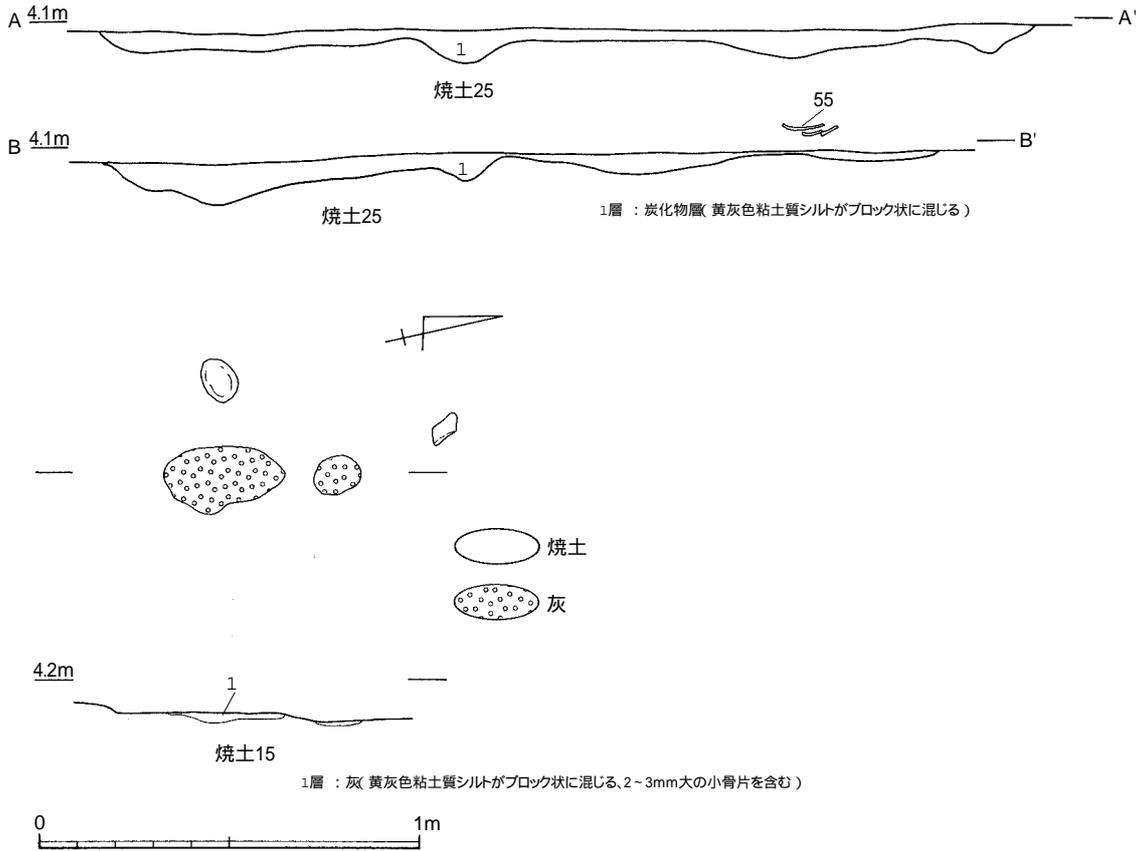


Fig.26 焼土25・焼土15セクション・遺物出土状況図

中央部の炭化物集中は約4×4mの範囲に炭化物の溜まりが不整形のプランをもって分布するもので、さらに周辺に小規模な炭化物溜まりの小ブロックを伴う形態をとる。炭化物は2~10cm前後の厚みをもって堆積しており、床面は平坦ではなく部分的に浅い落込みを伴う。さらに、その西方向には、平面形80×80cm、深さ6cmの規模をもつ炭化物集中が存在しており、埋土中から骨粉とみられる黄白色の灰が少量出土している。又、炭化物中からは多量の土器片と共にガラス玉1点が出土している。

さらに、炭化物直下及びその周辺からは大小各規模の6箇所の焼土が検出されており、この内、焼土25・26では上面から黄白色の灰と小骨片が、焼土23・35上面では骨粉とみられる黄白色の灰が検出されている。この他、土器の分布範囲北側4m四方の範囲には径25~40cm前後の規模をもつ焼土12・13・14・20が互いに2m程の間隔を保ちながら分布する。これら焼土12・13・14・20の直上にも少量の炭化物が堆積するが、何れも土器片は確認できていない。なお、焼土25内から出土した5mm大の小骨片は、骨片分析により、硬骨魚類網のものであるとの同定結果を得た。

出土遺物は壺・甕・鉢・尖頭状の礫器・叩石・ガラス玉である。土器は口縁部点数にして壺8点・甕27点・鉢2点・器種不明の口縁部細片60点、底部は29点である。口縁部は細片のために器種を判別できないものが多かったが、口縁部形態は粘土帯貼付口縁が25点、端部を刻むもの17点、無刻みのもの54点、端部を拡張させるものが1点を占める。底部は平底14点、底部脇を摘み出すもの12点、外底が凹状となるものが3点である。

出土状況を見ると土器は細片の状態出土するものが多数を占めるが、下位レベルからまとまっ

て出土し掘り込みに伴うとみられる遺物には完形近く復原できたものがある。このうち接合後完形近く復原された壺(55)は破片が東西6mの広がりをもって複数地点から出土しており、又、垂直分布でも炭化物集中の上面と-2層内の双方から出土し10cm前後の高低差をもつ破片間で接合されている。一方、壺(56・57)は東部ブロックから完形に近い形状を保ちまとまって出土しており、出土レベルが他遺物より10cm程落ち込んでいることから、浅い掘り込みを伴って廃棄された可能性が高い。又、西部ブロックから出土した甕(73)と赤彩の鉢(91)も1地点からまとまって出土しており、同様の出土状況であった。一方、他の土器片は炭化物溜まり周辺から疎らに出土しており、小破片での出土が大多数を占める。又、多量の口縁部・底部が出土しているにも関わらず、接合後完形近く接合できるものは殆どない。なお、土器集中1分布範囲内より得られたこれら遺物群については全体的に廃棄時期の大差はないと予想されるものの、広範囲から接合率の低い細片化した土器片が散在しつつ検出されているため、全ての土器を一括廃棄遺物としては捉え難い。そこで本稿では、炭化物直上及び炭化物内から出土した一群の土器と小ブロックを形成して出土し明らかに一括廃棄の状況を呈する土器群を特に高い一括性を示す資料としてここに提示し、その他同時期性について慎重を要する遺物についてはそれに準ずる一群として、後述する-1・2層出土遺物の項(Fig.40・41)に掲載している。

遺物はこの他にガラス玉4点・叩石3点・尖頭状の礫器4点が出土している。ガラス玉3点(116・118・119)は東部ブロックの炭化物溜まりと焼土21周辺に集中し、1点(117)が炭化物溜まり内からの出土である。又、尖頭状の形態をもつ礫器(108～111)も灰と小骨片を伴う焼土23とSX2の周辺から2個体1組みの状態ですべて4点が出土している。土器集中1周辺では同タイプ打製石器がSK4内からやはり2点、SX2内から1点が出土しており、同様に灰と小骨片の出土を伴うことから本タイプ打製石器と骨片(動物遺体)との間に廃棄時何らかの関連性があったものと推定される。この他、叩石(113・114)も炭化物溜まり内からの出土である。この他、特に使用痕跡は認められないが35×25×10cm大の扁平な箱形の砂岩製礫が焼土25直上から出土している。

図示したものは壺(55～62)、甕(64・66・67～89)、鉢(90・91)、壺又は甕(63・65)、底部(92～107)、尖頭状の礫器及び類するもの(108～112)、叩石(113～115)、ガラス玉(116～119)である。

広口壺(55・56・58・62)は口縁部が緩やかに外反するもの。55は口縁部外面に粘土帯を貼付し外面に強い指頭押圧を加える。62も張りの弱い胴部を呈し、口唇部にヘラ描波状文、肩部に逆三角形の列点文を施す。56は肩部に櫛描直線文と櫛描波状文を施す。広口壺(60)は口縁部が強く外反するもので端部を面取り格子目文を施す。63は口縁部外面に粘土帯を貼付し下端に指頭押圧を加える。長頸壺(57)は無文で端部を丸くおさめる。59は細片のため形状がつかみにくい壺か。口縁端部を面取り輪状の刺突紋を施す。61も長頸壺の口縁部で、口縁部外面に幅広の扁平な粘土帯を貼付して外面全面に刻目を施し、下端には楕円形浮文を貼付する。砂礫を多量に含む胎土特徴をもつ。甕は口縁部が大きくカーブを描いて外反するもの(64～69)、口縁部が短く外反するもの(73)、張りの弱い胴部から口縁部が緩やかに外反するもの(71・72)、の各タイプを認める。64・65は口縁部外面に幅の狭い粘土帯を貼付するが外面への押圧は弱く粘土帯に厚みをもたせる。一方66・67は外面へ強い押圧を加えた扁平な粘土帯となる。胴部への文様構成は64が上胴部に楕円形浮文と櫛描直線文を、

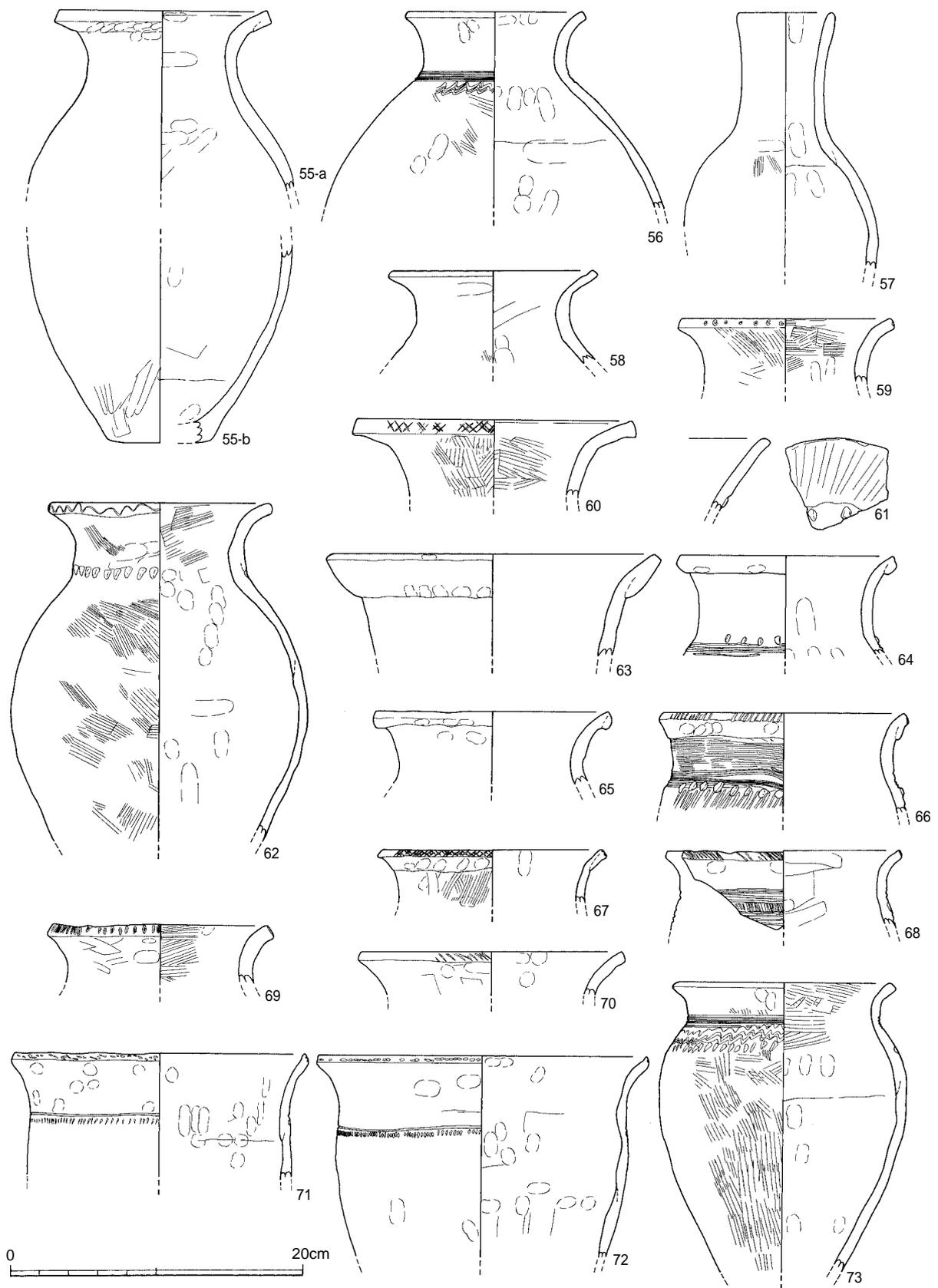


Fig.27 土器集中1出土遺物実測図1

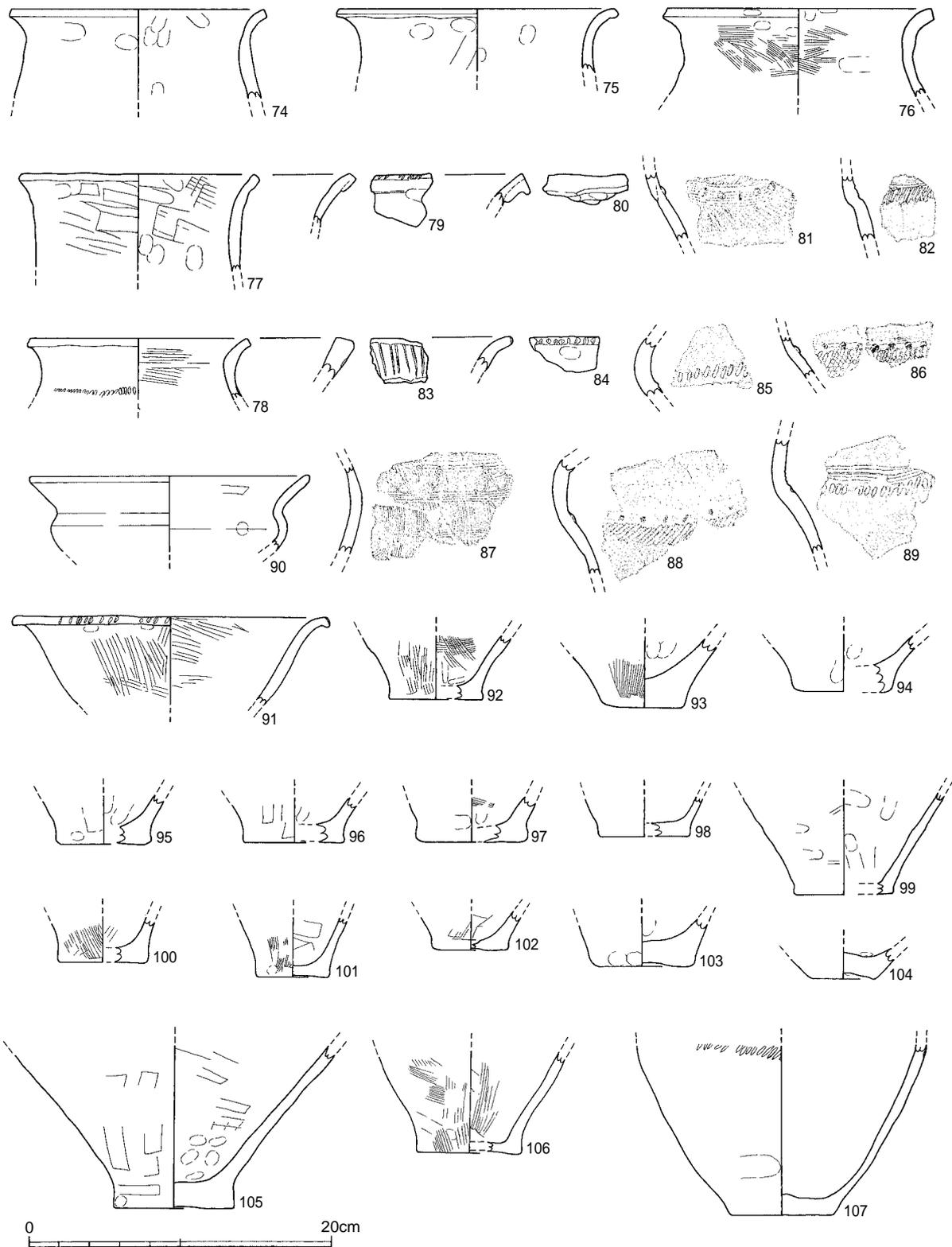


Fig.28 土器集中1出土遺物実測図2

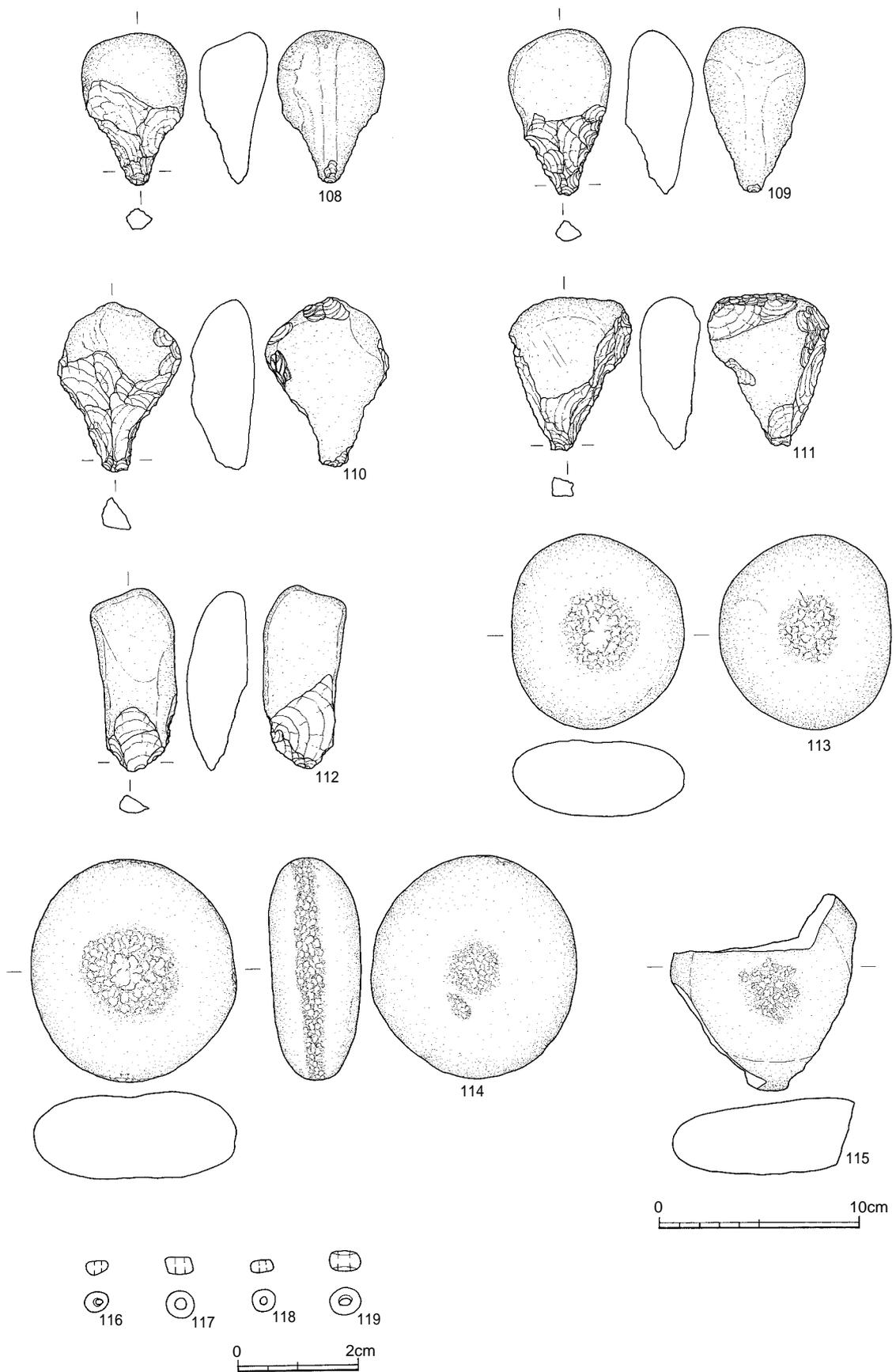


Fig.29 土器集中1出土遺物実測図3

66は上胴部に櫛描直線文と楕円形浮文・斜方向に長く伸びる列点文を施し、調整においても文様帯を境に頸部は強い横ハケ、胴部にはナデが施され明確に区分される。

口縁部が粘土帯貼付口縁をなさない68・69・70は共に端部を面取り刻目を施し、68は上胴部に2条の櫛描直線文を施し間には縦方向の同直線文を配置する。73～77は無刻である。同じく口縁部が大きくカーブを描いて外反するタイプの甕胴部は81・82・85・86・88・89で、共に上胴部に櫛描文・浮文・列点文等からなる文様帯を設ける。一方73は卵倒形の胴部から口縁部が短く外反する。上胴部に櫛描直線文・櫛描波状文・列点文を施す。71・72は胴部の張りが弱く口縁部は緩やかに外反する。共に口唇部への刺突と上胴部への沈線と列点文を施す。鉢(90)は一旦窄まった後「く」字状に外反する口縁部を呈する。鉢(91)は口縁部が外反し端部に刻目を施す。器面は粗いハケ調整で仕上げ、赤彩する。

108～111は尖頭状の形態を呈する礫器。石材は108～110が砂岩製、111が粘板岩製で、共に楕円形の河原石を利用する。何れも両側面から大きく剥離させ先端部を作り出した後、さらに先端部に調整剥離を加え尖った先端部を作り出している。砂岩製叩石113～115は扁平な円形の河原石を利用する。114は両主面中央部が使用によって窪み縁部全面にも使用痕が認められる。113は両主面の中央部が使用によって窪む。115は片主面中央部に使用痕を認め側縁部は著しく破損する。ガラス玉(116～119)は何れも半透明で水色に発色する。扁平な球形を呈し、貫通孔は径1～2mmを測る。

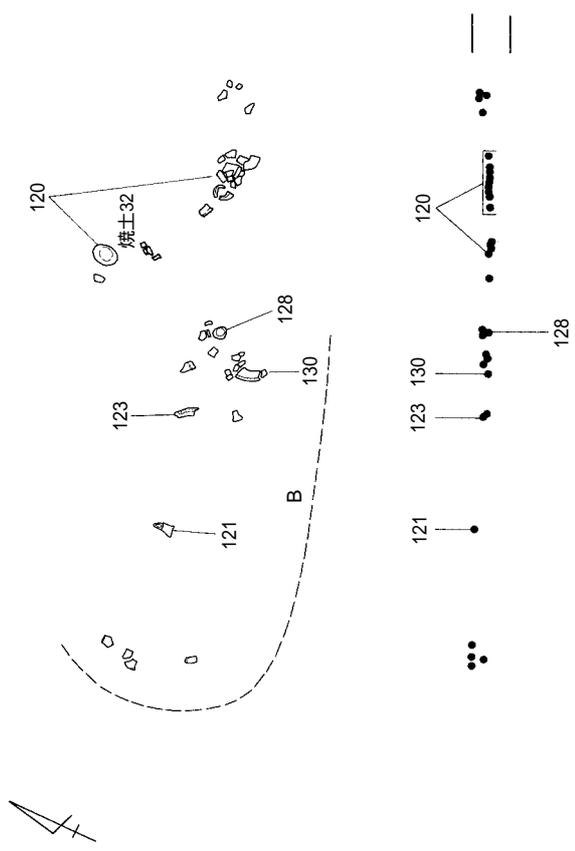
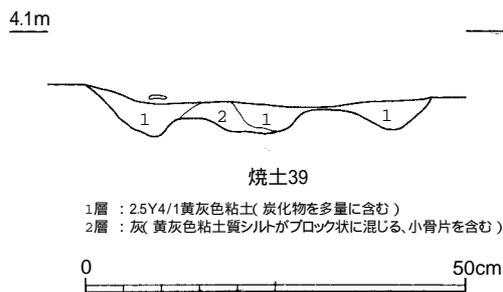
土器集中2(Fig.30・31)

区南部E・F-11グリッドに位置する土器集中で、土器集中1の南方3mの地点に近接している。土器は7×1mの規模をもって南西から北東方向に帯状に広がり、標高4.01～4.04mの間に水平分布している。土器は東西に分かれる2箇所焼土周辺に集中し、西に位置する-Aブロック、東に位置する-Bブロックの2つの廃棄の単位が認められる。

焼土はAブロックから焼土39、Bブロックから焼土B32が検出されている。焼土32は48×32cmの規模で広がるもので、焼土直上からは少量の土器細片が出土する。一方、焼土39は58×38cmの楕円形のプランをもって広がる明橙色の焼土で上面に深さ5cm前後の掘り込みを伴う。埋土は 層：炭化物を多量に含む黄灰色粘土、 層：小骨片を含む灰であり、 層ともに人為的な攪拌の痕跡を留める。なお焼土39からは21mm大の小骨片が出土しており、同動物遺存体は骨片分析によってニホンジカ雄の角であるとの同定結果を得ている。

土器は出土状況を図示したものの他にも周辺から多数の細片が得られており、出土点数は口縁部にして壺3点、甕27点、鉢1点、他に器種不明の口縁部細片が57点、底部点数は44点である。口縁部は細片のために器種を特定できない個体が多かったが、壺・甕の口縁部形態の比率は粘土帯貼付口縁が42点、端部を刻むのもの9点、無刻みのももの33点、端部を拡張させるもの3点となる。

出土状況を見ると、土器は各焼土の周囲にまとまる傾向をみせる。Aブロックでは焼土39直上から壺体部片(129)が出土し、さらに焼土を挟んで東から甕(124)、西側からは鉢(127)と神西式の甕2点(122・125)が出土している。一方、Bブロックでは焼土32を挟んで東側には接合後ほぼ完形に復原された壺(120)が、西側には長頸壺(121)と甕(123)・甕(130)・底部(128)が出土しており、土器集中2では壺・甕・鉢の各器種が焼土を中心に器種配置される点が特徴的である。



図示したものは壺(120・121・129)、甕(122～126・130)、鉢(127)、底部(128)である。壺は広口短頸壺(120)と長頸壺(121)を認める。120は口縁部が短く外反し胴部は強く張り球形を呈する。121は口縁部外面に楕円形浮文を貼付する。甕は口縁部が大きくカーブを描いて外反するもの(122～125)、「く」字状に強く外反するもの(126)を認める。122は神西式に類する甕で、断面三角形を呈する粘土帯貼付口縁の端部を面取り斜方向の刻目を施し、上胴部には櫛描直線文・楕円形浮文・斜方向の櫛描文による文様帯を配する。125も同様に口唇部への刻目、上胴部へは刻目を入れた円形浮文と櫛描直線文、鋭い櫛状原体による「ノ」字状の連続文様を施す。126は沈線と列点文を施す。127は鉢。壺胴部129は断面三角形の貼付突帯を2条認める。130は断面三角形の小突帯を貼付し直下には列点文を施す。

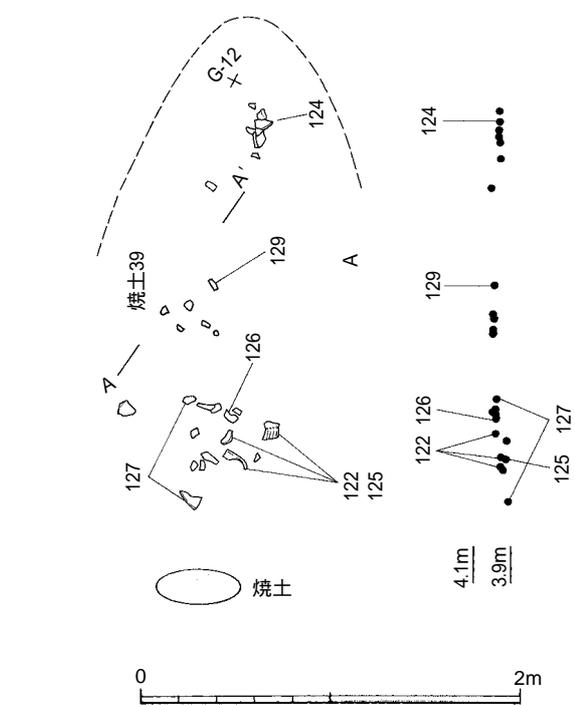


Fig.30 焼土39セクション図・土器集中2遺物出土状況図

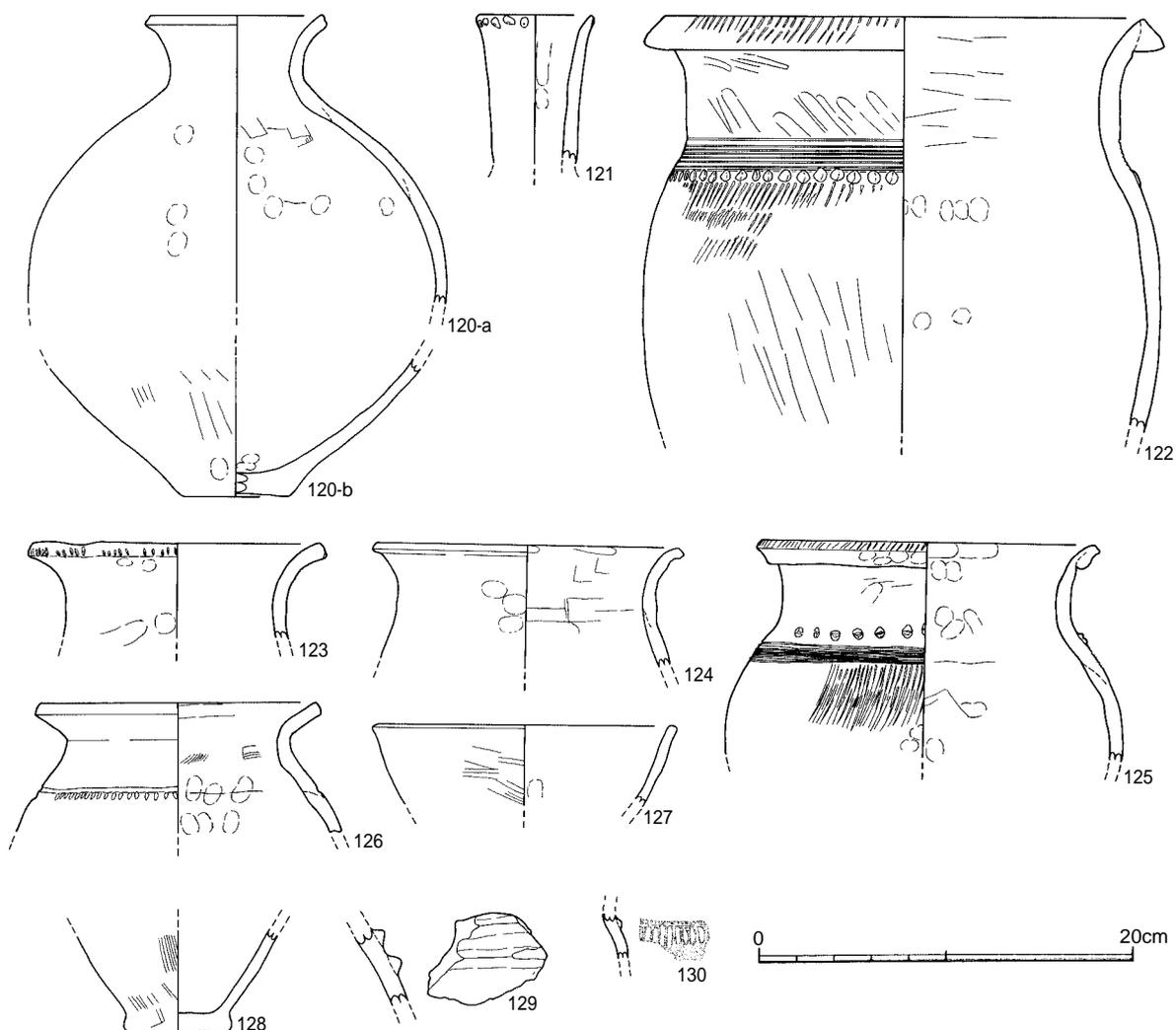


Fig.31 土器集中2 出土遺物実測図

(b) 層-2群

土器集中3・焼土29(Fig.32・33)

区南西部 E - 10・F - 11グリッドに位置する。土器群は東西7m南北2mの範囲に帯状に広がり、標高4.08～4.15mのレベルにほぼ水平分布する。北東側には土器集中4がほぼ同レベルで連続して北東方向への広がりをみせており、両者が同時期の一連の土器廃棄である可能性も考えられるが、両集中間での土器の接合は確認できていない。土器分布はブロック毎の間隔を空けず比較的均一な分布を示すが、A・B・C3つの小さな土器のまとまりを確認できる。

同レベルには焼土16と焼土29が存在しており、北方向には炭化物が広がる。焼土16は44×50cmの不整楕円形のプランを呈するもので、暗赤褐色の焼土上面に細骨片を含む薄い灰の層と炭化物を検出している。一方、焼土29は60×80cmの不整楕円形の焼土で直上からの土器・骨片の出土は認められない。

出土遺物は甕・高杯・砥石・敲打器である。土器は口縁部点数にして甕49点、高杯1点が出土しており、底部点数は26点である。甕の口縁部形態は大きくカーブを描き外反するタイプで占められ、

うち粘土帯貼付口縁が17点、非貼付で端部を刻むもの10点、無刻みのものが22点を占める。底部は平底13点、底部脇を摘み出すもの16点である。

出土状況を見ると、B・Cブロック間では甕体部片1点の接合が確認されている。土器は小破片が散在した状態で出土するものが多いが、この内、Aブロック内の壺・甕(131・144・150)はまとまった状態で出土した。B・Cブロックにおいては焼土16とその北側の炭化物溜まり周辺に土器片が散在しており、接合後完形近く復原できた132の破片は2m四方から散在した状態で出土している。又、高杯(157)は焼土16脇からの出土である。

図示したものは壺(131・134・135)、甕(132・133・137~143・145・147・148・151)、壺又は甕(136・144・146・149・150)、高杯(157)、底部(152~156)、砥石(158)、敲打器(159)である。広口壺(131)は口縁部が短く外反するもので、口縁部外面に粘土帯を貼付し強い指頭押圧を加える。甕は口縁部がカーブを描いて外反するタイプで占められるが、大

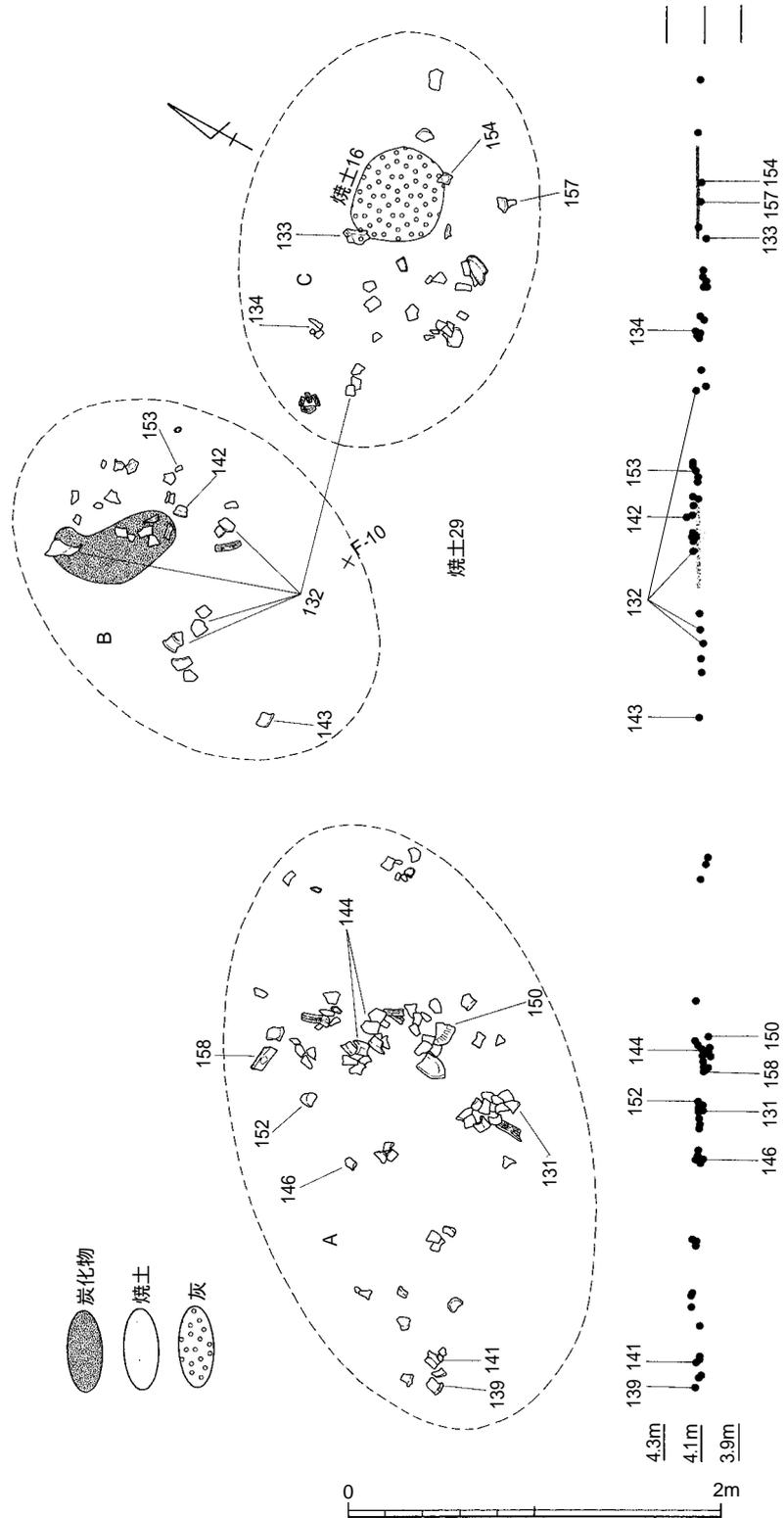


Fig.32 土器集中3遺物出土状況図

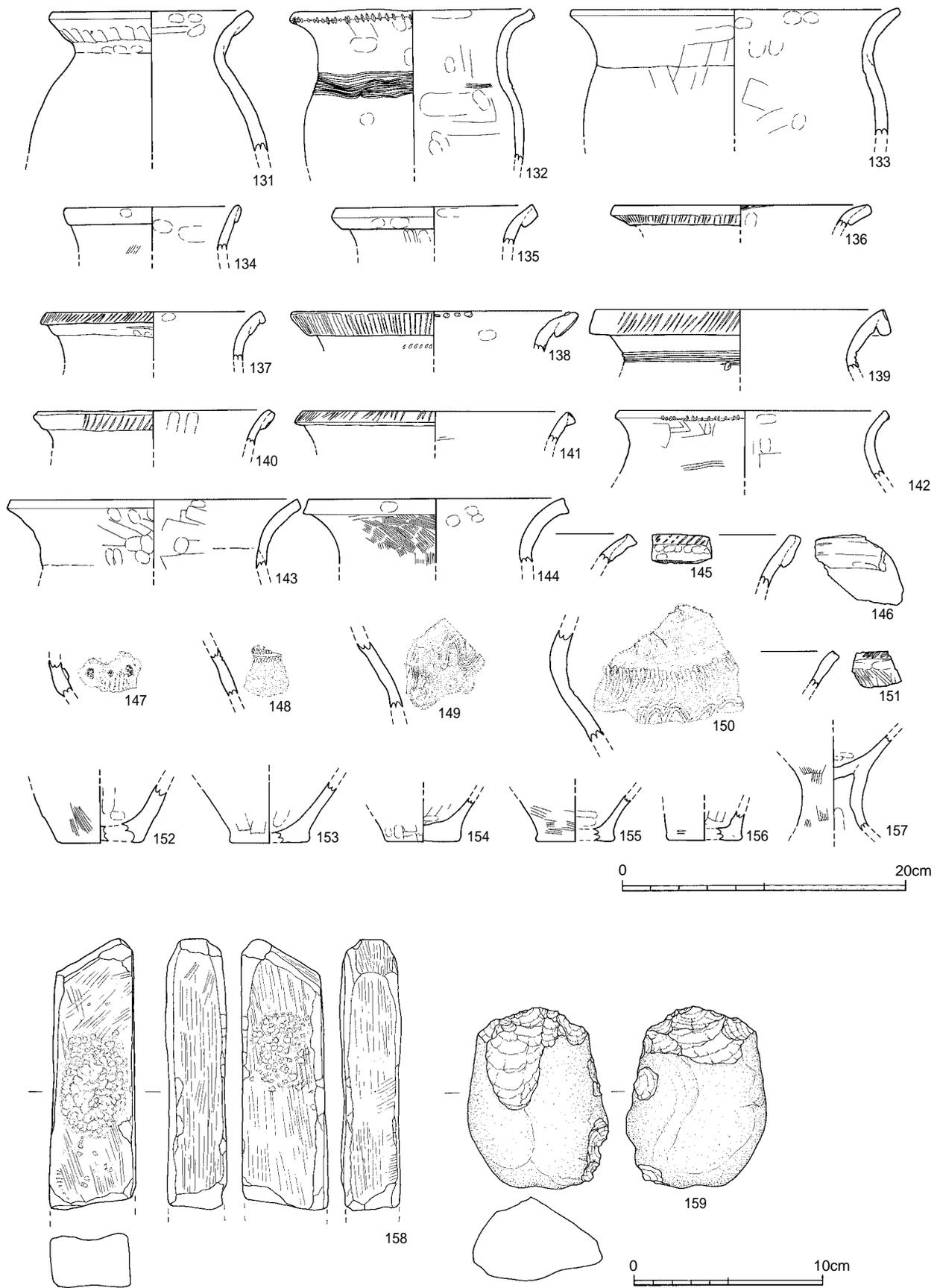


Fig.33 土器集中3出土遺物実測図

大きくカーブするもの(132・142・143)とやや短く外反するもの(133・139・144)がある。甕(132)は口縁部がカーブを描いて外反し胴部の張りは少ない。口唇部下端に浅い刻目を入れ、上胴部には上下への乱れが強い櫛描文を施す。133は無文で頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残す。甕口縁部で外面に粘土帯を貼付するものには、外面に刻目を施すもの(136・138・140)、端部への刻目を施すもの(137・131・141)、無刻のもの(146)がある。136は外面にハケ原体による刻目を施す。138も外面にハケ原体による刻目を施し内面に円形浮文を貼付、137は口縁端部を強く面取り下方へ僅かに肥厚させ、端部を刻む。貼付帯外面には指頭押圧を加える。131・141も粘土帯を貼付した口縁端部を強く肥厚させ、斜方向の刻目を施す。145は貼付帯外面への押圧によって僅かな段を残すのみとなる。壺又は甕の胴部(147～150)では上胴部への施文は147が円形浮文とハケ原体による列点文、148が沈線とその上下への列点文、149が櫛描波状文、150が列点文と櫛描波状文からなる。高杯(157)は円盤充填によるもので杯部内面に強い指ナデを施す。頁岩製の砥石(158)は両側面の中央部に敲打痕を、全側面に擦痕を認める。楕円形の河原石を利用した敲打器(159)は側縁部への強い敲打痕を認める。

土器集中4(Fig.34・35)

区北端部D-11・E-10・11グリッドに位置する。検出面は包含層 -1層にあたり、土器は標高3.97～4.19mのレベルに20cm前後の高低差をもちながら分布する。土器の分布は東西と南北方向の各々に帯状に広がり、棒状の礫と扁平な円礫の廃棄を伴う。又、南東から北西方向へ向かう約8mの範囲には小規模な焼土と炭化物溜まりが点在する。

出土遺物は甕・鉢・叩石である。土器は口縁部点数にして甕2点・鉢1点、器種不明の口縁部1点、底部点数では4点が出土している。甕の口縁部形態は大きくカーブを描き外反するタイプで占められ、うち粘土帯貼付口縁が1点、端部を刻むもの1点、無刻みのものが1点を占める。底部は底部脇を摘み出すもの4点である。この他、Aブロックにおいては完形の状態で出土した甕(160)とともに、周辺から4点の砂岩製叩石と棒状の礫が東西方向に配列されて出土している。図示したものは甕(160)、壺又は甕口縁部(161)、底部(164)、鉢(162)である。このうち甕(160)は胴部最大径を上位に有する胴部から口縁部が短く外反するもので、外面には粘土帯を貼付し外面に強い指頭押圧を連続的に加える。

(c) 層-3群

土器集中5(Fig.36)

区北部C-13グリッドに位置する。検出面は包含層 -1層にあたり、土器は標高4.07～4.18mのレベルに分布している。土器集中5内においては2ブロックの焼土を検出しており、土器は焼土周辺を巡るように四方3×4mの範囲に散在している。焼土5は36×42cmの規模をもつもので、直上には土器片を伴う。又、焼土6は36×36cmの規模の円形の焼土で、直上には小骨片を含む黄白色の灰が薄く堆積している。

出土遺物は壺・甕・石鏃である。土器は口縁部点数にして壺1点・甕5点、底部点数は1点が出土している。甕の口縁部形態は大きくカーブを描き外反するタイプで占められ、うち粘土帯貼付口縁が4点を占める。底部は平底が1点である。



Fig.34 土器集中4遺物出土状況図

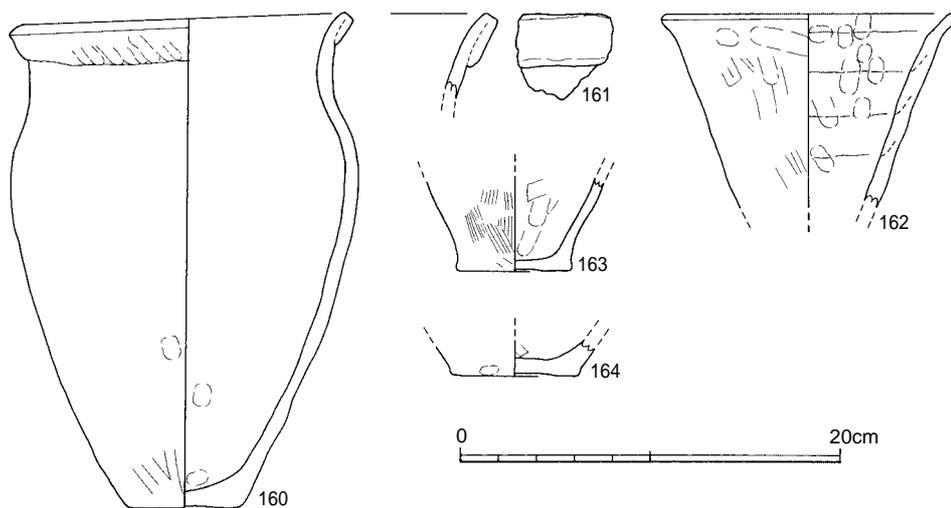


Fig.35 土器集中4出土遺物実測図

出土状況を見ると土器片は焼土を囲むように疎らに散在しており、この他、石鏃2点(172・173)が北部より出土している。この内(173)は他遺物群より10cm程下位での出土で、且つ172より約3m程東方に離れた地点からの出土であるため廃棄の同時性については明らかではない。

図示したものは壺(170)、甕(165～169)、底部(171)、石鏃(172・173)である。長頸壺(170)は口縁端部を丸くおさめるもので、褐灰色の砂礫を多量に含む胎土特徴をもつ。甕(167)は粘土帯外面に刻目を施す。166・167は粘土帯外面を強く指頭押圧し段が僅かとなるもので、端部を面取り刻目を施す。165も粘土帯貼付口縁の端部を刻み、上胴部に楕円形浮文と櫛描直線文を施すもので、胴部の張りはやや強い。168もほぼ同様の施文をもつものであるが、口縁部外面の粘土帯への強い指頭押圧とナデによって段は消失する。頸部に櫛描直線文、上胴部には楕円形浮文・櫛描直線文・「ノ」字状の列点文を配し、中段の櫛描直線文は著しく摩耗する。173は赤色頁岩製の凹基無茎石鏃。平面形は正三角形でやや左右不対称な形態を呈する。法量は全長2.9cm全幅2.2cm全厚0.45cmとやや大型品で、表・裏両面とも中央に初剥離面を残す。172も同石材による凹基無茎石鏃。平面形は正三角形を意図したものとみられるが左右が著しく不対称な形態を呈する。法量は全長2.0cm全幅1.5cm全厚0.3cmの小型品で、表面は全面敲打を施し裏面は中央に初剥離面を残す。

土器集中6(Fig.37)

区西寄りF-16グリッドに位置する。土器集中1の西方4mに位置する炭化物溜まりであるが、検出レベルが標高4.16～4.22mとやや高く、周辺の土器集中群との接合関係も認められない。平面規模は100×150cmで、炭化材・炭化物の溜まりとそれに伴う土器廃棄が認められる。炭化物の溜まりは5cm前後の厚みをもって堆積し最も深い中央部分で7cmの深さをみせることから、本来はSX2やSK4に類似した浅い皿状の落込みを形成するものであった可能性が高いが、検出時において特に明確な遺構の平面プランを検出することが出来なかったためここに掲載している。

出土遺物は壺・甕で口縁部点数にして壺1点、甕3点、底部は8点が出土している。甕の口縁部形態は大きくカーブを描き外反するタイプで占められ、うち粘土帯貼付口縁が2点、無刻みのものが1点を占める。底部は平底6点、底部脇を摘み出すもの2点である。

出土状況を見ると土器片は主に炭化物層の下層から出土しており、炭化物堆積の床面に沿って中央に向かい落ち込むように分布している。

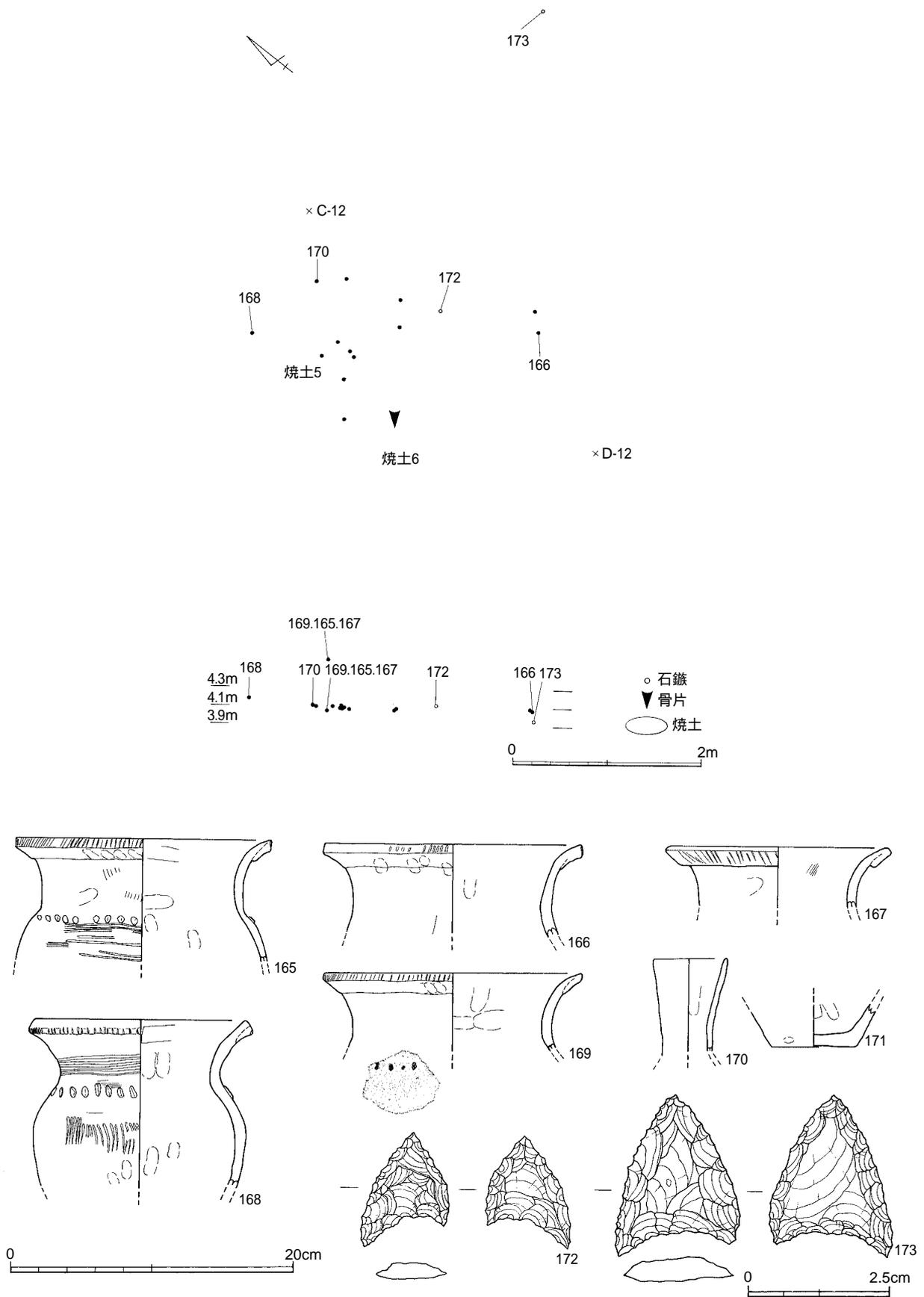


Fig.36 土器集中5遺物出土状況図及び出土遺物実測図

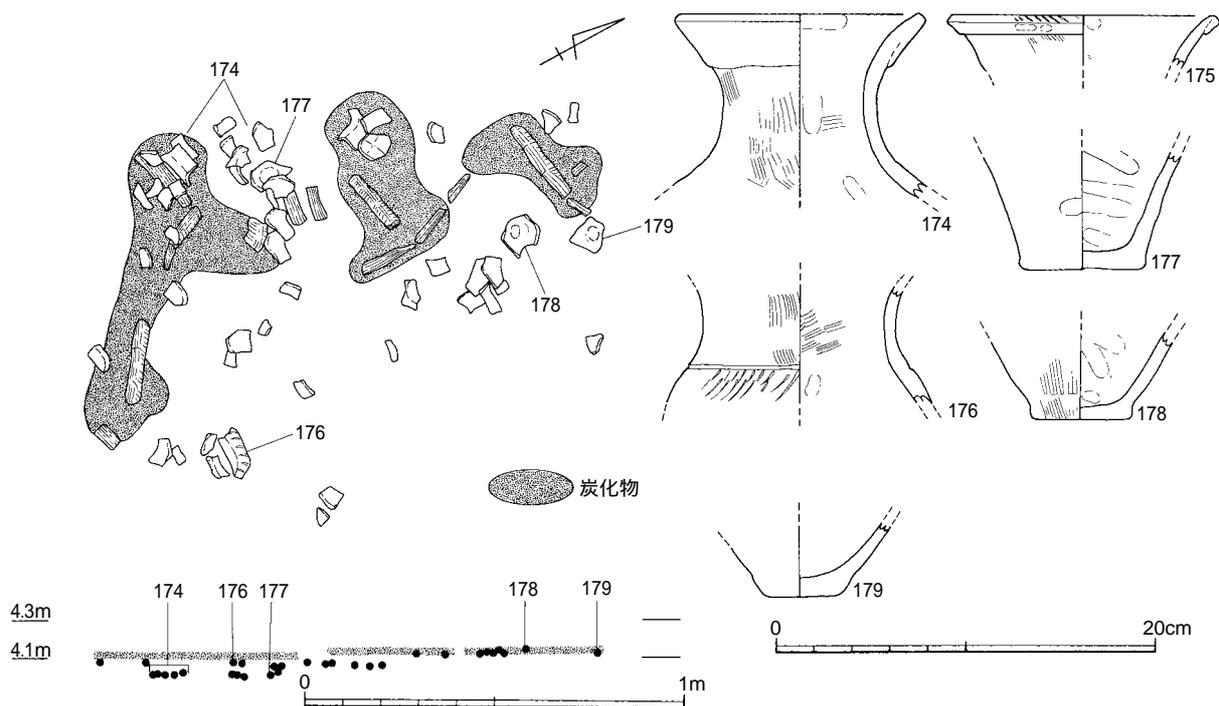


Fig.37 土器集中6遺物出土状況図及び出土遺物実測図

図示したものは174～179である。広口壺(174)は長頸化し、口縁部外面に幅広の粘土帯を貼付する。胴部を欠損するが肩部が強く張る胴部形態を呈するものとみられる。甕(175)は粘土帯貼付口縁の端部を面取り刻目を施す。甕胴部(176)は上胴部に沈線と櫛状原体による「ノ」字状の連続文様を施す。

焼土

-1・2層面では焼土31箇所を検出した。この内土器集中内又はその周辺に存在する焼土は18箇所、一方、土器集中に伴わない単独の焼土は12箇所である。焼土の多くは上面に灰あるいは小骨片を伴い、灰・焼土・炭化物が人為的に攪拌された状況を示す例も多い。ここでは、土器集中に伴わず単独で検出された焼土のうち、土器・骨片の出土をみるものを取り上げた。なお、その他の焼土の規模と検出状況は後述する別項(Tab.3～6)に示している。

焼土8

区東部D-9グリッドに位置する。検出面は 層上位、標高4.14mのレベルにあたり、同一面においては焼土9が西方に近接している。焼土8は35×25cmの不整楕円形の範囲に明赤褐色の焼土が広がるもので、土器片は伴わない。焼土中央部の直上からは少量の小骨片が出土しており、ここより採取された8mm大の骨片は骨片分析の結果、哺乳綱のものとの同定結果を得ている。

焼土10(Fig.38)

区南部D-11グリッドに位置する。検出面は -1層から 層下位、標高4.22mのレベルにあたる。焼土は52×38cmの楕円形の範囲に広がり、少量の炭化物と土器片を伴う。

出土遺物は甕上半部1点、甕口縁部2点、底部1点、細片数点で、このうち180・183・182・185を

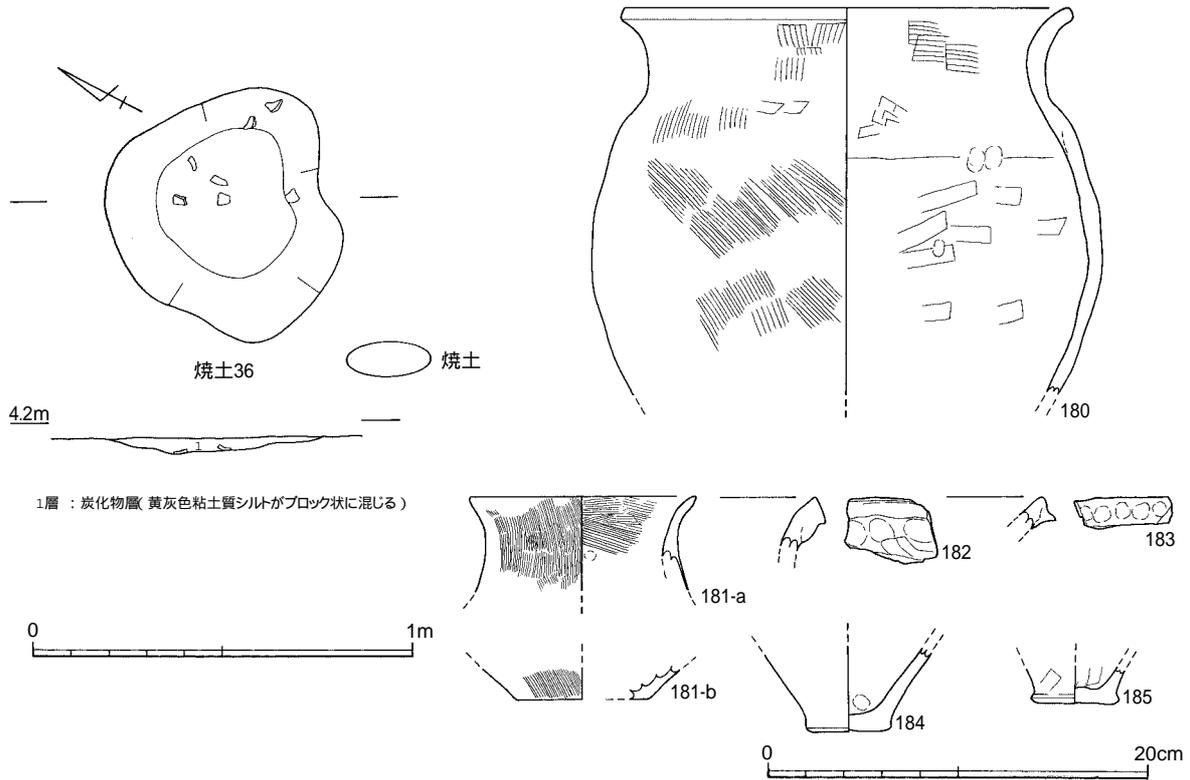


Fig.38 焼土10・41・36平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
 焼土10(181・182・183・185)・焼土41(184)・焼土36(181-a・b)

図示している。180は張りの強い胴部から口縁部が短く外反するもので端部を丸くおさめる。

焼土15(Fig.38)

区中央部D-14グリッドに位置する。検出面は -1層、標高4.10mのレベルにあたり、同一面においては北方2mの地点に土器集中1が分布する。焼土は100×70cmの範囲にブロックをなして分布しており、多量の炭化物と少量の土器片を伴うが、土器は何れも細片で図示できるものはない。なお、焼土中央部の上面には少量の小骨片を伴う黄灰色の灰が薄く堆積しており、ここより採取された3mm大の骨片は骨片分析の結果、哺乳綱のものとの同定結果を得ている。

焼土28

区南部F-10グリッドに位置する。検出面は -1層、標高4.00mのレベルにあたる。北側には土器集中3が近接して広がるが、焼土28より10cm程上面での検出であり、同時性は明らかではない。焼土は30×25cmの楕円形の範囲に広がるもので多量の炭化物を伴うが、土器片の出土はみない。なお、焼土上面には焼け崩れた微小な骨片を含む少量の灰が堆積しており、ここより採取されたサンプルは骨片分析の結果、哺乳綱のものとの同定結果を得ている。

焼土36(Fig.38)

区西部F-17グリッドに位置する。検出面は 層上位、標高4.16mのレベルにあたる。焼土は62×60cmの円形の範囲に橙色の焼土と炭化物の溜まりが広がるもので、焼土上面の浅い落込み内に炭化物が浅く堆積している。出土遺物は壺の口縁部(181-a)と同一個体の底部(181-b)で、何れも炭化物層内からの出土である。

焼土41

調査区南部 G-13グリッドに位置する。検出面は -1層、標高4.17mのレベルにあたり、同一面においては東に焼土42が近接している。焼土41は径33cmの円形の範囲に明赤褐色の焼土が広がるもので、焼土上面より底部1点(184)と細片が出土している。

4) 包含層出土遺物

ここでは土器集中として取り上げられなかったXI層・層出土遺物を掲載し、以下各層位ごとに出土状況と遺物の概要を述べることにする。

XI層出土遺物(Fig.39)

XI層よりの土器の出土はごく少量であり、最上層にあたるXI-1層に集中する傾向をみせる。出土遺物は 区東部のXI-1層から単独で出土した底部1点と、E-14及びD-11グリッドの2地点においてXI-1層最上位より比較的まとまって出土した10数点の細片である。E-14及びD-11グリッド出土の遺物群は、後述する -4 層の灰色粘土からなる落込みとそれに伴う土器群の直下より出土しているものであり(Fig.12参照)、当グリッド出土遺物のうち細片1点が -4 層出土遺物(186)と接合されていることから、当地点のXI-1層内には -4 層面からの遺物が混入している可能性が考えられる。

図示したものは底部(211・212)、口縁部(193)、胴部(196・207・208・209)である。このうち、212は 区東部においてXI-1層下位標高3.58mの地点から出土したもの、又、196はXI-1層最上位よりの出土である。一方、193・207・208・209はXI-1層D-11グリッドから、211が同層E-14グリッドより比較的まとまって出土したもので、先に触れたように上層からの遺物が混入した危険性をはらむ遺物群であることから、特に他のXI層出土遺物とは区分しておきたい。

底部(212)の内底はナデ調整、外面には横方向の強い擦痕を残し砂粒の移動を認める。外底には網代圧痕が顕著に残り、県西部弥生時代前期末の基準資料である西ノ谷遺跡出土資料との共通性を認める。甕胴部(196)は薄手の作りで、外面は上胴部が木理の非常に細かな縦ハケ、胴部下位は横方向の擦痕となり、上胴部のラインで上下の調整痕が明瞭に区分される。同個体は弥生前期末「土佐型」甕の上胴部にあたるものであるが、施文は認められない。焼成は堅緻で、器表には僅かに煤の付着を認める。

壺(193)は口縁部がカーブを描いて強く外反し、口唇部下端に幅広で緩やかな刻目を施す。外面は横方向のハケ調整を施し、頸部への指頭圧痕が顕著である。壺(207)は上胴部に断面三角形の刻目突帯を複数条貼付するもので、刻目は断面「V」字状で深いものである。208は壺の上胴部か。頸部外面に断面三角形の小突帯を数条貼付し、突帯の上下には静止ナデを施す。上胴部には楕円形浮文を貼付する。やや薄手の作りで、胎土は暗灰黄色を呈し白色系の粗砂を多量に含む。甕(209)は上胴部に扁平な棒状浮文を貼付する。やや薄手の作りで、胎土は鈍い黄褐色を呈し灰色系の粗砂を多量に含む。県中央部における弥生中期「土佐型」甕の施文に共通することから、上層よりの混入である可能性が高い。底部(211)の内底はハケ・ナデ調整。外面は底部脇に木理の粗い縦ハケを施す。

これらXI-1層出土遺物の時期は弥生時代前期末に比定されるが、各出土地点における堆積状況も

考慮して193・207・208・209・211については弥生前期末から中期前葉までの時間幅をもたせ、今後の当該期資料の増加を待つこととする。

-3・4層出土遺物(Fig.39)

弥生時代中期の遺物包含層は -3・4層が該当する。取り上げ点数は壺口縁部1点、甕口縁部1点、底部1点、胴部細片40数点である。土器の出土は特に -4層が粘質を強めて -4層へと変化し北西に向かって落込みをみせ始める調査区北部一帯に偏る傾向を示し、中でも -4層においては、先述した炭化物集中1・2の分布範囲周辺にあたるD-11～14グリット、標高3.7～3.9mの地点から30数点程の土器片が比較的まとまって出土している。又、 -3層出土遺物は調査区中央部一帯から、散在して出土している。

図示したものは壺(186～190)・甕(191・192・194・195・197・200・202・203)・底部(210)・壺又は甕(198・199・201・204・205・206・210)である。このうち -4層出土の200・204はD-11グリットから、186はE-14グリットからの出土で、何れも細片であるがローリングを受けた形跡はなく器表に煤が僅かに付着している。一方、 -4層出土は199・201・205・206・210。残るその他が -3層よりの出土である。

甕(200)は口縁部外面に幅の狭い粘土帯を貼付する。204は口唇部を面取り刺突文を施す。無頸壺(186)は双状原体による横方向の直線文を口縁部下端と中位胴部に施し、上胴部には同原体による縦方向の直線文と重弧文を交互に配置する。口縁部は端部に弱い圧痕を残すが、器表の状態からみて擬口縁の可能性もある。199は口縁部外面に幅の広い粘土帯を貼付し、口唇部下端に断面「V」字状の刻目を施すもの。201は口縁部外面に粘土帯を貼付し、接合部をヨコナデする。口唇部下端に細く鋭い刻目を施すものである。

一方、 -3層出土の壺(187)は口縁部外面に幅広の粘土帯を貼付し接合部はヨコナデする。粘土帯外面には鋭い刻目を施し、下端には円形浮文を貼付する。胎土は褐灰色を呈し、焼成は堅緻である。壺(188)も粘土帯貼付口縁であるが、粘土帯の下端に強いヨコナデを施し段を潰す。又粘土帯外面の上下に強いヨコナデを施すことにより中位が稜をなす。口唇部は面取り下端に刻目を施す。長頸壺(189)は口縁部が強く開き、端部を面取る。190も粘土帯貼付口縁をなすもので壺か。甕(191・192)は粘土帯貼付口縁の外面に指頭による押圧を加える。甕(194)は張りの少ない胴部から口縁部が緩やかに外反するもので、口唇部に刻目、上胴部に列点文を施す。外面は強く煤けている。195は甕か。上胴部に断面三角形の小突帯を4条巡らす。突帯間には横方向の強い板ナデを施す。外面調整はヨコハケ、内面は指ナデである。甕胴部(197)はやや薄手の作りで、上胴部に2条の貼付突帯を巡らしハケ状原体による圧痕を加える。外面調整は突帯による文様帯を境に、上半がナデ、下半がハケ調整となる。甕(202)は上胴部に櫛描直線文と山形文を施す。

以上のうち -3層出土遺物は弥生時代中期中葉から後葉に、 -4層出土遺物は弥生時代中期前葉に比定される。なお、 -4層出土の186・200・204については、先の炭化物集中1出土遺物との同時期性も考慮し弥生時代前期末から中期前葉までの年代幅を与えている。

-1・2層出土遺物(Fig.40・41)

-1・2層においては特に土器集中1の存在するE-12～15・F-13～14グリット、土器集中2の存在するF-12・G-13グリット周辺からの出土が多く、何れも一連の土器廃棄に伴う土器群であった可能性が高い。なお、掲載した実測図(214～291)は -1・2層までの層位が確実に分層できた中央部付近出土の遺物については「 -1・2層」の表示をおこなっているが、層位の細区分が不可能であった調査区東部・西部出土の遺物については「 層」、及び中央部と対応させ出土レベルによって任意に設定した「 -上層」との表記をおこなっている。

図示したものは壺(214・215・222・231・251・253)、甕(223～237・242・254～260・262～272)、壺又は甕(216～221・240・241・243～250・252・261)、鉢(273・287)、高杯(288)、底部(274～286)、尖頭状の打製石器(259)、石鏃(290)、ガラス玉(291)である。

-1・2層出土遺物は弥生時代後期前葉に位置付けられる。

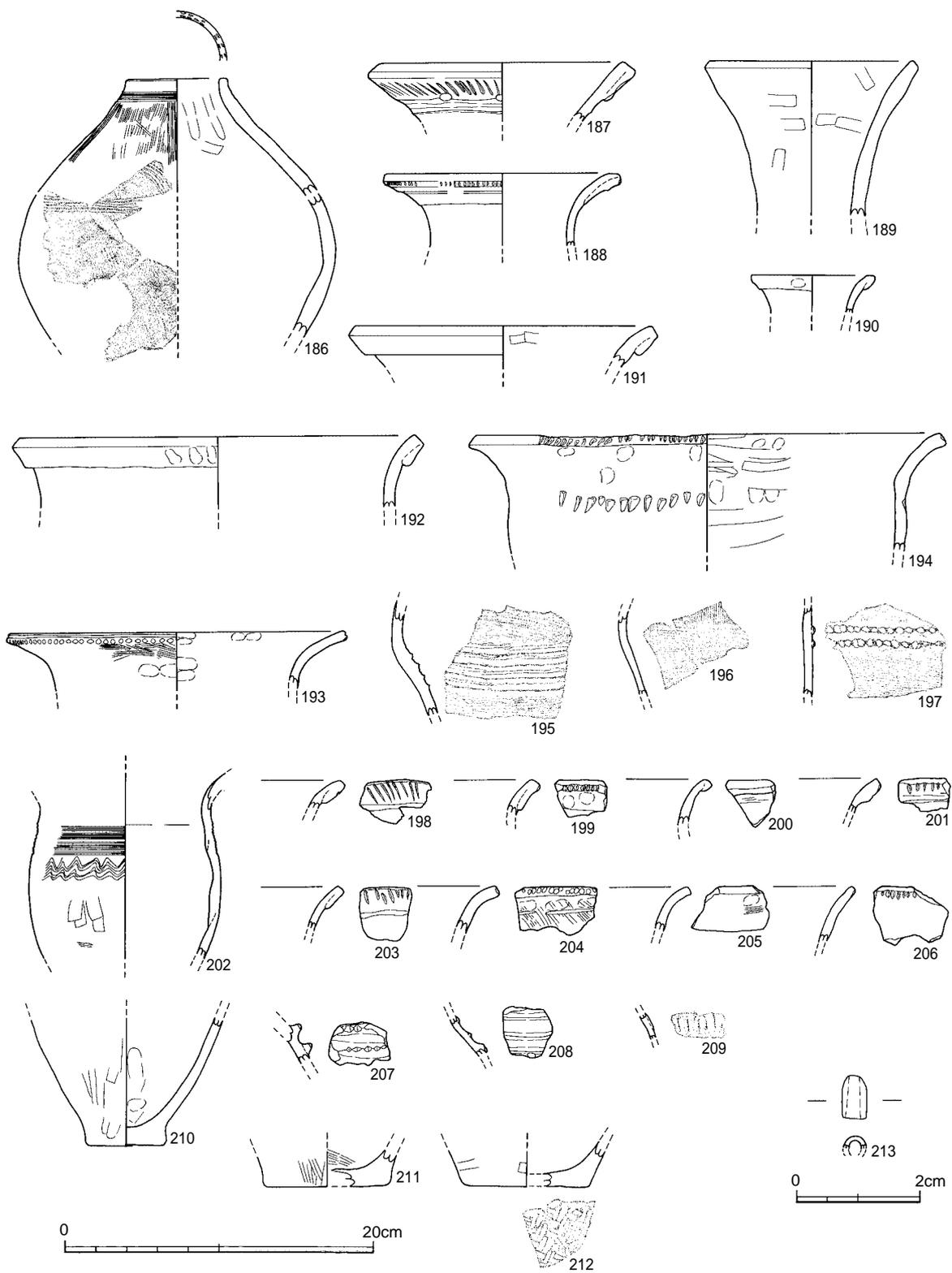


Fig.39 -3・4層・XI層出土遺物実測図

-3層 (187・192・194・195・197・198・202・203・213)
 -4層 (199・201・205・206・210) -4層 (186・200・204)
 XI層 (193・196・207・209・211・212)

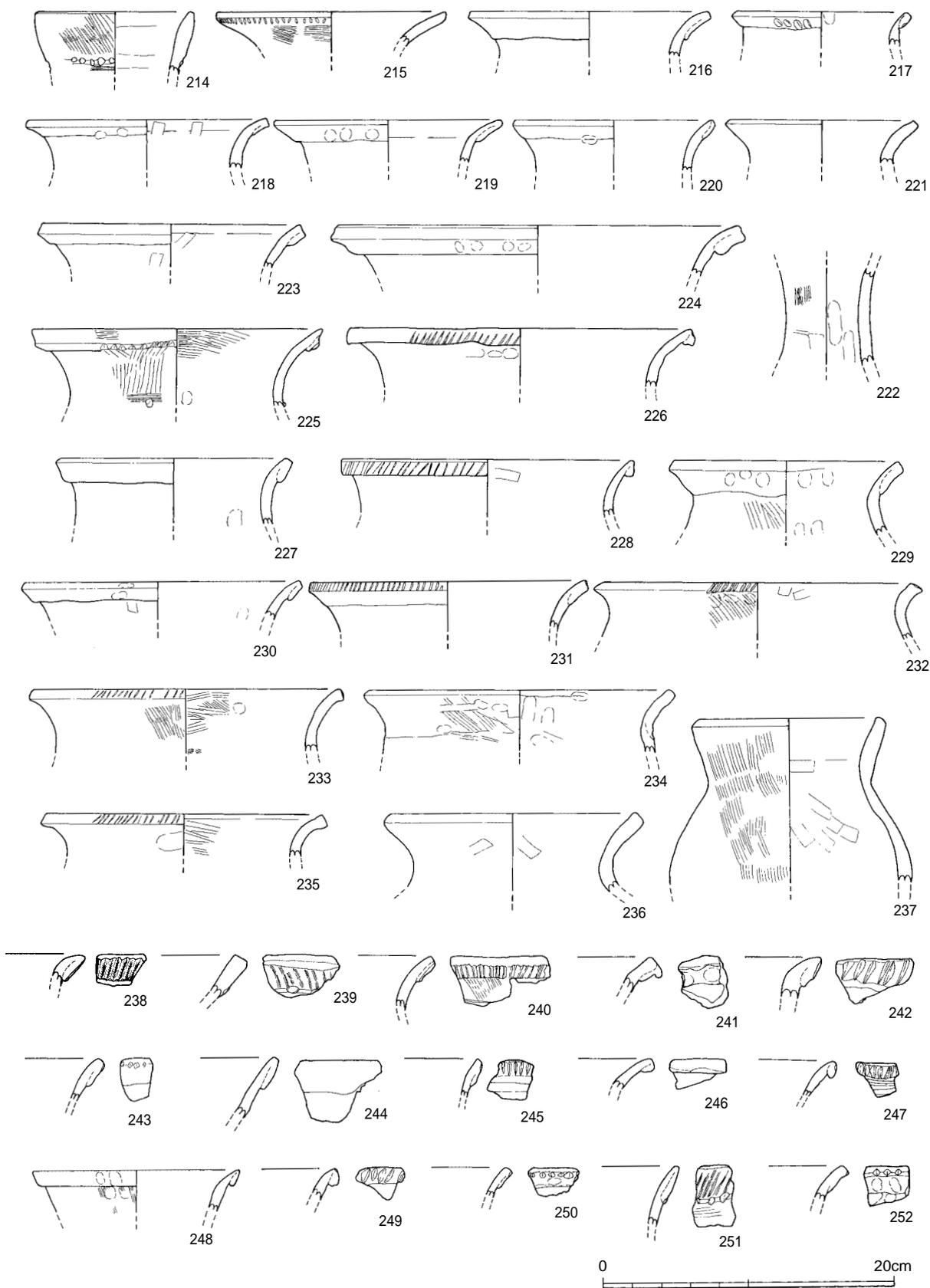


Fig.40 -1・2層出土遺物実測図1

-1層(214・217・220～222・225～227・229・230・232～235・237～240・242～251)

-2層(251・216・223・241・252)

-1・2層(218・219・224・228・231・236)

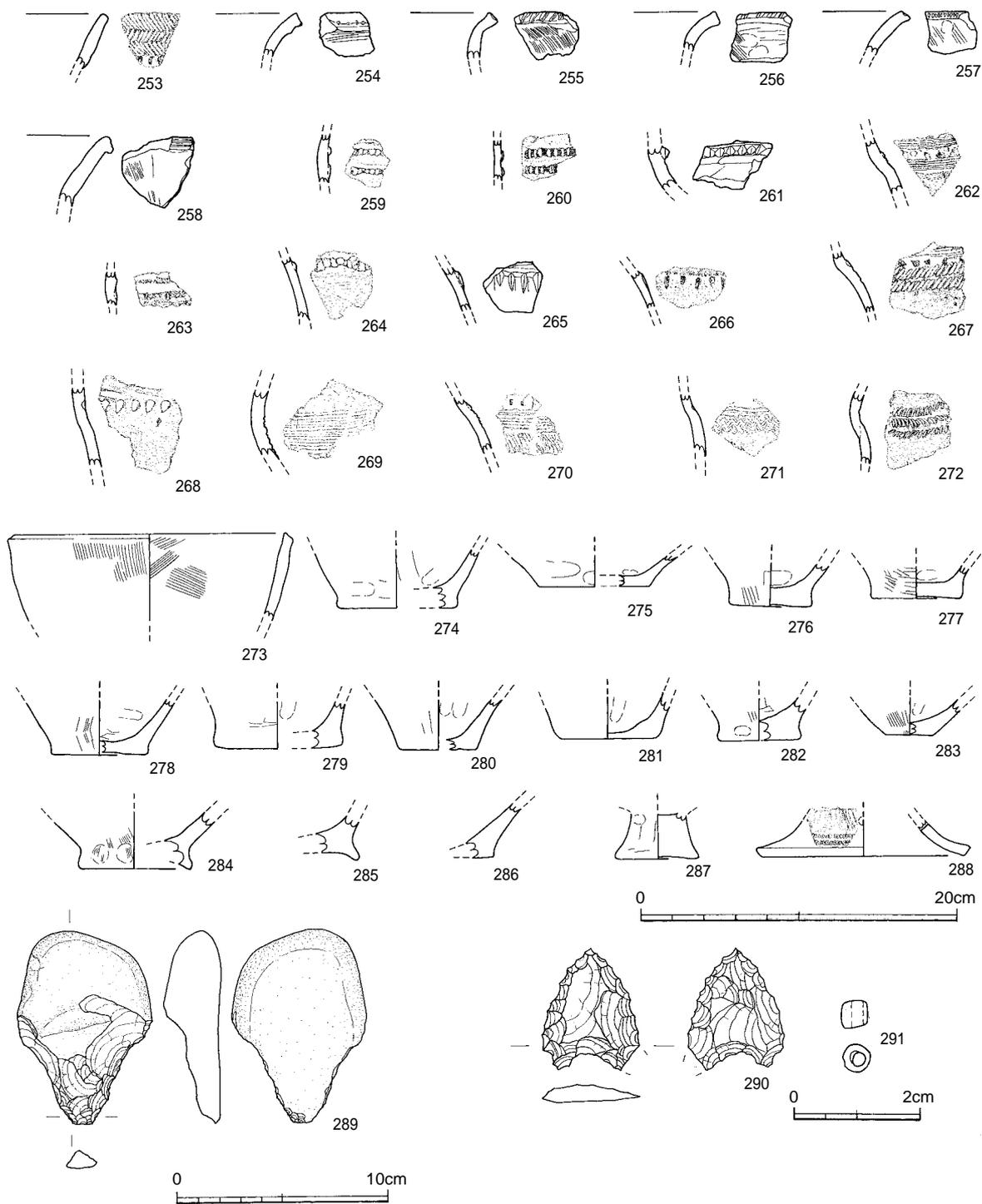


Fig.41 -1・2層出土遺物実測図2

- 1層(255・257・260・262・266～271・275・276・278～285・287)
- 2層(254・259・263～265・272～274・277・288)
- 1・2層(253・258・261)
- 上層(286・291) 層下層～層(289・290)

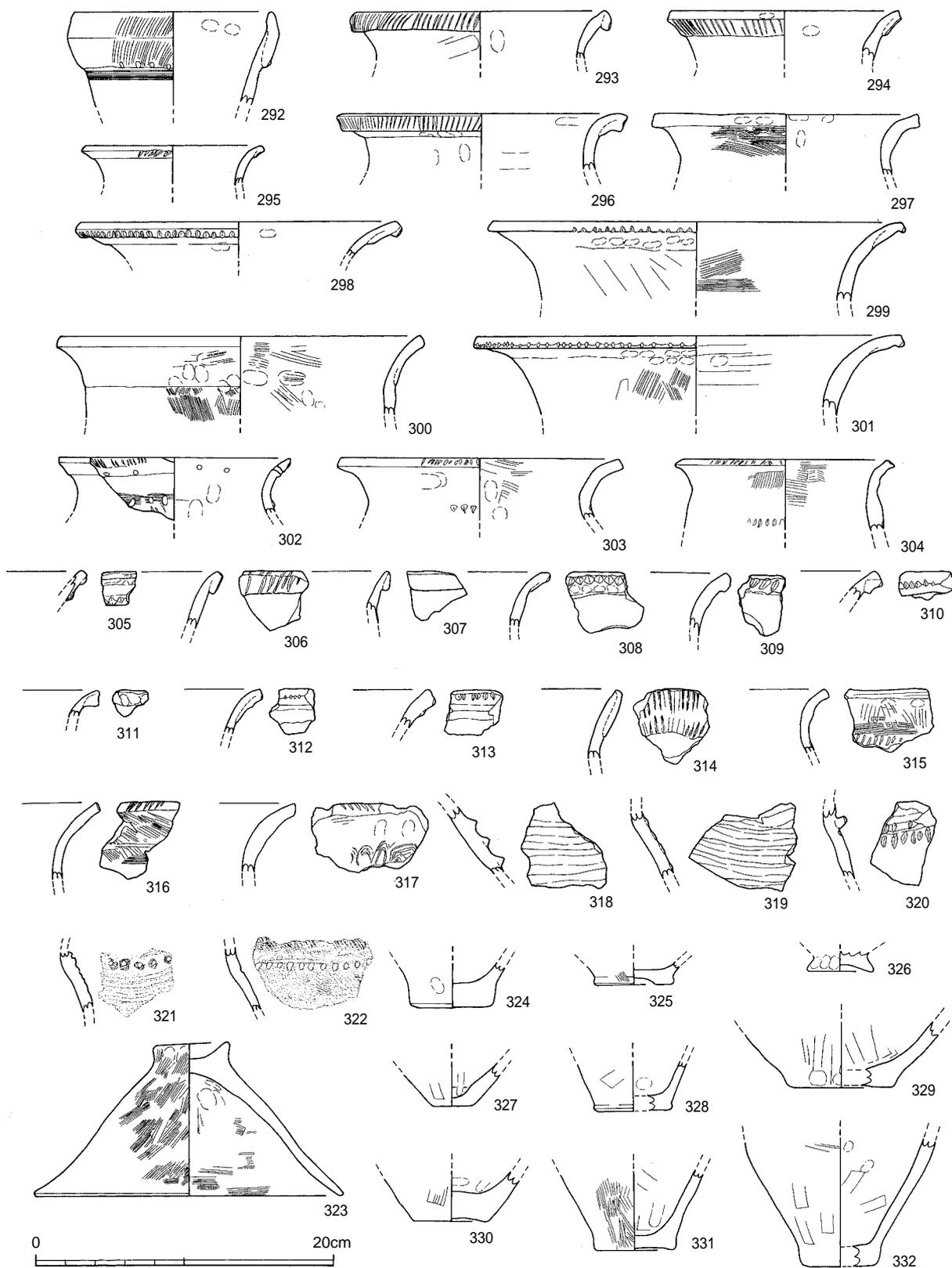


Fig.42 層出土遺物実測図

層(293・295～302・306～308・310～313・315～317・319・322・323・329・330・331)

-2層(320)

層下層～層(292・294・303～305・309・314・318・321・324～328・332)

(3) 弥生時代後期中葉～後葉の遺構と遺物

弥生時代後期中葉～後葉の遺物包含層は 層(標高約4.1～4.3m前後)～ 層最下層が該当する。

層はオリーブ灰色シルト層が 区一帯にほぼ水平堆積するもので、シルトは一定の粒度を保って厚く堆積している。これらのシルト層は植物遺体などの腐植物を殆ど含まず、堆積層内よりの土器片の出土も疎らである。検出遺構と土器集中のピークは 層最下位から 層最上位にあたる標高4.3～4.4mのレベルにあり、ここより土坑1基(SK7)、土器集中3箇所(土器集中7・8・9)を確認している。

土坑

SK8(Fig.43)

区の南東部寄りに位置する浅い皿状の土坑で、検出面は 層の最上位、標高4.3mにあたる。平面形態は不整形円形を呈し、規模は径145cm、深さ9cm前後を測る。床面は部分的に小さな落ち込みが存在し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黄灰色シルト質粘土で炭化物が多量に含まれる。床面直下には5cm程の厚みをもって焼土が広がるが、焼土は部分的に攪拌を受けた痕跡を留め、炭化物と黄灰色シルトがブロック状に混じる。なお、SK8出土の炭化物は植物珪酸体分析によって、稲朶に形成されるイネ属珪酸体、イネ族の葉部に特徴的なイネ族葉部珪化組織片が多く検出され、これら炭化物が主に稲朶穀や稲朶の焼成によるものであるとの結果を得た。又、これに混じりタケ亜科、ウシクサ族も単体で僅かに検出されたとの結果を得ている。

出土遺物は壺・甕・高杯である。土器は口縁部点数にして壺1点、甕4点を数え、底部は1点である。甕の口縁部形態は「く」字状に外反するするタイプが占め、底部は平底が1点である。甕は何れも細片であるが、他に体部細片20数点を確認しており、このうちタキ調整を認めるものはない。図示したものは333～336である。広口壺(333)は口縁部外面に粘土帯を貼付し、端部を僅かに肥厚させる。甕(334・335)は「く」字状に外反する口縁部をなすもので、335は内面に稜をなして強く外反する。内外面は八ケ・ナデ調整を施す。高杯(336)は杯部中位に稜をなして口縁部が緩やかに外反する。

SK8は弥生後期中葉から後葉に位置付けられる。

土器集中

土器集中7(Fig.44・45)

区南西部H-16グリッドに位置する土器集中で、検出面は 層の最上位、標高4.30m前後にあたる。南側には集石遺構SX4が近接しており、SX4の床面出土土器がほぼ同レベルで出土しているが、前者は土器様相が全く異なり弥生終末期～古墳時代初頭の土器群で占められ土器集中9との土器接合関係も認められない。土器は東西8m、南北2mの範囲に帯状に分布しており、ほぼ水平分布の様相を示すが、中に8cm前後の標高差をもつ破片も一部みられる。又、土器集中の西側には50×30cmの規模をもつ焼土57が広がり、その周辺に薄い炭化物の集中と炭化した木片がブロックをなして散在する。

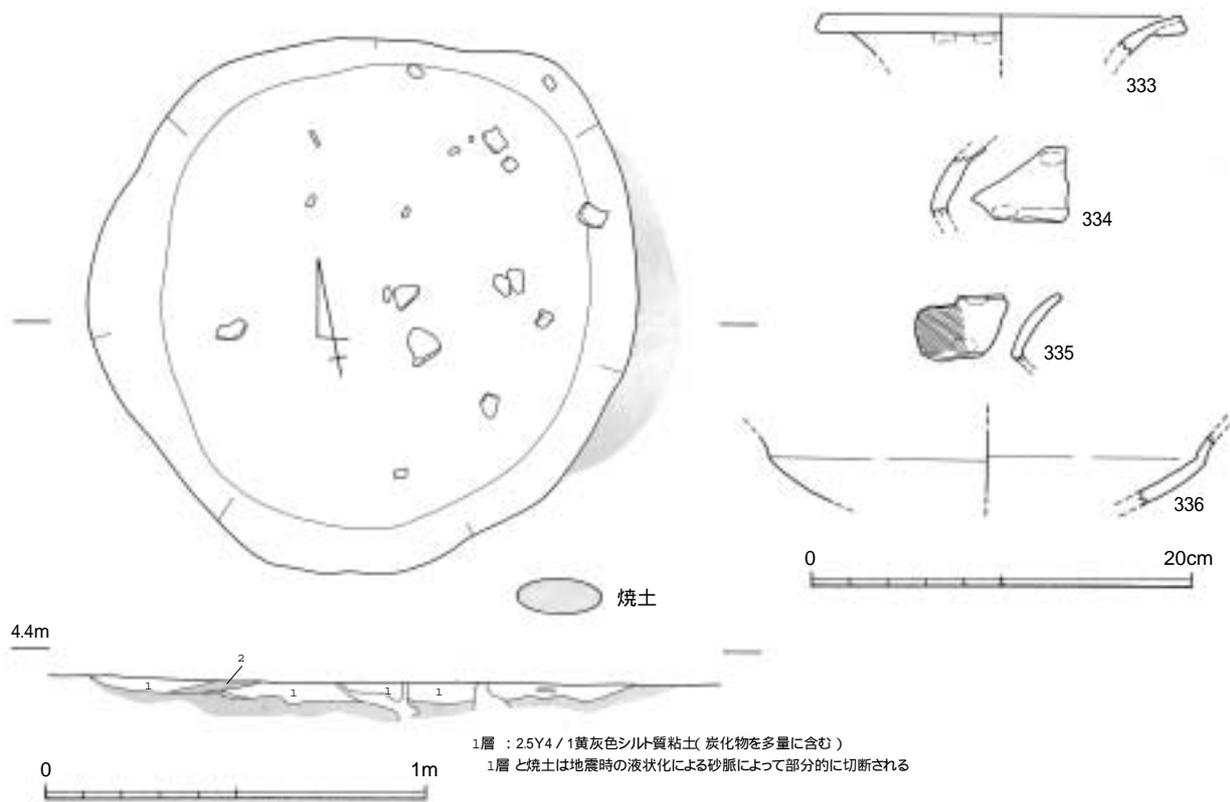


Fig.43 SK8平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図

出土遺物は甕・鉢である。土器は口縁部点数にして甕5点、鉢2点で、底部は6点を数える。甕の口縁部形態は、口縁部が大きくカーブを描き外反するタイプで無刻みのものが4点、直立気味に開くタイプで外面に粘土帯接合痕を明瞭に留め小さな段を残すものが1点を占める。底部は平底4点、外底が凹状となるものが1点である。又、甕・鉢とも器面調整はナデが主体をなし、何れも焼成は堅緻である。出土状況においては土器は完形で出土するものは僅かだが、この内鉢(343)・甕(340)は比較的元の原型を留めまとまって出土している。

図示したものは甕(337~341)、鉢(342・343)、底部(344~347)である。甕(239)は張りの少ない胴部から口縁部が緩やかに外反する。頸部外面には粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなす。口縁部外面には指頭押圧を連続的に加える。338~341は胴部から頸部にかけて一旦窄まった後口縁部がカーブを描いて外反するタイプの甕であるが、口縁部は短く外反するものとなる。又、口縁部外面への粘土帯貼付は施されず端部を丸くおさめるものとなり、口縁部・胴部共に無文となる。何れも調整はナデ調整により、指頭圧痕が顕著。胎土は比較的砂粒の少ないもので焼成は堅緻である。342は大型の鉢で口縁部に向かい直線的に開く。鉢(343)は直立する口縁部形態を呈する。底部(346)は外底をリング状に凹ませる。

弥生時代後期中葉~後葉に位置付けられる。

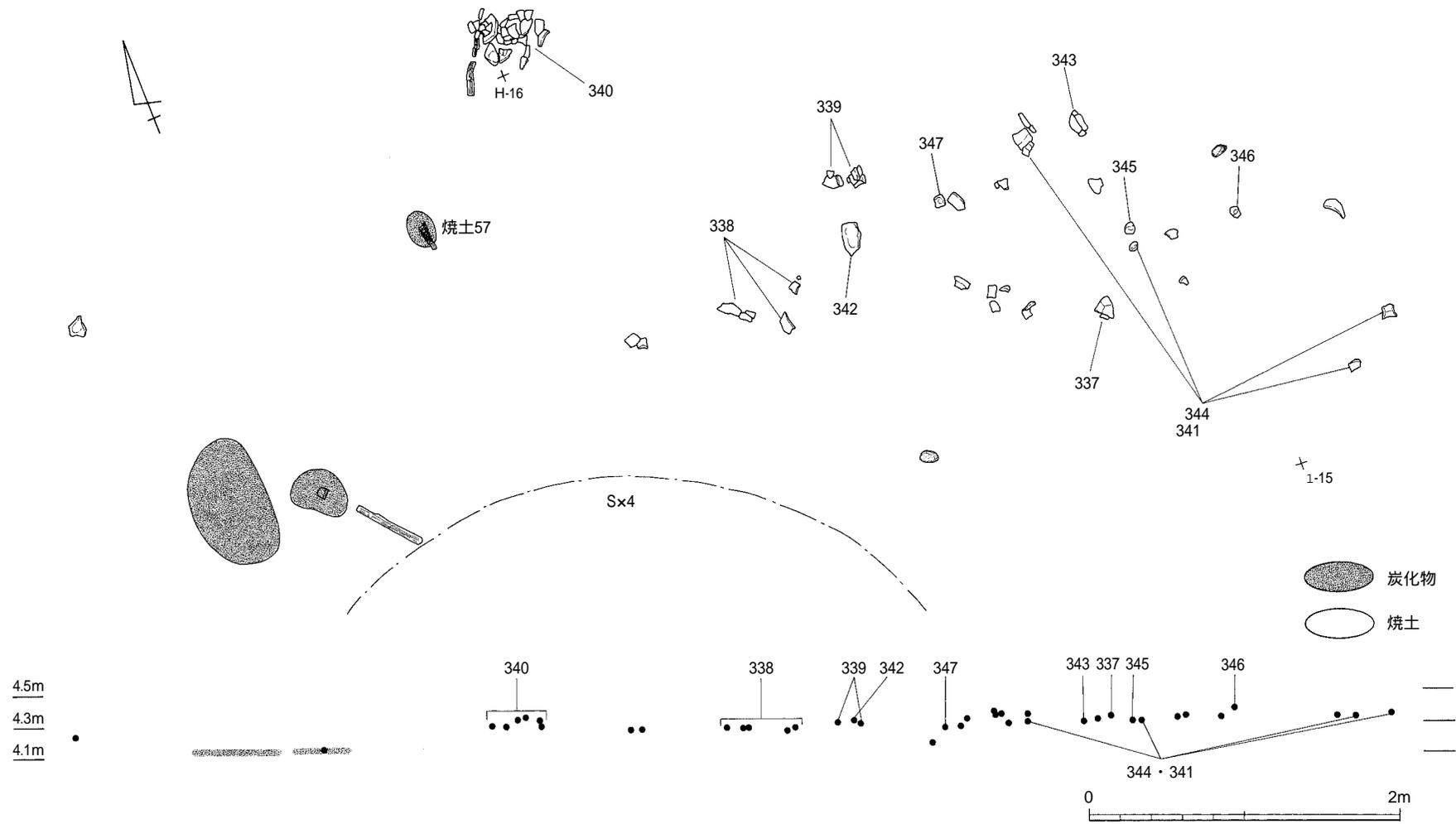


Fig.44 土器集中7遺物出土状況図

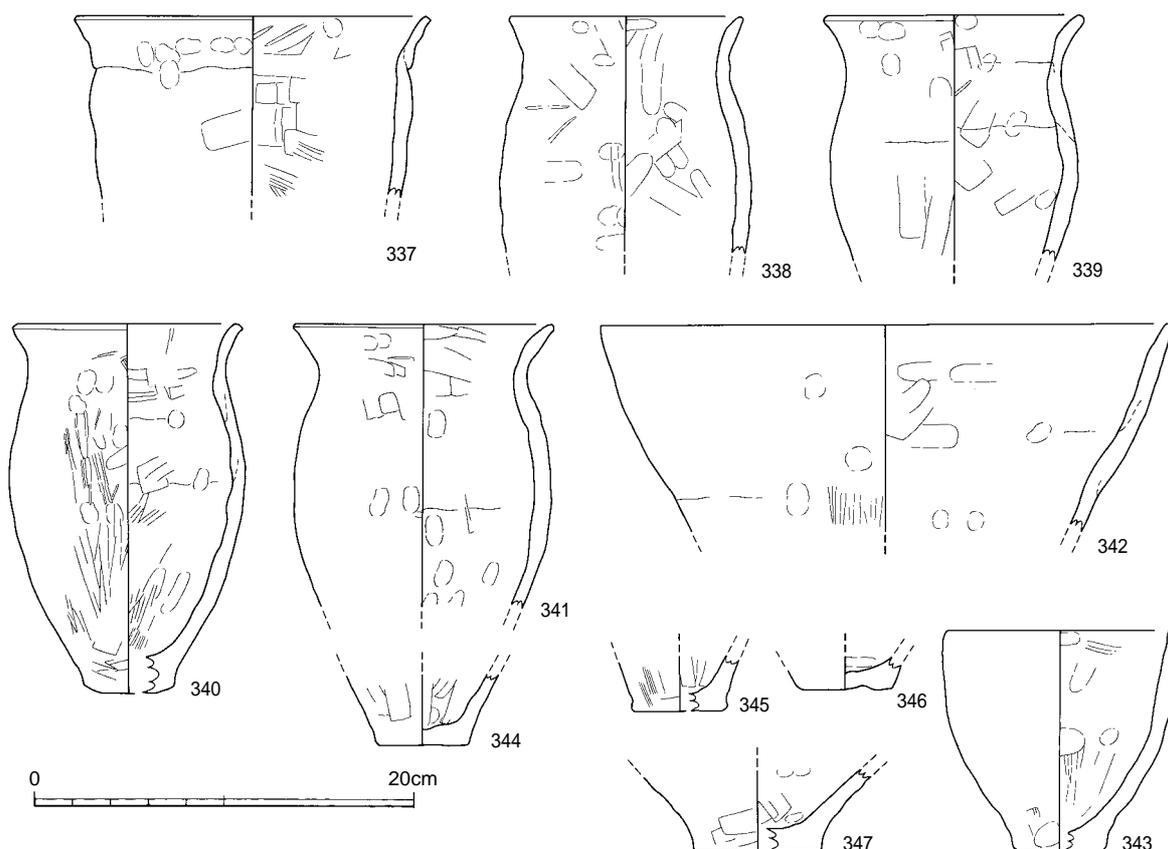


Fig.45 土器集中7出土遺物実測図

土器集中8(Fig.46・47)

区南部G-13・14グリッドに位置する土器集中で、検出面は 層の最下位、標高4.40m前後にあたる。土器集中9からは南西へ4m離れた地点に位置し、ほぼ同一面での検出であるが、両者の間には特に土器の接合関係は認められない。土器は東西7m・南北4mの範囲に散在した状態で水平分布しており、南部には焼土56が存在する。

焼土56は70×40cmの範囲に明橙色の焼土が広がり、その上面には長軸60cm、深さ3～4cm前後の規模をもつ浅い皿状の掘り込みを伴う。埋土は 層：炭化物を多量に含む黄灰色シルト、 層：灰白色の灰である。 層：灰層は焼土と黄灰色シルトをブロック状に含むもので攪拌された痕跡を留め、その上面の掘り込みは 層埋土によって埋め戻されている。さらに、焼土周辺には強い炭化物の集中がブロック状に広がり、焼土検出面から埋土 層直上にかけて土器細片が出土している。これらの堆積状況と遺物出土状況からみて、焼土56においては、消火に伴う人為的な埋め戻しと直後の土器廃棄が行われたものと捉えられる。

出土遺物は壺・甕・鉢・高杯・蓋である。土器は口縁部点数にして壺2点・甕11点・鉢1点・高杯1点・蓋1点で、底部は12点を数える。甕の口縁部形態は口縁部が「く」字状に外反するタイプで占められ、そのうち頸部まで残存するもののうち外面に粘土帯接合痕を残すものが0点、残さないものが1点である。壺・甕・鉢の底部は全て平底で占められる。又、甕の器面調整は全てハケ・ナデであり、タタキの出現をみない。

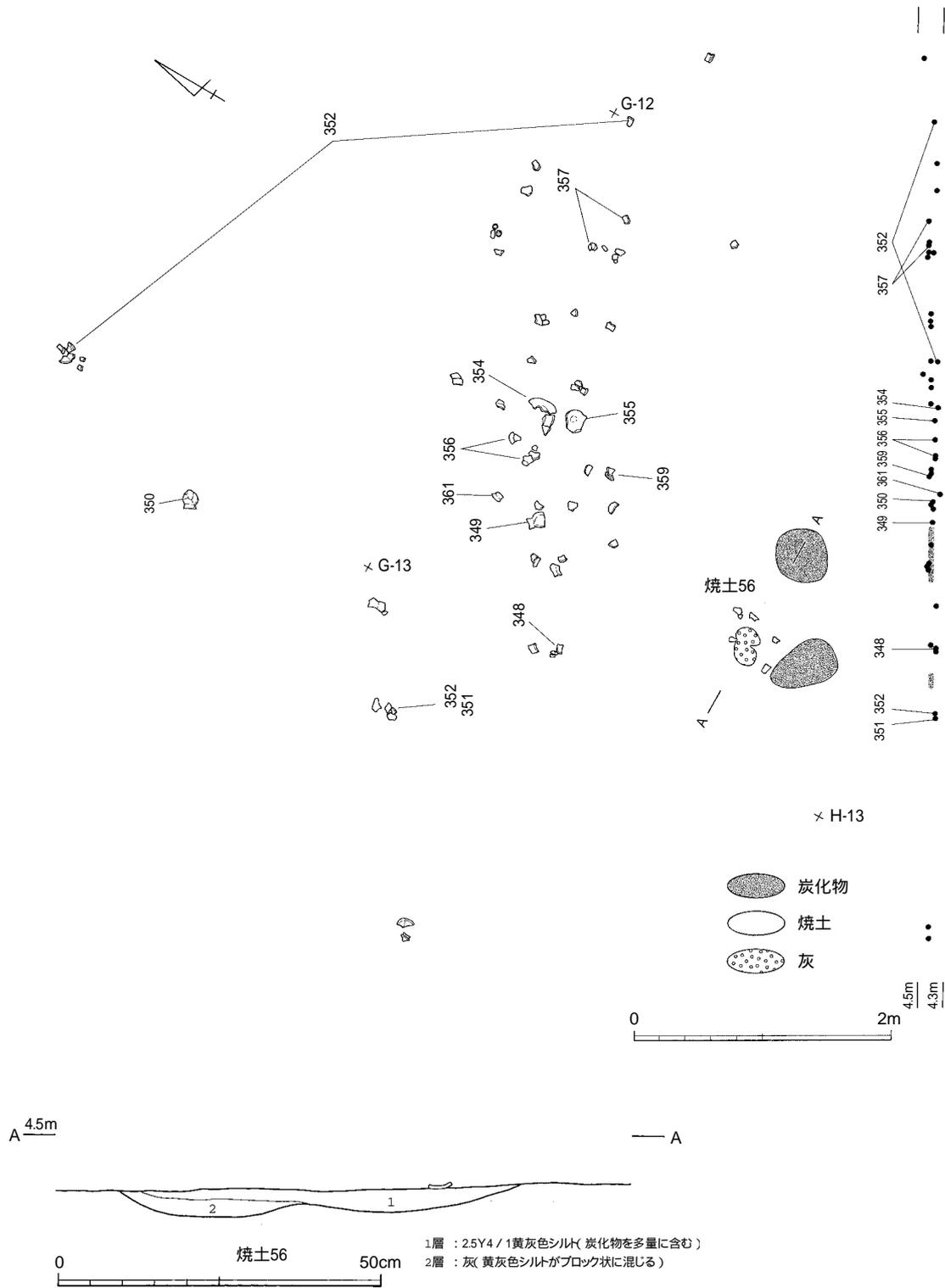


Fig.46 土器集中8遺物出土状況図・焼土56セクション図

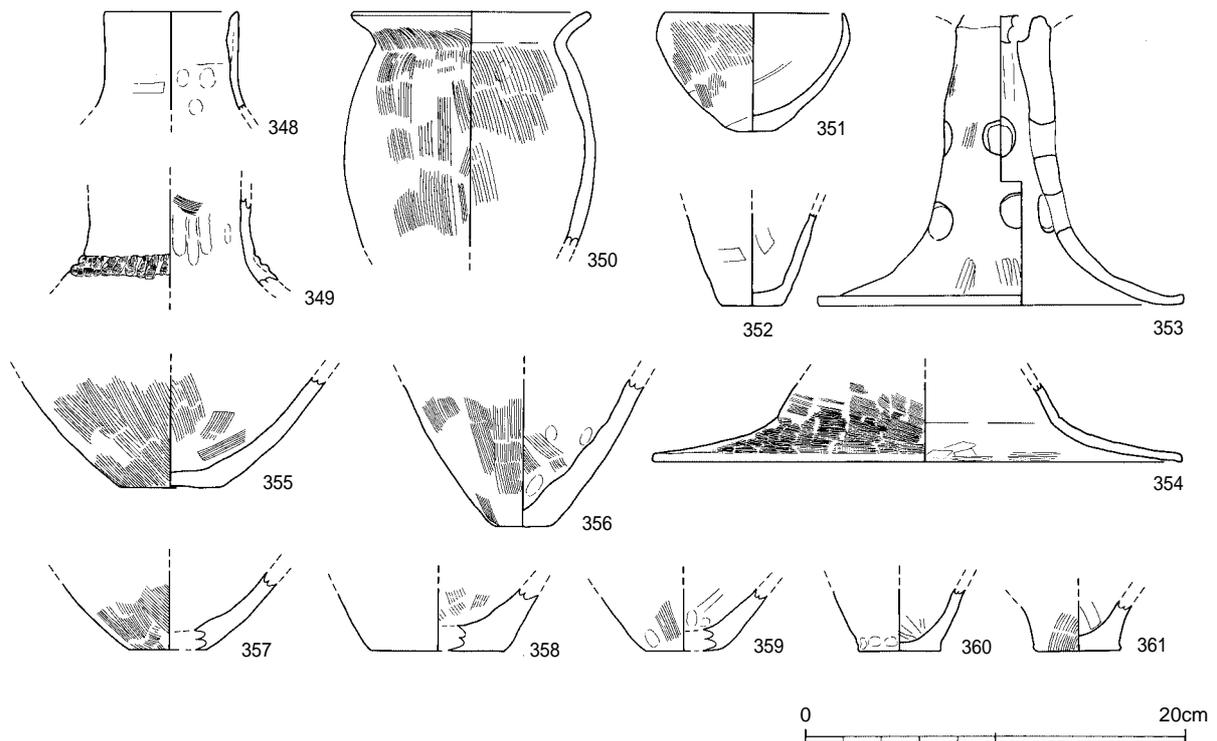


Fig.47 土器集中8出土遺物実測図

出土状況を見ると土器は焼土北側において東西方向へ帯状に広がる小ブロックを形成するが、小破片での出土が多く密度も薄い。ここからは壺(348・349)、蓋(354)と底部(355～357・359・361)等が出土している。又、ブロックから1～3m離れて鉢(357)と底部(351)・甕(350)・高杯(353)等が出土しており、476は3m離れたブロック内の土器片と接合されている。

図示したものは壺(348・349)、甕(350)、鉢(357)、高杯(353)、蓋(354)、底部(352・355～361)である。直口壺(348)は口縁端部を丸くおさめる。349は長頸壺の頸部～肩部で肩部に粘土帯を貼付しハケ状原体による圧痕文を連続的に施す。甕(350)は口縁部が「く」字状に強く外反するもの。鉢(351)は椀状を呈し口縁部は内湾する。高杯(353)は分割成形によるもので、脚部は接合部で剥離する。脚部は柱状部が長く、裾部が緩やかに広がる形態を呈し、径1.9cm大のやや大型の透かし孔を上下2段に配置する。外面はナデ・ミガキ調整を施し、柱部内面には絞り目が認められる。354は蓋か。屈曲部外面に接合痕を明瞭に残し小さな段を留める。外面に木理の細かい横ハケとナデ調整を施す。底部、352・355・357～361は平底を呈するが、356は小さな平底となる。

弥生時代後期後葉に位置付けられる。

土器集中9(Fig.48・49)

区南部E-11・12グリッド周辺に位置する。検出面は 層の最下位、標高4.44m前後にあたり、東西5.8m・南北2mの範囲に焼土と土器・小円礫の廃棄が弧を描く様に水平分布する。土器・礫・焼土の分布は、西端に位置し複数の焼土と少量の土器廃棄からなる-Aブロック、小円礫のまとまりと少量の土器細片からなる-Bブロック、東端に位置し完形に近い多量の土器から構成される-Cブロックの3つの小ブロックを認めることができる。

Aブロック内には焼土48が存在する。焼土48は南北2mの範囲に暗赤褐色の焼土がブロック状に点在するもので、焼土内には炭化物片が多く混じる。焼土上面からの骨片や土器の出土は認められない。Bブロック内からは3~4cm前後の円礫がまとまって出土しており、周辺に少量の土器細片を伴う。

出土遺物は甕・鉢・高杯である。土器は口縁部点数にして甕22点・鉢3点・高杯1点、底部と脚部は11点を数える。甕の口縁部形態は全て「く」字状に外反するタイプで占められ、そのうち頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものが3点、接合痕を残さないもの19点である。

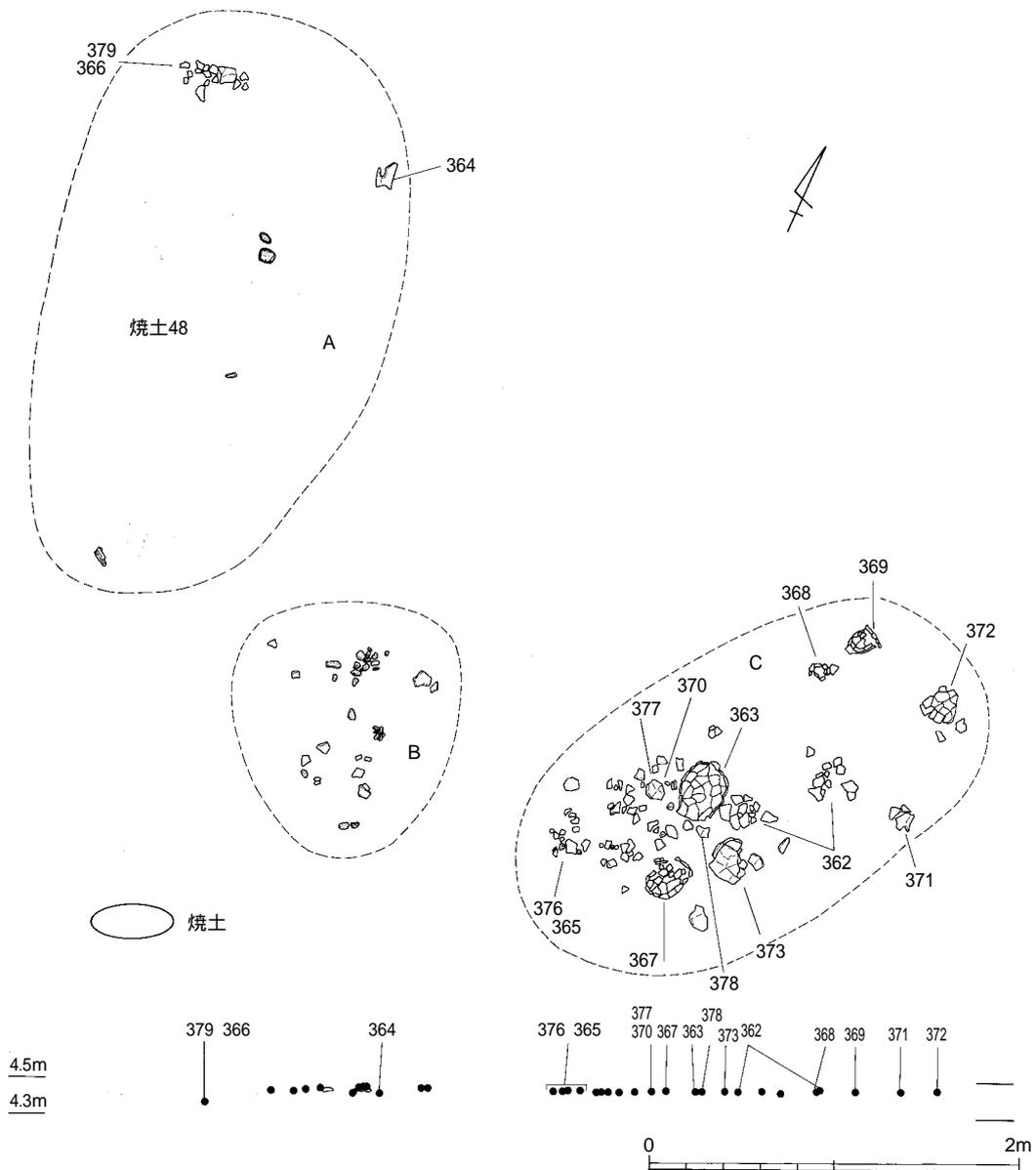


Fig.48 土器集中9遺物出土状況図

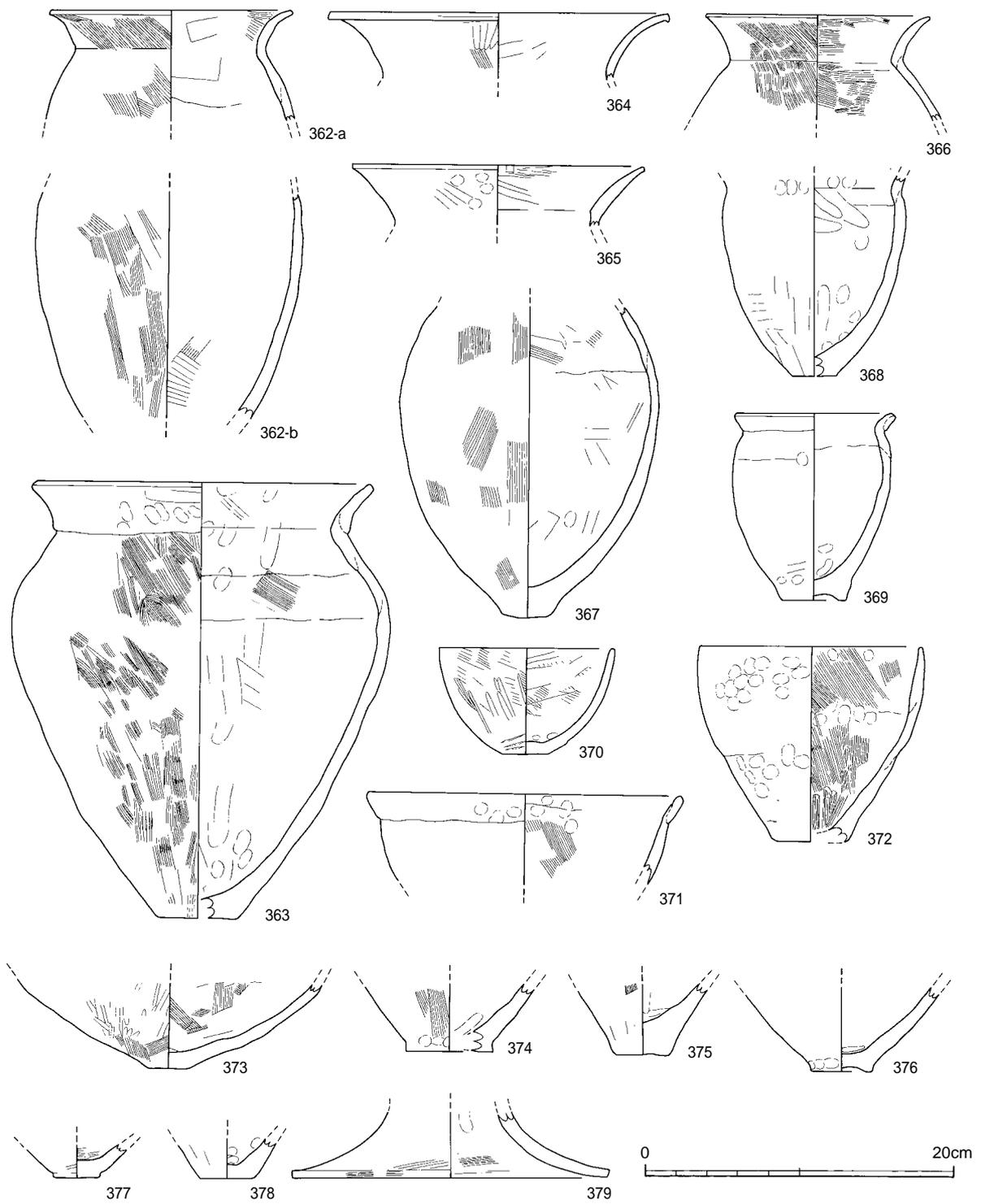


Fig.49 土器集中9出土遺物実測図

底部は平底4点、小型化した平底3点、底部脇に押圧を加えるもの2点、外底が凹状となるもの1点となる。又、甕の器面調整はハケ・ナデで占められタタキの出現をみない。

出土状況を見ると、Cブロックにおいては廃棄時の原型を留めた形状で出土するものが多く、土器片が廃棄後元地点から大きく動かずに埋没している可能性が高いことから、当時の遺物廃棄の状況を復原できる良好な事例といえる。ここでは近接して置かれた小型の鉢(370・377)と共に胴径18～24cm前後の比較的容量の多い甕(363・362・367)が円形に配置されており、又これらの土器群よりやや離れた位置に胴径12cm前後の小型の甕(368・369)2点がまとまって置かれ、やや間隔を空けて中型の鉢2点(372・371)が配置されている。

図示したものは甕(362～369)、鉢(370～372)高杯(379)、底部(373～378)である。甕は口縁部が「く」字状に外反するもの(362～366・369)と、丸味を帯びて外反するもの(368)に分かれ、うち363・369は頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に留め小さく段をなす。363上胴部が強く張るもので、胴部はハケ調整、口縁部外面はナデと指頭圧痕となり、胴部・口縁部間で調整が区分される。369は「く」字状口縁甕の小型品で、上胴部が張り、底部は上げ底となる。鉢(370)は椀型の形態を呈し、口縁部は直立気味に立ち上がる。ハケ・ナデ調整を施す。鉢(372)は直立する口縁部をなす。内外面はナデ・ハケ調整で内外面指頭圧痕が顕著である。371は口縁部が僅かに外反するもので、外面の粘土帯接合部が小さく段をなす。高杯(379)は裾部が緩やかに広がり、端部を面取る。

弥生後期後葉に位置付けられる。

包含層出土遺物(Fig.50)

層出土の遺物は壺・甕・鉢・手捏土器である。各土器は標高4.2～4.45mにかけての地点から出土したものであるが、層堆積層はオリブ灰色シルトが均質に堆積するもので、細分層による遺物取り上げは不可能であったため、結果として、同層出土土器も弥生後期前葉から後葉の幅広い土器様相を呈している。なお、土器片は未実測分も含め外面調整はナデ・ハケで占められ、叩き成形の痕跡を残すものは認められない。

図示したものは壺(380・381)、甕(382～394・400)、鉢(396・397)、底部(398・399・401～404)である。壺は広口壺(380・381)を認める。広口壺(380)は頸部がやや長頸化し、粘土帯貼付口縁となる。甕は口縁部がカーブを描いて外反するもの(382・385・383他)と口縁部が「く」字状に外反するもの(386・387)に分かれるが、細片で全体の形状が明らかでない個体が多い。口縁部形態は端部を丸くおさめるもの(387)と面取るもの(386)、粘土帯貼付口縁(382～385、388～390)がある。384は粘土帯貼付口縁外面に格子目文を施し、端部を面取り楕円形浮文を貼付する。389は口縁部外面に深い刻目を施す。390は粘土帯貼付口縁の段の張り出しが強いもので、口縁部外面に刻目を施す。391は粘土帯貼付口縁外面から強い押圧を加え僅かな段を留めるもので、口唇部下端から「V」字状の深い刻目を刻む。これらのうち384・390は焼成が堅緻で、胎土は褐灰色～黒色を呈し灰色系の砂礫を多量に含むという神西式に類似する胎土特徴を示す。386は「く」字状に強く外反するもので、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に留め段をなす。口縁部外面には指頭圧痕が顕著に残る。387は張りの少ない胴部から口縁部が「く」字状に外反する。392・393・394は甕の上胴部で、392は楕円形浮

文と櫛描直線文、393は沈線と列点文、394は列点文を施す。鉢(396)は球形状に膨らみをもった胴部から、口縁部が内面に稜をなして外反する。頸部外面に粘土帯を貼付し接合痕はナデ消している。鉢(397)はコップ型の形態を呈し、口縁部が内面に稜をなして外反する。395は小型の手捏土器である。この他、底部には平底(400・402・403)と外底が僅かに凹状を呈するもの(398・401・404)がある。鉢底部(398)は底部脇に指頭押圧を連続的に加える。底部(399)は外底から焼成後穿孔を途中まで穿つ。

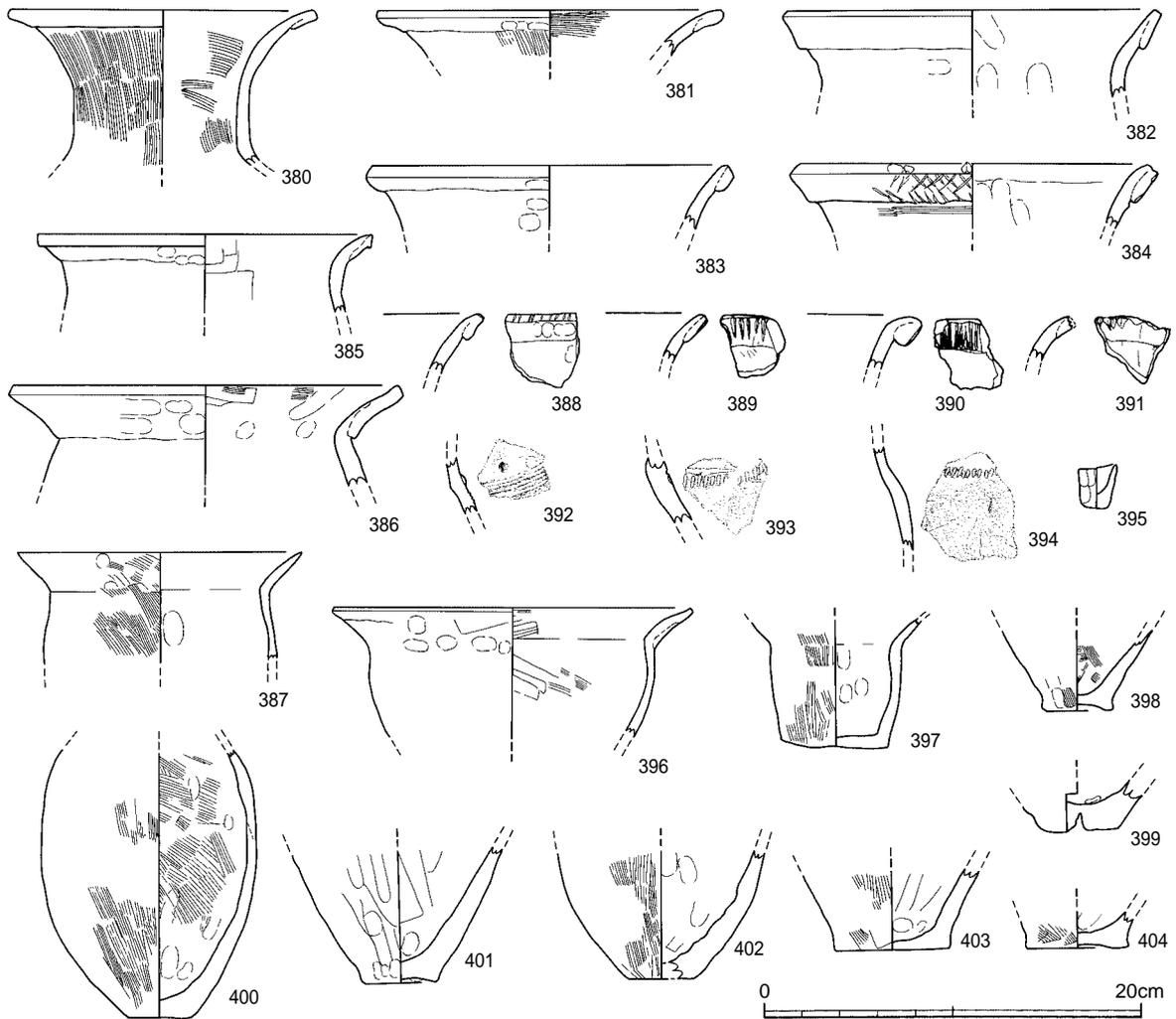


Fig.50 層出土遺物実測図

(4) 弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構と遺物

弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物包含層は 層(標高約4.3～4.8m)及び 層下位が該当する。

層は灰色シルト層が調査 区一帯にほぼ水平堆積するもので、堆積層内には炭化物と土器片が多量に含まれる。遺構と土器集中の様相も 層とは対照的に検出数が急増し、土坑2基(SK9・10)、配石を伴う竪穴状の性格不明遺構2基(SX4・5)、土器集中9箇所(土器集中10～18)等を確認している。これら遺構と土器集中の分布は南西部から北西部に帯状に広がる一定の方向性をもって広域な分布範囲を示す点にも特徴があり、西の調査 区へも連続的な広がりをみせていく。

土坑

SK9(Fig.51)

区南西端 I -17グリッドに位置する浅い皿状の土坑で、検出面は 層、標高4.7mのレベルにあたる。南側を南壁矢板によって切られているため、全体の規模・形状は不明であるが、平面形態は東西軸114cmの不整楕円形を呈するものと考えられる。床面は部分的に浅い窪みを伴い最も深い箇所まで深さ15cm、浅い所で10cm前後を測る。壁は緩やかに立ち上がり、壁面東肩から遺構外にかけて50×50cmの範囲に焼土が広がる。埋土は焼土と炭化物をブロック状に多量に含む灰色シルト質粘土である。床直上と埋土中からは多量の土器片と少量の礫が出土しており、埋土中の焼土ブロック及び土器片の出土状況から、消火後の埋め戻しに伴う一括した土器廃棄として捉えられる。

出土遺物は壺・甕・鉢で、口縁部点数にして壺1点・甕2点・鉢1点、底部は2点が出土している。甕は何れも細片で口縁部形態を知り得る資料を欠くが、底部は丸底気味あるいは尖底に近い小型化した平底で占められる。図示したものは405～407である。出土状況を見ると壺口縁部(405)・鉢(166)は床から浮いた状態での出土である。複合口縁壺(405)は内外面ハケ調整。底部(407)は尖底気味の小さな平底を呈し、外面にタタキ目を残す。鉢底部(406)は丸底に近い小さな平底を呈し、タタキ後ナデを施す。

SK9は弥生時代終末期に位置付けられる。

SK10(Fig.51)

区南西端 H -16・17グリッドにおいて、SX4の上面を切って存在する浅い皿状の焼成土坑である。検出面は 層、標高4.65mのレベルにあたり、同レベルにおいては土器集中10と焼土66が近接する。平面形態は径130cmの円形を呈し、床面は部分的に浅い窪みを伴い最も深い箇所まで深さ12cm、浅い所で6cm前後を測る。壁は緩やかに立ち上がり、床から壁面にかけて明橙色の焼土が認められる。埋土は 層：1～3cm大の炭化物と焼土ブロックを多量に含む黄灰色粘土質シルト、 層：0.2～1cm大の炭化物と焼土ブロックを多量に含む黄灰色砂質シルトである。埋土中からは少量の小骨片が出土しており、ここより採取した9mm大の小骨片は骨片分析の結果哺乳綱のものであるとの同定結果を得ている。

埋土上面からは多量の炭化物片とともに少量の土器細片及び鉢1点が出土しており、これらは遺構形状及び埋土内の焼土ブロックの検出状況等から、焼成土坑消火後の埋め戻しに伴う土器廃棄として捉えられる。図示したものは鉢(408)で、厚手で円盤状に突出した小さな平底から体部が外上

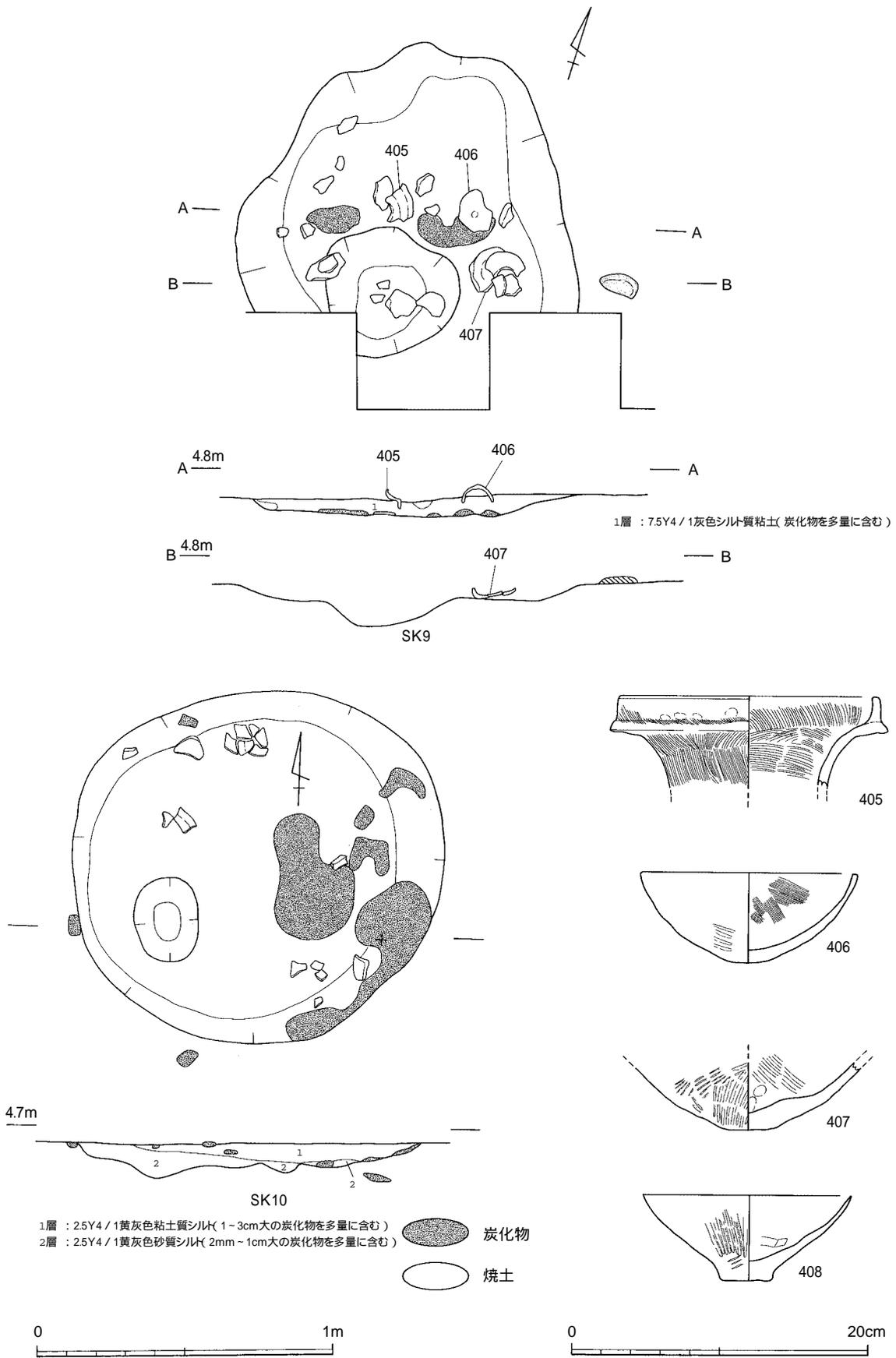


Fig.51 SK9・10平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図

SK9(405~407)・SK10(408)

方に開く。外面調整はナデ調整を基調とし体部中位に縦方向の丁寧なヘラナデを施すもので、底部脇には僅かにタタキ目が残る。

SK10はこれら出土遺物及び他遺構との切り合い関係から弥生時代終末期から古墳時代初頭に位置付けている。なお、SK10と近接する土器集中10・焼土66・SX4との前後関係及び時期差については、後述するSX4とこれら焼土・土器集中の検出状況からみて、SX4が半ば埋没しかけた段階に焼土66の焼成と土器廃棄が行われ、SK10はその後SX4上面の落込み部分への自然堆積が進み上面がほぼ水平面をなした頃に後続して焼成土坑が設けられたものと捉えている。

性格不明遺構

SX4(Fig.52～56)

区南西端 I -16・17グリッド周辺に位置する。検出面は 層にあたる標高4.7mのレベル、床面は標高4.2～4.3mにあたる。南端部が調査区外に出、又、 区側に属する西側部分では明確な遺構の立上りを確認できなかったことから、検出規模は東西3m、南北4.4m、深さ40cm前後を測るが、検出プランからみて本来径5m前後の円形を呈する竪穴状の遺構であった可能性がある。埋土は 層：灰色砂、 層：炭化物と焼土ブロックを少量含む灰色シルト、 層：炭化物と焼土ブロックを多量に含む灰色シルト、 層：オリーブ黄色粘土からなり、 層中には多量の土器片が含まれる。なお、SX4は 層を掘り込む形で存在するが、埋土 層は包含層 層にあたる灰色シルトとの違いが僅かで明瞭な壁の立上りラインを検出できていない。しかし、床面には 層にあたるオリーブ黄色粘土が薄く堆積し、壁際で斜め上方への立上りをみせていることから、この 層立上りから 層の外縁を結ぶラインに外壁が存在したものと推定し復原図化している。又、埋土 層も 層：砂層中に包含層 層：シルト層が外側付近で徐々に混じり明確な境界をなさなかった。

床面はほぼ平坦であるが、部分的に小さな掘り込みや焼土内への人為的な攪拌の痕跡を留めている。さらに床面直上では、中央部に焼土と炭化物の広がり、西側部分では河原石の散在、東側部分には中央焼土を囲むように配置された集石を5ブロックと焼土3箇所を確認した。中央焼土は60×32cmの範囲に広がり、焼土脇からは2～3cm大の小骨片1点が出土している。又その南側では160×100cmの範囲に広がる炭化物の溜まりが存在し、堆積は最も厚い所で5cmを測る。なお中央焼土より出土した小骨片は骨片分析により硬骨魚綱のものとの同定結果を得ている。

集石は5つの小ブロックに分かれるが、この内、集石2・3・5はほぼ円形を呈するように円礫が配置される。集石3は直下に平面径24cm程の焼土を認め、その上面に円礫が円形に積み上げられるもので、円礫間及びその直下からは多数の土器片が出土しており接合後ほぼ完形になるものがある。焼土直上の円礫及び土器には弱い炭化物の付着を認めるものの特に被熱痕跡を留めず、消火後に土器廃棄と配石が行われたものと考えられる。集石5も同様の焼土と焼土直上への配石・土器廃棄を認めるが、焼土脇には灰白色の灰が薄く堆積しさらに約20cm程離れた床面でも同様の灰の堆積が確認され3～5mm程の小骨片が少量検出されている。暗赤褐色の焼土内には炭化物片が多く混じり、さらに炭化物と黄灰色シルトからなる深さ約8cm程の掘り込みがその脇や下面に広がっていることから、焼土部分への人為的な攪拌が行われたものと推察される。又、両集石の間には集石2が配置

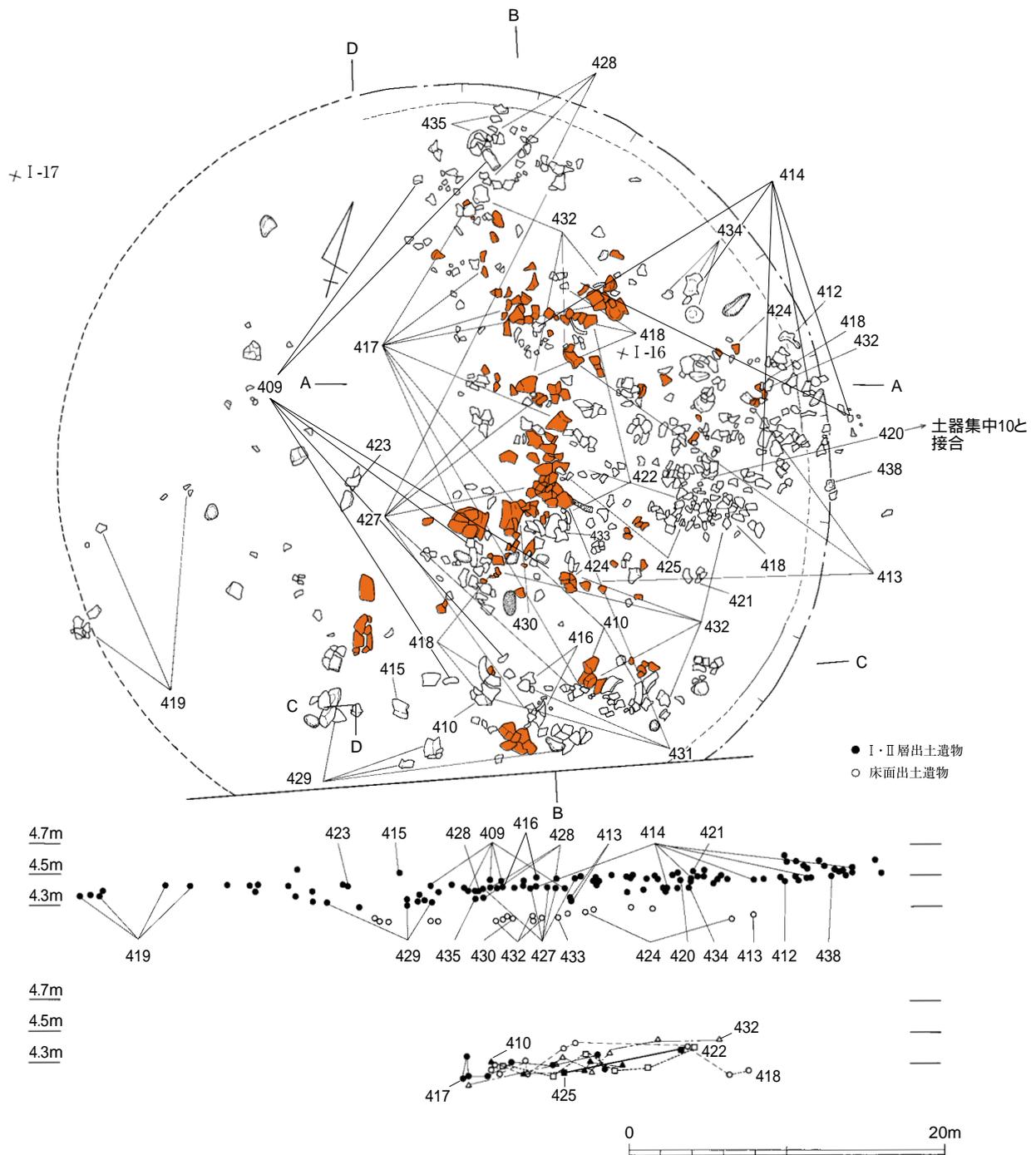


Fig.52 SX4平面・遺物出土状況図

され、同様の円形プランを呈するが、焼土は伴わない。その他、集石1・6は不整形を呈する円礫のまとまりで、集石6も直下に径24cm程の小規模な焼土を認める。なお、これら集石3・5・6直下の3箇所の焼土は中央焼土の東側を半円形に巡るように配置されるが、対する西側及び調査区の部分では焼土と集石は確認することができなかった。又、各集石ブロックを形成する円礫は何れも中筋川の本流にあたる後川(四万十川)の河原に多く見られる砂岩製の円礫で占められる。礫は集石1で

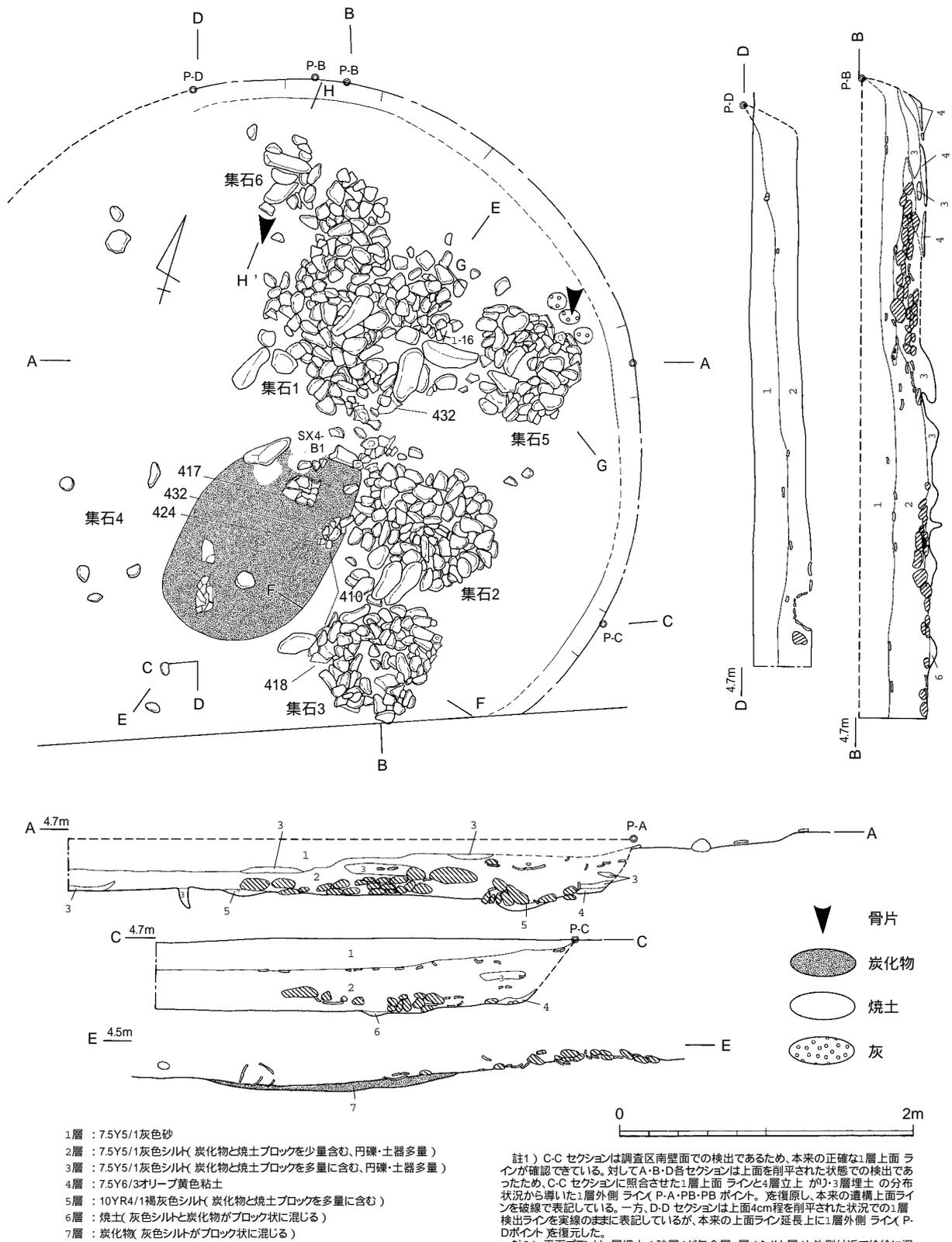


Fig.53 SX4平面・セクション・エレベーション図・集石及び遺物出土状況図

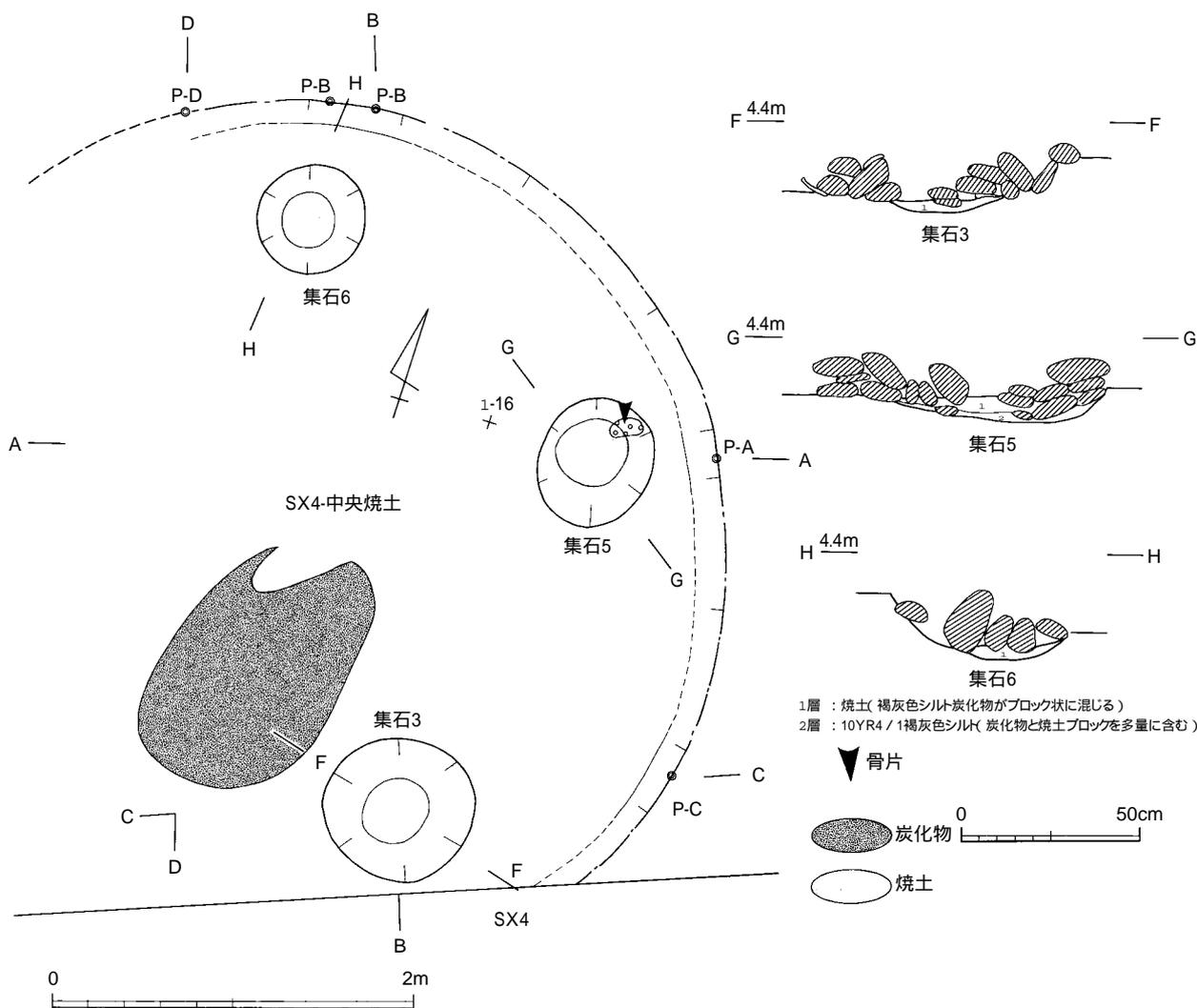


Fig.54 SX4平面図・集石3・5・6セクション図

148個、集石2で85個、集石3で51個、集石4で7個、集石5で46個、集石6で16個を数え、全体で約350個もの円礫によって構成されている。これらの礫は径10～20cmの大きさの扁平な形のものが主体を占めるが、中には30cm前後の棒状の礫も10点程含まれている。又、中型の扁平礫が積み重ねられ集石を構成するのに対し、大型棒状礫には焼土近辺や集石脇に倒れているものが多い。

最後に柱穴については、床面の精査に努めたが、集石3・5・6直下の焼土上面に僅かな掘り込みを確認した他には、最終的に柱穴の検出はできなかった。

なお、後述する土器集中10の項で詳細を示すこととなるが、SX4の周辺においては、SX4-層にあたる砂層面の検出段階に、その東側に接して、土器集中10南ブロック土器群がほぼ同レベルで広がりを見せており、これらの土器群はSX4東肩部近くで緩やかに落込みをみせ始め、ついにはSX4-層上面の土器群に連続していく。東肩部周辺での土器集中10・SX4間での土器の接合関係は認められなかったが、周辺箇所では土器集中10出土土器片とSX4-層上面出土土器の間で接合例(壺414・甕420)が確認されており、両者の土器廃棄がほぼ同時期に行われたものと考えられる。こ

うした点から、SX4- 層上面への土器廃棄と土器集中10の廃棄はほぼ同時期に行われており、さらに、それらが完了した後に、地形的に落ち込んだ部分への砂層(SX4- 層)の堆積が始まりその後完全に埋没したものと推察される。

出土遺物は壺・甕・鉢・土製品である。土器は口縁部点数にして壺2点・甕201点・鉢4点を数え、底部点数は53点にも及ぶ。このうち残存率50%を超える底部は45点であり、45個体を越す実に多量の土器が一括廃棄された事を示している。甕の口縁部形態は全て「く」字状に外反するタイプで占められるが、そのうち頸部まで残存する口縁部資料で、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものが8点、口縁部叩き出し成形によるものが7点である。底部は平底10点、尖底気味の小さな平底33点、尖底5点、丸底風3点、凹状2点となる。

出土状況を見ると土器は小破片で出土するものが多く、完形に近い形状を保ってまとまって出土したものは僅かである。接合後ほぼ完形に復原された土器は甕(417～419・428～432)、鉢(433～435)であるが、このうち甕(430)、鉢(433～435)が1地点からまとまって出土したのに対し、他は何れも出土時各所に破片が散在している。土器群は、 層上面に面的に広がる土器片の一群と、床直上及び集石間・集石直下に広がる土器群、及び 層埋土中より出土するものに大きく分かれ、より近いレベルで面的に分布する土器間で高い接合率を示す傾向が認められるが、中には410・417・418・422・425・432及び未実測資料等に 層埋土中と下層・床面間での接合関係が成立するものがあった。

図示したものは壺(409～414)、甕(415～432)、鉢(433～435)、底部(436～438)、用途不明土製品(439)である。このうち床面出土は410・413・417・418・422・424・425・429～433・437、 層上面出土は412・421・438・415・420、集石間から出土したものは413・417・418・422・424・432である。

壺は複合口縁壺(409)と広口壺(410・411・413・414)を認める。複合口縁壺(409)は強く張る胴部から口頸部がカーブを描いて外反し、口縁部は短く直立する。頸部下端には扁平な突帯を貼付する。突帯は両側からヘラ状原体による刺突を連続的に加えることによって組紐あるいは縄状に造形され、先端部は紐状に垂下する。本タイプ壺は大分県出土の資料に類例をみるものであるが、胎土特徴からみると在地生産の可能性が高い。器面調整は八ヶ・ナデ調整からなる。広口壺(410)は球形を呈する胴部から口縁部が外反し、端部は丸くおさめる。器面調整は八ヶ・ナデで仕上げるがタタキ目が一部残る。414も球形の胴部を呈するもので、口縁部端部を小さく面取る。最終調整は八ヶ・ナデ調整であるが、胴部外面にはタタキ目が顕著に残る。413も胴部が球形に張り、外面ナデ調整で指頭圧痕が顕著に認められる。411は口縁端部を肥厚させ格子目文を施す。壺の頸部(412)は頸部外面に扁平な突帯を貼付し、八ヶ状原体による格子目文を施す。甕(415～432)は全て口縁部が「く」字状に外反するタイプで占められる。このうち頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さく段をなすものは415～419である。甕(417)は張りの少ない胴部から口縁部が内面に稜をなして「く」字状に外反する。頸部外面には粘土帯接合痕と接合部への連続した指頭圧痕を認めるが、胴部から口縁部への連続したタタキによって消される。418は張りのある胴部から口縁部が内面に稜をなして外反する。口縁部外面には指頭圧痕が顕著で、頸部外面には粘土帯接合痕が明瞭に残り小さく段をなす。

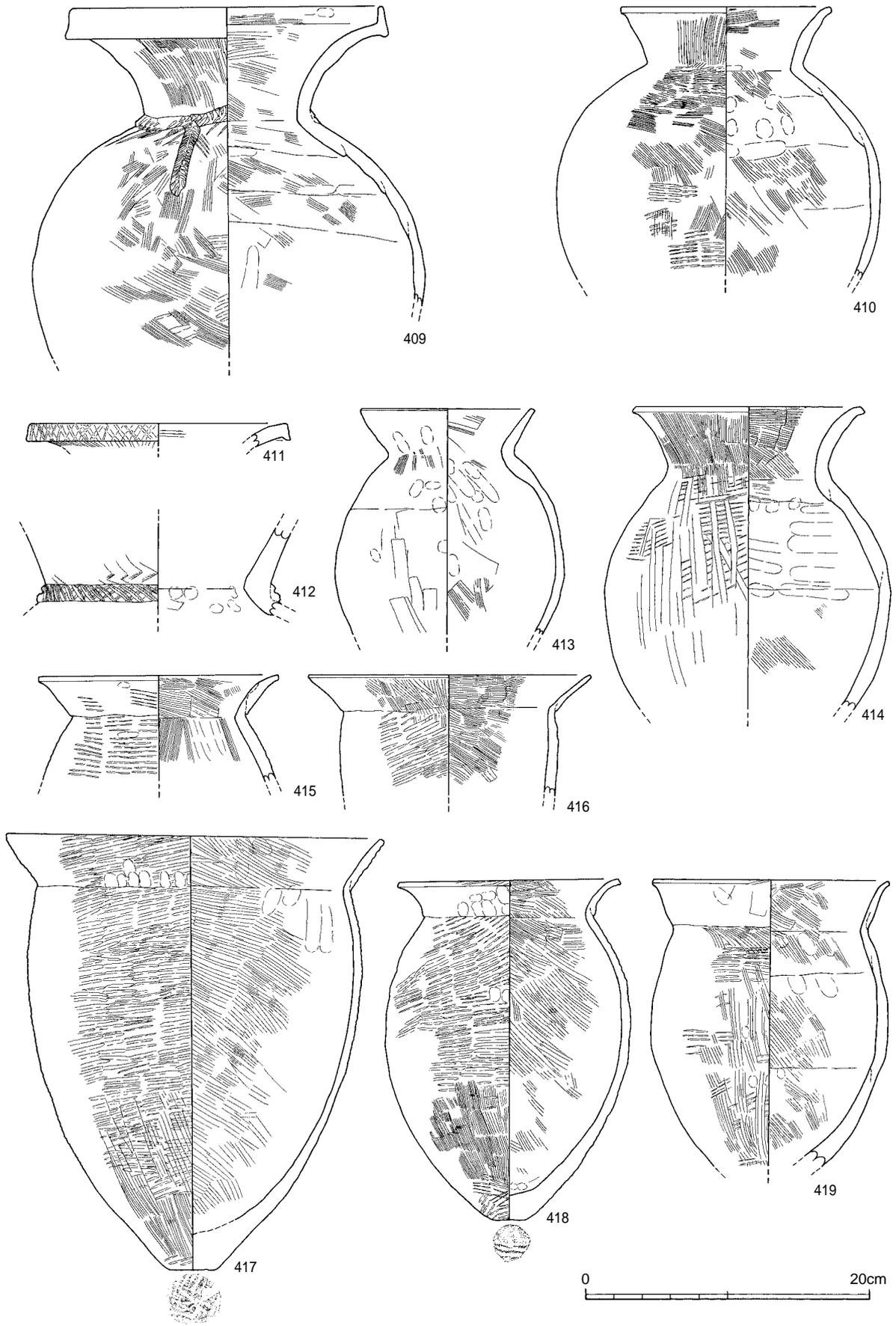


Fig.55 SX4出土遺物実測図1



Fig.56 SX 4 出土遺物実測図2

胴部はタタキとハケで、口縁部と胴部を境に器面調整が連続しない。420・421は口縁部が強く外反し端部を面取る。鉢(433)は大型品で口縁端部が小さく外反する。底部は僅かに平坦面を残し丸底気味となる。小型品(434)は平底の底部から体部が内湾して立ち上がるもので厚手の作りとなる。同じく小型品(435)も平底で体部は直線的に開く。439は手捏土器であるが、小片のため全体の形状は明らかではない。扁平な粘土板の上端を張り合わせることによって作り出し、内部は中空で先端部が窄まった袋状の形態を呈する。先端部には径2mmの小孔を穿つ。外面はナデ調整で、指頭圧痕が顕著に残る。

SX4は弥生時代終末期に位置付けられる。

SX5(Fig.57)

区の東部C-9グリッド周辺に位置し、先のSX4からは北東へ約35m離れて位置する。遺構上面の標高4.7mレベルには古墳時代初頭の遺物を伴う土器集中16と焼土49が広がっており、SX5床面の検出レベルは標高4.3m前後にあたる。やはり外側に移るに従い埋土が層堆積土と徐々に混じり明瞭な境界をなさないことから壁の立上りを検出できていないが、集石の分布範囲や東西バンク(図C-C)で確認した埋土の堆積状況、及び同様の土器様相を示した直上面から周辺部の土器集中群に対し標高が40cm程低くなっていることから、SX4に類似した径5m前後の円形の平面形態を呈し30～40cm前後の深さをもつ遺構であった可能性が高い。埋土は層：炭化物を少量含む灰色シルト、層：炭化物を多量に含む灰色シルトからなる。

床面中央には焼土と炭化物の溜まりが認められ、又炭化物溜まりの脇からは炭化材が出土する。周辺ではこの焼土を取り囲むように集石が巡り、およそ7つ前後の小ブロックに分かれる。円礫はSX4と同様の砂岩製の河原石からなり、全体で730個ほどの礫が出土している。各ブロックは不整形で、礫の形態も様々である。なお、SX5床面より出土した炭化材は、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いた樹種同定により、2種の広葉樹材が認められこのうち1種類がムクノキとの同定結果を得ている。

出土遺物は壺・甕・鉢・手捏土器である。土器は口縁部点数にして壺1点、甕30数点、鉢4点、手捏土器1点、底部点数は21点を数える。甕の口縁部は、頸部まで残存する口縁部資料のうち、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものが8点、又、口縁部叩き出し成形によるものを1点認めている。又、底部は平底1点、尖底気味の小さな平底11点、尖底4点、丸底3点、尖底気味の底部先端が小さく凹状となるものが2点である。

出土状況をみると、甕は接合後ほぼ完形近く復原されるものが多いが、先のSX4と同様にその殆どが破片の状態で出土し、3～6箇所程の複数地点に散らばる破片が接合される結果となった。破片が散在して出土した遺物は壺(440)甕(441・444・446～449・451)で、一方、1地点から完形に近い形状を保って出土したものは甕(442・443)である。又、鉢(453～455)・手捏土器(456)も完形での出土であった。この内、甕(443)は完形の形状を保ち中に棒状の礫が半ば埋め込まれた状態で、北西部床面より出土している。又、同じく完形に近い形状で出土した甕(442)は焼土を挟んで443に相対するように床面南東部から出土している。

図示したものは壺(440・441)、甕(442～451)、鉢(452～455)、手捏土器(456)である。この内、

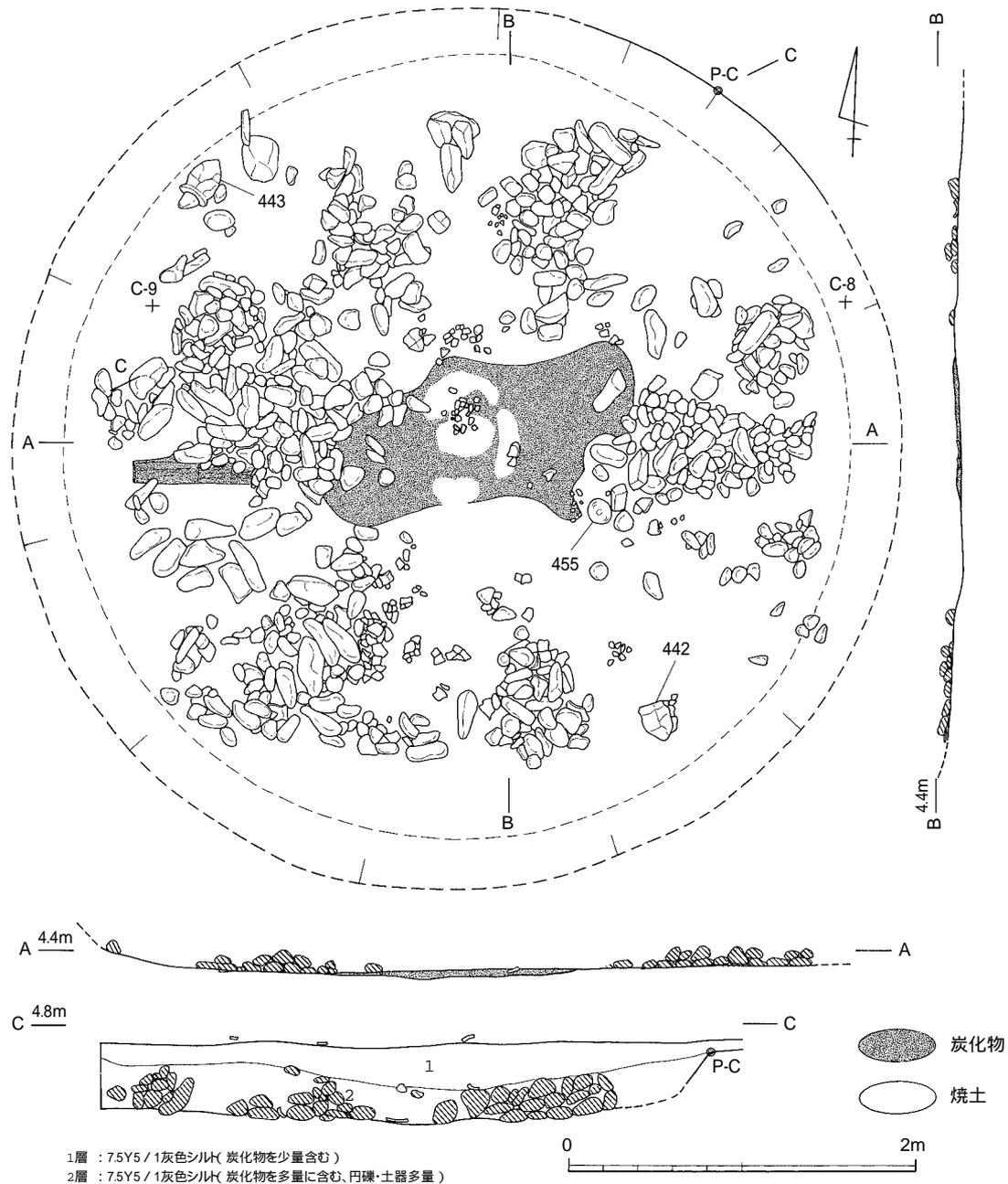


Fig.57 SX5平面・セクション・エレベーション図・集石及び遺物出土状況図

層埋土中・床面・集石間から出土したものは440～449・451～456で、450・454が 層出土である。複合口縁壺(440)は外反の弱い口頸部から口縁部が直立する。球形を呈する胴部は口縁部径に対して胴部径が小さく、外面にはナデを施すもののタタキ目が顕著に残る。441は口縁部を欠くが、胴部は球形に張り底部はほぼ尖底に近いが僅かに小さな平底を残す。外面は肩部・底部脇を中心に八ヶ調整を施すが、胴部一帯にタタキ目・指頭圧痕を顕著に残す。甕は胴部上位が張り卵倒形を呈する445、中位が張る446・447、長胴形を呈する444等がある。甕(442・443)は頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残す。底部は殆どが尖底に近い小型化した平底で占められるが、450は小さな平底の先

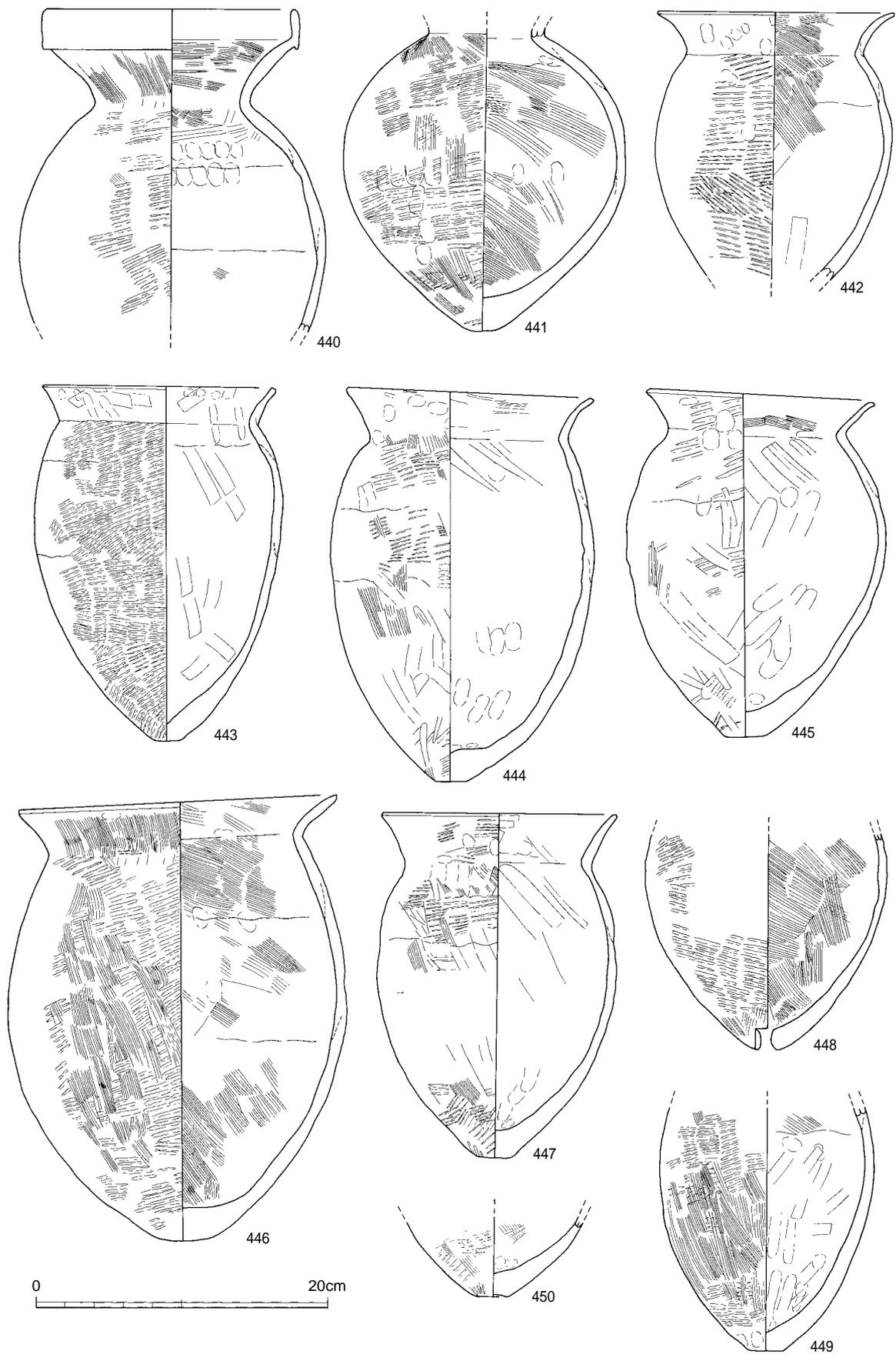


Fig.58 SX5出土遺物実測図1

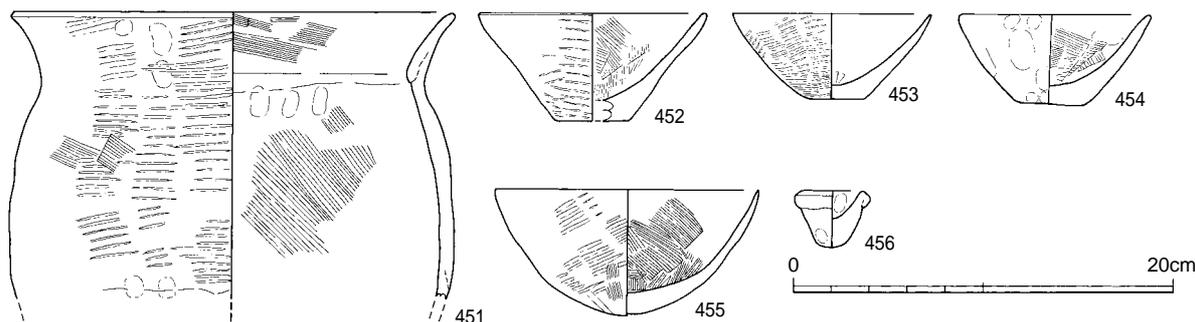


Fig.59 SX5出土遺物実測図2

端に強い指頭押圧を加え凹状を呈する。鉢は椀状を呈する(455)と平底から口縁部に向かい直線的に開く(452・453・454)がある。455は丸底風の底部先端を強く指頭押圧し凹状とする。456は椀状を呈する手捏土器で、口縁部端部を折り返し肥厚させる。

SX5は土器集中16出土遺物との関連からみて古墳時代初頭に位置付けられる。

土器集中

弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器集中は 層から 層最下位にかけて分布している。各集中は同一レベル上に分布する一群の土器集中が一定の方向性をもってさらに大きなまとまりを構成することから、ここでは、[層-1群]SX4の位置する 区南西端から北東方向へ向かって帯状に分布し 区中央を斜めに横切る一群で標高4.7~4.9m前後に分布するもの(土器集中10~13)、[層-2群] 区北西端に分布する一群で標高4.5~4.6m前後に分布するもの(土器集中14)、[層-3群] 区南寄りに位置し南西から北東に向かい帯状に分布する一群で標高4.8~4.9m前後に分布するもの(土器集中15)、[層-4群]調査区東部に位置しSX5周辺に分布する一群で標高4.6~4.9m前後に分布するもの(土器集中16~18)に区分し、以下述べることとする。なお、このうち2・3群においては同方向性をもつ土器廃棄が古墳時代前期まで断絶することなく継続して行われる。又、1~3群はともに南西から北東方向への一定の軸方向をもっており、当時の地形環境を一定反映しているものと推測される。

(a) 層-1群

土器集中10(Fig.60・61)

区南西部H-16・17・I-16グリッド周辺に分布する土器集中で、東西9m南北7mの範囲に複数の焼土と土器が分布する。土器の分布は、北側ににおいて標高4.65~4.70mのレベルにほぼ水平分布する北ブロックと、南側の10cm程低くなった落込み部分に位置し焼土66に伴う南ブロックという2つのまとまりがみられる。

この北ブロック土器群の北東側には土器集中11が近接し、東西方向に広がりを見せている。両者の間には10cm程の標高差があるものの、土器片の接合関係が1点確認されており、両者の廃棄が同時期であったかあるいは非常に近い時期の一連の土器廃棄であった可能性が高い。一方、南プロッ

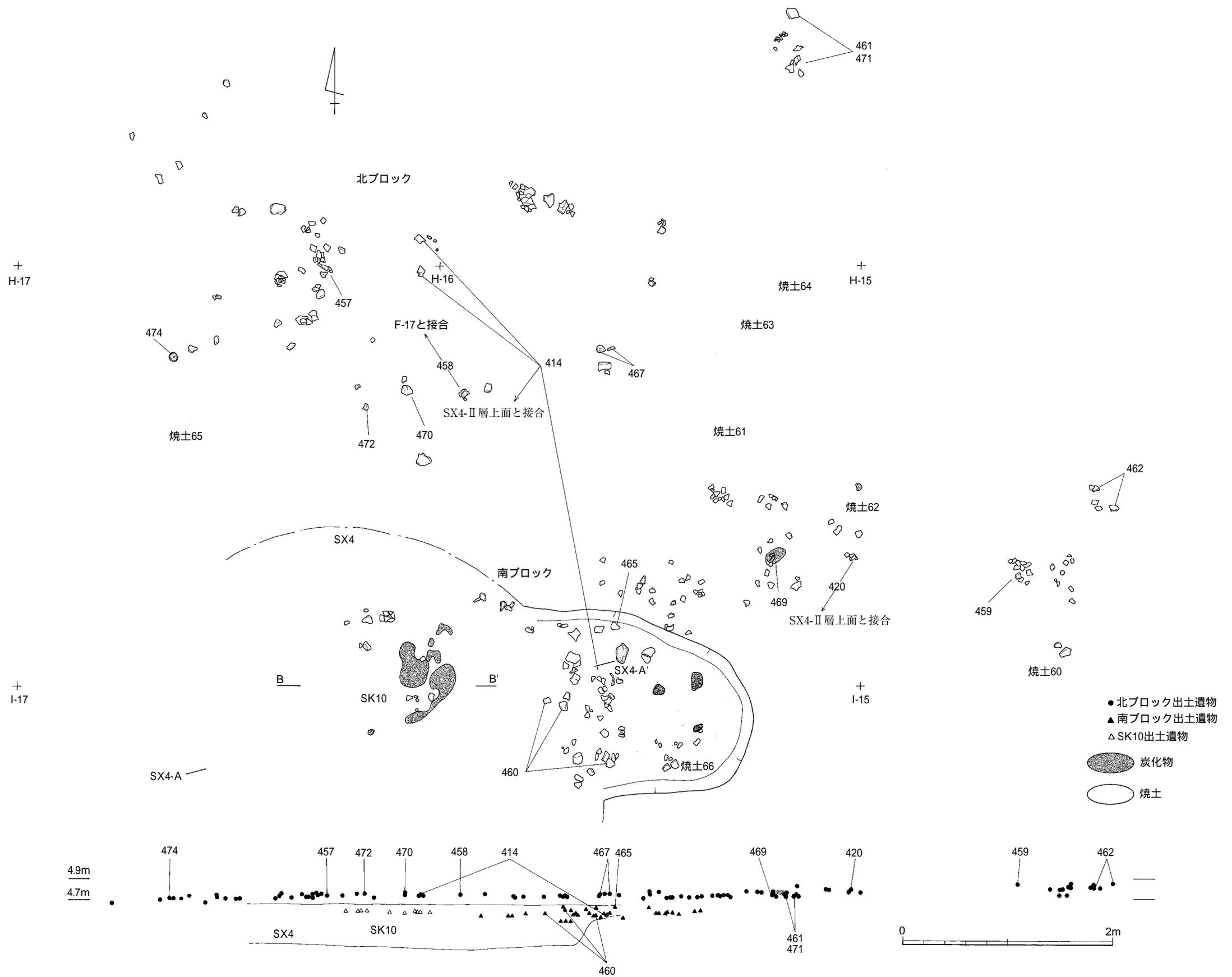


Fig.60 土器集中10遺物出土状況図

クの西側に接してSX4とその上面のSK10が存在しており、SK10直下にSX4- 層埋土にあたる灰色砂層が堆積するが、南ブロック土器群はSX4- 層埋土の上面に向かって分布高度を下げつつ連続的に広がり、さらにはSX4- 層埋土中へと連続して徐々に潜り込む形態を示していく。

焼土は南ブロック内に認める焼土66と、北ブロック内に認める複数の小規模な焼土(焼土62・63・64・65)を確認している。焼土66は平面形態が不整楕円形を呈し、120×90cmの範囲に明橙色の強い焼土が広がるもので、焼土上面には焼土ブロックと炭化物を多量に含む深さ5cm前後の浅い掘り込みを伴う。掘り込みの上層には焼け崩れた小骨片を含む黄白色の灰が薄く堆積しており、ここよりサンプル採取した5cm大の小骨片は骨片分析により、哺乳綱のものであるとの同定結果を得ている。なお、北ブロック内に位置する焼土62・63・64・65は標高4.77mでの検出で幾分高まっており、本土器集中に伴わない可能性がある。

なお、先に触れた南ブロック土器の分布状況とSX4堆積状況を照合させると、焼土66と南ブロック土器群の廃棄時期はSX4が 層によって半ば埋没し始めた段階のものとして捉えている。又、以上の点を考え合わせると、土器集中10はSX4が砂層の自然堆積によって埋没し始めた段階で再度の土器廃棄が行われたものであり、先のSX4への土器廃棄以降、比較的短期間内に継続して行われた一連の廃棄行為として捉えることができる。

出土遺物は壺・甕・鉢・手捏土器・叩石である。土器は口縁部点数にして壺4点、甕61点、鉢1点、手捏土器1点、底部点数は壺又は甕19点、鉢1点、ミニチュア土器1点、高杯脚部1点を数える。甕の口縁部は、頸部まで残存する口縁部資料のうち、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものを3点、又、口縁部叩き出し成形によるものを3点認めている。又、底部は平底3点、尖底気味の小さな平底12点、尖底1点、丸底2点、尖底気味の底部先端が小さく凹状となるものが2点である。

図示したものは壺(457・458)、甕(459～461)、鉢(462・470)、手捏土器(472)、壺又は甕(459)、底部(463～469・471・473)叩石(474)である。複合口縁部壺(457)は直立する口縁部外面に櫛描波状文を施す。広口壺458は口縁部が緩やかに外反し、口縁端部を面取る。甕は口縁部が「く」字状に外反する(460)、緩やかに外反する(461)を認める。底部は尖底に近い小型化した平底でほぼ占められるが、464・463・471は外底中央が凹状を呈する。手捏土器(472)は椀状を呈する。砂岩製叩石(474)は扁平円形の河原石を利用するもので、片面の中央部に使用痕を認める。

土器集中10は弥生時代終末期から古墳時代初頭に位置付けられる。

土器集中11(Fig.62)

区中央部G-15グリッド周辺に分布する土器集中で、東西4.5m南北5.8mの範囲に焼土と土器が弧を描く様に散在する。土器は標高4.80～4.90mのレベルに分布しており10cm前後の高低幅をもって出土している。土器集中11の西側では、標高4.8m前後のレベルで土器集中10が連続して広がっており、土器も連続した広がりをみせていることから、両者の廃棄が同時であったかあるいは非常に近い時期の一連の土器廃棄である可能性が高いが、両者の出土土器間での接合は確認されていない。

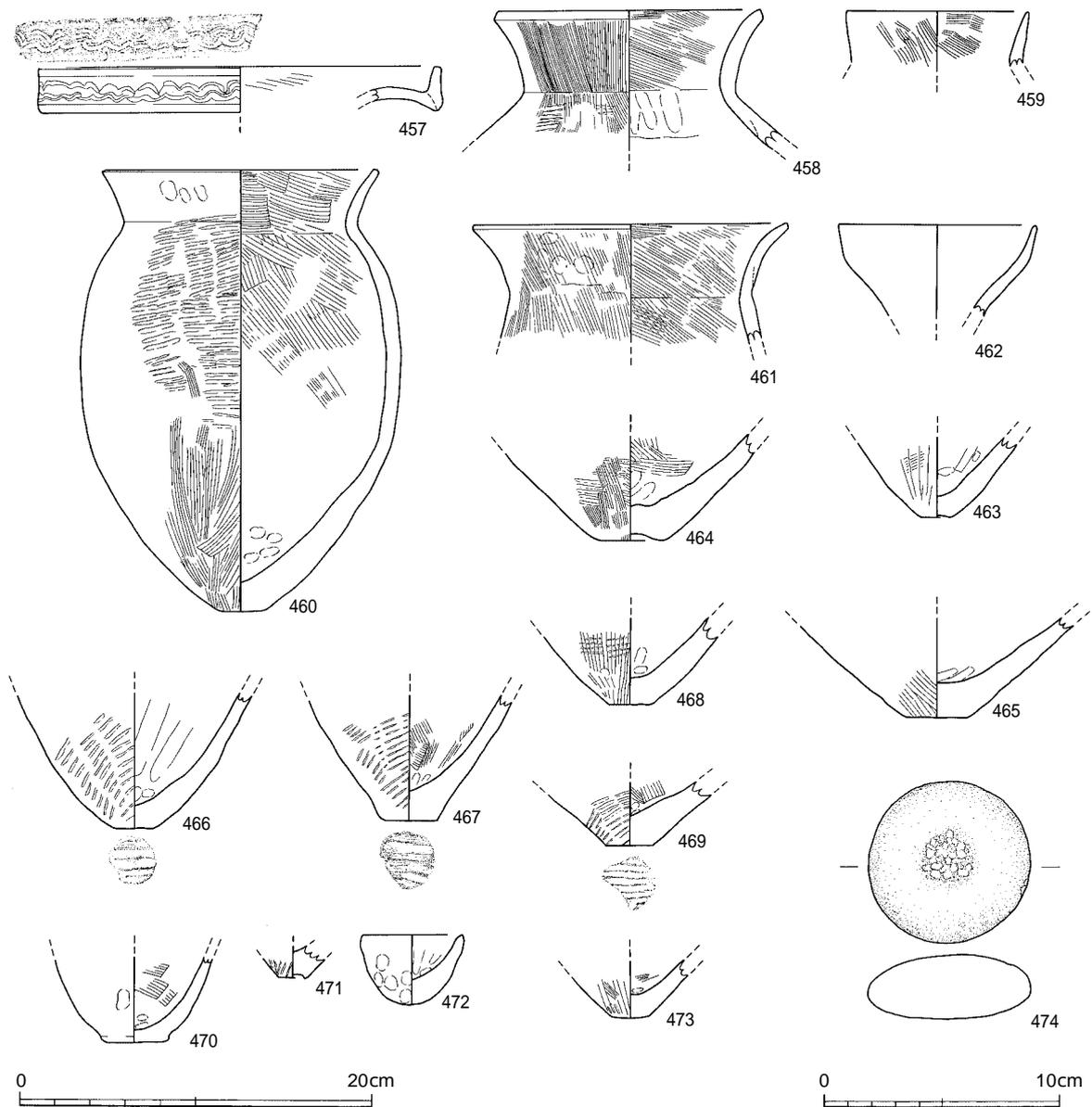


Fig.61 土器集中10出土遺物実測図

出土遺物は壺・甕・鉢・高杯である。土器は口縁部点数にして甕8点・高杯1点、底部点数は10点を数える。甕の口縁部形態は、頸部まで残存する口縁部資料のうち、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものを1点、又、口縁部叩き出し成形によるものを1点認めている。底部は平底1点、丸底1点、尖底気味の小さな平底7点、尖底1点である。

図示したものは壺(475)、甕(478)、底部(476・477)である。広口壺(475)は口縁部が大きく外反し端部を面取る。甕(478)は上胴部が強く張り底部は丸底を呈するもので、外面はタタキ後胴部中位まで木理の粗い縦八ヶを重ねる。鉢(477)は平底から体部が直線的に開くものである。

土器集中11は弥生時代終末期から古墳時代初頭に位置付けられる。

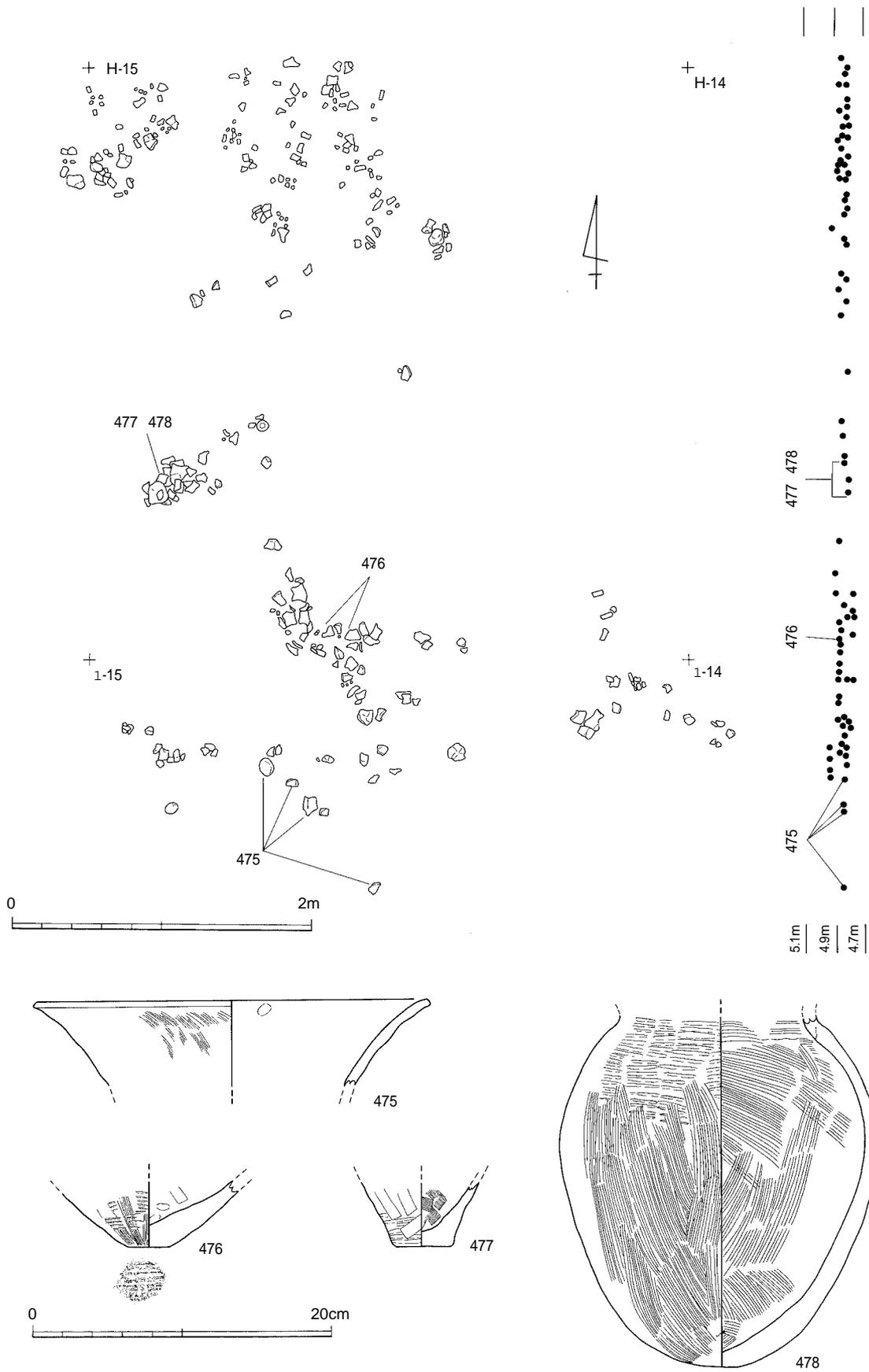


Fig.62 土器集中11遺物出土状況図及び出土遺物実測図

土器集中12(Fig.63・64・65)

区中央部 F -15・14グリッド周辺に位置し、東西6m南北2mの範囲に土器が分布する。土器・焼土の分布は、北側に位置し強い土器のまとまりを形成する A・B・Cブロック、その周辺にやや散在して広がる Dブロックに分けらる。A・B・Cブロックは標高4.82～4.88mの間に、Dブロックは4.68～4.72mの間に分布し、両者の間に約10cm程の高度差がある。又、北側、南側各々に小規模な焼土3箇所と炭化物溜まりの小ブロックを認める。

北側の Bブロック内にある焼土54は、30×40cmの範囲に広がり、上面には多量の土器が廃棄されている。焼土54の北西に1m程離れて、焼土50が存在するが、これは10cm程低いレベルでの検出である。焼土50は40×40cmの規模をもつもので、中央直上に炭化物を含む灰の層が薄く堆積しており、灰層内には小骨片が少量含まれる。又、南方3mの地点には径30cm程の小規模な焼土がありやはり上面から多量の土器が出土している。

出土遺物は壺・甕・鉢・高杯である。土器は口縁部点数にして壺4点、甕67数点、鉢13点、高杯2点、底部点数は壺又は甕34点、鉢2点、高杯の脚部1点を数える。甕の口縁部は、頸部まで残存する口縁部資料のうち、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものを0点、口縁部叩き出し成形によるものを6点認めている。又、底部は平底3点、尖底気味の小さな平底30点、尖底2点、丸底2点、尖底気味の底部先端が小さく凹状となるものが1点、底部脇に押圧を加えた小さな平底1点である。

図示したものは壺(479～482)、甕(483～492)、鉢(500～504)、高杯(505・506)、白玉(507)、である。複合口縁壺(479)は球形の胴部からカーブを描いて外反する口頸部から口縁部が短く直立する。頸部外面には扁平な突帯を貼付し刻目を施す。器面調整はハケ・ナデ調整である。広口壺(480)は強く外反する口縁部の端部を肥厚させ、端部は横ハケの後ハケ状原体による刻目を施す。広口壺(481)は口縁端部を丸くおさめ、482は面取る。鉢は大型(500)、中型(501・502)、小型(503・504)の各サイズを認める。500は外底が凹状を呈する底部から体部が強く開いて立ち上がる。502は円盤状の厚い底部から体部が内傾気味に立ち上がる。504は椀状で丸底を呈する。高杯(505)は裾部が長く広がるもの、506は裾部が内面に稜をなして開くものである。白玉(507)は灰緑色に発色するもので円筒状を呈し全長2.5mm全幅0.4mmを測り径1mmの貫通孔を穿つ。外面には縦方向の擦痕を認める。507は上層からの混入の可能性を含む。

土器集中12は弥生終末期から古墳時代初頭に位置付けられる。

土器集中13(Fig.66・67)

調査区中央部、E -13・14グリッドに位置する。土器は東西4.6m南北2mの範囲に帯状に広がっており、標高4.8m前後のレベルで5～10cm程の高低差をみせながら、ほぼ水平に分布している。焼土・炭化物は認められなかった。

出土遺物は壺・甕・鉢・叩石である。土器は口縁部点数にして壺1点、甕18点、鉢4点、底部点数は、壺又は甕15点、鉢3点を数える。甕の口縁部は、頸部まで残存する口縁部資料のうち、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものが0点、又、口縁部叩き出し成形によるものを4点認めている。又、底部は平底0点、尖底気味の小さな平底10点、尖底5点、丸底1点、底部脇を摘

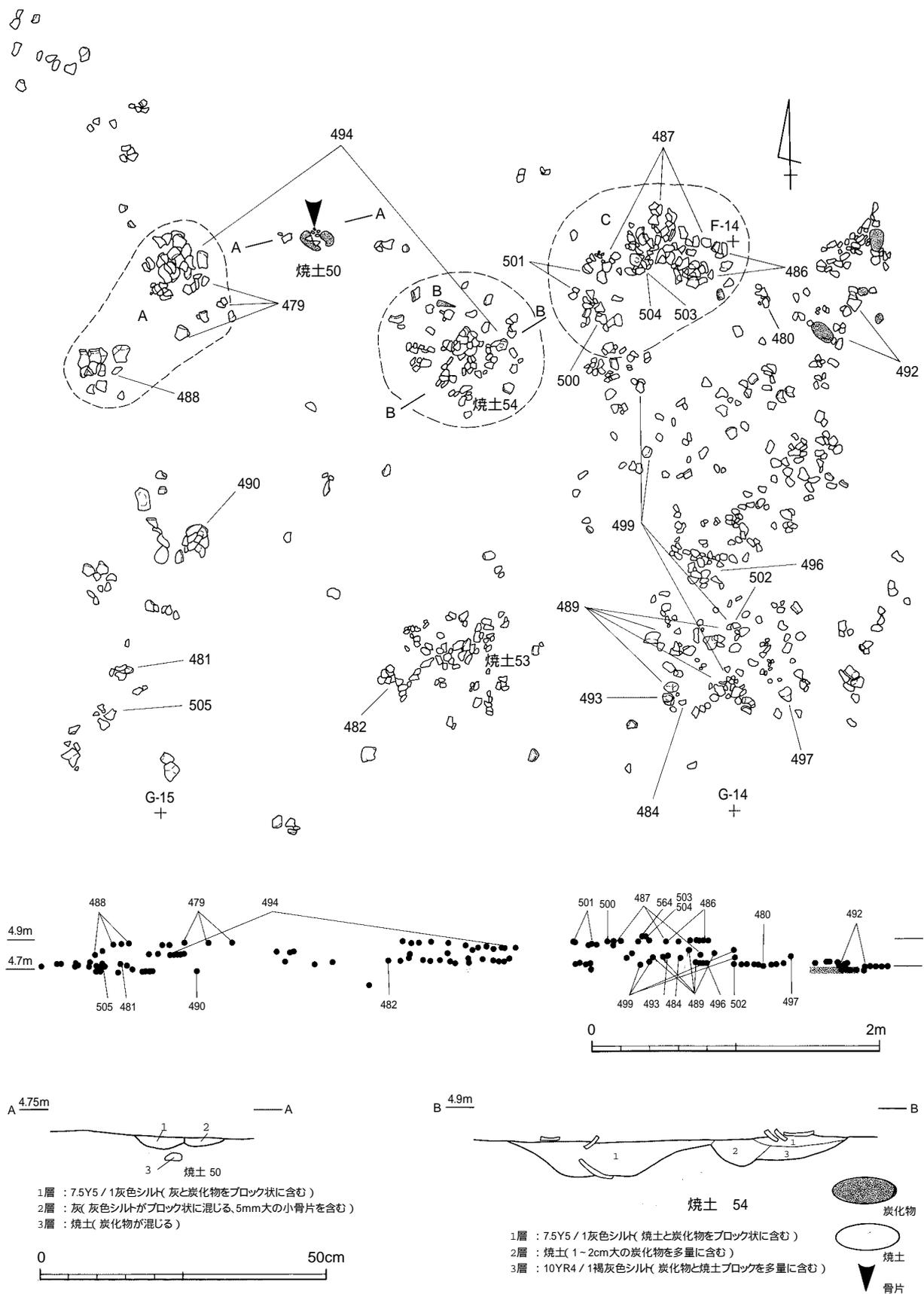


Fig.63 土器集中12遺物出土状況図・焼土50・54セクション図

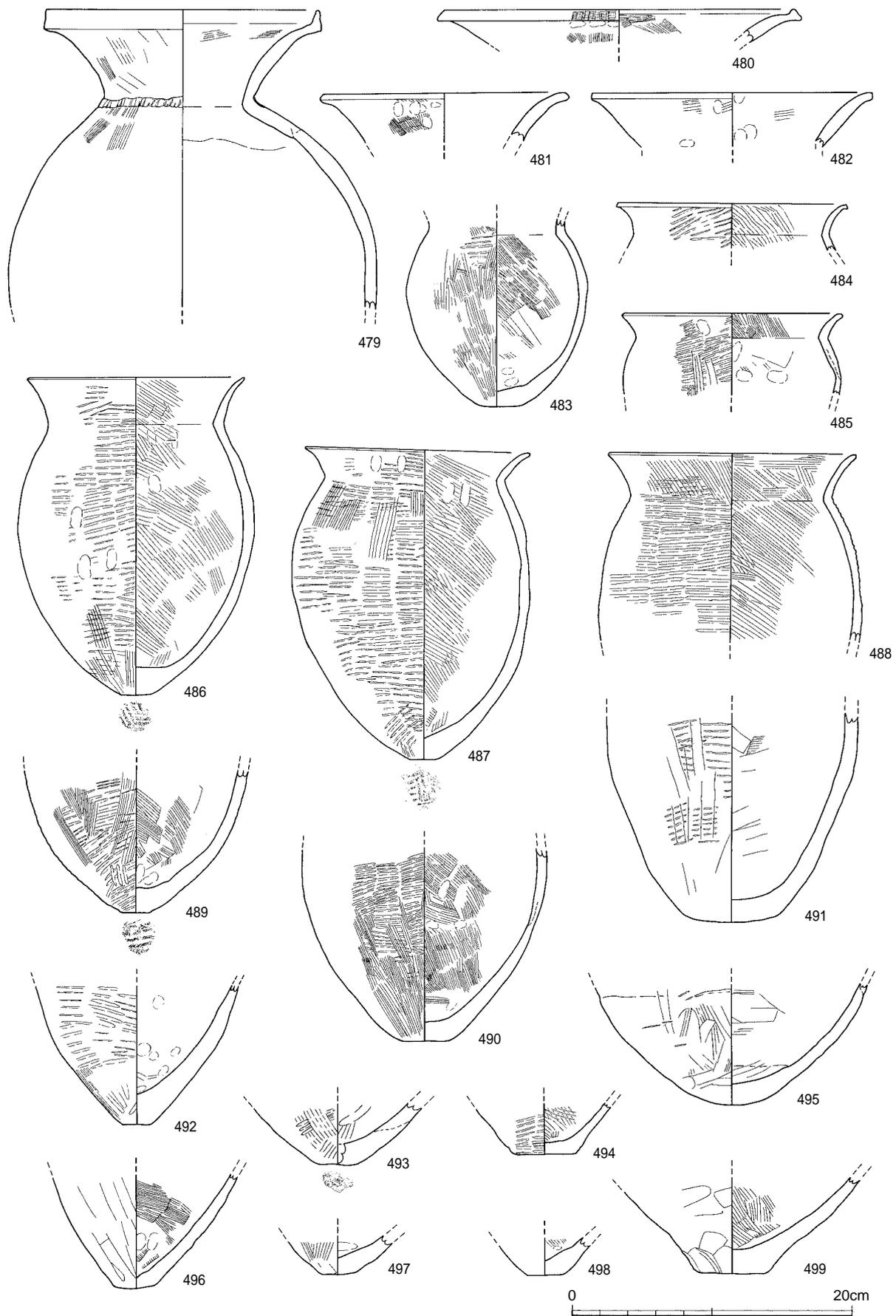


Fig.64 土器集中12出土遺物実測図1

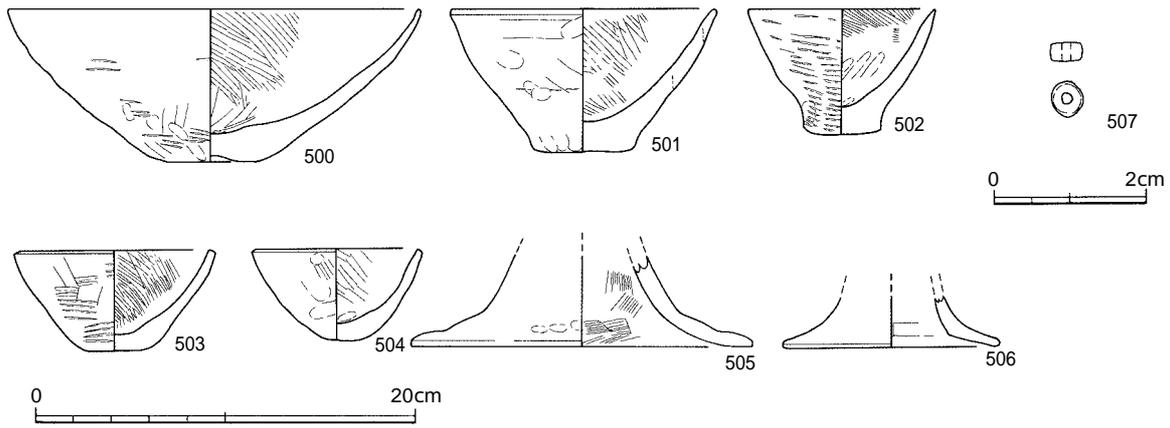


Fig.65 土器集中12出土遺物実測図2

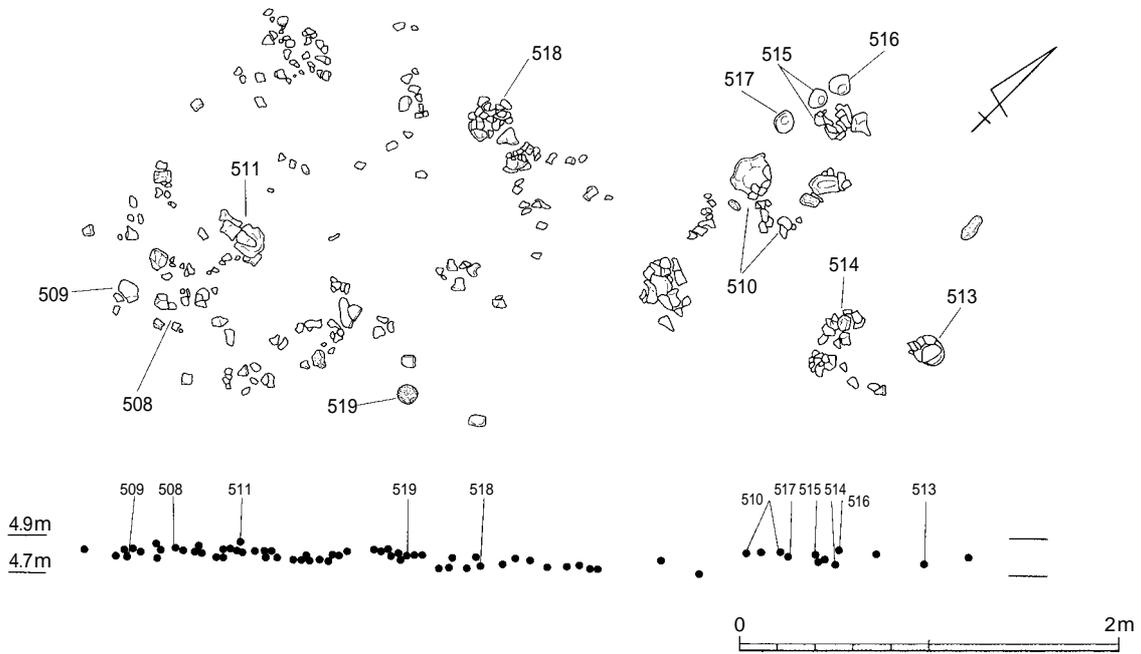


Fig.66 土器集中13遺物出土状況図

み出した小さな平底が2点である。

図示したものは壺(508・509)、甕(511～513)、鉢(515～518)、底部(514)、叩石(519)である。508・509は広口壺で、508は大きく外反する口縁部の端部を面取りヘラ状原体による刻目を施す。甕(512)は直立する口縁部をなし、頸部外面に接合痕を明瞭に残す。鉢(515～518)は何れも口径11～12cm前後の小型品で、515は尖底。516は平底の底部から体部が強く開く。外面は何れもナデ調整が主体をなすが、タタキ目が僅かに残り指頭圧痕が顕著である。砂岩製叩石(519)は扁平な楕円形の河原石を利用し、両主面と全縁部に使用痕を認める。

土器集中13は弥生時代終末期から古墳時代初頭に位置付けられる。

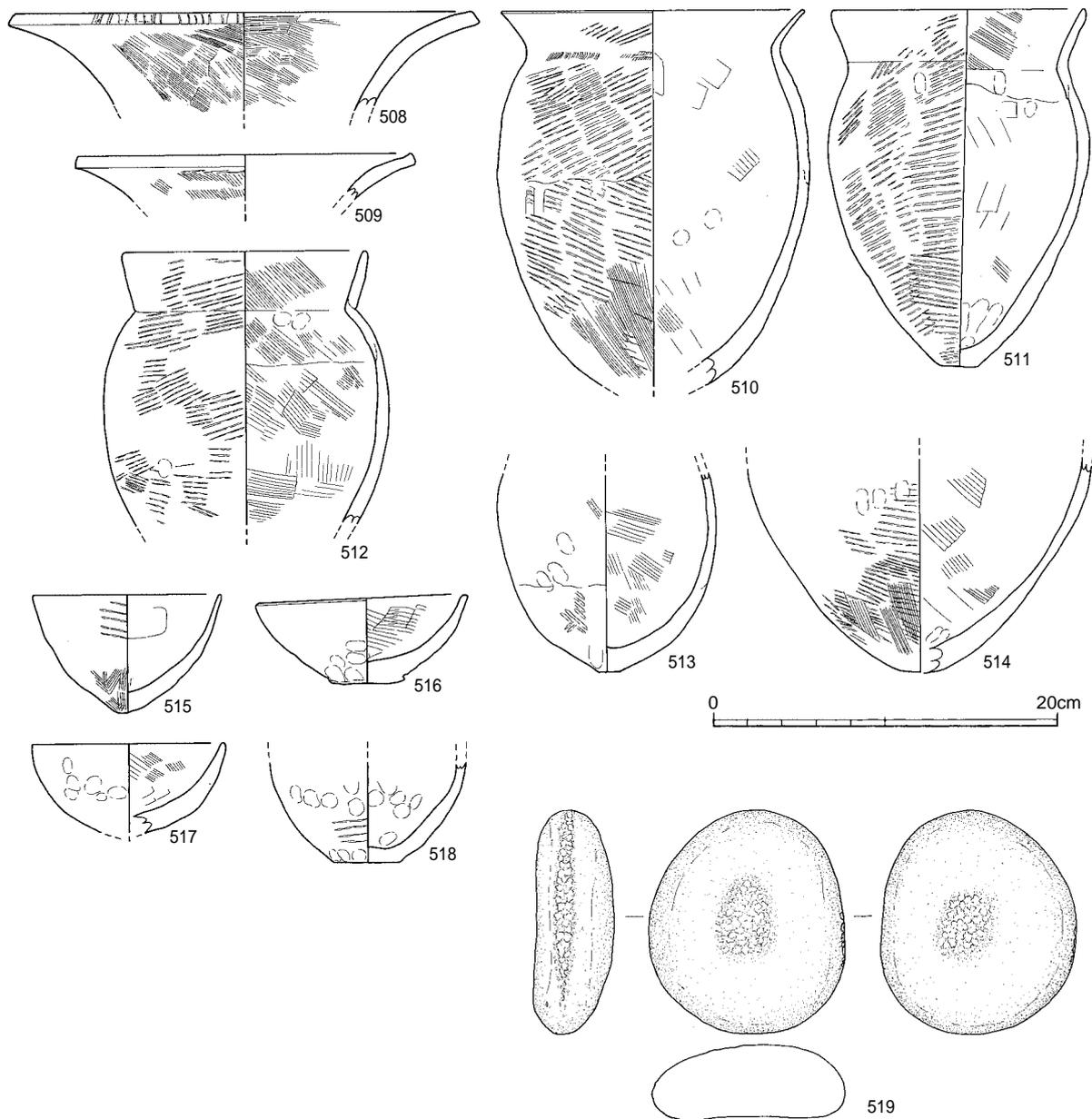


Fig.67 土器集中13出土遺物実測図

(b) 層-2群

土器集中14(Fig.68)

区北東部 E-16グリッドに位置する土器集中で、東西1m南北2mの範囲に標高4.5～4.6mにかけてまとめて出土している。土器集中14の西側、標高4.6mの地点には古墳時代の土器集中であるSF2が近接して広がっているが、両者間での土器の接合は確認されていない。

出土遺物は壺・甕・鉢・高杯・凹み石である。土器は口縁部点数にして、甕6点、鉢1点、底部点数は、壺又は甕6点、鉢1点を数える。甕の口縁部は、頸部まで残存する口縁部資料のうち、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものが1点、口縁部叩き出し成形によるものは0点である。又、底部は平底2点、尖底気味の小さな平底4点である。

出土状況を見ると、土器はいずれも小破片の状態出土しており、原型を留めず破片が折り重なる様に密集して出土している。この内図示したものは甕(520～523)である。520は長胴形の胴部からやや長めの口縁部が緩やかに外反する。頸部外面には粘土帯接合痕を明瞭に残し、頸部を境に調整痕が明瞭に分かれる。底部は尖底に近い小型化した平底を呈する。521は長胴形の胴部から「く」字状に外反する口縁部をなすもので、頸部外面に粘土帯接合痕を僅かに認めるものの、口縁部から胴部にかけての連続したハケ調整によって消す。底部はほぼ尖底に近い非常に小さな平底となる。底部(522)は丸底風であるが僅かに平坦面を残す。523は胴部中位が強く張るものでほぼ尖底となる。

土器集中14は弥生時代終末期に位置付けられる。

(c) 層-3群

土器集中15(Fig.69～72)

区中央部H-14・15グリッド周辺に分布する土器集中で、東西7.6m南北2.4mの範囲に帯状に分布する。土器は標高4.84～4.94mのレベルで出土しており10cm前後の高低幅をもってほぼ水平分布している。土器の分布は破片の接合関係から、西側に位置し多量の土器片の強い集中からなるAブロック、中央に位置するBブロック、東側に位置し幾つかの土器のまとまりから形成されるCブロック、南端に離れて完形の手捏ね土器1点からなるDブロックの3つの廃棄の単位を確認することができる。Aブロックの北側には径30cmの規模をもつ焼土70が存在するが、焼土上面からの骨片や灰の出土は認められない。

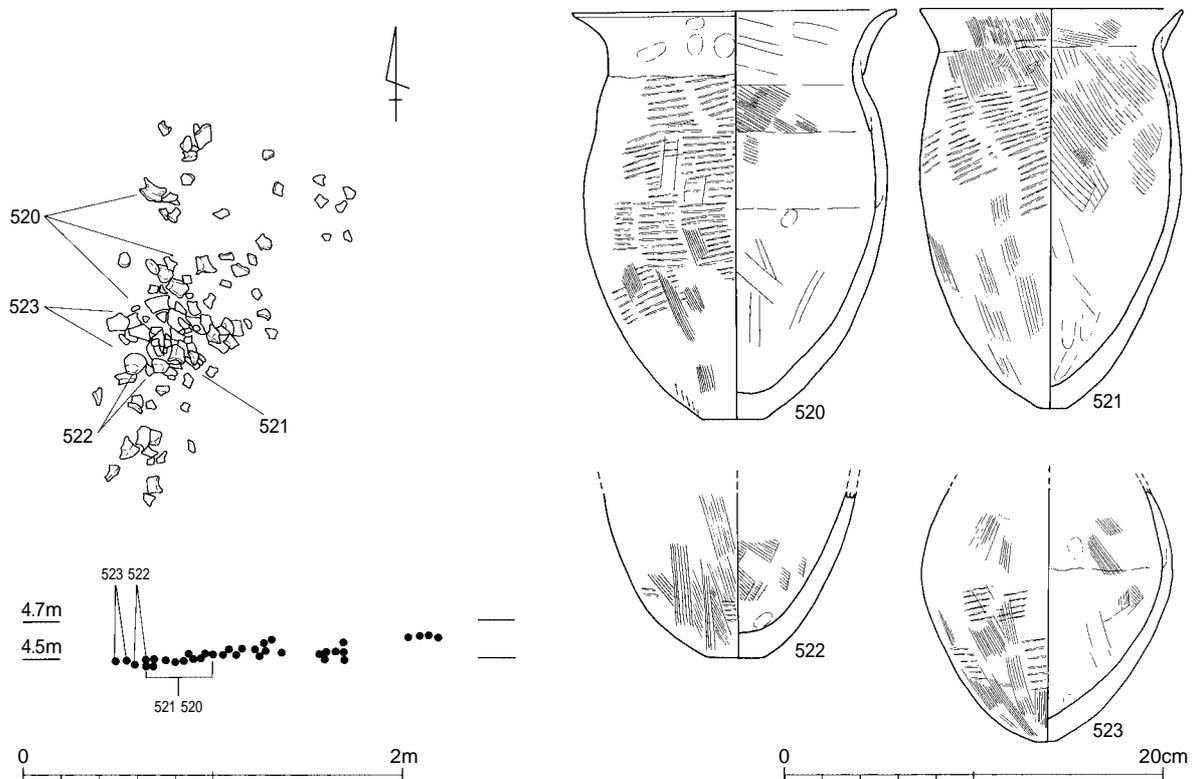


Fig.68 土器集中14遺物出土状況図及び出土遺物実測図

出土遺物は壺・甕・鉢・手捏土器である。土器は口縁部点数にして壺10点、甕13点、鉢5点、手捏土器1点、底部点数は12点を数える。甕の口縁部は、頸部まで残存する口縁部資料のうち、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものを3点、口縁部叩き出し成形によるものを2点認めている。又、底部は平底10点、尖底気味の小さな平底6点、丸底3点、凹状のもの1点、尖底気味の底部先端が小さく凹状となるものが1点である。

出土状況をみると、各ブロック内では多量の土器片が折り重なるように出土しており、又、土器は何れも破片の状態であり完形に近い状態で出土するものはない。これらの土器片は比較的まとまった範囲内で出土したものが接合され接合後完形品になるものが多い所から、廃棄後土器片が流出し移動している様子は考えられず、廃棄時の現状を良好な状態で留めているものと考えられる。図示したもののうち、Aブロック出土の土器は複合口縁壺(524～529)・直口壺(530)・広口壺(531・532)、甕(539・533・535)、鉢(543～547)で、Aブロックでは9個体もの大型の壺がまとまって出土しており、それに甕・鉢が加わり各器種がセットで配置される点が特徴的である。一方、Bブロックにおいては甕(534・538)が、Cブロックにおいては甕(536・537・540～542)が出土し甕のみで構成されている。又、やや離れたDブロックでは完形の手捏土器が単体で出土している。この様に、Aブロックにおいて壺・甕・鉢がセットをなし、B・Cブロックでは甕のみで構成されている点等、廃棄に際する土器選択と意図的な土器配置が認められる。

図示したものは壺(524～532)、甕(533～542)、鉢(534～547)、手捏土器(548)、臼玉(549)である。壺は複合口縁壺(524～529)・広口壺(531・532)・直口壺(530)を認める。各壺とも尖底気味に窄まる小型化した平底から張りの強い球形の胴部に向かう胴部形態、頸部から口縁部にかけての外反度等の基本形態はほぼ共通しており、それに各々の口縁部形態・頸部への施文等のバリエーションが付加される。複合口縁壺には口縁部が内傾するもの(524～526・530)と直立するもの(527・528)がある。524はやや長い口頸部から口縁部が内傾気味に立ち上がる。頸部外面には扁平な突帯を貼付し羽状文を施す。528は短い口頸部をなし、口縁部が直立する。頸部外面には扁平な突帯を貼付し格子目文を施す。525は短く外反する口頸部から、口縁部が強く内傾する。口縁部外面には円形刺突文と櫛描波状文を施す。頸部外面への扁平な突帯には両側からヘラ状原体による指頭を加える。529は直立気味で短い口頸部から口縁部が内傾するもので、焼成は非常に軟質で器面調整も粗雑な感を受ける。広口壺531は上位が球形に強く張る胴部から口縁部が外反し端部を丸くおさめる。底部は小さな平底となる。器面調整はナデ調整を施すが、タタキ目が胴部全面に残る。532も胴部球形を呈する。甕(536・537)は口縁部叩き出し成形による。鉢は口径12～19cm前後の中型のもの(543・544)と口径7cm前後の小型のもの(545・546・547)がある。543は外底が凹状を呈し体部は内湾気味に立ち上がる。外面は部分的にナデ調整を施すがタタキ目が全面に残る。指頭圧痕顕著である。544は丸底、545は張り出し気味の平底で、何れも全面にタタキ目を残す。547は手捏成形で外面に指頭圧痕が顕著に残る。548は手捏土器でナデ調整だが外面にはタタキ目が残る。

土器集中15は弥生時代終末期に位置付けられる。

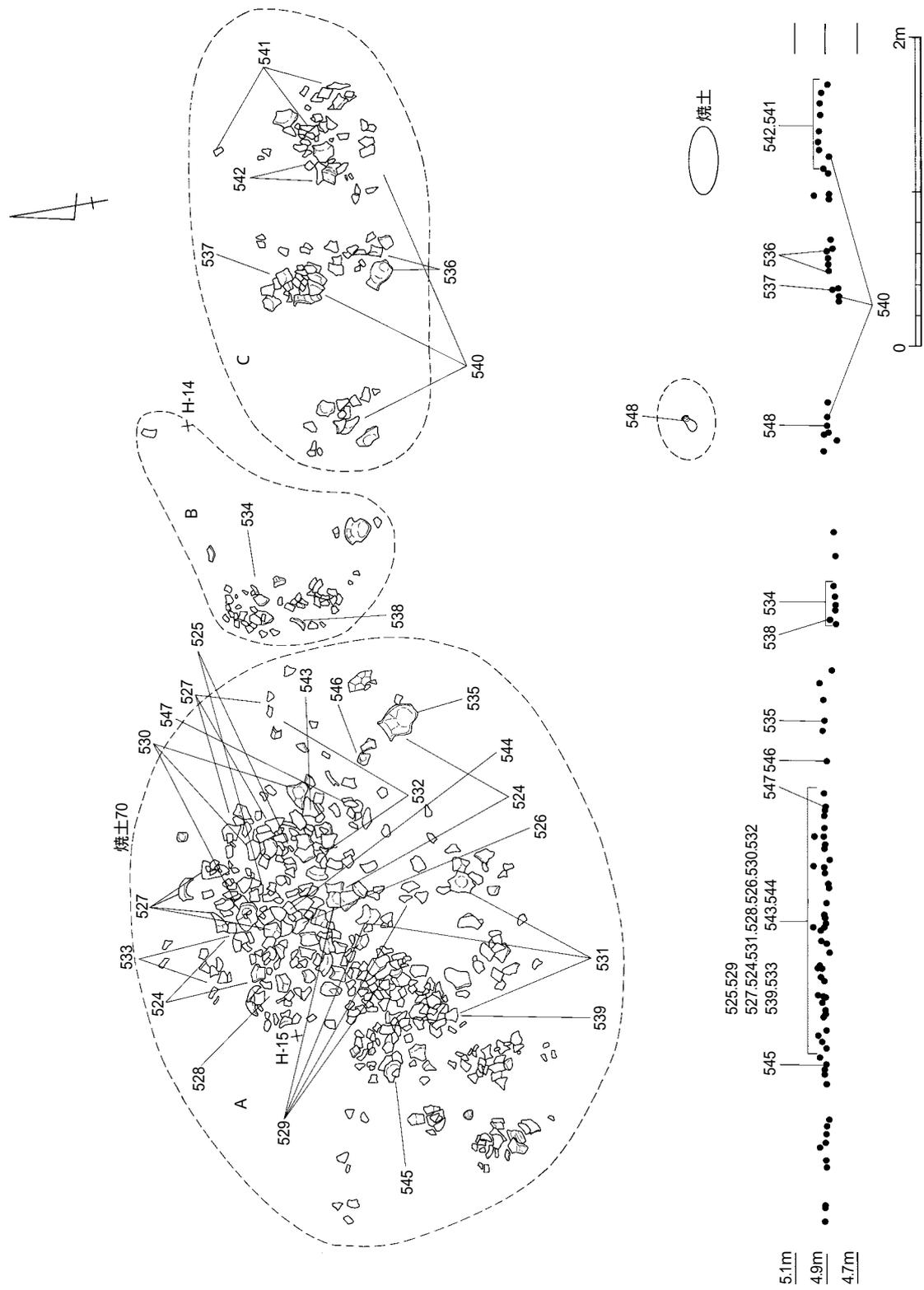


Fig.69 土器集中15遺物出土狀況圖

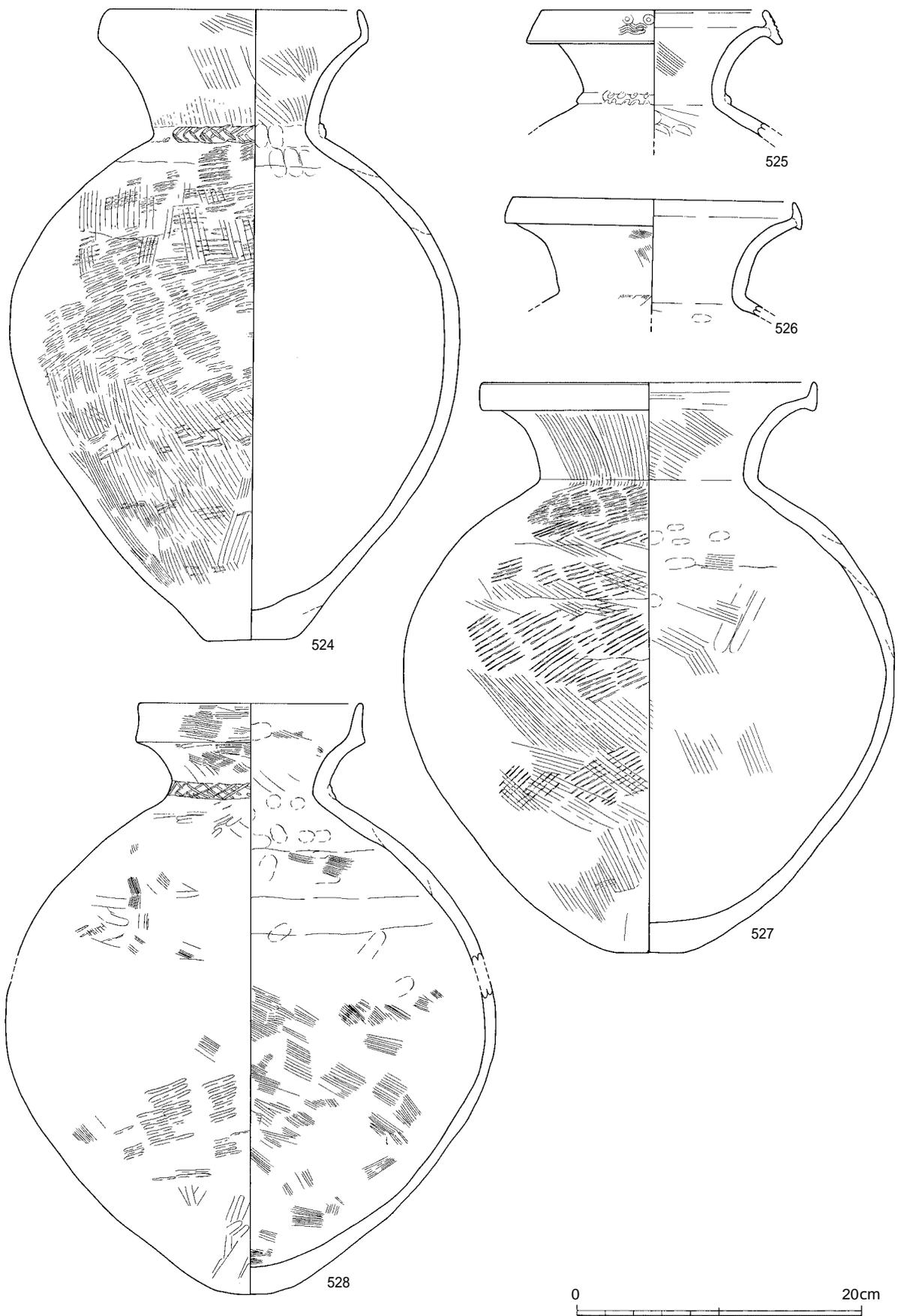


Fig.70 土器集中15出土遺物実測図1

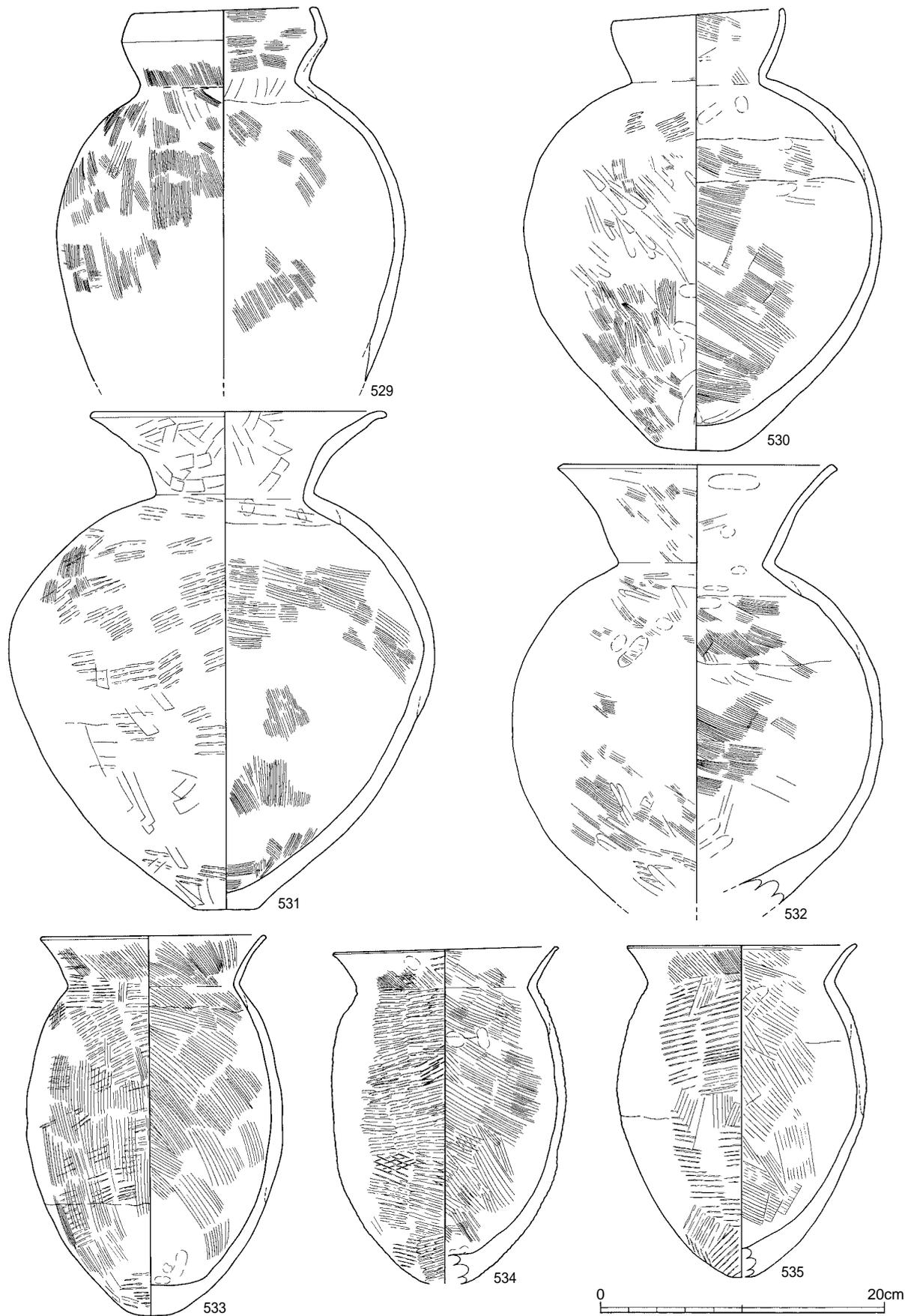


Fig.71 土器集中15出土遺物実測図2

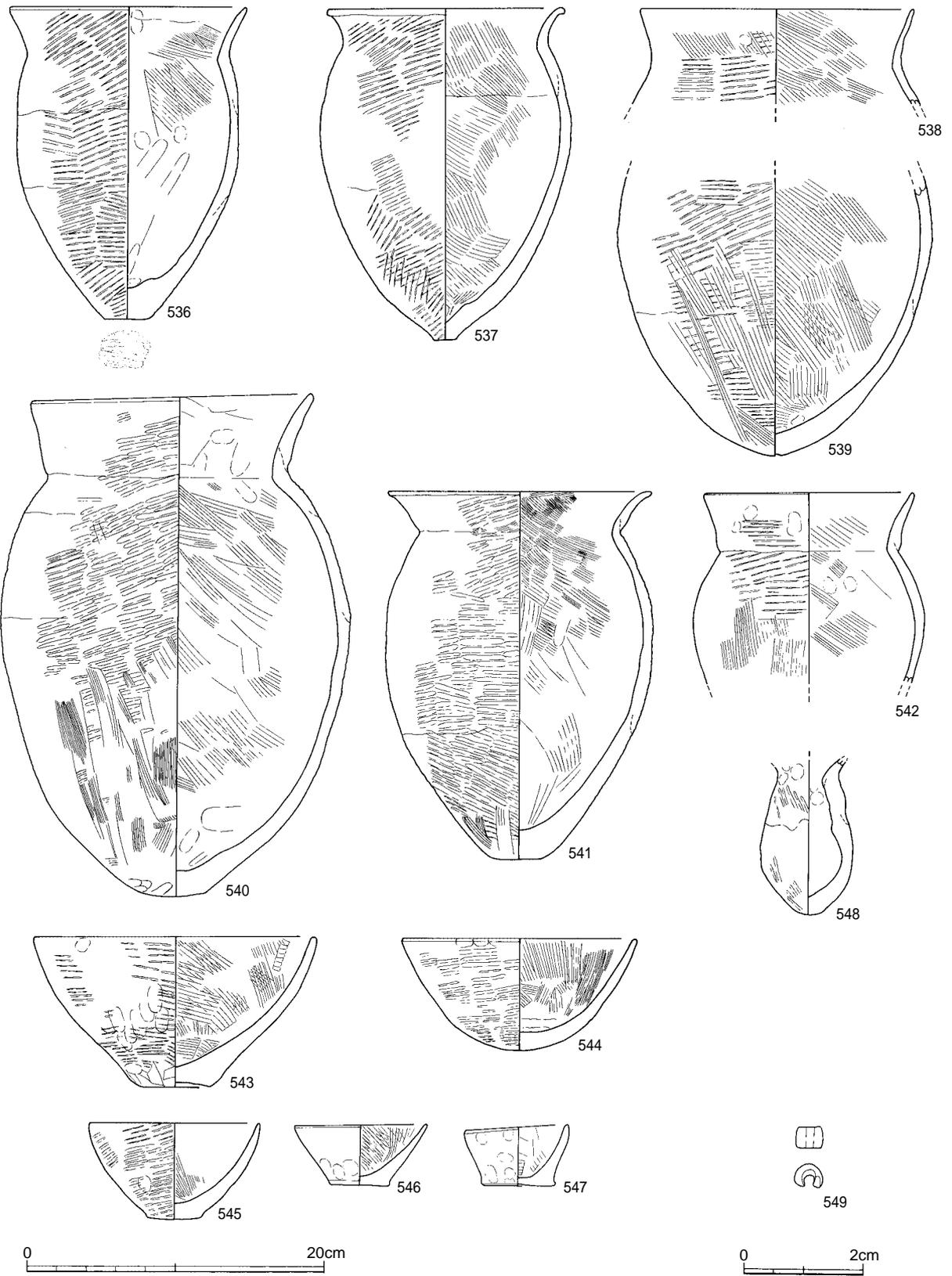


Fig.72 土器集中15出土遺物実測図3

(d) 層-4群

土器集中16(Fig.73・74)

区東部C-9グリッド周辺に分布する土器集中で、直下にはSX5が存在しSX5上面に広がる形態となる。土器の分布をみると、先述のSX5- 層出土の土器群とこれらSX5上面出土の土器群とは連続して北西から南東方向へ向かう4×2mのまとまった分布範囲を形成しており、又、垂直分布においてもSX5の壁際から中央部に向かい標高4.9mから4.7mまで徐々に高度を下げつつ連続していく状況を示している。これらの出土状況から、SX5上面出土の土器群と 層出土土器群は1つのま

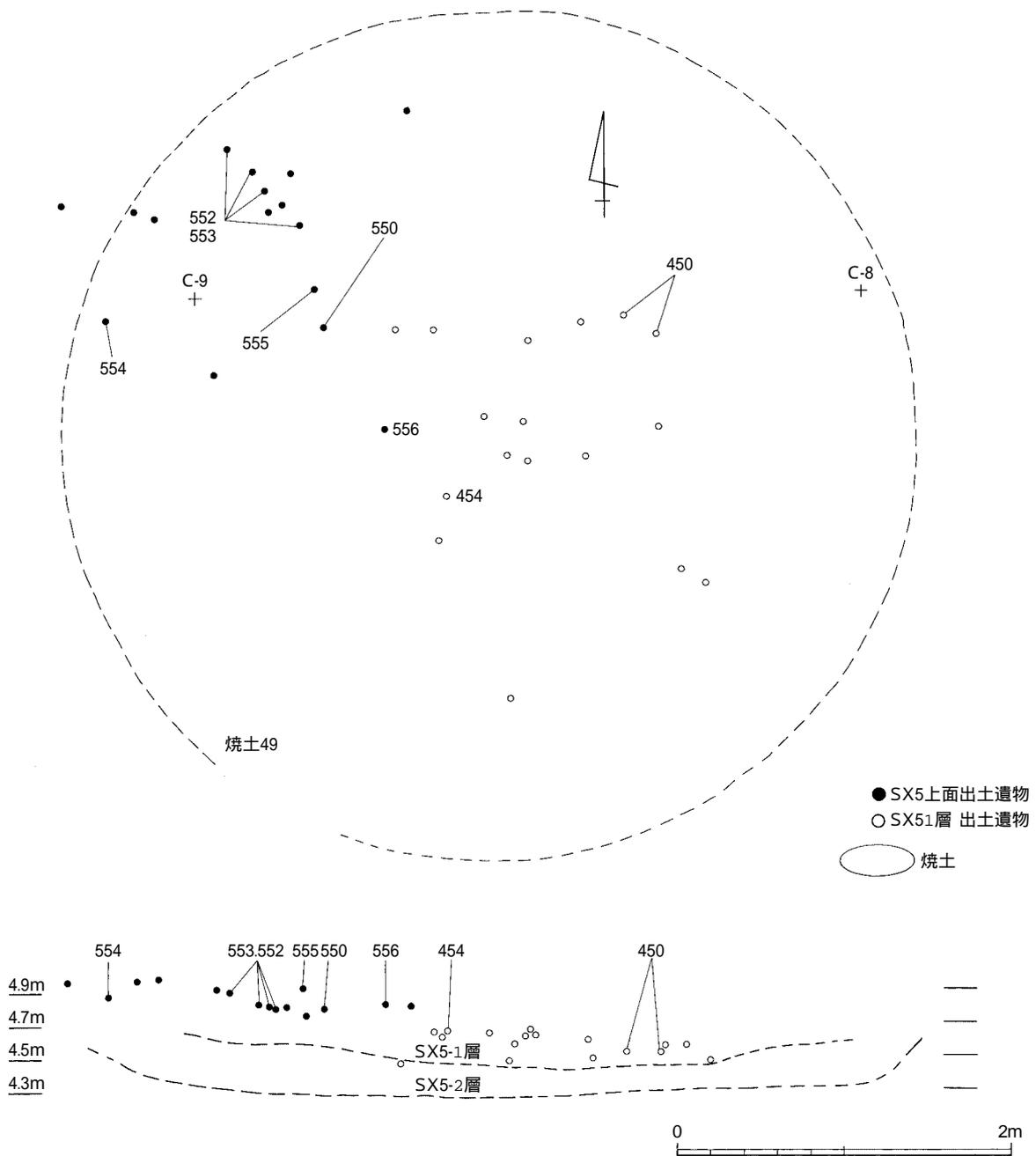


Fig.73 土器集中16遺物出土状況図

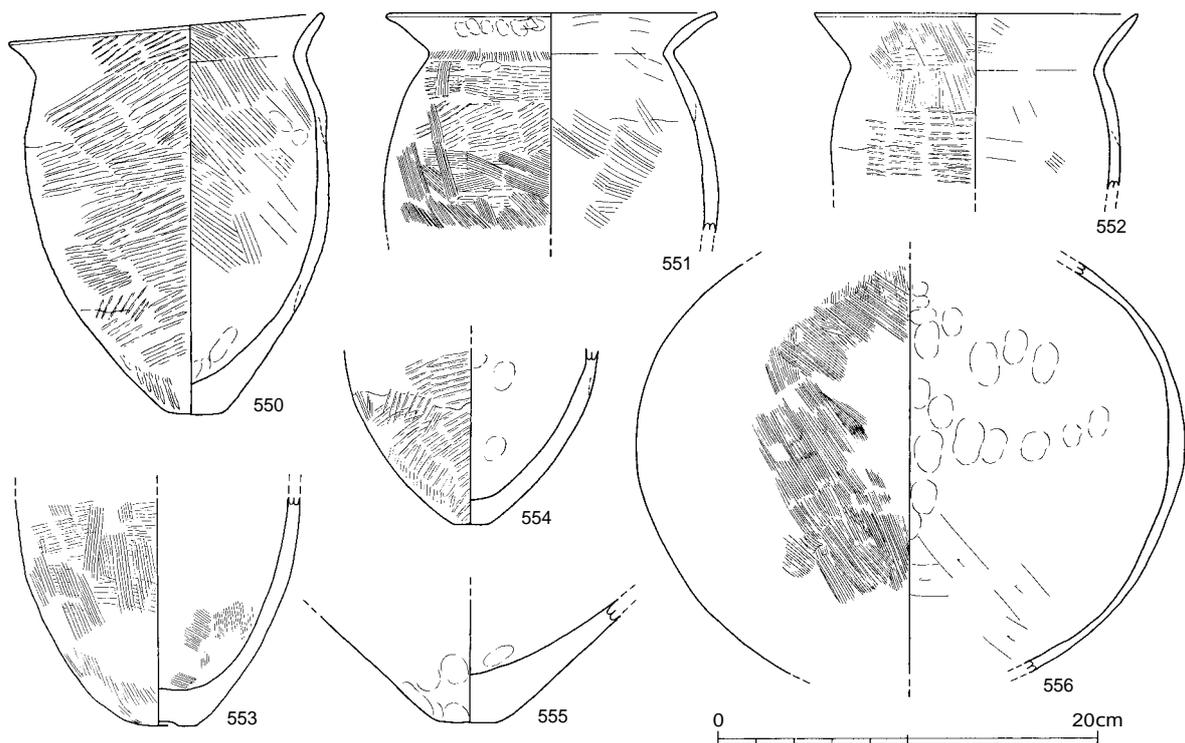


Fig.74 土器集中16出土遺物実測図

とまりをもった土器集中16を形成するものとして捉えられ、SX5床面への土器廃棄とSX5の埋没(人為的埋め戻しの可能性も含む)の直後あるいは比較的短期間内に、後続する二次的な土器廃棄(土器集中16)がなされたものと推察される。なお、この土器集中16とSX5-層埋土中及び床面出土土器との接合関係は認められていない。

出土遺物は甕である。土器は口縁部点数にして甕3点、底部点数は4点を数える。甕の口縁部形態は全て「く」字状に外反するタイプで占められ、このうち頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものが0点、又、口縁部叩き出し成形によるものを1点認めている。又、底部は尖底気味の小さな平底1点、尖底1点、丸底1点、尖底気味の底部先端が小さく凹状となるものが1点である。このうち550～556はSX5上面よりの出土であり、又、先にSX5-層出土として掲載した454・450も連続的な出土状況からみて本土器集中に伴うものと捉えられる。

図示したものは壺(555・449)、甕(452・551・554・552・553)である。550は口縁部叩き出し成形によるもの。外面にはタタキ目が全面に残り、底部脇にはタタキを放射状に重ね尖底風に成形する。甕底部(553)は丸底風の底部中央が小さく凹状となる。壺底部(555)は小さな平底を呈し、底部脇に指頭圧痕を認める。556は搬入品で東阿波型土器の胴部片にあたる。胎土中には結晶片岩の礫を含み、胴部は扁球形を呈する。胴部外面は木理の非常に細かいハケ目、内面はヘラケズリを施し指頭圧痕が顕著である。

土器集中16は556の出土から古墳時代初頭に位置付けられる。

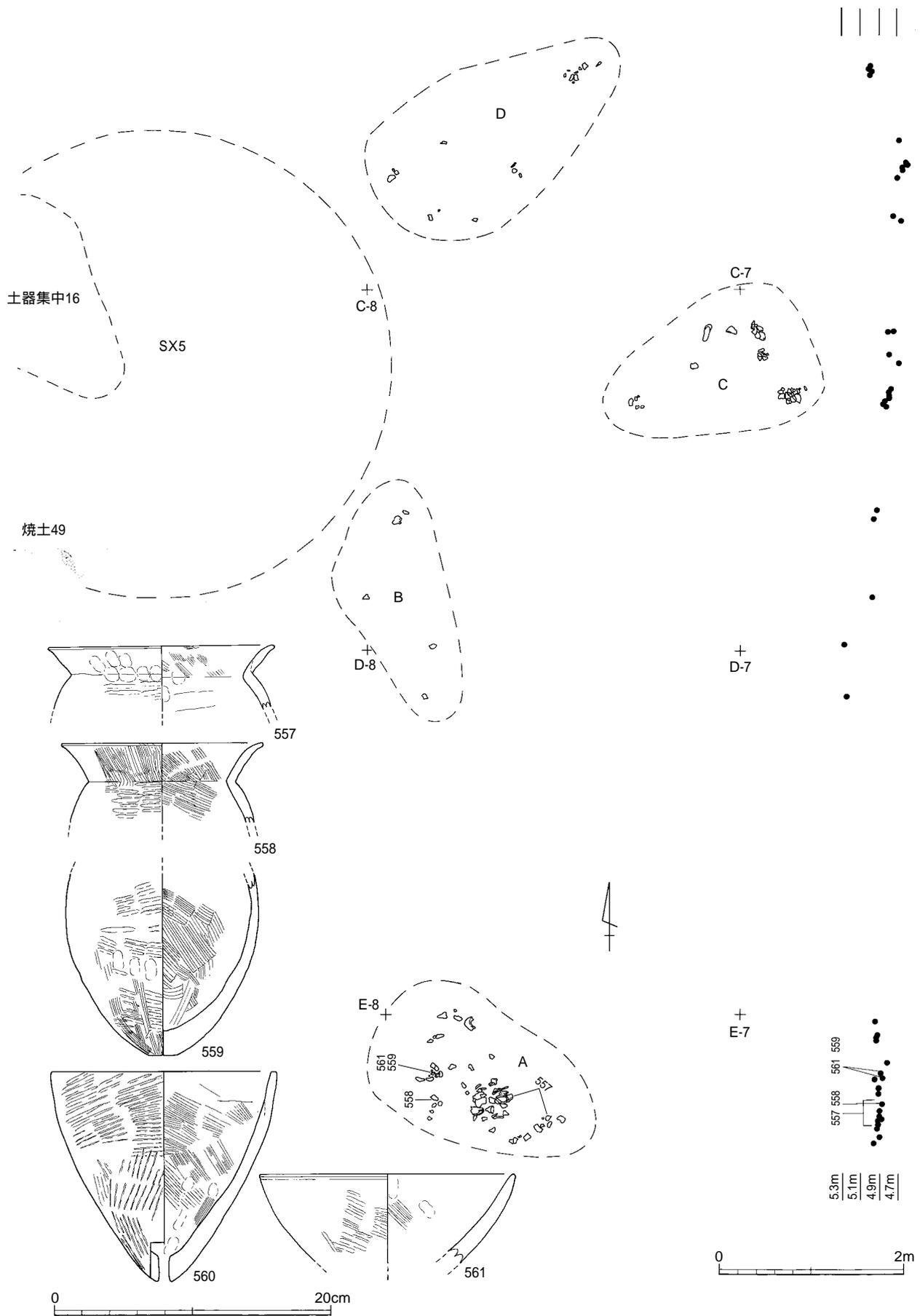


Fig.75 土器集中17遺物出土状況図及び出土遺物実測図

土器集中17(Fig.75)

区東部C～E-8グリッドに分布する土器集中で、東西4.5m南北12mの範囲に土器がブロック状に散在する。土器は検出面は 層の上位から 層下位、標高4.8～5.29mのレベルで出土しており、ブロック間でかなりの高低差を示していることから、全ての土器が必ずしも同時期性を示すとは言い難い。土器はA・B・C・Dの各ブロックを形成するが、A・Dが比較的まとまりを見せる他は細片の散在のみである。焼土は特に伴わない。

出土遺物は甕・鉢・甑である。土器は口縁部点数にして甕6点、鉢1点、底部点数は2点を数える。甕の口縁部は、頸部まで残存する口縁部資料のうち、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものを1点、口縁部叩き出し成形によるものを1点認めている。又、底部は尖底1点・小さな平底1点である。

図示したものは甕(557～559)、鉢(561)、甑(560)である。甕(557)は「く」字状に外反する口縁部をなし、頸部外面には粘土帯接合痕を明瞭に残し小さく段をなす。口縁部及び頸部外面には指頭押圧が連続的に加えられる。甕底部(559)は小さな平底を呈する。甑(560)はタタキによる胴部成形の後、再度底部脇へタタキを放射状に施し尖底風に成形する。底部には径8mm大の焼成前穿孔を穿つ。

土器集中17は弥生時代終末期から古墳時代初頭に位置付けられる。

土器集中18(Fig.76・77・78)

区南東端C-6・7グリッドに位置する土器集中で、東西6m南北2.4mの範囲に焼土・炭化物に

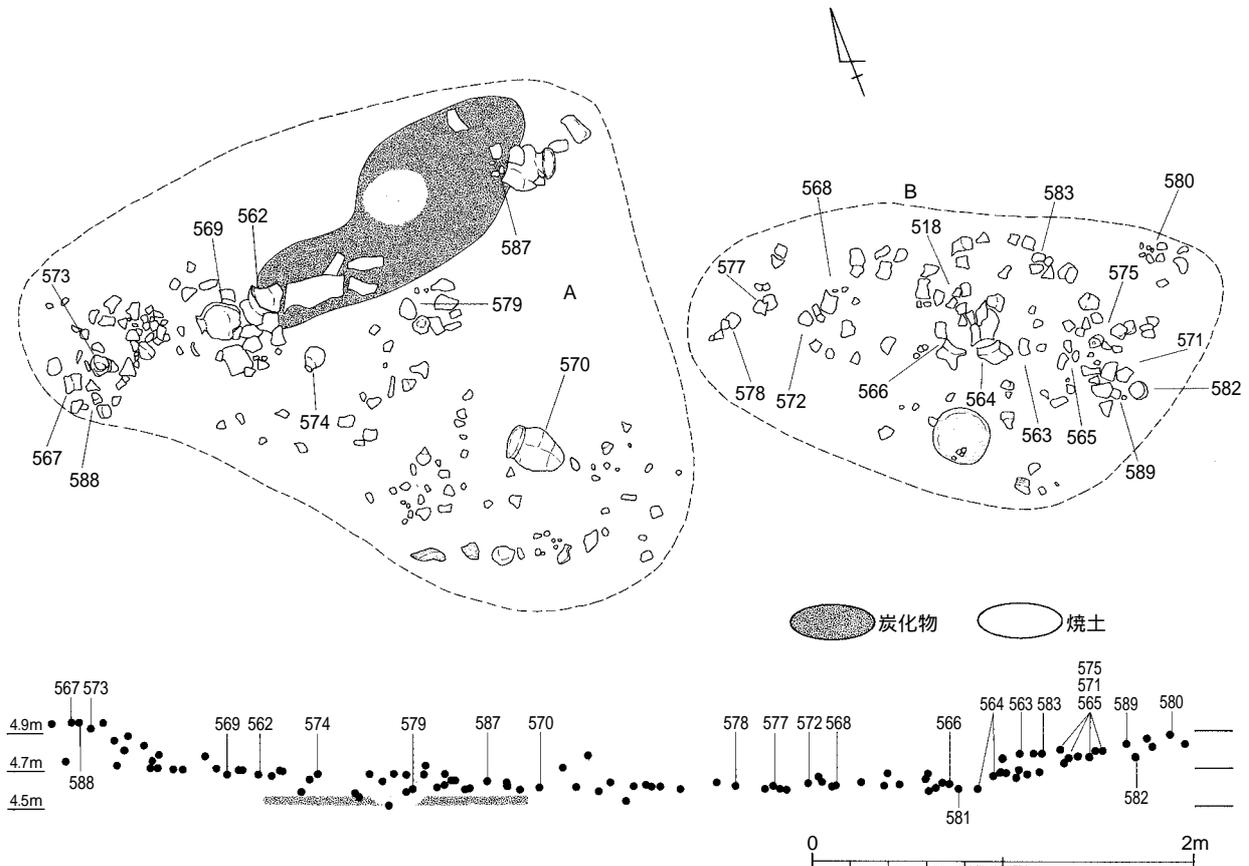


Fig.76 土器集中18遺物出土状況図

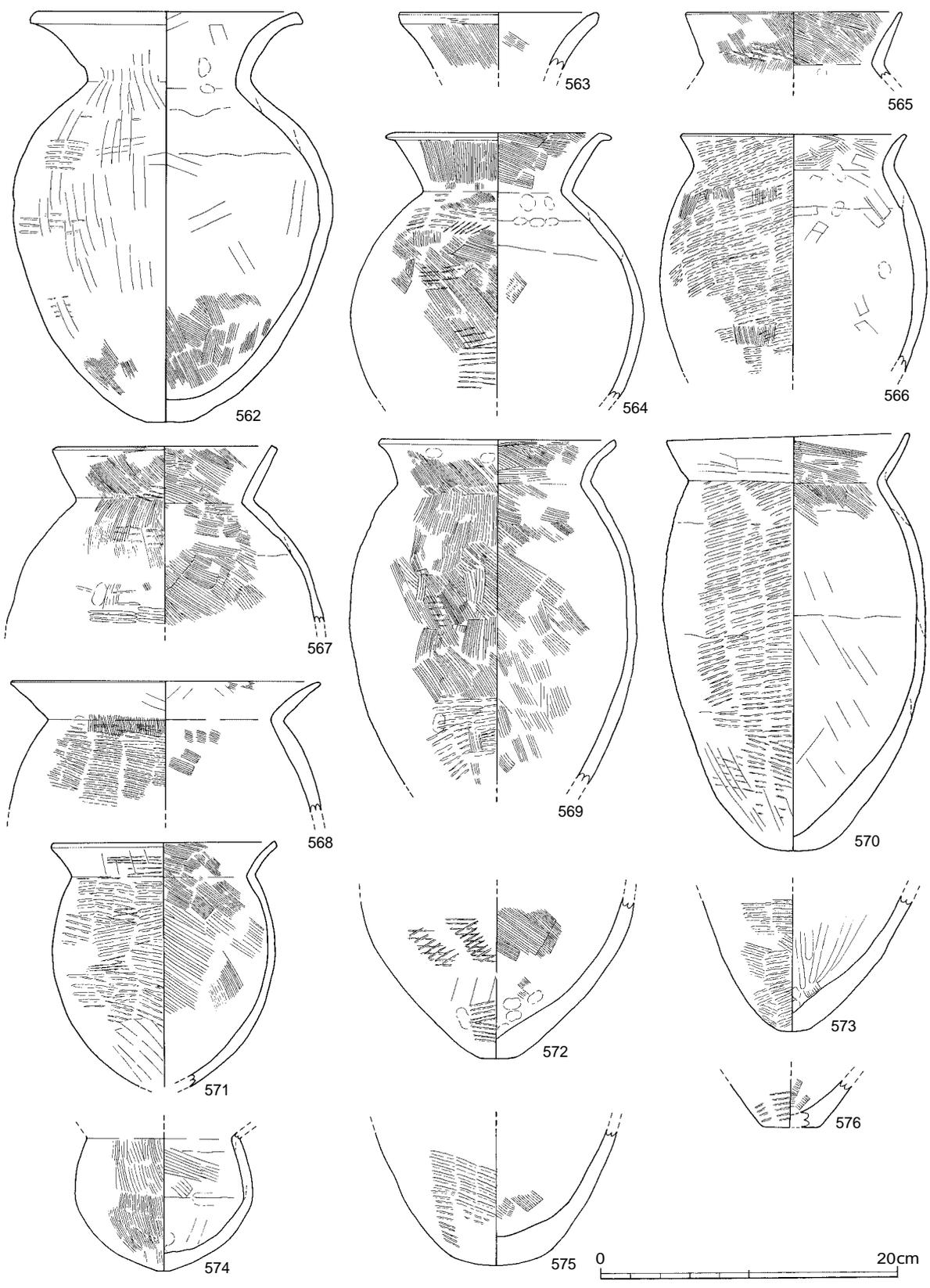


Fig.77 土器集中18出土遺物実測図1

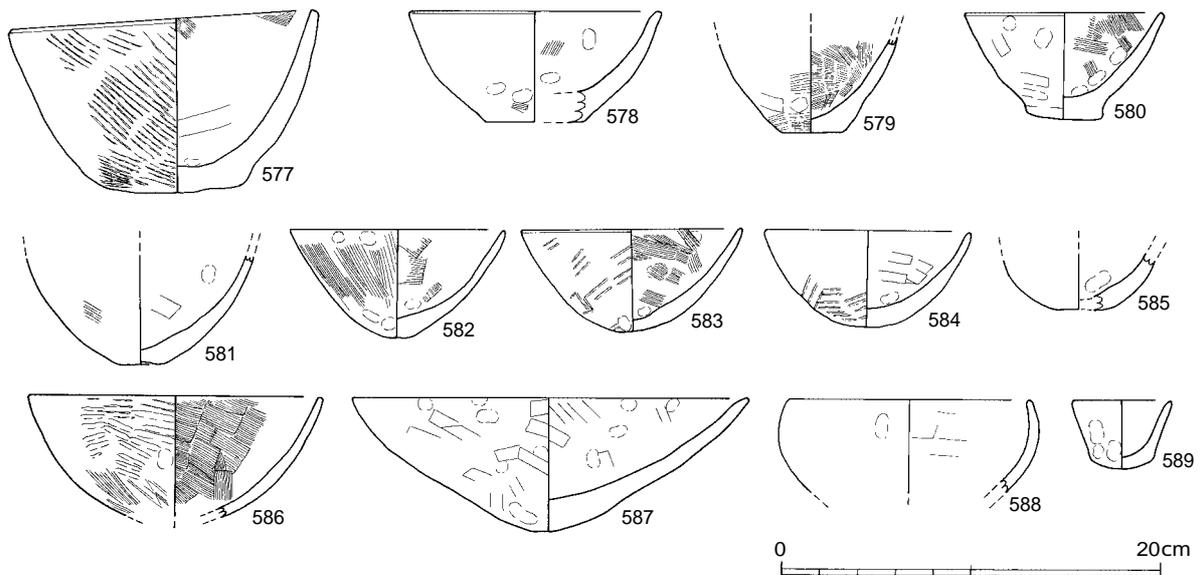


Fig.78 土器集中18出土遺物実測図2

伴う土器の廃棄が帯状に分布する。土器は 層の上位から 層下位、標高4.55～4.94mのレベルから出土しており、垂直分布図で示される様に、土器分布は中央部に向かうに従い緩やかな落込みをみせる。土器・炭化物の分布は、西端に位置し焼土・炭化物溜まりに多量の土器が伴うAブロック、大型で扁平な河原石に伴い土器が楕円形に分布するBブロックに分かれる。

出土遺物は壺・甕・鉢・手捏土器である。土器は口縁部点数にして壺4点、甕34点、鉢10点、手捏土器1点、底部点数は壺又は甕18点、鉢9点、手捏土器1点を数える。甕の口縁部は、頸部まで残存する口縁部資料のうち、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものを3点、又、口縁部叩き出し成形によるものを2点認めている。又、底部は平底7点、尖底気味の小さな平底10点、尖底0点、丸底9点、尖底気味の底部先端が小さく凹状となるものが2点である。

図示したものは壺(562～564・574)、甕(565～571)、鉢(577～588)、手捏土器(589)、底部(572・573・575・576)である。壺は広口壺(562～564)、小型丸底壺(574)を認める。562は口縁部が丸味を帯びて外反し端部を面取る。胴部は肩が張る卵倒形を呈する。外面調整はナデ・ハケ調整を基調とするが、部分的にタタキ目が残る。574は胴部中位が張り底部は僅かに尖頭状を呈する。甕(570)は口縁部が「く」字状に外反した後端部がやや内湾気味に立ち上がる。頸部外面には粘土帯接合痕を残す。胴部は長胴化が著しく、底部は丸味を帯びる。胴部外面へのナデが顕著で、タタキ目はナデ消され弱くなる。鉢は口径14～16cm前後の中型のもの(577・578・586)、口径10cm前後の小型のもの(579～584)等の法量分化を認める。577は平坦だが丸味を帯びる底部から体部が内湾気味に立ち上がる。外面は部分的なナデ調整によって潰された弱いタタキ目が全面に残る。579はしっかりした平底を呈し、体部が直線的に外上方へ開く形態をとる。外面下位にはタタキ目を明瞭に残すが、口縁部周辺はナデ消す。580は円盤状に張り出す厚手の底部から、体部が直線的に開く。外面はナデ調整で、指頭圧痕が顕著である。581は底部中央が小さく凹状となる。内外面ナデ調整で仕上げるが、僅かにタタキ目が残る。椀形の582・583・584・585は丸底を呈するもので、何れも内底には指

頭圧痕が顕著に残る。口径21cmで大ぶりの587は尖底気味で丸味をもった厚手の底部から、体部が外方へ強く開いて立ち上がる。内外面はナデ調整で指頭圧痕が顕著にのこる。588は半球形を呈する鉢で全面ナデ調整である。手捏成形の589は底部を丸味をもって作り出し、外面に指頭圧痕が顕著に残る。

土器集中18は古墳時代初頭に位置付けられる。

包含層出土遺物(Fig.79)

層から 層下位にかけては弥生終末期から古墳時代初頭の遺物が得られており、土器の検出状況においても連続的に出土を認めている。ここで取り上げたものは、土器集中に属さず単独で出土したもの、及び3～5個体程の土器廃棄の小さなまとまりをもって出土したもので、特にこのうち594・595・597・598は 区東部より一括廃棄の状況で出土した一群の土器であった。

図示したものは壺(590～593)、甕(594・595)、鉢(602～605)、高杯(597・598・606)、甑(601)、支脚(607)、用途不明土製品(600)、底部(596・599)白玉(608・609)である。複合口縁壺(590)は口縁部外面には櫛描波状文を施す。広口壺(591)は口縁端部に粘土帯を貼付し上下に強く肥厚させるもので、広く面をなした端部は内傾する。端部には櫛描波状文を施すが、波状文は波状の形態・上下幅・横幅とも一定でない乱れたものである。直口壺(593)は中位が球形に強く張る胴部を呈し、短い口縁部が直立気味に立ち上がる。596は壺か。厚手の小さな平底を呈し外面全面と外底にタタキ目を残す。甕(595)は胴部が著しく長胴化したもので、口縁部は丸味をもって外面する。有段高杯(598)は柱状部が中実となり、脚部に円形の透し孔を施す。高杯(606)は分割成形によるもので、杯部が接合部で剥離する。土製品(600)は漏斗形を呈し、尖頭部に径4mm大の焼成前穿孔を穿つ。外面は丁寧なナデ調整で仕上げる精製品で、尖頭部には僅かに指頭圧痕が残る。内面には絞り目を認める。甑の可能性もあるが使用痕跡は認められず用途は特定できない。601は甑。底部中央に径6mm大の焼成前穿孔を穿つ。607は手捏成形による支脚の小型品。受け部を指頭押圧によって凹状に作り出す。器面はナデ調整で、指頭圧痕が顕著に残る。

白玉(608)は灰黒色の石材を使用する。円筒形を呈し径1.7mmの貫通孔を穿つ。全長3mm・全幅5mm・重量0.09gを測る。滑石製白玉(609)は円筒形を呈し径1.8mmの貫通孔を穿つ。緑灰色を呈し、全長4.5mm・全幅5mm・重量0.15gを測る。608・609は、共に 層下位からの出土であるが、上層からの混入の可能性もある。

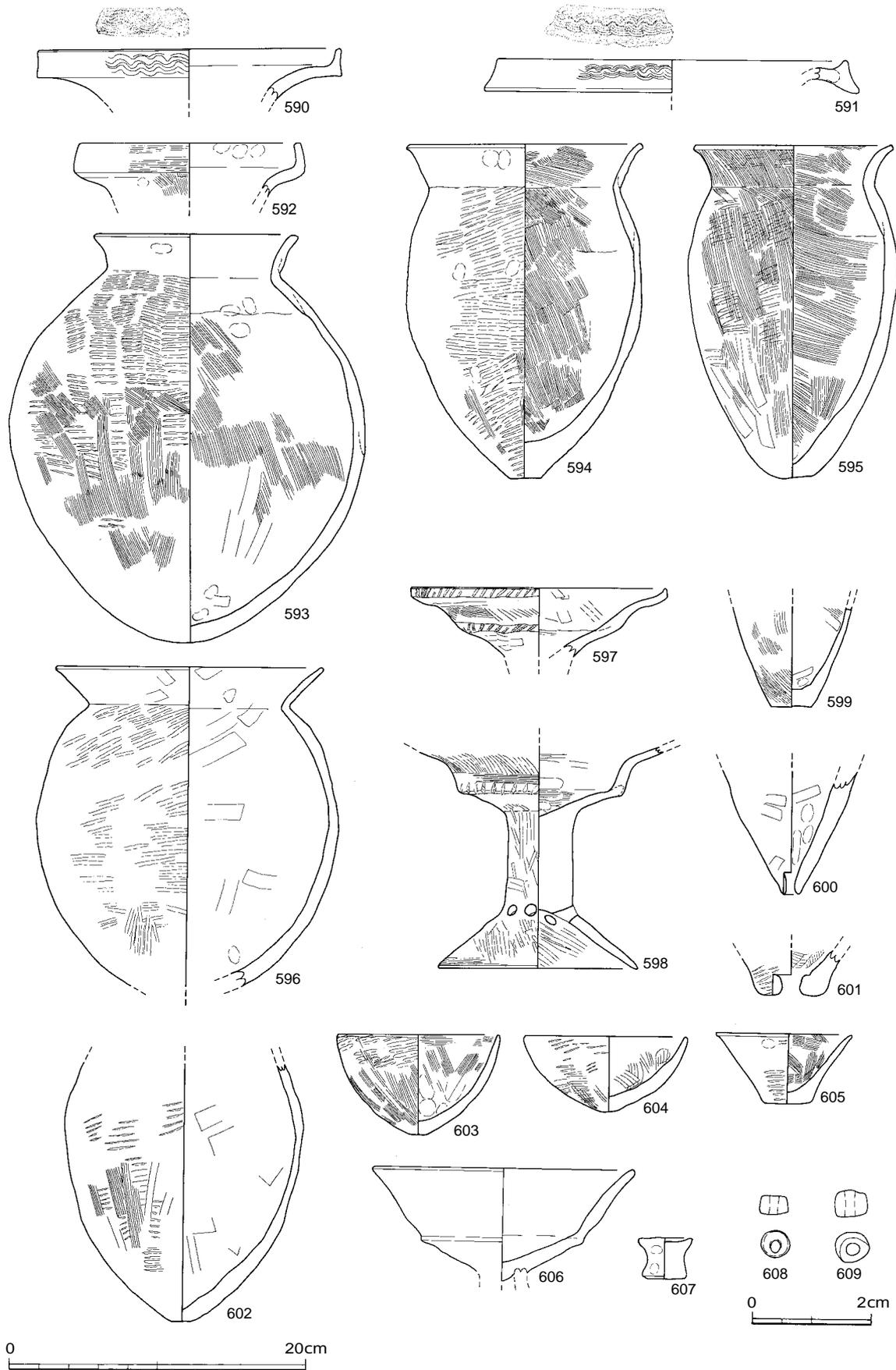


Fig.79 ・ 層出土遺物実測図

2. 区の調査

(1) 弥生時代前期末から中期の遺構と遺物

杭列

杭列3(Fig.80)

区南部K-25グリッドにおいて2基の杭穴(杭6・7)を、中央部I-25グリッドにおいて1基の杭穴(杭8)を確認した。杭穴6～8は 層面で確認され、検出面は標高3.92m前後のレベルにあたるが、上面をかなり掘削した状態での検出であったため実際の遺構上面は4.0m前後であったものと考えられる。杭6・7間の距離は約1.7mで、およそN-67°-Eの軸方向をもって並ぶ。杭穴6～8の検出規模は杭6が径16cm深さ18cm、杭7が径20cm深さ12cm、杭8が径16cm深さ14cmを測る。埋土は何れも炭化物を多量に含む黄灰色粘土で、共に木杭が残存する。杭は杭穴6～8から各々出土している。いずれも丸木材を利用するもので杭は杭6が先端部が尖頭状、杭7・8は先端部が平坦面をなすが、共に腐蝕が著しく加工痕跡は観察できない。

包含層出土遺物(Fig.80)

区における弥生時代前期末から中期にかけての遺構・遺物の検出は皆無に等しく、区とは対照的である。弥生時代前期末の出土遺物は 区の東部においてXI層から出土した甕底部(610)のみである。610はしっかりした平底をなし、胴部中位にはやや扁平な断面三角形の貼付突帯を巡らせ、突帯全面に鋭い刻目を刻む。突帯は2条を1単位とし途中より垂下する文様構成をとる。外面調整は丁寧なナデ調整を施し、焼成は堅緻である。

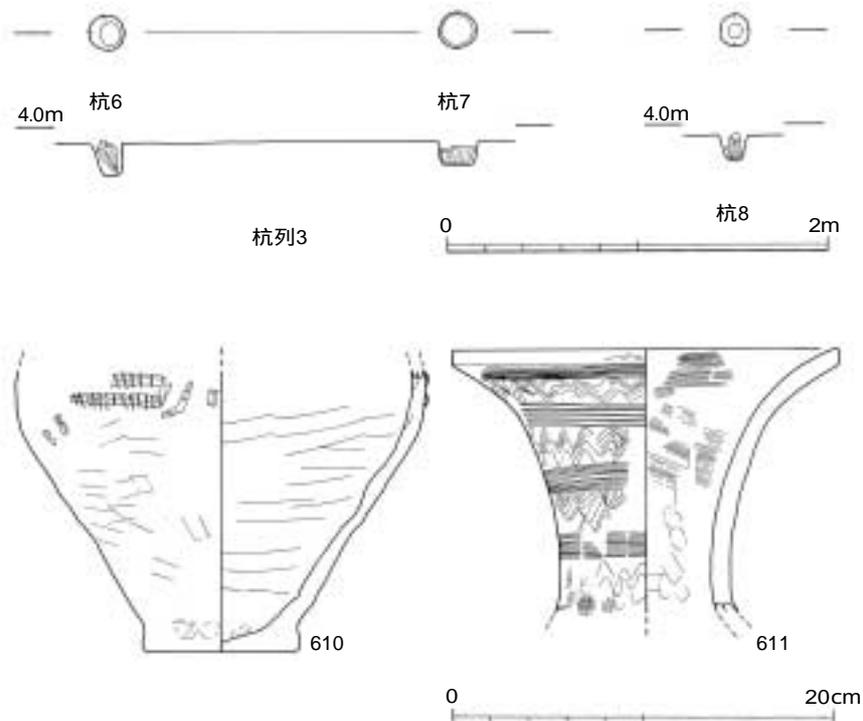


Fig.80 杭列3平面・エレベーション図及びXI層・ 層包含層出土遺物実測図

(2) 弥生時代後期前葉から後葉の遺構と遺物

土器集中

土器集中19(Fig.81)

区中央部 J-21・22グリッドに分布する土器集中で、検出面は 層の上位、標高4.1m前後にあたる。東西6m、南北1.5mの範囲に炭化物片と土器の廃棄が小ブロックを形成して水平分布するもので、土器の分布は西側に位置するAブロック、東に位置するBブロックの2つの小ブロックより構成される。土器は各ブロックとも1個体の破片が比較的まとまって出土しており、廃棄時の状態を比較的良好に留めている。Aブロックでは甕・鉢、Bブロックでは3個体の甕と壺がまとまって出土している。

出土遺物は壺・甕・鉢・である。土器は口縁部点数にして壺1点、甕4点、鉢1点、底部点数は6点を数える。甕の口縁部は、頸部まで残存する口縁部資料のうち、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものが1点、又、粘土帯貼付口縁を1点認めている。又、底部は全て平底である。外面調整は全てハケ・ナデ調整で、タタキ成形の痕跡を残すものはない。

図示したものは壺(612)、甕(613~616)、鉢(617)である。長頸広口壺(612)は胴部中位が張る扁球形の胴部を呈し底部は平底となる。長く伸びる頸部から口縁部が緩やかにカーブを描いて外反し、端部は丸くおさめる。甕(613)は緩やかにカーブを描いて短く外反する口縁部形態を示すものである。胴部は中位が張り胴部最大径が口縁部径を凌ぐ。外面調整はハケ調整である。(615)も同様の口縁部形態を呈するもので、口縁部外面に粘土帯を貼付する。外面調整はハケ・ナデ調整である。613・615は口縁部がカーブを描いて外反するタイプの甕であるが、短く外反するものとなり、口縁部と上胴部への施文も消失する。一方614・616は口縁部が「く」字状に外反するものである。614は口縁部が強く外反し、胴部中位が脹らむ。616は口縁部の外反が弱く、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残す。鉢(617)は口径19cmの中型品で、平底から体部が直線的に開く。口縁部は僅かに外反し端部を丸くおさめる。外面調整はハケ・ナデ調整である。

土器集中19は弥生時代後期中葉から後葉に位置付けられる。

包含層出土遺物(Fig.80)

図示したものは 層出土の611のみである。611は口縁部が大きく外反する長頸広口壺で、外面は口縁部から頸部にかけて多段の櫛描直線文を配し、その間に櫛描波状文を施す。

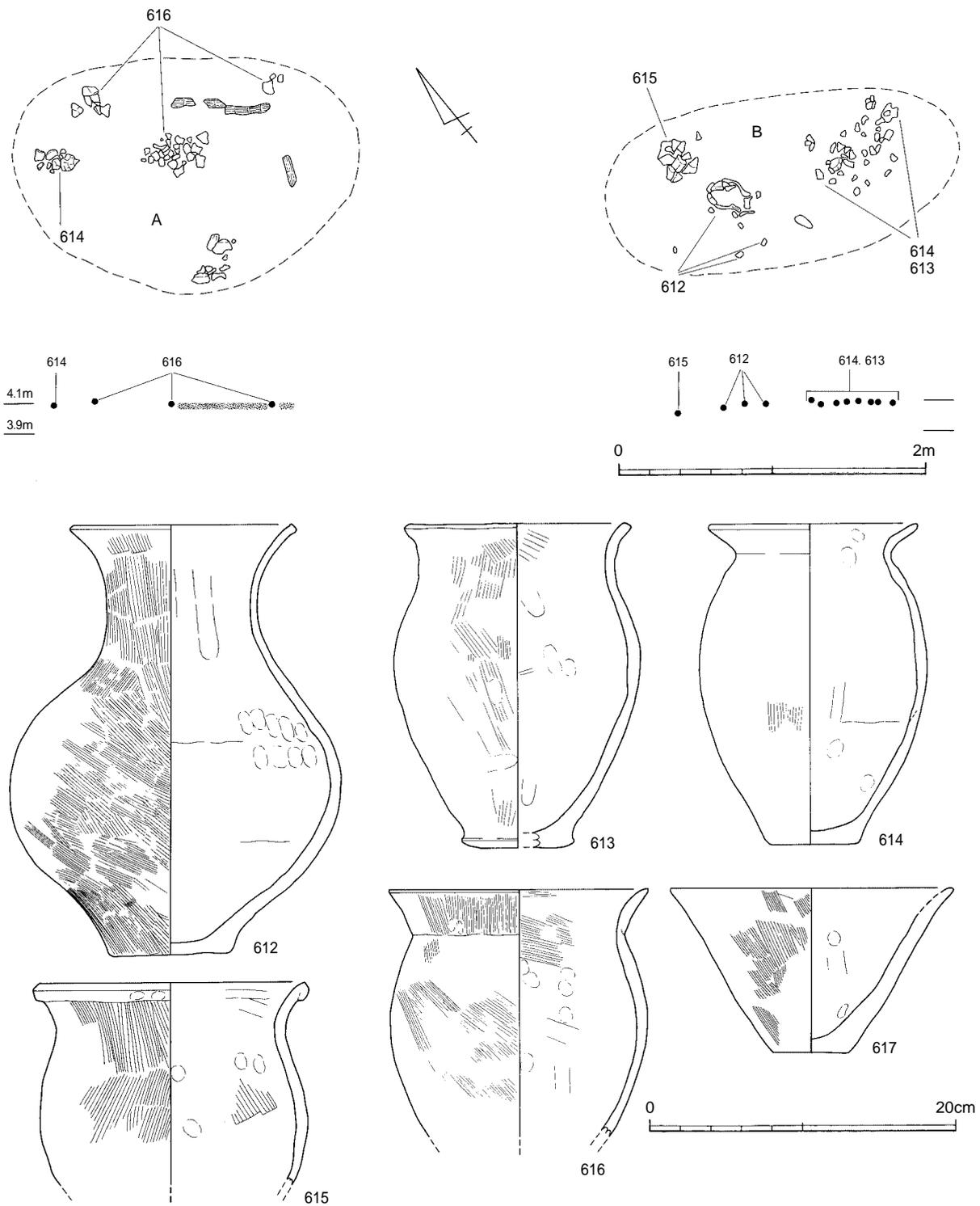


Fig.81 土器集中19遺物出土状況図及び出土遺物実測図

(3) 弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構と遺物

弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺物包含層である 層は 区東端では標高4.3～4.8mのレベルに堆積するが、同層はここより西に向かうに従い徐々に高度を下げ、 区中央部 L-26グリッド付近では標高3.9～4.4mまで落ち込んでいる。この様な立地条件を反映してか、 区における遺構・遺物の検出状況も 区中央部 G-23～M-23グリッドラインを境に、以西では検出数が激減する。区東部では土器集中20～23及びそれに伴う焼土を認めており、これら東部検出の土器集中はさらに東西方向の広域な帯状の分布域を構成しており、東に接する 区土器群へと連続していく。一方、 区西部においては焼土68の検出を認めるのみで土器集中の検出は皆無であり、東部とは対照的な様相を示している。

土器集中

土器集中20(Fig.82～84)

区中央部 H-21・I-22グリッドに位置する土器集中で、検出面は 層最上位にあたり、土器は標高4.32～4.42mの間で10cm前後の高低差をもちながらほぼ水平に分布する。土器は東西8m南北4mの範囲に広がり、東に位置し強い土器の集中からなるAブロック、中央に位置し土器細片が南北方向に散在するBブロック、西に位置し完形に近い状態で出土した2点の土器から構成されるCブロックの3つの小ブロックを確認することができる。なお、南西側には土器集中21が接しており、10cm程のレベル差をもつ両集中間で土器片の接合が2点確認されている。

出土遺物は壺・甕・鉢・高杯である。土器は口縁部点数にして壺1点、甕54点、鉢4点、高杯1点、底部点数は壺又は甕23点、鉢3点を数える。又、底部は平底1点、尖底気味の小さな平底13点、尖底3点、丸底5点、尖底気味の底部先端が小さく凹状となるものが3点である。

図示したものは壺(618～620・627)、甕(621～626・628～635)、鉢(642～645)、高杯(646)、底部(636～641)である。広口壺(618)は強く外反する口縁部の端部に粘土帯を貼付し上方に肥厚させる。端部は横ナデし、無文である。619・620は頸部外面に扁平な突帯を貼付し格子目文を刻む。627は胴部球形に張り底部は尖底となる。外面調整はナデ・ハケ調整である。甕は口縁部が直立するもの(621)、「く」字状に外反するもの(622～635)、丸味をもって外反するもの(625・628)がある。このうち頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さく段をなすものは622・633・634、接合痕を認めるものの上面をハケ・ナデで消すものは621・623、口縁部叩き出し成形によるものは625・626・628・635である。直立する口縁部をなす甕(621)は、頸部外面には粘土帯接合痕を僅かに認めるが、ナデによって消される。外面は口縁部がハケ調整、胴部はタタキ目を全面に残す。632は胴部中位が張る長胴形を呈する。底部は小型化した平底を留めるが殆ど尖底に近いものとなる。底部脇を除いて全面にタタキ目が残る。タタキ目は頸部と最大径にあたる胴部中位を境に方向が大きく変化しており、製作工程の転換箇所が明瞭に観察される。又、底部脇には縦方向のタタキを放射状に再度重ね尖底風に成形している。633は頸部外面への粘土帯接合によって小さな段を残す。胴部は上位に膨らみをもつ卵倒形の形態を呈し、底部は一部欠損するが丸底風になるものと考えられる。外面は底部脇を除いて全面にタタキ目が残るが、同様にタタキ目は頸部と最大径にあたる胴部上位を境に方

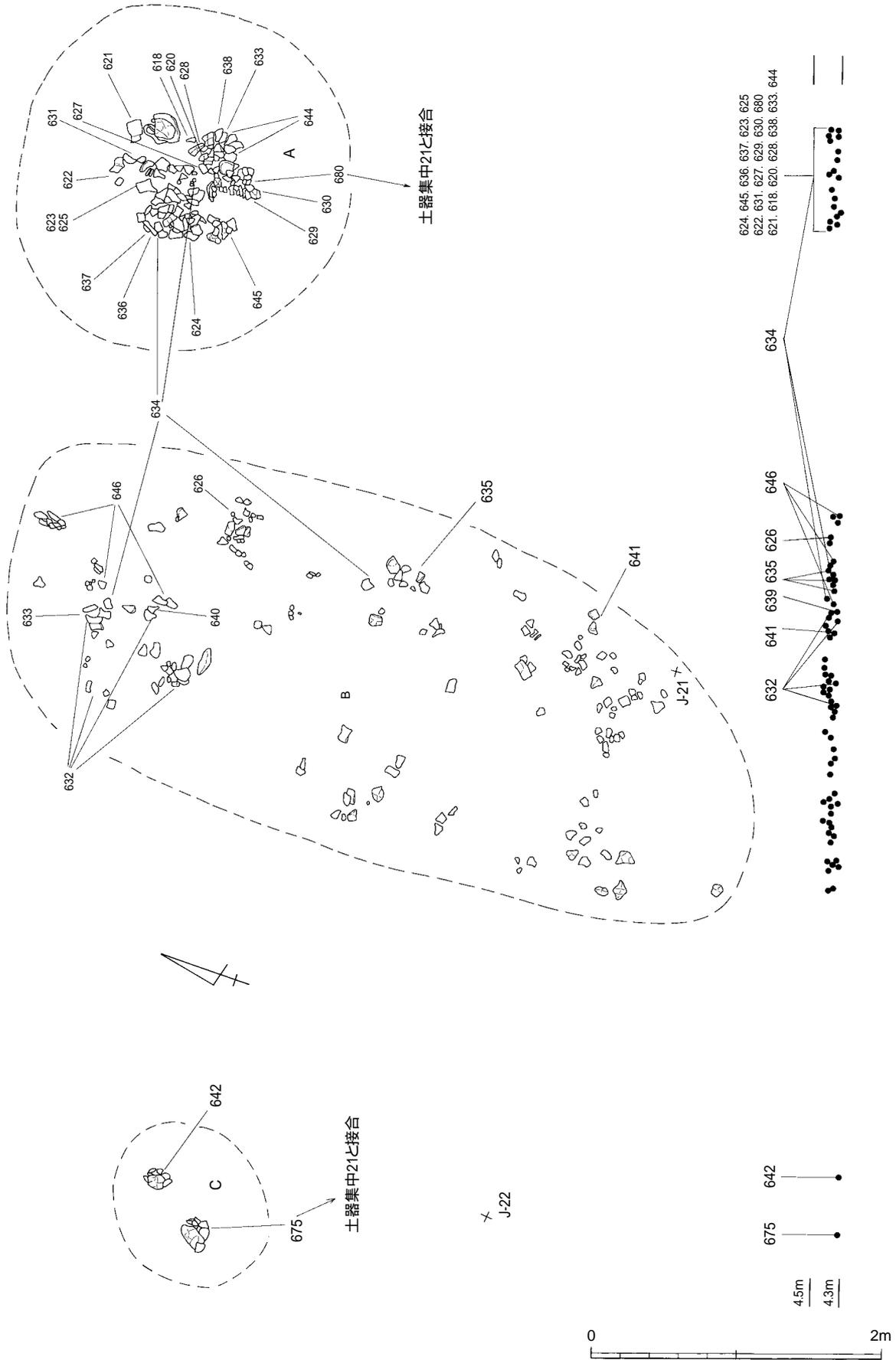


Fig.82 土器集中20遺物出土狀況図

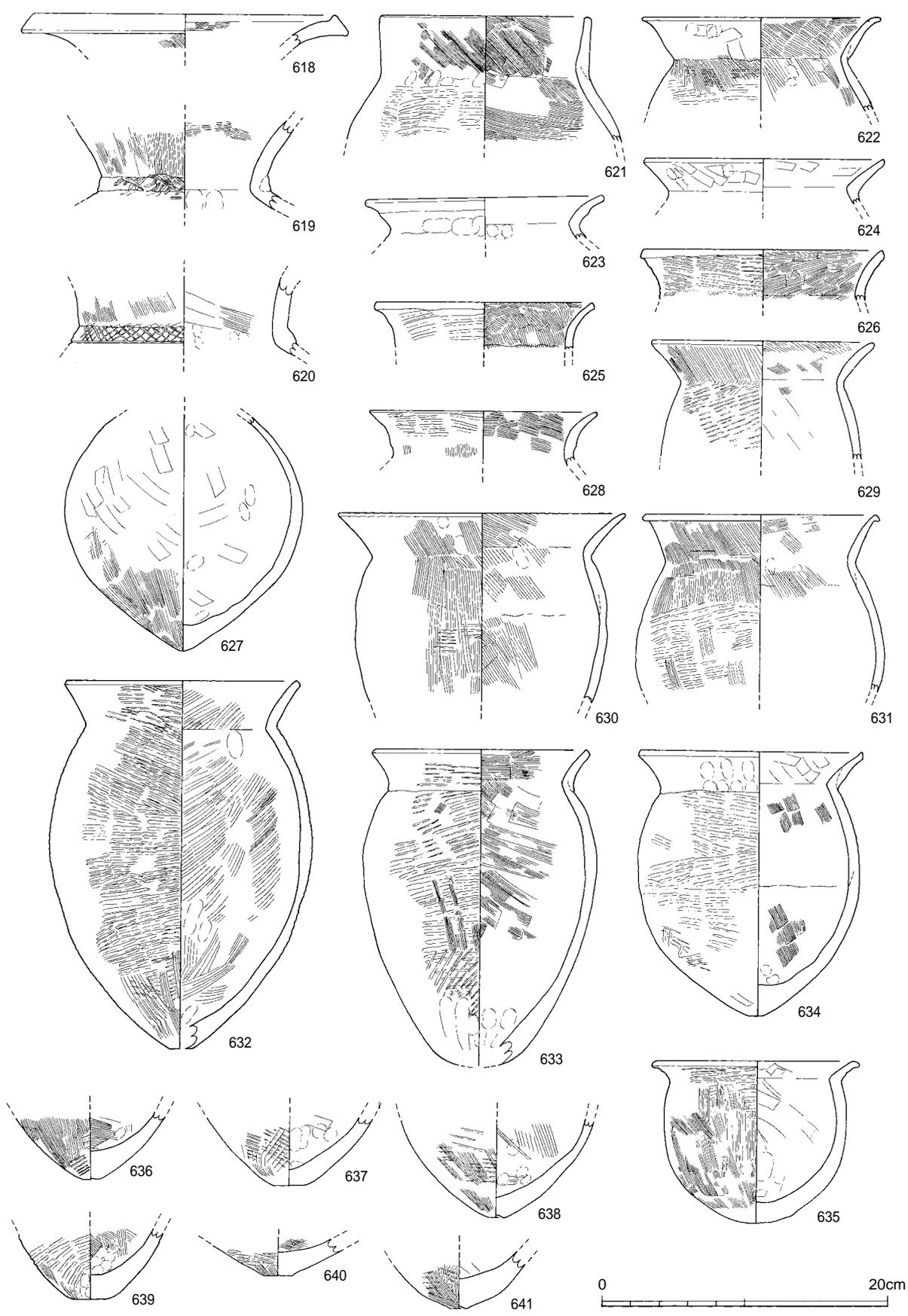


Fig.83 土器集中20出土遺物実測図1

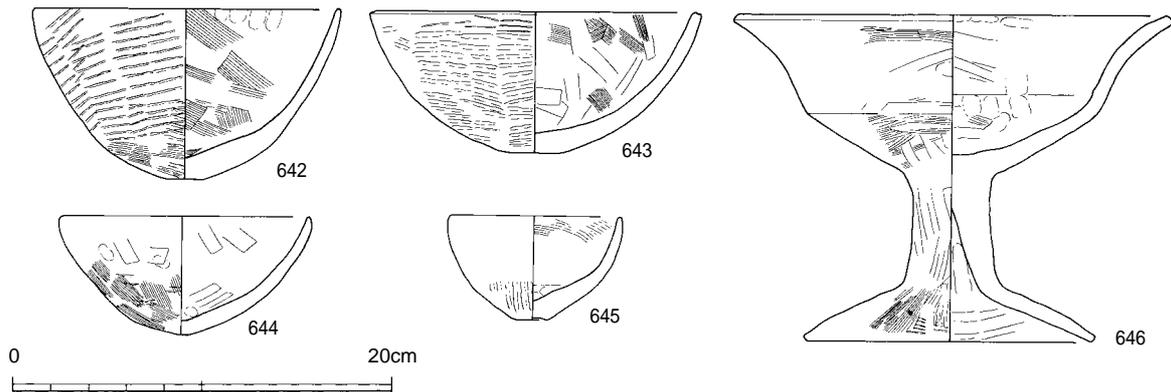


Fig.84 土器集中20出土遺物実測図2

向が大きく変化している。底部付近には縦方向のタタキを放射状に再度重ね胴部下位を成形しており、さらに底部脇と内底には強い指ナデと指頭押圧を加え丸底風に整える。底部(638・641)は尖底風に仕上げた底部の先端を指頭によって押圧するもので、先端部が小さく凹状を呈する。鉢は何れも椀形で、口径16～18cmの中型のもの(642・643)、口径9～14cmの小型のもの(642・643)がある。丸底の642はタタキ目を全面に残す。643はタタキ目を全面に残すもので、底部は丸底風であるが僅かに平坦面を残す。尖底風の644はハケ・ナデ調整を施す。645は底部は外底を指頭押圧し小さく凹状を呈するものである。内外面、ハケ・ナデ調整を施すが底部脇にタタキ目が僅かに残る。高杯(646)は中空で柱状の柱状部から「八」字状に開く裾部が広がる。杯部は杯体部から屈曲して口縁部が長く伸びる。外面調整はハケ・ナデ調整を施す。

土器集中20は弥生時代終末期に位置付けられる。

土器集中21 (Fig.85～88)

区の中央部から東部I-20～22・J-19～21グリッドにかけて分布する土器集中である。検出面は層の最上位にあたり、土器は西寄りで標高4.3m前後であるが、土器分布の帯は東へ向かうに従い緩やかに高度を増し東端では標高4.5m前後のレベルに分布するようになる。土器は東西15m南北7mの範囲に散在した状態ではほぼ等間隔で分布していくことから明瞭な廃棄の小単位を認めることは難しいが、このうち集中南部においては径1mの範囲に炭化物が広がり、中に20×30cmの規模の焼土69が確認された。この焼土69に伴う炭化物上面からは多量の土器細片と炭化した木片が出土している。

なお、東側では10cm程高い標高で、土器集中22が連続してさらに東方向へ分布しており、土器集中21と22間には土器の接合も成立していることから、同時期あるいは近い期間内の一連の土器廃棄である可能性をもつ。

出土遺物は壺・甕・鉢・甑である。土器は口縁部点数にして壺10点、甕81点、鉢12点、底部点数は壺又は甕60点、鉢11点、甑1点を数える。このうち甕で頸部まで残存する資料のうち頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものを5点、又、口縁部叩き出し成形によるものを21点認めている。又、底部は平底12点、尖底気味の小さな平底27点、尖底25点、丸底6点、尖底気味の底部先端が小さく凹状となるものが2点である。

図示したものは壺(647～657)、甕(658～681)、鉢(695～707)、甑(708)、底部(682～684・685～694)、叩石・砥石(709・710)、尖頭状の打製石器(711)である。複合口縁壺(647)は球形に張る胴部をなすもので、口頸部は外反する短い口頸部から口縁部が内傾して立ち上がる。胴部の外面調整はナデ調整を基調とするが、弱いタタキ目が部分的に残る。複合口縁壺(650)は内傾する口縁部を呈し、外面には櫛描波状文を施すもので、施文・器面のナデ調整ともに精緻である。複合口縁壺(652)は外反する短い口頸部をなすもので、口縁部は接合部から剥離する。広口壺(648)は中位に最大径をもつと思われる球形の胴部から、口縁部が大きく外反するもので端部を面取る。口縁部から肩部にかけてハケ調整、胴部はハケ・ナデ調整を施すが部分的にタタキ目が残る。広口壺(651)は外反する短い口縁部の端部を強くヨコナデし下方へ垂下させ、口唇部には刻目を施す。頸部外面には扁平な突帯を貼付し斜方向の刻目を施す。653は直立する頸部から口縁部が水平に開くもの。壺頸部(654・655・656)は頸部外面に扁平な突帯を貼付し、ハケ状原体による斜方向の刻目・格子目文等を施す。

甕は口縁部が直立するもの(677)と「く」字状に外反するもの(658～676)がある。このうち頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さく段をなすものは659・660・663・665、接合痕が観察されるが上面にハケ・ナデを施すものは658・661・662・664、口縁部叩き出し成形によるものは677である。662は胴部が長胴形を呈するものであるが胴部の張りが小さく、最大径は口縁部にある。底部は丸底となる。頸部外面に粘土帯接合痕が僅かに残るが、口縁部から肩部にかけてのハケ調整によって消される。底部脇には強い板ナデを施し、胴部はタタキ目が残る。664も断面に粘土帯接合痕が観察されるが、外面へのハケ調整によって接合痕は消される。677は中位に膨らみをもつ胴部から叩き出し成形による口縁部が直立する。底部は尖底となる。外面は底部脇を除く全面にタタキ目が残され、内面は内底付近と肩部内面に指頭圧痕が著しい。底部(696)は底部を尖底風に作り出すが、先端を強く指頭押圧し小さく凹ませる。外面は僅かにタタキ目を残すが、底部脇には強いハケを幾重にも重ねる。内底は指頭圧痕が著しい。鉢(703)は体部が半球形を呈し丸底となる。外面にはナデ調整を施すが弱いタタキ目が上半に残る。696は丸底風に成形するが外底を僅かに平坦に残す。内底は、周辺へ強い板ナデを施した結果中央部が凸状に盛り上がる形態となる。外面は全面にタタキ目を残す。705も底部を丸底風に成形するが、外底中央を強く指頭押圧することによって小さく凹ませる。内底は中央部が凸状に盛り上がる形態となる。704・706も底部中央を凹状にするものである。甑(708)は全面に強いタタキ目を残し、底部には径1.4cmの焼成前穿孔を穿つ。

土器集中21は弥生時代終末期から古墳時代初頭に位置付けられる。

土器集中22(Fig.85・89・90)

区東端I-18・19グリッド周辺に位置する。検出面は 層の最上位にあたり、土器は標高4.5m前後のレベルに分布する。土器群は東西9m南北4mの範囲に帯状に広がり、散在気味ながらも幾つかの小ブロックを形成している。

なお、西側には土器集中21が接しており、集中22ではやや高度が高まるものの土器はほぼ連続した分布形態をとっている。先述したように、土器集中21・22間では土器の接合関係も成立していることから、同時期あるいは近い期間内の一連の土器廃棄であった可能性が高い。



Fig.85 土器集中21・22遺物出土状況図

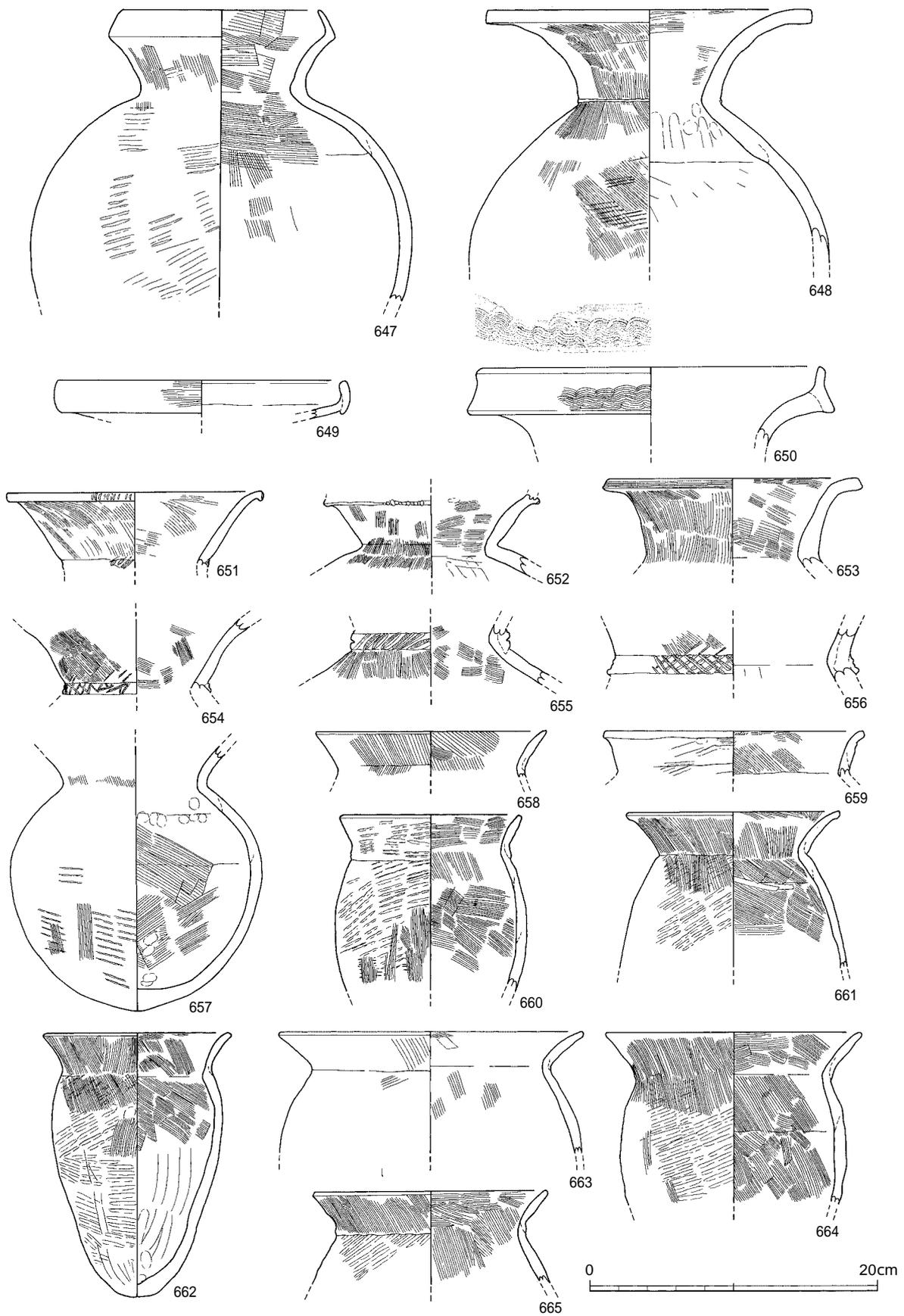


Fig.86 土器集中21出土遺物実測図1

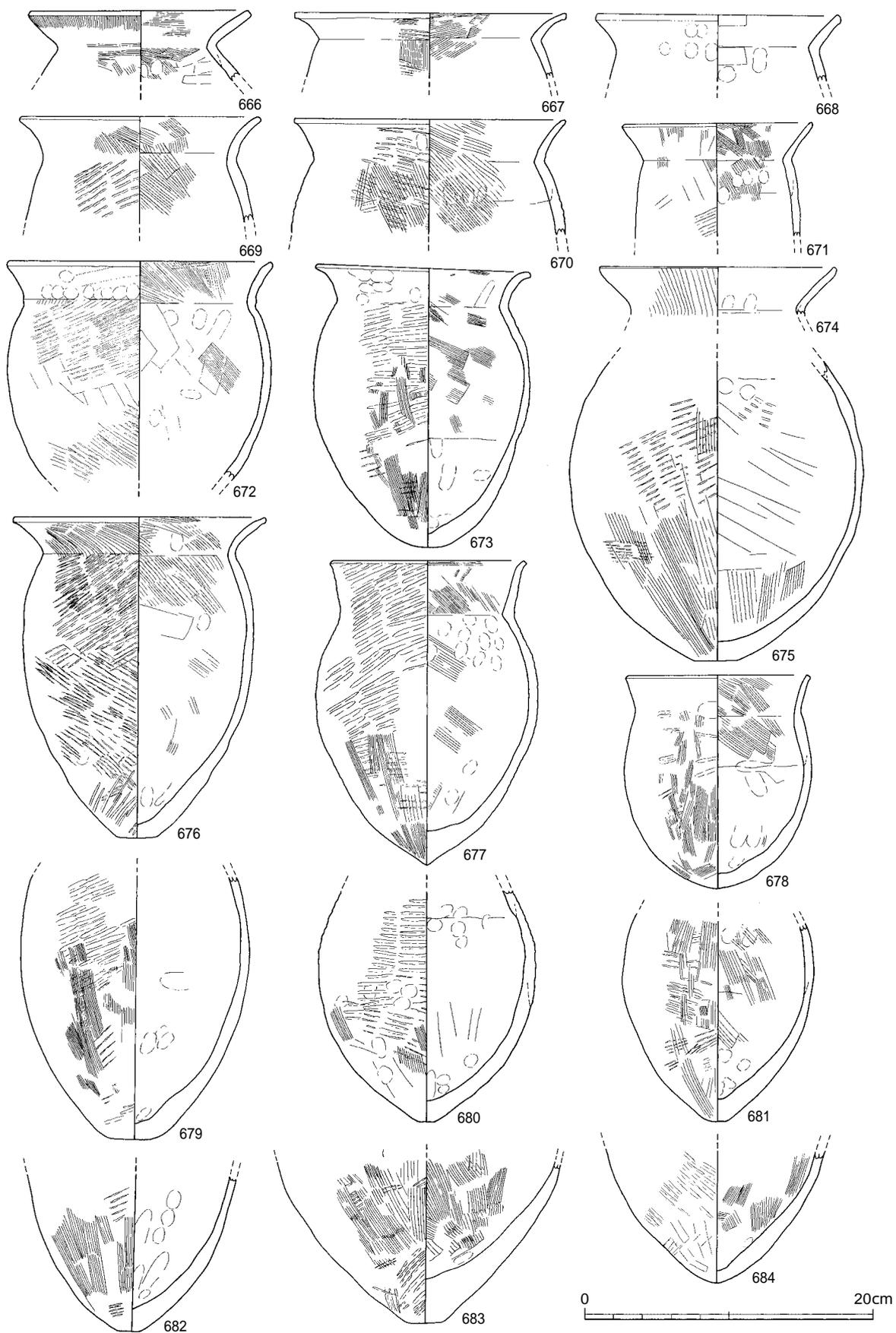


Fig.87 土器集中21出土遺物実測図2

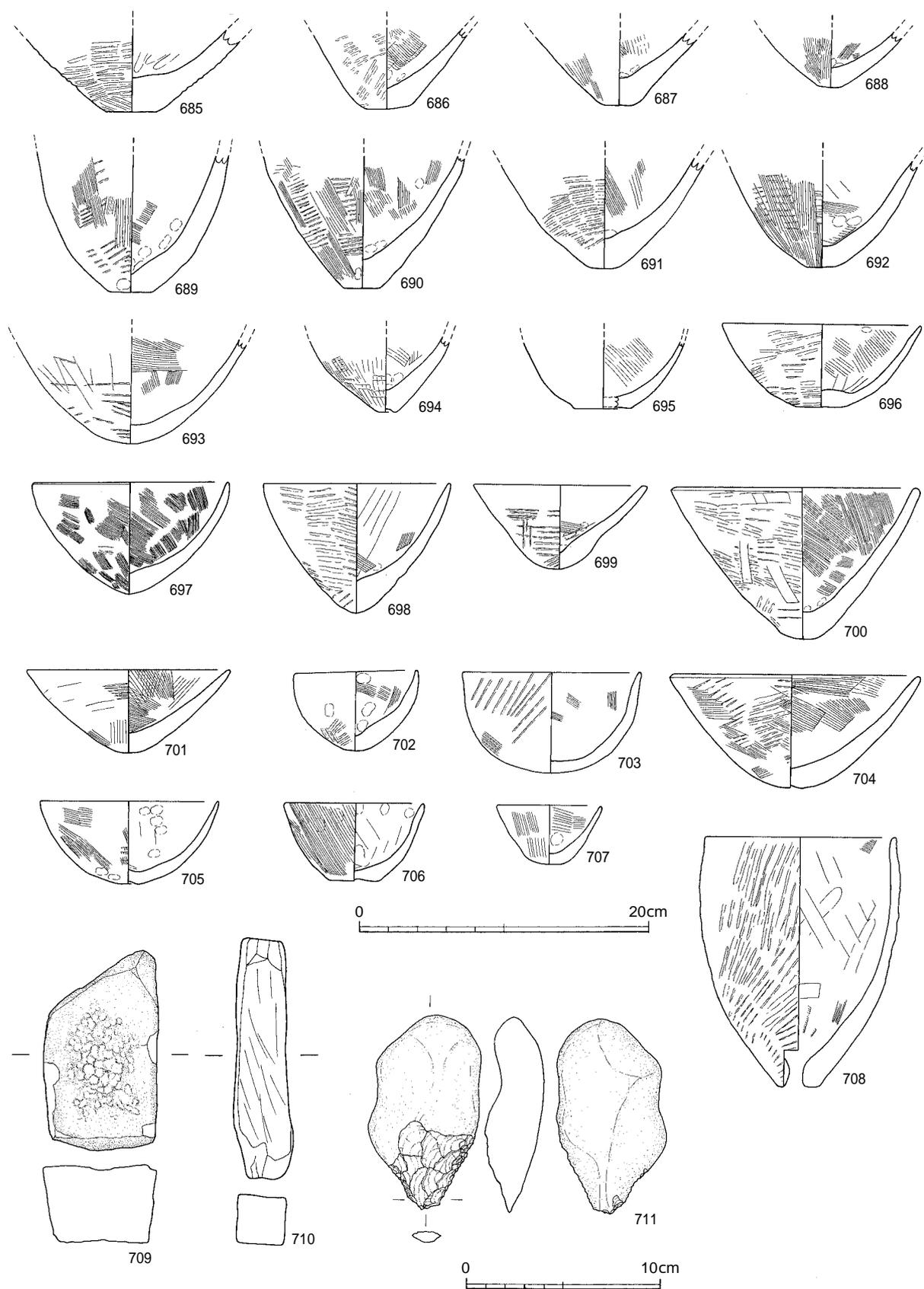


Fig.88 土器集中21出土遺物実測図3

出土遺物は壺・甕・鉢・甑である。土器は口縁部点数にして壺2点、甕38点、鉢6点、甑1点、底部点数は壺又は甕11点、鉢3点、甑3点を数える。甕の口縁部形態は、頸部まで残存する資料のうち、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものを1点、又、口縁部叩き出し成形によるものを4点認めている。又、底部は平底2点、尖底気味の小さな平底8点、尖底6点、丸底1点、尖底気味の底部先端が小さく凹状となるものが0点である。

図示したものは壺(712～714・719)、甕(715～718・720～725)、鉢(728～732)、甑(726・727)である。広口壺(712)は口縁端部に粘土帯を貼付し、内傾気味に上方へと肥厚させたもので、外面には櫛描波状文を施す。広口壺(713)は一旦外反した口縁部が端部で僅かに内湾気味に立ち上がる。小型丸底壺(714)は中位が張る扁球形の胴部から口縁部がやや内湾気味に長く伸びる。底部は厚手の丸底で、内底付近には指頭圧痕が顕著に残る。外面調整はハケとヘラミガキで仕上げ、焼成は堅緻である。甕(722)は胴部中位が張り、底部は小さな平底を呈する。外面は口縁部から胴部にかけて全面にタタキ目が残るが、底部脇と頸部の粘土帯接合部にのみハケ調整が施され、頸部外面の接合痕はハケによって消される。外底にはタタキ目を残す。723は胴部が長胴形を呈するもので底部は小さな平底となる。外面はナデ調整を全面に施し、僅かに弱いタタキ目が残る。鉢は法量によって口径20～22cmの大型のもの(728・729)、口径12～18cmの中型のもの(730・712)、口径8cmの小型のもの(731)に分かれる。730は体部が半球形を呈し丸底となる。外面にはハケ・ナデ調整を施し、内底には指頭圧痕が顕著に残る。大型の鉢(728)は丸底の底部から体部が外上方に開くもので、外面全面にタタキ目が残る。大型の729は丸底と思われる底部から体部が内湾気味に立ち上がった後、口縁端部が内面に稜をなして外反する。732も口縁端部が強く外反し水平面をなす。尖底の小型鉢(731)は外面全面ナデ調整だが、僅かに弱いタタキ目を認める。726・727は甑で、726は小さな平底の中央に、727は尖底部に焼成前穿孔を穿つ。何れもタタキ目を顕著に残す。

土器集中23(Fig.91・92)

区東端H-18・I-18グリッド周辺に分布する土器集中で、検出面は層の最上位、標高4.5m～4.6m前後にあたる。東西8.4m南北4mの範囲に焼土と土器が幾つかの小ブロックをなし、10cm前後の高低差をもって分布する。土器分布は西端に位置するAブロック、中央に位置し焼土と土器のまとまりからなるBブロック、東端に位置し南北方向に土器片が散在するCブロックの3つの小ブロックからなる。なお、CブロックにおいてはCで示した南側の土器群のみが標高4.7mレベルに達し高まりをもつ。又、Bブロック内には焼土67が存在している。焼土67は径40cmの不整円形の範囲に焼土を認めるもので、焼土上面からの骨片や土器の出土は確認できていない。

出土遺物は甕・鉢及び底部である。土器は口縁部点数にして甕24点、鉢3点、底部点数は壺又は甕14点を数える。甕の口縁部形態は、頸部まで残存する口縁部資料のうち、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さな段をなすものが1点、又、口縁部叩き出し成形によるものは0点である。又、底部は平底3点、尖底気味の小さな平底9点、尖底0点、丸底1点、尖底気味の底部先端が小さく凹状となるものが1点である。

図示したものは甕(733)、鉢(737)、底部(734～736・738～743)である。甕(733)は頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さく段をなす。外面にはタタキ目が残るがナデ・ハケによって消され弱

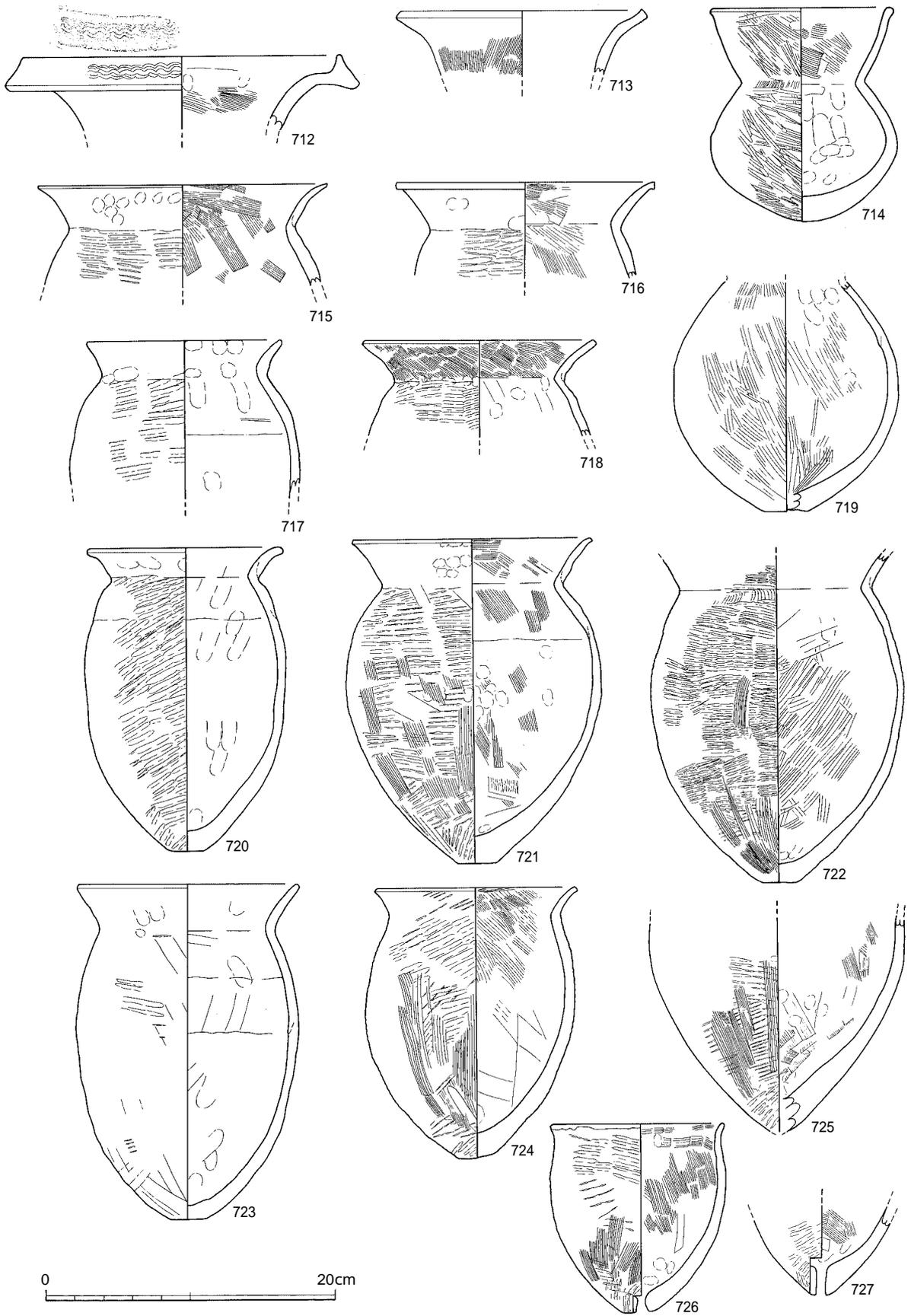


Fig.89 土器集中22出土遺物実測図1

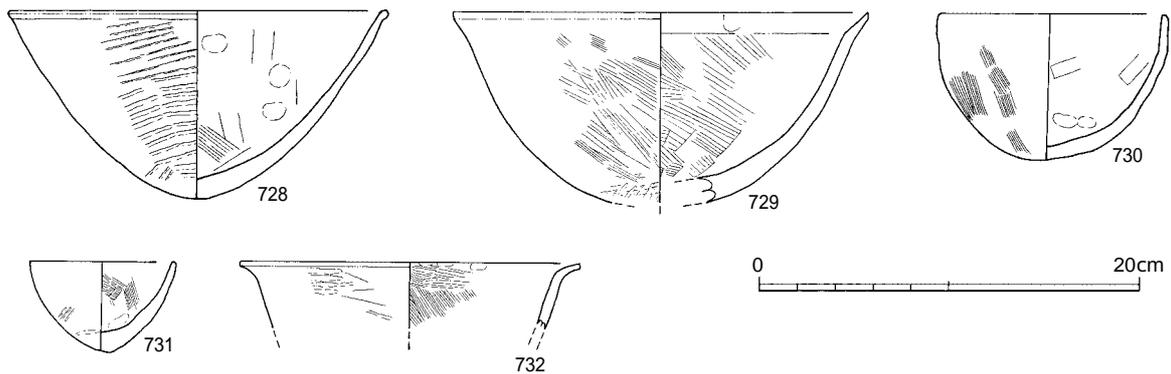


Fig.90 土器集中22出土遺物実測図2

いものとなる。中型の鉢(737)は内面に稜をなして口縁端部が僅かに外反する。底部(734～736・738～743)は尖底に近い小さな平底で占められる。

土器集中24(Fig.93)

区東端J-18グリッドに位置する小規模な廃棄土器群である。検出面は 層の最上位で、土器の最下位が標高4.28m前後にあたる。土器は60×37cmの狭い範囲から数個体がまとまって出土しており、検出時土坑状の遺構プランは確認できなかったが、各土器の形状が崩れることなく廃棄時の状態を良好に留めている点や同じ土器様相の遺物群検出レベルと比較して20～30cm程低いレベルとなっている点等から、廃棄段階にはいくらかの掘り込みを伴って土器廃棄が行われた可能性が高い。

同時期の土器様相を示す遺構・土器集中は北方向2mの地点に土器集中21・22が、東に2mの地点には 区 SX4が存在しているが、特に土器接合関係は確認されず、同時性や相互の関連性については言及できない。

土器は口縁部点数にして壺1点・甕1点・鉢2点を、底部は壺1点・甕1点・鉢2点を数えるが、この中に上半のみ・下半のみの甕2個体分が含まれていることから、最終的な推定個体数は大型の壺1点・中型の甕2点・大型の鉢2点の6個体となる。底部形態は、確認できたものについては平底0・尖底風の小さな平底0・尖底0・丸底3の比率である。この内、壺(748)鉢(749)は接合後完形に復原され、他の甕・鉢は上半あるいは下半のみの1/2程度の残存率である。出土時、各土器は4個体の土器の胴部～底部部分が四方から互いに内側へ向かい合う様に袋状に組み合わせられており、さらにその内側では、残る複数個体の土器が土圧によって押し潰され中に落ち込んだ様に幾重にも重なり合って出土した。なお、あくまでも推測の域を出ないが、出土時、丸底の底部が伏せた状態で内部最上面に落ち込み、又、壺の口縁から胴部にかけての破片が袋状土器塊の上面に被さるように出土している点からみて、土器廃棄時には袋状になった土器塊の天井部にも幾つかの底部・胴部が覆い被せられ全体を土器で包む繭型の形態をとっていた可能性がある。(なお、Fig.93図では最も土器片が密集する箇所をスクリーントーンで表示しているが、同表示箇所以外の空白部分には 層堆積土にあたる灰色シルトが流れ込んでいる。)

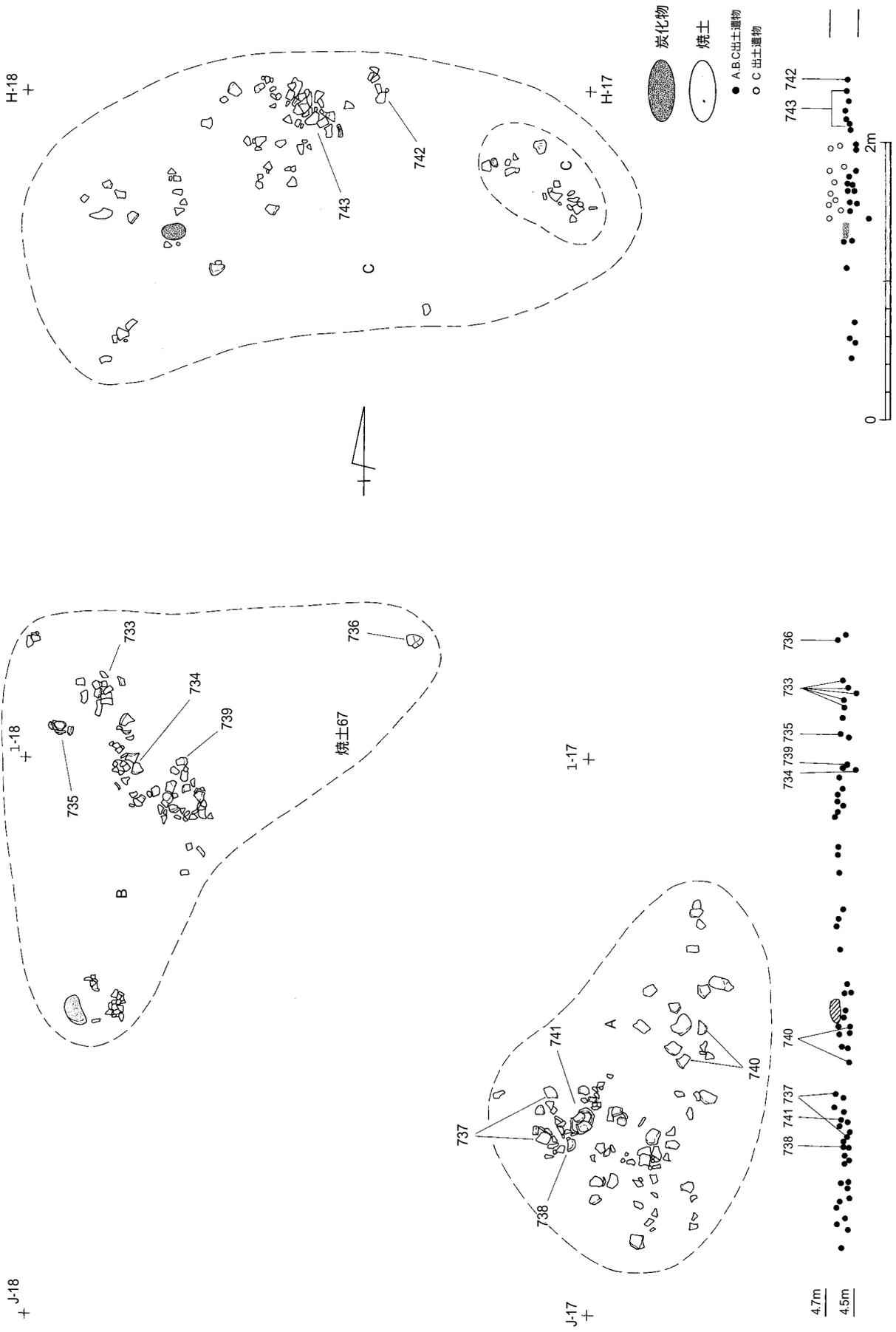


Fig.91 土器集中23遺物出土状況図

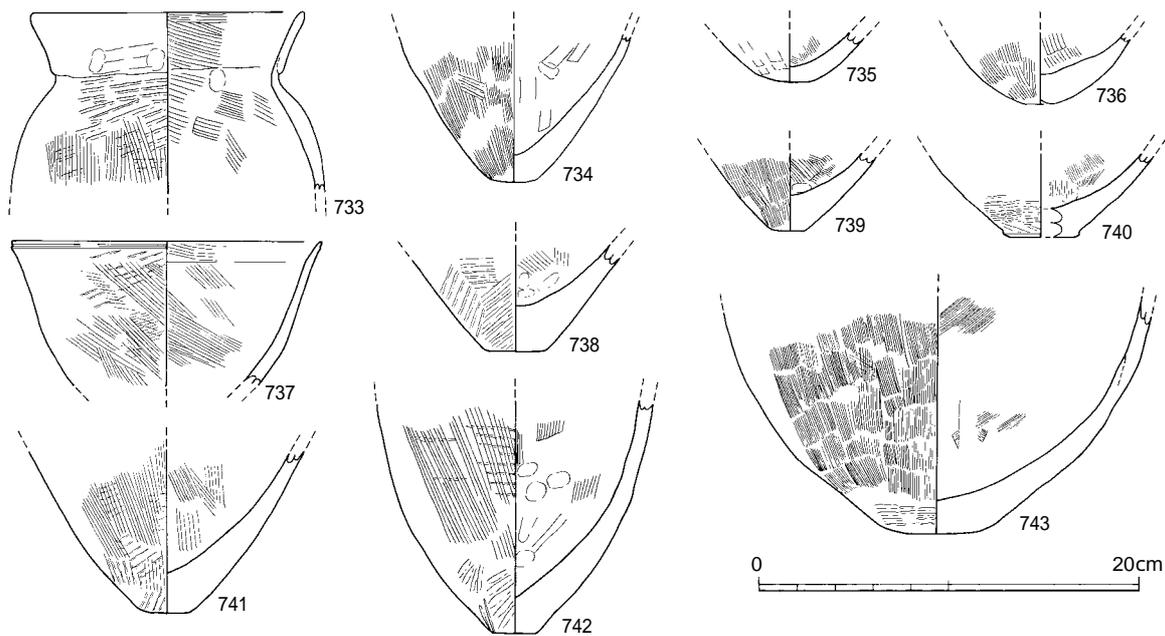


Fig.92 土器集中23出土遺物実測図

図示したものは壺(748)、鉢(749)である。広口壺(748)は中位に最大径をもち扁球形を呈する胴部から口縁部が大きく外反する。頸部外面には扁平な突帯を貼付し格子目文を刻む。底部は厚手で突出気味に張り出した丸底風のものとなる。口唇部は面取り横ナデするが、静止ナデによるもので、凹凸や歪みが著しい口縁部と同様に胴部も器形の歪みや凹凸が目立ち、底部脇には指頭圧痕が残る。外面は口縁部から頸部にかけてハケ調整が施され、胴部の外面調整はハケとナデ調整で仕上げるが、部分的にタタキ目が残る。大型の鉢(749)は丸底の底部から体部が内湾気味に立上がり口縁部は緩やかに外反する。外面は全面にタタキ目が残る。体部下位と上位の2箇所に変化と粘土帯接合痕が顕著で、製作過程の転換箇所が明瞭に観察される。

土器集中25(Fig.93)

区東端I-18グリッドに位置する小規模な廃棄土器群である。検出面は 層で、土器の最下位が標高4.25m前後にあたる。土器は60×65cmの比較的狭い範囲に数個体がまとまって出土しており、やはり、各土器が比較的良好に廃棄時の原型を保っている点や同じ土器様相の遺物群検出レベルと比べ20～30cm程低いレベルとなっている点等から、先の土器集中24と同様に廃棄時いくらかの掘り込みを伴って土器廃棄された可能性がある。

同時期の土器様相を示す遺構・土器集中は、東へ1mと非常に近接した位置に 区-SX4が存在し、又北方向2mの地点に 区-土器集中21・22が広がっているが、やはり土器接合関係が確認されないことから、相互の関連性については不明である。

土器は口縁部点数にして甕4点・鉢1点、底部点数は5点を数える。底部形態は尖底に近い小型化した平底で占められる。土器は何れも完形あるいは完形に近い形状を保ち廃棄時の状態を良好に留めて出土しており、廃棄時には完形の甕4点に完形の大型鉢1点を組み合わせて配置され、その後短期間の内に自然埋没あるいは人為的な埋め戻しがなされたものとみられる。

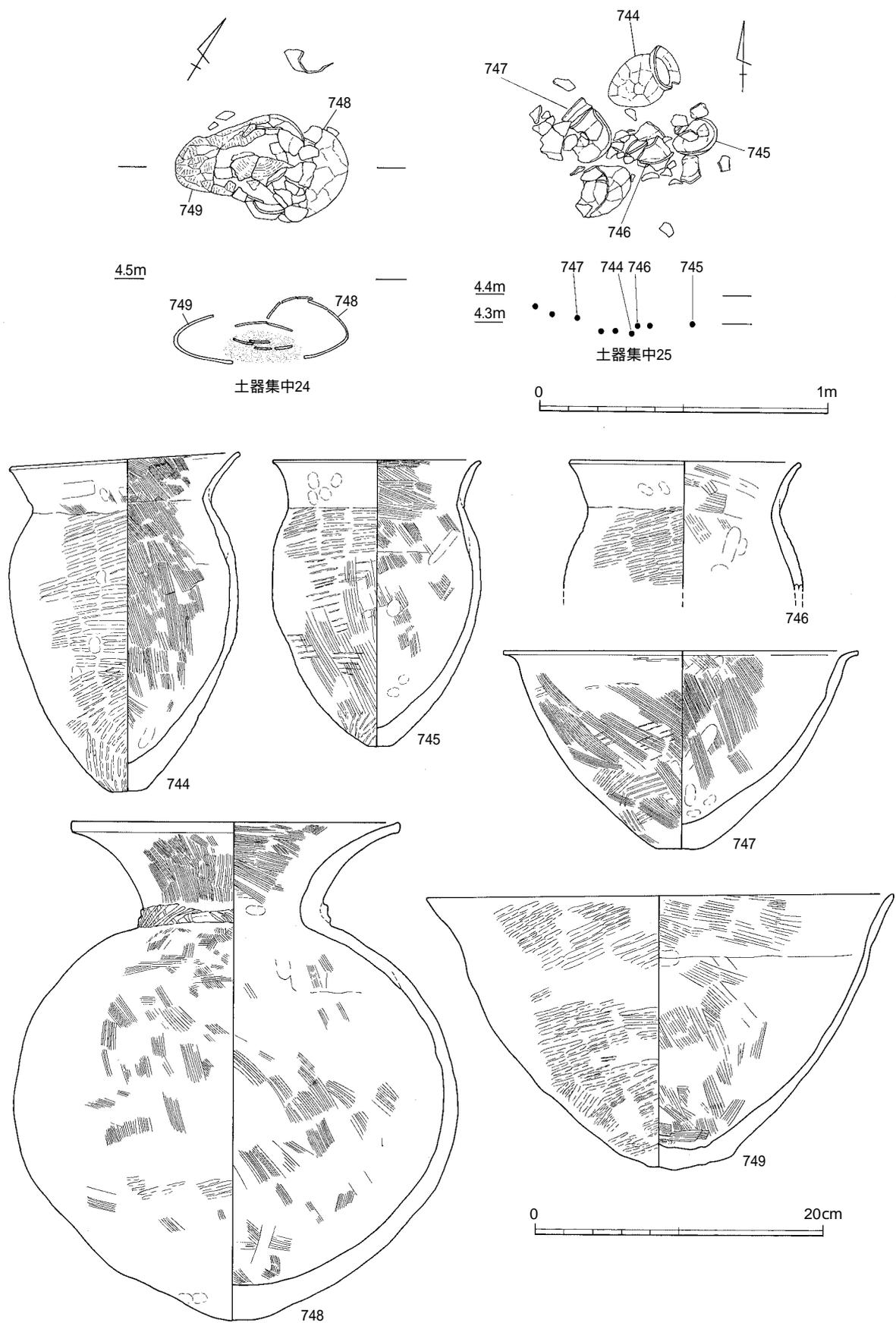


Fig.93 土器集中24・25遺物出土状況図及び出土遺物実測図

土器集中24(744～747) 土器集中25(748・749)

図示したものは甕(744・745・746)、鉢(747)である。甕(744)は胴部が上位の張る長胴形を呈し、口縁部は「く」字状に外反する。(745)は胴部が上位の張る卵倒形の形態を呈し口縁部は緩やかに外反する。底部は(744・745)とも尖底に近い小さな平底である。(744・745・746)は何れも頸部外面に粘土帯接合痕を残し、口縁部は指頭圧痕とナデ調整、胴部はタタキ目とハケ・ナデ調整と、接合部を境に器面の成形・調整が異なり明確に区分される。大型の鉢(747)は小さな平底を呈し、内湾気味に立上がる体部から口縁部が強く外反し水平に広がる。外面はタタキ目をハケ・ナデ調整によって消すが、部分的にタタキ目が残る。

焼土

焼土68(Fig.94)

区中央部、J-25グリッドに位置する。検出面は 層で、標高4.27mのレベルにあたり、1.3m四方に焼土と炭化物・灰が分布する。焼土の平面形態は不整楕円形を呈し、45×25cmの範囲に橙色に発色する強い焼土が広がる。焼土上面及び周囲には深さ2～3cmの浅い皿状の掘り込みを伴い、炭化物をブロック状に含む黄白色の灰が堆積する。又、焼土周囲にも径30cm、深さ4～5cmの浅い皿状の掘り込みが存在し、埋土は炭化物と焼土をブロック状に含む黄灰色シルトとなる。又、さらに焼土と掘り込み周辺には灰、炭化物の溜まりが周囲を取り巻くようにブロックをなして広がる。これら焼土・炭・掘り込みの上面には多量の炭化材とともに長楕円形の河原石と土器の廃棄を認める。

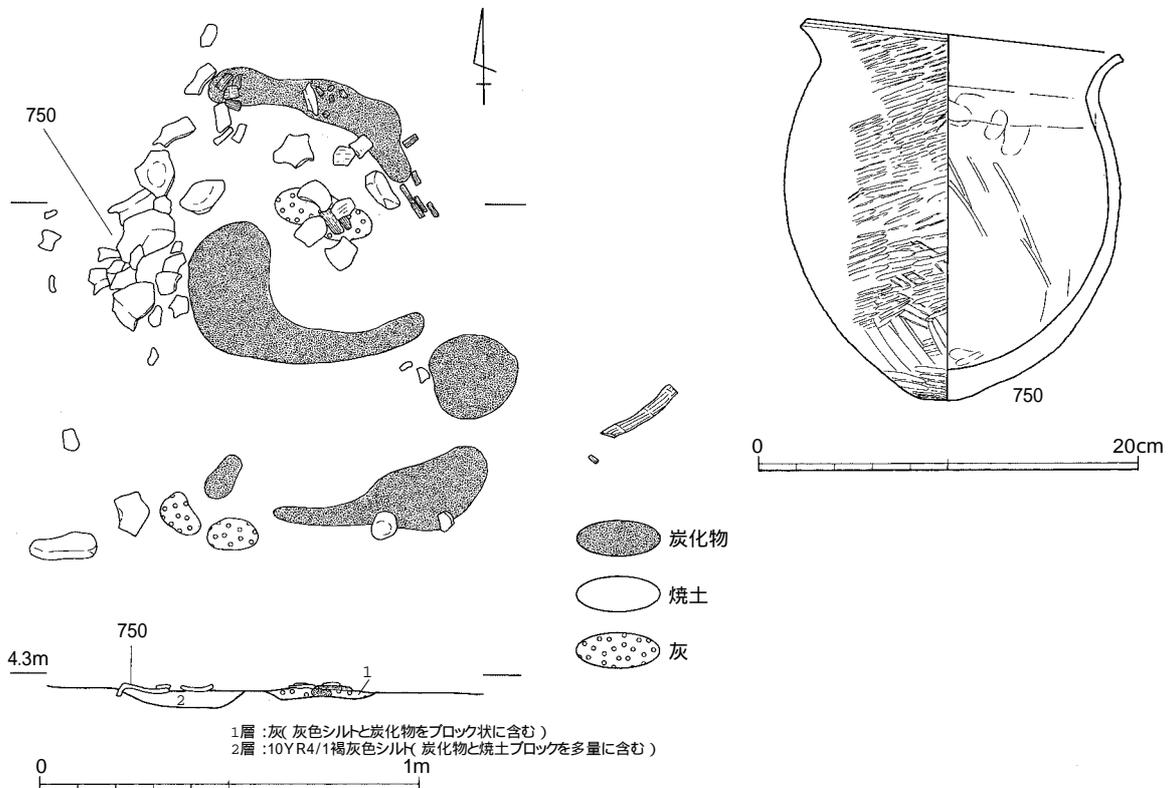


Fig.94 焼土68遺物出土状況図及び出土遺物実測図

図示したものは甕(750)である。750は口縁部叩き出し成形によるもので、中位が強く脹らむ胴部から口縁部が内面に稜をなして緩やかに外反する。底部は尖底に近いものとなるが、先端は小型化した平底をなし、外底にタタキ目を残す。

包含層出土遺物

絵画土器(Fig.95)

区中央部、I-23グリッドからは絵画を施した壺胴部片1点が出土している。出土層位は、層上位にあたるが、ほぼ同レベルで同時期の土器様相をみせる土器集中21の分布範囲からは西方に3m程離れて単独での出土となっている。

751は壺の頸部から胴部にかけての破片で、頸部外面には扁平な突帯を貼付し格子目文を施す。上半部のみ破片であるが、肩部の張りからみて、胴部は中位が強く脹らむ球形あるいは扁球形を呈するものとみられる。胴部外面にはタタキ目が顕著に残り、部分的にナデ調整を施す。この上胴部にはタタキ目を一旦ナデ調整によって消した後、その上面へヘラ状原体による描画が施される。描画は浅く線の細い線描によるもので、絵画構成は単純化・抽象化される。鹿等に類する中型哺乳類を描いたものと推測されるが、種の特定は難しいものと思われる。

・ 層出土の遺物(Fig.96)

図示したものは壺(752~756)、甕(757~764)、鉢(765~767)である。

広口壺(752)は球形を呈する胴部から口縁部が短く直立気味に立ち上がるもので、端部は丸くおさめる。広口壺(754)は口縁端部に粘土帯を貼付し上下に肥厚させる。外面には櫛描波状文を施す。複合口縁壺(753)は短い口頸部から口縁部が直立するもので、頸部外面に扁平な貼付突帯を巡らせハケ状原体による格子目文を刻む。複合口縁壺(755)は強く外反する口頸部から口縁部が直立する。壺(756)は頸部外面に扁平な突帯を貼付し、刺突文を施す。胴部は成形が粗雑で凹凸が目立ち、器

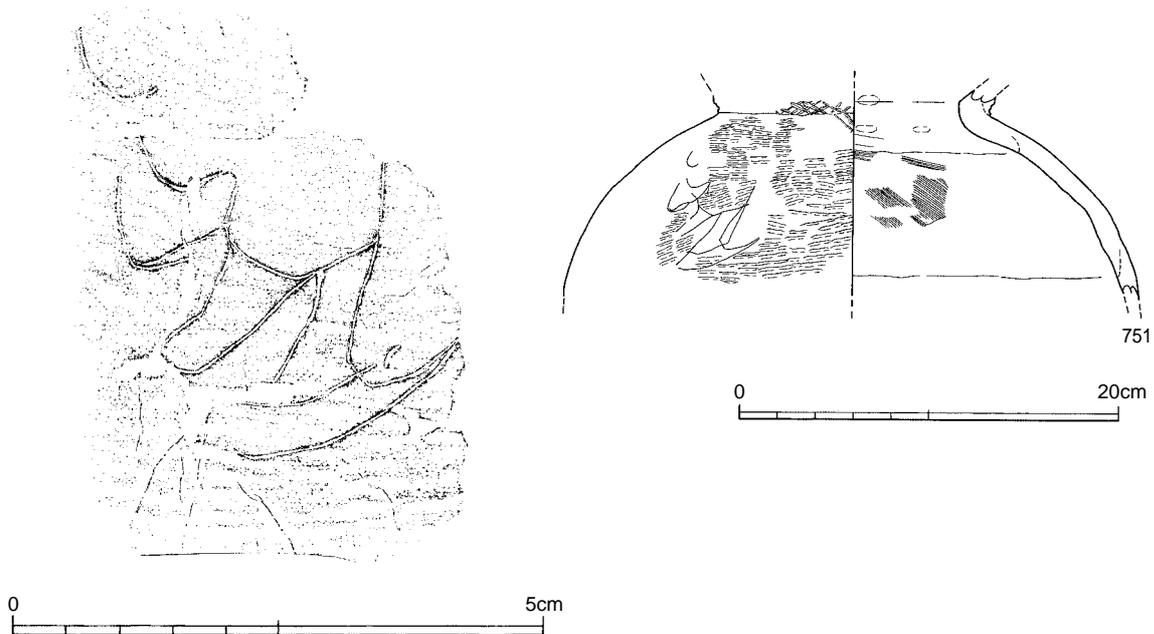


Fig.95 層出土遺物実測図1

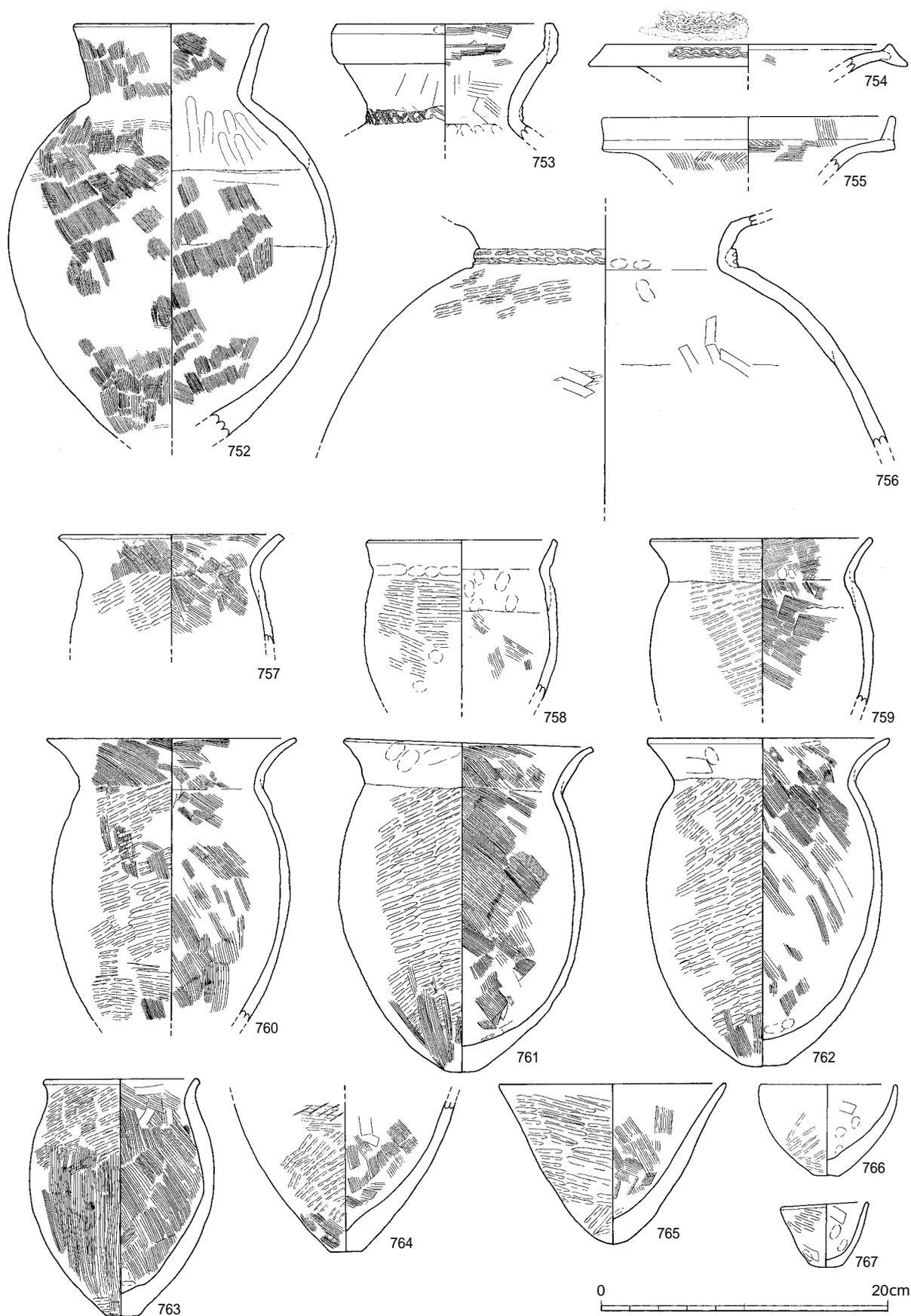


Fig.96 層出土遺物実測図2

面調整においてもナデ調整が不十分でタタキ目が残る。甕は口縁部が「く」字状に外反するもの(759～762)、丸味をもって外反するもの(757)、やや直立気味に立ち上がるもの(758・763)がある。又、成形特徴においては口縁部叩き出し成形のもの(763)、頸部外面に粘土帯接合痕を残すもの(759・760・761・762)がある。中型の鉢(765)は尖底の底部から体部が外上方へ直線的に立ち上がるもので、全面にタタキ目を顕著に留める。椀形を呈する小型の鉢(766)は尖底風に作り出した底部の中央が指頭押圧によって凹状を呈する。

焼土番号 (B)	層位	検出 レベル	グリッド	検出状況	形 態	規模 (cm)	出土遺物	備 考	分析資料番号
B 1	XII	2.86	D-8	単独	円形	40×40	無	-	-
B 2	XI	3.44	D-8	単独	楕円形・浅い掘り込みを伴う	50×30	土器細片	炭化物・灰	-
B 3		3.95	B-9	単独	円形	20×20	無	-	-
B 4	-1	4.20	C-8	単独	ブロック状	68×68	無	-	-
B 5	-1	4.15	C-13	土器集中5内	楕円形	36×42	土器	-	-
B 6	-1	4.18	C-13	土器集中5内	円形	36×36	無	灰・骨片	-
B 7	-3	3.66	D-9	単独	円形	40×40	無	-	-
B 8	-1	4.14	D-9	単独	不整形	35×25	無	骨片	分析資料7
B 9	-1	4.17	D-9	単独	楕円形	35×28	無	-	-
B 10	-1	4.22	D-11	単独	楕円形	52×38	土器細片	炭化物	-
B 11		3.77	D-12	単独	楕円形	30×20	無	-	-
B 12	-1	4.10	D-13	土器集中1の北側	円形	26×26	無	炭化物	-
B 13	-1	4.10	D-13	土器集中1の北側	ドーナツ状	40×40	無	炭化物	-
B 14	-1	4.10	D-13	土器集中1の北側	楕円形	40×24	無	炭化物	-
B 15	-1	4.09	D-14	単独	ブロック状	100×100	土器	灰・骨片・炭化物	分析資料19
B 16	-1	4.14	E-10	土器集中3内	不整楕円形	44×50	無	灰・骨片・炭化物	-
B 17	-3	3.91	E-11	単独	円形	40×40	無	-	-
B 18	-3	3.86	E-12	単独	円形	40×40	無	-	-

Tab.3 ・ 区検出焼土一覧表1

焼土番号 (B)	層位	検出 レベル	グリッド	検出状況	形 態	規模 (cm)	出土遺物	備 考	分析資料番号
B 19	-3	3.88	E -12	単独	円形	16×16	無	-	-
B 20	-1	4.15	E -13	土器集中1の 北側	円形	24×24	無	炭化物	-
B 21	-1	4.15	E -13	土器集中1内	円形	20×20	無	-	-
B 22	-1	4.15	E -13	土器集中1内	円形	18×18	無	-	-
B 23	-1	4.15	E -13	土器集中1内	円形	40×36	無	灰・炭化物	-
B 24	-3	3.89	E -14	単独	円形	40×40	無	-	-
B 25	-1	4.13	E -14	土器集中1内	円形	32×32	土器細片	灰・骨片・炭 化物	分析資料8
B 26	-1	4.08	E -15	土器集中1内	円形	42×40	土器	灰・骨片・炭 化物	-
B 27	-4	3.75	E -16	単独	円形	20×20	土器細片	-	-
B 28	-1	4.00	F -10	単独	楕円形	30×25	無	炭化物	分析資料9
B 29	-1	4.10	F -10	土器集中3内	不整楕円形	60×80	無	-	-
B 30	-3	3.94	F -12	単独	楕円形	32×16	無	-	-
B 31	-3	3.95	F -12	単独	円形	47×47	無	-	-
B 32	-1	4.01	F -12	土器集中2内	楕円形	48×32	土器細片	-	-
B 33	-1	4.15	F -13	単独	円形	25×25	無	-	-
B 34	-1	4.19	F -13	単独	円形	25×25	土器細片	-	-
B 35	-1	4.26	F -14	土器集中1内	円形	42×42	土器細片	骨粉・灰	-
B 36	-1	4.16	F -17	単独	不整形	62×60	土器細片	炭化物集中	-
B 37	-2	3.98	F -18	単独	円形	20×20	無	-	-
B 38	-3	3.95	G -13	単独	円形	15×15	無	-	-
B 39	-1	4.10	G -13	土器集中2内	楕円形・掘り 込みを伴う	58×38	土器	灰・骨片	分析資料10
B 40	-1	4.14	G -13	単独	円形	40×40	無	-	-
B 41	-1	4.17	G -13	単独	円形	33×33	土器細片	-	-
B 42	-1	4.18	G -13	単独	円形	32×30	土器細片	-	-

Tab.4 ・ 区検出焼土一覧表2

焼土番号 (B)	層位	検出 レベル	グリッド	検出状況	形 態	規模 (cm)	出土遺物	備 考	分析資料番号
B 43	-3	3.97	G -14	単独	楕円形	88×32	土器	骨片・炭化物集中・円礫	-
B 44		4.70	C -10	単独	円形	30×30	無	-	-
B 45		4.70	D -9	単独	円形	30×30	無	-	-
B 46		4.70	D -9	単独	円形	30×30	無	-	-
B 47	上層	4.79	D -13	単独	円形	56×?	無	-	-
B 48		4.43	E -11	土器集中9内	楕円形・ブ ロック状	120×50	無	-	-
B 49		4.70	C -9	土器集中16	不整円形	50×50	無	-	-
B 50		4.71	E -15	土器集中12内	楕円形	40×40	土器細片	灰・骨片・炭化物	-
B 51		4.40	F -12	土器集中9が 近接	円形	30×30	無	-	-
B 52		4.56	F -13	単独	円形	20×20	無	-	-
B 53		4.69	F -15	土器集中12内	楕円形	26×10	土器	-	-
B 54		4.84	F -15	土器集中12内	楕円形・ 土坑状	30×40	土器	-	-
B 55		4.61	F -16	土器集中12に 近接	円形・土坑状	80×80	土器	-	-
B 56		4.40	G -13	土器集中8内	楕円形・浅い 皿状	40×70	土器	灰・炭化物	-
B 57		4.22	H -17	土器集中7内	楕円形	30×50	無	炭化物	-
B 58		4.76	H -13	単独	円形	55×55	無	-	-
B 59		4.32	H -15	単独	ブロック状	60×60	無	骨片	-
B 60		4.75	H -15	土器集中10内	ブロック状	24×10	無	-	-
B 61		4.57	H -16	土器集中10内	不整形	48×32	無	-	-
B 62		4.77	H -16	土器集中10内	楕円形	12×8	無	炭化物	-
B 63		4.77	H -16	土器集中10内	ブロック状	28×28	土器細片	灰	-
B 64		4.80	H -16	土器集中10内	円形	30×28	無	炭化物	-
B 65		4.75	H -17	土器集中10内	円形	20×20	無	-	-
B 66		4.57	I -16	土器集中10内	円形	100×76	土器細片	灰・骨片	分析資料11

Tab.5 ・ 区検出焼土一覧表3

焼土番号 (B)	層位	検出 レベル	グリッド	検出状況	形 態	規模 (cm)	出土遺物	備 考	分析資料番号
B67		4.58	I - 18	土器集中23	不整円形	40 × 40	無	-	-
B68		4.24	J - 25	単独	楕円形	50 × 90	土器	灰・炭化物	-
B69		4.48	J - 19	土器集中21内	楕円形	20 × 30	土器	炭化物	-
B70		4.93	G - 15	土器集中15内	円形	30 × 30	無	-	-
ST1- B	XI	-	F - 16	遺構床面	円形	60 × 60	無	炭化物	-
SX1	XI	3.38	H - 17	単独	浅い落込みを 伴う	60 × 60	無	灰・骨片・ 炭化物	分析資料5
SK9		4.70	I - 17	単独	浅い皿状	50 × 50	土器	炭化物	-
SK10		4.57	I - 17	土器集中10に 近接	浅い皿状	130 × 130	土器	灰・骨片	分析資料12
SX4-中央B		-	I - 17	遺構床面	円形	32 × 60	土器	灰・骨片・ 炭化物	分析資料13
SX5-中央B		-	C - 9	遺構床面	楕円形	50 × 78	土器	炭化物	-

Tab.6 ・ 区検出焼土一覧表4

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
11-11	XIII層	深鉢	—	—	—	—	黒褐色。石英、他の粗砂多量。焼成堅緻。	屈曲部に断面三角形の突帯を貼付し、幅広い緩やかな刻目を施す。外面ハケ状原体による横方向の条痕。内面横方向のナデ。	外面と断面に煤。(廃棄後煤)
14-12	ST1	壺	—	—	—	—	黒褐色。灰色・白色系の砂と角礫を少量含む。焼成堅緻。	胴部外面に5条のヘラ描き沈線を1単位とする直線文を複数段巡らす。内外面ナデ。	
" -13	"	—	—	—	—	5.6	にぶい褐色。黒色・白色の砂粒含む。焼成堅緻。	底部脇と内底に木理の粗い縦ハケ。	
20-21	SK5	壺	15.0	—	—	—	暗灰黄色。灰白色の砂粒多量。焼成やや軟。	口縁部外面に粘土帯接合痕明瞭、小さく段をなす。口縁部から頸部に断面三角形の小突帯を4条巡らせ、上下には静止横ナデと指頭押圧を加える。肩部に横ハケ・楕円形浮文。内外面ナデ。	
" -22	SK6	甕	21.4	—	18.8	—	灰褐色。角閃石、灰色の角礫含む。焼成堅緻。	口縁部外面に幅1cmの粘土帯を貼付、外面に指頭押圧、接合部は僅かに段を残す。口唇部は横ナデし下端に刻目。上胴部に断面三角形の小突帯を2条貼付、上下への指頭圧痕と爪痕顕著。直下に列点文。内外面ナデ。内面指頭圧痕。	外面中位と内面下位に煤。
" -23	SK6	"	23.4	—	22.0	—	褐灰色。長石、灰色の角礫・細砂多量に含む。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1.7cmの粘土帯貼付、口唇部横ナデし下端に刻目、外面に連続した指頭押圧を施し接合部の段を潰す。上胴部に櫛描直線文を巡らせ刺突を入れた円形浮文と3条の微隆起帯を貼付、下段に櫛状原体による斜方向の連続文様を巡らす。内外面ナデ。口縁部内面指頭圧痕。	内外面と断面に煤。(廃棄後煤)
21-24	炭化物集中1	甕	16.8	—	—	—	黒褐色。石英・長石、角礫・細砂含む。焼成やや堅。	口縁は逆「L」字状を呈し、口唇部横ナデ、下端に「V」字状の鋭い刻み。内外面ナデ。口縁部内面に指頭圧痕。	外面に強い煤。
" -25	"	"	—	—	—	—	灰褐色。石英多量、雲母少量。焼成堅緻。	口縁部に2条の貼付突帯を巡らし、ハケ状原体による「V」字状の深い刻目を施す。内外面横ハケ。	外面に強い煤。
23-26	SK4	壺	11.0	—	—	—	にぶい橙色。石英・雲母、褐色・灰色系円礫と白色砂を含む。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1.8cmの粘土帯を貼付し、外面を上下双方から刻む。外面頸部を縦ハケ後、頸部から肩部にかけて列点文・多条の櫛描直線文・櫛描波状文・逆「ノ」字状の列点文・櫛描直線文・列点文が順に配される。内面口縁部横ハケ、頸部縦位の板ナデ。	内外面と断面に煤。(廃棄後煤)
" -27	"	"	—	—	—	—	にぶい黄褐色。石英・角閃石、砂・円礫少量含む。焼成堅緻。	頸部下端に櫛描直線文、肩部に列点文。外面縦ハケ、胴部ハケ・ナデ。内面ナデ・指頭圧痕。	
" -28	"	甕	—	—	—	—	にぶい褐色。石英・角閃石、円礫少量。	上胴部に櫛描直線文・円形浮文。内外面ナデ。	外面に弱い煤。
" -29	"	壺又は甕	—	—	—	—	黄灰色。灰色・白色の砂、円礫少量。焼成やや軟。	上胴部に櫛描直線文・櫛描波状文、断面三角形の突帯、横刻みの円形浮文を巡らす。外面ナデ。内面ハケ後ナデ。	
" -30	"	甕	24.0	—	20.6	—	黒褐色。黒色・白色の砂粒少量。焼成堅緻。	上胴部に列点文。外面縦ハケ、口縁部付近横ナデ・指頭圧痕。内面横ハケ・横ナデ。	外面口縁部と胴部中位に強い煤。
" -31	"	"	22.4	—	18.7	—	橙色。石英・雲母・角閃石、褐色系円礫少量。焼成やや堅。	口唇部横ナデし刻目。上胴部に櫛描直線文と櫛描波状文。外面上半横ナデ、下半ハケ後ナデ。内面横ハケ・ナデ、底部付近指頭圧痕。	外面全面と口縁部内面を赤彩。外面片側に強い煤。
" -32	"	"	17.7	—	—	—	黒褐色。角閃石多量、角礫・粗砂・細砂含む。焼成堅緻。	口唇部を横ナデし、2列の刺突文を施す。外面木理の粗い縦ハケ、端部付近ハケ後横ナデ・指頭圧痕。口縁部内面粗い横ハケ。	口縁部外面と断面に強い煤。(廃棄後煤)
" -33	"	"	—	—	—	—	黄灰色。円礫・粗砂、白色砂を多量に含む。	口縁部外面に幅1.8cmの粘土帯を貼付し外面を指頭押圧。内外面ナデ。	
" -34	"	"	—	—	—	—	にぶい褐色。角閃石多量、白・黒・赤色の砂、角礫少量含む。焼成堅緻。	口唇部を横ナデし、刻目。口縁部内外面強い横ナデ。外面ハケ・ナデ。内面板ナデ。	口縁部外面に煤。
" -35	"	"	—	—	—	—	橙色。灰色・黒色の砂少量。	上胴部に列点文。外面頸部縦ハケ、胴部横ナデ。内面ナデ・指頭圧痕。	外面に弱い煤。

Tab.7 遺物観察表-弥生時代1

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
23-36	SK4	甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色。石英・黒色・灰黒色の砂粒含む。	上胴部に列点文。外面頸部木理の粗い縦八ヶ、胴部ナデ。内面頸部粗い横八ヶ・胴部ナデ。	外面に弱い煤。
" -37	"	—	—	—	—	5.8	黒褐色。石英・雲母・長石、赤色風化礫他の角礫を含む。焼成やや堅。	外面縦八ヶ・ナデ。内面ナデ。	外面に強い煤。
" -38	"	壺	—	—	25.3	—	灰白色。灰色の粗砂・円礫やや多量。焼成やや軟。	内面胴部上位に粘土帯接合痕。外面右下がりの八ヶ後ナデ。内面ナデ。	
" -39	"	—	—	—	—	5.0	暗赤褐色。角閃石少量、灰色の円礫・細砂少量。焼成堅緻。	外面縦八ヶ。内面板ナデ。	外面に煤。
" -40	"	—	—	—	—	5.0	にぶい褐色。角閃石、円礫・砂を含む。焼成堅緻。	内外面ナデ。内底板ナデ・指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -41	"	—	—	—	—	4.8	にぶい褐色。石英・角閃石、白色・黒色砂含む。焼成やや堅。	内外面ナデ。底部脇指頭圧痕。底部外面指頭押し僅かに凹状。	外面に弱い煤。
" -42	"	—	—	—	—	5.4	灰黄褐色。石英・角閃石、白色・黒色の砂粒含む。焼成堅緻。	外面縦八ヶ。底部脇指頭圧痕。内底板ナデ・指頭圧痕。外底中央指頭押しにより僅かに凹状。	外面に弱い煤。
" -43	"	—	—	—	—	6.9	にぶい褐色。円礫少量、白色・黒色砂多量。焼成やや堅。	内外面ナデ。底部脇指頭圧痕。内底板ナデ・指頭圧痕。外底中央指頭押しにより僅かに凹状。	外面に弱い煤。
" -44	"	高杯	19.7	—	—	—	灰黄褐色。灰黒色・黒色の角礫・粗砂を多量に含む。焼成軟。	内外面ナデ・指頭圧痕。	
24-49	SX2	甕	15.7	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色の円礫・粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1・の粘土帯貼付。上胴部に斜方向の列点文。内外面ナデ・指頭圧痕。	
" -50	"	壺	12.8	—	—	—	褐灰色。灰白色の粗砂多量。	口唇部強い横ナデ。内外面ナデ。	外面と断面に煤。(廃棄後煤)
" -51	"	—	—	—	—	4.0	白色・黒色・灰色系角礫・粗砂少量。焼成やや堅。	内外面ナデ。内底指頭圧痕。底部凸状。	
" -52	"	甌	—	—	—	4.2	にぶい黄色。円礫・角礫多量。	内外面ナデ。内底指頭圧痕。底部に径6cmの焼成前穿孔。	
" -53	"	—	—	—	—	4.4	にぶい黄褐色。円礫・粗砂多量。焼成やや堅。	内外面ナデ。内底指頭圧痕。	
27-55	土器集中1	壺	14.2	—	—	7.0	明褐灰色。白色細砂、灰色砂を含む。焼成やや堅。	口縁部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残すが、段は指頭押しにより潰す。内外面ナデ。内底強い指ナデ。	
" -56	"	"	12.0	—	—	—	にぶい赤褐色。石英・雲母、赤色風化礫、褐色系円礫を含む。焼成堅緻。	頸部下端に櫛描直線文・櫛描山形文。口縁部横ナデ。外面八ヶ後ナデ・指頭圧痕。内面ナデ・指頭圧痕。	
" -57	"	"	6.8	—	—	—	褐灰色。灰色の円礫多量。焼成やや堅。	口縁部は丸くおさめる。肩部内面に粘土帯接合痕。内外面ナデ・指頭圧痕。	
" -58	"	"	13.8	—	—	—	にぶい黄褐色。石英、角礫・粗砂やや多量。	口縁部は丸くおさめる。内外面ナデ。	内外面に煤。
" -59	"	"	14.3	—	—	—	褐灰色。石英、黒色・灰色の粗砂・細砂少量。焼成やや堅。	口唇部横ナデし、刺突文。外面木理の粗い縦八ヶ。内面横八ヶ。	
" -60	"	"	18.9	—	—	—	橙色。角閃石多量、黒色・白色・赤色の砂粒含む。焼成軟。	口唇部横ナデ、端部に斜格子文。外面木理の粗い縦八ヶ。内面横八ヶ。	
" -61	"	"	—	—	—	—	にぶい黄褐色。円礫・粗砂多量。黄白色砂多量(砕いたもの)。焼成やや軟。	口縁部外面に幅4cmの扁平な粘土帯を貼付、外面に圧痕文、下端に楕円形浮文。	
" -62	"	"	15.0	—	20.2	—	褐灰色。角閃石少量、円礫少量・灰色黒色の砂含む。	口唇部横ナデしへラ状原体による波状文。頸部下端に列点文。内外面八ヶ・ナデ。	外面に弱い煤。体部中位片側に黒斑。
" -63	"	壺又は甕	27.5	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色の円礫と粗砂多量。黄白色砂多量(砕いたもの)。焼成やや堅。	口縁部外面に幅3.5cmの粘土帯を貼付し接合部を連続的に指頭押し。内外面ナデ。	

Tab.8 遺物観察表-弥生時代2

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
27-64	土器集中 1	甕	14.6	—	—	—	橙色。円礫多量。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1cmの粘土帯を貼付し端部を横ナデ、外面指頭押圧。上胴部に楕円形浮文・櫛描直線文。内外面ナデ。	
" -65	"	壺又は甕	16.0	—	—	—	灰褐色。角礫・粗砂多量。黄白色砂多量(砕いたもの)。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1cmの粘土帯を貼付し、外面を指頭押圧。内外面ナデ。	外面に弱い煤。
" -66	"	甕	16.6	—	—	—	灰黄褐色。円礫・角礫・粗砂やや多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.6cmの粘土帯を貼付、端面取りし斜方向の刻目、外面は連続的に指頭押圧を加える。外面頸部横八ケ、上胴部楕円形浮文と斜方向の列点文。内面ナデ。	外面に強い煤。
" -67	"	"	15.0	—	—	—	褐灰色。円礫やや多量、灰色砂含む。焼成堅緻。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯貼付、端部に格子目文、外面は指頭押圧。外面八ケ・ナデ。内面ナデ。	内面に煤。
" -68	"	"	15.9	—	—	—	にぶい赤褐色。角閃石、灰色・白色の砂を含む。	口縁部外面を面取り斜方向の刻目。上胴部に2条の櫛描直線文と縦方向櫛描文の組み合わせ文様。内外面ナデ。口縁部付近指頭圧痕。	口縁部外面に煤。
" -69	"	壺又は甕	14.6	—	—	—	にぶい橙色。石英・角閃石、粗砂灰色・黒色の砂粒を含む。焼成堅緻。	口縁部、八ケ状原体による刻目。頸部外面横ナデ、内面横八ケ。	
" -70	"	甕	18.0	—	—	—	にぶい赤褐色。石英・長石・角閃石少量、円礫少量、砂含む。焼成堅緻。	口縁部外面を面取り斜方向の刻目。内外面ナデ。口縁部付近に指頭圧痕。	口縁部外面に煤。
" -71	"	"	20.0	—	—	—	黒色。灰白色の角礫・粗砂を含む。焼成堅緻。	口唇部に圧痕文。上胴部に沈線と列点文。口縁部は静止横ナデにより凹凸が著しく、上胴部の沈線も上下への乱れが著しい。	外面に強い煤。
" -72	"	甕	22.6	—	21.0	—	灰褐色。石英・長石・雲母、赤色風化礫を含む。焼成堅緻。	口唇部を横ナデし刺突文を施す。胴部上位に1状のへら描き沈線(緩やかに曲がるもの)、直下に列点文。内外面ナデ・指頭圧痕。	内外面に煤。
" -73	"	"	14.6	—	17.0	—	石英・角閃石やや多量。焼成堅緻。	頸部に櫛描直線文、肩部に櫛描波状文・列点文。外面口縁部はナデ・指頭圧痕、胴部木理の粗い横八ケ。内面口縁部八ケ、胴部ナデ・指頭圧痕。	外面に強い煤。
28-74	"	"	16.7	—	—	—	にぶい赤褐色。石英・角閃石、砂少量。焼成堅緻。	口唇部横ナデ。内外面ナデ。頸部付近に指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -75	"	"	18.2	—	—	—	にぶい橙色。石英少量、砂粒少量。焼成やや軟。	口唇部横ナデ。内外面ナデ。頸部付近に指頭圧痕。	
" -76	"	"	17.5	—	—	—	灰褐色。円礫、黄白色砂多量(砕いたもの)。焼成やや軟。	口唇部横ナデ。内外面八ケ・ナデ。口縁部付近に指頭圧痕。	外面部分的に煤。
" -77	"	"	15.5	—	—	—	灰褐色。角閃石少量、砂少量含む。焼成堅緻。	口唇部横ナデ。外面強い横ナデ。内面八ケ・ナデ・指頭圧痕。	外面と断面に煤(廃棄後煤)
" -78	"	"	14.4	—	—	—	黒褐色。石英・角閃石、赤色風化礫他の砂粒を含む。焼成堅緻。	上胴部に列点文。口唇部横ナデ。外面横ナデ。内面、頸部木理の粗い横八ケ、他はナデ。	口縁部外面と内面の一部に強い煤。
" -79	"	"	—	—	—	—	にぶい黄褐色。円礫・砂少量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.2cmの粘土帯を貼付し、口唇部全面に斜方向の刻目。内外面ナデ。	
" -80	"	"	—	—	—	—	にぶい橙色。角礫・粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.7cmの粘土帯を貼付、口唇部は強く横ナデし下方へ肥厚、粘土帯外面は指頭押圧。内外面ナデ。	口縁部外面に弱い煤。
" -81	"	"	—	—	—	—	灰白色。角礫・円礫・砂多量。	上胴部内面に粘土帯接合痕。外面上胴部に櫛描直線文・楕円形浮文、その上下に櫛状原体による斜方向の連続文様を施す。内外面ナデ。	
" -82	"	"	—	—	—	—	にぶい橙色。角閃石多量、灰黒色の粗砂・細砂含む。焼成堅緻。	上胴部に1条の沈線と櫛状原体による斜方向の連続文様。内外面ナデ。	
" -83	"	"	—	—	—	—	黒褐色。灰白色の粗砂多量。焼成堅緻。	外面に斜方向の長く鋭利な刻目。口縁部横ナデ。	

Tab.9 遺物観察表-弥生時代3

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
28-84	土器集中 1	甕	—	—	—	—	橙色。石英・角閃石少量。 灰黒色・黒色・赤色の砂 を含む。焼成やや堅。	口縁部に幅広の深い刻目。内外面横ナデ。	口縁部外面に 強い煤。
" -85	"	"	—	—	—	—	褐色。石英少量、角閃石 多量、黒色・白色・赤色 の砂を含む。焼成堅緻。	上胴部に双線と櫛描山形文を施す。内外 面ナデ。	
" -86	"	"	—	—	—	—	灰褐色。角礫・粗砂多量。 焼成堅緻。	上胴部に1条沈線と楕円形浮文、直下に 縄状原体による圧痕を施す。内外面ナデ。	
" -87	"	壺又は甕	—	—	—	—	橙色。角礫・円礫、灰黒色 の砂を含む。焼成やや 軟。	胴部外面に複数段の櫛描直線文・櫛描波 状文・縦位の直線文を配する。内面ナデ。	
" -88	"	甕	—	—	—	—	褐灰色。灰色・白色の円 礫・角礫・粗砂多量。焼 成やや堅。	上胴部に楕円形浮文と櫛状原体による斜 方向の連続文様を施す。内外面ナデ。	
" -89	"	"	—	—	—	—	褐灰色。角閃石、灰色の 円礫少量、黒色・白色の 砂を含む。焼成堅緻。	上胴部に櫛描直線文・列点文を施す。外 面頸部横ナデ、胴部右下がりのハケ。内 面頸部ハケ、胴部板ナデ。	
" -90	"	鉢	18.6	—	—	—	橙色。円礫と白色粗砂多 量。	外面横ナデ。内面、口縁部は木理の粗い 横ハケ後ナデ、体部ナデ・指頭圧痕。	外面に煤。
" -91	"	鉢	20.4	—	—	—	橙色。石英・角閃石少量。 焼成やや堅。	口縁部は強く外反する。口縁端部に刻目。 体部外面木理の粗い縦ハケ、内面横ハケ。	外面、赤色塗 彩。
" -92	"	—	—	—	—	6.2	褐灰色。角閃石、円礫、 黒色・灰色の砂を含む。 焼成やや堅。	外面縦ハケ。内面不定方向のハケ。内底 ヘラナデ。	外面に弱い煤。
" -93	"	—	—	—	—	5.5	にぶい橙色。灰色系の角 礫・円礫・粗砂多量。焼 成やや軟。	外面縦ハケ。内底指ナデ。	外面及び断面 に煤。(廃棄 後煤)
" -94	"	—	—	—	—	6.4	灰黄褐色。赤色風化礫、 灰色の粗砂・細砂を含む。 焼成軟。	内外面ナデ。内底強い指ナデ。	外面に弱い煤。
" -95	"	—	—	—	—	6.3	にぶい褐色。石英・角閃 石、黒色の円礫少量。黒 色・灰色の砂を含む。焼 成やや堅。	内外面ナデ。底部脇に指頭圧痕。内底指 ナデ。	
" -96	"	—	—	—	—	6.5	にぶい褐色。石英・角閃 石多量。焼成堅緻。	内外面ナデ。内底指ナデ。	底部脇に弱い 煤。
" -97	"	—	—	—	—	7.2	にぶい黄褐色。角閃石少 量、灰黒色の角礫・粗砂 多量。焼成堅緻。	外面ナデ。底部脇に強い横ナデ。内面ハ ケ・ナデ。内底強い指ナデ。	内底に強い煤。
" -98	"	—	—	—	—	6.0	灰褐色。円礫、灰黒色・ 白色の粗砂多量。焼成堅 緻。	内外面ナデ。底部脇に強い横ナデ。	
" -99	"	—	—	—	—	6.6	にぶい褐色。灰色・褐色 の円礫を含む。焼成やや 堅。	内外面ナデ。内底付近強い板ナデ。	内外面と断面 に強い煤。(廃 棄後煤)
" -100	"	—	—	—	—	6.0	にぶい橙色。石英・角閃 石多量。焼成堅緻。	外面縦ハケ。内底付近強い板ナデ。	
" -101	"	—	—	—	—	4.8	褐灰色。石英・角閃石多 量。角礫少量。焼成堅緻。	外面縦ハケ・板ナデ。内面指ナデ・板ナ デ。底部脇に指頭圧痕。	内外面に煤。
" -102	"	—	—	—	—	5.1	橙色。石英少量、角閃石 多量。焼成堅緻。	内外面ナデ。底部脇と内底に強い板ナデ。	
" -103	"	—	—	—	—	6.6	褐灰色。円礫・角礫、灰 色・白色の粗砂多量。焼 成やや堅。	内外面ナデ。内底強い指ナデ。底部脇指 頭圧痕。外底中央指頭による押圧で僅か に凹状。	外面に弱い煤。
" -104	"	—	—	—	—	4.0	灰褐色。円礫・灰黒色の 粗砂多量。焼成やや堅。	内外面ナデ。内底指頭圧痕。外底中央指 頭とヘラによる押圧で凹状。	外面に弱い煤。
" -105	"	—	—	—	—	8.0	にぶい赤褐色。石英・角 閃石含む。焼成堅緻。	内外面板ナデ。内底指頭圧痕顕著。底部 は円盤状に張り出す。	内面と断面に 強い煤。(廃 棄後煤)
" -106	"	—	—	—	—	7.0	橙色。石英少量、角閃石 多量、灰色系粗砂少量。 焼成堅緻。	外面ハケ。内面木理の粗い縦ハケ、縦方 向の強い板ナデ。	内面と断面に 強い煤。(廃 棄後煤)

Tab.10 遺物観察表-弥生時代4

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
28-107	土器集中 1	甕	—	—	—	6.7	灰白色。灰色系円礫・粗砂多量。焼成やや堅。	外面胴部中位に列点文。内外面ナデ。	
31-120	土器集中 2	壺	9.2	—	22.5	5.6	にぶい黄橙色。雲母、灰色系粗砂含む。焼成やや軟。	口唇部横ナデ。内外面ナデ・指頭圧痕顕著。	外面底部付近に弱い煤。
" -121	"	"	6.1	—	—	—	にぶい黄橙色。灰色・灰白色の粗砂多量、角礫少量。焼成やや軟。	口縁部は丸くおさめる。口縁部付近に円形浮文を貼付。内外面ナデ。	
" -122	"	甕	25.6	—	27.7	—	にぶい橙色。灰色系円礫・粗砂やや多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.8cmの粘土帯を貼付、口唇部は面取り斜方向の浅い刻目を施す。肩部に櫛描直線文・楕円形浮文・ハケ状原体による斜方向の圧痕文。外面ナデ。内面ナデ・指頭圧痕。	
" -123	"	"	15.5	—	—	—	褐灰色。角閃石・灰色系粗砂・赤色風化礫少量。焼成やや軟。	口唇部下端に刻み。口縁部外面に指頭圧痕。頸部内外面横ナデ。	外面に煤。
" -124	"	"	16.2	—	—	—	橙色。角閃石、角礫少量、細砂含む。焼成堅緻。	頸部内面に粘土帯接合痕明瞭。外面ナデ・指頭圧痕。内面横ナデ。	外面に煤。
" -125	"	"	17.8	—	21.2	—	にぶい赤褐色。角礫・粗砂多量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付し、口唇部に斜方向の刻目、粘土帯外面に指頭押圧を連続的に加える。上胴部に横刻目の円形浮文・櫛描直線文・鋭利な櫛状原体による斜方向の連続文様。内外面ナデ・指頭圧痕。	
" -126	"	"	14.8	—	—	—	にぶい赤褐色。石英・角閃石、他粗砂・角礫少量。焼成堅緻。	口縁部内外面に強い横ナデ。上胴部に沈線と列点文を配する。外面横ナデ。内面ナデ、接合部付近に指頭圧痕顕著。	外面口縁部と胴部中位に強い煤。
" -127	"	鉢	16.2	—	—	—	橙色。黒色・白色系の砂少量。焼成やや軟。	外面横ハケ後横ナデ。内面ナデ・指頭圧痕。	
" -128	"	—	—	—	—	5.4	黄褐色。長石・角閃石、他の砂を含む。焼成やや堅。	外面ハケ後ナデ。内面ナデ。底部脇強い横ナデ。	内面に強い煤。
" -129	"	壺	—	—	—	—	褐灰色。石英・長石多量、角閃石少量、角礫少量黒色・白色系粗砂多量。	外面に断面三角形の突帯を複数貼付。外面繊維状の原体による横方向の擦痕。内面ナデ。	
" -130	"	甕	—	—	—	—	灰褐色。角閃石、赤色風化礫を含む。焼成やや軟。	上胴部に断面三角形の小突帯を貼付し直下に列点文を施す。内外面ナデ。	外面に煤。
33-131	土器集中 3	壺	13.8	—	—	—	灰黄褐色。灰色系円礫、黄白色・灰色の粗砂多量。焼成軟。	頸部外面に接合痕明瞭。さらに口縁部外面に幅2cmの粘土帯を貼付し、粘土帯下端に指頭押圧を連続的に加え段を潰す。口縁部内面にも指頭圧痕。内外面ナデ。	外面に弱い煤。
" -132	"	甕	16.6	—	15.6	—	にぶい橙色。石英・角閃石多量、角礫少量、黒色・白色系砂を含む。焼成堅緻。	口唇部面取りし下端に刻目。上胴部に乱れの強い櫛描直線文。内外面ナデ・指頭圧痕。	外面胴部中位と口縁部に強い煤。
" -133	"	"	23.1	—	—	—	橙色。角閃石多量、黒色・赤色系砂多量、円礫少量。	頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残す。内外面ナデ。口縁部内面指頭圧痕顕著。	外面に強い煤。
" -134	"	壺	12.2	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色系円礫と粗砂多量。焼成軟。	口縁部外面に幅1.2cmの粘土帯を貼付し外面を指頭圧痕。外面ハケ後ナデ。内面ナデ。	
" -135	"	"	14.0	—	—	—	黒褐色。円礫・粗砂多量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付し外面横ナデ・指頭圧痕。内外面ナデ。	口縁部外面に煤。
" -136	"	壺又は甕	18.0	—	—	—	にぶい赤褐色。角礫少量と砂含む。焼成堅緻。	口縁部外面に幅1.6cmの粘土帯を貼付し、外面ハケ状原体による圧痕文を連続的に加える。	
" -137	"	甕	15.0	—	—	—	褐灰色。灰色系円礫・角礫、灰白色の粗砂・細砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.7cmの粘土帯を貼付、口唇部を面取り斜方向の刻目を施す。粘土帯下端を指頭押圧し段を潰す。内外面ナデ。	外面に弱い煤。
" -138	"	"	20.0	—	—	—	灰黄褐色。円礫・粗砂多量。焼成やや軟。	口縁部外面に幅2.1cmの粘土帯を貼付、外面にハケ状原体による刻目を施す。口縁部内面に円形浮文。頸部外面に列点文。内外面ナデ。	外面に弱い煤。

Tab.11 遺物観察表-弥生時代5

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
33-139	土器集中 3	甕	20.3	—	—	—	褐灰色。角礫・円礫、灰白色の砂多量。焼成やや軟。	口縁部外面に粘土帯貼付、端部を強く面取り斜方向の刻目を施す。上胴部に櫛描直線文と楕円形浮文。	頸部下端に櫛描直線文。
" -140	"	"	16.3	—	—	—	灰黄褐色。灰色系の円礫・砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付し外面に斜方向の刻目。内外面ナデ。	
" -141	"	"	18.8	—	—	—	にぶい褐色。円礫・粗砂多量。黄灰色の砂(砕いたもの)多量。焼成やや堅。	口縁部外面に粘土帯を貼付、端部を面取り斜方向の刻目。内外面ナデ。	
" -142	"	"	18.8	—	—	18.8	灰褐色。石英・角閃石含む。焼成堅緻。	口唇部横ナデし、下端に刻目。上胴部に乱れの強い櫛描直線文。頸部横方向の板ナデ。内面ナデ・指頭圧痕。	外面口縁部に強い煤。
" -143	"	"	20.1	—	—	—	灰褐色。円礫・粗砂含む。焼成堅緻。	頸部外面に粘土帯接合痕を残し、小さく段をなす。接合部への指頭押圧顕著。口縁部内外面板ナデ・指頭圧痕。	外面に煤。
" -144	"	壺又は甕	18.0	—	—	—	にぶい橙色。灰色系円礫、黄灰色の砂(砕いたもの)多量。焼成やや軟。	口唇部強い横ナデ。外面ハケ。内面ナデ・指頭圧痕。	
" -145	"	甕	—	—	—	—	にぶい橙色。黒色・白色・赤色系の砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅2.2cmの粘土帯を貼付し、端部に斜方向の刻目。粘土帯外面に連続した指頭押圧を加え、接合部は小さく段を残すのみとなる。	
" -146	"	—	—	—	—	—	にぶい橙色。粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅2.4cmの粘土帯を貼付。口縁部外面ナデ、粘土帯接合部に指頭圧痕。内外面ナデ。	
" -147	"	甕	—	—	—	—	灰白色。円礫・粗砂・砂多量。	上胴部に円形浮文・列点文。	
" -148	"	"	—	—	—	—	灰黄褐色。角閃石、灰白色・黄白色の粗砂を含む。焼成やや堅。	上胴部に沈線、その上下へ列点文を組み合わせる。内外面ナデ。	
" -149	"	壺又は甕	—	—	—	—	灰黄褐色。円礫・砂を含む。焼成軟。	上胴部に櫛描波状文(乱れの強いもの)。内外面ナデ。胴部内面指頭圧痕顕著。	
" -150	"	"	—	—	—	—	角閃石・石英、黒色・灰白色の砂、円礫含む。焼成やや堅。	上胴部にヘラ状外面による圧痕文と櫛描波状文。外面指頭圧痕・ナデ。内面ナデ。	
" -151	"	甕	—	—	—	—	にぶい赤褐色。石英多量、黒色系・赤色系砂粒含む。焼成堅緻。	口唇部面取りし斜方向の刻目。口縁部外面縦ハケ、内面横ハケ。	
" -152	"	—	—	—	—	6.0	褐灰色。灰色系円礫多量。焼成軟。	外面縦ハケ、後ナデ。内底指頭圧痕、ナデ。	
" -153	"	—	—	—	—	5.6	明赤褐色。石英多量、黒色砂少量。焼成堅緻。	内外面ナデ。底部脇強い板ナデ。内底指ナデ。	内面と断面に強い煤。(廃棄後煤)
" -154	"	—	—	—	—	5.3	にぶい赤褐色。石英、角閃石多量。焼成堅緻。	内外面ナデ。底部脇指頭圧痕。内底板ナデ・指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -155	"	—	—	—	—	5.6	灰褐色。石英・角閃石少量。石英やや堅。	外面木理の粗いハケ後ナデ。内面ナデ。内底強い指ナデ。	外面に弱い煤。
" -156	"	—	—	—	—	5.4	にぶい赤褐色。灰白色系角粒粗砂多量。焼成堅緻。	内外面ナデ。底部脇強い板ナデ。	外面に煤。
" -157	"	高杯	—	—	—	—	橙色。灰色系円礫・砂多量。焼成やや軟。	杯部底部に粘土板充填。外面ハケ後ナデ。内面指ナデ。	
35-160	土器集中4	甕	17.1	26.0	18.4	6.0	黄灰色。円礫少量、灰白色の砂(砕いたもの)多量。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1.6cmの粘土帯貼付、口唇部横ナデ、外面指頭による連続した押圧。内外面ナデ・指頭圧痕。	外面中位と口縁部付近に弱い煤。
" -161	"	壺又は甕	—	—	—	—	灰赤色。灰色系円礫・角礫多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅2.8cmの粘土帯貼付。内外面ナデ。	
" -162	"	鉢	15.4	—	—	—	にぶい赤褐色。石英・角閃石少量。焼成堅緻。	内面に粘土帯接合痕明瞭。内外面ナデ・指頭圧痕。	外面上位と内面口縁部付近に強い煤。
" -163	"	—	—	—	—	6.0	灰褐色。角閃石多量。焼成堅緻。	外面ハケ・ナデ。内面ナデ。内底強い指ナデ。	内外面に煤。
" -164	"	—	—	—	—	6.8	明赤褐色。角閃石・石英多量。焼成堅緻。	内外面ナデ。底部脇に指頭圧痕。	

Tab.12 遺物観察表-弥生時代6

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
36-165	土器集中 5	甕	18.0	—	—	—	灰黄色。円礫・粗砂多量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付、口唇部を面取り浅い刻み目、外面に連続した指頭圧痕。肩部に楕円形浮文と櫛描直線文。頸部外面ハケ後ナデ。内外面ナデ。	
" -166	"	"	18.0	—	—	—	灰色系円礫・粗砂多量。焼成軟。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付、口唇部を面取り刻目、接合部を指頭押し段は潰す。内外面ナデ。	
" -167	"	"	15.4	—	—	—	灰白色の円礫と粗砂多量。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1.7cmの粘土帯を貼付し斜方向の浅い刻目を施す。内外面ナデ。	
" -168	"	"	14.9	—	15.0	—	灰白色。灰色系円礫少量、白色砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付、口唇部を面取り下端に刻み目、接合部はナデ消す。頸部から肩部に櫛描直線文・楕円形浮文・櫛状原体による「ノ」字状の連続文様。内外面ナデ。	
" -169	"	"	18.2	—	—	—	黒褐色。灰色系円礫・粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.7cmの粘土帯を貼付、口唇部を面取り浅い刻目、外面に連続した指頭圧痕。上胴部に楕円形浮文。内外面ナデ。	
" -170	"	壺	5.1	—	—	—	褐色。褐色砂礫、黄灰色砂多量。焼成軟。	口縁部を丸くおさめる。内外面ナデ。薄手のつくり。	
" -171	"	—	—	—	—	6.0	褐色。円礫・粗砂多量。焼成やや堅。	内外面ナデ。外底中央を指頭押し僅かに凹状。	外面に弱い煤。
37-174	土器集中 6	壺	12.8	—	—	—	灰色系円礫含む。焼成軟。	口縁部外面に幅3.2cmの粘土帯貼付。頸部外面木理の粗い縦ハケ・ナデ。内面ナデ。	
" -175	"	甕	13.9	—	—	—	にぶい橙色。円礫・砂少量。焼成やや軟。	口縁部外面に幅0.9cmの粘土帯貼付、口唇部横ナデし斜方向の浅い刻目を施す。外面ナデ・指頭圧痕。内外面ハケ・ナデ。	
" -176	"	"	—	—	—	—	灰黄褐色。灰色系円礫少量。焼成やや軟。	上胴部に1条の沈線と櫛状原体による「ノ」字状の連続文様を巡らす。外面頸部縦ハケ・ナデ。内面頸部右上がりのハケ、胴部ナデ・指頭圧痕。	
" -177	"	—	—	—	—	6.7	にぶい黄橙色。灰色系円礫・砂少量。焼成やや軟。	内外面指ナデ・指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -178	"	—	—	—	—	5.4	灰白色。角礫少量、灰白色粗砂(砕いたもの)含む。	外面縦ハケ。内面ナデ。内底指頭圧痕。	底部付近に黒斑。
" -179	"	—	—	—	—	4.0	にぶい黄橙色。円礫・角礫と灰色・白色の粗砂含む。焼成軟。	内外面ナデ。	外面に弱い煤。
38-180	焼土10	甕	23.4	—	26.9	—	褐色。角閃石・雲母多量、円礫少量。焼成堅緻。	外面木理の粗いハケ後ナデ。内面口縁部ハケ後ナデ、胴部横位の板ナデ。	内外面に煤。
" -181	焼土36	壺	12.0	—	—	7.0	にぶい橙色。赤色風化礫、白色砂少量。焼成やや軟。	外面縦ハケ。内面横ハケ。	内外面と断面に煤。(廃棄後煤)
" -182	焼土10	甕	—	—	—	—	にぶい黄橙色。石英少量、灰色系各礫と粗砂を含む。焼成堅緻。	口縁部外面に幅1.6cmの粘土帯を貼付、口唇部強い横ナデ、外面指頭圧痕、接合部の段はナデ消す。内面横ナデ。	
" -183	"	壺又は甕	—	—	—	—	にぶい橙色。褐色・灰色の円礫やや多量。焼成やや堅。	口縁部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残す。口唇部と口縁部外面に連続した指頭圧痕。	
" -184	焼土41	—	—	—	—	4.4	にぶい黄橙色。灰色系粗砂多量、白色砂多量。	内外面ナデ。内底指頭圧痕。	外面に煤。
" -185	焼土10	—	—	—	—	4.6	にぶい黄橙色。石英微量、褐色・赤色系角礫、白色細砂を含む。焼成堅緻。	内外面ナデ。底部脇と内底に強い板ナデ。	内外面と断面に煤。(廃棄後煤)
39-186	-4層	壺	6.5	—	—	—	にぶい黄橙色。灰色系円礫と砂粒を少量含む。焼成やや堅。	無頸壺。外面に双状原体による重弧文と直線文。外面縦ハケ・ナデ。内面ナデ、口縁部付近強い指ナデ。	外面に煤。
" -187	-3層	"	15.9	—	—	—	褐色。灰色系角礫と粗砂多量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅2.5cmの粘土帯を貼付し外面に縦方向の鋭い刻目、接合部に横ナデを施し下端に円形浮文を貼付。頸部外面強い横ナデ。内面ナデ。	

Tab.13 遺物観察表-弥生時代7

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
39-188	-3層	壺	15.3	—	—	—	灰褐色。灰色系粗砂、赤色系砂を含む。焼成やや堅。	口縁部外面に幅3cmの粘土帯を貼付、口唇部は横ナデし下端に刻目、粘土帯外面は2段の強い横ナデを施し中位に稜をなす。内外面ナデ。薄手のつくり。	外面に弱い煤。
" -189	"	"	13.3	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色系円礫と黄白色の砕いた砂多量。焼成やや軟。	口唇部横ナデ。内外面ナデ。	
" -190	"	"	8.1	—	—	—	褐灰色。円礫少量、白色砂含む。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1cmの粘土帯貼付。内外面ナデ。	
" -191	"	甗	19.2	—	—	—	にぶい橙色。灰色系円礫、黄白色の砕いた砂多量。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯貼付。内外面ナデ。	
" -192	"	"	25.5	—	—	—	橙色。円礫やや多量、灰色系砂含む。焼成堅緻。	口縁部外面に幅1.6cmの粘土帯貼付。粘土帯外面に指頭圧痕顕著。	
" -193	XI層	壺	21.9	—	—	—	明褐灰色。灰色系粗砂含む。焼成やや堅。	口唇部下端に幅広の緩やかな刻み目。外面口縁部付近横ハケ、頸部指頭圧痕。内面ナデ、口縁部指頭圧痕。	
" -194	-3層	甗	30.0	—	—	—	黒色。角閃石多量、円礫少量、砂含む。焼成堅緻。	口唇部面取りし幅広の深い刻目を施す。肩部に列点文。内外面横ナデ。頸部付近に指頭圧痕顕著。	外面に強い煤。
" -195	"	"	—	—	—	—	灰白色。灰色系粗砂多量。焼成やや堅。	上胴部に微隆起帯を4条巡らし、両側は強いヘラナデ。外面横ハケ。内面指ナデ。	内外面に弱い煤。
" -196	XI層	"	—	—	—	—	にぶい褐色。石英他の細砂を含む。焼成堅緻。	外面頸部木理の細かい縦ハケ、胴部横位の擦痕。内面頸部右下がりのハケ、胴部ナデ。薄手のつくり。	外面に弱い煤。
" -197	-3層	"	—	—	—	—	灰褐色。石英多量、焼成堅緻。	外面に2条の貼付突帯を巡らし、ハケ状原体による刻目を施す。外面、突帯を境に上位ハケ後ナデ、下位水平～右下がりのハケ。内面横ハケ・指頭圧痕。	外面に強い煤。
" -198	"	壺又は甗	—	—	—	—	灰黄褐色。円礫少量、粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.8cmの粘土帯を貼付し外面に刻目を施す。	外面に煤。
" -199	-4層	"	—	—	—	—	黒褐色。灰色・黄白色の粗砂を含む。焼成やや軟。	口縁部外面に幅2cmの粘土帯貼付、口唇部は横ナデし下端に刻目、粘土帯外面指頭圧痕顕著。内面ナデ。	外面に煤。
" -200	-4層	甗	—	—	—	—	にぶい橙色。角礫・粗砂含む。焼成軟。	口縁部外面に幅0.8cmの粘土帯貼付。内外面ナデ。	
" -201	-4層	壺又は甗	—	—	—	—	橙色。灰色・灰白色の砂を含む。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付、口唇部は横ナデし下端に細く鋭い刻み、粘土帯下端に強い横ナデ。薄手のつくり。	
" -202	-3層	甗	—	—	12.5	—	にぶい褐色。角閃石やや多量。焼成堅緻。	内面に粘土帯接合痕明瞭。上胴部に櫛描直線文・櫛描山形文。内外面ナデ。	外面胴部中位に強い煤。
" -203	"	"	—	—	—	—	灰白色。灰色系円礫と黄白色の砕いた粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.6cmの粘土帯を貼付し、刻目を施す。	外面に弱い煤。
" -204	-4層	壺又は甗	—	—	—	—	にぶい赤褐色。角閃石少量、砂礫少量。焼成堅緻。	口唇部を面取り刺突文を施す。外面ハケ・横ナデ。内面横ハケ・ナデ。口縁部内外面に指頭圧痕。	外面に煤。
" -205	-4層	"	—	—	—	—	黒褐色。雲母少量。砂礫少量。焼成やや堅。	口唇部面取り。外面横ハケ後ナデ、口縁部付近指頭圧痕。内面横～斜方向のハケ。	外面に強い煤。
" -206	"	"	—	—	—	—	にぶい赤褐色。砂礫少量。焼成堅緻。	口唇部は丸くおさめ下端に刻目。内外面ナデ。	
" -207	XI層	壺	—	—	—	—	灰褐色。石英・長石多量。焼成やや堅。	外面に断面三角形の貼付突帯を複数巡らせ、先端に「V」字状の刻目。内外面ナデ。	
" -208	"	甗	—	—	—	—	暗灰黄色。石英・長石、白色粗砂多量。	外面に断面三角形の小突帯を多段貼付し接合部に静止ナデを施す。下段に円形浮文を貼付。内面ナデ。薄手のつくり。	
" -209	"	"	—	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色系円形粗砂、黒色・白色の角粒粗砂多量。	上胴部に扁平な棒状浮文を貼付。内面ナデ。	
" -210	-4層	—	—	—	—	5.0	にぶい橙色。石英・雲母、他の砂を含む。焼成やや堅。	内外面縦方向の板ナデ・指ナデ。底部脇強い指ナデ。外底中央指頭押圧により僅かに凹状。	外面に弱い煤、内面に強い煤。

Tab.14 遺物観察表-弥生時代8

Fig-挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
39-211	XI層	—	—	—	—	8.2	にぶい橙色。灰色系砂・粗砂を含む。焼成やや堅。	底部脇木理の粗い縦ハケ。内底ハケ・ナデ。	
" -212	"	—	—	—	—	8.2	にぶい褐色。石英多量、角閃石・雲母少量。焼成堅緻。	外面横方向の擦痕。内底ナデ。	外面に弱い煤。
40-214	-1層	壺	11.0	—	—	—	灰白色。灰色・白色の円礫・粗砂多量。	口縁部外面に幅3.6cmの粘土帯を貼付し、外面に斜方向の粗いハケ目、下端に円形浮文を貼付。頸部外面粗い横ハケ。内面擦痕状の強い横ナデ。	
" -215	-2層	"	15.8	—	—	—	にぶい褐色。石英・長石少量。灰色系粗砂少量。焼成やや軟。	口唇部下端に浅い刻目。外面横方向～右下がりの粗いハケ。内面ナデ。	
" -216	"	壺又は甕	16.4	—	—	—	灰黄褐色。灰色系円礫・粗砂やや多量。焼成やや軟。	口縁部外面に幅2.2cmの粘土帯貼付。内外面ナデ。	内外面と断面に煤。(廃棄後煤)
" -217	-1層	"	11.7	—	—	—	褐色。灰色系砂少量。	口縁部外面に幅1cmの粘土帯を貼付し、外面に指頭による強い圧痕。	口縁部外面に弱い煤。
" -218	-1・2層	"	16.5	—	—	—	にぶい褐色。灰色系円礫少量、黄白色の砕いた砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1cmの粘土帯貼付、接合部は指頭押し小さく段を残すのみとなる。内外面ナデ。	
" -219	"	"	15.6	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色系円礫、黄白色の砕いた砂多量。焼成やや軟。	口縁部外面に幅2cmの粘土帯貼付、外面指頭圧痕。内外面ナデ。	
" -220	-1層	"	13.6	—	—	—	にぶい橙色。円礫・角礫多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.2cmの粘土帯貼付。粘土帯外面に指頭押しを加え小さく段を残すのみとなる。	外面に弱い煤。
" -221	"	"	12.7	—	—	—	暗灰黄色。灰色系粗砂やや多量。焼成軟。	口唇部横ナデ。内外面ナデ。	内外面に煤。
" -222	"	壺	—	—	—	—	浅黄褐色。灰色系の角礫多量。焼成やや堅。	外面縦ハケ・ナデ。内面ナデ。	
" -223	-2層	甕	17.8	—	—	—	灰黄褐色。円礫・粗砂やや多量。	口縁部外面に幅1.3cmの粘土帯貼付。内外面ナデ。	口縁部外面に煤。
" -224	-1・2層	"	27.5	—	—	—	にぶい褐色。灰色系円礫・角礫と砂やや多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅2.3cmの粘土帯貼付、口唇部強い横ナデ、粘土帯外面に連続した指頭圧痕。内外面ナデ。	外面に弱い煤。
" -225	-1層	"	20.0	—	—	—	褐灰色。灰色系円礫、灰白色の砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.7cmの粘土帯貼付、端部は強い横ナデ、外面に太く深い刻目。上胴部に櫛描直線文・刻目を入れた楕円形浮文。頸部外面木理の粗い縦ハケ、内面横ハケ・ナデ。	口縁部外面に弱い煤。
" -226	"	"	23.4	—	—	—	明褐灰色。円礫・角礫少量、粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1cmの粘土帯貼付、端部を強く横ナデし肥厚させる。端部に斜方向の刻目。	
" -227	"	"	15.5	—	—	—	橙色。円礫・角礫粗砂多量。焼成軟。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯貼付。内外面横ナデ。	
" -228	-1・2層	"	20.1	—	—	—	灰白色。灰色系円礫・粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.1cmの粘土帯を貼付し、斜方向の浅い刻み目を施す。内外面ナデ。	
" -229	-1層	"	15.3	—	—	—	灰白色。灰色系粗砂、灰色・白色の砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅2.2cmの粘土帯貼付、粘土帯外面指頭圧痕顕著。外面縦ハケ後ナデ、内面ナデ。	
" -230	"	"	18.9	—	—	—	暗灰黄色。灰色系円礫・角礫・粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.2cmの粘土帯貼付、口唇部と外面にナデ・指頭圧痕。内外面ナデ。	外面に強い煤。
" -231	-1・2層	"	18.8	—	—	—	にぶい黄褐色。円礫少量、粗砂含む。黄白色の砕いた砂含む。	口縁部外面に粘土帯接合痕明瞭、小さく段を残す。口唇部横ナデし刻目。	
" -232	-1層	"	21.1	—	—	—	灰黄褐色。灰色系円礫、灰白色の砂やや多量。焼成やや堅。	口唇部に斜方向の刻目。外面ハケ、内面ナデ。口縁部付近指頭圧痕顕著。	外面に弱い煤。
" -233	"	"	21.0	—	—	—	にぶい褐色。角閃石少量、円礫少量、黒色・白色の砂を含む。焼成やや堅。	口唇部にハケ状原体による斜方向の刻目。外面縦ハケ、内面横ハケ。	

Tab.15 遺物観察表-弥生時代9

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
40-234	-1層	甗	20.7	—	—	—	灰褐色。角閃石・円礫少量、黒色・白色の砂を含む。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕明瞭。外面ハケ・ナデ・指頭圧痕。内面ナデ・指頭圧痕。	外面に煤。
" -235	"	"	19	—	—	—	にぶい赤褐色。石英・雲母・角閃石、灰色系砂を含む。焼成堅緻。	口縁部を横ナデし僅かに拡張させる。口唇部斜方向の刻目。外面横ナデ、内面横ハケ。	口縁部外面に弱い煤。
" -236	-1・2層	"	16.8	—	—	—	にぶい褐色。角礫・粗砂多量。焼成軟。	内外面ナデ。	
" -237	-1層	"	12.6	—	—	—	灰黄褐色。灰色系円礫・粗砂多量。焼成やや軟。	外面木理の粗い縦ハケ。内面ナデ。	外面に煤。
" -238	"	"	—	—	—	—	灰白色。石英、灰白色の角礫・粗砂多量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅2.1cmの粘土帯を貼付し、外面にハケ状原体による刻目を施す。	
" -239	"	壺	—	—	—	—	灰白色。石英・長石、円礫少量、灰色・白色の粗砂多量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅2.8cmの粘土帯を貼付したとみられるが断面に接合痕は観察されない。接合部下端を横ナデし楕円形浮文貼付、外面は斜方向の刻目。口唇部と内面横ナデ。	
" -240	"	壺又は甗	—	—	—	—	褐灰色。灰白色の円礫少量、灰白色の粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付、外面にヘラ状原体による圧痕を連続的に加える。口唇部横ナデ。頸部外面縦ハケ後ナデ。内面ナデ。	口縁部外面に弱い煤。
" -241	-2層	"	—	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色系粗砂と砂を含む。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.6cmの粘土帯貼付、口唇部を強く横ナデし下方へ拡張、外面指頭圧痕。内外面ナデ。	口縁部外面に強い煤。
" -242	-1層	甗	—	—	—	—	灰白色。灰色系円礫・粗砂多量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅2.3cmの粘土帯を貼付し、外面に深い刻目を施す。内外面横ナデ。	
" -243	"	壺又は甗	—	—	—	—	にぶい橙色。灰色系円礫、粗砂・細砂多量。	口縁部外面に幅2.2cmの粘土帯を貼付、口唇部を横ナデし下端に刻み。内面横ナデ。	外面に弱い煤。
" -244	"	"	—	—	—	—	灰色系角礫・円礫多量。焼成軟。	口縁部外面に幅2.4cmの粘土帯を貼付、外面横ナデ。内外面横ナデ。	
" -245	"	"	—	—	—	—	灰色。粗砂多量。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1.6cmの粘土帯を貼付、口唇部下端から外面上半にかけて深い刻み、接合部は横ナデし段を潰す。内外面ナデ。	
" -246	"	"	—	—	—	—	褐色。角礫少量、灰色系粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1cmの粘土帯を貼付し口唇部横ナデ。内外面ナデ。	外面に煤。
" -247	"	"	—	—	—	—	灰褐色。灰白色の粗砂・細砂を含む。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1cmの粘土帯を貼付、外面に幅広の深い刻目。頸部外面木理の粗い横ハケ。内面ナデ。	
" -248	"	"	14.3	—	—	—	にぶい橙色。灰色系円礫多量。焼成軟。	口縁部外面に幅1cmの粘土帯を貼付、外面横ナデ・指頭圧痕。頸部外面縦ハケ・ナデ。内面ナデ。	
" -249	"	"	—	—	—	—	明褐灰色。角礫・粗砂多量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅1.2cmの粘土帯を貼付、端部を横ナデし斜方向幅広の刻目を施す。内外面横ナデ。	
" -250	"	"	—	—	—	—	にぶい黄橙色。粗砂多量。	口縁部外面に幅1.4cmの粘土帯貼付、口唇部下端に幅広の刻み、外面指頭圧痕。内外面ナデ。	外面に弱い煤。
" -251	"	壺	—	—	—	—	灰黄褐色。角礫・粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅2.7cmの粘土帯を貼付、外面に斜方向の刻み、下端に楕円形浮文。頸部外面粗いハケ・ナデ。内面ナデ。	
" -252	-2層	壺又は甗	—	—	—	—	灰黄褐色。角閃石少量、他砂を含む。焼成やや堅。	口縁部外面に幅2cmの粘土帯を貼付、口唇部を横ナデし下端に幅広の刻目を施す。粘土帯外面を指頭押し、下端は小さく段を残す。	内外面と断面に煤。(廃棄後煤)
41-253	-1・2層	壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色系円礫少量、砂を含む。焼成やや堅。	口縁部外面に幅3cmの扁平な粘土帯を貼付し、外面に連続した矢羽根状の圧痕文を施す。下端に楕円形浮文貼付。	
" -254	-2層	甗	—	—	—	—	灰黄褐色。灰色系角礫・粗砂多量。焼成堅緻。	口唇部を強く横ナデし下方へ拡張、下端に刻み。口縁部外面に2段の強い横ナデ、中位に稜をなす。頸部外面横ハケ・ナデ。内面ナデ。	外面と断面に弱い煤。(廃棄後煤)

Tab.16 遺物観察表-弥生時代10

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
41-255	-1層	甕	—	—	—	—	褐色。角閃石多量、円礫少量、砂を含む。焼成堅緻。	口唇部を面取り、斜方向の幅広の刻み目を施す。外面縦八ケ。内面横ナデ。	
" -256	"	"	—	—	—	—	にぶい橙色。雲母、白色・赤色の砂を含む。焼成堅緻。	口唇部を面取り、斜方向の刻目を施す。口縁部内外面八ケ・横ナデ・指頭圧痕。	口縁部外面に煤。
" -257	"	"	—	—	—	—	にぶい赤褐色。長石・角閃石少量、円礫・砂少量。焼成堅緻。	口唇部を面取り、刺突文を施す。口縁部外面縦八ケ、内面横八ケ後横ナデ。	口縁部外面に強い煤。
" -258	-1・2層	"	—	—	—	—	黄灰色。灰色系円礫と粗砂やや多量。焼成やや軟。	口唇部横八ケし下方に拡張。外面縦八ケ後ナデ。内面ナデ。	外面に煤。
" -259	-2層	"	—	—	—	—	暗赤褐色。石英多量、黒色砂を含む。焼成やや堅。	上胴部に2条の刻み目突帯を貼付。内外面横八ケ。	外面に弱い煤。
" -260	-1層	"	—	—	—	—	褐色。焼成堅緻。	外面に2条の刻み目突帯を貼付。内外面ナデ。	外面に煤。
" -261	-1・2層	壺又は甕	—	—	—	—	灰褐色。石英・雲母多量、白色の砂を含む。焼成堅緻。	上胴部に断面三角形の突帯を貼付し幅広の深い刻目を施す。突帯接合部に強い横ナデ。内外面ナデ。	
" -262	-1層	甕	—	—	—	—	黒褐色。石英・角閃石多量。	上胴部に櫛描直線文と楕円形浮文を施す。内外面ナデ。	外面に煤。
" -263	-2層	"	—	—	—	—	にぶい赤褐色。石英多量。焼成やや軟。	外面に2条の刻み目突帯を貼付。内外面ナデ。	器表の摩耗が激しい。
" -264	"	"	—	—	—	—	にぶい褐色。石英、他の砂粒を含む。焼成堅緻。	上胴部にやや扁平な刻み目突帯を貼付。外面頸部縦八ケ、胴部右下がりの八ケ。内面ナデ。	外面に弱い煤。
" -265	"	"	—	—	—	—	褐灰色。石英、灰色系粗砂多量、黒色・白色の砂を含む。焼成堅緻。	外面に断面三角形の小突帯と棒状浮文を貼付。内外面ナデ。	外面に強い煤。
" -266	-1層	"	—	—	—	—	灰褐色。灰色系粗砂多量。焼成やや軟。	薄手のつくり。外面に断面三角形の小突帯を巡らせ直下に棒状浮文を貼付。内外面ナデ。	
" -267	"	"	—	—	—	—	褐灰色。黄白色の砕いた砂と黒色砂を含む。焼成やや軟。	上胴部に横方向の櫛描直線文・楕円形浮文・斜方向の列点文を2段配する。	外面に煤。
" -268	"	"	—	—	—	—	灰白色。角閃石多量、褐灰色粗砂・細砂を含む。焼成堅緻。	上胴部に列点文。内外面ナデ。	外面に煤。
" -269	"	"	—	—	—	—	灰白色。円礫・砂多量。	上胴部に櫛描直線文・楕円形浮文。内外面ナデ。	
" -270	"	"	—	—	—	—	灰褐色。灰色・白色の角礫・粗砂多量。	上胴部に楕円形浮文・櫛描直線文・櫛状原体による斜方向の連続文様。内外面ナデ。	
" -271	"	"	—	—	—	—	橙色。石英・角閃石、赤色風化礫少量。焼成やや軟。	上胴部に列点文。外面ナデ。内面八ケ後ナデ。	
" -272	-2層	"	—	—	—	—	褐灰色。石英・角閃石少量。赤褐色の円礫と粗砂少量。焼成軟。	上胴部に3段の爪形文。内外面ナデ。	
" -273	"	鉢	17.3	—	—	—	にぶい赤褐色。精選された胎土。光沢のある細砂多量。焼成堅緻。	外面縦八ケ・ナデ。内面斜方向の八ケ・ナデ。	外面と断面に弱い煤。(廃棄後煤)
" -274	"	—	—	—	—	7.6	灰黄褐色。褐灰色角礫・粗砂多量。焼成やや堅。	内外面ナデ。底部脇強い横ナデ。	外面に弱い煤。
" -275	-1層	—	—	—	—	7.0	にぶい橙色。石英・長石・角閃石、他の砂少量。焼成やや軟。	内外面ナデ。底部脇横位の指ナデ。内底指頭圧痕。	
" -276	"	—	—	—	—	5.2	にぶい橙色。雲母、砂粒少量。焼成堅緻。	内外面ナデ。底部脇縦八ケ。内底強い指ナデ。外底中央が僅かに凹状。	内底に強い煤。
" -277	-2層	—	—	—	—	5.8	褐灰色。石英少量、灰色系砂礫を含む。	底部脇横八ケ・強い板ナデ。内底指ナデ。外底中央僅かに凹状。	
" -278	-1層	—	—	—	—	6.0	灰褐色。角閃石多量、石英少量、灰色系円礫多量。焼成堅緻。	外面八ケ後ナデ。内面ナデ。内底強い板ナデ。	外面に弱い煤。

Tab.17 遺物観察表-弥生時代11

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
41-279	-1層	—	—	—	—	8.0	にぶい橙色。角閃石、灰色系角礫・粗砂を含む。焼成堅緻。	内外面ナデ。底部脇板状原体による圧痕。	
" -280	"	—	—	—	—	5.0	灰褐色。角閃石多量、灰色系円礫・粗砂多量。焼成やや軟。	内外面ナデ。底部脇板ナデ。内底強い指ナデ。	断面に煤。 (廃棄後煤)
" -281	"	—	—	—	—	6.0	にぶい黄褐色。灰色系円礫・粗砂多量。焼成堅緻。	内外面ナデ。内底強い指ナデ。	
" -282	"	—	—	—	—	5.2	橙色。角閃石・石英を含む。焼成堅緻。	外面ハケ後ナデ。内底板ナデ。底部脇指頭圧痕。	
" -283	"	—	—	—	—	3.0	にぶい橙色。角閃石少量、黒色・白色系砂粒少量。焼成やや堅。	外面縦ハケ。内面ナデ。内底強い指ナデ。	
" -284	"	—	—	—	—	7.0	褐灰色。石英・角閃石、赤色風化礫を含む。焼成やや堅。	外面ハケ後ナデ。底部脇指頭による強い押圧。外底上げ底状。	外面に弱い煤。
" -285	"	—	—	—	—	—	灰褐色。石英・角閃石、灰色系円礫少量。焼成やや堅。	内外面指頭圧痕顕著。底部脇指頭による強い押圧。外底上げ底状。	外面に弱い煤。
" -286	-上層	—	—	—	—	—	にぶい黄褐色。石英・角閃石、他の砂を含む。焼成やや堅。	内外面ナデ。底部脇指頭押圧。	
" -287	-1層	鉢	—	—	—	5.4	にぶい黄褐色。灰色系円礫・角礫多量。焼成やや堅。	外面ナデ・指頭圧痕。	接合部で剥離
" -288	-2層	高杯	—	—	—	裾部 径 12.8	灰黄色。精選された胎土。石英を含む。焼成やや軟。	脚部に透かし孔。裾部に半円形の刺突文。外面縦方向のナデ・ミガキ。内面横ナデ。	搬入品の可能性あり。
42-292	XI-下層 ~ 層	壺	13.4	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色系角礫・粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅3.6cmの粘土帯を貼付、外面粗い縦ハケ、下端に楕円形浮文貼付。頸部に櫛描直線文。口縁部内面に指頭圧痕顕著。	
" -293	層	甕	16.8	—	—	—	黒褐色。灰色系円礫・粗砂多量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅1.1cmの粘土帯貼付・外面に斜方向の刻目。内外面ナデ。	
" -294	XI-下層 ~ 層	"	15.4	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色系円礫・粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.6cmの粘土帯を貼付、口唇部横ナデ、外面に刻目。内外面ナデ・指頭圧痕。	内外面に弱い煤。
" -295	層	壺	11.8	—	—	—	にぶい褐色。石英、雲母、他の砂少量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅1cmの粘土帯貼付・外面に斜方向の刻目。内外面ナデ。	
" -296	"	甕	19.2	—	—	—	灰白色。灰色系円礫と黄白色砂多量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅2.2cmの粘土帯貼付、端部横ナデし刻目。粘土帯外面を指頭押圧し小さく段を残すのみとなる。内外面ナデ。口縁部内面横ナデ。	
" -297	"	"	17.6	—	—	—	灰黄褐色。灰色系円礫と黄白色の砕いた砂多量。焼成やや軟。	口唇部静止横ナデし指頭押圧を連続的に加える。外面横～右下がりのハケ。内面横ナデ。口縁部内外面に指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -298	"	壺又は甕	21.4	—	—	—	明褐灰色。褐灰色円礫・粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅2.3cmの粘土帯貼付、口唇部下端に刻目。内外面ナデ	
" -299	"	甕	27.5	—	—	—	灰黄褐色。角閃石・石英他の砂少量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅2.5cmの粘土帯接合痕が明瞭に残る。接合部付近に指頭押圧を連続的に加え段を潰す。口唇部横ナデし下方に拡張、下端に刻目。外面ナデ。内面横ハケ後ナデ。	
" -300	"	"	24.2	—	—	—	灰褐色。角閃石・長石、他の砂粒を含む。焼成やや堅。	口縁部外面幅3.2cmの粘土帯接合痕を明瞭に残し小さく段をなす。接合部付近指頭圧痕顕著。外面口縁部横ナデ・指頭圧痕、胴部縦ハケ。内面ハケ・ナデ・指頭圧痕。	外面に煤。
" -301	"	"	28.5	—	—	—	灰黄褐色。石英・角閃石、他の砂粒を含む。焼成やや堅。	口縁部外面に幅2.4cmの粘土帯接合痕明瞭。接合部付近に指頭押圧を連続的に加え段を潰す。口唇部横ナデし下方に拡張、下端に刻目。外面縦ハケ・ナデ。内面横ハケ後ナデ。	外面に弱い煤。

Tab.18 遺物観察表-弥生時代12

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
42-302	層	甕	15.6	—	—	—	褐灰色。灰色系円礫・粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.4cmの粘土帯を貼付し端部に刻目。口縁部に径3mmの焼成前穿孔あり(2孔確認)。上胴部に櫛描直線文・楕円形浮文・列点文。内外面ナデ。	
" -303	XI-下層 ~ 層	"	18.6	—	—	—	にぶい橙色。石英・雲母・角閃石、白色系・褐色系の円礫少量。焼成堅緻。	口唇部を面取り刺突文を施す。上胴部に列点文。	口縁部外面に弱い煤。
" -304	"	"	13.8	—	—	—	にぶい黄褐色。石英・雲母・角閃石、灰色系の角礫・粗砂を含む。焼成堅緻。	口唇部を面取り刻目を施す。上胴部に列点文。外面頸部縦ハケ後ナデ。内面口縁部横ハケ。	
" -305	"	"	—	—	—	—	褐色。石英・角閃石、他の砂多量。	口縁部外面に断面三角形の小突帯を2条貼付。「V」字状の深い刻目を施す。外面横ナデ、内面横ハケ。	外面に弱い煤。
" -306	層	"	—	—	—	—	明褐灰色。灰色系粗砂やや多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯貼付、口唇と口縁部外面の両側に斜方向の刻み。外面ナデ。内面横ハケ。	
" -307	"	"	—	—	—	—	黄灰色。灰色系円礫・粗砂多量。焼成軟。	口縁部外面に幅1.1cmの粘土帯貼付。内外面ナデ。頸部内面指頭圧痕。	外面と断面に弱い煤。(廃棄後煤)
" -308	"	"	—	—	—	—	にぶい黄褐色。黄白色と灰色系粗砂やや多量。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1.7cmの粘土帯を貼付し口唇部下端に幅広の刻み目。粘土帯外面指頭圧痕顕著、接合部は小さく段を残す。内外面ナデ。	
" -309	XI-下層 ~ 層	"	—	—	—	—	灰黄褐色。白色・灰色系の角礫・粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅1.2cmの粘土帯を貼付、口唇部下端に幅広の緩やかな刻目。内外面ナデ。	
" -310	層	壺又は甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色。長石、白色・灰色系の粗砂多量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯貼付、口唇部横ナデし下端に幅広の刻目、粘土帯外面強い横ナデ。	
" -311	"	"	—	—	—	—	橙色。石英・長石、灰色系円礫と黄白色砂やや多量。焼成軟。	口縁部外面に幅1.2cmの粘土帯接合痕明瞭。口唇部に連続した指頭圧痕。内外面ナデ。	
" -312	"	甕	—	—	—	—	褐灰色。灰色系粗砂多量。焼成やや堅。	口縁部外面に幅2.5cmの粘土帯を貼付、口唇部下端に小さな刻目。粘土帯外面に2段の強い横ナデを施しその間に稜を設ける、接合部はナデにより段を潰す。	外面に弱い煤。
" -313	"	"	—	—	—	—	明褐灰色。角礫・粗砂多量。焼成やや堅。	口唇部下端に刻目。口縁部外面に強い横ナデを2段施し中位に稜を設ける。粘土帯接合痕はナデ消す。	
" -314	XI-下層 ~ 層	壺	—	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色・白色系角礫・粗砂多量。焼成やや軟。	口縁部外面に幅3.1cmの粘土帯を貼付、外面に上下双方から浅い刻目を施す。内外面ナデ。	
" -315	層	甕	—	—	—	—	にぶい橙色。石英、灰色系円礫少量。焼成やや堅。	上胴部に列点文。口唇部横ハケ。外面口縁部から頸部に木理の粗い縦ハケ・指頭圧痕・横ハケ。内面粗い横ハケ。	内外面に強い煤。
" -316	"	"	—	—	—	—	角閃石、円礫少量。焼成やや堅。	口唇部横ナデしハケ状原体による斜方向の刻目。外面口縁部付近右下がりのハケ、肩部横ナデ。内面粗い横ハケ、肩部指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -317	"	壺又は甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色。長石・雲母、灰色系の円礫・粗砂を含む。焼成軟。	口唇部横ナデし斜方向の刻み目。頸部付近に櫛描波状文。内外面ナデ。口縁部外面指頭圧痕。	外面に煤。
" -318	XI-下層 ~ 層	"	—	—	—	—	にぶい赤褐色。長石多量、石英・角閃石少量。焼成やや堅。	胴部外面に断面三角形の突帯を貼付、接合部は横ナデ。内面指ナデ・指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -319	層	"	—	—	—	—	にぶい褐色。灰色系粗砂多量。焼成やや堅。	上胴部に断面三角形の小突帯を4条貼付。	
" -320	-2層	"	—	—	—	—	にぶい赤褐色。石英多量、他の砂礫少量。焼成堅緻。	上胴部に断面かまぼこ形の刻み目突帯を貼付、直下に列点文。外面横ナデ。内面ナデ。	外面に煤。
" -321	XI-下層 ~ 層	甕	—	—	—	—	にぶい褐色。灰色系円礫と黄白色の砕いた砂多量。焼成やや軟。	上胴部に刺突を入れた円形浮文・櫛描直線文。	

Tab.19 遺物観察表-弥生時代13

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
42-322	層	甕	—	—	—	—	褐灰色。石英・角閃石、他の砂粒を含む。焼成堅緻。	上胴部に列点文。外面頸部縦ハケ、胴部右下がりのハケ。内面頸部横ハケ、胴部ナデ。	外面に強い煤。
" -323	"	蓋	20.4	10.8	—	4.8	橙色。雲母少量、灰色系粗砂やや多量。焼成やや堅。	外面木理の細かい右下がりのハケ。内面横ハケ・ナデ。底部脇強い指頭押圧。内底指頭圧痕。外底指頭による押圧で上げ底状。	
" -324	XI-下層 ~ 層	—	—	—	—	5.6	にぶい褐色。焼成やや堅。石英・角閃石他の砂粒を含む。角閃石多量。	内外面ナデ。底部脇板ナデ・指頭圧痕。	
" -325	"	—	—	—	—	5.3	にぶい黄褐色。石英・角閃石、他の砂粒を含む。焼成やや堅。	内外面ナデ。底部脇ハケ。外底を指頭押圧し上げ底状。	内外面に煤。
" -326	"	鉢	—	—	—	4.5	にぶい褐色。石英・角閃石、赤色風化礫他の砂礫を少量含む。焼成堅。	底部脇指頭による強い押圧。外底指頭押圧し、上げ底。	
" -327	"	—	—	—	—	2.5	灰黄褐色。角閃石、角礫・砂を少量含む。焼成やや堅。	外面底部脇に板ナデ。内底強い指ナデ。	外面に弱い煤。
" -328	"	—	—	—	—	5.2	にぶい黄褐色。灰色系砂粒・円礫を少量含む。焼成やや軟。	内外面ナデ。底部脇板ナデ。内底指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -329	層	—	—	—	—	7.0	褐灰色。灰白色の角礫・粗砂・細砂多量。焼成堅緻。	内外面ナデ。底部脇指頭押圧。内底強い板ナデ。外底僅かに凹状。	
" -330	層	—	—	—	—	5.0	灰黄褐色。灰色系円礫・粗砂多量。焼成やや堅。	外面ナデ。内底指ナデ。外底指頭押圧し僅かに凹状。	外面に煤。
" -331	"	—	—	—	—	5.4	にぶい褐色。石英・角閃石、他の砂粒少量。焼成やや堅。	外面縦ハケ。内面ナデ、内底へラ状原体による圧痕。	外面に弱い煤。
" -332	XI-下層 ~ 層	—	—	—	—	5.0	灰黄褐色。角閃石少量、円礫・粗砂含む。焼成やや堅。	内外面ナデ・指頭圧痕。	外面中位に煤。
43-333	SK8	壺	18.8	—	—	—	にぶい黄褐色。石英、灰白色の角礫・円礫やや多量。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付、口唇部横ナデ。内外面ナデ。	
" -334	"	甕	—	—	—	—	にぶい黄褐色。角閃石・雲母、灰色・灰黒色の角礫・粗砂。焼成堅緻。	口縁部外面横方向の板ナデ、端部と頸部に指頭圧痕。内面ナデ。	内面と断面に弱い煤。(廃棄後煤)
" -335	"	"	—	—	—	—	にぶい黄褐色。石英・長石、灰色系粗砂少量。	口縁部内外面斜方向のハケ。	口縁部外面に強い煤。
" -336	"	高杯	—	—	—	—	橙色。長石・雲母・角閃石、灰色系角礫・粗砂。焼成堅緻。	外面ナデ・ミガキ。内面ナデ。	内外面と断面に弱い煤。(廃棄後煤)
45-337	土器集中 7	甕	18.4	—	—	—	黒褐色。石英・角閃石、灰色系角礫・粗砂少量。焼成堅緻。	頸部外面に粘土帯接合痕明瞭、小さく段を残す。内外面ナデ。口縁部外面に連続した指頭圧痕。	外面口縁部から胴部中位に強い煤。
" -338	"	"	12.3	—	—	—	褐灰色。石英・長石・雲母・角閃石、角礫・粗砂含む。焼成堅緻。	内外面ナデ・指頭圧痕。	外面口縁部と胴部中位に強い煤。
" -339	"	"	13.4	—	13.0	—	にぶい橙色。長石・角閃石、黒色砂粒、灰色系角礫含む。焼成堅緻。	内面頸部と上胴部に粘土帯接合痕明瞭。内外面ナデ・指頭圧痕。	外面口縁部と胴部中位に強い煤、内面に弱い煤。
" -340	"	"	11.7	19.6	12.5	4.8	にぶい赤褐色。石英・長石・雲母・角閃石、白色系角礫・粗砂含む。焼成堅緻。	内面上位に粘土帯接合痕。内外面ナデ。外面胴部中位にへラ状原体によるミガキ。底部脇へラ状原体による横方向の圧痕。内外面頸部と接合部付近に指頭圧痕顕著。	外面中位に強い煤、内底に弱い煤。
" -341	"	"	13.7	—	13.5	—	にぶい赤褐色。石英少量、角閃石多量。焼成堅緻。	内面中位に粘土帯接合痕明瞭。内外面ナデ・指頭圧痕。	外面口縁部と胴部中位に強い煤。
" -342	"	鉢	29.6	—	—	—	にぶい橙色。石英・長石・角閃石少量、灰色系角礫・円礫多量。	内外面に粘土帯接合痕明瞭。内外面ナデ・指頭圧痕。接合部付近にハケ。	外面に弱い煤。

Tab.20 遺物観察表-弥生時代14

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
45-343	土器集中 7	鉢	11.9	11.7	—	4.9	褐灰色。石英・雲母・角閃石少量、赤色風化礫他の砂粒含む。焼成堅緻。	外面指ナデ。底部脇指頭による強い押圧。内面ナデ。	
" -344	"	—	—	—	—	5.0	褐灰色。石英・雲母・角閃石少量、円礫・角礫多量。焼成堅緻。	内外面縦方向のナデ。内底指頭と板状原体による圧痕。	内外面に煤。
" -345	"	—	—	—	—	5.0	褐灰色。雲母・角閃石・角礫・粗砂を含む。焼成堅緻。	外面縦方向のナデ。底部脇ハケ状原体による圧痕。内底強い板ナデ。	外面と断面に煤。(廃棄後煤)
" -346	"	—	—	—	—	5.0	にぶい赤褐色。石英少量、白色・灰色系角礫・円礫多量。焼成堅緻。	内外面ナデ。内底指頭圧痕。外底指頭とヘラ状原体による押圧でドーナツ形に凹状。	
" -347	"	—	—	—	—	6.7	灰黄褐色。石英・角閃石少量、灰色系角礫・粗砂多量。焼成堅緻。	外面ナデ。底部脇横方向の強い板ナデ。内面ナデ。内底指頭圧痕。	
47-348	土器集中 8	壺	7.0	—	—	—	にぶい橙色。白色系細砂、赤色砂を含む。やや精選された胎土。焼成やや軟。	口縁部内面に粘土帯接合痕。内外面ナデ。肩部内面に指頭圧痕顕著。	
" -349	"	"	—	—	—	—	灰黄褐色。灰色・白色系粗砂を含む。焼成軟。	頸部に幅1.5cmの粘土帯を貼りしハケ状原体による圧痕を連続的に加える。外面ナデ。内面ハケ・指ナデ。	
" -350	"	甕	12.4	—	13.2	—	灰黄褐色。灰白色の粗砂多量。焼成堅緻。	外面口縁部付近横ナデ、他は縦ハケ。内面口縁部ナデ・胴部ハケ。	
" -351	"	鉢	9.4	6.3	—	2.5	灰黄色。黒色・白色系円礫・角礫多量。焼成堅緻。	外面口縁部付近横ナデ、他は右下がりのハケ。内面ナデ。	片側に黒斑。
" -352	"	—	—	—	—	3.0	灰黄褐色。雲母、灰色系砂少量。焼成堅緻。	内外面ナデ。	
" -353	"	高杯	—	—	—	裾部径 19.1	灰赤色。灰色系角礫・粗砂多量。焼成やや軟。	脚は接合部で剥離。径2cmの透かし孔を脚部中位に4孔・下位に5孔配する。外面ナデ・ミガキ。内面ナデ・絞り目。裾端部は横ナデし面取る。	
" -354	"	蓋	—	—	—	裾部径 27.8	にぶい褐色。長石・雲母、灰色系粗砂・細砂を含む。焼成やや堅。	外面木理の細かい横ハケ。内面端部横ハケ、他はナデ。	内面及び断面に煤。(廃棄後煤)
" -355	"	—	—	—	—	5.0	灰黄褐色。灰黒色・白色の粗砂多量。焼成堅緻。	内外面ハケ。内底にハケ状原体による放射状の圧痕。	外面部分的に弱い煤。
" -356	"	—	—	—	—	2.8	にぶい黄橙色。灰色系円礫と白色系細砂少量。焼成やや堅。	外面縦ハケ。内面ハケ・ナデ・指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -357	"	—	—	—	—	4.0	明褐灰色。石英・長石、他の砂少量。焼成やや軟。	外面ハケ。内面ナデ。	外面と断面に煤。(廃棄後煤)
" -358	"	—	—	—	—	7.0	褐灰色。灰色系角礫・円礫・粗砂多量。焼成やや堅。	外面ナデ。内面ハケ・ナデ。	外面に弱い煤。外面片側に黒斑。
" -359	"	—	—	—	—	5.0	褐灰色。石英、赤色風化礫と白色・灰色系円礫を含む。焼成やや軟。	外面ハケ・ナデ。内面板ナデ、内底指頭圧痕。	外面に煤。
" -360	"	—	—	—	—	4.2	灰黄褐色。灰色・黒色・赤色系砂礫を含む。	内外面ナデ。内底強い板ナデ。底部脇指頭による押圧。	外面に煤。
" -361	"	—	—	—	—	4.2	暗灰黄色。角閃石、灰白色の粗砂・細砂を含む。焼成堅緻。	外面ハケ・ナデ。内面ナデ。	外面に弱い煤。底部付近に黒斑。
49-362a	土器集中 9	甕	—	—	17.4	—	灰黄褐色。黒色・白色・灰色系の砂礫を含む。	外面縦ハケ。内面ハケ後ナデ。	外面に煤。
" -362b	"	"	18.0	—	—	—	灰黄褐色。黒色・白色・灰色系の砂礫を含む。	内面上位に粘土帯接合痕。内外面ハケ・ナデ。	外面に弱い煤。
" -363	"	"	21.4	28.5	24.6	5.0	にぶい褐色。灰黒色の角礫・円礫、赤色風化礫を含む。焼成堅緻。	頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し段をなす。胴部内面にも接合痕。外面口縁部横ナデ・指頭圧痕、胴部縦ハケ・ナデ。内面ハケ・ナデ。	外面口縁部と胴部上位に強い煤。
" -364	"	"	22.0	—	—	—	灰色系円礫・粗砂、黒色・白色系砂を含む。焼成やや軟。	口縁部内外面ナデ。	外面口縁部に煤。

Tab.21 遺物観察表-弥生時代15

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
49-365	土器集中 9	甕	19.0	—	—	—	暗灰黄色。石英少量、黒色・白色・灰色系の砂を含む。焼成やや軟。	内外面板ナデ・指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -366	"	"	14.5	—	—	—	にぶい橙色。灰黒色の円礫・粗砂、白色の細砂を含む。焼成軟。	肩部内面に粘土帯接合痕を残す。外面縦ハケ。内面横ハケ。	外面口縁部に煤。
" -367	"	"	—	—	17.0	3.0	にぶい黄褐色。角閃石少量、白色・灰色系砂を含む。焼成やや軟。	肩部内面に粘土帯接合痕。外面縦ハケ・ナデ。内面ハケ・板ナデ。内底指頭圧痕。	外面に煤。
" -368	"	"	—	—	12.0	2.9	灰黄色。石英・角閃石、灰色系砂を含む。焼成堅緻。	肩部内面に粘土帯接合痕。外面板ナデ・指ナデ、頸部指頭による押圧。内面指ナデ・指頭圧痕。	外面片側に黒斑。
" -369	"	"	10.2	12.2	10.3	4.2	にぶい褐色。黒色・白色系の砂を含む。焼成やや軟。	頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し段をなす。内外面ナデ。底部脇に指頭圧痕。外底上げ底状。	
" -370	"	鉢	11.4	6.9	—	3.0	橙色。石英、黒色・赤色系砂少量。焼成やや軟。	内外面木理の粗い右下がりのハケ、板ナデ・指ナデ。内底指頭圧痕。	底部脇に黒斑。
" -371	"	"	20.6	—	—	—	にぶい橙色。石英少量、黒色・灰色系の砂を含む。焼成やや堅。	外面端部付近に粘土帯接合痕を明瞭に残し段をなす。外面ナデ。内面ハケ・ナデ。内外面とも接合部付近に指頭圧痕顕著。	
" -372	"	"	14.6	12.7	—	4.7	灰黄色。角閃石少量、灰色系角礫、白色・黒色・赤色の砂を含む。焼成やや軟。	内外面に粘土帯接合痕を残す。外面ナデ・指頭圧痕。内面縦ハケ、接合部付近に指頭圧痕。内底ハケ原体による放射状の圧痕。	
" -373	"	—	—	—	—	2.4	赤褐色。灰色系円礫と砂を含む。焼成やや軟。	内外面不定方向の木理の細かいハケ・板ナデ。	
" -374	"	—	—	—	—	3.8	にぶい黄褐色。角閃石少量、赤色・灰色系の円礫・粗砂、白色砂を含む。	内外面ナデ。内底強い指ナデ。底部脇指頭による強い押圧。外底上げ底状。	内面に強い煤。
" -375	"	—	—	—	—	5.6	灰褐色。灰色系円礫・粗砂、白色細砂多量。焼成やや堅。	外面縦ハケ・ナデ。内面ナデ。内底強い指ナデ。底部脇指頭による強い押圧。	外面に弱い煤。
" -376	"	—	—	—	—	3.4	褐灰色。灰色系角礫・粗砂、白色系細砂を含む。焼成堅緻。	外面木理の細かい縦ハケ後ナデ。内底指ナデ。外底中央を押圧し僅かに上げ底状。	外面及び断面に煤。(廃棄後の煤)
" -377	"	—	—	—	—	3.0	灰白色。石英、白色・灰黒色の砂を含む。焼成やや堅。	内外面板ナデ。底部脇に強い圧痕。	底部脇に黒斑。
" -378	"	—	—	—	—	3.4	灰褐色。石英、角閃石少量、白色・灰色系砂を含む。	外面底部脇板ナデ。内底指ナデ・指頭圧痕。	
" -379	"	高杯	—	—	—	裾部 径 22.4	にぶい橙色。白色・黒色・赤色・灰色系の砂を含む。焼成やや軟。	内外面木理の細かいハケ・ナデ。	裾部内面に弱い煤。
50-380	上層	壺	16.3	—	—	—	黄灰色。長石、他灰色系円礫・粗砂を含む。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1.4cmの粘土帯を貼付。外面縦ハケ。内面不定方向のハケ。	
" -381	XI層	"	18.2	—	—	—	灰白色。石英・長石、他の砂を含む。	口縁部外面に幅2cmの粘土帯を貼付、口唇部横ナデ、外面連続した指頭圧痕。頸部外面縦ハケ。口縁部内面横ハケ。	
" -382	"	甕	19.5	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色系円礫・粗砂多量。	口縁部外面に幅2.2cmの粘土帯を貼付し外面横ナデ。内外面ナデ。	
" -383	"	"	18.7	—	—	—	灰褐色。灰色系円礫、白色砂を含む。焼成軟。	口縁部外面に幅1.3cmの粘土帯を貼付し外面横ナデ。内外面ナデ。	
" -384	"	"	18.5	—	—	—	暗灰色。灰色系円礫と白色系粗砂多量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅2cmの粘土帯を貼付し外面に斜格子状の刻み目。口唇部は横ナデし楕円形浮文を貼付。頸部外面横方向の櫛目。内面ナデ。	
" -385	"	"	17.8	—	—	—	灰褐色。白色・灰色系の円礫・粗砂多量。	口縁部外面に幅1.7cmの粘土帯を貼付、外面を指頭押し接合部の段を潰す。内外面ナデ。	
" -386	"	"	20.4	—	—	—	にぶい橙色。角閃石・石英少量、円礫・角礫・粗砂多量。焼成堅緻。	頸部外面に粘土帯接合痕、明瞭に段を残す。口縁部外面横方向の指ナデ・指頭圧痕、内面横ハケ・ナデ・指頭圧痕。胴部内外面ナデ。	口縁部外面に弱い煤。

Tab.22 遺物観察表-弥生時代16

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
50-387	XI層	甕	15.1	—	—	—	にぶい橙色。石英、他黒色・灰色の粗砂を少量含む。焼成やや軟。	薄手のつくり。外面胴部右下がりの緻密なハケ、口縁部同ハケ・ナデ。内面胴部ナデ、口縁部繊維状の原体による横方向の擦痕。	外面に強い煤。
" -388	"	"	—	—	—	—	橙色。白色系の角礫・粗砂少量。焼成やや軟。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付、口唇部は横ナデし斜方向の刻み目、外面連続した指頭圧痕。内外面ナデ。	口縁部外面に強い煤。
" -389	"	"	—	—	—	—	明赤褐色。石英、黒色の粗砂を少量含む。	口縁部外面に幅1.7cmの粘土帯を貼付し、外面に幅広の刻み目、接合部の段は潰す。頸部外面ハケ・ナデ。口縁部内面横ハケ。	
" -390	"	"	—	—	—	—	にぶい黄褐色。灰白色の角礫・円礫多量。焼成堅緻。	口縁部外面に幅1.5cmの粘土帯を貼付し外面に刻み。内外面ナデ。	
" -391	"	"	—	—	—	—	にぶい黄褐色。石英、他の砂少量。	口縁部外面に幅1.3cmの粘土帯接合痕、口唇部下端に幅広の刻み目。頸部外面ハケ・ナデ。口縁部内面横ハケ。頸部外面ハケ後ナデ。内面横方向のハケ・ナデ。	
" -392	"	"	—	—	—	—	橙色。灰色系円礫多量。	肩部に楕円形浮文・櫛描直線文。内外面ナデ。	
" -393	"	"	—	—	—	—	にぶい橙色。石英・長石・雲母、他、円礫を含む。焼成堅緻。	肩部に1状沈線と列点文。外面ハケ・ナデ。内面ナデ・指頭圧痕。	
" -394	"	"	—	—	—	—	にぶい赤褐色。石英・長石・角閃石、細砂少量。焼成堅緻。	肩部に列点文。外面ナデ。内面ハケ・ナデ。	外面と断面に煤。(廃棄後煤)
" -395	"	ミニチュア	2.1	2.1	—	1.3	褐灰色。灰色系円礫・粗砂少量。焼成堅緻。	内外面ナデ・指頭圧痕。	
" -396	"	鉢	19.0	—	—	—	褐灰色。石英・長石・雲母・角閃石、他粗砂多量。焼成堅緻。	薄手のつくり。頸部外面で粘土帯接合し、接合部をナデ消す。接合部に連続した指頭圧痕。外面ナデ。内面ハケ・ナデ。	
" -397	"	—	—	—	—	5.7	橙色。角閃石少量、灰色系角礫・粗砂多量。焼成やや軟。	外面縦ハケ・ナデ。内面ナデ・指頭圧痕。	
" -398	"	—	—	—	—	3.8	にぶい赤褐色。灰黒色の角礫・粗砂を含む。焼成堅緻。	外面ナデ。底部脇指頭による強い押圧。内面ハケ・ナデ。内底ハケ原体による圧痕。外底上げ底状。	内外面に煤。
" -399	"	—	—	—	—	4.1	にぶい橙色。石英・角閃石少量、灰色系角礫粗砂多量。焼成やや堅。	内外面ナデ。内底指頭圧痕。外底に焼成前穿孔を認めるが内底に貫通しない。	
" -400	"	—	—	—	—	11.5	にぶい橙色。石英・角閃石少量、灰色系角礫・円礫・粗砂を含む。	外面縦ハケ・ナデ。内面右下がりのハケ、内底指頭圧痕。	外面に煤。
" -401	"	—	—	—	—	3.8	にぶい橙色。石英・角閃石少量、灰色系角礫・円礫を含む。焼成堅緻。	外面縦方向の強いナデ。底部脇指頭による強い押圧。内面ナデ。内底指頭圧痕。外底指頭による強い押圧で凹状。	内面と断面に煤。(廃棄後煤)
" -402	"	—	—	—	—	3.6	にぶい赤褐色。角閃石・雲母、灰色系円礫・粗砂を含む。焼成やや軟。	外面縦ハケ。内面ナデ・指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -403	"	—	—	—	—	6.0	灰黄褐色。雲母・角閃石、灰黒色の角礫・粗砂を含む。焼成やや堅。	外面縦ハケ・ナデ。底部脇指頭による横方向の圧痕。内面ナデ。内底指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -404	"	—	—	—	—	5.4	灰褐色。石英・雲母・角閃石、他円礫・角礫を含む。焼成堅緻。	底部脇ハケ状原体による圧痕。内底強い指ナデ。外底中央を指頭で強く押圧し凹状。	外面に煤。
51-405	SK9	壺	17.3	—	—	—	にぶい黄褐色。石英・角閃石、黒色・白色系の砂礫少量。焼成堅緻。	外面口縁部横ナデ・指頭圧痕、頸部縦ハケ。内面口縁部横ナデ後縦ハケ、頸部横ハケ。	
" -406	"	鉢	14.3	6.1	—	2.0	にぶい橙色。角閃石少量、灰色系角礫・粗砂を含む。	外面タタキ後ナデ。内面ハケ・ナデ。	
" -407	"	—	—	—	—	4.5	橙色。角閃石多量、黒色・白色系砂、円礫を含む。	外面右上がりのタタキ。内面木理の粗い右下がりのハケ・指ナデ。内底指頭圧痕。	外面底部脇に煤。
" -408	"	鉢	14.1	5.6	—	3.0	にぶい褐色。灰色系角礫少量・砂多量。焼成やや軟。	外面タタキ後ナデ。内面ナデ。	

Tab.23 遺物観察表-弥生時代17

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
55-409	SX4	壺	22.0	—	—	—	橙色。角閃石・雲母少量、赤褐色・灰色の円礫・角礫、白色砂を含む。	頸部に粘土帯を貼付しハケ状原体による矢羽状の強い圧痕を施す。外面頸部縦ハケ、胴部タタキ後ハケ。	
" -410	"	"	14.6	19.4	22.2	—	橙色。赤色風化礫、赤色・黒色系粗砂を含む。焼成堅緻。	外面口縁部縦ハケ、胴部タタキ後ハケ・ナデ。内面ハケ・ナデ、接合部付近に指頭圧痕。	外面中位と口縁部に煤。内面に弱い煤。
" -411	"	"	18.1	—	—	—	にぶい橙色。雲母、他の砂粒を少量含む。	口唇部格子状の圧痕文。内外面ハケ後ナデ。	
" -412	"	"	—	—	—	—	にぶい橙色。長石・雲母、赤褐色・灰色系の角礫・砂を含む。	頸部に粘土帯を貼付しハケ状原体による格子状の圧痕文を施す。内外面ハケ・ナデ。	
" -413	"	"	12.0	—	15.1	—	橙色。雲母、赤色風化礫、円礫を含む。	上胴部に粘土帯接合痕。内外面ハケ・ナデ・指頭圧痕。	内外面胴部下位に煤。
" -414	"	"	16.0	—	20.2	—	橙色。角閃石多量、黒色・赤色系砂と砕いた灰白色の砂を含む。焼成やや堅。	内面上位に粘土帯接合痕明瞭。外面口縁部縦ハケ、胴部タタキ後板ナデ。内面口縁部ハケ、胴部ハケ・ナデ。接合部に指頭圧痕顕著。	外面口縁部と胴部下位、内面下半位に弱い煤。
" -415	"	甕	17.0	—	—	—	にぶい黄褐色。雲母、灰黒色の円礫と黒色砂を含む。	頸部外面に接合痕を明瞭に残し小さく段をなす。外面水平方向のタタキ、口縁部タタキ後ナデ・指頭押圧。内面ハケ。	外面口縁部に煤。
" -416	"	"	20.0	—	—	—	にぶい赤褐色。雲母、黒色・白色系の砂粒を少量含む。焼成やや堅。	頸部外面に接合痕を明瞭に残し小さく段をなす。外面胴部タタキ、口縁部縦ハケ。内面ハケ。	内外面に煤。
" -417	"	"	26.1	31.1	23.5	3.4	にぶい黄褐色。長石・雲母、他の砂粒を含む。焼成やや堅。	頸部外面に接合痕を明瞭に残す。外面上半タタキ、下半タタキ後ハケ。頸部付近に指頭圧痕顕著。内面右下がりのハケ・ナデ。	内外面に煤。
" -418	"	"	15.4	24.3	17.3	2.6	橙色。赤色風化礫、他の砂粒を少量含む。	頸部外面に接合痕を明瞭に残し段をなす。外面口縁部ナデ・指頭圧痕、胴部タタキ・ハケ。内面ハケ。内底指頭圧痕。	外面中位・内面下半に強い煤。
" -419	"	"	16.6	20.4	16.7	—	にぶい橙色。赤色・黒色の粗砂、灰色系円礫を含む。焼成やや堅。	頸部外面に接合痕を明瞭に残す。外面胴部タタキ後縦ハケ、口縁部ナデ・指頭圧痕。内面ハケ・接合部付近に指頭圧痕。	外面中位と口縁部に強い煤。内底に弱い煤。
56-420	"	"	16.4	—	—	—	橙色。雲母、黒色・白色系砂粒を含む。焼成堅。	口縁部内外面横ナデ。	内外面に弱い煤。
" -421	"	"	14.4	5.0	—	—	にぶい橙色。雲母、赤色風化礫、他黒色系砂少量。焼成堅緻。	肩部内面に接合痕明瞭。外面タタキ後縦ハケ。内面横ハケ。	外面に弱い煤。
" -422	"	"	19.5	7.6	—	—	灰褐色。長石・雲母、他の砂粒を少量含む。焼成堅緻。	頸部外面に接合痕を明瞭に残す。外面胴部タタキ、口縁部ナデ、頸部指頭圧痕。内面ハケ。	内外面に煤。
" -423	"	"	13.4	—	—	—	灰褐色。雲母、黒色系砂粒を少量含む。	肩部内面に接合痕。口縁部内外面横ハケ・ナデ。	
" -424	"	"	12.1	9.3	12.2	—	にぶい黄褐色。長石・雲母、赤褐色の円礫、黒色系粗砂を少量含む。焼成やや堅。	外面タタキ後縦ハケ。内面右下がりのハケ。	外面中位に煤。
" -425	"	"	14.5	—	—	—	にぶい橙色。長石・雲母、赤色風化礫、他の砂粒を含む。焼成やや堅。	肩部内面に接合痕明瞭。外面胴部タタキ・口縁部タタキ後ナデ。内面ハケ・ナデ。	外面中位と口縁部に強い煤。
" -426	"	"	12.8	6.8	13.0	—	褐灰色。灰色系円礫・粗砂を多量に含む。焼成堅緻。	頸部外面の接合痕をハケで消す。外面タタキ後縦ハケ・ナデ。内面口縁部ハケ、胴部ナデ、指頭圧痕。	
" -427	"	"	19.0	14.2	—	—	にぶい黄褐色。長石・雲母少量、灰色系円礫・粗砂多量。焼成やや堅。	上胴部内面に接合痕明瞭。外面口縁部縦ハケ、胴部タタキ後強い板ナデ・ハケ。内面ハケ・ナデ。	外面に強い煤。
" -428	"	"	19.2	24.3	16.7	3.9	灰褐色。灰色系円礫と黒色・白色系細砂を含む。	上胴部内面に粘土帯接合痕を残す。外面タタキ後縦ハケ。内面ハケ。	外面中位と口縁部に強い煤。内面に弱い煤。
" -429	"	"	14.8	21.1	15.3	—	にぶい橙色。雲母、灰色系円礫、黒色・赤色・白色系砂を含む。	内面に粘土帯接合痕を残す。外面タタキ後縦ハケ。内面ハケ・ナデ。	外面中位強い煤、内面下半弱い煤。
" -430	"	"	14.8	21.6	15.2	1.5	橙色。雲母、赤色風化礫、黒色・赤色系角礫(真岩)、赤色風化礫を含む。	上胴部内面に粘土帯接合痕を残す。外面口縁部ハケ、胴部タタキ・ハケ。内面ハケ。	外面胴部中位と口縁部に煤。

Tab.24 遺物観察表-弥生時代18

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
56-431	SX4	甕	17.0	18.5	14.9	3.0	明赤褐色。長石、黒色・白色系砂を含む。	外面上半縦ハケ、下半タタキ。内面ハケ。内底指頭圧痕。	胴部中位に弱い煤。
" -432	"	"	15.3	24.1	17.4	2.8	橙色。雲母、赤色風化礫、他の粗砂少量。	口縁部叩き出し成形。外面タタキ・下半タタキ後木理の粗い縦ハケ。内面木理の粗いハケ。	外面に強い煤。
" -433	"	鉢	20.4	11.2	—	—	にぶい橙色。灰色系の角礫・円礫・粗砂を含む。焼成やや堅。	外面右下がりのタタキ。内面木理の細かいハケ・ナデ、口縁内面に強い横ナデ。	
" -434	"	"	10.5	5.5	—	4.5	橙色。石英・雲母、赤色風化礫、他の砂粒を含む。	外面ナデ、底部脇に指頭圧痕。内面横ハケ・ナデ。	
" -435	"	"	8.8	3.9	—	3.4	にぶい赤褐色。石英・雲母、黒色系砂粒を少量含む。	外面ナデ、底部脇に指頭圧痕。内面右下がりのハケ。	
" -436	"	甕	—	—	—	2.4	灰黄褐色。石英・雲母、赤色風化礫、灰色系円礫を含む。	外面タタキ後木理の粗いハケ。内面、指ナデ。外底タタキ。	外面に弱い煤。
" -437	"	"	—	—	—	2.5	にぶい橙色。長石、灰色系角礫を含む。	外面タタキ後縦ハケ。外底タタキ。内面板ナデ・指ナデ。内底指頭圧痕。	内面に煤。
" -438	"	—	—	—	—	3.7	にぶい橙色。雲母、赤色風化礫、黒色系粗砂・細砂を少量含む。	外面タタキ。内面ハケ。内底にハケ状原体による放射状の圧痕。外底中央僅かに凹状。	外面に弱い煤。
" -439	"	土製品	—	—	—	—	橙色。石英・雲母、他の砂少量。	粘土板を袋状に貼り合わせ、内側は中空。先端部に径3・の焼成前穿孔あり。外面指頭圧痕・ナデ。	
58-440	SX5	壺	17.1	—	21.0	—	橙色。石英・雲母、赤色風化礫、褐色・灰色系円礫を含む。焼成やや堅。	外面口縁部ナデ、頸部縦ハケ、胴部タタキ・ナデ。内面口縁部ナデ、頸部横ハケ、胴部ハケ・ナデ。接合部周辺に指頭圧痕顕著。	
" -441	"	"	—	—	19.4	2.1	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、他褐色の円礫少量。焼成やや軟。	肩部内面と上胴部外面に粘土帯接合痕明瞭。外面タタキ・ハケ。内面木理の粗いハケ・ナデ。接合部周辺に指ナデ・指頭圧痕。	外面中位に強い煤、内底に弱い煤。
" -442	"	甕	16.2	—	15.2	—	にぶい黄褐色。石英・雲母・角閃石、褐色・灰色系円礫少量。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕明瞭。上胴部内面と外面にも接合痕。外面口縁部ナデ・指頭圧痕、胴部タタキ。内面上半ハケ、下半ナデ。	外面中位に強い煤、内面下位に弱い煤。
" -443	"	"	16.0	24.6	17.0	1.8	橙色。石英・雲母、褐色の円礫少量。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し接合部をナデ消さない。外面口縁部ナデ、胴部タタキ。内面ナデ。	外面片側に黒斑。外面口縁部と胴部中位に煤。
" -444	"	"	16.6	27.2	18.0	2.1	明赤褐色。石英・雲母・角閃石、褐色の円礫含む。焼成堅緻。	外面胴部に粘土帯接合痕。外面口縁部ナデ・指頭圧痕、頸部縦ハケ、胴部タタキ後ナデ・ハケ。内面口縁部横ハケ・ナデ、胴部ナデ・指頭圧痕。	外面口縁部～上半に強い煤。
" -445	"	"	15.1	24.1	17.7	3.0	にぶい赤褐色。石英・雲母・角閃石、灰白色の円礫少量。焼成堅緻。	外面タタキ・強い板ナデ・指頭圧痕。内面口縁部横ハケ・ナデ、胴部板ナデ・指ナデ。内底指頭圧痕。	外面口縁部～中位に強い煤。
" -446	"	"	21.7	30.7	23.2	3.0	橙色。石英、灰黒色の角礫やや多量。焼成やや軟。	内面中位に粘土帯接合痕。外面口縁部縦ハケ、胴部タタキ・縦ハケ。内面右下がりのハケ・ナデ。	外面口縁部～中位に強い煤。
" -447	"	"	15.8	23.7	16.4	2.6	にぶい赤褐色。石英・長石・雲母・角閃石、褐色・灰白色の円礫を含む。焼成堅緻。	外面胴部に粘土帯接合痕。外面タタキ・ハケ・ナデ・指頭圧痕。底部脇に縦方向のタタキを加える。内面ナデ。内底強い指ナデ・指頭圧痕。	外面口縁部～上半に強い煤。断面にも煤。
" -448	"	"	—	—	16.5	1.4	明赤褐色。石英・雲母、褐色・灰色系の円礫含む。焼成やや堅。	外面タタキ。底部脇に縦方向のタタキを放射状に加える。内面ハケ。内底指頭圧痕。	外面中位と内面下位に弱い煤。
" -449	"	"	—	—	14.7	2.2	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、褐色の円礫を含む。焼成やや堅。	内面に粘土帯接合痕。外面タタキ・縦ハケ、底部脇指頭による強い押圧。内面ハケ・ナデ。内底付近強い指ナデ・指頭圧痕。	外面中位に強い煤。
" -450	"	—	—	—	—	2.0	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、褐色の円礫を含む。	外面タタキ・ハケ・ナデ、底部脇に縦位のタタキを加える。内面ハケ・ナデ。内底指頭圧痕。外底指頭押圧で凹状。	外面中位と内底に弱い煤。

Tab.25 遺物観察表-弥生時代19

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
59-451	SX5	甕	23.0	—	23.3	—	にぶい褐色。長石・赤色風化礫少量、灰黒色の角礫・円礫多量。焼成やや軟。	口縁部叩き出し成形。肩部内面に粘土帯接合痕明瞭。外面水平方向のタタキ・部分的にナデ。内面八ケ・ナデ。接合部付近に指頭圧痕。	外面中位に弱い煤。
" -452	"	鉢	12.0	5.7	—	3.8	にぶい黄橙色。石英・雲母・角閃石、褐色・灰色系の円礫を含む。焼成やや堅。	外面タタキ。内面八ケ。内底八ケ状原体による放射状の圧痕。	
" -453	"	"	15.0	4.3	—	2.9	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、褐色の円礫・粗砂を含む。焼成やや軟。	外面水平～右上がりのタタキ。内面ナデ。内底八ケ状原体による放射状の圧痕。	
" -454	"	"	10.0	4.8	—	3.3	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、他少量。焼成やや軟。	外面指ナデ・指頭圧痕。内面横八ケ・ナデ。	
" -455	"	"	13.9	6.6	—	1.2	明赤褐色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、他少量。焼成やや堅。	外面タタキ・ナデ。外底付近八ケ・板ナデ。内面八ケ。内底八ケ状原体による放射状の強い圧痕。外底指頭による押圧で凹状。	内面片側に煤。
" -456	"	手捏土器	3.0	3.0	—	1.0	橙色。石英・雲母、赤色風化礫少量。焼成非常に軟質。	手捏成形。内外面ナデ・指頭圧痕。	
61 - 457	土器集中10	壺	23.0	—	—	—	橙色。灰黒色の円礫、赤色・黒色系砂を含む。焼成やや軟。	口縁部外面に櫛描波状文。内外面木理の粗い八ケ。	
" -458	"	"	15.0	—	—	—	橙色。雲母、赤色・黒色・白色系細砂を含む。焼成堅緻。	内面肩部に粘土帯接合痕を残す。口縁部内外面八ケ。内面肩部に強い指ナデ。	
" -459	"	"	10.4	—	—	—	橙色。雲母他、黒色・白色系砂粒を含む。	口縁部内外面八ケ後ナデ。	
" -460	"	甕	15.7	25.3	18.2	2.4	褐灰色。角閃石、黒色・白色系砂を含む。焼成やや軟。	外面口縁部ナデ・指頭圧痕、体部タタキ・八ケ。内面木理の粗い八ケ、下半ナデ。内底指頭圧痕。	外面に煤。
" -461	"	"	18.0	—	—	—	灰黄褐色。円礫少量、黒色・白色系砂を含む。焼成やや軟。	外面縦八ケ。内面右下がりの八ケ。	外面に煤。
" -462	"	鉢	11.2	—	—	—	にぶい橙色。石英・雲母他、白色系細砂を少量含む。焼成やや堅。	内外面横ナデ。	
" -463	"	—	—	—	—	1.8	灰黄褐色。角閃石少量、赤色・黒色・白色系砂を含む。焼成やや軟。	外面八ケ後ナデ、底部脇強いヘラナデ。内底指頭圧痕。外底は指頭押圧により凹状。	
" -464	"	—	—	—	—	4.0	にぶい橙色。雲母、黒色・灰色系粗砂・円礫を含む。焼成やや堅。	外面タタキ後縦八ケ、内面木理の粗い不定方向の八ケ。内底ナデ。外底指頭押圧により凹状。	外面底部付近に弱い煤。
" -465	"	—	—	—	—	3.4	にぶい赤褐色。黒色・白色・灰色系の砂を含む。焼成やや堅。	外面八ケ後ナデ。内面ナデ。内底指頭圧痕。	
" -466	"	—	—	—	—	2.2	灰黄褐色。灰色系円礫、赤色・黒色・白色・灰色系の砂を含む。焼成やや堅。	外面右上がりのタタキ。内面指ナデ。内底指頭圧痕。外底タタキ。	外面に弱い煤。内面片側に黒斑。
" -467	"	—	—	—	—	3.2	にぶい褐色。石英・雲母、黒色・白色系砂を含む。焼成やや堅。	外面右上がりのタタキ。内面八ケ、内底指ナデ。外底タタキ。	外面に弱い煤。
" -468	"	—	—	—	—	2.4	にぶい橙色。石英・雲母少量、灰色系円礫やや多量。	外面タタキ後縦八ケ、内面ナデ。内底に指頭圧痕。	
" -469	"	—	—	—	—	2.8	橙色。雲母他の細砂・灰色系円礫を少量含む。	外面右上がりのタタキ、内面右下がりの八ケ。内底指頭圧痕。	外面底部付近に煤。
" -470	"	鉢	—	—	—	3.4	にぶい橙色。角閃石多量、黒色・白色・赤色系の砂と円礫を含む。	外面ナデ。内面八ケ・ナデ。内底指頭圧痕。外面に亀裂多い。	外面に弱い煤。

Tab.26 遺物観察表-弥生時代20

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
61-471	土器集中 10	鉢	—	—	—	1.5	にぶい赤褐色。灰黒色・灰色・白色系の砂を含む。焼成やや堅。	外面底部脇右上がりのタタキ。内面ナデ。外底指頭による強い押圧で上げ底状。	外面に弱い煤。
" -472	"	手捏土器	5.6	4.0	—	1.0	橙色。角閃石少量、黒色・赤色・灰色系の砂・円礫を含む。焼成やや軟。	内外面ナデ・指頭圧痕。	外面片側に黒斑。
" -473	"	—	—	—	—	2.2	にぶい褐色。石英・雲母、赤色風化礫を含む。焼成やや堅。	外面タタキ後縦ハケ、内面ナデ。内底に指頭圧痕。	外面及び断面に煤。(廃棄後煤)
62-475	土器集中 11	壺	25.9	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色系角礫・粗砂を含む。焼成軟。	外面ハケ後ナデ。内面ナデ・指頭圧痕。	
" -476	"	—	—	—	—	2.5	にぶい赤褐色。雲母、灰色系円礫・角礫他を含む。焼成やや堅。	外面タタキ・ハケ。内面ナデ。内底指頭圧痕。外底タタキ。	外面に弱い煤。
" -477	"	—	—	—	—	3.7	にぶい橙色。黒色・灰色系の砂多量、円礫少量。焼成軟。	外面タタキ・板ナデ。内面木理の細かい右下がりのハケ。	
" -478	"	甕	—	—	21.5	—	橙色。灰色系円礫少量、黒色・白色系砂多量。焼成やや軟。	肩部内面に粘土帯接合痕。外面タタキ・木理の粗い縦ハケ。内面粗いハケ。	
64-479	土器集中 12	壺	19.4	—	—	—	にぶい橙色。褐色・灰色系の角礫・円礫・粗砂多量。	口縁端部は上方に肥高させる。頸部に粘土帯を貼付し斜方向の刻目を施す。肩部内面に粘土帯接合痕明瞭。内外面ハケ・ナデ。	
" -480	"	"	25.0	—	—	—	にぶい橙色。灰色系角礫・粗砂多量。	口縁端部を拡張し口唇部にハケ状原体による刻み。口縁部内外面ハケ、端部付近は強い横ナデ。	
" -481	"	"	17.4	—	—	—	にぶい橙色。灰黒色の円礫多量。	口縁部外面ハケ・指頭圧痕、端部付近強い横ナデ。内面ナデ。	
" -482	"	"	20.0	—	—	—	にぶい橙色。白色・灰色系の角礫・円礫・粗砂多量。焼成軟。	内外面ハケ後ナデ。	
" -483	"	甕	—	—	13.0	3.4	にぶい橙色。長石・雲母、灰黒色の角礫・粗砂を含む。焼成やや堅。	外面タタキ後縦ハケ。外底タタキ。内面右下がりのハケ。内底指頭圧痕。	外面中位に煤。
" -484	"	"	16.3	—	—	—	にぶい橙色。雲母、赤色風化礫、黒色・赤色系砂を少量含む。焼成やや堅。	口縁部吹き出し成形。外面右上がりのタタキ、内面右下がりのハケ。	
" -485	"	"	15.2	—	—	—	橙色。黒色・灰色系の砂を含む。焼成やや軟。	口縁部吹き出し成形。外面タタキ・ハケ。内面口縁部ハケ、胴部ハケ後ナデ・指頭圧痕。	外面に煤。
" -486	"	"	15.6	22.8	16.9	2.2	橙色。雲母、赤色風化礫、他円礫少量。焼成やや軟。	口縁部吹き出し成形。外面タタキ・底部脇ハケ。内面右下がりのハケ。外底タタキ。	外面中位に弱い煤。
" -487	"	"	16.0	22.2	16.9	2.0	にぶい橙色。雲母、赤色・黒色系砂、灰色系円礫を含む。	外面口縁部タタキ後ナデ、胴部タタキ。内面ハケ。	外面上半に弱い煤。
" -488	"	"	17.2	—	—	—	明赤褐色。雲母、灰黒色の角礫、黒色系砂少量。焼成やや堅。	外面口縁部タタキ後粗い縦ハケ、胴部タタキ、底部脇ハケ。内面右下がりのハケ。	外面中位に煤。
" -489	"	"	—	—	—	2.0	灰黄褐色。灰黒色の円礫、黒色・白色系砂多量。焼成やや堅。	外面右上がり～水平方向のタタキ・ハケ、外底タタキ。内面右下がりのハケ・ナデ、内底指頭圧痕。	内外面に煤。
" -490	"	"	—	—	—	3.6	にぶい橙色。雲母、赤色風化礫、灰色系粗砂を含む。焼成やや堅。	外面タタキ・下半タタキ後縦ハケ。内面ハケ。内底指頭圧痕・ナデ。	内外面に煤。
" -491	"	"	—	—	—	6.2	橙色。雲母、赤色風化礫、灰色系粗砂を含む。焼成やや堅。	外面タタキ後ハケ・板ナデ。内面ナデ。	
" -492	"	"	—	—	—	2.0	にぶい橙色。黒色系角礫・粗砂多量。焼成やや堅。	外面タタキ、底部脇強い板ナデ。内面ナデ・指頭圧痕。	外面中位に煤。
" -493	"	—	—	—	—	3.0	にぶい橙色。雲母、黒色・白色系砂、灰色系円礫を含む。焼成やや堅。	外面タタキ後ハケ・ナデ、外底タタキ。内面ハケ後ナデ。	外面に弱い煤。

Tab.27 遺物観察表-弥生時代21

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
64-494	土器集中 12	—	—	—	—	4.4	にぶい橙色。長石・雲母、 黒色系砂少量含む。焼成 やや堅。	外面タタキ。内面八ケ。内底八ケ状原体 による放射状の圧痕。	外底に黒斑。
" -495	"	—	—	—	—	—	橙色。灰色系角礫・粗砂 を含む。焼成やや堅。	外面タタキ後ナデ・八ケ。内面ナデ。	
" -496	"	—	—	—	—	3.0	にぶい赤褐色。雲母、赤 色系砂、褐色・灰色系円 礫多量。焼成やや堅。	外面八ケ・ナデ、底部脇強い板ナデ。内 面八ケ・ナデ。内底八ケ原体による放射 状の圧痕。	内外面に煤。
" -497	"	—	—	—	—	2.5	橙色。雲母少量、黒色・ 赤色系砂少量。焼成やや 堅。	外面八ケ・ナデ。内面ナデ、内底指頭圧 痕。	内面に弱い煤。
" -498	"	—	—	—	—	2.6	灰黄褐色。石英・雲母・ 角閃石、灰黒色・褐色の 角礫やや。多量焼成やや 堅。	外面ナデ。内面八ケ・指ナデ。	外面に弱い煤。
" -499	"	—	—	—	—	5.2	橙色。石英・長石・雲母、 他の砂少量。焼成やや堅。	外面ナデ、底部脇強い板ナデ。内面八ケ。 内底八ケ状原体による放射状の圧痕。	外底に黒斑。
65-500	"	鉢	21.6	8.1	—	4.4	赤色。雲母、黒色系砂を 少量含む。焼成やや堅。	外面タタキ後ナデ・指頭圧痕。内面八ケ。 内底指頭圧痕・板ナデ。外底凹状。	
" -501	"	"	13.8	7.5	—	5.3	褐灰色。雲母、黒色・白 色系砂少量。焼成やや堅。	外面ナデ・指頭圧痕、口縁部外面横ナデ。 内面木理の粗い八ケ。内底八ケ原体によ る圧痕。	
" -502	"	"	10.0	6.7	—	4.1	橙色。石英・雲母、黒色・ 白色系円礫・砂を少量含 む。	外面水平方向のタタキ・ナデ。内面八ケ 後ナデ、内底指頭圧痕。	内外面に黒斑。
" -503	"	"	10.0	5.3	—	3.2	褐灰色。雲母、黒色・灰 色系の砂を含む。焼成や や堅。	外面タタキ・ナデ。内面八ケ。内底右下 がりの八ケ。内底八ケ状原体による圧痕。	内面に黒斑。
" -504	"	"	8.6	5.2	—	—	明褐灰色。長石・雲母、 黒色・灰色系の砂・円礫 を含む。焼成やや堅。	外面ナデ・指頭圧痕。内面木理の粗い八 ケ・ナデ。内底指頭圧痕。	
" -505	"	高杯	—	—	—	裾部 径 18.0	橙色。灰黒色・白色系の 円礫・角礫多量。	外面ナデ。内面八ケ後ナデ。	
" -506	"	"	—	—	—	裾部 径 11.2	にぶい橙色。灰色系角礫・ 円礫多量。焼成軟。	内外面ナデ。	
67-508	土器集中 13	壺	26.6	—	—	—	にぶい橙色。雲母、赤色 風化礫、灰色・白色系角 礫・円礫を含む。焼成や や堅。	口唇部に刻目。内外面八ケ。	内外面及び断 面に煤。(廃 棄後煤)
" -509	"	"	19.4	—	—	—	にぶい橙色。白色・灰色 系の角礫・粗砂を多量に 含む。焼成やや軟。	外面縦八ケ。内面ナデ。	
" -510	"	甕	18.0	—	18.2	—	橙色。長石・赤色風化礫、 灰色系角礫を含む。	外面上半右上がり、下半右下がりのタタ キ・縦八ケ。内面八ケ・ナデ。	外面に煤。
" -511	"	"	14.8	20.8	15.1	2.2	にぶい橙色。石英・長石、 赤色風化礫、灰白色の砂 を含む。焼成やや堅。	口縁部叩き出し成形。肩部内面に接合痕 明瞭。外面上半右上がり、下半水平方向 のタタキ。内面八ケ・ナデ。	外面中位と内 面片側に煤。
" -512	"	"	14.0	—	16.6	—	明赤褐色。雲母、黒色系 砂他を含む。	頸部外面に接合痕を明瞭に残し段をなす。 外面タタキ・ナデ。内面右下がりの八ケ・ ナデ。	
" -513	"	"	—	—	12.6	1.0	浅黄橙色。赤色・黒色・ 白色系砂を含む。焼成や や堅。	外面タタキ後八ケ・ナデ・指頭圧痕。内 面八ケ・ナデ。底部尖底状となるが、先 端部を指頭押し凹状。	
" -514	"	"	—	—	—	2.4	橙色。雲母、赤色風化礫、 灰色系角礫を含む。焼成 やや堅。	外面タタキ・八ケ。内面木理の粗い八ケ・ ナデ。	
" -515	"	鉢	10.8	6.8	—	0.7	橙色。赤色風化礫、黒色・ 灰色系粗砂を含む。焼成 やや堅。	外面タタキ後ナデ・八ケ。内面ナデ。	

Tab.28 遺物観察表-弥生時代22

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
67-516	土器集中 13	鉢	11.9	5.1	—	4.4	赤橙色。長石・雲母、黒色系砂を含む。焼成やや堅。	外面ナデ、底部脇に指頭圧痕顕著。内面木理の粗いハケ。	外底に黒斑。
" -517	"	"	11.1	—	—	—	明赤褐色。石英、黒色・白色系角礫・粗砂を含む。	外面ナデ、指頭圧痕。内面ハケ・ナデ。	
" -518	"	"	—	—	—	3.8	橙色。雲母、黒色・白色・赤色系砂を含む。焼成やや堅。	外面タタキ後ナデ・指頭圧痕。内面ナデ・指頭圧痕。	外底片側に煤。
68-520	土器集中 14	甕	17.0	21.7	16.0	3.4	橙色。灰白色・黒色・赤色系の砂を含む。焼成やや軟。	頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残す。外面口縁部ナデ・指頭圧痕、胴部タタキ・ハケ・ナデ。内面ハケ・ナデ。接合部に指頭圧痕。	外面中位に強い煤。
" -521	"	"	14.0	21.1	13.9	1.5	にぶい橙色。角閃石、灰白色・黒色・赤色系の砂を含む。	頸部外面に粘土帯接合痕を認めるがナデ消す。外面タタキ・ハケ。内面ハケ・ナデ。内底強い指ナデ。	外面中位に煤。
" -522	"	"	—	—	—	3.0	にぶい褐色。角閃石、灰白色・黒色・赤色系の砂を含む。	外面タタキ後ナデ・ハケ。内面右下がりのハケ。内底指頭圧痕。	
" -523	"	"	—	—	13.3	1.0	にぶい黄褐色。赤色・黒色系の砂、灰色系円礫を含む。焼成非常に軟。	胴部内面に粘土帯接合痕を残す。外面タタキ後ハケ・ナデ。内面ハケ・ナデ。	外面に弱い煤。
70-524	土器集中 15	壺	17.4	43.0	31.3	6.5	にぶい黄褐色。赤色・黒色系の砂、灰色系円礫を含む。焼成やや軟。	複合口縁。頸部外面に幅1cmの粘土帯を巡らせ矢羽文を刻む。外面口縁部木理の粗いハケ、胴部タタキ後粗いハケ。内面同ハケ・ナデ。頸部内面に指頭圧痕顕著。外面上位粘土帯接合痕明瞭。	
" -525	"	"	15.8	—	—	—	にぶい赤褐色。石英・角閃石少量、灰黒色の角礫・粗砂多量。焼成やや軟。	口縁部外面に円形の圧痕文と櫛描波状文。頸部外面に粘土帯を巡らせ上下に圧痕。外面ナデ。内面口縁部横ナデ、頸部ハケ・ナデ、肩部ナデ・指頭圧痕。	
" -526	"	"	19.7	—	—	—	にぶい橙色。灰黒色・灰白色の円礫やや多量。焼成軟。	外面ハケ後ナデ。内面ナデ。	
" -527	"	"	23.3	40.4	34.0	5.0	黒褐色。雲母、灰色系円礫・角礫、白色系粗砂を含む。焼成やや軟。	複合口縁。口縁部内外面横ナデ。頸部木理の粗いハケ。胴部外面タタキ後粗いハケ、内面ハケ・ナデ、接合部付近指頭圧痕。	
" -528	"	"	15.4	41.9	34.2	3.0	にぶい橙色。石英、赤色風化礫少量、灰色系円礫・粗砂やや多量。焼成やや軟。	複合口縁。頸部外面に幅1cmの粘土帯を巡らせ格子目文を刻む。外面口縁部ハケ、胴部タタキ後ハケ・ナデ。内面ハケ・ナデ。内面上位粘土帯接合痕明瞭、指頭圧痕顕著。	
71-529	"	"	12.7	—	24.5	—	橙色。石英・雲母、褐色の円礫他を少量含む。焼成軟。	肩部内面に粘土帯接合痕。外面口縁部横ナデ、胴部タタキ後ハケ・ナデ。内面口縁部横ハケ・横ナデ、胴部ハケ・ナデ。	
" -530	"	"	11.8	31.4	25.2	6.0	にぶい橙色。灰色系粗砂やや多量。焼成やや軟。	内面肩部と上位に粘土帯接合痕。外面タタキ後ハケ・ナデ。内面ハケ・ナデ。	外底片側に黒斑。
" -531	"	"	20.1	35.2	29.7	4.3	にぶい橙色。赤色風化礫、灰色系円礫・粗砂少量。焼成やや軟。	口縁部内外面ナデ。胴部外面タタキ後ナデ、内面ハケ・ナデ。肩部内面に粘土帯接合痕明瞭。	外面中位に弱い煤。
" -532	"	"	13.8	—	26.0	—	淡橙色。灰色系円礫・粗砂を含む。焼成やや軟。	内面肩部と中位に粘土帯接合痕。内外面ハケ・ナデ。	
" -533	"	甕	15.6	27.0	18.0	2.0	橙色。石英・長石・雲母・角閃石少量。焼成やや軟。	肩部内面に粘土帯接合痕。外面タタキ・縦ハケ。内面右下がりのハケ。内底指ナデ・指頭圧痕。	外面中位の片側に煤。
" -534	"	"	15.7	23.8	16.4	2.3	にぶい橙色。暗赤色・黒色・灰色系円礫・粗砂を含む。	肩部内面に粘土帯接合痕。外面口縁部タタキ後縦ハケ・ナデ、胴部タタキ。内面右下がりのハケ。内底強い指ナデ。	外面中位に弱い煤。
" -535	"	"	16.2	23.5	17.6	1.8	にぶい橙色。石英・雲母、赤色風化礫、他の砂を少量含む。焼成やや堅。	内面上位と外面中位に粘土帯接合痕。外面口縁部縦ハケ、胴部タタキ・ハケ。底部脇に右上がりの強いタタキを加える。内面木理の粗い右下がりのハケ。内底強い指ナデ。	底部脇に黒斑。

Tab.29 遺物観察表-弥生時代23

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
72-536	土器集中 15	甕	16.0	21.2	14.9	3.0	橙色。石英・雲母、赤褐色・灰色の円礫、白色砂少量。	外面に粘土帯接合痕。口縁部叩き出し成形。外面上半右上がり、下半右下がり。タタキ。内面ハケ・ナデ。内底指頭圧痕。外底タタキ。	外面片側に弱い煤。
" - 537	"	"	16.0	22.5	16.9	1.6	にぶい赤褐色。石英・長石・雲母・角閃石、灰色系円礫少量。焼成やや堅。	口縁部叩き出し成形。内面上位に粘土帯接合痕。外面タタキ。内面木理の粗い右下がりハケ。	外面片側に弱い煤。
" - 538	"	"	18.4	—	—	—	橙色。石英・長石・角閃石、赤色・灰色系砂少量。焼成やや堅。	口縁部叩き出し成形。外面口縁部タタキ後ハケ・ナデ、胴部タタキ。内面木理の粗い右下がりハケ。	
" - 539	"	"	—	—	21.0	2.0	にぶい橙色。石英・雲母少量、灰色系円礫含む。	外面タタキ・木理の粗い縦ハケ。内面粗い右下がりハケ。内底タタキ。外底指頭による押圧で凹状。	
" - 540	"	"	18.7	34.3	23.6	4.0	橙色。石英・雲母やや多量、赤色風化礫、灰色系砂少量。	頸部外面で粘土帯接合、接合部をナデ消すが僅かに接合痕が残る。外面タタキ・縦ハケ。内面口縁部ナデ、胴部ハケ・ナデ。内底強い指ナデ。	外面片側に煤。
" - 541	"	"	17.6	25.0	17.9	3.5	にぶい黄褐色。石英・雲母、白色砂少量。焼成やや堅。	頸部外面で粘土帯接合、接合部をハケで消すが段が僅かに残る。外面タタキ、底部脇ハケ。内面右下がりハケ、下半ハケ後ナデ。内底強い板ナデ。	外面片側に黒斑。
" - 542	"	"	14.0	—	15.6	—	橙色。石英・雲母・長石、赤色風化礫、灰色系砂少量。	頸部外面に粘土帯接合痕明瞭、接合部に横ナデを施すが小さく段が残る。外面口縁部タタキ後ナデ・指頭圧痕、胴部タタキ・ハケ。内面ハケ後ナデ。	
" - 543	"	鉢	19.0	10.3	—	4.7	にぶい橙色。石英・雲母・赤色風化礫を含む。	外面タタキ・ナデ・指頭圧痕。内面木理の粗い右下がりハケ。底部脇強い板ナデ。内底ハケ原体による放射状の圧痕。外底上げ底状。	底部脇に黒斑。
" - 544	"	"	15.7	7.6	—	—	にぶい褐色。石英・雲母、他の砂粒少量。焼成やや堅。	外面水平方向のタタキ、外底ナデ。内面縦ハケ、内底ナデ。	外面口縁部付近に煤。
" - 545	"	"	11.4	6.4	—	3.8	にぶい橙色。石英・長石、他の砂粒少量。	外面右上がりタタキ。内面ハケ・板ナデ。	
" - 546	"	"	8.9	4.3	—	4.0	にぶい橙色。石英・雲母、白色系砂少量。焼成やや軟。	外面ナデ、底部脇指頭圧痕。内面右下がりハケ。	内面と口縁部外面に煤。
" - 547	"	"	6.9	4.0	—	5.0	にぶい橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、灰色系円礫、白色砂を含む。焼成軟。	外面ナデ・指頭圧痕。内面ハケ・ナデ。	
" - 548	"	手捏土器	—	—	6.3	—	橙色。石英・雲母、白色・灰色系砂礫を含む。	外面中位に粘土帯接合痕。外面タタキ後指ナデ・指頭圧痕。内面ナデ・指頭圧痕。	
74-550	土器集中 16	甕	16.5	21.2	15.8	3.0	橙色。石英・雲母、赤色風化礫、灰色系円礫。焼成やや軟。	口縁部叩き出し成形。外面に粘土帯接合痕。外面右上がりタタキ、底部脇に縦位のタタキを加える。内面右下がりハケ。内底付近指ナデ・指頭圧痕。	外面口縁部～上半に強い煤。
" - 551	"	"	17.2	—	—	—	明赤褐色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、褐色系円礫少量。焼成堅緻。	外面口縁部ナデ・指頭圧痕、頸部縦ハケ、胴部タタキ・ハケ。内面木理の粗いハケ・ナデ。	外面口縁部～中位に強い煤。
" - 552	"	"	17.0	—	—	—	にぶい橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫を含む。	外面胴部上位に粘土帯接合痕。外面口縁部～肩部タタキ後ハケ、胴部タタキ。内面ハケ後ナデ。	外面口縁部と中位に弱い煤。
" - 553	"	"	—	—	—	2.6	にぶい橙色。石英・雲母、赤色風化礫、褐色・灰色系円礫を含む。	外面タタキ・縦ハケ・ナデ。内面ナデ、内底付近ハケ。外底指頭による強い押圧で凹状。	外面中位と内底に強い煤。
" - 554	"	"	—	—	—	1.6	黒褐色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫を含む。焼成やや堅。	外面下位に粘土帯接合痕。外面右上がりタタキ。内面ナデ・指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" - 555	"	—	—	—	—	3.6	橙色。石英・雲母、褐色・灰色系角礫・円礫やや多量。焼成やや軟。	内外面ナデ。底部脇と内底に指頭圧痕。	
" - 556	"	壺又は甕	—	—	28.8	—	にぶい黄褐色。雲母・結晶片岩を含む。	外面木理の非常に細かい縦～斜方向のハケ。内面上半指頭圧痕顕著、下半斜方向の篋削り。	搬入品。

Tab.30 遺物観察表-弥生時代24

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
75-557	土器集中 17	甕	16.4	—	—	—	橙色。石英・雲母、赤色風化礫を含む。焼成やや軟。	頸部外面に粘土帯接合痕明瞭、僅かに段をなす。外面口縁部と頸部に連続した指頭圧痕、胴部タタキ。内面口縁部ハケ、胴部ナデ。	
" -558	"	"	14.6	—	—	—	明赤褐色。石英・長石・雲母、他の砂粒少量。焼成やや堅。	外面口縁部縦ハケ、胴部タタキ。内面右下がりのハケ。	
" -559	"	"	—	—	13.9	2.0	橙色。石英・角閃石、褐色系円礫。焼成やや堅。	外面タタキ・ナデ、底部付近縦ハケ。内面ハケ。	外面に弱い煤。
" -560	"	甌	16.4	15.4	—	1.0	橙色。石英・雲母、赤色風化礫、褐色系円礫を含む。焼成やや堅。	外面右上がり～水平方向のタタキ、底部脇に縦方向のタタキを重ねる。内面右下がりのハケ、内底指頭圧痕。底部に焼成前穿孔。	外面に煤。
" -561	"	鉢	18.4	—	—	—	橙色。石英・長石・雲母、赤色風化礫少量。焼成軟。	外面右下がりのタタキ・ナデ。内面ハケ・ナデ。	
77-562	土器集中 18	壺	17.4	27.8	21.5	2.7	橙色。石英・雲母、赤色風化礫、褐色・灰色系円礫少量。焼成軟。	肩部内面に粘土帯接合痕。外面口縁部横ナデ、頸部縦位の板ナデ、胴部タタキ後板ナデ、底部付近ハケ。内面ナデ、底部付近ハケ。	外面口縁部と体部中に煤、内底に弱い煤。
" -563	"	"	13.2	—	—	—	橙色。石英・雲母、赤色風化礫、他の砂粒を含む。焼成やや軟。	口縁部外面縦ハケ、端部横ナデ。内面ハケ・ナデ。	
" -564	"	"	13.6	—	19.8	—	橙色。石英、赤色風化礫少量、灰黒色の角礫・粗砂やや多量。焼成やや軟。	肩部内面に粘土帯接合痕。外面口縁部縦ハケ、胴部タタキ後ハケ・ナデ。内面右下がりのハケ、内面ナデ。	肩部片側に黒斑。
" -565	"	甕	14.4	—	—	—	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫を含む。焼成やや堅。	口縁部外面タタキ後ハケ・ナデ、内面右下がりのハケ。	
" -566	"	"	15.0	—	18.0	—	にぶい褐色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫を含む。焼成やや堅。	口縁部叩き出し成形。肩部内面に粘土帯接合痕明瞭。外面右上がりのタタキ・ハケ。内面口縁部ハケ、胴部ナデ・指頭圧痕。	外面口縁部～中に強い煤、内面下半に弱い煤。
" -567	"	"	14.4	—	—	—	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、褐色円礫を含む。焼成やや堅。	肩部内面に粘土帯接合痕。外面口縁部～肩部タタキ後縦ハケ、胴部タタキ・ハケ・ナデ。内面右下がりのハケ。	外面口縁部と胴部中に強い煤。
" -568	"	"	20.6	—	—	—	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色系円礫を含む。	外面口縁部ナデ、頸部ハケ、胴部タタキ。内面ハケ・ナデ。	外面上半に部分的に煤。
" -569	"	"	15.7	—	19.2	—	明赤褐色。石英・長石・雲母、褐色の円礫。焼成やや軟。	外面口縁部～肩部縦ハケ、胴部タタキ・ハケ。内面ハケ。	外面口縁部～胴部中に煤。
" -570	"	"	16.3	28.2	17.6	3.6	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫を含む。焼成やや堅。	頸部外面で粘土帯接合、接合部にナデを施すが外面に粘土帯接合痕が僅かに残る。外面口縁部ナデ、胴部タタキ、底部脇縦ハケ。内面口縁部～肩部ハケ、胴部ナデ。	外面口縁部と胴部中に煤。
" -571	"	"	15.0	—	15.0	—	橙色。石英・雲母、赤色風化礫、黒色・灰色系砂を少量含む。焼成やや堅。	外面タタキ、底部付近強い板ナデ。内面右下がりのハケ。	外面中に強い煤。
" -572	"	—	—	—	—	2.2	橙色。石英・雲母、赤色風化礫、灰色系粗砂を含む。焼成やや軟。	外面タタキ・ナデ。内面ハケ・ナデ。内底指頭圧痕。外底タタキ。	
" -573	"	甕	—	—	—	2.0	にぶい赤褐色。石英・雲母、赤色風化礫、褐色の円礫を含む。焼成やや堅。	外面タタキ。外底タタキ。内面ナデ。内底付近強い甌ナデ・指頭圧痕。	外面中に煤。
" -574	"	壺	—	—	12.0	0.6	にぶい橙色。石英・雲母少量、灰黒色・灰色系の円礫・角礫・粗砂やや多量。焼成やや軟。	内面に粘土帯接合痕。外面縦ハケ。内面ハケ・ナデ。内底指頭圧痕。	
" -575	"	甕	—	—	—	—	橙色。灰黒色・灰色の角礫・粗砂を含む。焼成軟。	外面タタキ・ナデ。内面ハケ・ナデ。	
" -576	"	—	—	—	—	3.7	橙色。石英・雲母、赤色風化礫、灰色系円礫・角礫を含む。	外面タタキ・ナデ。内底付近ハケ・ナデ。	

Tab.31 遺物観察表-弥生時代25

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
78-577	土器集中 18	鉢	15.9	9.7	—	7.0	橙色。石英・雲母、赤色風化礫、他の砂粒を少量含む。焼成やや軟。	外面右下がりのタタキ。内面ハケ・ナデ。内底指頭圧痕。	
" -578	"	"	13.0	5.9	—	5.3	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、褐色・灰色系円礫を含む。焼成やや堅。	内外面ナデ・指頭圧痕。	
" -579	"	"	—	—	—	3.2	にぶい橙色。石英・雲母、赤色風化礫、他の砂粒を少量含む。焼成やや堅。	外面タタキ・ナデ。内面ハケ。	
" -580	"	"	10.4	5.7	—	4.0	明赤褐色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、他の砂粒を少量含む。焼成やや軟。	外面ナデ・指頭圧痕。内面木理の細かい右下がりのハケ。内底指頭圧痕。	
" -581	"	"	—	—	—	2.2	にぶい黄褐色。石英・雲母、赤色風化礫、灰色系円礫を含む。焼成軟。	外面タタキ後ナデ。内面ナデ。外底指頭による押圧で僅かに凹状。	
" -582	"	"	11.2	5.8	—	—	橙色。石英・角閃石、赤色風化礫、他の砂粒を少量含む。	外面縦ハケ、口縁端部と底部付近指ナデ・指頭圧痕。内面ハケ・ナデ。内底指頭圧痕。	外面上半に煤。
" -583	"	"	11.6	5.5	—	—	明赤褐色。石英・雲母・角閃石、他の角粒砂を少量含む。焼成やや堅。	外面タタキ後ナデで目痕を消す。内面木理の細かいハケ・ナデ。底部内外面指頭圧痕。	
" -584	"	"	10.8	5.2	—	—	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、他の砂粒を含む。	外面タタキ後ナデ。内面ナデ、内底指頭圧痕。	
" -585	"	"	—	—	—	—	橙色。雲母、赤色・灰色系角礫を含む。	内外面ナデ。内底指頭圧痕。	
" -586	"	"	15.2	—	—	—	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、他の砂粒を含む。焼成やや堅。	外面タタキ、底部付近ハケ・ナデ。内面木理の細かい右下がりのハケ。	
" -587	"	"	20.8	7.1	—	1.1	橙色。石英・雲母・角閃石、他の砂粒を含む。焼成やや堅。	内外面ナデ・指頭圧痕。	内外面片側に黒斑。
" -588	"	"	12.8	—	—	—	にぶい黄褐色。石英・雲母・角閃石、褐色・灰色系円礫を含む。	内外面ナデ。内面口縁部付近横位の板ナデ。	
" -589	"	手捏土器	5.0	3.6	—	—	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、他の砂粒を少量含む。	手捏ね成形。内外面ナデ・指頭圧痕。	
79-590	・ 層	壺	20.3	—	—	—	橙色。角閃石少量、灰色系角礫・粗砂を含む。焼成やや堅。	複合口縁。外面に櫛描波状文。内外面横ナデ。	
" -591	"	"	23.5	—	—	—	にぶい橙色。石英・長石・角閃石、灰色系角礫・粗砂多量。焼成やや堅。	口縁端部に粘土帯を貼付し上下に拡張させる。外面に櫛描波状文。内外面横ナデ。	
" -592	"	"	14.8	—	—	—	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、灰色系粗砂を含む。焼成やや軟。	外面口縁部横ハケ、頸部縦ハケ・指頭圧痕。内面横ナデ、口縁端部に指頭圧痕。	
" -593	"	甕	13.8	27.7	24.0	—	にぶい橙色。石英・長石・雲母・角閃石、灰色系角礫・粗砂多量。焼成やや軟。	頸部外面に粘土帯接合痕。肩部内面・胴部外面にも接合痕明瞭。外面口縁部ナデ、胴部タタキ・ハケ。内面ナデ・ハケ。内底指頭圧痕。	外面中位と内底に煤。
" -594	"	"	15.6	23.8	16.0	2.1	にぶい橙色。灰色系円礫、黒色赤色系砂を含む。焼成やや堅。	頸部外面に接合痕を明瞭に残す。外面口縁部ナデ・指頭圧痕、胴部タタキ・ハケ。内面ハケ。	外面に煤。
" -595	"	"	13.3	22.6	14.2	2.0	橙色。長石・雲母、赤色風化礫、灰色の円礫・角礫を含む。焼成やや堅。	外面タタキ後ハケ。内面ハケ。内底指頭圧痕。	外面胴部中位と口縁に強い煤。内底弱い煤。
" -596	"	"	17.9	—	20.2	—	にぶい橙色。長石・雲母、赤色風化礫、灰色の円礫・角礫を含む。	外面口縁部ナデ、胴部タタキ・ナデ。内面ナデ。	外面に煤。

Tab.32 遺物観察表-弥生時代26

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
79-597	・ 層	高杯	18.6	—	—	—	にぶい橙色。石英多量、赤色風化礫他、褐色系円礫を少量含む。焼成軟。	口縁端部を面取り刻目を施す。杯部屈曲部にもハケ状原体による刻目。外面ハケ。	
" -598	"	"	—	—	—	裾部径 13.4	にぶい黄橙色。石英多量、赤色風化礫他、褐色系円礫を少量含む。焼成軟。	杯部屈曲部にハケ状原体による刻目。外面木理の粗いハケ。柱状部は中実。脚部に透かし孔を配する。	
" -599	"	—	—	—	—	2.6	灰黄褐色。角礫・粗砂少量。焼成やや軟。	外面ハケ。内面ナデ、内底指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -600	"	土製品	—	—	—	1.0	にぶい黄橙色。石英・角閃石、灰色系角礫・砂多量。焼成やや堅。	内外面ナデ・指頭圧痕。内面絞り目。底部焼成前穿孔。	
" -601	"	甌	—	—	—	4.1	にぶい黄褐色。長石・角閃石少量、黒色・赤色系砂を含む。焼成やや堅。	外面タタキ。内底木理の粗いハケ原体による放射状の圧痕。底部に焼成前穿孔。	
" -602	"	甕	—	—	16.1	1.0	にぶい橙色。長石・雲母、赤色風化礫、灰色の円礫・角礫を含む。	外面タタキ・ナデ、底部付近縦ハケ。内面ナデ。	外面に煤。
" -603	"	鉢	10.8	6.8	—	1.5	にぶい橙色。石英・雲母・角閃石、灰色・褐色の角礫を含む。焼成やや堅。	外面タタキ後縦ハケ。内面口縁部横ハケ、胴部縦ハケ・ナデ、内底指頭圧痕。	
" -604	"	"	11.1	5.1	—	0.6	にぶい黄褐色。角閃石少量、黒色・白色系砂を含む。	外面タタキ・ナデ・ハケ。内面木理の粗いハケ。	
" -605	"	"	9.1	4.7	—	3.0	褐色。角閃石・雲母、灰白色の角礫、白色系砂を含む。焼成やや堅。	外面タタキ・ナデ。内面ハケ。	内外面に煤。
" -606	"	高杯	17.5	—	—	—	黄灰色。白色・灰黒色の角礫・粗砂を多量に含む。	内外面ナデ。接合部で剥離。	
" -607	"	支脚	受け部径 3.6	2.8	—	3.0	浅黄褐色。石英・長石、褐色・灰色の円礫多量。焼成やや軟。	内外面指ナデ・指頭圧痕。受け部は指頭押圧により凹状。	
80-610	杭列3	壺又は鉢	—	—	—	8.1	黒褐色。石英・雲母・角閃石を含む。焼成堅緻。	中位に断面三角形の突帯を貼付し、細く鋭い刻目を施す。内外面横方向の板ナデ。底部脇指頭押圧。	外面中位と内底に強い煤。
" -611	"	長頸壺	22.3	—	—	—	にぶい橙色。石英・長石・雲母少量、灰色系円礫やや多量。焼成やや軟。	頸部外面に櫛描直線文と波状文を多段配置する。内面横ハケ・指頭圧痕。	口縁部内面に弱い煤。(廃棄後の煤か)
81-612	土器集中 19	壺	14.2	28.3	21.5	7.5	にぶい褐色。褐色系円礫少量。灰白色の角礫・粗砂細砂多量。焼成やや軟。	外面頸部縦ハケ、胴部右下がりのハケ。内面ナデ。接合部付近に指頭圧痕顕著。	外面部分的に弱い煤。
" -613	"	甕	14.0	21.3	16.2	7.4	にぶい赤褐色。石英・雲母少量。灰色角礫・粗砂やや多量。	外面木理の粗い縦ハケ・ナデ。内面ハケ・ナデ・指頭圧痕。	外面の片側面と断面に強い煤。(廃棄後煤)
" -614	"	"	13.6	21.0	14.9	6.1	灰黄褐色。灰色系円礫・粗砂やや多量。焼成軟。	内外面ナデ・ハケ・指頭圧痕。	
" -615	"	"	17.3	—	—	—	にぶい黄褐色。灰色系円礫・粗砂含む。焼成軟。	口縁部外面に幅1cmの粘土帯貼付。頸部外面木理の粗い縦ハケ、胴部右下がりのハケ。内面ハケ・ナデ・指頭圧痕。	外面口縁部と上胴部に強い煤。
" -616	"	"	17.0	—	16.8	—	明赤褐色。石英・雲母・角閃石、灰黒色の粗砂。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残す。外面口縁部縦ハケ、胴部右下がりのハケ・ナデ。	外面に接合痕を残す。
" -617	"	鉢	18.6	10.8	—	5.0	黄灰色。雲母・角閃石、灰色・灰黒色の粗砂含む。焼成堅緻。	外面縦ハケ。内面ナデ・指頭圧痕。	内外面部分的に弱い煤。
83-618	土器集中 20	壺	20.8	—	—	—	にぶい橙色。灰色系の角礫・粗砂やや多量。焼成やや堅。	口縁端部を横ナデし上方へ肥厚させる頸部外面縦ハケ、内面ハケ・ナデ。	
" -619	"	"	—	—	—	—	にぶい橙色。石英・雲母、灰色の角礫・円礫含む。	頸部外面に扁平な突帯を貼付し、ハケ状原体による格子目文を施す。頸部外面縦ハケ、内面横ハケ・ナデ。	
" -620	"	"	—	—	—	—	にぶい橙色。雲母、灰黒色・灰色の角礫やや多量。焼成やや堅。	頸部外面に扁平な突帯を貼付し、格子目文を施す。頸部外面縦ハケ、内面右下がりのハケ。	

Tab.33 遺物観察表-弥生時代27

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
83-621	土器集中 20	甗	14.5	—	—	—	にぶい黄橙色。石英・雲母・角閃石、褐色・灰色の角礫・円礫含む。焼成堅緻。	頸部外面に粘土帯接合痕を認めるが上面をナデと指頭押圧によって消す。外面口縁部右下がりのハケ、胴部水平方向のタタキ。内面右下がりのハケ。	
" -622	"	壺	16.6	—	—	—	にぶい褐色。石英・雲母少量、赤色風化礫少量。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕を認めるが上面をナデとハケによって潰す。外面口縁部ナデ、胴部水平方向のタタキ、頸部から肩部ハケ。内面右下がりのハケ。	口縁部外面と上胴部に強い煤。内面と断面にも煤。
" -623	"	甗	16.5	—	—	—	にぶい褐色。石英・雲母やや多量。焼成堅緻。	外面頸部と口縁部に粘土帯接合痕。接合部上面にナデ・指頭圧痕。	口縁部外面に煤。
" -624	"	"	16.6	—	—	—	黒色。石英・雲母・長石、褐色角礫含む。焼成堅緻。	内外面ナデ。	口縁部外面に強い煤。
" -625	"	"	15.1	—	—	—	にぶい褐色。石英・雲母、赤色風化礫他含む。焼成堅緻。	口縁部叩き出し成形。外面タタキ、内面右下がりのハケ。	
" -626	"	"	16.8	—	—	—	明赤褐色。石英・雲母、赤色風化礫、灰黒色・褐色の円礫。焼成やや堅。	口縁部叩き出し成形。外面タタキ、頸部付近にハケ。内面右上がりのハケ。	
" -627	"	壺	—	—	16.7	—	にぶい橙色。長石・雲母、灰色系円礫。焼成やや軟。	胴部外面ナデ、底部付近縦ハケ。内面ナデ・指頭圧痕。	
" -628	"	甗	15.6	—	—	—	にぶい黄褐色。石英・雲母・角閃石、砂粒少量。	口縁部叩き出し成形。外面タタキ、頸部付近にハケ。内面右下がりのハケ。	
" -629	"	"	15.4	—	—	—	にぶい橙色。石英・長石少量、灰色円礫少量。	外面口縁部縦ハケ、胴部右上がりのタタキ。内面口縁部右下がりのハケ、胴部ナデ。	
" -630	"	甗	20.0	—	18.2	—	にぶい黄褐色。石英・雲母、赤色風化礫、灰色・褐色の円礫少量。焼成やや堅。	胴部内面に粘土帯接合痕。外面タタキ後縦ハケ。内面右下がりのハケ。	胴部中位に強い煤。内面と断面にも煤。
" -631	"	"	16.2	—	17.4	—	黒褐色。石英・雲母・角閃石。	上胴部内面に粘土帯接合痕。外面タタキ後半に縦ハケ。内面ハケ・ナデ。	内外面と断面に煤。
" -632	"	"	16.0	26.0	18.3	1.8	にぶい赤褐色。石英・雲母、褐色系円礫他の砂粒少量。焼成やや堅。	口縁部叩き出し成形。外面上胴部右下がり・中位以下と口縁部は水平方向のタタキ、底部脇に縦ハケ。内面右上がりのハケ。内底指頭圧痕。	外面に煤。
" -633	"	"	14.7	—	16.3	—	橙色。石英・雲母、褐色系円礫他の砂粒少量。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さく段をなす。外面上胴部右上がり・中位以下と口縁部は水平方向のタタキ、底部付強い指ナデ・指頭圧痕。内面胴部右下がりのハケ。内底付近ナデ・指頭圧痕。	外面胴部中位に強い煤。
" -634	"	"	15.4	18.6	15.5	1.0	にぶい褐色。雲母・角閃石少量、赤色風化礫他の砂礫を含む。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さく段をなす。外面口縁部ナデ・指頭圧痕、胴部タタキ。内面口縁部ナデ、胴部右下がりのハケ・ナデ。内底付近指頭圧痕顕著。	外面胴部中位と口縁部に強い煤。
" -635	"	"	14.6	11.4	12.7	—	にぶい黄褐色。石英・雲母、赤色風化礫、砂粒少量。焼成やや堅。	口縁部叩き出し成形。外面口縁部タタキ、胴部タタキ後縦ハケ。内面ナデ。内底付近指頭圧痕顕著。	外面と断面に弱い煤。外面片側に黒斑。
" -636	"	"	—	—	—	1.0	にぶい橙色。石英・雲母、褐色円礫少量。	外面底部付近タタキ後縦ハケ。内面ハケ・ナデ。尖底気味の底部先端を指頭押圧し凹状。	外面に弱い煤。
" -637	"	"	—	—	—	2.2	にぶい褐色。石英・雲母・角閃石、褐色円礫。	外面底部付近タタキ後ハケ。内面ナデ、指頭圧痕顕著。	外面と内底に弱い煤。
" -638	"	"	—	—	—	1.0	褐灰色。雲母・角閃石、褐色・灰色の円礫含む。	外面タタキ後ナデ・縦ハケ。内面ハケ・ナデ。内底付近指頭圧痕顕著。尖底気味の底部先端を指頭押圧し凹状。	外面中位と内底に煤。
" -639	"	"	—	—	—	2.3	にぶい褐色。雲母、赤色風化礫、灰色・褐色の円礫含む。焼成やや堅。	外面右上がりのタタキ。内面ハケ、内底指頭圧痕顕著。	外底に弱い煤。
" -640	"	"	—	—	—	2.0	にぶい赤褐色。石英・雲母、灰色・褐色の円礫含む。焼成堅緻。	外面タタキ、底部脇ハケ状原体による圧痕。内底ハケ。	外面片側に黒斑。

Tab.34 遺物観察表-弥生時代28

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
83-641	土器集中 20	甕	—	—	—	1.0	橙色。雲母・角閃石、赤色風化礫、白色砂粒含む。焼成やや堅。	タタキ後八ケ。内底板ナデ・指頭圧痕。	内面と断面に煤。
84-642	"	鉢	16.2	9.0	—	—	橙色。石英・角閃石、黒色・白色の角粒砂少量。焼成やや軟。	外面右上がりのタタキ、底部、付近八ケ。内面右下がりの八ケ、口縁部に指頭圧痕顕著。	外面黒斑。
"-643	"	"	16.6	7.5	—	3.0	にぶい黄橙色。石英・長石・雲母他の砂粒を含む。焼成やや軟。	外面水平方向のタタキ。内面右下がりの八ケ・ナデ。外底僅かに凹状。	外面片側に黒斑。
"-644	"	"	13.0	6.3	—	—	灰黄褐色。角閃石、灰色の角礫・粗砂、黒色砂を含む。焼成やや軟。	外面タタキ後ナデ、底部付近木理の細かい縦八ケ。内面ナデ。内底強い指頭押圧で凹状。	外面に弱い煤。
"-645	"	"	9.0	6.5	—	1.6	にぶい黄橙色。角閃石、黒色・白色の角粒砂、赤色風化礫含む。焼成やや軟。	外面タタキ後ナデ。内面ナデ・八ケ。内底強い指頭押圧で凹状。外底先端を指頭押圧し凹状。	内外面片側に弱い煤。
"-646	"	高杯	22.4	17.3	—	裾部 径 14.9	橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、灰色円礫含む。焼成やや軟。	外面杯部横ナデ・横八ケ、柱状部ヘラナデ、裾部縦八ケ。内面ナデ。	外面部分的に強く煤ける。
86-647	土器集中 21	壺	13.8	—	27.0	—	橙色。石英・角閃石少量、灰色円礫・角礫含む。焼成軟。	肩部内面に粘土帯接合痕。外面口縁部横ナデ、頸部縦八ケ・ナデ、胴部タタキ後ナデ。内面口縁部横八ケ、胴部八ケ・ナデ。	
"-648	"	"	22.4	—	—	—	にぶい橙色。灰黒色の角礫・粗砂やや多量。焼成やや軟。	肩部内面に粘土帯接合痕明瞭。外面口縁部から肩部に縦八ケ、胴部タタキ後ナデ・八ケ。内面口縁部横八ケ、胴部ナデ。肩部内面指ナデ・指頭圧痕。	
"-649	"	"	20.0	—	—	—	にぶい橙色。石英・角閃石、白色・灰色の粗砂・円礫少量。焼成やや軟。	複合口縁。口縁部内外面横方向の八ケ・ナデ。	
"-650	"	"	23.5	—	—	—	にぶい橙色。角閃石少量、灰・白色系の角礫・粗砂、赤色風化礫含む。焼成やや軟。	複合口縁。口縁部外面に櫛描波状文。内外面ナデ。	
"-651	"	"	17.8	—	—	—	にぶい橙色。石英・雲母少量、灰色の角礫・円礫やや多量。焼成軟。	口縁端部を面取り刻目を施す。頸部外面に扁平な突帯を貼付し刻目。口縁部内面縦八ケ、外面右下がりの八ケ。	
"-652	"	"	—	—	—	—	にぶい橙色。角閃石少量、灰色の円礫含む。焼成やや軟。	口縁部は接合部で剥離。頸部縦八ケ・ナデ。内面横八ケ・ナデ、肩部内面に強い指ナデ。	
"-653	"	"	17.3	—	—	—	橙色。雲母・角閃石少量、褐色系円礫と黒色・白色・赤色砂少量。焼成やや堅。	口縁端部横八ケ。口縁部から頸部にかけて外面縦八ケ、内面右下がりの八ケ。	
"-654	"	"	—	—	—	—	にぶい橙色。灰色角礫・粗砂やや多量。焼成やや堅。	頸部外面に扁平な突帯を貼付し、八ケ状原体による格子目文を施す。頸部内外面八ケ。	
"-655	"	"	—	—	—	—	にぶい黄橙色。灰黒色の角礫やや多量。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯貼付し、八ケ状原体による斜方向の圧痕文を施す。外面縦八ケ。内面右下がりの八ケ。	
"-656	"	"	—	—	—	—	にぶい橙色。灰色の角粒粗砂を含む。焼成やや堅。	頸部外面に扁平な突帯を貼付し、八ケ状原体による格子目文を施す。頸部外面八ケ・内面ナデ。	
"-657	"	"	—	—	17.5	—	橙色。石英少量、灰色の角礫、赤色風化礫他含む。焼成軟。	肩部内面に粘土帯接合痕。外面タタキ後ナデ・八ケ、頸部縦八ケ。内面八ケ・ナデ、内底と接合部付近に指頭圧痕。	
"-658	"	甕	15.9	—	—	—	にぶい黄橙色。石英・雲母、白色・褐色系円礫、白色細砂他を含む。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残す。内外面八ケ。	口縁部外面に強い煤。
"-659	"	"	18.0	—	—	—	橙色。石英・角閃石、赤色風化礫、灰色砂少量。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さく段をなす。口縁部外面タタキ後ナデ、内面八ケ。	
"-660	"	"	12.3	—	13.4	—	にぶい橙色。石英・角閃石、灰色円礫含む。	頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さく段をなす。肩部内面にも粘土帯接合痕。外面口縁部横方向のタタキ、胴部右上がりのタタキ・縦八ケ。内面八ケ。	外面胴部中に強い煤。

Tab.35 遺物観察表-弥生時代29

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
86-661	土器集中 21	甕	14.8	—	—	—	にぶい褐色。石英・角閃石、灰色円礫。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さく段をなす。肩部内面に粘土帯接合痕。外面口縁部～肩部縦ハケ、胴部右上がりのタタキ。内面ハケ。	
" -662	"	"	12.7	18.5	12.0	—	にぶい黄褐色。角閃石少量、灰色円礫含む。焼成堅緻。	頸部外面に粘土帯接合痕、接合部上面にハケを施す。外面口縁部～肩部縦ハケ、胴部上半右上がり・下半水平方向のタタキ、底部脇強い板ナデ。内面上半右下がりのハケ、下半ナデ、内底指頭圧痕。	外面片側に黒斑。
" -663	"	"	20.8	—	—	—	橙色。石英、黒色・白色砂、灰色円礫含む。焼成軟。	頸部外面に粘土帯接合痕、接合部上面にナデ。内外面ハケ・ナデ。	
" -664	"	"	17.7	—	15.7	—	にぶい黄褐色。石英・角閃石、角礫含む。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕、接合部上面にハケ。内面胴部外面口縁部～肩部に縦ハケ、胴部右上がりのタタキ。内面右下がりのハケ。	外面口縁部と胴部中位に強い煤。
" -665	"	"	15.9	—	—	—	にぶい褐色。石英・角閃石、褐色角礫含む。	頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さく段をなす。外面口縁部タタキ後縦ハケ、胴部右上がりのタタキ。内面ハケ。	口縁部外面に弱い煤。
87-666	"	"	15.1	—	—	—	橙色。石英・雲母、灰色系円礫含む。焼成軟。	肩部内面に粘土帯接合痕。外面口縁部縦ハケ、頸部横ナデ、胴部右下がりのハケ。内面ハケ・ナデ、接合部付近に指頭圧痕。	
" -667	"	"	18.8	—	—	—	橙色。角閃石、白・黒・灰色の角粒砂・円礫少量。焼成やや堅。	外面口縁部タタキ後ナデ、上胴部タタキ後縦ハケ。内面口縁部横ハケ、胴部ハケ後ナデ。	口縁部外面に煤。
" -668	"	"	16.8	—	—	—	灰黄褐色。灰色・白色の角粒砂含む。焼成軟。	内外面ナデ・指頭圧痕。	口縁部外面に煤。
" -669	"	"	16.5	—	—	—	にぶい橙色。石英・角閃石、他の砂粒少量。焼成やや軟。	外面口縁部ハケ、胴部右上がりのタタキ、内面右下がりのハケ。	外面口縁部と肩部に強い煤。
" -670	"	"	18.6	—	—	—	黒色。石英・角閃石、白色系粗砂少量。	上胴部内面に粘土帯接合痕。口縁部叩き出し成形。外面タタキ後縦ハケ。内面右下がりのハケ。	外面に黒斑。
" -671	"	"	12.8	—	11.5	—	橙色。灰色系角礫、白色・黒色の砂を少量含む。焼成軟。	上胴部内面に粘土帯接合痕、外面タタキ後ナデ・ハケ。内面右下がりのハケ・ナデ。	外面に弱い煤。
" -672	"	"	18.0	—	18.1	—	橙色。灰色・黒色系砂粒を含む。	外面口縁部ナデ、上胴部右上がり胴部下位右下がりのタタキ。頸部外面に指頭押圧を連続的に加える。内面口縁部ハケ、胴部ナデ・指頭圧痕。	外面口縁部と胴部中位に強い煤。
" -673	"	"	14.9	19.5	14.9	—	にぶい橙色。角閃石、灰色系円礫、黒色砂を少量含む。焼成やや軟。	頸部外面に粘土帯接合痕、接合部上面にナデ・指頭圧痕。外面タタキ・ハケ。内面右下がりのハケ・ナデ。	外面中位と口縁部に強い煤。
" -674	"	"	16.0	—	—	—	褐灰色。灰色・黒色系砂礫を含む。焼成やや軟。	頸部内面に粘土帯接合痕。口縁部外面木理の粗いハケ。内面ナデ。	
" -675	"	"	—	—	20.3	3.0	褐灰色。灰色系円礫多量。焼成やや軟。	肩部内面に粘土帯接合痕。胴部外面タタキ後ナデ、下位木理の粗い縦ハケ。内面ハケ・ナデ。	
" -676	"	"	17.4	22.5	16.0	2.8	にぶい橙色。灰色系円礫、白色・黒色の角粒粗砂を含む。焼成やや軟。	外面口縁部ハケ、胴部上位右上がり、下半右下がりのタタキ。底部脇強い板ナデ・ヘラナデ。内面上半ハケ、胴部下半ナデ。	外面胴部中位と口縁部に強い煤内面下位に弱い煤。
" -677	"	"	13.2	21.3	15.4	—	明赤褐色。灰色・褐色系円礫、黒色砂を含む。	口縁部叩き出し成形。外面タタキ、底部付近縦ハケ。内面口縁部ハケ、胴部ハケ・ナデ。肩部内面指頭圧痕顕著。	外面部分的に煤。断面にも煤。
" -678	"	"	12.4	14.9	13.0	—	にぶい橙色。角閃石、灰色系円礫、黒色・白色の粗砂を少量含む。	内面中位に粘土帯接合痕。外面タタキ後ナデ、下半ハケ。内面上半ハケ、下半ナデ。	外面口縁部と胴部中位に強い煤。
" -679	"	"	—	—	15.8	3.8	にぶい褐色。灰色系角礫、黒色・白色砂を含む。焼成やや軟。	外面右上がりのタタキ・ハケ。内面ナデ。	外面胴部中位に強い煤。
" -680	"	"	—	—	15.0	1.0	橙色。石英・雲母、他の砂粒少量。	外面水平方向のタタキ、底部付近縦ハケ・ナデ。内面ナデ。接合部付近と内底に指頭圧痕顕著。	外面胴部中位に強い煤。

Tab.36 遺物観察表-弥生時代30

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
87-681	土器集中 21	甕	—	—	13.4	1.0	にぶい橙色。雲母、白色 細砂少量。焼成やや軟。	外面タタキ・ハケ。内面ハケ・ナデ。内 底に指頭圧痕顕著。	外面胴部中位 と内底に強い 煤。
" -682	"	"	—	—	—	1.9	にぶい橙色。石英、黒色・ 灰色系砂粒少量。焼成や や軟。	外面タタキ・ハケ。内面ナデ・指頭圧痕。 内底に強い指ナデ。	外面胴部中位 強い煤。内底 に煤。
" -683	"	"	—	—	—	2.6	にぶい橙色。石英、角閃 石・灰色系円礫少量。焼 成やや軟。	外面タタキ後ハケ、底部脇に右上がりの 強いタタキと強い指ナデ。内面ハケ。	外面に弱い煤。
" -684	"	"	—	—	—	—	褐色。石英・角閃石、灰 色系円礫を含む。焼成や や堅。	外面右下がりのタタキ、底部脇に強い板 ナデ。内面縦ハケ・ナデ、内底指頭圧痕。	底部脇に弱い 煤。
88-685	"	—	—	—	—	3.4	にぶい橙色。石英、灰色 系円礫を少量含む。焼成 やや軟。	外面タタキ。内底指ナデ、ハケ状原体に よる放射状の圧痕。	外底と内底に 弱い煤。
" -686	"	—	—	—	—	3.4	にぶい橙色。角閃石、黒 色・灰色の粗砂を含む。 焼成やや軟。	外面タタキ・ナデ。内面右下がりのハケ。 内底強い指頭押圧により凹状。	内外面に弱い 煤。
" -687	"	—	—	—	—	1.8	橙色。石英・角閃石、灰 色系円礫、白色・灰色系 粗砂を含む。焼成やや軟。	外面縦ハケ・ナデ。内底木理の粗いハケ・ 強い指ナデ・指頭圧痕。	内面と断面に 煤。(廃棄後煤)
" -688	"	—	—	—	—	1.5	にぶい黄橙色。角閃石、 灰色系角礫、白色砂を含 む。焼成やや軟。	外面縦ハケ、内底ハケ・指頭圧痕。外底 にハケ。	内外面と断面 に煤。(廃棄 後煤)
" -689	"	甕	—	—	—	3.0	明赤褐色。石英・角閃石、 灰色系円礫、白色系砂を 含む。焼成やや軟。	外面タタキ・ナデ。内面右下がりのハケ。 内底指頭圧痕顕著。外底タタキ。	外面中位に煤。
" -690	"	"	—	—	—	2.4	にぶい赤褐色。石英・角 閃石、白色系砂を含む。 焼成やや堅。	外面タタキ後ハケ。内面右下がりのハケ。 内底指頭圧痕。	外面中位に煤。
" -691	"	—	—	—	—	1.2	にぶい黄橙色。角閃石、 灰色系円礫、他を含む。	外面タタキ。内面ハケ・ナデ。内底指頭 押圧により凹状。	外面に煤。
" -692	"	—	—	—	—	1.8	明赤褐色。石英・雲母、 褐色・灰色系円礫を含む。 焼成やや堅。	外面タタキ・縦ハケ。内面ハケ・ナデ。	外面に煤。
" -693	"	—	—	—	—	—	にぶい橙色。石英、褐色・ 灰色系円礫、黒色砂を含 む。焼成やや軟。	外面タタキ後ナデ。内面ハケ・ナデ。	外面底部脇に 部分的に煤。
" -694	"	—	—	—	—	1.2	にぶい褐色。雲母・角閃 石、赤色風化礫、灰色砂 少量。焼成やや堅。	外面木理の粗い縦ハケ。底部脇ハケ状原 体による圧痕。内面ハケ・ナデ、内底指 頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -695	"	—	—	—	—	4.0	にぶい橙色。石英・角閃 石、赤色・白色・黒色系 砂粒を含む。焼成軟。	外面ナデ。内面右下がりの粗いハケ。	内面と断面に 煤。(廃棄後煤)
" -696	"	—	13.7	5.7	—	3.2	灰黄褐色。石英・角閃石、 他の砂礫少量。	外面タタキ。内面右下がりのハケ。内底 周辺にハケ状原体による圧痕を加え、中 央が凸状となる。	内外面と断面 に煤。(廃棄 後煤)
" -697	"	鉢	13.5	7.8	—	—	にぶい黄褐色。石英・雲 母、赤色風化礫、灰色系 円礫・粗砂を含む。焼成 やや軟。	外面タタキ後木理の細かいハケ。内面同 ハケ。内底ハケ状原体による放射状の圧 痕。底部尖底。	外面片側に黒 斑。
" -698	"	"	13.0	9.0	—	—	にぶい橙色。石英、黒色 砂他の砂礫を含む。焼成 やや堅。	外面右下がり・底部脇右上がりのタタキ。 内面ハケ・ナデ。内底指頭による強い押 圧で凹状。	外面片側に弱 い煤。
" -699	"	"	12.0	5.8	—	—	赤褐色。石英・角閃石、 灰色系粗砂、他を含む。	外面タタキ・ナデ。内面横ハケ・ナデ。 内底指頭圧痕。	外底片側に黒 斑。
" -700	"	"	17.0	10.5	—	1.2	にぶい橙色。石英・雲母、 褐色・灰色系角礫を含む。 焼成やや堅。	外面右下がりのタタキ・板ナデ。内面右 下がりのハケ、内底指頭圧痕。	内外面の片側 に煤。
" -701	"	"	14.2	5.8	—	—	にぶい橙色。石英、黒色 砂他の砂礫を含む。焼成 やや軟。	外面タタキ後ナデ。外底付近縦ハケ。内 面ハケ。内底ハケ状原体による放射状の 圧痕。	底部付近に黒 斑。

Tab.37 遺物観察表-弥生時代31

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
88-702	土器集中 21	鉢	8.5	5.5	—	—	にぶい褐色。石英・長石・角閃石、灰色系円礫少量。焼成やや軟。	外面ナデ、底部付近に斜方向のタタキ。内面ハケ・ナデ・指頭圧痕。	外面に弱い煤。
" -703	"	"	12.4	7.0	—	—	にぶい橙色。灰色系角礫・粗砂を多量に含む。焼成軟。	外面タタキ後ナデ。内面ナデ・ハケ。	
" -704	"	"	17.5	7.9	—	1.7	にぶい黄褐色。角閃石多量、灰色系円礫、白色細砂を含む。焼成やや軟。	外面右上がりのタタキ・ハケ、底部付近指ナデ。内面右下がりのハケ、内底指ナデ。丸底気味の外底中央は指頭押圧により凹状。	外面に弱い煤。
" -705	"	"	12.4	5.7	—	1.2	にぶい橙色。灰色系円礫、灰白色の角礫・粗砂少量。焼成やや軟。	外面ハケ・ナデ、底部付近指ナデ・指頭圧痕。内面ナデ・指頭圧痕。内底凸状。丸底気味の外底中央は指頭押圧により凹状。	外面に弱い煤。
" -706	"	"	9.5	5.5	—	3.4	黄灰色。角閃石・赤色風化礫、白色粗砂少量。焼成やや軟。	外面縦ハケ。内面ナデ、内底へラ状原体による圧痕。口縁部内外面に指頭圧痕顕著。外底中央は指頭押圧により凹状。	
" -707	"	"	7.2	4.1	—	1.2	橙色。黒色・白色系角粒砂少量。焼成やや軟。	外面縦ハケ・指ナデ、内面横ハケ・指ナデ。内底指頭圧痕。	
" -708	"	甌	13.2	17.4	—	3.0	にぶい橙色。角閃石、灰色系円礫・砂少量。焼成やや堅。	外面縦方向のタタキ。内面ナデ。内底付近ハケ状原体による放射状の圧痕。	外面片側に黒斑。
89-712	土器集中 22	壺	22.0	—	—	—	淡赤橙色。暗灰色の角礫多量。焼成やや軟。	口縁部外面に櫛描波状文。外面ナデ。内面口縁部ナデ、頸部ハケ。	
" -713	"	"	16.7	—	—	—	にぶい褐色。焼成堅緻。	口縁部横ナデ。頸部外面縦ハケ、内面ナデ。	口縁部外面に煤。
" -714	"	"	12.0	14.9	12.8	—	褐灰色。石英・雲母、赤色風化礫、白色細砂他の砂粒少量。焼成堅緻。	外面ハケ後緻密なミガキ。内面口縁部ハケ、胴部ナデ・指頭圧痕。	外面に黒斑
" -715	"	甕	20.0	—	—	—	橙色。角閃石少量、灰色系円礫を含む。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕、接合部上面にナデを施す。外面口縁部ナデ・指頭圧痕、胴部右上がり～水平方向のタタキ。内面ナデ・指頭圧痕。	
" -716	"	"	17.8	—	—	—	灰褐色。角閃石少量、灰色系角礫・粗砂を含む。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕、接合痕をナデ消すが僅かに痕跡が残る。口唇部横ナデ。外面口縁部ナデ、胴部タタキ。内面ハケ。	外面に弱い煤。
" -717	"	"	13.4	—	—	—	橙色。褐色・灰色系円礫多量。焼成軟。	頸部外面に粘土帯接合痕明瞭、接合部上面にナデを僅かに施す。外面口縁部ナデ・指頭圧痕、胴部水平方向のタタキ。内面右下がりのハケ。	外面胴部中に弱い煤。
" -718	"	"	15.8	—	—	—	橙色。石英、黒色・白色の角粒砂少量。焼成軟。	頸部外面に粘土帯接合痕、接合部上面にナデ・指頭押圧を施す。外面口縁部ハケ、胴部水平方向のタタキ。内面口縁部ハケ、胴部ナデ。	外面口縁部と上胴部に煤。
" -719	"	—	—	—	15.6	3.0	にぶい橙色。石英、灰黒色の角礫を含む。焼成やや軟。	外面木理の粗い縦ハケ。内面同ハケ、頸部付近に連続した指頭圧痕。	外面底部脇に黒斑。
" -720	"	甕	13.4	21.0	14.0	3.0	橙色。角閃石、灰色系円礫。焼成軟。	頸部外面に粘土帯接合痕明瞭、小さく段をなす。外面口縁部ナデ・指頭圧痕、胴部右上がりのタタキ。内面ナデ・指頭圧痕。	
" -721	"	"	16.6	22.6	17.8	2.4	明赤褐色。石英、黒色砂、灰色系円礫を含む。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕、接合部にナデを施すが接合痕が明瞭に残る。外面口縁部ナデ・指頭圧痕、胴部水平方向のタタキ・縦ハケ。内面右下がりのハケ・ナデ・指頭圧痕。	外面胴部中に強い煤。
" -722	"	"	—	—	17.5	2.4	灰褐色。石英、黒色砂、灰色系円礫を含む。焼成やや堅。	頸部外面で粘土帯接合、接合痕はハケ・ナデで消す。外面水平方向のタタキ、底部脇右上がりのタタキ後縦ハケ。外底タタキ。内面口縁部ナデ、胴部木理の粗いハケ。	外面胴部上半に強い煤。

Tab.38 遺物観察表-弥生時代32

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
89-723	土器集中 22	甕	15.0	13.4	15.3	2.5	にぶい橙色。石英・雲母、赤色・灰色系円礫やや多量。焼成やや軟。	内面肩部と中位に粘土帯接合痕明瞭。外面タタキ後ナデ、底部脇に強い板ナデ。内面ナデ。	外面口縁部～肩部に強い煤。
" -724	"	"	13.7	18.9	14.4	2.6	にぶい橙色。石英、黒色砂、灰色系円礫を含む。	口縁部叩き出し成形。外面右上がりのタタキ・縦八ケ。内面上半右下がりの八ケ、下半ナデ。	外面に強い煤。
" -725	"	"	—	—	—	—	橙色。石英・角閃石少量、灰色系円礫を含む。焼成やや堅。	外面中位水平方向のタタキ、下位右上がりのタタキ・縦八ケ。内面八ケ・ナデ・指頭圧痕。	外底付近に弱い煤。
" -726	"	甗	11.7	13.2	12.2	1.9	にぶい黄褐色。石英・雲母、灰色系円礫を含む。焼成やや軟。	口縁部叩き出し成形。外面タタキ・ナデ、底部付近縦八ケ。内面口縁部横八ケ、胴部縦八ケ・ナデ、内底指頭圧痕。底部に径6mmの焼成前穿孔。	外面片側に黒斑。
" -727	"	"	—	—	—	1.0	にぶい黄褐色。角閃石、灰色系円礫を含む。焼成やや堅。	底部に径7mmの焼成前穿孔。外面右上がりのタタキ後、底部脇に縦方向のタタキを重ねる。内面右下がりの八ケ、内底指頭ナデ。	外底に弱い煤。
90-728	"	鉢	20.0	10.0	—	1.0	橙色。角閃石・雲母、灰色系円礫を含む。	外面右上がりのタタキ、底部脇に縦方向のタタキを重ねる。内面ナデ・八ケ・指頭圧痕。	外底に黒斑。
" -729	"	"	22.0	—	—	—	橙色。石英・角閃石、褐色・灰色系円礫・角礫を含む。焼成やや軟。	外面木理の粗い右下がりの八ケ、底部脇タタキ、内面口縁部横ナデ、内面同右下がりの八ケ。	外面に弱い煤。
" -730	"	"	12.0	7.7	—	—	橙色。石英・角閃石、赤色風化礫、灰色系円礫を含む。焼成軟。	外面縦八ケ・ナデ。内面ナデ、内底指頭圧痕。	
" -731	"	"	7.6	4.9	—	—	橙色。角閃石やや多量、褐色・白色系円礫・角礫を含む。焼成やや軟。	外面タタキ後ナデ。内面右下がりの八ケ・ナデ、内底指頭圧痕。	外面の片側面に弱い煤。
" -732	"	"	17.8	—	—	—	にぶい橙色。石英・角閃石、灰色系円礫を含む。焼成やや堅。	外面タタキ後ナデ。内面口縁部横八ケ・指頭圧痕、胴部右下がりの八ケ。	内面に黒斑。
92-733	土器集中 23	甕	14.4	—	—	—	にぶい橙色。石英・雲母、他の砂粒を含む。焼成やや軟。	頸部外面に粘土帯接合痕明瞭、小さく段をなす。外面口縁部ナデ・指頭圧痕、胴部タタキ・縦八ケ。内面右下がりの八ケ・ナデ。	外面胴部中位と口縁部に強い煤。
" -734	"	"	—	—	—	2.2	灰黄褐色。石英・雲母、赤色風化礫、褐色・灰色系円礫・粗砂少量。	外面タタキ後八ケ。内面ナデ。内底付近強い板ナデ。	内外面と断面に煤。
" -735	"	—	—	—	—	1.7	にぶい褐色。石英・長石・雲母・角閃石、灰色系円礫少量。	外面底部脇板状原体による圧痕。内面八ケ。	外面片側に黒斑。外面に弱い煤。
" -736	"	—	—	—	—	1.4	橙色。石英・長石・雲母、赤色風化礫、他の砂礫少量。焼成堅緻。	外面木理の粗い八ケ。内底木理の粗い八ケ・指頭圧痕。	
" -737	"	鉢	16.4	—	—	—	橙色。石英・雲母・角閃石、褐色・灰色系円礫・粗砂を含む。焼成やや堅。	外面タタキ後斜方向の粗い八ケ。内面口縁部横八ケ、体部右下がりの八ケ。	
" -738	"	—	—	—	—	3.0	灰黄褐色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、褐色・白色系粗砂を含む。焼成堅緻。	外面右上がりのタタキ。内面木理の粗い八ケ、内底指頭圧痕。	外面と断面に煤。(廃棄後煤)
" -739	"	—	—	—	—	1.6	にぶい橙色。石英・雲母少量、灰色系円礫少量。	外面縦八ケ、底部脇に放射状のタタキ。内底八ケ・指頭圧痕。	内面と断面に煤。(廃棄後煤)
" -740	"	—	—	—	—	4.0	明赤褐色。石英・雲母・角閃石、褐色系円礫・角礫を含む。焼成やや堅。	外面タタキ内面八ケ。	外面部分的に煤。
" -741	"	甕	—	—	—	3.0	橙色。石英・雲母・角閃石、白色・灰色系円礫・角礫を含む。	外面タタキ後縦八ケ。内面八ケ・ナデ。内底指頭圧痕。底部脇にタタキを放射状に再度加える。	内面と断面に煤。(廃棄後煤)
" -742	"	"	—	—	—	2.4	赤褐色。石英・長石・雲母、赤色風化礫、灰色系円礫を含む。焼成堅緻。	外面タタキ・八ケ。内面八ケ・ナデ・指頭圧痕。底部脇放射状にタタキを加える。	外面中位に強い煤。

Tab.39 遺物観察表-弥生時代33

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
92-743	土器集中 23	—	—	—	—	4.6	灰黄色。石英・長石・雲母、褐色・灰色系円礫を含む。焼成やや軟。	外面木理の細かい縦八ケ。内面八ケ・ナデ。	底部片側に黒斑。
93-744	土器集中 24	甕	15.8	28.8	15.8	2.9	橙色。石英・長石・雲母、灰色系円礫、赤色砂を含む。焼成やや堅。	頸部外面に粘土帯接合痕顕著。内面胴部上位に粘土帯接合痕を残す。外面口縁部ナデ・胴部タタキ。内面八ケ。	
" - 745	"	"	14.6	20.0	14.5	2.0	橙色。雲母、灰色系角礫・円礫を含む。	頸部外面に接合痕を明瞭に残す。外面口縁部ナデ・指頭圧痕、胴部タタキ・八ケ。内面八ケ・ナデ。	
" - 746	"	"	16.0	9.0	—	—	橙色。雲母、灰色系円礫・粗砂を含む。焼成やや堅。	頸部外面に接合痕を明瞭に残す。外面口縁部ナデ・指頭圧痕、胴部右上がりのタタキ。内面八ケ・ナデ・指頭圧痕。	胴部中位に黒斑。
" - 747	"	鉢	24.7	13.8	—	3.2	橙色。雲母、灰色系円礫を含む。	外面タタキ後八ケ・ナデ。外底タタキ。内面縦八ケ。内底付近指頭圧痕顕著。	
" - 748	土器集中 25	壺	22.6	34.9	30.6	2.5	にぶい橙色。灰色系円礫・角礫・粗砂やや多量。	頸部外面に扁平な突帯を貼付し、格子目文を施す。口唇部横ナデ（静止ナデにより凹凸が強い）。口縁部内外面八ケ。胴部外面タタキ後八ケ・ナデ。内面八ケ・ナデ。	
" - 749	"	鉢	32.2	19.3	—	—	にぶい橙色。雲母、灰色系円礫・粗砂を含む。	体部上位内面に粘土帯接合痕明瞭。外面タタキ。外面上位水平方向・不定方向の八ケ。	外底に黒斑。
94-750	焼土68	甕	16.5	19.3	17.6	1.7	にぶい赤褐色。石英・雲母、白色・灰色系角粒砂少量。	口縁部叩き出し成形。肩部内面に粘土帯接合痕明瞭。外面タタキ、底部脇に強い窪ナデ。内面ナデ。外底タタキ。内底指頭圧痕。	外面部分的に煤。
95-751	層	壺	—	—	—	—	にぶい赤褐色。石英・雲母、白色・灰色系角粒砂少量。	上胴部内面に粘土帯接合痕明瞭。頸部外面に扁平な突帯を貼付し、格子目文を施す。胴部外面タタキ・ナデ。内面八ケ・ナデ。	上胴部に線刻 絵画。
96-752	"	"	13.3	—	22.9	—	褐色。石英・雲母、灰色系円礫・粗砂を含む。	上胴部内面に粘土帯接合痕明瞭。胴部外面タタキ後縦八ケ・ナデ。内面八ケ・ナデ。肩部内面に強い指ナデ。	
" - 753	"	"	15.1	—	—	—	橙色。雲母、赤色風化礫、褐色・灰色系円礫・角礫を含む。焼成やや堅。	頸部外面に扁平な突帯を貼付し、格子目文を施す。口縁部外面横ナデ、内面横八ケ。肩部内面に強い指ナデ。	
" - 754	"	"	19.7	—	—	—	にぶい橙色。雲母少量、灰色系角礫やや多量。	口縁部外面に櫛描波状文。内外面ナデ。	
" - 755	"	"	20.4	—	—	—	にぶい橙色。石英・雲母、赤色風化礫、灰色系円礫・粗砂。	外面口縁部横ナデ、口頸部縦八ケ。内面八ケ・ナデ。	
" - 756	"	"	—	—	—	—	にぶい橙色。石英・長石少量、灰色系円礫やや多量。焼成やや軟。	肩部内面に粘土帯接合痕。頸部外面に粘土帯を貼付し、刺突文。外面頸部ナデ・胴部タタキ後ナデ。内面ナデ。	
" - 757	"	甕	15.0	—	—	—	にぶい褐色。石英・雲母少量。	上胴部内面に粘土帯接合痕。外面口縁部縦八ケ、胴部右上がりのタタキ。内面右下がりの八ケ。	外面口縁部と 胴部中位に強い煤。
" - 758	"	"	13.1	—	—	—	灰黄色。石英・雲母、赤色風化礫、他の砂粒少量。	上胴部内面に粘土帯接合痕。外面口縁部ナデ、胴部タタキ。内面上胴部ナデ、胴部下位右下がりの八ケ。頸部外面と肩部内面に指頭圧痕顕著。	
" - 759	"	"	15.5	—	15.5	—	にぶい褐色。石英・雲母、灰色系円礫を含む。	頸部外面で粘土帯接合、ナデ消さず僅かな段をなす。外面タタキ。内面八ケ。	
" - 760	"	"	16.9	23.2	16.5	3.2	にぶい橙色。角閃石少量、黒色・灰色の角粒砂少量。	頸部外面で粘土帯接合、接合部にナデを施すが接合痕が明瞭に残る。外面口縁部ナデ、胴部タタキ、底部脇縦八ケ。内面八ケ。内底ナデ・指頭圧痕。	外面口縁部と 胴部中位に強い煤。
" - 761	"	"	17.2	23.5	—	1.3	灰褐色。石英・角閃石少量、白色・黒色・灰色系砂少量。	頸部外面で粘土帯接合、接合痕をナデ消すが僅かに痕跡が残る。外面口縁部ナデ、胴部タタキ、底部脇縦八ケ。内面八ケ。内底ナデ・指頭圧痕。	外面口縁部と 胴部中位に強い煤。内底に弱い煤。
" - 762	"	"	17.2	—	16.6	—	にぶい橙色。角閃石少量、黒色・灰色の角粒砂少量。	頸部外面で粘土帯接合、接合痕をナデ消すが僅かに痕跡が残る。外面口縁部八ケ、胴部タタキ。内面八ケ。	外面口縁部と 胴部中位、内面下位に強い煤。

Tab.40 遺物観察表-弥生時代34

Fig- 挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				色調・胎土	成形・調整・施文	備考 (使用痕・他)
			口径	器高	胴径	底径			
96-763	層	甕	10.8	16.7	—	—	にぶい黄橙色。角閃石少量、黒色・白色の角礫・角粒砂少量。	口縁部叩き出し成形。外面右上がりのタタキ・縦ハケ。内面右下がりのハケ。外底タタキ。	外面中位に強い煤。
" -764	"	"	—	—	—	2.3	にぶい橙色。石英・雲母・角閃石、赤色風化礫、他の円礫を含む。	外面タタキ、底部脇縦ハケ。内面ハケ。	外面中位に強い煤。断面にも煤。
" -765	"	鉢	16.0	11.3	—	—	橙色。石英・長石・雲母、他の砂粒を含む。焼成堅緻。	外面右下がりのタタキ。底部脇に右上がりのタタキを重ねる。内面体部ハケ、口縁部付近ナデ。内底指頭圧痕。	
" -766	"	"	9.3	6.3	—	1.6	橙色。角閃石、灰色系円礫、白色・黒色系砂を含む。	外面右上がりのタタキ・ナデ。内面ナデ・指頭圧痕。	
" -767	"	"	5.9	3.4	—	1.0	にぶい橙色。石英、灰色系角礫・粗砂やや多量。	外面右下がりのタタキ・ナデ・指頭圧痕。内面ナデ・指頭圧痕。	

Tab.41 遺物観察表-弥生時代35

Fig-挿図番号	出土地点	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	特徴	石材・備考
14-14	ST1	石鏃	2.31	1.31	0.35	0.9	凹基無茎石鏃。側縁部は直線的。断面形は凸レンズ状を呈する。表・裏面共に全面敲打。	頁岩(赤色)
"-15	"	石鏃	1.97	1.08	0.28	0.51	凹基無茎石鏃。側縁部は外湾する。断面形は凸レンズ状を呈する。表面は全面敲打、裏面は中央に初剥離面を残す。	頁岩(赤色)
"-16	"	未製品	1.65	1.6	0.33	0.7	石鏃未製品。平面形は台形状。基部に押圧剥離による調整加工痕を認める。調整加工段階で側縁部を破損し、製作放棄したものか。	頁岩(赤色)
"-17	"	叩石	11.6	9.0	3.1	447.2	扁平な楕円形の礫を使用。全縁部に敲打痕。長縁部は強い敲打により欠損する。	砂岩
23-45	SK4	礫器	8.6	5.8	4.3	197.9	亜円礫を使用。両側面から大きく剥離させ先端部を作り出し、さらに先端への調整剥離を両側面・前後より加える。側縁部にも敲打痕を認める。	頁岩(灰色)
"-46	"	"	9.5	5.3	3.3	133.4	亜角礫を使用。両側面から大きく剥離させ先端部を作り出し、さらに先端への調整剥離を両側面より加える。上端は強い敲打により欠損する。	頁岩(灰色)
"-47	"	敲打器	12.5	6.1	2.2	195.9	扁平な長楕円形の礫を使用。先端部と両側面に敲打痕を認める。	頁岩(灰色)
"-48	"	叩石(凹石)	11.7	10.9	4.6	914.0	扁平円形の礫を使用。両主面の中央部に凹みを有する。縁部全面に敲打痕を認める。	砂岩
24-54	SX2	礫器	11.3	6.9	4.6	296.6	亜角礫を使用。両側面から大きく剥離させ先端部を作り出し、さらに先端への調整剥離を両側面・前後より加える。	頁岩(砂質・灰白色)
"-108	土器集中1	"	7.6	5.3	3.4	120.1	亜角礫を使用。両側面から大きく剥離させ先端部を作り出し、さらに先端への調整剥離を両側面・前面より加える。	砂岩
"-109	"	"	8.3	5.1	3.4	149.0	亜角礫を使用。両側面から大きく剥離させ先端部を作り出し、さらに先端への調整剥離を両側面・前部より加える。	砂岩
"-110	"	"	8.5	6.2	3.1	157.0	亜円礫を使用。両側面から大きく剥離させ先端部を作り出し、さらに先端への調整剥離を両側面・前後より加える。上端部に強い敲打痕を認める。	頁岩(灰色)
"-111	"	"	7.4	4.2	3.0	155.8	亜円礫を使用。両側面から大きく剥離させ先端部を作り出し、さらに先端への調整剥離を両側面・前後より加える。上縁部に強い敲打痕を認める。	粘板岩
"-112	"	"	9.4	6.1	3.0	152.4	棒状礫を使用。両側面と前後から大きく剥離させ尖った先端部を作り出す。	頁岩(砂質・暗灰色)
"-113	"	叩石(凹石)	10.7	14.5	4.2	615.0	扁平円形の礫を使用。両主面の中央部に凹みを有する。	砂岩
"-114	"	"	12.2	11.2	4.8	951.0	扁平円形の礫を使用。両主面の中央部が使用により凹む。縁部全面に敲打痕を認める。	砂岩
"-115	"	"	9.9	9.1	3.8	303.2	扁平円形の礫を使用。片主面の中央部が使用により凹む。縁部全面に敲打痕を認める。	砂岩
33-158	土器集中3	砥石	15.8	4.7	3.1	498.7	箱形。叩石としても転用。全面に擦痕、両主面中央に敲打痕を認める。	頁岩(砂質・褐灰色)
"-159	"	敲打器	10.7	8.2	4.8	521.8	亜角礫を使用。側縁部に強い敲打痕を認める。	頁岩(砂質・灰色)
36-172	土器集中5	石鏃	2.0	1.5	0.3	0.71	凹基無茎石鏃。平面形は左右対称で側縁部は外湾する。断面形は凸レンズ状を呈する。表面は全面敲打、裏面は中央に初剥離面を残す。	頁岩(赤色)
"-173	"	"	2.85	2.2	0.45	2.07	凹基無茎石鏃。側縁部は僅かに外湾する。断面形は凸レンズ状を呈する。表・裏面とも中央に初剥離面を残す。	頁岩(赤色)
41-289	XI-下層 ~ 層	礫器	9.2	6.4	2.7	164.5	扁平な亜円礫を使用。両側面から大きく剥離させ先端部を作り出し、さらに先端への調整剥離を両側面・前後より加える。	頁岩(灰色)
"-290	"	石鏃	1.96	0.52	0.28	0.87	凹基無茎石鏃。側縁部は外湾する。断面形は扁平。脚部を欠損する。	頁岩(赤色)
88-709	土器集中21	砥石	10.4	5.9	4.0	438.6	箱形。叩石としても転用。全面に擦痕、両主面中央に敲打痕を認める。	砂岩
"-710	"	"	12.6	2.6	2.7	178.1	箱形。全面に擦痕を認める。	頁岩
"-711	"	礫器	10.3	5.8	3.0	186.5	亜角礫を使用。両側面から大きく剥離させ先端部を作り出し、さらに先端への調整剥離を両側面・前部より加える。	頁岩(灰色)

Fig-挿図番号	出土地点	器種	全径 (cm)	全厚・全長 (cm)	中央孔径 (cm)	重量 (g)	特徴
29-116	土器集中1	ガラス小玉	0.35	0.25	0.1	0.03	半透明、水色に発色。扁平球状。貫通孔は偏心する。
"-117	"	"	0.45	0.3	0.15	0.06	半透明、水色に発色。扁平球状。中央部孔。
"-118	"	"	0.4	0.2	0.1	0.03	半透明、水色に発色。扁平球状。中央部孔。
"-119	"	"	0.5	0.35	0.2	0.09	半透明、水色に発色。扁平球状。中央部孔。
"-291	区・上層	"	0.4	0.45	0.15	0.08	半透明、水色に発色。円筒状。貫通孔は偏心する。
39-213	区・-3層	管玉	0.45	0.7	0.2	0.06	碧玉製。暗緑色に発色。片側を欠損する。

Tab.42 石器・ガラス製品・石製品観察表

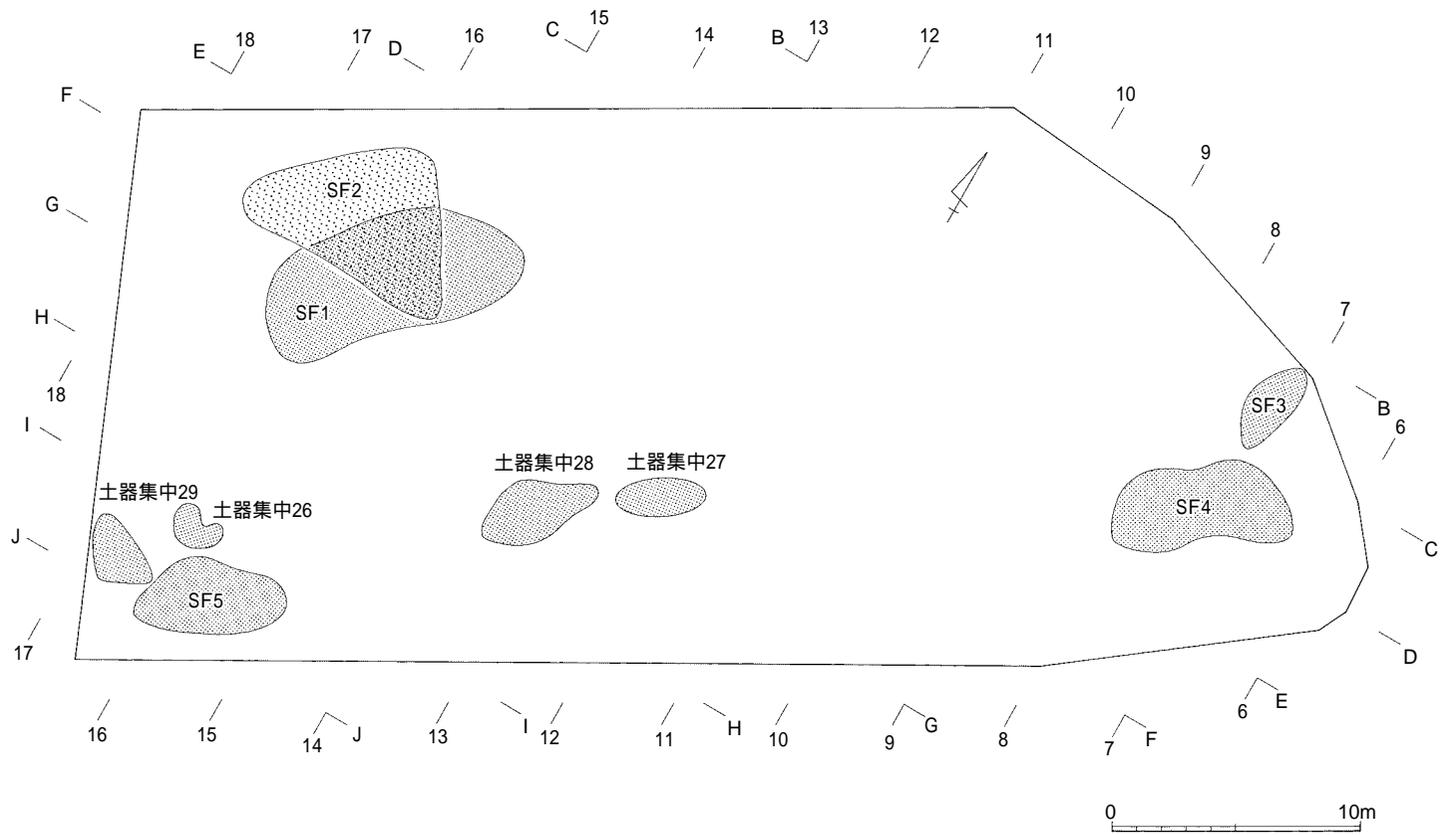


Fig.97 区検出遺構全体図(古墳時代)

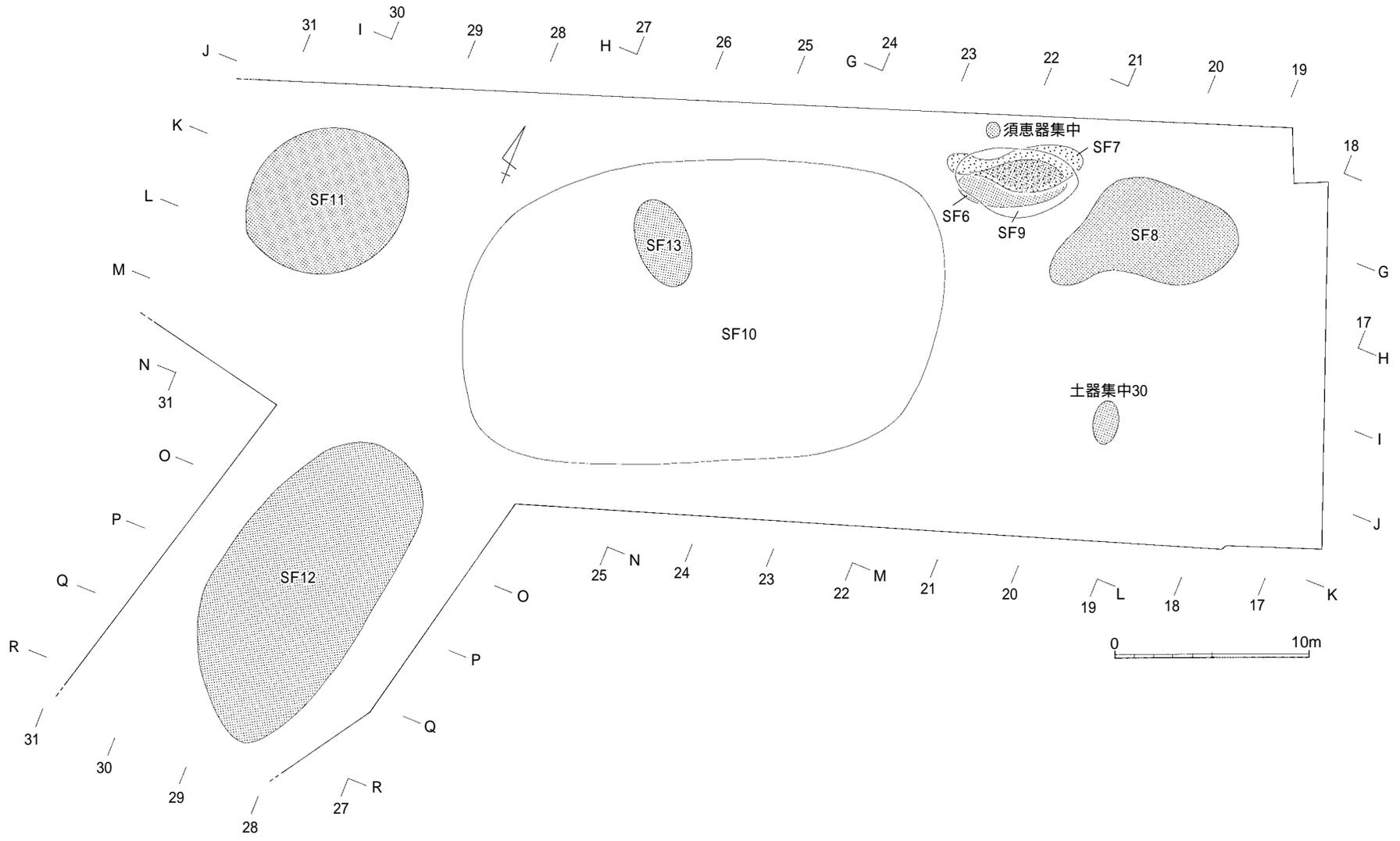


Fig.98 区検出遺構全体図(古墳時代)

第3節 古墳時代

具同中山遺跡群の調査では1989、1990年の調査で弥生時代終末から古墳時代の祭祀跡を1箇所、古墳時代の祭祀跡(SF)を11箇所確認している。それ以後数回に亘る調査が行われているが、前回の調査に比べ、規模、遺物の出土量とも少ない。今回の調査では土器集中が5箇所、祭祀跡が13箇所の計18箇所を検出した。ここでは弥生時代と同様に調査区を 区・区と分けて各々の遺構と遺物について述べることにしたい。

1. 区の調査

区では遺物の小集中が多く、広範囲に及び祭祀跡分布は少ない状況である。また 区に比べ、遺構の検出標高は約70cmほど高い状況にあり、 区に比べ層の堆積も薄く、上面の 層及び -2層からは古代・中世の遺構・遺物が検出されている。これらの状況から 区では古代・中世段階の削平が行われおり、下層の古墳の祭祀に影響を及ぼしていると考えられる。

1) 検出遺構

祭祀遺構

SF1

区の北西部E-15・16～F-17・16に亘って位置している。 層の下層掘削時において平面的に検出した。検出範囲は約9.2×3.4mに及び広範囲に集中が確認できるが、その中でも、E-15を中心に集中するブロックとF-16を中心とするブロックがみられる。検出標高は4.68～4.96mを測り、区のSFの中では最も広い範囲に分布がみられる。集中は甕、高杯、鉢、手捏ね土器で構成されており、大半は破片の集中であるが、鉢、手捏ね土器等はそのままの形で検出された。

出土遺物(Fig.100)

遺物総点数は206点を数え、その内甕片は185点、高杯13点、手捏ね土器1点が出土しており、中でも甕が最も多く全体の90%を占めている。また高杯の占める割合も多い。その内図示できたのは15点である。768、769は鉢である。底部は平底、768は口縁部にかけて直線的に伸びている。769は底部は段状を呈する。外面はタタキ整形後八ヶ調整、内面には八ヶ調整なされる。770～772、774は高杯であるが、770は柱状を呈し、裾部は屈曲して外方に広がる。774は高杯で、口縁部は外方に大きく広がる。773は長胴形を呈する手捏ね土器である。口縁部はそのまま短く伸びると思われる。775～782は甕で、775は胴部が球胴状を呈している。777は底部は丸底で胴部は球胴状を呈す。口縁部は叩き出している。外面は底部に至るまでタタキ整形の後八ヶ調整、内面には指頭とナデがなされる。778は底部は丸底で胴部は球胴状に大きく張る大型の甕である。外面にはタタキ整形後八ヶ、内面にはヘラ状のナデと指ナデがみられる。781と782は同体と思われる甕である。口縁部と胴部はほぼ同径で、頸部から口縁部にかけては緩やかに屈曲し伸びる。内外面にはナデ調整がみられる。

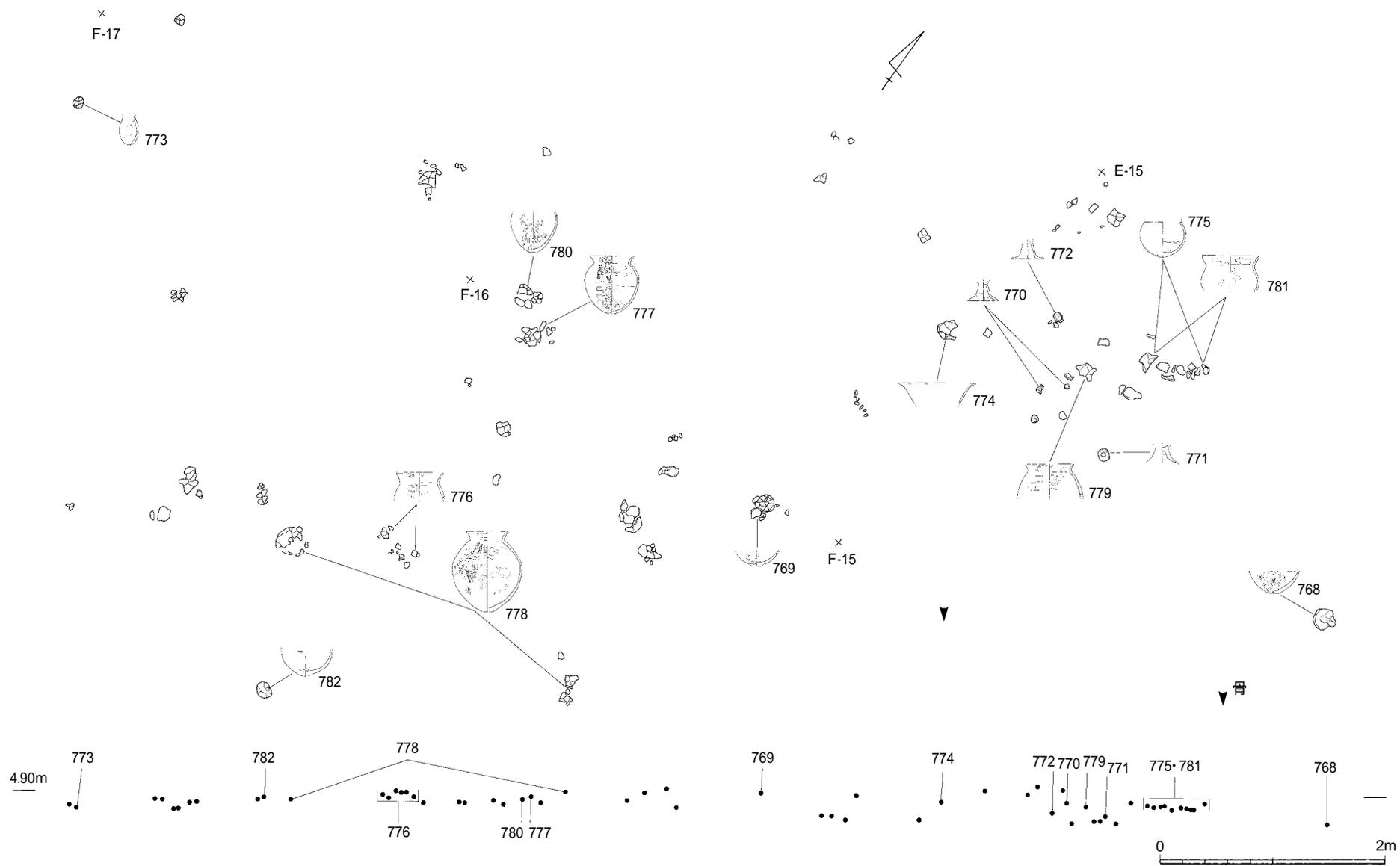


Fig.99 SF1遺物出土狀況圖

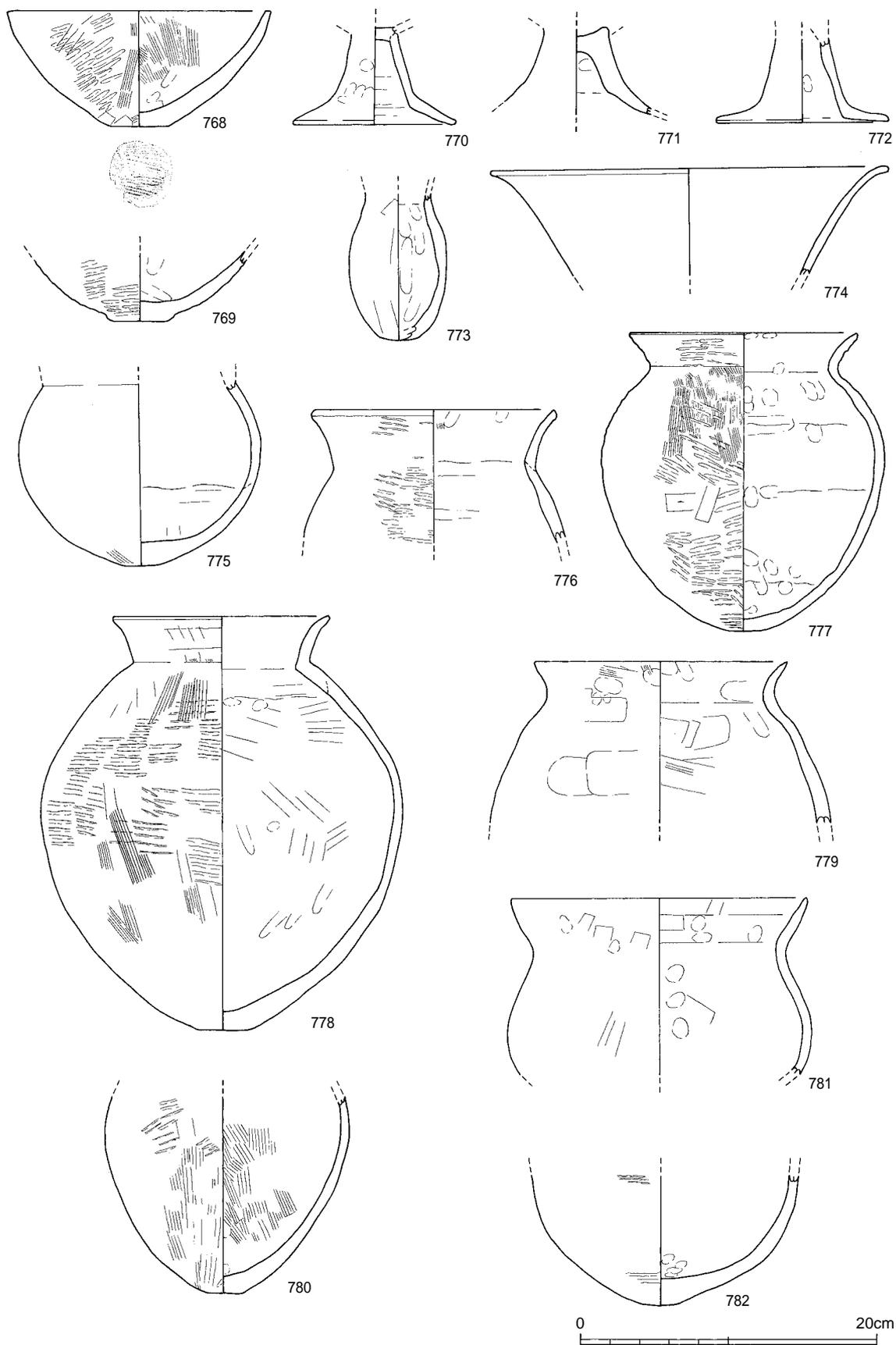


Fig.100 SF1出土遺物実測図

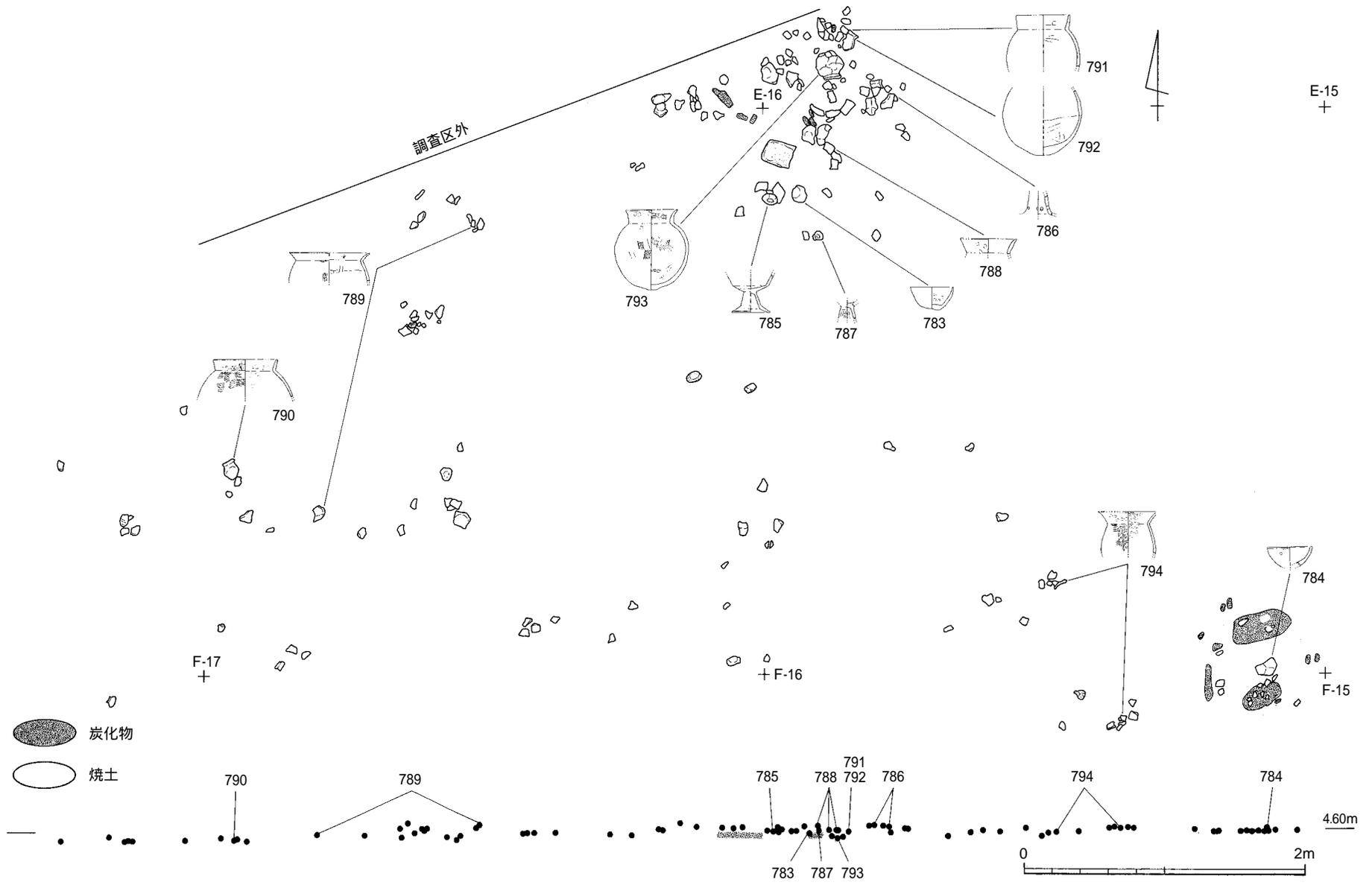


Fig.101 SF2遺物出土状況図

SF2

区の北西部E-16~18・F-16~18に亘って位置している。層の下層掘削時に平面的に検出した。検出範囲は約8.8×5.2mに及び、区の中では広い集中範囲である。検出標高は4.52~4.66mを測る。集中の北部は調査区外との境になるため、分布範囲は調査区外に広がると考えられる。遺物はE-16を中心とするブロックに集中し、その他は点在している。またF-15の西側には直径約1mに及ぶ範囲内に焼土と炭化物が集中しており、その中には土師器鉢の破片がみられた。ブロックに

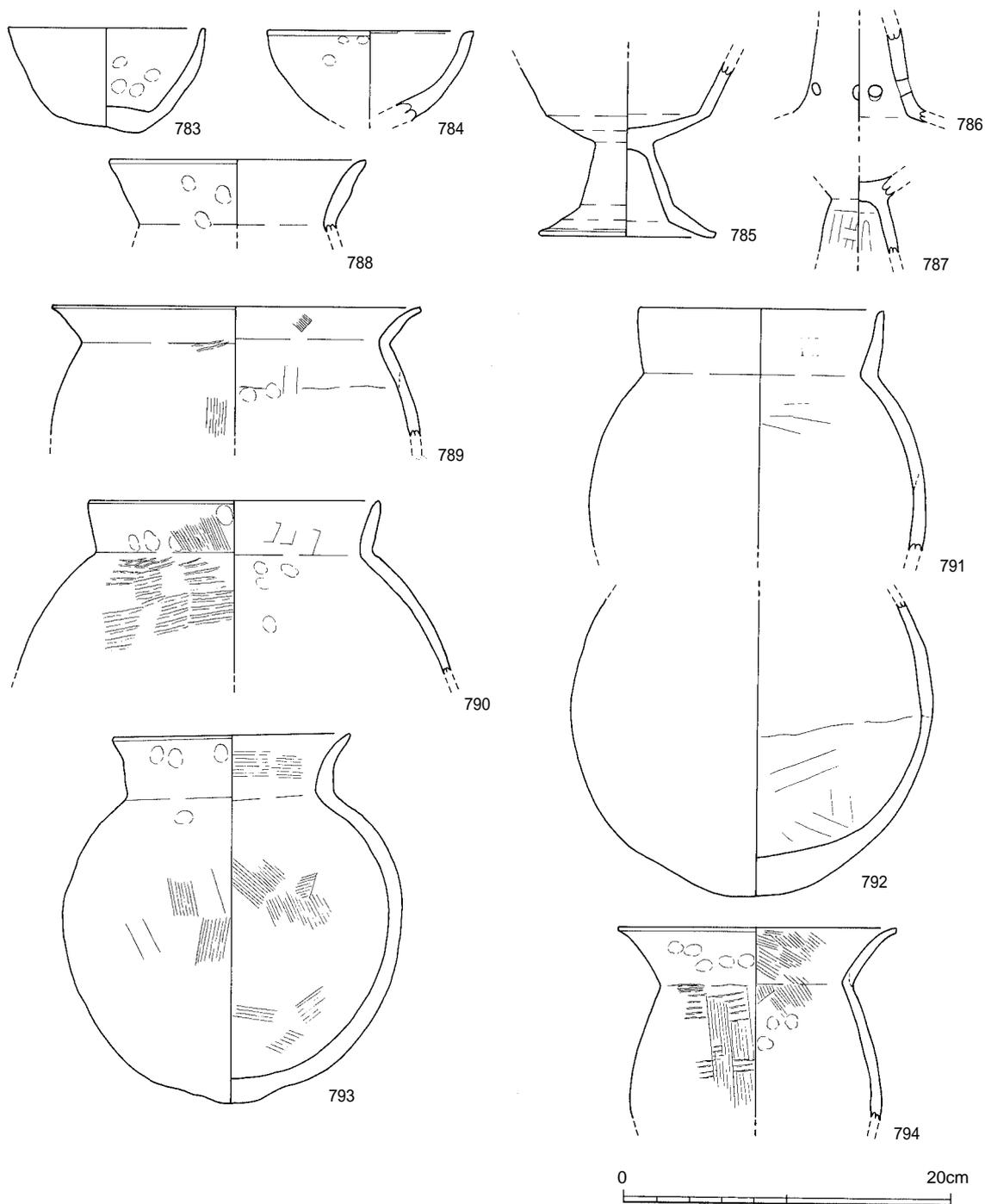


Fig.102 SF2出土遺物実測図1

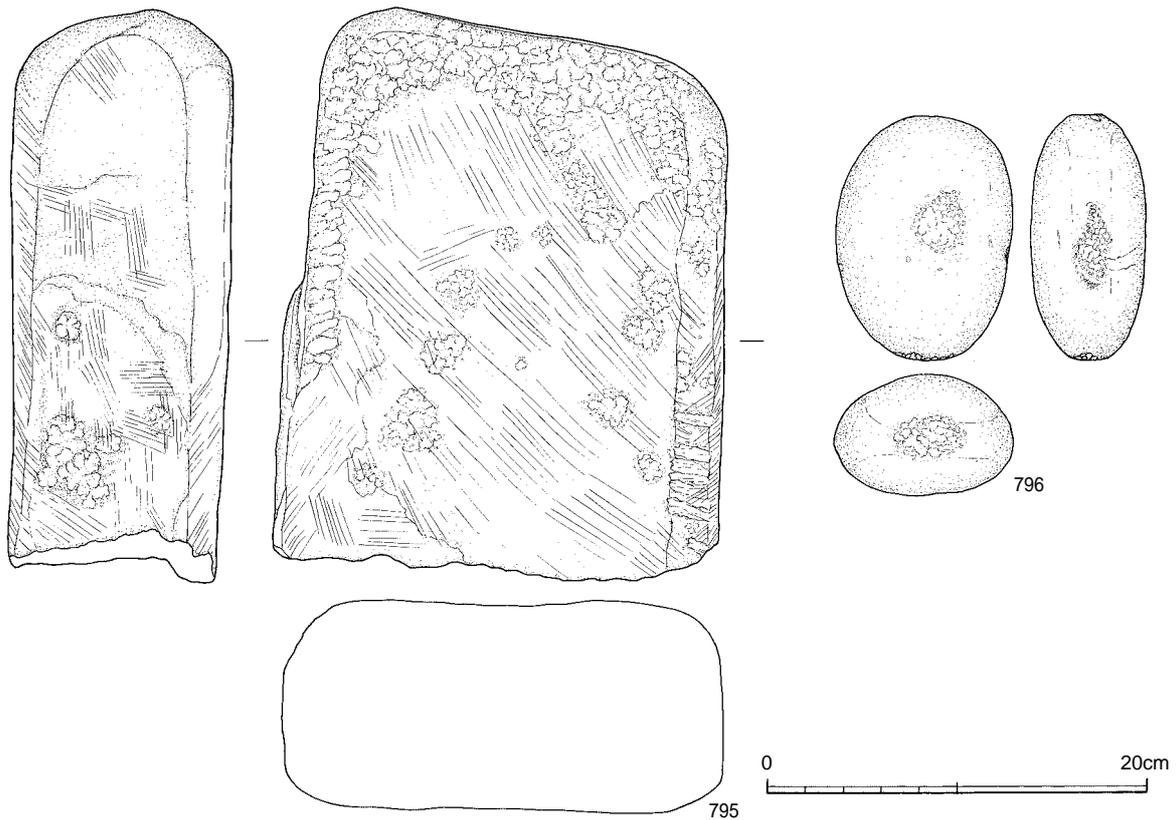


Fig.103 SF2出土遺物実測図2

は20×18cmを測る断面形状の礫が置かれ、その周辺に遺物が集中して出土している。集中は甕、高杯、壺、鉢で構成されており、破片が大半を占めるが、793の甕は土圧でつぶされた状態のまま検出された。

出土遺物(Fig.102、103)

遺物総点数は178点を数え、その内甕が157点、高杯13点、叩石1点が出土しており、中でも甕が最も多く全体の88%を占めている。その内図示できたのは12点である。783、784は椀である。783は扁平な平底を呈し、やや雑な作りである。内外面はナデ調整がなされる。785～787は高杯で、785は脚部は柱状を呈し、裾部は緩やかに屈曲し広がる。786には直径約9mmの円孔が施されている。788～794は甕で789は頸部から口縁部にかけて屈曲し伸びる。790は頸部から口縁部にかけて直立し、短く伸びる。外面にはタタキ痕が残る。793はほぼ完形で、丸底の底部から胴部は球胴状に大きく張り、頸部から口縁部は屈曲し伸びる。内外面にはハケ調整がなされる。794は口縁部に最大径をもち頸部から口縁部は外反する。胴部外面にはタタキ整形後のハケ調整がなされる。791は胴部は球胴状を呈し、口縁部は直立して伸びる。792とは同体と考えられる。795は土器の集中とともに検出されており、敲打痕が認められる。台石に使用されたと考えられる。796は円礫の叩石で、中央と両側面の3箇所には敲打痕が認められる。

SF3

区の南西部B-8において、層掘削時に平面的に検出した。SF4の北側約60cmの地点に位置している。検出範囲は1.9×3.6mに及び、南北に帯状を呈する集中である。集中の北西部には直径30cmを測り、円形を呈する焼土を確認した。焼土上からは798の手捏ね土器が出土している。検出標

高は5.2～5.34mを測る。集中は土師器甕、高杯、椀、直口壺、須恵器、手捏ね土器、有孔石製円板で構成され、直口壺、鉢、手捏ね土器はほぼ完形で置かれていた。また、土器と共に20cmを測る棒状の川原石が2点出土している。

出土遺物(Fig.105)

遺物総点数は343点を数え、その内土師器甕片が278点、高杯17点、直口壺1点、椀2点、須恵器2点、手捏ね土器5点、有孔石製円板5点が出土しており、甕が全体の約81%を占めている。また手捏ね土器と有孔石製円板の出土点数が全体で最も多い集中である。その内図示できたものは26点である。797～801は手捏ね土器であるが、800と801は口縁部に粘土紐を貼り付け肥厚させている。803と804は椀で、底部は丸底で口縁部にかけて内湾している。802は須恵器の杯身で、立上がりは内傾して伸び、受部はやや厚みを持っている。805は須恵器の甕で口縁部は屈曲し、口縁下には断面三角形の稜が2条巡る。稜間には波状文(2本)が巡っている。806～808、810～814は高杯であるが、完形のものはなく、杯部が椀状を呈するタイプ(806)と外方に直線的に伸びるタイプ(807、808、810、811)、がみられる。815～817は小型の甕であるが、815と816は底部は丸底を呈し、胴部はやや張るが、頸部から口縁部は緩やかに伸びる。共に指頭が顕著である。817の底部は平底で、頸部から口縁部は直立して伸びる。818は直口壺である。胴部は大きく張り、頸部から口縁部は直線的に上方に伸びる。819～822は甕で、胴部はやや球胴状を呈し、頸部から口縁部にかけては緩やかに屈曲している。823～827は有孔石製円板である。その中でも827は直径約3cmを測る大型の円板であり、2mmの円孔を2箇所施す。824は2.8×4.1cmを測る楕円形を呈し、一部は欠損している。

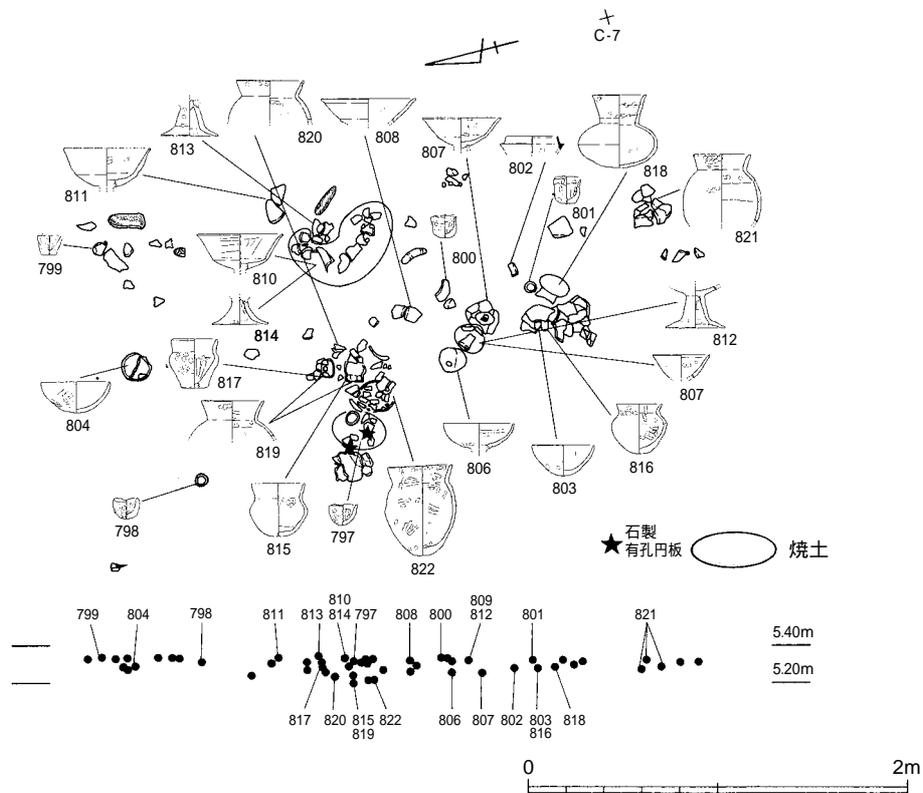


Fig.104 SF3遺物出土状況図

SF4

区の東南部C-7・8、D-9に亘って位置している。層掘削時に検出した。検出範囲は6.4×2.7 mに及び、また遺物はC-7グリットに集中して出土しており、その他は周辺に点在している。D-8

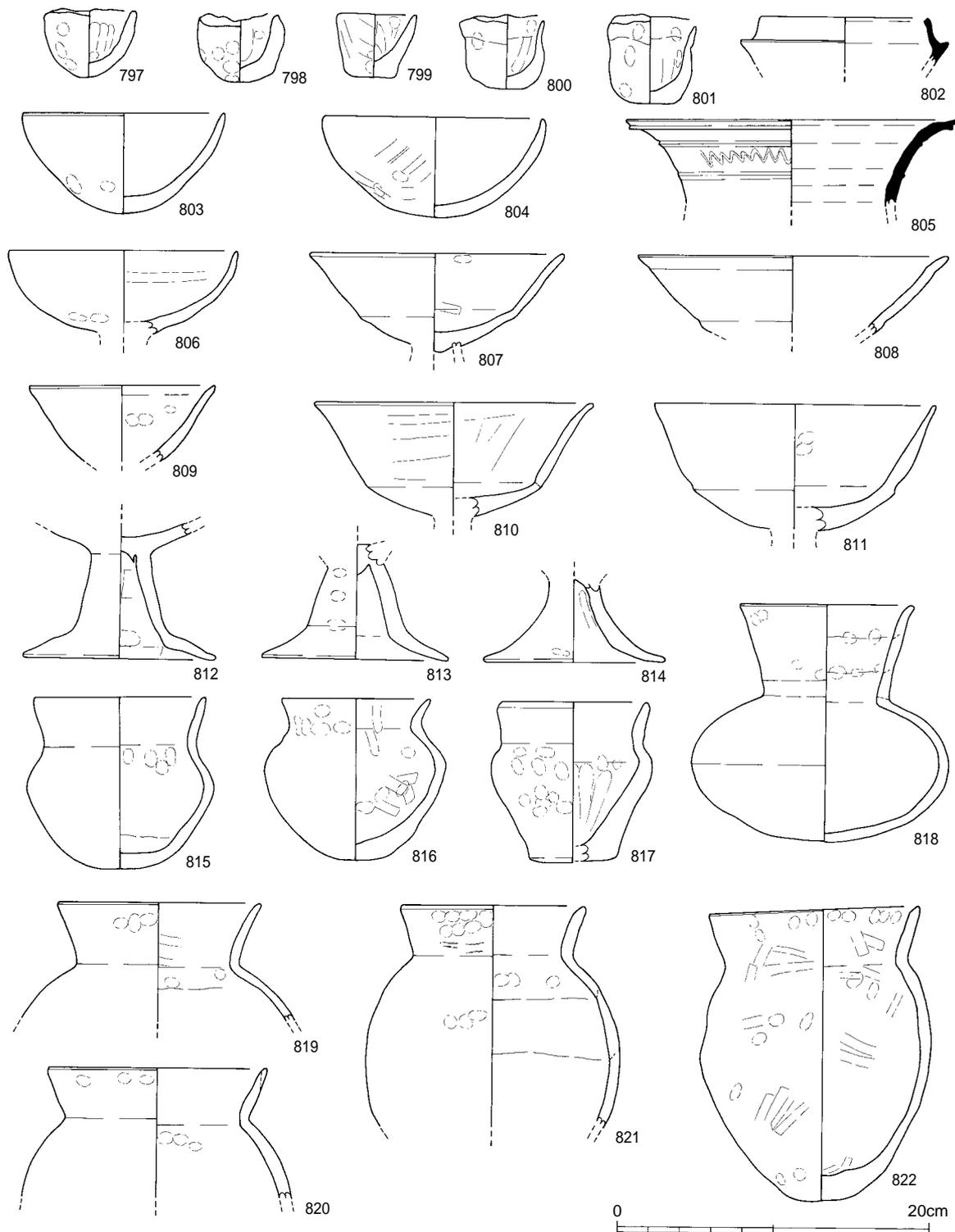


Fig.105 SF3出土遺物実測図1

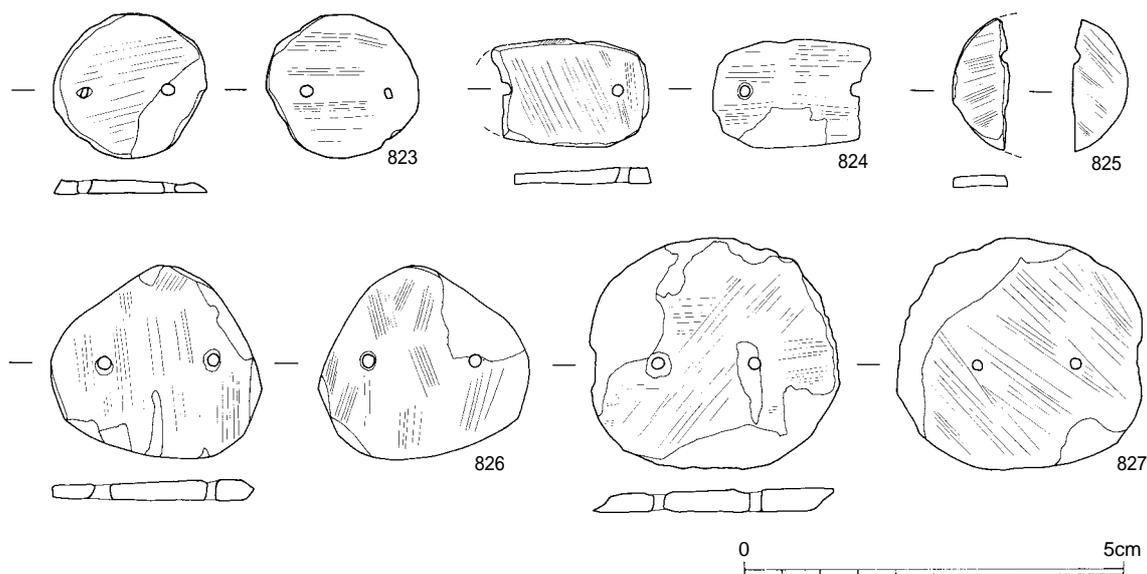


Fig.106 SF3出土遺物実測図2

グリッドの南約20cmと南東約2m地点には直径約45～50cmを測る焼土が確認され、南東の焼土には土器の細片が混在していた。検出標高は5.2～5.48mを測る。区のなかでは広い集中に入り、土師器甕、高杯、丸底壺、甑、須恵器、手捏ね土器で構成されている。

出土遺物(Fig.108)

遺物総点数は細片も含めて518点を数え、その内土師器甕片が478点、高杯22点、壺1点、須恵器2点、手捏ね土器1点、甑1点が出土しており、甕が全体の約92%を占めており、ついで高杯が多い。その内図示できたのは11点である。828は須恵器の杯身で、立上がりはやや短い。831、833、834、836、837は高杯で831は杯部は外方に大きく開き、脚裾部は緩やかに屈曲して広がる。837の脚部は裾部との境がなく、そのまま伸びる。838は頸部下に最大径をもつ甕で頸部から口縁部は屈曲している。835は甑の底部であるが、底部中央には焼成前の穿孔がなされている。

SF5

区南西隅 I -15・16、J -16に亘って位置している。層掘削時に検出した。J -16を中心にして5.6×2.4mに及ぶ範囲に集中が認められる。検出標高は5.18～5.32mを測る。集中は甕、高杯、椀、丸底壺、須恵器、手捏ね土器で構成されており、須恵器、高杯等はほぼ完形で出土している。

出土遺物(Fig.110)

遺物総点数は219点を数え、その内土師器甕片が108点、高杯65点、椀1点、丸底壺1点、須恵器38点、手捏ね土器2点、土製模造鏡1点が出土しており、全体の約50%が甕で占められるが、椀の点数が他のSFに比べ少ない。その内図示できたものは17点である。839は土製模造鏡でやや器壁が厚く把手部分には施孔がみられる。手捏ね土器(840、841)は底部平底を呈している。843は須恵器杯蓋である。天井部は丸みをもち、天井部約1/2まで回転ヘラ削り、稜部は断面三角形を呈し、口縁端部は内傾している。甕(844、845)は小型と大型が出土している。844は口縁下と頸部近くに波状文が巡り、胴部には2段に亘り刺突を行い、1cmの円孔を施す。また、口縁部は一部しか残っておらず、

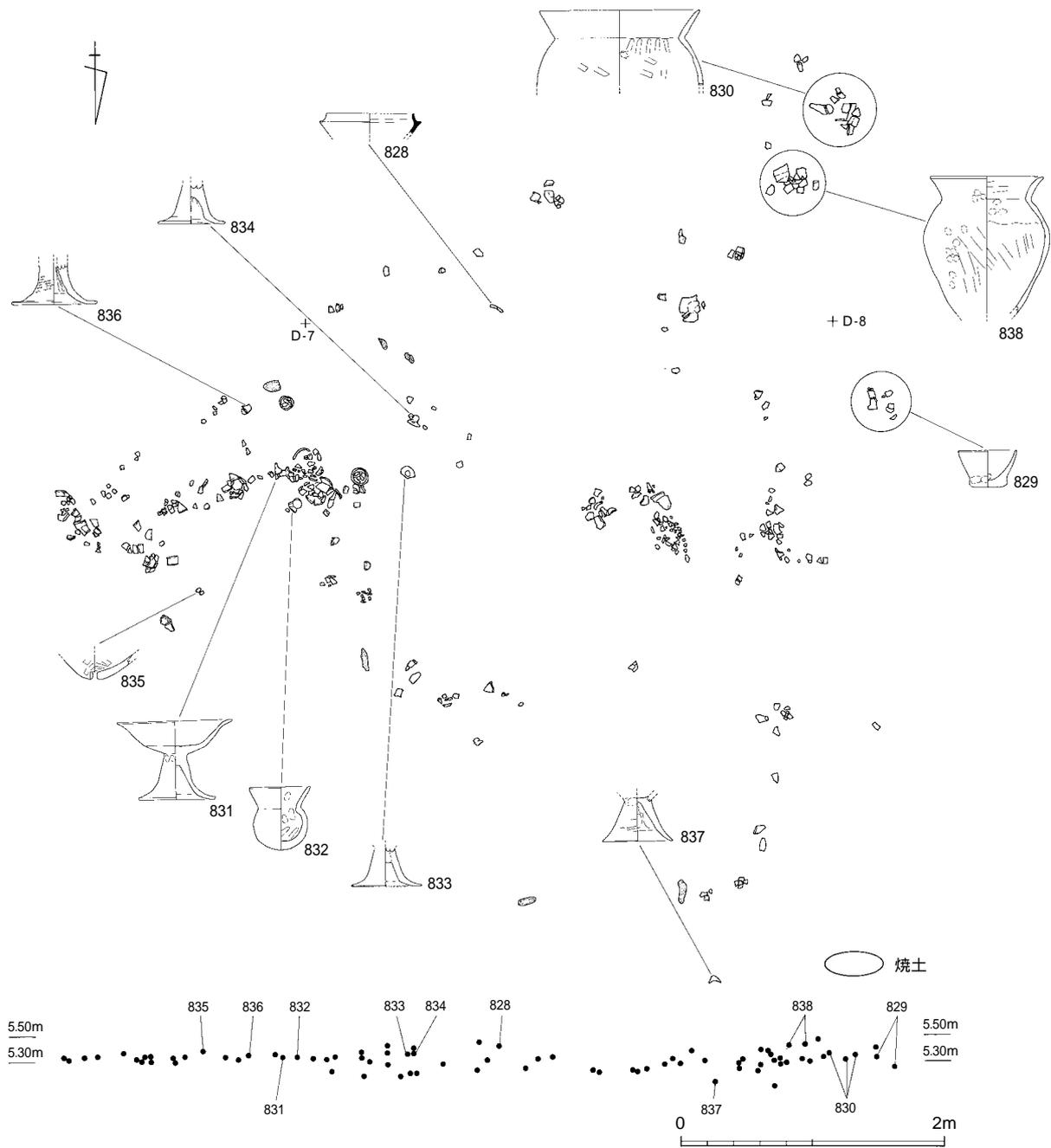


Fig.107 SF4遺物出土状況図

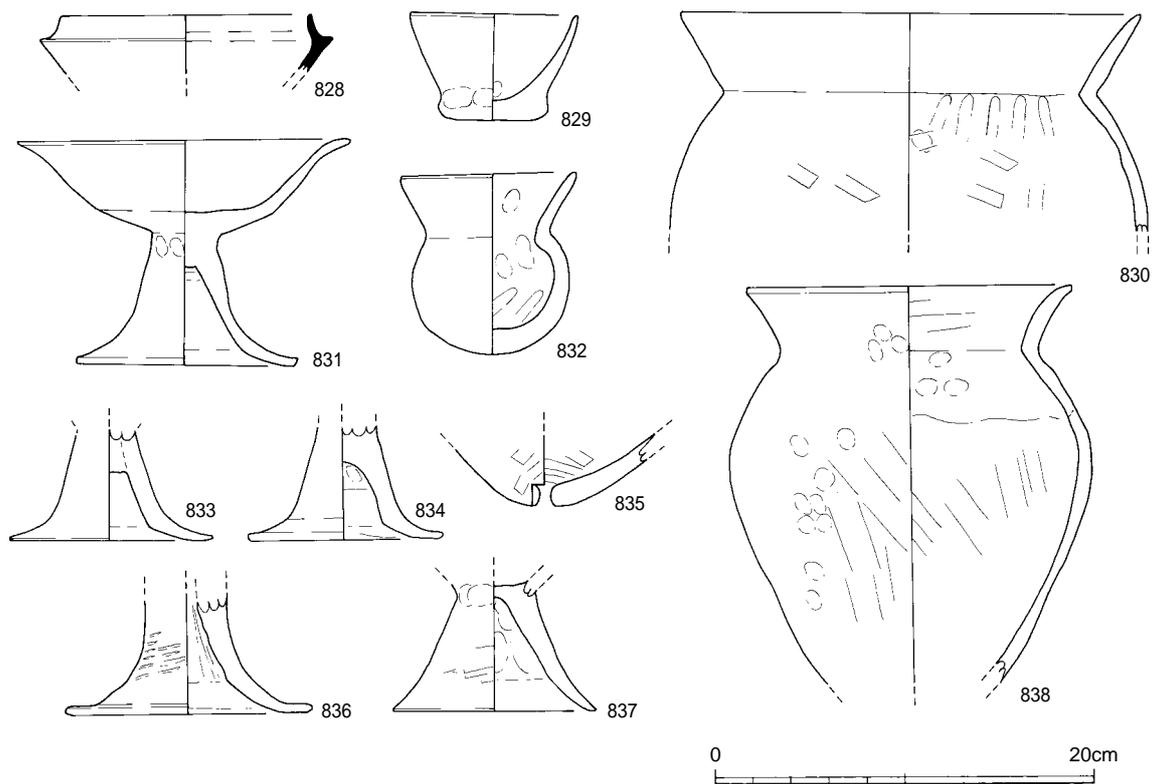


Fig.108 SF4出土遺物実測図

故意にかき割られたと考えられる。845は頸部付近には波状文(12本)が巡り、胴部にも波状文(5本)を巡らせ、1cm大の円孔を施す。内底部には施孔の際の粘土が貼り付いたままである。高杯(846～850)は杯部が上方に伸び口縁部はやや外反する。脚裾部は屈曲し広がる。851は丸底壺で、胴部は球胴に張る。852～855は土師器の甕で、852は頸部から口縁部にかけて短く直立している。853はやや小型で、頸部から口縁部にかけて上方に伸びている。指頭が顕著である。

土器集中

土器集中26

区南西部のI-16・17に位置してしている。層の下層掘削時に検出した。I-16を中心にして1.6×1.2mに及ぶ範囲に集中が認められ、その内何点かは点在している。検出標高は4.85～4.95mを測る。他のSFと比較すると狭い範囲内に集中している。遺物の大半は細片であるが、底部から胴部にかけての形態を呈するものも何点かみられ、そのほとんどは甕で構成されている。

出土遺物(Fig.111)

遺物では細片が多くを占めるが、その内甕が79点、壺が2点を数え、甕を中心に構成されている。その内856～858、860～865の甕、859の壺の口縁部が図示できている。856は口縁部に最大径をもつ。底部は丸底で、頸部から口縁部は外方に屈曲する。外面にはタタキ後八ヶ調整がなされる。863は底部が丸底で胴部は強く張り、頸部から口縁部にかけて短く上方に伸びる。外面には同じくタタキ後八ヶ調整。857と862は口縁部で、外方に屈曲している。861、864、865は底部から胴部にかけて

残存しており、長胴の形態を呈する。その内865は底部平底で、外面にはタタキの後細かいハケ調整がなされる。858は小型の甕で頸部から口縁部は直立して短く伸びる。859は頸部から口縁部にかけて直立する。口縁下には段を呈している。

土器集中27

区の中央部F-12・13に亘って位置している。層の下層掘削時において平面的に検出した。検出範囲は3.2×0.8mを測り、東西方向に帯状を呈しているが、3箇所のブロック状に土器が集中している。検出標高は約5mを測る。集中は土器の細片がほとんどであるが、近辺には20cm大の楕円形を呈する川原石が数点みられる。また集中は甕によって構成されているが1点角礫状の砥石が出土している。

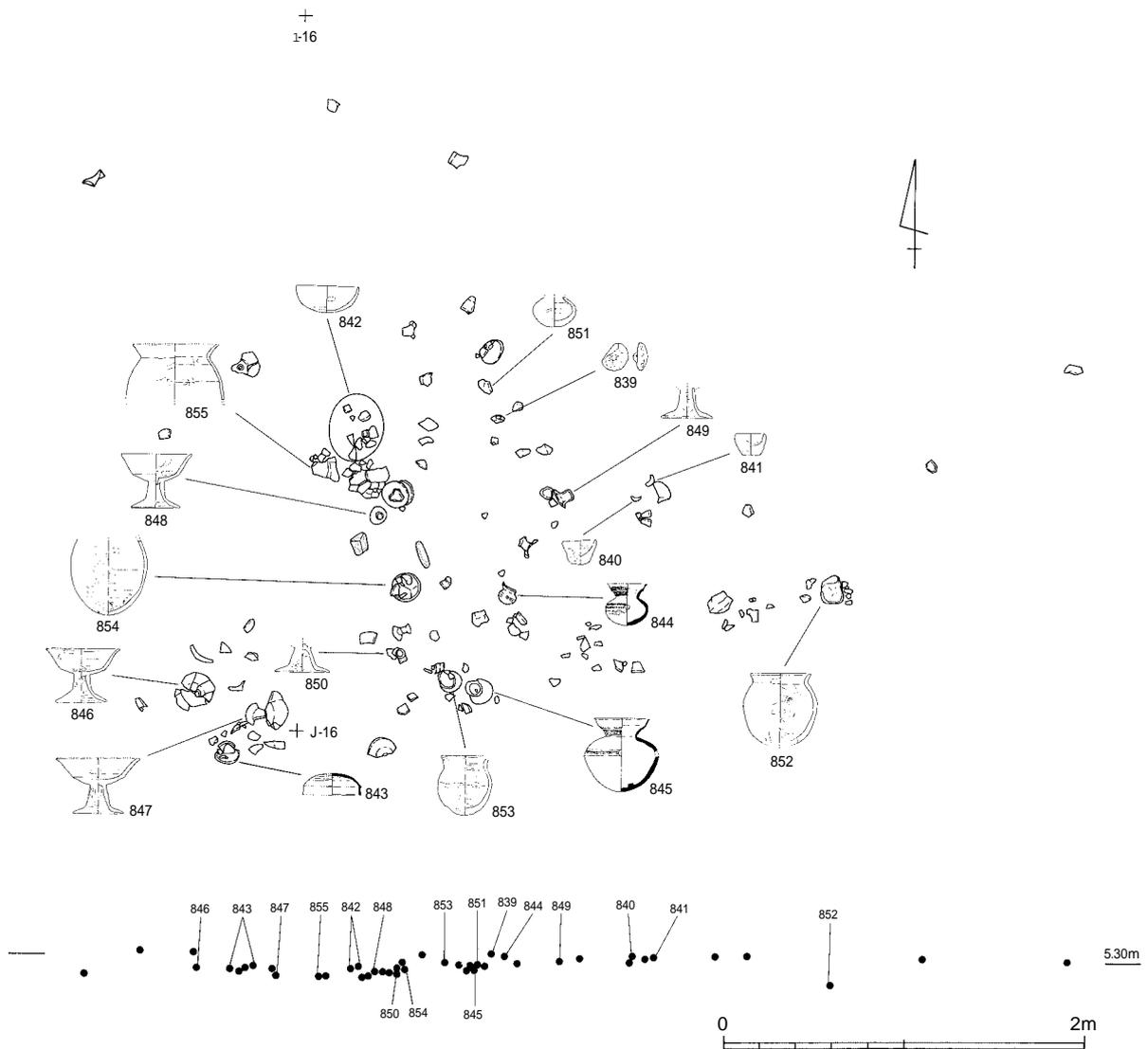


Fig.109 SF5遺物出土状況図

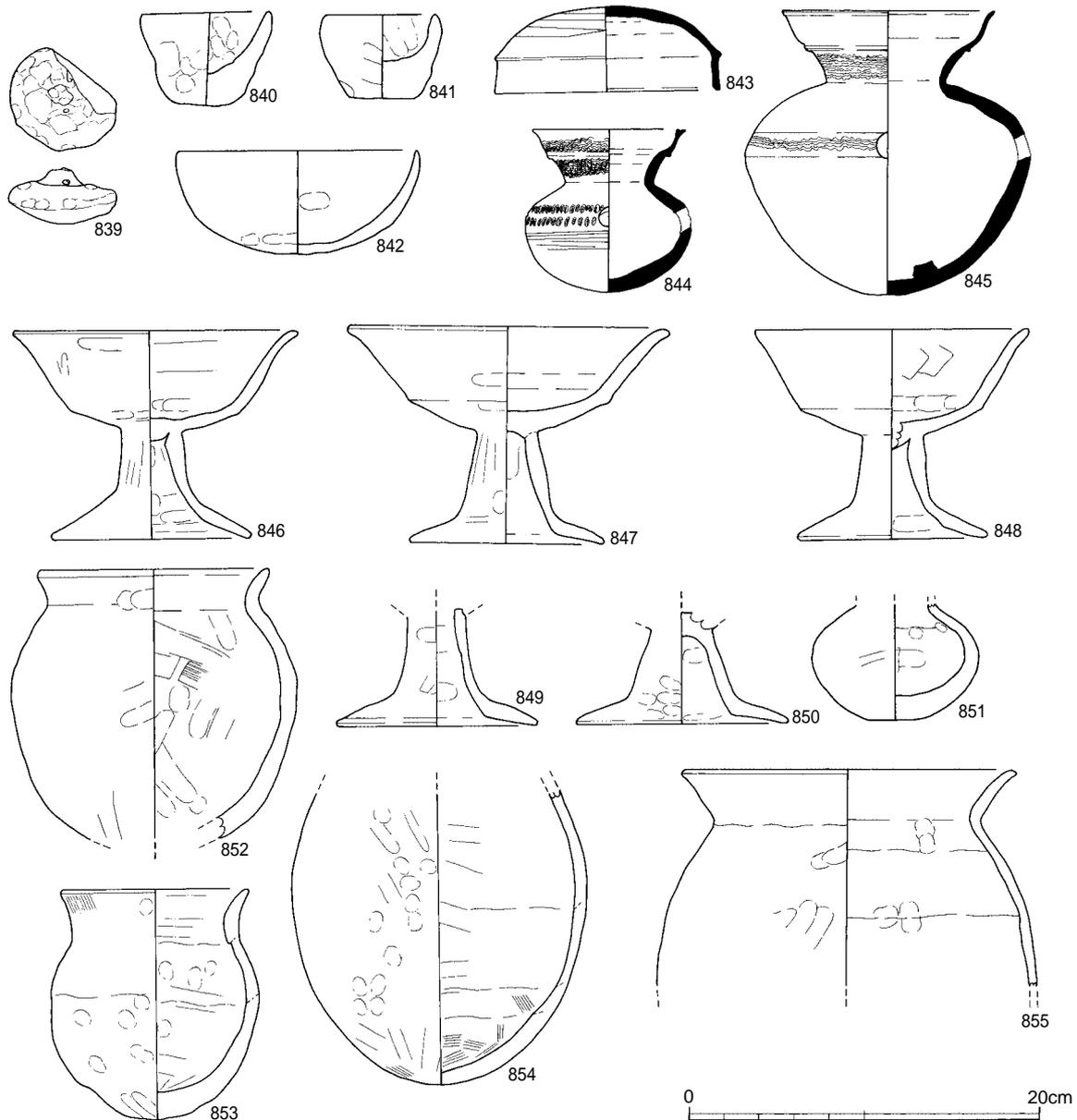


Fig.110 SF5出土遺物実測図

出土遺物(Fig.112)

遺物総点数は90点を数え、非常に少ない集中である。その内土師器片が39点、石器1点、川原石3点を数える。これらの出土遺物の内、図示できたのは4点である。867、868は甕で頸部から口縁部は外反している。外面には一部タタキ痕がみられる。866は底部は丸底で口縁部にかけて内湾する椀である。外面には一部タタキ痕がみられる。869は全長15cmを測る砥石である。側面の一部は加工痕跡がみられる。

土器集中28

区中央部のG-13・14に位置している。層の下層掘削時に検出した。G-13を中心にして3.2×2.4mに及ぶ範囲に集中が認められる。検出標高は5.0～5.05mを測る。集中は椀と甕で構成され

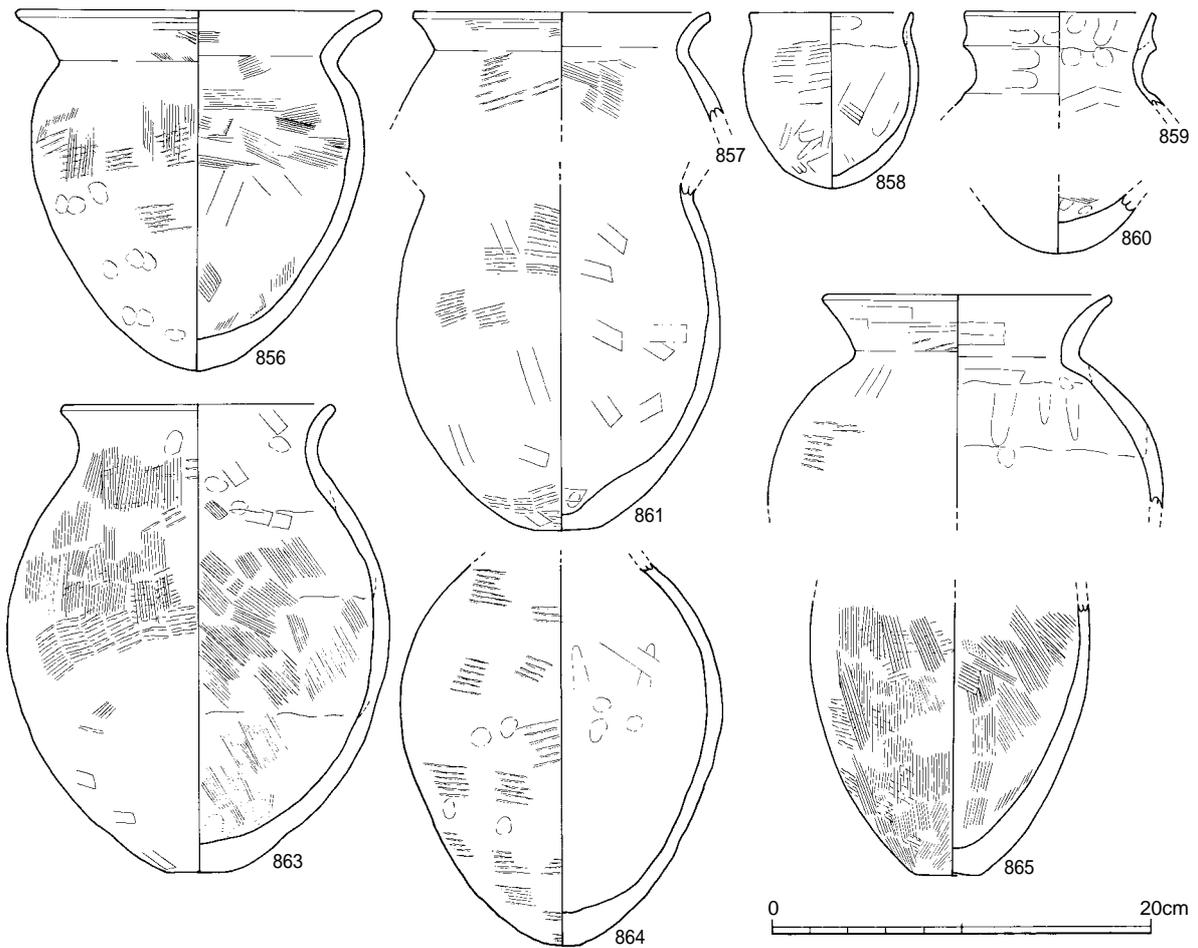
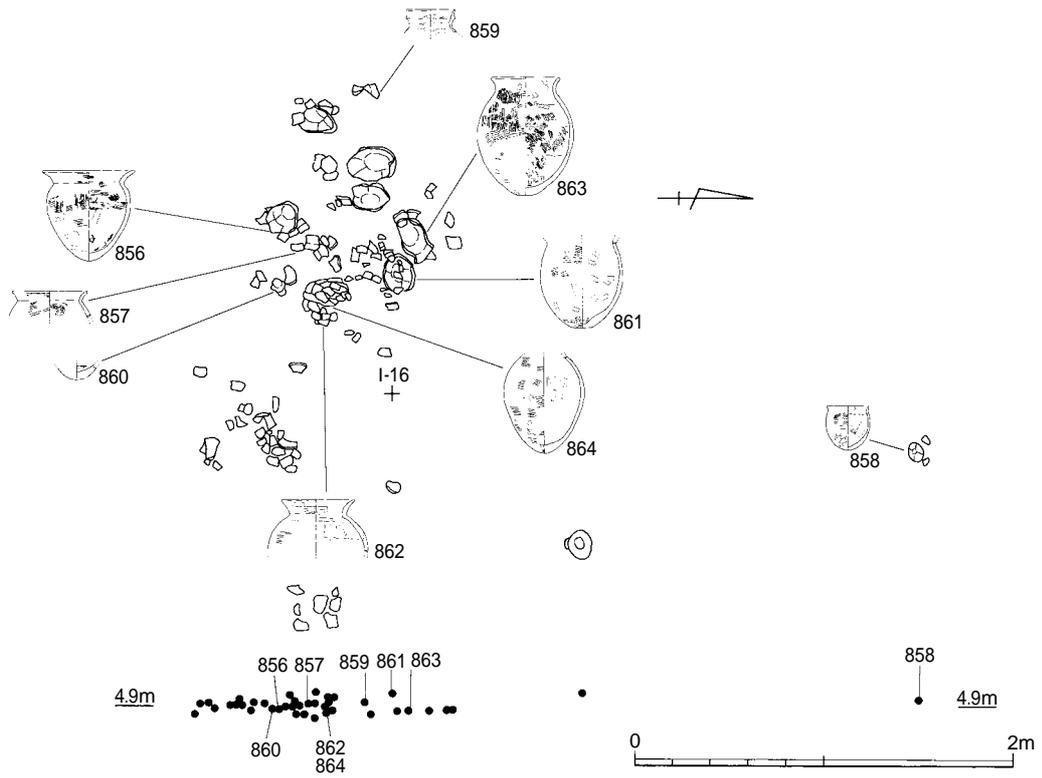


Fig.111 土器集中26遺物出土状況図及び出土遺物実測図

ている。また遺物の大半は細片であるが、その他は871の椀がほぼ完形で出土している。

出土遺物

遺物では細片が多くを占めるが、その内甕が58点、椀が7点を数える。870と871は椀とともに平底を呈すが、870は口縁部にかけて内湾しているが、871は直線的に伸びる。873～875は甕で、874は胴部は長胴を呈し、頸部から口縁部にかけて屈曲する。外面にはタタキ整形痕が残る。875も長胴を呈すが、口縁部は短く外反する。同じく外面にはタタキ整形痕がみられる。873は口縁部は頸部から直立して伸びる。胴部は球胴状に張ると思われる。

土器集中29

区南西隅 I - 17 に位置している。層掘削時に検出した。検出範囲は2.0×2.4mに及ぶ土器集中である。検出標高は5.2

～5.3mを測る。集中は土師器甕、高杯、椀、須恵器で構成されている。高杯は完形のまま出土した。甕は細片のため復元できなかった。

出土遺物

遺物総点数は97点を数え、細片が多いがその内土師器甕片が91点、高杯7点、椀4点、須恵器1点が出土しており、甕が全体の約94%を占めている。その内図示できたものは7点である。876は須恵器杯身で立上がりは欠損しているが、底部約1/3には回転ヘラ削り、受部は断面三角形を呈する。877と878は椀で、底部は丸底を呈し、口縁部にかけて内湾する。880は完形の高杯である。全体にやや歪んでいる。杯部は外方に大きく開き、脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し広がる。脚部内面にはヘラ削りとナデがなされる。

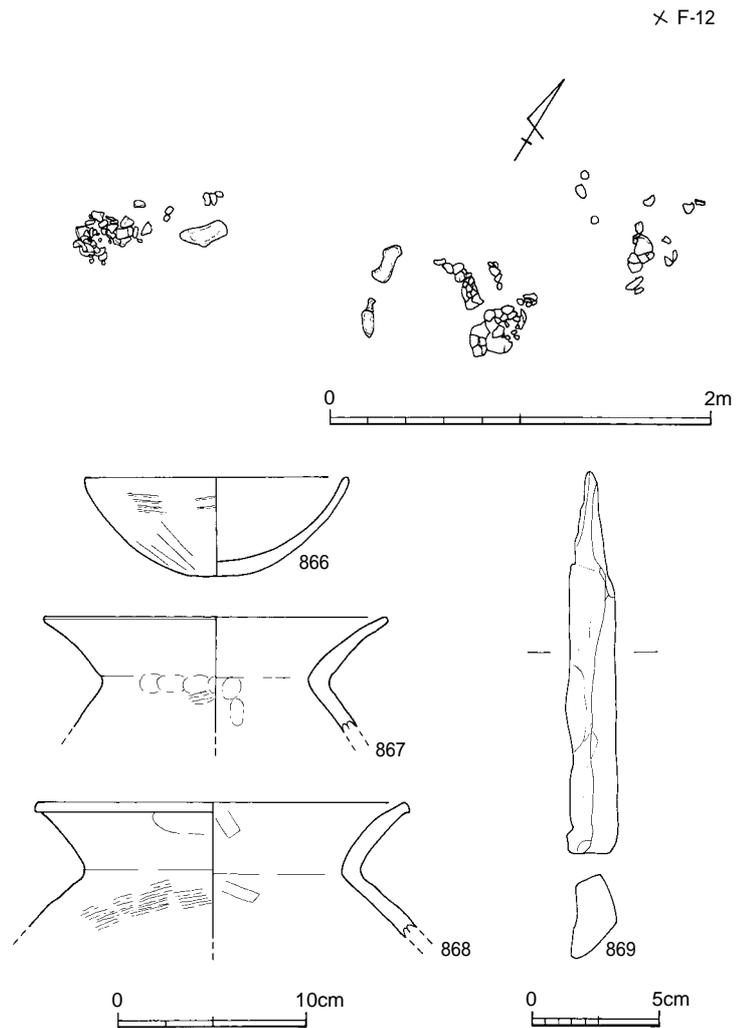


Fig.112 土器集中27遺物出土状況図及び出土遺物実測図

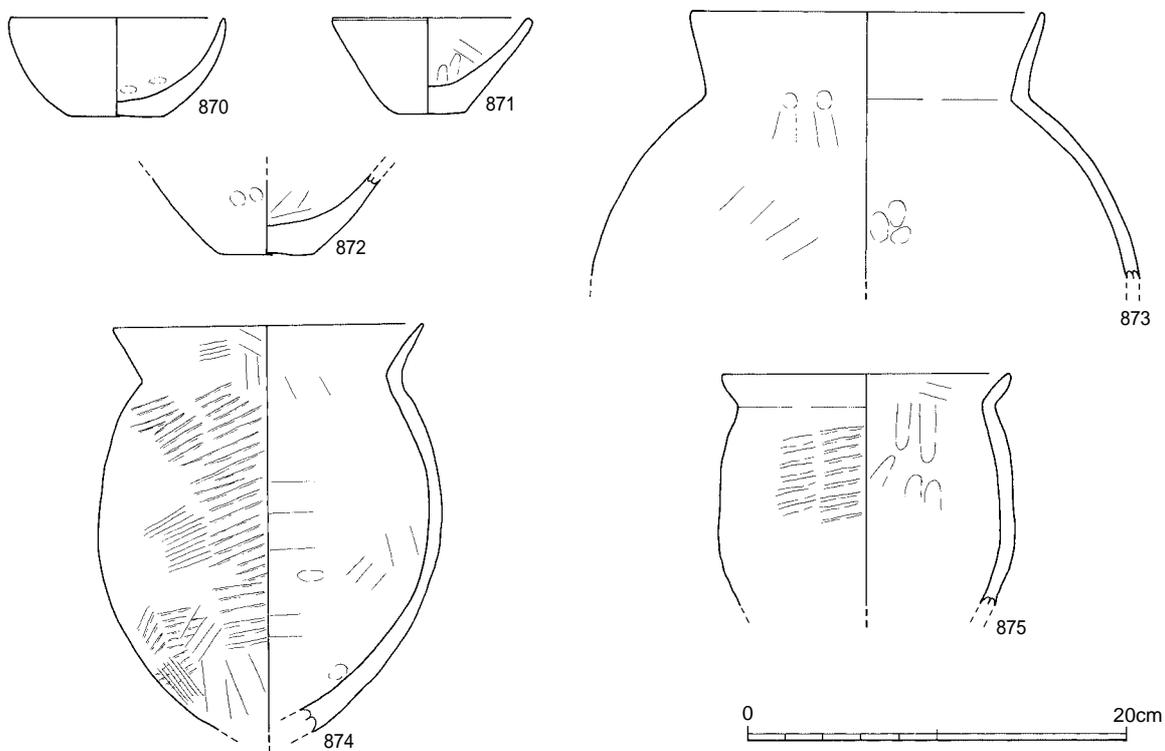
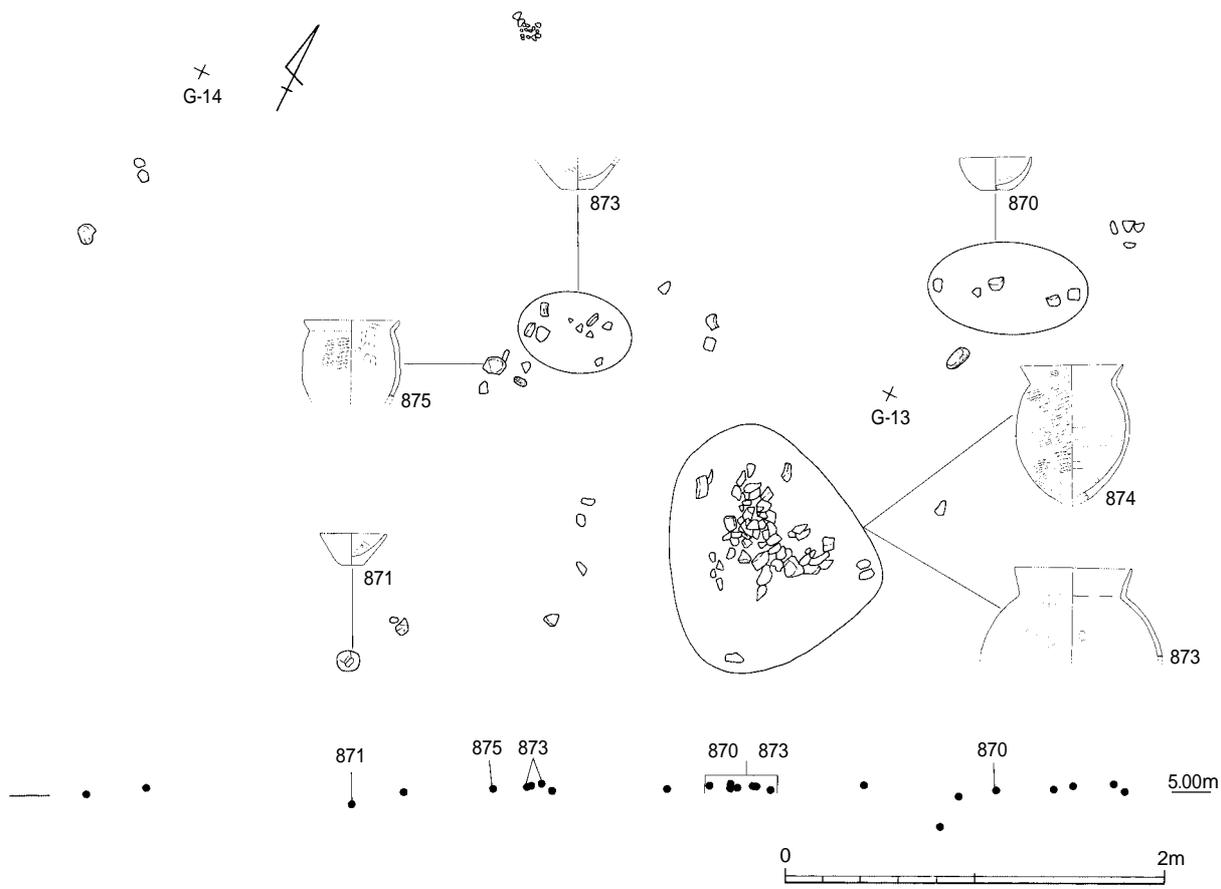


Fig.113 土器集中28遺物出土状況図及び出土遺物実測図

2) 包含層出土遺物(層)

区の祭祀跡は 区のに比べ規模、土器の出土量とも非常に少なく、同様に包含層の出土遺物も少ない。包含層からは須恵器では杯身、甗、壺、埴瓶、土師器では椀、高杯、甕、壺、甑、手捏ね土器が出土している。石製品では有孔石製円板、白玉、叩石が出土しており、白玉の出土量は718点を数え、非常に多い状況にある。 区では2点しか確認されておらず、 区での出土量が圧倒的に多い。ここでは 区から出土している包含層遺物に関して種類・器種ごとに説明を加えていくこととしたい。また個々の遺物の詳細については遺物観察表に記載しているので参照されたい。

須恵器(Fig.116)

杯身(883~890)

883、884は底部は平底気味で、稜部は断面三角形状を呈し上方に伸び、立上がりは内傾してやや長く伸びる。底部外面約1/2には回転ヘラケズリ、内面には回転ナデ調整が施される。885、886は稜部は断面三角形状を呈し、立上がりは直立して上方に伸びる。885は口縁端部は内傾し浅い凹状を呈している。887は稜部は断面三角形を呈し、やや上方に伸びる。立上がりは内傾して伸び、端部は丸くおさめている。888は口径13.2cmを測りやや大振りで、稜部は断面三角形状を呈し、立上がりは内傾し伸びる。889、890は稜部は断面三角形を呈し、厚みをもつ。立上がりは短く内傾する。

埴瓶(891)

891は埴瓶の体部片である。外面にはカキ目文が施される。

甗(893)

底部は丸底で胴部は大きく張り、頸部から口縁部は外上方に伸びる。口縁下には稜部を呈する。外面は磨耗著しいため、波状文等は見られない。胴部には直径1cm大の円孔がなされる。

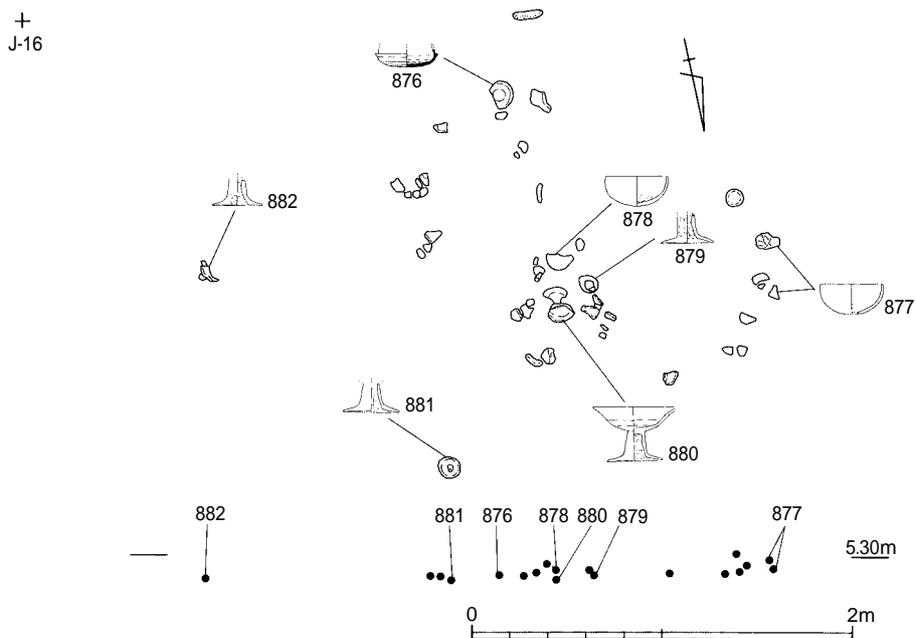


Fig.114 土器集中29遺物出土状況図

壺(892)

口径8.7cm、器高12.4cmを測る小型の壺である。底部は丸底で胴部は大きく張る。頸部から口縁部は直立して短く伸びる。内外面にはヘラケズリとナデが施されている。

土師器 (Fig.117、118、119)

鉢・椀(903～906)

903～905は底部は丸底で口縁部にかけて内湾しながら伸びる形態をもつ。903は外面にタタキ整形痕が残り、底部にはヘラケズリがなされている。906は口径15.7cm、器高が9cmを測る大形の形態をもつ。底部は丸底で、口縁部にかけては内湾しながら伸びる。外面にはタタキ後ヘラケズリとナデ、内面には細かいハケ調整がなされている。

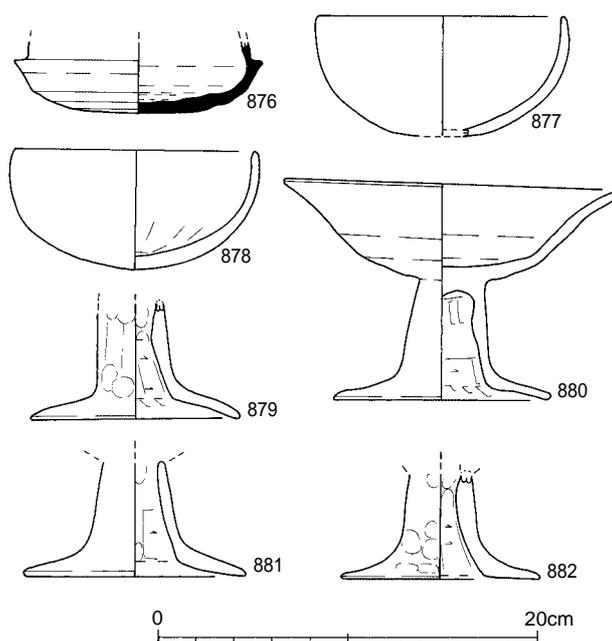


Fig.115 土器集中29出土遺物実測図

高杯(907～914)

高杯は脚部から杯部まで図示できるものではなく、杯部と脚部に分れるものが大半を占める。杯部の形態別では屈曲し口縁部は外上方に伸びる(907)と、杯部は段をもたず口縁部にかけて内湾しながら伸びるもの(908)がみられる。909は脚部が柱状を呈し、裾部は屈曲し外方に広がる。912は裾部まで屈曲せずそのまま伸びる。910、913は裾部は屈曲し広がっている。911は器壁が厚く、裾部の広がりが短い。

壺(915)

915は丸底壺である。底部は丸底で胴部は球形に大きく張り。口縁部は直立して外上方に伸びる。

甕(916～932、934)

土器のなかでは甕の出土量が最も多い。底部から口縁部まで図示できたものが少ないため細かい形態分類はできなかった。917、919は胴部は球形を呈し、頸部から口縁部は屈曲し伸びる。胴径に対し口径が非常に小さい。917は外面にはタタキ整形の後ハケ目調整がなされる。919は外面にはタタキ整形がなされる。916、918～924は胴部は球胴状を呈し、頸部から口縁部は屈曲し外方に伸びる。922の頸部内面には強い指ナデがなされる。923は外面にはタタキ整形痕が残り、内面にはヘラナデ、指ナデがなされる。925は口縁部と胴部はほぼ同径である。底部は丸底で胴部は球胴状を呈し、口縁部が外反している。926は胴部は球胴状を呈し、口縁部は屈曲し短く伸びる。927は底部は丸底で胴部はやや球形を呈し、頸部から口縁部は屈曲し外方に伸びる。928の口縁部と胴部はほぼ同径を測り、胴部は長胴状を呈している。内外面には指頭が顕著に残る。929は底部は扁平な丸底で、胴部は球形状を呈し、口縁部に至る。内外面には細かいハケ調整がなされる。930の口縁部と

胴部はほぼ同径を呈し、口縁部は短く伸びる。外面にはタタキ整形後ハケ調整がなされる。内面には指ナデが顕著である。931は底部は丸底で胴部は球胴状に張る。頸部から口縁部は大きく開く。外面には一部タタキ痕が残る。934の底部は丸底で、胴部と口縁部は同径を呈している。口縁部は外方に開く。内外面にはナデ調整が施される。

甑(933)

底部は丸底で体部から口縁部にかけて外上方に伸びる。内面にはハケ調整がなされる。底部には焼成前の円孔が施されている。

手捏ね土器(Fig.117-894 ~ 902)

手捏ね土器では894 ~ 898の小型のものと、898 ~ 902の大型のものがみられる。894底部丸底で、口縁部にかけて内湾している。895 ~ 897は底部は平底を呈し、口縁部は外上方に伸びている。898は底部は平底で、体部はやや内湾し、口縁部は内側に屈曲して上方に伸びる。899は898より大型のもので、口縁部は粘土帯を貼付し、肥厚させている。900は底部は平底、口縁部にかけては直線的に伸びている。901は底部平底で口縁部は屈曲し、上方に伸びる。

石製品

石製品では有孔石製円板、白玉が出土しており、中でも白玉の出土量が圧倒的に多い。今回図示したものは23点であるが、区のみで718点出土している。

有孔石製円板(Fig.120-936)

一部は欠損しているが、2.1 × 2cmを測り円形状を呈している。中央部には直径2mmの円孔が2箇所

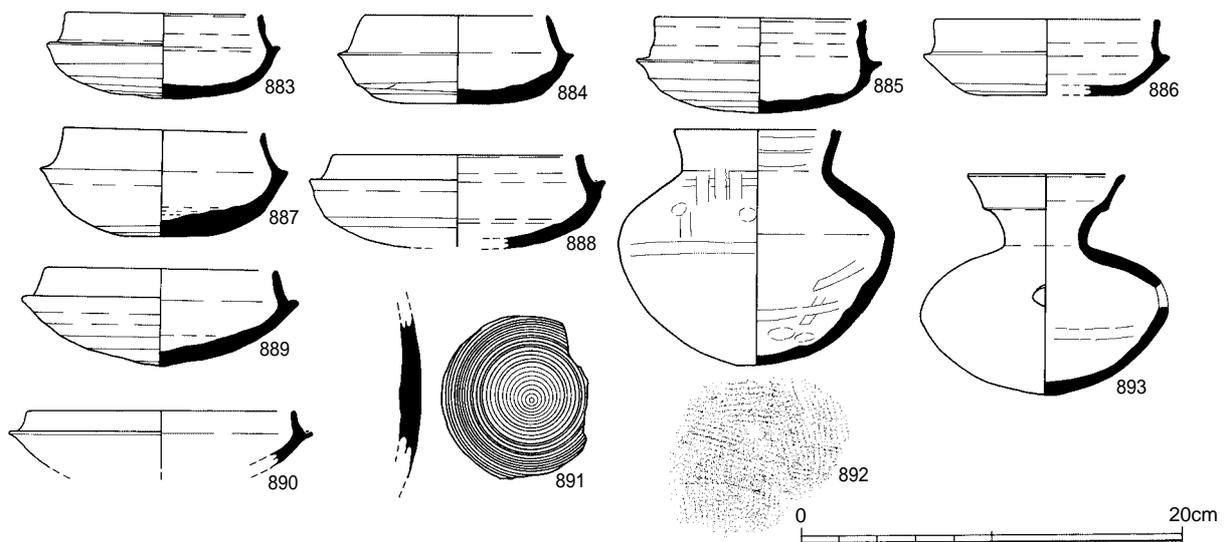


Fig.116 層出土遺物実測図1(区)

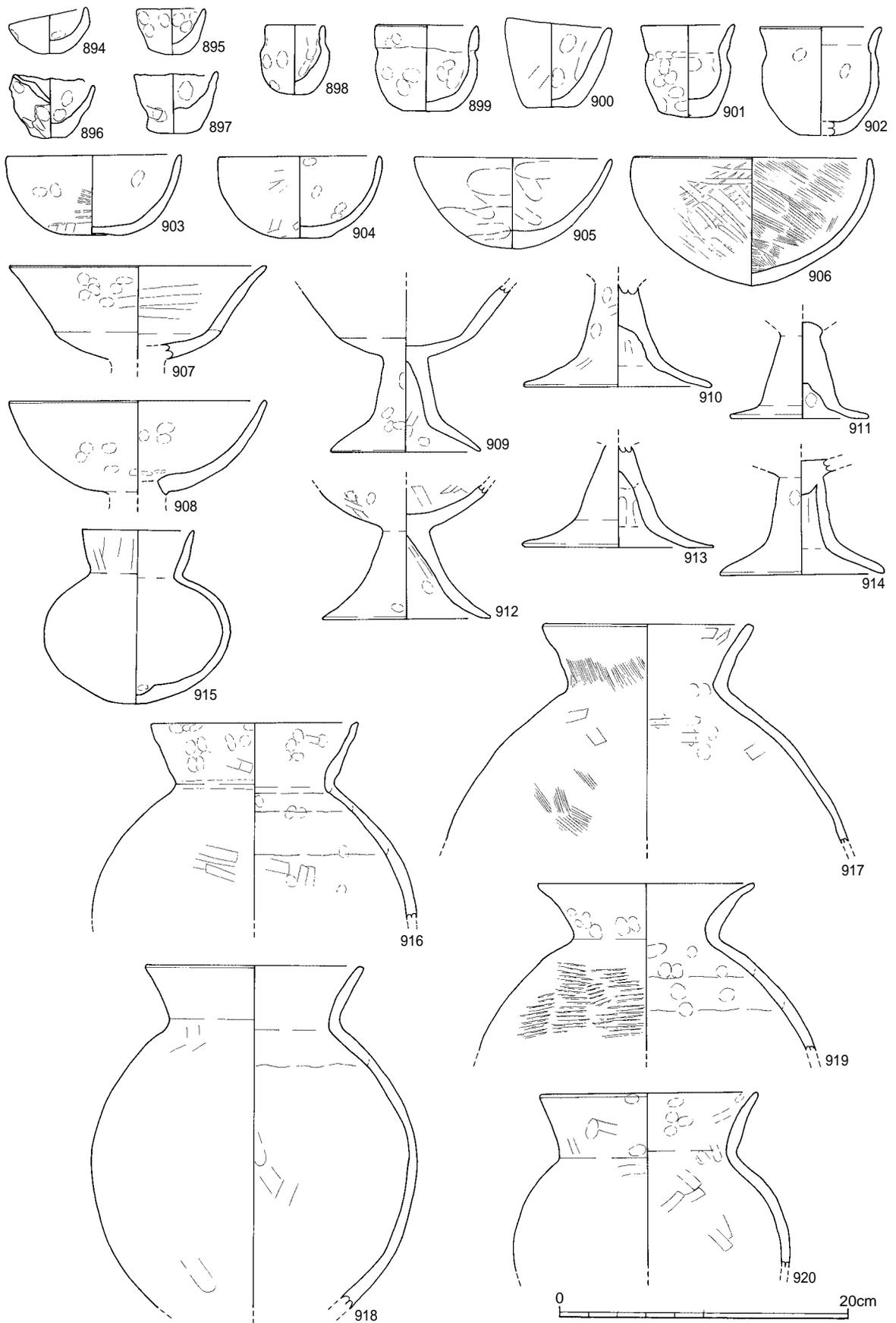


Fig.117 ・ 層出土遺物実測図2(区)

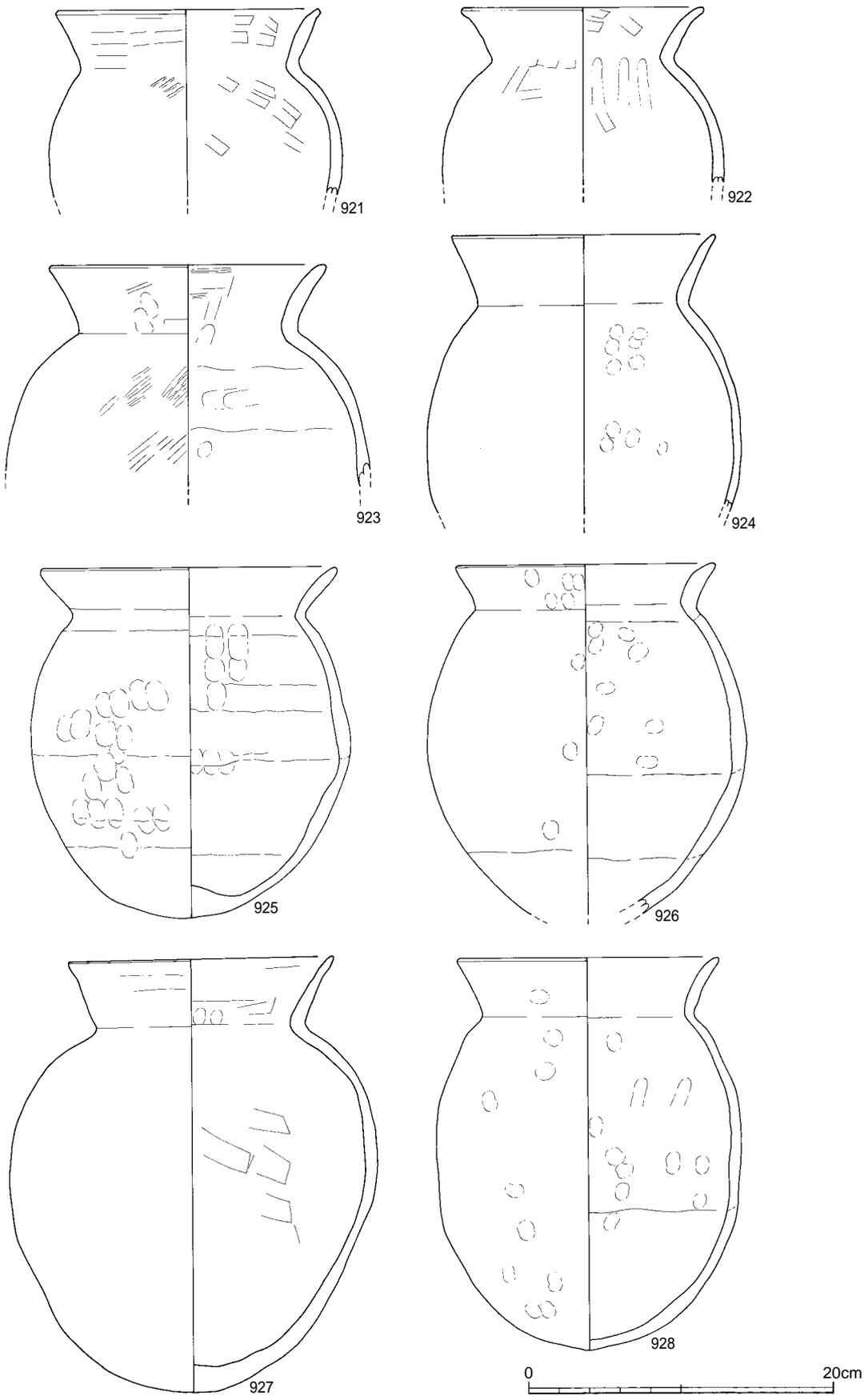


Fig.118 ・ 層出土遺物実測図3(区)

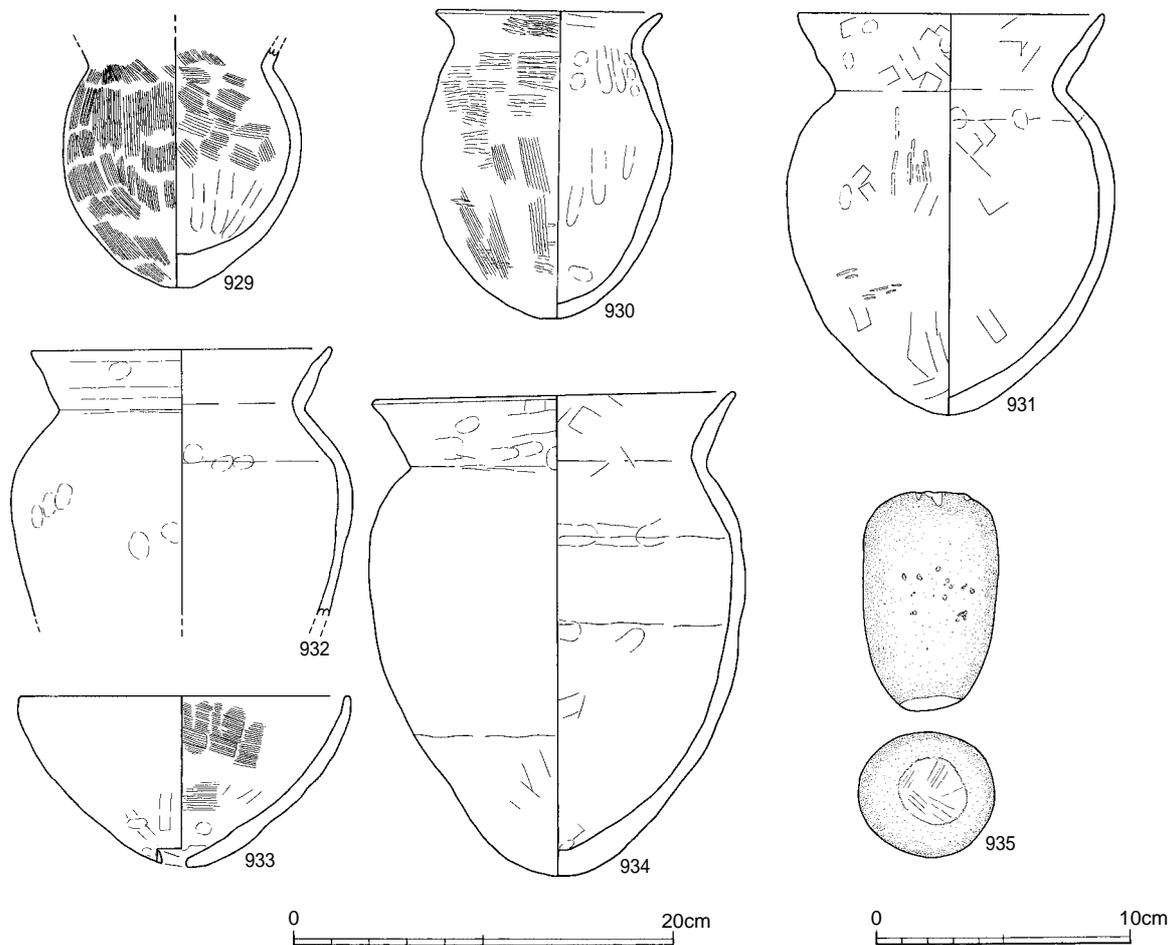


Fig.119 ・ 層出土遺物実測図4(区)

に施されている。

白玉(Fig.102-937 ~ 960)

937 ~ 959は径が5 ~ 6mm、全厚3 ~ 4mm、孔径は約2mmを測る。960は径が7mm、全厚4mm、孔径は2mmを測り、出土した白玉の中では大型である。すべて滑石製である。

石器(Fig.119-935)

楕円形の自然石を利用した叩石である。外面には僅かに敲打痕が認められ、側面にも敲打痕がみられる。

2. 区の調査

区の調査ではあわせて1箇所出土の土器集中と8箇所の祭祀跡(SF)が検出された。区と比べ祭祀跡の分布範囲は広範囲に亘り、遺物の出土量も非常に多い。区の中でも東側は区と同様に祭祀跡の規模はやや狭いが、調査区の西側では祭祀の規模も広範囲に及び、遺物の出土密度も非常に多

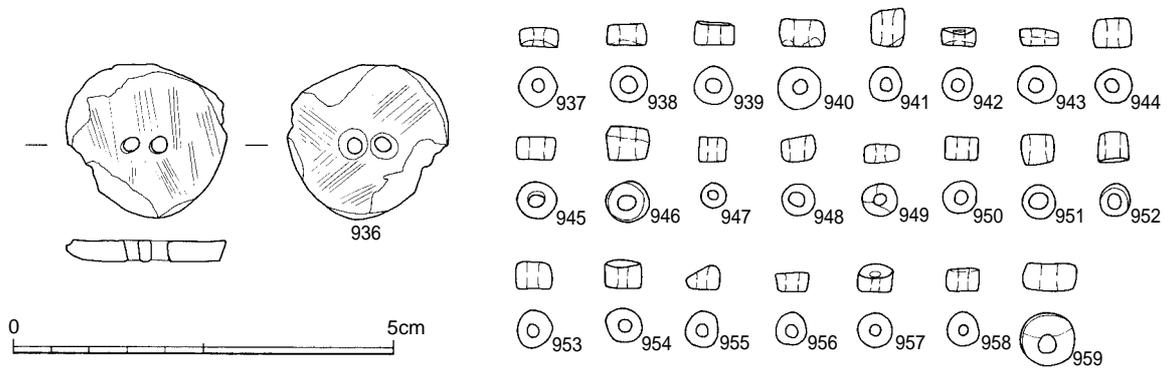


Fig.120 ・ 層出土遺物実測図5(区)

い状況にある。また土層の堆積は 区から 区の西側に向かい包含層の堆積は厚くなっている。

1) 検出遺構

祭祀遺構

SF6

区の北部G-22～23に亘って位置している。層掘削時に平面的に検出した。検出範囲は約5.6×2.5mに及び、SF7の下層において帯状に分布している。区のなかでは狭い集中に入る。集中の北側は調査区外になるため、確認することができなかった。土器の分布状況と出土量を考えるとSF8と同様に調査区外に集中範囲が広がっていると考えられる。検出標高は4.1～4.32mを測る。検出範囲内には全面に遺物が広がっており、集中の北側G-22グリッドより南1.7m地点に86×56cmを測る楕円形状の焼土、H-22の北西2.6mには70×50cmと70×30cmを測る焼土が土器と共に検出された。焼土上からは974、972の甕と962の小型丸底壺が出土している。また炭の集中が2箇所検出されている。集中は土師器甕、高杯、椀、丸底壺で構成されており、968の鉄片が1点出土している。またその中でも甕の出土割合が多い。集中は破片が大半であるが、966の高杯と小型丸底壺がほぼ完形で出土している。

出土遺物(Fig.122)

遺物総点数は748点を数え、集中範囲は狭いが遺物点数は多い。その内土師器甕片が717点、高杯24点、丸底壺4点、手捏ね土器1点、鉄片1点が出土しており、その中でも甕が全体の95%を占め最も多い。壺や高杯の全体量は少ないが、破片点数の為、細部に至るまでは確認できなかったが、出土割合はもう少し多くなると思われる。その内図示できたのは17点である。960は小型丸底壺で、口縁部は外方に直線的に伸びる。底部外面にはタタキ目痕が残り、内面には指押しが顕著である。961と962は小型丸底壺であるが、胴部と口縁部はほぼ同径を呈する。内外面には指頭が顕著である。963は小型の甕で、頸部下に最大径をもち、頸部から口縁部にかけては外方に長く伸びる。外面と

頸部内面には指頭が顕著に残る。964～967、969は高杯である。完形は966のみで、他は杯部か脚部のみ残存している。966は杯部の器高は2.8cmと非常に浅く、口縁部は外方に直線的に広がる。杯部内外面はハケ調整がなされ、内面全体に煤が吸着している。脚部は柱状を呈し、裾部は緩やかに屈曲し広がる。杯部との接合部には強い指頭とナデがみられ、外面にはハケ、内面には指ナデが顕著である。964、965は杯部のみであるが、ほぼ前者と同形を呈している。その内964は外面には縦方向の粗いハケ、内面には横方向のハケ調整がなされる。967、969は脚部のみであるが、969は裾部は屈曲せずそのまま短く伸びる。970は壺の口縁部で、二重口縁をなす。971は口縁部のみであるが、口唇部は平坦面を呈し、内面にはヘラミガキがみられる。972～976は甕である。口縁部のみの残存が多い。972は胴部から口縁部まで残存する布留式土器である。器壁が非常に薄く、胴部が球形を

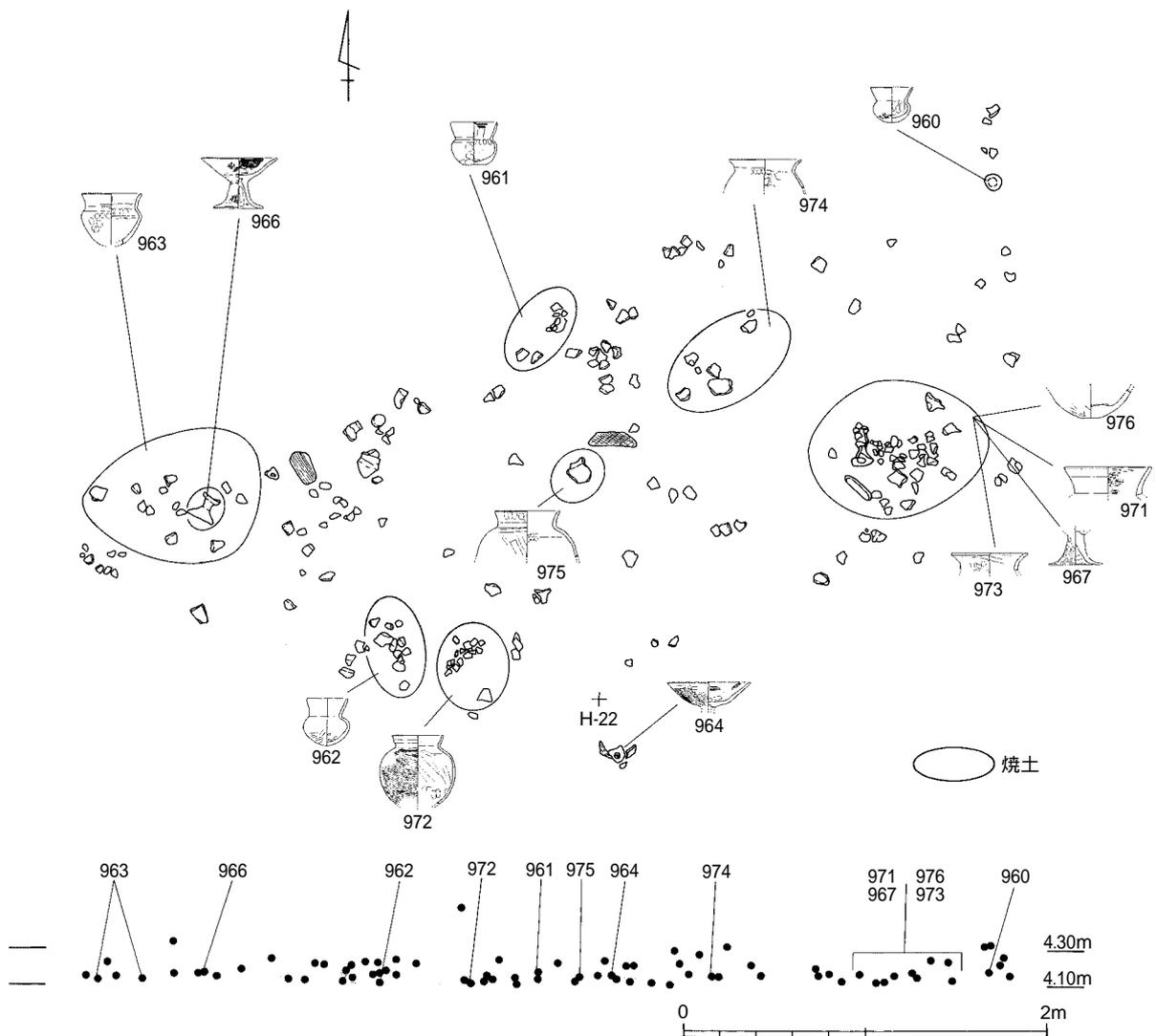


Fig.121 SF6遺物出土状況図

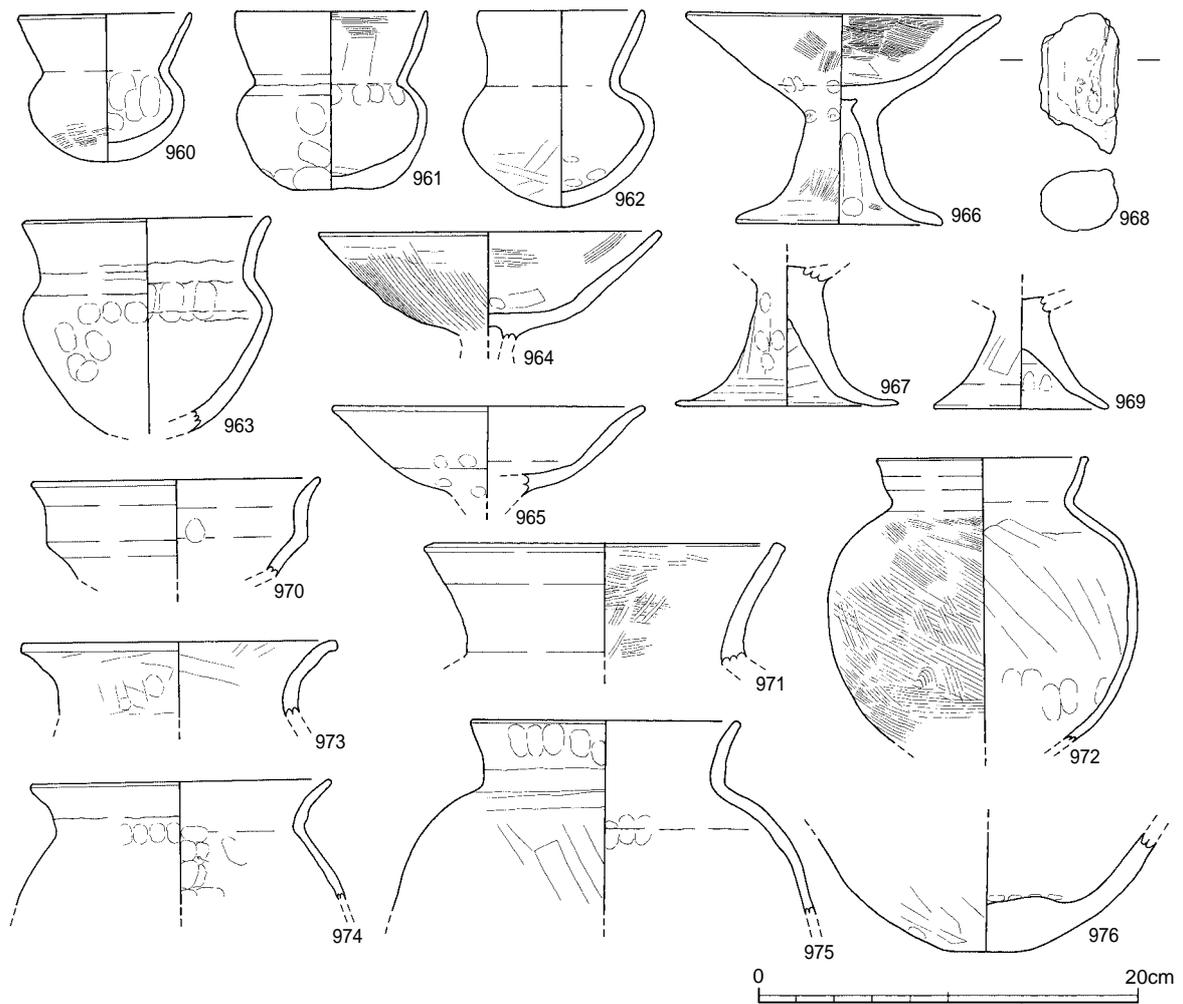


Fig.122 SF6出土遺物実測図

呈し、大きく張る。頸部から口縁部はやや直立気味に上方に伸びる。口唇部は平坦面で強いナデにより、浅い凹状を呈している。外面には斜位方向の細かいハケ調整、内面には強い指ナデが顕著である。外面には煤が吸着している。975は胴部に最大径をもち、口縁部は直立して短く伸びている。集中のなかでは大型の甕である。

SF7

区の北部G-22~23に亘って位置しており、層掘削時に平面的に検出した。検出範囲は約6.8×2.4mに及び、SF9のすぐ下層において帯状に分布している。区のなかでは狭い集中に入る。しかし、集中の北側は調査区外にあたるため確認することができなかったが、土器の分布状況と出土量を考えるとSF3と同様に調査区外に集中範囲がまだ広がっていると考えられる。検出標高は4.3~4.56mを測る。検出範囲内には全面に遺物が広がっており、集中のやや中央寄り、G-22グリッドより南2.6mには30×25cmの焼土が検出された。焼土上からは981の高杯片が出土している。また炭化材と思われる炭の集中が土器と共に検出されている。集中は土師器甕、高杯、椀、壺、砥石で構成されており、その中でも甕の出土が多いが、高杯の割合が次いで多い。集中は破片が大半である



Fig.123 SF7遺物出土状況図

が、978の椀はほぼ完形で出土している。

出土遺物(Fig.124,125)

遺物の総点数は471点を数える。その内土師器甕片431点、高杯33点、壺2点、椀4点、砥石1点が出土しており、その内甕の出土量が全体の約91%、次いで高杯が7%を占めている。甕の出土量が最も多く椀や壺の全体量は少ないが、破片点数のため細部に至るまでは確認できなかった。出土割合はもう少し多くなると思われる。出土遺物の内図示できたものは25点である。977~979は椀である。977は器高はやや浅く、口縁部は内湾する。内外面にはヘラケズリとナデがみられる。978は977に比べ器高が深く、口縁部は内湾する。979も器高が深く、口縁部にかけては直線的に伸びる。外面には縦方向の粗いハケが施される。980~987は高杯である。杯部から脚部にかけて残存するものは2点のみで、後は分離している。980は脚部は短く柱状を呈し、裾部は屈曲し外方に広がる。981は982と985の杯部に比べ小振りの高杯である。口縁部は外方に直線的に伸び、脚部は柱状を呈し、裾部は緩やかに屈曲する。982は杯部のみであるが、口縁部は外方に大きく開く。端部はやや外反している。983、986、987は脚部であるが、形態は柱状を呈し裾部は屈曲し外方に伸びる。987の裾部は他と比べ短く伸びる。985は杯口縁部が16.5cm、器高6.4cmを測る高杯で、口唇部は平坦面をなす。脚部は短い柱状を呈し、裾部は内傾して伸びる。杯部内面にはハケ状のナデ、脚部内面にはナデ調整が施される。988は底部は丸底で胴部は球胴を呈し、頸部から口縁部にかけて屈曲し伸びる壺である。989は断面方形形状の砥石片で焼土の上面から出土している。990は底部は丸底で、胴部が球胴状に大きく張る丸底壺である。底部外面には一部タタキ痕が残り、内面にはヘラ状工具による

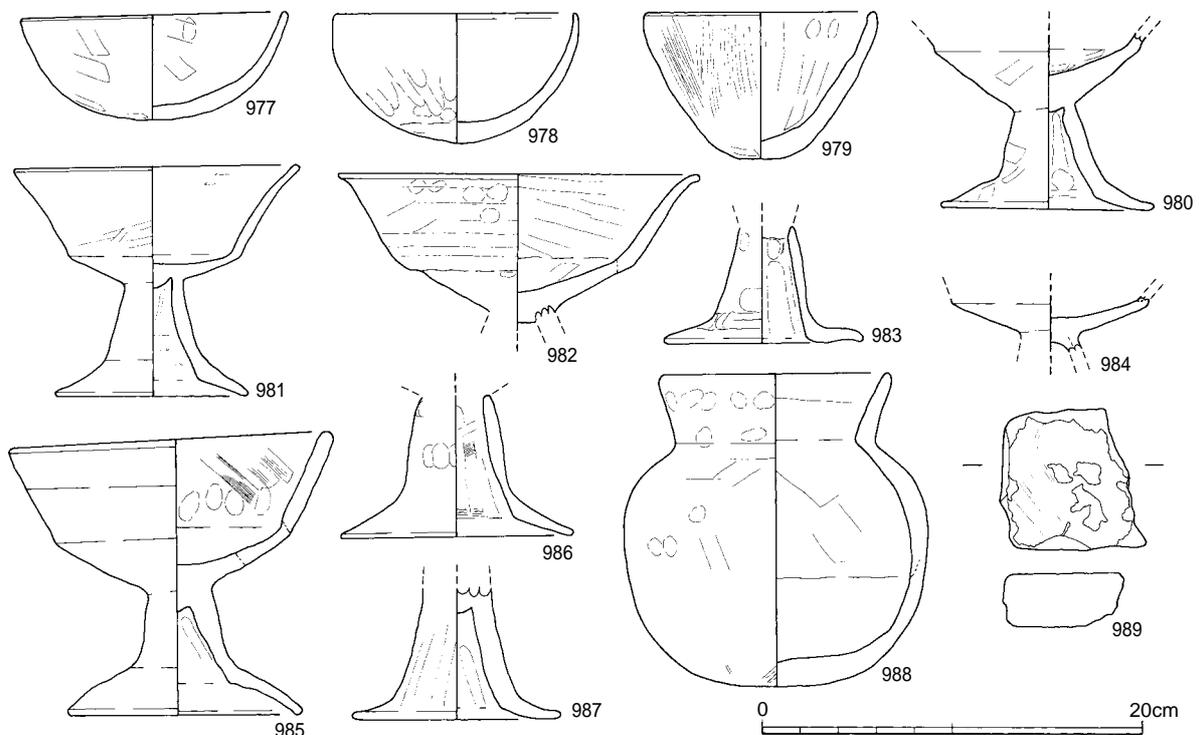


Fig.124 SF7出土遺物実測図1

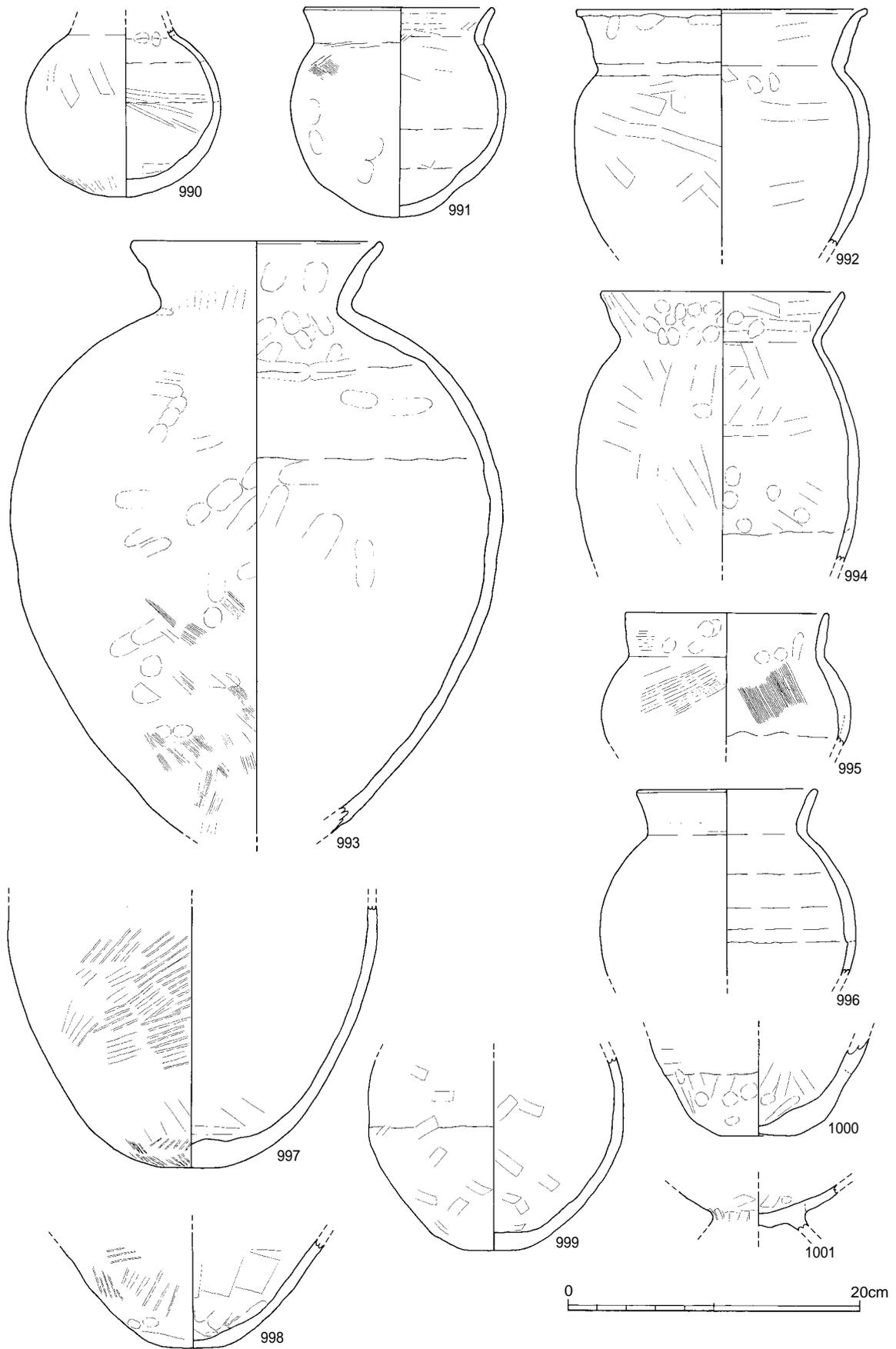


Fig.125 SF7出土遺物実測図2

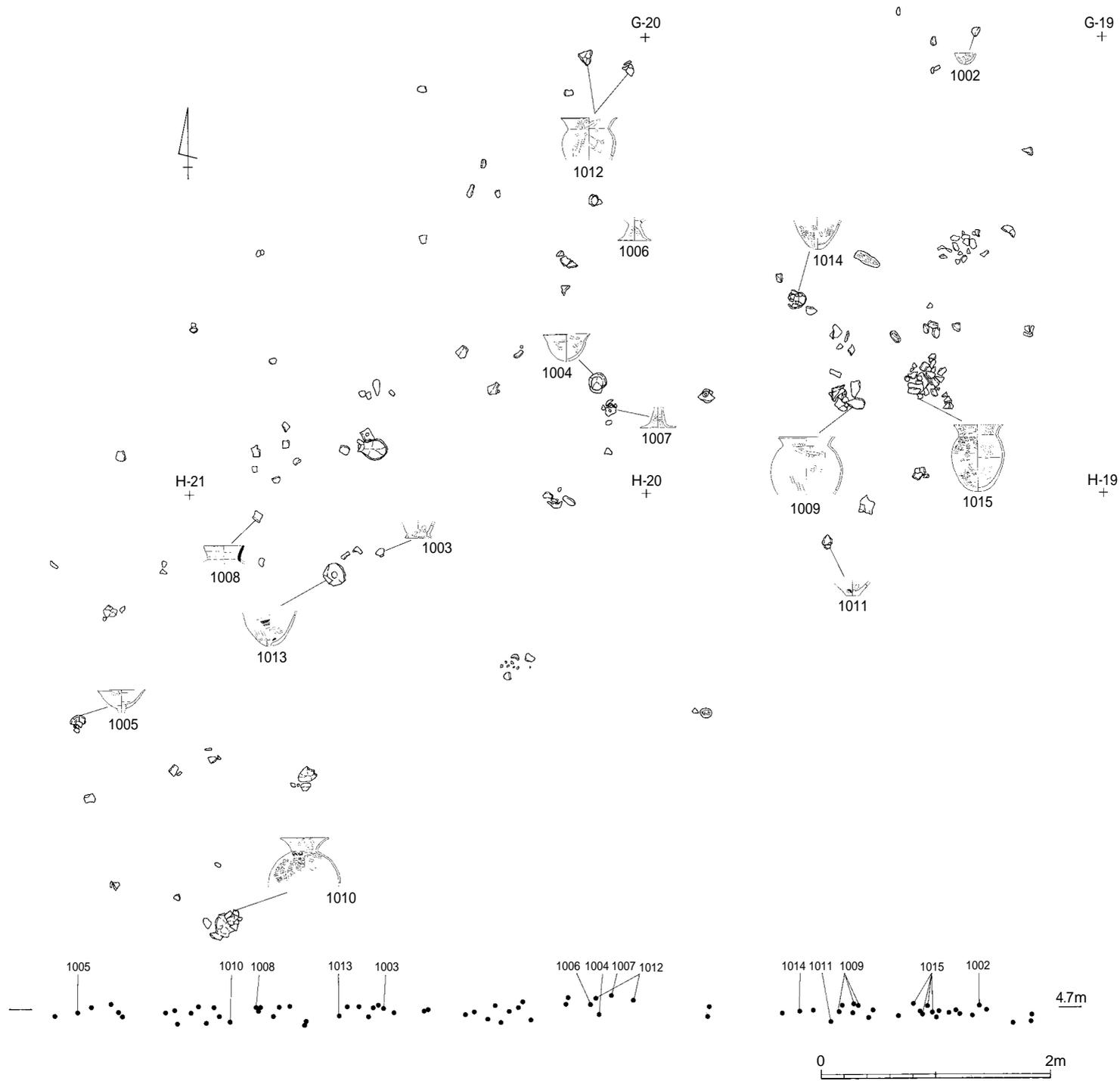


Fig.126 SF8遺物出土狀況図

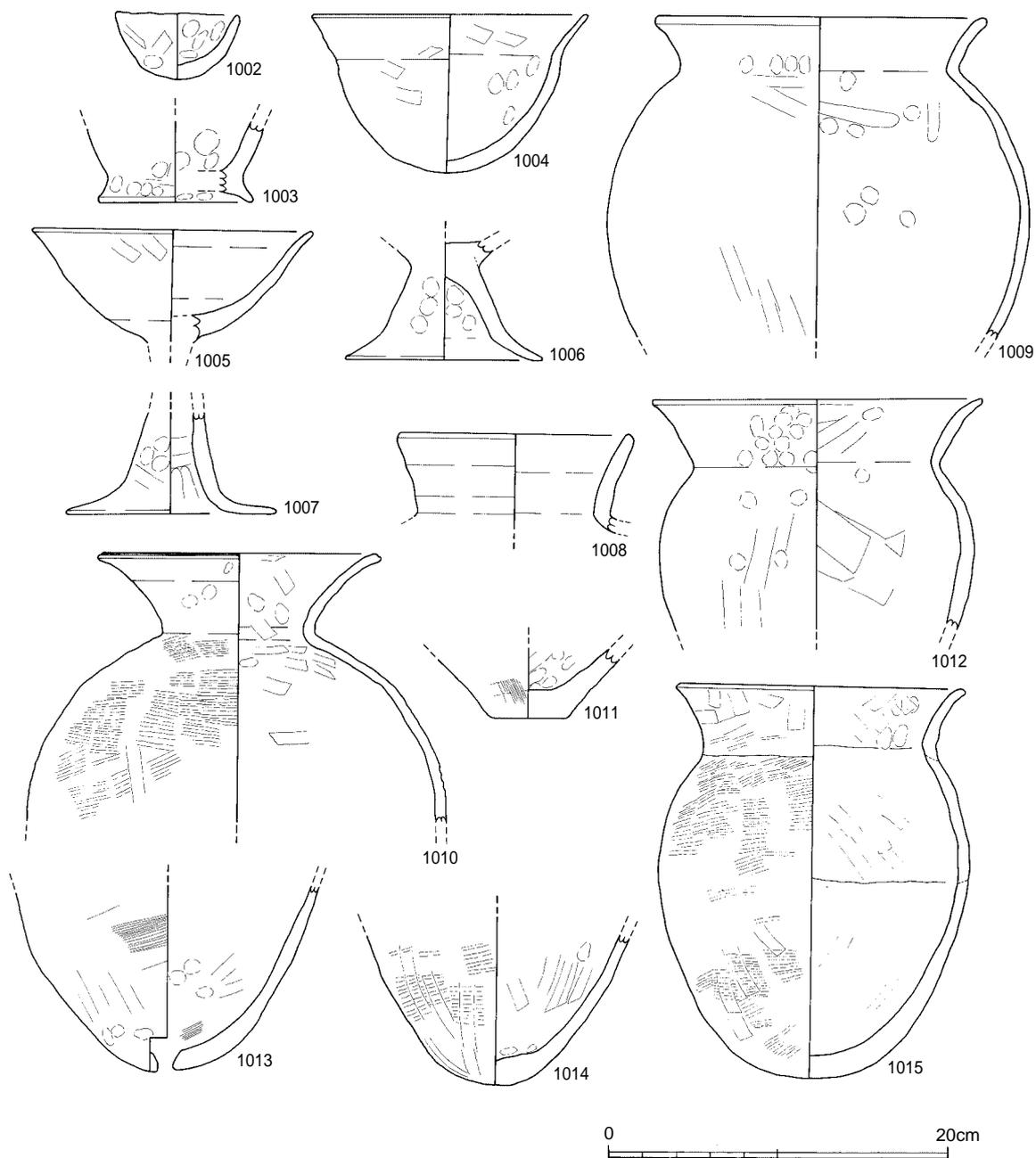


Fig.127 SF8出土遺物実測図

深いケズリ痕が巡る。991は小型の甕で、底部は扁平な丸底で胴部は球形を呈し、頸部から口縁部にかけて外方に短く伸びる。口縁部内外面にはヘラ状工具痕が残る。外面には指頭が顕著に残る。992～1000は甕で9点が図示できた。992、994は口縁部と胴部がほぼ同径を呈する。992は口縁端部は指押しにより外反させている。994は口縁部外面指頭が顕著で、内面にはヘラケズリとナデがなされる。995は胴部は膨らみ、口縁部は直立している。外面には斜位のタタキ目、内面にはハケ調整がなされる。外面は煤けている。997～1000は底部から胴部にかけて残存している。997、998の底部は丸底を呈し、共に外面にはタタキ整形痕、内面にはヘラケズリがなされる。1000は扁平な丸

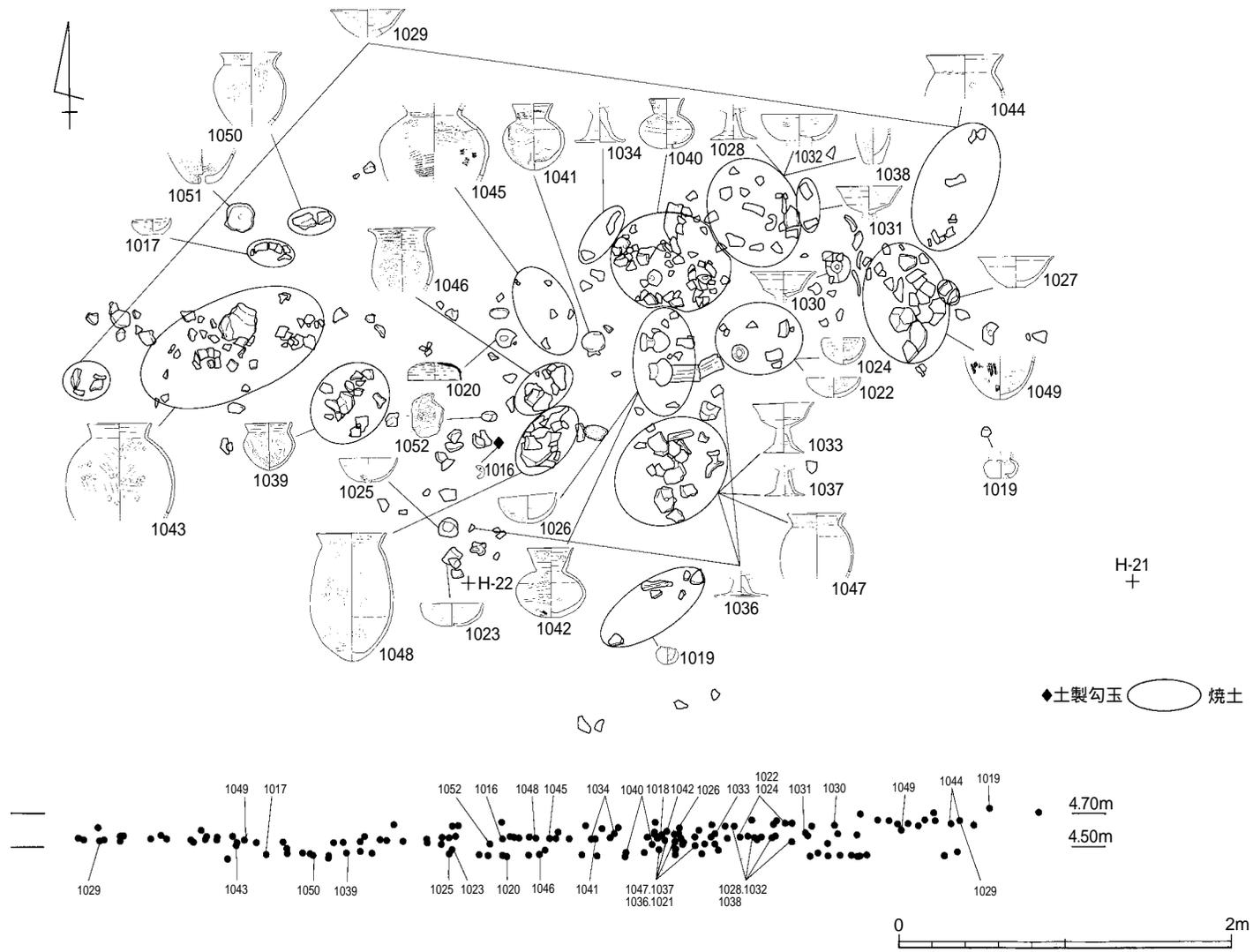


Fig.128 SF9遺物出土状況図

底で内外面にはヘラケズリとナデがなされる。993は器高が41cmを測る大型の壺である。胴部が大きく張り、頸部から口縁部にかけては屈曲して外方に伸びる。外面には指頭が顕著で、下半にはハケ調整がなされる。1001は台付きの鉢と考えられる。台接合部は縦方向の細かいヘラケズリが残る。SF8

区の北部G-20・21～H-20・21にかけて位置している。層掘削時に平面的に検出した。SF7の南東部に隣接している。検出範囲は約9.7×5.2mに及び、東西方向に帯状に分布している。分布範囲のなかではG-20を中心とする集中の小ブロックがみられ、その周辺に土器が点在している。

区の中では広い集中に入り、検出標高は4.5～4.7mを測る。集中は甕、高杯、椀、壺、甌で構成されており、中でも甕の出土点数が多い。また、出土状況は破片が大半であるが、1015の甕が完形で出土している。

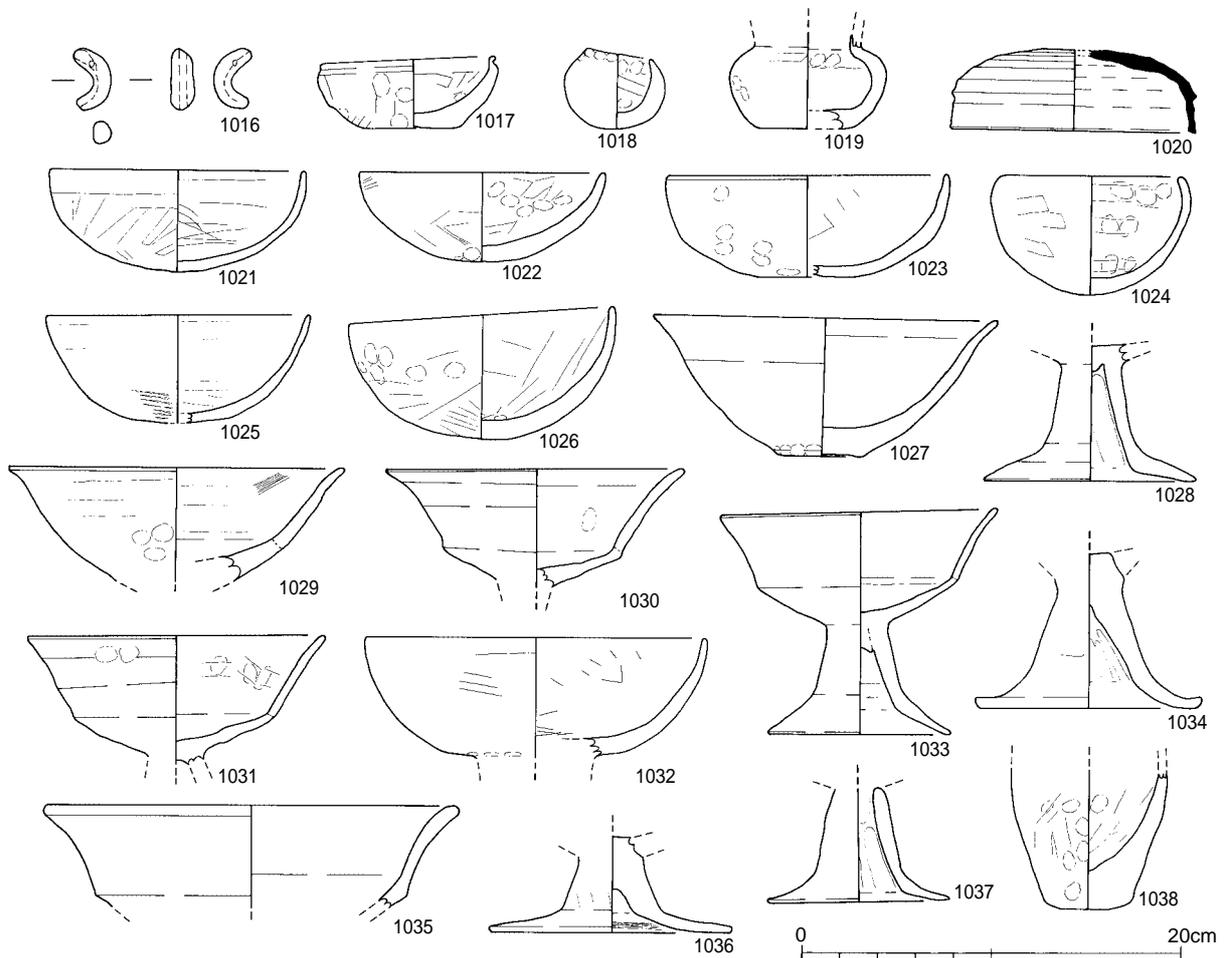


Fig.129 SF9出土遺物実測図1

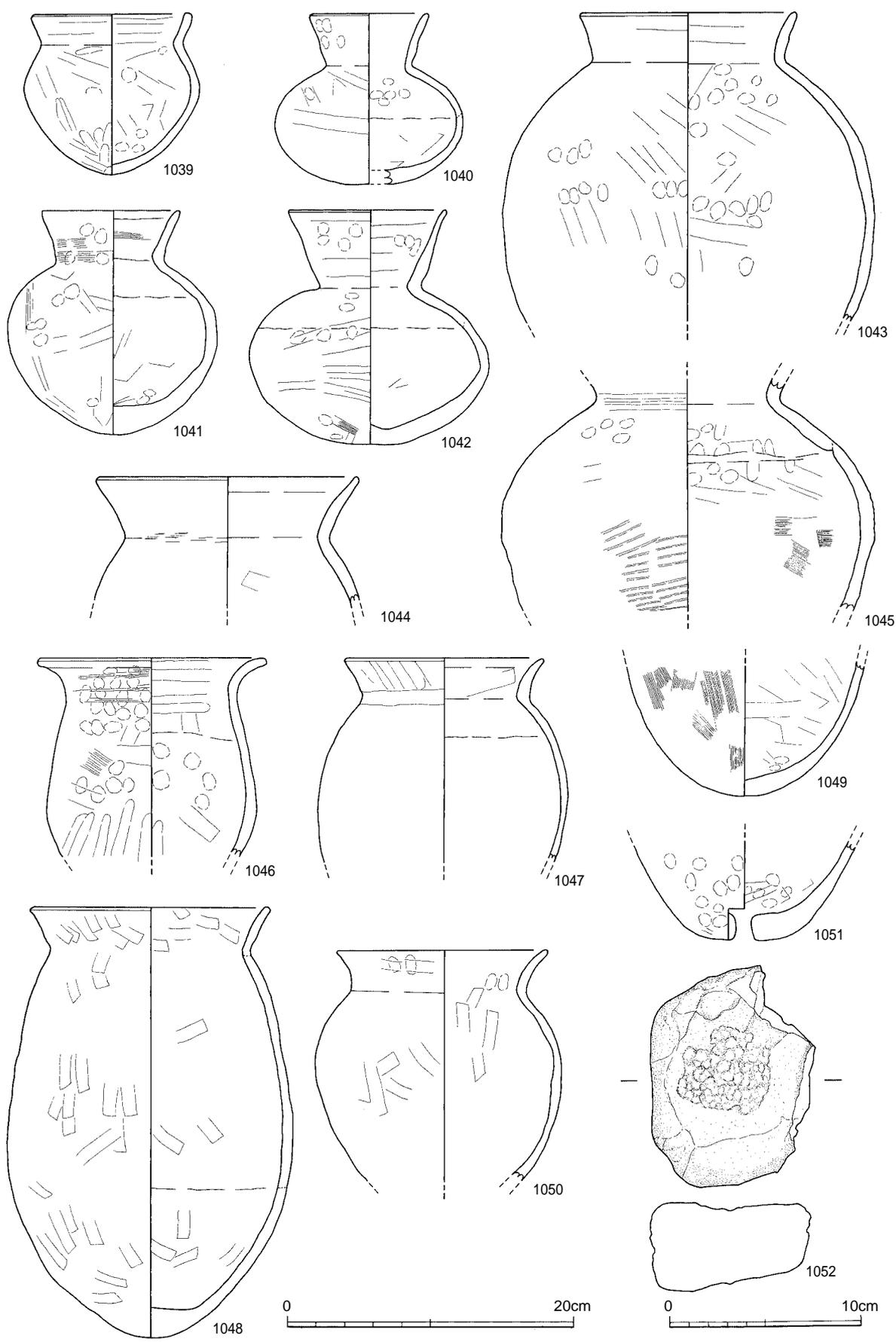


Fig.130 SF9出土遺物実測図2

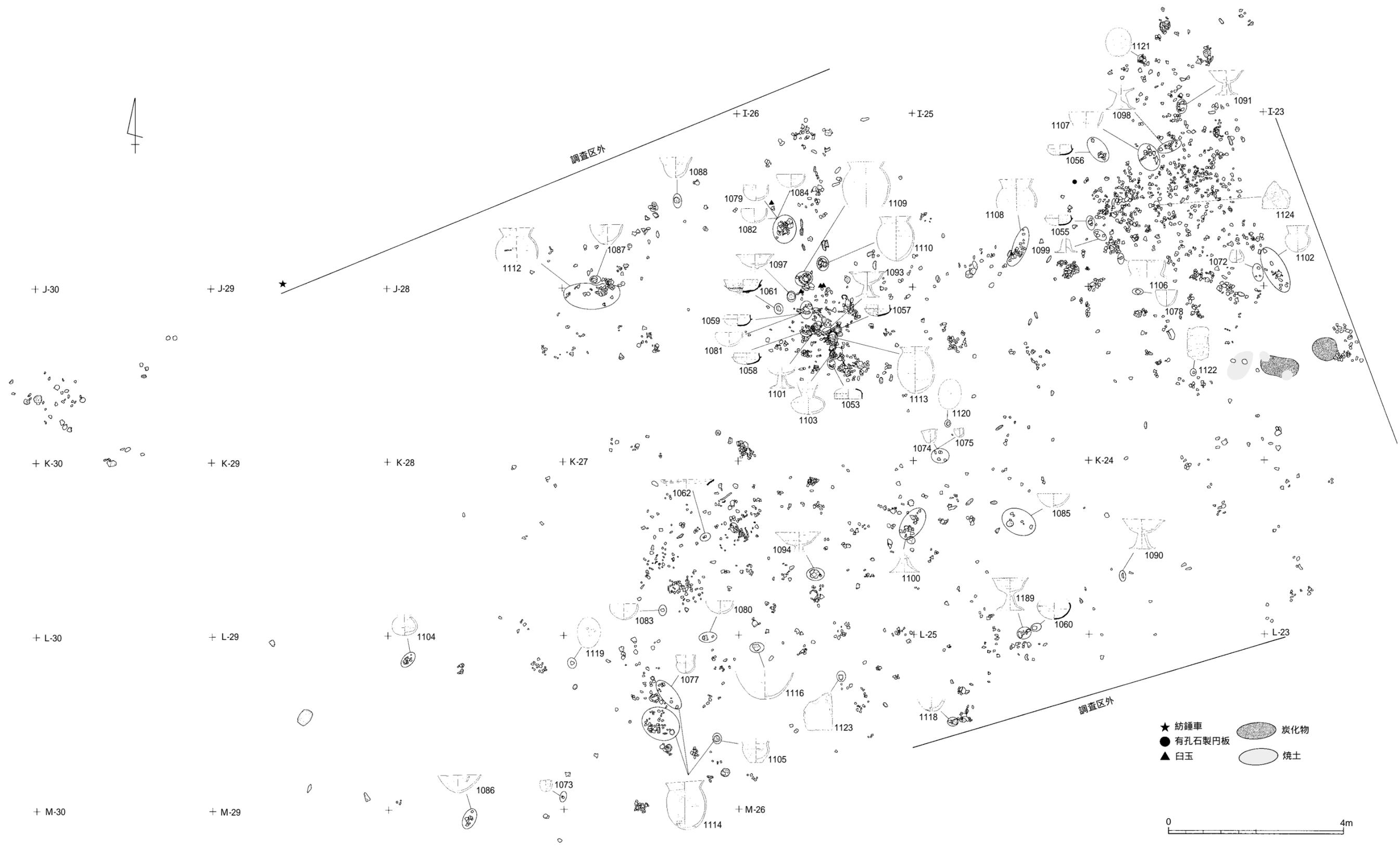


Fig.131 SF10遺物出土状況図

出土遺物(Fig.127)

遺物総点数は222点を数え、その内甕1点、手捏ね土器1点が出土している。中でも甕の点数が全体の97%を占め、最も多い。出土土器の内図示できたものは14点である。1002は手捏ね土器でほぼ完形である。1003は底部に断面三角形の短い脚が付き、内底部と外面には指頭が顕著に残る。1004はやや大振りの椀で底部から体部は内湾し、口縁部にかけては外反しながら伸びる。内外面にはヘラナデがみられる。1005～1007は高杯で1005の杯部は椀状を呈す。1007の脚部は柱状を呈し、裾部は強く屈曲し広がる。全体に小振りである。1006は裾部は緩やかに屈曲し短く伸びる。裾部の広がり狭い。1009、1011、1012、1014、1015は甕である。1009は胴部に最大径を持ち、球胴状に大きく広がる。頸部から口縁部にかけては屈曲し短く伸びる。1012と1015は口縁部と胴部がほぼ同径の甕で、頸部から口縁部は屈曲し外方に伸びる。1015は底部は丸底で胴部が長胴状を呈している。外面にはタタキ整形後ヘラ状のナデがみられる。1010は胴部は球胴状に大きく膨らみ、頸部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲し大きく開く壺である。外面にはタタキ整形後ヘラ状のナデがみられる。1008は直立する口縁部を呈する壺である。1013は甕で、集中からは1点のみの出土である。底部中央には直径1cmの焼成前の円孔を施す。

SF9

区の北部G-21・22～H-22に亘って位置している。層掘削時に平面的に検出した。SF6の北西部に近接している。検出範囲は約6×3.2mに及び、東西方向に帯状に分布しており、区の中なかでは狭い集中である。しかし、集中の北側は調査区外にあたるため確認することができなかったが、分布状況と土器の出土量を考えると調査区外に集中範囲がまだ広がっていると考えられる。検出標高は4.44～4.72mを測る。検出範囲内全面に遺物が広がっており、北部には焼土がみられるが、一部分しか残存していなかった。G-21では炭化材と思われるものが、土器とともに検出されている。集中は土師器甕、高杯、椀、壺、甕、須恵器、手捏ね土器、砥石で構成されているが、その中で、土製勾玉が1点出土している。また甕の出土点数が多いが、次いで高杯、椀も多くみられる。この集中の約20cm下層にはほぼ同範囲内にSF7が検出されており、またその下層からはSF6がほぼ同範囲内に検出されていることから、この場所で何回かに亘って祭祀行為が行われていたようである。

出土遺物(Fig.129、130)

遺物総点数は1050点を数え、集中範囲は狭いが遺物の点数は多い。その内土師器甕片が885点、高杯151点、椀7点、壺3点、甕1点、須恵器1点、手捏ね土器3点、土製勾玉1点、叩石1点が出土しており、甕が全体の約84%を占め最も多い。次いで高杯が14%と多い出土量である。椀も実際より点数は多いと思われるが、細片のため細部に亘る確認はできなかった。その内図示できたのは砥石も合わせると37点である。1016は土製勾玉で1点のみ出土している。全長は約3cmを測り、直径3mmの円孔が穿たれる。1017～1019は手捏ね土器で、各々は集中内で離れた位置から出土している。1017は椀形を呈し、口縁端部は外方に摘み出している。1019は破片であるが、壺型を呈すると思われる。1020は須恵器杯蓋で、集中の中心近くで1点のみ出土している。天井部はやや平坦で、稜部は断面三角形を呈する。口縁部は内傾している。天井部外面には約1/2に回転ヘラケズリがみられる。1021

~1027は椀である。1024は器高が深く、口縁部が内湾する。1048~1046はやや器高が浅く、体部から口縁部にかけて内湾する。内外面はナデ調整。1025と1026は器高が深く、1025は底部にタタキ痕が残る。1026は内外面にはヘラケズリとナデがみられる。1027は底部は平底で、体部から口縁部にかけて直線的に伸び、端部は外反する。1028~1037は高杯で10点が図示できた。杯部から脚部まで残存するものは1点のみで、後は分離したものが多い。1029は杯部は椀型で、口縁部は外反する。1030、1031、1033は杯底部間に段を呈し、口縁部は上方に直線的に伸びる。1033は脚部は柱状で、裾部は緩やかに屈曲し広がり、杯部は内湾する椀型を呈している。1035は口縁部が外方に広がる大型の高杯である。1028は細い柱状で裾部は強く屈曲し、広がる。1034は裾口縁部のみ外反し、内面には強い指ナデがみられる。1036の脚部は非常に短く、裾部は屈曲して外方に大きく広がる。1039は小型の甕である。底部は丸底で胴部は球胴状に張る。口唇部は平坦面を呈す。内外面にはヘラナデと指頭が顕著である。1040~1042は直口壺である。胴部は球胴状に大きく張り、内外面にはヘラケズリとナデ調整がされる。1041は口縁部が外方に短く伸びる。1043~1050は甕で、1043は胴部に最大径を持つ甕で、球形状に大きく張る。口縁部は上方に短く伸び、胴部に対し口縁部が小さい。内外面にはヘラナデと指頭がなされる。1045も胴部に最大径をもつ甕である。外面はタタキ整形痕が残り、頸部内面にはヘラケズリ、下半にはハケ調整がみられる。1046は胴部は長胴を呈す甕で、口縁部は外方へ強く屈曲する。内外面には指頭及び指ナデが顕著である。1048も同じく胴部が長胴状に長く伸び、頸部から口縁部にかけては外反し短く伸びる。内外面にはヘラケズリがなされる。1047と1050は胴部は球形を呈し、頸部から口縁部は外方に屈曲している。内外面にはナデ調整がなされる。1051は甕である。底部は扁平は丸底で、中央には焼成前に直径1.5cmを測る円孔が穿たれている。1052は断面方形を呈する叩石で、集中の中心近くから出土している。1面のみには敲打痕がみられる。

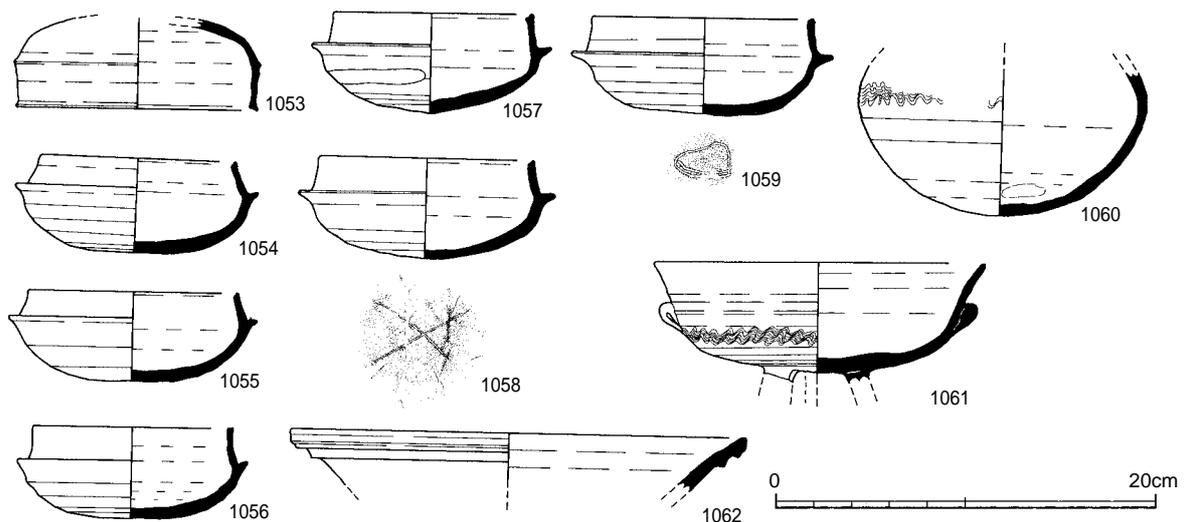


Fig.132 SF10出土遺物実測図1

SF10

区の中央部H-29・I-23～27、J-23～27、K-23～27、L-25～27の19グリットに亘って位置している。層掘削時に平面的に検出した。検出範囲は20×14mに及び、非常に広範囲に亘り遺物が分布している。調査区の中では最も大きいSFである。検出標高4.5～4.62mを測る。区の南突出部において検出した。検出範囲内には全面に遺物の広がりがみられるが、その中でも遺物の分布はI-24、J-23・24を中心とするブロックとJ-26を中心とするブロックがみられるが、その他に遺物は全面に分布しており、グループ状に分けることは難しい。J-23から南東2mには直径約40cmの円形を呈する炭化物集中が位置しており、その集中から西50cmには90×40cmの炭化物集中がみられる。その西側には40×60cmの焼土が検出された。炭化物集中、焼土上には土器の破片が出土している。I-24、J-23・24を中心とするブロックとH-29を中心とするブロックでは遺物の破片が主に集中しており、少し離れた地点からは1064の有孔石製円板と1022、1000の手捏ね土器が出土している。J-26を中心とするブロックでは1057、1058の須恵器杯身と1061の高杯がまとめて出土している。集中は土師器甕、壺、丸底壺、高杯、椀、須恵器、手捏ね土器、石製品で構成されており、他のSFと比べると石製品の出土点数が多く集中から少し離れたH-29からは1063の石製紡錘車が1点出土している。集中の大部分は破片が重なりあったもので、西突SFのように完形のまま出土しているものは少ない。

出土遺物(Fig.132～135)

遺物総点数は8055点を数える。その内、土師器甕片が7804点、高杯203点、が出土している。出土遺物の中では土師器甕が全体の97%を占め最も多く、次いで高杯の割合が高い。それらの遺物のなかで図示できたのは土師器甕が12点、高杯13点、椀10点、壺4点、須恵器10点、石製品14点、手捏ね土器7点である。1053は杯蓋で、断面三角形の短い稜をなし、口縁部は内傾している。端部は浅い凹状をなしている。1054～1059は杯身で、1054、1055は受部は断面三角形を呈し、上方に短く伸びる。立ち上がりは内傾して伸び、端部も内傾する。外面約2/3には回転ヘラ削りがなされる。1056は受部は斜め上方に伸び、立ち上がりは上方に長く伸びる。端部は平坦面をなしている。1057～1059は受部は横方向に伸び、立ち上がりはやや内傾気味に伸びる。1057、1058は端部は浅い凹状をなし、1059の端部は平坦面をなしている。また1058、1059の底部外面にはヘラ状記号がみられる。1060は甕の底部から胴部である。胴部には波状文(7本)が巡る。1061は高杯である。脚部は途中より欠損しているが、3箇所透かし窓がみられる。杯部には2重の凸帯と波状文(6本)が巡っている。また両側には耳状の摘みが貼付されている。1062は甕の口縁部である。口縁下には凸帯が巡る。1078～1085の椀は底部丸底で口縁部にかけて内湾する形態をもつ。1079は口縁部のみ外反させている。1087は器高6.3cmを測り、平底を呈する。口縁部にかけて直線的に伸びる。1088は体部は内湾して伸び屈曲し、口縁部は外方に伸びる。1086は底部から外上方に伸び、端部は平坦面を呈している。内外面ともハケ調整がなされる。1089～1101は高杯で1232～1097の杯部は段をなし、口縁部にかけて大きく開いている。1090、1093の端部はやや外反している。脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し外方に伸びるものが多いが、1089のように裾部が内傾しているものもみられる。1098は脚部が太く裾部は緩やかに伸びる。1100のように脚部と裾部が明確でないものもみられる。1102、1104は丸底壺

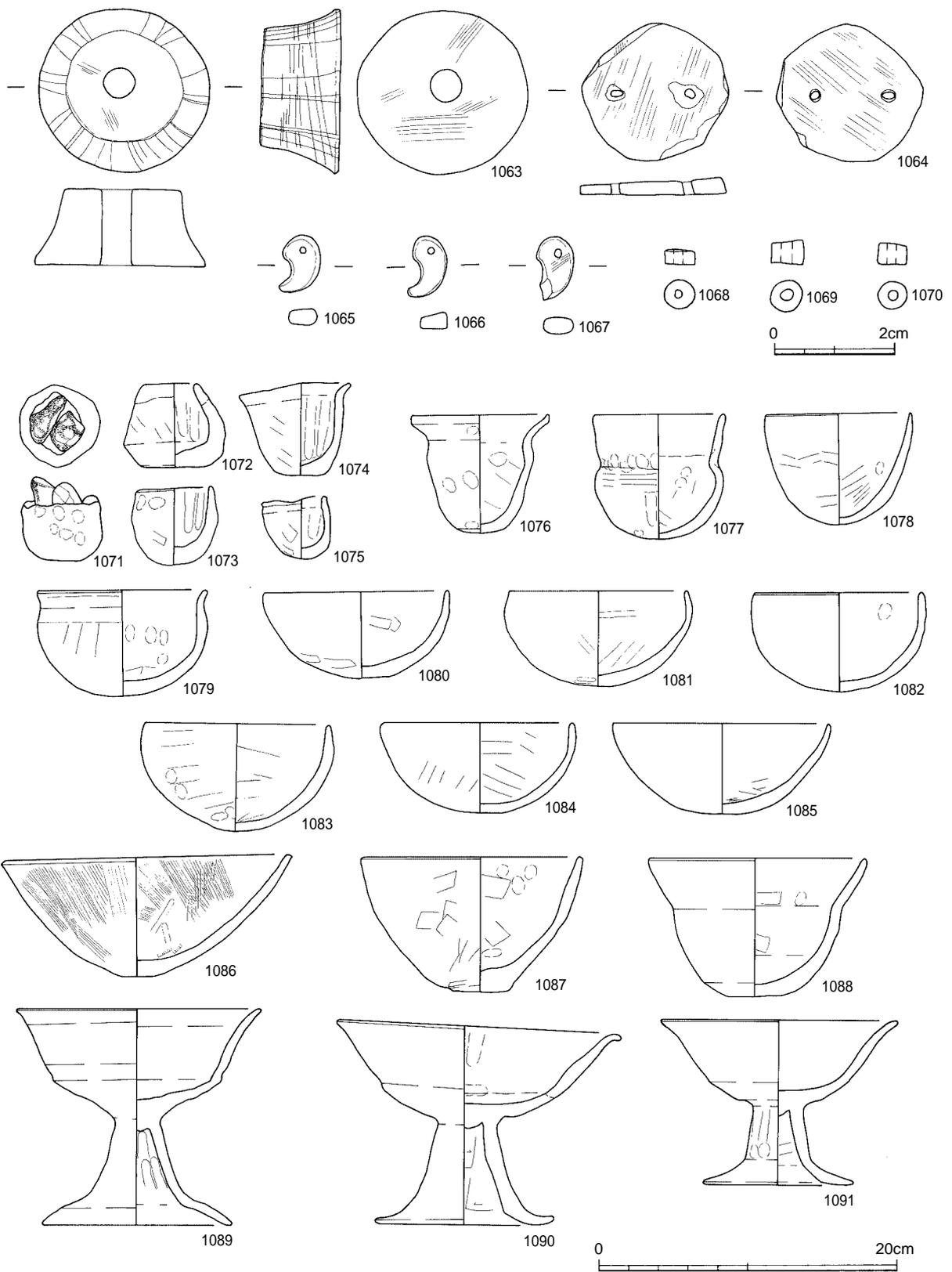


Fig.133 SF10出土遺物実測図2

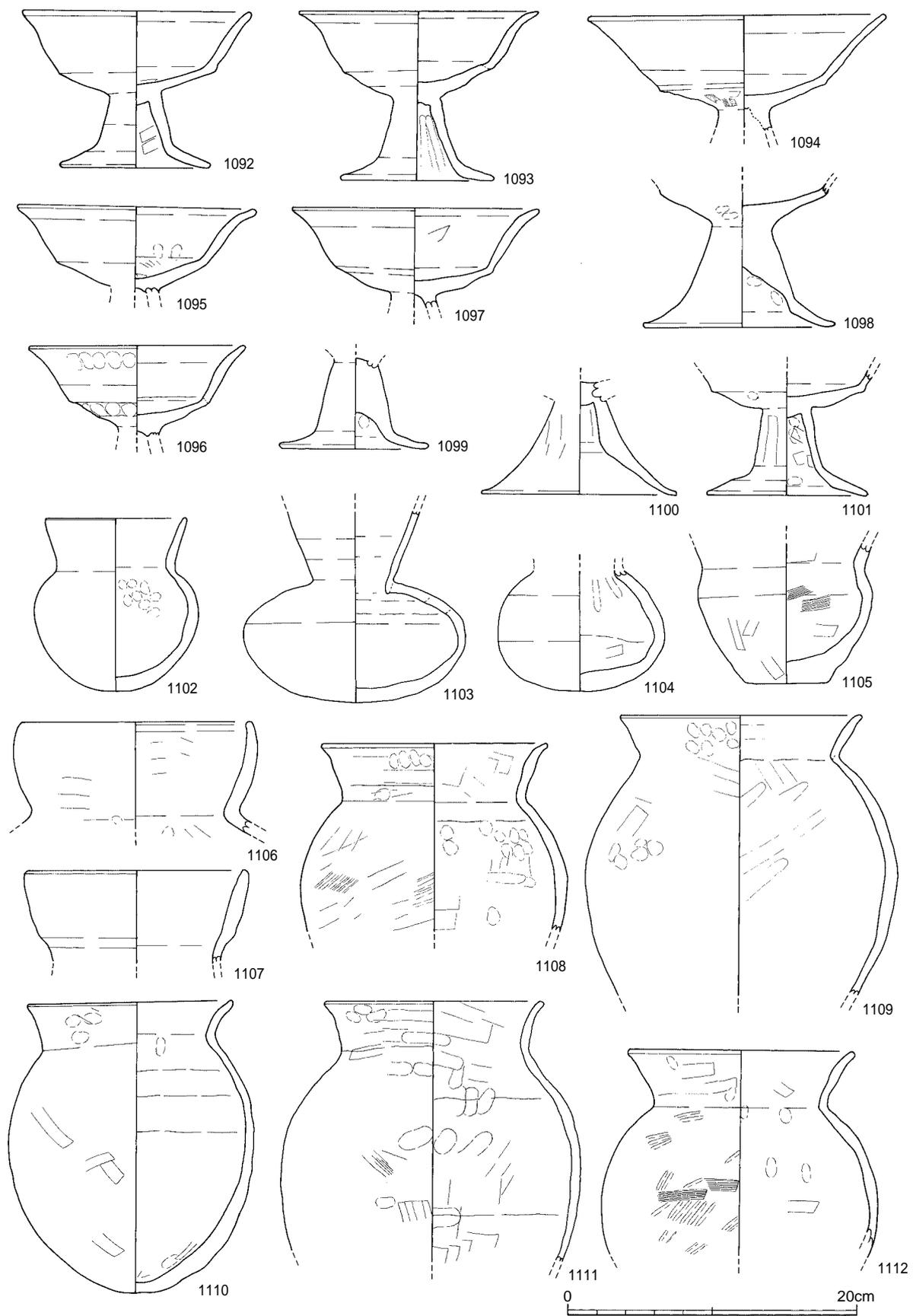


Fig.134 SF10出土遺物実測図3

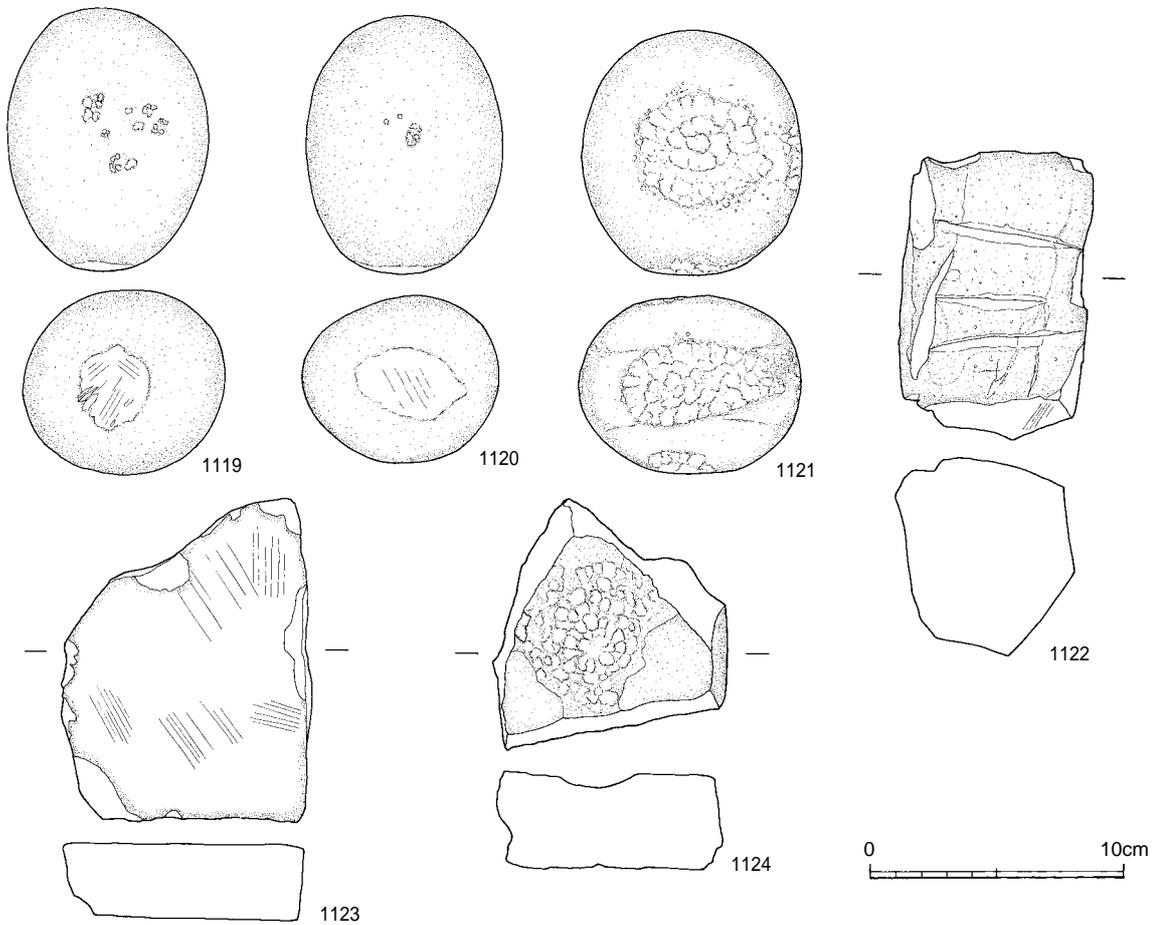
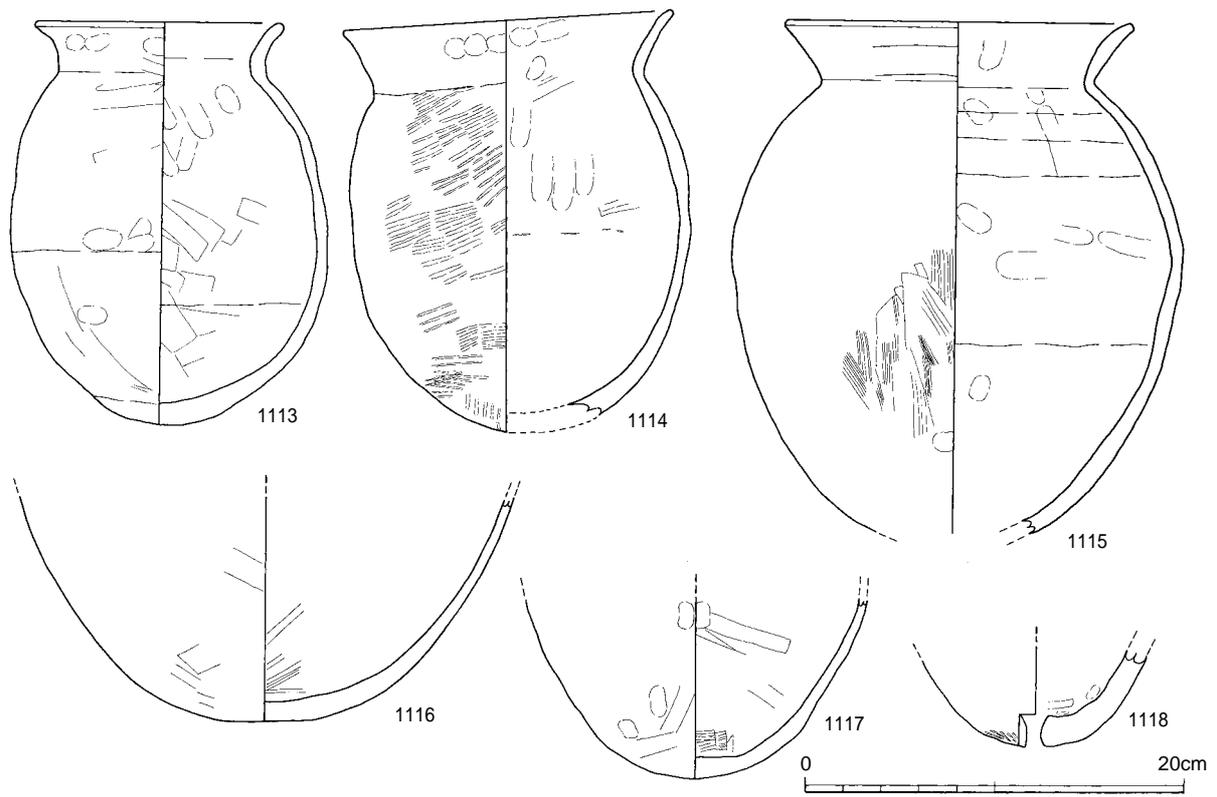


Fig.135 SF10出土遺物実測図4

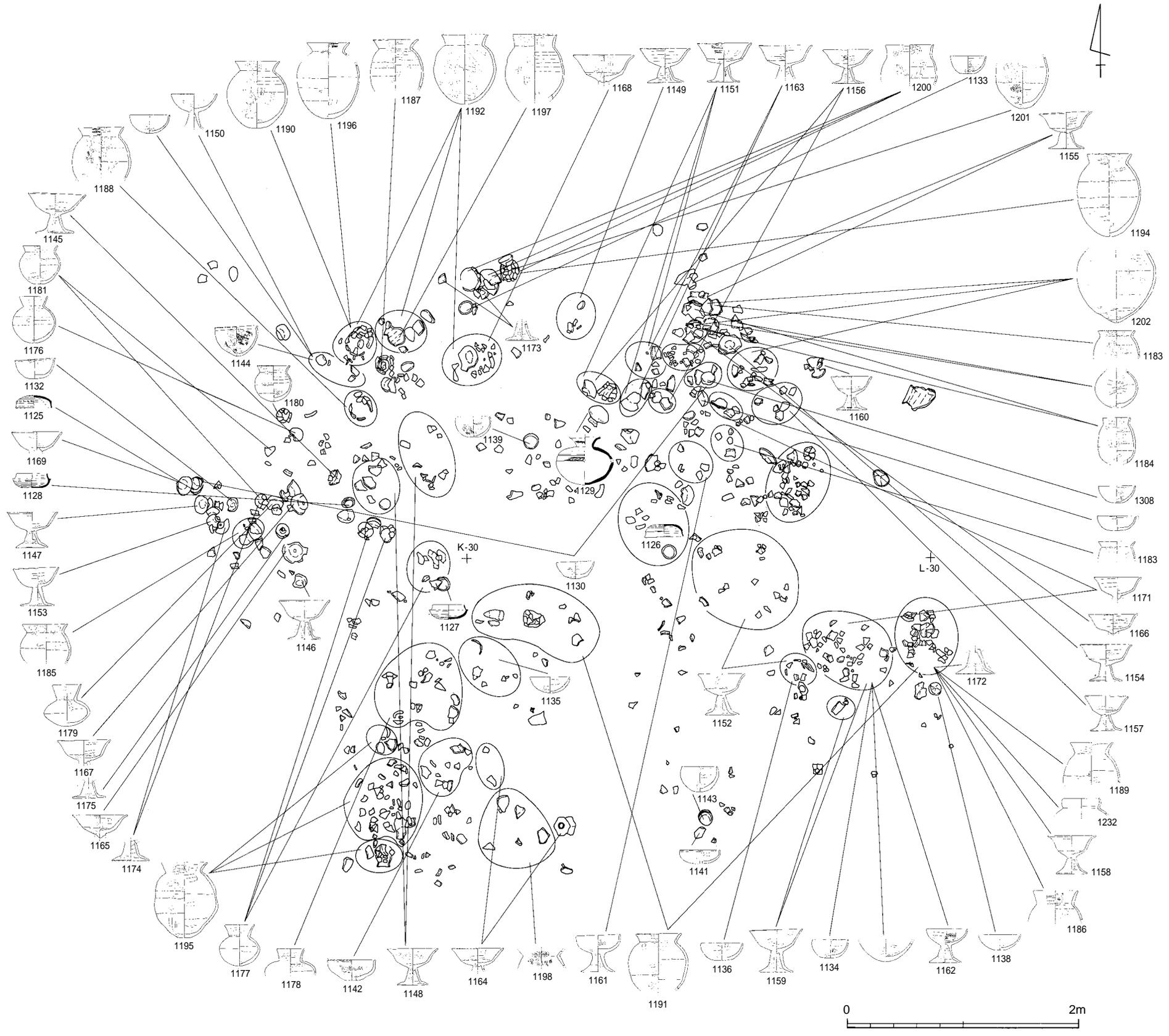


Fig.136 SF11遺物出土状況図

で、胴部は球胴を呈する。1103は直口壺であるが、口縁部は欠損している。胴部は大きく張る。1107は口縁下に段を有している。壺と思われる。1105、1108、1117は甕である。1106の口縁部は内傾気味に上方に伸びる。1108～1115は胴部は球胴形を呈しており、頸部から口縁部は外反する。1112、1114は外面にはタタキ痕がみられる。1115は胴部が球胴形に張る甕で、外面にはハケ調整がなされる。1118は甕の底部である。中央には直径約1cmの円孔がなされる。1071～1077は手捏ね土器である。底部は丸底で、口縁部にかけて内湾するもの(1071、1073、1075)、1071の内部には小円礫が入ったまま出土している。底部は平底で口縁部は強く内傾するもの。(1072)底部は平底で、口縁端部が外反するもの(1074)がみられる。また1076、1077は大型で、1076は頸部から口縁部にかけて強く外反している。1077は底部は丸底で胴上部が張り、口縁部は上方に長く伸びる形態を呈している。1063～1070は石製品で紡錘車は直径2.9cmを測り、中央には0.5cmを測る円孔が穿たれる。有孔石製円板は直径2.5cmを測る円形を呈し、中央には円孔が2箇所施されている。1065～1067は全長1.0cmを測る小形の勾玉である。上部には円孔がなされている。1068～1070は径が0.5cmを測る白玉で、すべて滑石製である。叩石には1119～1121の円礫と1124の角礫がみられる。1121は両面の中央部と周縁に敲打痕が認められる。1122は3箇所凹状の窪みが認められる。用途は不明である。

SF11

区の西突出部において検出した。J-30・31～k-30・31、I-31の5グリットに亘って位置している。層掘削時に平面的に検出した集中である。検出範囲はK-30グリットを中心に約5.6×7.2mに及び範囲内に土器が分布している。調査区のなかでは比較的広い分布になる。検出標高は4.28～4.4mを測る。検出範囲内には全面に遺物が広がりがみられるが、その中でも遺物の分布はJ-30内のブロックとK-30のブロック内に土器が集中している。また前者のブロックからは1125の須恵器杯蓋、1128の須恵器杯身、後者のブロックからは1129の甕がほぼ完形で出土しており、その他にも椀や高杯、丸底壺等が完形で出土している。他のSFは大半が破片の集中であるのに対し、完形での出土が非常に多いといえ、遺物の出土状況からは、出土地点からほとんど動いていないと思われる。集中の北側は調査区外のため、確認できなかったが、遺物の分布状況や出土量から考えると、分布範囲は調査区外に広がっている可能性も考えられる。集中は土師器甕、高杯、椀、丸底壺、須恵器で構成されており、その中で叩石が2点出土している。全体では甕の出土が多いが、高杯、椀の出土割合が他のSFに比べ高い。

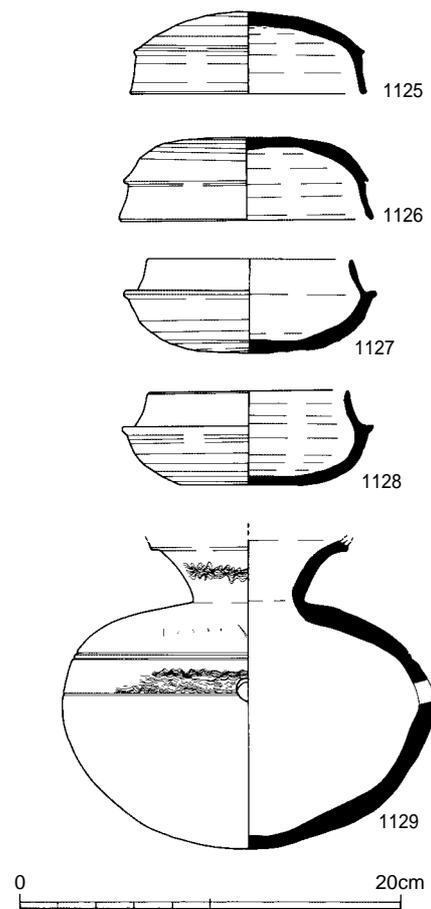


Fig.137 SF11出土遺物実測図1

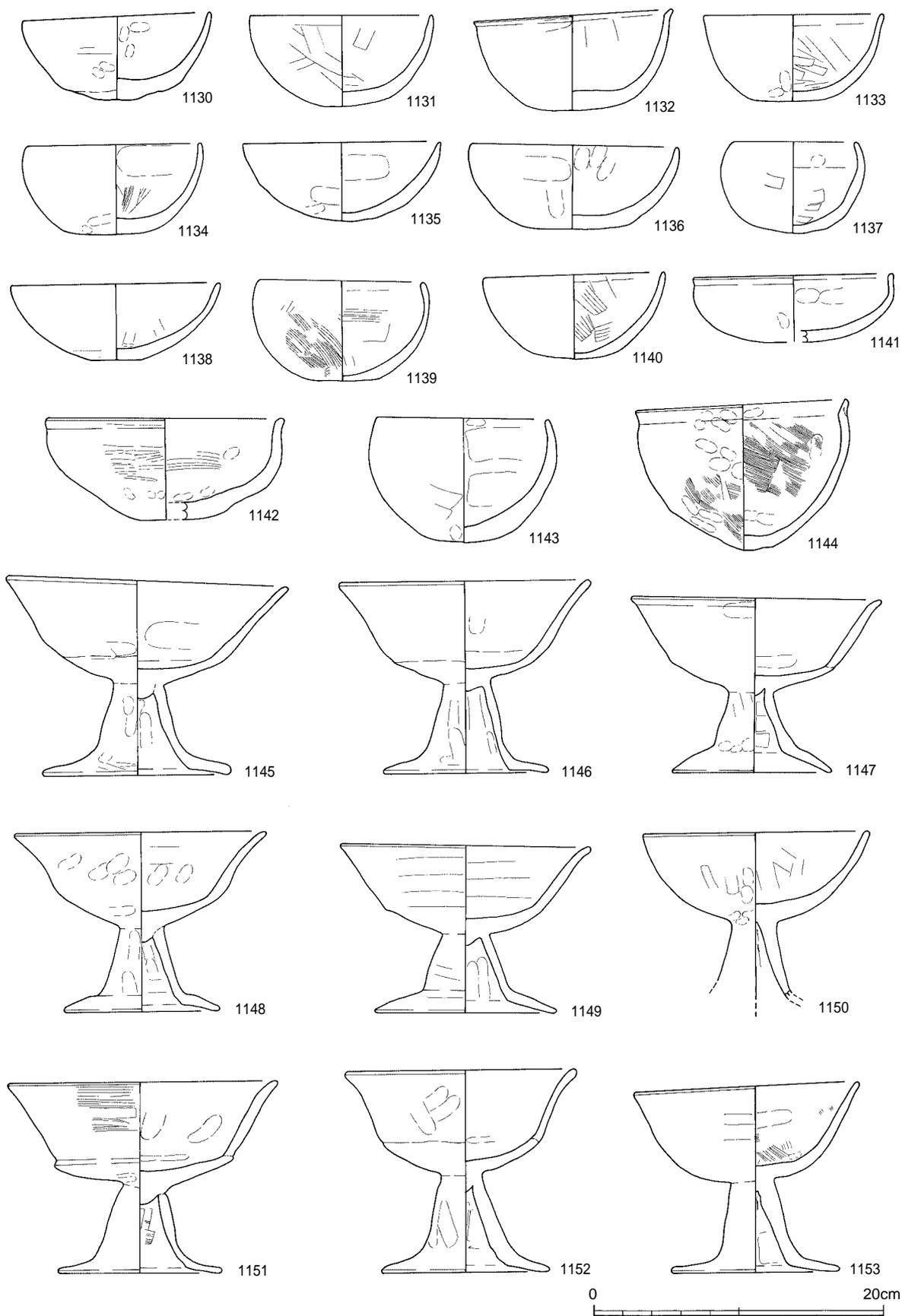


Fig.138 SF11出土遺物実測図2

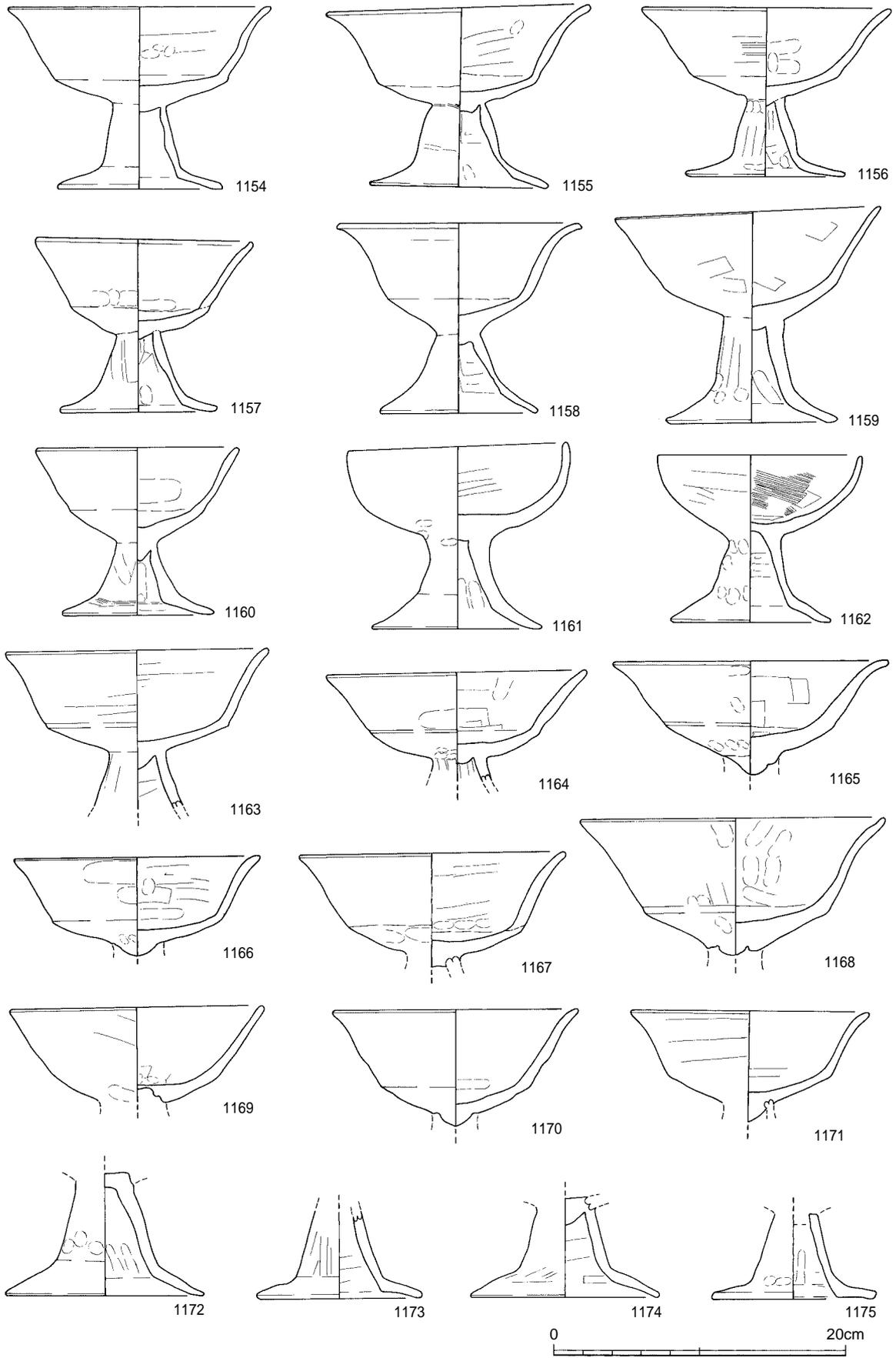


Fig.139 SF11出土遺物実測図3

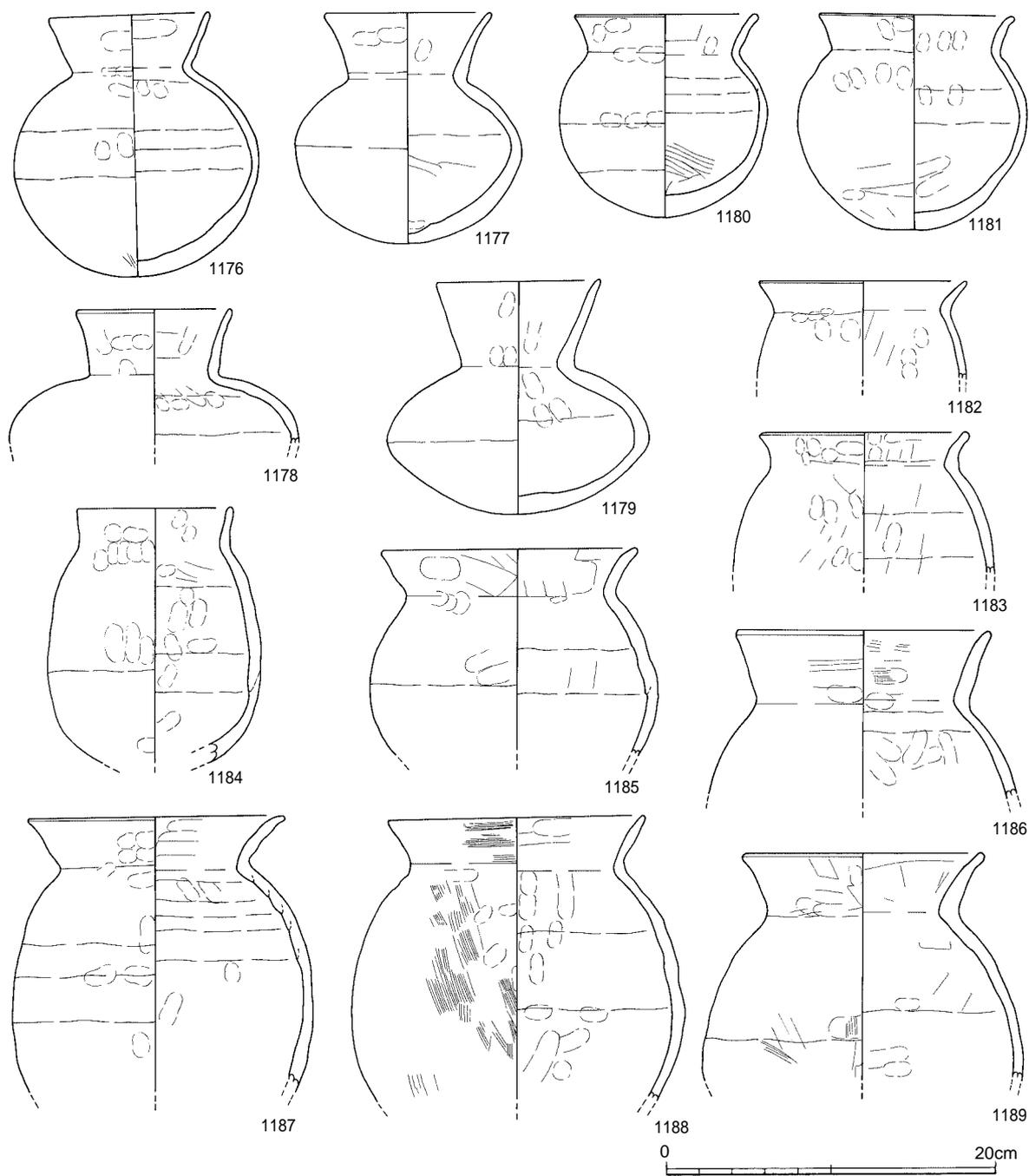


Fig.140 SF11出土遺物実測図4

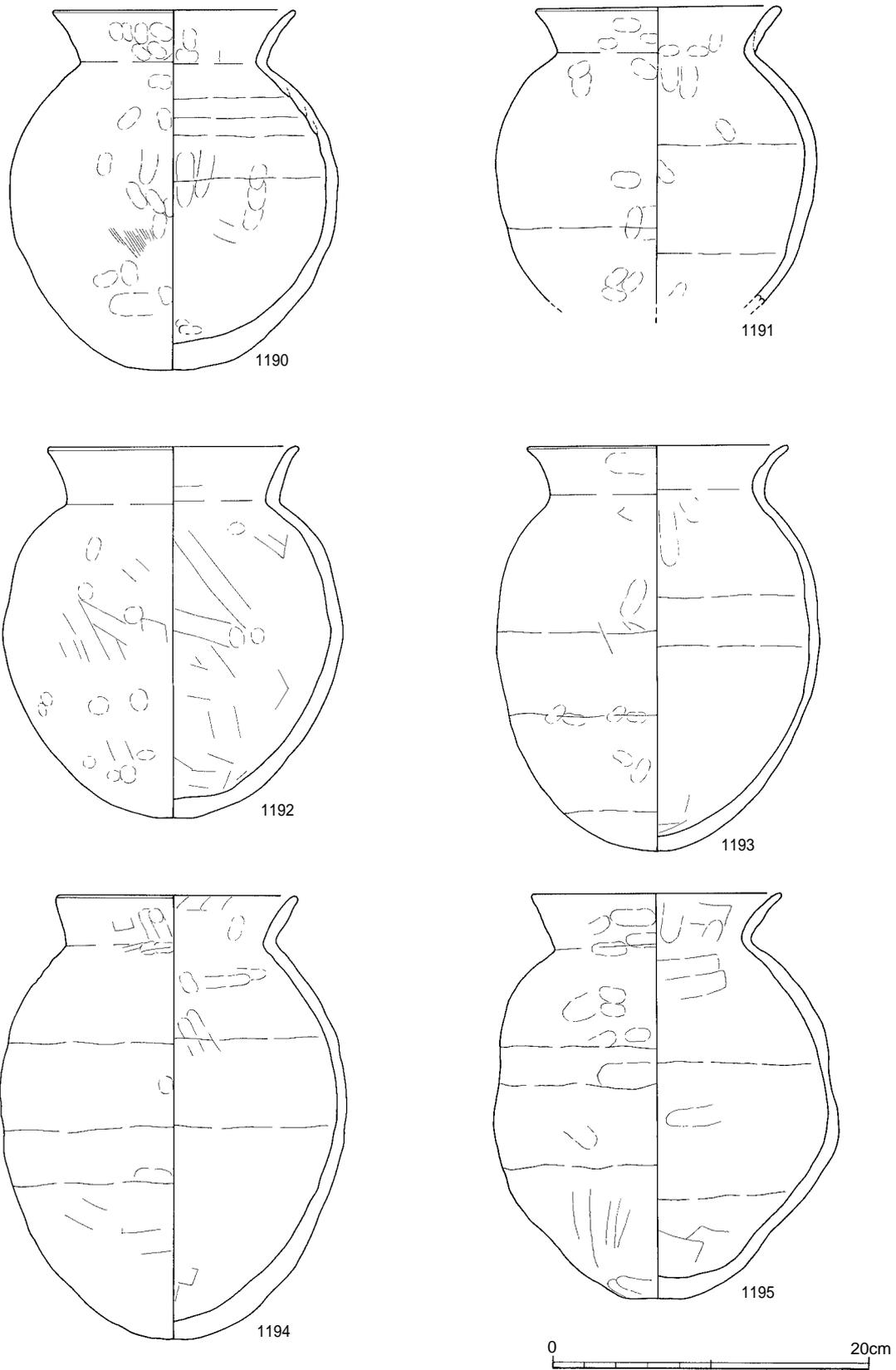


Fig.141 SF11出土遺物実測図5

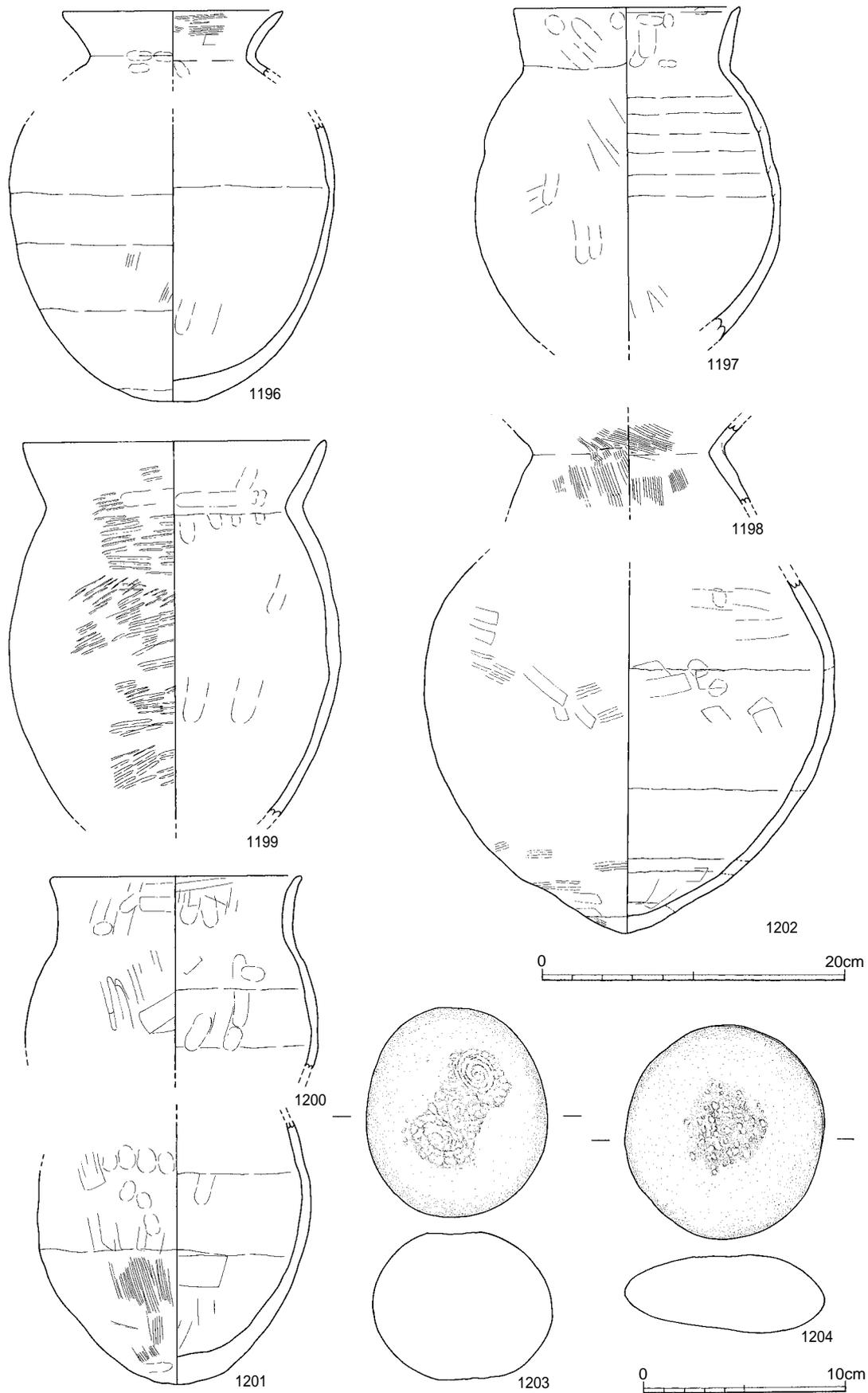


Fig.142 SF11出土遺物実測図6

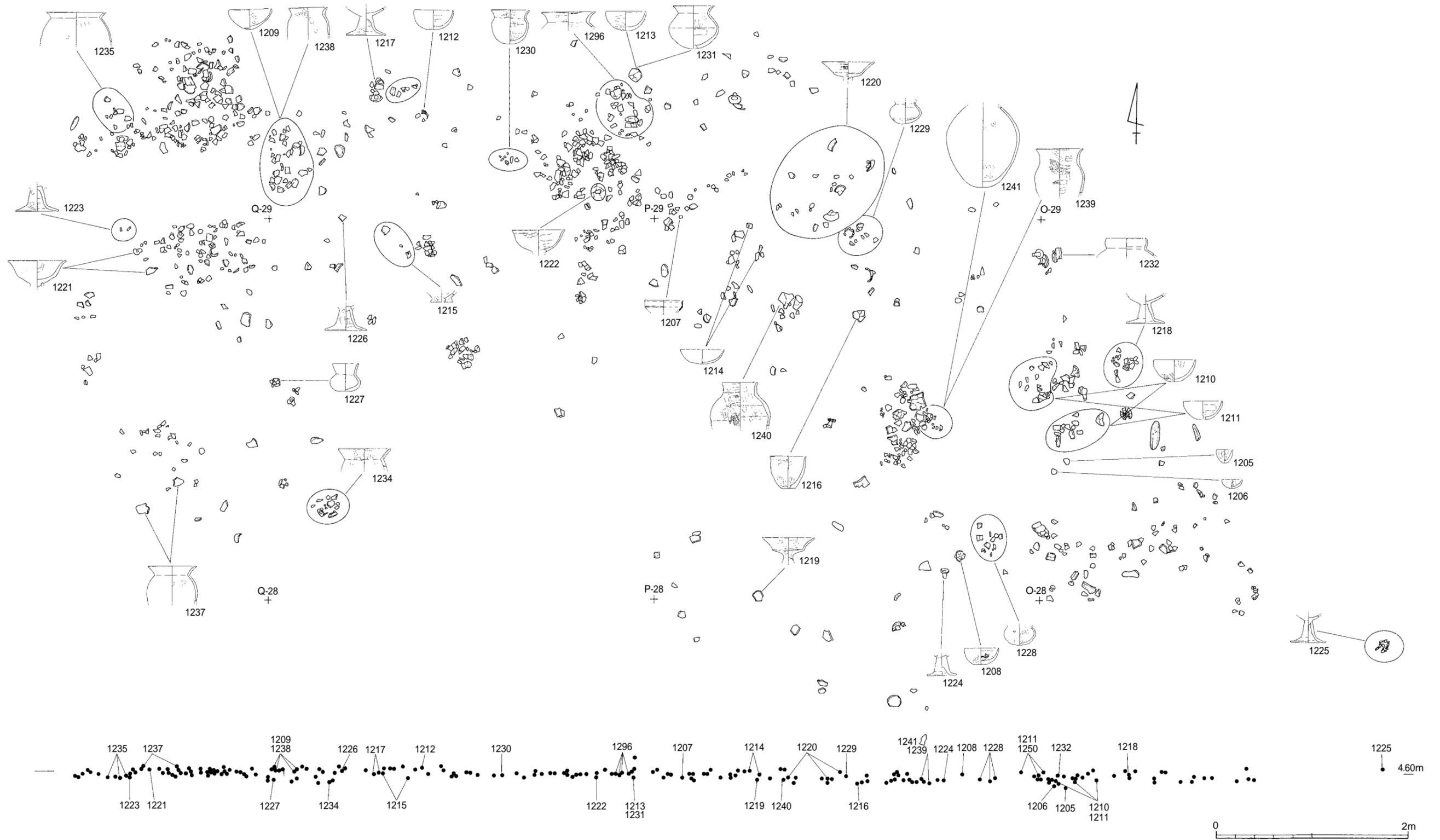


Fig.143 SF12遺物出土状況図

出土遺物(Fig.137 ~ 142)

遺物総点数は800点を数え、分布範囲に対して非常に多い。その内、土師器甕片が704点、高杯49点、須恵器5点、石器2点が出土している。出土遺物の中では土師器甕が全体の88%を占め最も多く、次いで高杯の割合が高い。それらの遺物のなかで図示できたのは土師器甕が17点、高杯31点、椀15点、丸底壺4点、須恵器5点、叩石2点である。須恵器ではJ-30ブロックから1125と1128の杯身、杯蓋、K-30ブロックから1127の杯身と1129の甕が出土している。1125は天井部は丸みを持ち、稜部は短く断面三角形を呈する。口縁部はやや外方に伸び、端部は平坦である。天井部約2/3には回転ヘラケズリがなされる。1126は天井部は扁平で、口縁端部は内傾している。天井部1/2には回転ヘラケズリ、内外面には回転ナデがなされる。1127、1128は受部はやや斜位方向に摘み出し、立上がりは長く内傾して伸びる。底部約2/3まで回転ヘラケズリ、内外面には回転ナデ調整がなされる。1129は胴部が球形に大きく張り頸部に至る。口縁部の稜から上部は欠損する。欠損状況からは故意に口縁部のみ割っているように思われる。口縁部が外面には波状文が巡る。胴部外面にも同じく波状文(16本)が巡り、中央には直径1.2cmの円孔が施される。椀では口径12~14.5cmを測り、底部は丸底を呈しており口縁部にかけて内湾するタイプがほとんどである。1134は内底部に八ケ調整、1139は内外面に八ケ調整がなされる。1137は口径が8cmを測る小振りの椀で、口縁部は強く内湾している。1132は底部がやや扁平な丸底を呈しており、口縁部にかけては内湾するが、端部は外反させている。1133は内面にヘラケズリがなされる。1141は器高は4.5cmと浅く、口縁端部を外反させている。1142は底部外面は指押しによる平底状を呈し、口縁部にかけては内湾し、端部は外反している、外面にはタタキ整形痕が残り、内底面には指頭が顕著である。1144は口径15cm、器高が10cmを測る大振りの椀である。底部は丸底で口縁部にかけて内湾し口縁部はナデにより外反させている。内外面には八ケと指頭が顕著である。高杯杯部に屈曲部を持たない椀型を呈するタイプ(1150、1153、1161、1162)と杯部に屈曲部の段を持ち、口縁部が外方に伸びるタイプがみられる。その内1158は杯部口縁は強く外反し、杯部に対し脚部は短く裾部の屈曲も緩やかである。1160は杯部の屈曲は弱く口縁部にかけて直線的に伸びる。脚部は短い。裾部は屈曲して外方に伸びる。1155は杯部の屈曲が強く、口縁部も強く外反している。脚部はやや短く、裾部は外方に伸びる。1156は1155の杯部とほぼ同形を呈しているが、脚部は細い柱状で、裾部は強く屈曲し外方に大きく広がる。1150は内面にヘラケズリがなされる。1153は内底面に八ケ調整がなされ、脚部は細い柱状を呈し、裾部は強く屈曲し外方に広がる。1161は器高は浅く、口縁部にかけて強く内湾している。脚部裾の屈曲は弱く、緩やかに伸びる。1162は内面には八ケ状のナデとヘラナデがなされ脚部はやや太く裾部は屈曲し、外方に緩やかに伸びる。4点とも脚部内面は凸状は呈しておらず、指ナデが顕著である。1176~1179は直口壺であるが、1176は胴部が球形に大きく張り、頸部から口縁部にかけては外方に直線的に伸びる。1177は1176よりやや小振りであるが、同じく胴部は球形を呈し、口縁部は直線的に伸びる。1178は底部は欠損しているが、胴部は大きく張り、口縁部は直立して上方に伸びる。頸部内面には指頭が顕著に残る。1179は胴部は大きく張り出し、頸部から口縁部は上方に直線的に伸びる。1180、1181は小型の甕で、底部は丸底で、胴部はほぼ球形を呈している。頸部から口縁部にかけては緩やかに外反する。共に指ナデが顕著で、内底部には煤が吸着している。甕は底部から口縁部まで復元

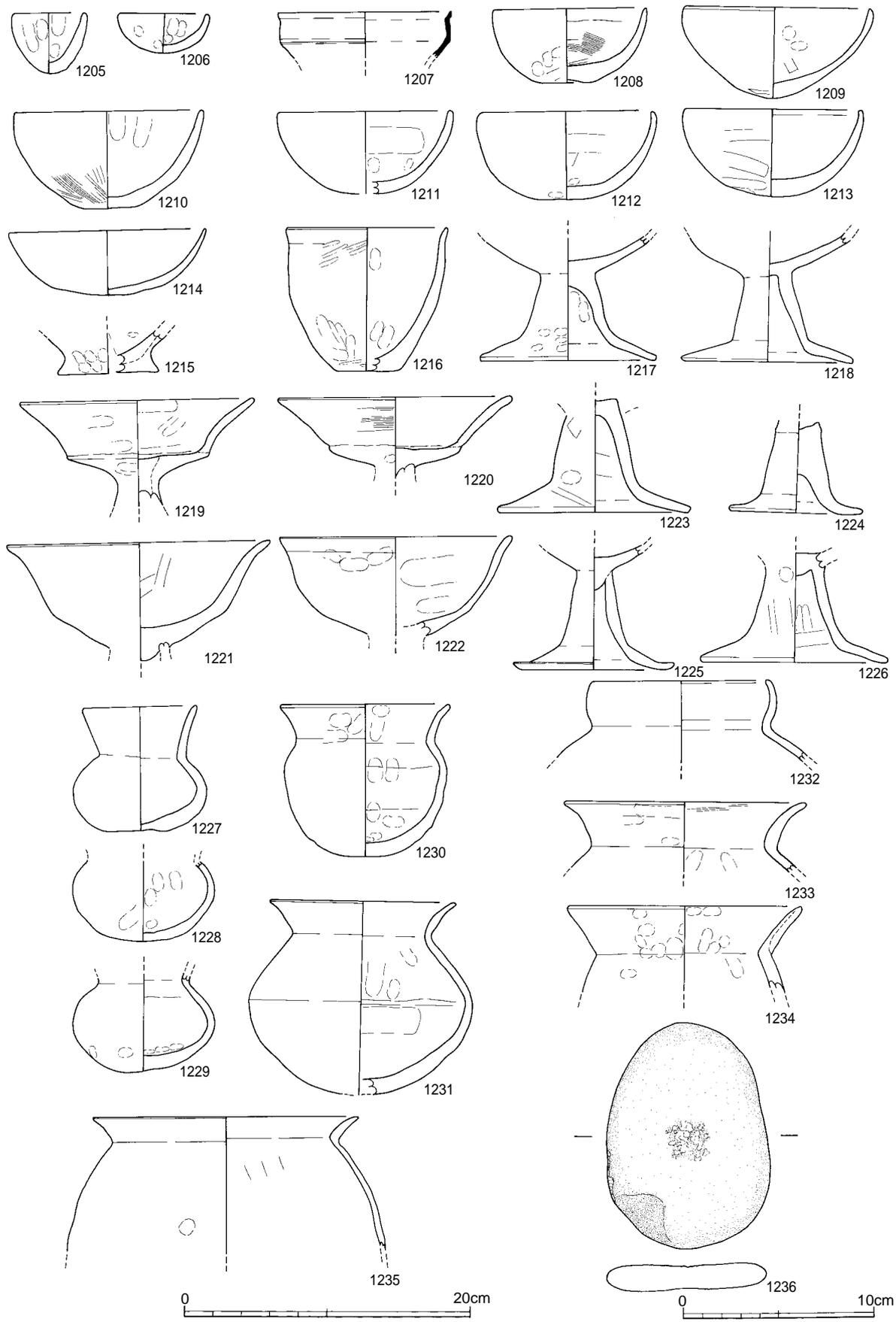


Fig.144 SF12出土遺物実測図1

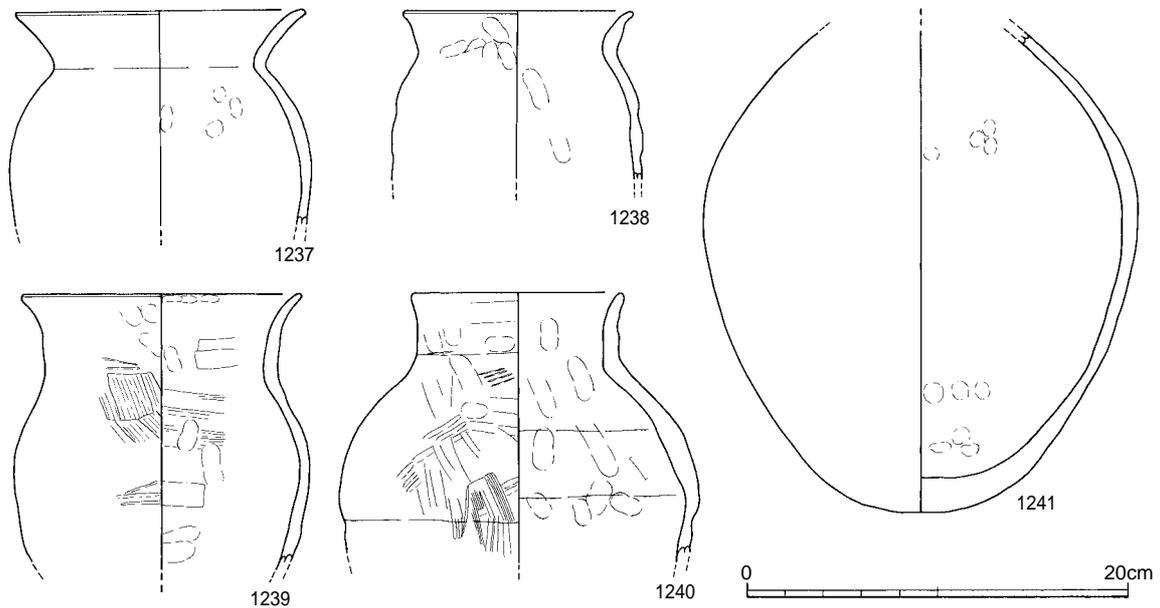


Fig.145 SF12出土遺物実測図2

できたものは少ない。1182は小型の甕で口縁部と胴部はほぼ同径で、口縁部は短く外反している。1183、1185、1186～1189は胴部に最大径をもち球形状を呈しており、頸部から口縁部は外方に屈曲する。1188は外面にはハケ状のナデ、内面には指ナデがなされる。その他は内外面にはナデ調整がなされている。1184は胴部は長胴状を呈し、頸部から口縁部は直立する。内外面に指頭、内面には粘土接合痕が顕著である。1196は底部は丸底で胴部は球形状に張る。頸部から口縁部は強く外反する。1197は球胴状呈するが、口縁部は直立し上方に伸びる。内面には粘土紐接合痕が顕著である。1198は頸部のみであるが、内外面には細かいハケ調整がなされている。1199は口縁部と胴部がほぼ同径で長胴状を呈している。外面には横方向のタタキ、内面には指ナデがみられる。1200も口縁部と胴部がほぼ同径で、口縁部は胴部から上方にそのまま伸びる。外面にはヘラ状のケズリとナデ、内面には指ナデがなされる。1202は胴部は球形状に大きく張り出している。この集中のなかでは最も大型である。外面には一部タタキ痕が残る、内面はヘラケズリとナデが施される。1190～1192は底部は丸底で、胴部は球形に張りだし頸部から口縁部は外反する。1193～1195は底部は丸底で、胴部は球形状を呈しているが前者に比べ長胴に近い。口縁部は強く外反する。1195は粘土接合痕が顕著に残る。1203と1204は叩石である。1203は円礫で一面のみに使用痕が残る。1204は断面扁平状の円礫である。1203と同じく一面のみに敲打痕が認められる。

SF12

区の南突出部調査区において検出した。N-28・29～Q-29・30間の10グリッドに亘って位置している。層の掘削時に平面的に検出した集中である。検出範囲は約7.2×15.2m亘って遺物が広範囲に分布しており、南北方向に帯状の広がりを呈している。検出標高は4.46～4.64mを測る。検出範囲内には全面に遺物が広がりがみられるが、その中でも遺物の分布はP-29を中心とするブロックとQ-29を中心とするブロックに集中している。またM-30・N-30にかけては水槽掘削の際に土器が出土しており、遺物の分布は南北方向に広がっていたと考えられる。分布範囲内には焼土や炭化物の集中は検出されていないが、土器と共に川原石が点在している。集中は土師器甕、壺、丸底壺、高杯、椀、須恵器、手捏ね土器で構成されており、1236の叩石が1点出土している。土器集中の大部分は破片が重なりあったものであるが、1205、1206の手捏ね土器はほぼ完形で出土している。

出土遺物(Fig.144、145)

遺物の総点数は3117点を数え、その内土師器甕片は3038点、高杯57点、須恵器1点、手捏ね土器2点、叩石1点が出土している。出土遺物のなかでは土師器甕が全体の約97%を占め最も多く、つい

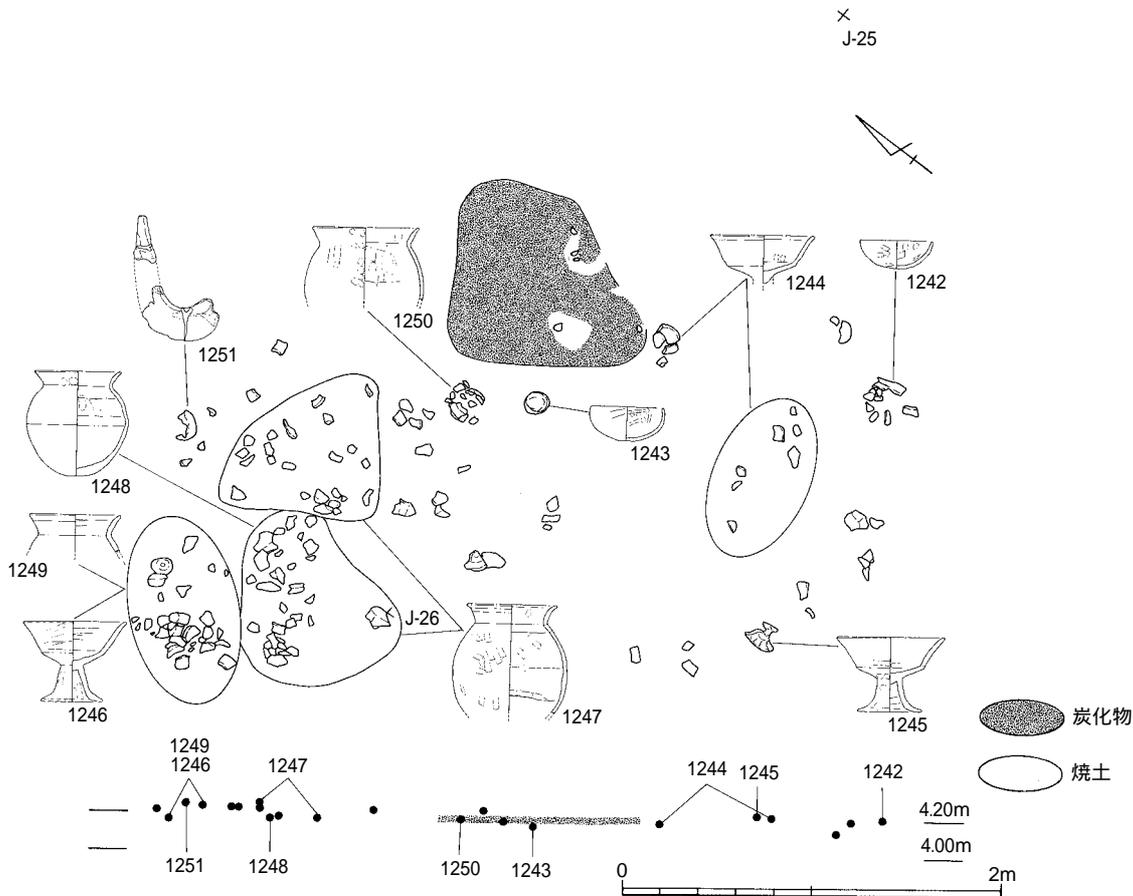


Fig.146 SF13遺物出土状況図

で高杯の割合が多い。その中で図示できたものは37点である。1205、1206は手捏ね土器である。指押し整形が顕著で椀型を呈す。2点ともO-29において並んで出土している。1207は須恵器で、口縁部は強いナデにより段を呈し、口唇部は内傾している。甕の口縁部と考えられる。1208、1209、1211～1213は底部は丸底を呈し、口縁部にかけて内湾する椀である1210は底部は平底で、口縁部にかけてはやや内湾する。外面には粗い縦方向のハケが施される。器高は1210が6.9cmを測り最も深く、1208は4.9cmを測り浅い形態をなしている。1216は底部は平底で、器高が10cmを測る深い椀状を呈した土器である。口縁部にかけては直線的に伸び、端部は外反している。口縁部外面にはタタキ整形痕が残っている。1215は底部のみ出土であるが、外面は粘土を貼り付けた台付椀と思われる。外面には指頭が顕著に残る。1217～1226は高杯で、杯部から脚部まで接合されたものはみられない。脚部では1224は器壁が厚く、短い柱状を呈す。裾部は屈曲し外方に広がる。1225は細い柱状を呈し、裾部は屈曲し外方に広がる。裾端部は外反する。杯部では1219と1220は器高が3.5～4cmを測り、非常に浅い。口縁部は外方に広がっている。1222は椀型を呈し、口縁部は内湾し、端部は外反する。小型丸底壺では1227は胴部は球胴状を呈し、口縁部は外方に直線的に伸びる。1230、1231は小型の甕で、1230は口縁部と胴部はほぼ同径で口縁部は外反している。内外面には指頭が顕著である。1231

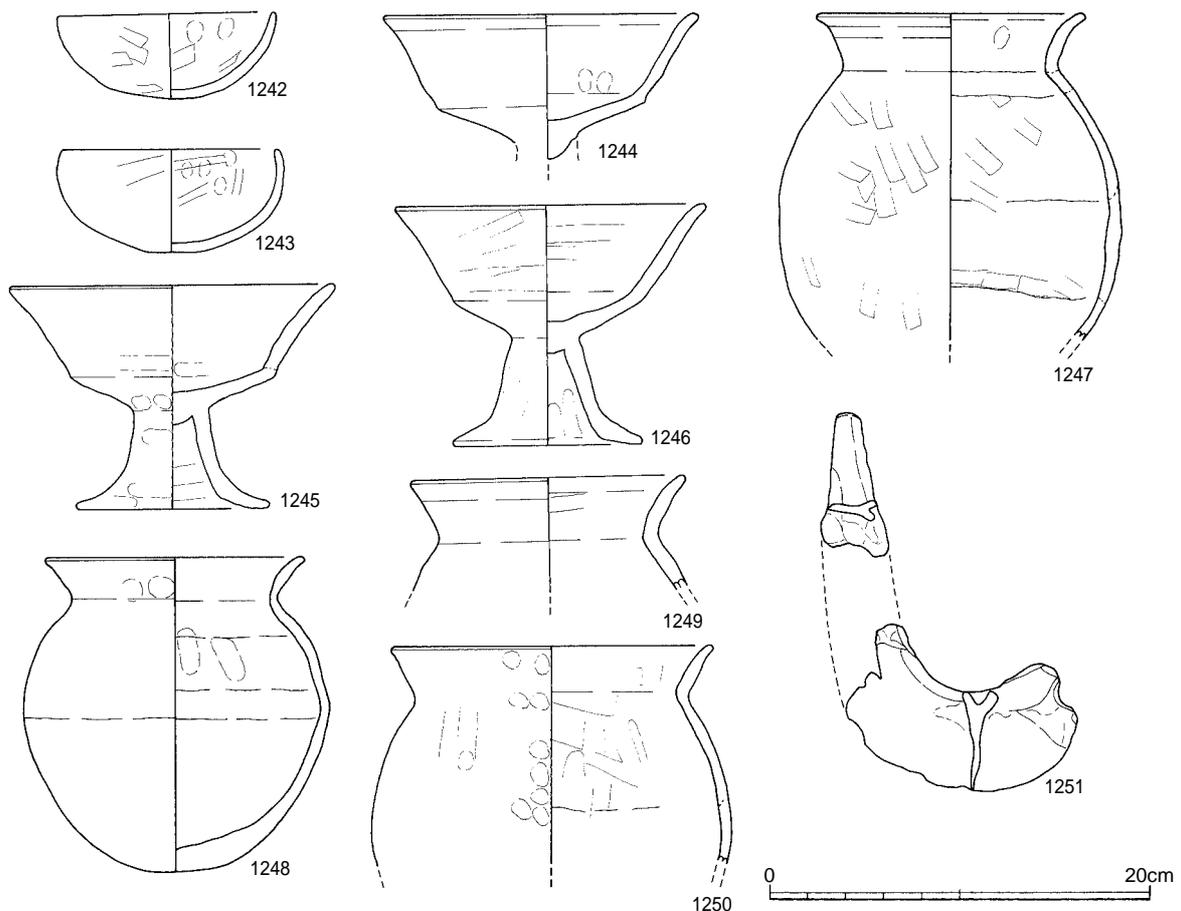


Fig.147 SF13出土遺物実測図

は胴部に最大径をもち大きく膨らむ。口縁部は「く」字に外反している。1231の口縁部は頸部から直立して短く伸びる。内面は強いナデにより、やや内傾している。甕では口縁部から底部まで復元できるものはなかった。胴部が球胴状を呈し、頸部から口縁部にかけて屈曲するタイプが多い。1237、1239は口縁部と胴部がほぼ同径の甕で、1239は頸部から口縁部にかけて緩やかに屈曲している。外面には一部タタキ痕とハケ、内面にはハケ調整がみられる。1240は胴部が球胴状になると思われ、口縁部は頸部から直立して伸びる。外面にはタタキ整形後縦方向のハケ、内面には指ナデが顕著である。

SF13

区の中央部 I -26・27～ J -26に亘って位置している。層の下層掘削時に平面的に検出された。検出範囲は約4.1×1.6mを測り、J -26を中心に帯状に遺物が分布している。検出標高は4.1～4.26mを測る。検出範囲内には全面に遺物が広がっており、J -26から北方向約1.8m地点には1.0×0.9mの方形状を呈した炭化物の集中が検出された。また炭化物集中の近辺には焼土が点在している。集中の北端には1251の鉄鋤先が出土しており、農具を使用した祭祀行為が行われたと考えられる。集中は土師器甕、高杯、椀により構成されており、その中でも甕の出土が多いが、高杯の割合が次いで多い。集中は破片が大半であるが、1243の椀と1246の高杯はほぼ完形で出土している。

出土遺物(Fig.147)

遺物総点数は156点を数え、その内土師器甕片113点、高杯40点、椀2点、鉄鋤1点が出土している。甕の総点数が全体の約72%を占め最も多い。その内図示できたものは10点である。1242、1243は椀で、底部は丸底で、口縁部にかけて内湾している。器高はやや浅い。1243は炭化物集中のすぐ東側より出土した椀でほぼ完形である。口縁部は上を向いて出土している。底部は丸底で、口縁部は内湾している。1244～1246は高杯で、1244は杯部のみであるが、杯部と口縁部間には段を呈し、口縁部にかけては外方に直線的に伸びる。端部は外反する。底部外面は凸状になる。1245、1246は杯部から脚部にかけて残存している。1246は杯部の器高はやや深く、口縁部は外方に伸びて端部は外反している。脚部は短い柱状を呈し、裾部は屈曲し短く伸びる。杯部に比べ脚部は短い。1245も同じく杯部は外方に大きく開き、脚部は短い柱状を呈し、裾部は屈曲して短く伸びる。内外面はナデ調整が顕著である。1247～1250は甕で、1247は底部は欠損しているため不明であるが、胴部は球胴を呈し、頸部から口縁部は外方に屈曲する。内外面にはヘラケズリがなされる。SF13の中では大型の甕である。

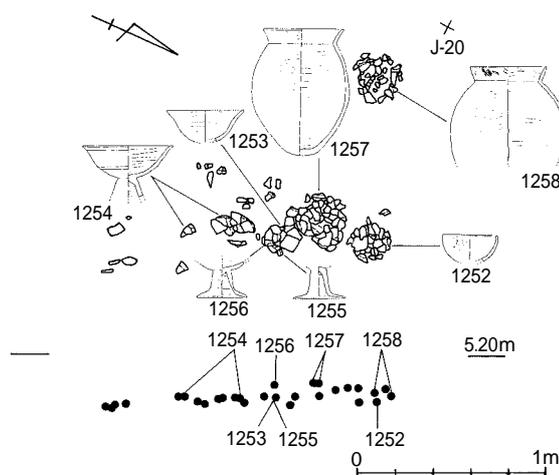


Fig.148 土器集中30遺物出土状況図

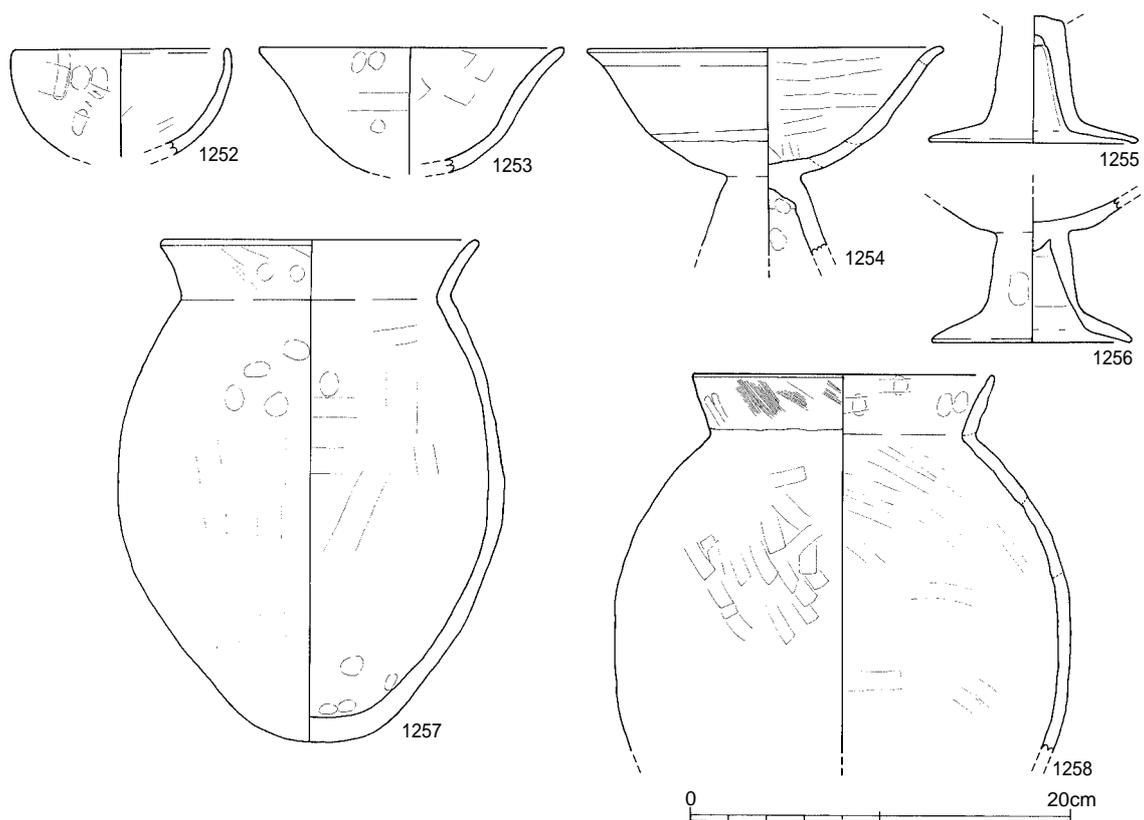


Fig.149 土器集中30出土遺物実測図

1248は底部丸底で胴部は球形に大きく張り、頸部から口縁部は強く外反する。1249、1250は同じく胴部は球胴状を呈すると考えられる。頸部から口縁部は屈曲して外方に伸びる。1240は内面にはヘラケズリが顕著である。1251はU字形の鉄鋤先である。途中で欠損しているが、長さは約19.6cm、刀部の最大幅は2.7cm、最大厚1.6cm、重量133.5gを測る。内縁は木製芯を挿入させるために断面がV字状を呈している。古津賀遺跡から同様な鉄鋤先が出土している。

土器集中

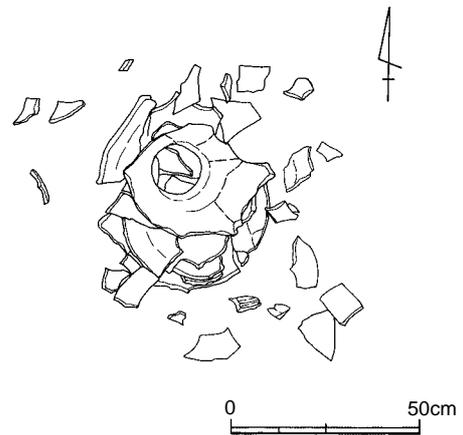
土器集中31

区の南部J-20に位置している。層掘削時に平面的に検出した。検出範囲は0.8×1.6mと非常に狭い小集中である。検出標高は4.95～5.05mを測り、各々の土器はそのまま土圧でつぶされたと思われる状態で出土しており、周辺には土器の点在はみられない。集中は土師器甕、高杯、椀から構成されており、その中でも高杯の出土が多い。

出土遺物

遺物総点数は106点を数える。小集中であるため少ない点数であるが、その内土師器甕が89点、高杯12点、椀3点が出土しており、中でも甕が全体の約84%を占め、最も多い。次いで高杯の出土が多い。その内図示できたものは7点である。1252は椀で、底部は欠損しているが、口縁部にかけて内湾している。1253～1256は高杯である。杯部は椀型を呈しており、端部は外反している。1253

は内面にはヘラ状のナデがなされ、脚部内面には強い指頭をなしている。1255は細い柱状を呈し、裾部は屈曲し外方に広がる。1250、1258は胴部に最大径を持つ甕である。1257はほぼ完形で、底部は丸底を呈し、胴部は長胴状である、内外面にはヘラナデがなされる。1258は甕で、頸部から口縁部は直立して短く伸びる。口縁部外面にはハケ、胴部外面にはヘラケズリがなされる。



須恵器集中

区北部のG-23において層掘削時に検出した。ほぼ完形を呈する一個体の甕を廃棄したものと考えられる。まず甕の底部が置かれた中に胴部片が積み重ねられており、その上面には頸部から口縁部にかけての部位が口縁部を下にした状態で積み重ねられている。周辺には数点の胴部片が点在した状態で検出された。検出標高は甕の底部部分で4.75m、口縁部が置かれている上面で4.86mを測る。遺物は底部から口縁部まで残存しているが、口縁端部は一部分のみが残っている状態で、その他は甕などの口縁と同じく故意に割られた状態である。須恵器の形

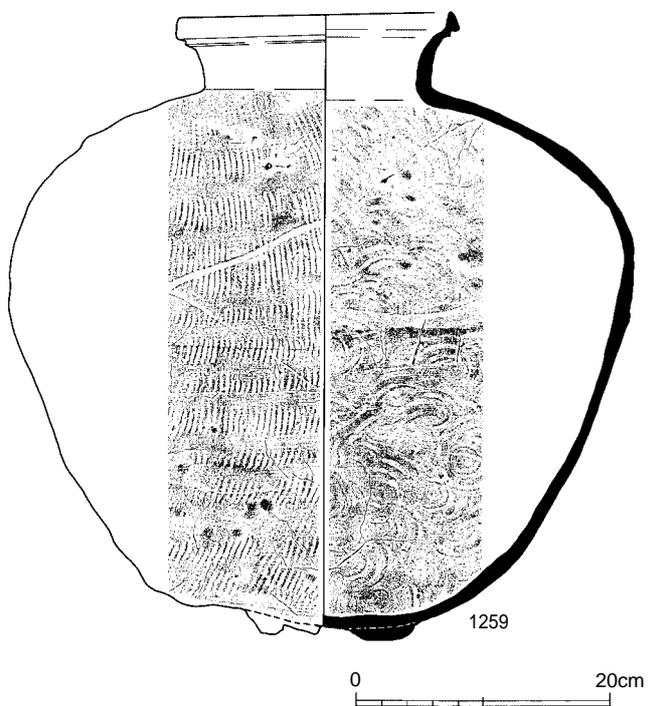


Fig.150 須恵器集中遺物出土状況図及び出土遺物実測図
態は口径21cm、器高48cmを測り、胴部が大きく張る。口縁部は下には断面三角形の凸帯をなし、端部は上下に肥厚させている。頸部から胴部下半には平行のタタキが施され、中間部分にはカキ目が見られる。内面は同心円文状のタタキ痕が施されている。全体に火膨れをおこしており、胴部外面には須恵器片、底部外面2/3以上にはセメント状の土が溶着している。

2) 包含層出土遺物(層)

区では 区に比べSFの規模も非常に広く、遺物の出土量も多量である。包含層の出土量も区に比べ多い。ここでは包含層遺物に関して種類・器種ごとに説明を加えていくこととしたい。包含層からは須恵器では杯身、甕、壺、土師器では椀、高杯、甕、壺、甑が出土している。また手捏ね土器が出土している。石製品では有孔石製円板、白玉、石製紡錘車、勾玉、叩石が出土している。

また個々の遺物の詳細については遺物観察表に記載しているので参照されたい。

須恵器

杯蓋 (Fig.151-1260 ~ 62)

天井部はやや丸みをもち、断面三角形の短い稜部をなす、口縁端部は内傾している。天井部約1/2には回転ヘラ削りがなされる。1261は天井部に宝珠形の摘みが付き、断面三角形の短い稜をなす。口縁部は内傾しており、端部は浅い凹状をなしている。1262は口縁部のみであるが、端部は平坦面を呈している。

杯身 (Fig.151-1262 ~ 1266)

1263、1265の底部はやや丸みをもつ。受部は断面三角形を呈し、外上方に短く伸びる。立ち上がり内傾して上方に伸び、端部もやや内傾する。底部外面約2/3には回転ヘラ削りが顕著である。

甗 (Fig.151-1267,1268)

1267は口縁部外面には12~13本単位の波状文が巡り、胴部には6本の波状文がなされている。胴部波状の中央部には直径1.4cmの円孔が穿たれている。底部外面に格子状のタタキがみられる。1268は胴部には5本の波状文がなされ、中央には直径1.3cmの円孔が施される。波状文間には段をなしている。

甗 (Fig.151-1269)

全体に器壁が薄く、胴部は球胴状に膨らむ。頸部から口縁部は外方に屈曲する。口縁部外面には2箇所の稜が巡り、その間には5本の波状文が巡っている。口縁端部は他の甗や甗と同様に所々打ち割られている。外面には平行のタタキ整形がなされる。

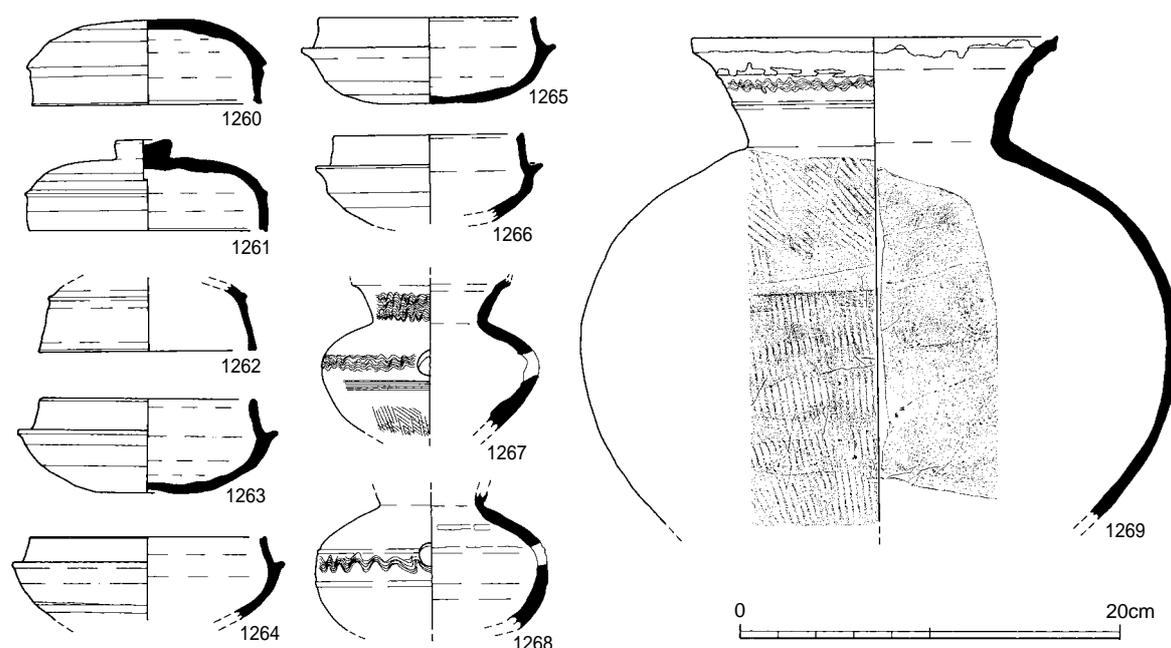


Fig.151 層出土遺物実測図1(区)

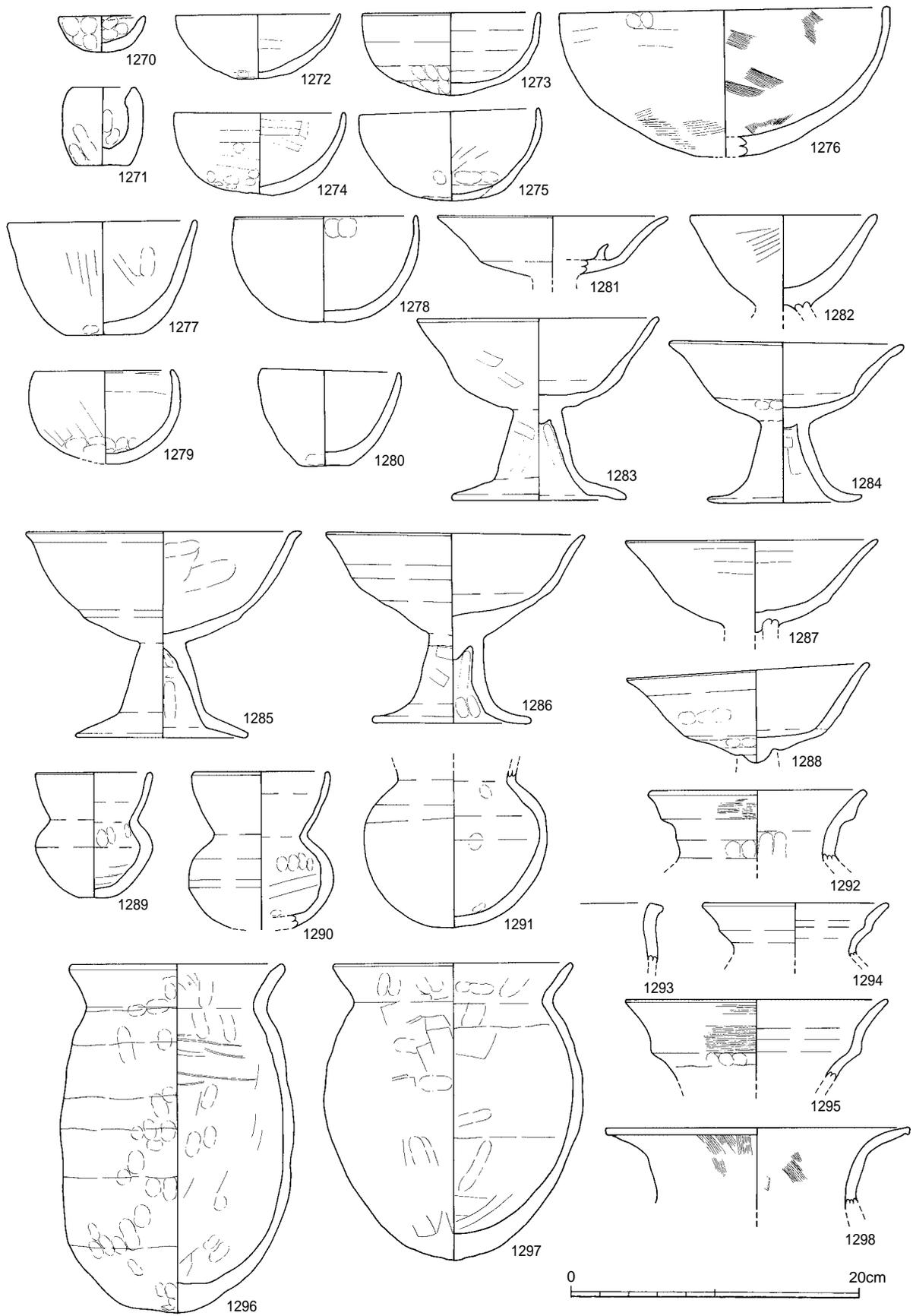


Fig.152 ・ 層出土遺物実測図2(区)

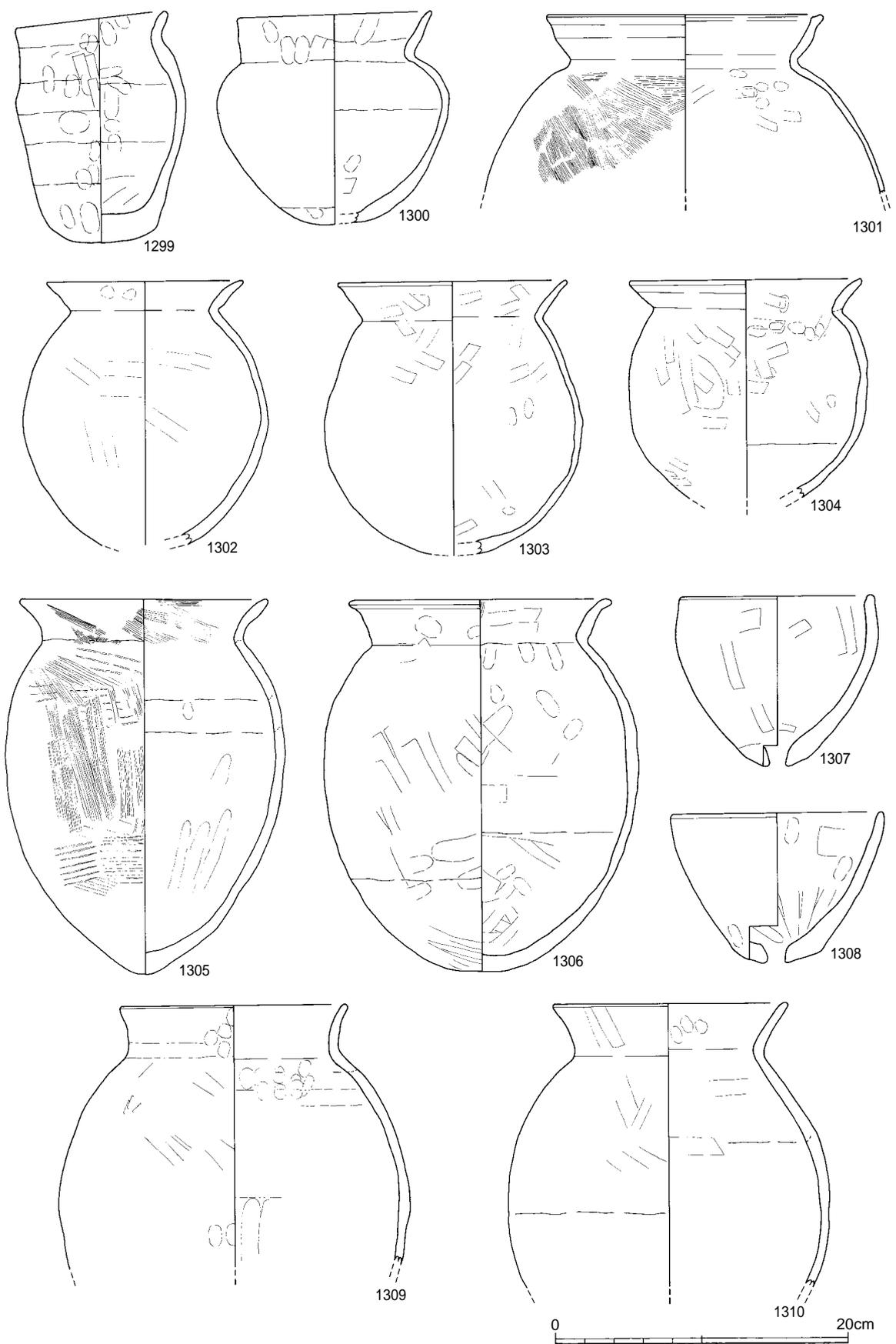


Fig.153 ・ 層出土遺物実測図3(区)

土師器

椀(Fig.152-1272 ~ 1280)

1297 ~ 1274、1278、1279は底部は丸底で口縁部にかけては内湾しながら伸びる形態を持つ。1274は口縁部内面にはハケ状のナデ、1275は内面にはヘラナデがなされている、また1275の底部には木の葉状の文様がヘラ状工具で描かれている。1277、1280は底部は平底を呈し、口縁部にかけては外上方に伸びる形態をもつ。1280はやや小振りである。1276は口径23.0cm、器高10.2cmを測る大型の椀である。底部は扁平な丸底を呈し、口縁部にかけては内湾している。底部外面にはタタキ、内面にはハケが施される。口縁端部は平坦面をなしている。

高杯(Fig.152-1281 ~ 1288)

1283 ~ 1286は杯部に段を有し、口縁部は外方に大きく開いている。脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲して外方に開いている。1284は裾部の屈曲は緩やかで短く広がる。1285は中でも大振りで、口縁端部が外反している。1281は杯部高は4.1cmと浅く、内底部には断面三角形の凸帯が巡っている。1281は杯部は椀型を呈している。

小形丸底壺(Fig.152-1289 ~ 1291)

1289、1290底部は丸底で胴部はやや球胴状を呈している。頸部から口縁部は外方に長く伸びる。口縁部と胴部はほぼ同径である。内面には指頭が顕著である。1291は口縁部が欠損している。胴部は球胴状を呈している。

壺(Fig.152-1292.1294.1295.1298)

1291、1294、1295は二重口縁壺である。口縁部は外反して伸びた後、屈曲して外反している。端部は丸くおさめる。外面に横方向のハケ調整がみられる。1297は外方に屈曲しており、端部はやや肥厚させている。内外面にはハケ調整がみられる。

甕(Fig.152-1293.1296.1297.1299 ~ 1306.1309 ~ 1320)

1293は口縁部のみであるが、端部は平坦でやや外反させている。1299は底部は平底で胴部は上方に直立気味に伸び、頸部に至り、口縁部は短く外反する。粘土接合痕と指頭調整が顕著である。1300は胴上部に最大径をもつ小型の甕で、頸部から口縁部は屈曲している1301は胴部は球胴状に張り、頸部から口縁部は屈曲して伸びる。口縁端部は強いナデにより内傾している。頸部から胴部外面には斜位方向のハケ調整がなされ、内面には一部ヘラナデがみられる。1302 ~ 1304は胴部が球胴に張り、頸部から口縁部は外反する。1350は内外面にはヘラ削りが顕著である。1305は底部は尖底気味の丸底で、外面にはタタキの後ハケ調整がなされる。口縁部内面にはハケ、胴部内面には指ナデが顕著である。1306、1310は胴部は球胴状に張り、頸部から口縁部は外反する。1309は胴部は球胴を呈すると思われ、頸部から口縁部は直立して上方に伸びる。1311は頸部と口縁部の境が緩やかで、端部のみ外反させている。内面にはヘラ削りが顕著に残る。1313は口縁部に最大径をもつ甕で、口縁部は強く外反している。1314は胴部は球胴状を呈し、口縁部は外反する。外面にはタタキの後ハケ調整がなされている。1316は口縁部と胴部はほぼ同径で、頸部から口縁部にかけて指頭が顕著に残っている。1317 ~ 1319は胴部は球胴状を呈すると思われ、口縁部は外反する。1320は頸部から底部にかけ残存している。底部外面にはタタキ目が一部残る。

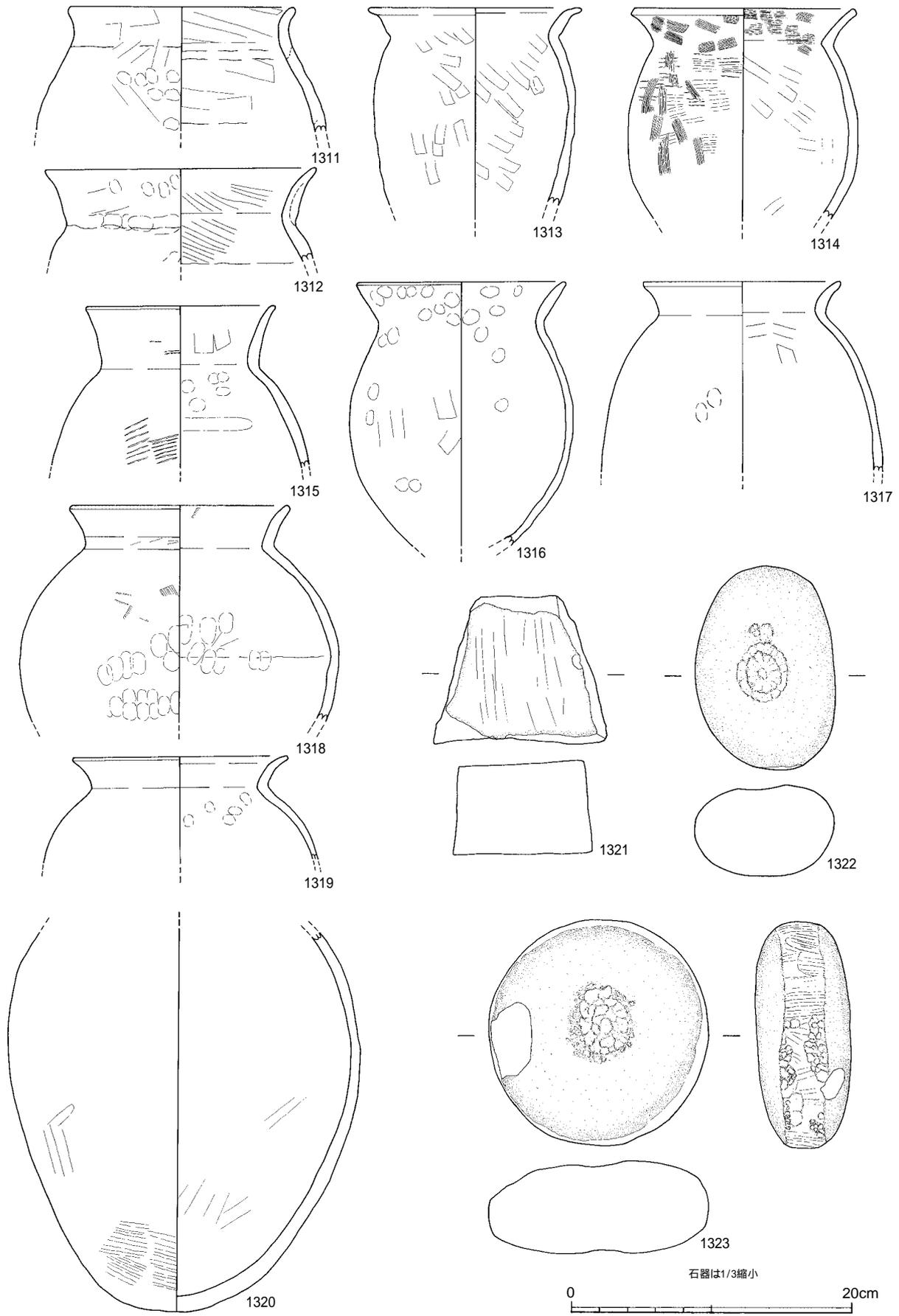


Fig.154 ・ 層出土遺物実測図4(区)

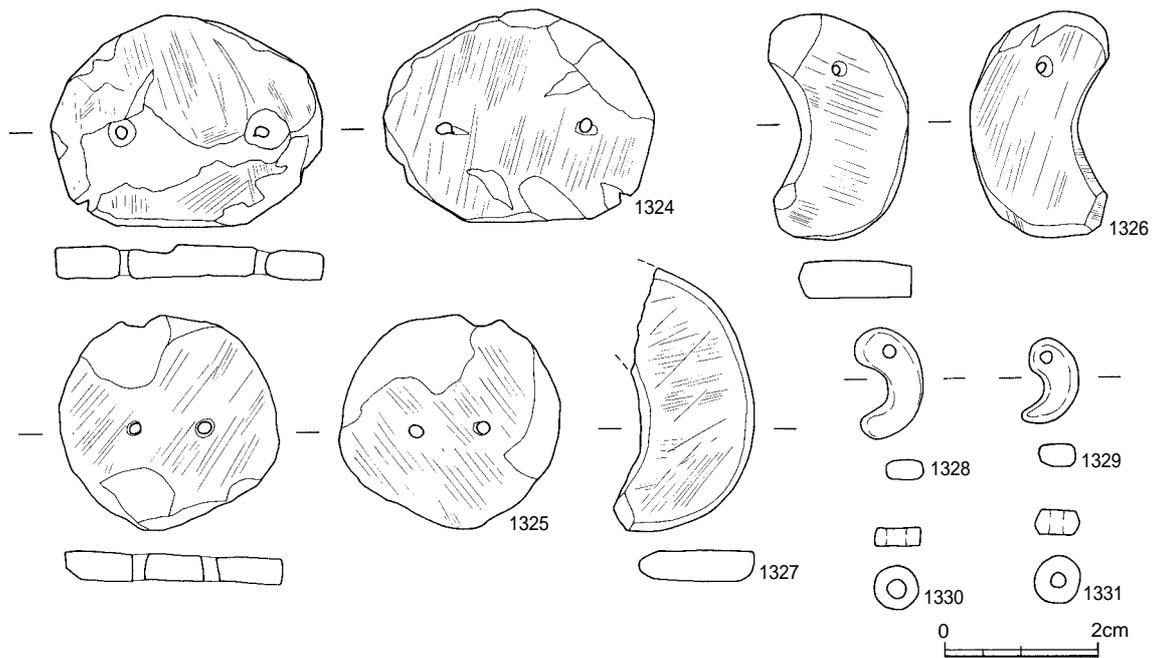


Fig.155 層出土遺物実測図5(区)

甑(Fig.153-1307.1308)

1307は体部は内湾しながら伸び口縁部に至る。底部には焼成前の直径約1.5cmを測る円孔がなされている。内面は煤けている。1308は底部は平底に近く、口縁部は外上方に直線的に伸びる。底部に焼成前の直径約1.8cmを測る円孔がなされている。外面は一部煤ける。

手捏ね土器(Fig.152-1270.1271)

1270は底部は丸底で口縁部にかけてはやや内湾している。1271は底部は平底を呈し、口縁部にかけては直立し、端部が僅かに内湾している。

石製品

石製品では有孔石製円板2点、石製勾玉4点、白玉2点が出土している。

有孔石製円板(Fig.155-1324.1325)

1324は3.5×2.8cmを測りやや楕円状を呈している。直径3mmの円孔が2箇所みられる。1325は2.8×2.8cmを測り、円形を呈している。中央には直径2mmの円孔が2箇所みられる。

石製勾玉(Fig.155-1326～1329)

1326は全長3cm、全幅1.4cm、全厚5mmを測る。上部には直径2mmの円孔が施されている。1327は上部が欠損しているが、1326とほぼ同形態を呈すると考えられる。1328は全長1.5cm、全厚2mmを測る小型の勾玉である。上部には直径1mmを測る円孔が施されている。1329もほぼ同形態の勾玉で全長1.2cm、全厚3mmを測り、上部には直径1mmの円孔が施される。

白玉(Fig.155-1330.1331)

直径6mm、全厚2～3mm、孔径2～3mm程度を測る。滑石製の白玉である。

石器(Fig.154-1321～1323)

1323は中央部にが敲打痕がみられ、側縁全周にも敲打痕が認められる。1322は中央部にのみ敲打痕が認められる。1321は表面を磨いており、砥石と考えられる。

Fig-挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
100-768	SF1	弥生土器鉢	17	7.85	—	4	胎土には長石を含む。橙色5YR6/6	底部は平底、口縁部は大きく開く。外面はタタキ及びハケ、内面は縦状のハケ、内底面は指頭。
" -769	"	弥生土器鉢	—	-4.7	—	4	胎土には砂粒を多く含む。にぶい黄橙色10YR7/3	体部外面はタタキ、外底面はタタキ及びナデ、内面はナデ調整。
" -770	"	土師器高杯	—	-6.7	—	11	胎土には砂粒を多く含む。にぶい橙色7.5YR7/4	杯部は欠損。裾部は屈曲して開く。外面が指頭及びナデ、内面はナデ調整。
" -771	"	土師器高杯	—	-5.9	—	—	胎土には砂粒を含む。橙色5YR7/6	杯底部間で剥離。裾部は欠損。内外面はナデ調整。
" -772	"	土師器高杯	—	-5.7	—	11.5	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	裾部は強く屈曲して伸びる。内外面ナデ調整。
" -773	"	手捏ね土器	—	-10.1	—	2.6	胎土には砂粒を多く含む。橙色2.5YR6/6	口縁部は欠損。外面はヘラナデ及び指ナデ、内面は指頭及びナデ調整。
" -774	"	土師器高杯	27	-7.3	—	—	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。明赤褐色5YR5/6	外方に大きく開き端部は外反する。内外面はナデ。
" -775	"	土師器甕	—	-12.5	—	2.2	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色10YR7/2	口縁部は欠損。胴部は球胴状を呈す。外底面はハケ及びナデ、内面はナデ調整。胴部外面には煤。
" -776	"	弥生土器甕	16.2	-9.1	—	—	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。にぶい橙色5YR7/4	口縁部は外反し外面はタタキ、内面は指頭とナデ。
" -777	"	土師器甕	15.2	20.2	19	—	胎土には砂粒を多く含む。明赤褐色10YR5/6	底部は丸底、胴部は球胴状で内湾して頸部に至る。口縁部はタタキ出し外反する。外面はタタキ整形後ハケ、内面は指頭及びナデ。口縁部外面及び内底面には煤。
" -778	"	土師器甕	14.5	28.1	24.4	4	胎土には赤色礫及び砂粒を多く含む。にぶい橙色7.5YR7/4	底部は丸底、胴部に最大径をもち頸部にかけて内湾する。頸部から口縁部はくの字に外反。口縁部外面はハケとナデ、胴部外面はタタキ後ハケ、内面はヘラナデ及び指ナデ。外面には煤。
" -779	"	土師器甕	17	-11	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	胴部に最大径をもち、口縁部は短く外反する。口縁部外面は一部ハケ、内外面はナデ。
" -780	"	弥生土器甕	—	-13.4	—	2.6	胎土には長石を含む。にぶい橙色5YR6/4	口縁部は欠損。外面にはタタキ後粗いハケ、内面にはハケ及びナデ調整。内底面には指頭。
" -781	"	土師器甕	20	-12	—	—	胎土には長石を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	胴部と口縁部は同径を測る。頸部のくびれは弱く口縁部に至る。内外面とも指頭及びナデ。
" -782	"	土師器甕	—	-8.8	—	2	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色5YR6/4	外面はタタキ及びナデ、内面はナデ調整。
102-783	SF2	土師器椀	12.2	6.4	—	3.3	胎土には砂粒を含む。にぶい黄褐色10YR5/3	扁平な丸底。体部は直線的に伸びる。外面はナデ、内面は指頭及びナデ。
" -784	"	土師器椀	12.6	-5.5	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	口縁部は面取りし、全体に器壁は厚い。外面は指頭及びナデ、内面はナデ。
" -785	"	土師器高杯	—	-10.8	—	10.6	胎土には砂粒を含む。橙色5YR6/6	杯部は屈曲部から口縁部にかけて直線的に伸びる。脚裾部は直線的に開く。内外面共にナデ。
" -786	"	土師器高杯	—	-6	—	—	胎土には砂粒を多く含む。赤褐色5YR5/6	脚部下位には円形の透しあり。内外面ともナデ調整。
" -787	"	土師器高杯	—	-4.8	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	外面はヘラ状のナデ、内面は指ナデ調整。
" -788	"	土師器甕	15.6	-4.4	—	—	胎土には砂粒を含む。橙色7.5YR6/6	外面は指頭及びナデ、内面はナデ調整。
" -789	"	土師器甕	22.4	-8	—	—	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。にぶい橙色7.5YR6/4	口縁部は大きく外反する。外面はタタキ整形後ナデ、内面は指頭及びナデ。外面には煤。
" -790	"	土師器甕	17.6	-10.7	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。褐色7.5YR4/3	胴部に最大径をもち、口縁部は直立する。口縁部外面は指頭及びハケ、体部はタタキ整形。内面はヘラナデ及び指ナデ。外面には煤。
" -791	"	土師器甕	15	-14.8	—	—	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。にぶい橙色7.5YR6/4	胴部に最大径をもち、口縁部は直立して伸びる。内外面はナデ。

Tab.43 遺物観察表1

(- 数値は残存値)

Fig-挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
102-792	SF2	土師器甕	—	-18.1	—	—	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は丸底。胴部は内湾しながら伸び、最大径を呈する。791と同一個体。
" -793	"	土師器甕	14.4	22.7	20.6	1.5	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は扁平な丸底、胴部は球胴状を呈し、口縁部は外反する。口縁部外面は指頭とナデ、体部は粗いハケ、口縁部内面は横ハケとナデ、体部は粗いハケ調整。
" -794	"	土師器甕	17	-11.8	—	—	胎土には角閃石を含む。灰褐色7.5YR5/2	口縁部に最大径を持ち、大きく外反する。口縁部外面は指頭及びナデ、体部外面はタタキ整形及びハケ、内面はハケ及びナデ。
105-797	SF3	手捏ね土器	5.7	4.4	—	1	胎土には砂粒を多く含む。にぶい黄橙色10YR7/4	指押し成形。内面は指ナデ。
" -798	"	手捏ね土器	5.1	4.6	—	1.5	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	指押し成形。内面は指ナデ。
" -799	"	手捏ね土器	4.9	4.1	—	2.6	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	内外面はヘラ削り及びナデ調整。
" -800	"	手捏ね土器	5.3	4.8	—	—	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。橙色10YR6/4	指押し成形。口縁部は粘土紐貼付。内面は指押し及びナデ。
" -801	"	手捏ね土器	5.5	5.6	—	—	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。橙色10YR7/4	指押し成形。口縁部は粘土紐貼付。内面は指押し及びナデ。
" -802	"	須恵器杯身	10.8	-3.1	—	—	胎土には白色砂粒を含む。灰白色N7/	立上がりは内傾して伸び、受部は外方に伸びる。内外面は回転ナデ。
" -803	"	土師器椀	13	6.5	—	1	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR7/4	底部は丸底。口縁部は内湾する。内外面はナデ。
" -804	"	土師器椀	14	6.5	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR6/3	底部は丸底。口縁部は内湾する。外面はヘラナデ及び指頭。
" -805	"	須恵器甕	21.2	-5.7	—	—	にぶい赤褐色7YR5/3	口縁部は外反し、口縁下には二条の稜が巡る。稜間には波状文が巡る。内面には回転ナデ。
" -806	"	土師器高杯	14.6	-5.4	—	—	胎土には砂粒を多く含む。にぶい橙色5YR6/4	杯部は椀状を呈す。内外面はナデ。
" -807	"	土師器高杯	16.3	-6	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	杯底部は凸状を呈す。内外面はナデ。
" -808	"	土師器高杯	17.8	-5.1	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR7/6	口縁部は大きく外方に開く。口縁部外面はナデ。
" -809	"	土師器鉢	12	-4.9	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR7/6	内外面はやや磨耗している。
" -810	"	土師器高杯	18	-7.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	口縁部は外方に直線的に伸びる。内外面はナデ。
" -811	"	土師器高杯	18	8.2	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/8	杯部は深く、口縁部は直線的に伸びる。内外面はナデ。
" -812	"	土師器高杯	—	-9.1	—	12.2	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR7/3	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲して伸びる。内面はヘラナデ及びナデ。
" -813	"	土師器高杯	—	-7.4	—	13.4	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し外方に緩やかに伸びる。脚部内面はヘラケズリ及びナデ。
" -814	"	土師器高杯	—	-5.3	—	11.5	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。にぶい黄橙色10YR6/4	裾部まで屈曲せずそのまま伸びる。内面は指ナデ。
" -815	"	小型甕	11	11.1	12	2	胎土には砂粒を含む。黄灰色2.5Y5/1	底部から胴部はやや丸みをもち、頸部から口縁部は上方に伸びる。内外面は磨耗。
" -816	"	小型甕	9.5	10.5	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部から頸部下にかけてやや膨らみ、頸部から口縁部にかけて、外方に短く伸びる。外面は指頭及びナデ、内面はヘラケズリ及びナデ。内底部には煤。
" -817	"	小型甕	9.4	10.4	—	5.6	胎土には砂粒を含む。明赤褐色2.5YR5/8	底部は平底、頸部下に最大径を持ち、口縁部は直立して伸びる。外面は指頭。内面は強い指ナデ。

Tab.44 遺物観察表2

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
105-818	SF3	直口壺	11.2	15.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR7/6	胴部は球胴状に大きく張り、頸部から口縁部は上方に直線的に伸びる。内外面はナデ。
" -819	"	土師器甕	13	-7.6	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。黄灰色2.5Y5/1	頸部から口縁部は上方にやや直立して伸びる。内面は指頭及びナデ。
" -820	"	土師器甕	14	8.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	頸部から口縁部は外方に短く伸びる。内外面ナデ。外面には煤。
" -821	"	土師器甕	11.8	-14.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR6/4	胴部は球形を呈し、頸部から口縁部は上方に短く伸びる外面には一部タタキ痕が残し、指頭が顕著。
" -822	"	土師器甕	13.5	18.8	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	底部は丸底、胴部は丸みを持ちながら伸び頸部に至る。頸部から口縁部は上方に伸びる。内外面は指頭及びヘラナデ。
108-828	SF4	須恵器杯身	13	-3	—	—	胎土には白色砂粒を含む。灰色N6/	立上がりは斜め上方に伸び、受部は外上方にやや伸びる。内外面回転ナデ。
" -829	"	手捏ね土器	8.6	5.7	—	5.7	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR6/4	底部外面は指押し、内底面には指ナデ。
" -830	"	土師器甕	23.7	-11.5	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR6/4	頸部から口縁部は屈曲し外方に伸びる。外面はナデ、内面は指ナデ、一部ヘラケズリ。外面には煤。
" -831	"	土師器高杯	17.4	7	—	11	胎土には砂粒を含む。橙色7.5YR7/6	杯部は外方に大きく開き、端部は外反する。脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し緩やかに伸びる。杯部内外面はナデ、脚部との接合部は指押し。脚部内外面はナデ。
" -832	"	小型丸底壺	9	9.5	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は丸底、頸部から口縁部は外方に直線的に伸びる。内面は指ナデ。
" -833	"	土師器高杯	—	-5.8	—	10.6	胎土には砂粒を含む。浅黄色2.5Y8/3	脚部は柱状を呈し、短く伸びる。裾部は屈曲し、緩やかに伸びる。
" -834	"	土師器高杯	—	-6	—	10.2	胎土には砂粒を含む。橙色5YR6/6	脚部は柱状を呈し、短く伸びる。裾部は屈曲し外方に伸びる。外面はナデ。内面はヘラケズリ及び指ナデ。
" -835	"	甗	—	-3.9	—	—	胎土には砂粒を含む。浅黄色2.5Y7/3	底部には焼成前の施孔。内面にはヘラケズリ及びナデ。
" -836	"	土師器高杯	—	-6.4	—	10.5	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰黄色2.5Y6/2	脚裾部は大きく開く。脚部外面にはタタキ、内面にはヘラケズリ及びナデ。
" -837	"	土師器高杯	—	-6.9	—	10.6	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	脚部は緩やかに伸びる。外面は板状の圧痕あり。内面には指頭及びナデ。
" -838	"	土師器甕	17	21	19	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR7/6	胎土には砂粒及び小礫を含む。胴部に最大径をもち、頸部から口縁部は外方に屈曲する。外面はヘラナデ及び指頭。頸部内面は指押し、胴部内面はヘラナデ。
110-839	SF5	土製模造鏡	全長 6.05	全幅 5.48	全厚 3.2	—	橙色2.5YR6/8	一部剥離する。全体に厚みをもち、把手部分には3mmの孔あり。
" -840	"	手捏ね土器	7.2	5.5	—	4	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は平底。内外面は指押し成形。
" -841	"	手捏ね土器	6.2	4.8	—	4	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	底部は平底。内外面には指頭及びナデ。
" -842	"	土師器椀	13.4	6	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	底部は丸底。口縁部は内湾する。
" -843	"	須恵器杯蓋	12.7	4.85	—	—	青灰色5PB6/1	天井部は丸みをもち、稜部は断面三角形を呈し、口縁端部は内傾する。天井部約1/2まで回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデ。
" -844	"	須恵器甕	8.8	9.3	—	—	暗青灰色5B4/1	口縁下には1条の稜が巡り、口唇部は平坦面を呈す。胴部には2条の刻目が巡り、稜部の上下には波状文が巡る。
" -845	"	須恵器甕	12.2	16.3	—	2	灰色5Y5/1	口縁下には断面三角形の稜が巡り、口唇部はやや内傾する。稜下と胴部には波状文が巡る。内底部には施孔時の粘土が貼り付く。

Tab.45 遺物観察表3

(- 数値は残存値)

Fig-挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
110-846	SF5	土師器高杯	15.7	11.9	—	11	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	杯部は外方に大きく開き、端部はやや外反する。脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し緩やかに伸びる。杯部内外面はナデ。脚部内面はヘラケズリ及びナデ。
" -847	"	土師器高杯	12.5	12.3	—	10.9	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR7/6	杯部は大きく開き、口縁部はやや外反する。脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲して外方に伸びる。杯部内外面はナデ。脚部内面はヘラケズリ及びナデ。
" -848	"	土師器高杯	15.6	12	—	10.9	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR7/6	杯部は深く、口縁部は外方に開く。脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し緩やかに伸びる。杯部内面はヘラケズリ及びナデ。内外面はナデ。
" -849	"	土師器高杯	—	-6.7	—	11	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR7/6	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し外方に伸びる。内面はヘラケズリ及びナデ。
" -850	"	土師器高杯	—	-6.4	—	5.8	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR7/6	脚部は短い柱状を呈し、裾部は屈曲し、外方に伸びる。内外面は指頭及びナデ。
" -851	"	小型丸底壺	—	-6.6	—	3	胎土には砂粒及び小礫を含む。浅黄橙色10YR8/3	胴部は球形状を呈す。外面はナデ、内面は指ナデ。外面には煤。
" -852	"	土師器甕	13	15.4	16.2	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	胴部は球形状を呈し、頸部から口縁部は短く直立する。外面はナデ、内面はヘラケズリ及びナデ、一部ハケ状のナデ。
" -853	"	土師器甕	10.6	13.2	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	胴部はやや丸みをもち、頸部から口縁部は直立して伸びる。外底部はヘラケズリ及び指頭。内面はヘラケズリ及びナデ。
" -854	"	土師器甕	—	-16	—	2.4	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	底部は丸底、胴部は丸みをもち伸びる。外面は指頭及びナデ。内面はヘラケズリ及びナデ、内底部にはハケ。
" -855	"	土師器甕	18.8	-12.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	全体に器壁が薄く、頸部から口縁部は屈曲し外方に伸びる。内外面は指頭及びナデ。
111-856	土器集中26	甕	19.3	19.2	—	1.6	砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	丸底の底部から胴部は内湾しながら頸部に至る。口縁部は頸部からくの字状に屈曲する。口縁部に最大径を持つ。体部外面はタタキ後縦方向のハケ。内面は横位のハケ及びナデ。
" -857	"	甕	15.6	-5.8	—	—	砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR7/4	頸部から口縁部にかけて緩やかに屈曲する。外面はタタキ後ナデ。内面はハケ及びナデ。
" -858	"	甕	8.5	9.3	9.2	—	石英他砂粒を多く含む。にぶい黄褐色10YR7/4	底部は丸底を呈し、胴部は内湾して伸びる。頸部から口縁部は短く伸びる。口縁部外面はタタキ後ナデ、下半はヘラ状のナデ。内面はナデ。
" -859	"	壺	10.8	-5.2	—	—	石英他砂粒を多く含む。にぶい赤褐色5YR5/4	口縁部は直線的に伸び、口縁下には段をなす。外面にはナデ、内面には指頭及びナデ。
" -860	"	甕	—	-3.2	—	1.2	砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	底部丸底。内底には指頭及びナデ。
" -861	"	甕	—	-18.3	16.7	3.5	胎土には砂粒を含む。にぶい黄褐色10YR6/3	底部は扁平な平底、胴部はやや膨らむ。外面はタタキ後ナデ、内面はナデ、内底面は指頭。
" -862	"	甕	16	-11.3	—	—	砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色5YR6/3	胴部は球形状に張り、頸部から口縁部は屈曲する。体部外面はタタキ後ナデ、口縁部外面は強いナデ。内面は指ナデ。外面には煤。
" -863	"	甕	13.9	24.7	20	3	石英他小礫を多く含む。にぶい褐色7.5YR5/3	底部は丸底、胴部に最大径を持ち、頸部から口縁部は緩やかに伸びる。口縁部から頸部外面はタタキ後ハケ及びナデ。内面はハケ及びナデ。外面には煤。
" -864	"	甕	—	-20.3	—	1.6	砂粒及び小礫を含む。にぶい赤褐色5YR5/4	底部は丸底。外面はタタキ後ナデ、内面には指ナデ。体部外面には煤が著しい。
" -865	"	甕	—	-14.5	—	3.3	石英他小礫を多く含む。明赤褐色5YR5/6	底部は平底、外面にはタタキ後ハケ調整、内面にはハケ調整。
112-866	土器集中27	土師器椀	13.9	5.2	—	2.3	胎土には砂粒を含む。灰黄褐色10YR6/3	底部は丸底、口縁部にかけて内湾する。外面にはヘラ状工具痕あり。
" -867	"	土師器甕	17.7	-6.1	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	口縁部は強く外反する。頸部には指頭が顕著。
" -868	"	土師器甕	19.2	-7.2	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色10YR7/2	口縁部は強く外反する。外面にはタタキ整形。

Tab.46 遺物観察表4

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
113-870	土器集中 28	土師器椀	11.4	5.2	—	5	胎土には砂粒を含む。 橙色7.5YR7/6	底部は平底、口縁部にかけて内湾する。
" -871	"	土師器椀	10.3	5	—	3.8	胎土には砂粒を含む。 にぶい橙色5YR7/3	底部は平底、口縁部は外方に伸びる。内面には ヘラケズリ及び指ナデ。
" -872	"	土師器甕	—	-4.3	—	4.6	胎土には砂粒及び小礫 を含む。灰白色2.5Y8/1	底部は平底、内底部にはヘラナデ。
" -873	"	土師器甕	18.6	-14	—	—	胎土には砂粒及び小礫 を含む。にぶい橙色7.5 YR6/4	頸部から口縁部は上方に直立して伸びる。外面 にはヘラケズリ及びナデ。
" -874	"	土師器甕	16.2	-21.5	18.2	—	胎土には砂粒及び小礫 を含む。にぶい褐色7. 5YR6/3	頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部から 底部外面までタタキ後底部は粗いハケ、内面は ナデ。
" -875	"	土師器甕	15	-12.2	15.6	—	胎土には砂粒及び小礫 を含む。灰褐色5YR4/2	口縁部はタタキ出し成形。口縁部は短く外反す る。外面には煤、内面は指ナデ。
115-876	土器集中 29	須恵器杯身	—	-3.8	—	—	胎土には白色砂粒を含 む。灰色N5/	受部は断面三角形外方に伸びる。底部1/3は回 転ヘラケズリ。内外面は回転ナデ。
" -877	"	土師器椀	12.7	-5.3	—	—	胎土には砂粒を含む。 にぶい黄橙色10YR7/3	底部は丸底。体部から口縁部は内湾する。外面 はナデ。
" -878	"	土師器椀	12.8	6.3	—	—	胎土には砂粒を含む。 にぶい橙色7.5YR6/4	底部は丸底、体部から口縁部は内湾する。内底 部にはヘラ状痕がみられる。
" -879	"	土師器高杯	—	-6.1	—	10.9	胎土には砂粒を含む。 橙色7.5YR6/6	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し、伸びる。外 面はケズリ及びナデ。内面にはケズリ及び指 ナデ。
" -880	"	土師器高杯	17.5	11.5	—	11.1	胎土には砂粒及び小礫 を含む。橙色5YR6/6	杯部は外方に大きく開き、脚部は柱状を呈し、 裾部は屈曲し伸びる。杯部内面はナデ、脚部外 面はナデ、内面はヘラケズリ及びナデ。
" -881	"	土師器高杯	—	-6	—	11.5	胎土には砂粒を含む。 にぶい橙色7.5YR7/4	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲して伸びる。内 面はヘラケズリ及びナデ。
" -882	"	土師器高杯	—	-6.5	—	10.3	胎土には砂粒及び小礫 を含む。橙色5YR6/6	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し短く伸びる。 内面はケズリ及びナデ。
116-883	区 層	須恵器杯身	10.4	-4.5	受部径 12.4	—	灰色N6/	受部は断面三角形を呈し、立ち上がりは内傾し て伸びる。端部は浅い凹状を呈する。底部外面 には回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。
" -884	"	須恵器杯身	9.75	4.65	受部径 12.6	—	灰色N6/	受部は断面三角形を呈し、立ち上がりは内傾し て伸びる。端部は丸くおさめる。底部外面には 回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。内底面には 不定方向のナデ。
" -885	"	須恵器杯身	11.1	5	受部径 13	—	灰色N6/	受部は断面三角形を呈し、横方向に伸びる。立 ち上がりは直立して伸び、端部は内傾する。底 部外面には回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。
" -886	"	須恵器杯身	10	4	受部径 13	7	灰色N6/	受部は断面三角形を呈し、横方向に伸びる。立 ち上がりは直立して伸び、端部は丸くおさめる。 底部外面約1/3には回転ヘラケズリ、内面は回 転ナデ。
" -887	"	須恵器杯身	10.4	5.6	受部径 13	3.1	灰白色N7/	受部は断面三角形を呈し、立ち上がりは内傾し て伸びる。端部は丸くおさめる。底部外面には 回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。
" -888	"	須恵器杯身	13.2	4.9	受部径 15.8	—	灰色N5/	受部は断面三角形を呈し、立ち上がりは内傾し て短く伸びる。端部は平坦面をなす。底部外面 には回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。
" -889	"	須恵器杯身	12	5.2	受部径 14.6	—	灰色N5/	受部はやや厚みもち、斜め上方に伸びる。立 ち上がりは内傾して短く伸びる。底部外面は約 1/3まで回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。
" -890	区 層 上面	須恵器杯身	14	3	受部径 14.6	—	灰色N6/	立ち上がりは内傾して短く伸び、端部は丸くお さめる。内外面回転ナデ。
" -891	区 層	須恵器提瓶	—	-8.8	受部径 16	—	灰色N5/	外面にはカキ目がみられる。
" -892	"	須恵器 短頸壺	8.8	12.5	—	—	灰色N5/	底部は丸底、同上部にかけ膨らむ。頸部から口 縁部にかけて直立して上方に短く伸びる。底部 外面には格子状のタタキ、口縁部内外面はナデ、 内底部にはヘラケズリ。

Tab.47 遺物観察表5

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
116-893	区 層	須恵器甗	8.25	11.65	—	—	灰白色2.5Y	口縁部は屈曲して外上方に開く。端部は内傾する。胴部中央には直径1.2cmの円孔がなされる。内外面は摩耗著しい。
117-894	"	手捏ね土器	5.2	3.2	—	1.5	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	底部は丸底、口縁部は内湾する。外面は指押し成形、内面にはナデ。
"-895	"	手捏ね土器	4.7	3.1	—	1.4	胎土には砂粒及び小礫を含む。明赤褐色5YR5/6	底部は丸底、口縁部は内湾する。内外面は指押し成形。
"-896	"	手捏ね土器	5.6	4.5	—	4	胎土には砂粒を含む。赤褐色5YR4/6	底部は平底、口縁部は外上方に伸びる。内外面指押し成形で粘土接合痕が顕著である。
"-897	"	手捏ね土器	5.7	4.2	—	3	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR6/4	底部は平底、口縁部は外上方に伸びる。内外面指押し成形。
"-898	"	手捏ね土器	4.05	4.8	—	—	胎土には砂粒を含む。灰白色2.5Y7/1	口縁部は屈曲して上方に直立する。内外面指押し成形、内面は指ナデ。
"-899	"	手捏ね土器	7	6	—	3.4	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰白色7.5Y6/1	口縁部は粘土紐を貼付し肥厚させている。内外面指押し成形。内面にはナデ。
"-900	"	手捏ね土器	7.2	5.9	—	3.6	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR7/6	底部は平底、口縁部は外上方に伸びる。内外面にはナデ。外面は煤けている。
"-901	"	手捏ね土器	6.5	6.45	—	3.6	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	口縁部は屈曲して上方に直立する。内外面指押し成形、内面は指ナデ。
"-902	"	手捏ね土器	7.3	7.5	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/8	口縁部は屈曲して外上方に短く伸びる。内外面はナデ。
"-903	"	土師器椀	12	5.5	—	4	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	底部は平底に近い。口縁部にかけて内湾する。底部外面にはタタキ後ヘラナデ。
"-904	"	土師器椀	11.25	5.9	—	2.5	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR7/4	底部は扁平な平底、口縁部にかけて内湾する。内外面はナデ。
"-905	"	土師器椀	13.6	6.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR7/6	底部は丸底、口縁部は外上方に伸びる。内外面指頭及びナデ。
"-906	"	土師器鉢	16.4	8.9	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色5YR6/4	底部は丸底、口縁部にかへ内湾する。外面はタタキ整形後ヘラ状の細かいナデ、内面にはハケ調整。
"-907	"	土師器高杯	18	-6.5	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	杯部は段を呈し、口縁部は外方に開く。内外面はナデ。
"-908	"	土師器高杯	17.8	-6.5	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色2.5YR6/4	杯部は椀型を呈し、口縁部は外方に伸びる。内外面は指頭及びナデ。
"-909	"	土師器高杯	—	-11.3	—	10.4	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲してやや内傾気味に伸びる。内外面ナデ。
"-910	"	土師器高杯	—	-7.2	—	13	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲して外方に伸びる。内外面はナデ。
"-911	"	土師器高杯	—	-6.1	—	9.3	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR7/3	脚部は短い柱状を呈し、裾部屈曲して短く伸びる。内外面ナデ。
"-912	"	土師器高杯	—	-11.7	—	9.2	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	脚部から裾部にかけて緩やかに伸びる。杯部、脚部内面はヘラナデ。
"-913	区 下層	土師器高杯	—	-7.1	—	11.2	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	裾部の屈曲は緩やかで、裾部は外方に広がる。内外面はナデ。
"-914	"	土師器高杯	—	-8	—	11.4	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR7/6	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲して外方に伸びる。外面は指頭及びナデ、内面には指ナデ。
"-915	区 層	小型丸底壺	7.8	12.1	—	2	胎土には砂粒を含む。橙色7.5YR7/6	底部は丸底、胴部は球形を呈し口縁部は直立して外上方に伸びる。内外面はナデ。
"-916	区 層	土師器甕	14.3	-13.8	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR7/3	胴部は球形を呈し、頸部から口縁部にかけて屈曲し、外上方に伸びる。口縁部内外面は指頭及びナデ、胴部内外面にはヘラナデ。外面には煤。

Tab.48 遺物観察表6

(- 数値は残存値)

Fig-挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
117-917	区下層	土師器甕	14.6	-15.2	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	胴部は球形に膨らみ、頸部から口縁部は屈曲し、外上方に伸びる。口縁部外面はハケ及びナデ、胴部にはタタキ後ハケ。内面はヘラケズリ及びナデ。
" -918	区層	土師器甕	14.7	-2.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色5YR7/3	胴部は球形を呈し、頸部から口縁部は屈曲し外上方に伸びる。内面にはヘラナデ。
" -919	区下層	土師器甕	15	-11.6	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/8	胴部は球形を呈すると思われ、頸部から口縁部は外方に強く屈曲する。胴部外面には平行のタタキ、内面は指頭が顕著である。
" -920	区層	土師器甕	15.1	-12.3	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	胴部は球形を呈すると思われ。頸部から口縁部は外方に強く屈曲し、外上方に伸びる。外面は指頭及びナデ、内面はヘラケズリとナデ。
118-921	区下層	土師器甕	17.1	-12.8	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	胴部は球形を呈し、頸部から口縁部は屈曲して外上方に伸びる。外面には一部タタキ痕が残る。内面にはヘラケズリ及びナデ。内外面には煤。
" -922	"	土師器甕	14.8	-11.7	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	胴部は球形を呈し、頸部から口縁部は屈曲し外上方に伸びる。外面は剥離しており、調整は不明瞭。内面は頸部から胴部にかけて指ナデ。
" -923	区層	土師器甕	18	-14.75	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	口縁部は頸部から屈曲して外方に伸びる。胴部外面にはタタキ後ナデ、内面には指ナデ。外面には煤。
" -924	区層	土師器甕	17.2	-18.4	20.8	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	胴部に最大径を持ち、口縁部は頸部から屈曲し、上方に伸びる。内面には指頭。
" -925	"	土師器甕	19.3	23.3	21	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR7/3	底部は丸底、口縁部と胴部はほぼ同径を呈し、頸部から口縁部は屈曲して外方に伸びる。内外面は指頭及びナデ。内外面とも接合痕が顕著。
" -926	"	土師器甕	17	-23.1	21	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR6/3	胴部は球胴状に膨らみ、口縁部は屈曲して外方に短く伸びる。内外面とも指頭及びナデ。
" -927	"	土師器甕	17.3	28.9	24.2	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色5YR6/4	底部は丸底、胴部に最大径を持ち球胴形に近い。口縁部は屈曲し、外上方に伸びる。口縁部内面はヘラナデ、胴部内面はヘラケズリ。
" -928	"	土師器甕	17	26.2	20	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR6/4	底部は丸底、口縁部と胴部はほぼ同径で、口縁部は屈曲し外上方に伸びる。内外面は指頭及びナデ。
119-929	区層	土師器甕	—	-13.6	12.4	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	底部は丸底で、胴部は球形に膨らみ頸部に至る。内外面にはハケ、内底部には指ナデ。
" -930	"	土師器甕	11.6	16.3	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	底部は丸底、胴部は膨らむ。口縁部はタタキ出し、短く外反する。外面には平行タタキ後ハケ、内面には指頭及びナデ。
" -931	区下層	土師器甕	16	21.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	底部は丸底、胴部と口縁部はほぼ同径である。口縁部は屈曲して外上方に長く伸びる。外面にはタタキ後ヘラナデ。内面にはヘラケズリ及びナデ。
" -932	区層	土師器甕	15.8	-13	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色2.5YR6/4	胴上部に最大径を持ち、口縁部は屈曲して外上方に伸びる。口縁部内外面はナデ。
" -933	区下層	甌	17.3	9.1	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は丸底で口縁部は内湾する。中央部からややずれて円孔がなされる。底部外面は指頭及びヘラナデ、内面にはハケ。
" -934	区下層	土師器甕	18.8	25.7	20	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	底部は丸底、胴部と口縁部はほぼ同径を呈する。口縁部は屈曲して外上方に伸びる。内面にはヘラケズリ及びナデ。外面には煤。
122-960	SF6	小型丸底壺	9.1	7.8	8.2	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	底部は丸底、胴部は球胴状を呈し、口縁部は大きく開く。底部外面タタキ後ナデ、内面は指押しが顕著。
" -961	"	小型丸底壺	10.1	9.5	10.1	4.1	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	底部は平底を呈し、胴部は球胴状に膨らむ。口縁部は外方に大きく開く。外面は指頭及びナデ。内面はヘラケズリ及びナデ。
" -962	"	小型丸底壺	8.6	10.4	—	2	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR7/3	胴部は球形を呈し、口縁部は頸部から上方に直線的に伸びる。外面はナデ、内面は指頭及びナデ。

Tab.49 遺物観察表7

(- 数値は残存値)

Fig-挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
122-963	SF6	小型甕	12.9	-11.4	13.1	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR7/3	底部は欠損。頸部直下に最大径をもち頸部から口縁部は緩やかに外方に伸びる。外面はナデ、頸部内面は指押し。外面には煤。
" -964	"	土師器高杯	17.9	-5.7	—	—	胎土には砂粒を含む。橙色5YR6/6	脚部は欠損。浅い椀型の形態を呈する。口縁部外面は横ナデ、下半は粗いハケ、内面には一部粗いハケ調整。外面には煤。
" -965	"	土師器高杯	16.4	-4.8	—	—	胎土には砂粒を含む。灰黄褐色10YR6/2	脚部は欠損。杯部は浅い椀型を呈し、口縁部は外方に直線的に伸びる。内外面は磨耗。
" -966	"	土師器高杯	16.2	11.1	—	10.8	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/3	杯部は浅い椀型を呈し、口縁部は外方に直線的に伸びる。脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し緩やかに伸びる。外面はハケ及びナデ、杯部内面はナデ、内底面はヘラナデ、脚部内面は指押し及びヘラナデ。
" -967	"	土師器高杯	—	-7.4	—	13.8	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色5YR7/4	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲して伸びる。外面は指頭及びナデ、内面はヘラケズリ及びナデ。
" -969	"	土師器高杯	—	-5.9	—	9.2	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰黄色2.5Y7/2	脚部は短く、器壁が厚い。裾部は緩やかに屈曲し伸びる。外面はナデ、内面は指頭及びナデ。
" -970	"	壺	15	-5.2	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	口縁部のみ残存。口縁部は直立して伸びる。外面はナデ、内面はケズリ及びナデ。
" -971	"	壺	18	-6	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい黄褐色10YR5/3	口縁部は外上方に直線的に伸びる。外面は磨耗、内面はハケ。内面には煤。
" -972	"	土師器甕	11.2	-15.1	16.3	—	胎土には砂粒を多く含む。暗灰黄色2.5Y5/2	底部は欠損。胴部は球胴状を呈し、頸部にかけて湾曲する。口縁部は直立して伸びる。端部は平坦面をなす。口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は斜位方向の細かいハケ、内面には強い指ナデ。
" -973	"	土師器甕	16.4	-4	—	—	胎土には砂粒を含む。黒色10YR2/1	外面はヘラケズリ及びナデ、内面はヘラナデ。外面には煤。
" -974	"	土師器甕	15.6	-6.5	—	—	胎土には砂粒を含む。橙色7.5YR6/6	頸部から口縁部は短く外反。内外面は指頭及びナデ。
" -975	"	土師器甕	15.6	-10.2	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR6/3	胴部に最大径をもち、頸部から口縁部は直立して伸びる。口縁部外面は指押し、頸部外面は強い横ナデ、外面はヘラナデ。内面はナデ。
" -976	"	土師器甕	—	-6.4	—	5	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰黄褐色10YR6/2	底部は丸底。外面はヘラナデ、内底面は指頭。内面には煤。
124-977	SF7	土師器椀	13.9	5.5	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は丸底。内外面はヘラケズリ及びナデ。
" -978	"	土師器椀	12.7	6.9	—	—	胎土には砂粒を含む。橙色5YR6/6	底部は丸底、体部から口縁部は内湾する。外面は指ナデ。内面はナデ。
" -979	"	土師器椀	12	7.7	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい赤褐色5YR5/4	底部は扁平な丸底。口縁部は外方に直線的に伸びる。外面は粗いハケ。内面にはハケ状のナデ。
" -980	"	土師器高杯	—	-9.3	—	10.9	胎土には砂粒を含む。橙色5YR6/6	脚部は柱状で短く伸び、裾部は屈曲して伸びる。外面はヘラナデ、内面はヘラケズリ及びナデ。
" -981	"	土師器高杯	15	12.2	—	10	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	杯口縁部は外方に直線的に伸びる。脚部は柱状を呈し、裾部は緩やかに屈曲する。杯部内外面はナデ。脚部内面はヘラケズリ及びナデ。
" -982	"	土師器高杯	19	-7.9	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	口縁部は外方に大きく開き外面には強い横ナデ。内面はヘラケズリとナデ。口縁と底部との接合部が顕著。
" -983	"	土師器高杯	—	-7.1	—	10.3	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し外方に伸びる。外面には指ナデ。内面はヘラケズリ及びナデ。
" -984	"	土師器高杯	—	-3	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	杯部はナデ。
" -985	"	土師器高杯	16.5	14.6	—	13	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	杯口縁は上方に直線的に伸び、脚部は柱状に短く伸びる。裾部は屈曲し下方に伸びる。杯外面はナデ、内面はハケ状のナデと指頭。脚部内面はケズリとナデ。
" -986	"	土師器高杯	—	-7.5	—	12.6	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色10YR7/3	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し伸びる。裾端部は面取される。内面にはヘラケズリ及びナデ。

Tab.50 遺物観察表8

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
124-987	SF7	土師器高杯	—	-7	—	11	胎土には砂粒を含む。にぶい赤褐色5YR5/3	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し、短く伸びる。外面はヘラケズリ及びナデ。内面は指ナデ。
" -988	"	土師器壺	12	16.6	15.9	7	胎土には砂粒及び石英を含む。にぶい橙色7.5YR7/4	底部は丸底、胴部は球胴状を呈し、頸部から口縁部は直線的に伸びる。外面には指頭及びヘラナデ。内面はヘラナデ。
125-990	"	土師器壺	—	-11.7	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	底部は丸底、胴部は球胴状を呈する。底部外面は叩き及びナデ、胴部内面には強いヘラ状のケズリ及びナデ。外面には煤。
" -991	"	土師器甕	13.9	14.5	14.7	2.6	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰黄褐色10YR6/2	底部は丸底、胴部は球胴を呈し、頸部から口縁部は外方に短く伸びる。口縁部はヘラ状痕、指頭及びナデ。内面はヘラ状のケズリ及びナデ。
" -992	"	土師器甕	21.8	-16.4	20.2	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰黄褐色10YR4/2	胴部と口縁部はほぼ同径。頸部から口縁部は直立して伸び、端部を折り曲げている。頸部外面は強いナデ、体部外面はヘラナデ。内面はヘラナデ。
" -993	"	土師器甕	17.6	-40	34	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色10YR7/2	胴部は球形状に大きく張る。口縁部は屈曲して外上方に伸びる。底部外面にはハケ、内面には指頭及びナデ。
" -994	"	土師器甕	16.5	-18.7	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR5/3	口縁部と胴部はほぼ同径。頸部から口縁部は屈曲し上方に伸びる。口縁部外面はヘラケズリ及び指頭。外面はヘラナデ。内面はヘラケズリ及びナデ。外面には煤。
" -995	"	土師器甕	14	-9.1	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	頸部から口縁部は直立し短く伸びる。外面にはタタキ状のハケ。内面にはハケとナデ。接合痕が顕著。
" -996	"	土師器甕	12	-12	17.5	—	胎土には砂粒を含む。にぶい黄褐色10YR7/4	胴部は球胴を呈し、頸部から口縁部は上方に直線的に伸びる。端部は平坦である。内外面はナデ。
" -997	"	甕	—	-18	—	4	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR7/6	底部丸底、外面にはタタキ、内底部にはヘラケズリ。外面には煤。
" -998	"	土師器甕	—	-7.5	—	3.4	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色5YR6/4	底部は扁平な丸底。外面はタタキ。内面にはヘラ状痕及び指頭。外面には煤。
" -999	"	土師器甕	—	-13.3	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR5/3	底部は扁平な丸底。内外面はヘラケズリ及びナデ。
" -1000	"	土師器甕	—	-6.7	—	5.6	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰褐色7.5YR6/2	底部は扁平な丸底。内底部は窪む。外面にはヘラケズリ及び指頭。内面にはヘラケズリ及びナデ。
" -1001	"	台付き鉢	—	—	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	脚部との接合部はヘラ状のケズリ。脚部内面指頭とナデ
127-1002	SF8	手捏ね土器	7.1	3.9	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰白色2.5Y8/2	内外面指押し成形。外面はケズリ及びナデ。
" -1003	"	土師器脚付鉢	—	-4.8	—	9.2	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR7/6	底部には断面三角形の脚部あり。内外面とも指押し及びナデ。
" -1004	"	土師器碗	16.3	9.3	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色10YR6/3	底部は丸底、胴部は上方に伸び、頸部から口縁部は緩やかに屈曲する。内外面ともナデ。
" -1005	"	土師器高杯	16.4	-6.7	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	脚部は欠損。杯部は碗型を呈す。内外面は磨耗。
" -1006	"	土師器高杯	—	-6.9	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色10YR7/4	裾部の屈曲は弱く、緩やかに伸びる。内外面ともナデ。
" -1007	"	土師器高杯	—	-6	—	12.4	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR7/6	杯部は欠損。形状は円柱状を呈し、裾部は屈曲して伸びる。外面はナデ、外面はヘラナデ及び指ナデ。
" -1008	"	土師器壺	13.6	-5.8	—	—	胎土には砂粒を多く含む。灰白色2.5Y7/1	口縁部は直立して伸び、端部は平坦面を呈す。内外面は磨耗。
" -1009	"	土師器甕	19	-19	24.9	—	胎土には砂粒を多く含む。灰黄色2.5Y7/2	胴部は球胴状に膨らみ、湾曲しながら頸部に至る。口縁部は外方に屈曲する。端部は平坦をなす。外面は指頭及びハケ状のナデ、内面は指頭及び指ナデ。

Tab.51 遺物観察表9

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
127-1010	SF8	壺	16	-15.9	24.6	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	胴部は球胴状に膨らみ頸部から口縁部はくの字状に屈曲。端部は平坦面やや凹状を呈す。胴部外面はタタキ整形後ナデ、口縁はナデ。内面はヘラ削り及びナデ。
" -1011	"	甕	—	-4.1	—	4.6	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	底部は平底。外面にはハケ状のナデ、内面には指頭及びヘラナデ。外面には煤。
" -1012	"	土師器甕	19.6	-13.7	18.5	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。黒色7.5YR2/1	胴部は内湾し頸部に至る。口縁部は外上方に大きく開く。外面は指頭及びナデ、ヘラケズリ及びハケ工具によるナデ。外面には煤。
" -1013	"	甌	—	-11	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	底部は丸底。体部には直径1cm台の円孔あり。外面にはヘラ削り及びハケ、内面にはナデ。
" -1014	"	甕	—	-9	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。褐色7.5YR4/3	底部は丸底。外面はタタキ整形後ヘラナデ、内面はヘラ削り及びナデ。
" -1015	"	土師器甕	16.5	23.4	18.2	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい赤褐色5YR5/4	底部は丸底、胴部は内湾しながら伸び頸部に至る。頸部から口縁部は外反。胴部外面はタタキ整形後ヘラナデ、口縁部内面はヘラナデ、胴部内面はヘラケズリ及びナデ。外面及び内底面には煤。
129-1016	SF9	土製勾玉	全長 3.3	全幅 1.2	全厚 1.2	重量 5.6	にぶい黄橙色10YR6/3	3mm大の孔が施される。
" -1017	"	手捏ね土器	9.2	3.8	—	5.4	胎土には砂粒を含む。灰黄褐色10YR6/2	底部は平底、口縁部は内傾して端部を摘み出す。指押し成形、内面はケズリ及びナデ。
" -1018	"	手捏ね土器	3.4	4.1	—	1.8	胎土には砂粒を含む。灰黄褐色10YR6/2	内外面指押し成形及びナデ調整。
" -1019	"	手捏ね土器	—	-5	—	5	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰黄褐色10YR6/2	口縁部は欠損。底部は平底。内外面指押し及びナデ。外面には煤。
" -1020	"	須恵器杯蓋	13	4.3	稜径 13	—	胎土には砂粒を含む。灰色N6/0	天井部はやや平坦に近く、2/3以上に回転ヘラケズリ、稜部断面は三角形状を呈す。口縁端部は内傾し、浅い凹状を呈す。内面は回転ナデ。
" -1021	"	土師器椀	13.6	5.4	—	—	胎土には砂粒を含む。橙色5YR6/6	底部は丸底、体部は内湾しながら口縁部に至る。内外面ともケズリ及びナデ。
" -1022	"	土師器椀	13	4.7	—	2	胎土には砂粒を含む。橙色5YR6/6	底部丸底、体部は内湾して伸び口縁部に至る。内外面はヘラ削り及びナデ。
" -1023	"	土師器椀	14.6	5.4	—	5	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰黄褐色10YR6/2	底部は丸底、体部は内湾しながら口縁部に至る。内外面はやや磨耗。
" -1024	"	土師器椀	9.4	6.3	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は丸底、口縁部にかけて内湾している。外面はヘラケズリ及びナデ、内面は指頭及びナデ。
" -1025	"	土師器椀	14	5.7	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰褐色7.5YR6/2	底部は丸底、体部は内湾しながら伸び口縁部に至る。底部外面はタタキ整形、内外面はナデ。
" -1026	"	土師器椀	14	7.1	—	2.2	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR7/6	底部は丸底、体部から口縁部にかけて内湾する。底部外面はヘラ削り、口縁部外面は指頭及びナデ。内面はヘラケズリ及びナデ。
" -1027	"	土師器椀	18.2	7.3	—	4.2	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/4	底部は平底、体部から口縁部にかけては大きく開く。口縁部はナデ。
" -1028	"	土師器高杯	—	-7.2	—	11	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/4	脚部は柱状、裾部は屈曲し伸びる。内面は指ナデ。
" -1029	"	土師器高杯	17.8	-6	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	脚部は欠損。口縁部は外方に開く。
" -1030	"	土師器高杯	15.5	-6.3	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR6/4	脚部は欠損。底部から体部は直線的に外方に伸びる。内外面ナデ。
" -1031	"	土師器高杯	15.7	-7.3	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/4	口縁部は外方に直線的に伸びる。内外面は指頭とナデ
" -1032	"	土師器高杯	18	-6.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰褐色7.5YR6/2	杯部は内湾し、椀型を呈す。外面にはナデ、内面はヘラナデ。

Tab.52 遺物観察表10

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
129-1033	SF9	土師器高杯	14.6	11.8	—	9.7	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	杯部は口縁部にかけてやや外反する。脚部は柱状を呈し、裾部は緩やかに屈曲する。
" -1034	"	土師器高杯	—	-8.2	—	12	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR7/4	脚部は扁平な柱状を呈し、裾部は緩やかに屈曲し伸びる。内面はヘラケズリ及びナデ。
" -1035	"	土師器高杯	22	-5.4	—	—	胎土には砂粒を含む。灰褐色7.5YR5/2	口縁は外反する。内外面は摩耗。
" -1036	"	土師器高杯	—	-5.1	—	13	胎土には砂粒を含む。灰白色2.5Y8/2	脚部は短く、裾部は屈曲し外方に長く伸びる。外面はケズリ及びナデ、内面はナデ。
" -1037	"	土師器高杯	—	-6	—	9.6	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	脚部は柱状、裾部は屈曲して伸びる。内面はナデ。
" -1038	"	手握ね土器	—	-7.4	—	4.4	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	外面は指押し及び一部ケズリ。内面はヘラケズリ及び指頭。
130-1039	"	土師器壺	11	11.3	—	2	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/3	底部は丸底、胴部は球胴状を呈し、頸部から口縁部は緩やかに屈曲する。外面は指頭及びヘラナデ。内面はハケ状のナデ。
" -1040	"	直口壺	8	12	13.2	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色5YR6/4	底部は丸底、胴部は球胴状を呈し頸部に至る。口縁部は上方に伸びる。外面はナデ、内面は指頭及びナデ。
" -1041	"	土師器壺	9.7	15.7	—	1.3	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	底部は丸底、胴部は球胴状を呈し頸部に至る。口縁部は外方に直線的に伸びる。口縁部外面は強いナデ、胴部から底部外面はヘラケズリ及びナデ。内面はヘラケズリ及びナデ。
" -1042	"	直口壺	11	16.5	16.6	3.2	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	胴部は大きく張り、内湾して頸部に至る。口縁部は外方に直線的に伸び、口縁部外面はナデ、胴部はケズリとナデ。口縁部内面はナデ、胴部内面はケズリとナデ。
" -1043	"	土師器甕	15	-21.7	—	26	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	胴部に最大径をもち、球胴状を呈する頸部から口縁部は直立して短く伸びる。内外面はヘラナデ及び指頭、内面には煤。
" -1044	"	土師器甕	18.3	-9.2	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい黄橙色10YR6/3	頸部から口縁部は屈曲。外面に一部タタキ。内面はナデ。
" -1045	"	甕	—	-16.4	26	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色5YR6/4	胴部外面はタタキ整形及びナデ、頸部外面はナデ。頸部内面はヘラナデ、胴部内面はハケ状のナデ。
" -1046	"	土師器甕	16.4	-14	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色5YR6/4	胴部は長胴を呈し、頸部から口縁部は強く屈曲する。頸部から口縁部外面は指頭及びナデ、胴部外面はハケ状のナデ及び指ナデ。内面はケズリ及びナデ。
" -1047	"	土師器甕	13.9	-14.4	17.4	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰黄色2.5Y6/2色5YR6/4	胴部は球形状を呈し、口縁部は外方に短く屈曲する。口縁部内外面はヘラナデ。
" -1048	"	土師器甕	16.2	30.2	19.8	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/4	底部は丸底、胴部は長胴状を呈し頸部から口縁部は緩やかに屈曲する。内外面はヘラケズリ及びナデ。口縁部外面には煤。
" -1049	"	土師器甕	—	-9.5	—	2	胎土には砂粒を含む。にぶい黄橙色10YR7/4	底部は丸底。外面にはハケ、内面にはヘラ状のナデ、内底部には指頭。
" -1050	"	土師器甕	14.5	-16.2	16.4	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	胴部に最大径をもち、頸部から口縁部は短く屈曲する。口縁部外面はナデ、胴部外面はヘラケズリ及びナデ。内面は一部ヘラナデ。
" -1051	"	土師器甕	—	-7	—	5.6	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部中央には1.5cm台の孔あり。外面は指頭及びナデ、内面はケズリ及び指頭。
132-1053	SF10	須恵器杯蓋	12.8	4.8	13.1	—	胎土には白色砂粒を含む。灰色N5/	稜部は短く断面三角形状を呈し口縁部は垂直に伸びる。端部は内傾し浅い凹状をなす。内面は回転ナデ。
" -1054	"	須恵器杯身	10.3	5	12.8	—	胎土には白色砂粒を含む。灰色7.5Y5/1	底部は平底気味。立上がりは内傾して伸び、端部は浅い凹状を呈す。受部は外方に短く伸びる。底部外面2/3以上は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。
" -1055	"	須恵器杯身	11	4.8	13	—	胎土には白色砂粒を含む。灰色7.5Y6/1	立上がりは内傾し短く伸び、端部は内傾する。受部は短く水平に伸びる。底部外面約2/3は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。

Tab.53 遺物観察表11

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
132-1056	SF10	須恵器杯身	10.6	4.8	12.2	4	胎土には白色砂粒を含む。黄灰色2.5Y6/1	立上がりは高く内傾して伸び、端部は浅い凹状を呈す。受部は外方に短く伸びる。底部外面2/3まで回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。
" -1057	"	須恵器杯身	10.4	5.3	12.6	—	胎土には白色砂粒を含む。灰色N5/	体部は丸く、立上がりは高く内傾して伸びる。端部は鋭く内傾する。受部はやや外傾して長く伸びる。底部外面約2/3以上は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。
" -1058	"	須恵器杯身	11.2	5.3	13.5	—	胎土には白色砂粒を含む。黄灰色2.5Y6/1	立上がりは内傾して伸び、端部は内傾し凹面を呈す。受部は外方に伸び、端部は丸みをもつ。底部から体部外面2/3に回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ、内底は不定方向のナデ。
" -1059	"	須恵器杯身	11.7	5.1	13.7	6	灰色N5/	立上がりは高く内傾して伸び、端部も内傾。受部は長く水平に伸びる。底部外面2/3以上は回転ヘラケズリ、内面は強い回転ナデ。
" -1060	"	須恵器甕	—	-7.8	—	—	胎土には白色砂粒を含む。灰色N6/	胴部は球胴状を呈し、外面には櫛描波状文、下半はカキ目及びびナデ。内面はヘラケズリ及びびナデ、内底面は指頭。
" -1061	"	須恵器高杯	17.4	-6.5	—	—	胎土には白色砂粒を含む。青黒色5B2/1	脚部は欠損。口縁部は外上方に直線的に伸び、断面三角形の二重の稜が巡る。両側には耳状の把手を貼付。脚部には三箇所透し窓がみられる。外面には6本の櫛描波状文、内面は回転ナデ。
" -1062	"	須恵器甕	25	2.9	—	—	胎土には白色砂粒を含む。灰色N5/	口縁部のみ残存。二段の稜をなす。内面はナデ。
133-1071	"	手捏ね土器	5.2	4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR5/6	底部は丸底で、口縁部は内湾する。内部には川原石が入る。
" -1072	"	手捏ね土器	3.3	5.6	—	4.5	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	指押し成形。内外面は指ナデ。
" -1073	"	手捏ね土器	4.8	5.1	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶ黄褐色10YR5/3	指押し成形。内外面は指ナデ調整。中には9個の川原石あり。
" -1074	"	手捏ね土器	7.4	5.9	—	3.3	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	指押し成形。底部は平底を呈し、口縁部は摘み出しにより外反する。外面はナデ、内面は指ナデ。内底面はケズリ及びびナデ。
" -1075	"	手捏ね土器	4.1	4	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	指押し成形。内外面はケズリ及びび指ナデ。
" -1076	"	手捏ね土器	9.2	8	—	3.4	胎土には砂粒を含む。にぶい黄褐色10YR6/3	口縁部は外反し、口唇部は直立させる。指押し成形。内外面ナデ。
" -1077	"	手捏ね土器	8.8	8.4	—	3	胎土には砂粒を含む。灰黄褐色10YR5/2	底部は丸底、胴部は内湾し口縁部は直立して伸びる。外面はヘラケズリ及びび指押し、内面はヘラナデ及びび指ナデ。
" -1078	"	土師器椀	9.6	7.5	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	底部は丸底、体部から口縁部は内湾しながら伸びる。内面はケズリ及びびナデ。
" -1079	"	土師器椀	11	7.1	—	2.8	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は丸底、体部から口縁部は内湾して伸びる。口縁部は外反する。外面はヘラケズリ及びびナデ、内面はナデ。内面には煤。
" -1080	"	土師器椀	12.3	5.8	—	—	胎土には砂粒を多く含む。明赤褐色5YR5/6	底部は丸底、体部から口縁部は内湾する。内外面はヘラケズリ及びびナデ。
" -1081	"	土師器椀	12	6.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色10YR7/3	底部は丸底、体部から口縁部は内湾する。外底面には指頭、内面はナデ。
" -1082	"	土師器椀	11.3	6.7	—	—	胎土には小礫を多く含む。にぶい褐色7.5YR5/4	底部は丸底、体部から口縁部は内湾しながら伸びる。内外面はナデ。
" -1083	"	土師器椀	12.3	7.2	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	底部は丸底、体部から口縁部は内湾する。外面は指頭及びびナデ、内面はナデ。
" -1084	"	土師器椀	12.6	6.1	—	2.4	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色10YR7/2	底部は丸底、体部から口縁部は内湾しながら伸びる。内外面ナデ。
" -1085	"	土師器椀	14.6	6.1	—	2.6	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR7/4	底部は丸底、体部から口縁部は内湾しながら伸びる。内外面とも磨耗。
" -1086	"	土師器椀	19	8	—	2	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。橙色5YR7/6	体部は丸底、体部から口縁部は内湾しながら外上方に開く。端部は平坦面を呈す。外面は縦方向のハケ、内面はハケ調整。

Tab.54 遺物観察表12

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
133-1087	SF10	土師器椀	14.4	9.1	—	3.9	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は平底、体部から口縁部は直線的に伸びる。内外面ともヘラケズリ及びナデ調整。
" -1088	"	土師器椀	14.5	9.3	—	3.8	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は平底に近く、体部は内湾し口縁部は直線的に上方に伸びる。内外面ともケズリ及びナデ調整。
" -1089	"	土師器高杯	16.3	14.6	—	12.7	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色5YR6/4	口縁は屈曲部から直線的に伸び、脚裾部は屈曲し、内湾する。杯部内外面はナデ、脚部内面は指ナデ。
" -1090	"	土師器高杯	18.7	13.8	—	12.2	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	口縁部は外方に大きく開き、端部は外反する。脚裾部は屈曲して伸びる。杯部内外面はナデ、脚部内面はケズリ及びナデ。
" -1091	"	土師器高杯	16	11.2	—	10.2	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色5YR6/4	口縁部は外上方に伸び、端部は外反。脚裾部は屈曲して伸びる。杯部内外面はナデ、脚内外面は削り及びナデ。
134-1092	"	土師器高杯	15.6	10.8	—	10.4	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	口縁は屈曲部から直線的に伸び、脚裾部は屈曲し伸び、脚部との接合面は丁寧なナデ。杯内外面は丁寧なナデ、内底にはヘラ状痕あり。脚外面はナデ、内面はケズリ及びナデ。
" -1093	"	土師器高杯	16.5	11.7	—	10.7	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	杯部は屈曲部から外方に伸び、端部は外反する。脚裾部は屈曲して伸びる。杯内外面はナデ、脚内面は指ナデ。
" -1094	"	土師器高杯	20.2	-8.3	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。明赤褐色5YR5/6	脚部は欠損。口縁部は屈曲部から外方に大きく開く。端部は平坦面を呈す。内外面はナデ、外底にはハケ。外面には煤あり。
" -1095	"	土師器高杯	16.2	-5.6	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	脚部は欠損。口縁部は屈曲部から外上方に開き端部は外反する。内外面はハケ状のナデ。
" -1096	"	土師器高杯	14.9	-7.2	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	脚部は欠損。口縁部は屈曲部から外上方に開く。外面は指頭及びナデ、内面はナデ。
" -1097	"	土師器高杯	17	-6	—	—	胎土には小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	脚部は欠損。口縁部は屈曲部から直立気味に伸び、端部は外反する。内外面はナデ。
" -1098	"	土師器高杯	—	-10	—	13	胎土には砂粒及び小礫を含む。褐灰色10YR6/1	口縁部欠損。脚裾部は屈曲して伸びる。全体に器壁は厚い。外面はケズリ及びナデ、内面はナデ。
" -1099	"	土師器高杯	—	-6.3	—	9.8	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	脚部のみ残存。柱状を呈し、器壁が厚い。裾部は屈曲して伸びる。外面はナデ、内面は指押し。
" -1100	"	土師器高杯	—	-7.8	—	13.4	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色5YR6/4	脚部のみ残存。裾部は屈曲しない。内外面ヘラ状のケズリ及びナデ。
" -1101	"	土師器高杯	—	-8.7	—	11	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	口縁部は欠損。脚部は円柱状を呈し、裾部は屈曲して伸びる。内外面はヘラ状のケズリ及びナデ。
" -1102	"	小型丸底壺	9.6	12	11.5	2	胎土には砂粒を含む。にぶい黄褐色10YR7/4	底部は丸底。胴部は球胴状を呈し、口縁部は頸部から上方に直線的に伸びる。外面は磨耗、内面は指頭及びナデ。
" -1103	"	直口壺	—	-13.4	15.4	—	胎土には砂粒を含む。赤褐色5YR4/6	底部から胴部は大きく張り、頸部に至る。頸部から口縁部は上方に直線的に伸びる。外面には赤彩が残る。
" -1104	"	小型丸底壺	—	-8.3	—	—	胎土には砂粒を含む。橙色5YR6/6	口縁部は欠損。胴部は球胴状を呈す。外面は磨耗。内面はヘラケズリ及び指ナデ。
" -1105	"	甕	—	-9.7	12.2	5.5	胎土には砂粒を含む。橙色7.5YR6/6	口縁部は欠損。底部は平底、胴部はやや広がり伸びる。頸部から口縁部は屈曲せず伸びる。外面はヘラケズリ及びナデ、内面はハケ、内底部はヘラケズリ及びナデ。外面には煤。
" -1106	"	土師器壺	16	-7.8	—	—	胎土には小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	口縁部のみ残存。頸部から口縁部は直立し、内湾気味にのびる。外面は一部ケズリ、内面はナデ。
" -1107	"	土師器壺	15.2	-6.8	—	—	胎土には小礫を含む。にぶい黄褐色10YR6/3	口縁部は屈曲して上方に伸びる。内外面ナデ。
" -1108	"	土師器甕	15.6	-13.1	18.2	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色5YR6/4	底部は欠損。胴部は球形状を呈し、頸部から口縁部は外反する。外面はタタキ及びヘラナデ、口縁部は指頭及びナデ。胴部内面はヘラケズリ及びナデ、口縁部から頸部はヘラケズリ及び指頭。外面には煤。

Tab.55 遺物観察表13

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
134-1109	SF10	土師器甕	16.7	19.5	21.4	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	胴部に最大径をもち、頸部にかけて湾曲し、口縁部は外反する。外面は指頭及びナデ、内面は指ナデ。外面には一部煤。
" -1110	"	土師器甕	14.2	20	17	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は丸底、胴部は内湾しながら頸部に至り、口縁部は外反する。外面はヘラケズリ及びナデ、内底面にはヘラケズリ。外面には一部煤。
" -1111	"	土師器甕	14.75	18.2	20.5	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は欠損し、胴部に最大径をもち、口縁部は緩やかに外反。口縁部外面は指頭及び横ナデ、胴部はヘラケズリ及びナデ。内面はヘラケズリ及びナデ。外面には煤。
" -1112	"	土師器甕	15.5	-14.3	19	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色10YR6/3	胴部は球胴状を呈し、頸部から口縁部はくの字に外反する。胴部外面はタタキ後ハケ状のナデ、口縁部はヘラナデ。内面はヘラケズリ及びナデ。外面には煤。
135-1113	"	土師器甕	12.7	21.3	—	16.6	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色5YR6/4	底部は丸底、胴部は内湾して頸部に至る。口縁部は外反。外面指頭及びナデ、内面はヘラケズリ及びナデ。胴部外面には煤。
" -1114	"	土師器甕	17	23.4	17.8	—	胎土には石英及び砂粒を含む。橙色7.5YR6/6	底部は丸底、胴部と口縁部は同径を測る。口縁部は緩やかに外反する。口縁部は貼付。胴部外面はタタキ、口縁部はナデ。内面は指頭及び指ナデ。
" -1115	"	土師器甕	18	27.1	23.6	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色7.5YR7/4	胴部は球胴状を呈し、頸部から口縁部にかけて外反する。胴部外面はヘラケズリ及びハケ状のナデ、内面は指ナデ。内底面及び外面には煤。
" -1116	"	土師器甕	—	-11.9	—	4	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰褐色7.5YR5/2	底部は丸底。外面はケズリ及びナデ、内底面には粗いハケ。
" -1117	"	土師器甕	—	-9.6	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰黄褐色10YR5/2	底部は丸底。外面はケズリ及びナデ、内面はヘラケズリ及びナデ。内外面には煤。
" -1118	"	甌	—	-5.2	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色10YR5/3	底部には直径1cm台の円孔。外面にはタタキ痕、内面は指頭及びナデ。
137-1125	SF11	須恵器杯蓋	12.6	4.3	—	—	灰色N6/1	天井部は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ調整。
" -1126	"	須恵器杯蓋	13.2	4.4	—	—	灰色N6/1	天井部2/3までヘラケズリ。内外面は回転ナデ調整。
" -1127	"	須恵器杯身	10.8	5	—	—	灰色N6/1	外面は2/3まで回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ調整。立上がりは内傾する。
" -1128	"	須恵器杯身	10.4	5.1	—	6.5	灰色N5/1	底部は2/3まで回転ヘラケズリ。内外面は回転ナデ調整。
" -1129	"	須恵器甕	—	-16.4	—	—	灰色N4/1	口縁部は欠損。口縁部、胴部には櫛描波状文が巡る。
138-1130	"	土師器椀	12.8	6.1	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部外面は指頭調整。口縁部内外面はナデ調整。
" -1131	"	土師器椀	12.5	6.3	—	—	胎土には小礫を含む。にぶい 橙色7.5YR6/3	内外面はヘラケズリ及びナデ調整。
" -1132	"	土師器椀	13.5	6.95	—	7.2	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は平底気味。内外面はナデ調整。
" -1133	"	土師器椀	12.3	6.2	—	5.2	胎土には小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	外面は磨耗著しい。口縁部内面は横ナデ。体部内面はヘラケズリ及びヘラナデ
" -1134	"	土師器椀	12	6.3	—	4.5	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい赤褐色5YR6/4	底部外面は指頭調整。内面には縦方向のハケ調整とナデ。
" -1135	"	土師器椀	13.8	5.5	—	—	胎土には小礫を多く含む。浅黄褐色10YR8/3	全体に磨耗が著しい。厚い器壁を呈する。
" -1136	"	土師器椀	14.2	5.9	—	7	胎土には砂礫を多く含む。橙色5YR6/6	外面は指頭及びナデ調整。内面には一部ヘラケズリ。
" -1137	"	土師器椀	—	6.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色10YR7/3	外面は磨耗著しい。内面は強いヘラ状のナデ調整。

Tab.56 遺物観察表14

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
138-1138	SF11	土師器椀	14.4	5.3	—	3.6	胎土には砂粒・小礫を含む。灰黄褐色10YR6/2	内底部には指頭調整。
" -1139	"	土師器椀	11.3	7.15	—	5	胎土には砂粒を多く含む。にぶい褐色7.5YR5/4	口縁部内外面は横位のナデ。体部から底部内外面はハケ状ナデか?底部外面には木の葉状の文様あり。
" -1140	"	土師器椀	12.4	6	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。明赤褐色5YR5/6	外面は磨耗著しい。内面には斜位のハケ調整。
" -1141	"	土師器椀	13.6	4.7	—	—	胎土には砂粒を多く含む。にぶい黄橙色10YR6/3	底部外面は指頭調整。口縁部内外面はナデにより端部は外反。
" -1142	"	土師器椀	16	7.25	—	—	胎土には砂粒を多く含む。にぶい褐色7.5YR5/4	外面タタキ整形後、底部内外面は指押し成形とナデ。口縁端部は強いナデ。
" -1143	"	土師器椀	11.8	8.8	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	底部外面はヘラナデ、内面はナデ調整。
" -1144	"	土師器椀	14.3	10.5	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰黄褐色10YR5/2	口縁部内外面は横ナデにより外反。体部から底部外面は指頭後ハケ、内面は斜位方向のハケ。
" -1145	"	土師器高杯	19.2	14	—	12.6	胎土には砂粒を含む。橙色7.5YR6/4	杯部は大きく開き内外面はナデ。脚外面は指頭及びナデ、内面はヘラケズリ及びナデ。
" -1146	"	土師器高杯	17	13.45	—	11	胎土には砂粒を含む。橙色7.5YR6/6	杯部の形態は椀型に近く、底部と体部との接合部が明確。脚外面は指頭及びナデ、内面はヘラケズリとナデ。
" -1147	"	土師器高杯	17.1	12.3	—	10.7	胎土には砂粒を含む。橙色7.5YR6/6	杯部は磨耗著しい。脚部内外面はヘラケズリ及びナデ。
" -1148	"	土師器高杯	17.2	12.5	—	10.8	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/4	口縁部は外方に大きく開く。杯部外面は指押し及びナデ。脚部外面はナデ、内面はヘラケズリ及びナデ。
" -1149	"	土師器高杯	17.4	11.6	—	12.6	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	杯部口縁部は外反する。内外面は強い横ナデ。脚部内外面はヘラケズリ及びナデ。
" -1150	"	土師器高杯	15.4	11.7	—	—	胎土には小礫を含む。にぶい褐色7.3YR5/3	杯部は椀型、口縁部は内湾する。外面は指頭、内面は一部ヘラケズリ及びナデ。
" -1151	"	土師器高杯	18.4	13.4	—	11	胎土には小礫を含む。橙色5YR6/6	杯部外面はハケ状のナデ。脚部との接合部は指押し成形とナデ。脚部内面はヘラケズリ及びナデ。
" -1152	"	土師器高杯	15.4	14	—	10.4	胎土には小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	杯部内外面は磨耗。脚部内外面はヘラケズリ及びナデ。
" -1153	"	土師器高杯	15.5	13.4	—	11.4	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR5/3	杯部は椀型、杯部に対し脚部は細い。杯部内面はナデ、内底にはハケ。脚部外面はナデ、内面はヘラケズリ及びナデ。
139-1154	"	土師器高杯	18	12.6	—	12	胎土には小礫を含む。橙色7.5YR6/6	杯部内外面はナデ。脚部内面はヘラケズリ及びナデ。
" -1155	"	土師器高杯	17.8	12.8	—	12	胎土には小礫を多く含む。橙色7.5YR6/6	杯部は内外面ナデ。脚部外面はナデ、内面はケズリ及びナデ。脚部との接合面にはヘラ状痕が残る。
" -1156	"	土師器高杯	16.8	11.6	—	11	胎土には小礫を含む。にぶい橙色10YR6/4	杯部は外方に大きく開く。杯部内外面は磨耗。脚部内外面はヘラケズリ及びナデ。脚部との接合部は指頭。
" -1157	"	土師器高杯	14.8	12	—	10.8	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	杯部は屈曲して口縁部は外上方に伸びる。脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲して外方に伸びる。脚部外面にはヘラケズリ、内面はナデ。
" -1158	"	土師器高杯	16.4	13.15	—	10.6	胎土には小礫を含む。橙色5YR6/6	杯部内外面はナデ。脚部内面はヘラケズリ及びナデ。脚部との接合部は指頭。
" -1159	"	土師器高杯	18.2	15	—	11.8	胎土には小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	口縁部は外反する。内外面は一部ヘラケズリ及びナデ。脚部外面はヘラ削り及び指頭。内面は指ナデ。
" -1160	"	土師器高杯	13.6	11.65	—	10.6	胎土には小礫を含む。にぶい橙色10YR6/4	杯部内面はナデ。脚部外面はヘラナデ、裾部内外面はナデ。
" -1161	"	土師器高杯	15	12.8	—	11.6	胎土には小礫を含む。橙色5YR6/8	杯部は椀型、脚部はさほど開かず、口縁部は内湾する。脚部内面はヘラケズリとナデ。杯部と脚部との接合部は指押し。

Tab.57 遺物観察表15

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
139-1162	SF11	土師器高杯	14.1	11.6	—	10.9	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/4	杯部の形態は椀型、口縁部は内湾する。口縁部内外面はハケ及びナデ。脚部外面は指頭、内面はナデ。
" -1163	"	土師器高杯	18	-11	—	—	胎土には砂礫を含む。橙色7.5YR6/6	脚部途中より欠損。杯部内外面はナデ。脚部内外面はヘラケズリ及びナデ。
" -1164	"	土師器高杯	17.8	-7.6	—	—	胎土には小礫を含む。にぶい橙色5YR6/4	脚部途中より欠損。杯部内面はヘラケズリ及びナデ。脚部との接合部は指頭。
" -1165	"	土師器高杯	18.8	-7.8	—	—	胎土には砂粒を含む。橙色5YR6/6	全体に器壁が厚く、口縁部は強く外反する。外面はナデ、底部は指頭、内面はヘラケズリ及びナデ。内底面には接合痕。
" -1166	"	土師器高杯	16.8	-6.85	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR6/4	脚部は欠損。口縁部は外反し、底部と体部の接合部は丁寧なナデ。内面はヘラケズリとナデ。
" -1167	"	土師器高杯	17.9	-7.95	—	—	胎土には砂粒を含む。橙色7.5YR6/6	口縁部は大きく開き、体部と底部との接合面は屈曲する。内外面はナデ。
" -1168	"	土師器高杯	20.6	-10.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	杯部は段をなし、口縁部は外方に大きく開く。内外面は指頭圧痕及びナデ。器壁が厚い。
" -1169	"	土師器高杯	17.2	-6.4	—	—	胎土には小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	杯部の形態は椀型で、内外面はナデ、内底部には一部ヘラケズリ。外底面は凹状を呈す。
" -1170	"	土師器高杯	16.8	8.2	—	—	胎土には小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/4	脚部は欠損。全体に磨耗著しい。
" -1171	"	土師器高杯	16.2	-7.6	—	—	胎土には小礫を多く含む。橙色7.5YR6/6	内外面はナデ。内底部にはヘラ状工具痕あり。口縁と底部との屈曲部は強いナデ。
" -1172	"	土師器高杯	—	-8.6	—	13.6	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色5YR6/4	杯部欠損。外面は指頭及びナデ。内面はヘラケズリ及び指ナデ。
" -1173	"	土師器高杯	—	-6	—	11.4	胎土には小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	外面はヘラケズリ及びナデ、内面はケズリ及びナデ。
" -1174	"	土師器高杯	—	-6.9	—	13	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/4	杯部は欠損する。外面には一部ケズリ痕あり、内面には横及び縦方向のケズリ及びナデ。
" -1175	"	土師器高杯	—	-5.8	—	11.4	胎土には小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/4	杯部は欠損。外面はナデ、内面はヘラケズリ及びナデ。
140-1176	"	直口壺	9.65	16	14.9	—	胎土には砂粒を多く含む。橙色7.5YR6/6	底部は丸底、胴部は球胴状を呈し、口縁部に至る。口縁部は直線的に上方に伸びる。外面はヘラナデ及び指頭、内面はナデ調整。
" -1177	"	直口壺	10	14	13.7	—	胎土には小礫を含む。にぶい褐色7.5YR7/4	底部は丸底、胴部は球胴状を呈し、口縁部に至る。口縁部は直線的に外方に伸びる。口縁部内外面はナデ、胴部内面はヘラ状のナデ。
" -1178	"	直口壺	9.4	-8.2	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR7/4	胴部途中より欠損。口縁部は直線的に外方に伸びる。外面は指頭及びナデ、頸部内面は強い指頭とナデ。
" -1179	"	直口壺	10	13.75	16	—	胎土には砂粒を多く含む。にぶい褐色7.5YR7/4	胴部は左右に大きく開き口縁部は外上方に直線的に伸びる。胴部外面はヘラケズリの後ナデ、内面はナデ。底部外面はヘラ状工具痕。
" -1180	"	小型丸底甕	11	12.4	12.6	—	胎土には砂粒を含む。褐灰色10YR5/1	底部は丸底、胴部は内湾しながら口縁部に至る。外面は磨耗、口縁部内面はヘラナデ、内底部はヘラケズリ及びナデ。底部内外面には煤。
" -1181	"	小型丸底甕	11.7	13.25	14	4	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR6/4	底部は丸底、胴部は内湾しながら口縁部に至る。口縁部から頸部外面は指頭及びナデ、底部外面はヘラ状のケズリ。内面は指頭及びナデ。底部内外面には煤。
" -1182	"	土師器甕	12.6	-6	—	—	胎土には砂粒を多く含む。にぶい褐色7.5YR5/3	胴部下半は欠損。器壁は全体に薄い。口縁部から頸部外面は指頭、体部内面はヘラナデ及び指頭。
" -1183	"	土師器甕	12.2	-8.6	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR7/4	胴部途中より欠損。内外面はヘラナデ及びナデ調整。外面には煤。
" -1184	"	土師器甕	9.4	-15.5	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/4	底部は欠損。胴部から口縁部は直線的に伸びる。内外面は指頭及びナデ。
" -1185	"	土師器甕	17.3	-12.7	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい黄褐色10YR6/3	胴部から底部は欠損。胴部は球胴状を呈し、口縁部は外反する。内外面はヘラケズリ及びナデ。外面には煤。

Tab.58 遺物観察表16

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
140-1186	SF11	土師器甕	15.4	10.35	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	外面はナデ、内面は指頭及びナデ。
" -1187	"	土師器甕	15.5	-16.8	18.2	—	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。灰褐色7.5YR5/2	口縁部はくの字状に開き胴部に最大径をもつ。外面は指頭及びナデ、内面はヘラ及び指ナデ。
" -1188	"	土師器甕	15.5	-17.4	20.3	—	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。にぶい橙色5YR6/4	胴部は球胴状に張る。口縁部から胴部外面はハケ状のナデと指頭、内面はナデ及び指頭。頸部から胴部にかけては煤。
" -1189	"	土師器甕	14.1	-8.8	—	—	胎土には小礫を含む。灰黄褐色10YR5/2	胴部に最大径をもち口縁部は外反する。外面はヘラ削り及びナデ、内面はヘラケズリ及び指ナデ。
141-1190	"	土師器甕	15.2	22.95	—	—	胎土には小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は丸底、胴部は球胴状を呈し口縁部は外反する。胴部に最大径をもち、内外面は指頭及びナデ。胴部外面、内底部には煤。
" -1191	"	土師器甕	15.3	-19	—	—	胎土には小礫を多く含む。にぶい橙色	底部は欠損。胴部は球胴状を呈する。内外面とも磨耗。
" -1192	"	土師器甕	15.6	23.7	21.5	2.6	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰黄褐色10YR5/2	底部は丸底、胴部は球胴状で口縁部は外反。口縁部から胴部外面はハケ状のナデ、底部は指頭、内面はヘラナデ。外面には煤。
" -1193	"	土師器甕	16.2	25.9	20.5	—	胎土には砂粒を多く含む。にぶい褐色7.5YR5/4	底部は丸底を呈し、胴部は内湾しながら、口縁部に至る。口縁部は外反。全体に磨耗が著しい。内外面はナデ。
" -1194	"	土師器甕	15	28.4	22	—	胎土には砂粒を多く含む。にぶい黄褐色10YR6/3	底部は丸底を呈し、胴部は内湾しながら頸部に至る。口縁部は外反。内外面はヘラナデ及び指頭。胴部内外面には煤。
" -1195	"	土師器甕	15.5	26.1	21.7	4.2	胎土には砂粒を多く含む。にぶい橙色7.5YR7/3	底部は扁平な丸底で胴部は内湾しながら頸部に至り、口縁部は外反。外面は指頭及びナデ、内面はナデ、底面はヘラケズリ調整。
142-1196	"	土師器甕	14.6	25.9	21.5	4.3	胎土には砂粒及び小礫を含む。褐色10YR6/1	底部は丸底、内湾しながら胴部に至る。頸部から口縁部はくの字状に曲がり、胴部に最大径をもつ。頸部外面は指頭、胴部下半にはハケ。口縁部内面はハケ状のナデ、胴部にはヘラナデ。
" -1197	"	土師器甕	15	-22.3	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	胴部は内湾し口縁部に至る。口縁部は上方に伸びる。内外面はヘラナデ及び指頭。胴部外面には煤が帯状にめぐる。
" -1198	"	土師器甕	—	-5.4	—	—	胎土には砂粒を多く含む。にぶい褐色7.5YR6/4	頸部のみ残存。外面はタタキ整形の後ハケ、内面はハケ調整。
" -1199	"	土師器甕	20	-25	—	—	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。灰褐色7.5YR6/2	胴部と口縁部はほぼ同径で、外面はタタキ整形及びナデ、口縁から頸部内面は指頭及びナデ。
" -1200	"	土師器甕	16.4	-13	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	胴部から口縁部はほぼ同径。外面はヘラケズリ及びナデ、内面はヘラケズリ及び指ナデ。
" -1201	"	土師器甕	—	-17.5	—	—	胎土には小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	口縁部は欠損。底部はやや尖底気味。外面下半はハケ状のナデ及び指頭、内面はナデ。内外面には煤。
" -1202	"	土師器甕	—	-24.7	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色5YR6/6	底部は扁平な丸底、胴部は内湾し大きく張る。外面はタタキ整形後ナデ、内面はヘラケズリ、ナデ。
144-1205	SF12	手捏ね土器	5	4.3	—	—	にぶい褐色7.5YR6/4	指押し成形。内面は指ナデ調整。
" -1206	"	手捏ね土器	6.2	2.9	—	—	胎土には砂粒を多く含む。にぶい黄褐色10YR5/3	指押し成形。内面は指ナデ調整。
" -1207	"	須恵器甕	12.2	-3.3	—	—	灰色N6/	口縁部のみ残存。内外面回転ナデ。
" -1208	"	土師器椀	10.7	5.2	—	4.6	胎土には小礫を含む。褐色7.5YR6/6	底部は凹状、体部から底部は内湾する。外面は指頭及びナデ、内面はハケ、内底面にはヘラ状痕あり。底部外面には二条の輪があり。
" -1209	"	土師器椀	13	6.4	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR6/4	底部は丸底、体部から口縁部は内湾する。内外面とも磨耗。
" -1210	"	土師器椀	13.1	6.85	—	4	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色5YR6/6	底部は平底、口縁部は内湾する。外面下半には粗いハケ、内面は磨耗する。

Tab.59 遺物観察表17

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
144-1211	SF12	土師器椀	12.2	5.8	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい黄橙色10YR6/3	口縁部は内湾する。内外面は磨耗、内外面は一部ナデ調整。
" -1212	"	土師器椀	11.9	6.2	—	—	胎土には砂粒を含む。橙色5YR6/6	体部から口縁部は内湾する。外面は磨耗、内面はヘラケズリ及びナデ調整。
" -1213	"	土師器椀	12.3	6.2	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい黄橙色10YR6/4	底部丸底、体部から口縁部は内湾する。外面はヘラケズリ及びナデ、内面はナデ調整。
" -1214	"	土師器椀	13.8	4.5	—	—	胎土には小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は丸底、体部から口縁部は内湾する。内外面とも磨耗。
" -1215	"	台付椀	—	-2.9	—	7	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	底部のみ残存。底部は厚みを持った平底。外面は指頭により屈曲し、内面はナデ調整。
" -1216	"	土師器椀	11.2	10.1	—	4.5	胎土には砂粒を含む。にぶい黄橙色10YR6/4	底部平底、体部は斜め上方に伸び口縁部に至る。外面はタタキ整形及びナデ、内面はナデ調整。外面には煤。
" -1217	"	土師器高杯	—	-8.7	—	12.4	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	杯部途中より欠損。外面は指頭及びナデ、内面は強いナデ。
" -1218	"	土師器高杯	—	-9.2	—	12	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色5YR6/4	外面は磨耗、内面はケズリ及びナデ。
" -1219	"	土師器高杯	—	-8.8	—	—	胎土には砂粒を含む。浅黄橙色10YR6/3	器高は浅く、体部から口縁部にかけて大きく開く。底部と体部の接合は明確。内外面は指頭及びナデ。
" -1220	"	土師器高杯	16.3	-5.7	—	—	胎土には小礫を含む。橙色5YR6/6	杯口縁部は外方に大きく開く。外面はハケ及びナデ。
" -1221	"	土師器高杯	18.4	-8.3	—	—	胎土には小礫を含む。橙色7.5YR7/6	全体に器壁は厚い、口縁部は大きく外反する。内外面とも磨耗。
" -1222	"	土師器高杯	16.4	-7	—	—	胎土には小礫を含む。にぶい橙色5YR6/4	杯部のみ残存。杯部は鉢型呈す。内外面ともに磨耗著しい。
" -1223	"	土師器高杯	—	-8	—	13.6	胎土には砂粒を含む。橙色7.5YR6/6	外面はヘラナデ、内面はケズリ及びナデ。
" -1224	"	土師器高杯	—	-6.4	—	9.4	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR7/3	杯部は欠損。裾部は短い。外面は磨耗、内面は指頭調整。
" -1225	"	土師器高杯	—	-8.8	—	11.4	胎土には小礫を含む。にぶい橙色7.5YR7/4	杯部は欠損。内外面とも磨耗。
" -1226	"	土師器高杯	—	-7.7	—	13.2	胎土には小礫を含む。橙色7.5YR7/6	外面はヘラケズリ及びナデ、内面は指ナデ。
" -1227	"	小型丸底壺	8	8.8	—	4.3	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。灰黄褐色10YR6/2	丸底気味の底部から体部は膨らみ頸部に至る。口縁部は直立して伸びる。内外面とも磨耗。
" -1228	"	小型直口壺	—	-5.6	10.7	—	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	口縁部は欠損。底部は丸底。外面は磨耗、内面は指頭及びナデ調整。
" -1229	"	土師器小型丸壺	—	-7	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	口縁部は欠損。底部は丸底、胴部は大きく張る。外面は指頭及びナデ、内底面は指頭及びナデ調整。
" -1230	"	土師器小型甕	11.6	10.75	11.4	—	胎土には小礫を含む。褐灰色10YR4/1	底部は丸底、胴部は内湾して口縁部に至る。口縁部は外反。内外面指頭とナデ。外面には煤。
" -1231	"	土師器丸底甕	12.7	13.55	15.7	—	胎土には砂粒を多く含む。にぶい赤褐色5YR5/4	底部は丸底、胴部は大きく膨らみ頸部に至る。口縁部は外反する。外面は磨耗、内面は指頭及びナデ。
" -1232	"	土師器壺	12.2	-5.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色10YR6/3	頸部から内傾して口縁部に至る。内外面とも磨耗。
" -1233	"	土師器甕	16.8	-4.9	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	口縁部のみ残存。内外面ともナデ。
" -1234	"	土師器甕	16.3	-6.1	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR6/3	外面は指頭、内面は指頭及びナデ調整。
" -1235	"	土師器甕	18.8	-9.4	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色10YR5/3	胴部から底部は欠損。全体に薄い作りを呈する。胴部は丸く、口縁部は外反。内外面は磨耗。

Tab.60 遺物観察表18

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
145-1237	SF12	土師器甕	15.2	11.3	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	胴部は内湾し、口縁部は外反する。内外面は磨耗。
" -1238	"	土師器甕	12	9	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色5YR7/4	外面は指頭及びナデ、内面は磨耗。
" -1239	"	土師器甕	14.6	-14.6	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色10YR5/3	胴部から口縁部へは緩やかに伸びる。外面には一部タタキ、指頭及びハケ。内面には指頭と横方向のハケ。外面には煤。
" -1240	"	土師器壺?	11	-14.3	18.8	—	胎土には砂粒及び小礫を多く含む。にぶい赤褐色5YR5/4	胴部は球胴状を呈し、口縁部は直立し伸びる。外面はタタキ整形とナデ、下半はハケ、内面は指ナデ。胴部には帯状に煤。
" -1241	"	土師器壺?	—	-25.5	—	2.6	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色10YR8/4	底部は丸底。胴部は内湾しながら頸部に至る。外面は磨耗、内底面には一部ヘラケズリ。
147-1242	SF13	土師器椀	11.4	4.6	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい黄褐色10YR5/3	丸底の底部から口縁部にかけて内湾する。外面はヘラケズリ及びナデ、内面にはハケ状のナデ。
" -1243	"	土師器椀	11	5.5	—	2.6	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色5YR7/4	丸底の底部から口縁部にかけて内湾する。外面は磨耗、内面は指頭及びナデ。
" -1244	"	土師器高杯	16.4	-6.8	—	—	胎土には砂粒を含む。橙色5YR6/6	杯の屈曲部は明確、口縁部は外反する。内外面は丁寧なナデ。内底部と外面には煤。
" -1245	"	土師器高杯	17	11.8	—	10	胎土には砂粒を含む。橙色5YR6/6	杯部は屈曲部から外方に大きく開く。脚裾部は緩やかに屈曲する。外面は指頭及びナデ、脚部内面はヘラナデ及び指ナデ。
" -246	"	土師器高杯	16.8	12.7	—	10	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	口縁部は外方に大きく開く。脚裾部は屈曲して開く。外面はナデ、杯部内面はナデ、脚部は指ナデ。
" -1247	"	土師器甕	13	-17.3	18	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい赤褐色5YR5/4	胴部に最大径、胴部から頸部にかけて内湾し口縁部はくの字に外反。口縁部外面は横ナデ、胴部はヘラケズリ及びナデ、内面はヘラケズリ及びナデ。外面には煤。
" -1248	"	土師器甕	13.4	16.65	16	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	丸底の底部、胴部は球胴状を呈し、頸部から口縁部は外反する。口縁部外面は指頭。
" -1249	"	土師器甕	14.1	-6.2	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい黄褐色7.5YR6/4	頸部から口縁部はくの字に屈曲する。内外面はナデ調整。
" -1250	"	土師器甕	17	11.5	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄色2.5YR6/2	頸部から口縁部は緩やかに外反する。外面指頭及びナデ、内面はヘラケズリ及びナデ。外面には煤。
149-1252	土器集中 30	土師器椀	11.2	-5.6	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR7/4	外面はヘラナデ及び指頭。内面はナデ。
" -1253	"	土師器高杯	16	-6.6	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR7/6	内外面はナデ。
" -1254	"	土師器高杯	18.5	-11	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	杯部は椀状を呈し、口縁部はやや外反する。外面はナデ、内面はヘラ状のナデ。脚部内面は指頭。
" -1255	"	土師器高杯	—	-6.2	—	10.8	胎土には砂粒を含む。橙色7.5YR7/6	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し外方に伸びる。内面は指ナデ。
" -1256	"	土師器高杯	—	-7.7	—	10.3	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR7/4	脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し外方に伸びる。内面はヘラナデ。
" -1257	"	土師器甕	16.5	26.6	20.4	2.5	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	胴部は丸みをもち、頸部から口縁部は緩やかに外反する。内外面はヘラナデ及びナデ。外面には煤。
" -1258	"	土師器甕	15.7	-19.9	24	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	胴部は球胴を呈し、頸部から口縁部は上方に直立する。口縁部外面はハケ状のナデ、胴部はヘラケズリ及びナデ。内面はヘラケズリ及びヘラナデ。
150-1259	須恵器 集中	須恵器甕	21.1	48.3	47.3	—	灰色5Y6/1	胴部は大きく膨らみ、頸部から口縁部に向け直立気味に伸び、端部は外反する。端部は肥厚し、端部下には断面三角形の凸帯が巡る。外面には平行のタタキ、内面には同心円文。

Tab.61 遺物観察表19

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
151-1260	区 層	須恵器杯蓋	12	4.5	稜径 12.6	—	灰色N6/	天井部はやや丸みをもち、稜部は断面三角形を呈す。口縁部はほぼ垂直に伸び、端部は内傾する。天井部外面約1/3には回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。
" -1261	"	須恵器杯蓋	12.6	4.9	稜径 12.7	—	灰色N5/	稜は断面三角形を呈し、口縁部は垂直に伸びる。端部は内傾し、凹状の挟りが入る。天井部中央には摘み付き、約3/4まで回転ヘラケズリ、内面には回転ナデ。
" -1262	"	須恵器杯蓋	11.5	-3.5	稜径 10.8	—	灰色7.5Y4/1	稜は断面三角形を呈し、口縁部は外下方に伸び、端部は平坦面をなす。内外面は回転ナデ。
" -1263	"	須恵器杯身	11.2	5	受部径 13.9	—	灰色N5/	受部は断面三角形を呈し、立上がりは内傾して伸びる。底部外面は約2/3まで回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデ。
" -1264	区 上層	須恵器杯身	12.6	-4.4	受部径 14.4	—	灰色N6/	受部は断面三角形を呈し、立上がり内傾して上方に伸びる。端部は浅い凹状をなす。底部外面には回転ヘラケズリ、内外面には回転ナデ。
" -1265	区 層	須恵器杯身	11.4	4.6	受部径 13.7	—	灰色N5/	受部は断面三角形を呈し、立上がりは内傾して伸びる。端部もやや内傾する。底部外面約3/4には回転ヘラケズリ、内面には回転ナデ。
" -1266	"	須恵器杯身	10	-4.6	受部径 12	—	灰色N5/	受部は断面三角形を呈し、長く伸びる。立上がりは直立気味に上方に伸び、端部は内傾する。底部外面には約2/3に回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。
" -1267	区 上層	須恵器壺	—	8	11.5	—	灰色N5/	口縁部外面には波状文(13本)、同部外面にも波状文(7本)をなし、中央部には直径1.4cmの円孔をなす。底部外面には粗いハケ。内面には回転ナデ。
" -1268	区 層	須恵器壺	—	-7.3	12.2	—	灰色N5Y6/1	胴部外面には波状文(5本)が巡り、中央には直径1.2cmの円孔をなす。内面にはヘラケズリ及びナデ。
" -1269	"	須恵器甕	19.2	-25.7	31.4	—	灰色N5/	胴部は球形に大きく張り、頸部から口縁部にかけて外方に屈曲する。口縁端部のみ打ち割られている。口縁下には断面三角形の凸帯が巡り、波状文(5本)が施されている。外面には平行のタタキ目が残る。
152-1270	"	手捏ね土器	5.9	2.5	—	1.2	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	内外面指押し成形。外面には煤。
" -1271	"	手捏ね土器	4.6	5.4	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR6/5	内外面指押し成形。底部外面にはヘラ状工具痕がみられる。
" -1272	"	土師器椀	11.4	4.4	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色5YR6/4	底部は丸底を呈し、口縁部にかけては内湾する。内外面ナデ。
" -1273	"	土師器椀	12.2	5.7	—	1.2	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR7/4	底部は丸底を呈し、口縁部にかけては内湾する。内外面ナデ。底部外面には指頭が顕著。
" -1274	"	土師器椀	11.8	5.7	—	4.3	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR6/4	底部は扁平丸底を呈し、口縁部にかけては内湾する。底部外面には指頭、口縁部外面はヘラナデ。内面にはヘラ状のナデ。
" -1275	"	土師器椀	12.3	6.35	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	底部は丸底を呈し、口縁部にかけては内湾する。底部外面には木の葉状の文様がみられる。内底部にはヘラナデ及び指頭。
" -1276	区 上層	土師器椀	23	-10.2	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰褐色7.5YR6/2	底部は丸底を呈し、口縁部にかけては内湾する。端部は平坦面を呈する。底部外面にはタタキ。内面には斜位方向のハケ。
" -1277	区 層	土師器椀	13	7.9	—	5.4	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色5YR6/4	底部は平底を呈し、口縁部にかけては直線的に上方に伸びる。外面にはヘラケズリ。内面には指頭及びナデ。底部外面には煤。
" -1278	"	土師器椀	12.8	7.2	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR6/3	底部は丸底、口縁部にかけては内湾する。内外面ナデ。
" -1279	"	土師器椀	9.6	6.5	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	底部は丸底を呈し、口縁部にかけては内湾する。底部外面は指頭、外面はヘラナデ。内面には指頭とナデ。
" -1280	"	土師器椀	9.6	6.85	—	3.7	胎土には砂粒を含む。にぶい黄褐色10YR6/3	底部は平底を呈し、口縁部にかけては直線的に上方に伸びる。底部外面には指頭。

Tab.62 遺物観察表20

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
152-1281	区 層	土師器高杯	16	-4.1	—	—	胎土には砂粒を含む。 灰黄色2.5Y6/2	杯部は浅く、内底部には凸状の粘土帯が巡っている。内外面は磨耗。
" -1282	"	土師器高杯	13	-6.7	—	—	胎土には砂粒を含む。 灰黄色2.5Y6/2	杯部は椀状を呈し、口縁部は直線的に上方に伸びる。外面にはヘラ状痕がみられる。
" -1283	"	土師器高杯	16.7	12.7	—	12.2	胎土には砂粒を含む。 にぶい橙色7.5YR6/4	杯部口縁は直線的に外方に伸び、内外面はナデ。脚部は柱状を呈し、裾部は屈曲し広がる。内外面はヘラケズリ及びナデ。
" -1284	"	土師器高杯	16	11.4	—	10.7	胎土には砂粒を含む。 にぶい橙色7.5YR6/4	杯口縁部はやや外反し、底部と体部の接合部は指頭が残る。脚部から裾部は緩やかにのび外反する。
" -1285	"	土師器高杯	19	14.4	—	12	胎土には砂粒を含む。 明赤褐色5YR5/6	杯部は深い椀型を呈し、口縁部にかけて内湾する。内外面はナデ。脚部は小さく柱状を呈し、裾部は屈曲し外方に広がる。内面は指頭及びナデ。
" -1286	"	土師器高杯	17.7	13.2	—	10.4	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR	杯部は椀型を呈し、脚部は小さく裾部は屈曲し短く広がる。外面にはヘラナデ、内面は指ナデ。
" -1287	区 下層	土師器高杯	17.5	-6	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR7/6	杯部口縁は外方に広がり、端部はやや外反する。内外面はナデ。
" -1288	区 層	土師器高杯	16.6	-6.4	—	—	胎土には砂粒を含む。 にぶい黄褐色10YR6/3	杯部は口縁は上方に直線的に伸びる。内外面はナデ。底部外面は凸状を呈する。
" -1289	区 下層	小型丸底壺	7.9	8.2	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	頸部から口縁部は上方に長く伸びる。内面には指押し及びナデ。
" -1290	"	小型丸底壺	9.2	10.9	—	—	胎土には砂粒を含む。 にぶい黄褐色10YR6/3	体部は球胴状に張り、口縁部は頸部から上方に長く伸びる。外面にはナデ、内面にはヘラケズリ及びナデ。
" -1291	区 層	小型丸底壺	—	-11	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/6	底部は丸底を呈し胴部は球形に張る。内外面はナデ。
" -1292	区 下層	二重口縁壺	14.9	-5	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	口縁部は段を呈し、外方に伸びる。外面には横方向のハケ、内面には指ナデ。外面には煤。
" -1293	区 層	土師器甕	—	-3.6	—	—	胎土には砂粒を含む。 にぶい橙色10YR6/4	口縁部の一部のみ残存する。口唇部は平坦面を呈し、内外面はナデ。
" -1294	区 下層	二重口縁壺	12.6	-3.7	—	—	胎土には砂粒を含む。 にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部には段をもち、やや外方に伸びる。内面は強いナデにより段を呈する。
" -1295	"	二重口縁壺	18	-5.6	—	—	胎土には砂粒を含む。 にぶい橙色7.5YR6/4	口縁部には段をもち、外方に伸びる。外面には横方向のハケ、段下には指頭。内面には強いナデ。
" -1296	区 層	土師器甕	14.6	24.3	16.4	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色7.5YR6/6	胴部は長胴状、頸部から口縁部は外方に屈曲し短く伸びる。外面には指頭及びナデ、内面にはヘラ状のケズリと指頭。粘土接合痕が顕著である。
" -1297	"	土師器甕	16.4	20.7	18	—	胎土には砂粒を含む。 にぶい橙色7.5YR7/3	底部は丸底を呈し、口縁部は球胴状に張る。頸部から口縁部は外方に屈曲し伸びる。口縁部内外面には指頭及びナデ、胴部内外面にはヘラケズリとナデ。
" -1298	区 上層	土師器壺	21	-5.7	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR7/4	口縁部は外反し、口唇部はやや肥厚させている。外面には縦方向のハケ。内面にもハケ。
153-1299	区 層	土師器甕	10.3	15.9	—	6.4	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR7/4	底部は平底、胴部は長胴を呈し、頸部から口縁部にかけて外方に短く伸びる。口縁部外面はヘラケズリ及び指頭。胴部内外面は指頭及びナデ。内底部はヘラケズリ。粘土接合痕が顕著。
" -1300	"	土師器甕	13	14.7	16	—	胎土には砂粒を含む。 灰黄褐色10YR6/2	底部は丸底、胴部に最大径を持ち、頸部から口縁部は屈曲し、外方に直線的に伸びる。口縁部内外面はケズリ及びナデ。内底部には煤。
" -1301	区 下層	土師器甕	18.5	-12.3	—	—	にぶい褐色7.5YR7/4	胴部は球胴を呈し、頸部から口縁部は屈曲し外方に伸びる。口唇部にはナデにより凹状を呈す。器壁は薄い。口縁部内外面はナデ、胴部外面には横・斜位のハケ。内面にはヘラナデ及び指頭。布留式土器。
" -1302	区 層	土師器甕	13.4	-18.1	17	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰褐色7.5YR6/2	胴部は球胴状を呈し、頸部から口縁部は外方に強く屈曲する。内外面はヘラナデ。胴部内外面には煤。

Tab.63 遺物観察表21

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)				胎土・色調	特徴・技法
			口径	器高	胴径	底径		
153-1303	区 下層	土師器甕	15.6	-18.8	17.6	—	胎土には砂粒を含む。にぶい黄橙色10YR6/3	底部は丸底を呈し、胴部は球胴を呈す。頸部から口縁部は屈曲し、外方に伸びる。外面はヘラナデ、内面は指頭及びナデ。全体に器壁は薄い。
" -1304	区 層	土師器甕	15.8	-15.1	16.2	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/3	胴部は球胴状を呈し、頸部から口縁部にかけて屈曲し伸びる。口縁部内外面はナデ。胴部内外面はヘラケズリ及びナデ。
" -1305	区 上層	土師器甕	16.8	25.9	19	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/6	底部は丸底で、胴部は長胴状を呈す。頸部から口縁部にかけてくの字に屈曲する。口縁部内外面はハケ。胴部外面はタタキ後ハケ。内面には指ナデ。
" -1306	区 層	土師器甕	17.1	25.6	21.8	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。橙色5YR6/8	底部は丸底、胴部は球胴状を呈し、頸部から口縁部は屈曲し外方に短く伸びる。胴部外面はヘラケズリ及びナデ。底部はハケ状のナデ。胴部内面は指頭及びナデ、内底部はヘラケズリ。外面には煤。
" -1307	"	甕	13	11.7	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	口縁部は内湾し、底部には1.5cm大の円孔あり。内外面にはヘラケズリとナデ。内底部には煤。
" -1308	"	甕	14.4	10.3	—	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。灰褐色7.5YR6/2	底部は平底に近く、口縁部は直線的に外方に伸びる。底部には2cm大の円孔を施す。内面にはヘラケズリ及びナデ。外面には煤。
" -1309	"	土師器甕	15.4	-18	24	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。明赤褐色5YR5/6	胴部は球胴状を呈し、頸部から口縁部は直立し短く伸びる。外面は指頭とナデ。内面には指頭とナデ。
" -1310	"	土師器甕	15.9	-19.6	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい黄橙色10YR7/4	胴部は球胴状を呈し、頸部から口縁部は屈曲し上方に伸びる。外面はヘラナデ、内面は指頭とナデ。粘土接合痕が顕著。
154-1311	"	土師器甕	16	-8.9	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	頸部から口縁部は直立し、端部のみやや外反する。外面はヘラナデと指頭。内面にはヘラケズリとナデ。
" -1312	区 下層	土師器甕	18.4	-6.8	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい黄橙色10YR6/3	口縁部と頸部外面には指頭が顕著。内面には粗いハケ調整がなされる。
" -1313	"	土師器甕	14.7	-14.1	14.2	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい橙色7.5YR6/4	胴部は長胴を呈し、頸部から口縁部は屈曲し外方に伸びる。内外面はヘラケズリとナデ。
" -1314	区 上層	土師器甕	15.6	-15.1	16.2	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。オリーブ黒色5Y3/1	胴部は球胴状を呈し、頸部から口縁部にかけて外反する。口唇部は平坦面を呈す。外面はタタキ整形後ハケ、口縁部内面は横方向のハケ。外面には煤。
" -1315	"	土師器甕	13.4	-11.7	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい橙色7.5YR7/4	外面に一部タタキ整形痕が残る。内面には指頭とナデ。
" -1316	区 下層	土師器甕	15	-19	16	—	胎土には砂粒を多く含む。灰黄色2.5Y7/3	口縁部と胴部は同径を呈す。口縁部は屈曲し伸びる。内外面には指頭調整が顕著である。
" -1317	区 層	土師器甕	14	-14	20	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄橙色10YR6/3	胴部に最大径をもち、頸部から口縁部にかけては短く外反する。内外面ナデ。
" -1318	"	土師器甕	15.4	-15.5	22.6	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい褐色7.5YR5/4	胴部に最大径を持ち、球胴状に大きく張る。頸部から口縁部は屈曲し短く伸びる。内外面は指頭及びナデ。外面には煤。
" -1319	"	土師器甕	18.2	-7.5	—	—	胎土には砂粒を含む。にぶい黄褐色7.5YR6/4	胴部に最大径を持ち、球胴状に大きく張る。頸部から口縁部は屈曲し短く伸びる。内外面は指頭及びナデ。
" -1320	区 下層	土師器甕	—	-28	24.8	—	胎土には砂粒及び小礫を含む。にぶい黄褐色7.5YR7/4	外底部にはタタキ痕が残る。

Tab.64 遺物観察表23

(- 数値は残存値)

第4節 古代・中世

弥生時代・古墳時代については調査区の 区で遺構・遺物の説明を行ってきたが、古代、中世については遺構の配置や検出状況を考え、 区・ 区で区別せずに調査区内での各遺構、遺物について記述する。今回の調査では、中世においては掘立柱建物柱(SB)12棟、土坑(SK)5基、溝(SD)4条、井戸(SE)1基、ピット群(P)を検出した。古代では土坑7基を検出している。古代・中世では、前回の具同中山遺跡群の調査(1989、1990年度の調査)以来初めてのまとまった成果である。古代に属する検出遺構は少ないが、包含層等の土器の出土量から考えると中世段階で削平されている可能性が高い。遺構・遺物はともに調査区の東半部に集中しており、古墳時代において広範囲に及ぶ祭祀跡が検出された 区西側からは、古代・中世の遺構・遺物は検出されなかった。これについては基本層準にも示されているように、西側の地形が低くなっていることが関連していると考えられる。

1. 古代

(1)検出遺構

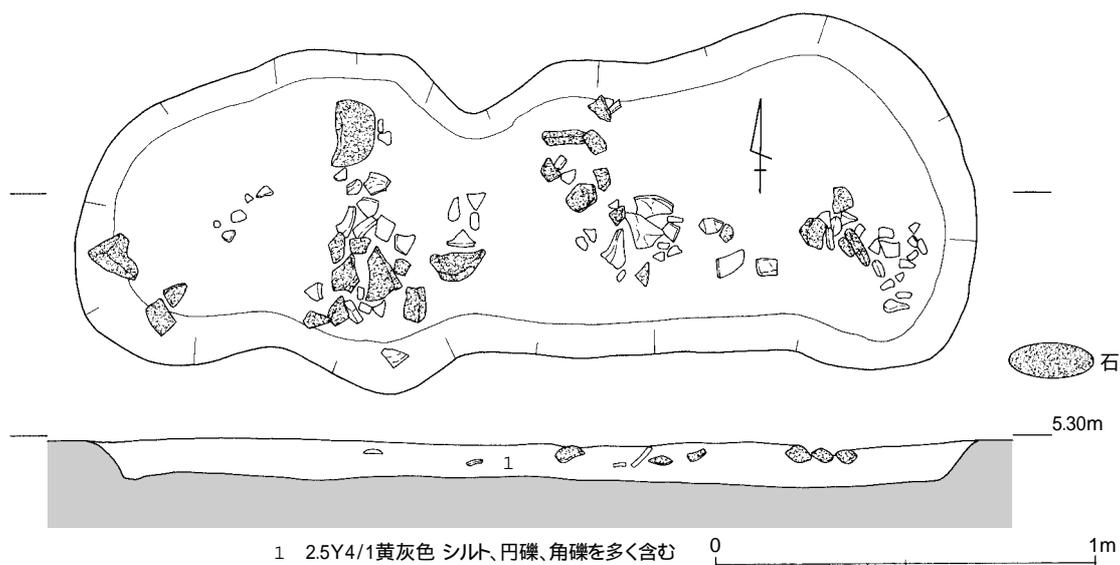
土坑

SK11

調査区中央部のF-15グリッドで検出した。長軸は2.37m、短軸は0.7mを測る不整楕円形状を呈する土坑である。深さは約12cmと浅い。長軸方向はN-90°Eを示す。床面は平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。埋土は単層の黄灰色シルトで、埋土中には土器と共に3~5cm大の角礫及び1~3cm大の円礫が多く見られる。出土遺物には土師器片64点、須恵器片36点、製塩土器4点、土錘2点が出土しており、その内4点が図示できた(Fig.156-1332~1335)。1332は須恵器杯である。底部には断面方形形状の高台が付く。1333は須恵器の蓋である。天井部は欠損しており、内外面はナデ調整が見られる。1334は須恵器甕の口縁部である。頸部から外上方に伸び、端部は屈曲する。内外面はナデ調整が見られる。1335も端部は屈曲している。

SK12

調査区中央部のG-14グリッドで検出した。長径は1.15m、短径は1.1mを測る円形プランの土坑である。深さは約24cmを測る。床面は平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。埋土 層はにぶい黄灰色シルト、 層は暗灰黄色シルトで遺物の大半は 層より出土している。出土遺物には土師器片137点、須恵器片15点、製塩土器5点、土錘2点、鉄片3点が出土しており、その内10点が図示できた(Fig.158-1336. 1337. 1339. 1341. 1342. 1348)。1336は土師器の皿で、口縁部は外上方に伸びる。1338は須恵器の皿で口縁部は外上方に伸び、端部はやや屈曲する。1337は土師器の杯片である。1339は須恵器の蓋である。天井部は欠損しており、内外面はナデ調整を施す。1341、1342は須恵器の杯である。1341は底部が欠損しているが、平底と考えられる。1342は底部外面に断面方形形状の高台が付く。1348は土師器で、口縁部は外方に短く屈曲する。



SK13

調査区北東部のB-13グリッドで検出した。一辺約1.2mを測る方形プランの土坑である。深さは25cmを測る。床面は平坦で、壁面は斜めに緩やかに立ち上がる。埋土は 層 褐灰色シルト、 層 暗灰黄色シルト、 層は黒褐色粘土質シルトで炭化物を含んでいる。

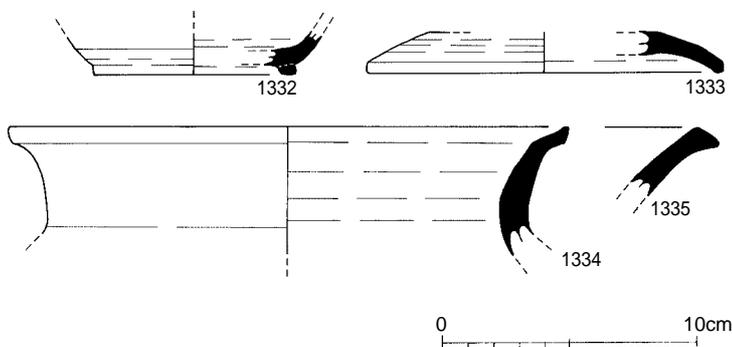


Fig.156 SK11平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図

遺物は 層からの出土である。土師器片が8点出土しており、その内の4点が図示できた(Fig.158-1345. 1346. 1347. 1349)。1345、1346は土師器杯の底部である。ともに平底を呈しているが、調整は不明瞭である。1347、1349は土師器である。共に底部は欠損している。1349の頸部から口縁部は外方に屈曲し、胴部外面には格子状のタタキが施されている。甕の中では小型である。1347も口縁部は外方に屈曲し、端部は上方に伸びる。胴部内面には当て具痕が残る。

SK14

調査区北東部のB-11・C-11において検出した。長軸約1.8mを測る不整形プランの土坑である。深さは約10~14cmと浅く、長軸方向はN-10°Eを示す。床面はほぼ平坦でし、壁面は斜めに立ち上がる。埋土は 層にぶい黄褐色シルト、 層は 層よりやや粘質が強い。埋土は一部地震の噴砂により切られている。遺物は 層からの出土である。遺物は土師器片15点、須恵器片2点、鉄滓1点が出土しており、その内1点が図示できた。1350は高台の付く土師器杯で、口縁部は外方に直線的に伸びている。

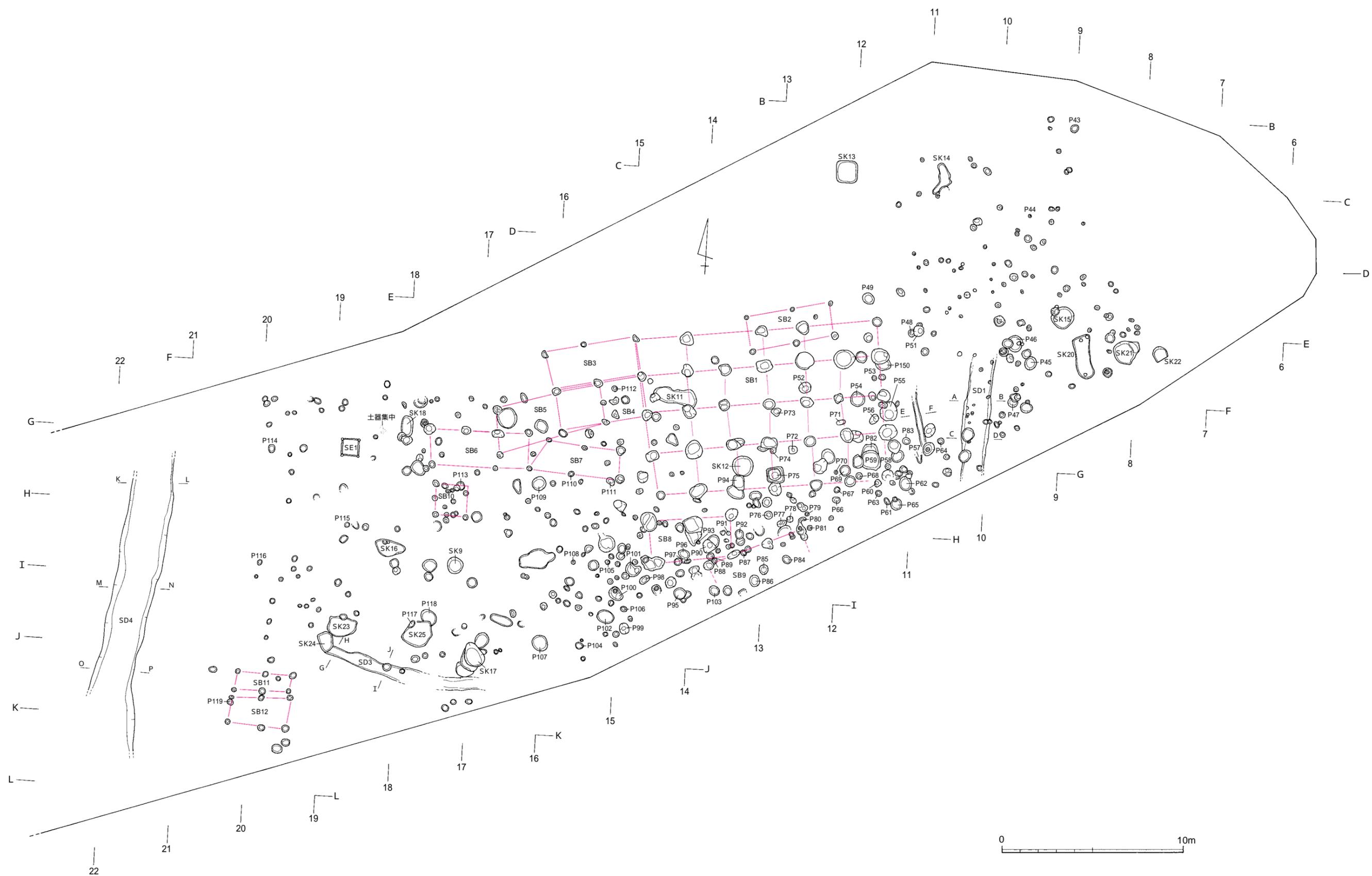


Fig.157 調査区検出遺構全体図(古代・中世)

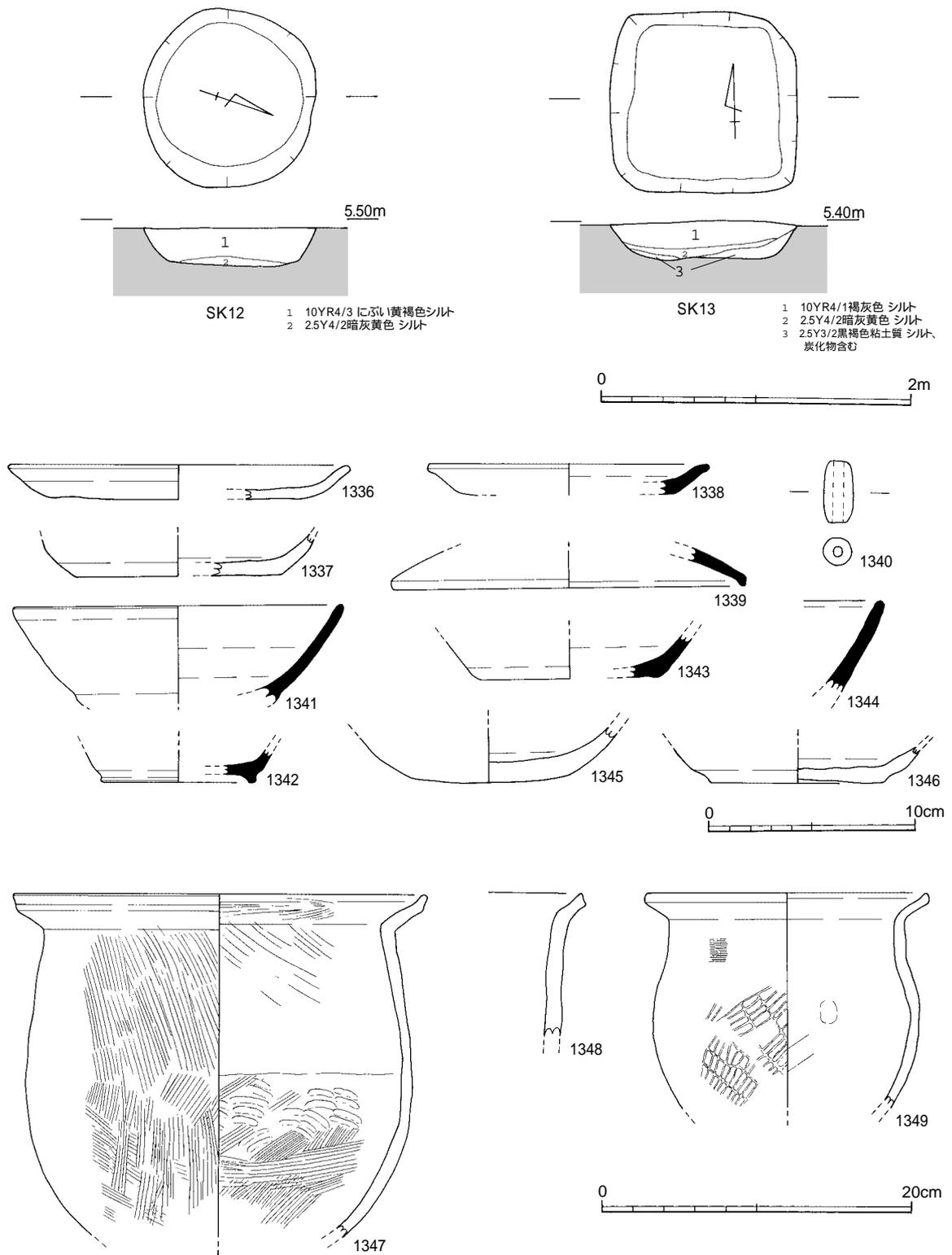
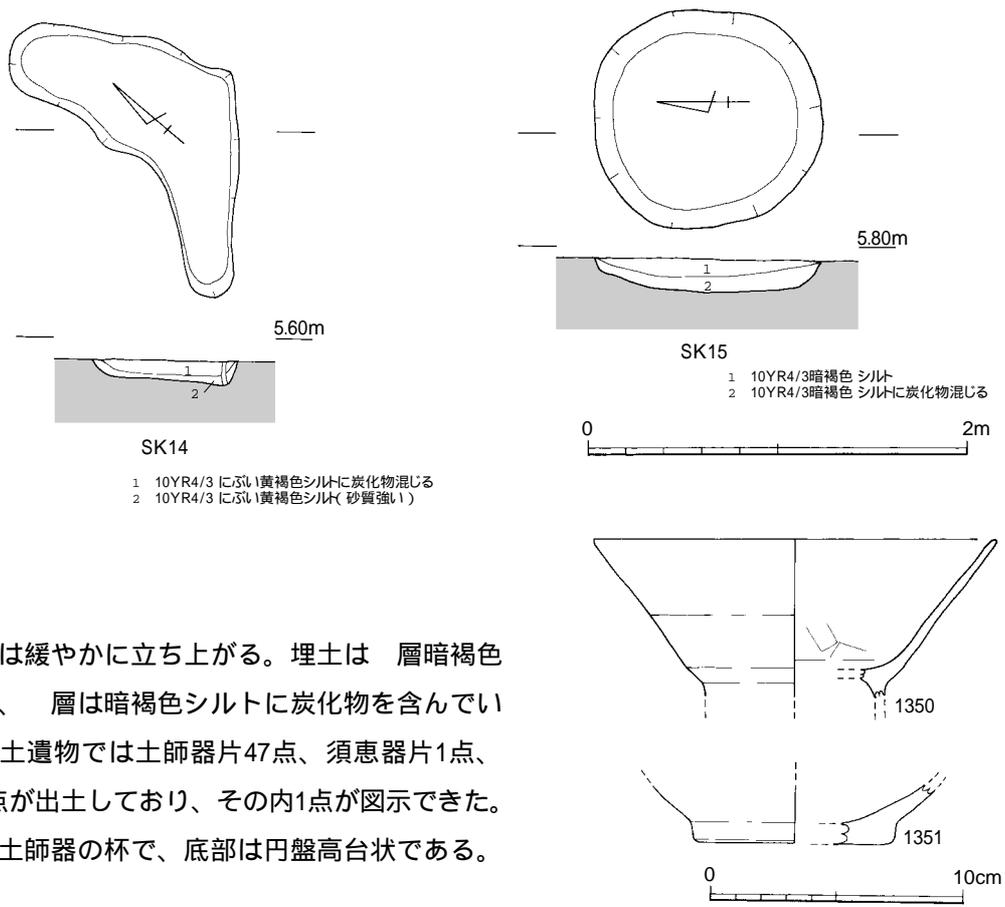


Fig.158 SK12・13平面・セクション図及び出土遺物実測図

SK15

調査区東部のD-9・10グリッドで検出した。径1.2mを測るほぼ円形プランの土坑である。深さは12~18cmを測り、北壁から南壁にかけて徐々に深くなっている。床面はほぼ平坦で、南壁面は斜め、



北壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は 層暗褐色シルト、 層は暗褐色シルトに炭化物を含んでいる。出土遺物では土師器片47点、須恵器片1点、土錘1点が出土しており、その内1点が図示できた。1351は土師器の杯で、底部は円盤高台状である。

SK16

調査区東部のH-18グリッドで検出した。長軸1.7m、幅0.84mを測る不整楕円形プランの土坑である。深さは約12cmと浅く、長軸方向はN-76°Wを示す。床面は平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。埋土は単層の暗褐色シルトである。遺物は土

師器片28点、須恵器片10点、製塩土器2点、土錘1点が出土しており、その内2点が図示できた(Fig. 160-1352.1353)。1352は須恵器の皿である。口縁部は上方に伸び、内外面はナデ調整。1353は須恵器の蓋である。天井部は欠損しており、内外面はナデ調整がみられる。

SK17

調査区南東部のI-17グリッドで検出した。長径1.36m、短径約1mを測る不整楕円形を呈した土坑である。深さは約32cmを測る。一部他の柱穴により切られている。長軸方向はN-51°Wを示す。床面はほぼ平坦面で、壁面は北壁面では斜めに、南壁面は直立して立ち上がる。

埋土は単層の暗褐色シルトである。遺物は土師器片15点、須恵器片5点が出土しており、その内の3点が図示できた(Fig.160-1356.1358.1359)。1356は須恵器の蓋で、天井部には擬宝珠形の摘みが付く。1358は須恵器の杯である。1359は土師器の口縁部片である。

Fig.159 SK14・15平面・セクション図及び出土遺物実測図

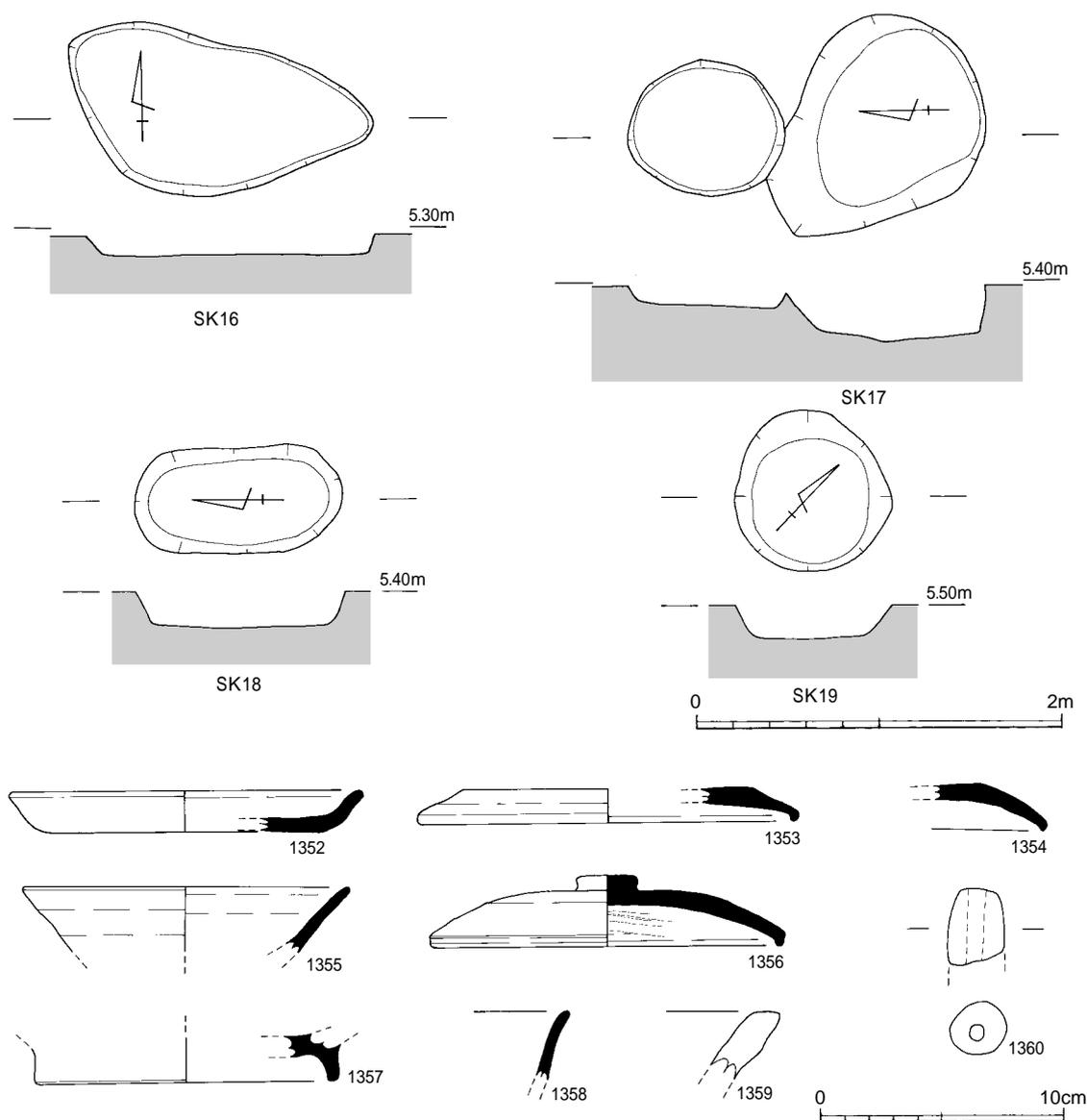


Fig.160 SK16・17・18・19平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

SK18

調査区中央部のF-18・19グリッドで検出した。長さ1.14m、幅0.58mを測る楕円形プランの土坑で、深さは約0.22mを測る。長軸方向はN-0°を示す。床面はほぼ平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。埋土は単層の暗褐色シルトである。遺物は土師器片8点、須恵器片3点が出土している。図示できるものはなかったが、須恵器蓋及び土師器の破片が存在する。

SK19

調査区中央部のH-18において検出した。長径90cm、短径84cmを測るで円形プランの土坑である。深さは約18cmと浅く、長軸方向はN-55°Eを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。

埋土は単層の暗褐色シルトである。遺物は土師器片42点、須恵器片20点、製塩土器1点、土錘1点が出土しており、その内4点が図示できた(Fig160-1354.1355.1357.1360)。遺物中には土師器の破片が多くみられる。1354は須恵器の蓋である。1355と1357は須恵器の杯で、1357は断面方形の高台が付く。1360は土錘であるが、途中で欠損している。

2. 中世

(1) 検出遺構

掘立柱建物

SB1

調査区中央部 E-12~15、F-12~15、G-12~15グリッドに位置している。棟軸をN-82°Eにとる総柱の掘立柱建物跡である。規模は梁間4間(9.3m)、桁行6間(13.8m)の東西棟建物で、柱間寸法は梁間方向で1.8~2.25m、桁行方向で2.25~2.7mと、ばらつきがみられる。北側柱列の2ヶ所で柱穴が検出できなかった。今次最大規模の建物跡である。柱穴径は、最大のP二6で約115cm、最小のPホ1で約40cmとややばらつきがある。平面形はほぼ円形を呈すが、楕円状のもの柱穴もみられる。深さは25~65cmを測り、やや幅がある。柱穴からは柱根は出土せず、ほとんど抜き取られていると思われるが、柱穴の床面からは礎盤として使用されたと考えられる板材が17基の柱穴から検出されている。中には床面底が粘土状になっており、その上面に礎板が検出されている場合とそのまま礎板が置かれている状態のものが存在する。礎板の大きさには幅があるが、1枚のみ置かれている場合が多く、中には2枚使用したものもみられた。またP口2、P八2の床面近くからは古銭が出土している。そのうちP口2では礎板と共に1373の古銭が出土しており、地鎮的な行為が行われた可能性がある。柱穴の埋土は層がにぶい黄褐色シルトに炭化物を含み、層は暗褐色シルトである。出土遺物は細片ではあるが、各ピットから出土している。柱穴の規模、礎板の有無はTab.83を参照されたい。

出土遺物(Fig.163-1361~1374)

遺物は土師器片が844点、須恵器片23点、瓦器207点、古銭2点が出土しており、その内14点が図示できた。1361、1362は底部から口縁部が上方に伸びる土師器の小皿である。1362の外底部には回転糸切り痕が残る。1363~1368は瓦器である。1363は口縁部はやや内湾し、内外面にはナデ、外底には指頭整形を行っている。1364、1366も底部から口縁部は内湾する。外底面には指頭整形が顕著である。内底部には一部ヘラミガキがなされている。1365は底部は平底で、口縁部は直立して伸びる。内外面は強いナデが施されている。ともに和泉型の皿と考えられる。1367、1368は外底部に断面三角形の小さな高台を貼付している。1367は口縁部外面には横ナデによる段をなし、体部外面には指頭圧痕が残る。1368は内底見込みに平行線状のヘラミガキが残る。皿と同様に和泉型の瓦器椀である。1369は須恵器の皿で、口縁内面は凹状を呈する。外底は回転ヘラ切り痕が残る。1370は東播系須恵器のコネ鉢である。1372は口縁部が短く外方に伸びる大型の土師器鍋である。内面にはヘラケズリとナデが施されている。1373、1374は古銭で、1374は天禧通宝(1017~1021年)で北宋銭で

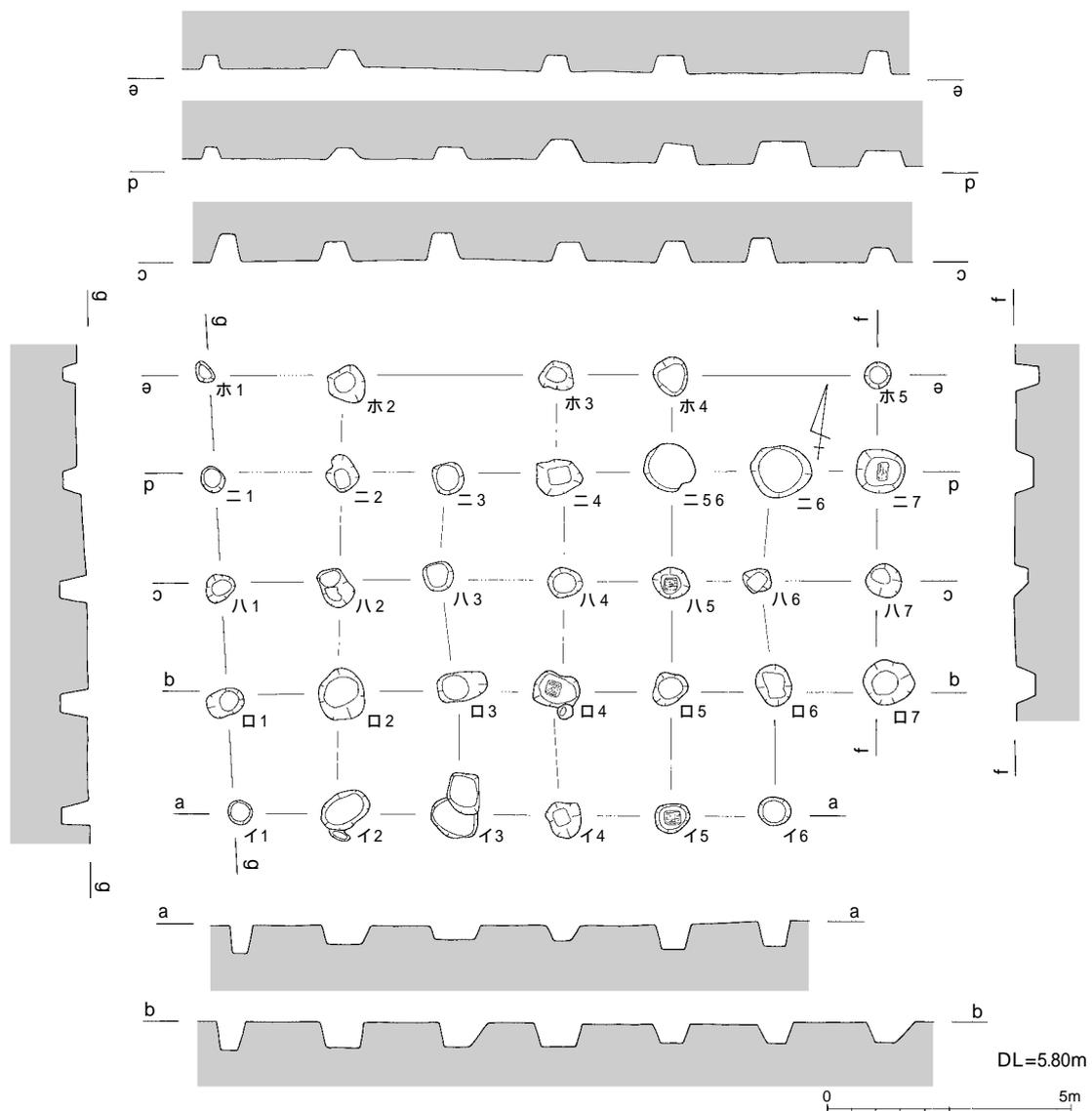


Fig.161 S B1平面・エレベーション図

ある。1373は皇宋元宝(1253年)で南宋銭である。1373はPロ2から礎板とともに出土している。

礎板(Fig.164-1375 ~ 1384、Fig.165-1385 ~ 1391)

SB1を構成する柱穴の17基から検出された。総数は19枚である。中に1375、1376、1377、1379、1382、1383のように遺存状態の良好なものもみられるが、1385、1386、1391のように腐食のため原形を留めていないものも存在する。最大のものは全長34.1cm、全幅31.1cm、全厚4.5cmを測り、正方形に近い形状である。良好な礎板は正方形のものが多いが、中には方形を呈すものや、厚みが薄いものなどもある。また、一つの柱穴に小型の礎板を2~3枚使用している例もみられた。材質はコウヤマキである。各礎板についてはTab.83を参照されたい。

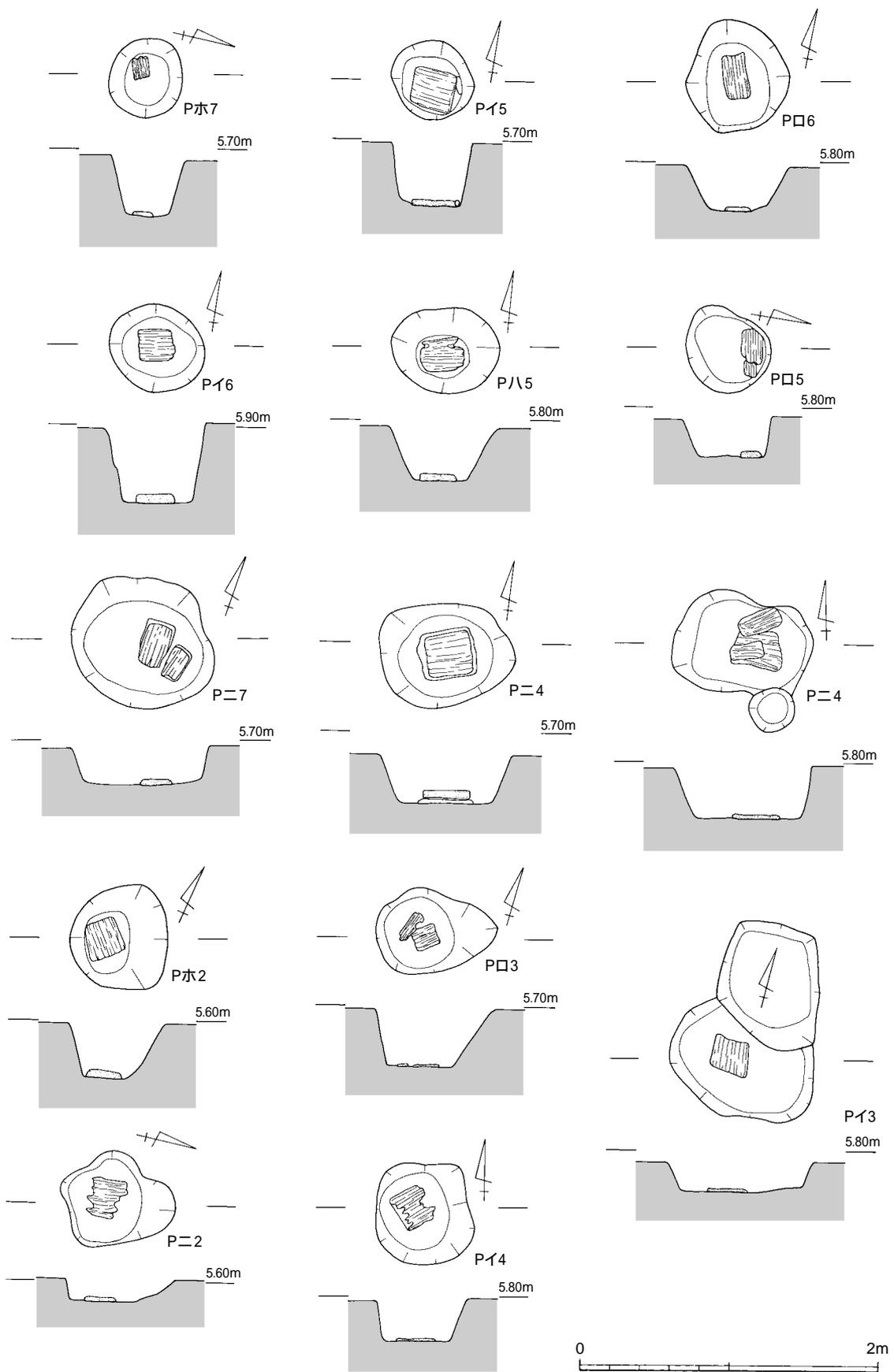


Fig.162 SB1礎板出土状況・エレベーション図

SB2

調査区の中央部D-13、E-13・14において検出した。棟軸はN-76°Eにとる掘立柱建物跡である。規模は梁間1間(2m)、桁行2間(4.6m)の東西棟建物で、柱間寸法は梁間方向で2m、桁行方向で2~2.6mを測る。柱穴は径が22~40cmを測り、平面形は円形を呈しており、深さは18~30cmと幅がある。埋土は単層のにぶい黄褐色土である。遺物は土師器片6点、須恵器片2点、瓦器3点が出土しているが、図示できるものはなかった。

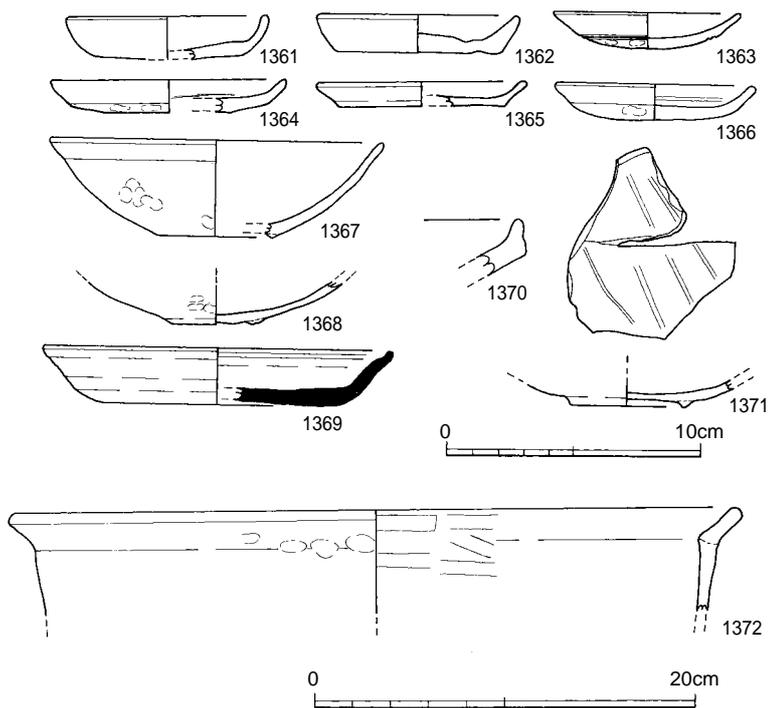


Fig.163 SB1出土遺物実測図

古銭は原寸大

SB3

調査区の中央北部E-15・16、F-16において検出した。棟軸をN-75°Eにとる掘立柱建物跡である。規模は梁間1間(2.2m)、桁行

2間(4.8~4.9m)の東西棟建物で、柱間寸法は梁間方向で2.15~2.2m、桁行方向で2.2~2.7mを測り幅がある。東側の柱穴はSB1の西北ピットと重複している。柱穴は径が30~48cmを測り、平面形は円形から不整形円形を呈する。深さは20~42cmとやや幅がある。埋土は単層のにぶい黄褐色土である。遺物は土師器片58点、瓦器1点、土錘1点、鉄滓2点が出土しており、その内図示できたものは1点でFig.170-1399の土錘である。

SB4

調査区中央部のE-15、F-15・16において検出した。棟軸をN-75°Eにとる掘立柱建物跡である。規模は梁間1間(2.35m)、桁行2間(4.8m)の東西棟建物で、柱間寸法は梁間方向で2.2~2.35m、桁行方向で2.35~2.45mを測る。北側のピットはSB3の南側ピットと、東側ピットはSB1のP八1、P口1と重複している。柱穴は径が35~60cmを測り、平面形は円形から不整形円形を呈する。深さは20~40cmを測り、幅がある。埋土は単層のにぶい黄褐色土である。遺物は重複ピットも合わせると土師器片91点、須恵器片1点、瓦器1点、白磁1点、鉄滓5点が出土しているが、図示できるものはなかった。

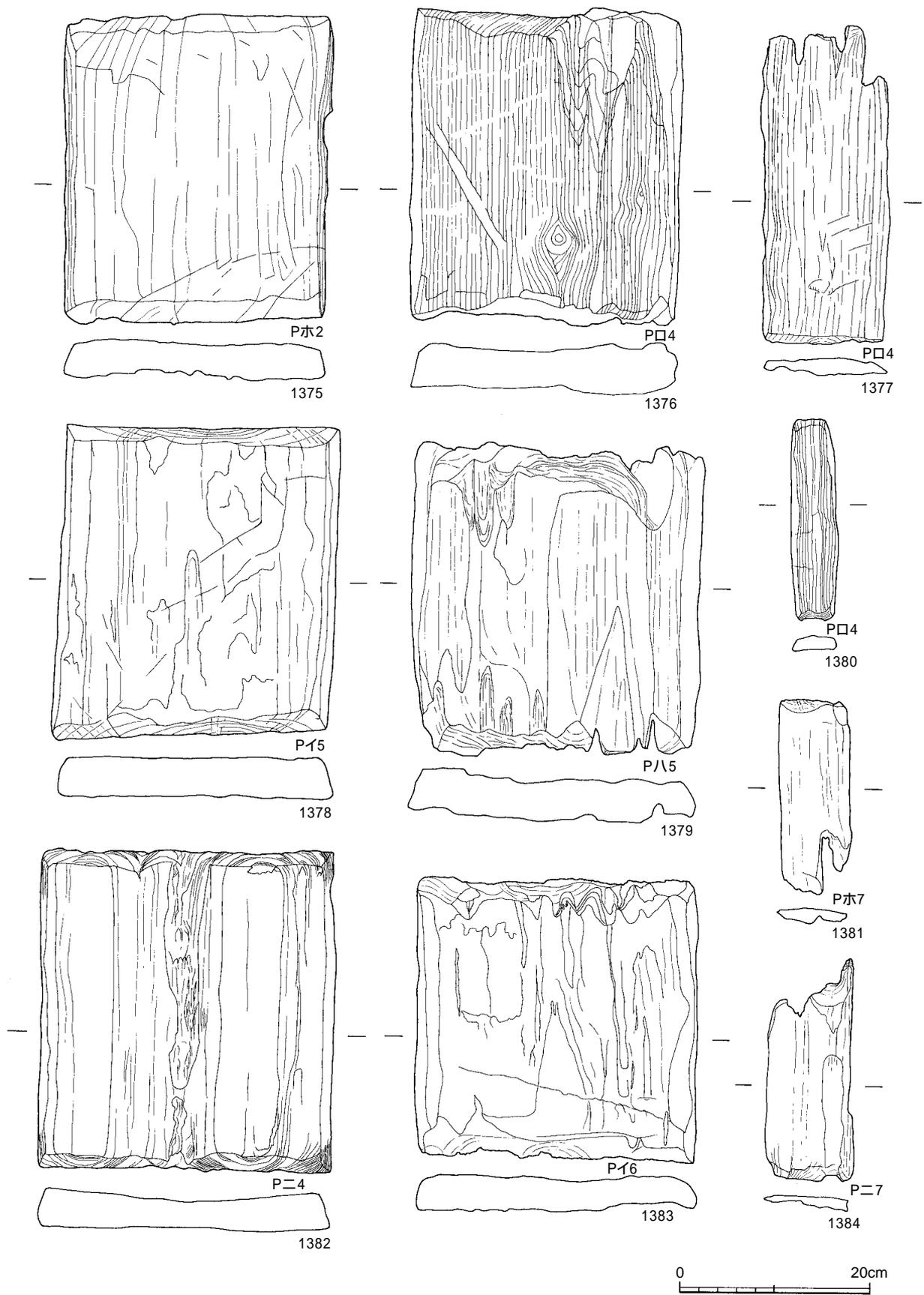


Fig.164 SB1礎板実測図1

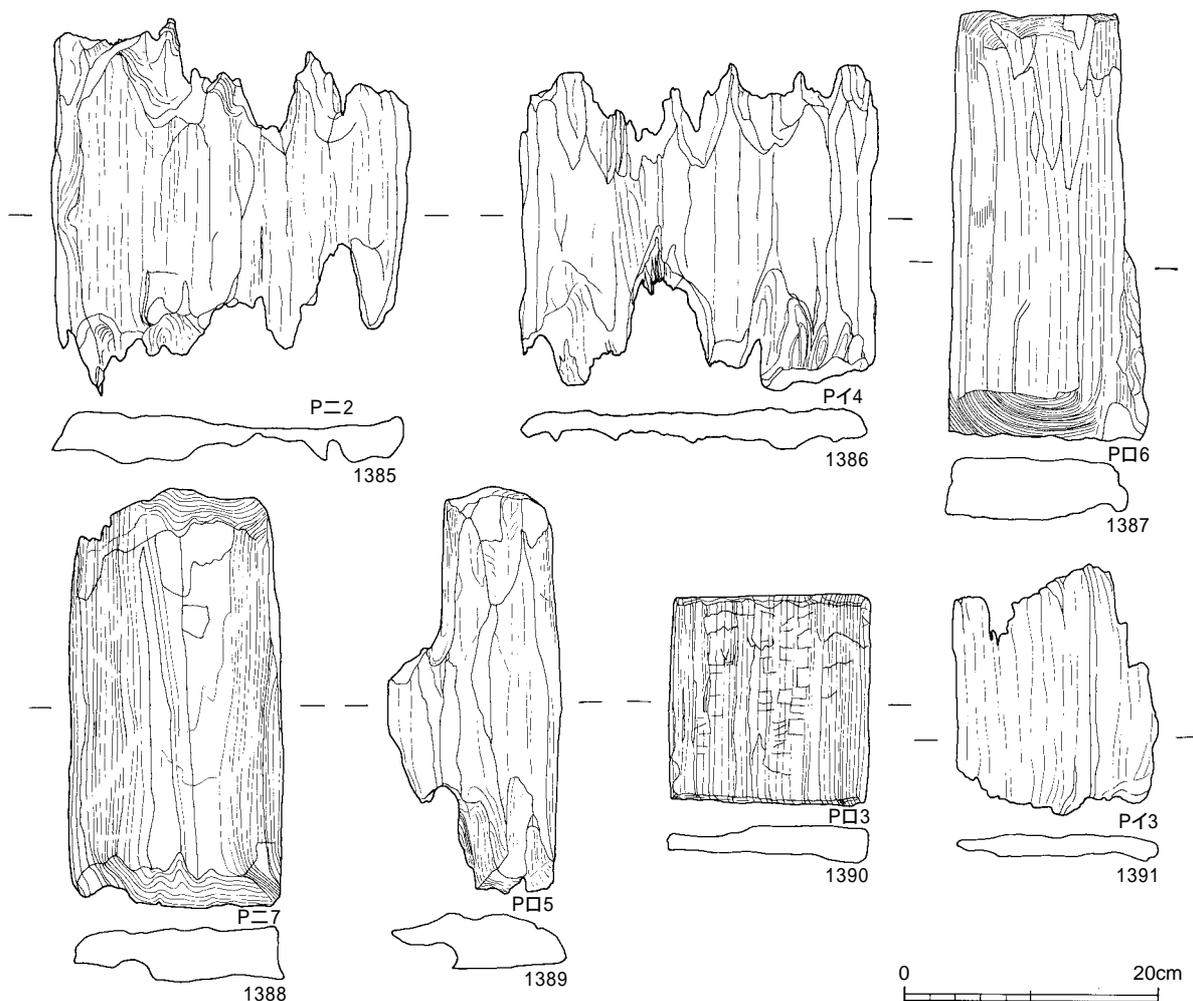


Fig.165 SB1礎板実測図2

SB5

調査区中央北部のF-16・17、G-17において検出した。棟軸をN-70°Eにとる掘立柱建物跡である。規模は梁間1間(2.46m)、桁行2間(5.68m)の東西棟建物で、柱間寸法は梁間方向で2.2~2.46m、桁行方向は2.2~3.6mを測り幅がある。中央と東側ピットはSB4の中央と西側ピットと重複している。柱穴はが32~50cmを測り、平面形は円形から不整形円形を呈している。深さは23~40cmを測り、やや幅がある。埋土は単層の褐色シルトである。出土遺物は重複ピットも合わせると、土師器片が71点、須恵器片1点、瓦器2点、白磁1点、鉄滓3点が出土しているが、図示できるものはなかった。

SB6

調査区中央北部のF-17・18、G-17・18において検出した。棟軸が真北に直交する掘立柱建物跡である。南側の桁行ピットは現地では確認できなかった。規模は梁間1間(2.0m)、桁行3間(5.45m)の東西棟建物で、柱間寸法は梁間方向で2.0m、桁行方向では1.7~2.0mを測り幅がある。柱穴は径が28~60cmを測り、やや幅がある。平面形態は円形から楕円形を呈している。深さは25~30cmを測る。埋土は黄褐色シルトである。出土遺物は土師器片が124点、須恵器片4点、瓦器2点、土錘3点、

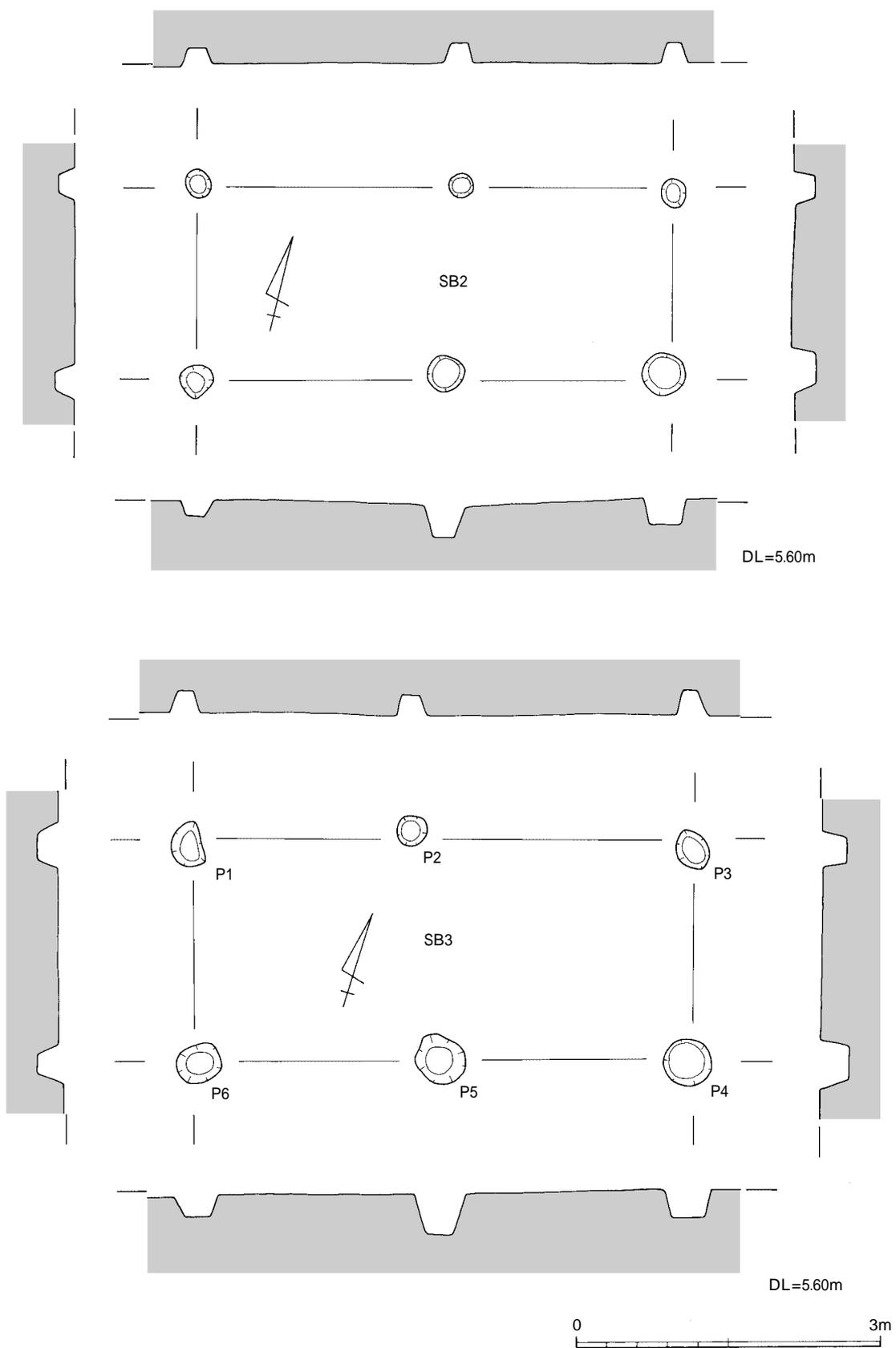


Fig.166 SB2・3平面・エレベーション図

鉄2点が出土しているが図示できたものはなかった。

SB7

調査区中央部のF-17・18、G-17・18において検出した。SB6の東側に隣接する。棟軸をN-85°Eにとる掘立柱建物跡である。規模は梁間1間(1.9m)、桁行2間(5m)の東西棟建物である。東側の梁間はやや広くなっており、南側ピットはSB6の南棟隅ピットと重複している。柱間寸法は梁間方向で1.68～1.9m、桁行方向は2.0～2.6mを測り幅がある。柱穴は径が28～40cmを測り、平面形態は円形から不整形円形を呈している。深さは20～38cmを測る。埋土は黄褐色シルトである。出土遺物は土師器片は58点、須恵器片4点、瓦器8点が出土しているが図示できたものはなかった。

SB8

調査区の中央南部G-14・15～H-14・15にかけて位置している。棟軸が真北に直交する掘立柱建物跡である。規模は梁間1間(2.4m)、桁行2間(4.52m)の東西棟建物である。南側桁行の中央ピットは上面ではなく底面のみの確認であった。また北側の桁行の中央ピットはやや建物の内側に寄っている。柱間寸法は梁間方向で2.1～2.5m、桁行方向で2.1～2.55mを測り幅がある。柱穴の規模は最大のP2で1mを測るが、ほとんどの柱穴は70～80cmを測る。平面形態は不整形円形から楕円形を呈しており、深さは22～48cmとばらつきがある。埋土は黄褐色シルトに炭化物を含んでいる。出土遺物は土師器片120点、須恵器片6点、瓦器31点、砥石1点が出土しており、P2からはFig.170-1402の柱根が検出された。図示できたのは5点である。

出土遺物(Fig.170-1392.1394.1396.1400.1402)

1392、1394、1396は瓦器で、1392は底部から口縁部にかけて内湾して伸びる皿である。1394は口縁部外面横ナデにより浅い段を呈し、1396は器高が浅く、外面には指頭が顕著に残る椀である。ともに和泉型と考えられる。1400は断面薄い方形状の砥石である。また1402の柱根は裏面に加工痕がみられる。

SB9

調査区の中央南部H-13・14にかけて位置している。棟軸をN-70°Eにとる掘立柱建物跡である。建物の北側桁行のみの検出であるが、柱穴の検出状況から建物は南側の調査区外に広がるものと考えられる。桁行は3間(5.4m)の東西棟建物と考えられる。桁行の西側から2つめの柱穴はSB8の南端の柱穴と重複している。柱間寸法は1.5～1.9mを測り幅がある。柱穴は径が50～65cm測り、平面形態は不整形円形から楕円形を呈している。深さは42～52cmを測る。埋土は単層の黒褐色土である。出土遺物は土師器片123点、須恵器片2点、瓦器31点、土錘1点で図示できたのは5点である。

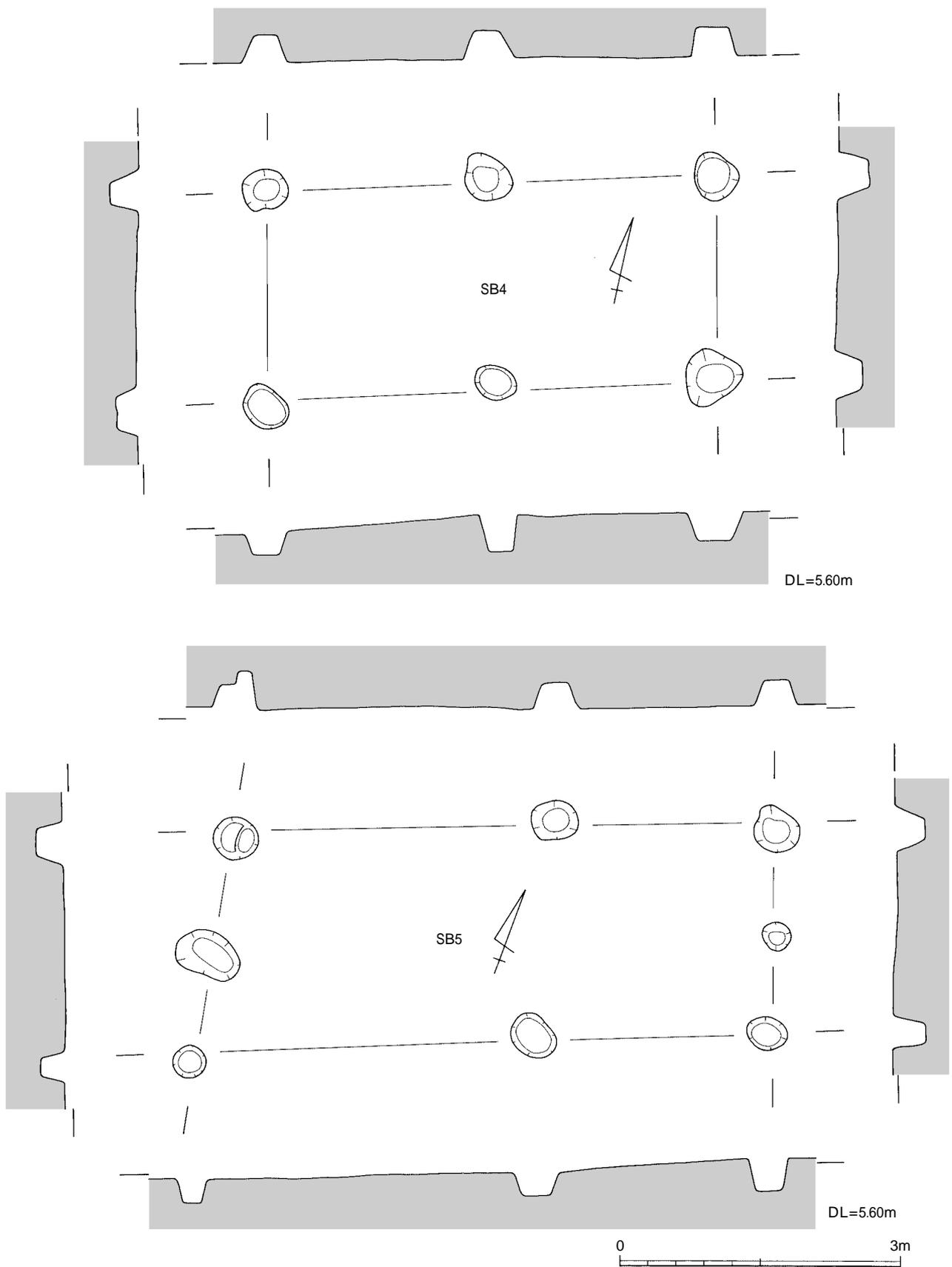


Fig.167 SB4・5平面・エレベーション図

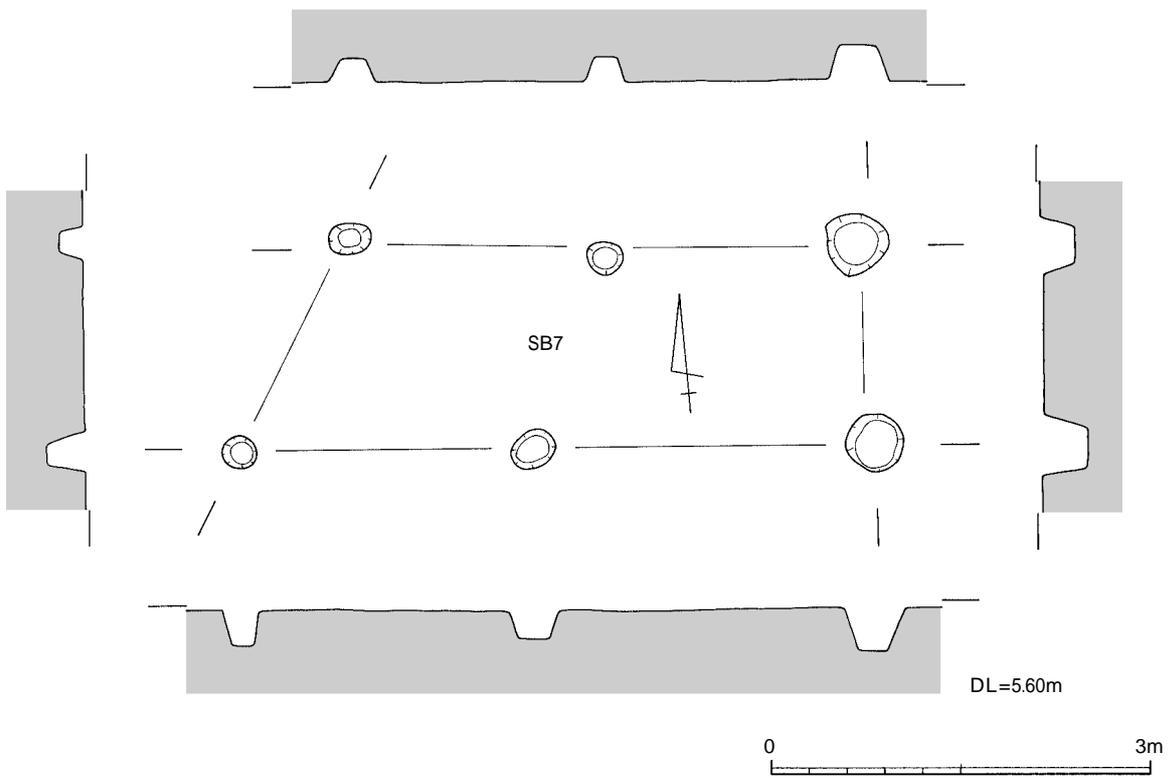
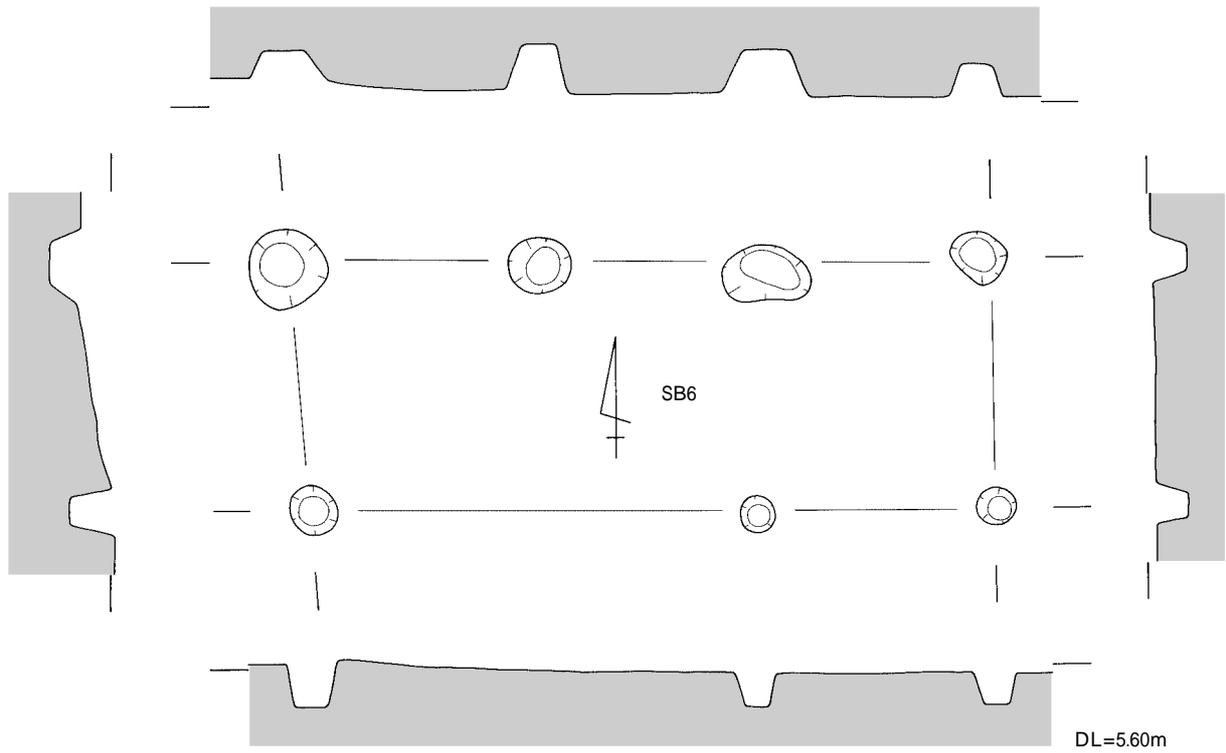


Fig.168 SB6・7平面・エレベーション図

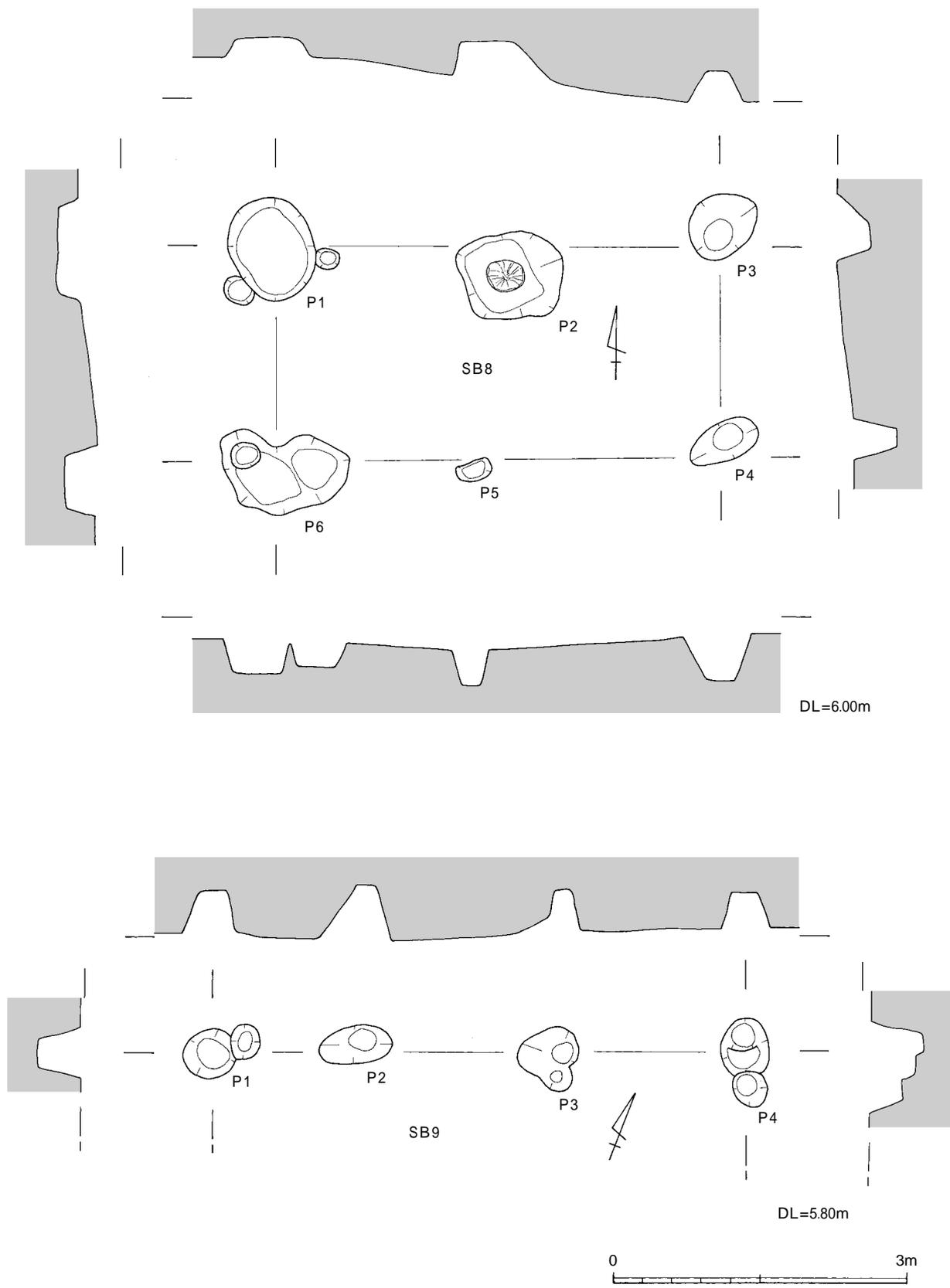


Fig.169 SB8・9平面・エレベーション図

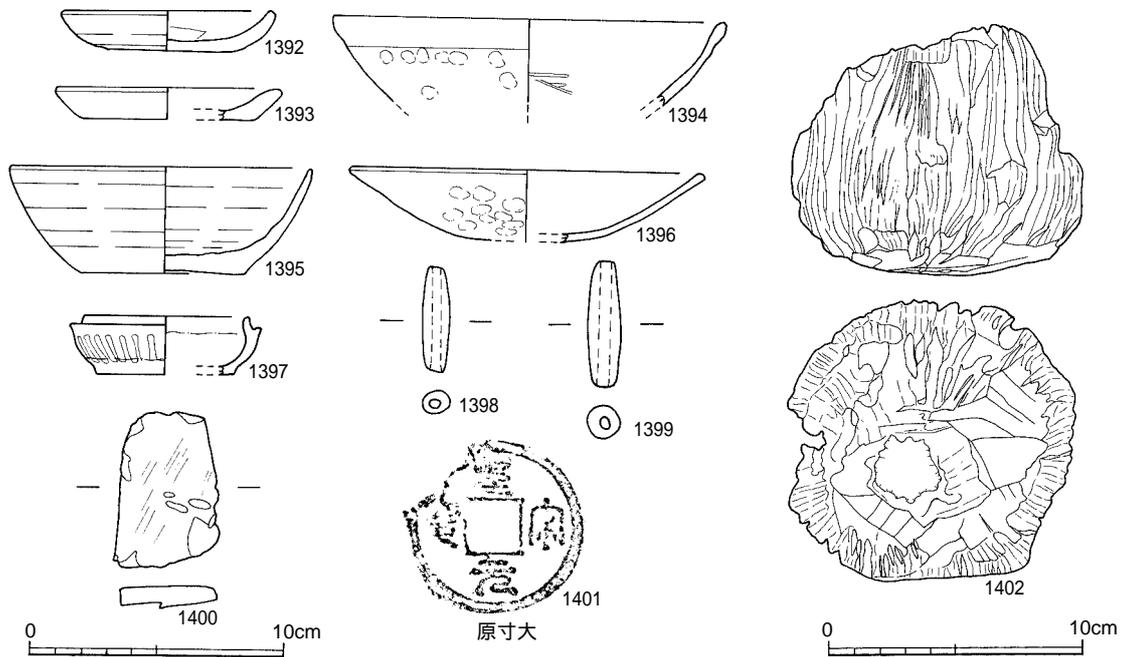


Fig.170 SB3・8・9出土遺物実測図

出土遺物(Fig.1393.1395.1397.1401)

1393は底部から口縁部にかけて上方に伸びる皿で、外底部には回転系切り痕が残る。1395は平底の底部から口縁部は外上方に伸びる杯で、外底部には回転系切り痕が残る。1397は青磁の合子で、外面には鑄状の凹凸がみられる。外面にはオリーブ色の釉が施釉されている。1401はP3から出土した皇宋元宝(1253年)の南宋銭である。

SB10

調査区西部のG-18～H-18において検出した。SB6の南約1m地点に位置している。棟軸をほぼ真北にとる掘立柱建物跡である。建物の北隅ピットは確認できていない。規模は梁間1間(1.75m)、桁行1間(1.6m)の建物である。柱間寸法は1.6～1.75mを測る。柱穴の径は28～36cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈している。深さは18～30cmを測る。埋土は単層の黄褐色シルトである。出土遺物は土師器が2点出土しているが、図示できるものはなかった。覆屋状の建物と考えられる。

SB11

調査区の西南部J-20・21において検出した。棟軸をN-88°Eにとる掘立柱建物跡である。規模は梁間1間(1.55m)、桁行2間(3.2m)の東西建物である。柱間寸法は梁間方向で1.35～1.55m、桁行方向で1.5～1.65mを測る。柱穴の径は22～32cmを測り、平面形態は円形を呈している。柱穴の深さは16～44cmを測り、やや幅がある。埋土は単層の黄褐色シルトである。出土遺物は皆無である。

SB12

調査区西南部の J -20・21 ~ K -20・21において検出した。SB11の南側に隣接している。棟軸を N -85 ° E にとる掘立柱建物跡である。規模は梁間1間(1.8m)、桁行2間(3.25m)の東西建物である。柱間寸法は梁間方向で1.8 ~ 2.05m、桁行方向が1.4 ~ 1.9mを測りやや幅がある。柱穴の径は22 ~ 40cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。深さは18 ~ 40cmを測る。埋土は単層の黄褐色シルトである。出土遺物は皆無である。

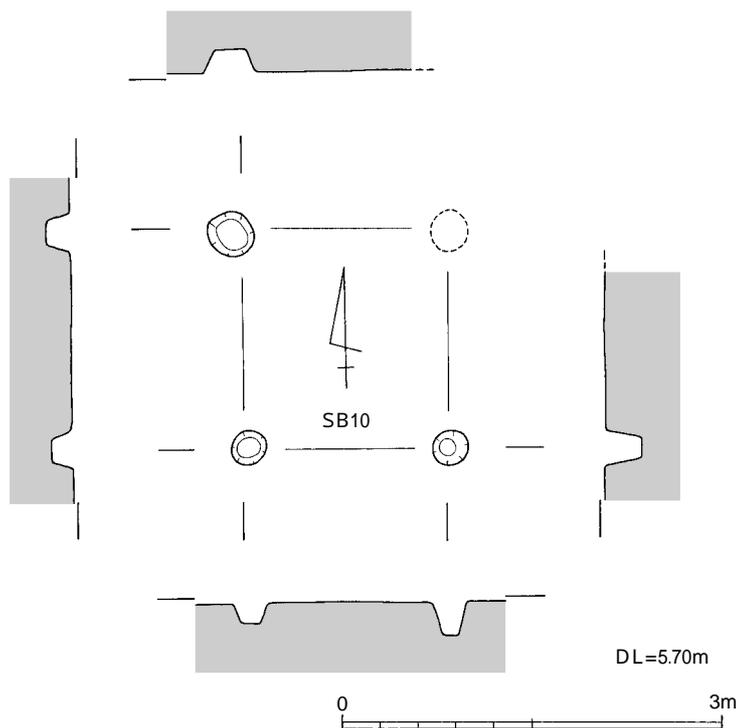


Fig.171 SB10平面・エレベーション図

土坑

SK20

調査区東南部の E -9において検出した。またSK15から南側に約80cm、SK21の西側約1.4m地点に位置する。長径は2.3m、短径は76cmを測る長形状を呈した土坑である。深さは5 ~ 12cmと浅く、長軸方向は N -5 ° E を示す。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は斜位方向に緩やかに立ち上がる。また床面には角礫、川原石及び、北壁と南壁付近の床面には完形の瓦器椀が出土しており、意図的に置かれたものと考えられる。また土坑中央部からは鉄製品が出土しており、土坑墓とも考えられる。埋土は 層灰黄褐色シルト、 層暗褐色シルトで、 層には角礫、円礫が多く含まれる。出土遺物では土師器片40点、須恵器片12点、瓦器3点、鉄製品1点が出土しており、その内2点が図示できた (Fig.173-1403.1404)。1403は底部外面には断面が台形状の粘土紐を貼付しており、外面は指頭、内底面から体部内面にかけてヘラミガキが巡る。1404は底部外面には扁平な三角形を呈した粘土紐を貼付している。内外面は磨耗が著しい。形態及び調整から共に和泉型瓦器椀と思われる。

SK21

調査区の東部の E -9において検出した。長径は1.44m、短径は1.2mを測る不整形を呈した土坑である。深さは約14 ~ 20cmを測る。南壁から北壁にかけて徐々に深くなっている。長軸方向は N -49 - E を示す。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は北壁面が斜位方向、南壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。出土遺物では土師器片11点、瓦器片10点、青磁片1点が出土しており、その内2点が図示できた (Fig.174-1405.1408)。1405、1408は瓦器椀の口縁部片である。

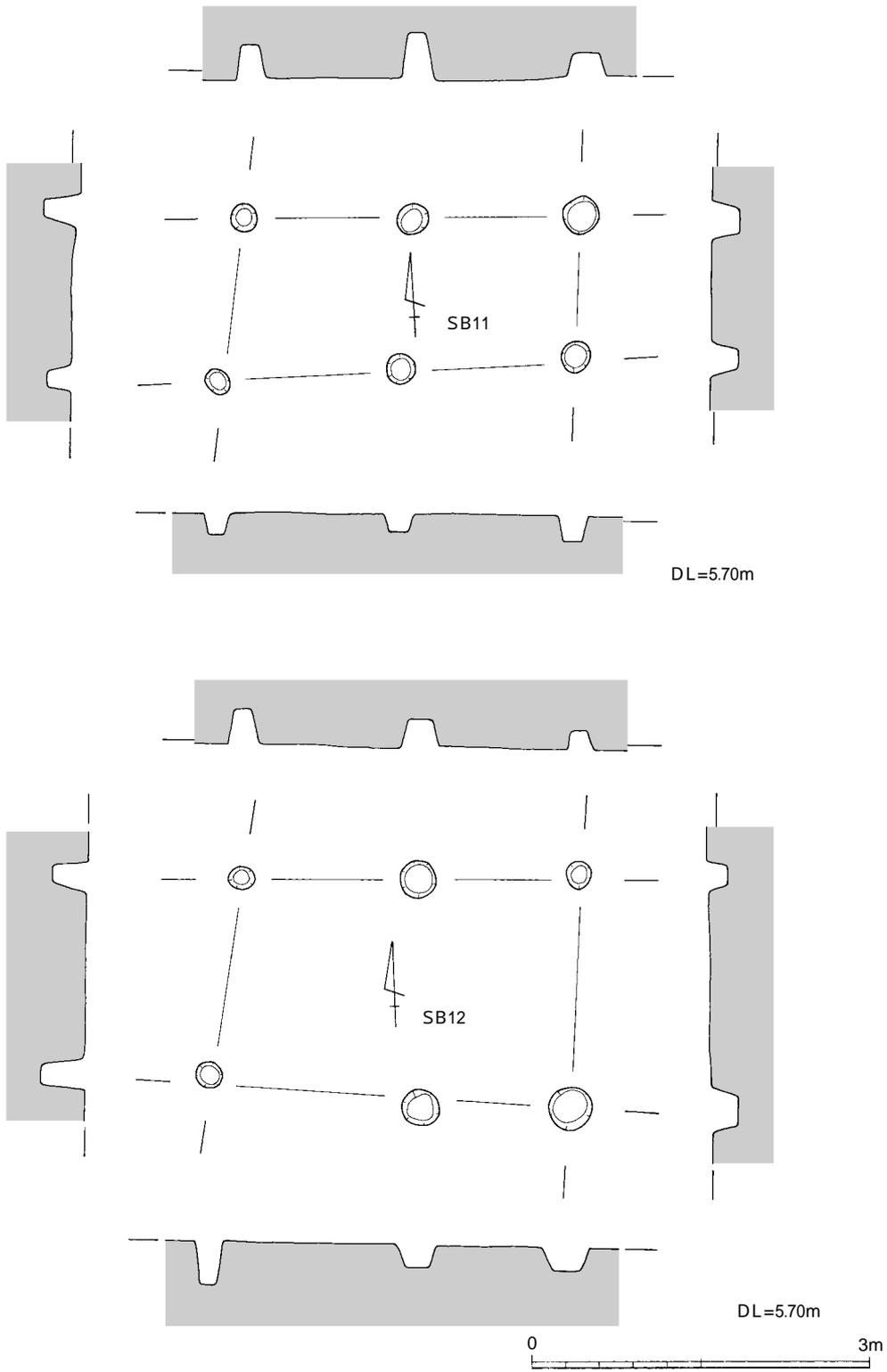


Fig.172 S B 11・12平面・エレベーション図

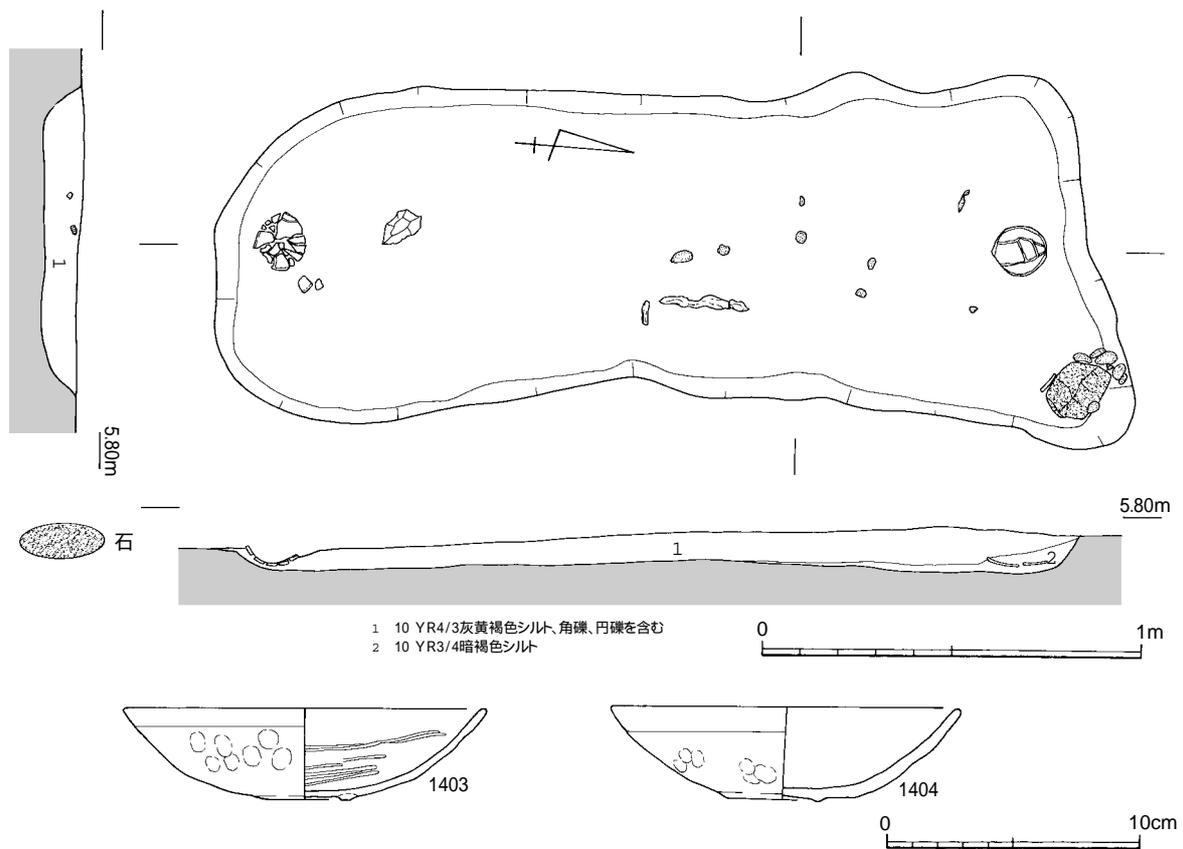


Fig.173 SK20平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図

SK22

調査区の東南部 E - 8において検出した。SK21の東側約1mに位置する。南東壁はトレンチにより切られ確認できなかった。深さは約10cmと浅く、床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。出土遺物では土師器片6点、瓦器片2点が出土しており、その内2点が図示できた (Fig.174-1406.1407)。1406は土師器杯の底部である。1407は土師器の口縁部である。ともに磨耗しており調整は不明瞭である。

SK23

調査区西南部 I - 19において検出した。SK24の北側に隣接している。長軸1.5m、短軸1.03mを測る。深さは21cmを測り、長軸方向はN - 89 ° - Wを示す。北辺は柱穴により切られている。床面はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物は土師器片、須恵器片が数点出土しているが、図示できたものはなかった。

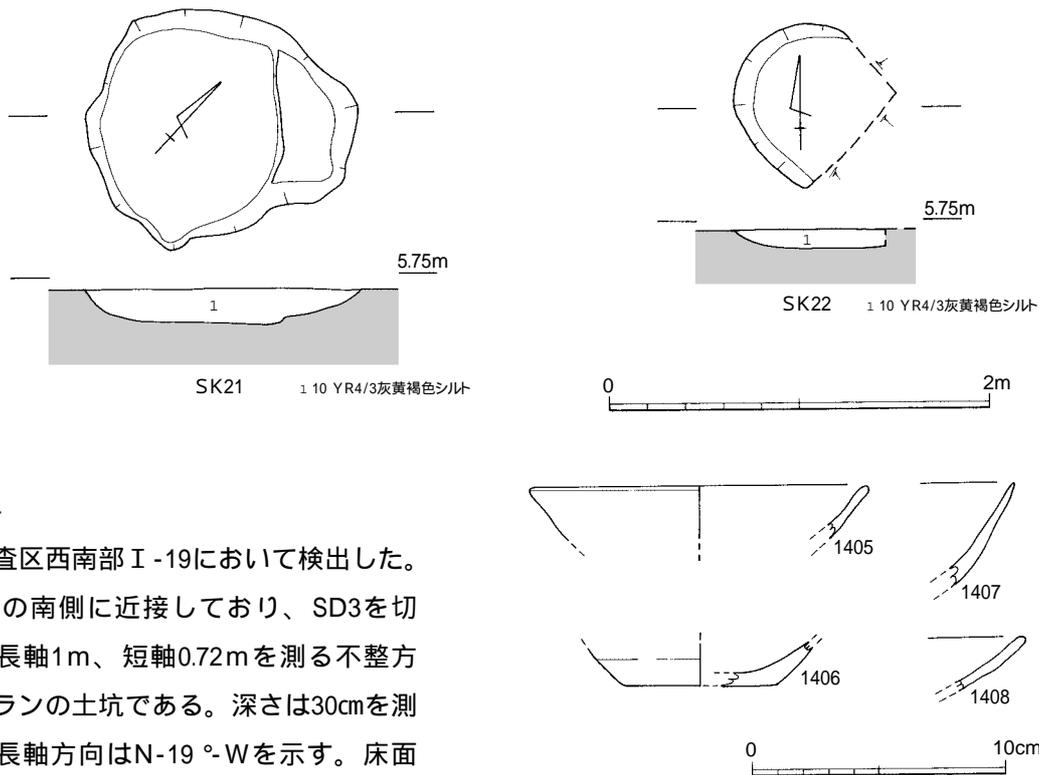


Fig.174 SK21・22平面・セクション図
及び出土遺物実測図

SK24

調査区西南部 I -19において検出した。SK23の南側に近接しており、SD3を切る。長軸1m、短軸0.72mを測る不整形プランの土坑である。深さは30cmを測り、長軸方向はN-19°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物は土師器の杯片、須恵器片が十数点出土しているが、図示できるものはなかった。

SK25

調査区の西南部 I -18において検出した。SK1の東約2.4mに位置し、長軸は1.5m、短軸は1.35mを測る。深さは12cmと浅い。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。西辺は柱穴により切られている。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物は土師器片が数点出土しているが、図示できたものはなかった。

溝

SD1

調査区東南部の E -10・11から F -10・11にかけて6.4m分を検出した。溝跡で、幅1.4mを測る。調査区を南北方向に通るが、南側は調査区の矢板により確認ができなかった。北側はトレンチにより切られている。溝の深さは浅い箇所14cm、深い箇所20cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。層位は 層にぶい黄褐色シルト、 層灰黄褐色シルト、 層褐色シルトで炭化物が混じる。出土遺物では土師器片50点、須恵器片2点、瓦器11点、青磁1点、石鍋1点が出土しており、その内石鍋が1点図示できた(Fig.176-1415)。口縁下の鏝は小さく、外面には削りが顕著である。

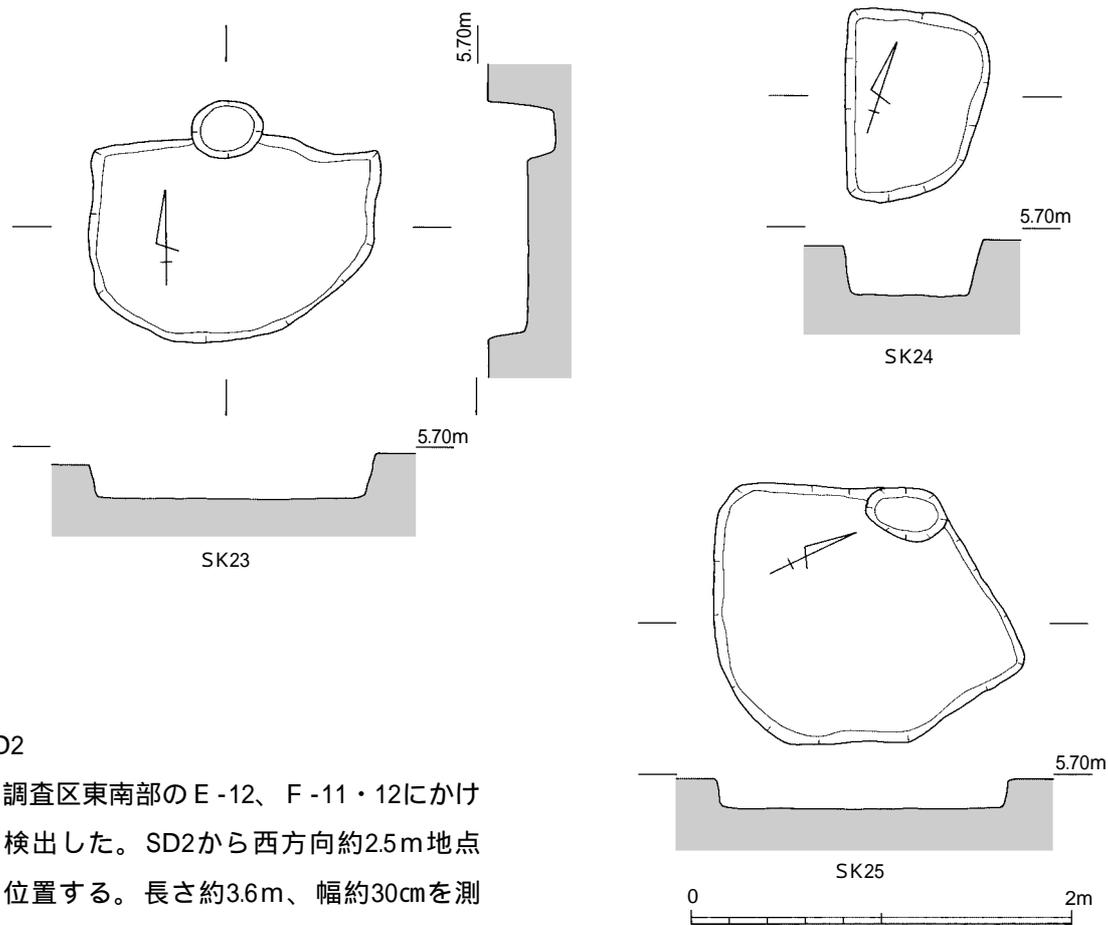


Fig.175 SK23・24・25平面・エレベーション図

SD2

調査区東南部のE-12、F-11・12にかけて検出した。SD2から西方向約2.5m地点に位置する。長さ約3.6m、幅約30cmを測る溝状遺構である。調査区を南北方向に通るが、北側と南側については検出不可能であった。深さは約10cmと非常に浅い。床面は平坦面を呈し、壁面は斜位に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。出土遺物には土師器片15点、須恵器片2点、瓦器4点が出土しているが、細片のため図示できるものはなかった。

SD3

調査区南部のJ-17～19にかけて検出した。長さは約8.8m、幅は40～80cmを測る。調査区を東西方向に通るが、西端はSK2により切られており西側は検出できなかった。溝の東側は調査区外に伸びると思われる、西側はSK2から北方向に折れ、続くとも考えられる。深さは約20cmを測り、床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は斜位に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。出土遺物では土師器片、須恵器片、製塩土器、青磁が数点出土しているが、細片のため図示できるものはなかった。

SD4

調査区西端のG-22、H-22、I-22、J-22、K-22グリッドで16mを検出した。幅約2.2mを測り、今次最大規模の溝である。調査区を南北方向に通り、さらに調査区外に伸びる。深さは20～25cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁面は斜めに緩やかに立ち上がる。埋土は層灰黄褐色シルトで炭化物

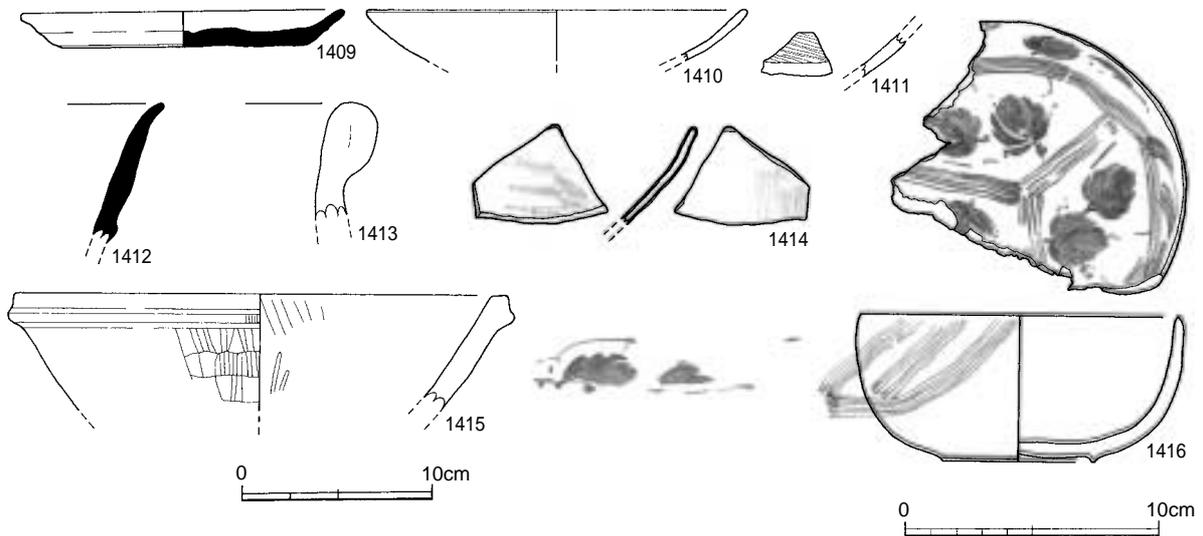
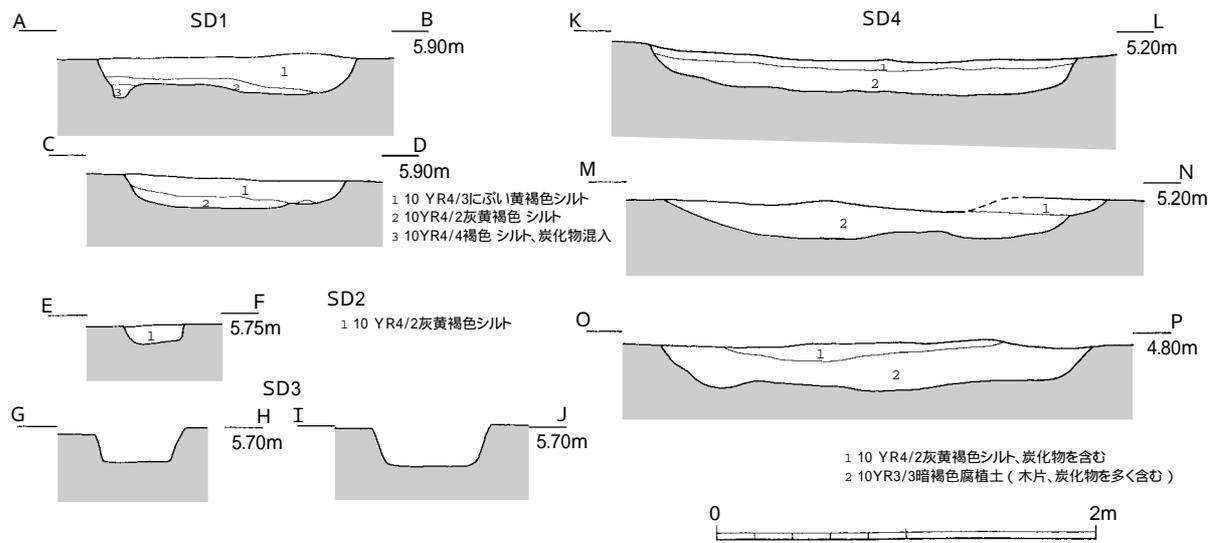


Fig.176 SD1・2・3・4セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図

を含み、層は暗褐色腐植土で木片が多く出土している。この溝を境に西側の調査区では中世の遺構は確認されておらず、地形的にも落ち込んでいることから、当該期の遺構展開域の西端と捉えることができる。遺物は土師器片87点、須恵器片4点、瓦器26点、青磁1点、国内産陶器1点、黒色土器1点、木製品が出土しており、その内7点が図示できた(Fig.176-1409~1414.1416)。1409は須恵器の皿で、内外面は回転ナデ調整がみられる。1410は瓦器碗の口縁部片であるが、調整は不明瞭である。1411は黒色土器B類である。内面にはヘラミガキが見られる。1412は須恵器杯である。1413は備前焼甕である。口縁部の形態は玉縁状を呈する。1414は同安窯系の青磁碗である。内外面には櫛描文がみられる。1416は漆器碗である。高台はやや小振り、断面は三角形状を呈する。内外面には草花状の文様が朱塗りされている。

井戸

SE1

調査区のG-19グリッドにおいて検出した。木組方形縦板組隅柱横棧型井戸である。掘形の北辺は削平のために正確ではないが、東西幅約1.5m、南北幅は1.14m以上を測る不整形を呈していたと思われる。深さは1.5mを測る。中央には一辺1m、高さ0.9mの方形井側を据えている。内部に井筒はみられない。隅柱は一辺14cm前後、高さ1.3～1.45mを測る柱材を使用している。柱には丸材を使用しており、先端は杭状に削られている。また横棧を組む方形の孔が穿たれている。横棧は隅柱上部の1段のみに設置されていたが、1417、1418の隅柱には下部にも横棧を組んだと思われる孔がみられることから、柱のみ転用したとも考えられる。横棧は幅8cm大の角材を面取りしている。両端は凸部を作り出し、隅柱に設けられた孔に差し込まれ固定されていた。縦板には高さ78～115cm、幅20～24cm、厚さ3.6～6.0cmを測る材を、一面につき一側面には3枚ずつ用いている。縦板の一部は下部を炭化させており、腐食を防いだものと考えられる。内部には暗褐色腐植土が堆積しており、縦板から約70cm下層には直径5～8cm大の円礫(川原石)が敷き詰められ、中央部からは1417の曲物が出土している。その円礫層の下層には直径10～15cm大の同様の礫が敷き詰められている。出土遺物には曲物の他に土師器片、瓦器が数点出土しているが、細片のため図示できるものはなかった。

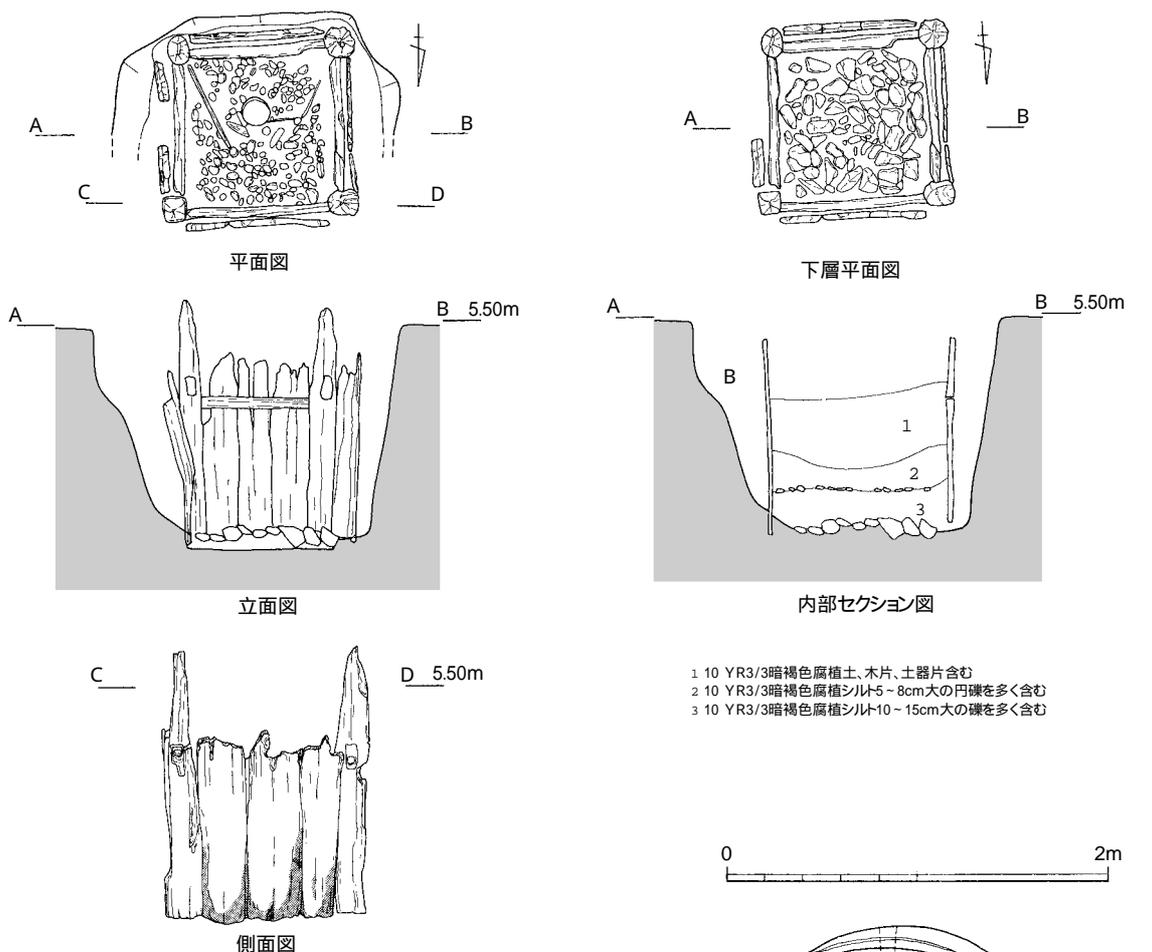
出土遺物(Fig.177-1417)

井戸内部の層から出土した曲物である。口径は13.4cm、器高12.2cm、底径が14.1cmを測る。口縁下には1.5×2.2cmを測る方形の孔がみられる。

土師器集中(Fig.180)

調査区西中央部のF-19グリッドにおいて検出した土師器の集中である。直径約50cm範囲に杯が十数点重なった状態で出土した。検出標高は5.5～5.7mを測る深さであるため柱穴の可能性も考えたが、掘形を確認できなかったため土師器集中として報告することとする。杯は2、3点重なった状態で、集中している。数点の皿と青磁片も出土しているが、杯が多くを占めている。集中の西約1mにはSE1が存在し、何らかの地鎮的行為に関係すると考えられる。

土師器は破片も合わせてと約229点出土しており、そのうち皿4点、杯22点が図示できた。1437～1440は口径6.4～7cm、器高1.4cmを測る小皿である。底部から口縁部は上方に短く伸び、1438、1439には底部外面には回転系切りがみられる。1441～1461は口径12cm前後、器高4cm前後、底径は約7cmを測る杯である。口縁部は外方に伸びるものとやや内湾するタイプがみられる。全体に摩耗しており調整が不明なものが多いが、底部外面には回転系切り後の板状圧痕が残るものが数点認められる。1464は内面に線描が施された同安窯系の青磁皿である。



ピット群

調査区においては大小600基を超える柱穴が検出されている。柱穴のほとんどは他の遺構と同じく西部に集中している。ほとんどの柱穴から土器片が出土しているが、細片が多いため今回は遺物が図示できた柱穴に関して述べていくこととする。

P43

調査区の北東部B-9において検出した。径は約40cmを測り、平面形はほぼ円形を呈している。深さは約30cmを測る。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は直立して立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片5点、瓦器1点、青磁1点、土錘2点が出土している。その内3点が図示できた(Fig.181-1465.1466.1477)。1465は青磁碗である。内面には劃花文の一部が見られる。1466は瓦器椀である。外面には指頭調整がなされる。1477は土錘である。上下は一部欠損している。

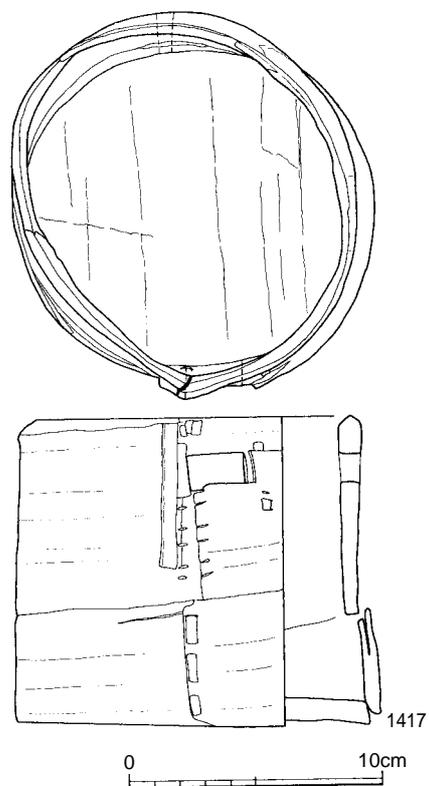


Fig.177 SE1平面図・出土遺物実測図

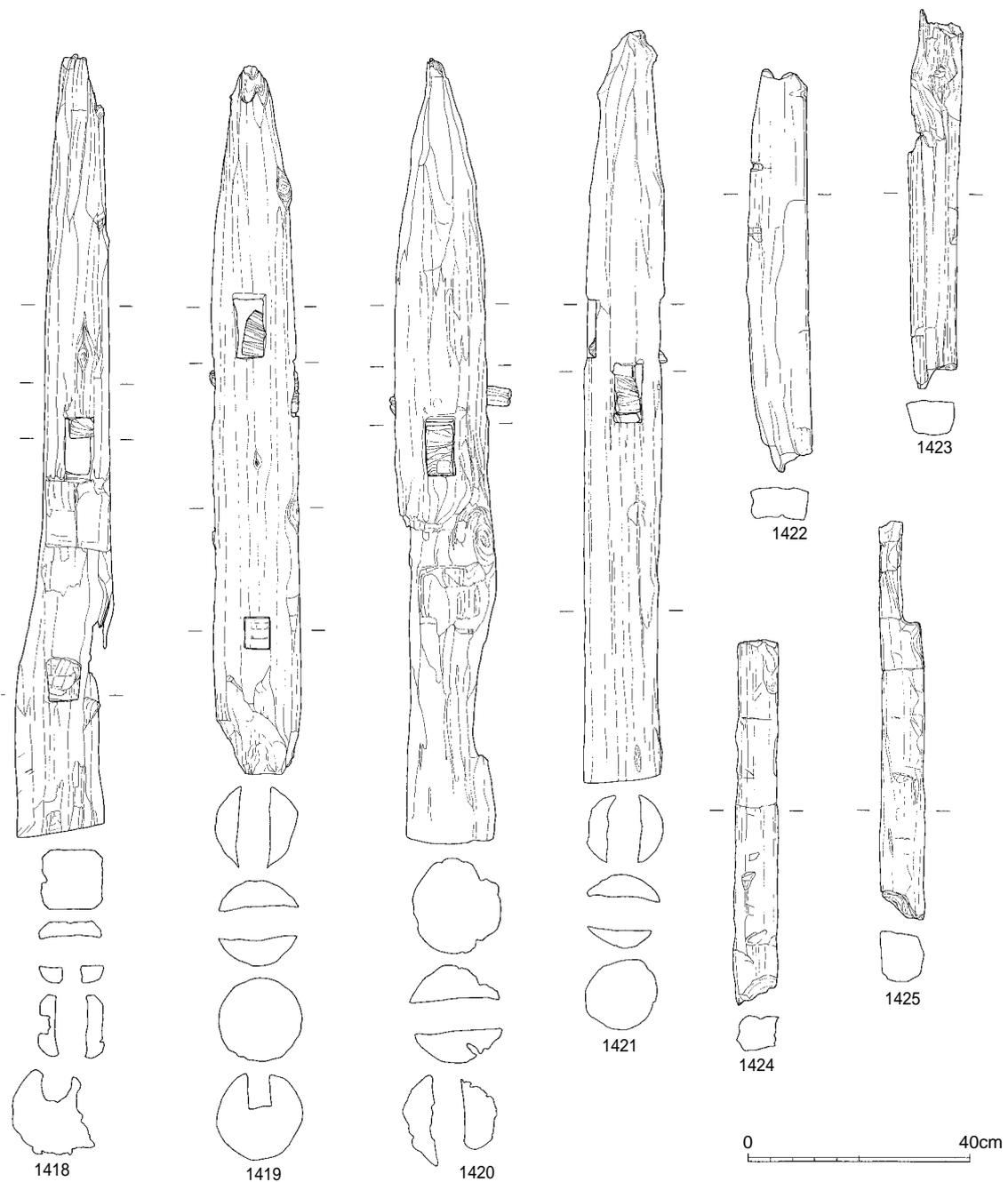


Fig.178 SE1柱・横棧実測図

P44

調査区の北東部C-10より検出した。径は約24cmを測り、平面形は円形を呈す。深さは約20cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は斜位方向に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物はFig.181-1467の和泉型の瓦器皿が出土している。口縁部内外面はナデ及び外底面には指頭が顕著である。

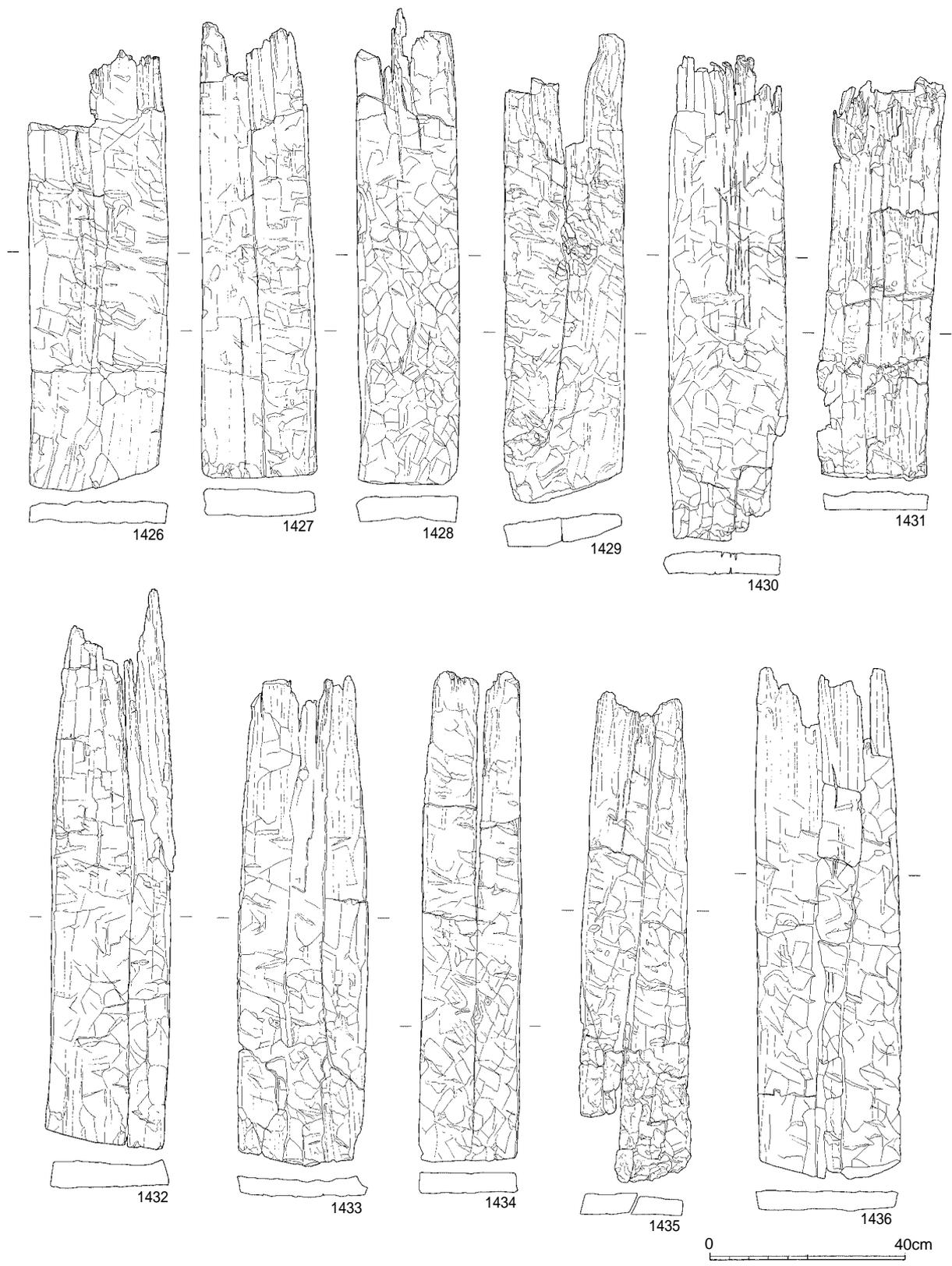


Fig.179 SE 1縦板実測図

P45

調査区東部の E-10において検出した。長径は約80cm、短径は56cmを測り、平面形はほぼ円形を呈す。深さは40cmと深い。床面は平坦面を呈し、北壁は直立に、南壁は斜位方向に緩やかに立ち上がる。埋土は 層灰黄褐色シルトで炭化物を含み、 層は灰黄褐色粘質土である。遺物では土師器片11点、瓦器1点が出土しており、その内1点が図示できた (Fig.181-1468)。土師器の杯で、底部は平底を呈し外面には回転糸切り痕についてと思われる板状の圧痕が残る。

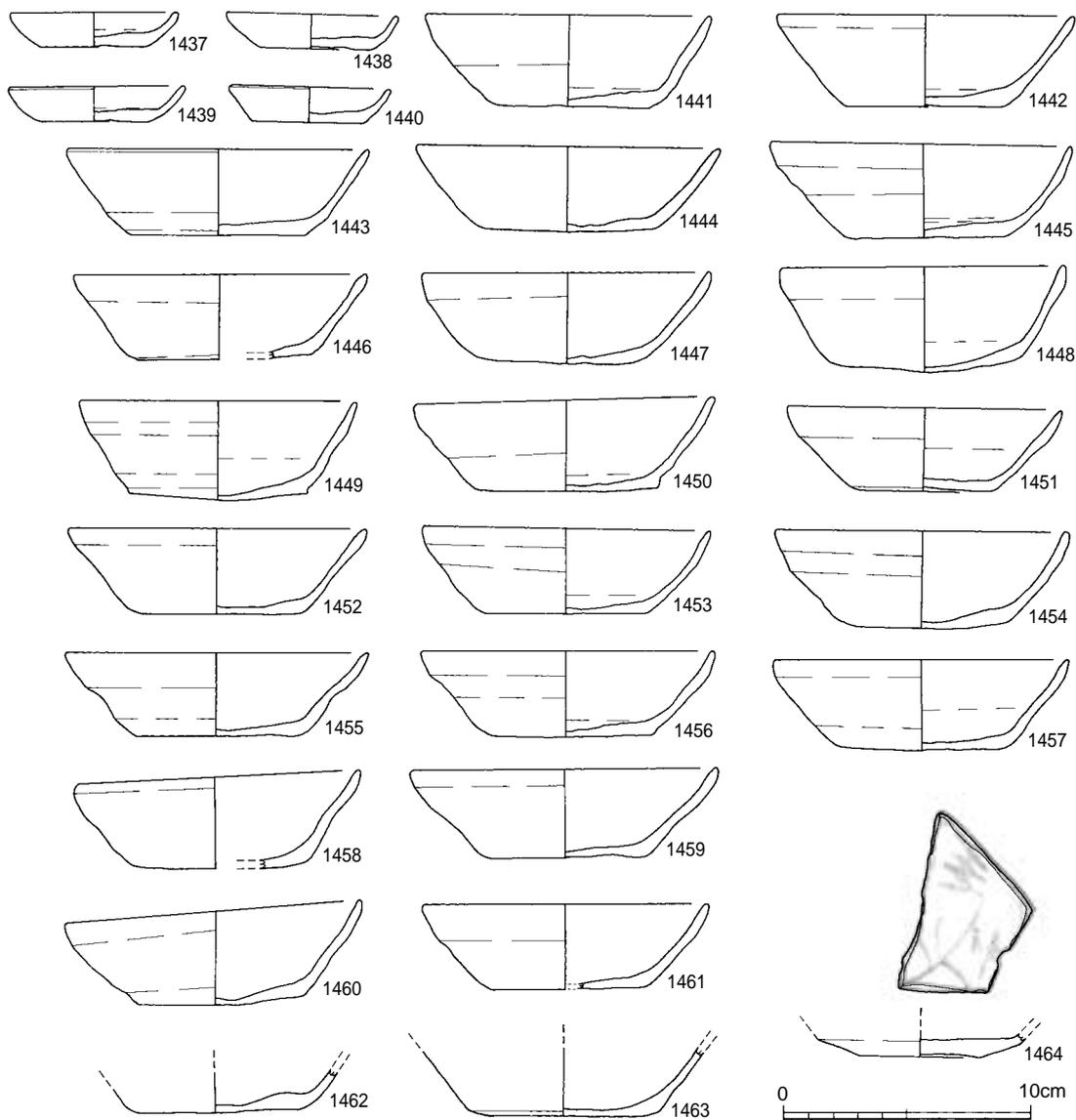
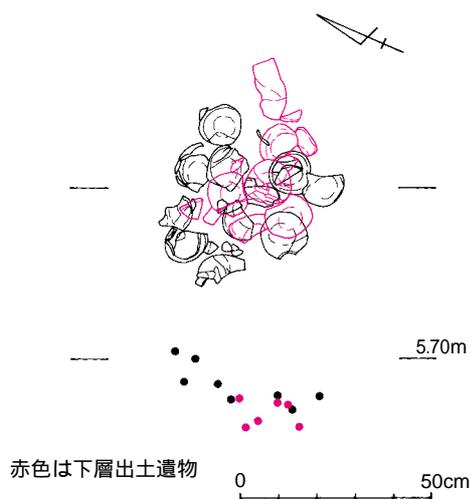


Fig.180 土師器集中出土状況図及び出土遺物実測図

P46

調査区東部のE-10において検出した。P45から25cm北側に位置する。長径は96cm、短径は80cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。深さは13cmと浅い。床面は平坦面を呈し、壁面は斜位方向に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトで炭化物を含んでいる。遺物では土師器片5点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.181-1469)。土師器の杯で、底部は平底を呈し外面には回転糸切り痕が残る。

P47

調査区東南部のF-10において検出した。P45から南西部約1.9m地点に位置する。径は約60cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは約30cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトで炭化物を含んでいる。遺物では土師器片が38点、瓦器2点、鉄片3点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.181-1471)。土師器の杯で底部は欠損しているが、口縁部は外上方に伸びる。

P48

調査区の東南部E-12において検出した。径は40cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは18cmを測る。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトで炭化物を含んでいる。遺物では土師器片13点、製塩土器1点が出土しており、その内1点図示できた(Fig.181-1473)。土師器の杯で底部は平底を呈し、外面には回転糸切り痕が残る。器壁は非常に薄い作りである。

P49

調査区東部のD-12において検出した。径は58cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。深さは約20cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面はほぼ斜位方向に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトで炭化物を含んでいる。遺物では土師器片3点、須恵器片1点、土錘1点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.181-1471)。土師器の杯である。ロクロ成形で底部は平底を呈し、外面には回転糸切り後の板状圧痕が残る。

P50

調査区のE-12において検出した。径は約80cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。調査区の中では大型の柱穴である。深さは約50cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は斜位に立ち上がる。埋土は 層灰黄褐色シルトで炭化物を含み、 層は粘質の強い灰黄褐色土である。遺物では土師器片86点、瓦器5点、鉄片2点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.181-1472)。土師器の杯である。ロクロ成形で底部は平底を呈し、口縁部は外上方に伸びている。

P51

調査区のE-11・12にかけて検出した。径は約58cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する柱穴である。深さは25cmを測る。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色土である。遺物では土師器片27点、須恵器片2点、瓦器1点が出土しており、その内3点(Fig. 181-1474～1476)が図示できた。1474と1475は土師器の皿である。全体に器壁が厚く、底部外面には糸切り痕が残る。器高の約1/3～1/2を底部が占めている。1476は土師器の皿で、平底の底部から

口縁部は直立して外方に伸びる。底部外面には回転系切り痕が残る。

P52

調査区中央部のE-13、F-13にかけて検出した。SB1のP八5とP二5の中間に位置している。径は約65cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する柱穴である。深さは40cmを測る。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は斜位に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトに炭化物が混じる。遺物では土師器片が8点、古銭1点が出土しており、その内古銭1点が図示できた(Fig.181-1478)。北宋銭の紹聖元宝(1094年)である。

P53

調査区のE-12より検出した。径は約40cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。深さは約50cmを測る。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層灰黄褐色シルトで炭化物を含み、上層は褐色シルトである。床面からは直径15cm大の角礫が出土している。遺物では土師器片7点、須恵器片2点、瓦器6点が出土しており、その内の瓦器椀が1点図示できた(Fig.182-1479)。口縁部外面には強い横ナデ、体部下半にかけては指頭が顕著である。内面にはヘラミガキが施される。

P54

調査区のF-12より検出した。径は約80cmを測り、平面形態は円形を呈する。深さは12cmと浅い。床面は平坦面を呈し、壁面は斜位に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片が14点、須恵器片1点、瓦器4点が出土しており、その内瓦器椀が1点のみ図示できた(Fig.182-1480)。底部外面には断面が台形状の粘土紐を貼付して高台を形成しており、外面には指頭、内底面には平行のヘラミガキが施されている。

P55

調査区のF-12より検出した。SB1のP八7南側に隣接する柱穴で、長径は1m、短径は88cmを測り、平面形態は不整形円形を呈する。深さは約20cmを測る。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は斜位方向に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片14点、須恵器片2点、瓦器4点、青磁1点が出土しており、須恵器が1点のみ図示できた(Fig.182-1486)が、出土した青磁片では同安窯系の製品がみられる。1486は須恵器の椀の口縁部と思われる。

P56

調査区のF-12より検出した。P54の西側に隣接している。長径は56cm、短径は40cmを測り、平面形態は楕円形を呈する。深さは37cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は直立して立ち上がる。埋土は単層の褐色シルトで、床面からは直径10cm大の角礫が出土している。遺物では土師器片8点、須恵器片5点、瓦器2点が出土しており、その内瓦器椀と須恵器鉢が図示できた(Fig.182-1481.1499)。1499の須恵器鉢は口縁端部は平坦面を呈し、内外面には回転ナデ調整がなされる。内面には使用痕跡がみられる。また埋土からは叩石(Fig.182-1497)が出土している。

P57

調査区のF-11において検出した。SD2から西側約40cm地点に位置する。長径は40cm、短径は25cmを測り、平面形態は不整形を呈する。深さは約40cmを測る。床面は平坦で壁面は斜位に立ち上が

る。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片2点、瓦器5点が出土しており、その内瓦器椀が1点のみ図示できた(Fig.182-1482)。口縁部は強い横ナデと体部には指頭、内面には平行のヘラミガキが施される。和泉型瓦器椀と思われる。

P 58

調査区のG-12において検出した。P 56の西側約2m地点に位置している。径は約35cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。深さは26cmを測る。床面は平坦で壁面は斜位に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片1点、土錘1点が出土しており、その内土錘が1点のみ図示できた(Fig.182-1496)。ほぼ完形で、黒褐色の色調を呈している。

P 59

調査区のF-12において検出した。P 57の西側に隣接している。径は約70cmを測る柱穴で、平面形態はほぼ円形を呈す。深さは20cmを測る。床面は平坦面で壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトに炭化物を含んでいる。遺物では土師器片45点、須恵器片1点、瓦器8点、青磁2点、鉄滓2点が出土しており、その内青磁が2点図示できた(Fig.182-1484.1485)。ともに体部片ではあるが、内面には劃花文が施されており、釉には細かい貫入が入る。

P 60

調査区のG-12において検出した。P 58の南側約50cm地点に位置する。径は38cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。深さは40cmを測る。床面は平坦を呈し、壁面は直立して立ち上がる。埋土は単層の暗灰黄色シルトに炭化物を含んでいる。遺物では国内産陶磁器が1点出土している(Fig.182-1487)。底部は平底を呈し、口縁部は外上方に直線的に伸びる。内底部には胎土目痕、底部外面には糸切り痕が残る。口縁部途中まで灰オリーブ色の釉が施されている。瀬戸焼と思われる。

P 61

調査区のG-12より検出した。長径は40cm、短径は25cmを測り平面形態は楕円形を呈する。深さは約50cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は斜位に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトに炭化物を含んでいる。床面付近からは土器とともに10cm大の角礫が出土している。遺物では土師器片が4点出土しており、その内1点が図示できた(Fig.182-1488)。口縁部は外方に伸びる。底部外面には回転糸切り痕が残る。

P 62

調査区のG-12より検出した。径は約70cmを測り、平面形は円形を呈している。深さは約30cmを測る。柱穴の一部は他の柱穴により削平されている。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は斜位方向に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器11点、瓦器7点、青磁1点、土錘1点、鉄滓1点が出土しており、その内2点が図示できた(Fig.182-1489.1496)。1489は口縁部内外面は横ナデ、底部外面には指頭が顕著である。和泉型の瓦器皿と思われる。1496は土錘であるが、上下とも欠損している。

P 63

調査区のG-12より検出した。P 59と60の中間に位置している。径は28cmを測り、平面形態は円

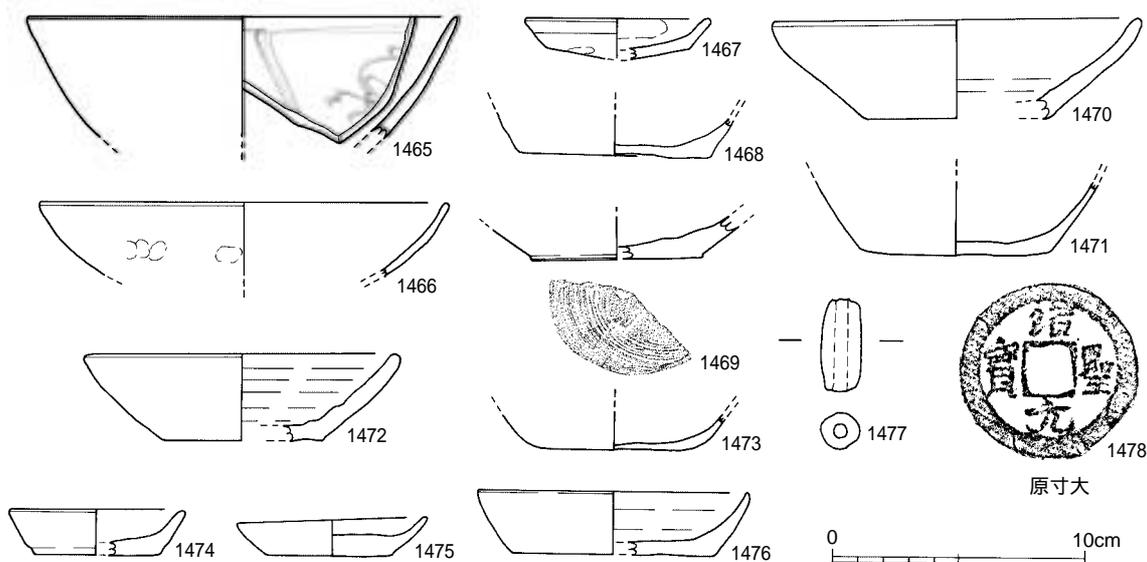


Fig.181 ピット出土遺物実測図1(P 43 ~ P 51)

形を呈する。深さは約20cmを測る。床面は平坦を呈し、壁面は斜位に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトに炭化物を含んでいる。遺物では土師器片6点、須恵器片2点、瓦器3点が出土しており、その内1点のみが図示できた(Fig.182-1500)。東播系須恵器のコネ鉢で、器壁はやや薄く、口縁端部は上下に肥厚させている。

P 64

調査区のF-12より検出した。SD1の西側約1メートル地点に位置する。径は35cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。深さは15cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は斜位に立ち上がる。埋土は層黒色土、層は灰黄褐色シルトである。層は柱穴中央で柱状に堆積しており、柱根を抜いた際の堆積と考えられる。遺物では土師器片が10点、須恵器片3点が出土しており、その内長胴甕が1点図示できた(Fig.182-1501)。口縁端部は平坦面を呈し、内外面はハケ目がなされる。

P 65

調査区のG-12より検出した。P 59に隣接しており、柱穴の一部は他の柱穴で削平されている。径は55cmを測り、平面形態は円形を呈する。床面は平坦面を呈し、壁面は斜位方向に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片49点、須恵器片1点、瓦器13点が出土しており、その内青磁が1点のみ図示できた(Fig.182-1491)。体部片ではあるが、内外面には櫛描文がみられることから同安窯系の製品であると思われる。

P 66

調査区のG-13より検出した。径は35cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。深さは約30cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は斜位方向に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片が16点、須恵器片1点、瓦器5点が出土しており、その内3点が図示できた(Fig.182-1483.1490.1502)。1483は瓦器椀である。口縁部は強いナデにより体部間に段ができ、体部外面は指

頭による調整。内面には細かいヘラミガキ調整が施される。和泉型である。1490は土師器皿である。全体に器壁が厚く、底部は器高の約1/3を占める。1502は土師器の羽釜である。口縁部下には断面が方形の鐳が付き、口縁端部は平坦面を呈す。内面には細かいハケとナデ調整がなされている。

P 67

調査区 G -13より検出した。P 25の北側に隣接する。長径は40cm、短径は33cmを測り、平面径はほぼ円形を呈する。深さは47cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は直立して立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトで、10cm大の角礫及び円礫が含まれている。遺物では土師器片23点、瓦器3点、瓦質土器1点、青磁1点が出土しており、その内2点が図示できた(Fig.182-1494.1503)。1494は土師器の皿である。全体に器壁が厚く、底部外面には糸切り痕が若干残る。1503は瓦質の鍋である。口縁部は一旦「く」字状に屈曲し、端部は上方に伸びる。口唇部は浅い凹状を呈す。全体に器壁が薄く、胎土は精選されている。内面には横方向の細かいハケがみられる。京都系の製品と考えられる。

P 68

調査区の G -12より検出した。径は30cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。深さは約50cmを測り深い。床面は平坦面を呈し、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトに炭化物を含んでいる。遺物では土師器片が6点、瓦器4点、青磁1点が出土しており、その内2点が図示できた(Fig.182-1492.1493)。1492は土師器の杯である。底部は平底を呈し、口縁部は外上方に直線的に伸びる。口縁部内外面にはロクロ痕及び底部外面には回転糸切り痕が残る。1493は青磁碗の体部である。内外面には櫛描文がなされる同安窯系の製品である。釉には細かい貫入が入る。

P 69

調査区の G -12より検出した。P 68から西側約50cm地点に位置する。長径約70cmを測り、平面形態は不整形円形を呈する。深さは20cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトに炭化物を含んでいる。遺物では土師器片12点、瓦器11点、瓦質土器1点が出土しており、その内瓦質の鍋が1点のみ図示できた(Fig.182-1504)。口縁部は「く」字に屈曲し、端部は上方に伸び平坦面を呈する。口唇部は浅い凹状を呈する。内外面はナデ調整がなされ、胎土は精選されている。1503の瓦質鍋と同様に京都系の製品である。

P 70

調査区の G -13において検出し、P 69の西側に隣接する。径は20cmを測り、平面形はほぼ円形を呈す。深さは30cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は直立している。埋土は単層の灰黄褐色シルト層である。遺物では土師器片12点、須恵器片1点、瓦器3点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.182-1495)。土師器の皿で底部は平底、口縁部は直立して上方に伸びる。

P 71

調査区中央部の F -13において検出した。径は約30cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。深さは43cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の暗灰黄色シルトである。遺物では土師器片3点、瓦器11点、青磁1点、製塩土器1点が出土しており、その内瓦器皿が4点図示できた(Fig.183-1505 ~ 1508)。ともに口縁部内外面は横ナデ、底部外面には指頭が顕著である。和泉型の瓦器皿と思われる。

P72

調査区中央部のF-13において検出した。径は約40cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。深さは20cmを測る。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は直立する。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片5点、瓦器3点、青磁1点、土錘2点が出土しており、その内2点が図示できた(Fig.183-1509.1510)。1509は青磁碗の口縁部で内面には劃花文がみられる。釉には貫入が入る。龍泉窯系の製品である。1510は土錘である。

P73

調査区中央部のF-13より検出した。SB1のP口4、口5の南側に隣接している。長径は56cm、短径は40cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。深さは60cmを測り、非常に深い。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は直立している。埋土は 層灰黄褐色シルト、 層褐灰色土で 層と 層の間には10～20cm大の角礫が6個体含まれていた。遺物では土師器片4点、須恵器1点、瓦器3点が出土しており、その内3点が図示できた(Fig.183-1511～1513)。1511、1512は土師器の杯である。底部は平底、外面には糸切り痕が残る。1513は東播系須恵器の椀である。口縁部は外上方に伸びる。底部外面には糸切り痕が残る。

P74

区の中央部のF-13より検出した。SB1のP口4に隣接している。径は約35cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。深さは45cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片が18点、瓦器3点、黒色土器1点、国内産陶磁器1点、土錘1点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.183-1533)。備前焼の甕底部である。内面には自然釉がかかる。

P75

調査区中央部のG-13より検出した。SB1のPイ4北側に隣接している。径は70cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。深さは40cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片72点、須恵器片3点、瓦器17点、土錘1点が出土しており、その内瓦器皿が1点のみ図示できた(Fig.183-1517)。口縁部内外面はナデ、底部外面には指頭が顕著である。和泉型の皿と思われる。

P76

調査区中央部のG-13において検出した。P75の南側約1.8m地点に位置する。径は約30cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは30cmを測る。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトで5cm大の角礫が含まれている。遺物では土師器片12点、瓦器7点、土錘1点が出土しており、その内6点が図示できた(Fig.183-1514～1516.1518.1519.1524)。1518は土師器の皿で底部外面には回転糸切り痕が残る。1519と1524は瓦器皿である。口縁部内外面はナデ、底部外面には指頭が顕著である。1524は炭素吸着が甘い。1514、1524は瓦器の椀である。口縁部内外面は横ナデ、内面にはヘラミガキが施される。ともに、和泉型と思われる。また埋土からは1516の土錘が出土している。

P77

調査区中央部のG-13において検出した。P76の南西側約60cm地点に位置している。長径は45cm、短径は38cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは60cmと深い。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は直立する。埋土は 層は暗灰黄色土に炭化物を含み、 層は灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片23点、須恵器片3点、瓦器7点が出土しており、その内3点が図示できた(Fig.183-1521.1522.1525)。1521、1522は瓦器皿で内外面はナデがされる。1525は瓦器椀である。口縁部内外面は横ナデ、内面にはヘラミガキが施される。ともに和泉型の製品と思われる。

P78

調査区中央部のG-13において検出した。P77の西側に隣接する。径は約35cmを測り、平面形態は円形を呈する。深さは約15cmとやや浅い。床面は平坦面を呈し、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片が30点、瓦器11点が出土しており、その内2点が図示できた(Fig.183-1527.1529)。1527は土師器の小皿である。内外面は回転ナデ調整。1529は皿で、底部外面には回転糸切り痕が残る。

P79

調査区中央部のG-13において検出した。P77から東側の約1m地点に位置している。径は約25cmを測り、平面形態は円形を呈する。深さは55cmを測る。床面は平坦で壁面は直立する。埋土は 層暗灰黄色土、 層は灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片20点、須恵器片1点、瓦器11点が出土しており、その内瓦器が3点図示できた(Fig.183-1520.1528.1530)。口縁部内外面は横ナデ、底部外面にはは指頭が顕著である。ともに、和泉型の皿と思われる。

P80

調査区中央部のG-13において検出した。P78の西側に隣接している。南壁面はトレンチにより削平され、確認はできなかった。残存形態から径は約50cmを測り、円形を呈すると思われる。深さは約20cmを測る。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片9点、瓦器9点、製塩土器1点、土錘1点が出土しており、その内土錘が1点図示できた(Fig.183-1526)。

P81

調査区中央部のG-13において検出した。P79の南側に隣接している。径は30cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは12cmを測る。床面は平坦で、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の暗灰黄色土である。遺物では土師器片16点、須恵器片1点、瓦器2点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.183-1531)。須恵器の蓋である。天井部は途中で欠損している。内外面はナデ調整がなされる。

P82

調査区中央部のF-12において検出した。SB1のP口6の東に隣接する。径は約30cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。深さは26cmを測る。床面は平坦で、壁面は直立する。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片23点、須恵器片1点、瓦器2点、古銭1点が出土している(Fig.183-1532)。古銭では元豊通宝が出土している。北宋銭で年代は元豊年代(1078年)である。

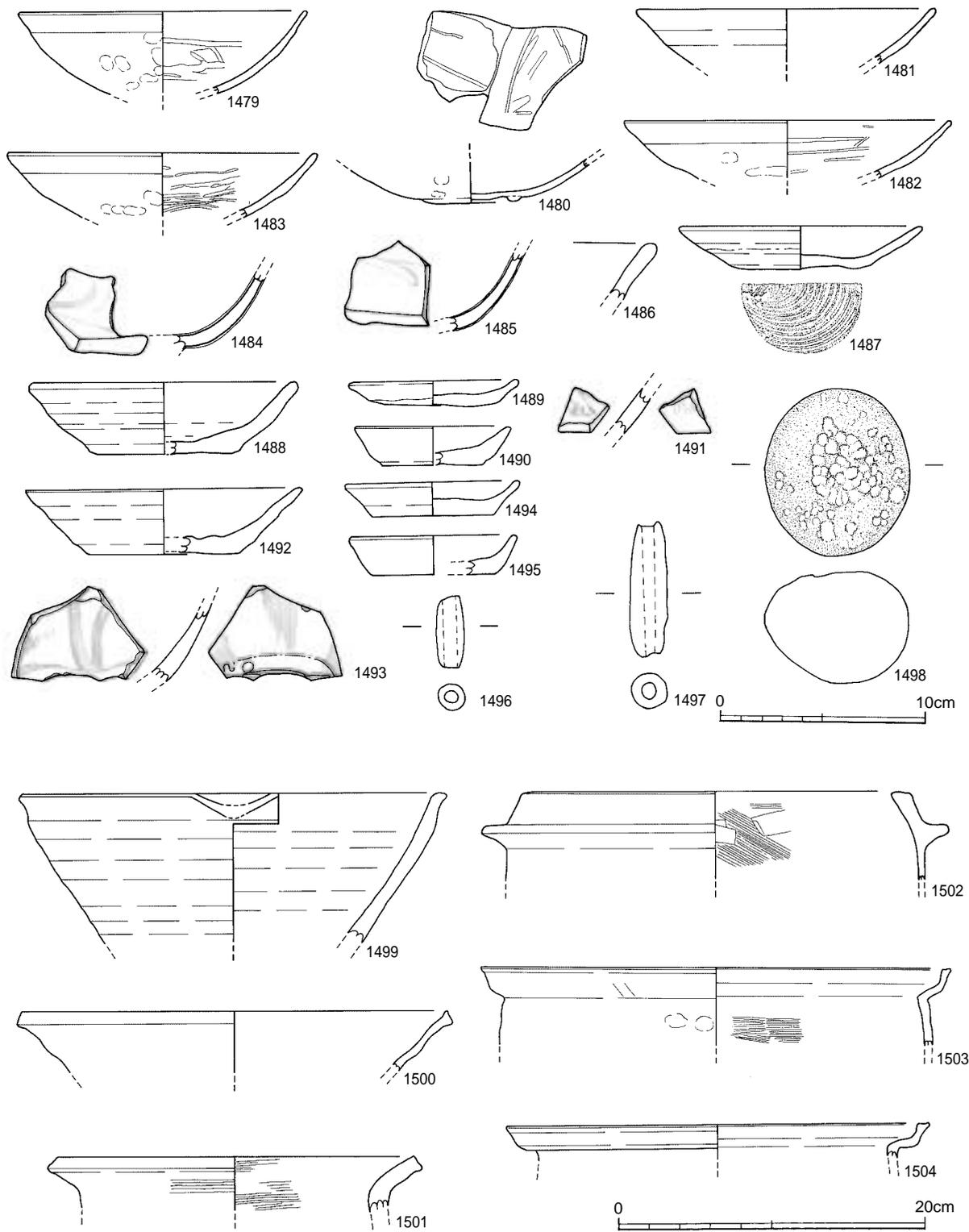


Fig.182 ピット出土遺物実測図2(P 52 ~ P 69)

P83

調査区中央部のF-12より検出した。SB1のP東側に隣接している。径は約35cmを測り、平面形は円形を呈す。深さは12cmと浅く、床面は平坦で、壁面は直立気味に立ち上がっている。埋土は単層の灰黄褐色シルトで炭化物を含んでいる。遺物では土師器片16点、瓦器7点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.184-1534)。土師器の皿で調整は不明瞭であるが、色調は白色に近い。

P84

調査区中央南部のH-13において検出した。長径は54cm、短径は40cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは20~25cmを測り、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片が14点、瓦器13点、青磁1点、白磁1点、土錘1点が出土しており、その内2点が図示できた(Fig.184-1536.1557)。1536は青磁の碗である。口縁部内面には劃花文が施され、釉には細かい貫入が入る。龍泉窯系の製品である。1577は土錘である。上下部とも欠損している。

P85

調査区中央南部のH-13・14において検出した。P83の南西約1mに位置している。径は約40cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは18cmを測り、床面は平坦で壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片16点、須恵器片1点、瓦器13点が出土しており、その内2点が図示できた(Fig.184-1535.1539)。1535は土師器の皿である。底部外面には糸切り痕が残る。全体に器壁が厚く、器高の1/2を底部が占める。1539は底部外面には断面三角形の粘土紐を貼付し、高台を形成している。体部外面には指頭、内面にはヘラミガキが施される。和泉型の瓦器碗である。

P86

調査区中央南部のH-14において検出した。P78の東に隣接している。径は約65cmを測り、平面形はほぼ円形を呈している。深さは28cmを測り、床面は平坦で壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片29点、瓦器6点、青磁1点、鉄滓1点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.184-1537)。青磁の皿である。内外面には灰オリーブ色の釉がかかり、釉には細かい貫入が入る。

P87

調査区中央南部のH-14において検出した。径は約35cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。深さは約30cmを測る。床面は平坦で、壁面は直立している。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片5点、瓦器2点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.184-1538)。土師器の皿である。器壁が厚く、器高の1/2を底部が占めている。

P88

調査区中央部のH-14において検出した。SB9のP1東側に隣接している。径は約30cmを測り、平面形は円形を呈している。深さは13cmと浅く、床面は平坦で壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の暗灰黄色シルトである。遺物では土師器片23点、白磁1点、土錘1点が出土しており、その内土錘のみ図示できた(Fig.184-1558)。

P89

調査区中央部のH-14において検出した。P87の北側に隣接している。径は約40cmを測り、平面形は円形を呈している。深さは60cmと深く、床面は平坦で壁面は直立する。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器が4点出土しており、その内皿が1点のみ図示できた(Fig.184-1540)。底部は平底、口唇部内面下には一条の沈線が入る。外面にはヘラミガキが施されている。

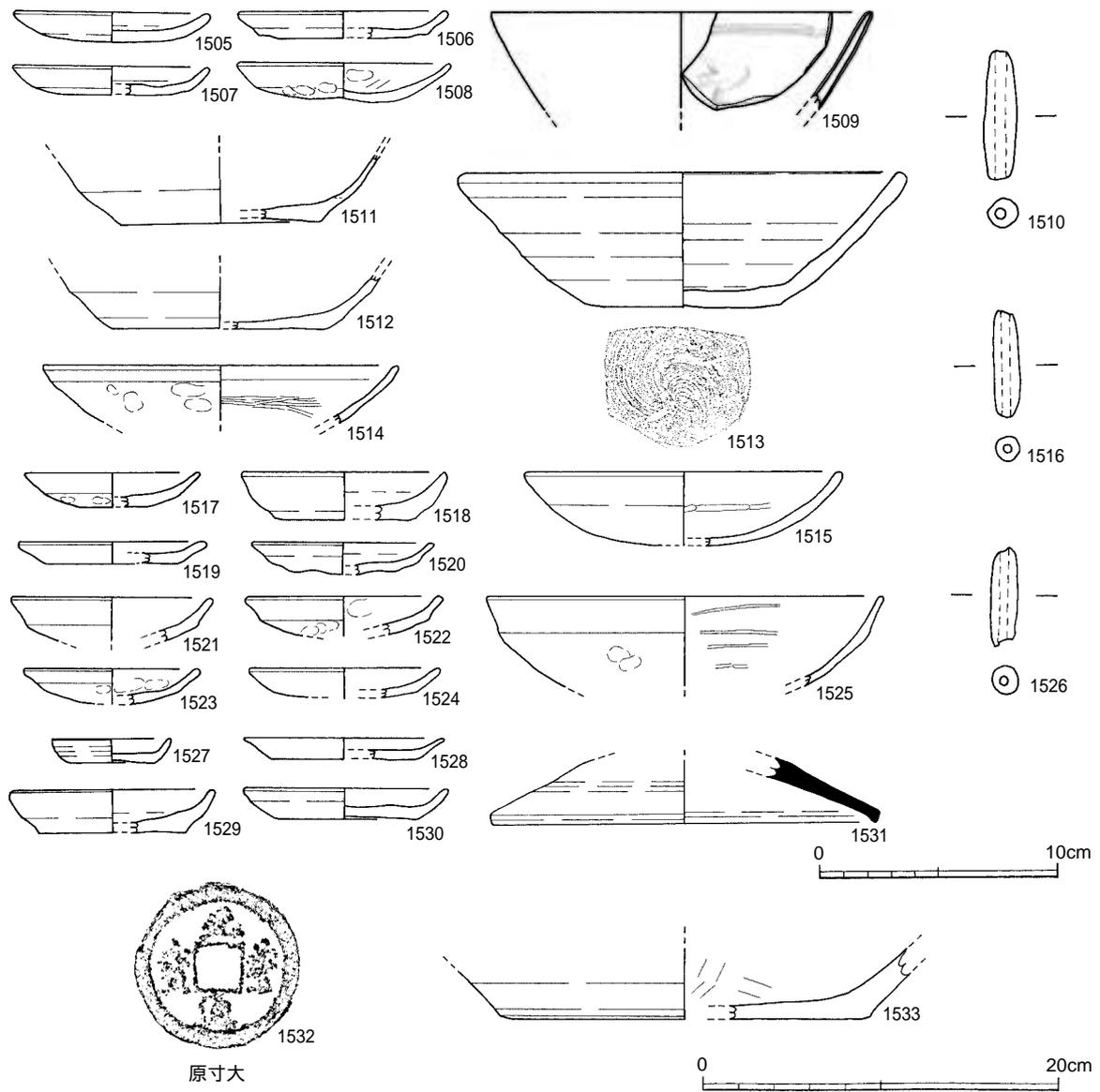


Fig.183 ピット出土遺物実測図3(P70～P81)

P90

調査区中央南部のH-14において検出した。P88の北側に隣接している。長径は70cm、短径55cmを測り、平面形は不整形円形を呈している。深さは66cmを測る。壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は層灰黄褐色シルト、層は黒褐色シルトである。遺物では土師器片90点、須恵器片1点、瓦器27点、青磁2点、白磁2点、製塩土器1点が出土しており、その内3点が図示できた(Fig.184-1541～1543)。1541は土師器の皿で、内外面はナデ調整。1542は青磁碗である。外面には鑄蓮弁文が施される。1543は須恵器の皿で、内外面は回転ナデ調整、外面には火襷がみられる。

P91

調査区中央南部のH-14において検出した。P89の東約1m地点に位置している。径は20cmを測り、平面形はほぼ円形を呈している。深さは18cmを測る。床面は平坦で壁面は直立する。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片2点、瓦器1点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.184-1544)。土師器の皿である。底部から口縁部は外方に直線的に伸びる。

P92

調査区中央南部のH-14において検出した。P90の南東部に位置している。径は約35cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは50cmと深い。床面は平坦で、壁面は直立している。埋土は層暗灰黄色シルト、層灰黄褐色シルトで遺物は層から出土している。遺物では土師器片30点、須恵器片1点、瓦器10点、土錘2点が出土しており、その内3点が図示できた(Fig.184-1546.1552.1563)。1546は底部外面には断面台形状の粘土紐が貼付され、高台を形成している。口縁部は横ナデ、外面は指頭がなされる。内面にはヘラミガキが施されている。1552も底部外面には扁平な高台が貼付され、体部から内底部にかけてヘラミガキが施されている。ともに、和泉型瓦器碗と思われる。1563は土錘で、上下部は欠損している。

P93

調査区中央南部のH-14において検出した。径は28cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。深さは34cmを測る。床面は平坦を呈し、壁面は直立している。埋土は層が暗灰黄色シルト、層は灰黄褐色シルトで層は柱根を抜いた後に堆積したものと思われる。遺物では土師器片が23点、瓦器4点、土錘1点、鉄滓1点が出土しており、その内2点が図示できた(Fig.184-1543.1565)。1543は須恵器の皿で、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。1565は土錘であるが上下部とも欠損している。

P94

調査区中央南部のG-14において検出した。径は約60cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。深さは18cmで、床面はほぼ平坦で壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色土である。遺物では土師器片13点、須恵器片1点、瓦器6点、鉄滓1点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.184-1566)。須恵器の甕で、口縁端部は上下に肥厚させており、外面には八ケ目状の調整がみられる。

P95

調査区中央南部のH-15、I-15において検出した。径は約70cmを測り、平面形は不整形円形を呈する柱穴である。深さは35cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁面は直立している。埋土は単層の灰黄褐

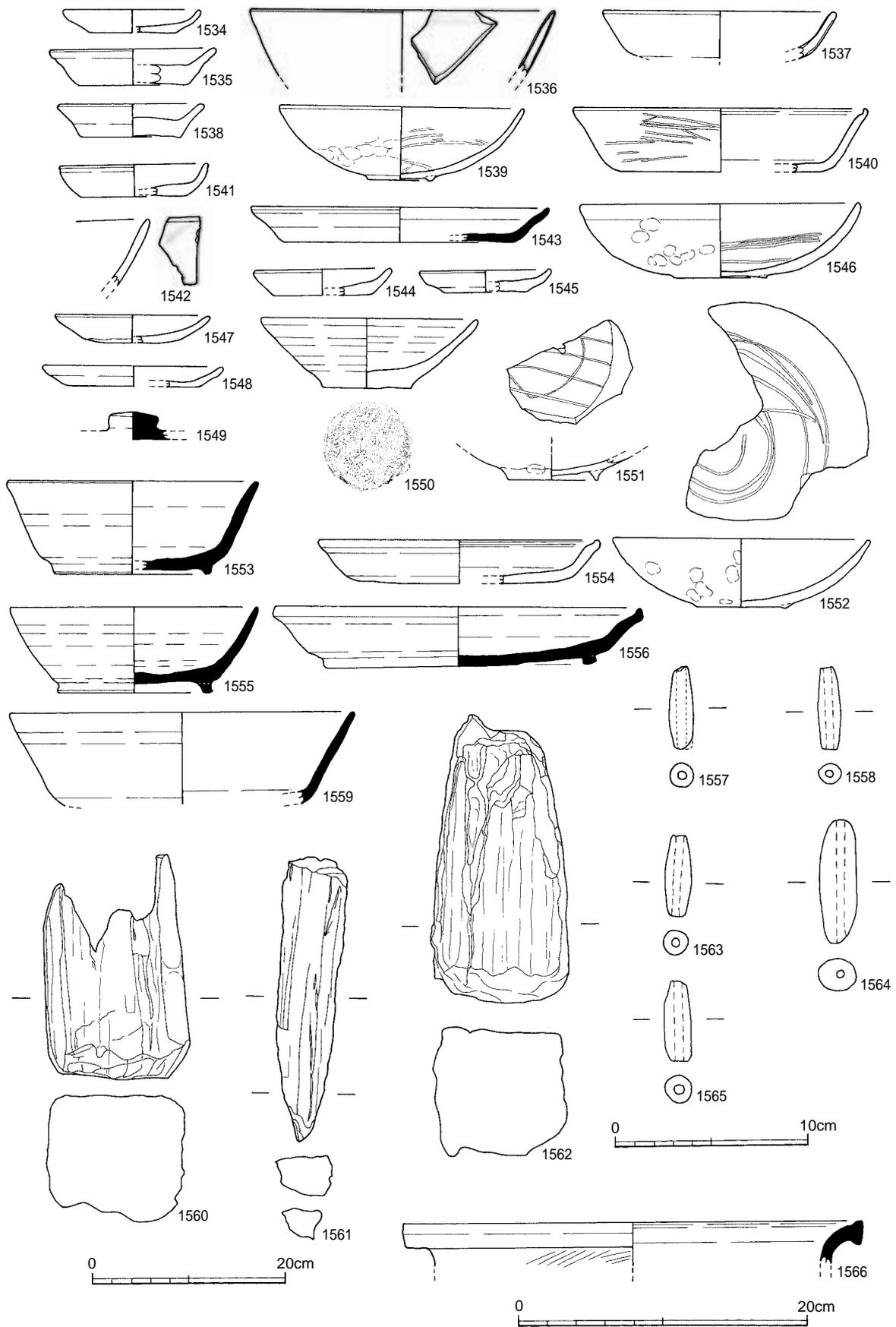


Fig.184 ピット出土遺物実測図4(P41～P61)

色シルトである。遺物では土師器片32点、須恵器片2点、瓦器7点、製塩土器2点、土錘1点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.184-1547)。瓦器の皿で口縁部は横ナデ、底部外面には指頭が顕著である。

P 96

調査区中央南部のH-15において検出した。長径は55cm、短径は45cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。深さは約50cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は直立する。埋土は 層が灰黄褐色シルト、 層は暗灰黄色シルトで 層の床面からは柱根が検出された。遺物では土師器片31点、須恵器片3点。瓦器1点、製塩土器1点が出土しており、その内3点が図示できた(Fig.184-1548.1560)。1548は瓦器皿で、口縁部内外面はナデ、底部外面には指頭が顕著である。1560は床面から出土した柱根で、断面はほぼ正方形を呈しており、底面には加工痕が残る。

P 97

調査区の南部H-15において検出した。P 96に北壁を切られている柱穴である。残存径は約35cmを測り、平面形態は円形を呈していたと考えられる。深さは約40cmを測る。床面は平坦面をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は単層の黄灰色シルトで炭化物を含んでいる。出土遺物ではFig. 184-1549の須恵器が出土している。蓋で、天井部には擬宝珠形の摘みが付く。

P 98

調査区中央南部のH-15において検出した。径は約25cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。深さは22cmを測る。床面は平坦で、壁面は直立している。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器が1点、瓦器2点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.184-1550)。土師器の杯で、回転口口成形で底部には回転糸切り痕が残る。胎土は精緻である。

P 99

調査区中央南部のI-15において検出した。径は約40cmを測り、平面形はほぼ円形を呈している。深さは約35cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁面は直立する。埋土は単層の灰黄褐色シルトで炭化物を含んでいる。遺物では土師器片41点、瓦器6点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig. 184-1551)。底部外面には断面三角形の高台を貼付しており、内底部には平行のヘラミガキが施される。和泉型の瓦器碗と思われる。

P 100

調査区中央南部のH-15、I-15において検出した。長径は72cm、短径は62cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。深さは18cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片3点、須恵器片2点が出土しており、その内3点が図示できた(Fig.184-1553.1554.1556)。1553は須恵器の杯で、底部外面には断面方形の高台が付く。口縁部は上方に直線的に伸びる。1554は土師器の皿で、口縁内面下にはナデにより、凹状を呈する。1556は須恵器の皿で、底部外面には断面台形状の高台が貼付される。口縁端部は上方に摘み出している。

P 101

調査区中央南部のI-15・16において検出した。P 99の南西約60cmに位置している。径は約80cm

を測り、平面形は円形を呈する土坑状の柱穴である。深さは約10cmと浅く、床面は平坦で、壁面は直立している。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片22点、須恵器片6点、白磁1点が出土しており、その内3点が図示できた(Fig.184-1555.1564)。1555は底部外面には断面方形状の高台が付き、口縁部は上方に直線的に伸びる。1564は土錘で一部欠損している。

P102

調査区中央南部のI-16において検出した。径は55cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは50cmを測る。床面は平坦で、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は 層灰黄褐色シルトで炭化物を含んでいる。 層も同じく灰黄褐色シルトであるが、噴砂の影響を受けている。遺物では土師器片28点、須恵器片3点、鉄滓1点が出土しており、その内3点が図示できた(Fig.184-1559、Fig.185-1567.1568)。1559は須恵器の杯で口縁部は外上方に直線的に伸びる。1567は土師器の杯で、底部は円盤状を呈している。1568は須恵器の杯である。底部は平底を呈する。

P103

調査区南部のH-14において検出した。P86の西方向1.6mに位置している。径は約35cmを測り、平面形態はほぼ円形を呈している。深さは約30cmを測る。床面は平坦面を呈し壁面は直立する。埋土は単層の灰褐色シルトである。柱穴からは杭に使用されたと考えられる木片が出土している(Fig.184-1561)。先端を杭状に加工している。

P104

調査区中央南部のI-16において検出した。P104の南西約2m地点に位置している。径は約40cmを測り、平面形はほぼ円形を呈している。深さは約20cmを測る。床面は平坦で、壁面は直立している。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片6点、瓦器4点、土錘1点が出土しており、その内土錘1点が図示できた(Fig.185-1590)。

P105

調査区南部のH-16において検出した。P101の西約1m地点に位置している。径は約30cmを測り、平面径はほぼ円形を呈している。深さは約31cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は直立する。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器が4点、瓦器2点が出土しており、その内瓦器皿が1点図示できた(Fig.185-1570)。

P106

区南部のI-16において検出した。P99の北側約1m地点に位置する。径は38cmを測り、平面形は円形を呈している。深さは約18cmを測り、床面は平坦で壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルト層である。遺物では土師器片1点、須恵器片1点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.185-1569)。底部外面には断面台形状の高台が貼付される須恵器の杯である。

P107

調査区南部のI-16・17において検出した。径は約80cmを測り、平面形は円形を呈す大型の柱穴である。深さは28cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は 層灰黄褐色シルト、 層は黄灰色土である。遺物では土師器片29点、須恵器片3点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.185-1571)。底部は平底を呈す須恵器の杯である。口縁部は上方に伸び、底部

外面には回転ヘラ切り、口縁部内外面は回転ナデ調整がなされる。

P108

調査区南部のH-16において検出した。径は約24cmを測り、平面形はほぼ円形を呈す。深さは約21cmを測る。床面は平坦面を呈し、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では須恵器片2点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.185-1575)。口縁部から体部まで残存する東播系須恵器のコネ鉢である。口縁端部はやや上下に肥厚する。

P109

調査区中央部のG-17において検出した。径は約70cmを測り、平面形はほぼ円形を呈している。深さは44cmを測る。床面はほぼ平坦面で壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は 層が灰黄褐色シルト、 層は黄灰色シルトである。遺物では 層から須恵器片1点、白磁1点が出土しており、その内2点が図示できた(Fig.185-1572.1574)。1572は須恵器の鉢で、端部は上下にやや肥厚させている。東播系コネ鉢と思われる。1574は白磁の碗で、口縁部は玉縁状を呈す。 類に属する。

P110

調査区中央部のG-16において検出した。P66の東約1.2m地点に位置している。径は約30cmを測り、平面形はほぼ円形を呈す。深さは約20cmを測る。床面はほぼ平坦で壁面は直立する。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片4点、青磁1点、土錘1点、鉄滓1点が出土しており、その内土錘が1点図示できた(Fig.185-1589)。上下部ともに一部欠損している。

P111

調査区中央部のG-16において検出した。P67の東約1.7m地点に位置している。長径は約48cm、短径は35cmを測り、平面形は楕円形状を呈している。深さは約30cmを測る。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片1点、瓦器1点、白磁1点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.185-1576)。口縁部は玉縁を呈する白磁碗である。 類に属する。

P112

調査区中央部のF-16において検出した。径は35cmを測り、平面形は円形を呈している。深さは48cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は 層灰黄褐色シルト、 層はにぶい黄褐色シルト層である。遺物は 層より出土している。遺物では土師器片28点、瓦質土器1点、白磁1点が出土しており、その内1点が図示できた(Fig.185-1573)。白磁の口縁部で、端部は外反している。 類に属する。

P113

調査区の西部G-17において検出した。SB10の北側に隣接する。径は46cmを測り、平面形はほぼ円形を呈するが、柱穴の上部はほとんど掘削されおり、底面のみ残存する状態であった。埋土は単層の黄褐色シルトである。底面には全長30cm、全幅15cm、全厚2cmの礎板が置かれており、礎板直下は約3cmの暗青灰色の粘土が礎板に添って敷かれているようである。また礎板と共にFig.185-1588の古銭が置かれており、地鎮が行われたと考えられる。遺物では土師器片4点、須恵器片2点、古銭1点が出土しており、その内2点が図示できた(Fig.185-1578.1588)。1578は須恵器の杯で、底部外面

には断面台形状の高台が付く。1588は元豊通宝である。北宋銭である。

P114

調査区北西部のG-20において検出した。径は38cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。深さは約40cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片3点、国内産陶磁器1点が出土しており、その内備前焼1点が図示できた(Fig.185-1577)。口縁部は玉縁状を呈しており、甕と思われる。

P115

調査区東部のH-19において検出した。径は40cmを測り、平面形はほぼ円形を呈している。深さは約60cmと深い。床面はほぼ平坦を呈し、壁面は直立する。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では土師器片4点、須恵器片3点が出土しており、その内東播系須恵器のコネ鉢が図示できた(Fig.185-1581)。口縁部のみであるが、口縁端部は上下に肥厚させている。

P116

調査区北西部のH-20において検出した。径は22cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。深さは18cmを測る。床面はほぼ平坦面を呈し、壁面は直立する。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では須恵器片1点、羽口1点が出土しており、その内ふいごの羽口の一部を図示することができた(Fig.185-1591)。

P117

調査区の西南部I-18において検出した。SK25の西壁の一部を掘り込んでいる。長径40cm、短径28cmを測り、平面形は楕円形を呈している。深さは20cmを測る。床面は平坦で、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では白磁が1点のみ出土している(Fig.158-1579)。底部は平底を呈す白磁類の皿である。

P118

調査区の西南部I-18において検出した。SK25により南壁の一部を切られている。残存径は約75cmを測り、平面形はほぼ円形を呈している。深さは18cmを測る。床面はほぼ平坦で壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は褐灰色シルトである。遺物では土師器片34点、須恵器片15点が出土しており、その内6点が図示できた(Fig.185-1580.1582～1586)。1582は須恵器の杯で底部外面には断面方形の高台が付く。底部から口縁部にかけては直線的に伸びる。1580、1583、1584は須恵器の蓋である。1583は天井部に輪状の摘みが付く。1580は天井部に疑宝珠形の摘みが付く。1586は須恵器の高杯で、脚部側面には方形の透かし窓が4箇所施される。杯部と脚部間は強くナデている。1585は土師器の皿で、内外面とも強いナデがなされる。

P119

調査区の西南部J-21において検出した。SB12の西側に隣接している。径は約30cmを測り、平面形はほぼ円形を呈している。深さは21cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁面は直立気味に立ち上がる。埋土は単層の灰黄褐色シルトである。遺物では青磁碗が出土している(Fig.185-1587)。底部外面は断面方形の削り出し高台を呈し、高台外面まで施釉されている。外面には鎬蓮弁文がみられる。釉には細かい貫入が入る。

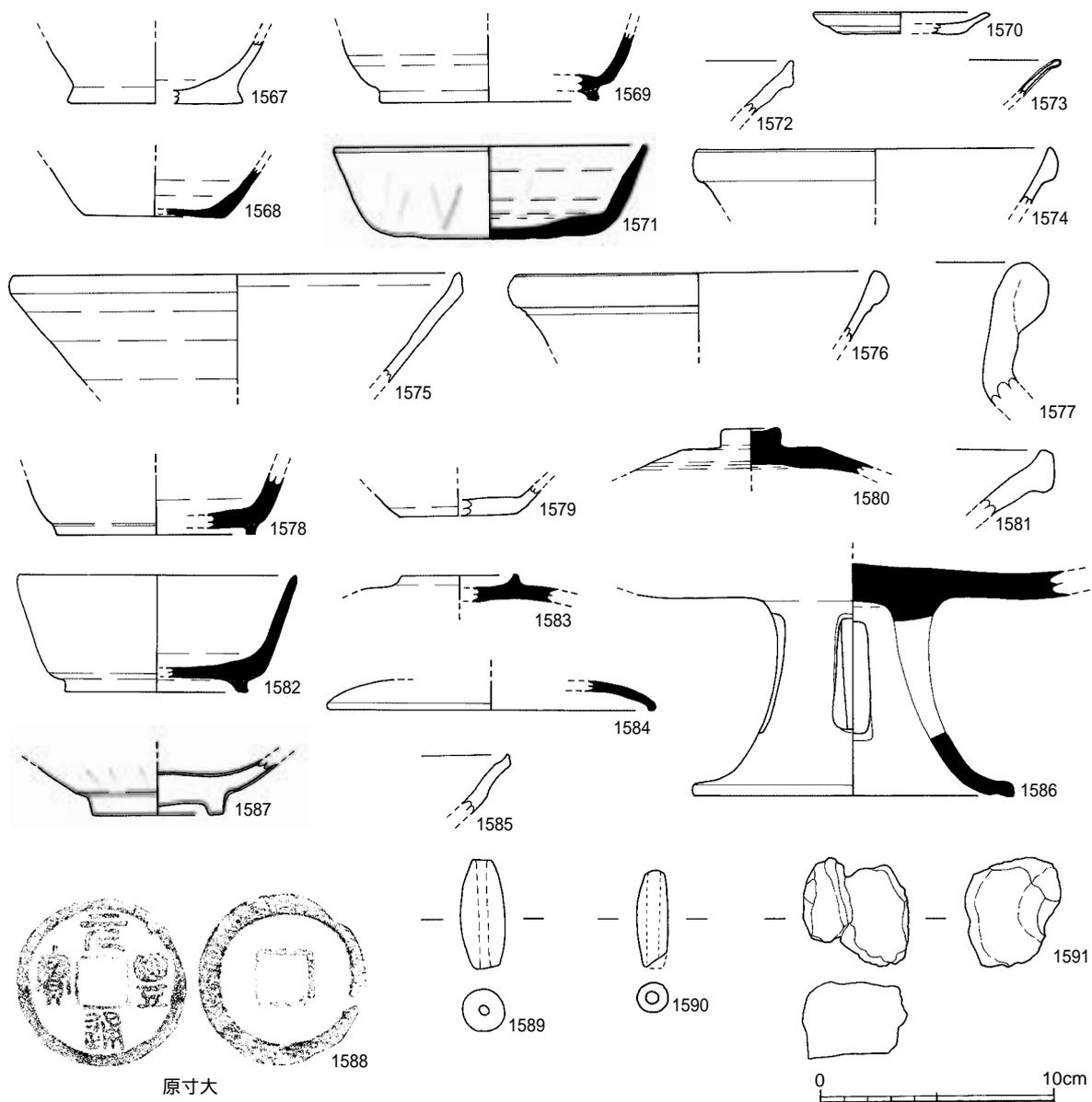


Fig.185 ピット出土遺物実測図5 (P 101 ~ P 118)

包含層出土遺物

今回の調査では古代から中世に至る遺物が多く出土しており、1989・1990年の具同中山遺跡群の調査で出土して以来の多さである。中世の包含層(-2層)のすぐ下層(層)には古代の包含層が堆積している。ここでは出土遺物を種類・器種ごとに説明を加えていくこととしたい。出土遺物は土師器皿、杯、椀、甕、鍋、羽釜、瓦器皿、椀、青白磁、瓦質鍋、東播系須恵器コネ鉢、貿易陶磁器、国産陶磁器、須恵器皿、杯、蓋、製塩土器、土錘、古銭、鉄製品、石製品である。また個々の遺物の詳細については遺物観察表に記載しているので参照されたい。

第層

今回の調査では、古代の包含層を確認することができ、多数の遺物が出土した。遺物の量は1993

年度に調査された船戸遺跡以来の出土量となっている。供膳具が主体を占めるが、他の遺跡に比べ製塩土器が多い。ここでは中世と同じく出土遺物を種類・器種ごとに報告することとしたい。

土師器

土師器では皿、杯の供膳具と共に土師器甕の煮沸具が出土している。

皿(Fig.186-1592.1593.1594)

1592は底部から口縁部は直立して伸びる。外底部には回転ヘラ切り痕が残る。1593は口縁部はやや内湾する。1594は口径21cmを測る大振り of 皿で、口縁内面下にはナデによる沈線がみられる。

杯(Fig.186-1596.1597)

1596は底部外面に断面方形の高台が付く。1597は底部外面にはやや「八」字状の高台が貼付され、口縁部は外上方に伸び外反する。中央には2箇所の孔がみられる。

高杯(Fig.188-1676)

脚部のみ残存しており、外側面を丁寧に削り、断面は八角形を呈している。

甕(Fig.189-1680～1684)

1680は頸部から口縁部にかけて外反する土師器である。端部は平坦面をなし、内面に肥厚させている。外面には縦位のハケ、内面には横位のハケ調整がなされる。1681、1683は口縁部は丸くおさめる。1684は口縁部内面には一条の沈線が巡り、端部にかけてはやや屈曲して伸び、端部は上方に摘み出す。胎土は精緻である。

須恵器

須恵器では皿、杯、蓋、高杯の供膳具と共に、壺、甕の貯蔵具が出土している。

皿(Fig.186-1598～1605.1607.1608.1610.1611.1613)

皿には底部に高台が付くもの(1598.1613)、平底の底部から口縁部は上方に伸びるもの(1602.1604.1607.1610)口縁部がやや外反し、口縁部をやや摘みだすもの(1599、1600、1603、1605、1608、1611)がみられる。1613は断面方形の高い高台が付く。

杯(Fig.186-1612.1615～1617.1620～1622.1625～1651)

杯では平底の杯Aと高台を持つ杯Bが出土している。杯Bでは底径が6.2cmを測る小振りのものから、11cmを測るやや大振りのものがみられる。1646は底部外面には爪状圧痕が確認できる。1650は口径21.6cmを測り、口縁部は外方に大きく開く。1651は口縁部が直線的に伸び、内面には一部ケズリがみられる。

蓋(Fig.187-1652～1664)

1652にはボタン状の摘みが付く。1653は口縁端部のみ下方に伸びる。天井部には擬宝珠形の摘みが付く。1654は平坦な天井部から口縁部に向け緩やかに伸びる。口縁端部のみ下方に伸びる。天井部には擬宝珠形の摘みが付く。1658、1659は平坦な天井部から口縁部は下方に伸び、端部のみ垂直に下方に伸びる。1663は平坦な天井部から口縁部は垂直に下がる。壺の蓋と考えられる。1664は全体に焼け歪みがみられる。口縁端部のみ垂直に下方に伸びる。1657は平坦な天井部から口縁部に向け緩やかに下る。天井部内外面には刻書がなされる。

高杯(Fig.186-1606.1609.1614.1619.1623.1624)

1606、1609は裾端部は稜をなし、端部は下がる。1619は杯部は口縁端部のみ上方に短く伸びる。脚部は外方に広がり、端部は丸くおさめる。1623は口縁部は外上方に伸び、端部はやや外反する。

壺(Fig.188-1665～1672)

117は長頸壺である。口縁部は外方に大きく広がる。1671は同上部に最大径をもつ。1672は口縁部のみ欠損している。胴部から頸部にかけて内湾し、底部外面には糸切り痕がみられる。

甕(Fig.188-1673～1675.1677、Fig.189-1678)

1673は口縁部は大きく外反する。口縁部外面には縦方向のハケ、胴部外面には平行のタタキがなされている。1674は口縁部は短く外反し、端部は平坦面をなす。外面には粗いタタキ目がみられる。

鉢(Fig.189-1679)

口縁部のみ残存する。口縁端部は平坦面をなし、端部はやや肥厚させている。

緑釉陶器(Fig.189-1685.1686)

1685、1686は皿で、口縁部は丸くおさめている。

製塩土器(Fig.189-1689～1693)

口縁部はやや内湾しながら伸びる。1691は端部を丸くおさめている。外面には指押しとナデ、内面には布目痕がみられるものが多い。

瓦(Fig.189-1694)

1片のみ出土している。内面には布目痕が残る。瓦は、試掘時に1点が出土している。

土錘(Fig.189-1695～1699)

土錘は完形のもの少ないが、全幅が1～1.5cmを測る細身のタイプが多く出土している。

第 -2層

土師器

土師器では皿、杯、椀の供膳具と共に、土師器甕、鍋の煮沸具が出土している。ここでは個々の説明を器種ごとに述べていく。

皿(Fig.190-1700～1704.1707)

皿は1707の1点のみで、底部は回転糸切りで全体に器壁が厚く、器高の約1/2を占めている。1700～1704は小皿で1701～1704は口径は7cm内外を測り、口縁部は外方に短く伸びる。1704は底部外面に回転糸切りが施される。1700は口縁部は外方に直線的に伸び、器壁は厚い。

杯(Fig.190-1705.1706.1708～1713)

1705、1706は口縁部は外方に直線的に伸びる。器高は3cmを測りやや浅い。1708は底部から直立して口縁部まで伸び、底部外面には回転糸切りが施されている。1709は口縁部は外上方に伸びる。1710は口径約14cmを測る大型の杯で、口縁部は外上方に伸びる。外面には回転ロクロによるナデ痕が残る。1711は口径18cmを測る大型の杯で、口縁部は外上方に伸びている。外面には回転ロクロによるナデ痕が残る。全体に器壁が厚い。1712は底部から口縁部にかけて外上方に直線的に伸びる。内外面にはロクロ痕が顕著である。1713は底部は円盤状を呈している。

椀(Fig.190-1714 ~ 1716)

1714は口縁部のみであるが、端部はやや外反している。1715、1716は底部のみで1715の外面には断面方形の高台が貼付されている。

1716の器壁はやや厚く、底部には断面方形の高台が貼付されている。

甗(Fig.193-1795 ~ 1798)

図示できたのは口縁部のみである。1795は頸部から口縁部にかけて強く屈曲し外反する。端部は平坦で浅い凹状の段を呈し、器壁は薄い。内面にはヘラ状のナデがみられる。

1796 ~ 1798は土師器である。1796は口縁部は強く屈曲している。内面には粗いハケがみられる。

1797は口縁部は「く」字に屈曲する。器壁はやや厚く、口縁端部は丸くおさめている。内外面にはハケ調整がみられる。1798は口縁部は「く」字状に外反し、端部外面はナデによる浅い段をなす。外面には縦方向のハケ。内面には横方向のハケ調整がなされる。

鍋(Fig.193-1792.1793)

図示できたのは口縁部のみである。1792は口縁部下には断面が扁平な三角形を呈した短い鍔が付く。口縁端部は平坦面を呈し、内傾している。内面には一部ヘラケズリがみられるが、強い横ナデが施されている。1793は口縁直下には断面三角形の短き鍔が付く。口縁部は内傾しており、端部は平坦面を呈している。外面には叩き目痕が残り、口縁部内面は強いナデとハケ調整が施されている。

瓦器

今回の調査では遺構及び包含層より多量の瓦器が出土している。破片も含め約3560点を数える。前回の調査では和泉型と楠葉型が出土しているが、今回は和泉型が多数を占めており、楠葉型は確認できなかった。

皿(Fig.190-1717 ~ 1725)

皿では口径9cm内外を測るもの(1717 ~ 1723.1725)と12cmを測るやや大型のもの(1724)が出土している。形態は平坦な底部から口縁部は外方に立上がり伸び、端部は外反するもの(1717.1718.1724)と他はやや平坦な底部から口縁部にかけては内湾するもので、外面に指押しが顕著になされ、口縁部内外面はナデ調整がなされる。

椀(Fig.190-1726 ~ 1740)

底部から口縁部まで残存するものは少なく、口縁部のみ出土が圧倒的に多い。また外面はナデと指頭のみで、ヘラミガキがなされるものは全くみられない。また内面のヘラミガキも簡略化されている。1726は口径約18cmを測る大型の椀で、器高はやや浅い。底部外面には断面三角形の高台が貼付されている。口縁部は強い横ナデによりやや外反している。胴部外面には指頭、内面にはヘラミガキがなされる。1727は底部外面には断面台形状の高台が貼付される。内面見込みには平行線状のヘラミガキが施される。1728は底部外面には断面台形状の高台が貼付される。口縁部にかけては内湾しながら外方に伸びる。内面にはヘラミガキが施される。1729は器高が最も深く6.4cmを測る。底部外面には断面三角形の高台が貼付される。口縁部は横ナデにより外反している。1731は断面三角形の小さい高台が貼付される。内面には平行線状のヘラミガキがなされる。1732、1734は器高が

4cm内外を測り、浅い形状を呈す。1735は器高は浅く3cmを測る。口縁部にかけては内湾しながら伸びる。体部には指頭が顕著である。1737は器高が最も浅く2.7cmを測り、口縁部にかけては外方に伸びる。底部高台は扁平な高台が貼付される。内面にはヘラミガキはみられない。

瓦質土器

瓦質土器では鍋と釜が出土している。

鍋(Fig.193-1794.1801)

1794は口縁下外面には断面三角形の短い鏝が付く。口縁部は上方に直線的に伸び、端部は丸くおさめている。1801は脚付き鍋の脚部である。

釜(Fig.193-1790.1791)

1790は口縁下外面には断面三角形の鏝が付く。口縁部は内傾し、端部は平坦面を呈する。内外面には強いナデが施される。1791は鏝部分が一部欠損している。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。外面にはナデによる段がみられる。

貿易陶磁器

今回の調査では青磁、白磁、青白磁が出土している。青磁では皿、碗、壺、白磁では碗、壺、青白磁では梅瓶の破片が出土している。

青磁

皿(Fig.190-1743.1744.Fig.191-1760)

皿は3点のみ図示できた。1743は底部で見込部分には櫛描き文がみられる。1744は口縁部であるが、屈曲して外方に伸びる。ともに同安窯系の皿である。1760は稜花皿で、口縁部には稜花状の縁取りが施される。内面見込みには菊花状、口縁内面には草花が刻書されている。

碗(Fig.191-1739.1746 ~ 1759.1761.1762)

碗では口縁部外面に鎬蓮弁文の文様がみられるものと、内外面には櫛目の文様がなされるもの、劃花の文様がなされるもの、内外面無文のものが出土している。1746～1748は外面に鎬蓮弁文がなされる。1747は口縁部はやや外反している。1749、1750は外面には蓮弁文の文様が施されている。1750の口縁部はやや外反している。龍泉窯系の碗である。1751、1756は内外面には櫛目の文様が施されている。同安窯系の碗である。1752、1756は内面に劃花の文様が施されている。1757～1759は碗の底部である。高台は削り出しており、高台外面まで釉薬が施されている。内面には劃花の文様が施されている。龍泉窯系の碗である。1753、1755は内外面は無文で口縁部は外反している。1753は端部は平坦面を呈している。1761は高台を削り出しており、高台外面まで施釉されている。内面見込部分には草花文が印刻されている。1762は高台は断面三角形を呈し、高台内面にまで施釉されている。外面に蓮弁状の文様が施されていると思われる。

壺(Fig.191-1763)

1763の1点のみ出土している。口縁部片であるが、口縁端部は肥厚し、口縁下には把手が貼付されている。

白磁

碗(Fig.192-1764 ~ 1770)

碗は底部から口縁部まで復元できるものは出土していない。口縁部の形態では口縁部は外上方に直線的に伸び、口縁部は玉縁状を呈する 類の碗(1764 ~ 1766)と体部から口縁部にかけては内湾して外上方に伸び、口縁部は外反させ端部を水平にしている 類の碗(1767.1769)と、底部には断面逆三角形の高い高台を有する 類の底部が(1768.1770)がみられる。1767は口縁部は外反させ、端部は水平を呈する碗で、外面には線描きの文様が施されている。1768は高台は一部欠損しているが断面は逆三角形を呈すると思われ、外面と内面見込みには櫛描きの文様が施されている。

壺(Fig.192-1771)

1点のみ出土している。口縁部は上方に直立して伸び、端部は強く外反させている。内外面にはオリーブ灰色の釉が施釉されており、釉は透明度が強い。

東播系須恵器コネ鉢(Fig.193-1783 ~ 1788)

今回の調査では東播系須恵器が多く出土しているが、破片が多いため図示できたものは7点である。体部から口縁部にかけて上方に直線的に伸びるものがほとんどである。1783は口径35cmを測るやや大振りの鉢で端部は平坦面を呈する。1784は口縁部はほとんど肥厚させていない。1785は口縁端部は上下に肥厚させている。1788は端部を上方に摘み出している。1787は口縁端部は丸くおさめ、平坦面を呈していない。

須恵器鉢(Fig.193-1789)

口縁部下にはナデによる強い段をなし、口縁端部は丸くおさめている。

国産陶磁器

瀬戸・美濃焼(Fig.192-1772.1773.1775 ~ 1779)

今回の調査では皿、天目茶碗が出土している。1774は折縁皿で、口径26cmを測る大型の製品である。口縁部は外反させ、端部は玉縁状を呈している。1773は口縁部はナデにより段をもち、口縁端部は丸くおさめている皿である。1775、1776は卸し皿で、内面には卸し目が施され、底部外面には回転系切りがみられる。1779は天目茶碗である。底部は欠損している。体部は外上方に内湾しながら伸び、口縁部はやや外反させている。

須恵器(Fig.194-1804 ~ 1819)

須恵器はほとんどが下層からの出土であり、 層の遺物が混在している。主に皿、杯、蓋、壺が出土している。

皿(Fig.194-1804.1805)

底部から口縁部にかけて上方に伸びる。内外面は回転ナデ調整。

杯(Fig.194-1806 ~ 1813)

底部は平底をなす杯A(1810 ~ 1810)と底部外面に高台をなす杯B(1811 ~ 1813)が出土している。共に回転ナデ調整。1811は口径11cm、器高が3.3cmと浅い杯である。

蓋(Fig.194-1814 ~ 1818)

完形のもの出土していない。1816は天井部に擬宝珠形の摘みが付く。1817は口縁端部は稜をな

している。1818は口縁端部をやや肥厚させている。

短頸壺(Fig.194-1819)

底部には断面方形の高台を呈し、体部は上方に伸び頸部にかけて内湾する。口縁部は短く上方に伸びている。

製塩土器(Fig.194-1820.1821)

1821は口縁部が強く内傾する。共に外面には指押しとナデ、内面には布目痕が残る。

土錘(Fig.194-1822～1834)

今回の調査では土錘の出土量の多いが、欠損しているものも多く図示できたものは13点である。形態では細身のタイプと厚みがあり、横に張るタイプがみられる。

石製品(Fig.191-1780～1782、Fig.193-1802)

1780の石臼は上臼で挽き手穴が側縁の中央部にみられる。1781は1/2残存する滑石製の硯である。1782は小形の硯で、底面には何らかの文様が刻まれている。1802は石質は滑石製で約1/2が欠損している。中央部には円孔が施されており、内面のスクリーン部分には黒色化している。内外面とも細かいケズリが行われている。

鉄製品(Fig.194-1835)

鉄釘である。全長12cmを測る。

古銭(Fig.194-1836.1837)

皇宋通宝(1039年)、元豊通宝(1078年)が出土している。ともに北宋銭である。

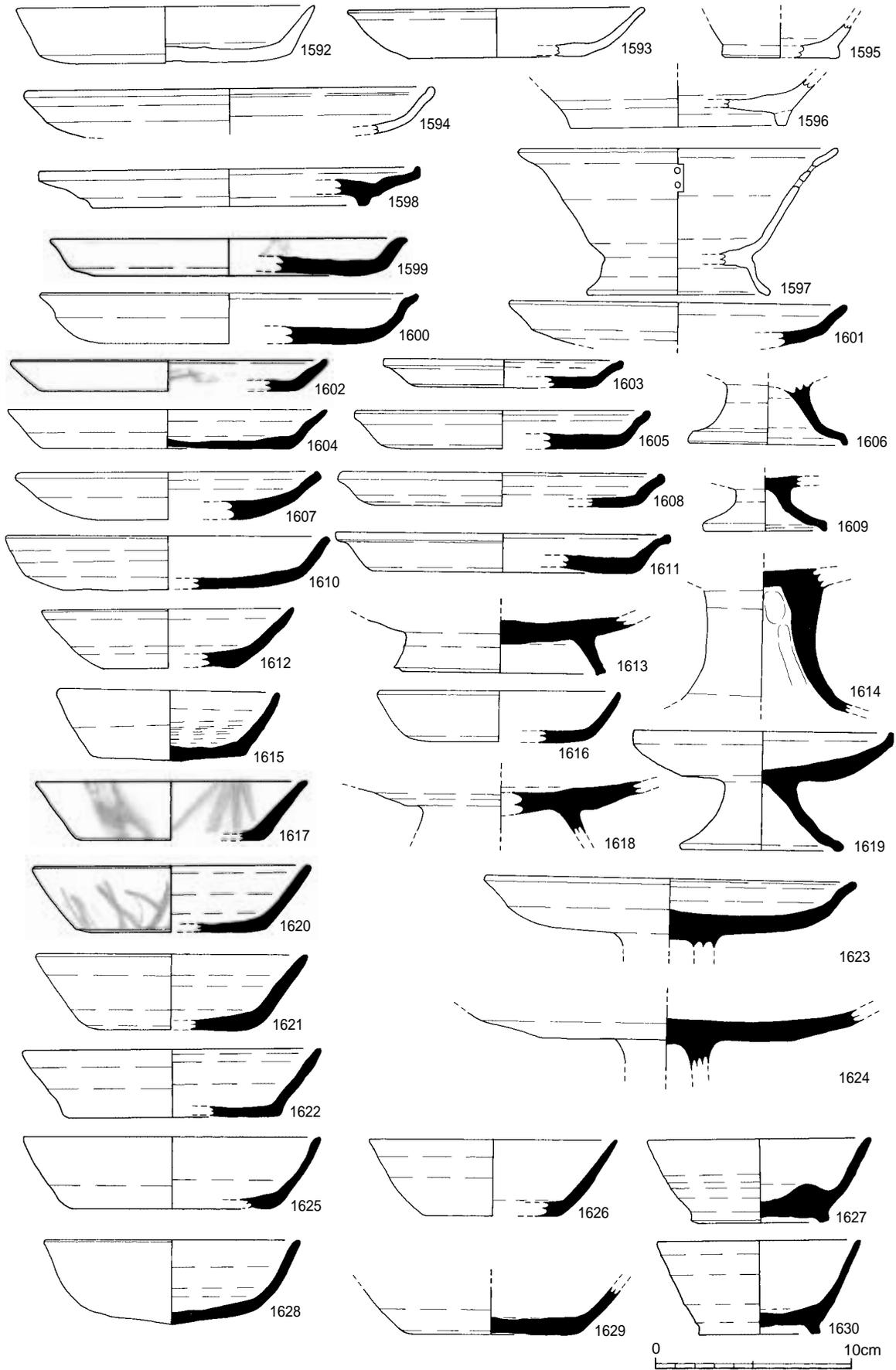


Fig.186 層出土遺物実測図1

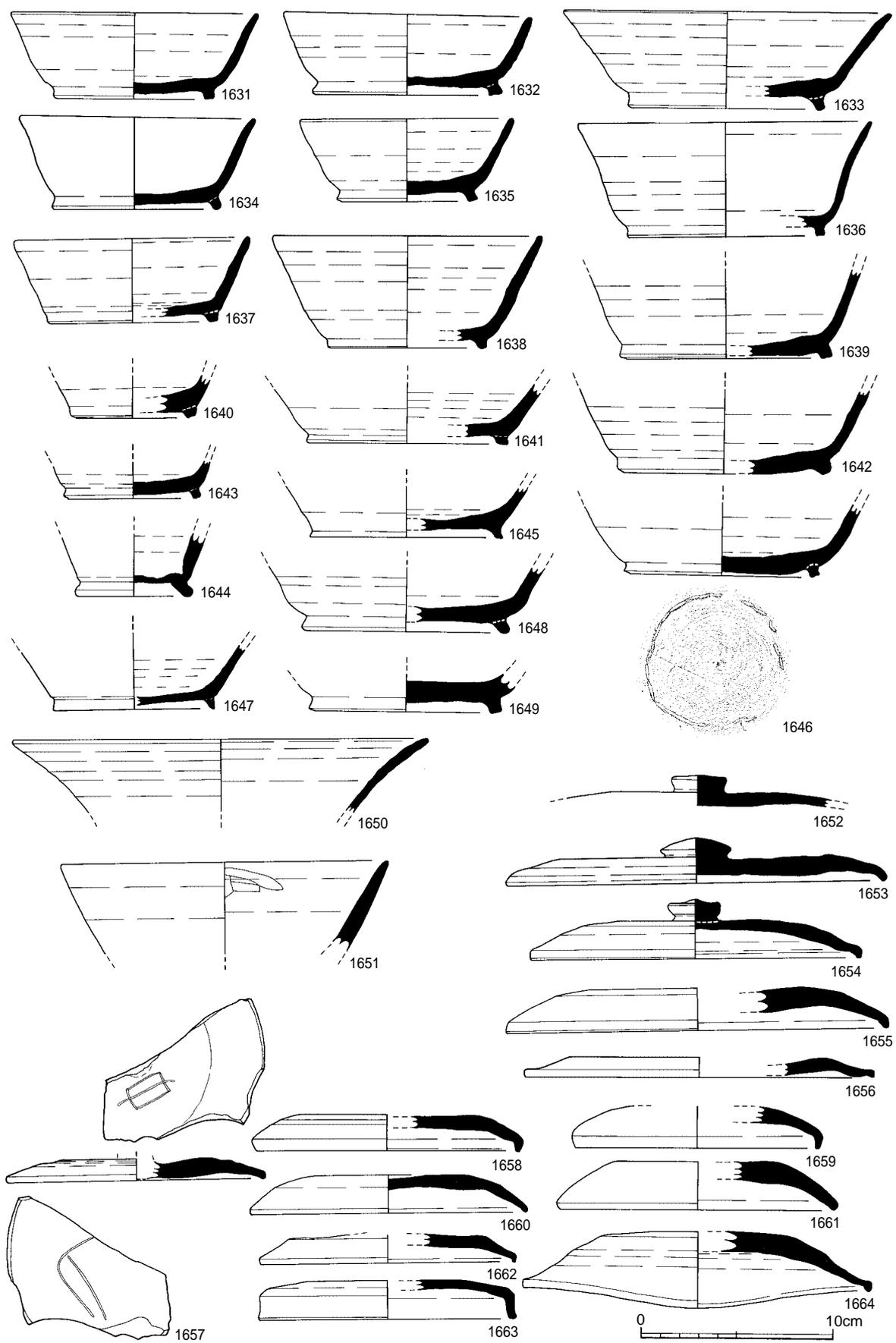


Fig.187 層出土遺物実測図2

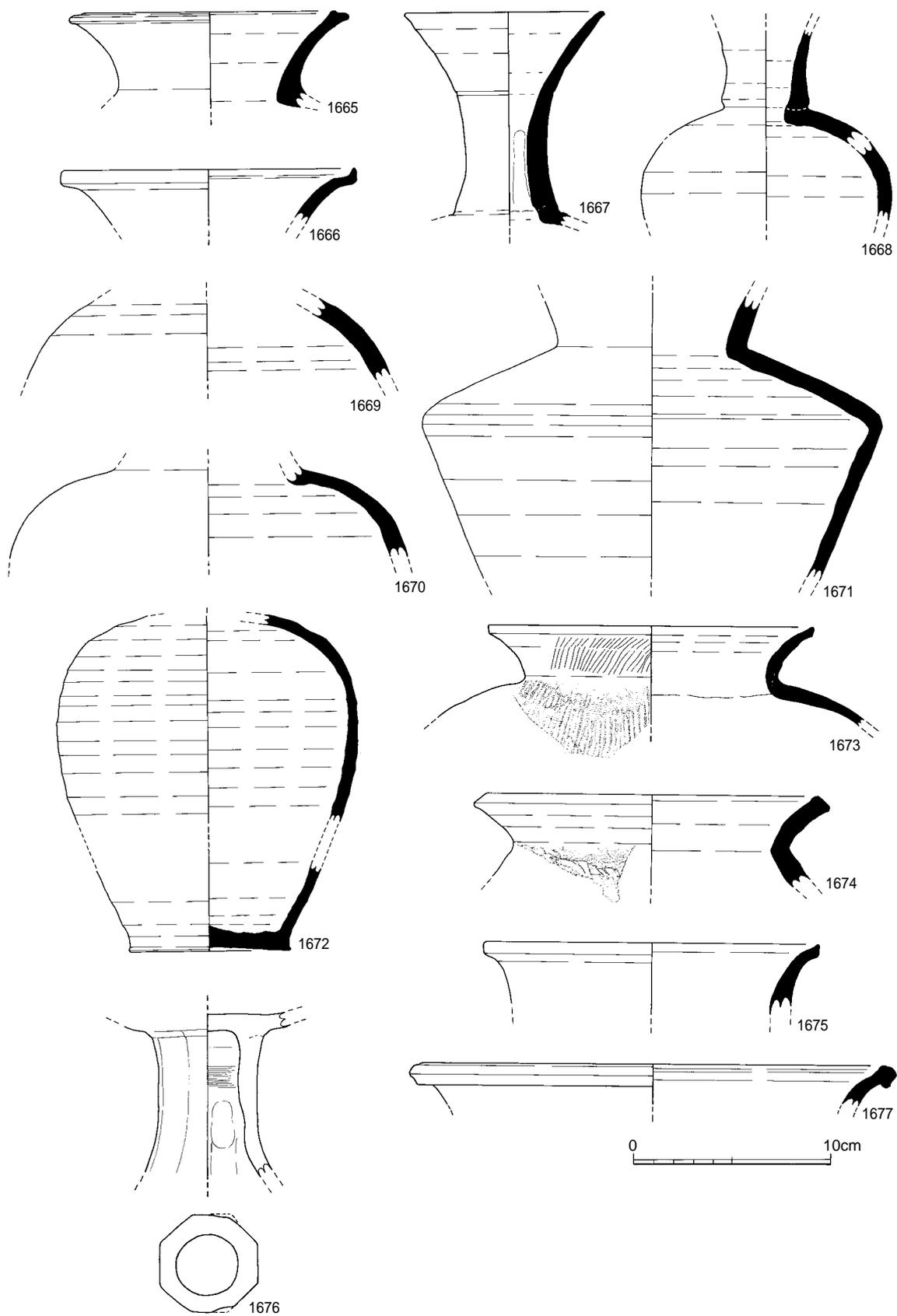


Fig.188 層出土遺物実測図3

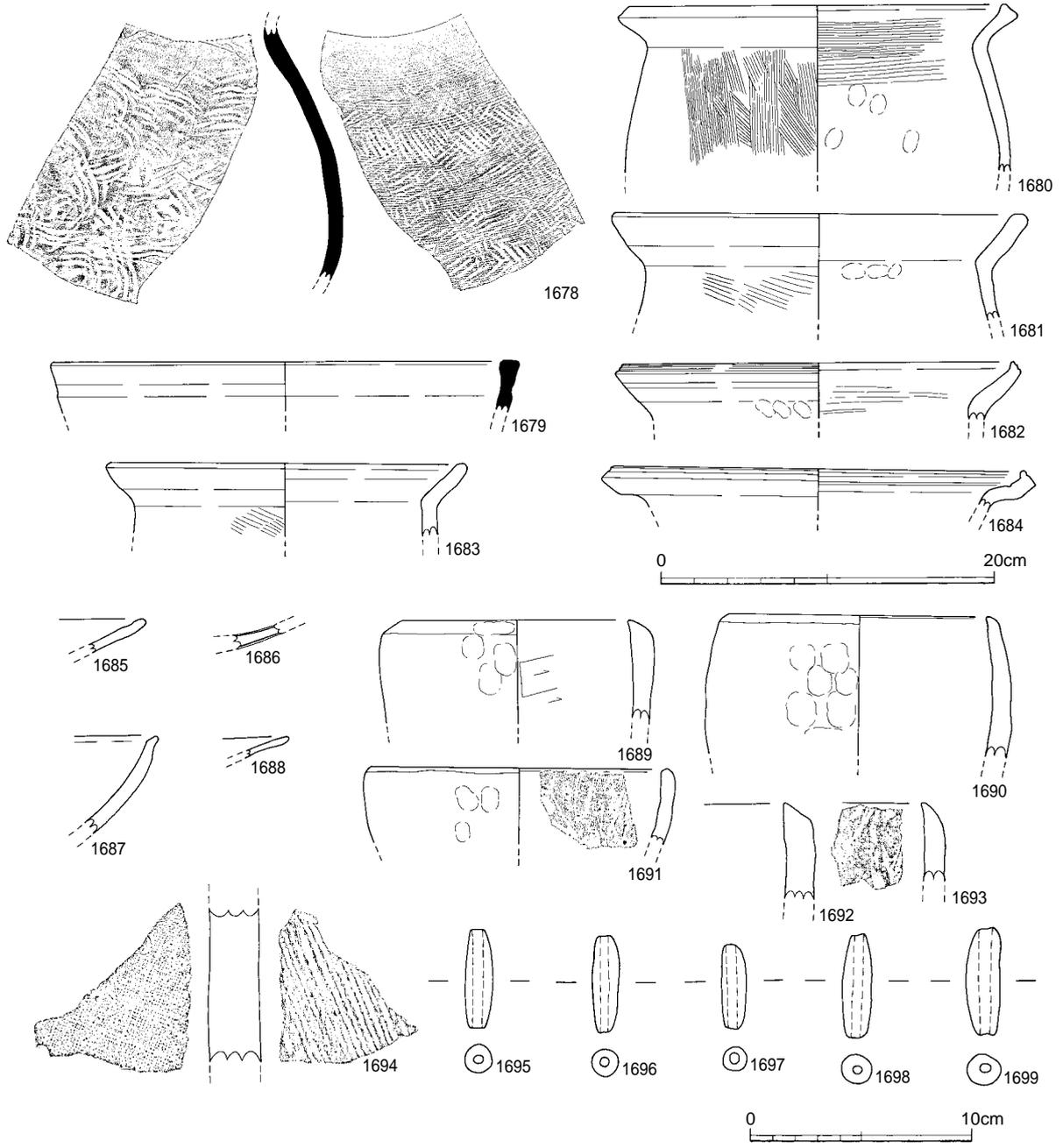


Fig.189 層出土遺物実測図4

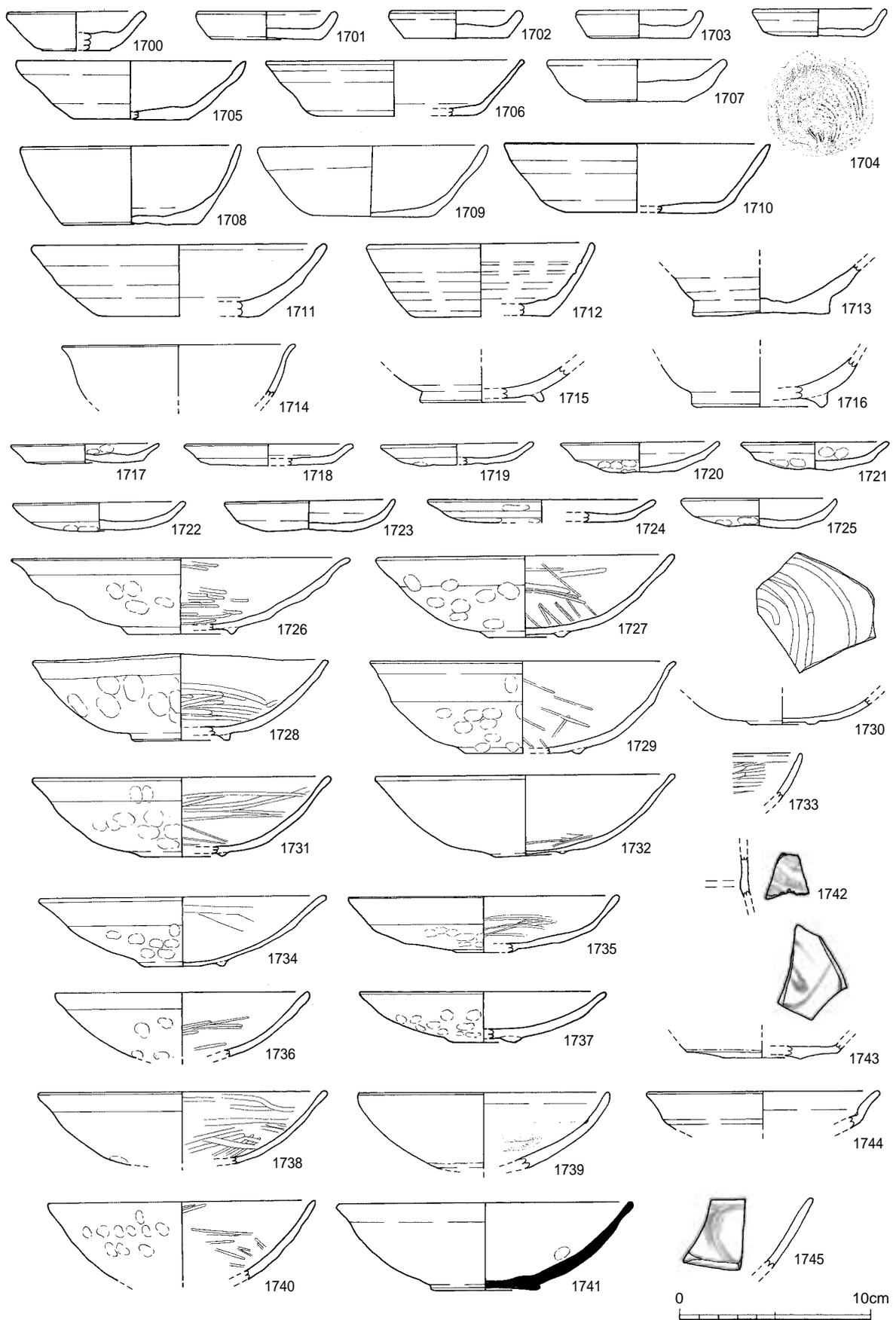


Fig.190 -2層出土遺物実測図1

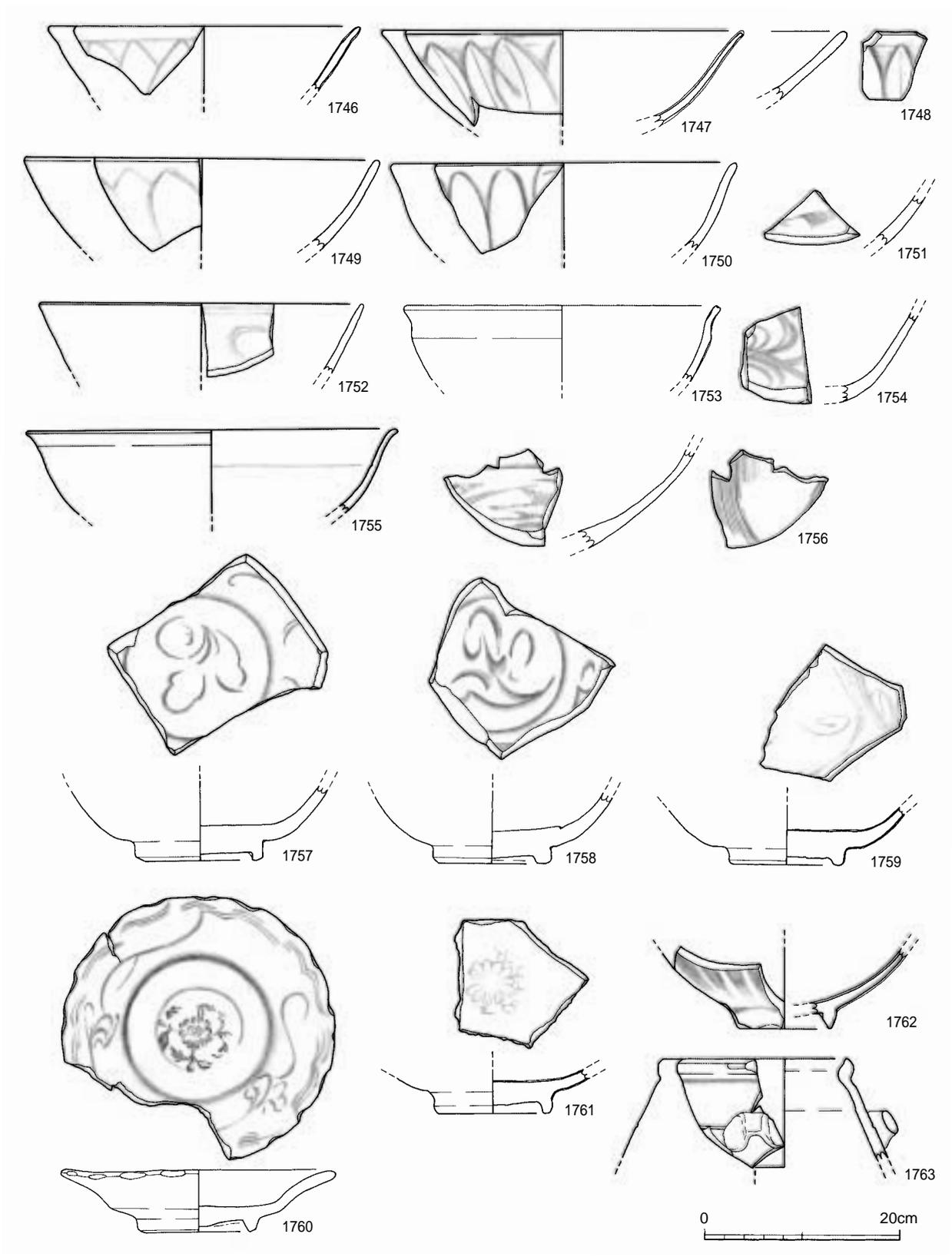


Fig.191 -2層出土遺物実測図2

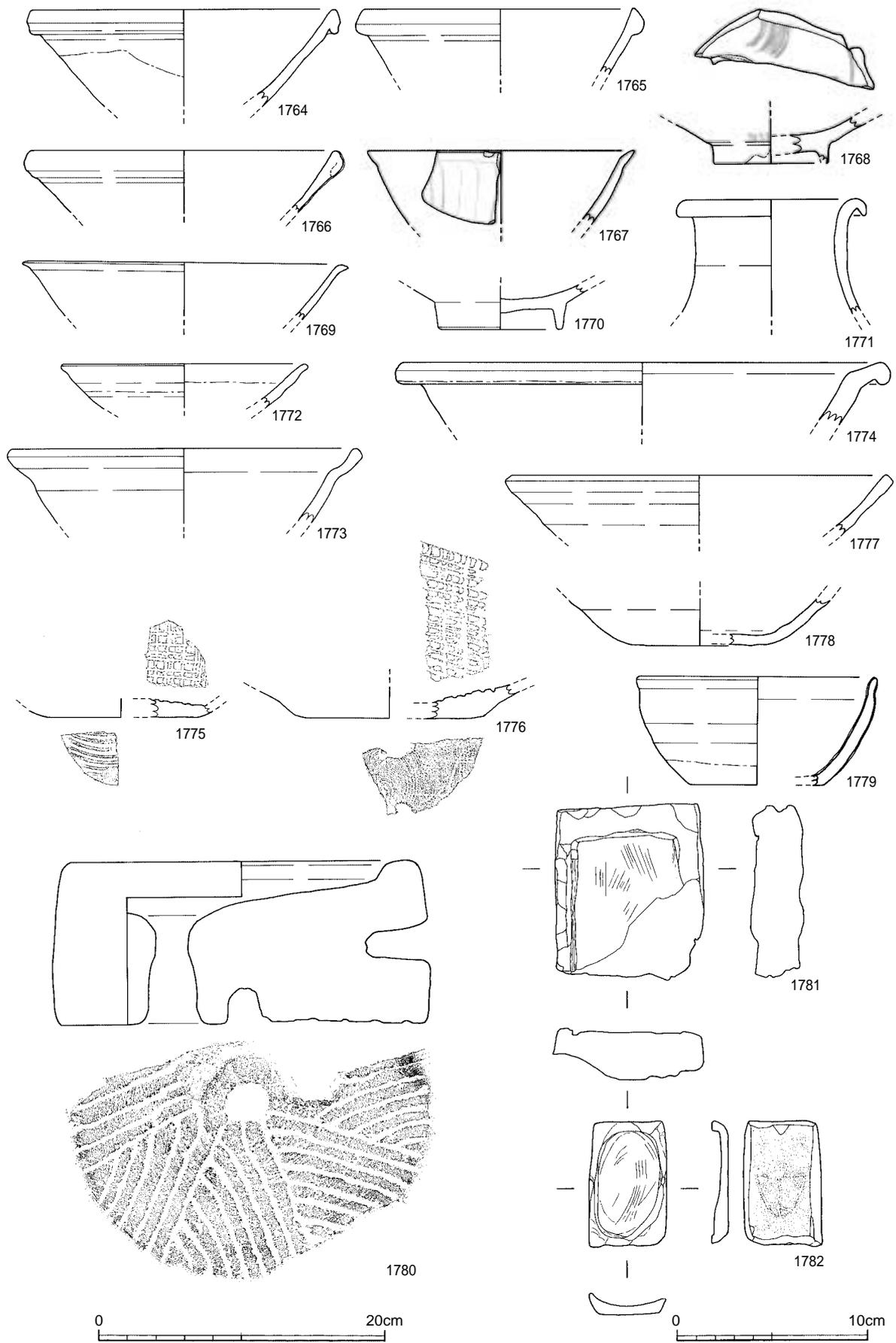


Fig.192 -2層出土遺物実測図3

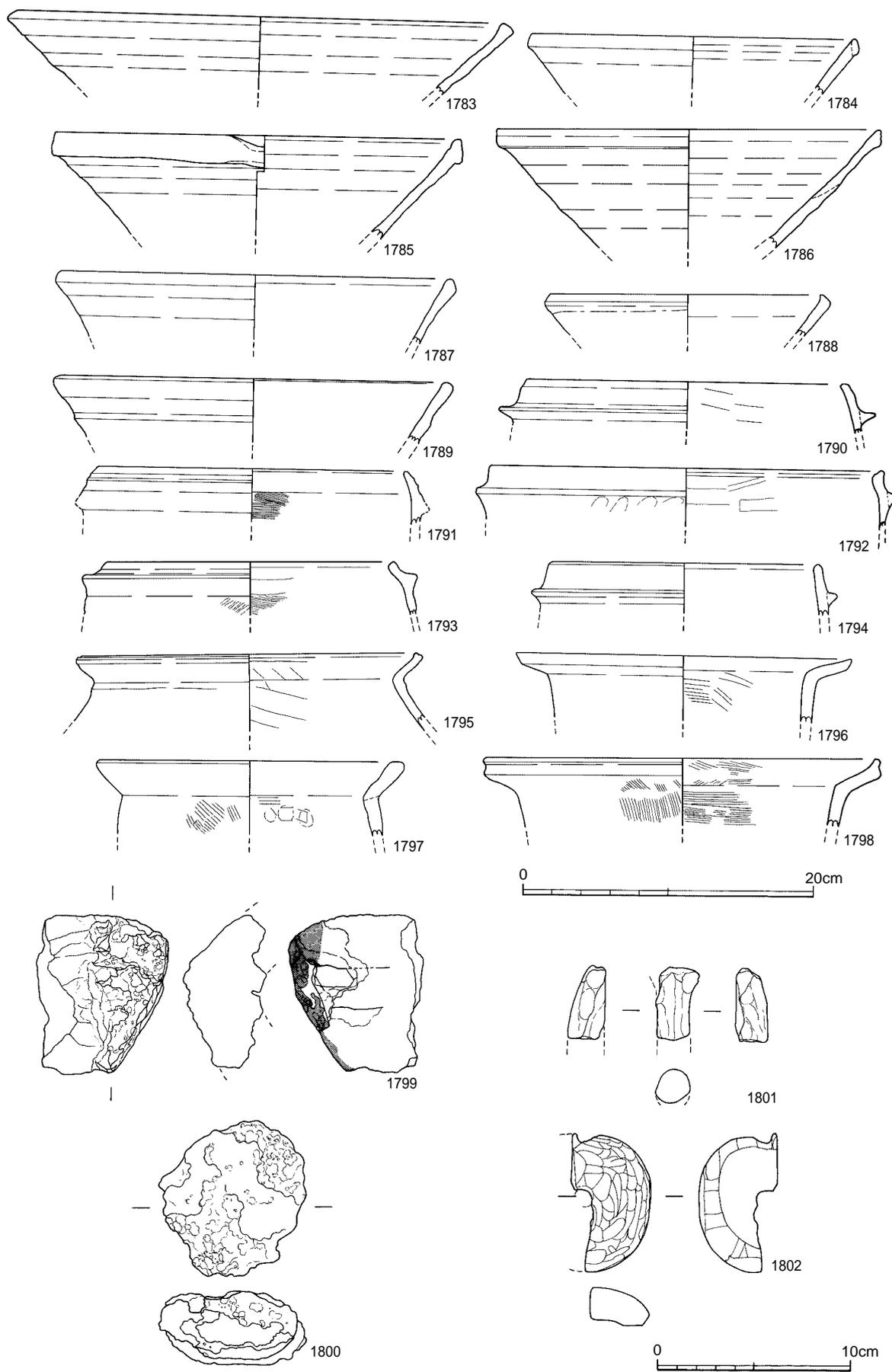


Fig.193 -2層出土遺物実測図4

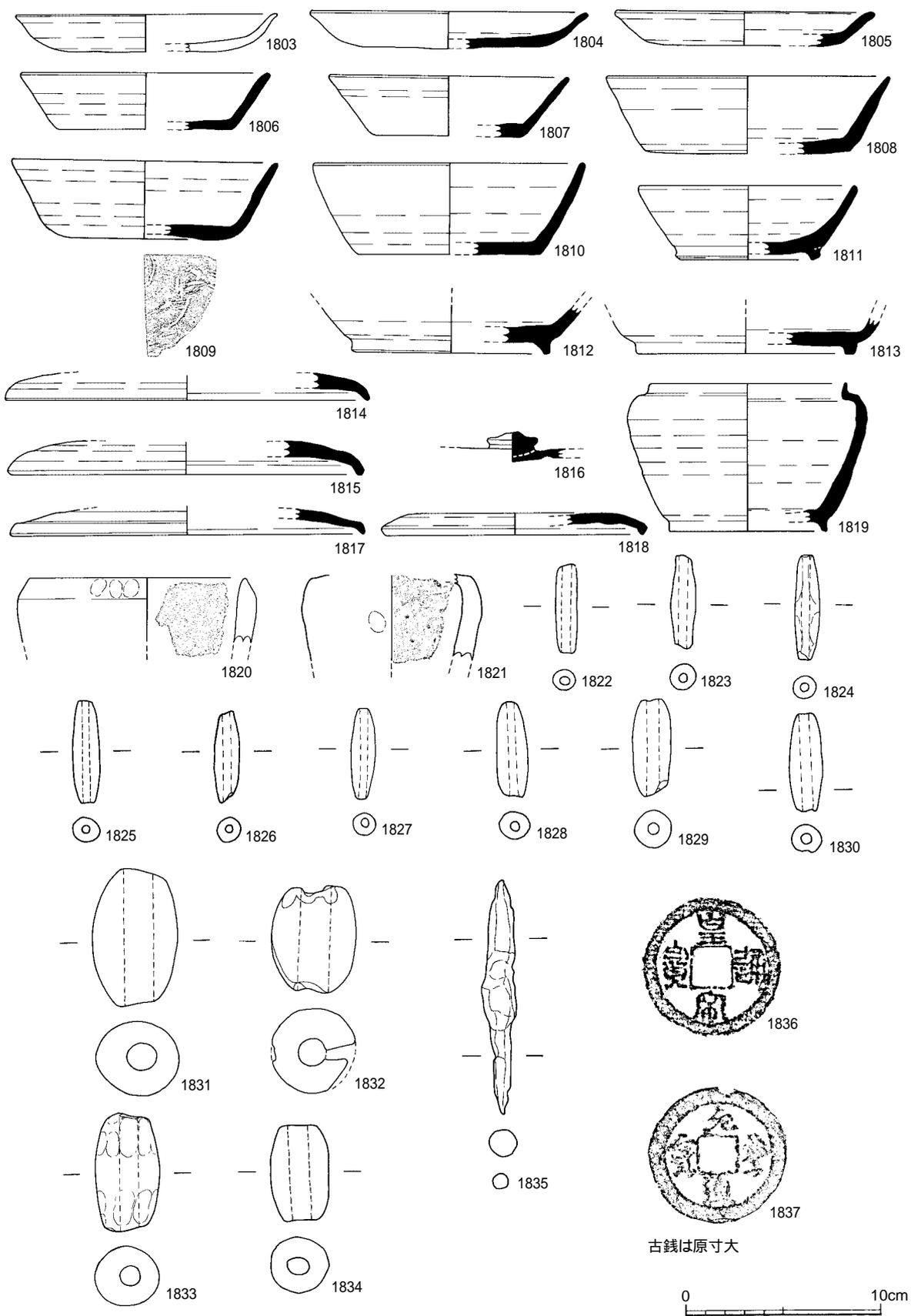


Fig.194 -2層出土遺物実測図5

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
156-1332	SK11	須恵器杯	—	-1.6	8	灰白色N7/	底部外面には断面台形状の高台が付く。内外面は回転ナデ、外面には一部ヘラケズリがなされる。	
" -1333	"	須恵器蓋	—	-1.5	13.6	灰色N5/	天井部から下方に緩やかに伸びる。端部は丸くおさめる。内外面は回転ナデ。	
" -1334	"	須恵器甕	22.2	-5.1	—	灰色N5/	口縁部は外方にやや外反し、端部は強くナデる。	
" -1335	"	須恵器	—	-2.4	—	灰色N5/	口縁端部は平坦面呈し、外反する。	
158-1336	SK12	土師器皿	16.2	2.2	1.3	にぶい黄橙色 10YR7/4	底部から口縁部は外方に伸びる。内外面は摩耗。	
" -1337	"	土師器杯	—	-2	9.8	灰白色2.5Y2/1	底部外面はヘラ切り痕が残る。	
" -1338	"	須恵器皿	13.6	-1.5	—	灰色10Y6/1	口縁部端部は丸くおさめる。内外面は回転ナデ。	
" -1339	"	須恵器蓋	17	-1.85	—	灰白色2.5Y7/1	口縁部は下方に伸び、端部は垂直に伸びる。外面は回転ナデ。	
" -1341	"	須恵器杯	15.8	-4.8	—	灰白色5Y8/1	口縁部は外方に直線的に伸びる。内外面は回転ナデ。	
" -1342	"	須恵器杯	—	-1.6	7.5	灰白色N7/	底部には断面方形形状の短い高台をなし、側面は強くナデる。	杯B
" -1343	"	須恵器杯	—	-2.1	8.8	灰白色N7/	底部は平底、内外面回転ナデ。	杯A
" -1344	"	須恵器杯	—	-4.5	—	灰色N6/	口縁部は丸くおさめる。内外面ナデ。	
" -1345	SK13	土師器杯	—	-2.6	7.5	にぶい黄橙色 10YR7/4	底部は平底、器壁が厚い。	
" -1346	SK12	土師器杯	—	-1.7	8.2	灰白色 10YR8/2	底部は平底、外面にはヘラ切り痕が残る。	
" -1347	SK13	土師器甕	26.6	-22.2	—	にぶい褐色 7.5YR5/4	胴部はやや丸みをもち、口縁部は外方に「く」字状に屈曲し、端部は上方に伸びる。内外面には斜位、横方向のハケ。下半内面にはタタキとハケがなされる。	
" -1348	SK12	土師器甕	—	-9.5	—	浅黄褐色 10YR8/4	口縁部は外方に屈曲し、端部は平坦面をなす。	
" -1349	SK13	土師器甕	18	-14	—	にぶい橙色 5YR7/4	胴部は球胴に近く、口縁部は外方に強く屈曲する。端部は平坦面を呈する。格子状のタタキが施される。口縁部内外面はナデ。	
159-1350	SK14	土師器杯	15.9	-6.2	—	浅黄褐色 10YR8/3	底部外面には高台が付き、口縁部は斜め上方に伸びる。	
" -1351	SK15	土師器杯	—	2.3	7.8	にぶい橙色 7.5YR7/4	底部は円盤状高台を呈し、体部途中まで残存する。内面にはナデ。	
160-1352	SK16	須恵器皿	11.2	1.7	8.4	灰白色N7/	底部から口縁部は外方に伸びる。端部はやや外反する。口縁部内外面は回転ナデ、内底面は不定方向のナデ。	
" -1353	SK16	須恵器蓋	15.4	-1.4	11.8	淡黄色2.5Y8/3	平坦な天井部からは下方に伸び、端部は垂直に伸びる。内外面は回転ナデ。	
" -1354	SK19	須恵器蓋	—	-1.8	—	灰白色2.5Y7/1	平坦な天井部から口縁部は下方に伸びる。口縁部内外面は回転ナデ。	
" -1355	"	須恵器杯	13.2	-2.7	—	灰色N5/	口縁部は外方に伸びる。内外面は回転ナデ。	
" -1356	SK17	須恵器蓋	14.5	3	—	灰色N5/	天井部にはボタン状の摘みが付き、口縁部にかけて下方に緩やかに伸びる。端部は垂直に下がる。内外面は回転ナデ。天井部内面は不定方向のナデ。	
" -1357	SK19	須恵器杯	—	-1.9	12.4	灰白色 10YR8/1	底部外面には断面方形形状の高台が付く。	杯B

Tab.65 遺物観察表1

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
160-1358	SK17	須恵器杯	—	-3.7	—	灰色7.5Y6/1	口縁部のみ残存する。端部は丸くおさめる。内外面は回転ナデ。	
" -1359	"	土師器甕	—	-2.5	—	にぶい褐色 7.5YR5/3	口縁端部は平坦面を呈する。	
163-1361	SB1	土師器小皿	7.6	1.7	—	橙色7.5YR7/6	底部から口縁部は直立する。内外面ナデ。	
" -1362	"	土師器小皿	7.7	—	5.9	にぶい黄橙色 10YR7/4	底部から口縁部は直立し伸びる。底部回転系切り。	
" -1363	"	瓦器皿	7.4	1.2	—	灰色N4/0	底部外面は指押し、口縁部内外面はナデ。	和泉型
" -1364	"	瓦器皿	9.2	1.3	—	灰色N5/0	底部から口縁部は直立し伸びる。底部外面は指押し、口縁部内外面はナデ。	和泉型
" -1365	"	瓦器皿	8	0.9	—	灰色N4/0	底部から口縁部は直立し伸びる。底部外面は指押し、口縁部内外面はナデ。	和泉型
" -1366	"	瓦器皿	7.8	1.4	—	灰色N5/0	底部から口縁部は直立し伸びる。底部外面は指押し、口縁部内外面はナデ。	和泉型
" -1367	"	瓦器椀	13	3.8	—	灰色N5/0	外底部には断面三角形の高台を貼付。口縁部は内湾。口縁部内外面はナデ、体部には指頭。	和泉型
" -1368	"	瓦器椀	—	-1.6	3.2	灰色N5/0	外底部には断面台形状の高台を貼付。	
" -1369	"	須恵器皿	13.6	2.2	10	灰色N5/0	底部から口縁部は外上方に伸び、端部は凹状をなす。外底面は回転ヘラ切り、内外面回転ナデ。	
" -1370	"	須恵器 コネ鉢	—	-2.3	—	褐色7.5YR4/3	内外面ナデ。	東播系
" -1371	"	瓦器椀	—	—	4.5	灰黄褐色 10YR6/2	外底部には断面三角形の高台を貼付。内面には平行線状のヘラケズリ。	和泉型
" -1372	"	土師器鍋	38	-5.5	—	灰黄褐色 10YR4/2	口縁部は外上方に短く伸びる。外面に指頭、内面にはヘラナデ。	
170-1392	SB8	瓦器皿	8.2	1.7	4.8	明褐色 7.5YR7/2	底部から口縁部内湾する。内外面にはナデ。	和泉型
" -1393	SB9	土師器小皿	8.6	1.2	6.6	にぶい黄褐色 10YR7/3	口縁部は直立外反し、外底面は回転系切り。	
" -1394	SB8	瓦器椀	15.4	-3.5	—	灰色N4/0	口縁部内外面ナデ、体部外面には指頭。	和泉型
" -1395	SB9	土師器杯	11.9	4.2	6.3	にぶい黄褐色 10YR7/4	ロク口成形、平底の底部から口縁部外上方に伸びる。外底面には回転系切り。	
" -1396	SB8	瓦器椀	16	-2.6	—	灰色N4/1	口縁部内外面は横ナデ、体部外面には指頭。	
" -1397	SB9	青磁合子	6.4	2.3	5.4	灰白色 7.5Y7/1	外面には縦状の鑄が入る。外面途中まで施釉。内面口縁下より施釉。	
" -1403	SK20	瓦器椀	12.9	3.6	3.3	灰白色 2.5Y7/1	底部には断面台形状の高台を貼付し、口縁部にかけては内湾する。口縁部内外面はナデ、体部外面には指頭。内面にはヘラミガキがなされる。	
" -1404	"	瓦器椀	12.3	3.6	3.6	灰色N4/	底部には断面三角形の高台を貼付し、口縁部にかけては内湾する。口縁部内外面はナデ、外面には指頭。内面には一部ヘラミガキが残る。	
174-1405	SK21	瓦器椀	13.2	-1.2	—	灰白色 2.5Y7/1	口縁部内外面はナデ。	
" -1406	SK22	土師器杯	—	-1.7	6	灰白色 10YR8/2	底部は平底を呈する。外面にはナデ。	
" -1407	"	土師器杯	—	-4.2	—	橙色5YR7/6	口縁部は丸くおさめる。	
" -1408	SK21	瓦器椀	—	-2.1	—	灰白色N8/	内面には一部ヘラミガキあり。	

Tab.66 遺物観察表2

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
176-1409	SD4	須恵器皿	12.6	1.4	10	黄灰色 2.5Y6/1	底部から口縁部は短く伸びる。内外面ナデ。	
" -1410	"	瓦器椀	15	-2	—	灰色5Y7/1	内外面は摩耗。	
" -1411	"	黒色土器	—	-2.5	—	暗灰色N3/0	内外面にはヘラミガキ。	
" -1412	"	須恵器杯	—	-5.5	—	灰白色2.5Y7/1	口縁端部は外反する。	
" -1413	"	備前焼	—	-4.4	—	灰色N5/	口縁部は玉縁状を呈する。	
" -1414	SD1	青磁碗	—	-3.9	—	オリーブ黄色 5Y6/3	内面には線描目、外面には縦方向の櫛描目が施される。	同安窯系
" -1415	"	石鍋	19.5	-4.8	—	黒色N2/	口縁部下には断面台形状の鏝をなし、端部は平坦面を呈する。外面にはケズリ。内外面には煤が付着。	
" -1416	SD4	木製漆器椀	12.9	5.7	6		底部高台は削り出し、口縁部は内湾する。内外面には草花文が朱塗りされている。	
" -1417	SE1	曲物	14.1	12.3	14.1		口縁下には1.5×2.2の方形を孔を施す。	
180-1437	土師器 集中	土師器皿	6.8	1.4	4.4	浅黄橙色 10YR8/3	底部から口縁部は外方に短く伸びる。内底面は不定方向のナデ。	
" -1438	"	土師器皿	7	1.4	4.5	浅黄橙色 7.5YR8/4	底部から口縁部は外方に短く伸びる。底部外面には回転系切り痕あり。	
" -1439	"	土師器皿	7	1.4	4.4	にぶい橙色 7.5YR7/4	底部から口縁部は外方に短く伸びる。底部外面には回転系切り痕あり。	
" -1440	"	土師器皿	6.4	1.4	4.4	浅黄橙色 7.5YR8/4	底部から口縁部は外方に短く伸びる。内底面は不定方向のナデ。	
" -1441	"	土師器杯	11.5	3.7	6.3	浅黄橙色 7.5YR8/4	底部から口縁部は外上方に伸びる。内外面は回転ナデ、底部外面には回転系切り痕あり。	
" -1442	"	土師器杯	12	3.7	6.3	浅黄橙色 7.5YR8/3	底部から口縁部は外上方に伸びる。内外面は回転ナデ。	
" -1443	"	土師器杯	12	3.5	7	浅黄橙色 10YR8/3	底部から口縁部は外上方に伸びる。内外面は回転ナデ、内底部にはロク口痕顕著。底部外面回転系切り痕後の板状圧痕がみられる。	
" -1444	"	土師器杯	12.2	3.5	7	浅黄橙色 7.5YR8/4	底部から口縁部は外上方に伸びる。内外面は摩耗著しい。	
" -1445	"	土師器杯	12	3.8	6.4	浅黄橙色 7.5YR8/4	底部から口縁部は内湾気味に外上方に伸びる。内底部にはロク口痕が顕著。	
" -1446	"	土師器杯	11.8	3.6	7.6	浅黄橙色 10YR8/3	底部から口縁部は外上方に伸びる。内外面は摩耗著しい。	
" -1447	"	土師器杯	11.6	3.8	6.8	浅黄橙色 7.5YR8/4	底部から口縁部は外上方に伸びる。内外面は回転ナデ。	
" -1448	"	土師器杯	11.3	4.3	7.4	浅黄橙色 7.5YR8/4	底部から口縁部は外上方に伸びる。内外面は回転ナデ、底部外面回転系切り痕後の板状圧痕がみられる。	
" -1449	"	土師器杯	11.1	4.05	7.2	浅黄橙色 7.5YR8/3	底部から口縁部は外上方に伸びる。内外面は回転ナデ、底部外面回転系切り痕後の板状圧痕がみられる。	
" -1450	"	土師器杯	11.8	3.7	7.3	浅黄橙色 10YR8/4	底部から口縁部は内湾気味に外上方に伸びる。内外面は摩耗著しい。	
" -1451	"	土師器杯	11	3.4	6	浅黄橙色 7.5YR8/4	底部から口縁部は外上方に伸びる。口縁部はやや肥厚している。	
" -1452	"	土師器杯	12	3.5	6.5	浅黄橙色 7.5YR8/3	底部から口縁部は内湾気味に外上方に伸びる。内外面は摩耗著しい。	
" -1453	"	土師器杯	11.5	3.5	6.4	浅黄橙色 10YR8/4	底部から口縁部は内湾気味に外上方に伸びる。内外面は摩耗著しい。	

Tab.67 遺物観察表3

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
180-1454	土師器 集中	土師器杯	11.7	4	7	浅黄橙色 7.5YR8/3	底部から口縁部は内湾気味に外上方に伸びる。内外面回転ナデ、底部外面には回転系切り痕あり。	
" -1455	"	土師器杯	12.2	3.4	6.6	浅黄橙色 7.5YR8/3	底部から口縁部は外上方に伸びる。口縁部の段が顕著である。底部外面には回転系切り後の板状圧痕が残る。	
" -1456	"	土師器杯	11.7	3.5	6.5	浅黄橙色 10YR8/4	底部から口縁部は外上方に伸びる。口縁部の段が顕著である。底部外面には回転系切り痕あり。	
" -1457	"	土師器杯	11.9	3.75	7	浅黄橙色 7.5YR8/3	底部から口縁部は外上方に伸びる。内外面は摩擦著しい。	
" -1458	"	土師器杯	11.4	3.95	7	浅黄橙色 7.5YR8/3	底部から口縁部は外上方に伸びる。口縁部の段が顕著である。底部外面には回転系切り痕あり。	
" -1459	"	土師器杯	12.2	3.6	6.8	浅黄橙色 7.5YR8/3	底部から口縁部は内湾気味に外上方に伸びる。内外面は摩擦著しい。	
" -1460	"	土師器杯	11.9	3.8	6.7	にぶい橙色 7.5Y R7/4	底部から口縁部は外上方に伸びる。内外面は回転ナデ、底部外面回転系切り痕後の板状圧痕がみられる。	
" -1461	"	土師器杯	11.4	3.5	6.4	浅黄橙色 7.5YR8/3	底部から口縁部は外上方に伸びる。内外面は摩擦著しい。	
" -1462	"	土師器杯	—	-1.65	6.5	浅黄橙色 7.5YR8/4	底部外面には回転系切り痕後の板状圧痕がみられる。	
" -1463	"	土師器杯	—	-2.8	7.6	浅黄橙色 10YR8/4	底部外面には回転系切り痕。	
" -1464	"	青磁皿	—	-1	4.8	オリーブ色 10YR6/2	内面には櫛描目、底部外面は露胎。	同安窯系
181-1465	P 43	青磁碗	16.8	-4.8	—	オリーブ灰色 2.5GY5/1	内面には劃花文が施される。釉薬には貫入が入る。	龍泉窯系
" -1466	"	瓦器椀	16	-2.9	—	暗灰色N3/	体部外面には指頭が顕著。内面は摩擦著しい。	
" -1467	P 44	瓦器皿	7	1.6	5.6	灰色N4/	底部から口縁部は外上方に短く伸びる。口縁部内外面は横ナデ。底部外面は指押し。	和泉型
" -1468	P 45	土師器杯	—	-1.6	7.6	浅黄橙色 10YR8/3	底部外面には回転系切り後の板状圧痕がみられる。内外面は摩擦著しい。	
" -1469	P 46	土師器杯	—	-1.7	6.6	にぶい黄橙色 10YR6/3	底部外面には回転系切り痕。	
" -1470	P47	土師器杯	14.2	3.9	7.4	浅黄橙色 7.5YR8/3	平底の底部から口縁部は外上方に伸びる。回転口口成形。	
" -1471	P49	土師器杯	—	-3	7.5	浅黄橙色 10YR8/4	底部外面には回転系切り痕後の板状圧痕がみられる。内外面は摩擦する。	
" -1472	P50	土師器杯	12	3.45	6.3	にぶい橙色 7.5YR7/4	平底の底部から口縁部は外上方に伸びる。回転口口成形。	
" -1473	P48	土師器杯	—	-1.5	6.5	浅黄橙色 10YR8/3	内外面とも摩擦が著しいが、底部外面には回転系切り痕の一部がみられる。	
" -1474	P51	土師器小皿	6.6	1.8	4.9	橙色5YR6/6	底部から口縁部は外方に短く伸びる。底部外面には回転系切り痕が残る。	
" -1475	"	土師器小皿	7.5	1.6	4.9	にぶい橙色 7.5YR7/4	底部から口縁部は外上方に短く伸びる。底部外面には回転系切り痕が残る。	
" -1476	"	土師器皿	10.6	2.5	7	橙色7.5YR7/6	底部から口縁部は外上方に直線的に伸びる。口縁部内外面は回転ナデ。底部外面には回転系切り痕が残る。	
182-1479	P53	瓦器椀	14	-4	—	灰色N4/	口縁部は強い横ナデにより段をなす。体部外面には指頭、内面にはヘラミガキが施される。	和泉型
" -1480	P54	瓦器椀	—	-2	4.6	灰色N4/	底部外面には断面台形状の高台が貼付される。外面には指頭、内底面にはヘラミガキがなされる。	和泉型
" -1481	P56	瓦器椀	12.4	-2.7	—	黒色7.5Y2/1	口縁部内外面はナデ。	

Tab.68 遺物観察表4

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
182-1482	P57	瓦器椀	16	-2.8	—	灰色N4/	口縁部は横ナデにより段をなし、体部外面には指頭。内面にはヘラミガキが施される。	和泉型
" -1483	P66	瓦器椀	15	-3.15	—	灰色N4/	口縁部内外面は横ナデにより段をなし、体部下半は指頭。内面にはヘラミガキが施される。	和泉型
" -1484	P59	青磁碗	—	-3.7	—	灰オリーブ色 7.5Y5/2	体部のみ残存し、高台途中より欠損する。内面には劃花文が施される。	龍泉窯系
" -1485	"	青磁碗	—	-4.1	—	灰オリーブ色 7.5Y5/2	体部のみ残存する。内面には劃花文が施される。	龍泉窯系
" -1486	P55	須恵器椀	—	-2.2	—	灰色N7/	口縁部のみ残存する。内外面はナデ。	
" -1487	P60	瀬戸焼皿	11.7	2.15	5.6	灰オリーブ 7.5Y6/2	底部は平底、口縁部にかけて外方に直線的に伸びる。口縁部内外面には施釉、内面見込みには目あとが残る。底部外面は回転系切り痕が残る。	
" -1488	P61	土師器杯	12.6	3.5	7.4	浅黄褐色 7.5YR8/3	底部は平底で口縁部は外方に伸びる。底部外面には回転系切り痕が残る。器壁が厚い。	
" -1489	P62	瓦器皿	8	1.9	4.1	灰色N4/	底部から口縁部は外方に短く伸びる。口縁部内外面はナデ。底部外面は指頭が顕著。	和泉型
" -1490	P66	土師器小皿	7.4	1.9	4.8	にぶい橙色 7.5YR7/2	底部から口縁部は外方に短く伸びる。内外面は摩耗著しい。器壁は厚い。	
" -1491	P65	青磁碗	—	-2.2	—	明オリーブ灰 色5GY7/1	内外面には櫛描きが施される。	同安窯系
" -1492	P68	土師器杯	13.5	3.2	7.3	にぶい黄褐色 10YR6/3	底部は平底、口縁部は外方に直線的に伸びる。底部が外面には回転系切り痕が残る。ロク口成形。	
" -1493	"	青磁碗	—	-3.8	—	オリーブ黄色 5Y6/3	内面には櫛描、劃花文、外面には櫛描が施される。高台部分は露胎。釉には細かい貫入が入る。	同安窯系
" -1494	P67	土師器皿	8.2	1.6	6	にぶい黄褐色 10YR7/4	底部から口縁部は外方に短く伸びる。底部外面には回転系切り痕あり。	
" -1495	P70	土師器皿	8	1.75	6	橙色5YR7/6	底部から口縁部は直立して短く伸びる。内底面は不定方向のナデ。	
" -1499	P56	須恵器鉢	28	-8.8	—	灰色2.5Y6/1	口縁部は外上方に開き、端部は平坦面を呈する。内外面は回転ナデ。口縁部は片口を呈している。	
" -1500	P63	須恵器 コネ鉢	27.8	-4	—	灰色N5/0	口縁部は外方に開き、端部は肥厚させている。	東播系
" -1501	P64	土師器甕	23.4	-3.65	—	にぶい橙色 7.5YR6/4	口縁部は屈曲し、端部は平坦面をなす。内外面には横方向のハケ。	
" -1502	P65	土師器羽釜	24	-5.7	—	にぶい褐色 7.5YR5/3	口縁下には断面形状の鐳が巡る。口縁部は内傾して伸び、端部は平坦面を呈する。内面にハケ及びナデがなされる。内外面には煤。	
" -1503	P67	瓦質土器鍋	30.5	-5.1	—	灰色N4/	口縁部は屈曲し、直立して上方に伸びる。端部は内傾し、浅い凹状を呈する。口縁部内外面は強いナデ。体部内面には横方向のハケ、外面には指頭がみられる。	
" -1504	P69	瓦質土器鍋	27.4	-2.3	—	灰色N4/	口縁部は屈曲し、直立して上方に伸びる。端部は内傾し、浅い凹状を呈する。口縁部内外面は強いナデ。	
183-1505	P71	瓦器皿	7.8	1.3	3.5	灰色N4/	底部から口縁部は内湾して伸びる。口縁部内外面はナデ、底部外面には指頭。	和泉型
" -1506	"	瓦器皿	8.6	1.1	5.4	にぶい橙色 7.5YR7/4	底部から口縁部は外方に伸びる。口縁部内外面は強いナデ、底部外面は指頭。炭素吸着が弱い。	和泉型
" -1507	"	瓦器皿	8.2	1.2	4	灰色N5/	底部から口縁部は内湾して伸びる。口縁部内外面はナデ、底部外面には指頭。	和泉型
" -1508	"	瓦器皿	8.8	1.5	—	灰色N4/	底部から口縁部は内湾して外方伸びる。口縁部内外面は強いナデ、底部外面には指頭が顕著に残る。	和泉型
" -1509	P72	青磁碗	16	-4.1	—	灰オリーブ色 5Y5/3	口縁部内面には劃花文が施される。	龍泉窯系

Tab.69 遺物観察表5

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
183-1511	P73	土師器杯	—	-2.8	8.4	灰白色 10YR7/1	底部外面には回転系切り痕が残る。器壁は薄い。	
" -1512	"	土師器杯	—	-2.3	9	にぶい黄橙色 10YR7/2	底部は平底、調整は不明瞭。	
" -1513	"	須恵器椀	19	5.6	8.2	灰色N7/	底部は平底、体部から口縁部は外上方に伸びる。内外面は回転ナデ。底部には糸切り痕が残る。	東播系
" -1514	P76	瓦器椀	15	-2.4	—	灰色7.5Y5/1	口縁部内外面はナデにより段をなし、体部外面には指頭。内面にはヘラミガキがなされる。	和泉型
" -1515	"	瓦器椀	11.8	-3.1	—	灰色5Y5/1	口縁部内外面はナデ、内底面には指頭。体部内面には一部ヘラミガキがなされる。	
" -1517	P75	瓦器皿	7.4	1.4	3	黄灰色2.5Y6/1	底部から口縁部はや内湾して伸びる。口縁部内外面はナデ、底部外面は指頭が顕著である。	和泉型
" -1518	P76	土師器皿	8.6	2	6	にぶい黄橙色 10YR6/4	底部から口縁部は外方に短く伸びる。底部外面には回転系切り痕が残る。器壁は厚い。	
" -1519	"	瓦器皿	7.6	1	5.5	灰白色5Y7/1	底部から口縁部は外上方に伸びる。口縁部内外面はナデ。底部外面にもナデがなされる。	和泉型
" -1520	P79	瓦器皿	7.5	1.3	—	灰白色5Y7/1	底部から口縁部は内湾して短く伸びる。口縁部内外面はナデ、底部外面には指頭が顕著、炭素吸着が少ない。	和泉型
" -1521	P77	瓦器皿	8.4	-1.8	—	暗灰色N3/	底部から口縁部は内湾して伸びる。口縁部内外面、底部内面にはナデ。底部外面には指頭。	和泉型
" -1522	"	瓦器皿	8	-1.6	—	灰色N4/	底部から口縁部は内湾し伸びる。口縁部はナデにより段をなし、外底面は指頭。一部に炭素吸着はみられない。	和泉型
" -1523	P79	瓦器皿	7.2	1.5	—	灰色N7/	底部から口縁部は内湾して伸びる。口縁部内外面、内底面はナデ、底部外面には指頭。	和泉型
" -1524	P76	瓦器皿	8	1.25	—	灰色N6/	底部から口縁部は内湾して伸びる。全体に焼歪みがあり。口縁部内外面はナデ。	
" -1525	P77	瓦器椀	16.6	-3.8	—	灰色N4/	口縁部は内湾し、内外面は横ナデにより段をなす。体部外面には指頭、内面にはヘラミガキ。	和泉型
" -1527	P78	土師器小皿	5	1	3.6	浅黄橙色 7.5Y8/4	底部から口縁部は直立して短く伸びる。内外面回転ナデ。	
" -1528	P79	瓦器皿	8.2	0.9	6	灰色N4/	底部から口縁部は外上方に伸びる。口縁部内外面は強いナデ。底部外面には指頭。	和泉型
" -1529	P78	土師器皿	8.4	1.8	6.2	にぶい黄橙色 10YR7/3	底部から口縁部はやや内湾して短く伸びる。底部外面には回転系切り痕が残る。器壁は厚い。	
" -1530	P79	瓦器皿	8.4	1.3	6	にぶい黄橙色 10YR7/3	底部から口縁部は外方に短く伸びる。	
" -1531	P81	須恵器蓋	16	-2.7	—	青灰色2.5Y6/1	口縁部の端部は下方に肥厚さす。内面には回転ナデ。外面には自然釉がかかる。	
" -1533	P74	備前焼甕	—	-4	19.2	にぶい黄橙色 7.5YR6/4	底部のみ残存する。内面には自然釉がかかる。	
184-1534	P83	土師器皿	7	1.2	4.4	黄橙色 10YR8/3	底部から口縁部は内湾して短く伸びる。	
" -1535	P85	土師器皿	8.6	1.9	5.6	にぶい黄橙色 10YR7/3	底部から口縁部は外方に短く伸びる。底部外面には回転系切り痕が残る。器壁は厚い。	
" -1536	P84	青磁碗	15.6	-3.4	—	灰オリーブ色 7.5Y6/2	内面には劃花文が施される。釉には細かい貫入が入る。	龍泉窯系
" -1537	P86	青磁皿	12	-2.5	—	灰オリーブ色 7.5Y6/2	口縁部は内湾する。釉には貫入が入る。	
" -1538	P87	土師器皿	7.4	1.7	5.1	にぶい黄橙色 10YR7/4	底部から口縁部は外方に短く伸びる。口縁部内外面はナデ。器壁は厚い	
" -1539	P85	瓦器椀	12.6	3.9	3.2	灰色N4/	底部外面には断面三角形の高台を貼付する。口縁部にかけては内湾する。体部外面下半には指頭、内面内底部には螺旋状のヘラミガキが施される。	

Tab.70 遺物観察表6

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
184-1540	P89	土師器皿	15.2	3.3	10.4	にぶい黄橙色 10YR7/4	底部から口縁部は外方に伸び、口縁部内面下には沈線が入る。外面には横方向のヘラミガキがなされる。	
" -1541	P90	土師器皿	7.7	1.7	5.4	橙色7.5YR7/6	底部から口縁部は内湾して短く伸びる。口縁部内外面、内底面にはナデ。	
" -1542	"	青磁碗	—	-3.5	—	にぶい黄色 2.5Y6/3	口縁部外面には鑄蓮弁文が施される。釉には細かい貫入が入る。	
" -1543	"	須恵器皿	15.4	1.9	11.9	黄灰色2.5Y6/1	底部から口縁部は外方に伸びる。口縁部内外面はナデ、外面には一部火だすきあり。	
" -1544	P91	土師器皿	7	1.35	5	浅黄橙色 7.5YR8/4	底部から口縁部は外方に短く伸びる。端部は丸くおさめる。	
" -1545	P93	土師器皿	6.9	1.1	4.6	橙色5Y6/6	底部から口縁部はやや内湾しながら短く伸びる。口縁部内外面はナデ、底部外面には回転糸切り痕が残る。	
" -1546	P92	瓦器碗	14.2	3.85	4.6	灰白色N7/	底部外面には微隆起状の高台が貼付され、体部から口縁部は内湾する。口縁部内外面はナデ、体部外面には指頭圧痕、内面にはヘラミガキが施される。	
" -1547	P95	瓦器皿	7.9	1.5	3.9	灰色N5/	底部から口縁部は内湾する。口縁部内外面はナデ、底部外面は指押し成形をなす。	
" -1548	P96	瓦器皿	10.2	1	7.6	灰黄色2.5Y6/2	底部から口縁部は外方に伸びる。口縁部内外面ナデ、底部外面には指頭圧痕がみられる。	
" -1549	P97	須恵器蓋	—	-1.4	—	灰白色5Y7/1	擬宝珠形の摘み。	
" -1550	P98	土師器杯	11.1	3.6	4.5	にぶい黄橙色 10YR7/2	底部から口縁部は外方に直線的に伸びる。口縁部内外面は回転ナデ、底部外面には回転糸切り痕が残る。	
" -1551	P99	瓦器碗	—	-1.3	4.6	灰色N5/	底部外面には断面三角形の高台が貼付される。内底面には平行線状と螺旋状のヘラミガキが施される。	
" -1552	P92	瓦器碗	13.2	3.55	4.6	灰色N7/	底部外面には微隆起状の高台が貼付され、体部から口縁部にかけて内湾する。口縁部内外面はナデ、体部外面には指頭圧痕、内面には螺旋状のヘラミガキ。	
" -1553	P100	須恵器杯	12.8	4.9	8	黄灰色2.5Y6/1	外底部に断面方形の高台が付く。口縁部は外上方に直線的に伸びる。高台脇を一部ヘラケズリする。内外面は回転ナデ。底部外面は回転ヘラ切り。	
" -1554	"	土師器皿	14.4	2.3	10	橙色5YR6/6	底部から口縁部は外方に伸び、口縁部内面下には一条の沈線が入る。口縁部内外面は回転ナデ。	
" -1555	P101	須恵器杯	13	4.4	8	灰色N5/	底部外面には断面方形の高台が付き、口縁部は外上方に直線的に伸びる。内外面は回転ナデ。	
" -1556	P100	須恵器皿	18.8	3.1	9.4	灰白色2.5Y7/1	底部には断面方形の高台が付く。口縁部に伸び、端部は上方に摘み出す。口縁部内外面はナデ。高台貼付部分は強くナデる。	
" -1559	P102	須恵器杯	17.9	4.8	—	灰色N6/	口縁部は外方に直線的に伸びる。内外面は回転ナデ。	
" -1566	P94	須恵器甕	22	-3	—	褐灰色 10YR6/1	口縁部は強く外反し、端部は上下に肥厚している。内外面ナデ。外面には斜位方向のハケがなされる。	
185-1567	P102	土師器杯	—	-3.7	7.5	灰白色 10YR8/2	底部は円盤状高台をなす。底部外面には一部ヘラ状圧痕が残る。	
" -1568	"	須恵器杯	—	-2.2	6	灰白色N7/	底部は平底。内外面は回転ナデ。	
" -1569	P106	須恵器杯	—	-2.9	9.4	灰色N5/	底部外面には断面方形の高台が付き、高台内面は内傾する。内外面は回転ナデ。	
" -1570	P105	瓦器皿	7.4	1	5.4	黒色5Y2/1	底部から口縁部は外方に伸び、内外面は横ナデ。	
" -1571	P107	須恵器杯	13.3	4	8.6	灰色5Y6/1	底部は平底、口縁部は外方に直線的に伸びる。内底部はやや落ち込む。口縁部内外面は回転ナデ、底部外面には回転ヘラ切り痕。外面には火だすきあり。	

Tab.71 遺物観察表7

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
185-1572	P109	須恵器鉢	—	-2.3	—	灰色5Y5/1	口縁部は肥厚させている。内外面ナデ。	
" -1573	P112	白磁碗	—	-1.5	—	灰白色 10Y8/1	口縁部は外反する。	白磁 類
" -1574	P109	白磁碗	15.2	-2.4	—	灰白色5Y7/2	口縁部は玉縁状を呈する。	白磁 類
" -1575	P108	須恵器 コネ鉢	19.5	5.1	—	灰色N7/	口縁部は上方に肥厚させている。内外面回転ナデ。	東播系
" -1576	P111	白磁碗	15.4	-3	—	灰白色5Y7/1	口縁部は玉縁状を呈する。	白磁 類
" -1577	P114	備前焼甕	—	-6	—	灰褐色 7.5YR4/2	口縁部は玉縁状を呈する。	
" -1578	P113	須恵器杯	—	-2.6	8.4	灰色N7/	外底部には断面方形の高台をなす。内外面は回転ナデ。	杯B
" -1579	P117	白磁皿	—	-1.2	5	灰白色5Y7/1	底部は平底を呈する。	白磁 類
" -1580	P118	須恵器蓋	—	-2	—	灰色5Y6/1	天井部にはボタン状の摘みが付く。内面には不定方向のナデ。	
" -1581	P115	須恵器 コネ鉢	—	-2.7	—	灰色N7/	口縁部は肥厚する。内外面回転ナデ。	東播系
" -1582	P118	須恵器杯	12	5	7.8	灰白色5Y8/1	底部外面には断面方形の高台付き、口縁部は外方に直線的に伸びる。	杯B
" -1583	"	須恵器蓋	—	-1.2	—	灰白色N7/6	天井部は輪状の摘みを呈する。	
" -1584	"	須恵器蓋	14	-1.3	—	灰白色5Y8/1	天井部から口縁部は下方に緩やかに伸び、端部は丸くおさめる。	
" -1585	"	土師器皿	—	-2.5	—	にぶい橙色 7.5YR7/4	口縁部は強いナデにより段をなす。	
" -1586	"	須恵器高杯	—	-10	13.8	灰白色 2.5Y7/1	脚部は緩やかに下方に伸び、裾部に至る。側面には方形の透かし窓が4箇所みられる。杯底部は強い指押しとナデがなされる。	
" -1587	P119	青磁碗	—	-2.3	5.6	灰オリーブ色 5Y5/3	底部外面は削り出し高台。高台内と畳付以外は施釉する。外面には鑄蓮弁文が施される。釉には細かい貫入が入る。	
186-1592	層	土師器皿	15.2	2.9	12.8	橙色7.5YR7/6	底部から口縁部は外方に直立して伸びる。底部外面には粘土紐痕あり、口縁部内外面はナデ。	
" -1593	"	土師器皿	15	2.5	9.2	にぶい橙色 7.5YR6/4	底部から口縁部は外方に伸び、端部はやや外反する。底部外面には回転ヘラ切り痕が一部残る。口縁部内外面はナデ。	
" -1594	"	土師器皿	20.8	-2.4	—	橙色5YR6/6	口縁部は外方に伸び、端部は丸くおさめる。端部内面下には一条の沈線が入る。口縁部内外面はナデ。	
" -1595	"	土師器杯	—	-1.8	5.9	にぶい黄橙色 10YR7/4	底部は円盤状高台を呈する。	
" -1596	"	土師器杯	—	-2.4	11	橙色5YR7/8	底部外面には断面方形の高台が付く。高台と杯部間は強くナデる。	
" -1597	"	土師器杯	16.1	7.5	9.2	橙色7.5YR7/6	底部外面には2cmを測る高台が貼付され、貼付部分は強くナデる。体部は外上方に伸び、口縁部は外反する。口縁下には直径3mmの円孔を縦に2箇所施す。	
" -1598	"	須恵器皿	19.4	1.9	14	灰白色5Y8/1	底部外面には断面台形状の高台が付く、口縁部は外方に伸びる。端部のみ垂直に短く伸びる。口縁部内外面は回転ナデ。	
" -1599	"	須恵器皿	18	1.9	16	灰色N5/	底部から口縁部は上方に直立して伸びる。端部はやや外反する。口縁部内外面は回転ナデ、底部内外面は不定方向のナデ。内外面には火禿がみられる。	

Tab.72 遺物観察表8

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
186-1600	層	須恵器皿	19.1	2.6	14.6	灰白色 7.5YR8/2	底部から口縁部はやや内湾して伸び、端部は外反する。口縁部内外面は回転ナデ。底部内底面は摩耗。	
" -1601	"	須恵器皿	17	-2.2	—	灰白色 2.5Y8/1	底部から口縁部は外上方に伸び、端部は丸くおさめる。口縁部内外面は回転ナデ。	
" -1602	"	須恵器皿	15.8	1.6	12.7	灰白色 2.5Y8/1	底部から口縁部は外上方に伸びる。口縁下には強いナデにより段をなす。外底面にはヘラ切り痕。	
" -1603	"	須恵器皿	12.2	1.4	8.6	灰色5Y6/1	底部から口縁部は外方に伸びる。端部下はナデにより沈線状をなす。口縁部内外面は回転ナデ。	
" -1604	"	須恵器皿	16	2	12.6	灰黄色 2.5Y7/2	底部から口縁部は外上方に伸びる。	
" -1605	"	須恵器皿	14.6	2	10.4	灰白色 2.5Y8/1	底部から口縁部は外上方に伸び、口縁部は丸くおさめる。端部下にはナデにより浅い沈線状をなす。口縁部内外面は回転ナデ。	
" -1606	"	須恵器高杯	—	-3.2	8	灰白色 2.5Y7/1	杯部は外下方に短く伸び、裾端部は下方に突出する。内外面はナデ。	
" -1607	"	須恵器皿	15.4	-2.4	—	灰白色N8/	口縁部は外方に緩やかに伸びる。口縁端部は方形状を呈する。口縁部内外面はナデ。	
" -1608	"	須恵器皿	16.6	1.7	14	灰白色 2.5Y7/1	底部から口縁部は外方に伸び、口縁下にはナデによる段をなす。内外面は回転ナデ。外面にはヘラ切り痕。	
" -1609	"	須恵器高杯	—	-2.8	6.1	灰白色 2.5Y8/1	杯部は外下方に短く伸び、裾端部は下方に突出する。内外面はナデ。	
" -1610	"	須恵器皿	15.4	2.8	14	灰白色 2.5Y7/1	底部から口縁部は外上方に伸び、端部は丸くおさめる。口縁部内外面は回転ナデ、底部外面にはヘラ切り痕。	
" -1611	"	須恵器皿	17	2	14	灰白色5Y7/1	底部から口縁部は外方に伸び、外反する。口縁部内外面は回転ナデ。	
" -1612	"	須恵器杯	12.8	3	7	灰色7.5Y5/1	底部は平底、口縁部にかけて外方に直線的に伸びる。口縁部内外面回転ナデ。	杯A
" -1613	"	須恵器皿	—	-2.9	10.8	灰白色N7/	底部外面には断面方形状の高い高台が付く。内外面にはナデ。	
" -1614	"	須恵器高杯	—	-7.2	—	灰白色 2.5Y8/1	脚部のみ残存し、内面にはナデがなされる。	
" -1615	"	須恵器杯	11	3.7	7.9	灰白色 2.5Y7/1	底部は平底、口縁部は外上方に直線的に伸びる。底部外面にはヘラ切り痕あり、口縁部内外面は回転ナデ。	杯A
" -1616	"	須恵器杯	12.2	2.6	9.5	灰白色 5Y5/1	底部は平底、口縁部は外上方に伸びる。胎土・焼成は瓦質に近い。	杯A
" -1617	"	須恵器杯	13.8	3	9.6	灰白色 5Y7/1	底部は平底、口縁部は外上方に直線的に伸びる。内外面には回転ナデ、内外面には火だすきが見られる。	杯A
" -1618	"	須恵器皿	—	-2.8	—	灰白色 2.5Y8/1	底部外面には高台が付く。1613と類似。	
" -1619	"	須恵器高杯	13	6.1	8.2	灰白色 5Y8/1	杯部は皿状を呈し、口縁端部は上方に直立する。脚部は下方に緩やかに伸び、端部は丸くおさめる。内外面とも摩耗が著しい。	
" -1620	"	須恵器杯	14	3	9.6	灰白色 2.5Y7/1	底部は平底、口縁部は外上方に直線的に伸びる。口縁部内外面は回転ナデ、外底面にはヘラ切り痕が残る。外面には火だすきが見られる。	杯A
" -1621	"	須恵器杯	13.6	3.9	8.6	灰黄色 2.5Y6/2	底部は平底、口縁部は外上方に伸びる。口縁部内外面は回転ナデ。	杯A
" -1622	"	須恵器杯	15	3.5	11.2	灰白色N7/	底部は平底、口縁部は外上方に直線的に伸びる。口縁部内外面は回転ナデ、外底面はヘラ切り痕が残る。	杯A
" -1623	"	須恵器高杯	18.8	-3.5	—	灰白色 2.5Y8/1	杯部は皿状を呈し、口縁部はやや外反する。口縁部内外面はナデ、外底部には一部ケズリが見られる。	

Tab.73 遺物観察表9

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
186-1624	層	須恵器高杯	—	-3.4	—	灰白色 2.5Y8/2	脚部内面はナデ。	
" -1625	"	須恵器杯	15.2	3.7	10.4	灰白色N7/	底部は平底、口縁部は外上方に伸びる。口縁部内外面は回転ナデ。	杯A
" -1626	"	須恵器杯	12.4	3.9	7	灰白色5Y8/1	底部は平底、口縁部は外上方に直線的に伸びる。調整は不明瞭。	杯A
" -1627	"	須恵器杯	11.2	4.3	7	灰白色 2.5Y7/1	外底部は断面台形状の高台をなし、口縁部は外上方に伸びる。口縁部内外面はナデ、内底面は火膨れを起こす。	杯B
" -1628	"	須恵器杯	12.9	4.4	—	灰色N5/	底部は扁平な平底、口縁部は外方に伸びる。外底部にはヘラ切り痕が残る。	杯A
" -1629	"	須恵器杯	—	-2.5	9	灰白色 5Y6/1	底部は平底、外底面にはヘラ切り痕が残る。	杯A
" -1630	"	須恵器杯	10.4	4.8	6.2	灰色N5/	外底部は断面方形形状の高台をなし、口縁部は外方に伸びる。高台側面は強いナデ、口縁部内外面は回転ナデ。	杯B
187-1631	"	須恵器杯	12.6	4.5	8.2	灰色N5/	外底部は断面方形形状の高台をなし、口縁部は外方に伸びる。高台側面は強いナデ、口縁部内外面は回転ナデ。	杯B
" -1632	"	須恵器杯	12.7	4.35	9.8	灰色N7/	外底部には断面台形状の高台をなし、外面は凹状を呈する。口縁部は外方に伸びる。口縁部内外面は回転ナデ。	杯B
" -1633	"	須恵器杯	16.7	5.1	10.4	灰白色 5Y7/1	外底部には断面方形形状の高台が付き、口縁部は外方開きながら伸びる。口縁部内外面はナデ。	杯B
" -1634	"	須恵器杯	12.1	4.8	8.5	灰白色 2.5Y8/1	外底部には断面方形形状の高台が付き、口縁部は外方に伸びる。端部はやや外反する。	杯B
" -1635	"	須恵器杯	10.9	4.3	7.4	灰色10Y5/1	外底部は断面方形形状の高台をなし、口縁部は外方に伸びる。口縁部内外面は回転ナデ、外底面はヘラ切り痕。	杯B
" -1636	"	須恵器杯	15.1	5.9	10.1	灰色5Y5/1	外底部には断面方形形状高台をなし、口縁部は外方に伸びる。口縁部内外面は回転ナデ。	杯B
" -1637	"	須恵器杯	12.2	4.4	8.8	灰白色 5Y7/1	外底部は断面台形状の高台をなし、側面は強くナデる。口縁部は外方に直線的に伸び、口縁部内外面ナデ。	杯B
" -1638	"	須恵器杯	13.8	5.9	8.2	灰色 7.5Y6/1	外底部は断面方形形状の高台をなし、口縁部は外上方に伸びる。口縁部内外面は回転ナデ。	杯B
" -1639	"	須恵器杯	—	-4.6	10.9	灰白色 5Y7/1	外底部には断面方形形状の高台をなし、側面は強くナデる。口縁部は外方に伸びる。外底面はヘラ切り痕が残る。内底面には不定方向のナデ。	杯B
" -1640	"	須恵器杯	—	-2.2	6.4	灰色N6/	外底部は断面台形状の短い高台をなす。内外面はナデ。	杯B
" -1641	"	須恵器杯	—	-3.1	10.3	灰黄色 2.5Y7/2	外底部は断面台形状の高台をなし、側面をナデる。外底面にはヘラ切り痕。	杯B
" -1642	"	須恵器杯	—	-4.4	11	灰色7.5Y7/1	外底部には断面台形状の高台をなし、側面は強くナデる。内外面ナデ。	杯B
" -1643	"	須恵器杯	—	-1.9	7.1	灰白色 5Y6/1	外底部には断面方形形状の高台をなし、底面は斜位に削る。外底面はヘラ切り。	杯B
" -1644	"	須恵器杯	—	-3.3	5.8	黄灰色 2.5Y6/1	外底部には断面方形形状の高台をなし、側面を強くナデる。端部は丸い。小型の杯。	杯B
" -1645	"	須恵器杯	—	-2.7	10	灰色N7/	外底部は断面方形の高台をなし、側面を強くナデる。	杯B
" -1646	"	須恵器杯	—	-3.8	10	灰色N6/	外底部には断面方形形状の高台をなし、側面を強くナデる。内底部はナデ、外底面はヘラ切り及び爪状圧痕がみられる。	杯B
" -1647	"	須恵器杯	—	-3.3	8.4	灰黄色 2.5Y7/1	外底部には断面方形形状の高台をなし、側面を削り込み。内底部はナデ、外底面にはヘラ切り痕。	杯B

Tab.74 遺物観察表10

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
187-1648	層	須恵器杯	—	-3.4	10	灰黄色 2.5Y7/2	外底部には断面方形の高台をなし、外底面にはヘラ切り痕。	杯B
" -1649	"	須恵器杯	—	-2	10	灰白色 2.5Y8/1	外底部には断面方形の高台をなし、外底面にはヘラ切り痕。内底面はナデ。	杯B
" -1650	"	須恵器杯	21.6	-3.8	—	灰白色 7.5Y7/1	一部焼き歪みが見られるが、口縁部は外方に大きく開く。内外面はナデ。	
" -1651	"	須恵器杯	17	-4.7	—	灰白色 2.5Y8/1	内外面はナデ、内面には一部ヘラケズリがなされる。	
" -1652	"	須恵器蓋	—	-1.6	—	灰黄色 2.5Y7/2	天井部にはボタン状の摘みつく。内外面はナデ。天井部内面は不定方向のナデ。	
" -1653	"	須恵器蓋	19.4	2.4	—	灰色5Y6/1	天井部は平坦面を呈し、口縁部は緩やかに下方に伸びる端部は丸くおさめる。天井部には擬宝珠形の摘みが付く。内外面ナデ。	
" -1654	"	須恵器蓋	17.1	3.1	—	にぶい橙色 7.5YR7/4	天井部から口縁部は下方に緩やかに伸び、端部は下方に短く伸びる。内外面ナデ。天井部にはボタン状の摘み。	
" -1655	"	須恵器蓋	20	-2	—	灰白色 2.5Y8/1	天井部から口縁部は内湾して下方に伸びる。内面はナデ。	
" -1656	"	須恵器蓋	18.2	-1.05	—	灰色N6/	口縁端部は断面方形を呈する。内外面はナデ。	
" -1657	"	須恵器蓋	13.2	-1.2	—	灰白色 7.5Y7/1	天井部から緩やかに下方に伸び口縁部に至る。天井部内外面には線刻がなされる。	
" -1658	"	須恵器蓋	13.6	-1.9	—	灰色N5/	天井部は平坦面をなし、口縁部は緩やかに下方に伸びる。端部は下方に垂直に伸びる。天井部外面はヘラケズリ、口縁部内外面はナデ。	
" -1659	"	須恵器蓋	12.5	-2.2	—	灰白色 2.5Y8/1	天井部から口縁部は緩やかに下方に伸びる。端部は下方に垂直に伸びる。口縁部内外面はナデ。	
" -1660	"	須恵器蓋	14.2	2	—	灰色N7/	天井部から口縁部は下方に緩やかに伸びる。内外面はナデ。摘みは欠損。	
" -1661	"	須恵器蓋	14.2	-2	—	黄灰色 2.5Y5/1	天井部は平坦面を呈し、口縁部はやや内湾しながら下方に伸びる。	
" -1662	"	須恵器蓋	13.2	-1.5	—	灰白色5Y7/1	天井部は平坦面をなし、口縁部は屈曲して下方に伸びる。端部は下方に垂直に伸びる。内外面はナデ。	
" -1663	"	須恵器蓋	13.2	-2	—	灰褐色 7.5YR5/3	天井部は平坦面をなし、口縁部は屈曲して下方に伸びる。口縁部内外面、天井部内面はナデ。	
" -1664	"	須恵器蓋	18.2	-4	—	灰白色N7/	天井部から口縁部は緩やかに下方に伸び、端部は稜をなす。天井部外面にはケズリ、内面にはナデ。焼き歪みが見られる。	
188-1665	"	須恵器壺	12.4	-4.9	—	灰色N5/	口縁部端部は平坦面を呈し、ナデにより浅い抉りをなしている。	短頸壺
" -1666	"	須恵器壺	15	-2.8	—	灰白色N7/	端部は上方に短く伸びる。内外面は回転ナデ。	
" -1667	"	須恵器壺	10	-10.9	—	灰色5Y6/1	口縁部は外方に大きく開く。内外面は回転ナデ。	長頸壺
" -1668	"	須恵器壺	—	-12.7	—	黄灰色 2.5Y6/1	頸部から胴部のみ残存する。内外面はナデ。	
" -1669	"	須恵器壺	—	-4.2	—	黄灰色 2.5Y6/1	内外面は回転ナデ。	
" -1670	"	須恵器壺	—	-4.6	—	灰色N5/	内外面は回転ナデ。	
" -1671	"	須恵器壺	—	-14.5	—	灰色N8/	肩部は大きく張る、口縁部は接合面を強くナデる。	
" -1672	"	須恵器壺	—	-15	8	灰色N5/	底部は平底、胴部から頸部にかけて内湾しながら伸びる。内外面回転ナデ、外底面には糸切り痕。	

Tab.75 遺物観察表11

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
188-1673	層	須恵器甕	22	-6.7	—	褐灰色 7.5YR5/1	頸部から口縁部は外反する。外面には縦状のハケとナデ、内面はナデ。外面には縦方向のタタキ。	
" -1675	"	須恵器甕	16.6	-4.6	—	灰色7.5Y5/1	口縁部は短く外反し、端部は平坦面を呈し、外傾する。内外面ナデ。	
" -1676	"	土師器高杯	—	-8.5	—	浅黄橙色 10YR8/3	脚部側面は面取りをし、断面八角形状を呈する。	
" -1677	"	須恵器甕	23.2	-2.1	—	灰白色5Y7/1	口縁端部は玉縁状に肥厚させている。内外面はナデ。	
189-1678	"	須恵器甕	—	-15.3	—	灰黄色2.5Y7/2	外面には格子状、内面には同心円状のタタキ痕がなされる。	
" -1679	"	須恵器鉢	17.9	-3.1	—	灰白色2.5Y7/1	口縁端部は平坦面を呈する。内外面はナデ。	
" -1680	下層	土師器甕	20.6	-10.6	—	にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁部は外反する。端部は平坦面をなし、外傾する。内面は頸部まで横方向のハケ、下半は指頭及びナデ。外面は縦・斜位方向のハケ。	
" -1681	層	土師器甕	24.6	-6.3	—	にぶい褐色 7.5YR5/4	口縁部は外方に屈曲し、端部は平坦面をなす。口縁部内外面ナデ、外面には斜位のハケ。	
" -1682	"	土師器甕	23.5	-3.3	—	にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁部は外方に屈曲し、端部は平坦面なし外傾する。口縁部は強いナデ、内面にはハケ。	
" -1683	"	土師器甕	21.2	-4.3	—	にぶい黄橙色 10YR5/4	口縁部は外方に屈曲し、端部は丸くおさめる。口縁部内外面はナデ、外面にはハケ。	
" -1684	上層	土師器甕	24.8	-2.5	—	灰黄褐色 10YR4/2	口縁端部は平坦面をなし、外傾する。内面下には一条の沈線をなす。口縁部内外面はナデ、外面には煤。	
" -1685	"	緑釉陶器	—	-1.2	—	灰オリーブ色 10Y4/2	皿の口縁部。灰オリーブ色の釉が施される。	
" -1686	層	緑釉陶器	—	-2.3	—	灰オリーブ色 7.5Y5/2	体部片のみ残存。	
" -1687	上層	瀬戸美濃	—	-4.5	—	にぶい黄褐色 5YR4/3	碗の口縁部、端部は外反する。底部付近まで鉄釉がかかる。	
" -1688	層	黒色土器	—	-0.9	—	赤褐色5YR4/6	口縁部のみ残存する。内面は黒色を呈する。	黒色A
" -1689	"	製塩土器	10.1	-4	—	灰白色2.5Y8/2	内面には一部ヘラケズリ、外面には指頭圧痕。	
" -1690	"	製塩土器	11.5	-6.4	—	にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁部はやや内湾する。外面には指頭圧痕が顕著。	
" -1691	"	製塩土器	13.1	-3.4	—	灰色5Y6/1	内面には布目痕、外面には指頭圧痕。	
" -1692	"	製塩土器	—	-4.2	—	浅黄橙色 10YR8/3	口縁端部は斜位に削る。内面には布目痕、外面には指頭圧痕。	
" -1693	"	製塩土器	—	-3.5	—	灰白色2.5Y7/1	内面には布目痕、外面には指頭及びナデ。	
" -1694	"	瓦	—	-7	—	橙色5YR6/6	内面には布目痕。	
190-1700	-2層	土師器皿	7	2	3.5	にぶい黄橙色 10YR7/3	底部から口縁部は上方に短く伸びる。底部の器壁が厚い。	
" -1701	"	土師器皿	7	1.5	6	褐灰色 10YR5/1	底部から口縁部は直立し、短く伸びる。口縁部内外面はナデ、外底面には回転糸切り痕。	
" -1702	"	土師器皿	6.7	1.4	5.3	にぶい橙色 7.5YR6/4	底部から口縁部は直立し、短く伸びる。口縁部内外面はナデ。	
" -1703	"	土師器皿	6.3	1.5	5.4	にぶい橙色 7.5YR6/4	底部から口縁部は直立し、短く伸びる。口縁部内外面はナデ。	
" -1704	"	土師器皿	6.8	1.4	4.8	にぶい橙色 7.5YR7/4	底部から口縁部は上方に短く伸びる。口縁部内外面は回転ナデ、外底面には回転糸切り痕。	

Tab.76 遺物観察表12

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
190-1705	-2層	土師器杯	12	3.1	6	浅黄橙色 10YR8/3	底部から口縁部は外方に伸びる。口縁部内外面は回転ナデ、外底面には回転系切り痕。	
" -1706	"	土師器杯	13.4	2.9	8	にぶい黄橙色 10YR5/4	底部から口縁部は外上方に直線的に伸びる。	
" -1707	"	土師器皿	9.3	2.2	5.4	にぶい黄橙色 10YR7/2	底部から口縁部は外方に短く伸びる。口縁部内外面はナデ、外底面には回転系切り痕。器壁が厚い。	
" -1708	"	土師器杯	11.3	4.1	7	にぶい橙色 7.5YR7/4	底部から口縁部は上方に直線的に伸び、端部は丸くおさめる。口縁部内外面は回転ナデ。	
" -1709	"	土師器杯	12	3.8	6.5	浅黄橙色 10YR8/4	底部から口縁部は外方に伸びる。	
" -1710	"	土師器杯	14.2	2.3	8.6	にぶい橙色 7.5YR7/6	底部から口縁部は外方に伸びる。	
" -1711	"	土師器杯	15.4	3.7	8.4	にぶい黄橙色 10YR6/3	底部から口縁部は外上方に伸び、端部は丸くおさめる。口縁部内外面は回転ナデ。	
" -1712	"	土師器杯	13.4	3.85	7.2	浅黄橙色 7.5YR8/4	底部から口縁部は外上方に直線的に伸びる。内外面ともロク口痕が顕著。外底面には回転系切り痕。	
" -1713	"	土師器杯	—	-2.5	7.1	にぶい黄橙色 10YR7/3	底部は円盤状高台を呈する。内底面は中心部にかけて落ち込む。	
" -1714	"	土師器椀	12	-2.8	—	灰白色2.5Y8/2	口縁部のみ残存し、端部は外反する。	
" -1715	"	土師器椀	—	-1.7	6.4	浅黄橙色 10YR8/4	底部外面には断面方形の高台を貼付、接合面は強くナデる。	
" -1716	"	土師器椀	—	-2.6	6.6	にぶい橙色 7.5YR7/4	底部外面には断面三角形の高台を貼付する。	
" -1717	"	瓦器皿	7.8	1	6.1	灰色N5/	底部から口縁部は外方に短く伸びる。口縁部内外面はナデ、外底面には指頭圧痕。	和泉型
" -1718	"	瓦器皿	8.5	1.1	6.8	灰色N5/	底部から口縁部は外上方に短く伸びる。口縁部内外面はナデ、外底面には指頭圧痕。	和泉型
" -1719	"	瓦器皿	7.9	1.1	5.4	灰色N4/	底部から口縁部はやや内湾して伸びる。口縁部内外面はナデ、外底面は指頭圧痕。	和泉型
" -1720	"	瓦器皿	8.3	1.6	—	灰色N5/	底部から口縁部は内湾して伸びる。口縁部内外面はナデ、外底面は指頭圧痕が顕著。	和泉型
" -1721	"	瓦器皿	7.8	1.5	—	灰色5Y6/1	底部から口縁部は外上方に短く伸びる。口縁部内外面はナデ、外底面は指頭圧痕。	和泉型
" -1722	"	瓦器皿	9	1.5	—	灰色N5/	底部から口縁部は内湾して伸び、外底面は指頭圧痕。	和泉型
" -1723	"	瓦器皿	8.8	1.6	—	灰白色2.5Y7/1	底部から口縁部は内湾して伸びる。口縁部内外面はナデ、外底面には指頭圧痕。炭素吸着はみられない。	
" -1724	"	瓦器皿	13.6	1.2	—	灰色N4/	底部から口縁部は外方に伸びる。口縁部内外面にはナデ、内底面にはヘラミガキがなされる。	和泉型
" -1725	"	瓦器皿	8	1.6	—	灰白色7.5Y6/1	底部から口縁部は内湾して伸びる。口縁部内外面はナデ、外底面には指頭圧痕。	
" -1726	"	瓦器椀	17.7	3.9	5.4	灰色N4/	外底面には断面三角形の高台貼付、口縁部は外上方に内湾して伸びる、口縁部はナデにより段をなす。体部外面には指頭圧痕、内面にはヘラミガキ。	和泉型
" -1727	"	瓦器椀	15.4	4.3	4	灰色7.5Y4/1	外底面には断面台形の高台貼付、口縁部は外上方に内湾し伸びる、口縁部はナデにより段をなす。体部外面には指頭圧痕、内面にはヘラミガキ。	和泉型
" -1728	"	瓦器椀	15.2	5	5	灰色N5/	外底面には断面台形の高台貼付、口縁部は外上方に内湾し伸びる、口縁部はナデにより段をなす。体部外面には指頭圧痕、内面にはヘラミガキ。	和泉型
" -1729	"	瓦器椀	16	4.8	6	灰色10Y4/1	外底面には断面三角形の高台貼付、口縁部は外上方に内湾し伸びる、口縁部はナデにより段をなし、端部は外反する。体部外面には指頭圧痕、内面にはヘラミガキ。	和泉型

Tab.77 遺物観察表13

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
190-1730	-2層	瓦器椀	—	-1.5	3.4	灰白色2.5Y7/1	外底面には断面台形の高台貼付、内面には螺旋状のヘラミガキ。	和泉型
" -1731	"	瓦器椀	15.5	4.2	4.4	灰黄色2.5Y6/2	外底面には断面三角形の高台貼付、口縁部は外上方に内湾し伸びる、口縁部はナデにより段をなす。体部外面には指頭圧痕、内面にはヘラミガキ。	和泉型
" -1732	"	瓦器椀	15.4	4.2	3.8	にぶい黄色 2.5Y6/3	外底面には断面三角形の微隆起状の高台を貼付。内底面にはヘラミガキ。	
" -1733	"	瓦器椀	11.2	-3.6	—	にぶい黄褐色 10YR7/4	口縁部内面には一条の浅い沈線、ヘラミガキ。	
" -1734	"	瓦器椀	15	3.6	4.2	灰色5Y5/1	外底部には断面三角形の高台を貼付、口縁部は外方へ開く。口縁部内外面はナデ、体部外面には指頭圧痕。	
" -1735	"	瓦器椀	14	3	2.5	灰色N6/	口縁部は体部途中より屈曲して上方に伸びる。口縁部内外面はナデ、外面には指頭圧痕。内面にはヘラミガキ。	
" -1736	"	瓦器椀	13.4	-3.4		灰色N4/	口縁部内外面はナデ、外面は指頭圧痕。内面にはヘラミガキ。	和泉型
" -1737	"	瓦器椀	12.8	2.5	3.6	灰白色2.5Y7/1	外底面には粘土紐状の高台を貼付、口縁部は外方へ伸びる。外面には指頭圧痕。	
" -1738	"	瓦器椀	14.9	-3.8	—	暗灰色N3/	内面にはヘラミガキがなされる。	和泉型
" -1739	"	青磁碗	13	-4	—	灰オリーブ色 7.5Y6/2	口縁部は内湾する。内面には櫛描文が施される。	同安窯系
" -1740	"	瓦器椀	18	-4.1	—	灰白色2.5Y7/1	口縁部は内湾する。外面には指頭圧痕、内面にはヘラミガキ。焼成は須恵質である。	
" -1741	"	須恵器椀	15.1	4.6	5.7	灰色7.5Y4/1	底部は円盤状高台を呈し、口縁部は内湾して伸びる。焼成は瓦質に近い。	
" -1742	-2下層	青白磁	—	-2.5	—	明緑灰色5G7/	梅瓶の体部片である。	
" -1743	-2層	青磁皿	—	-0.9	4.0	灰オリーブ色 5Y6/2	底部は平底で露胎、内面には櫛目文が施される。	同安窯系
" -1744	"	青磁皿	12	-2	—	灰オリーブ色 5Y6/2	口縁部は屈曲し外方に伸びる。	同安窯系
" -1745	"	青磁碗	—	-3.4	—	灰オリーブ色 5Y5/3	口縁部内面には劃花文が施される。	龍泉窯系
191-1746	"	青磁碗	15.8	-3.5	—	緑灰色 7.5GY6/1	口縁部は外方に直線的に伸びる。外面には鎬蓮弁文が施される。	龍泉窯系
" -1747	"	青磁碗	18.4	-5	—	オリーブ灰色 10Y5/2	口縁端部はやや外反する。外面には鎬蓮弁文が施される。	龍泉窯系
" -1748	"	青磁碗	—	-3.5	—	オリーブ灰色 10Y6/2	外面には鎬蓮弁文が施される。	龍泉窯系
" -1749	"	青磁碗	18	-4.8	—	灰オリーブ色 5Y5/2	口縁部は内湾する。外面には蓮弁文が施される。	龍泉窯系
" -1750	"	青磁碗	17.5	-4.5	—	オリーブ灰色10 Y6/2	外面には蓮弁文が施される。釉には細かい貫入が入る。	龍泉窯系
" -1751	"	青磁碗	—	-2.5	—	灰白色5Y7/2	内面には櫛目文が施される。	同安窯系
" -1752	"	青磁碗	16.4	-3.6	—	灰オリーブ色 7.5Y4/1	内面には劃花文が施される。	龍泉窯系
" -1753	-2上層	青磁碗	16	-3.9	—	灰オリーブ色 5Y6/2	口縁部は段をなし、屈曲する。端部は方形状を呈する。	
" -1754	-2層	青磁碗	—	-4.5	—	灰オリーブ色 5Y6/2	内面には劃花文が施される。	龍泉窯系
" -1755	"	青磁碗	19.9	-4.3	—	オリーブ灰色 10Y6/2	口縁部は外反する。	

Tab.78 遺物観察表14

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
191-1756	-2層	青磁碗	—	-5	—	灰オリーブ色 5Y6/3	内面には櫛描き、外面には縦状の櫛目文が施される。釉には細かい貫入が入る。	同安窯系
" -1757	"	青磁碗	—	-3.9	5.5	オリーブ灰色 10Y5/2	外底は断面方形の削り出し高台、畳付は斜位に削る。内面見込みには劃花文が施される。	龍泉窯系
" -1758	"	青磁碗	—	-3.7	5.5	灰オリーブ色 7.5Y6/2	外底は断面方形の削り出し高台、畳付は斜位に削る。高台途中まで施釉。内面見込みには劃花文が施される。	龍泉窯系
" -1759	"	青磁碗	—	-3.1	5.8	灰オリーブ色 7.5Y5/2	外底は断面方形の削り出し高台、畳付は斜位に削る。高台途中まで施釉。内面見込みには劃花文が施される。	龍泉窯系
" -1760	-2上層	青磁皿	13.8	3.2	6	灰オリーブ色 7.5Y6/2	外底部には断面方形の高台をなし、口縁部は外方に開き伸びる、口縁端部には袈裟が入り菱花文をなす。内面には草花文が施される。	
" -1761	"	青磁碗	—	-2.3	5.7	灰オリーブ色 7.5Y5/2	外底は断面方形の削り出し高台、畳付は斜位に削る。高台途中まで施釉。内面見込みには印花文が施される。	
" -1762	-2層	青磁碗	—	-4.2	4.7	灰オリーブ色 7.5Y5/2	外底部には断面三角形の高台をなし、外面には蓮弁文が施される。釉は厚みをもつ。	
" -1763	"	青磁壺	9.5	-5.3	—	灰オリーブ色 5Y5/3	口縁端部は玉縁状をなし、口縁下には把手が貼付される。四耳壺と考えられる。	
192-1764	"	白磁碗	17.5	-5.1	—	灰白色5Y7/2	口縁部は玉縁状をなし、口縁部途中まで施釉。	白磁 類
" -1765	-2下層	白磁碗	16.2	-4.5	—	灰白色5Y7/2	口縁部は玉縁状をなし、口縁部途中まで施釉。	白磁 類
" -1766	"	白磁碗	15.8	-3.3	—	灰白色5Y7/1	口縁部は玉縁状をなす。	白磁 類
" -1767	"	白磁碗	14	-3.4	—	灰白色5Y7/2	口縁部は外反する。外面には櫛目状の文様をなす。	白磁 類
" -1768	-2層	白磁碗	—	-2.4	6	灰白色5Y7/2	高台は断面三角形を呈し、見込みには劃花文が施される。高台途中まで施釉。	白磁 類
" -1769	"	白磁碗	14.8	-2.9	—	灰白色5Y7/1	口縁部は外反し、端部は平坦面をなす。	白磁 類
" -1770	"	白磁碗	—	-2.3	6.4	灰黄色2.5Y7/2	外底面には断面方形の高台をなす。	白磁 類
" -1771	"	白磁壺	9	-6.1	—	灰色7.5Y6/1	口縁部は強く外反し、端部は下方に伸びる。内外面とも施釉。釉薬は透明度が高い。	
" -1772	-2上層	瀬戸焼皿	12.6	-2.3	—	浅黄色2.5Y7/3	口縁部はやや外反する。口縁部途中まで施釉。	
" -1773	"	瀬戸焼皿	18	-3.9	—	オリーブ黄色 5Y6/3	口縁部は段をなし、端部は平坦面を呈し、外傾する。内外面はナデ。	
" -1774	"	瀬戸焼	25	-3.3	—	にぶい黄橙色 2.5Y6/3	口縁部は外反し、端部は玉縁状をなす。内面から口縁途中まで施釉。	
" -1775	"	瀬戸焼 卸し皿	—	-1.8	10	淡黄色2.5Y8/3	外底部は回転系切り痕。内面には卸目が施される。	
" -1776	"	瀬戸焼 卸し皿	—	-1	8	浅黄色2.5Y7/3	外底部は回転系切り痕。内面には卸目が施される。	
" -1777	"	須恵器椀	19.6	-3.2	—	灰白色2.5Y7/1	口縁部は平坦面を呈し、外傾する。内外面は回転ナデ。	東播系
" -1778	"	須恵器椀	—	-2.5	6.8	灰白色2.5Y7/1	底部は平底、外底面には系切り痕、内面はナデ。	東播系
" -1779	"	瀬戸美濃	12.4	-5.7	—	黒褐色 7.5YR2/2	口縁部には段をなし、端部は外反する天目茶碗。体部途中まで鉄釉がかかる。	
193-1783	-2層	須恵器 コネ鉢	33.5	-5.1	—	灰白色5Y7/1	口縁部は外上方に広がり、端部は上方に肥厚する。内外面には回転ナデ。	東播系

Tab.79 遺物観察表15

(- 数値は残存値)

Fig- 挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
193-1784	-2層	須恵器 コネ鉢	22.4	-4.7	—	灰色N5/1	端部は外傾し、下方にやや肥厚する。内外面回転ナデ。	東播系
" -1785	"	須恵器 コネ鉢	28.4	-6.8	—	灰色N5/1	端部は外傾し、上下に肥厚させる。内外面は回転ナデ。	東播系
" -1786	"	須恵器 コネ鉢	26.6	-8.2	—	灰色N6/	口縁端部は上方に肥厚させている。内外面はナデ。	東播系
" -1787	"	須恵器 コネ鉢	26.9	-4.5	—	灰白色5Y7/1	端部は上方に肥厚し、外傾している。	東播系
" -1788	"	須恵器 コネ鉢	18.6	-2.9	—	灰黄色2.5Y6/2	口縁部は外傾する。内外面回転ナデ。	東播系
" -1789	"	須恵器鉢	27.6	-4.4	—	灰色N6/1	口縁部下は段をなし、端部は平坦面を呈する。	
" -1790	"	瓦質土器 羽釜	22.3	-3.4	—	オリーブ黒色 5Y3/1	口縁下には断面三角形の鐳が付く。口縁部は内傾して伸び、端部は平坦面を呈する。口縁部内外面ナデ。	
" -1791	"	瓦質土器 羽釜	21.5	-3.7	—	灰色N4/	口縁部下には短い鐳、口縁部は内傾して伸びる。端部は丸くおさめ外面にはケズリ、内面にはナデ。体部内面にはハケ。	
" -1792	-2上層	土師器鍋	27	-4.1	—	にぶい橙色 7.5YR6/4	口縁下には断面三角形の短い鐳、口縁部は内傾し短く伸びる。端部は内傾する。内面にはヘラケズリ、ナデ。	
" -1793	"	土師器鍋	20	-3.7	—	にぶい橙色 5YR7/4	口縁下には断面三角形の短い鐳が付く、口縁部は内傾し短く伸びる。端部は内傾する。内面にはナデと横方向のハケ。外面にはタタキ痕。	
" -1794	-2層	瓦質土器鍋	18.3	-4.5	—	灰色5Y4/1	口縁下には断面方形の鐳が付く、口縁部は内傾して伸びる。内外面はナデ。	
" -1795	"	土師器	24	-5.4	—	褐色7.5YR4/6	口縁部は「く」字状に外反する。端部は平坦面を呈し内面を強くナデる。口縁部内面はヘラ状のナデ。	
" -1796	-2下層	土師器甕	23.1	-4.5	—	黄褐色5YR4/6	口縁部は外方に屈曲し、端部は上方に短く伸びる。内面にはヘラ状のナデ。	
" -1797	"	土師器甕	27.3	-5.2	—	にぶい褐色 7.5YR5/4	口縁部は外方に屈曲し伸びる。頸部内面はナデと指頭圧痕。外面にはハケ。	
" -1798	"	土師器甕	26.6	-4.8	—	にぶい橙色 7.5YR6/4	口縁部は外方に屈曲して伸び、端部は上方に肥厚する。端部外面はナデ、内面はハケ、外面には縦状のハケ。	
" -1801	-2層	瓦質土器鍋	—	-5	—	灰色5Y4/1	三足鍋の脚部分のみ残存する。外面には指頭及びナデ。	
194-1803	-2下層	土師器皿	13.2	1.9	9.4	灰白色2.5Y8/2	底部から口縁部は外方に伸び、端部は外反する。	
" -1804	"	須恵器皿	14	1.9	10	灰白色2.5Y8/2	底部から口縁部は外方に伸びる。口縁部内外面は回転ナデ。	
" -1805	"	須恵器皿	13.2	1.7	10.1	灰色5Y5/1	底部から口縁部は外方に伸び、口縁部内外面は回転ナデ。	
" -1806	"	須恵器杯	12.5	2.9	8.9	灰色N6/	底部は平底、口縁部は外方に伸びる。外底面にはヘラ切り痕。内外面ナデ。	杯A
" -1807	"	須恵器杯	12.1	3.1	8	灰色N5/	底部は平底、口縁部は外方に伸びる。内外面ナデ。	杯A
" -1808	"	須恵器杯	14.4	4	10.5	灰黄色2.5Y7/2	底部は平底、口縁部は外方に直線的に伸びる。外底面にはヘラ切り痕。内外面は回転ナデ。	杯A
" -1809	"	須恵器杯	13.4	4	9.2	灰色N7/	底部は平底、口縁部は外方に伸びる。外底面にはヘラ切り痕。内外面ナデ。	杯A
" -1810	"	須恵器杯	13.6	4.7	9.5	灰色N6/	底部は平底、口縁部は外方に直線的に伸びる。外底面にはヘラ切り痕。内外面は回転ナデ。	杯A
" -1811	"	須恵器杯	11.1	3.8	7.3	灰色10Y5/1	外底部には断面方形の高台をなし、口縁部は内湾して伸びる。口縁部内外面は回転ナデ。	杯B

Tab.80 遺物観察表16

(- 数値は残存値)

Fig-挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	特徴・技法	備考
			口径	器高	底径			
194-1812	-2下層	須恵器杯	—	-2.4	—	にぶい褐色 7.5YR5/3	外底部には断面方形の高台をなす。内外面は回転ナデ。	杯B
" -1813	"	須恵器杯	—	-1.9	—	灰色N6/	外底部には断面台形状の高台をなす。	杯B
" -1814	"	須恵器蓋	18.3	-1.4	—	灰白色5Y7/1	内外面はナデ。	
" -1815	"	須恵器蓋	17.9	-2.2	—	灰黄色 2.5Y7/2	口縁部はやや内湾し、端部は丸くおさめる。内面はナデ。	
" -1816	"	須恵器蓋	—	-1.5	—	灰色N6/	擬宝珠形の摘み。	
" -1817	"	須恵器蓋	18	-1.3	—	灰白色2.5Y8/1	口縁端部のみ下方に伸びる。	
" -1818	"	須恵器蓋	13.1	-1.1	—	灰色5Y5/1	口縁端部は下方に肥厚する。内外面回転ナデ。	
" -1819	"	須恵器壺	10	7.6	8	灰白色N7/1	外底部には断面三角形の高台をなし、体部は内湾し伸びる。口縁部は短く直立する。内外面はナデ。	
" -1820	"	製塩土器	11	-3.4	—	にぶい橙色 7.5Y7/4	内面には布目痕、外面には指頭圧痕。	
" -1821	"	製塩土器	—	-4.5	—	黄灰色 3.5Y6/1	口縁部は内傾して伸びる。内面は布目痕、外面は指頭圧痕。	

Tab.81 遺物観察表17

(- 数値は残存値)

Fig-挿図番号	遺構番号	法量 (cm)				Fig-挿図番号	遺構番号	法量 (cm)			
		全長	全厚	孔径	重量(g)			全長	全厚	孔径	重量(g)
160-1360	SK19	3.15	2.2	0.7	15.4	189-1696	層	4.4	1.2	0.4	4.9
158-1340	SK12	3.05	1.4	0.5	5.6	189-1697	層	3.9	1.1	0.4	4.1
170-1398	SB8	4.15	1.1	0.4	3.6	189-1698	層	4.7	1.3	0.4	6.7
170-1399	SB3	4.9	1.3	0.4	6.49	189-1699	層	4.8	1.5	0.5	9.1
181-1477	P43	3.65	1.45	0.5	7.8	194-1822	-2層	4.6	1.1	0.5	5.3
182-1496	P62	3.5	1.3	0.6	5.1	194-1823	-2層	4.7	1.3	0.5	5.9
182-1497	P58	6.6	1.8	0.7	19.6	194-1824	-2層	5.4	1.2	0.5	7
183-1510	P72	5.4	1.3	0.5	7.8	194-1825	-2層	5.3	1.4	0.4	9.5
183-1516	P76	4.5	1	0.4	5.3	194-1826	-2層	4.7	1.3	0.4	5.9
183-1526	P80	4.1	1.3	0.3	4.9	194-1827	-2層	4.7	1.2	0.4	4.8
184-1557	P84	4.3	1.3	0.5	5.8	194-1828	-2層	5	1.55	0.5	10.7
184-1558	P88	4.3	1.2	0.4	4.6	194-1829	-2層	5	1.9	0.6	17
184-1563	P92	4.25	1.4	0.4	6.4	194-1830	-2層	5	1.7	0.6	11.9
184-1564	P101	6.4	1.9	0.4	19	194-1831	-2層	7.2	4.3	1.6	102
184-1565	P93	6.3	1.4	0.5	7.8	194-1832	-2層	5.6	4.3	1.4	79
185-1589	P110	4.7	1.9	0.4	15.1	194-1833	-2層	6.1	3.2	1	55.2
185-1590	P104	4.1	1.4	0.6	5.7	194-1834	-2層	5	2.9	1.1	45.1
189-1695	層	4.5	1.3	0.5	5.5						

Tab.82 土錘法量表

ピット番号	規模 (cm)			Fig.-挿図番号	礎板法量 (cm)		
	長径	短径	深さ		全長	全幅	全厚
Pホ7	54	45	40	164-1380	21.5	5	1.75
				164-1381	21	7.4	1.8
Pイ5	58	52.5	44	164-1378	33.2	29.9	4.3
P口6	75	68	32	165-1387	33.8	14.3	4.9
Pイ6	65	60	48	164-1383	30	29.3	3.8
Pハ5	72	57	36	164-1379	33.1	30.1	5.4
P口5	61	57	28	165-1389	32.9	13.5	4.5
Pニ7	95	88	24	164-1384	24.7	9.7	1.5
Pニ4	90	70	32	164-1382	34.1	31.1	4.5
P口4	85	63	34	164-1376	33.4	28.2	5.6
Pホ2	69	65	36	164-1375	32.9	27.3	4.1
P口3	80	57	36	165-1390	17	16	2.85
Pイ3	98	53	20	165-1391	20.1	16	2.2
Pニ2	78	63	16	165-1385	29.6	29.1	4.2
Pイ4	67	60	28	165-1386	26.3	27.9	3.2

Tab.83 SB1ピット及び礎板計測表

Fig.-挿図番号	遺構番号	銭種	初鑄年代
163-1373	SB1	皇宋元宝	宝祐元年(1253年)
163-1374	SB1	天禧通宝	天禧年間(1017~1021年)
170-1401	SB9	皇宋元宝	宝祐元年(1253年)
181-1478	P52	紹聖元宝	紹聖元年(1094年)
183-1532	P82	元豊通宝	元豊元年(1078年)
185-1588	P113	元豊通宝	元豊元年(1078年)
194-1836	-2層	皇宋元宝	宝元2年(1039年)
194-1837	-2層	元豊通宝	元豊元年(1078年)

Tab.84 出土古銭表

第5節 近世

(1) -1層上面検出の遺構と遺物

本節では、-1層上面付近で検出した遺構及び近世に属する遺構・遺物を中心に報告する。掘立柱建物は全体プランの確定が困難なものもあり、建物の確定に至らない柱穴も多い。基本層準の項で述べた「境界」以西の状態については、下記の建物群との厳密な併行状態に言及できないが、柱穴

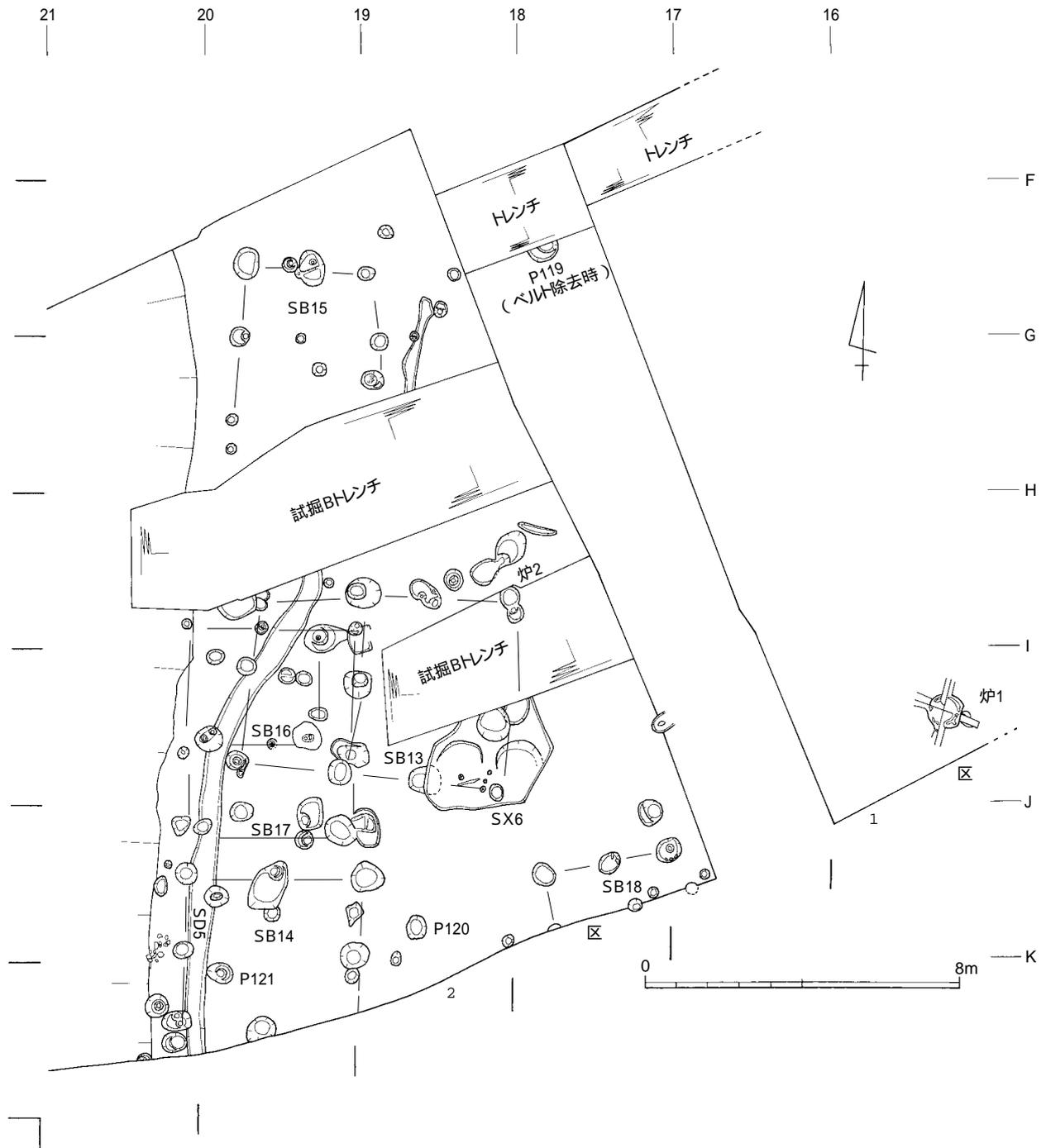


Fig.195 -1層上面検出遺構全体図(近世)

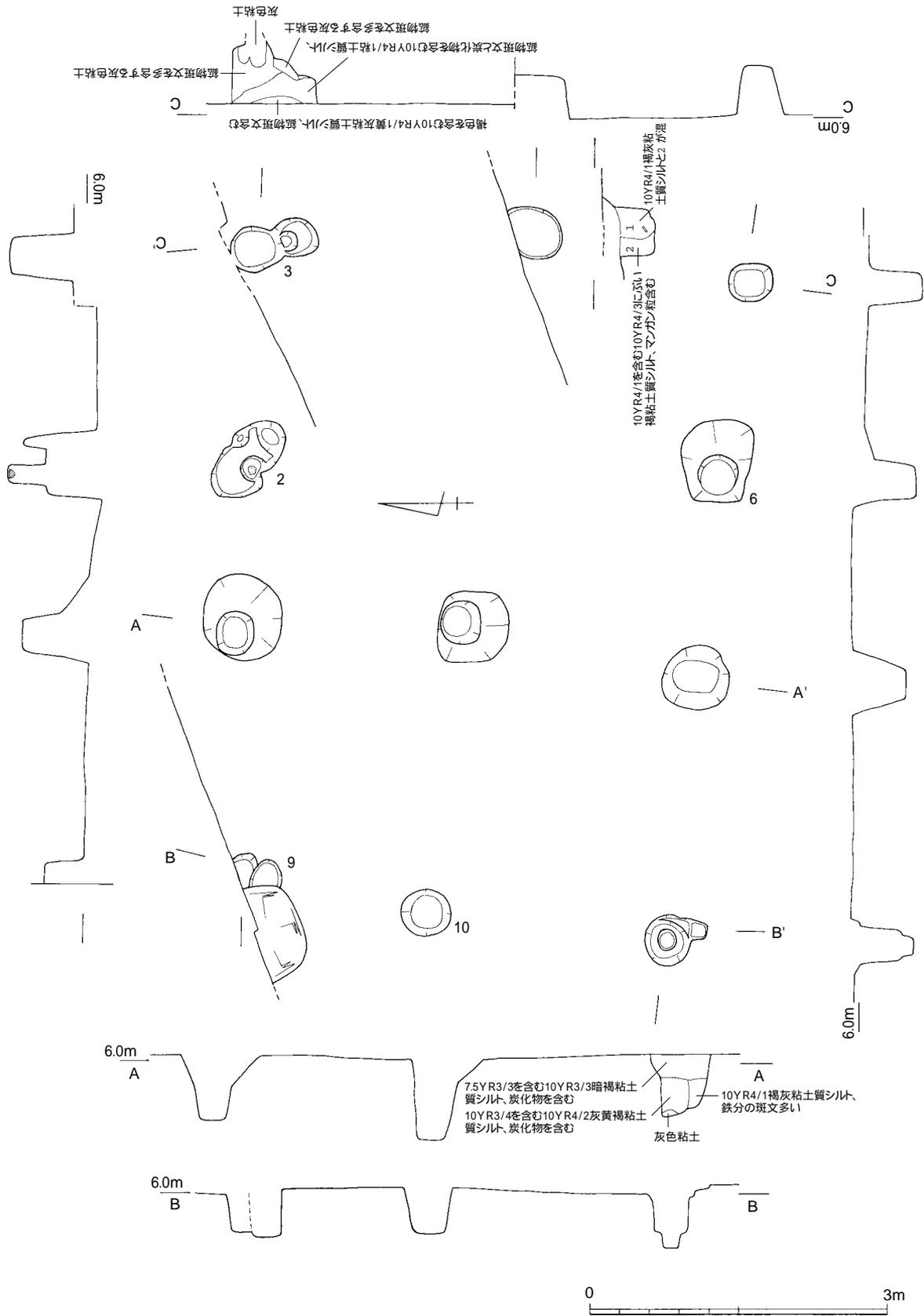


Fig.196 SB13平面・セクション・エレベーション図

等は検出されなかった。また柱穴の配置をみれば、下記の建物や溝跡にみられるような企画方位を原則として営まれたことが想定できる。遺構埋土は大きく二つの群で捉えることができ、群は少なくとも上層が10YR3/3暗褐色に7.5YR3/3を含む粘土質シルトで、炭化物を含むことを原則とする。群は10YR4/1褐灰色粘土質シルトで、鉄分などの集積斑紋を含むことを原則とする。群埋土の遺構が群のそれを切る場合が幾例か観察できた。

掘立柱建物

SB13とSB14で時期比定可能な遺物が出土しており、これらと企画方位や柱穴の埋土および深度において共通性を看取できるSB15～17も、時期的に近接する可能性を考えた。これらの正方位からの偏差は、東へ 0° ～ 6° におさまっている。セクション図を示していない柱穴では、明確な柱痕が認められなかった。

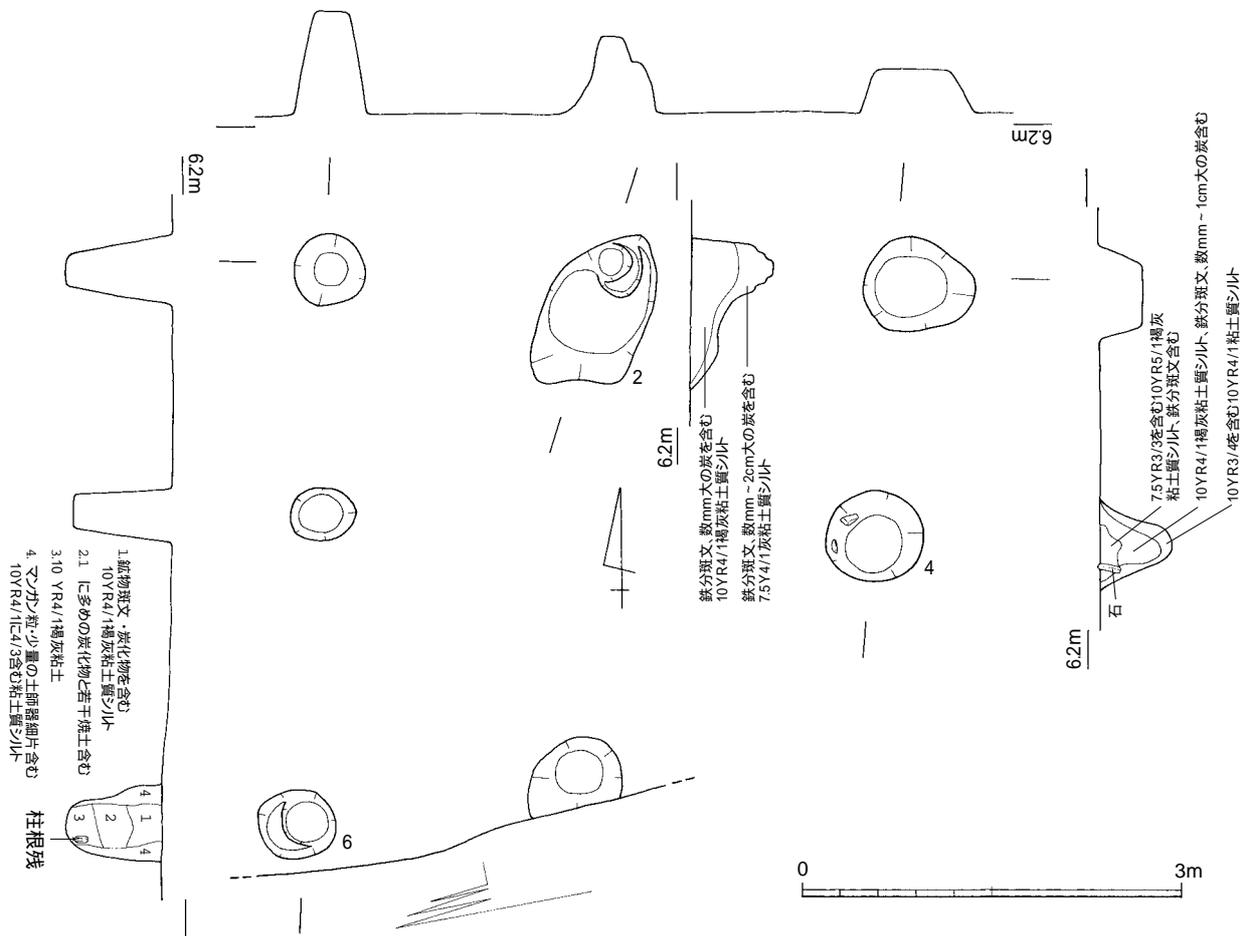


Fig.197 SB14平面・セクション・エレベーション図

SB13(Fig.196)

区中央部に位置する。東側の2×2間分において柱穴のプランや配置がよく揃っており、これを母屋部分、西側の3基の柱穴を付帯的な部分と仮定して報告する。南北4.35mと4.7m、東西6.45mと6.75m、母屋部分の梁間は3.9mと4.05mを測る。柱穴の埋土は 群で、深さは40～90cmを測る。正方位からの偏差は5°を測る。SX6に切られる。上部が開く柱穴が4基認められ、埋土層と併せて考えれば、抜き取られた可能性がある。P10はSD1に切られる。P9は他遺構に切られるが、柱根の残滓とみられる長さ14cmの木片を検出した。出土遺物は、図示したものを含めて唐津灰釉皿1点(1839)、土錘3点、須恵器蓋2点、青磁稜花皿1点(1840)、土師器皿1点、土師質土器細片5点、須恵器細片2点、小鉄器片2点がP2より出土した他、瀬戸天目茶碗(1838)、青磁稜花皿(1847)、柱根残滓(1843)などが出土している。

SB14(Fig.197)

区南端で2×2間分を検出した。南北4.4m、東西4.5mで、柱穴の埋土は 群、深さは36～84cmを測る。正方位からの偏差は3°を測る。P6では径35cmの柱痕が観察でき、幅10cmの木材が遺存していた。P2底面の柱痕は、直径14cmを測った。出土遺物は、P4より瀬戸天目茶碗1点(1844)、鉄滓1点、土師質土器・須恵器・土師器甕細片計6点、その他の柱穴から図示した遺物の他、釘状の不明鉄器、桂化木片1点などが出土している。

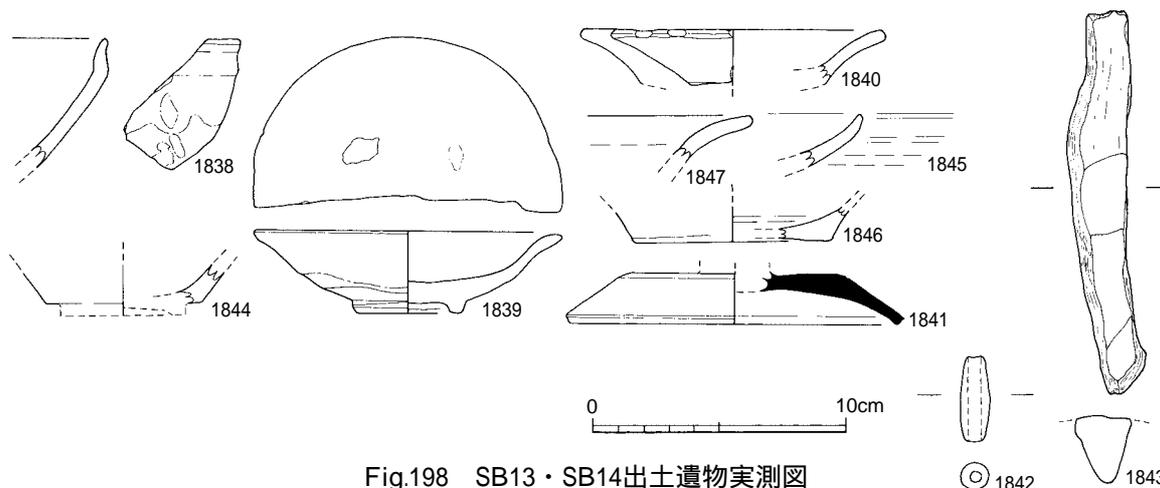


Fig.198 SB13・SB14出土遺物実測図

SB15(Fig.199)

区北部で2×3間分を検出した。柱穴の配置が不規則で、全体のプランに不明確な点がある。検出分は東西3.6m、南北4.9mで、柱穴は深さ35～66cmを測る。正方位からの偏差は6°である。P3、4、7の埋土は 群ではなく、地山に近似する土層で炭化物は少量、或いは含まない。P6は地山類の土層に炭化物と焼土を多含し、他と異質な埋土である。その他の柱穴埋土は 群に属す。P2の柱痕径は18cmを測る。東部には深さ約10cmの溝跡が並行し、関連を持つ可能性がある。出土遺物は、図示したものの他には土師質の破片が数十点出土している。P5のS1は片面が被熱変色しており、鉄砧石であったとみられる。遺物は細片まで含めても、確実に16世紀末以降に比定できるものは存在しないが、本遺構の中軸がSB14のその延長上に位置することや、検出レベル、柱穴の規模・プランからみて、SB13やSB14との関係が深いと考え、本項で報告した。

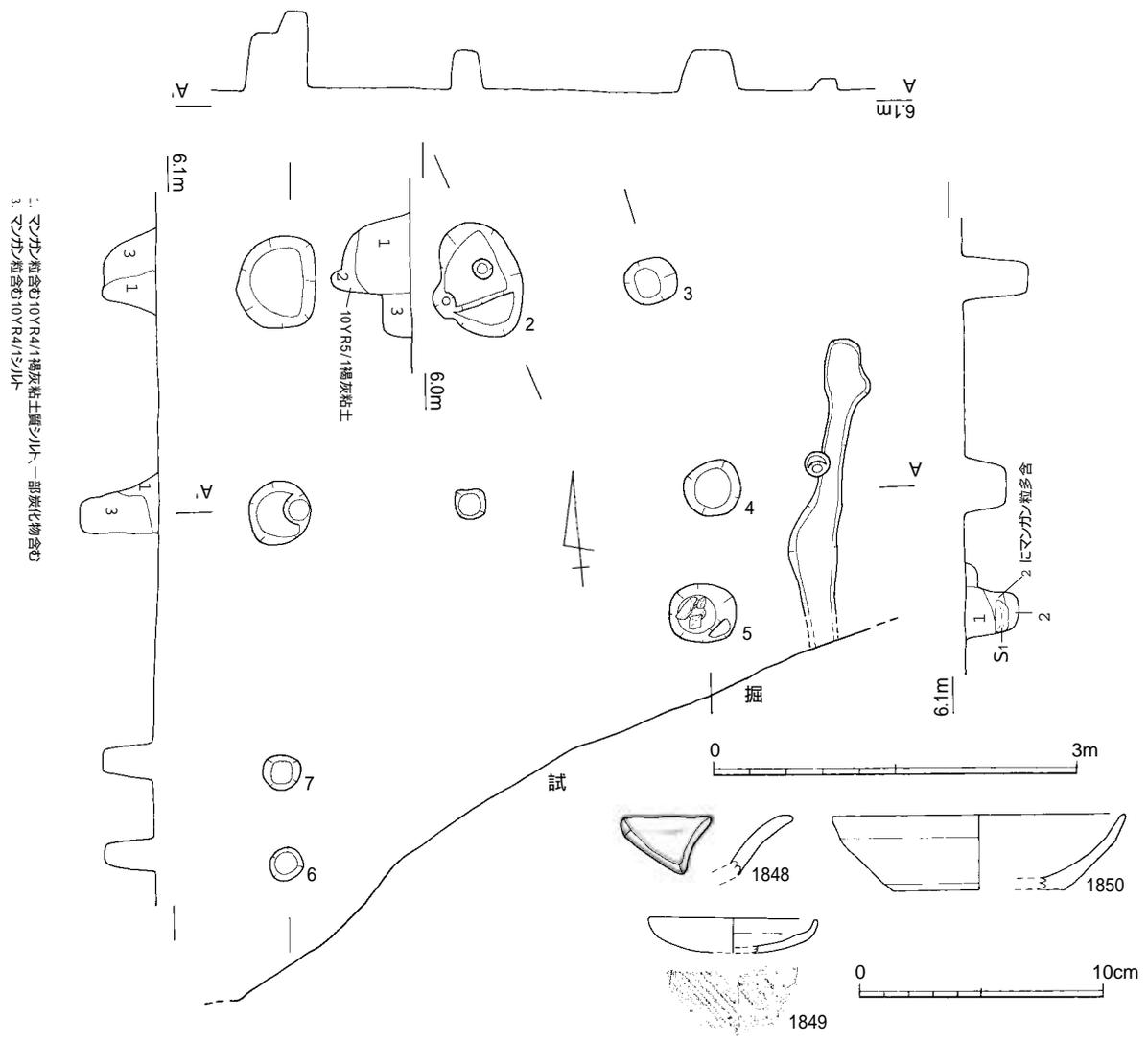


Fig.199 SB15平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図

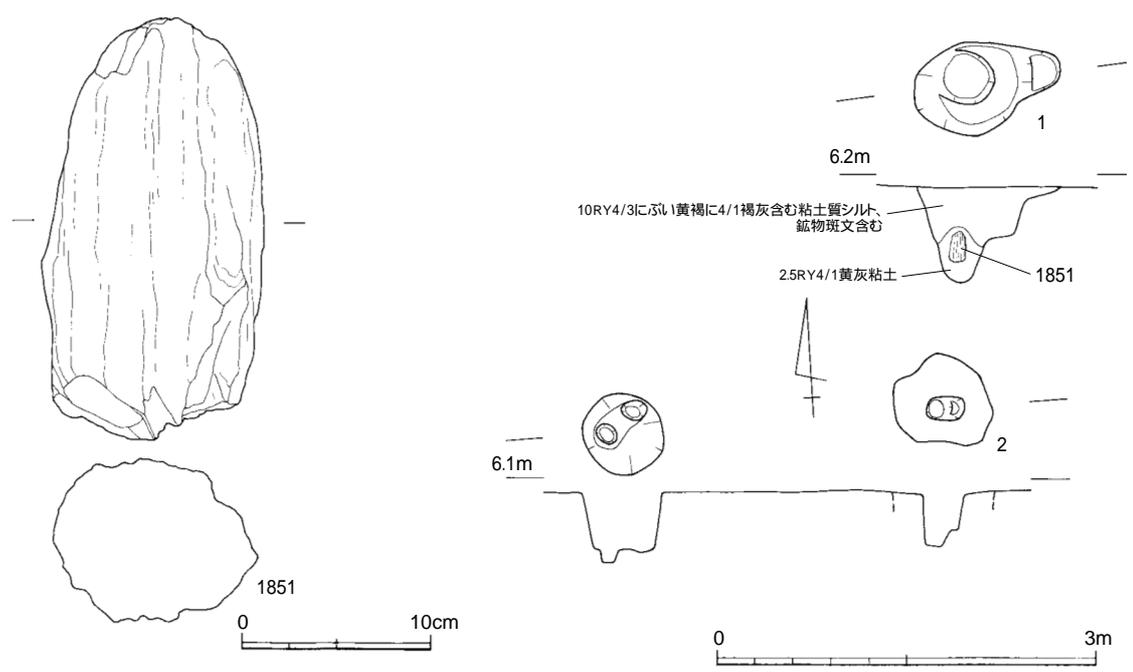


Fig.200 SB16平面・セクション・エレベーション図及び出土柱根実測図

SB16(Fig.200)

区中央部に位置する3基の柱穴群である。P1、P2は共に柱根の一部が遺存しており、埋土も群に属するなど関連性が伺えたので、残る1基とともに報告する。柱間距離は共に2.64mで、深さは45~77cmを測る。P1の下層に遺存していた柱根は直立しており、最大径は実測で12cmを測る。P2は、中央部が柱痕で検出時の外側のプランが掘り形であった可能性があるが、断面で確定できなかった。柱根以外の出土遺物は皆無である。

SB17(Fig.201)

区中央部に想定した2×2間の建物で、東西4.3m、南北5.3mを測る。柱穴は深さ38~87cmを測り、P4、5は埋土群に属することが確認できた。正方位からの偏差は約3°を測る。P5のセクションは、柱の建替えと最後の抜き取りを示唆し、新しい柱痕状部の径は38cmを測る。P4では柱根の

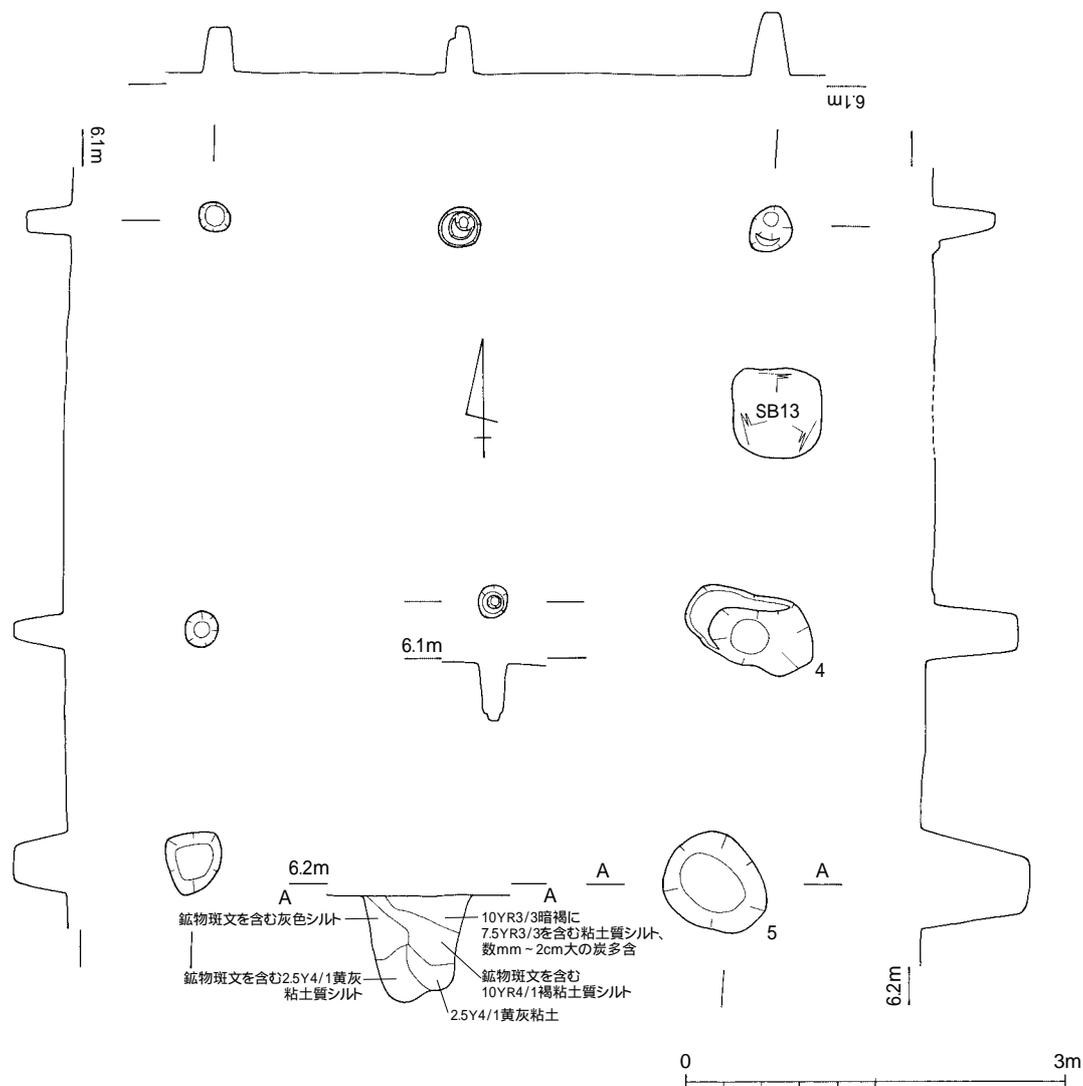


Fig.201 SB17平面・セクション・エレベーション図

一部が残存していた。その他、P4から青磁片1点と鉄滓3点が出土している。

SB18(Fig.202)

区南東隅で2×1間分を検出した。東西3.3m、南北約1.5mを測る。柱穴は深さ38～87cmを測り、P1、3の埋土は 群、P2は 群に属す。P3底の柱痕径は19cmを測る。本遺構の正方位からの偏差は西へ11°を測り、上記の建物群とは明らかに異なるが、検出レベルが近似していたので本項で報告する。P2の遺物は全て最下層から出土しており、1852、1853は奈良時代ないし平安初期に属す。他には須恵器杯の底部4点、口縁部1点が出土している。P1、3からは土師質の破片21点、土師器甕片3点、須恵器甕片2点が出土しており、確実に中世以降に下る遺物は抽出できない。本調査区南東部の下層は、古代の遺構・遺物が比較的多い区域である。

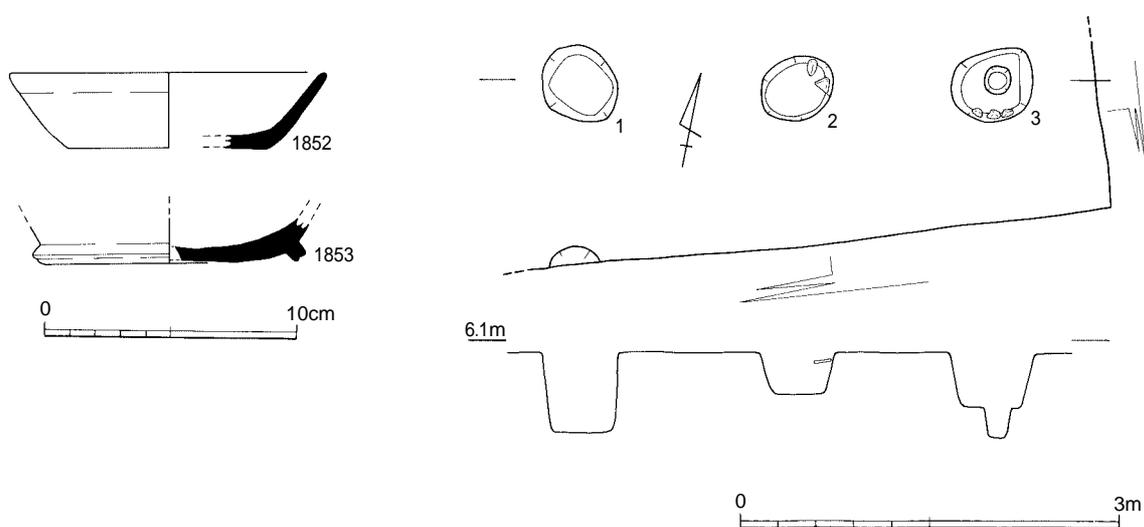


Fig.202 SB18平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

炉跡

炉1(Fig.203)

区西南部で検出し、燃烧部の最大径78cm、深さ22cmを測る。被熱赤変した輪状に検出された燃烧部の検出レベルは、 -6層上面に相当する。東側の床面レベルで、炭化物と焼土のはみ出しがみられる。同部では、被熱部もオーバーハングしつつ開口している(PL33)。開口部を基準にした場合、正方位からの偏差は東へ十数度を測る。周囲1.5m以内で、直径50～70cmのピット2基、1876などの近世陶器や鉄滓を検出したが、いずれも検出面と層位との厳密な関係が明らかでなく、炉跡との関連も不明である。1854は -6層出土の破片と接合している。

炉2(Fig.204)

区東部に位置し、燃烧部の長さ約72cm、深さ18cm、前庭状部分の長さ約100cmを測る。前庭状部分を含めた長軸は、正方位からの偏差41°を測る。試掘トレンチに位置しており、埋土 層の大部分は試掘時に掘削された。検出当時、本体とみられる南西部で焼土と炭化物、 層堆積部を含む遺構プラン全体にオーバーラップする形で炭化物が確認されている。前庭部状の 層堆積部や溝状

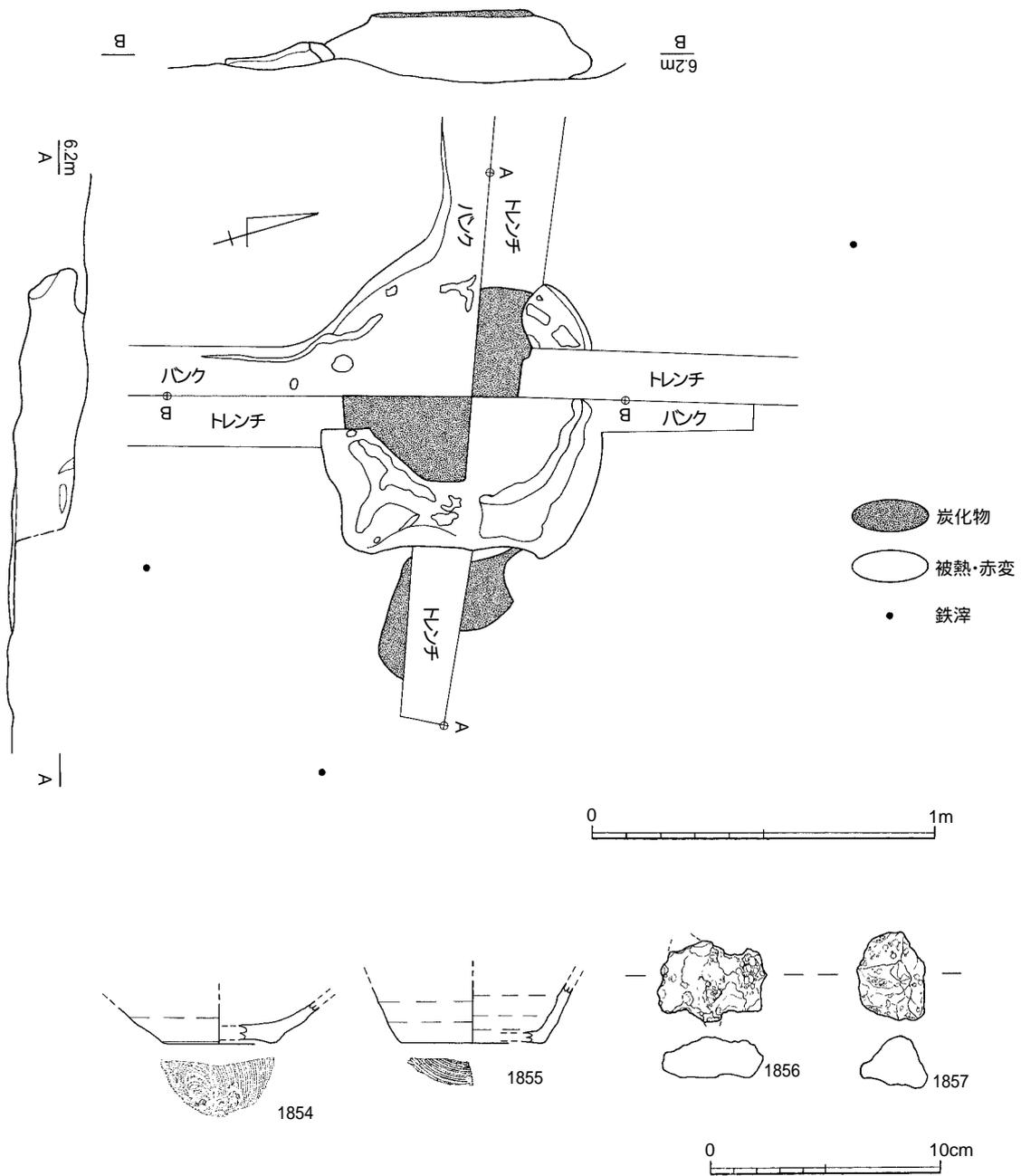


Fig.203 炉1平面・セクション図及び出土遺物実測図

遺構は本調査時に検出・調査した。燃烧部の床や壁面は被熱赤変しており、北東に開口部がある。壁面はオーバーハングしているが、土圧などによる影響も否定できない。北東側に深さ6cmの溝状遺構が近接するが、関係は不明である。試掘時の出土遺物については不明であり、本調査でも、前庭部底より出土した橙色に焼けた粘土塊以外に出土遺物は存在しない。

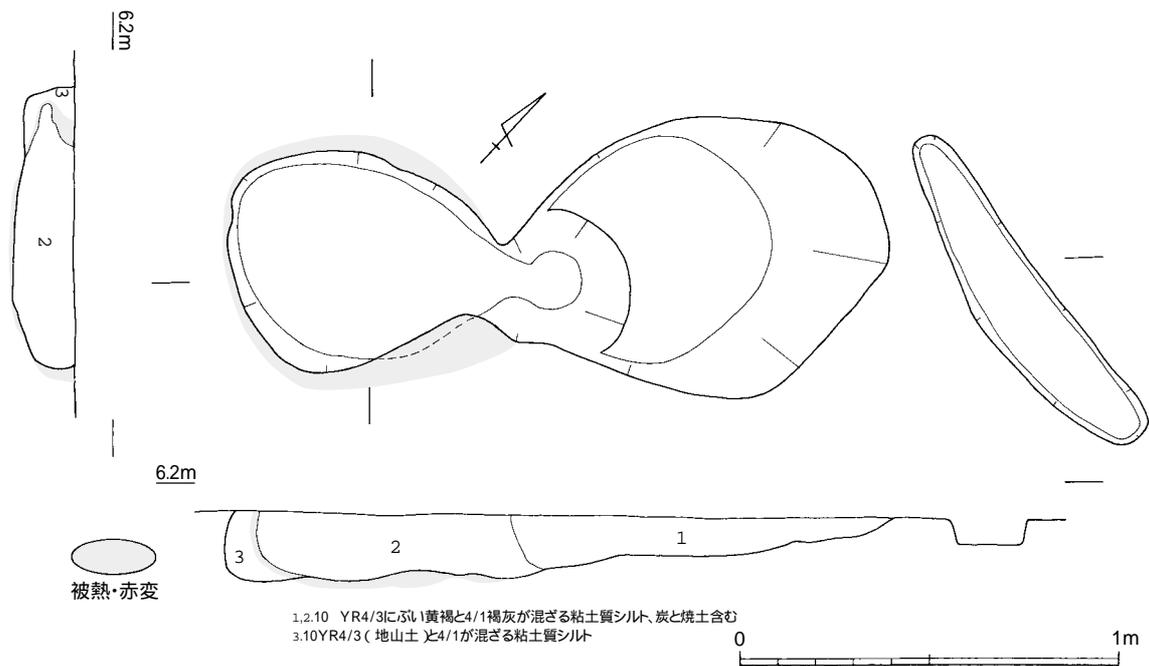


Fig.204 炉2平面・セクション図

溝

SD5 (Fig.8、195)

遺構分布範囲の西限近くを南北に縦走する溝跡で、深さ約16cmを測る。底面の標高は5.96～5.98mとほぼ一定で、土層でも流水の痕跡は観察できなかった。柱穴のいくつかを切ることが確認できた。図示した遺物はいずれも下層からの出土で、これら以外は細片かつ少量である。

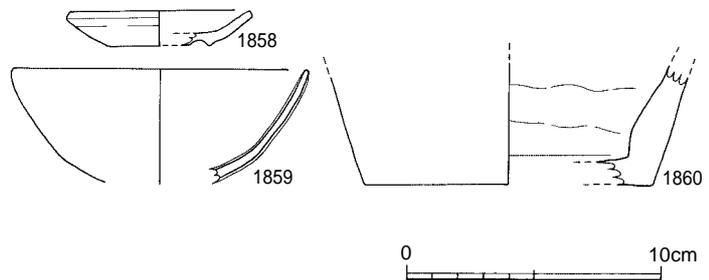


Fig.205 SD5出土遺物実測図

ピット

P119 (Fig.206)

区の境界に設定していたベルト部の北部に位置し、同ベルト除去後に検出したピットである。長径1.52m、深さ64cmを測る。一部はトレンチによって破壊された。埋土中に石や陶器が存在した。図示した遺物の他、内野山窯産かとみられる銅緑釉陶器片などが出土している。

P120 (Fig.206)

区南部で検出した柱穴で、長径63cm、深さ60cmを測る。柱痕径は約18cmで、埋土は群に属す。天目茶碗1864の他、長さ34cm、幅13cmの割れた柱根残片が出土した。

性格不明遺構

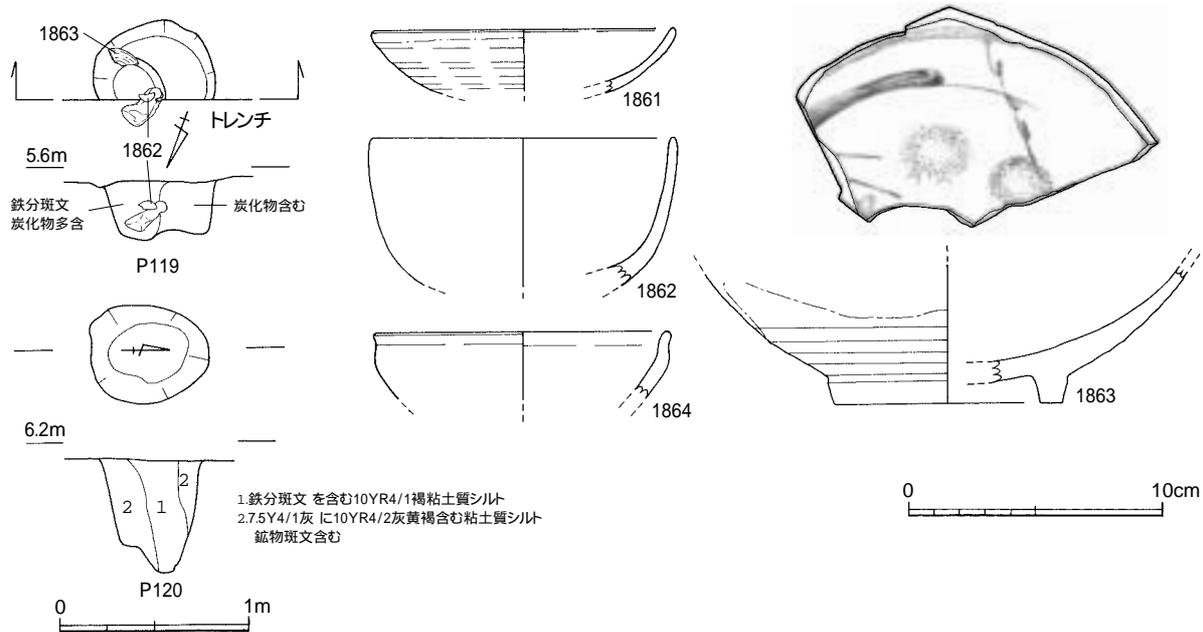


Fig.206 P119、P120平面・セクション図及び出土遺物実測図

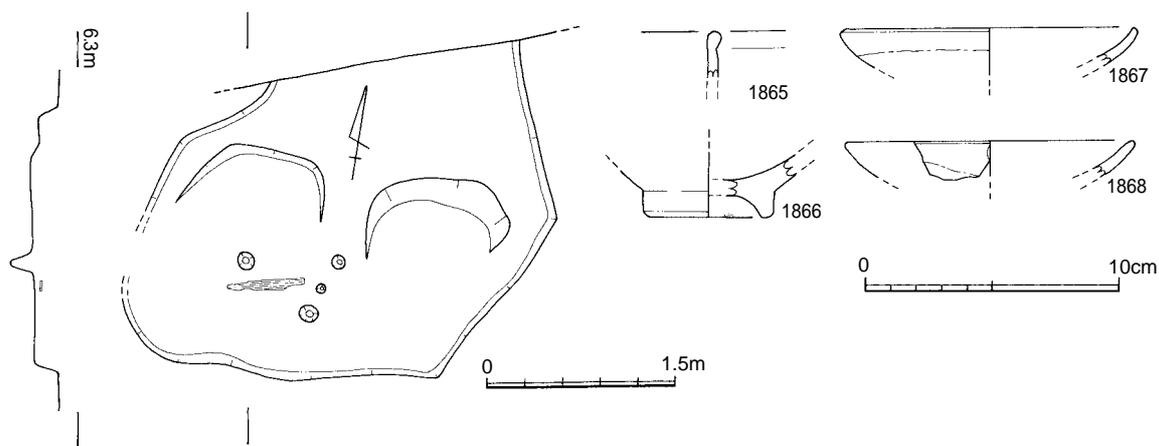


Fig.207 SX6平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

SX6(Fig.207)

区南寄りで検出した。長軸3.45m、深さ20cm前後を測る。埋土は10YR4/1褐灰色粘土質シルトにマンガン粒を含むもので、埋土群に属する。北部は試掘坑で破壊されていた。SB13を切る。底面は2ヶ所の段差など凹凸があり、小ピットも検出した。底面よりやや浮いて検出した木片は、厚さ1~2cmである。出土遺物は図示したもの他、福建省産かとみられる青花や京焼風陶器碗などの細片が出土している。

(2) -2~6層出土の遺物(Fig.208、209)

近世に属する遺物等が出土している。遺物観察表のごとく、17世紀前半頃に属するものがやや目につく。中世以前の遺物も含め、全出土遺物より抽出して図示した。

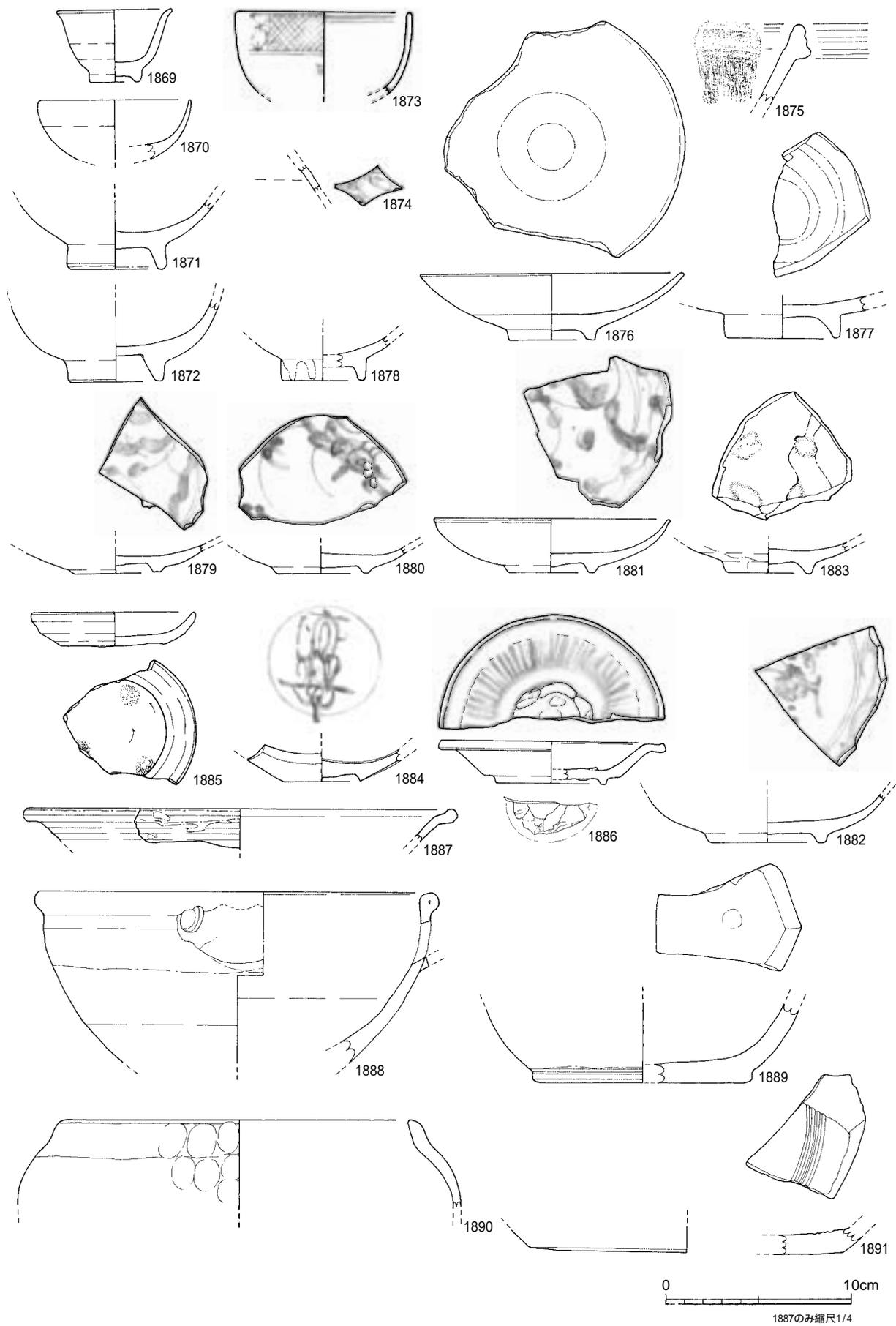


Fig.208 -2、 -6層出土遺物及び採取遺物実測図1

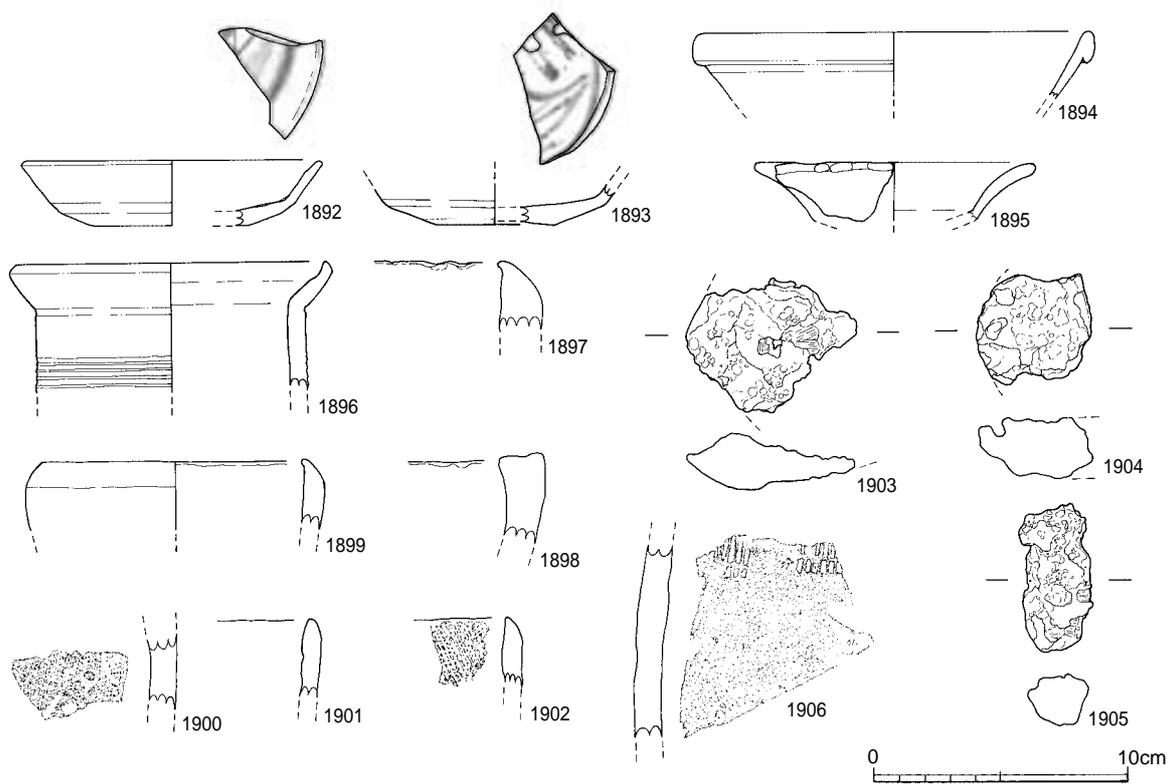


Fig.209 -2、 -6層出土遺物及び採取遺物実測図2

凡例 (Tab.85 ~ 88)

1. 「外」は外面、「内」は内面、「断」は断面、「外底」は底部外面、「内底」は底部内面。
2. 「赤い」は赤色風化礫、「硬」・「軟」は器壁の硬さで焼成を示す。
3. 「精良」・「良」・「粗」は胎土においてベースとなっている粘土の状態。胎土や素地などに関して記載のない場合は原則として、その器種として標準的な状態であることを示す。
4. 「摩」は摩耗、「残」は残存率で、復元周に対する残存比などで示した。

挿図番号	出土位置	種類	器形	法量 (cm)			手法的特徴	釉薬・文様	表面・断面色調	胎土・素地	備考
				口径	器高	底径					
1838	SB13-P6 柱痕	瀬戸	天目碗	—	—	—	外面回転ケズリ	外底露胎	内 7.5YR3/3 暗褐, 外 10YR7/3 にぶい黄橙, 断は口縁のみにぶい橙, 他はにぶい黄橙	細粒, 気孔, 硬	
1839	SB13-P2 上層	唐津	皿	12.2	3.2	4.2	胎土目, 高台削り出し, 高台両側をケズる, 畳付けに糸切り痕	灰釉, 外底無釉, 透明感のないオリブ, 断5Y5/1灰	5Y5/2灰オリブ, 断5Y5/1灰	砂粒, 黒粒, 硬	17世紀初
1840	SB13-P2	青磁	稜花皿	11.8	—	—			5Y5/2灰オリブ, 断5Y5/1灰	長石細粒, 気孔	
1841	"	須恵器	蓋	—	—	13.0	内面は丁寧な多方向ナデ	外全面自然釉	内2.5Y7/1灰白, 外5Y5/2灰オリブ	精良, 黒粒, 密, 硬	
1842	"		管状土錘	長3.4	幅1.2	重3.2g			2.5YR5/6 明赤褐	良, 赤レキ, 気孔, 軟	
1843	SB13-P3	柱根		長15	幅2.1		切削痕あり				柱根残滓か
1844	SB14-P4	瀬戸	天目碗	—	—	—	外面下位回転ケズリ	外底露胎	7.5YR4/4褐, 断2.5Y8/4淡黄	2mm大までの角粒, 気孔, 硬	
1845	SB14-P2	白磁	皿	8.4	—	—		内外ごく薄い透明釉	2.5Y8/2灰白	精良, 硬	
1846	SB14-P6	土師質土器	杯	—	—	6.6				良, 細粒, 赤レキ, 火山ガラス	摩
1847	SB13-P10	青磁	稜花皿	—	—	—		光沢感のある透明釉	5Y5/ 灰オリブ, 断7/1灰白	良, 気孔, 硬	
1848	SB15-P5 層	"	"	—	—	—		内面劃花文	2.5GY5/1オリブ灰, 断N6/6灰	微細粒	
1849	SB15-P2 柱痕底	土師質土器	小皿	7.0	1.4	—	内底ナデ, 外底平行圧痕		5YR7/4 にぶい橙	精良, 赤レキ, 軟	残1/2
1850	"	"	杯	12.0	3.1	7.2	内底回転調整痕, 外底回転切離痕		10YR8/3浅黄橙	赤レキ, 軟	摩著, 残2/3
1851	SB16-P1	柱根		長22.1	幅11.7	厚8.6	下端面に切削面残る				
1852	SB18-P2 底	須恵器	杯A	14.6	3.0	10.0			10YR7/4にぶい黄橙, 底部は酸化色	砂粒含, 気孔, 軟	摩著, 残1/9
1853	"	"	杯B	—	—	10.0	高台端面やや凹, 内底断続ナデ		2.5Y7/1灰白	外底やや軟	残1/9
1854	炉1	土師質土器		—	—	5.0	内外ミズビキ様痕跡, 糸切り		5YR6/6橙, 断10Y5/1灰	精良, 密, 硬	残1/3, -6層出土破片と接合
1855	"	"	杯	—	—	6.2	糸切り		5YR6/6橙	精良, 密	残1/9
1856	"	鉄滓		長3.6	幅4.3	厚1.8					重みあり, 重量36.0g
1857	"	"		長3.8	幅3.0	厚2.3					重量32.0g
1858	SD5下層	土師質土器	小皿	7.0	1.4	4.0	糸切りとみられる		5YR7/6橙	精良, 密, 硬	

Tab.85 遺物観察表 A

挿図 番号	出土位置	種類	器形	法量 (cm)			手法的特徴	釉薬・文様	表面・断面色調	胎土・素地	備考
				口径	器高	底径					
1859	SD5下層	染付	碗	11.8	—	—		釉厚0.9mm前後, 小気泡を多含す るねばりのある 釉	10Y7/1灰白,断 N8/灰白	精良,密,硬	16世紀末~ 17世紀初
1860	"	古瀬戸	瓶子	—	—	6.4	内底回転ケズリ, その後上方を断 続ケズリ	外面は底部まで 施釉,透明感の ある薄緑釉,内 面は無釉	7.5Y7/3浅黄,断 2.5Y8/1灰白	粗,長石細粒・ 黒粒多,気孔, 硬	
1861	P119上層	陶器	皿	12.0	—	—		内面から口縁端 部外面に銅緑釉		良,微気孔,硬	内野山窯
1862	"	"	碗	12.0	—	—		細貫入	2.5Y7/3浅黄	気孔,硬	
1863	"	"	鉢	—	—	12.0	外底回転ケズリ, 内底砂目	内面は白色の化 粧がけの上に褐 釉による文様, 外面下位無釉	内2.5Y8/1灰白, 施釉部10YR4/3 褐,断7.5YR4/ 3褐	若干の砂粒, 硬	唐津
1864	P120上層	瀬戸	天目碗	11.6	—	—			7.5YR3/4暗褐, 断10YR7/3にぶ い黄橙	0.7mm大の粒, やや粗硬	残 1/10, 大 窯4期
1865	SX6下層	陶器		—	—	—		藁灰釉	10Y7/1灰白,断2. 5Y6/2灰黄	若干の気孔, 硬	肥前系
1866	"	"	碗	—	—	4.8		全面僅かに緑が かった透明釉, 細貫入	内2.5Y7/2灰黄, 外5Y8/2灰白	気孔多し	
1867	"	"	皿	11.5	—	—		光沢のある灰釉, 外面は口縁部以 外無釉	5Y4/3暗オリ ブ,断2.5Y6/3に ぶい黄	若干の砂粒, 硬	残 1/14, 肥 前系
1868	"	"	"	10.4	—	—		外面は口縁部以 外無釉	7.5Y5/2灰オリ ブ,断2.5Y6/3に ぶい黄	黒粒・長石微 粒	残1/14
1869	-6層	白磁	小杯	6.2	3.9	2.8	削り高台	畳付のみ釉剥ぎ	N8/灰白		肥前系
1870	-2層	"		8.2	—	—			N8/灰白	黒微粒,若干 気孔	
1871	区中央 採取	陶器	呉器 手風	—	—	5.2		やや黄色がかった 透明釉,細貫入, 畳付のみ釉剥ぎ	2.5Y8/3淡黄,断 2.5Y8/2灰白	粗,1.1mm大ま での長石粒	
1872	"	"	"	—	—	5.3		光沢のある透明 釉,貫入,畳付の み釉剥ぎ	2.5Y7/4浅黄,断 2.5Y7/3浅黄	0.5mm大の赤 レキ他,多気 孔	
1873	-2下層	染付	碗	9.4	—	—		釉は微気泡を含 む,外面格子文	N8/灰白,断N8/ 灰白		
1874	-6層	色絵付		—	—	—		外面透明釉の上 に緑と朱の絵付, 内面無釉		若干の気孔	
1875	層		播鉢	—	—	—			2.5YR4/2灰黄 褐,断5YR5/4 にぶい赤褐	細粒,気孔	
1876	-18 グリッド	陶器	皿	14.2	3.6	4.6	外底回転ケズリ, 削り高台,砂目 なし	内面銅緑釉,内 底蛇の目釉剥ぎ, 外面灰釉・一部 白濁,高台無釉		精良,気孔	体部外面下 位の1ヶ所に 砂付着,内 野山窯,18 世紀前半
1877	-6層	"	"	—	—	6.2	削り高台	内面銅緑釉,内 底蛇の目釉剥ぎ にサビ	5BG4/1暗青灰, N8/灰白	精良	内野山窯
1878	-2上層	青磁		—	—	4.4	削り高台	濁った浅緑色の 釉,高台は無釉, 一部に釉が垂れ る	10GY7/1明緑灰, 断N8/灰白		畳付に細砂 付着,肥前 系,17世紀 前半~中頃
1879	"	染付	皿	—	—	4.8	削り高台	畳付のみ釉剥ぎ, 濁った光沢のな い釉,草花文	2.5GY8/1灰白, 断N8/灰白		17世紀前半
1880	-2下層	"	"	—	—	5.0		畳付のみ釉剥ぎ, 粘りのある白濁 釉,草花文	10Y7/1灰白,断 N8/灰白	密	高台砂付着, 17世紀前半

Tab.86 遺物観察表 B

挿図 番号	出土位置	種類	器形	法量 (cm)			手法的特徴	釉薬・文様	表面・断面色調	胎土・素地	備考
				口径	器高	底径					
1881	-6層	染付	皿	12.8	2.9	4.8	削り高台	畳付のみ釉剥ぎ, 白濁釉, 草花文, 口縁部唐草文	7.5GY8/1 明 緑 灰, 断7.5Y8/1 灰 白	密, 褐色部に 3mm大の長石 粒認む	高台若干の 砂 付着, 17 世紀前半
1882	-2層	"	"	—	—	6.2		畳付のみ釉剥ぎ, 厚さ0.4~0.8mm の白濁釉	5G7/1明緑灰,断 N8/灰白	若干気孔あり	体部断面淡 橙色, 17 世紀前半
1883	包含層・ H-19	陶器		—	—	4.7	削り高台,内底4ヶ所の目アト	外底無釉, 透明 感のないオリ ー プ灰色の釉	2.5Y6/3にぶい 黄,断5Y8/1灰白	精良,密	内野山窯か
1884	-6層	青花	碗	—	—	4.2	削り出しの碁笥 底,内底やや盛 り上がる	一条の界線と文 様,内底僅かに オリ ー プがかっ った厚い釉	5Y6/2灰オリ ー プ,断5Y7/1灰白		外底に砂付 着, 漳州窯 系
1885	"	志野	小皿	8.8	1.9	5.7	外底回転ケズリ, 3ヶ所の目アト	全面に透明釉	2.5Y7/2灰黄,断 2.5Y8/2灰白	気孔	-2d期
1886	"・F-20	瀬戸	折縁皿	12.0	2.25	6.0	内底にトチン痕	体部内面に刻文, 透明感のある灰 釉, 全面施釉, 輪 ドチ内釉剥ぎ	7.5Y6/3オリ ー プ黄,断5Y8/1灰 白	2mm大までの 砂粒	
1887	-6層	陶器		30.6	—	—		内面白化粧土か, 外面にも一部付 着	5YR6/2灰褐,断 5Y6/4にぶい橙	精良,気孔	残1/15
1888	採取	陶器	片口	21.4	—	—	注口の両脇にボ タン状粘土塊貼 付, 体部上位に 穿孔して, 注口 部を貼付	内面と口縁部外 面灰釉	内5Y7/1灰白,外 2.5YR4/2 灰 赤, 断 7.5YR6/3 灰 白	1.5mm大まで の粒	残1/4,17世 紀
1889	-2下層	陶器	鉢か	—	—	12.0	外底ケズリ,内 底胎土目	内面白色釉, 外 面褐釉, 外面の 釉厚薄い, 外底 無釉	内2.5Y8/2灰白, 外10YR4/3にぶ い黄褐,断2.5Y6/ 1黄灰	若干の長石細 粒, やや密	産地不明
1890	採取	瓦質	鍋	19.0	—	—	内面と口縁部ヨ ナデ仕上げ		内5Y5/1灰,外2. 5Y6/1黄灰	細粒, やや軟	残1/13
1891	"	瀬戸	折縁 深皿	—	—	16.7	立上がり付近回 転ケズリ,内底 に糸線	外底にも一部釉	2.5Y7/3浅黄,断 2.5Y7/3浅黄	長石・石英,気 孔,硬	中 -
1892	-6層	青磁	皿	11.8	2.55	6.4		透明感と光沢の ある釉, 外底無 釉, 内底劃花文	7.5Y6/2灰オリ ー プ,断10Y7/1灰	気孔	
1893	採取	"	皿	—	—	4.7	外面下位回転ケ ズリ	透明感のある釉, 内面は使用によ るとみられる摩 耗, 外底釉剥ぎ, 内底劃花文+ 柳 描文	7.5Y5/2灰オリ ー プ,断N8/灰白	気孔	
1894	-6層	白磁	碗	15.6	—	—			5Y7/1灰白,断N 8/灰白		残1/13
1895	"	青磁	稜花皿	—	—	—		釉厚0.4~0.8mm	7.5GY6/1 灰, 断 N7/灰白	長石細粒, 若 干気孔	
1896	古代	土師器	甕C	12.2	—	—	体部外面ヨコハ ケか		10YR8/4浅黄橙	砂岩・赤レキ・ チャートの円 大粒多	全摩,残1/4
1897	採取	焼塩 土器		—	—	—	口縁内面の一部 に細目の布痕残 る		7.5YR7/4 にぶ い橙	12mm大までの 泥岩円粒他多 含, 亀裂多	破片, 復元 口径19cm±
1898	"	"		—	—	—	内面布痕		7.5YR6/4 にぶ い橙	5mm大までの 泥岩円粒他多 含, 亀裂多	
1899	"	"		10.5	—	—			7.5YR6/2灰黄	4mm大までの 泥岩円粒, 気 孔, やや軟, 2次 被熱	摩,残1/17
1900	"	"		—	—	—	内面布痕			3mm大までの 粒, 気孔多, 硬, コンクリート 状	

Tab.87 遺物観察表C

挿図 番号	出土位置	種類	器形	法量 (cm)			手法的特徴	釉薬・文様	表面・断面色調	胎土・素地	備考
				口径	器高	底径					
1901	採取	焼塩 土器		—	—	—	内面圧痕		黄灰	5mm大までの 泥岩円粒他多 含、気孔、外面 コンクリート 状	
1902	"	"		—	—	—	内面布痕		10YR7/4にぶい 橙	砂粒含、やや硬	
1903	-6下層	鉄滓		長6.7	厚2.2	重63.4 g					底面は暗灰 色の層をな し、粒状の 小突起多数
1904	"	"		長4.5	厚2.4	重58.6 g					
1905	"	"		長5.7	厚2.0	重22.7 g					中央で質が 分離、繊維 痕跡含む
1906	-2下層	常滑	甕	—	—	—	外面圧痕		内10YR7/3にぶ い黄橙、外5YR5/ 4にぶい赤褐、断 10YR7/3にぶい 黄褐		13世紀

Tab.88 遺物観察表D

第 章 考察

第1節. 具同中山遺跡群 検出の弥生時代祭祀関連遺構と遺物

はじめに

今回の調査では、弥生時代後期前葉から古墳時代初頭にかけての土器集中地点25箇所を確認している。土器集中は甕を主体とする壺・鉢他の器種から構成され、中でも甕の出土比率は9割近い。これらは、祭祀遺物の不在から当初は祭祀に関わるものとしての位置付けが躊躇されていたが、しかし今回、自然科学分析の方面よりの有力な示唆を得ることができ、又、整理が進むにつれ少量ではあるが祭祀的色彩の強い遺物の出土事例を確認することができた。以下では、これらの成果と各土器集中地点の検出の概要をまとめ弥生時代後期前葉から古墳時代初頭検出の土器集中と祭祀関連遺構についてその諸特徴を述べておきたい。

1. 土器集中地点と遺構検出状況の概要

弥生後期前葉から後葉では土器集中1～19を確認した。土器集中1は6箇所の焼土と複数の炭化物溜まり、土器集中2・3・4には各々1～2箇所の焼土を伴い、共にその周辺への土器廃棄が認められるものである。中でも、土器集中1の分布範囲内には楕円形の形態をもつ浅い皿状の遺構SK4・SX2が存在しており、SK4内からは骨片の他に桃の種、赤彩土器(41)等の祭祀的色彩の強い遺物が出土し、又、SX2においても骨片の出土をみている。さらに、土器集中1内東部の炭化物溜まり周辺からはガラス玉4点(116～119)、西部からは赤彩土器(91)が出土している。なお、これ以降の土器集中地点は一旦小規模なものとなり土器集中5～9・19が確認されている。

弥生時代終末期～古墳時代初頭の段階に至ると、床面に配石を伴う遺構SX4・5、及び土器集中10～18・20～25を検出している。土器集中の分布範囲も 区東部まで広がり、分布域は調査区西方への広がりを見せ始める。土器の出土量も急増し 層からの土器片の出土量はコンテナケースにして60箱余りである。焼土は土器集中1～3・5・7～10・12・15・16・21・23内各々に認められ、土器集中内検出の焼土は33箇所であった。祭祀的要素を伺わせる出土遺物としては、土器集中分布範囲東端において出土した絵画土器(層-751)、ミニチュア土器(層-395・層-607)、用途不明の精製土製品(層-600)、土製品(SX4-439)、手捏土器(SX5-456・土器集中10-472・土器集中15-548)等がある。こうした祭祀的色彩を帯びる一部の遺物を除くと、その他土器は壺5.6%、甕88%、鉢5.2%、高杯0.8%、蓋・甌0.1%という器種組成であり、甕の多さに加えて高杯の僅少さも目立っている。

2. 土器集中分布域の展開

これら土器集中の分布範囲を時期別に示したものがFig.210である。図のように、弥生後期まで調査区東部(調査区)に偏りを見せていた土器集中分布範囲(A・B)は、弥生終末期に至ってさらに西方に広がりをみせ、東西方向に向かう帯状の広大な分布域(C)を示している。又、古墳時代初

頭の遺物を伴うSX5と周辺の土器集中は再び東部にブロック(C)を形成している。さらに後続する古墳時代初頭から前期(D)はやや北側に移り、中期(E)では再び調査区東部(区)に大ブロックを形成し始める。こうした土器集中の分布域は小単位での一括廃棄が数度に亘って行われ形成されたとみられるものと、ブロック全体が同時性の強い状況で廃棄されたとみられるもの等、時期によって形成の在り方は異なると思われるが、廃棄地点の展開状況は掴むことができる。

次に各ブロックに、周辺の現況地形図(Fig.5)を照合させたい。中筋川流域の現況地形図に具同中山遺跡群 調査区位置をあてはめると、当調査地点は中筋川左岸に形成された自然堤防の最も高い地点から北西に向かって緩やかに標高を下げる地点上にかけて立地している。又、特に調査区中央部から北西側の地形の落込みが顕著である点は基本層準の堆積状況からも確認されている。こうした立地条件を反映してか、当調査区では東西方向を基本とする帯状の分布ブロックが形成され、時代毎にブロックが分布位置の移動をみせていったものとみられる。こうした土器廃棄ブロックが自然堤防上の後背湿地側に形成される状況は具同中山遺跡群平成11年度調査⁽¹⁾において報告されており、当調査地点でも同様の結果を示したこととなる。

この様に、本遺跡においては、地形環境を強く意識した一定の分布傾向が弥生時代後期から古墳時代に至るまで継続し、共通性をみせている。こうした点から、その出土遺物の内容や規模が大きく変化するとはいえ、これらはともに一連の祭祀ブロックとして位置付けることが可能だろう。

3. 弥生時代～古墳時代初頭の検出遺構・遺物の特徴

次に、今回の検出状況の中で特に際立った特徴を見せた、焼土と骨片及び、大型礫の廃棄、配石遺構について特記しておきたい。

焼土と焼骨

Tab.4～7に示したように、本調査区における焼土の検出数は、縄文晩期土器の出土をみるⅫ層で1地点、弥生時代前期から中期頃にあたるⅪ～Ⅲ・4層では13地点、弥生後期前葉にあたるⅡ・2層で29地点、後期中葉～後葉のⅠ層で0地点、弥生時代終末期～古墳時代初頭のⅦ層で31地点である。これらのうち良好な状態⁽²⁾で検出できたものについては、焼土上面への人為的な攪拌痕跡を留めるものも多く確認された点も特徴としてあげておきたい。

すでに縄文時代晩期より出現をみせ始めるこれら多数の焼土は、遺物を伴わないことが多く、祭祀行為に結びつくものかどうかの判定は困難であった。しかし、今回、焼土上面及びSK4・SX2・SX4他数地点の焼土より採取できた小骨片について、岡山理科大学富岡直人氏より出土骨片の同定結果と、その動物遺体処理に関する貴重な示唆を頂くことができた。詳細は氏の本編に譲るが、これによって、種同定が可能であった土器集中2内焼土39検出のニホンジカその他、SK4・SX2他各焼土検出の骨片が哺乳綱・鳥綱・硬骨魚綱のものであったとの同定結果を得た。さらに当遺跡出土の動物遺体が500度以上の高温焼成を受けており、食用を目的としたものとは考え難いとの貴重な教示を得ている。こうした結果は本遺跡出土の動物遺体がキャンプ地等の場所で食用に供されることを目的とした性格のものではないことを裏付け、祭祀的性格を帯びたものであることを示唆するものであった。

この他、骨片とともに出土した特徴的な遺物としてSK4出土の45・46、SX2出土の54、土器集中1出土の108～112、-1・2層の281、土器集中21出土の711を挙げることができる。こうした尖頭状の礫器の出土は中筋川流域では初の確認事例であるが、宿毛市芳奈町の芳奈向山遺跡⁽³⁾と宇和島市拝鷹山貝塚⁽⁴⁾では出土事例が報告されており、芳奈向山遺跡では弥生後期の土器を伴う層位からの出土とされている。自然礫を利用し先端部を尖頭状に作り出したこれらの礫器は、281と711を除き、他は何れも骨片出土地点内又は1m以内の近辺からの出土であり、本遺跡においては骨片及び動物遺体処理との関連性を示唆する出土状況である。こうした遺物も、祭祀的行為の過程で使用され、他の遺物群と同様に廃棄されたものと考えられる。

大型礫の配置

土器集中に伴う大型の礫の出土は具同中山遺跡群平成11年度調査SF2他⁽⁵⁾で確認されている。本次調査地点においても、遺跡外から持ち込まれ配置されたとみられる礫の出土が確認されているため、その概略をまとめておきたい。

弥生時代の遺物を伴う土器集中内より大型の盤状礫を検出した事例は、土器集中1・土器集中18である。土器集中1の事例は土器分布域の北東隅より大型礫が出土したもので、大規模な炭化物溜まりと焼土25の直上からの出土である。西側1mの地点では赤彩土器、南西1mの地点では焼土内より骨片が出土しており、土器集中1内でも特に祭祀的色彩の強いスポットといえる。礫は35×25×10cm大の扁平な砂岩礫で、両主面は平坦面をなしている。全面とも特に使用痕跡は認められない。又、土器集中18の事例も、帯状の分布域の東部寄りの位置から径30cm・厚さ10cm大の扁平な砂岩礫が出土するもので、同土器集中内に焼土と炭化物溜まりを伴う。両事例は弥生後期前葉(土器集中1)、古墳時代初頭(土器集中18)のものであるが、同様の扁平礫の出土は古墳時代前期のSF2内にも認められており、本調査地点の場合、こうした祭祀集中地点内への使用痕跡を伴わない(実用的用途ではない。)大型盤状礫の配置は、弥生時代後期から古墳時代前期まで引き継がれた祭祀の一形態として捉えられるものだろう。

配石

土器集中内に複数の礫を廃棄する状況はすでに弥生後期前葉の土器集中4において認めることができる。これは4点の砂岩製叩石とともに10個程の棒状の砂岩礫が東西方向にやや不規則な状態で出土したものである。周辺に複数の小規模な焼土と炭化物溜まりを伴い、又、礫の集中地点の脇では礫が完形の状態で出土している。

その後、弥生時代終末期に至ると、約350個の礫からなる5つの配石ブロックを伴う遺構、SX4が出現する。SX4には床面中央とその周囲を等間隔でめぐる3箇所の焼土が存在し、焼土脇より骨片が検出されている。3箇所の焼土上面には人為的な浅い掘り込みの痕跡が認められており、その上面に礫が半ば埋め込まれるような状況を呈して配置され集石ブロック3・5・6を形成している。SX4で使用された礫はその殆どが径10～15cm前後の扁平な形態のもので、扁平な礫を積み重ねることによってブロックが形成されている。又、ブロック3・5では円形に積み上げたブロック中央に径15cm程の空間を空ける等の状況が認められた。なお、このうち35～40cm前後の長さをもつ大型の棒状の礫9点が出土しており、この棒状礫は積み重ねられることなく各ブロック脇に横倒しに倒れる状

況で出土した。又、ブロック6では棒状礫の先端片側が焼土上面の掘り込みに半ば埋まった状態で横倒しに倒れる状況を呈しており、こうした点から、SX4に礫が持ち込まれる際には、すでに礫の大きさや形態の選択が行われており、小型扁平礫と大型棒状礫は異なる用途として選択されていた可能性がある。なお、SX4の遺構廃棄に際しては底部からみた推定個体数45個体以上の壺・甕・鉢・土製品が一括廃棄されており、完形に近い形状を保って出土した甕2個体以外は何れも破砕された状態で出土している。

一方、SX5は古墳時代初頭の遺物を伴い、先のSX4に後続するものである。750個の礫によって構成され、不整形の複数の小ブロックが中央の焼土を円形に取り巻く様に配置されている。礫の形状は扁平・棒状・不整形と形状・大きさとも様々であり、先のSX4のような規則性は認め難い。又、床面からは炭化物溜まりの他板状の炭化材が検出されている。

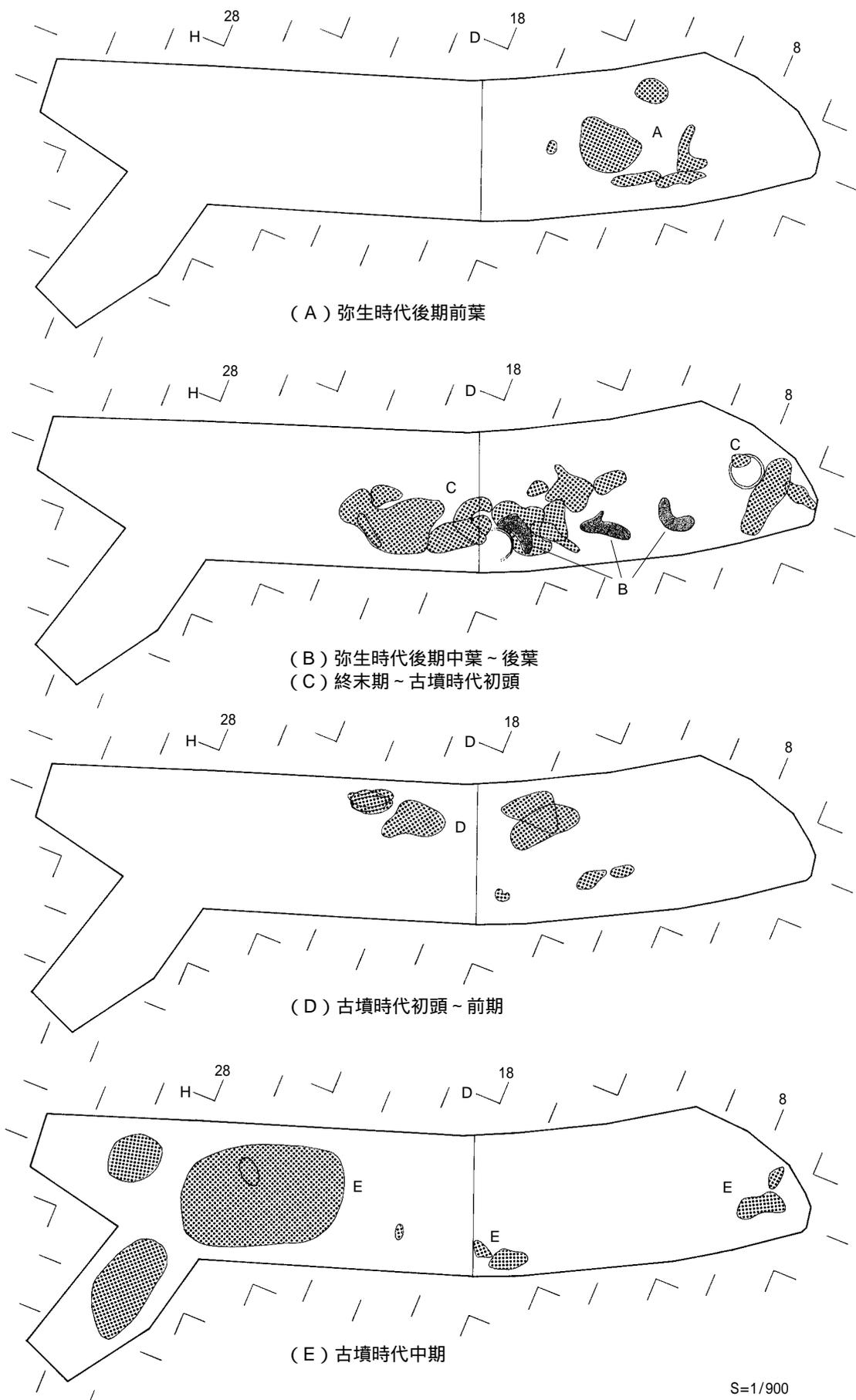
おわりに

以上、焼土を伴う土器集中地点、配石を中心に弥生時代から古墳時代初頭にかけての祭祀関連遺構と遺物の特徴を列記した。ここまで眺めてきたように、本遺跡では古墳時代中期頃に祭祀形態の画期が求められ、それに遡る弥生時代後期前葉から古墳時代初頭にかけての祭祀は、古墳時代中期以降みられるような畿内産須恵器に勾玉・有孔円板・土製模造鏡等の祭祀遺物を共伴する祭祀形態とは一線を画している。すなわち日常的な用途の甕・鉢を主体とした土器の廃棄に焼土・焼骨、配石等を伴うより土着性の強い祭祀の形態であり、具同中山遺跡群 地点では弥生後期前葉頃からその祭祀的性格の顕在化と規模の拡大が認められている。

なお、今回の整理に関しては、岡山理科大学富岡直人氏には自然科学分析の分野より有力な手掛かり、示唆を頂いた。又、現地調査にあたって岡本健児先生には現地に足を運んで頂き、祭祀遺物及び配石遺構に関連しての貴重なご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

[註]

- (1) 広田佳久・畠中宏一『具同中山遺跡群 -2』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター2000年
- (2) 本遺跡検出の焼土のうち土器集中に伴わないものは、重機掘削の際に検出されたものも多く、上面を削平された状態で検出されたものも含まれている。
- (3) 岡本健児・木村剛朗『芳奈遺跡・芳奈向山遺跡』宿毛市教育委員会1978年
- (4) 岡本健児『愛媛県宇和町深ケ川の弥生式土器と宇和島市池拝鷹山貝塚について』『西四国第2号』1968年
- (5) (1)に同じ。



S=1/900

Fig.210 土器集中・SFの分布と変遷

第2節 具同中山遺跡群 出土の弥生時代から古墳時代初頭の土器

はじめに

高知県西部中筋川流域に立地する具同中山遺跡群は、他県に例をみない大規模な古墳時代の河川祭祀跡として知られ、数次にわたる発掘調査によって、祭祀にまつわる数々の考古学的資料と当地域の古墳時代土器編年の基礎となる多くの遺物資料を提供し続けてきた。しかし、その一方で、弥生時代については当該期の一括資料に恵まれず、中筋川流域の弥生土器編年は今だ確立していない。今日まで確認された当該期資料には、西ノ谷遺跡出土の弥生前期末及び古墳時代前期前葉の一括資料があるが、その他は流路及び包含層よりの散在的な出土にとどまっており、弥生時代、特に弥生中期から後期にかけての空白部分を埋める一括資料の出現が待たれていた。

今回の調査では特に弥生時代後期前葉から後葉及び終末期から古墳時代初頭の遺構と土器集中が多数検出されており、コンテナケースにして90箱程の弥生土器片が出土している。Tab.93には各層位より検出された土器集中と遺構出土の遺物及び包含層出土遺物の概要と器種組成を示しているが、ここより本遺跡の器種組成の傾向を求めると、壺5.6%、甕88%、鉢5.2%、高杯0.8%、甌・蓋0.1%、手捏土器・土製品が0.4%と、甕の出土比率が突出する。これらの土器群は祭祀的要素の強い特殊な状況下で一括廃棄されたもので、中には、手捏土器、土製品、赤彩を施した甕・鉢といった祭祀的色彩を帯びた土器群が含まれている他、廃棄に際して意図をもった器種選択が行われた可能性もあることから、これらの数値が必ずしも当時の集落遺跡での土器組成に直接的に結びつくものとは言い難く、その器種組成の内容は一般集落跡のものとは異なる様相を示すことも予想される。こうした点から今回の資料群を取り扱う際にはその資料的限界性・特殊性を踏まえた上での資料解釈と分析・比較が必要であろうと思われるが、しかし、祭祀に際して周辺集落からのあらゆる土器がここに持ち込まれ廃棄されたことは確かであり、本資料は日常的土器・非日常的土器の双方を含めた周辺地域の土器形態が反映されたものになり得ると期待できる。

これら本遺跡出土土器群のもつ資料的性格も考慮しつつ、本項では、最も多くの出土数をみた甕を中心に、まずその形態分類と編年的位置付けを行い、さらにその特性と形態変遷について分析を試みたい。

1. 弥生時代前期末～後期の土器

(1) 形態分類

壺

A類：短頸壺。

短い頸部から口縁部が外反するもの。(55・58)

広口短頸壺。短い頸部から口縁部が短く外反するもの。(56・62・120・131)

B類：長頸壺。

広口長頸壺。(21・174・188・189・380・611・612)

筒状の頸部を呈するもの(26・214・292)

C類：細長頸壺。細く長い頸部に僅かに外方へ広がる口縁をもつもの。(121・170)

D類：直口壺。(348)

D類：無頸壺。(186)出土事例は186の1点のみであるが、同個体は焼成後無頸化された擬口縁の可能性はある。

甕

甕の形態分類を行うにあたっては、各属性のうちもっとも残存率が良好であった口縁部形態に着目し大きくA～E類に分類した。加えて、A・B類の胴部形態を認識できる資料については口径に対する胴部最大径の大小をもって区分した器形プロポジションによって～類に細分類した。

A類：口縁部が大きくカーブを描いて外反するもの。

A-類：張りのある胴部から一旦窄まったのち大きくカーブを描いて外反し口縁部に至るもの。

A-類：張りのない胴部から大きくカーブを描いて外反し口縁部に至るもの。

(A-類：23・49・64・66・122・125・132・160・165・168・615、

A-類：22・194、A類：68・79・137他)

A-類：おおむねA-類に共通するが口縁部が直立気味あるいはごく緩やかに外反するもの。

(71・72)

B類：口縁部が小さなカーブを描いて外反するもの。

B-類：張りのある胴部から一旦窄まったのち口縁部が小さくカーブを描いて外反するもの。

(73・133・160・180)

B-類：張りのない胴部から口縁部が小さくカーブを描いて外反するもの。(30・31)

B類はさらに口縁端部を肥厚させるもの(31)と素口縁(73・133・180)、上胴部施文を有するものと無文のもの等、多様性をみせる。

B類：口縁部がカーブを描いて外反するもの。(338～341・613)

C類：口縁部が「く」字状に外反するもの。(126・350・362・366・614・616他)

さらにC類には内面または外面に稜をなして鋭角的に外反するもの(350・362～366・386・616他)と、内外面に稜をなさず外反するもの(126・368・369・614)がある。

D類：口縁部が直立気味あるいはごく緩やかに外反するもので、頸部外面に粘土帯接合痕を明瞭に残し小さく段をなすもの。(337)

337は鉢にも形態が共通するが、口縁部外面への強い煤付着痕跡から甕としての用途が伺われるため、ここに位置付けたものである。

E類：口縁部外面に小突帯を貼付するもの。(25)

25は外面に2状の小突帯を貼付した後、突帯上面へハケ状原体による刻目を施す。

F類：口縁部が逆「L」字状を呈するもの。(24)

いわゆる「瀬戸内型」甕で、出土例は24のみである。

このうち、A-類は張りのある胴部から口縁部が大きくカーブを描いて外反するもので胴部最大径が口縁部径を上回るもの(125)、胴部最大径と口縁部径がほぼ同等(23・122・165・168)、口縁部径が胴部最大径を僅かに上回るもの(132)を認める。A-類は胴部が膨らみをもたないか、又

はごくわずかな膨らみをもつもので、口縁部径が胴部最大径を大きく上回る。(22・31・194)これら甕A類は、「土佐型」甕と口縁部形態が共通するもので、今回の具同中山遺跡群では、具同～期の100%、-1期の77%をA類が占めており(Tab.89)、具同中山遺跡群周辺地域における甕の該当時期の主要形態であったことが分かる。口縁部から胴部まで残存する良好な資料は少ないが、提示した資料は何れも上胴部に櫛描直線文・列点文・円形浮文・微隆起帯等からなる文様帯を設け、頸部と胴部を区画する。又、口縁部は粘土帯貼付のものとは非貼付、刻目を施すもの等があり、粘土帯の在り方についても様々なバリエーションが認められる。しかし、これら多様な一群の甕は口縁部と上胴部への加飾の意図は共通しており、バリエーションを認めつつも成立素地を同じくする一群の土器グループとしてまとめることが可能だろう。その他、特にA-類として区分した71・72は口縁部がごく緩やかに外反するもので、最大径は口縁部に有するが、胴部から口縁部までほぼ直線的に伸びる。何れも内外面に指頭圧痕が顕著で、口縁部も歪みや厚さの違いが著しい。

鉢

A類：体部が内湾気味に立ち上がるもの。器高によって以下に細区分される。

A-類：器高の低いもの。(127・351・370)

A-類：器高の高いもの。(343・372)

B類：体部が直線的に開くもの。

B-類：器高の低いもの。(617)

B-類：器高の高いもの。(162・342)

C類：口縁部が外反するもの、又は外反気味のもの。(371・396・397)

鉢は器形による上記の分類に加え、大型品(342)・中型品(127・162・343・371・372・396・617)・小型品(351・370・397)の法量分化を認める。

高杯

A類：外反する杯部を呈するもの。(336)

B類：有段の杯部を呈するもの。(44)

その他、脚部は円盤充填成形によるもの(157)、分割成形によるもの(353)を認める。

	甕A	甕B	甕B	甕C	甕D	甕E	甕F	形態判定の可能な甕	甕(器種特定できたもの)
期	—	—	—	—	—	2 (66)	1 (33)	3	3
～期	5 (100)	—	—	—	—	—	—	5	22
-1期	55 (77)	—	15 (21)	1 (1)	—	—	—	71	391
-2期	—	4 (80)	—	—	1 (20)	—	—	5	5
-3期	1 (3)	1 (3)	—	35 (94)	—	—	—	37	37

遺構・土器集中・包含層を含めた数値
()内は%

Tab.89 甕の形態別組成

(2)時期区分と各期の様相

高知県西部域の弥生土器編年はいまだ確立していないことから、ここでは、具同中山遺跡群出土資料の検出層位をもとに遺跡内で相対的に設定した時期区分を用い、各々具同～-3期としてFig.212～213に示した。なお、各期の年代観は高知県中央部の編年観と、土器文化の強い影響を伺わせる近隣の愛媛県側の様相に照らして想定したものであるが、本次資料群については～期の資料数が極端に少なく包含層資料をもって補わなければならない様な状況であったことから、今後当該期資料の充実を待ち、年代観及び各期の組成について再検討を望むものであることを付け加えておきたい。

[期] XI層検出のST1とX-4層検出の炭化物集中1出土資料を該当させているが、他には良好な資料に恵まれない。ST1からは5条を単位とするヘラ描き直線文を施した壺胴部(12)、炭化物集中1からは口縁部が逆「L」字状を呈する甕(24)と、口縁部外面に2状の刻目突帯を貼付した甕(25)が出土している。この他、XI層包含層出土資料であるが、 期に該当するものとして外底に網代圧痕を残す底部(212)、薄手の甕上胴部(196)、断面三角形の粘土紐を双条に貼付し刻目を施した胴部(616)を図示している。又、上下層混在した出土状況から具同 期～ 期に対応するものとして扱ったXI層最上層・-4層包含層出土の壺口縁部(193)、壺胴部(207)、双状原体による重弧文と直線文を施す壺(186)、甕口縁部(200・204)を参考までに掲載している。 期の中でも本次資料群は弥生時代前期末に比定している。

[期] -4層が該当する。同層も良好な資料に恵まれず、包含層出土遺物を認めるのみである。

[期] SK5出土資料が該当する。壺(21)は口縁部が扁平な粘土帯貼付口縁を呈し頸部に微隆起帯を貼付するもので、薄手の作りとなる。SK5出土資料は中期中葉頃に比定できるものか。

[期] -3層検出のSK6出土資料が該当し、甕(22・23)が床面一括の状態出土している。22・23はともに指頭押圧によって扁平化した粘土帯貼付口縁を呈し上胴部には微隆起帯を巡らせるもので、当SK6出土資料は弥生中期末に比定している。

[-1期] -1層検出のSK4、SX2、土器集中1～6出土資料が該当し、量的にもまとまった資料が得られている。土器集中1については広範囲から土器が出土しているため、炭化物集中内から出土しより一括性が高い一群の土器を抽出し掲示した。バリエーションに富んだ形態を示す甕に併せて、素口縁の広口壺(56・62)・長頸壺(57・121)、貼付口縁を伴う広口壺(55)・長頸壺(26・61)、口唇部を僅かに肥厚させる広口壺(60)、鉢(90・91・162)、高杯(44)等が出土している。弥生後期前葉に比定している。

[-2期] 層上層検出の土器集中7が該当する。この時期になると既にその殆どが非貼付口縁となる。内容は口縁部がカーブを描いて外反するタイプの甕(338～341)と頸部外面に接合痕を明瞭に残し口縁部がごく緩やかに外反するタイプ(337)で占められ、これに直立する口縁部をもつ鉢(343)と大型の鉢(342)が共伴する。いずれの器種もナデ調整で指頭圧痕が著しい。前後の層位関係からみて弥生後期中葉頃に位置付けているが、共伴遺物等の不足から年代観については今後再検討が必要である。

[-3期] 層最下層検出の土器集中8・9・19が該当する。土器集中8・9・19では口縁部が「く」字状に外反する甕がその殆どを占め、1点のみ貼付口縁をなし口縁部がカーブを描いて外反するタイプの甕(615)が出土している。外面調整にはハケ・ナデを施し、叩き成形の痕跡を残す資料は認められない。この時期には長頸広口壺(612)・直口壺(348)・分割成形による高杯(353)等が共伴している。弥生後期後葉に比定する。

ここまで各期の概要を眺め、それにより、弥生時代中期から後期前葉における在地的要素の強い甕の盛行と、後期中葉以降の「く」字状口縁甕への緩やかな移行を看取できた。以下の項では中でも弥生前期末から後期前葉にかけての県西部地域土器の特質を最も顕著に表すと予想される在地性の強い一群の甕を中心に、今一度その構成要素と変遷過程を検討してみたい。

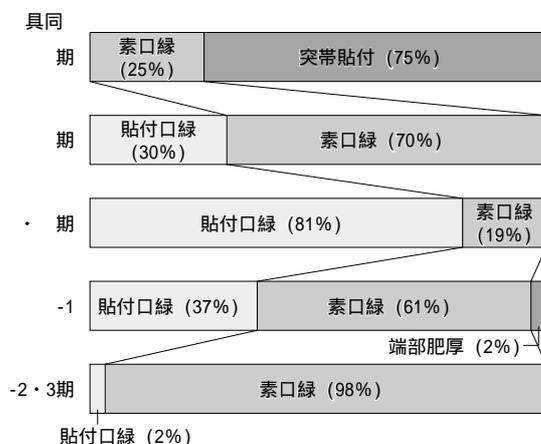
(3) 甕の特質と属性変化

まず具同 ~ -3期出土の甕を検討するにあたり、それらを構成する幾つかの属性があげられるが、全体のプロポーションを観察できる資料が少ないという資料的限界もあることから、ここではより多くの情報が得やすく、具同中山遺跡群 出土の甕を特徴付けるとみられる 口縁部形態に加え、 器形プロポーション・胎土特徴・胴部施文の各要素に着目し、以下検討を行いたい。

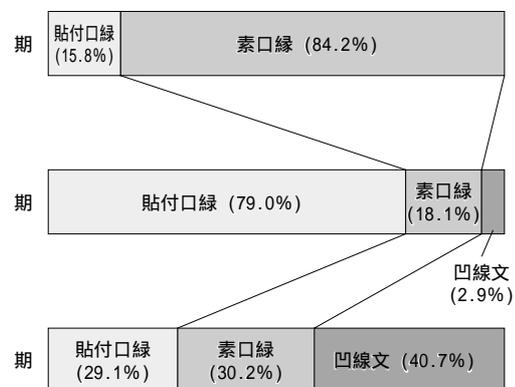
1) 口縁部形態の様相と変遷

口縁部形態の中でも、粘土帯貼付口縁を有する甕は本次出土資料中でも多く認められ、本遺跡出土の甕を特徴付ける重要な要素の一つとみられる。ここではまず、本次出土資料における口縁部形態別組成を提示し、各期における粘土帯貼付口縁の占有率と量的変化を明らかにしたい。

Tab.90は具同 期から -3期までの口縁部形態別組成(壺・甕)である。これによると、粘土帯貼付口縁の占める比率は 期0%、 期30%、 ・ 期81%、 -1期37%、 -2・3期2%という値を示す。粘土帯貼付口縁が最も盛行するとみられる ・ 期の資料が量的に乏しく資料的弱さは免れないが、各期の中で最も高い比率を占めるというおよその傾向は伺われる。続く -1期は粘土帯貼付口縁の終末段階と考えられるが、この時期に至っても貼付口縁が依然37%を占めている。この後、 -2・3期には様相が一転し、非貼付口縁が98%、対し貼付口縁は2%と急激な減少をみせる。



Tab.90 具同 .口縁部形態別組成



Tab.91 高知県中央部.口縁部形態別組成

時間区分	タイプ a	タイプ b	タイプ c	タイプ d	タイプ e	タイプ f	タイプ g	貼付口縁計
期	2 (67)	—	—	—	—	1 (33)		3
～ 期	7 (33)	11 (52)	—	—	—	1 (5)	2 (10)	21
-1期	38 (54)	20 (29)	2 (3)	4 (6)	6 (9)	—	—	70
-2・3期	1 (100)	—	—	—	—	—	—	1

～ 期は包含層まで含めた数値。 -1～3期は一括性の高い資料のみの数値。
() 内は%

Tab.92 粘土帯貼付口縁のタイプ別組成

又、本次資料において観察される粘土帯貼付口縁の在り方には、a -粘土帯外面に指頭押圧の痕跡を留めるが2～5mm程度の明瞭な段をなすもの、b -扁平な粘土帯の外面と下端への強い指頭押圧によって1mm以下の僅かな段を残すのみとなるもの、c -断面と外面に粘土帯貼付の痕跡を留めるが段を全く留めないもの、d -端部を強く横ナデし下方へ肥厚させるもの、e -端部あるいは外面を強く横ナデして面取り、断面三角形を呈するもの、f -粘土帯外面の上段と下端、あるいは下端のみに回転力を利用した強い横ナデを施しナデ上端に稜をなすもの、g -扁平で幅広の粘土帯下端を横ナデするもので主に長頸壺口縁部に伴うもの、バリエーションを認める。貼付口縁に占めるこれら各要素の出現比率を各期毎に求めたものをTab.92に示しているが、それによると、a～gまでの多様なバリエーションのうちa・bタイプが優勢を示す傾向は～ -1期を通して認められ、-3期まで残存するものはaタイプのみであった。この結果のうち、-2・3期は資料数が乏しく当時の貼付口縁の実体を隈なく表した満足な数値とは言い難いもので今後の再検証が必要であるが、こうした貼付口縁の形態変遷の傾向は読み取れるものと考えられる。

なお、参考までに高知平野の状況をみると、高知平野東部の田村遺跡・本村遺跡における口縁部形態別組成(Tab.91)では、土佐 期(弥生中期前葉)の貼付口縁比率は15.8%、 期(中期中葉)79.0%、 期(中期末)29.1%との報告がなされている⁽¹⁾。又、高知平野西部のバーガ森北斜面遺跡⁽²⁾では、弥生中期末の段階で、口縁部における凹線文と粘土帯貼付の出現比率は約6割対4割と報告されている。

2) 各属性と甕A～F類の対応

前項によって粘土帯貼付口縁が具同中山遺跡群の弥生中期から後期前葉土器における重要な構成要素であることがさらに明確となったが、さらにここでは、～ -3期出土の甕に胎土特徴器形プロポーション 口縁部形態 胴部施文という各属性を対応させ、検討を行う。各属性の内容は以下の通りである。

胎土特徴-以下の特徴を示す胎土を認める。

[胎土A類]砂岩や白色系円礫等の砂礫を多量(20～40%程度)に含むもので、中には白色系の角粒細砂を多量に混和したのもも目立つ。

[胎土B類]四万十帯の花崗岩鉱床に起因するとみられる石英・長石・雲母・角閃石等の鉱物からなる砂や頁岩等の砂礫を少量含むもの。

[胎土C類]その他。焼成はやや軟質なものとなる。

器形プロポーション-先に提示したA-・A-・B～F類によっている。

口縁部形態-A粘土帯貼付口縁、B素口縁、C端部を肥厚させるもの、D突帯を貼付するもの
上胴部への施文-[施文A] a 楕円形浮文、a 円形浮文、a 棒状浮文、b 櫛描直線文、b 櫛描波状文、c ヘラ又はハケ状原体による列点文、c 鋭い櫛状原体による「ノ」字状の連続文様で先のcの変形パターンとみられるもの、d 1条沈線、e 微隆起帯、の複数の組み合わせからなる文様帯。
[施文B]列点文等からなる単一文様帯。[無文]の3パターンを認める。

Tab.94にて取り上げたものは比較的残存率が良く器種特定が可能であった甕の口縁部資料である。これらの各個体毎に各属性を対応させ、属性間の対応関係の傾向をみてみたい。

まず、期についてみると、粘土帯貼付口縁には胎土A類・胎土B類ともに対応し、胎土A類にはA-類甕が、胎土B類にA-類甕が各々対応している。又、胴部施文は胎土A類のA類甕(23)にa・b・c・dのセットによって構成される施文が対応し、胎土B類のA類甕(22・194)にはc・dのセットによる施文と列点文による単一施文様に対応する。

続く-1期についてみると、粘土帯貼付口縁甕が胎土A類に、非貼付口縁甕が胎土B類に対応する図式が認められる。又、さらに各形態を対応させると、粘土帯貼付口縁と胎土A類のA-類甕が対応し、非貼付口縁は胎土B類のA-類(132)・A-類・B・C類が対応する。さらにこれに胴部施文の要素を加えると、胎土A類のA類甕には胴部施文Aが対応し、その内容はa・b・c又はcによって構成される。一方、胎土B類のA-類(132)・A-類・B・C類甕には無文あるいは施文B(列点文による単一施文)と施文Aが対応し、施文Aの内容はb・b・c・dのセットによって構成される。

これらの結果から、-期まで残る粘土帯貼付口縁甕には胎土AのA-類甕が対応することが明らかとなった。又、胴部施文のパターンと変化について注目すると、-期までA-類甕・A-類甕ともみられる微隆起帯は-期以降には認められない、胴部施文の櫛描波状文は-1期まで胎土B類甕に継続的に残る(31・29・56・73等)、等の傾向を認め、胎土A類甕と胎土B類甕が各々に独自の形態変化と文様構成をみせることが明らかとなってきた。

3) 胎土A類-A-類甕の位置付けと変遷

この胎土AのA-類甕に共通した特徴を示す土器を県下に求めると、神西式土器が挙げられる。本土器型式の土器は昭和25年の高知県高岡郡窪川町神西遺跡発掘調査にて発見されたことから、岡本健児氏によって、神西式と称する土佐独自の土器型式としてして提唱されたもので、甕は砂礫を多量に含む独特の胎土特徴及び、口縁部形態、上胴部文様帯の構成内容に特徴がみられる。このタイプの土器は現在まで高知県中央部物部川流域の田村遺跡、本村遺跡、県中央部仁淀川流域のバーガ森北斜面遺跡、北高田遺跡等にて確認されており、県西部域においては先述の神西遺跡の他、具同中山遺跡群平成6年度・7年度調査^(3・4)でも流路跡よりの出土が確認されており、県下西部から中央部にわたる分布を示している。

本次出土資料(23・64・66・122・125・165・168他)をみると、形態、胎土特徴、直線文・円形浮文・列点文の組み合わせからなる文様構成も神西式土器に共通する要素を備えており、神西系土器の範疇に位置付けることが可能である。本遺跡出土の神西系土器と県中央部出土の同土器を比較す

ると、凹線文土器を共伴し畿内 様式に並行関係をみるバーガ森北斜面遺跡平成9年度調査出土資料と本遺跡出土資料具同 期のSK6出土(23)が円形浮文の形態と微隆起帯の貼付等に共通性が見出され、本資料もほぼ同時期の弥生時代中期末頃に時期比定できるものと捉えている。一方、屈曲する杯部を呈する高杯(SK4-44)、鉢(土器集中1-90)との共伴関係から導いた年代観によって後期前葉に比定された具同 -1期資料群は、すでに弥生時代後期前葉に比定されている北高田遺跡出土資料⁽⁵⁾により近い形態特徴と文様構成を示している。

なお、これら具同 期・ -1期にみる甕A- 類上胴部への施文については、櫛描直線文・円形浮文・楕円形浮文・列点文等、県中央部のタイプにおおむね共通するが、このうち文様帯の最下段については、ヘラ状原体・ハケ状原体の使用による列点文の他に、高知県中央部の神西式土器では一般化しない施文c (櫛状原体による斜方向又は「ノ」字状の連続文様。23・125等)が認められ、県中央部とは異なる施文具の使用例が認められる。

次に、最終段階の具同 -3期に至ると、甕A- 類の出土比率は減少し唯一形態を確認できたものは土器集中19出土の615のみである。同個体は明瞭な段を残す粘土帯貼付口縁aタイプを呈しA- 類甕のプロポーシオンを依然保つものの、既に上胴部の文様帯は失われ、胴部から頸部・口縁部にかけて一定した縦ハケ調整、胎土は砂粒を少量含む軟質なものになるなど、従来まで甕A- 類を規定してきた幾つかの特質はすでに失われている。

4) 胎土B類-A- 類、A- 類、B類甕の構成要素と変遷

一方、胎土B類の甕A- 類は大きくカーブを描いて口縁部に至る形態と上胴部施文等の特徴が「土佐型」甕に共通性を示すことから、A類甕の範疇に位置付けたものであるが、具同 期の22は先のA- 類に比較して胴部の張りが弱い。SK6出土の22は共伴するA- 類甕(23)の県中央部での編年観によって弥生中期末に時期比定されるものであるが、同個体は口縁部外面に粘土帯貼付痕跡を認めるものの外面への強い指頭押圧によって扁平化し小さく段を留めるのみとなる。口唇部下端には刻目を施し、上胴部の文様帯には2状の微隆起帯を貼付しその上下に指頭押圧を連続的に加えている。さらにその直下に列点文を巡らせている。続く具同 -1期に至ると、72は口縁部外面への粘土帯貼付はみられず、端部を横ナデし口唇部への刺突を施している。上胴部文様帯は沈線と列点文からなる。又、胎土B類のA- 類甕は確認事例は132の1点のみである。やはり素口縁となり端部下端に刻目を、上胴部には櫛描文を施す。

次に胎土B類のB- 類甕には30・31等がある。31も口縁部外面への粘土帯貼付はみられず、端部を横ナデし僅かに肥厚させ口唇部全面への刻目を施している。文様帯は櫛描直線文と波状文からなる。

こうした胎土B類甕にみる胴部施文を高知県中央部のものに比較すると、具同中山遺跡群 出土の -1期の壺・甕(29・31・56・73・202・271)に認めるような胴部の櫛描波状文は、県中央部では弥生後期以降すでに認められないということであり、施文の消長にも県中央部との違いが認められる。

5) 甕の属性変化と地域色

以上、各期にわたって当遺跡を特徴付ける甕A類を中心にその特質と変遷過程をみてきたが、最後に再び、一括性の強い出土状況を示した -1期土器群の中で共伴する a ~ g の各タイプ貼付口縁の組成比率について振り返っておきたい。今回の具同中山遺跡群出土資料ではその前後の資料が不十分であるため、各タイプ貼付口縁甕の構成比率がどのように変化し出現から消失へとむかったのか、具体的データから明らかにすることはできないが、ただ、おそらく粘土帯貼付口縁甕の終末段階であったろうとみられる具同 -1期出土資料からみる限りでは、多様な形態の粘土帯貼付口縁が最終段階までバリエーションとして共存しており、これらが土佐独自のスタイルを保つ神西系土器の中に依然残っていく状況が認められた。

又、ここまで分析データを中心に具同 期から -1、 -2・3期の甕の構成要素と変遷過程を辿ってきたが、今回の資料でみる限りでは、「土佐型」・「西南四国型」甕と称される南四国と西南四国に広く分布する地域色の強い一群の甕は、具同 出土資料群内では、胎土A-A- 類甕、胎土B-A- 類甕とする、胎土・器形プロポーションの異なる2種の甕によって構成され、両者が共存することが明らかとなった。両タイプ甕がどのように当地域での出現をみせ始め、どのような比率で当地域の甕の主要形態として展開をみせたのかは、当該期の資料が欠落しているため、現段階では述べることができないが、粘土帯貼付口縁の終末段階にあたる具同 -1期では、すでに胎土B類甕の貼付口縁の割合が0%まで減少し、胎土A類甕は依然高い比率で同口縁部形態を維持し続けている点を考えると、胎土B類甕の方がより敏感に次の形態への移行を遂げているものとみられる。これを具体的に具同中山遺跡群 の各期にあてはめると、具同 期が粘土帯貼付口縁を有する胎土B類甕と胎土A類甕が共に共存する段階、続く -1期は、すでに粘土帯貼付口縁の消失段階へと移行した胎土B類甕と、依然粘土帯貼付口縁を維持する胎土A類甕が共存する段階であるといえる。

これらの点から、両者は共通する成立素地が予測されながら、そこから派生した別種のA類甕で、その後独自の移行を辿っており、異なる胎土特質も考え合わせると その背後には異なる生産構造が存在していた可能性が考えられる。特に当遺跡ではどちらかが主流を占めるというのではなくほぼ同等の割合で両者が存在しているのであり、こうした2種の在地性の強い土器が独自の変容を遂げつつ別個のスタイルを保持し地域内で共存する在り方は、弥生中期から後期前葉までの中筋川流域の地域特性の一側面を表すものといえるだろう。

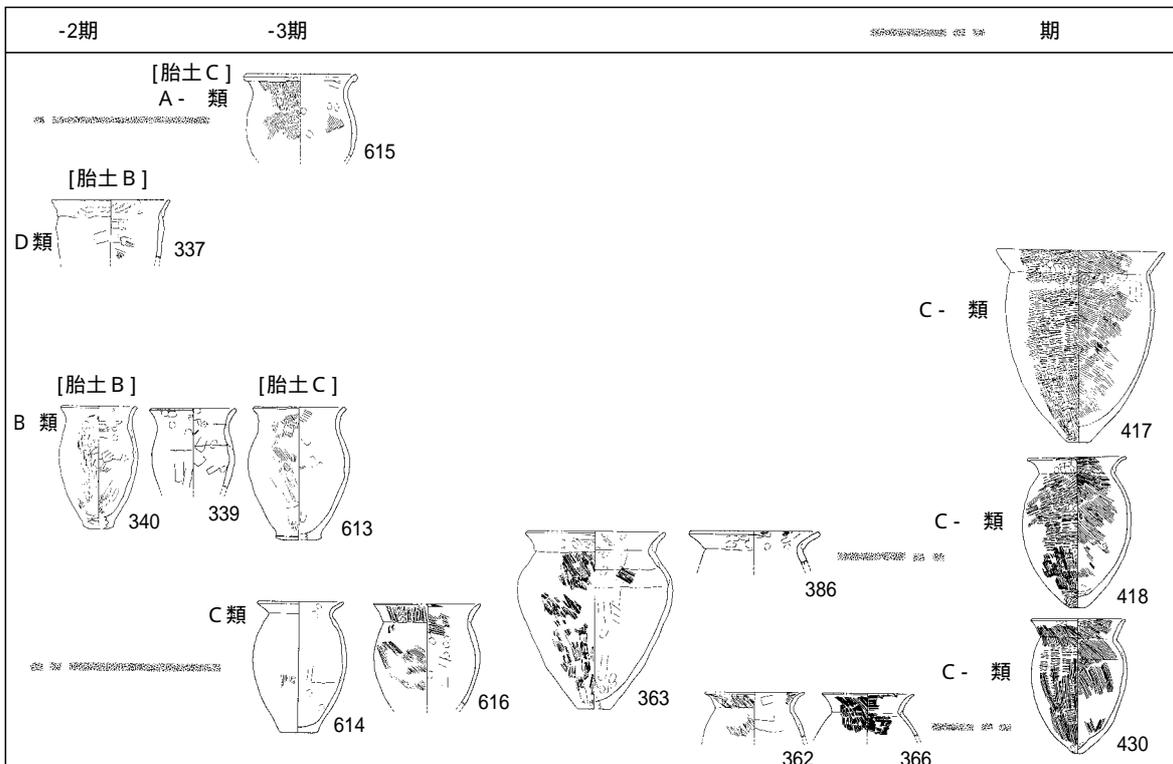
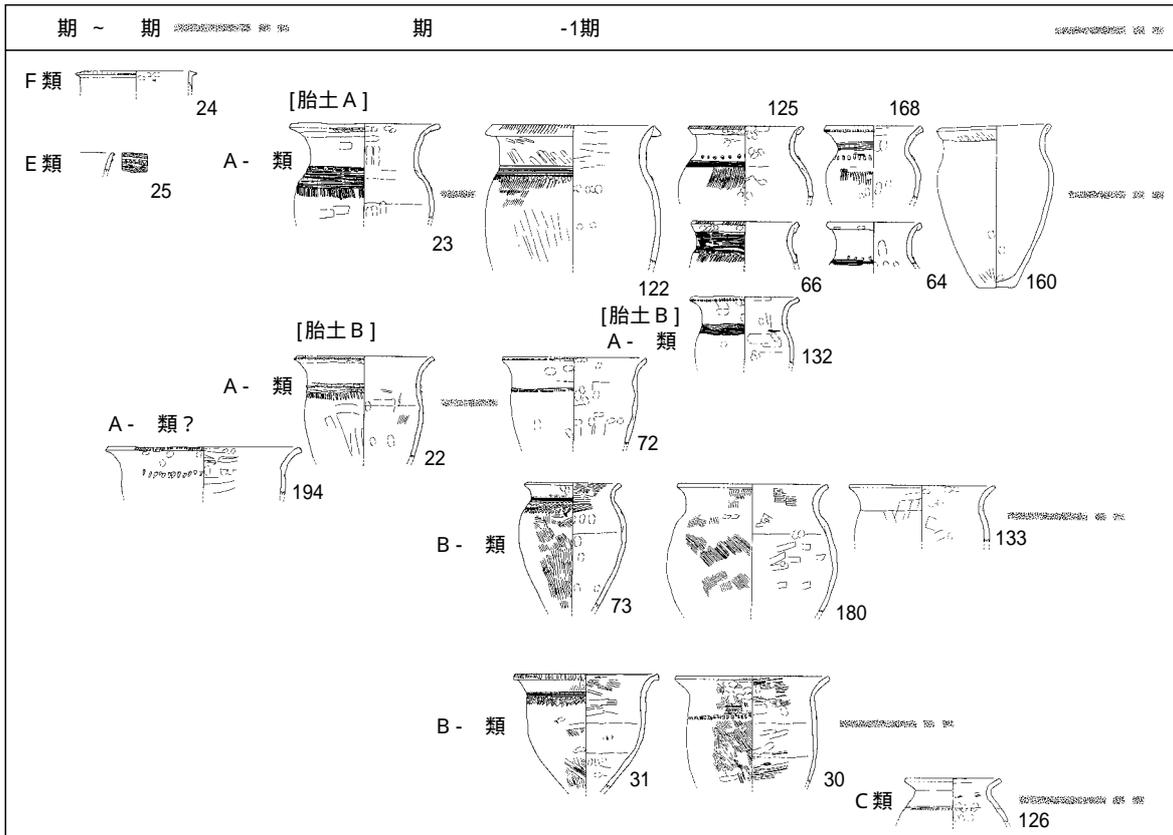


Fig.211 甕の形態分類と変遷

具同 時期区分	検出 層位	遺構・ 土器集中	壺	甕	鉢	高杯	甌 その他	手捏	器種 不明 (壺・甕)	口縁 部計
期	XI層	ST1	-	-	-	-	-	-	-	-
"	"	包含層	1	1	-	-	-	-	-	2
"	-4層	炭化物集中1	-	2	-	-	-	-	-	2
~ 期	"	包含層	1	1	-	-	-	-	-	2
期	-4層	包含層	-	-	-	-	-	-	10	10
期	-3層	SK5	1	-	-	-	-	-	-	1
"	"	SK6	-	2	-	-	-	-	-	2
~ 期	"	包含層	2	21	-	-	-	-	-	23
-1期	-1層	SK4	1	22	-	1	-	-	-	24
"	"	SX2	1	3	-	-	-	-	-	4
"	"	土器集中1	8	86	2	-	-	-	2	98
"	"	土器集中2	3	84	1	-	-	-	-	88
"	"	土器集中3	-	49	-	1	-	-	-	50
"	"	土器集中4	2	-	1	-	-	-	1	4
"	"	土器集中5	1	5	-	-	-	-	1	7
"	"	土器集中6	1	3	-	-	-	-	-	4
"	-1・2層	包含層	10	139	-	-	-	-	10	159
		~ XI層計	32	418	4	2	-	-	24	480
-2期	層	土器集中7	5	-	2	-	-	-	-	7
-3期	"	土器集中8	2	11	1	1	1	-	-	16
"	"	土器集中9	-	22	3	1	-	-	-	26
"	"	土器集中19	1	4	1	-	-	-	-	6
-2・3期	"	包含層	5	15	-	1	-	-	-	21
		層計	8	57	7	3	1	-	-	76
~ 古1期	層	SK9	1	2	1	-	-	-	-	4
"	"	SK10	-	-	1	-	-	-	-	1
期	"	SX4	2	201	4	-	-	1	-	208
古1	"	SX5	1	30	4	-	-	1	-	36
~ 古1期	"	土器集中10	4	61	1	-	-	1	-	67
"	"	土器集中11	-	8	-	1	-	-	-	9
"	"	土器集中12	4	67	13	2	-	-	-	86
"	"	土器集中13	1	18	4	-	-	-	-	23
期	"	土器集中14	-	6	1	-	-	-	-	7
"	"	土器集中15	10	13	5	-	-	1	-	29
古1	"	土器集中16	-	3	-	-	-	-	-	3
~ 古1期	"	土器集中17	-	6	1	-	-	-	-	7
古1	"	土器集中18	4	34	10	-	-	1	-	49
期	"	土器集中20	1	54	4	1	-	-	-	60
~ 古1期	"	土器集中21	10	233	12	-	-	-	-	255
"	"	土器集中22	2	38	6	-	1	-	-	47
"	"	土器集中23	-	24	3	-	-	-	-	27
期	"	土器集中24	1	1	2	-	-	-	-	4
"	"	土器集中25	4	-	1	-	-	-	-	5
~ 古1期	"	包含層	9	208	4	4	-	1	13	239
		層計	54	1007	77	8	1	6	13	1166
		総計	94	1482	88	13	2	6	37	1722
		%	5.6	88	5.2	0.8	0.1	0.4		

Tab.93 遺構別土器組成表

具同 時期区分	挿回 番号	胎土 A・ B・C	形態 分類	口縁部タイプ A粘土帯貼付 B素 C端部肥厚 D突帯系	貼付帯タイプ a段明瞭 b段僅か c段消失 d端部肥厚 e三角形 f横ナテ+稜	口縁部施文 (列目) a外面 b端部全面 c端部下端	胴部施文 a a a 浮文 b b 櫛描文 c c 列点文等 d 沈線 e 微隆起帯
~	192	A	-	A	a	無文	-
~	203	A	-	A	b	a	-
期	23	A	A-	A	c	c	a・b・ c・e
-1	33	A	-	A	a	無文	-
-1	49	A	A-	A	a	無文	c
-1	64	A	A-	A	a	無文	a・b
-1	66	A	A-	A	a	b	a・b
-1	67	A	A	A	b	b	-
-1	80	A	-	A	d	無文	-
-1	83	A	-	A	b	a	-
-1	122	A	A-	A	e	a	a・b・c
-1	125	A	A-	A	a	b	a・b・c
-1	137	A	A	A	b	b	-
-1	138	A	-	A	a	a + 内面に 浮文	-
-1	139	A	-	A	a	b	a・b
-1	140	A	-	A	a	a	-
-1	141	A	-	A	e	b	-
-1	145	A	-	A	c	b	-
-1	146	A	-	A	a	無文	-
-1	160	A	A-	A	b	無文	無文
-1	165	A	A-	A	a	b	a・b
-1	166	A	A	A	b	b	-
-1	167	A	A	A	a	a	-
-1	168	A	A-	A	c	c	a・b・c
-1	169	A	A	A	b	b	a
-1	76	A	B	B	-	無文	-
-1	142	A	-	B	-	c	b
~	200	B	-	A	a	無文	-
~	194	B	A-	B	-	b	c
期	22	B	A-	A	c	c	c・e
-1	79	B	A	A	b	b	-
-1	175	B	-	A	a	b	-
-1	30	B	B	B	-	無文	c
-1	31	B	A-	B	-	b	b・b
-1	32	B	-	B	-	b	-
-1	34	B	-	B	-	b	-
-1	68	B	A	B	-	b	b
-1	69	B	-	B	-	b	-
-1	70	B	-	B	-	b	-
-1	71	B	A-	B	-	b	c・d
-1	72	B	A-	B	-	b	c・d
-1	73	B	B	B	-	無文	c・b・b
-1	74	B	B	B	-	無文	無文
-1	75	B	B	B	-	無文	無文
-1	77	B	-	B	-	無文	無文
-1	78	B	B	B	-	無文	c
-1	84	B	-	B	-	b	-
-1	123	B	-	B	-	c	-
-1	124	B	A-	B	-	無文	-
-1	126	B	C	B	-	無文	c・d
-1	132	B	A-	B	-	c	b
-1	133	B	B	B	-	無文	無文
-1	143	B	-	B	-	無文	-
-1	180	B	B	B	-	無文	無文
-2	337	B	D	B	-	無文	無文
-2	338	B	B	B	-	無文	無文
-2	339	B	B	B	-	無文	無文
-2	340	B	B	B	-	無文	無文
-2	341	B	B	B	-	無文	無文
-3	350	C	C	B	-	無文	無文
-3	362	C	C	B	-	無文	無文
-3	363	C	C	B	-	無文	無文
-3	364	C	C	B	-	無文	-
-3	365	C	C	B	-	無文	-
-3	368	C	C	B	-	無文	無文
-3	369	C	C	B	-	無文	無文
-3	613	C	B	B	-	無文	無文
-3	614	C	C	B	-	無文	無文
-3	615	C	A-1	A	-	無文	無文
-3	616	C	C	B	-	無文	無文

Tab.94 甕の属性対応表

2. 弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器

(1) 形態分類

壺

A類：広口壺。屈曲する頸部から外反する口縁部を有するもの。

A-1類：口縁部が長く外反するもの。(411・475・480・481・482・508・509・531・532・562・618・648・653・748)

A-2類：口縁部が短く外反するもの。(410・413・414・458・563・564・651・713)

A-3類：口縁部が長く外反するもので端部を拡張させるもの。(591・712・754)

B類：複合口縁壺。(405・409・440・457・479・524～529・590・592・647・649・650・652・753・755)

C類：直口壺。(459・530・752)

D類：小型丸底壺。(714)

甕

C類：口縁部が「く」字状に外反するもの。外反の度合いには強いものと緩やかなものがあるが、ここでは一括している。C類は胴部形状によって以下のように細区分できる。

C-類：張りのある胴部から口縁部が「く」字状に外反するもの。(415・418・419・421～426・429～432・442～447・451・484～488・510・511・533～536・541・他多数)

C-類：張りのない胴部から口縁部が「く」字状に外反するもの。
(416・417・427・428・662・671)

G類：口縁部が丸みをもって外反するもの。(520・625・750・763)

H類：口縁部が直立気味に伸びるもの。(461・512・538・540・542・621・660・677・678・745・746・758)

鉢 体部形態をもって分類した。さらに底部には平底・尖底・丸底・凹状の各タイプがある。

A類：体部が内湾気味に立ち上がるもの。椀状の形態を示す。

(406・434・455・504・515～518・543～545・561・577～579・581・584・586・588・603・604・642～645・697・702・703・705・706・730・731・766)

B類：体部が直線的に開くもの。(408・435・452～454・501～503・546・580・582・583・605・698～701・704・728・765)

C類：口縁部が外反するもの、又は外反気味のもの。(433・732・737・747・749)

D類：体部が内湾気味に大きく開くもの。器高が低く、皿状に近い形態を示す。(500・587)

高杯

A類：外反する杯部を呈するもの。(606・646)

B類：有段の杯部を呈するもの。(597・598)その他脚部のみの資料に(505・506)がある。

その他

支脚形土製品(607)甗(708・726・727)他がある。

(2) 時期区分と土器様相

基準資料

本遺跡においては先の具同 3期以降、土器の出土は一時途絶え、次に遺構と土器集中に伴う多量の土器廃棄をみるのは弥生時代終末期～古墳時代初頭の段階である。この時期には 層検出のSK9・10、SX4・5、土器集中10～18・20～25出土資料が該当し、畿内 様式以来の全面にタタキ目を残す甕・鉢等を主体として構成される。本遺跡では各土器集中がさらに大きな群を形成し時期毎に土器の廃棄地点が移動をみせるという特徴を備えているところから、こうした群構成と検出レベルの上下によって出土資料を大別し 層- 群(SX4・土器集中10～15・20) 層- 群(SX5・土器集中16・18)という新旧関係を想定している。本項ではこの2段階の検出土器群を元に、当該期土器の幾つかの構成要素を検討し、各段階毎の属性変化を追ってみたい。

なお、全体的な傾向をつかむことを目的としたこれら2群の資料に合わせ、ここでは特に、より一括性の高い出土状況を示し且つ上下層及び周辺よりの土器混入の危険性が薄いと評価できるものを基準資料(群：SX4、土器集中14・15・20、 群：SX5、土器集中16・18)として抽出している。

各期の様相

まず、先に提示した2段階の基準資料を元に、時期設定を行い各器種の様相を眺めたい。

a) 群基準資料(具同 期)

SX4と土器集中14・15・20が該当する。甕C-1類が多数を占める中、胴の張らないC-2類(416・417・428)も少量混じる。器面は胴部全面にタタキ目を残し、底部脇から下位にかけてハケ調整を施すものが多い。C類甕にはこの他口縁部が強く外反し端部を面取るタイプ(420・421)、口縁部叩き出し成形のもの(536・537)も出現している。底部は小さな平底が多数を占め、尖底・外底先端を凹状にするものが少量混じる。この時期の壺には広口壺(531・532)、複合口縁壺(524～529)、直口壺(530)と、その頸部外面に扁平な突帯を貼付するもの(524・525・528)、さらにその突帯を上胴部に垂らすもの(409)等があり、409は大分県に類例を認める。底部は平底及び小型化した平底(524・527・530・531)が多くを占めるが丸底化したもの(528)も少量認める。鉢は平底(543・545・546)・尖底(644)・丸底(544・642)・凹状底(543・645)とも認める。全面にタタキ目を顕著に残すものが多数を占める中、外面全面ナデ調整で内面のハケ調整を施す平底タイプ(434・435・546・547)、ナデ調整が主体を占め底部付近にタタキ目・ハケ目を残す尖底風タイプ(644・645)も少量認める。これら 群基準資料は具同 期として時期設定する。

b) 群基準資料(具同古式土師器 期)

SX15と土器集中16・18出土資料を該当させる。SX5では胴部全面にタタキ目を残すタイプの甕(442・443)に混じって、タタキ目上面へのナデ調整が一層顕著になったタイプの甕(444・445・447)が共伴するようになる。又、具同 期段階(群資料)まで多く認められた底部脇への縦ハケ目を残す個体は殆ど認められない。土器集中16からは口縁部叩き出し成形の甕(550)に共伴して東阿波型土器(556)が出土している。壺・甕の底部は丸底気味のものがやや増加するが、依然ごく小さな平底を残すものが多い。鉢は内外面ナデ調整を主体とする平底のタイプ(578・580)、丸底(585・587)凹状底(581)、体部が半球形を呈する薄手の精製品(588)等を認める。 群基準資料は、東阿波型土

器(556)の出土をもって具同古式土師器 期として時期設定しておく。

甕の属性変化と地域特性

さらに上記の基準資料に加え 層- ・ 群資料を用いて、甕の構成要素のうち外傾接合痕、底部形態、成形・調整痕について、各期毎の諸特徴の具体的な出現比率を求めておきたい。

まず、頸部外面に外傾接合による粘土帯接合痕を残し段を生じる甕は、県中央部では一般化せず、県西部域の甕を特徴付けるものであるが、本次資料中においても一定量確認されている。本次資料にみる頸部外傾接合の甕にはA：接合部上面へのナデ消しを行わず、1mm前後の小さな段を残すもの、B：接合部上面にナデを施すが不十分で、接合痕跡が明瞭に観察されるもの、C：断面に外傾接合痕が観察されるが、頸部外面の接合痕はナデ又はハケによって完全に消されるもの、の各タイプがあり、いずれも頸部を境に口縁部と胴部の調整が明確に分かれる。具同 出土の甕頸部にみるその出現率は、具同 期ではタイプAが15%、Bが4%、Cが14%を占め、具同古式土師器 期ではタイプAが19%、B・Cが0%と、古式土師器 期の段階まで一定の比率を示している。

次に、底部形態については、成形段階において底部脇へ放射状のタタキを重ね尖底風の作りをめざした個体が多数を占めるが、完全な尖底・丸底を呈するものは少なく径1～2cm前後の平坦面を残すものが大多数である。又、外底中央に指頭押圧を加え凹状に成形する底部は前段階から一定量確認されてきたが、本段階に至っても尖底風・丸底風の作りの底部先端を指頭押圧し凹ませる資料を少量認めている。各タイプの比率は 期で平底22%、小さな平底58%、尖底10%、丸底6%、凹状4%、古式土師器 期で平底29%、小さな平底37%、尖底5%、丸底22%、凹状7%である。

一方、口縁部叩き出し成形は具同 期甕の6%、古式土師器 期の6%を占める。又、甕で底部脇から胴部下半へのタタキ目後の縦ハケ調整を施すものは 期甕の52%、古 期の3%、底部脇から胴部にかけて全面タタキ目を残すものは 期甕の29%、古 期の33%、胴部タタキ目上面へのナデ調整が部分的に行われるものは 期の16%、古 期の44%、胴部への最終ナデ調整が顕在化シタタキ目は僅かに残るのみとなるものは 期甕の3%、古 期の19%である。

以上、各期の出土資料の様相をみたが、各器種とも形態や成形・調整技法上の変化は非常に漸進的なものであり、明確な画期は認められない。特に甕は、具同古式土師器 期に至って底部丸底の個体の増加や胴部下半ハケ目の消失、タタキ目上面へのナデを施す個体の増加、等の変化傾向を認めるものの顕著ではなく、古相と新相が共伴し続ける。しかし、具同古式土師器 期段階に少量の出現をみるタタキ目上面へのナデ調整が著しく進んだ甕(SX5-444・445・447)は具同 期段階には殆ど認められなかったものであり、新段階の指標として注目できるだろう。次に鉢においては、タタキ目を残す椀形の鉢の中に、タタキ目を全く伴わない平底・丸底タイプと、タタキ目上面へのナデ調整が顕著な個体の占める比率がともに増加し、具同古式土師器1期段階ではよりその比率が高まっている。こうした点から、変化を捉えにくい甕に対して、鉢はより新段階の要素が速やかに顕在化しているものと捉えられる。

(3)具同中山遺跡群、層出土資料の編年的位置付け

ここまで、具同中山遺跡群、層出土資料の特質についてみてきたが、最後に同資料群の高知県西部地域における編年的位置付けを行っておきたい。すでに見てきた様に、具同古式土師器期資料群は甕におけるタタキ目上面への最終ナデ調整が顕在化しておらず、こうした点から県西部芳奈遺跡⁽⁶⁾出土の芳奈式土器、西ノ谷遺跡⁽⁷⁾出土の古式土師器の前段階のものとして位置付けられる。一方、芳奈式土器に対しては、具同期資料のC-類甕(428)がその形態にやや共通性がみられ、又、かつて岡本健児氏が指摘された「外面に段部をなす」頸部形態についても本次資料の約2割がその特徴を引き継いでいるものの、芳奈式土器の特徴とされた「口縁部から頸部にかけての部分が全体の器長に対して長い」ものでタタキ目を伴わない甕に該当する資料は今回確認することができなかった。こうした点や、本次出土資料中では具同期の直前段階資料が欠落していることも考慮して、芳奈式土器に対する位置付けは今後の課題へと残し、本遺跡出土の具同期～古式土師器期資料群を県西部地域における弥生時代終末期から古墳時代への移行期段階の遺物群として位置付けることとしたい。

又、併行関係を高知県中央部及び北部に求めると、東阿波型土器等の搬入土器の出土をみた拝原遺跡、西分増井遺跡、ひびのき遺跡、小籠遺跡、松ノ木遺跡出土の弥生時代終末期～古墳時代初頭の資料が挙げられる。これらのうち、小籠遺跡⁽⁸⁾及び松ノ木遺跡⁽⁹⁾出土資料との比較検討を行うと、本遺跡SX4出土資料(具同期)は尖底・丸底の出現、甕胴部外面のハケ調整の減少化と全面にタタキ目を残す甕の出現等の特徴をもって、ヒビノキ式土器併行段階小籠遺跡ST5・7・9・18・19・21・22(土佐-2様式⁽¹⁰⁾)、松ノ木遺跡ST1・3・5(松ノ木遺跡-期)併行に位置付けることが可能である。

一方、本遺跡出土のSX5・土器集中16・18出土資料(具同古式土師器期)は東阿波型土器の共伴をもって、ヒビノキ式土器併行段階の小籠遺跡ST8・12～14・16・20・SK13出土資料(古式土師器1期)、松ノ木遺跡ST15・12・10・14(松ノ木遺跡-期)に併行するものとして捉えられる。しかし先述のように、具同古式土師器期資料はタタキ目を全面に残す甕が依然多数を占めつつ、ナデの顕在化をみる甕と共存するという傾向を認めており、県中央部・北部遺跡出土資料の様相に比較すると、新段階への変化が認めにくい。特に甕に認める、こうした弥生後期以来の伝統的要素が古墳時代初頭まで色濃く残る現象は、県中央部域よりも具同中山遺跡群出土資料においてより一層顕著に現れるといえるだろう。

今回の資料整理・報告にあたっては当埋蔵文化財センター出原恵三・久家隆芳、両氏より教示を頂いた。

[註]

- (1) 出原恵三・松村信博「弥生時代中期の土器と集落-高知県」『古代学協会四国支部第8回大会資料-弥生時代中期の土器と集落』1994年
- (2) 伊藤強『バーガ森北斜面遺跡』高知県伊野町教育委員会1999年
- (3) 松田直則・伊藤強・山崎正明・武吉眞裕・竹村三菜『具同中山遺跡群』高知県文化財団埋蔵文化財センター1997年
- (4) 松田直則・伊藤強・山崎正明・筒井三菜・久家隆芳『具同中山遺跡群 -1』高知県文化財団埋蔵文化財センター2000年
- (5) 出原恵三・池澤俊幸・久家隆芳『北高田遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター2000年
- (6) 岡本健児・木村剛朗『芳奈遺跡・芳奈向山遺跡』宿毛市教育委員会1978年
- (7) 出原恵三・曾我貴行「西ノ谷遺跡出土の古式土師器について」『西ノ谷遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター1993年
- (8) 出原恵三「小籠遺跡出土の弥生後期土器及び古式土師器」『小籠遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター1996年
- (9) 前田光雄「弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭の土器と集落」『松ノ木遺跡』高知県長岡郡本山町教育委員会2000年
- (10) 出原恵三「土佐地域」『弥生土器の様式と編年・四国編』木耳社2000年

[参考文献]

- 岡本健児「神西式土器の再検討」『高知女子大学研究紀要人文・社会学編第20巻』1972年
- 岡本健児・広田典夫『ひびのき遺跡』高知県土佐山田町教育委員会1977年
- 岡本健児「南四国における叩目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古稀記念・古文化論集』1982年
- 久家隆芳「弥生時代後期終末から古墳時代の土器」『具同中山遺跡群 -1』高知県文化財団埋蔵文化財センター2000年
- 下條信行・村上恭通他『岩木赤坂遺跡』愛媛大学法文学部考古学研究室1999年
- 出原恵三『拝原遺跡』高知県香我美町教育委員会1993年
- 出原恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』高知県春野町教育委員会1990年

具同 時期区分	出土地点	壺・甕・鉢・高杯	
期	炭化物集中1・ST1・XI層包含層		(期) 期 XI層 最上層
期	該当なし		-4層 包含層
期	SK5		
期	SK6		
期	SK4		
-1 期	土器集中2		
	土器集中1		

Fig.212 弥生土器時期区分と各期の様相(1)

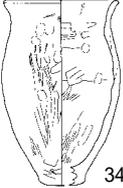
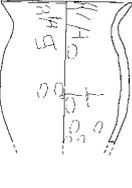
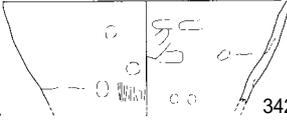
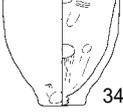
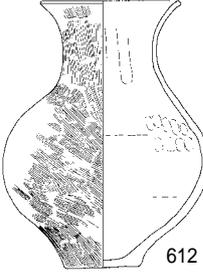
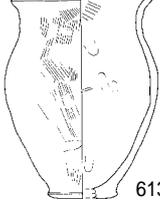
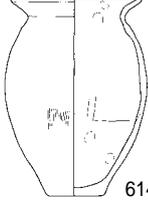
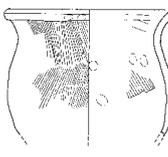
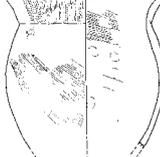
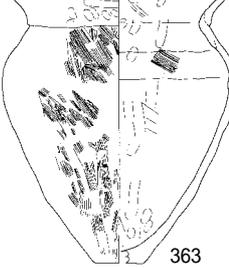
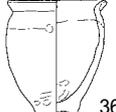
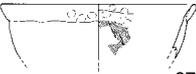
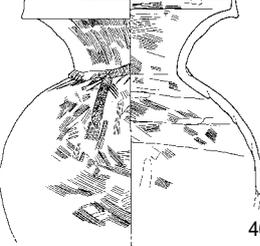
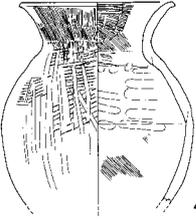
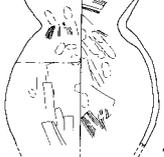
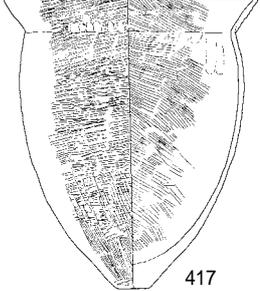
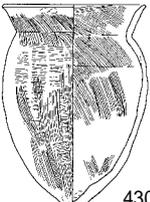
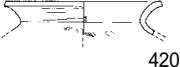
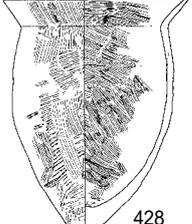
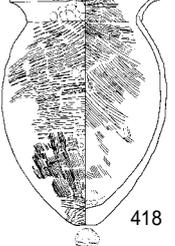
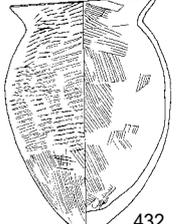
具同 時期区分	出土地点	壺	甕	鉢	
-2 期	土器集中7			  	
-3 期	土器集中19		 	  	
	土器集中9		 	   	
期	SX4	  	   	   	  

Fig.213 弥生土器時期区分と各期の様相(2)

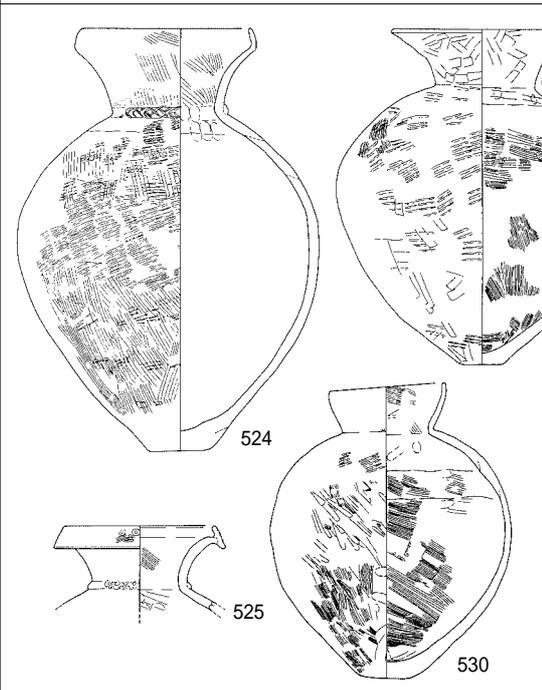
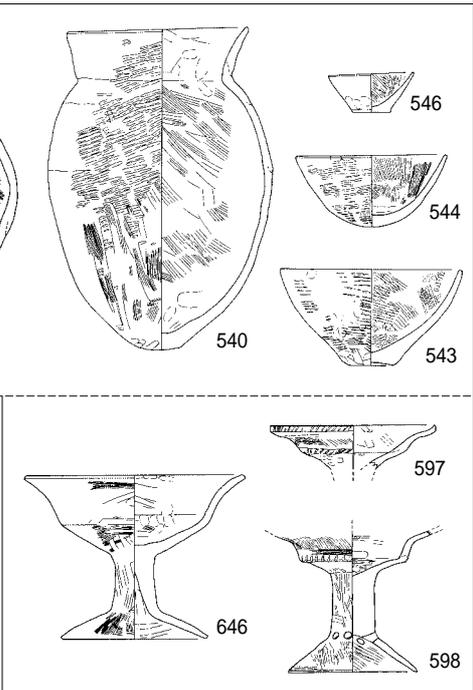
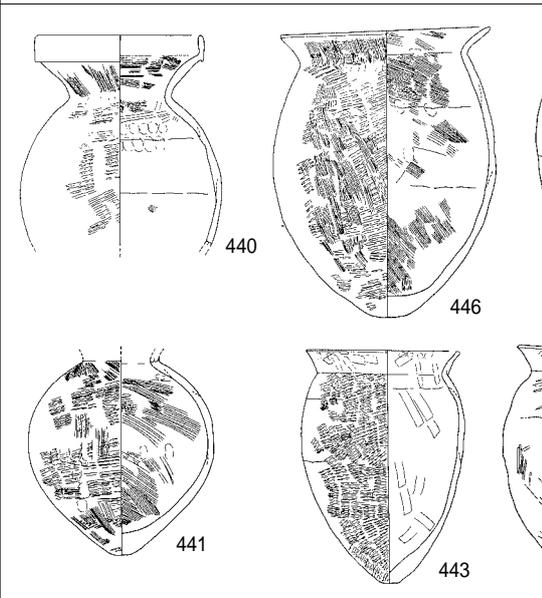
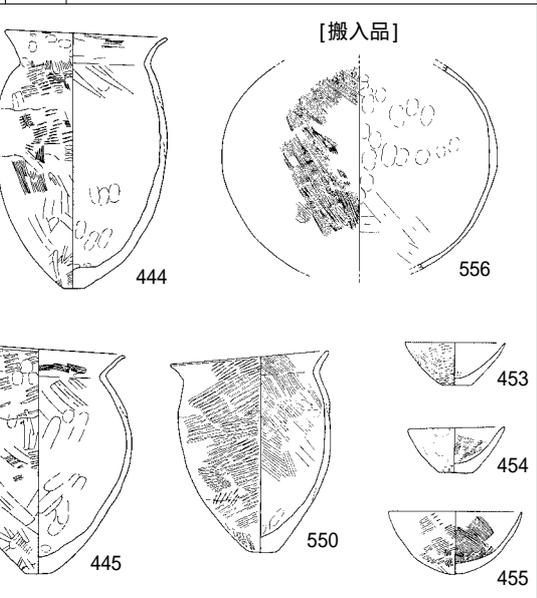
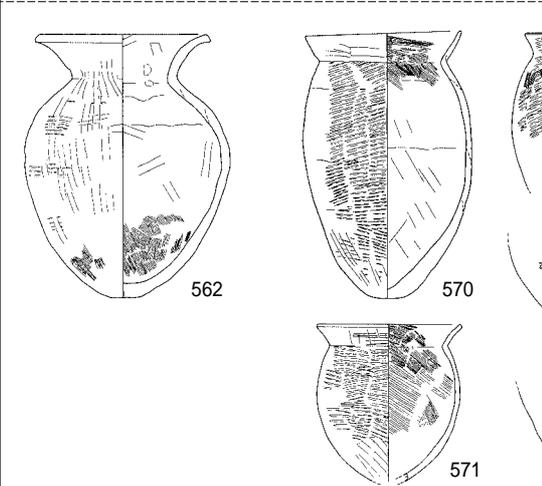
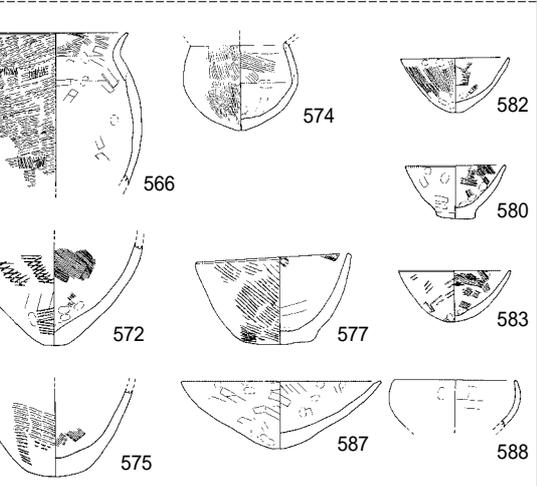
具同 時期区分	出土地点	壺・甗	鉢・高杯
期	土器集中15	 <p>524, 525, 530, 531, 540, 546, 544, 543</p>	<div data-bbox="861 622 925 920" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">土器集中20・層包含層</div>  <p>597, 646, 598</p>
古式土師器期	SX5	 <p>440, 446, 444, 441, 443, 445, 550</p>	<div data-bbox="1165 936 1260 967" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">[搬入品]</div>  <p>556, 453, 454, 455</p>
	土器集中18	 <p>562, 570, 566, 571, 572, 575</p>	 <p>574, 582, 580, 583, 577, 587, 588</p>

Fig.214 弥生・古墳時代初頭の土器時期区分と各期の様相(3)

第3節 具同中山遺跡群 における古墳時代の祭祀について

1. はじめに

今回の具同中山遺跡群 の調査では弥生時代終末から古墳時代中期の祭祀跡を13箇所、土器集中を5箇所検出している。祭祀跡は遺物は遺構に伴ったものではなく、遺物が集中して出土した箇所を主に認定したものであるが、焼土・炭化物を伴って検出されていることから、原位置にさほど変化はないと考えられる。ここでは の各時代における祭祀形態及び、遺跡内で最も多く検出した古墳時代中期における祭祀の変遷について考えていきたい。

2. における祭祀形態について

(1) 弥生時代終末期から古墳時代初頭

SF1、2、8と土器集中26があげられる。SF1は甕、鉢、高杯で構成され、手捏ね土器が1点出土している。鉢は平底で外面にはタタキ、内面にはハケが施されている。甕の底部は扁平な丸底で胴部が球形に張り外面にはタタキが残るもの(777.778)と内外面はヘラナデがなされるもの(779)がみられる。SF2は椀、高杯、甕で構成されており、焼土を伴っている。高杯の脚部には円孔がなされるもの(786)と、甕では底部が丸底で胴部は球形を呈し、口縁部は頸部から直立するもの(790.791)と外反するもの(789.793)が出土しており、一部タタキが残るもの(794)もみられる。SF8は壺、甕、高杯、鉢、甗と手捏ね土器1点が出土している。鉢は口縁部が屈曲し、外方に広がるもの(1004)と脚付(1003)がみられる。高杯は杯部は屈曲せず、口縁部にかへ緩やかに伸びている。甕の底部は丸底で、胴部が球形を呈するタイプと長胴を呈するものが出土している。長胴の甕はタタキ後ヘラナデが顕著である。土器集中26は甕と壺で構成される小集中である。甕の底部は扁平な丸底で、胴部に最大径をもち、長胴を呈するものが多い。タタキ後ハケ調整をするもの(856.863.865)とヘラナデをするもの(861.864)が出土している。SF2は甕の形態等からより前期に近い時期と考えられる。

(2) 古墳時代前期

SF6、7があげられる。SF6は壺、高杯、甕で構成されており、焼土を伴って出土している。壺では小型丸底壺が3点出土しており、内外面はナデと指頭が顕著である。甕では972の布留式土器が搬入されている。高杯は964と966のように杯部高は浅く、屈曲せずに緩やかに外方に伸び、内外面にはハケを施している。⁽¹⁾ 拝原遺跡ST5で同様な形態の高杯がみられる。SF7は壺、甕、高杯、椀で構成されており、SF6と同様に焼土を伴っている。高杯は杯部が屈曲し、外上方に伸びて外反するタイプ(981.982)と杯部高が深く、口縁部は屈曲して上方に直線的に伸びるタイプ(985)がみられる。甕の底部は丸底で胴部が球形を呈するものが多いが、一部タタキが残るものが数点出土している。SF6、7とも祭祀遺物はみられない。

(3) 古墳時代中期

SF3、4、5、9、10、11、12、13があげられる。調査区で祭祀跡が最も多い時期である。SF3、4、9、10は焼土を伴って検出されている。SF3は土師器椀、高杯、壺、甕、須恵器杯身、甕で構成され、手捏ね土器と石製模造品を伴っている。SF4は土師器高杯、壺、甕、甗、須恵器杯身で構成さ

れ、手捏ね土器が伴う。SF5は土師器椀、高杯、壺、甕、須恵器杯蓋、甗で構成され、手捏ね土器と土製模造鏡を伴っている。SF9は土師器椀、鉢、壺、甕、甗、須恵器杯蓋で構成され、手捏ね土器と土製勾玉が伴う。このSF9の北西では須恵器集中として取り上げた甕が出土している。底部に胴部から口縁部の破片を重ねた状況で出土しており、底部の標高からはSF9に伴う集中であった可能性も考えられる。SF10は土師器椀、高杯、壺、甕、須恵器杯身、杯蓋、甗、高杯、甕で構成され、手捏ね土器と石製模造品が伴っている。一部タタキが残る甕が出土しているが、混入と思われる。SF11は祭祀遺物は含まず、甕、壺、高杯、椀と、数点の須恵器で構成されている。須恵器は杯身2点、杯蓋2点、甗1点が出土しているのみで、甕は伴っておらず、須恵器に比べ土師器の出土数が圧倒的に多い。土師器甕の比率がその中でも高いが、椀、高杯は完形のものが多い。SF12は椀、鉢、高杯、壺、甕、須恵器甗で構成され、手捏ね土器を伴っている。SF13は甕、高杯、椀とともに、鉄鋤先が出土している。高杯は杯部が屈曲して外上方に伸び、外反している。甕の底部は丸底で、胴部は球形に張るタイプで占められている。鉄鋤先は古津賀遺跡⁽²⁾で出土例がみられる。

3. 祭祀の分布域について

具同中山遺跡群は中筋川下流域左岸に広範囲に亘る遺跡である。調査は1986年度以降継続的に行われ、縄文時代から近世に至る貴重な成果をあげてきている。具同中山遺跡群及び周辺の遺跡については、現在までの調査成果から各地点の自然地形との関係が推察されており、標高が高い部分での古墳時代から中世における遺構の存在が述べられている⁽³⁾。中筋川の現況地形図(Fig.5)ではの調査区は中筋川流域の自然堤防状地形のなかでも最も高い場所に位置している。具同中山遺跡群の古地形解析結果⁽⁴⁾では、中筋川の堤防より北側の後背湿地(現在の水田域)には埋没河川や湿地が推定されており、これにの調査区を合わせると、区寄りに大型河川と湿地が推定されている。実際に調査を進めると区から区にかけて緩やかに傾斜しており、祭祀跡の検出標高も同様な状況を示している。遺構の分布は弥生時代終末から古墳時代初頭(SF1・2・8)は調査区の微高地側に形成され、古墳時代前期(SF6・7)も同じ様な状況である。古墳時代中期では区の微高地側では小規模な祭祀を行い、調査区東部の湿地側において大規模な祭祀が行われている。

4. 古墳時代中期に祭祀の形態分類について

の調査では古墳時代中期の祭祀跡を8箇所検出した。中期の祭祀跡は1986年の調査で9箇所⁽⁵⁾、'89、'90年の調査では11箇所⁽⁶⁾を確認している。1986年の調査では検出された祭祀跡について次のような形態分類を行っている。類：河川岸の斜面に沿って集中して出土する。類：河川岸ではあるが、遺物は水平レベルで、円形状を呈して出土する。類はさらに、土師器のみで構成されるもの、須恵器・土師器で構成されるもの、土師器・須恵器で構成されるが、手捏ね土器の出土量が多いものに分類されている。これらの形態分類を参考ににおける分類を行った。では区から区にむけて緩やかに傾斜しており、類のように斜面堆積は見られず、類のみであった。

では 類を器種構成によって、A：土師器のみで構成されるもの。B：土師器・須恵器で構成されるもので、その中に祭祀遺物(手捏ね土器、石製模造品、土製模造品)を含むもの。C：土師器・須恵器のみで構成され、祭祀遺物を含まないものに分類していく。

- A SF13
- B SF3.4.5.9.10.12
- C SF11

- Aは土師器のみで構成されており、須恵器は含まない形態のもので、SF13があげられる。 - Bは土師器と須恵器で構成され、中に祭祀遺物を含むもので、SF3、4、5、9、10、12があげられる。SF3、4、9、10については焼土を伴って検出されている。祭祀遺物ではSF4、12からは手捏ね土器、SF5、9では手捏ね土器と土製模造品、SF3、10では手捏ね土器、石製模造品が出土している。須恵器の大半は杯身、杯蓋で、甕はSF4、12、甕は口縁部のみがSF3、10で出土しているが点数は非常に少なく、出土遺物のほとんどが土師器で占められている。 - Cは土師器と須恵器のみで構成されるもので、SF11があげられる。祭祀遺物は含まず、甕、壺、高杯、椀と数点の須恵器で構成されている。須恵器は杯身2点、杯蓋2点、甕1点が出土しているのみで、甕は伴っておらず、須恵器に比べ土師器の出土数が圧倒的に多い特徴をもつ。

前述したように1986年、'89. '90年の調査においては計20箇所に及ぶ中期の祭祀跡を検出している。これらを具同中山遺跡群 の祭祀形態分類に当てはめたものが、Tab.95の形態分類表である。

- B (土師器・須恵器で構成され、中に祭祀遺物を含むもの)に各祭祀跡が集中している。規模、遺物出土量ともに各祭祀跡により差異はあるが、具同中山遺跡群における祭祀形態を大まかに分類すると と同様に - Bが主体を占めている。各祭祀跡では祭祀遺物の量に差が認められる。祭祀遺物が遺物出土量に対し約50%前後を占めるものと30%以下のものとに分かれる⁽⁷⁾。前者では前調査のSF4、10、11、17、後者では前調査のSF5、8、9、12、13、14、16、20、21があてはまる。 の調査では後者のみで、祭祀遺物が最も多い祭祀跡のSF10では手捏ね土器と石製模造品が出土しているが、他の祭祀跡と同様に遺物出土量に比べ非常に少ない。また須恵器の甕を使用している祭祀跡はSF3とSF10であるが、破片のみで、一個体を使用したものはみられない⁽⁸⁾。

類型	具同中山遺跡群	具同 (1986年調査)	具同 ('89. '90年調査)
		SF6.7	
- A	SF13	SF1.3	
- B	SF3.4.5.9.10.12	SF5.4.8.9	SF10.11.12.13.14.15.16. 17.18.20.21
- C	SF11	SF2	SF19

Tab.95 具同中山遺跡群祭祀形態分類表(古墳時代中期)

5.まとめ

今回の調査では弥生終末期から古墳時代初頭、古墳時代前期、古墳時代中期に至る祭祀跡を確認した。具同中山遺跡群では古墳時代中期の祭祀跡を最も多く確認した。なかでも5世紀後半から6世紀初頭にかけて遺跡内では祭祀行為が最盛期をむかえている。これは具同中山遺跡群において祭祀が最盛期をむかえる時期と同様な様相を示している。祭祀形態においては - Bとした土師器と須恵器で構成され、祭祀遺物を含む形態が主体を占めている。また今回具同中山遺跡群においてほとんど空白期であった古墳時代前期の祭祀跡を確認することができた。 においては、古墳時代中期に祭祀の最盛期をむかえるが、弥生終末期から古墳時代初頭では配石を伴う祭祀的要素の強い遺構であるSX4、5が検出されていることから、連綿と祭祀行為を行っていたと考えられる。

[註]

- (1) 出原恵三 『拝原遺跡』香我美町教育委員会 1993
- (2) 出原恵三・廣田佳久・松田直則・山本哲也 「古津賀遺跡 具同中山遺跡」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会 1988
- (3) 松田直則・伊藤強・山崎正明他 「具同中山遺跡群」『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997
- (4) 松田直則・筒井三菜 「具同中山遺跡群 - 1」『中村宿毛道路関連発掘調査報告書』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000
- (5) 註2と同じ
- (6) 前田光雄・松田直則・廣田佳久・藤方正治・江戸秀輝 「具同中山遺跡群」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992
- (7) 具同中山遺跡群の1986年、89. 90年調査で検出された祭祀跡について、久家隆芳氏が分類を行っている。その中で祭祀遺物を含む祭祀跡について、祭祀遺物量が50%前後を占めるものと30%以下のものとに細分している。
- (8) 今回の調査で須恵器集中として取り上げた須恵器の甕はSF9に近いが、先行したトレンチ調査の際に確認したもので、全面において確認していないためここでは祭祀形態の中には入れていない。

第4節 四万十川下流域における古代の土器 -まとめと展望-

はじめに

今次検出された遺構のうち、古代のそれが占める割合は僅かである。しかし、基本層準 層が古代前期から後期に及ぶ遺物包含層であり、より上層からの出土分も含めて、当該期の遺物を一定量得ることができた。本節ではこれらの遺物の位置付けを試みるが、資料の性格による限界もあり、他遺跡の資料や成果も援用・比較する。下ノ坪遺跡は土佐中央部に位置するが、現在土佐では最も充実した古代の土器群が出土している。船戸遺跡と風指遺跡は、これまで土佐西南部としてはまとまった古代の出土資料が知られていた遺跡である。立地はいずれも四万十川下流から中筋川へ若干遡った川沿いに所在する。以下、同地域を中筋川下流域と呼称する。地勢や遺跡の位置については第 章を参照されたい。

さてここで、本稿で引用することの多い下ノ坪遺跡と船戸遺跡について、古代を中心に概要を述べる。下ノ坪遺跡は、既知の遺跡が最も多く集中することが知られる高知平野東部の物部川下流沿いに位置し、弥生後期前葉、古墳後期、古代の各時代の遺構・遺物が検出された。特に律令期においては遺構・遺物が濃密な区域があり、大型の掘立柱建物群も検出されている⁽¹⁾。土器も奈良時代前半から平安時代前半を中心に多量に出土しており、各種の遺構より出土した土器群は土佐の基準資料となっている。船戸遺跡では、縄文から中世の遺物が出土している。検出された流路と掘立柱建物群は古代から中世に属する。古代の土器は流路と包含層から各時代の遺物と共に一定量出土しており、層位から古代の中での時期を細分することはできない。

食膳具

まず、時期を把握し易い食膳具について検討し、煮炊具については後述する。以下、特記しない限り食膳具について述べる。

1. 分析の方法

以下のような方法で作成したTab.97を、基本的な検討資料とする。対象とした遺物は、今次調査では 層・ 層を中心とする全出土遺物、船戸遺跡ではSR1、SR2、SR3及び包含層出土遺物の未報告分や細片も含めた全てである。その他の遺跡では原則的に報告された遺物を対象とし、例えば下ノ坪遺跡では特に報告書の表6なども使用した。時期比定には註2、註3を指標とする。これらは、 期については下ノ坪遺跡出土資料を軸としている。土佐では当該期の土器編年に実年代を附与できる段階ではなく、参考のため註2と3で示された搬入品をTab.96にまとめた。今次調査⁽⁴⁾と船戸遺跡から出

期	搬入品	
2	平安 期中	
3		
4		
5		
6		
7		
7		平安 期新
1	平安 期中～新	
2		
3		篠窯伊野H期
1	虎溪山1号ないし丸山2号	
2		楠葉型黒色土器B類椀
3		白磁碗 類
1	龍泉窯系青磁碗-2類, 皿 類 和泉型瓦器森島 -2期	

Tab.96 土佐の土器編年と搬入品

期	土師器・土師質土器										黒色土器	須恵器								
	皿	杯	碗	(底部)			蓋	高杯	(赤彩)			杯	皿	杯	(底部)			蓋	高杯	
				杯A	杯B	皿B			皿	杯・碗					蓋	高杯	杯A			杯B
I-2	11	16		2	5	3	6	4	4	5	1		6	40	2	11	13	39	2	
I-3	17	8		2	1	2	8	6	14	4	5	4	2	24	17	10	2	29	1	
I-4	6	7		3	9		6	3			1		23	63	28	23		116	8	
I-5	26	28	2	13	2	1	9	3	5	1			27	50	31	7		18	5	
I-6	23	38	2	27	5		13	9		1		1	15	38	19	7		3	2	
I-7	58	79		124	24	2	45	10		1		5	44	117	82	22		86	8	
II-1	23	74		42	2		6					1	4	3	1	2		11		

報告の表6を改変。遺構出土遺物による。

Tab.97-1 下ノ坪遺跡H区

期	土師器・土師質土器						黒色土器	須恵器							不明	その他	
	皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯		皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯	壺			甕
			平底	有台						平底	有台						
I不						1		8	108	45	49	29		9	13	皿か杯7	2,皿B1
I-4~5	5	2	3	2				12	21	11	49	53	18			皿か杯1	皿B1
I-6~7	3	2	2	2	1			39	7	7	14	17					
II	5	4	3	7			4										緑7
III																	碗9

Tab.97-2 具同中山遺跡群(今次調査)

期	土師器・土師質土器						黒色土器	須恵器							その他		
	皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯		杯・碗	皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯		壺	甕
			平底	有台							平底	有台					
I不	皿B1				1	1		3	21	19	17	2		20	8	壺蓋1	
I-2~3									7		2	13					
I-4~5	1			1				10	31	21	37	34	1				
I-6~7		1	2	2				29	24	16	36	22					
II-1~2	14	5	9	26			3		1		4						
II~III-1	4	7	47	2												緑12,灰3, 篠鉢3	
III	2	2	1											1		碗か杯1	
不可分															4		

Tab.97-3 船戸遺跡

- 1.「I不」は、I期であることは認めるが、小期が不明なもの。「不可分」は時期不明なもの。
2. 原則として口縁部でカウントした。
- 3.(底部)(杯底部)(赤彩)は独立したカウント数である。つまり、(底部)に数えられたもののうち、口縁部まで残存するものは該当器種に重複して数えている。(赤彩)先土師器の該当器種に重複している。
- 4.「有台」は有高台、「緑」は緑釉、「灰」は灰釉陶器。
5. その他、註6参照。

Tab.97 時期・器種別出土遺物点数

土した土器は、資料の性格上各個を一小期に確実に比定することが困難な場合が多いので、例えば 期については -2~3期、 -4~5期、 -6~7期という幅を持たせて区分した⁽⁵⁾。このような区分でもなお比定困難なものについては、比定不可能分として表示した。 ~ 期については今次調査と船戸遺跡で傾向に差があることと、土佐西南部の編年の不明瞭な部分の為にやや異なる区分となった。具体的には後述する。

2. 成果と考察

上記のような方法により、Tab.97を作成した。これをもとに以下の項目について検討する。

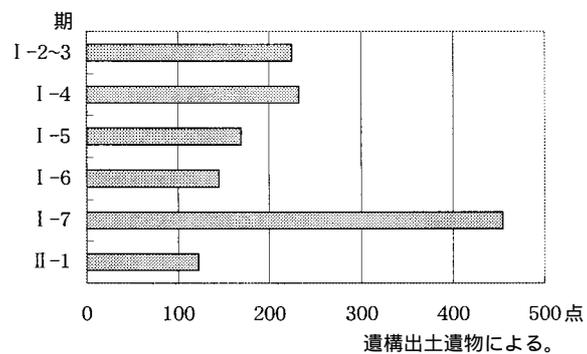
(1) 時期別土器点数

Tab.97から、まず時期毎の土器点数についてTab.98を得た。今次調査と船戸遺跡の比較より抽出できる点として、まず船戸遺跡では -2~

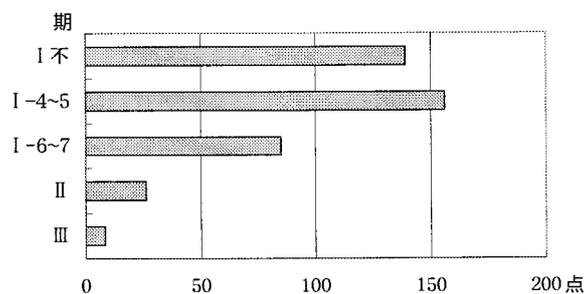
3期に比定できるものが一定量存在することが挙げられる。また、 期から 期においても差異があり、船戸遺跡で一定数が出土しているのに対して、今次では急激な減少がみられる。これに関連して問題となるのは底部が下方あるいはやや外方へ踏ん張るように突出し、ヘラで切り離される平底の土師質土器杯で、船戸遺跡では一定数が出土しているが、今次は1351や1595が該当する可能性を持つのみである。このタイプは高知平野での良好かつまとまった出土例がなく、同平野とは異なる地域色として捉えられる。したがって明確な編年的位置付けができない状態にあるが、形態や瀬戸内地域の資料との比較から考えて、

期の中頃から後半を中心とする時期に属するものと推定でき、Tab.97及びそれに基づく各図表では「 期~ -1期」に含めた。本節ではこの器形を杯D2と仮称する。今次出土遺物中に同類が僅少或いは皆無であることは、遺跡の消長を示すものと考えられる。

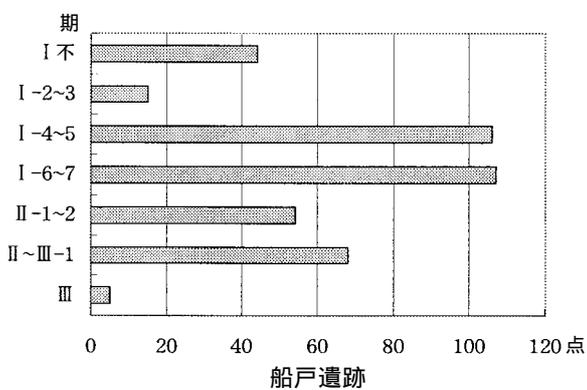
なお、Tab.98下ノ坪遺跡H区は遺構出土遺物による資料であるが、同調査区は遺構からみても 期末に盛行している。また同遺跡は、少なくとも 期まで、少量ながら遺物が出土している。



下ノ坪遺跡H区



具同中山遺跡群(今次調査)



全てTab.97より作成、その他註7。

Tab.98 時期別遺物点数

(2)土師器と須恵器、土師質土器

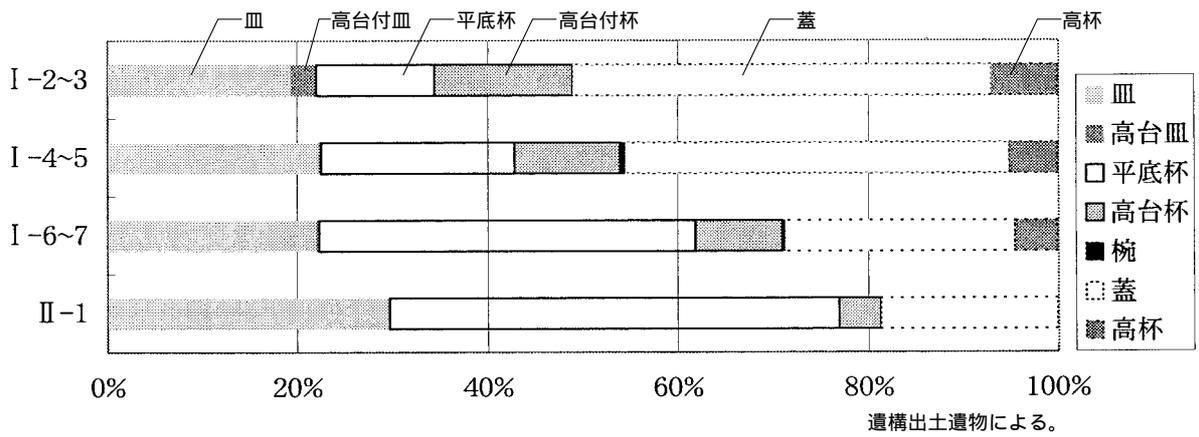
土師器、土師質土器などの呼称については、以下註3に準ずる。

まず明らかな事項は、須恵器の消長である。註2と3で、 期に至って食膳具が速やかに酸化焰焼成化することが指摘されたが、Tab.97より土佐西南部においても同様の軌跡をたどったものとみられる。次に 期における土師器の比率をみれば、Tab.97にあげた下ノ坪遺跡に比して、今次調査および船戸遺跡(以下両遺跡)では極めて低いことを指摘できる。註2と3では、土佐中央部において -4期以降の土師器の全てに回転台が使用されていることや、律令期の土師器が須恵器生産を基盤としていることが推察できたが、両遺跡でも回転台の使用を想定させるものは存在するが否定できるものは存在せず、この地域においても同様の理解をしておくことができる。さらに、両遺跡で確認できた土師器自体の僅少さは、現在のところ土佐西南部に共通する現象となっており、下ノ坪遺跡以外でも土師器の各器種が一定量出土している高知平野東部との間に相違が看取できる。それが肯定されるならば、各々の地域における 期の土師器の生産と使用に関して特性が指摘でき、土器生産とその背景について言及することができる。土佐西南部をはじめとする各地域で調査例が増えれば、より明瞭な言及が可能となる。

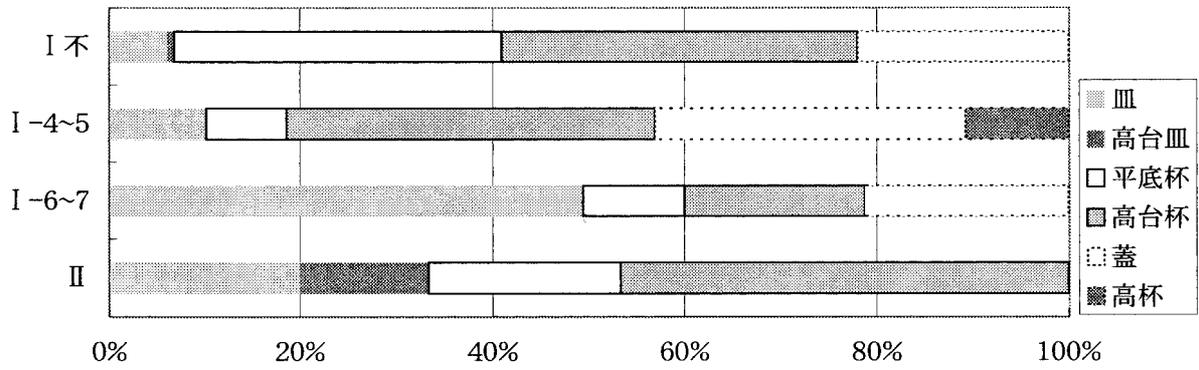
次に、 期の土師質土器について検討する。両遺跡において 期から -1期頃に比定できる土師質土器の発色は斉一的で、灰白色あるいは淡褐灰色の白っぽい色調で、焼成不良の須恵器との区別が困難である。後続するとみられる土器や高知平野との比較によって土師質土器とした。今次では1350の他、未報告遺物の9点がこれに該当する焼成と器形を呈するが、船戸遺跡の該当器種はほとんどがこの焼成・色調を呈する。高知平野東部における 期末から 期の変化の一つとして、酸化焰焼成の食膳具の色調の変化が挙げられることは註2で触れられており、焼成においてもなんらかの変化があったものと考えられる。しかし、発色の変化は、同地域では必ずしも急激かつ斉一的なものではなかった。今次調査及び船戸遺跡では、 期に至って須恵器とはいえないが 期の土師器とも異なる焼成と色調への変化が明確に看取でき、また高知平野東部に比してその色調は画一的で、 期の土師器との差異も比較的明瞭である。以上のような色調の特徴は焼成法に起因するものとみられ、土器生産体制の特質とその変化に関連して、今後の資料の蓄積を待って検討すべき課題の一つと言えよう。なお、船戸遺跡で先述の杯D2に該当しない -1～2期の土師質土器と杯D2の胎土及び色調を比較すると、双方とも上記の白っぽい色調は共通であり、胎土については杯D2の方に砂粒のやや少ないものが多い。また 期から 期への転換に関しては、この後にも適宜触れる。

(3)器形組成とその変化

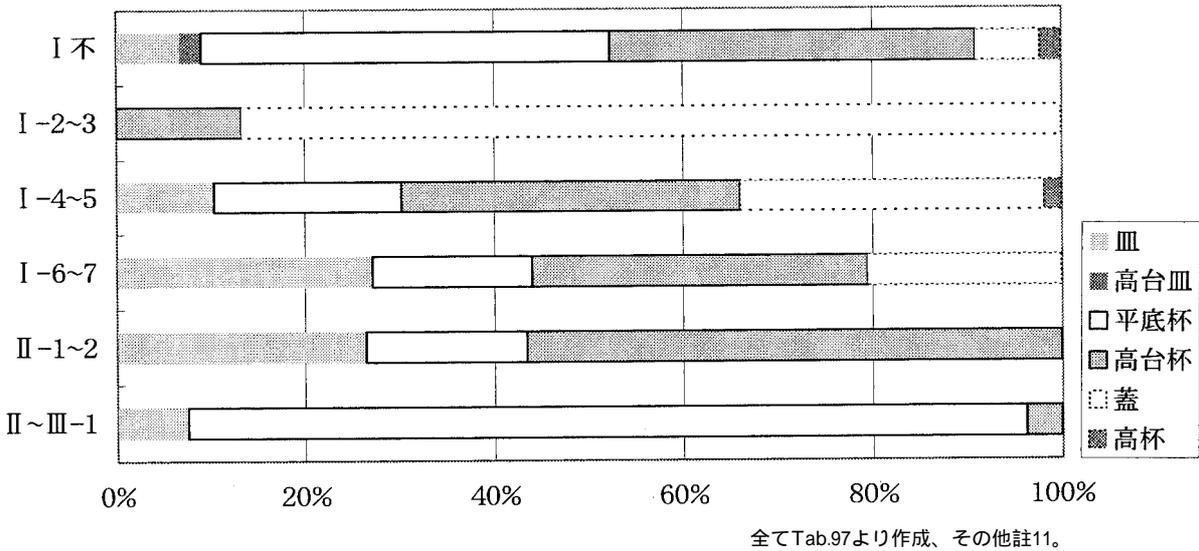
Tab.97からTab.99を得た。資料がそろっている -4から 期を中心に考える。3遺跡からまず共通して読み取れることは蓋と高杯の消長であり、前者は 期前半から 期初めにかけて漸減し、後者も 期に続かない器形である。即ちこれら自体が律令的な背景を持った器形であり、蓋については 期の中でも漸減するといった見方が可能である。次に杯形式をみると、下ノ坪遺跡では -5期以降杯Aが杯Bを凌駕している⁽¹²⁾。それに対し今次調査と船戸遺跡では、Tab.99の如く 期後半も杯Bの多い状態が続く。換言すると、下ノ坪遺跡では杯Aが漸増するのと対照的に杯Bは蓋と共に漸減するが、今次調査と船戸遺跡では杯A、杯Bともに 期においては明確な組成上の変化をみせ



下ノ坪遺跡H区



具同中山遺跡群(今次調査)



全てTab.97より作成、その他註11。

船戸遺跡

Tab.99 時期別器形組成

ず、期には一時高台付き杯が増大する。このような認識はTab.99の「不」分を考慮しても変更の必要がなからう。⁽¹³⁾ 風指遺跡でも、形態などから-5~7期を中心とする時期に比定できる須恵器杯があるが、報告の包含層出土分のうち杯Aが15点、杯Bが22点認められる。⁽¹⁴⁾ なお、杯Bの時期比定には高台の形態その他を手掛かりとしている。⁽¹⁵⁾

以上の結果を大局的にみれば、Tab.99の3遺跡における器形組成の間には一部を除いて同軌性を看取でき、土佐中央部以西の古代前期中頃から後期初めの器形組成およびその変遷のモデルを推測することができる。そしてその中で、期後半の杯形式内での組成比などに地域差がみられる結果となった。なお今次調査の-4~5期は、土師器や高杯が、低比率ではあるが中筋川下流域の他遺跡に比べれば一定揃っていることが、Tab.97や風指遺跡、具同中山遺跡群'89・90年度調査区との比較などから窺える。また船戸遺跡では長頸壺をはじめとする壺の多さを指摘できる。

(4) 須恵器皿の口縁部形態

主に須恵器平底皿の口縁部形態について、時期や地域による傾向が窺える。形態の分類については註2に依拠することとする。ここで注目する、口縁端部内面に凹線を表現する形態はb形態と呼称する。まず下ノ坪遺跡H区で様相をみるため、報告書掲載の遺物を対象としてTab.100-1を得た。⁽¹⁶⁾ 同表を含め以下に記す点数は、口縁部を確認できるものを対象としたものである。Tab.100-1より、-4期には皿において口縁部b形態が主流化しているが、後続の-5期以降には非主流に転じることが看取できる。杯については表の時期を通じて確実なものが1点(SK20)、可能性のあるものが2点挙げられるのみであり、例外といえる。以上のようなb形態のあり方は、白猪田遺跡や小籠遺跡および土佐山田町須江古窯跡群をみても齟齬はなく、高知平野東部の傾向とみておくことができる。⁽¹⁷⁾ 口縁端部内面を凹状に作出する手法は、-4期では端部を上方或いはやや内側に明確にひき出し、端部下で一度外反させること等とあわせて、明確に屈曲した形状を意識する。しかし、今次調査や船戸遺跡、あるいは土佐山田町須江古窯跡群の一部では、端部を若干巻き込むのみのもの、突出が弱いもの、弱い凹線状に表現されるもの、端部下の外反がみられないもの等がある。それらは傾斜が強く低い体部に伴う場合が多く、-5ないし-6期以降に多い属性を表しているものと解釈できる。Tab.100-2、Tab.100-3は、今次調査と船戸遺跡について、そのように形態などから時期比定したTab.97中の須恵器皿におけるb形態の比率であるが、-4期のみならず-5~7期相当のものでも同形態が過半を占めていることが注意される。杯についても、船戸遺跡では55点のうち5点を確認することができる。風指遺跡の報告では、包含層出土の須恵器皿29点中27点、同杯28点中1点がb形態である。以上のように高知平野東部と中筋川下流域では、消費地遺跡における須恵器皿の口縁部b形態の展開と継承のしかたが異なっている可能性がある。なお今次調査及び船戸遺跡においても、期では高知平野東部と同様に口縁部b形態がほとんど継承されないということは、他の形態的属性や法量分化とともに、期の皿が新しい背景をもって成立していることの傍証と考えられる。このことは註2と3で述べられた諸要素とともに、期への画期を示す事象に加えられるものと考えられる。

さて、須恵器皿の口縁部形態について近頃の例をみると、b形態のものがまとまっている例として、まず枝朶下池4号窯址、悪社谷2号窯址、枝朶下池2号窯址、枝朶下池5号窯址といった松山平野周縁の窯跡⁽¹⁸⁾があげられる。これらの窯跡では、報告をみる限りb形態が主流であり、またその形態と調整や、一緒に報告されている遺物を土佐の編年観で見れば、いずれも-4~5期以降に相当する属性を有している。伊予ではその他、口縁部b形態の須恵器皿が出土している消費地遺跡もあるが、報告の限りでは同形態が客体である例が存在するのに対して、その逆の例は管見に入っていない。例えば西条地域の池の内遺跡では、皿を含む須恵器がまとまって出土しているが、口縁部b形態の平底の皿は報告中に存在しない。次に讃岐では、8世紀前半に位置付けられている森広遺跡SD7801でb形態の優越が看取できる⁽¹⁹⁾。また十瓶山窯跡群の北条池1号窯跡、庄屋原2号窯跡でも同様の口縁部形態の皿が複数採取されており、主流となっている可能性もある。両窯跡は8世紀中頃から後半に位置付けられている⁽²⁰⁾。その他、郡家一里屋遺跡区SD13、同区SR02、同包含層、同区西部SR02、川津一ノ又遺跡SD11で散発的な出土例はあるが、それらも含めて、8世紀後半から9世紀後半の中で捉えられているその他多くの消費地資料において、口縁部b形態が優越する傾向はみられず、むしろ客体である例が多い⁽²²⁾。阿波でも、管見ではそのような傾向は指摘できない⁽²³⁾。

上記のような知見をまとめると、讃岐、伊予、土佐における須恵器皿での口縁部b形態の採用は、奈良期前半から平安初期にかけて一応その例をあげることができる。土佐では8世紀中頃ないし後葉に一旦同口縁部形態が主流化し、高知平野東部では、このことに符合する例が窯跡と消費地遺跡の双方に存在する⁽²⁴⁾。また土佐西南部の諸消費地遺跡では、同形態の普遍化が平安初期まで継続しているとみられる点に特徴を認められる。b形態の作出手法については、いくつかのバリエーションがあるものの、やはり回転台不使用の土師器とは異なる須恵器的な手法のものが多く、その変化も、時期と共により回転台使用に適した方法で簡略化する点では共通しているようである⁽²⁶⁾。口縁部b形態が土師器の影響を受けたものであることを踏まえて、以上のような諸事象について考えれば、まず、同形態の盛行が持続的である土佐西南部において、期の土師器食膳具の出土比率が極めて低く、食膳具生産における須恵器の偏重がより強かったとみられることが注意される。これに対し、同形態が-5期頃以降鎮静化する高知平野東部では、回転台使用ではあるが須恵器にはない属性を有す土師器が期において一定普及していることが対照的で、土製食膳具の需要と生産における地

期	%	b形態 点数	全皿 点数	該当遺構
I-2~3	0	0	2	SB9,SK16
I-4	75	6	8	SB17,SK22
I-5	12	2	17	SB18,SK30
I-6	10	1	10	SK27,33,SD40
I-7	25	4	16	SB20,21,22, SK21,34

Tab.100-1 下ノ坪遺跡H区

期	%	b形態 点数	全皿 点数
I不	100	3	3
I-4~5	82	9	11
I-6~7	62	24	39

Tab.100-2 具同中山遺跡群(今次調査)

期	%	b形態 点数	全皿 点数
I不	100	3	3
I-2~3	-	0	0
I-4~5	78	7	9
I-6~7	55	16	29

Tab.100-3 船戸遺跡

Tab.100 須恵器皿口縁部におけるb形態の比率

域差が表れている可能性がある。口縁部 b 形態の採用と展開も、このような問題と関連している可能性がある。次に、以上のような諸問題に関わる当面の課題を列挙すれば、まず土佐西南部では下記の神ヶ谷窯跡に関わる問題点があげられる。十瓶山窯跡群に関しては、b 形態の製品がどのように消費されているのか、或いはいないのか、またその事と各窯との関係の解明が期待される。伊予については、器形組成や変遷を知ることのできる良好な消費地資料の蓄積を待つべきであろう。このような課題が解明されれば、「回転台土師器」や赤色塗彩土師器を巡る問題と併せて、地方における当該期の土器生産を理解する為の視点となろう。

(5) 神ヶ谷窯跡について

上では中筋川下流域の3遺跡と、その理解に有効な遺跡について述べてきた。ここで扱う神ヶ谷窯跡は、3遺跡より約10km上流の中筋川沿いで、同じ幡多郡内の隣郷に属する。同郡で発掘調査が行われた窯跡は、本窯跡と鹿々場窯跡のみである。出土遺物の時期は -5期を中心とする時期に比定できる。報告の組成比率では杯Aが37%、杯Bが17%を占める。また皿の口縁部 b 形態については、報告書掲載の口縁部を残す皿の総数49点中で8点を数えた⁽²⁷⁾。このような数値は、既述したような同流域の消費地遺跡での傾向に矛盾するものである。現状でこれを解釈するには2つの方向性が考えられ、第1は窯跡という遺跡の性格に起因するとみる方向である。この見方は、何らかの理由で消費地の器形組成や形態属性の量的な傾向が反映されなかったという方向へ展開する。工人集団の問題へと繋がっている可能性もある。第2は当窯跡の遺物群から、未知の消費地の様相を想定する方向である。そしてこれら2つの因子が関連あるいは複合している場合も考えられる。第1の方向で展開する術を持たないので、以下、第2の方向で仮定を重ねて展望を述べてみる。この場合、問題にしている杯皿の形態や組成に関して、神ヶ谷窯跡の生産が、既述したような中筋川下流域の遺跡群とは異なる傾向の需要に対応しているということであり、その要因として小地域色、或いは遺跡の性格差の2通りが考えられる。仮に後者の場合は、既述の3遺跡が出土遺物などからいずれも水運至便な拠点の遺跡である可能性が高いので、それと異なる遺跡を想定してみる必要がある。しかし、現状ではこのような可能性を検証するための資料が揃っていない。

ところで、神ヶ谷窯跡と既述の3遺跡の須恵器について指摘しておきたい点がある。神ヶ谷窯跡の須恵器にみられる特徴の一つとして、ほとんどの杯皿の内面にみられる、粗い条痕を残す特徴的なナデ痕跡があげられる。外面の立上りや底部の仕上げも、丁寧さに欠けるものが多い。蓋においても天井部外面のヘラ切り痕跡の著しいものが存在する。このような須恵器は今次調査、船戸、風指の各遺跡にも存在するが、あくまでも少数である。例えば船戸遺跡SR1、SR2及び 区包含層で報告されている須恵器杯皿で内底を観察できる82点のうち、上記の特徴的な内面のナデ痕を認めるものは11点で、底部や立上りおよび蓋の天井部も、神ヶ谷窯跡出土品のように粗いヘラ切り痕や段差を認めるものはごく少ない。このような違いは、形態などの諸属性とあわせて見た場合、時期の違いとして全てを説明することが難しい。既述の皿口縁部の問題とあわせて、工人集団や供給対象などの問題と関連している可能性が考えられる。またこのようにみれば、上記の各消費地遺跡には複数の生産単位からの須恵器の供給が想定できる。なお、高知平野東部で簡略化が進む -5~7期の須恵器と、プロポーションなどからみて時期的に近いと思われる船戸遺跡の須恵器を比較した場

合、後者の方に底部などの調整が丁寧なものが多い。

(6)特徴的な杯蓋

同郡内ながら隔たった神ヶ谷窯跡と鹿々場窯跡では、蓋「類」が存在し、「郡単位での須恵器生産」が想定されている。⁽²⁸⁾ 同類は高知平野東部で見かけない特徴的な形態であり、今次では1661が該当する他、具同中山遺跡群の先次調査でも関連すると考えられるものが複数出土しており、当該地域に一定普及した特色として認識することができる。⁽²⁹⁾

(7)爪形状圧痕

神ヶ谷窯跡では、「ほとんど全ての杯Bの底部外面に爪形状圧痕が認められる」ことが報告されている。圧痕は國下多美樹氏の分類ではE類に属するものがほとんどで、僅かにRやHs、Nd類の可能性を持つものが認められる。⁽³⁰⁾ 放射状の痕跡は認められない。爪形状圧痕を高台貼付時の痕跡が切るものは存在するが、その逆は認められないことは國下氏の観察とも一致する。以下 期の須恵器を対象に述べる。既述の3遺跡で爪形状圧痕を検討すると、杯Bにおいて今次調査で86点中8点、船戸遺跡で89点中5点、風指遺跡の報告掲載分21点中6点を認めることができた。⁽³¹⁾ 杯B以外で確認したものはない。圧痕の諸属性および状態は神ヶ谷窯跡に準ずるものである。時期的には -5期から -7期にまで比定できるものが各々存在する。高知平野においては、爪形状圧痕は 期前半に位置付けられる福井遺跡で報告されているのみであり、上記のような様相は、まず中筋川流域の特色として把握できる。そして神ヶ谷窯跡では、杯Bにおいて爪形状圧痕を残す技法が貫徹しており、上記の3消費地遺跡には同圧痕を残す製品が少数入っていることになる。ただし、それらの中で神ヶ谷窯跡の製品らしきものは積極的に指摘できず、調整や形態などからみれば、むしろ異なっているものが多い。なお、同圧痕についてはその性質上、圧痕形成後の調整や高台貼付などによって消された可能性を否定できない資料も少なくなく、定量的な扱いには注意が必要であることを付記しておく。

(8)食膳具小結

a) まとめと留意点

中筋川流域の諸遺跡および関連する遺跡出土の食膳具から指摘できる事柄を述べてきた。資料の性格により断片的な記述となったが、それらをまとめて何らかの展望を得ることもできる。まず中筋川流域では律令期の土師器が僅少であった。その他の高知平野との比較や、消費地遺跡と神ヶ谷窯跡の関係について、 期後半に関して模式化したのがTab.101である。当地域の須恵器生産に関して、口縁部b形態の堅持や一部の特徴的な手法にあらわれているような共通性を窺うことができる。久家分類の蓋 類或いはその類品は、現段階では少量ながら幡多郡域での展開を捉えられた。そして神ヶ谷窯跡と他の遺跡の比較からは、工人集団や地域差、或いは遺跡の性格を視野に入れた土器生産の一端を示唆している可能性を考えた。中筋川下流沿いの遺跡では、 -5 ~ -7期の杯の組成が高知平野と逆で杯Bが優位であり、神ヶ谷窯跡出土須恵器にはそれらの遺跡と異なる様相もみられた。以上の推察において、その根拠とした資料には一括性に欠けるなどの限界があり、将来の良好な資料の蓄積によって是正される点もあろう。

	高知平野東部	中筋川流域	
	消費地遺跡	消費地遺跡	神ヶ谷窯跡
杯組成	平底主体	有高台主体	平底主体
須恵器皿の口縁部b形態	非主流	主流	非主流
丁寧さ	-	丁寧なもの存在	粗雑
粗いナデ	-	少数存在	主流
爪形状圧痕	例外	少数存在	ほとんど全て
蓋皿類	不在	若干数存在	少数存在

※ I-5~7期を対象とする。

Tab.101 各地域・遺跡の傾向模式表

b) 中筋川下流域の遺跡群の動向

中筋川下流域の遺跡について、食膳具からみた消長をまとめる。時期区分は如上に準ずる。

期 奈良時代及び平安初期に該当する。 -2~3期に比定可能な遺物は今次調査では極僅少で、船戸遺跡や風指遺跡に存在した。しかし、 -4期以降に比定できる須恵器が増加する点は、3遺跡ともに同様である。具同中山遺跡群⁽³²⁾89・90年度調査区でも、一応同期以降の土器が確認できるが、期以降に比べれば少量である。高知平野では全般に、 -4期以降に安定的な土器様相がみられるとともに、土器の出土量も増加することが指摘されている⁽³³⁾。また最近の調査で、今次調査区の南方の川沿いでも 期相当の遺物が出土している⁽³⁴⁾。

期 今次調査区では遺物量が急減し、本期後半以降は僅少となる。次の繁栄は 期を待たねばならない。これに対して風指遺跡と船戸遺跡では、緑釉陶器や篠窯産鉢に加えて既述の土師質土器杯D2が多数出土しており、継続的な活動が確認できる。

-2~3期 期はほぼ平安時代後半に該当すると考えられる。土佐西南部では -1期相当の資料が抽出できていない。さて本期相当の遺物は、風指遺跡と船戸遺跡でも例外或いは僅少となる。対して具同中山遺跡群⁽³²⁾89・90年度調査区では、土器椀に加え土師質土器小皿と杯も、形態や法量からみて本期に比定可能なものが多数出土しており、アゾノ遺跡でも本期相当の土器椀などが出土しはじめる。これらは次期の活況への胎動であり、先行した地点を示している。

期 流通の変化を背景とする画期である。具同中山遺跡群の89・90年度調査区とアゾノ遺跡に加え、一旦低調であった今次調査区と船戸遺跡でも貿易陶磁器や畿内産瓦器、東播系須恵器などが多量に出土し、活況を呈す。東海地方の製品もみられ、今度も出土している。このような搬入品の量と内容、および遺跡の拡がりは、これら各遺跡の先行期は勿論、同時期の土佐の他地域と比較しても特異であり、当時の広域流通をめぐる状況下で四万十川下流域及び中筋川流域が有した意味や、権門との関係が注意される⁽³⁵⁾。

煮炊具

四国における当該期の煮炊具の様相については、不明瞭な点が多い。土佐については、古代初期頃の様相は食膳具同様ほとんど把握することができない。8世紀中頃以降については一定の出土例があり、後述するように、物部川下流域では時期比定の指標となる資料も存在する。今次調査では当該期に属するとみられる甕型の煮炊具(以下土師器甕)が、既述のような食膳具とともに一定量出土しているため、その分類と位置付けを試みる。対象とする資料は、今次調査では層・層を中心とする全出土遺物、船戸遺跡ではSR1、SR2、SR3及び包含層出土遺物の未報告分や細片も含めた全てである。下ノ坪遺跡や土佐国衙跡については、報告された遺物を対象とする。全体が復元できる個体の僅少さから、まず口縁部形態と胎土からみていくこととする。因みに胴部については、Fig.216、217や御産所権現山遺跡資料から、9世紀前半以前では総じて張りのない非球形で、外面に粗いハケを施すものが中心になるとみてよい。

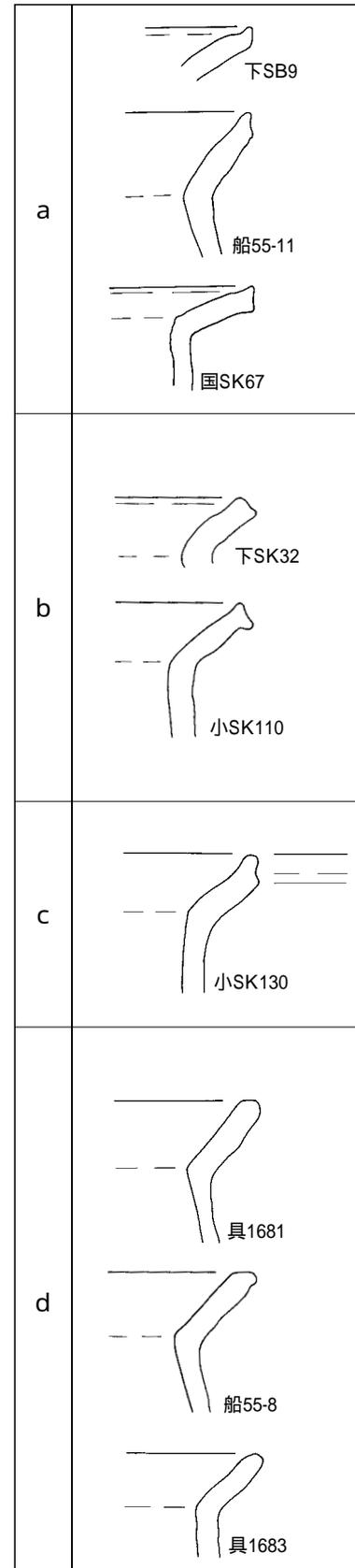
1. 口縁部の形態

a形態 外反して外端面は垂直となる。端面の下側の角を意識的につくったり、上端部がやや尖るものがある。bやc形態に似るものもあるが、各形態と胎土について後述のような連繋傾向が看取できることから、区分が必要と考えた。現状では、胴部との関係について不明瞭な点も多い。

b形態 基本的に断面方形の端部を持つ。a形態に似るものについては、端面が斜面になることなどを指標とした。端面が横ナデによりやや凹状をなすもの、若干拡張されるもの、やや摘み上げられるものなど、バリエーションがある。口縁部外面で2段程度のヨコナデが確認できるものも多い。

c形態 外反して端部は摘み上げられ、断面三角形に尖る。口縁部外面で2~3段のヨコナデが確認できるものも多い。特徴的な形態で、胎土との関連も相俟って判別の容易なものが多いが、図上ではaやb形態との中間的なものも若干存在する。他形態との区別については後にも述べるが、b形態の上端部角を摘み出したような、外端面の明瞭な凹みを本形態の指標とした。

d形態 やや内湾しながら外反する。端部断面の角は丸みを持ちながらも、一応端面を意識したものが多い。端面がやや凹になるもの、若干肥厚するもの、丸くおさめるものなどもある。



下 = 下ノ坪、国 = 土佐国衙、小 = 小籠、船 = 船戸、具 = 今次調査

Fig.215 土師器甕の口縁部形態例

しかし、上記の各形態との区別に迷うものはほとんど存在しない。

2. 胎土

以下では特徴的な 群及び 群を軸として設定した胎土群について述べる。もちろん全ての胎土がこれらの群で分類できるわけではない。

群 チャートの砂粒や砂岩、泥岩の円粒を含む。胎土ベースは密であるが、弥生・古墳時代の在
地土器の延長で理解できる含有鉱物と焼成である。色調はにぶい黄橙色を中心とする。下ノ坪遺跡
SX2では移動式カマド(以下カマド)も出土しているが、本群では普遍的にみるものではない。

群 0.5~2.5mm前後の石英単独の角粒を多含する。長石等も含む。雲母や角閃石は含まない。断
面は粗く、細かい層状に見えるが硬質の焼成で、 群のような在地の伝統的な胎土及び器壁とは一
線を画す。色調の傾向は橙色ないし黄橙色である。含有鉱物、焼成ともに特徴的なものを一定普遍
的に認めるが、他の胎土群に似るものもないわけではない。下ノ坪遺跡SB9などではカマドも出土
している。

群 大小の角粒を多く含んで在地的な土器と一線を画す点は 群に通ずるが、花崗岩に由来する
とみられる大礫を特に多く含む特徴がある。礫は大きいものでは7mm前後に及び、長石を基本に、
石英を同一礫内に含む点⁽³⁷⁾が特徴的である。雲母はほとんど含まない。土佐出土のものは、小気孔が
みられ硬度も 群に劣るものが多い為か、砂粒が剥離しやすい。にぶい黄橙色を中心とする明るめ
の色調である。このような諸特徴は、土佐及び後述の伊予出土のものについては、画一性が極めて
強い。土佐ではカマドの出土例がない。

群 群に準じ、雲母片を多く含む点のみが異なる。Tab.102及び後述のように出土点数は少
ないが、現在確認しているものはいずれも堅緻な胎土である。カマドの出土例はない。

群 含有鉱物の種類では 群と差異化できないが、 群で特徴的である大粒が少なく、砂粒自体
も同群に較べて少ないものを本群とした。土佐では西南部で少数が認められるが、讃岐や伊予で普
遍的に認められる胎土に近く、現状ではそれらとの判別がつかない。

以上、胎土について記した。要するに 群、 群、 群は、在地的な酸化焰焼成の土器において
非普遍的な胎土で、特に 、 群は他地域の産である可能性が高い。さて、胎土について肉眼観
察から判断できることは限られており、慎重に扱うべきであることは言うまでもない。上記の 群、
 群、 群も、突き詰めれば同質の鉱物からなる砂粒を含んでいることになる。しかし、明らかに
特徴的な胎土群が存在し、形態との間に関連が看取できるものがあることも事実であり、それを踏
まえることには意味があろうと考えた。

3. 口縁部形態と胎土の関係

上記の口縁部形態と胎土群についてTab.102を得た。これらより、まずd形態と 、 群の間
に強い連繫が看取できる。b、c各形態は、 群を中心としながらも複数の胎土が存在する。 群
は、a形態とは連繫しない。このような関係は、中筋川下流域と高知平野東部の出土遺物に共通し
ていることも認識できる。

4. 型式と編年観

上では、口縁部形態と胎土の関係についてみてきた。全体が復元できる資料が少ないが、Fig.216に挙げた例などから、胴部についても推測することができる。胴部が張らず、非球形で最大径が口縁部にある全体形や、外面の粗目のハケ調整が各口縁部形態および胎土にかかわらず原則となっているが、内面調整やハケの施し方に若干の差異も看取でき、上記の口縁部形態や胎土と関連を持っている。またこのような形態や調整とは異なり、比較的球状でタタキ痕を残し、しばしば頸部に横方向のハケ調整を施すものも存在する。以下ではこれらについて説明し、型式を設定する。

土師器甕A 復元率の良い例としてFig.216などを挙げられる。

口縁部形態は既述の a、b、c が存在する。体部は総じて張りを持たず、最大径は口縁部にある。丸底である。ハケは粗目で、底部以外の体部外面は揃った縦方向、底部は多方向、口縁部内面は横方向のハケ目が、最終調整痕として残る。体部内面にもハケ目を残すものもある。胎土は 群、 群、その他が存在する。法量は2種以上が認められる。製作工程についても伺える資料が少数ながら存在し、例示したFig.216の外面は、ハケ目の下から一部タタキ痕がのぞく。西鴨地遺跡では口縁部まで連続するハケ調整痕が観察できる例があり、同調整が口縁部の折り曲げに先行することを示すが、口縁部外面で横ナデ以前のくい込んだハケ先端部痕が残る例には検討の余地もあろう。今次本類に分類したものは、以下の他型式との比較において、その細部形態や胎土が多様で、今後検討の余地も多いであろう。以下、本類は適宜甕Aと略称する。

土師器甕B Fig.217参照。口縁部はd形態である。全体形は、肩の張らない非球形で口縁部に最大径があるという点では、土師器甕Aと共通する。粗目のハケ痕を残す点も同甕Aに類似するが、体部内面には少なくともハケやケズリの痕跡を残さず、そのような調整が行われていない可能性がある。口縁部内面には横ハケ痕を残すものがあるが、甕Aでは同痕がほぼそのまま残されるものが少なくないのに対して、本類はある程度消されることを原則とする。外面のハケは体部上位が斜位になる点が特徴的で、ハケ原体は甕Aに増して粗目の傾向がある。胎土は 及び '群'に限られる。法量は2種以上が存在する。なお、御産所権現山遺跡⁽³⁹⁾出土資料をみると、体部外面中位以下の調整痕は大略甕Aと同様であることがわかる。以下適宜甕Bと略称する。

胎土 形態	I	II	III	IV	不	計
a				1	2	3
b	7	3	1	2	4	17
c		2		2	1	5
d			35			35
計	7	5	36	5	7	60

具同中山遺跡群(今次調査)

胎土 形態	I	II	III	III'	IV	不	計
a	1	1			1	1	4
b	1	4				1	6
c	1	17					18
d			18	2		1	21
不	1				2		3
計	4	22	18	2	3	3	52

船戸遺跡

胎土 形態	I	II	III	III'	不	計
a	7					7
b	3	7			4	14
c	1	1			1	3
d			1	3		4
不	1					1
計	12	8	1	3	5	29

下ノ坪遺跡H区

胎土 形態	I	II	III	不	不明	計
a	1				1	2
b		1			3	4
c	1	1				2
d			5		1	6
不				1	2	3
計	2	2	5	1	7	17

土佐国衛跡

「不」は分類不可能、「不明」は未検討、数字は点数、註38参照。

Tab.102 土師器甕における口縁部形態と胎土

土師器甕C Fig.217参照。形態や調整が上記の2種とは大きく異なる。すなわち体部外面に縦ハケ痕がみられず、タタキ痕を残す部分がある。体部中位の境界より上位には、横方向に連続するハケを施すものが多い。内面は口縁部付近に横ハケが施され、下半には指頭圧痕が残るものがある。体部のプロポーションは、中位の境界以下は半球形を呈し、上位は直線的に口縁部に至る。同境界で屈曲するものがあり、大型のもの以外はこの境界部の胴径が口縁部径に近い。甕A、Bに比してやや短胴なものもある。胎土は群に限られ、口縁部はa形態に近いものが多い。なお、本類は上記のような体部の属性が指標となること、上記各類との抽出点数比較に影響すると思われる。以下適宜甕Cと略称する。

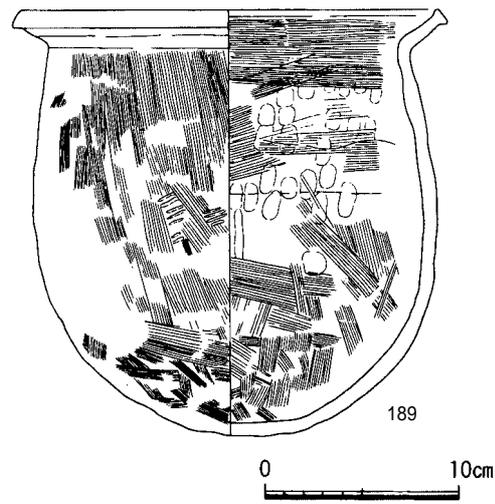


Fig.216 下ノ坪遺跡F区包含層出土土師器甕

土師器釜A いわゆる摂津C型に属するもので、土佐では⁽⁴⁰⁾ -1期を中心とする時期に普遍的に認められる。それ以前の釜の他型式は出土していない。-1期では複数の一括性資料中で確認できるが、期後半に盛期を迎える遺跡では、包含層や流路から後記の甕A2と共に普遍的に出土することから、同期には出現している可能性がある。胎土は群、群、その他があり、群は未確認である。体部外面に甕Aと同様の縦ハケを残す。西鴨地遺跡の流路出土遺物は、後記の甕A2と釜Aが同じ胎土と酷似したハケ目をもつ様相が顕著な例である。

以上のように分類を行ってきたが、これらの編年の詳細はいまだ明らかにできない。しかし、高知平野東部で提示されている食膳具の編年案をもとに、遺構出土資料による把握を試みたのがFig.217である。まず-3期頃では、胎土群などの甕Aと、甕B⁽⁴¹⁾(胎土群)が存在する。甕Bを確認できる下限は、-5~6期の小型品である。期の甕Aは細部形態や胎土においてバリエーションがあるが、口縁端部は-4期以前には顕著に拡張せず、-5~7期にはやや拡張されるものが見られる。-1期では口縁部c形態が出現する。このような口縁端部の変化を、甕Aにおける時期的な変化と捉える。口径が15cmに満たない小型のものについては資料が十分でないので今後は除外し、口径約17cm以上の甕Aについて、口縁部がb及びa形態を呈すものを甕A1型式、c形態のものを甕A2型式と称することとする。このようにみてくると、c形態とa、b形態の関係が問題となるが、隣県の様相も考慮すれば現状では明快に説明できない。しかし、土佐では原則的に、胎土群では各種の口縁部形態が存在するが、群はb、c形態であることは示唆となろう。当面は、口縁部a形態のもの全容がわかる例の蓄積や、胎土群甕の生産地について知見を得ることが課題となる。なお、甕A2に関しては、胎土に大粒の礫を含み、硬質に焼成されたものが主体であるが、それらは口縁部の角度や細部形態、肩を持たない胴部、胎土や焼成の状態、ハケ痕跡などにおいて、先行期の煮炊具と比較して強い斉一性が看取できる。法量についても現状では画一的である。

期	遺跡・遺構	甕 A	甕 C	甕 B	小型器種、搬入品
3	下ノ坪 SX2				
	下ノ坪 SK18				
	下ノ坪 SK16				
4	土佐国衛 SK113	(胎土群) 			
	下ノ坪 SK22	(胎土群) 			
	下ノ坪 SK28				
	白猪田 SD1				
5	下ノ坪 SB17				
	下ノ坪 SK30				
	下ノ坪 SB18				
7	小籠 SK110				
	下ノ坪 SB21				
1	下ノ坪 SA4				
	下ノ坪 P14		(甕C) 		
	土佐国衛 SA13				
	白猪田 P30	(胎土群) 			
2	小籠 SK130 SK136				
	土佐国衛 SK63				
1	ひびのきサウジ SE1	釜A 			

本図の編年観は煮炊具の型式から作成したのではなく、註2、3の食膳具の編年に依拠したものである。「搬」は搬入品。出典は報告書一覽参照。

Fig217 古代における煮炊具の変遷

甕Cは -1期に出現し、 期初めに釜Aと共存した後消滅する。上記の甕A2と併せて、 期への画期が煮炊具についても想定できる。畿内においては藤原京期以来、都城を中心に球胴の甕が主流化することが知られるが、土佐では甕Cより前には球胴状のものは例外である。下位にタタキを残す球胴の甕は、都城や太宰府、その他の地域でも平安前期に普及しており、当該地域一帯に普遍的な様相であることは首肯できる。しかし、土佐のものも含めて細部での差異が多く、様々な地域色が存在するようである。

5. 各遺跡での出土状況

Tab.102では、まず今次調査における甕B(胎土、 群・口縁d形態)の高比率と、下ノ坪遺跡における甕Bに対する甕A1(口縁a、b形態)の優越、船戸遺跡における胎土 群の甕A2(口縁c形態)の高比率が注目される。上記の変遷観からみると、各型式の多寡は遺跡の盛期の違いを反映している面があるものと考えられ、今次調査と下ノ坪遺跡では 期に属する型式が相対的に高率となっている。今次調査と船戸遺跡の比較では、甕A2の比率などから後者に時期の下る煮炊具が多いことがわかる。このような解釈は、既述の食膳具の分析結果とも整合する。これらから煮炊具について概観すると、 期においては中筋川下流域では甕B、高知平野東部の複数の遺跡では甕Aが各々主流であり、他のタイプがそれを補完していることが認識できる。 期になると、土佐中央部では甕A2が顕在化し、⁽⁴⁴⁾ 西南部の船戸遺跡でも同じ様相を呈するようになることが推測できる。また、資料が高知平野東部に偏っていた甕Cも、今次調査での1349、1896が該当し、いずれも胎土群に属す。

6. 他地域での状況

まず甕Bについては、伊予や讃岐など、瀬戸内海沿岸地域で出土例がある。⁽⁴⁵⁾ 特に幸の木遺跡ではまとまった点数が出土しており、胎土も土佐の 群と区別できない。同類は、「企救型甕」と呼ばれているものと形態や調整が共通しており、その分布圏を一定把握することができる。甕A1の類品は、四国全域と東部瀬戸内沿岸で分布が認められるが、細部形態や胎土は多様なあり方をしているようである。土佐では 期に出現する甕A2は、甕A1類品とほぼ同地域での分布が認められる。甕A2には、形態等での均一性の強さが指摘でき、そのようなあり方や調整における属性も含めて、先行期の煮炊具よりも、甕A2にやや遅れて展開してくる摂津型の羽釜との共通性が看取できる。このような事象は、古代後期への転換に関わる可能性がある。

最後になったが、次の方々には小稿に関して懇切なご助言、ご協力を賜った。深く謝意を表します。片桐孝浩、久家隆芳、栗田正芳、佐藤浩司、佐藤竜馬、柴田昌児、筒井三菜、松田直則、松村信博、山本純代(敬称略)。

註

註1) 詳細は報告と、池澤俊幸「土佐における古代前期の建物群-研究の現状と課題-」『古代文化 特輯 南海道諸国の官衙遺跡-調査研究の現状と課題- 第52巻 第6号』(財)古代学協会 2000年 参照。

註2) 池澤俊幸「南四国における古代前期の土器様相 - 下ノ坪遺跡を中心として -」『下ノ坪遺跡 農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理工事に伴う発掘調査報告書 -』高知県野市町教育委員会 1998年

註3) 池澤俊幸「土佐からみた平安時代の土器」『中近世土器の基礎研究Ⅳ 平安時代の土器・陶磁器研究』日本中世土器研究会 2000年

註4) 今次調査は具同中山遺跡群の一部であり、本遺跡群ではこれまでも数々の調査が行われている。故に、以下今次の調査区を指して今次調査と記す。

註5) これらの境界的な属性を示すものについては、より適合要素の多い方に帰属させている。例えば -6期で主流化するような属性を持つものがすでに -5期に出現しているが、本項ではそのような個体は -6期の方へ算入した。このような判断をした個体も少なからず存在した。

註6) Tab.97-3については 期から 期の区分が重複して表記されているが、これは個々の遺物の時期幅を考慮したものであり、カウント点数は重複して数えていない。平底・有台の表記は 期以降の杯Dなど、杯A・杯B系譜でないものを意識したものである。また、今次調査と船戸遺跡については、該当させた遺物の報告番号をTab.104、105に示した。Tab.97の点数は、Tab.104、105にさらに非実測のものを加えたものである。

註7) 下ノ坪遺跡の点数は、口縁部点数を原則としたものである。これに対して今次調査及び船戸遺跡では、Tab.97からわかるように底部の点数が多く、杯については口縁部ではなく底部片点数を使用した。検証のため、口縁部点数を使用したグラフも作成してみたが、そのプロポーシオンに対する認識自体に関わる差異はなかった。その他、時期区分の表記等については前掲Tab.97に準ず。

註8) 註3に同じ。

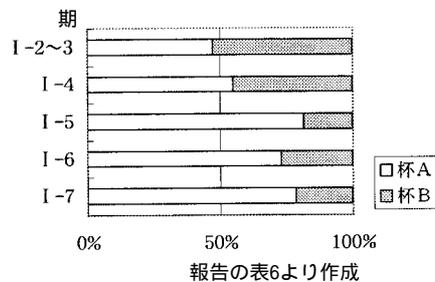
註9) 風指遺跡などでも同様である。『下ノ坪遺跡』p.244参照。

註10) 具体的には註2参照。

註11) 杯については底部の属性が必要なため、底部点数を使用している。註7参照。

註12) Tab.99では -4～5期に含まれたが、実際には下ノ坪遺跡の -4期の資料と白猪田遺跡SD1では杯Aの優越は確認できず、高知平野東部では -5期以降に一般に杯Aが杯Bを凌駕することが推測できる。

註13) Tab.99は土師器と須恵器を総合した数値によるが、問題としている 期では、今次調査及び船戸遺跡ではほとんどを須恵器が占める。それに対して土師器が一定量を占める下ノ坪遺跡で、須恵器に限って杯の組成をみたのがTab.103である。本図から、本文中にあるような杯の組成比に関する認識が、須恵器に限った場合でも適用可能なことが看取できる。



Tab.103 下ノ坪遺跡H区遺構出土須恵器杯の組成比

註14) 筆者計数。土師器と報告されているもののうち杯A 1点、杯B 3点を須恵器とした。

註15) 分類基準等については註2に拠る。今次の例はTab.104参照。

註16) 同区では遺物密度が濃厚で、遺構出土遺物群中にもいくらかの混入があるとみられ、全破片に立脚することが必ずしもより実態に近いとはいえないと考えた。

註17) 各報告及び廣田典夫「土佐の須恵器」1991年

註18) 『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会/(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1996年、『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会/(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998年

- 註19) 片桐孝浩「讃岐における古代の土器様相」『土佐の土器・古代から中世へ-8世紀～10世紀の土器様相の展開-』第8回 四国中世土器研究会資料 1996年
- 註20) 佐藤竜馬「十瓶山窯跡群の須恵器とその検討課題」『香川考古第2号』香川考古刊行会 1993年、同「讃岐における須恵器の生産動向と群別」奈良国立文化財研究所 所内特別研究『古代律令国家の調納制を考える』発表資料 2000年。佐藤氏より御教示を得、資料を実見させて頂いた。
- 註21) 註19。佐藤竜馬「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題-北海道を中心に-』古代学協会四国支部第12回大会発表資料 1998年。
- 註22) 本村・横内遺跡、小山・南谷遺跡、空港跡地遺跡、正箱遺跡、国分寺下日名代遺跡、讃岐国府跡、下川津遺跡、川津ノ又遺跡、川津一ノ又遺跡、郡家一里屋遺跡、郡家原遺跡、大浦浜遺跡の各報告による。
- 註23) ただし、高畑遺跡では少数ながらb形態の「須恵器」皿が報告されている。
- 註24) Tab.96から推定した -4期の年代観で、あくまでも他県と比較するための推測である。実年代観については以下同様。
- 註25) 製品の需給関係が証明されているのではない。
- 註26) 註20 佐藤1993を参照した。
- 註27) 報告書掲載分のみを対象としたことに関して、調査担当者からは、b形態のものに若干注意を払ったが、細片を総合しても数比が大きく変わるような様相や抽出方法ではないとの所見を得ている。
- 註28) 久家隆芳「神ヶ谷窯跡・サンナミ遺跡-中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 -」高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年。鹿々場窯跡は、中筋川下流域の水系及び平野とは一応隔絶した他郷に所在する(『大方町史』大方町 1995年)。
- 註29) 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 古津賀遺跡/具同中山遺跡群』高知県教育委員会 1988年・249ページ、『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 具同中山遺跡群』高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年・199ページ参照。これらについては久家氏から、蓋「類」に比定できるかどうかは疑問とのコメントを得ているが、いずれにしても類似する形態で、高知平野ではみられないことが注意される。
- 註30) 國下多美樹「爪形状圧痕」を有する須恵器～長岡京出土土器の検討を通して～』『京都考古 第67号』京都考古刊行会 1992年
- 註31) 前者2遺跡については未報告分も観察した。いずれも外底周縁部が残存するものを母数とした。
- 註32) 調査担当者にも所見を頂いた。
- 註33) 註2に同じ。
- 註34) 『平成12年度 中村・宿毛道路高企画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 具同中山遺跡群 -3 記者発表及び現地説明会資料』高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年
- 註35) 松田直則「四万十川流域の遺跡」『中近世土器の基礎研究XI』日本中世土器研究会 1996年
- 註36) 『松山市埋蔵文化財調査年報・平成元年～2年度』松山市埋蔵文化財センター 1991年
- 註37) 岩質については、愛媛県埋蔵文化財調査センター等で教示を得た。
- 註38) 比定した遺物の報告番号をTab.106に記す。
- 註39) 註36に同じ。
- 註40) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983年
- 註41) 下ノ坪遺跡SX2は、その出土遺物群全体をみた場合にやや特異な様相も看取できる。

- 註42) 三好美穂「都城の煮炊具-藤原京・平城京・長岡京・平安京-」『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東4煮炊具-』古代の土器研究会第4回シンポジウム 1996年
- 註43) 『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東4煮炊具-』古代の土器研究会第4回シンポジウム 1996年、佐藤浩司「旧豊前国における古代末から中世前期の土器様相」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1991年
- 註44) Tab.102では少数だが、小籠遺跡や西鴨地遺跡で一定、或いはまとめて出土している。
- 註45) 片桐孝浩「讃岐出土の東北系土器について～特に黒色土器について～」『研究紀要』(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1995年。松山平野の資料については栗田正芳氏の手を煩わせ、資料を拝見した。
- 註46) 『現地説明会資料 幸の木・久枝田遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1995年。柴田昌児氏の手を煩わせ、資料を拝見した。
- 註47) 佐藤浩司「ケズリのない甕-豊前企救型煮沸具の語るもの-」『研究紀要-第6号-』(財)北九州市教育文化事業団/埋蔵文化財調査室 1992年
- 註48) 註43 1996年、『古代の土器4煮炊具(近畿編)』古代の土器研究会編 1996年

引用・参考報告書

高知県

- 『土佐国衛跡発掘調査報告書 第1～6、8～11集』高知県教育委員会 1980～1991年
- 『土佐国衛跡発掘調査報告書 第7集』南国市教育委員会 1987年
- 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 風指遺跡・アゾノ遺跡』高知県教育委員会 1989年
- 『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書(土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第8集)』土佐山田町教育委員会 1990年
- 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 具同中山遺跡群 第一分冊 1989・1990年度』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第1集 高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年
- 『土佐山田北部遺跡群-山田北部県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書-』土佐山田町教育委員会 1992年
- 『船戸遺跡-中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 -』高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 『小籠遺跡 -あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書-』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 『白猪田遺跡-久礼田地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書-』南国市教育委員会 1997年
- 『下ノ坪遺跡 -農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理工事に伴う発掘調査報告書-』野市町教育委員会 1998年
- 『四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う土佐市 西鴨地遺跡 現地説明会・記者発表資料』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1998年
- 『福井遺跡 四国横断自動車道(南国～伊野)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999年
- 『神ヶ谷窯跡・サンナミ遺跡-中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 -』高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年

愛媛県

- 『一般国道11号西条バイパス埋蔵文化財調査報告書 池ノ内遺跡 牛の角遺跡 天神山遺跡 原八幡神社裏遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1989年

香川県

- 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 大浦浜遺跡』香川県教育委員会/本州四国連絡橋公団 1988年
- 『下川津遺跡 第1分冊』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター/本州四国連絡橋公団 1990年
- 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第12冊 郡家一里屋遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター/日本道路公団 1993年
- 『四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第13冊 郡家原遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター/日本道路公団 1993年
- 『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 正箱遺跡・薬王寺遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1994年
- 『四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第14冊 川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター/日本道路公団 1994年
- 『中小河川大束川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1997年
- 『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1997年
- 『四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第31冊 国分寺下日名代遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター/日本道路公団 1999年
- 『県道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 八町地遺跡 本村・横内遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター 2000年
- 『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター/香川県土地開発公社 2000年

徳島県

- 『徳島県立国府養護学校プール建設工事に伴う高畑遺跡発掘調査概要報告書』徳島県教育委員会 1990年

期	土師器・土師質土器							黒色土器	須恵器							その他	
	皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯	杯・椀		皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯	壺		甕
			平底	有台							平底	有台					
不	(4078)								939, 1636, 1650, 1806, 1808, 1810, 1811	1568, 1808, 1810, 1840, (4108)	939, 1636, 1640, 1641, 1642, 1811, (4112, 4119, 4120, 4124, 4125,)	1584, 1655, 1659, 1661, 1814, 1815, 1817		1666, 1668, 1671, 1667, (4150)	1334, 1665, 1673	壺蓋 1659, 1663	
-4~5	1554	1540	1540					1369, 1556, 1600, 1608, 1610, 1611, 1648	1559, 1571, 1582, 1612, 1620, 1621, 1622, 1625, 1626, 1627, 1628, 1631, 1632, 1633, 1634, 1635, 1638, 1651, 1726	1571, 1612, 1620, 1621, 1622, 1625, 1626, 1628, (4100, 4106)	1332, 1357, 1553, 1555, 1582, 1627, 1631, 1632, 1633, 1634, 1635, 1638, 1660, (4083, 4128, 4129)	1354, 1531, 1652, 1653, 1654, 1656, 1658, 1662, 1664, 1660, (4083, 4128, 4129)	1333, 1586, 1606, 1609, 1614, 1618, 1619, 1623, 1624				
-6~7	1336 (4077)	(4079, 4080)	(4079, 4080)	(4127)	1664			1338, 1352, 1409, 1543, 1601, 1602, 1603, 1604, 1804, 1805, (4085, 4087, 4088)	1616, 1617, 1637, 1341, 1807, (4095, 4096)	1341, 1343, 1616, 1617, 1807, (4095, 4107)	1578, 1637, 1641, 1342, 1645, 1647	1353, (4133)					
		1346	1346	1596, 1597												緑5, 6, 1686	
																椀 1595, 1714, 1715, 1741, (4184)	

数字は遺物図版番号。()内は未報告分の実測番号。

Tab.104(註6) Tab.97-2具同中山遺跡群(今次調査)のうちの実測分

期	土師器・土師質土器						黒色土器 杯・椀	須恵器						その他			
	皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯		皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯		壺	甕	
			平底	有台						平底	有台						
不	36-17				55-6	737		37-4, 45-3, 57-8	37-6, 47-19, 57-26, 58-2, 58-24, 92-16, 17, 18, 13 0, 388, 396, 414, 421, 724, 772, 81 6, 834, 849, 856, 858, 877	47-17, 50-2, 57-26, 92-8, 98, 100, 216, 425, 568, 57 3, 593, 594, 616, 795, 80 3, 805, 809, 832	37-6, 47-17, 19, 50-2, 54-12, 58-4, 5, 14, 24, 32, 3 3, 34, 102, 390, 5 87, 592, 881	47-30, 713			48-1, 4, 60-16, 17, 18, 9 3-1, 2, 735, 7 93-1 758, 831, 83 5, 836, 837, 838, 839, 84 1, 844, 845, 846, 889	60-23, 62-1, 2, 7, 93-1 0, 104, 833, 89 7	壺蓋133
-2~3								57-13, 14, 15, 16, 17, 58-7, 47-24		47-2, 58-7	59-10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22						
-4~5								37-2, 3, 47-4, 6, 8, 9, 57-1, 10, 92-2, 807	47-15, 47-16, 18, 21, 25, 26, 57-18, 19, 20, 21, 22, 27, 58-1, 8, 9, 11, 12, 13, 18, 22, 23, 90-9, 92-3, 4, 30 6, 355, 396, 700, 766, 768, 771	47-15, 16, 1 8, 57-18, 19, 20, 21, 22, 2 7, 90-9, 92-3, 4, 202, 20 5, 355, 700, 704, 766, 77 1, 801, 808	47-21, 22, 25, 26, 58-1, 3, 6, 8, 9, 1 1, 12, 13, 15, 18, 19, 22, 23, 25, 26, 30, 31, 59-1, 386, 378, 394, 396, 40 3, 411, 417, 800, 802, 810, 812, 84 7, 894, 566, 695	37-1, 47-27, 28, 29, 31, 50-1, 59-8, 9, 23, 24, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 60-3, 4, 5, 6, 13, 14, 92-19, 20, 23, 137, 139, 712, 715, 732, 760, 82 8, 829, 893	59-3				
-6~7		90-17	90-17, 212	54-8, 558				45-6, 9, 12, 47-1, 2, 3, 5, 7, 10, 11, 12, 57-2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 11, 12, 92-1, 22, 25, 717, 729, 827, 818, 887, 895	36-2, 47-13, 14, 20, 23, 54-3, 57-23, 24, 25, 58-10, 17, 20, 27, 28, 29, 90-12, 15, 18, 92-5, 6, 7, 9, 12, 13	36-2, 47-13, 14, 54-3, 57-23, 24, 2 5, 90-12, 15, 18, 92-5, 6, 7, 9, 559, 691	45-19, 23, 26, 47-20, 23, 54-10, 11, 58-10, 16, 17, 20, 21, 27, 28, 29, 30, 31, 35, 59-2, 91-10, 92-12, 13, 14, 15, 103, 203, 385, 389, 391, 416, 57 7, 693, 813, 814, 880, 899	59-25, 60-1, 2, 7, 8, 11, 92-24, 26, 720, 721, 722, 72 5, 726, 798, 817, 821, 822, 823, 83 0, 865, 878, 879					
-1~2	45-2, 4, 5, 7, 8 53-2, 3, 4, 5, 6, 10, 885	53-26, 27, 31, 90-10, 11	53-8, 26, 27, 31, 90-8, 10, 11, 91-4, 555	36-5, 6, 7, 8 45-24, 25, 28, 29, 30, 54-13, 14, 15, 16, 17, 91-6, 7, 8, 9, 561			49-8 65-9 679	45-21		45-21, 22, 27, 54-18							
~ -1	45-1, 53-12, 13, 549	45-17, 18, 53-28, 29, 54-21, 90-20, 552,	36-9, 10, 11, 12, 13, 14, 45-17, 18, 32, 33, 34, 35, 39, 40, 41, 42, 53-20, 24, 28, 29, 32, 54-21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 55-1, 2, 3, 4, 5, 90-20, 91-5, 28, 217, 283, 56 4, 580, 585, 647, 873	54-19, 20												緑49-6, 65-3, 4, 5, 6, 94-1, 2, 3, 4, 5, 6, 952, 灰49-7, 94-7, 8,	
	53-11, 90-2	36-3, 45-13	45-13										61-1			椀か杯 91-1	
不可分																48-13, 19-1, 2, 62-4	

表中の数字は、例えば36-17は報告書Fig.36の17を示す。同一Fig.で連続する場合は省略した。Fig.番号の付かない13桁数字は未報告分の実測番号。

Tab.105(註6) Tab.97-3船戸遺跡のうちの实測分

形態	胎土				不
a				1796	
b	1680	1682, 1501, (4162)			(4169)
c		1370, 1798			
d			1681, 1683, 1797, (4027, 4065, 4160, 4161, 4166, 4159, 4157, 5229)		
不				1347	

数字は遺物図版番号。()内は未報告分の実測番号。

具同中山遺跡群(今次調査)

形態	胎土					不
a	918	56-2			55-10	55-11
b	46-7	56-1, 919, 938				
c	114	36-22, 46-1, 46-2, 46-3, 46-4, 46-5, 46-8, 55-9, 55-12, 56-3, 916, 945, 947				
d			36-18, 36-21, 55-8, 913, 914, 915, 917, 921, 946	55-7, 56-4		46-6
不	307				91-11, 91-13	

表中の数字は、例えば56-2は報告書Fig.56の2を示す。
Fig.番号の付かない3桁数字は未報告分の実測番号。

船戸遺跡

形態	胎土				不
a	234, 336, 453, 600, 601, 176, 976				
b	235, 294, 533	177, 277, 409, 534, 663, 761, A区1			236, 662, 748, F区189
c	395	1005			
d			337	293, 454, 602	
不	975				

特記しないものはH区。

下ノ坪遺跡

形態	胎土			不	不明
a	8-39				3-134
b		9-109			6-52, 2-16-9, 2-18-1
c	7-22	8-123			
d			8-21, 56, 11-19, 20, 36		6-23
不				9-108	6-43, 3-118

数字は、例えば8-39は8集の遺物番号39であることを示す。

土佐国衙跡

Tab.106(註38) Tab.102のうちの实測分

第5節 具同中山遺跡群における集落の変遷について

1. はじめに

発掘調査は1986年の調査以来持続的に行われてきたが、古代から中世における良好な資料は 89・90年度の発掘調査で確認されているのみで、今回の調査がそれに続く良好な資料といえる。今回の調査では古代の遺構は土坑と柱穴のみであり、建物跡などは検出することができなかった。中世においては、掘立柱建物跡、土坑、溝、井戸、その他柱穴群を確認しており、集落が形成されていたと思われる。これら遺構・遺物の年代から具同中山遺跡群のなかでの集落の変遷及び、周辺の中世集落遺跡の中での具同中山遺跡群 の位置付けを考えていきたい。

2. 具同中山遺跡群 の遺構・土器について

(1)遺構(Fig.218)

掘立柱建物跡については12棟が確認されており、ほとんどの建物跡が調査区の東部に集中している。建物の時期については出土遺物が細片であることもあり、明確な時期は特定できないものが多い。時期の指定が一定可能なSB1～4、8、9について考えていく。SB1は4×6間の東西棟で、面積は約80㎡を測り、具同中山遺跡群では最大規模の建物跡である。建物跡は32基の柱穴により構成されているが、その内17基の床面より礎板が検出されている。最大のもので約34×31cmを測り、材質はコウヤマキを使用している。礎板直下には数cmの粘土が堆積している場合があり、分析結果では藁が粘土化したものであった。まず、床面に藁を敷いて礎板を置き柱を設置したものである。礎板は軟弱な地盤に使用される例がみられ、本遺跡の立地からも同様なことがいえる。遺物からは13世紀後半から14世紀初頭に機能していたと考えられる。SB2～4は棟軸方向を共にN-75°-Eにとることから、ほぼ同時期に存続したものである。遺物は細片であるため明確な時期は特定できないが、13世紀代と考えられる。SB8は棟軸が真北に直交する。柱穴の規模、出土遺物からSB1とほぼ同時期に機能した建物跡と考えられる。SB9は北側の桁行のみの検出であるが、棟軸はN-70°-Eにとる。遺物では白磁 類が出土していることから14世紀前半代と考えられる。

土坑は6基を確認している。土坑墓と考えられるSK20では、南北両端に瓦器椀が置かれている。瓦器椀は和泉型で -3から -1期(尾上編年⁽³⁾)のものと考えられる。

溝は4条確認している。SD1は調査区の東端を南北方向に通ると思われ、これより東側ではSK20、21、22と柱穴は確認しているが、建物跡は確認できなかった。SD4は調査区の西端を南北方向に通る溝でこれより西側には遺構は確認されておらず、遺構はSD1とSD4の間に集中していることから、建物跡を区画する役割を担ったものと考えられる。遺物からは古代から中世後期にかけて存続していたと考えられる。

今回の調査では井戸を1基確認している。縦板組隅柱横棧型の形態をもつ木組井戸である。井戸内からは曲物(1417)と共に瓦器片が出土している。草戸千軒町遺跡⁽⁴⁾で同形態のものが検出されており、変遷では 期(13世紀中葉から14世紀初頭)と 期前半(14世紀前半)段階に確認されている。遺物からは具同中山遺跡群 では 期の段階、SB1とほぼ同時期に機能したと思われる。この時期の

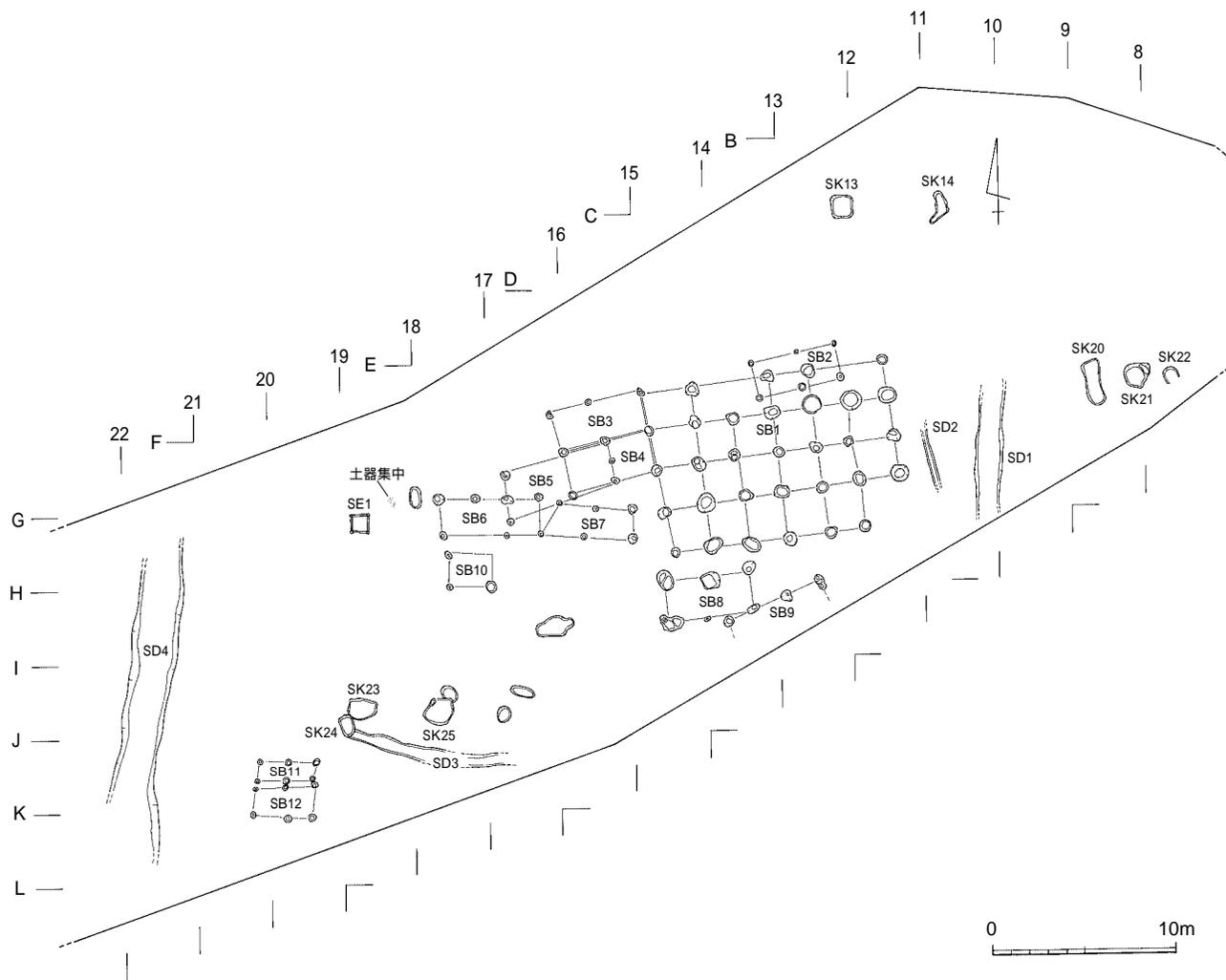


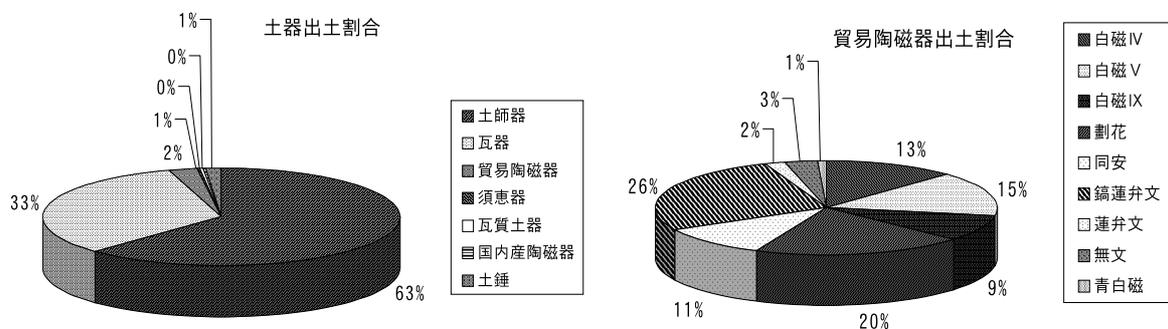
Fig.218 具同中山遺跡群 遺構全体図(中世)

木組の井戸としては県下では初例である。

(2) 出土遺物

調査では古代から中世にかけての土器が遺構・包含層を含めると約13,000点近く出土している。遺物では土師器、貿易陶磁器、瓦器、須恵器、瓦質土器、国内産陶磁器、古銭等が出土している。土師器の出土量が最も多く全体の63%を占め、供膳具では皿、杯、椀が出土している。皿・杯の良好な資料としては土師器集中があげられる。図示できたものは皿4点と杯23点である。ともに、回転口口成形で皿は口径6.5～7cmを測り、口縁部は上方に短く伸びる。杯は口径11～12cmを測り、口縁部はやや内湾気味に外上方に伸びるタイプである。前回の報告書の中での分類⁽⁵⁾によると、皿はC-b、杯では -b、 -bとなり、概ね13世紀後半から14世紀代を考えることができる。この土師器集中には同安窯系皿と龍泉窯系の -4aが出土しており、これらは12世紀中頃から13世紀前半代に位置付けられる。杯の形態、法量からは13世紀前半代とは考えにくく、これらの貿易陶磁器が13世紀後半から14世紀代に土師器と共に廃棄されたものと考えられる。椀は包含層から数点出土している。底部に輪高台を有する椀(池澤分類椀C)⁽⁶⁾と、底部が円盤状高台を呈する須恵器の椀(池澤分類椀A)が出土している。煮炊具としては釜、鍋類が出土している。破片のため詳細は不明であるが、在地産のものを使用している。外面にタタキ目が残る播磨系の鍋が若干出土している。

次に搬入品では瓦器、貿易陶磁器、東播系須恵器、瓦質土器、国内産陶磁器が出土している。中でも瓦器の出土量が多く、全体の割合でも約33%に及んでいる。瓦器は和泉型が占め、前回の調査で出土した楠葉型はほとんど確認できなかった。形態・法量より -3から -1・2(尾上編年⁽⁷⁾)期と考えられる。貿易陶磁器は全体の2%を占めており白磁、青磁、青白磁が出土している。白磁は類、類、類がみられ、類の比率がやや多い。また白磁の壺が出土している。青磁では同安窯系、龍泉窯系の製品がみられるが、その中では -2a、 -4a、 -5bが主に出土している。出土数では -5bが最も多く、中には内外面無文の碗、稜花皿が若干みられる。壺の口縁部も出土している。鉢類では東播系須恵器のコネ鉢が多くを占める。期の2段階から期(森田編年⁽⁸⁾)の製品が主であるが、P73からは期の2段階と思われる椀(1513)が出土している。土佐ではこの時期から東播系コネ鉢が搬入され始める。前回の調査では期・期の製品が多く使用され、その後備前焼の



Tab.107 具同中山遺跡群 出土土器割合表

播鉢、在地の瓦質播鉢が主流となるが、今回の調査では備前焼の甕は若干出土しているものの、播鉢は確認できていない。煮炊具としては瓦器の鍋(1503、1504)が出土している。口縁部のみであるが、胎土焼成は瓦器に類似している。畿内(京都)では12世紀代から出現し始めるようである。県下では初めての出土となる。陶磁器類では瀬戸・美濃焼、備前焼が出土している。瀬戸では1773の前期から1772の後期の製品が出土しており、13世紀後葉から14世紀末までの時期におさえられる。

(3)具同中山遺跡群の集落変遷からみた 期の変遷

前回の調査では遺物・遺構の変遷についての分類⁽¹¹⁾が行われている。ここではその変遷に添って、今次における遺構・遺物の変遷にふれたい。

89・90年の調査では古代末から中世にかけての掘立柱建物跡29棟、土坑31基、溝跡8条、集石遺構25基、火葬墓1基を検出し、出土遺物では約110,000点の土器を確認しており、瓦器、貿易陶磁器等の搬入品は県下でも最大量を誇る。集落の変遷については 期から 期に分類されており(Fig. 219)、 期を9世紀後半から11世紀中葉、 期を11世紀後半から13世紀後半、 期を14世紀初頭から15世紀、 期を16世紀以降に位置付けている。それぞれの時期区分について述べていく。

期

建物跡が出現して集落を形成する時期である。対岸に位置する風指遺跡⁽¹³⁾が終焉をむかえる時期に建物跡がみられるようになることから、風指遺跡との関連が重視されている。

期

集落ではSB12、14を主屋とし、その周辺に小規模な建物跡が散在している。遺構、遺物量とも最も多く、この時期が遺跡の最盛期と考えられている。遺物の特徴としては、12世紀代には輪高台の土師器椀が主流をなすが、後半段階では貿易陶磁器や瓦器椀が搬入され始める。13世紀では椀の消滅とともに、和泉型の瓦器椀や貿易陶磁器、東播系コネ鉢等の搬入品が多量に出土するなど、古代から中世の転換期を迎え、遠隔地である当遺跡にも流通圏の拡大による商業ルートにのった各地の製品が搬入される時期と位置付けられている⁽¹⁴⁾。

期

調査区の中央部に集中していた建物跡が周辺に散在するようになり、 期において建物跡が存在した地点では方形等の石組の墓が出現するなど墓地化が進む時期で、建物跡の規模も縮小化してくる。遺物では貿易陶磁器は引き続き搬入されるが、瓦器椀は消滅する。東播系の製品は少なくなり、15世紀後半には備前焼の播鉢等の製品が多く搬入されてくる時期としている。

期

さらに集落は小規模化しており、前時代において建物跡が存在した場所は水田となり、農村と化する時期と考えられている。

今回の調査での遺構・遺物を見ていくと、遺構ではSB2、3、4は具同中山遺跡群の集落が最盛期を迎える 期の段階が考えられる。SB1、8、SK8、SE1は 期の後半段階から 期初頭段階、SB9は 期の段階にそれぞれ位置付けられるのではないかと思われる。SDについては明確な時期は不明であるが、遺構の位置関係、範囲等から建物跡を区画する機能を担っていたと考えられるため、遺構の中心時期はほぼ同時期と考えられる。

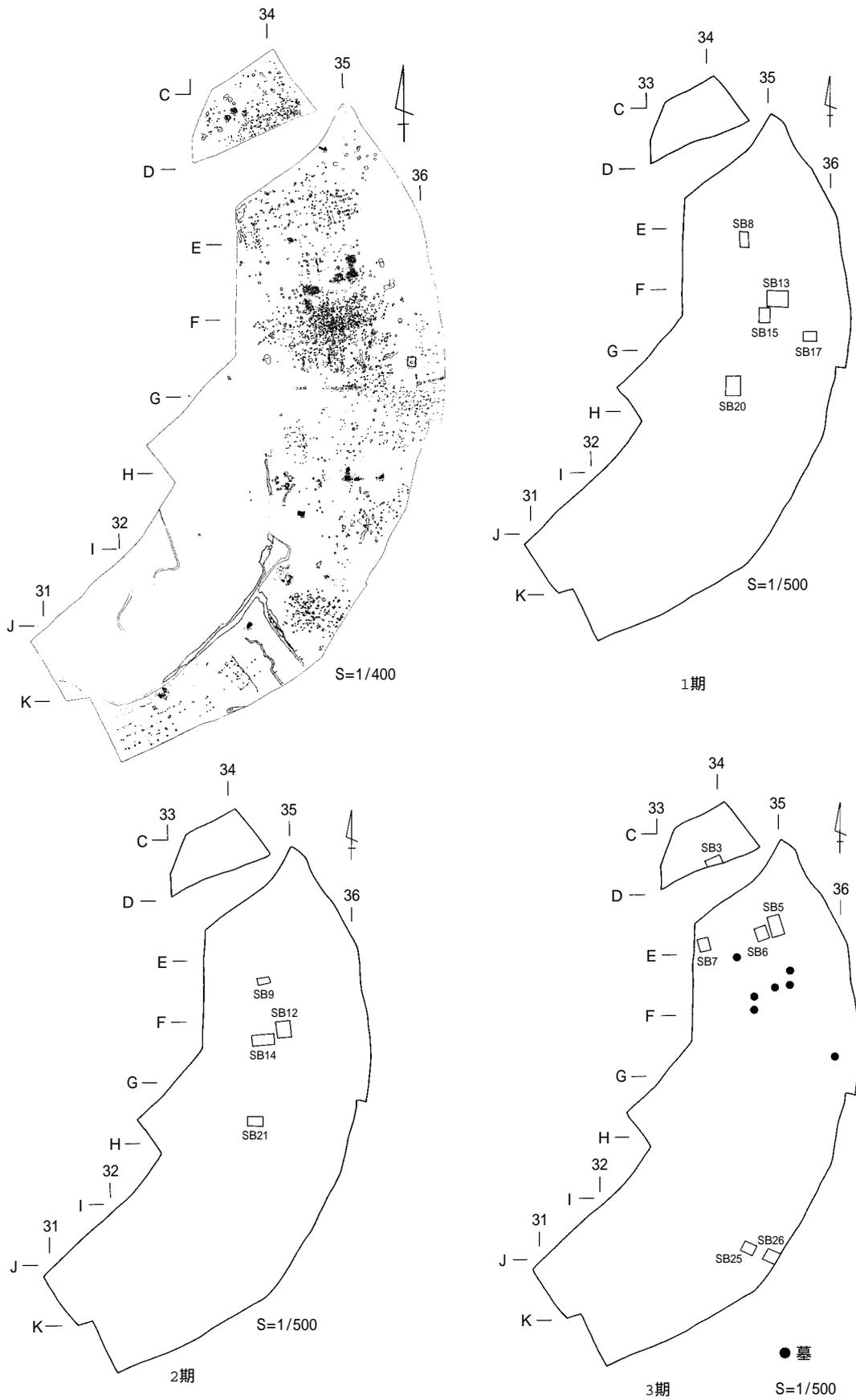


Fig.219 遺構全体図及び建物配置図(具同中山遺跡群1989・90年調査)

遺物では包含層出土のものが多いが、期から期の範疇に入る土器が出土している。出土量の割合では土師器、瓦器の出土量が大半を占めている (Tab.107)。土師器皿、杯では手捏ね成形のものはみられず、すべてロクロ成形を経ており、形態、分量から13世紀後半代に比定できるものが多い。瓦器では和泉型の -3から -1、2期が出土している。貿易陶磁器の中では -5 bの出土量がやや多い。遺物からは期の後半段階から期の前半期が集落の最盛期と考えられる。期の後半から期にかけては遺物の出土量は極端に減少していることから、この時期で今次調査区は終焉を迎えていたと思われる。そして16世紀末から17世紀代になると再び集落が形成されたものと考えられる。

3. 中筋川流域の中世集落遺跡について

中世における中村市は幡多庄に属しており、鎌倉時代の初めには九条家の荘園として成立している。九条道家の代には第三子実経が一条家を創設するにあたり、幡多庄を初めとする多くの所領を譲渡している。1250年には一条家領となり、その後の幡多荘の中心地として発展していく。『金剛福寺文書』には中村に「舟所職」⁽¹⁵⁾が置かれていたことが記載されており、幡多荘を中心とする荘園の年貢が中村に集められ、後川・四万十川を下り下田から京都へと運ばれたと考えられている。南北朝期になると状況は一変し、1467年に勃発した応仁の乱前後は幡多の地も他の地域と同様に土豪の台頭により、荘園自体の維持管理が難しくなっていたようである。これを契機に応仁2年には一条教房自らが幡多の地に下向し、現在の中村市街地に居館を構えたと考えられている。

今回の発掘調査地点は具同中山遺跡群の東端にあたり、小河川である池田川が中筋川に合流する地点に近接している。中筋川をはさんだ対岸の丘陵部山頂には古代から続く中世寺院の香山寺、その尾根下には14世紀代の遺物を確認した具重遺跡⁽¹⁶⁾、その西約600mには中世の地震跡を初めて確認したアソノ遺跡⁽¹⁷⁾、古代における官制の祭祀場として位置付けられる風指遺跡、その約880m上流には船戸遺跡⁽¹⁸⁾が存在する。香山寺を取り巻くように各遺跡が展開しており (Fig.2)、寺との関係が非常に重視されている。香山寺は足摺に所在する金剛福寺の末寺で、『長宗我部地検帳』では寺が立地する坂本地区には「足摺領」の記載が多くみられる。金剛福寺は一条氏の帰依を受けていたようで、香山寺も一条氏の勢力下のもとにあったと思われる。所在する中世遺跡について概略を述べていく。

アソノ遺跡 (Fig.220)

今次調査区はやや上流、'89・'90年の調査地点の対岸に位置する古代末から中世の集落遺跡である。遺構では掘立柱建物跡12棟、土坑43基、配石遺構、溝、柱穴群を検出しており、建物の出現時期は13世紀、集落自体は対岸の具同中山遺跡群が縮小、墓地化する13世紀後半から14世紀前半にかけて最盛期をむかえている。最大規模の建物跡はSB4で梁間4間(4.1m)、桁行4間(5.8m)を測り、棟軸をN-80°-Wにとる東西棟の建物跡である。集落の最盛期に存在している。遺物は11世紀から15世紀後半までの土器が出土しており、具同中山遺跡群と同じく搬入品が多く見られる。瓦器では和泉型が多く、尾上編年の -3から -2に位置付けられる。貿易陶磁器では同安窯系皿の -2、 -1-bや、龍泉窯系碗の -2 b、 -5 bが出土している。白磁は類がみられる。また15世紀代の青磁、

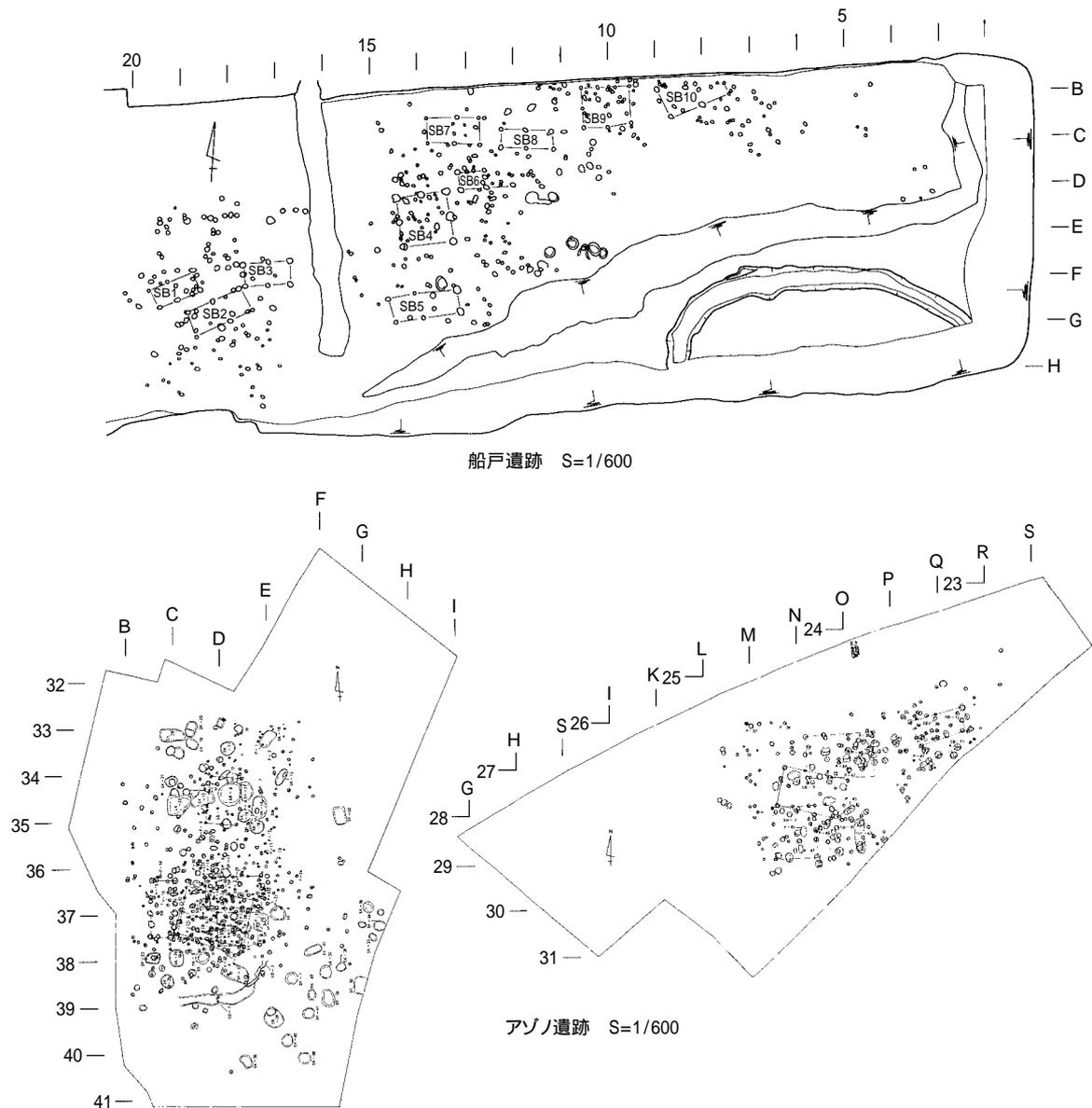


Fig.220 船戸遺跡、アゾノ遺跡 遺構全体図

白磁も多く、遺物量と集落の規模事態は具同中山遺跡群よりも大きい。遺跡からは1498年に起きた地震による噴砂跡が確認されており、集落自体もこの時期に終焉したと考えられている。

船戸遺跡(Fig.220)

今次調査区から約1.5km上流、右岸に位置しており、地籍図には「船戸」の字が残る。中筋川が蛇行して小さな入江状の地形をなす立地である。掘立柱建物跡10棟、流路3条、柱穴群を検出している。建物跡は13世紀から15世紀代に存続していたと考えられる。最大規模の建物跡はSB4で2×2間の正方形状を呈しており、出土遺物からは13世紀代に存在したと思われる。その他は1×2間の小規模な建物跡である。遺物は瓦器、貿易陶磁器の他に石製の碇が出土している。また近接する具同中

山遺跡群、アゾノ遺跡出土の搬入品の量からは、同時期に商品流通に関わった遺跡であった可能性が考えられ、石製の碇の出土からも中筋川の川津⁽¹⁹⁾としての機能をもつ遺跡であったと考えられている。

4. まとめ

中筋川流域の遺跡の概略を述べたが、各遺跡ともほぼ同時期に存続している。具同中山遺跡群では、期とした時期に貿易陶磁器や瓦器などの製品が県下では最も多く出土しており、集落の規模もアゾノ遺跡、船戸遺跡に比べ大きい。これら下流域の遺跡の中でも中心的集落であったのが具同中山遺跡群と考えられている。歴史的背景からは、九条家から一条家領として発展していく時期でもあり、「荘倉」的な機能をもちあわせた集落であった可能性が示唆⁽²⁰⁾されている。今次調査区では、周辺の遺跡ではみられない総柱の大型建物を検出した。出土遺物からは具同中山遺跡群が最盛期を過ぎた13世紀末から14世紀初頭に存続していたと思われる。アゾノ遺跡、船戸遺跡においても、この時期前後に遺跡の中では最大規模の建物跡を確認しているが、総柱の建物跡はみられない。今次調査区が香山寺のすぐ対岸に位置することや、建物跡の規模等から考えると「荘倉」的な建物であった可能性が高いといえる。また、出土遺物からはSB1が存続した時期に今次調査区が集落の最盛期をむかえ、周辺集落の中で中心的役割を担っていたと考えられる。今次調査区では14世紀中頃より遺物量が減少し、15世紀から16世紀代の遺物はほとんど出土していないことから、集落はSB1以後衰退に向かい、15世紀代にはほぼ終焉していると思われる。

古代から中世にかけての中筋川下流域に遺跡が多く存在する背景として、四万十川から支流の中筋川に遡上する水運の結節点としての場所であり、また古代以来の経済基盤に支えられた流通ルートによって、中・上流域の集落の結節点としてこの地域に中世集落が発展するのではないかと考えられている。これらのことから、今次調査区は中筋川に入ってきた船が最初に通る地点でもあり、流通の結節点として重要な役割を担っていた集落であった可能性が高いと考えられる。

註

- 1) 前田光雄・松田直則他『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 具同中山遺跡群』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992
- 2) 『玉津田中遺跡 第4分冊』-田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書- 兵庫県教育委員会 1995
遺跡は明石川左岸の沖積地に立地している。辻ヶ内地区の調査で検出された平安時代の掘立柱建物跡SB85002の柱穴からは礎板と柱根が検出されている。柱根の材質はコウヤマキ、礎板はモミである。
- 3) 尾上実・森島康雄・近江俊秀『瓦器碗』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995
- 4) 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書』-中世瀬戸内の集落遺跡- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1996
- 5) 註1に同じ 松田直則氏は土師器皿・杯については高知県中央部との比較により形態分類を行なっている。
- 6) 池澤俊幸『土佐からみた平安時代の土器』『中近世土器の基礎研究XV』日本中世土器研究会 2000
- 7) 註3に同じ
- 8) 森田実『中世須恵器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995
- 9) 伊野近富『12～16世紀の京都の土器』『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1989

- 10) 藤沢良祐氏の御教授による。
- 11) 松田直則「四万十川流域の遺跡」『中近世土器の基礎研究XI』日本中世土器研究会 1996
古代から中世における具同中山遺跡群の集落変遷を遺構・遺物から検討し、具同中山遺跡群が機能したと思われる11世紀から16世紀末を 期から 期に区分されており、遺跡における画期を述べられている。
- 12) 註11と同じ
- 13) 出原恵三・松田直則「風指・アソノ遺跡」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会 1989
- 14) 註11と同じ
- 15) 松田直則「四万十川流域の中世河津」『中世都市研究3』新人物往来社 1996
- 16) 松田直則「四万十川流域出土の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究16』日本貿易陶磁研究会 1996
具重遺跡では、古墳時代の土師器の他に青磁碗と内面見込みに印花文をもつ白磁碗を採取している。
- 17) 註13と同じ
- 18) 松田直則他「船戸遺跡」『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996
- 19) 註15と同じ
幡多荘には「舟所職」の役職が1275年以前からみられ、四万十川と後川の合流点である古津賀の木ノ津に置かれたと推定されている。これらから一条氏専用の河津が存在していたと推定し、船戸遺跡も木ノ津を經由して中筋川を通る川船の河津であったと考えられている。
- 20) 註11、15と同じ
- 21) 松田直則「古代から中世における中筋川流域の発展」『土佐史談212』土佐史談会 1999

参考文献

- 『中村市史』中村市
- 『長宗我部地検帳 幡多郡中』高知県立図書館
- 山崎正明他「具同中山遺跡群」『県道中村下ノ加江線建設工事に伴う発掘調査概要報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1998
- 松田直則「各地の土器様相 土佐」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995
- 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995

第 章 自然科学分析

1. 具同中山遺跡群 出土動物遺存体及び土壌の分析

岡山理科大学理学部

富岡 直人

はじめに

高知県具同中山遺跡群は、四万十川と中筋川の合流点近くの自然堤防の上に位置し、縄文時代から近世にかけての遺物・遺構が検出されている複合遺跡である。1997年に高知県文化財団埋蔵文化財センターによって調査・発掘された地点からは、弥生時代前期末～古墳時代初頭に形成された土坑、溝、包含層が検出され、動物遺存体が出土した。本報告は、この資料群についての分析結果を記すものである。

出土状況

調査区で確認した焼土および炭化物集中のうち、弥生時代終末期～古墳時代初頭に形成された層に属する遺構では、土坑SX10、焼土ブロックのB66、配石を伴うSX4の中央焼土から、動物遺存体が発見された。このうちB66はドーナツ状を呈しており1m程の広がりを持っている。これらの遺構とそれに供伴する遺構は、ほぼ同時期に営まれたものと考えられ、祭祀の痕跡をうかがわせる土器の集積や配石群などが検出されている。

また、弥生時代後期前葉の-1層に属する遺構では土坑SK4、炭化物を伴う落ち込みSX2、焼土ブロックのB8・B25・B28・B39・B15、前期末のXI層に属する遺構では炭化物を伴うSX1から動物遺存体が発見された。特にSK4は赤彩土器を供伴した長径2.1m、短径1.2mの浅い皿状の土坑で、この遺構からは、哺乳綱3点、硬骨魚綱2点、鳥綱1点が発見されており、分析遺構中最も出土量が多い。

分析方法

上記動物遺存体資料(資料件数14件)を分類・同定し、個体数算定を行うとともに、常法によって計測し、実体顕微鏡、生物顕微鏡で観察し、解体痕跡の分析、死亡年齢の推定を実施して、当時の家畜飼育・処理文化を考察することを目的とした。

資料は破損が著しかったため、水洗選別は行わず、必要に応じて精製水と面相筆・軟毛歯ブラシでクリーニングを実施した。極めて脆弱な資料については、クリーニングが破損を招くため、実施せず、表面観察に止めた。

土壌中の資料の埋存環境を推定するために、資料を包含していた乾燥土壌を採取し、蒸留水を利用して抽出液を製作し土壌pHの測定を実施した。

出土動物遺存体の特徴

出土した動物遺存体の多くは火を受けて白色に変化して亀裂が生じ、径1～20mm程の小さな碎片となっていた。焼成の温度は骨の保存状況と色調から判断して500度以上の高温であったことが推定される。

種名および個体数算定について、概要を表1に記述する。種が特定されたものは、-1層の焼土ブロックB39から出土した1歳以上のニホンジカの角(左右不明、残存幅21.73mm)のみであった。

出土資料の属性は、表2の通りである。実体顕微鏡で観察を行ったが、このように碎片資料が多かったため、解体痕跡はみられなかった。

送付された脊椎動物遺存体の個体番号を資料番号として示し、複数個体が含まれた場合は補助番号を付した。そのため、最終的な資料点数は16点を数える。実体顕微鏡下で慎重に鑑定を進めたが、6,7,8,11については、特に識別に困窮したことを付記しておく。

この資料を含め、検出された遺存体のうち残存状況が良好なものを写真撮影し、図版1に示した。

土壌pHの特徴

弥生時代後期前葉の-1層に属するSK4の資料に付着した土壌を中心に、乾燥土壌を採取し、純水を利用して抽出液を製作し土壌pHの測定を実施した。

表3 土壌pH pH degree of soil in the Gudo-Nakayama site

分析番号	遺構名	資料番号 (動物遺存体)	土壌 pH	備考	土色 (測定液抽出後)
1	SK4	2	7.31	灰成分が多	10YR4/3
2	SK4	1	6.45	土壌が黒色	7.5YR3/2
3	SK4	2	5.80	土壌が黒色	7.5YR3/2
4	SX1	5	6.41		10YR4/2
5	B8	7	5.80	鉄分が多	7.5YR4/4
6	B28	9	6.10		10YR4/2

この結果、具同中山遺跡群のこれらの遺構の多くは酸性～弱酸性の埋存状況にあったことが明らかである。ただし、分析番号1のSK4資料のみ飛び抜けており、弱アルカリ性の土壌であった。これは、同じ遺構の分析番号2,3資料と0.86～1.51ポイント異なっている。測定液抽出後の土壌の色(土色：発掘時の観察状況と違うため、色調に変化が生じている)も大きく異なることから、pHが変化していることは頷けるものの、筆者が従来行った分析経験上、同一遺構内で測定値に最も差が認められた例として、特徴的埋存環境であったことと考えられる。

この原因は、遺構埋土ブロックの混交が弱く、土壌成分の異なるブロックが性質を保ちながら保存されたためと考えられる。このように、灰や骨片が多量に含まれた土壌が周囲の酸性土壌の影響でその性質を失っていったとは考えられず、もともと骨片や灰が含まれていたのは少量であったと考えられる。以上のような土壌ブロックの混交が進んでいない状況は、具同中山遺跡群の中～長期

にわたる攪乱の少なさ、埋存環境の良好さを物語るものである。

以上より、分析番号1のSK4土壌は、リン酸カルシウムを主体とする骨格資料の保存に適するものの、その他の土壌は適しておらず、骨格が腐朽しやすい原因の一つとなったと考えられる。

動物遺存体の加工処理と遺跡の性格

出土動物遺存体と遺構の関係を吟味すると、焼土や炭化物を多量に伴う遺構において、動物の骨格類が白色に変化する500度以上の高温で火が焚かれ、硬骨魚綱、鳥綱、哺乳綱の骨格が焼かれ、細片化されたものと考えられる。

火が焚かれ焼骨が多量に出土する遺跡は、日本全国に数多く見られ、筆者も30遺跡前後の遺跡資料を分析する機会をえているが、具同中山遺跡群の場合、他の遺跡と比較しても細片化が著しい。本来、この程度の面積を発掘し、これ程の焼土・炭化物供伴遺構が検出された場合、より大きな破片で鑑定が容易な資料が含まれていて当然であるが、それが一切検出されていない。このため、食料残滓の廃棄が多量に行われた遺跡とは考えられない。また、土壌pHの検討においても灰や骨片などの影響でアルカリ性に変化している様子は、分析番号1を除いてみられず、灰や骨格類の廃棄も低調であったと考えられる。

以上より、弥生時代から古墳時代にかけて、動物とその骨格は具同中山遺跡群内で日常的に多量に処理していたのではなく、非日常的に動物が高温の火によって処理された場であったと考えられる。さらに出土した焼骨は、それぞれの動物の一個体に換算しても、わずかな部分しか検出されておらず、焼成された焼骨の多くは意図的に別の場所へ廃棄された可能性も考えられる。また、焼骨を埋納する意図をもっていたのならば、より多量に資料が出土したはずであり、さらにその保存性は良かったはずであると考えられることから、そのような意図がなかった可能性が高い。

以上の結果と供伴遺物や遺構の状況を考え合わせると、具同中山遺跡群は非日常的に硬骨魚綱、鳥綱、哺乳綱の処理を行った祭祀的性格を強く持つ遺跡で、これらの骨格の埋納や廃棄が行われたとしたら別地点でなされたものと考えられる。

謝辞

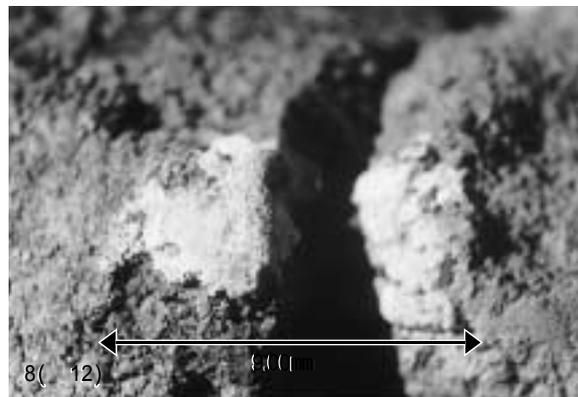
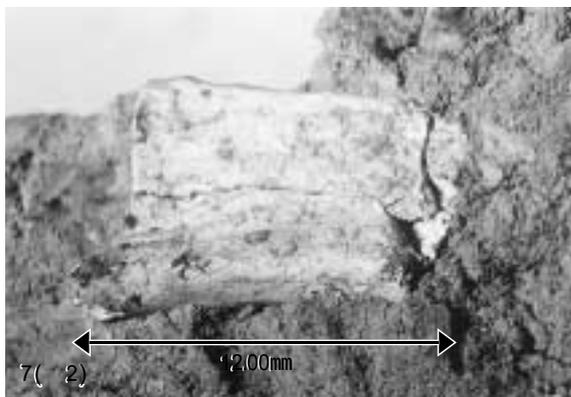
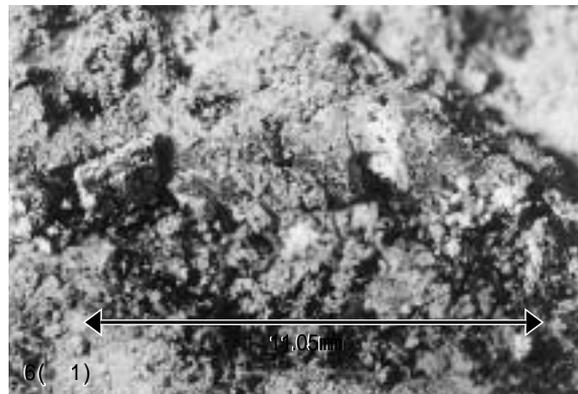
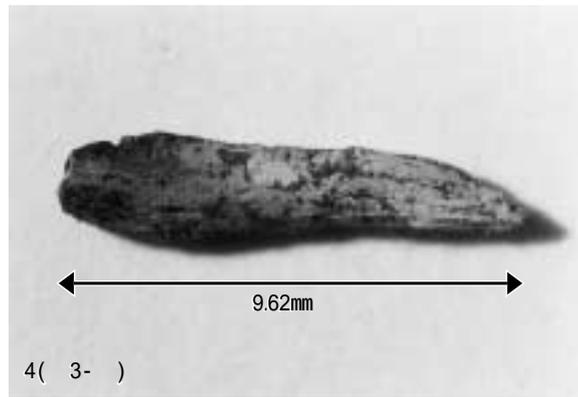
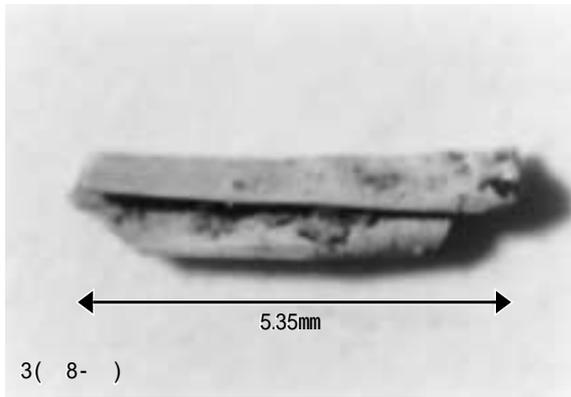
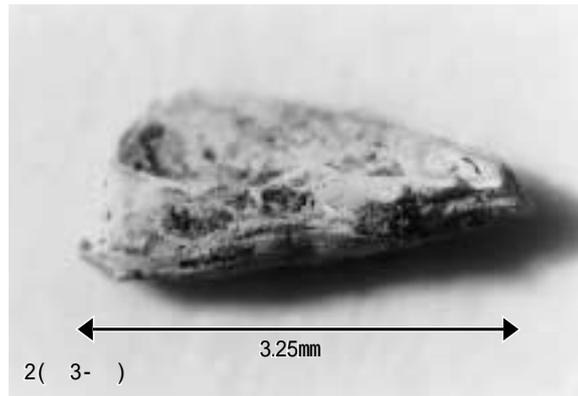
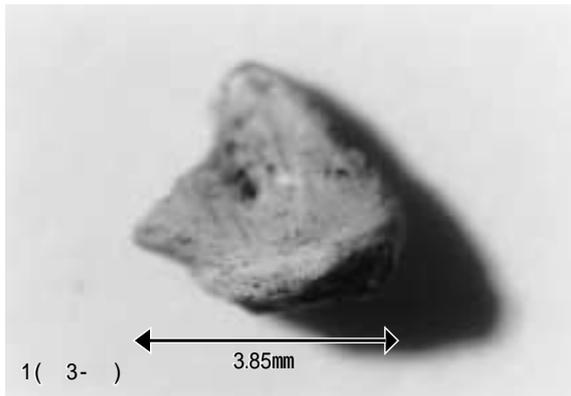
高知県埋蔵文化財センター浜田恵子氏には資料の提供とともに様々な御教示御援助を頂いた。また、分析にあたっては 岡山理科大学院生沖田絵麻さん、同大学学生藤田芙美さん、渡邊美保さんの多大なる御協力を得た。さらに、国立歴史民俗博物館西本豊弘先生、岡山理科大学総合情報学部波田善夫氏、基礎理学科名取真人氏に比較標本の提供と御助言、御教示を頂いた。また、東北大学文学部須藤隆先生には、終始様々な御指導、御教示を頂いた。記して感謝の意を表します。

表1 出土動物遺存体 List of animal remains from Gudo-Nakayama site

硬骨魚綱	目不明	Osteichthyes ordo.indet.	・・・・・・・・・・・・・・・・	1
鳥綱	目不明	Aves ordo.indet.	・・・・・・・・・・・・・・・・	1
哺乳綱	目不明	Mammalia ordo.indet.	・・・・・・・・・・・・・・・・	1
ウシ目(偶蹄目) Artiodactyla				
シカ科		Cervidae		
ニホンジカ		<i>Cervus nippon</i> Temminck(雄成獣1歳以上)・・・・・・・・1		

表2

資料番号 ()	層位	遺構名	大分類(綱)	小分類(種名)	部分	残存長(mm)	備考 (全て白色{焼骨}で、 亀裂が生じている)
1	-1	SK4	哺乳綱	不明	不明	-	
2	-1	SK4	哺乳綱	不明(中型)	不明	11.05	
3-	-1	SK4	硬骨魚綱	不明	不明(棘)	3.25	
3-	-1	SK4	鳥綱	不明	不明	9.62	
3-	-1	SK4	硬骨魚綱	不明	不明	3.85	
4	-1	SK4	哺乳綱	不明	不明	-	
5	XI	SX1	哺乳綱	不明(中型)	不明	10.32	
6	-1	SX2	哺乳綱	不明	不明	5.70	
7	-1	B 8	哺乳綱	不明	不明	8.40	
8	-1	B 25	硬骨魚綱	不明	不明	5.35	
9	-1	B 28	哺乳綱	不明	不明	-	ビビアナイト析出
10	-1	B 39	哺乳綱	ニホンジカ	角(角幹部)	21.73	雄1歳以上、左右不明
11		B 66	哺乳綱	不明	不明	5.35	
12		SK10	哺乳綱	不明	不明	9.00	
13		SX4- B 1	硬骨魚綱	不明	不明	4.65	
19	-1	B 15	不明	不明	不明	2.82	



図版1 出土動物遺存体 Animal remains. 1~3 硬骨魚綱目不明.
4 鳥綱目不明. 5~8哺乳綱(5ニホンジカ角. 6~8目不明)

写真図版



調査前全景(西より)



区完掘状況及び南壁セクション



区南壁セクション(層 ~ 層)



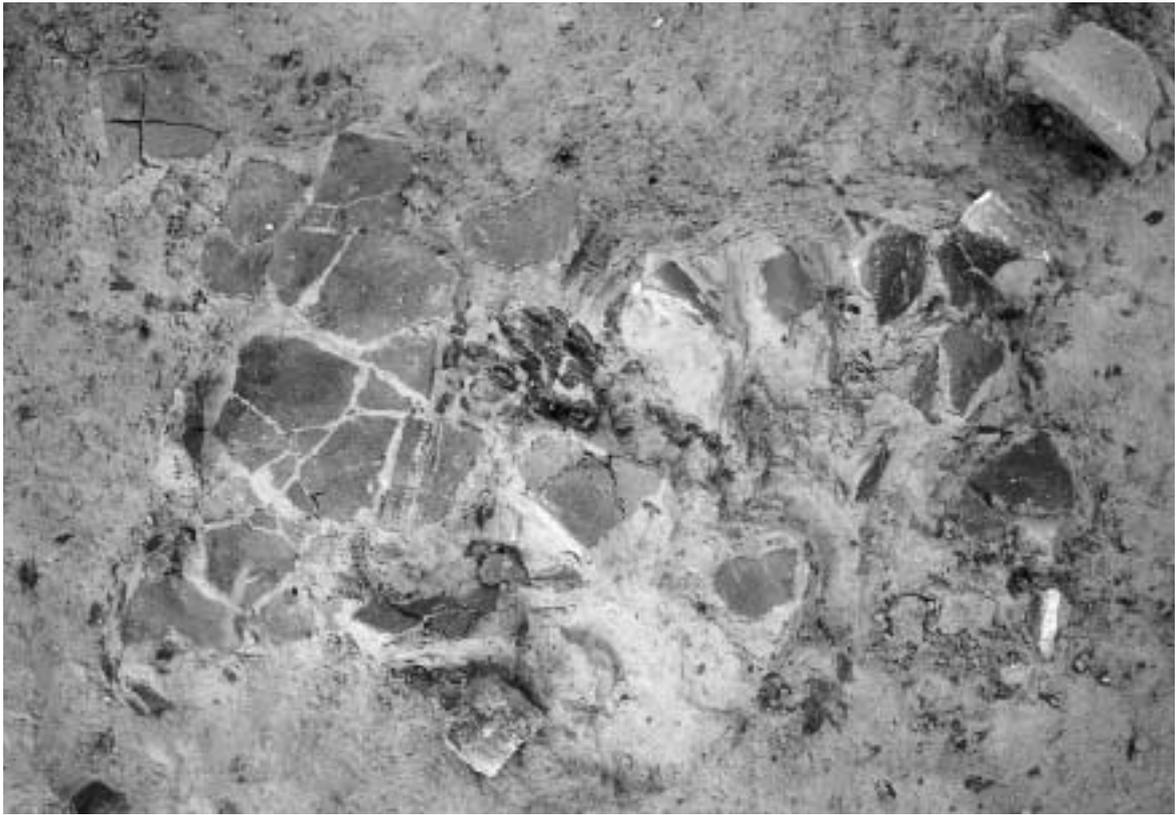
ST1(東より)



ST1セクション(南より)



SK5半截状況



焼土35遺物出土状況



土器集中3遺物出土状況



杭3セクション(南より)



SR1・2完掘状況(西より)



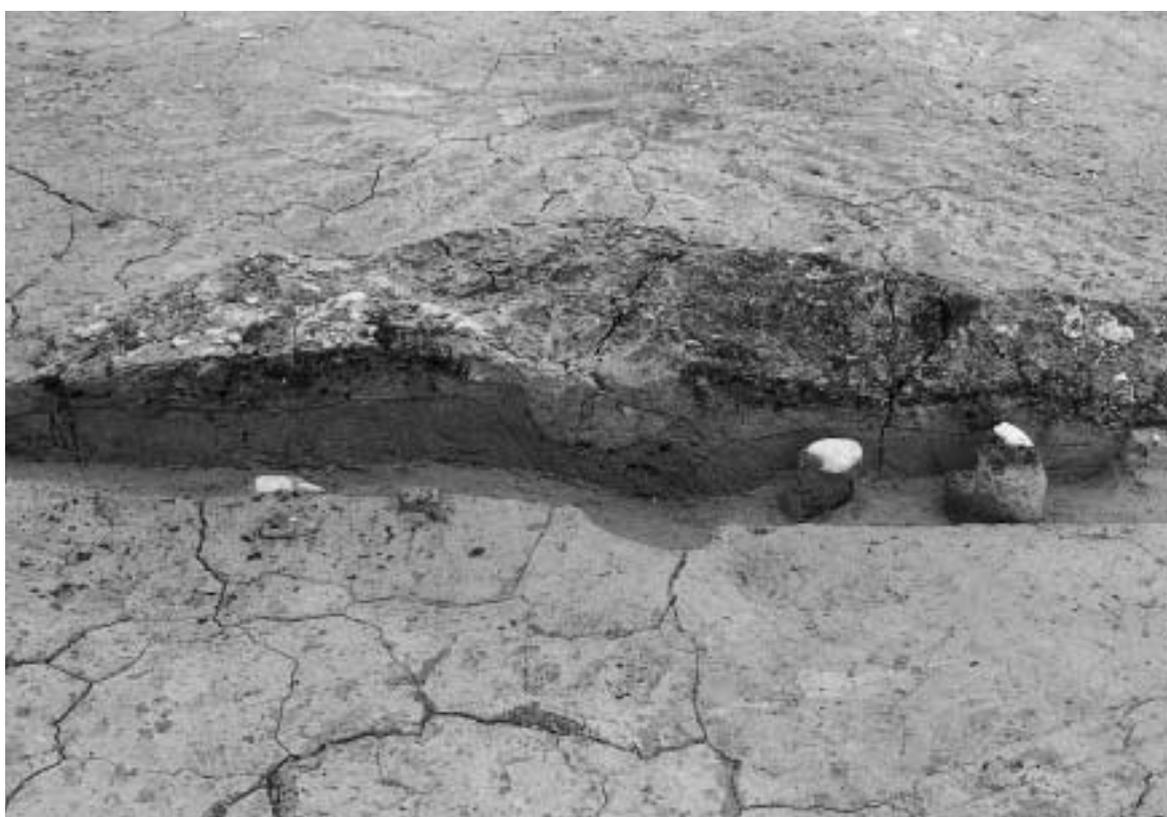
杭群2- P4炭化物出土狀況



SK6遺物出土狀況



SK4半截状況



SX2セクション(西より)



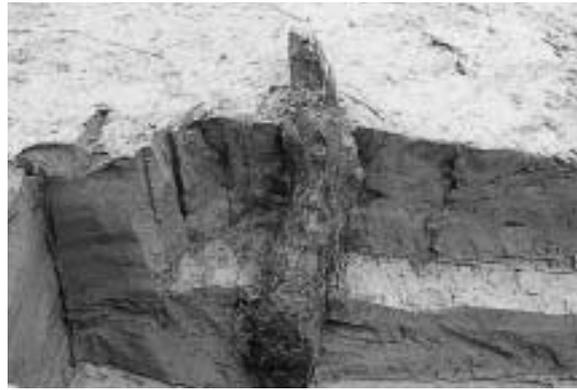
SK7セクション(北より)



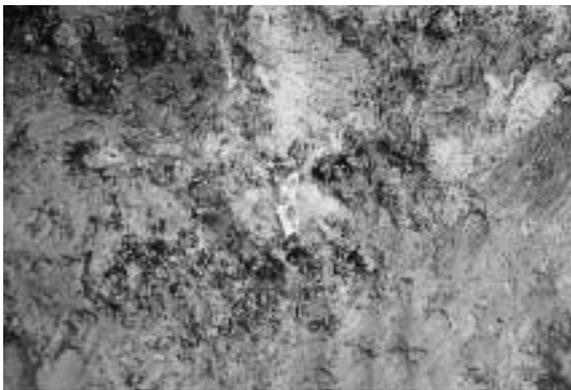
焼土15セクション(南より)



XI層(610)



杭2セクション



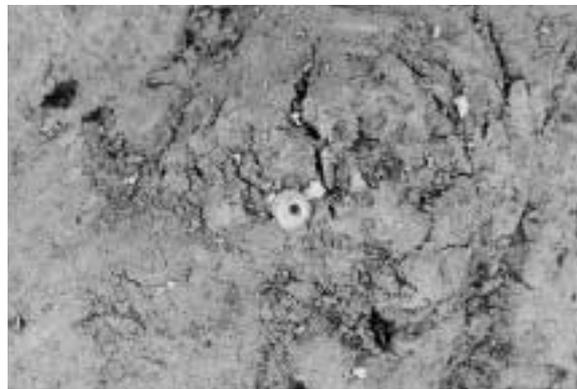
SK4骨片出土状況



同左



ST1遺物出土状況



土器集中1(118)



土器集中1焼土検出状況



SK4遺物出土状況



SX2(49)



土器集中1(68)



土器集中2(130・128)



土器集中3遺物出土状況



土器集中3遺物出土状況(131)



土器集中4遺物出土状況(160)



土器集中4遺物出土状況



土器集中6遺物出土状況



SX5集石及び遺物出土状況(西より)



同上セクション(北より)



SX4集石及び遺物出土状況(東より)



SX4集石1・2・3出土状況



SX4セクション(北より)



同上(西より)



SX5焼土検出状況



SX5遺物出土状況(443)



SX4-集石1



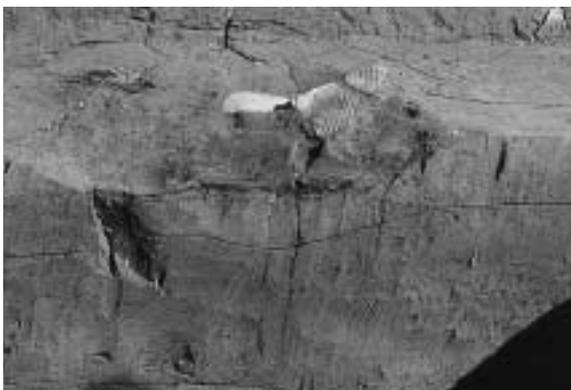
同左



SX4-集石3



SX4-集石5



SX4-集石6焼土セクション



SX4骨片出土状況



SK7遺物出土状況



土器集中15遺物出土状況



烧土72セクション(南より)



烧土50骨片出土状況



土器集中11遺物出土状況



土器集中12遺物出土状況



土器集中12遺物出土状況



土器集中13遺物出土状況



土器集中1遺物出土状況



土器集中15遺物出土状況



土器集中17遺物出土狀況



同左



(598)



土器集中17(560)



土器集中21遺物出土狀況



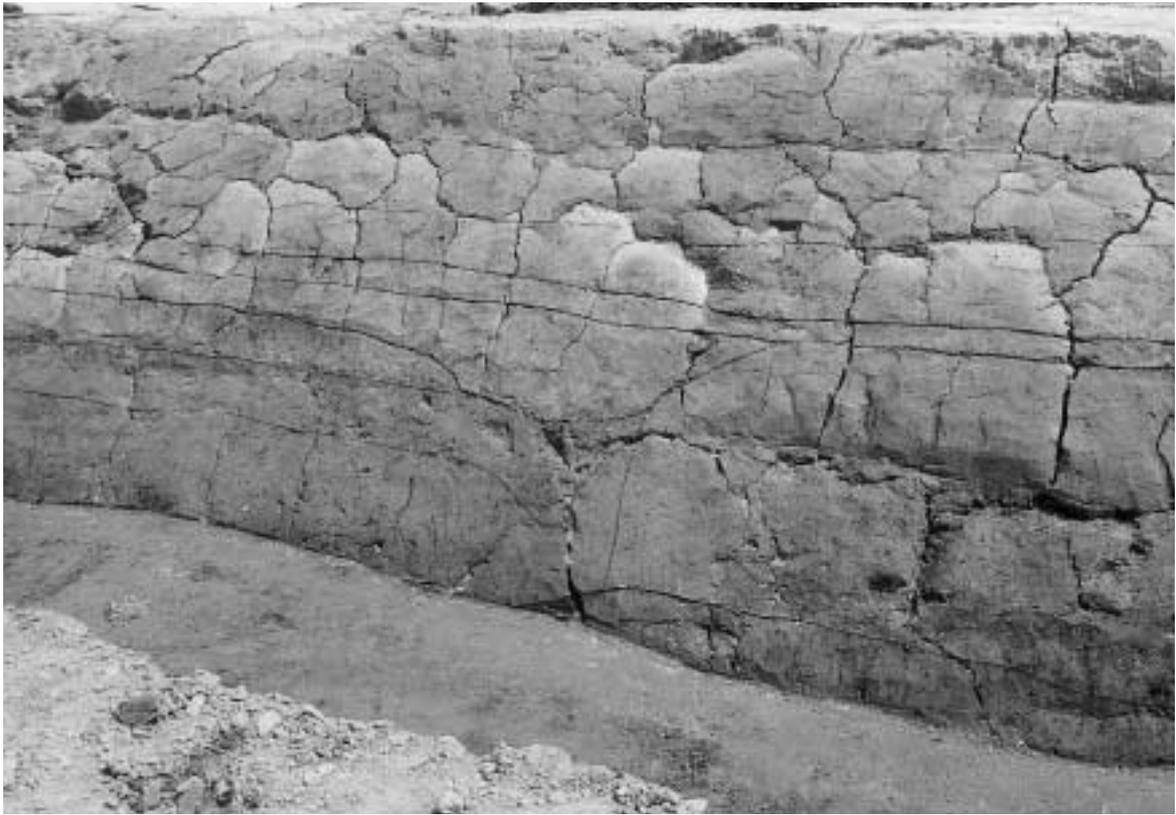
土器集中25遺物出土狀況



土器集中24遺物出土狀況



(517・515・516)



区南北セクション



区南壁セクション(~ 層)



SF2遺物出土状況



SF3遺物出土状況



土器集中26遺物出土狀況



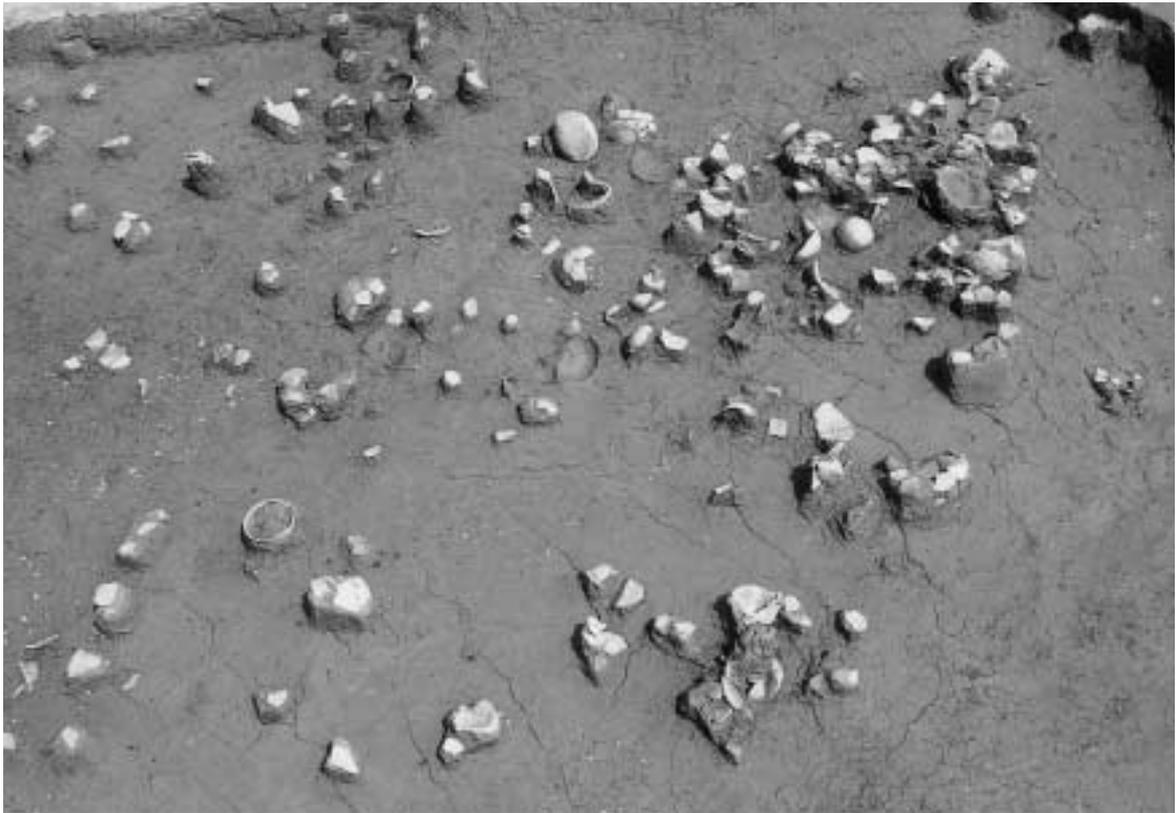
SF9遺物出土狀況



SF10遺物出土状況



同上



SF11遺物出土状況



同上



SF12遺物出土状況



同上



SF13遺物出土狀況



須惠器集中出土狀況



土器集中28遺物出土状況



土器集中29遺物出土状況



SF5遺物出土状況



SF5須恵器出土状況



SF6遺物出土状況



SF7遺物出土状況



SF9遺物出土状況



SF10遺物出土状況



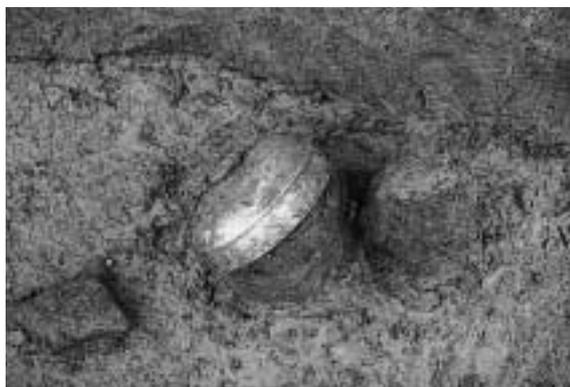
SF10遺物出土狀況



層遺物出土狀況



層遺物出土狀況(須惠器蓋、土師器鉢)



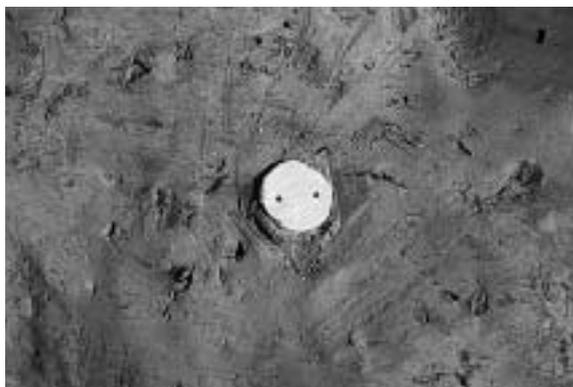
層遺物出土狀況(須惠器蓋)



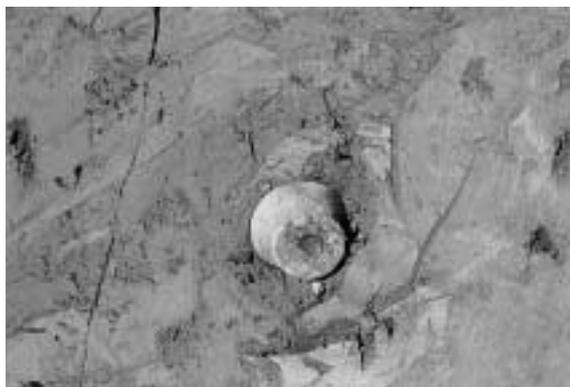
層遺物出土狀況1



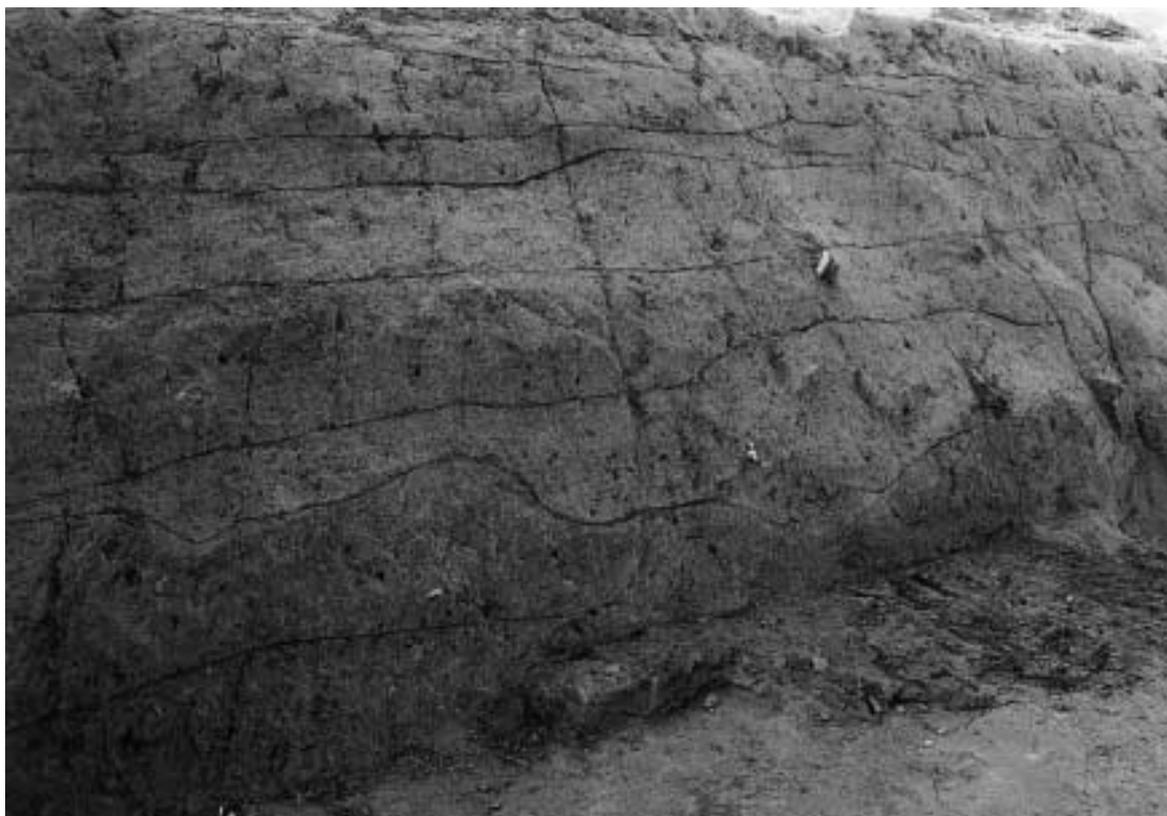
層遺物出土狀況2



SF10石製有孔円板出土狀況



SF10石製紡錘車出土狀況



調査区南壁セクション(~ 層)



区中世面完掘状況(東より)



区中世面完掘状況(南より)



SB1完掘状況



SK20完掘状況及び遺物出土状況



SD4半截及び完掘状況



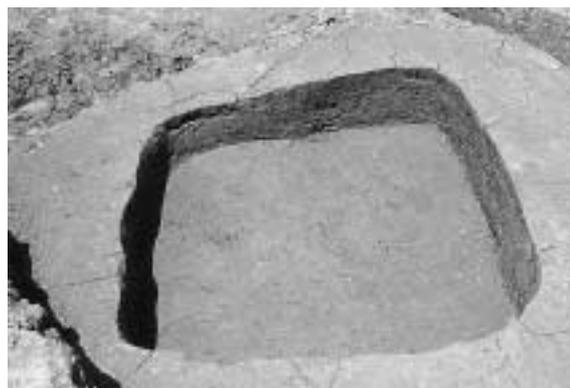
SE1検出状況(北より)



SE1半截状況(北より)



SK13セクション及び遺物出土状況



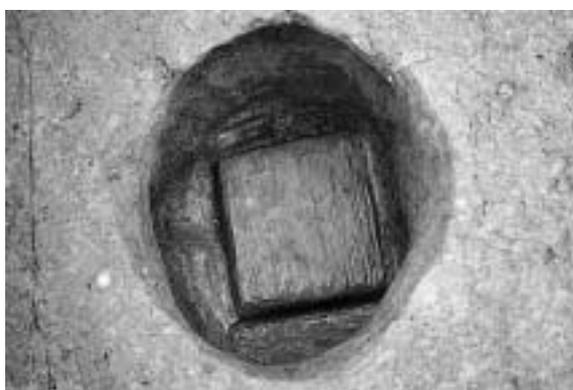
SK13完掘状況



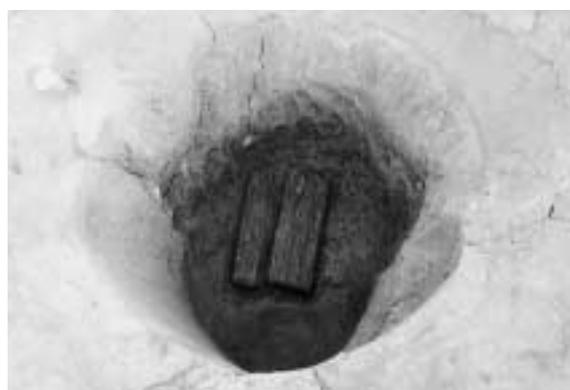
SK11遺物出土状況



SB1-P14半截状況



SB1-P15礎板出土状況



SB1-P16礎板出土状況



SB8-P2柱根出土状況



礎板と古銭出土状況



SD1完掘状況



SD4木製漆器椀出土状況



SE1曲物出土状況



土師器集中出土状況



SK8瓦器出土状況



層須恵器出土状況



-2層青磁出土状況



-2層青磁出土状況



区東部 -1層上面完掘状態



炉1(東より)



SB13東部完掘状態(西より)



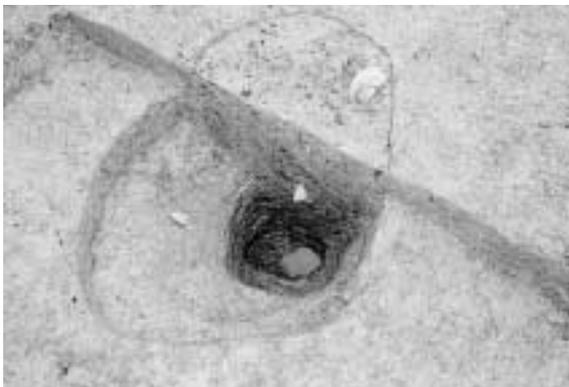
SB14完掘状態(南より)



SB15完掘状態(南より)



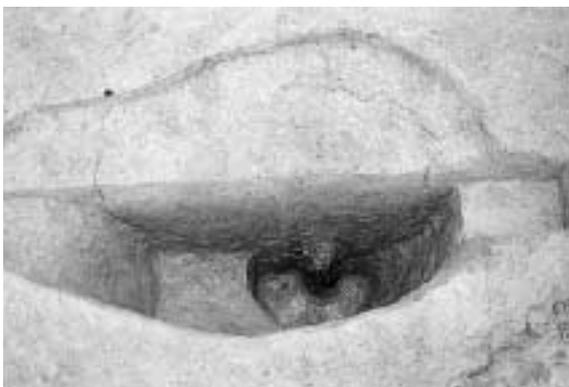
炉2調査状況



SB14-P2半截状態



SB16-P2柱根出土状況



SB17-P4柱根検出状況



P121柱根出土状況

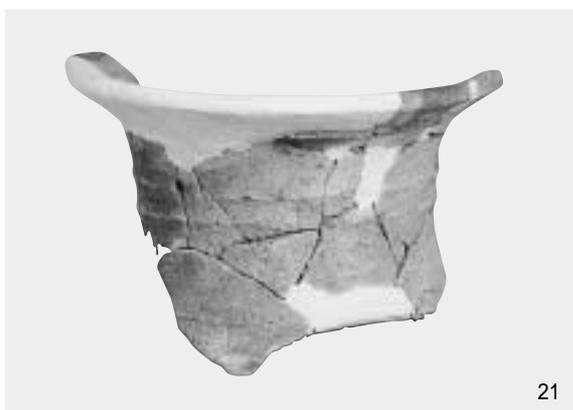


区最下層確認トレンチ(東より)



作業風景









10(内面)



10(外面)



11



24



66



71



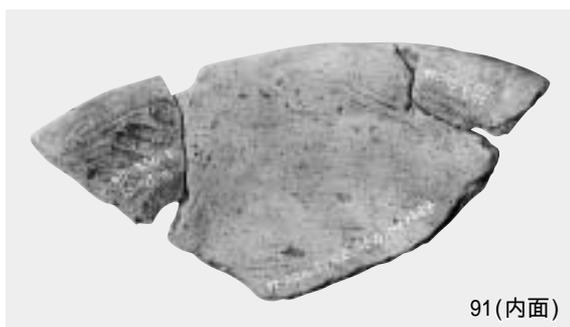
72



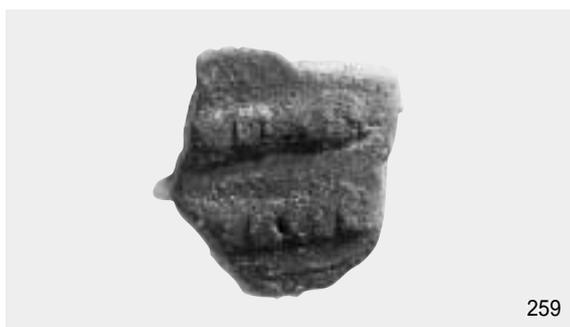
137

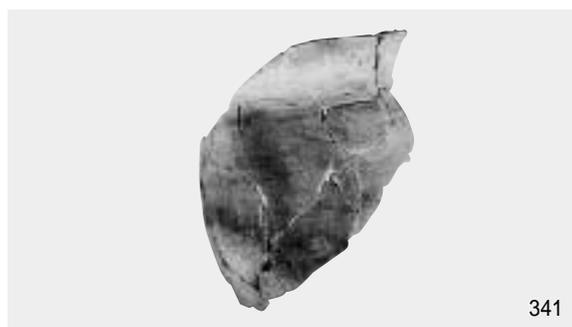
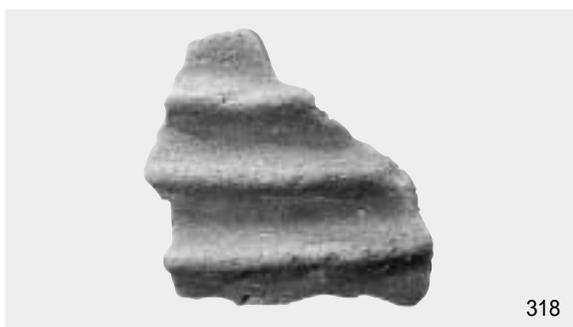
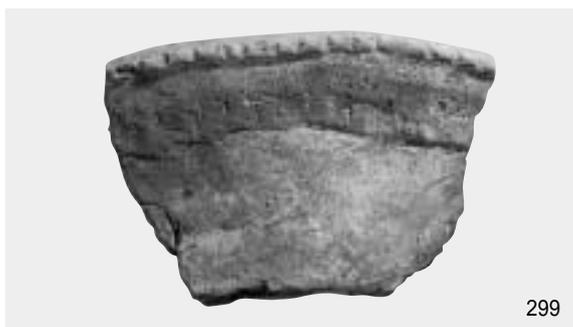
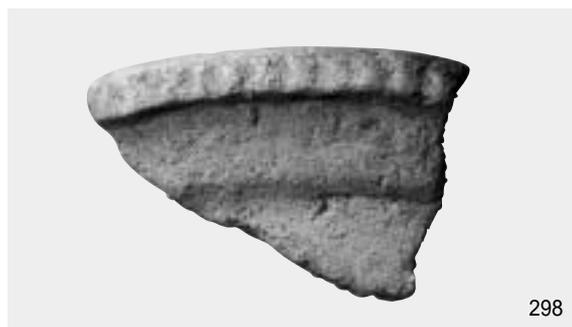
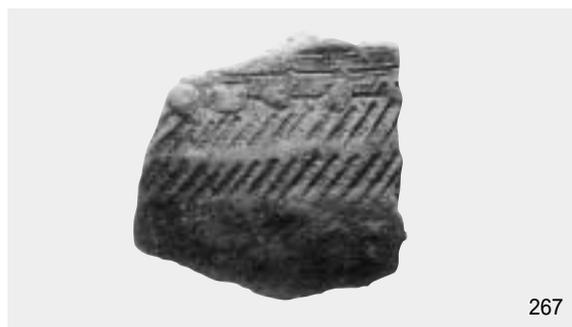
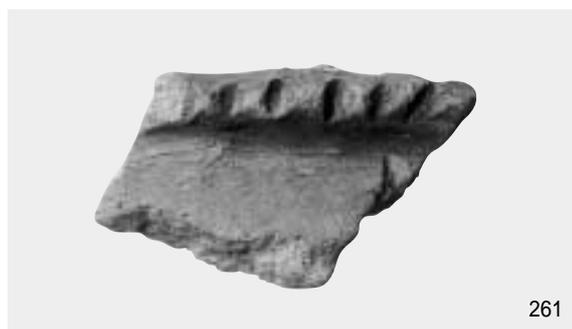


91(外面)



91(内面)







363



417



409



409



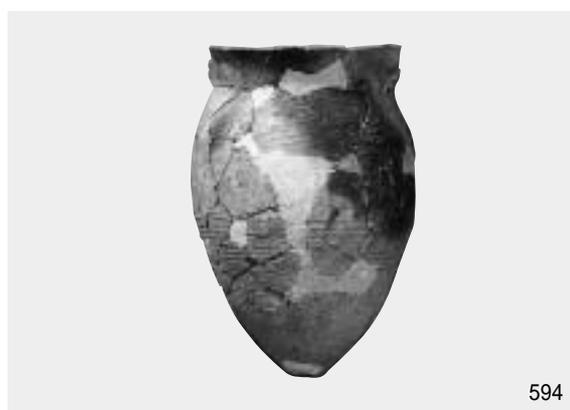
418

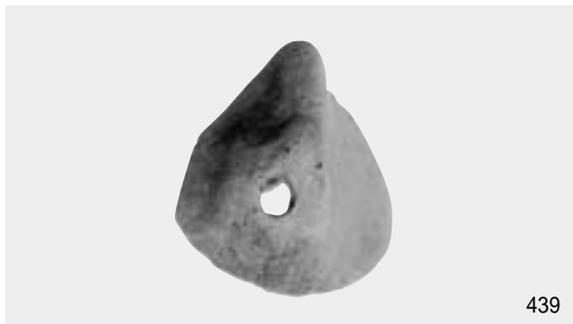
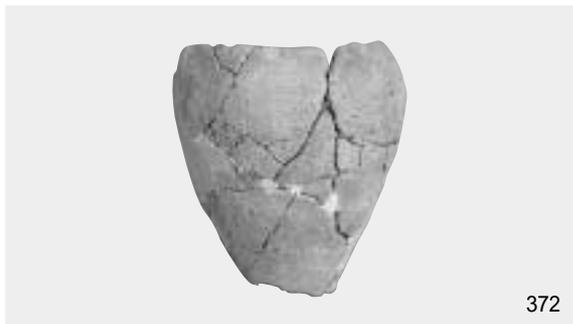


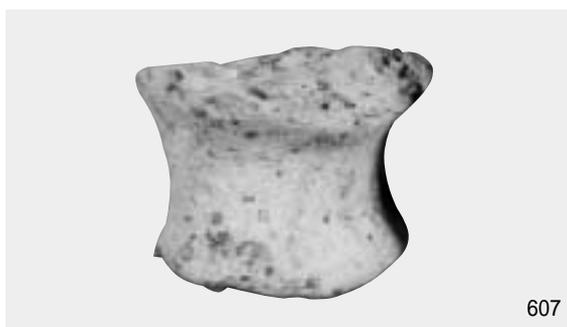
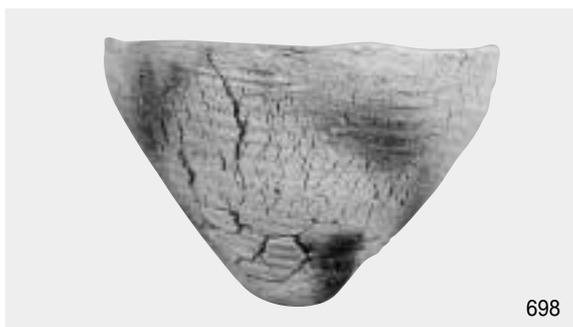
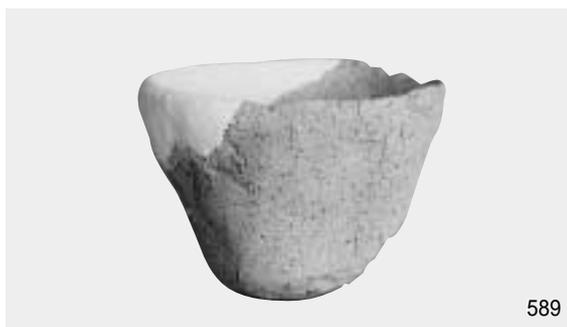
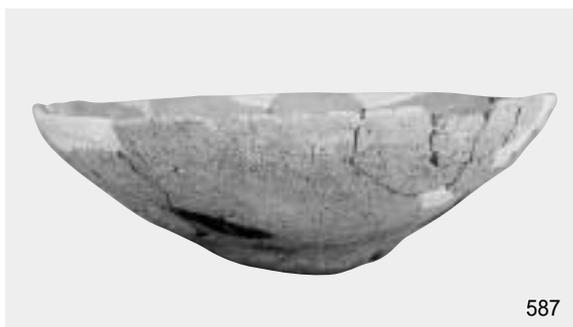
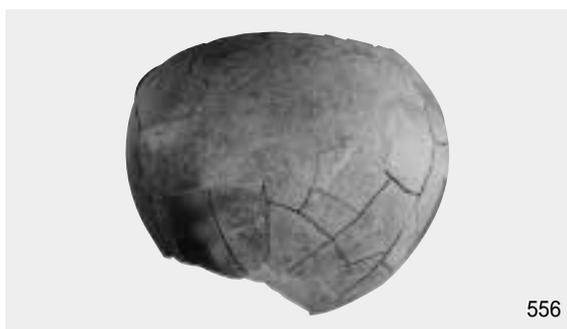
524

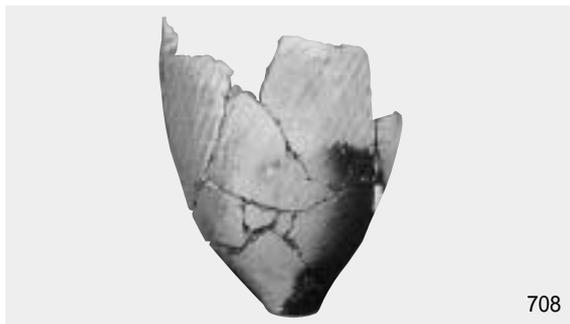
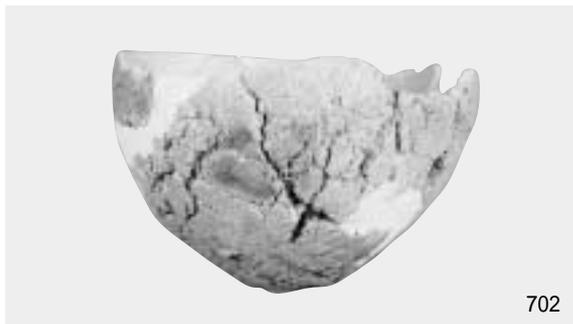
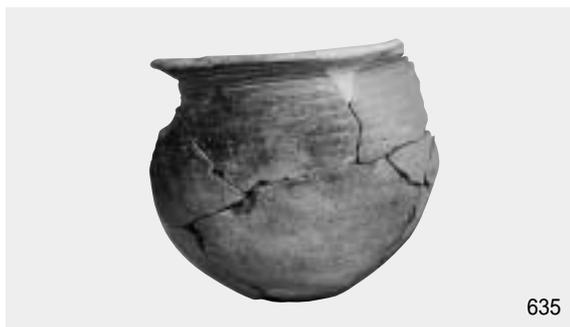








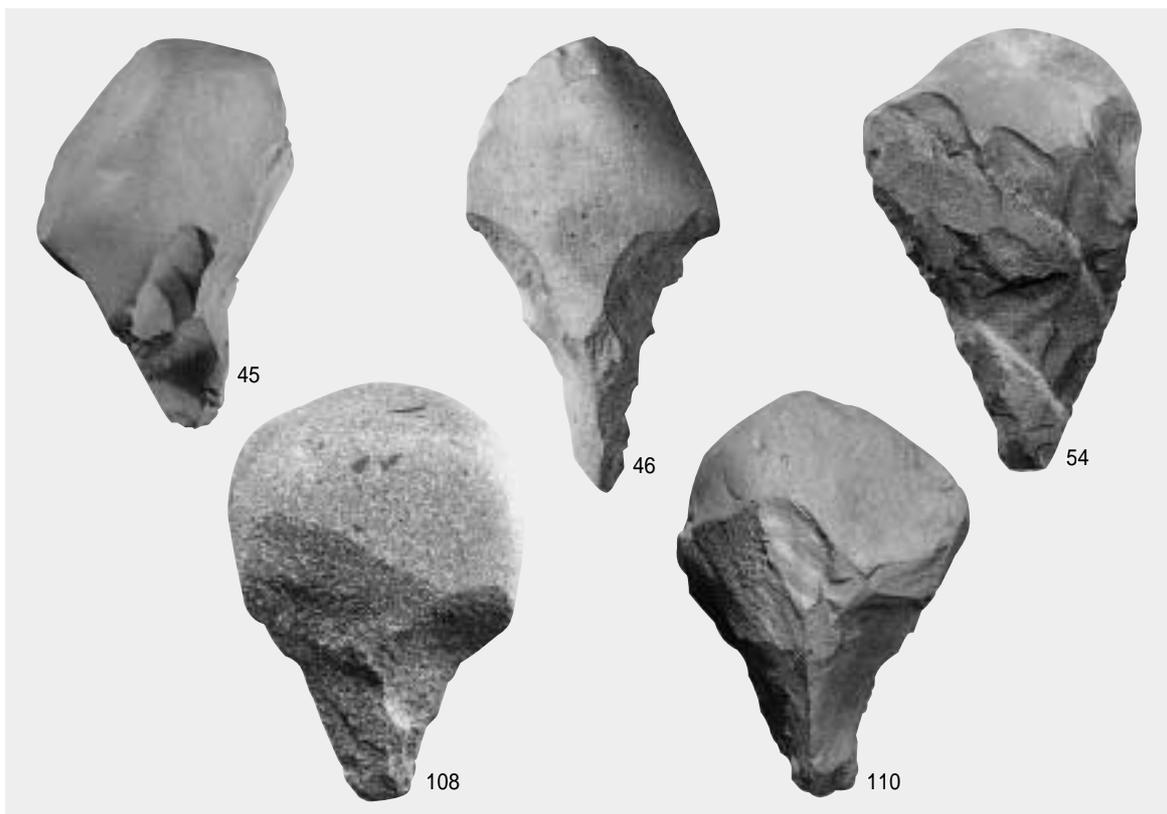




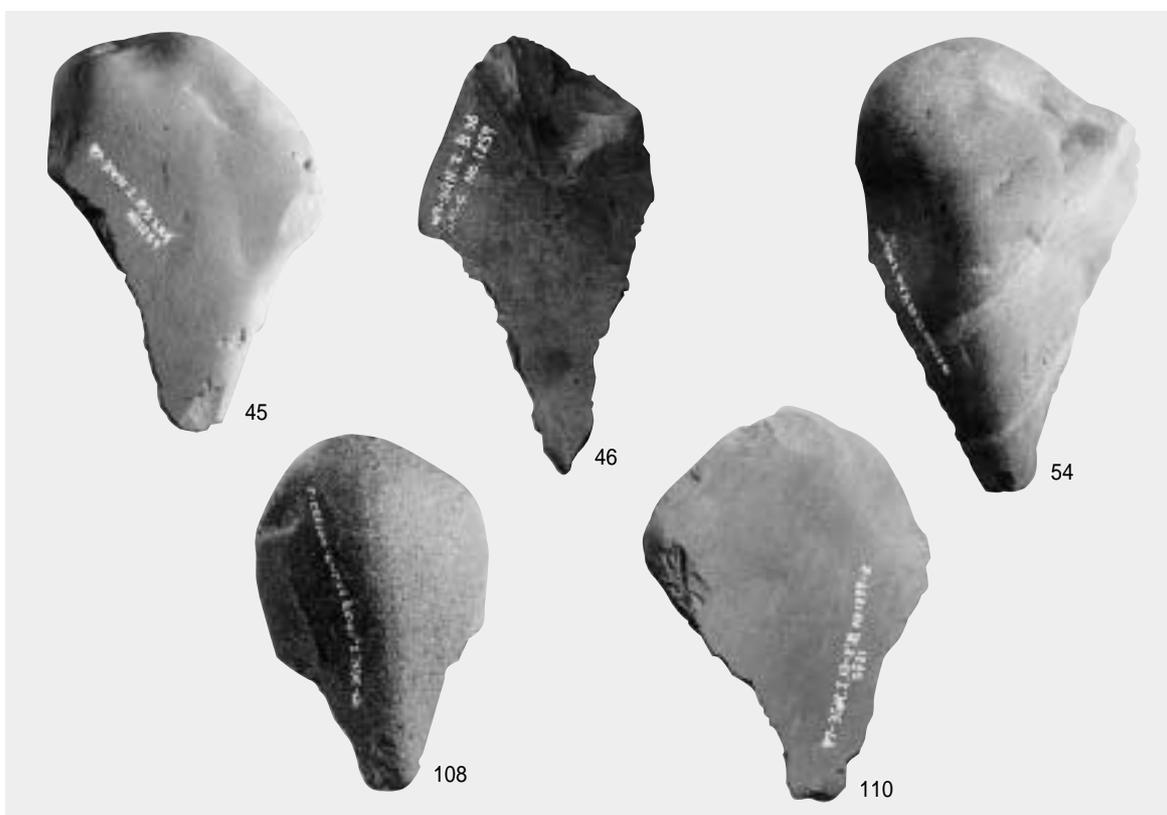
層出土遺物



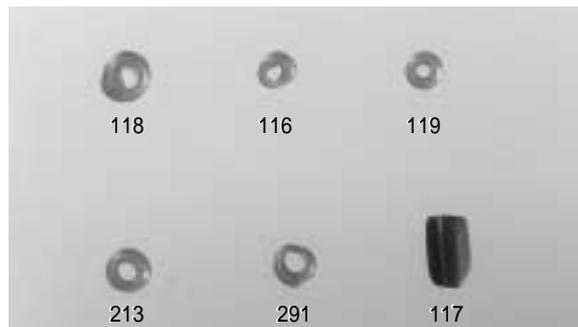
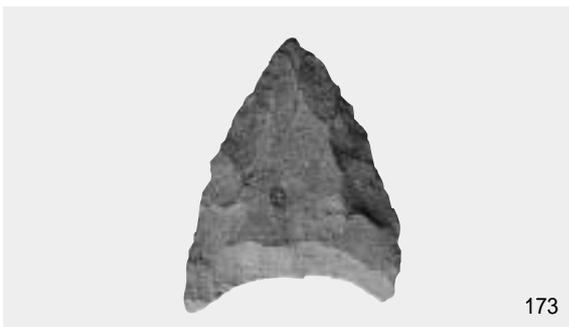
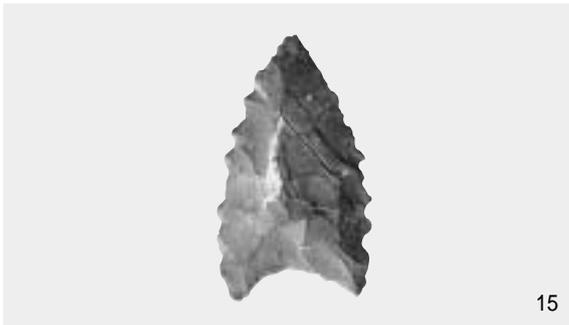
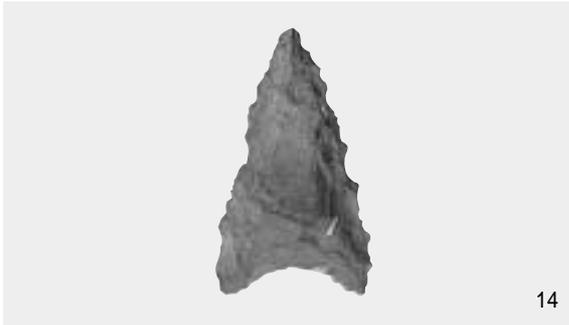
層出土遺物



層出土遺物

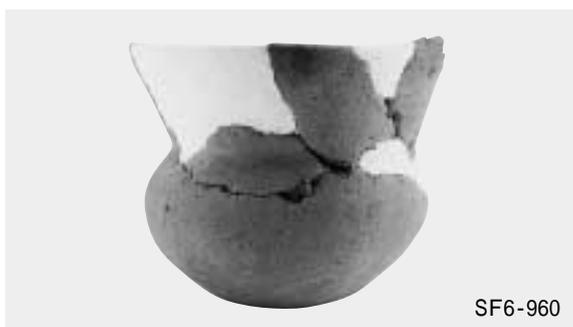
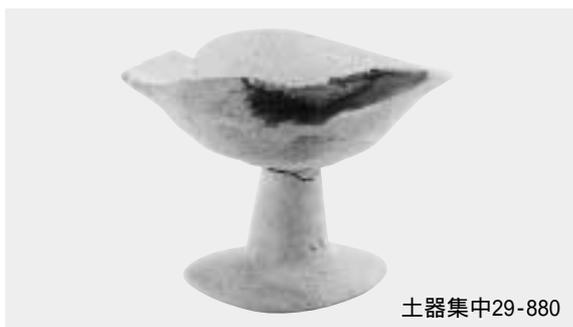
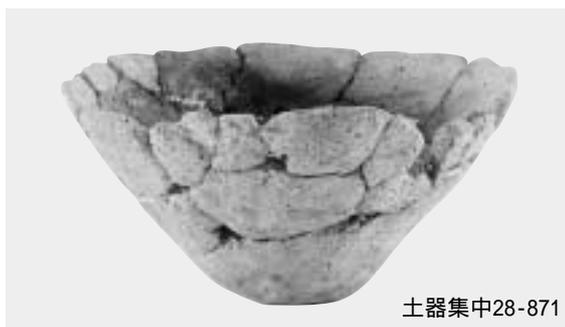


同上(裏面)





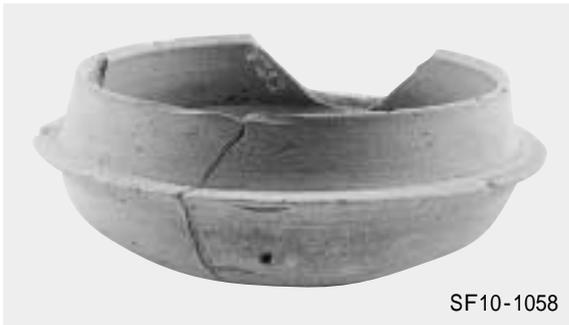
出土遺物(古墳時代)

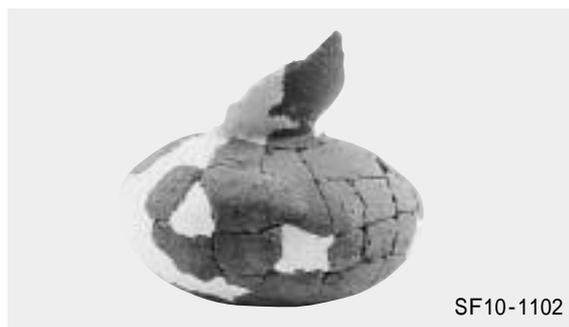


出土遺物(古墳時代)



出土遺物(古墳時代)





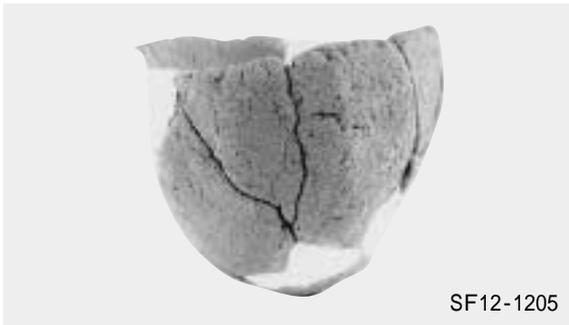
出土遺物(古墳時代)



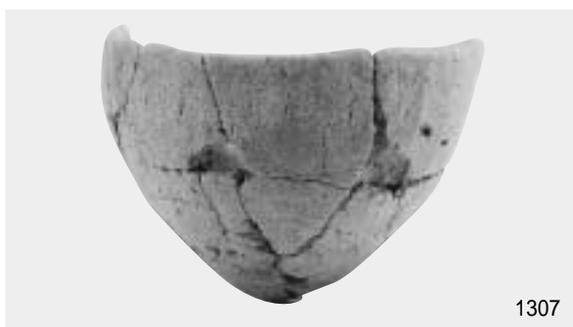
出土遺物(古墳時代)



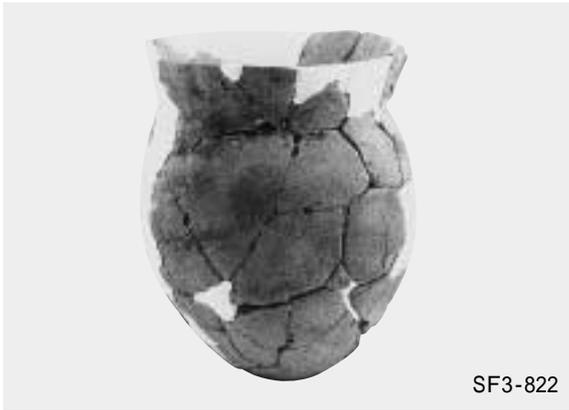
出土遺物(古墳時代)



出土遺物(古墳時代)



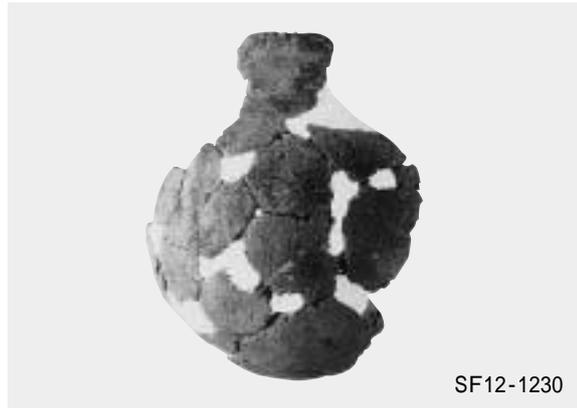
出土遺物(古墳時代)



出土遺物(古墳時代)



出土遺物(古墳時代)





927



928



931



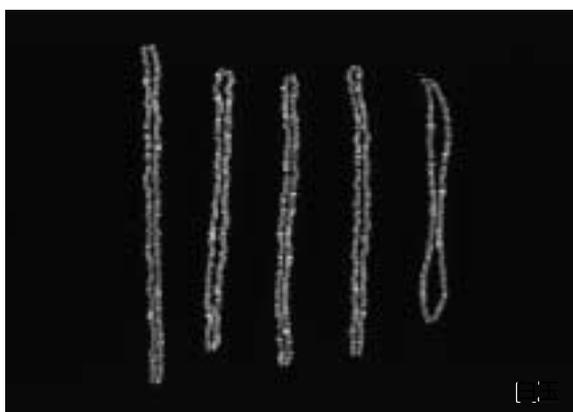
934



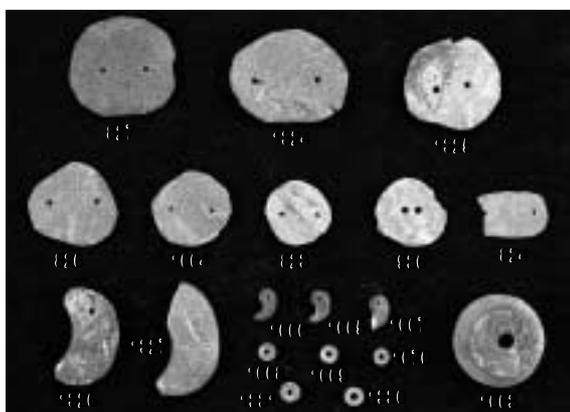
1299



1305

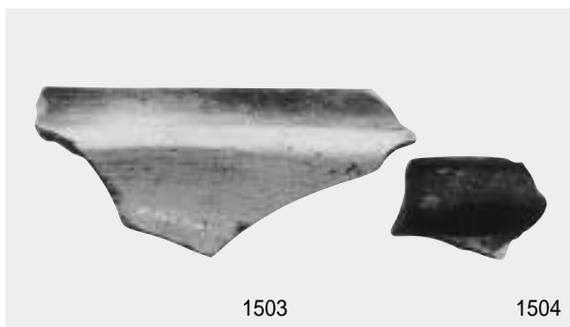


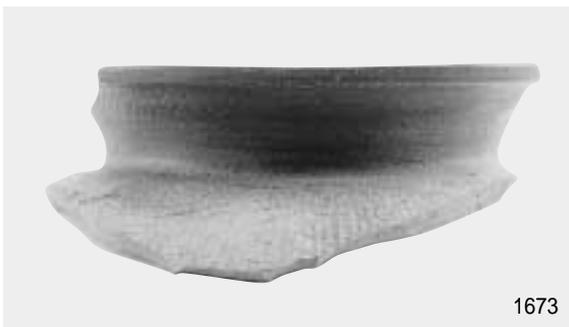
三

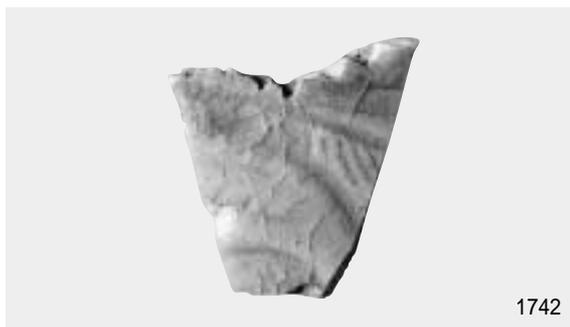


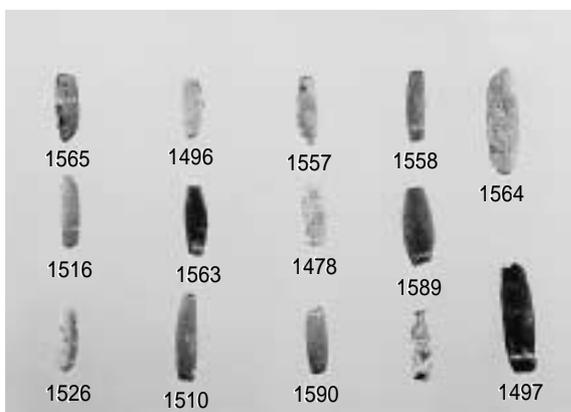
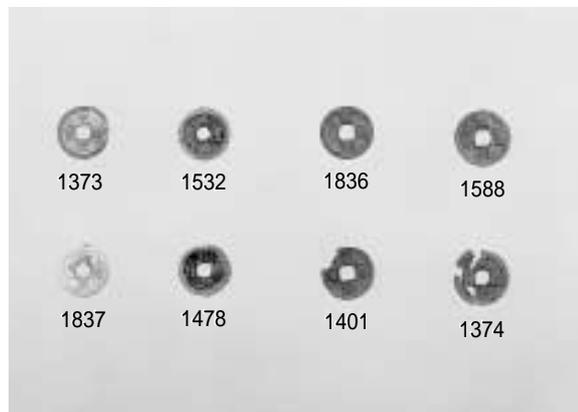
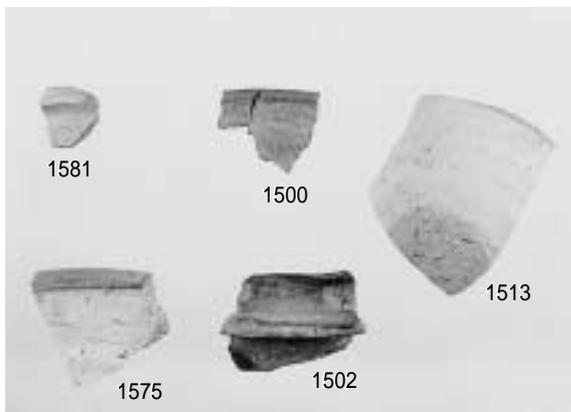
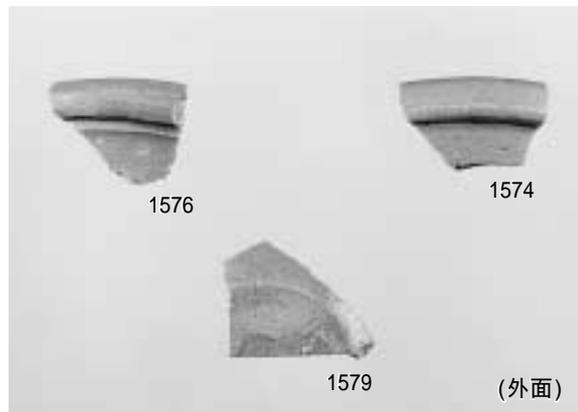
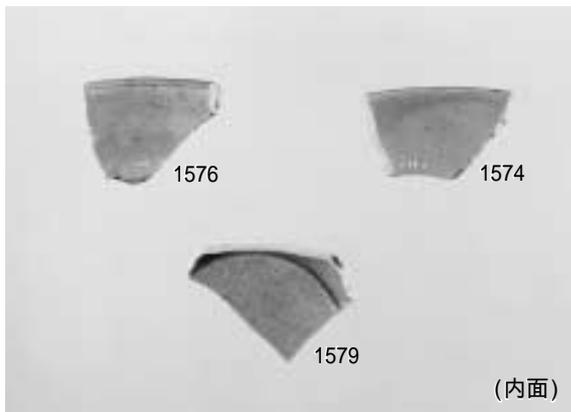
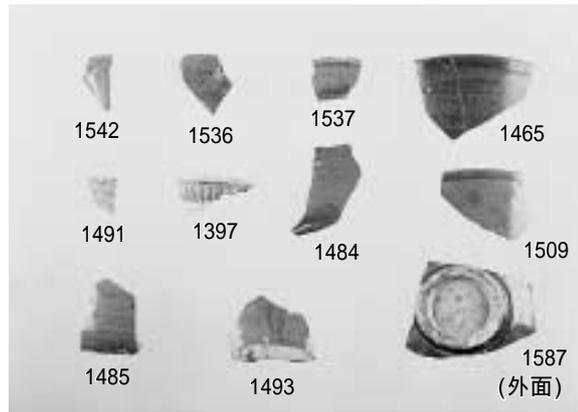
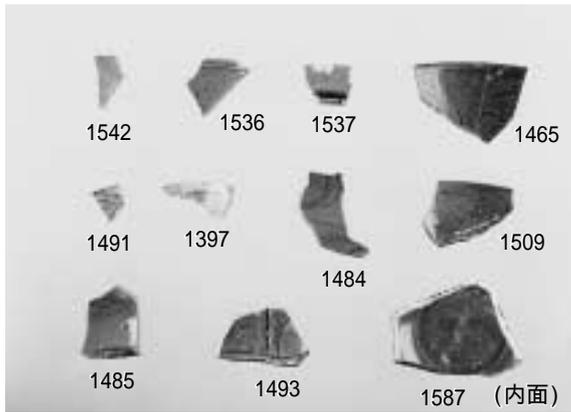
出土遺物(古代・中世)



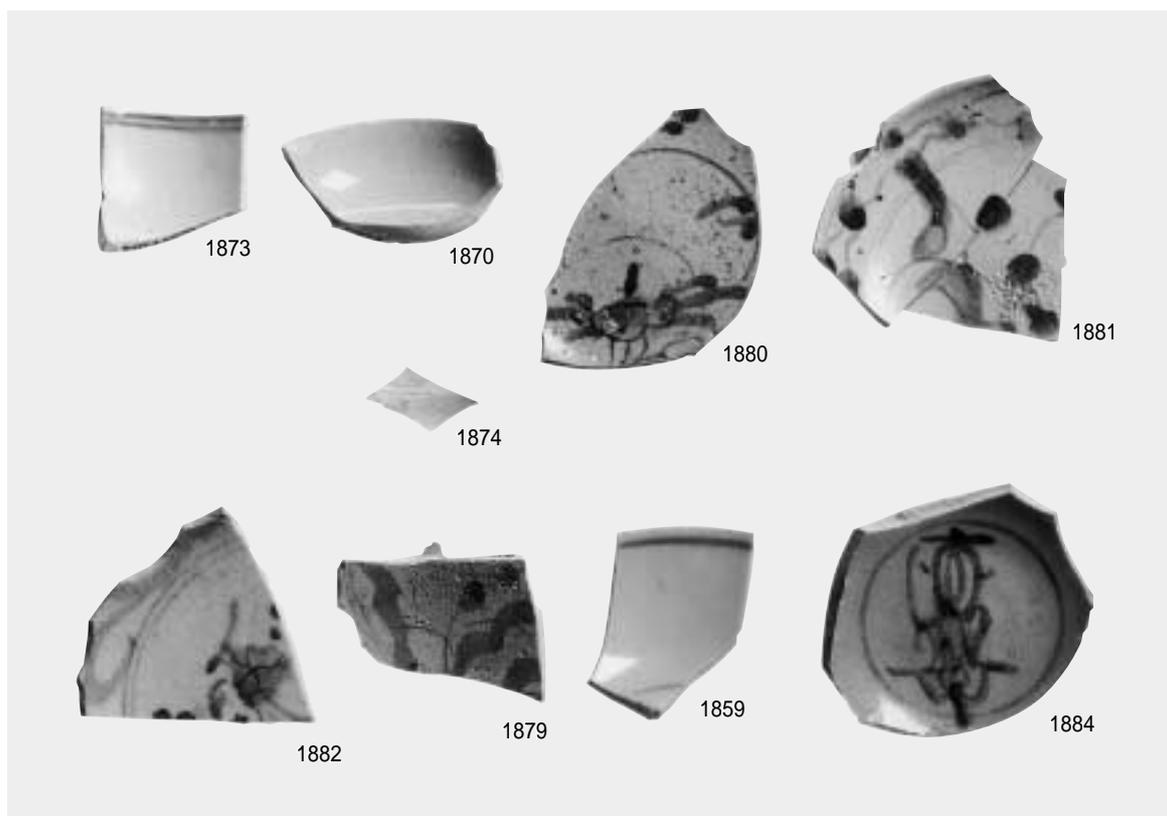




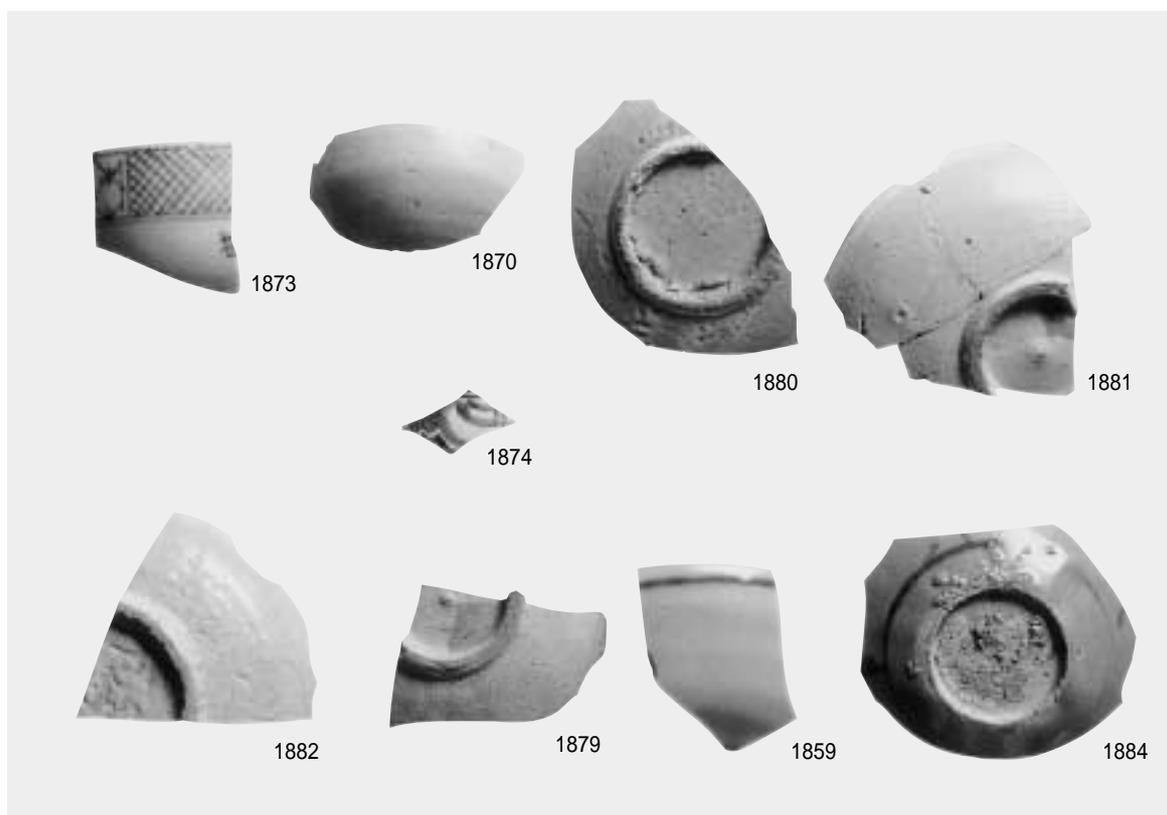




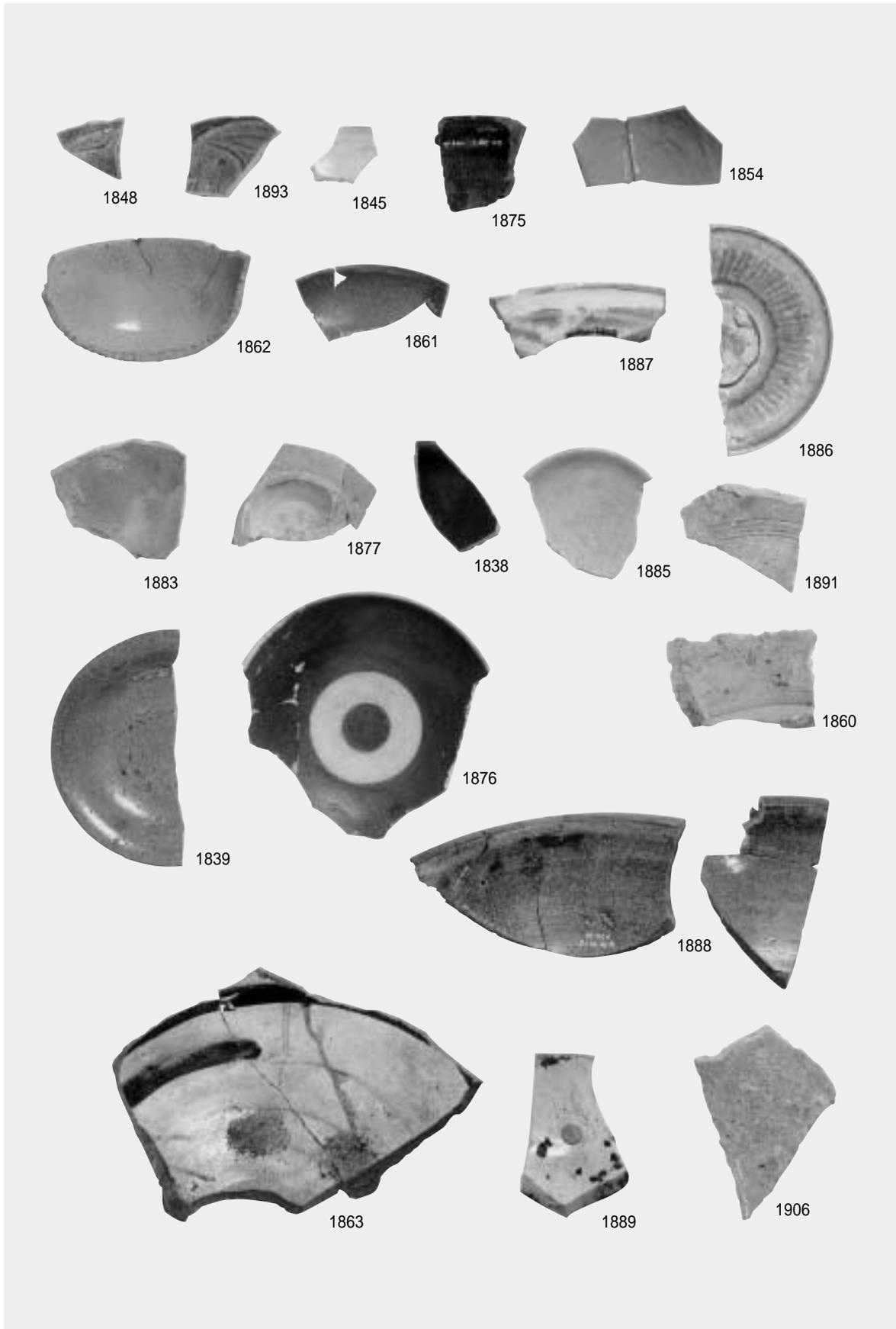
出土遺物(中世)



層出土磁器



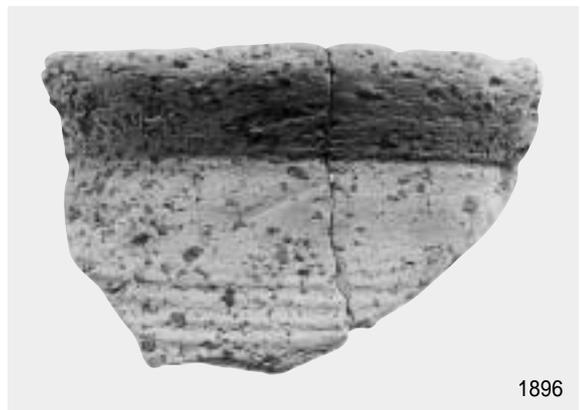
同上



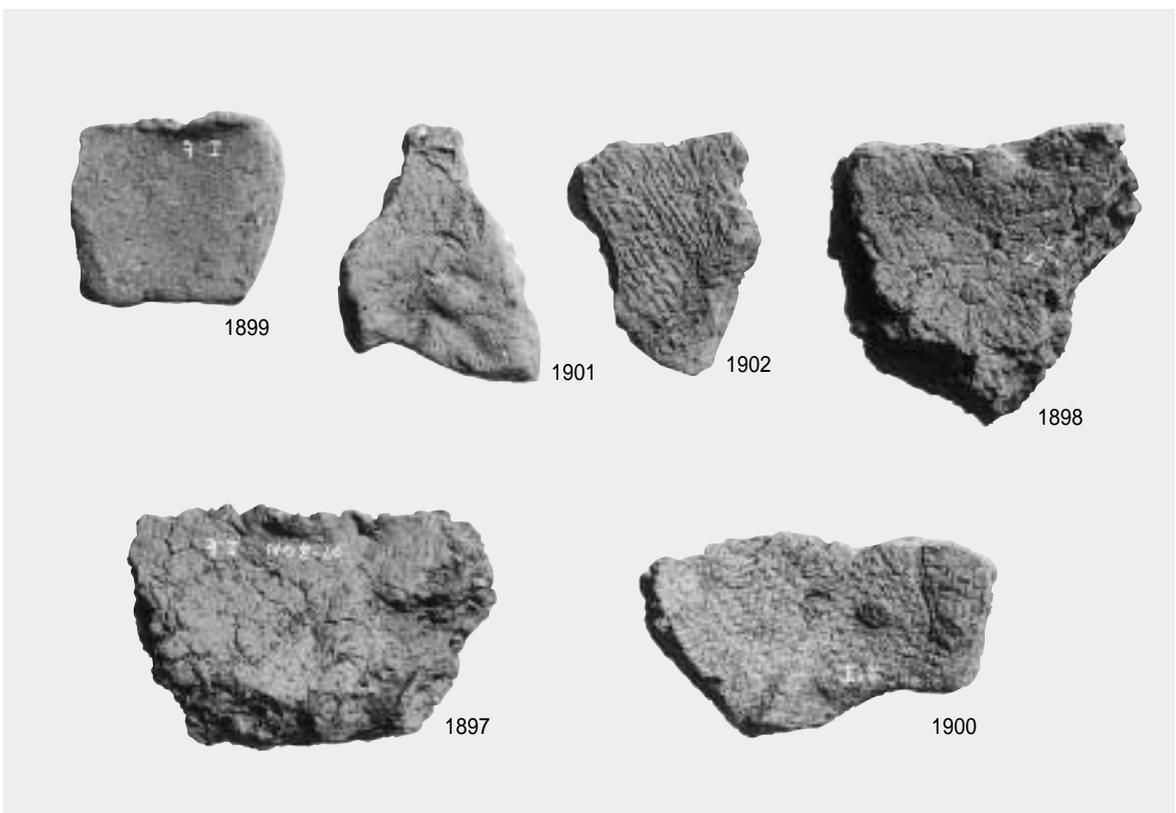
出土陶磁器・土器



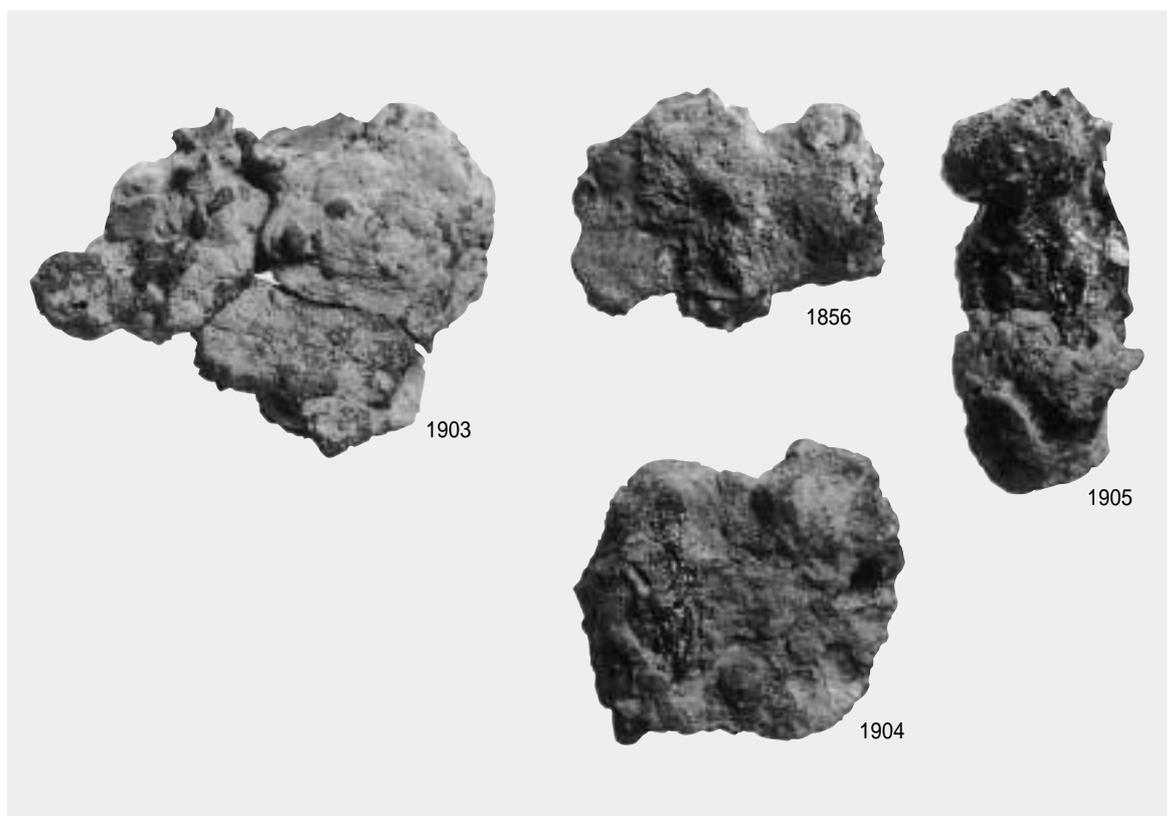
出土陶磁器・土器



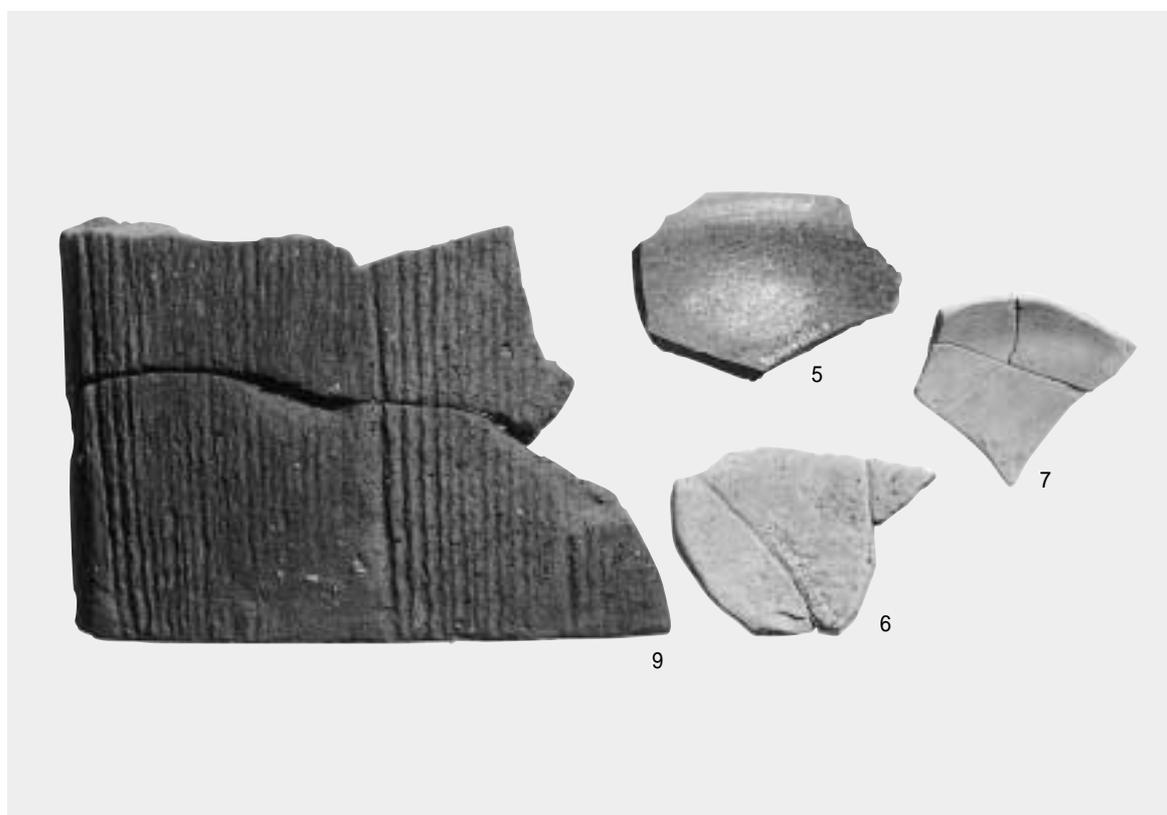
包含層出土遺物



燒塩土器



炉1、包含層出土鉄滓



試掘調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ぐどうなかやまいせきぐんよん							
書名	具同中山遺跡群							
副書名	県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第59集							
編著者名	松田直則、浜田恵子、池澤俊幸、筒井三菜							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783 - 0006 高知県南国市篠原南泉1437 - 1 TEL 088 - 864 - 0671							
発行年月日	西暦2001年3月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぐどうなかやま 具同中山 いせきぐん 遺跡群	〒787 - 0019 高知県 中村市 具同	39207	070052	32 ° 58 31	132 ° 55 5	平成9年 4月21日 ~ 平成10年 2月10日	2,189m ² (延べ面積 10,945m ²)	県道中村 下ノ加江 線建設に 伴う事前 の発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
具同中山遺跡群	複合遺跡	弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世		竪穴状遺構 土坑 杭列 土器集中 祭祀跡 掘立柱建物跡 井戸 溝 炉跡		弥生土器 土師器 須恵器 貿易陶磁器 近世陶磁器		弥生時代終末期から 古墳時代初頭では祭 祀的要素の強い配石 遺構 中世では大型の掘立 柱物跡

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第59集

具同中山遺跡群

- 県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書 -

2001年3月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437 - 1

Tel. 088 - 864 - 0671

印刷 川北印刷株式会社